鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 71

KUYOUOKA

九養岡遺跡

ODORIBA

踊場遺跡

TAKASHINO

高篠遺跡

東九州自動車道建設（末吉財部IC～国分IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅳ

２００４年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター









序　　文

鹿児島県教育委員会では，東九州自動車道(末吉財部IC～国分IC間)の建設に伴い，平成８年度から埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

この報告書は，「九養岡遺跡」・「踊場遺跡」・「高篠遺跡」の発掘調査の記録です。

九養岡遺跡では，旧石器時代，縄文時代，古代の遺構・遺物が発見されました。特に，旧石器時代の石器製作の様相が，驚くほど鮮明に再現されました。

踊場遺跡では，縄文時代，平安時代，中世の畠跡が発見されました。平安時代の祭祀遺構は，集落と宗教との関わりを考える上で貴重なものです。

高篠遺跡では，縄文時代，平安時代の遺構・遺物が発見されました。平安時代では，掘立柱建物，焼土，鉄製品，鉄滓，墨書土器，石帯，銅環等が発見され，当時の社会構成をうかがえる貴重な資料が提示されています。

本書は，南九州に住んだ先人たちの歴史の一端を明らかにする貴重な手がかりを提供するものと考えております。文化財の保護や学術研究のための資料として活用していただければ幸いです。

終わりに，調査にあたりましてご協力いただいた日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所や関係者の方々ならびに地域の皆様に心から感謝申し上げます。

平成16年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　木　原　俊　孝

総　目　次

九養岡遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至るまでの経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第３節　発掘調査の概要と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第１節　位置と特色・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第３節　遺跡の層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第Ⅲ章　旧石器時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　第１節　調査の方法と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　第２節　旧石器時代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　第３節　旧石器時代の遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第Ⅳ章　縄文時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
　第１節　調査の方法と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
　第２節　縄文時代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
　第３節　縄文時代の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
　第４節　縄文時代の石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
第Ⅴ章　古代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
　第１節　調査の方法と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
　第２節　古代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
　第３節　古代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
第Ⅵ章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133

踊場遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
　第１節　調査に至るまでの経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
　第２節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
　第３節　発掘調査の概要と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
第Ⅱ章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
　第１節　遺跡の層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
　第２節　縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
　第３節　古代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・193
　第４節　中世の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・241
第Ⅲ章　発掘成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・242
　第１節　縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・242
　第２節　古代の遺物，遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・242
　第３節　中世の畠跡について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・245

高篠遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247
　第１節　調査に至るまでの経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247
　第２節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247
　第３節　調査の経過(日誌抄)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・248
第Ⅱ章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・252
　第１節　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・252
　第２節　縄文時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・254
　第３節　平安時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・258
第Ⅲ章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・387
　第１節　土器の製作技術と土器様相・・・・・・・・・・・・・・・・・387
　第２節　平安時代の遺構のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・399
　第３節　高篠遺跡の特質と歴史的位置付け・・・・・・・・・・・・・・405

付　編

踊場遺跡出土畠跡および７号建物に関わる自然化学分析・・・・・・・414
踊場遺跡出土土器に塗彩された赤色顔料分析・・・・・・・・・・・・・419
高篠・踊場遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査・・・・・・・・・・・420
高篠遺跡出土金属器の組成について・・・・・・・・・・・・・・・・・432

総　括

１　九養岡遺跡，踊場遺跡における縄文晩期土器編年試案・・・・・・434
２　古代土器における踊場遺跡と高篠遺跡の時期的位置付け・・・・・435
（1）土師器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・435
（2）黒色土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・436
（3）須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・436
（4）土師器甕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・437
３　高篠遺跡，踊場遺跡の時期的な位置付け・・・・・・・・・・・・437
４　古代の掘立柱建物跡について・・・・・・・・・・・・・・・・・・438
５　古代のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・438

図　版

九養岡遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版１
踊場遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版29
高篠遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版51

九　養　岡　遺　跡

例　言

1　この報告書は，東九州自動車道建設（末吉財部IC～国分IC間）に伴う「九養岡遺跡」の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所の受託事業として，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

3　本書で用いたレベル数値はすべて海抜高である。

4　本書の遺物番号は各節ごとの通し番号とし，挿図，表，図版の番号と一致する。

5　発掘調査の実施においては，財部町教育委員会の協力を得た。

6　発掘調査における実測及び写真撮影は，調査担当者が行った。

7　遺物実測の一部は(株)九州文化財研究所に依頼し，その監修については長野眞一・福永修一が行った。

8　遺物に関する写真撮影等は，鶴田靜彦・福永修一・西園勝彦が行った。

9　本報告書の制作・整理作業にはデジタル技術を導入し，図版等の作成及び編集に係るデータ処理は，福永修一と真鍋雄一郎が行い，馬籠亮道・鮫島伸吾の協力を得た。

10　本書の執筆，編集は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い，福永と真鍋が行った。各項目の執筆分担は以下の通りである。なお，監修は長野眞一が行った。

第Ⅰ章　……福永修一・真鍋雄一郎
第Ⅱ章
　第１節　……立部剛
　第２節　……山崎克之
　第３節　……真鍋雄一郎
第Ⅲ章
　第１節　……福永修一
　第２節　……福永修一
　第３節　……福永修一・馬籠亮道
　第４節　……福永修一・馬籠亮道
第Ⅳ章
　第１節　……福永修一
　第２節　……福永修一
　第３節　……真鍋雄一郎
　第４節　……福永修一
第Ⅴ章
　第１節　……福永修一
　第２節　……福永修一
　第３節　……福永修一・真鍋雄一郎
第Ⅵ章
　第１節　……福永修一・馬籠亮道
　　長野眞一
　第２節　……福永修一・真鍋雄一郎
　第３節　……福永修一・真鍋雄一郎

11　第Ⅱ章第１節については，立部剛氏(現吉田町立吉田南中学校教諭)より玉稿をいただいた。

12　掲載遺物の縮尺は，土器が1/3，石器は1/1を基本とする。しかし，礫石器等大型のものについてはこの限りではない。また，遺構については，1/20を基本としたがこれについても大型の遺構についてはこの限りではない。各々，図中に示したスケールを参考とされたい。

13　土器，石器等の出土位置については，各節ごとに記載した。スケールについては，図中にグリッドラインが表示されているので参考にされたい。

14　旧石器時代の出土石器分布図については，図中に記載のない限り下記の要領で記載した。

チップ　［○］
剥片　［●］
礫石器以外の実測石器(剥片)　［◎］
礫石器以外の実測石器(石核)　［■］
礫石器以外の実測石器(石器)　［▲］
礫石器　［●］

　なお，剥片及び礫石器以外の実測石器については，石材分類に従い色分け表示を行った。石材の表示色については本文を参照されたい。

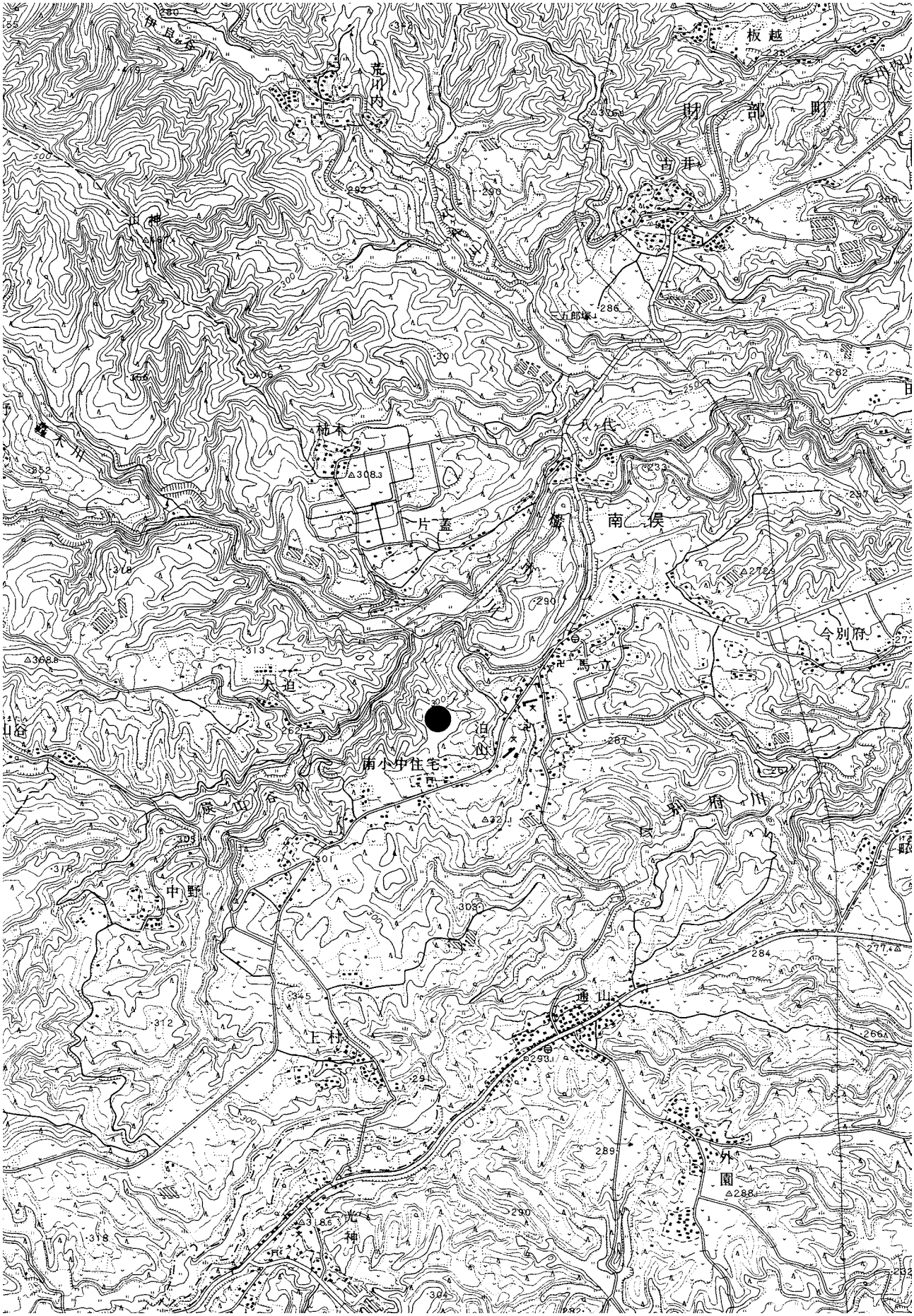
15　本報告書に掲載した出土遺物，図面，写真等は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し活用する。なお，本報告書に使用したデータの一部は，鹿児島県埋蔵文化財情報管理システムおよび埋蔵文化財情報データベース(http://www.jomon-no-mori.jp)で公開する予定である。

報　告　書　抄　録

ふりがな	くようおかいせき
書　　名	九養岡遺跡
副 書 名	東九州自動車道 (末吉財部 IC ～国分 IC 間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅳ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	71
編 著 者 名	福永修一・真鍋雄一郎
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 899-4461　鹿児島県国分市上之段 1175-1　　TEL 0995-48-5811
発行年月日	2004 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m^2)	調査起因
くようおか 九養岡	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曽於郡 たからべちょうみなみまた 財部町南俣	464518	62-8-0	31° 41' 39"	130° 56' 18"	確認調査 19960823 ～ 19961009 本調査 19990506 ～ 20000204	6,240	東九州自動車道建設 (末吉財部 IC ～国分 IC 間) に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
九養岡	包含地	旧石器	礫群	三稜尖頭器，ナイフ形石器	
		縄文早期	土坑　　集石	下剥峯式土器，手向山式土器	
				塞ノ神式土器	
		前期	土坑	轟式土器	
		後期		中岳式土器	
		晩期		黒川式土器	
		古代	古道　　土坑	土師器	



伊良谷川
荒川内
板越
財部町
吉井
山神
五郎塚
桃木
八代
片蓋
南俣
今別府
馬立
大迫
泊山
南小中住宅
別府川
中野
通山
上村
外園
光神

遺跡の位置図

本　文　目　次

第Ⅰ章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至るまでの経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第３節　発掘調査の概要と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第１節　位置と特色・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第３節　遺跡の層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第Ⅲ章　旧石器時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　第１節　調査の方法と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　第２節　旧石器時代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　第３節　旧石器時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　第４節　接合資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第Ⅳ章　縄文時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
　第１節　調査の方法と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
　第２節　縄文時代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
　　１　集石遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
　　２　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
　　３　落し穴状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
　第３節　縄文時代の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
　　１　Ⅰ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
　　２　Ⅱ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
　　３　Ⅲ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
　　４　Ⅳ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
　　５　Ⅴ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
　　６　Ⅵ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
　　７　Ⅶ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
　　８　Ⅷ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
　　９　Ⅸ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
　　10　Ⅹ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
　第４節　縄文時代の石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
　　１　Ⅶ～Ⅵa層出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
　　２　Va層出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
　　３　Ⅳa～Ⅲ層出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
第Ⅴ章　古代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
　第１節　調査の方法と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
　第２節　古代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
　　１　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
　　２　古道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
　第３節　古代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
　　１　土師器坏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
　　２　土師器甕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
　　３　土錘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
　　４　軽石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
　　５　鉄器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132
第Ⅵ章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133

挿　図　目　次

第１図　３遺跡の周辺の地形・・・

第135図　Ⅲ～Ⅳａ層出土石器実測図(１)・・・・・・・・・・・・・・・115
第136図　Ⅲ～Ⅳａ層出土石器実測図(２)・・・・・・・・・・・・・・・116
第137図　Ⅲ層　遺構位置及び遺物出土状況図(1/750)・・・・・・・・・・118
第138図　Ⅲ層遺構実測図(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
第139図　Ⅲ層遺構実測図(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120
第140図　Ⅲ層　古道検出状況図(1/300)・・・・・・・・・・・・・・・121
第141図　古代出土遺物実測図(土師器坏)・・・・・・・・・・・・・・・122
第142図　古代出土遺物実測図(土師器甕1)・・・・・・・・・・・・・・・124
第143図　古代出土遺物実測図(土師器甕2)・・・・・・・・・・・・・・・125
第144図　古代出土遺物実測図(土錘)・・・・・・・・・・・・・・・・・126
第145図　古代出土遺物実測図(軽石製品1)・・・・・・・・・・・・・・・129
第146図　古代出土遺物実測図(軽石製品2)・・・・・・・・・・・・・・・130
第147図　古代出土遺物実測図(鉄器)・・・・・・・・・・・・・・・・・132
第148図　出土層位別石器数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133
第149図　工程別接合状況図(CC)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
第150図　工程別接合状況図(SH)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第151図　工程別接合状況図(OB)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・136
第152図　三稜尖頭器の製作工程と関連遺物・・・・・・・・・・・・・・137

表　目　次

第１表　遺跡地名表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
第２表　遺跡地名表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第３表　第１エリア第１ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・22
第４表　第１エリア第２ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・26
第５表　第１エリア第３ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・29
第６表　第１エリア第５ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・30
第７表　第１エリア第６ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・32
第８表　第１エリア第７ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・33
第９表　第１エリアブロック外出土石器観察表・・・・・・・・・・・・・34
第10表　第２エリア第８ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・35
第11表　第２エリア第９ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・36
第12表　第２エリア第10ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・37
第13表　第２エリア第11ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・39
第14表　第２エリア第12ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・40
第15表　第２エリア第13ブロック出土石器観察表・・・・・・・・・・・・41
第16表　第２エリアブロック外出土石器観察表・・・・・・・・・・・・・43
第17表　エリア外出土石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第18表　Ⅰ～Ⅲ類土器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第19表　Ⅰ～Ⅲ類土器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
第20表　Ⅳ～Ⅴ類土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
第21表　Ⅵ～Ⅶ類土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
第22表　Ⅷ～Ⅸ類土器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
第23表　Ⅷ～Ⅸ類土器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
第24表　Ⅹ類土器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
第25表　Ⅹ類土器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105
第26表　Ⅹ類土器観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
第27表　Ⅵ～Ⅶ層出土石器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・110
第28表　Ⅵ～Ⅶ層出土石器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・113
第29表　Ⅴ層出土石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
第30表　Ⅲ～Ⅳ層出土石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
第31表　古代出土遺物観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
第32表　古代出土遺物観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
第33表　古代出土遺物観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
第34表　古代出土遺物観察表(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
第35表　古代出土遺物観察表(５)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
第36表　古代出土遺物観察表(６)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
第37表　古代出土遺物観察表(７)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132

図　版　目　次

旧石器第１エリア遺物出土状況(１)・・・・・・・・・・・・・・・図版１
①旧石器時代第１エリア遺物出土状況(２)ほか・・・・・・・・・・図版２
１号礫群ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版３
①２号礫群及び炭化物出土状況ほか・・・・・・・・・・・・・・・図版４
①１号集石ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版５
①７号集石ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版６
D～F-8,9区Ⅶ層遺物出土状況ほか・・・・・・・・・・・・・・・図版７
１号落し穴状遺構断面ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版８
①F - 6,7区Ⅲ～Ⅳa層遺物出土状況ほか・・・・・・・・・・・・図版９
①C～D-11,12区古道跡ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・図版10
①E - 12区古道跡断面ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版11
旧石器時代出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・図版12
旧石器時代出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・図版13
旧石器時代石器接合資料(１)・・・・・・・・・・・・・・・・図版14
旧石器時代石器接合資料(２)・・・・・・・・・・・・・・・・図版15
旧石器時代石器接合資料(３)・・・・・・・・・・・・・・・・図版16
旧石器時代石器接合資料(４)・・・・・・・・・・・・・・・・図版17
縄文時代石器(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版18
縄文時代石器(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版19
縄文時代石器(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版20
縄文時代Ⅰ～Ⅲ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版21
縄文時代Ⅳ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版22
縄文時代Ⅵ･Ⅶ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版23
縄文時代Ⅷ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版24
縄文時代Ⅹ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版25
古代土器(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版26
古代土器(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版27
古代軽石製品ほか　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版28

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道(末吉財部IC～国分IC間)の建設を計画し，事業区域内の埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会に照会した。

これを受けて，鹿児島県教育委員会，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県立埋蔵文化財センターとの間で協議を行い，工事予定区域内の埋蔵文化財の分布調査を行うこととした。分布調査は平成６年10月と平成７年５月に実施した。

その結果，工事予定地区内に13か所の遺物散布地や調査の必要な地点が存在することが判明した。そこで，再度協議を行い，平成８年４月から用地買収等の条件が整った区域を対象として，順次確認調査を実施することとなった。

本遺跡の確認調査は，暫定２車線部分及び工事施工区域内の4,400㎡を対象として平成８年８月23日から10月９日の期間実施した。

確認調査の結果，縄文時代晩期，前期，早期の遺物包含層が残存することが明らかになった。調査結果に基づき，遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果，発掘調査を行い記録保存することとなり，約4,400㎡を対象とした本調査を実施することとなった。

本調査は当初4,400㎡を対象に実施する予定であったが，遺跡範囲の拡大に伴い，6,240㎡の調査を行った。これについては確認調査の時点で用地の未買収地があり，十分な確認調査ができなかったことによるものである。

本調査は，平成11年度に実施し，平成11年５月６日～平成12年２月４日(実働173日間)の期間で行った。

第２節　調査の組織

平成８年度　確認調査
事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者
　鹿児島県立埋蔵文化財センター　　所長　　吉元　正幸
調査企画者
　次長兼総務課長　尾﨑　進
　主任文化財主事兼調査課長　戸﨑　勝洋
　調査課長補佐　新東　晃一
　主任文化財主事兼第三調査係長　池畑　耕一
調査担当者
　文化財主事　宮田　栄二
　〃　寺師　孝則
　文化財研究員　寺原　徹
　文化財調査員　松村　智行
事務担当者
　主　　査　成尾　雅明
　主　　査　前屋敷裕徳
　主　　事　迫立ひとみ

平成11年度　本調査
事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者
　鹿児島県立埋蔵文化財センター　　所長　　吉永　和人
調査企画者
　次長兼総務課長　黒木　友幸
　主任文化財主事兼調査課長　戸﨑　勝洋
　課長補佐兼第一調査係長　新東　晃一
　主任文化財主事兼第二調査係長　立神　次郎
　主任文化財主事　長野　眞一
調査担当者
　文化財主事　井ノ上秀文
　〃　松尾　勉
　〃　高見　憲次
　文化財研究員　福永　修一
事務担当者
　総務係長　有村　貢
　主　　査　政倉　孝弘
　主　　事　溜池　佳子

平成14年度　報告書作成
事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成責任者
　鹿児島県立埋蔵文化財センター　　所長　　井上　明文
作成企画者
　次長兼総務課長　田中　文雄
　調査課長　新東　晃一
　課長補佐　立神　次郎
　主任文化財主事兼第二調査係長　彌榮　久志
　主任文化財主事　長野　眞一
作成担当者
　文化財研究員　福永　修一
　文化財研究員　真鍋雄一郎
事務担当者
　総務係長　前田　昭信
　主　　査　栗山　和己

平成15年度　報告書作成
事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成責任者
鹿児島県立埋蔵文化財センター　所長　木原　俊孝
作成企画者
次長兼総務課長　田中　文雄
調査課長　新東　晃一
課長補佐　立神　次郎
主任文化財主事兼第二調査係長　彌榮　久志
主任文化財主事　長野　眞一
作成担当者
文化財主事　福永　修一
文化財研究員　真鍋雄一郎
事務担当者
総務係長　平野　浩二
主　事　福山恵一郎
報告書作成検討委員会　平成15年12月25日所長他　９名
報告書作成指導委員会　平成15年12月24日調査課長他４名
企画担当者　長野眞一・前迫亮一・中村和美

指導者・協力者
日本道路公団九州支社
日本道路公団鹿児島工事事務所
財部町教育委員会
橘　昌信(別府大学文学部教授)
安蒜政雄(明治大学文学部教授)
佐藤宏之(東京大学教授)
小畑弘己(熊本大学文学部助教授)
井ノ上秀文，堂込秀人，栗山葉子，立神勇志，白石浩之
雨宮端生，切通雅子，松本茂，藤木強，桑波田武志，岩谷史記，綿貫俊一，吉留秀敏，岩永雅彦，杉原敏之，川道寛，木崎康弘，立部剛，佐藤良二

整理作業員
赤塚涼子，小村幸子，高岡眞由美，立野里沙，永野愛子
濱野芳子

第３節　発掘調査の概要と経過

調査期間は以下の通りである。

確認調査

平成８年度(平成８年８月23日～10月９日)

本調査

平成11年度(平成11年５月６日～平成12年２月４日)

九養岡遺跡の調査対象面積は，当初約4,400㎡であり調査前は山林となっていた。そこで確認調査を行い，遺物包含層及び遺構の有無，時代，時期，地表面からの深さ，さらに遺物包含層の広がりを把握することとした。調査はそれぞれ２×４mのトレンチを６か所設定し実施した。

その結果，縄文時代晩期，前期，早期の遺物文化層が残存することが明らかになった。

それを受けた平成11年度，約９か月にわたる本調査では，計画路線センター杭，STA.No27+60杭とSTA.No28+80杭を結んだ線を基準軸とし，10m間隔の区画(グリッド)を設定して調査を実施した。グリッドは東西方向へA～F，南北方向に1～20とし，A-１区，D-８区というようにアルファベットと数字を組み合わせた呼称とした。

調査の経過については，日誌抄をもってかえる。

平成８年度　確認調査

８月23日～10月９日

表土剥ぎ，トレンチ設定(１T～６T)，掘り下げ，遺物取り上げ，土層断面実測，写真撮影，埋め戻し

平成11年度　本調査

５月６日～５月28日
機材搬入，抜根作業，グリッド設定
D～F-４～13区Ⅲ～Ⅳa層掘り下げ，遺物取り上げ
D～F-10～13区Ⅲ層道跡検出，撮影
ボラ抜き跡検出，撮影
６月１日～６月30日
D-４～７区Ⅴa～Ⅷ層トレンチ掘り下げ
D～F-14～17区Ⅲ～Ⅳa層掘り下げ，遺物取り上げ
Ⅳ層上面コンタ図作成
D～F-８,９区Ⅳb～Ⅵa層掘り下げ，遺物取り上げ
D～F-10～13区Ⅳa層上面古道跡検出，実測，撮影
D-９区Ⅴa層落し穴状遺構検出，撮影
７月１日～７月28日
D～F-８,９区Ⅶ～Ⅷ層掘り下げ，遺物取り上げ
D～F-10～15区Ⅳ～Ⅴ層掘り下げ，遺物取り上げ
E-14,15，D-15区Ⅳa層土坑検出，実測，撮影
財部町立財部南中３年生発掘体験学習
８月２日～８月27日
D～F-16～19区Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ，遺物取り上げ
D～F-10～15区Ⅴ，Ⅵ層掘り下げ
９月１日～９月30日
D～F-７区Ⅴ～Ⅷ層トレンチ掘り下げ
D～F-13,15,17区Ⅵ～Ⅷ層トレンチ掘り下げ
D-６,７区西壁土層断面図実測
D～F-７,9,11区北壁土層断面図実測
F-15区Ⅷ層上面集石検出，実測
D～F-４,５区Ⅲ～Ⅵ層掘り下げ，遺物取り上げ
D,E-15区Ⅵ層掘り下げ
D～F-10～16区Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ，遺物取り上げ
Ⅸ層上面コンタ図作成
D-４,５区西壁土層断面図実測
D～F-9区Ⅸ，Ⅹ層掘り下げ
10月1日～10月28日

D～F-9区ＸⅠ～ⅩⅦ層トレンチ掘り下げ
D～F-11区Ⅸ～ⅩⅦ層掘り下げ
D～F-16～17区Ⅶ層掘り下げ，Ⅷ層上面集石遺構検出
実測，撮影
D～F-６,７区Ⅳb層～ⅩⅣ層掘り下げ
D～F-12,13区Ⅸ～ⅩⅢ層掘り下げ
D～F-14区Ⅵ～Ⅸ層掘り下げ
D～F-15区Ⅸ～ⅩⅡ層トレンチ掘り下げ
E,F-16区集石検出
11月1日～11月30日
D-７，E,F-６,７区Ⅸ層上面土坑検出
D～F-7区北壁土層断面実測
D～F-15区ⅩⅡ～ⅩⅣ層トレンチ掘り下げ
OBフレーク，チップ等出土，三稜尖頭器等出土
D～F-16,17区Ⅷ～ⅩⅥ層掘り下げ，遺物取り上げ
C-３～13区Ⅰ～Ⅴ層掘り下げ
C-９～12区Ⅲ層およびⅣa層古道跡検出
D～F-17区Ⅹ～ⅩⅢ層トレンチ掘り下げ
D-12～16区西壁土層断面実測
D～F-４区Ⅶ，Ⅷ掘り下げ
D～F-5区Ⅸ～ⅩⅥ層トレンチ掘り下げ
D,E-２,３区Ⅲ～Ⅳa層掘り下げ
E-16,17区ⅩⅡ，ⅩⅢ層トレンチ掘り下げ
D,E-17区ⅩⅥ，ⅩⅦ層トレンチ掘り下げ
D～F-13,15,17区北壁土層断面図実測
12月1日～12月27日
D～F-15区ⅩⅣ，ⅩⅤ層掘り下げ
D～F-16,17区ⅩⅡ～ⅩⅣ層トレンチ掘り下げ
B-４～８区Ⅲ，Ⅳa層掘り下げ
C-12～17区Ⅲ～Ⅷ層掘り下げ
C-13区Ⅳa層道路状遺構，土坑検出，実測，撮影
D-14,15区ⅩⅤ，ⅩⅥ層掘り下げ
D～F-18,19区Ⅳa～Ⅷ層掘り下げ
C-18,19区Ⅳb～Ⅶ層掘り下げ
D～F-15区ⅩⅤ層掘り下げ
E-15区ⅩⅤ層下礫群検出，実測
1月5日～1月28日
C-15区Ⅷ～ⅩⅤ層掘り下げ
C-15区北壁土層断面実測
C-16区Ⅶ～ⅩⅤ層掘り下げ
D～F-16,17区ⅩⅡ～ⅩⅤ層掘り下げ
E-16区ⅩⅤ層下礫群検出，実測
D-17区西壁土層断面実測
D～F-15,16区ⅩⅥ，ⅩⅦ層掘り下げ
ⅩⅥ層上面コンタ図作成
2月1日～2月4日
礫群検出状況撮影，現場事務所後片付け，プレハブ撤去

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　位置と特色

九養岡，踊場，高篠の３遺跡は，いずれも鹿児島県曽於郡財部町南俣に所在する。

遺跡の所在する財部町は鹿児島県の北東部，宮崎県との県境に位置し，北及び東は宮崎県都城市，西は姶良郡霧島町，国分市，姶良郡福山町，南は曽於郡末吉町と接している。町市街地は都城盆地の一角をなし，大淀川の上流にあたる溝ノ口川，横市川に沿って水田や集落が散在している。その一方，山林が総面積の67.2％を占める山岳地帯でもある。

町域はほぼ三角形をなしている。西部は瓶臺山(543m)，白鹿岳(604m)，陣が岡(430m)と，山地が南北に連なるが，全体としては都城盆地へ南東へ傾斜する台地からなっている。そして，この台地間を大淀川の支流である溝ノ口川，横市川が東流する。地質は大部分がシラス，ボラなどの火山灰土壌となっている。年平均気温は15.8度，年間降水量は2400㎜程度である。

さて，九養岡，踊場，高篠の３遺跡が所在する南俣地区は財部町の南部にあたり，町西部の山地から東部の都城盆地へ漸移する標高約200～360ｍの丘陵性台地が卓越する地域である。さらに，この丘陵性台地は，大淀川水系に属する諸河川により侵食を受け，小台地群に分断されているが，３遺跡はいずれもこうした小台地群に立地している。

◇遺跡を取り巻く地形・水文環境

まず，５万分の１地形図図幅の範囲において行った地形分類によって，遺跡のおかれた地形を概観すると，図幅中央をほぼ南北に走る山地があって，東側の都城盆地に傾く地域と西側の国分低地へ傾く地域を分かっている。南部は隣接する岩川図幅と同じく，西岸に高隈山地があり，その東側に東へ傾く牧之原台地が付着し，西高東低の地形を形成している。(第１図)

まず山地は北部より南部に向かって，瓶臺山(543m)，黒石岳(524.7m)，白鹿岳(604m)，荒磯岳(538.7m)と標高500～600ｍの山々をもつ主として中生代後期から新生代前期からなる小起伏山地が連なるが，瓶臺山や白鹿岳を中心とした山地には中起伏山地もみられる。これらの山地を九州を構成する大地形の枠組みの中でみると，西南日本外帯西縁にあたる九州山地とひと続きの地質構造をもち，南の大隅半島側が大きく屈曲することによって，琉球外弧の北端をなすにいたった地域である。さらに九州山地の延長は，宮崎平野から南南西に続く都城盆地により，東側の鰐塚山地と西側の高隈山地に分けられ，本図幅にみられる山地群は西側の高隈山地から種子島，屋久島へと連なっていく。また，この山地群の西は，火山フロント及び琉球内弧にある鹿児島地溝の東縁の断層崖によって明確に区分される。

次に山地群に付着するような形で分布するのが，丘陵地である。上述した山地群は約2.8～2.5万年に噴出した入戸火砕流堆積物によって，その谷が埋められて緩傾斜の丘陵地形を形成したものと思われる。さらに，この火砕流堆積物によって形成された台地も広範囲に分布する。この台地は本図幅中央部の山地群を境に，東西にいずれも約300ｍ程の標高を示し，河川による侵食，開析が進んでいるが，その様相は東西で異なる。台地原面を比較的広く残す西側の台地(牧園，春山原，須川原，上野原)に対し，東側は，台地を侵食した河谷の斜面が広い部分を占め，台地原面は局部的に残存するに過ぎない。近接する河谷との比高も西側では200～250ｍに達するのに対し，西側では100ｍ未満であることが多い。

台地に小規模ながら付着するのが段丘面である。本分類では中位段丘面として取り扱った。大淀川水系に属する横市川，後川などが都城盆地の西縁をなす財部市街地付近に集まる部分に比較的まとまって見出せる。これらは，いずれもシラス台地に多くみられる河成侵食段丘であると思われ，入戸火砕流堆積後，極めて短期間に形成されたであろうことが報告されているが，詳細は後述する。

最後に低地だが，台地や丘陵間の河谷沿いにみられる小規模な谷底平野を除けば，図幅西縁の国分低地が最大である。この低地を含めた姶良カルデラ北縁地域には完新世段丘が認められるが，その詳細な地形発達史についてはここでは省略する。図幅東縁は，都城盆地西端をなす低地がみられ，財部町市街地にあたる。

都城盆地は，南部九州の基盤をなす地質構造の屈曲を切って，九州山地と鰐塚山地の間に形成された北東－南西方向の低地帯である。高篠，九養岡，踊場の３遺跡とも，その位置を地形から概観すると，盆地中心部に向かう傾斜の一角にあたることから，この盆地の概略にも触れる。都城盆地は，宮崎平野と四万十帯の諸県丘陵で分けられるが，その延長と促られ，盆地の概形は前期更新世にさかのぼるとされる。現在の盆地の地形を支配しているのは，厚く堆積した入戸火砕流堆積物及び二次的堆積物である。もともと全体として盆地状の地形に火砕流が厚く堆積すると，まず縁辺部がやや高く，中央部に低く浅い皿状の地形が生じ，これに堆積物が厚い中央部ほど大きな溶結作用が加わることで，当初より深い皿状の地形が生じた可能性が指摘されている。

入戸火砕流の堆積後，その侵食，開析過程の中で現地形が形成されたが，これらを地形分類の上からみると，西半分のシラス台地，東半分の扇状地性の段丘に分けて促ることができる。西半分のシラス台地は，東に向かって漸次低くなっており，高度200ｍ付近で，高位段丘面(台地面)と中位段丘面に分けることができる。これらの台地を開析したのは，丸谷川，庄内川，横市川といったいずれも大淀川水系に属する諸河川である。東半分の扇状地性段丘に目を移すと，これらを形成したのは急峻な山地から流れる東岳川と沖水川である。扇状地は東縁部で約200ｍの高さを示し，西に緩く傾き下り，大淀川東岸で140ｍほどである。沖水川以北と以南の扇状地には標高差がみられる。また，扇状地北縁には10ｍ前後の崖がみられるが，南縁は緩やかに原河川氾濫源に漸移し，

その境は明瞭ではない。

さて，以上の地形の概観をふまえて，３遺跡周辺の地形に絞ってみると，いずれの遺跡も黒石岳，白鹿岳，荒磯岳といった山地群から，都城盆地に向かって下る小台地群や中位段丘面に移行する緩やかな斜面上に立地する。高篠遺跡は横市川とその支流の炭山谷川，九養岡遺跡と踊場遺跡は横市川と今別府川によって挟まれた台地に立地する。３遺跡に関わる河川は，いずれも大淀川水系に属し東流することから，遺跡の立地する台地は，河川によって南北に分断され，東西に細長い形状をなす。遺跡周辺の地形の基盤をなすのは，山地の主体となっている四万十層群であると思われるが，入戸火砕流堆積物によって，その低所が埋積された。さらに，その後の侵食，開析過程によって，現在の地形を形成している。

この侵食，開析過程については，その大半が入戸火砕流堆積後，無植生のうちに，流水による激しい侵食，開析が極めて短期間のうちに行われたという説明がある。本地域でも，台地面のみならず，河成侵食段丘の段丘面や地形分類に表れにくい小規模な階段状の地形における平坦面などにおいて，シラス上位に後述する成層した二次シラスが，露頭や近辺の発掘調査で数多く確認された。加えて，二次シラスの上にのるローム層中に約2.2～2.3万年前の噴出物とされるSz-Tk6(桜島高峠6，P17)が見出せることは，少なくとも，このテフラの堆積までには，現地形の大半が形成されたことが推察される。

このようにして，台地の分断や高密度の谷分布が本地域でも形成されたが，ここで現在の水系にも目を移してみたい。高篠，九養岡の両遺跡は横市川の，そして踊場遺跡は今別府川の侵食，開析に関わる。いずれの河川も，第1図図幅中央部の山地から東流し，都城盆地内にて，大淀川に合流し，鰐塚山地北縁で先行谷をなしつつ，宮崎平野に向けて北流する。この水系の原型は前期更新世中葉から後半というかなり古い時期に推定されている。しかし一方で，大淀川の水系については，過去のある時期，志布志低地に向かって南下していた可能性が指摘されている。都城盆地の入戸火砕流堆積物の下位に，河成または湖成と考えられる都城層が確認されており，この都城層が全体として南方に傾斜しているためである。新しく考えると，阿多火砕流や入戸火砕流が末吉町付近に厚く堆積することで，現在の分水界を形成したという可能性も考えられている。いずれにしろ，今回の３遺跡において確認されている最も古い遺物，遺構である後期旧石器時代以降の古水系は，ほぼ現水系とほぼ同一の流向が想定される。

◇遺跡を取り巻く地質環境

地形上の特色は，本地域の地質の相違を反映している。遺跡周辺で見られる最も古い岩石は，砂岩頁岩互層からなる固結堆積物であり，中央部の山地の主体である。これらの岩石は，地質構造的には四万十累帯に属し，秩父累帯とともに九州山地の主部をなすが，九州南部において，西南日本外帯の構造が南北に急変し，広く南部九州の基盤となっている。四万十累帯は北帯と南帯とに分かれるが，本地域にみられるものは，主に白亜紀～古第三期からなる北帯である。こうした岩石は，第１図図幅南東部の台地を刻む河谷中にも小露頭が見られることより，図幅南東部には基盤岩として広く分布することが予想される。特に，踊場遺跡北側は，この砂岩頁岩互層が基盤の高まりとして地表に露出し，小丘陵をなして，財部城ヶ尾遺跡と接している。また，同様の高まりは周辺で顕著であり，本遺跡の南約1.2㎞に位置する耳取遺跡付近で再び露出する。これらの基盤の上に，入戸火砕流堆積物が台地を構成するのだが，基盤の高まりが見られる部分では火砕流の堆積が薄く，基盤の低所では厚く堆積しているのは言うまでもない。

現地形を支配する入戸火砕流堆積物であるが，その大半は非溶結いわゆるシラスである。灰色～淡黄褐色を呈し，その上部は風化により黄褐色に変色していることがある。無層理で淘汰が悪く，軽石礫の他，多数の外来礫を含む。シラス下位においては，溶結凝灰岩に漸移する場合もある。また，シラス上部には成層した二次的な軽石，火山灰層(二次シラス)が認められることが多い。本遺跡及び周辺の遺跡においてもまた同様であった。これは，先述したように火砕流堆積直後，植生に覆われる前に，流水による激しい侵食，堆積が行われたためであると考えられている。

シラス上位，台地面の最上部を覆って，ローム層が分布する。台地面や平坦面においては，３～４ｍの厚さを示す。このローム層中には多数のテフラが確認される。高篠，九養岡，踊場の各遺跡においては，上位より，Sz-Ts(桜島大正，P1)，Sz-Bm(桜島文明，P3)，Kr-M(霧島御池)，K-Ah(鬼界アカホヤ)，Sz-Sy(桜島末吉，P11)，Sz-St(桜島薩摩，P14)，Tkn(高野)，Sz-Tk4(桜島高峠４，P15)，Sz-Tk6(桜島高峠6，P17)といった６枚のテフラが確認されており，基本的層序に違いはみられない。詳細は層序の項を参照されたい。

第２節　歴史的環境

古代の行政区分では，日向国諸県郡財部郷に属した。『和名抄』には財部(たからべ)，県田(あがた)，瓜生(うりゅの)，山鹿(やまが)，穆佐(むかさ)，八代(やつしろ)，大田(おおた)，春野(はるの)の八郷を載せ，日向国内では国府所在郡の児湯郡と並び最大の郡である。

「財部」の名の起源については，日光神社に関連する古代「財日奉部」によるとする説がある。「財日奉部」は大和政権の勢力がおよぶ数か所に，日祠りに適した処を選び，太陽信仰に基づく日祠りの祭祀や，日迎えを行っていた。「財日奉部」の「財部」に由来する地名は，国内にいくつかあったが，現在まで残っているのは本県の財部町だけで，最も古い地名である。

「日祠り」は日光神社や白鹿岳周辺で行われたのではないかと考えられ，現在も日光神社に引き継がれている。

財部郷は，現曽於郡財部町から宮崎県都城市にかけての地域に比定される。鹿児島県内では最も早く大和政権の勢力が

及んだ地域とみられ，現志布志町夏井の飯盛山古墳は５世紀中頃の前方後円墳，現大崎町横瀬の横瀬古墳は５世紀後半の前方後円墳である。中世は『日向国建久図田帳』に「財部院百余丁」とあり，古代令制下の当郷を継承するものとみられる。

近世には薩摩藩の外城のひとつ財部郷としてみえ，郷域は北諸県郡財部村及び大隅の東曽於郡下財部，北俣，南俣(現財部町)が比定されている。主として現曽於郡財部町を中心とし，宮崎県都城市南東部にわたる一体と考えられる。明治４年７月の廃藩置県後は鹿児島県に属し，同年11月からは都城県に所属した。その後宮崎県に移管され，明治９年８月には再び鹿児島県に合併された。明治22年に町村制が実施され，従来の財部郷を財部村と改称し，北俣，南俣，下財部，３か村の名称は大字に改められた。その後，大正15年の町制施行により財部町となり現在にいたっている。

埋蔵文化財は，昭和58年に鹿児島県教育委員会が実施した大隅地区埋蔵文化財分布調査によって多くの遺跡が確認された。その後も，農政関係の分布調査などにより遺跡の数は増加しつつある。

昭和61年には長十塚遺跡(財部城ヶ尾遺跡)と石仏段遺跡の確認調査が行われ，縄文時代晩期や古代の遺物が出土している。長十塚遺跡は東九州自動車道建設に伴う調査も行われ，同様の時期の遺物，遺構が確認された。昭和62年には横尾遺跡，横尾山遺跡，中崎上遺跡の確認調査が行われている。横尾遺跡からは縄文時代早期の土器や石鏃等が出土し，中崎上遺跡からは縄文時代早期の押型文土器，撚糸文系土器，塞ノ神式土器，前期の曾畑式土器，中期の阿高式土器，後期の岩崎上層式系土器等が出土している。昭和63年には中崎上遺跡の一部の全面調査が行われ，西之表市下剥峯遺跡出土の縄文時代早期の貝殻文系円筒土器に類似する土器が出土している。

平成５年には宮原，霧島迫Ａ，Ｂ遺跡の確認調査が実施され，縄文時代早期や晩期の遺物が出土している。

平成９年には西栗栖遺跡の確認調査が実施され，縄文時代早期や後，晩期の遺物が出土している。

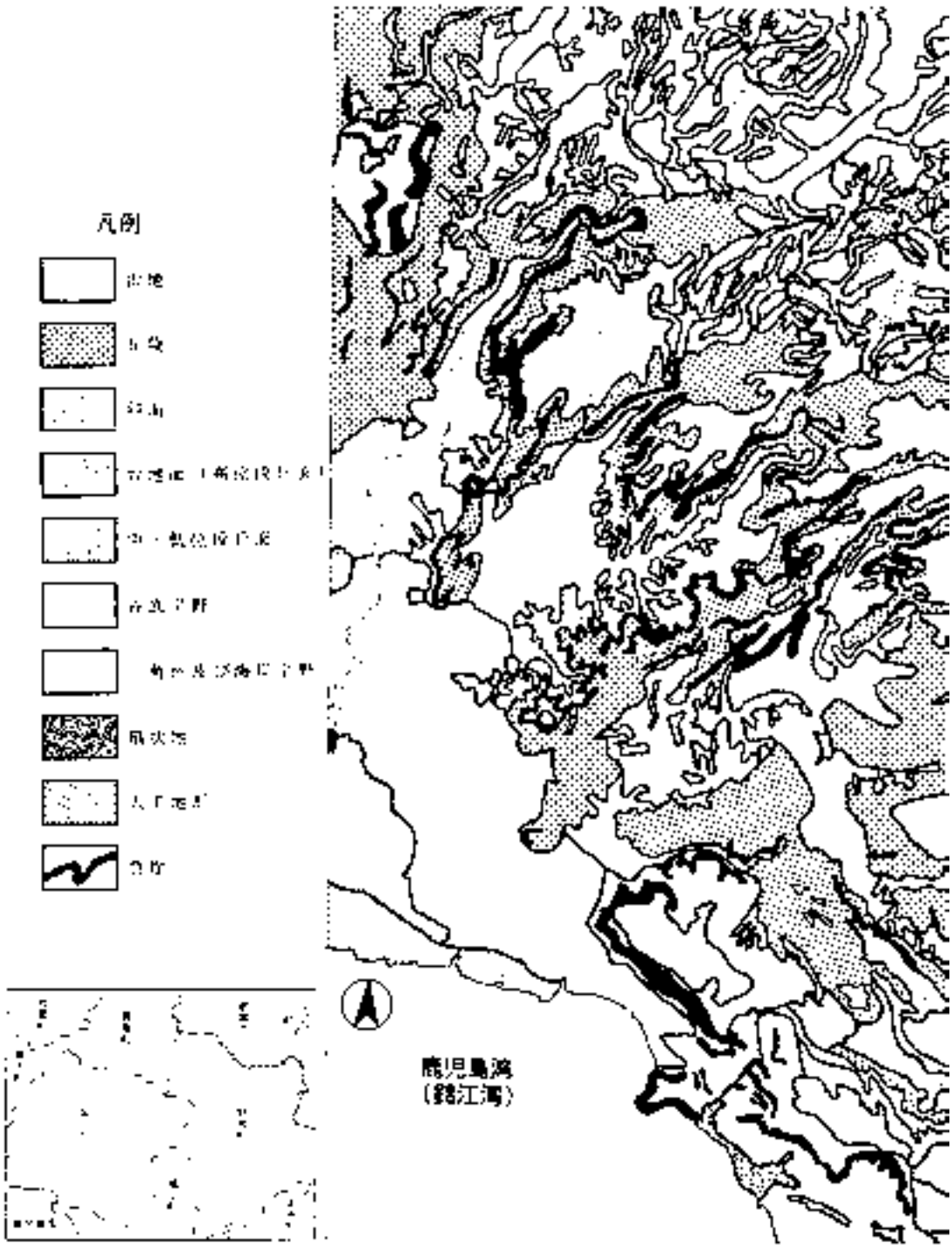
平成12年には田平下遺跡の発掘調査が行われている。

また，東九州自動車道建設(末吉財部IC～国分IC間)にともなう大規模な発掘調査は平成８年から12年にかけて実施され，旧石器時代から近現代の遺構，遺物が確認された。

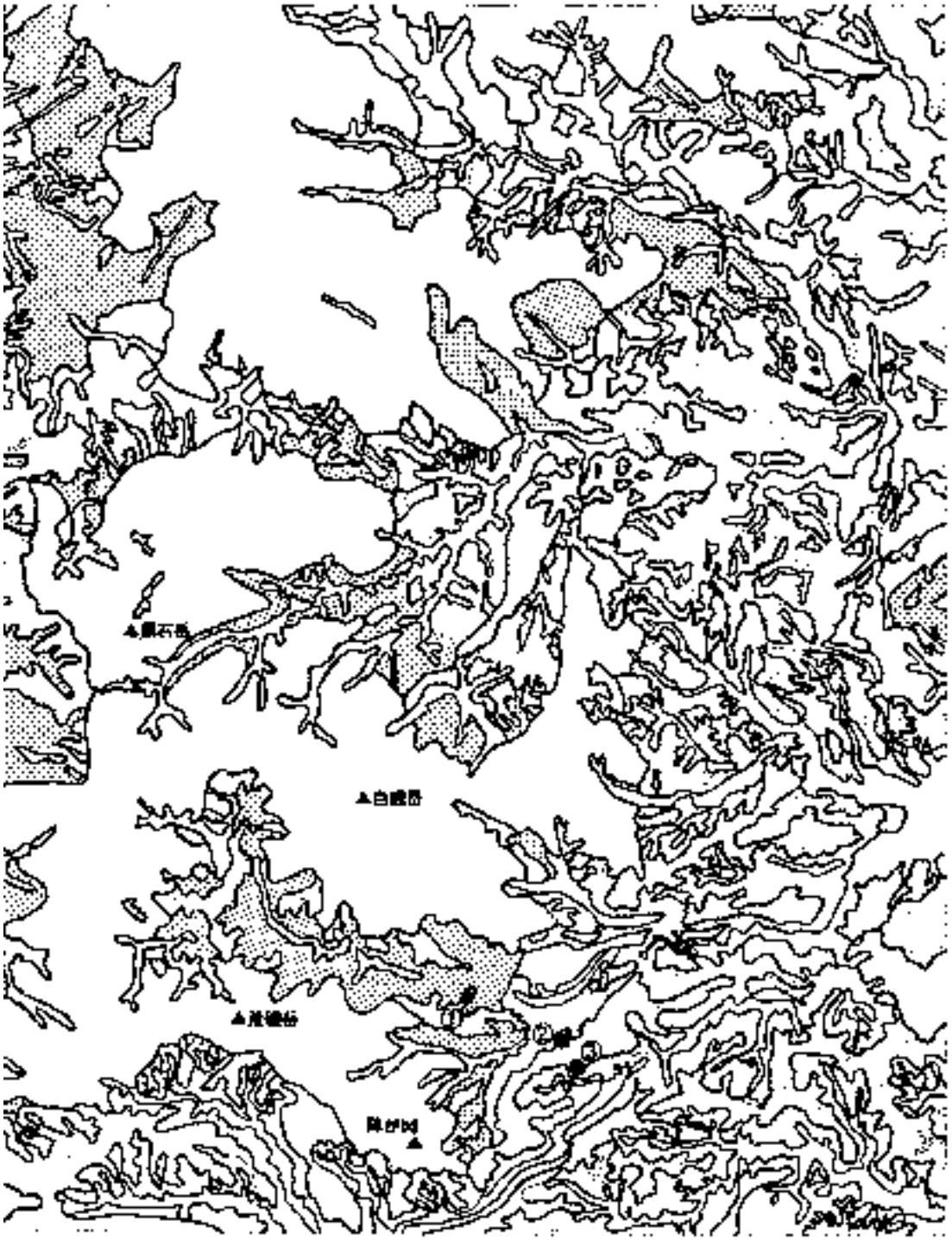
なかでも耳取遺跡出土の旧石器時代の線刻礫はメディアで報道され，日本列島展(全国７か所で開催)で展示されたことは記憶に新しい。

＜参考文献＞

1「九日田遺跡，供養之元遺跡，前原和田遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書』(36)2002
2「高篠坂遺跡，永磯遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財セター調査報告書』(61)2003
3「長十塚遺跡，石仏段遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(１)1988
4「横尾遺跡，横尾山遺跡，中崎上遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(２)1988
5「横尾遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(３)1989
6「宮原遺跡，霧島迫Ａ，Ｂ遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(４)1994
7「西栗栖遺跡」『財部町埋蔵文化財発掘調査報告書』(５)1998
8「財部町郷土史」財部町郷土史編纂委員会　1997



第１図　３遺跡の周辺の地形



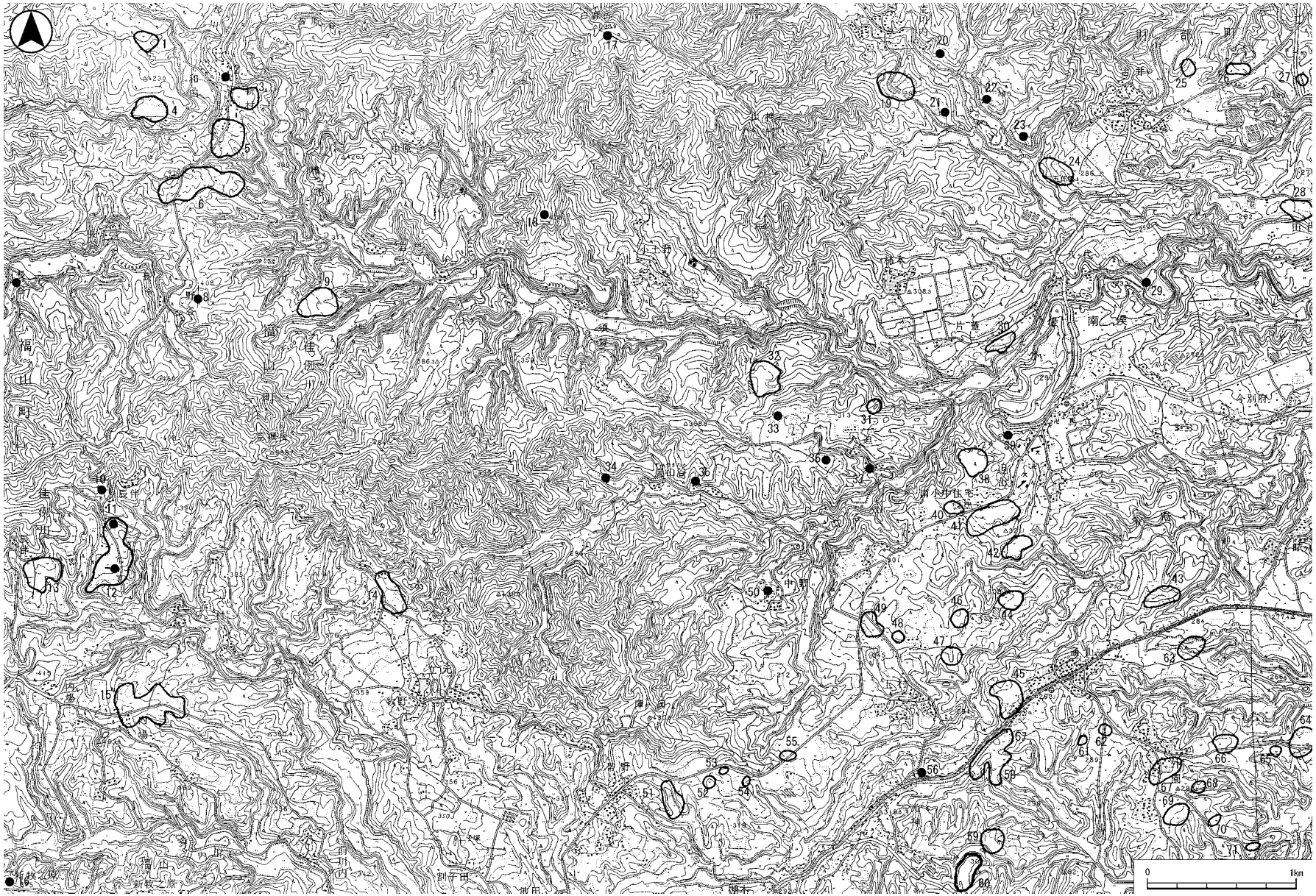
地図中●印は遺跡の位置を表す　　①：高橋遺跡　②：九養岡遺跡　③：踊場遺跡

第１表　遺跡地名表(１)

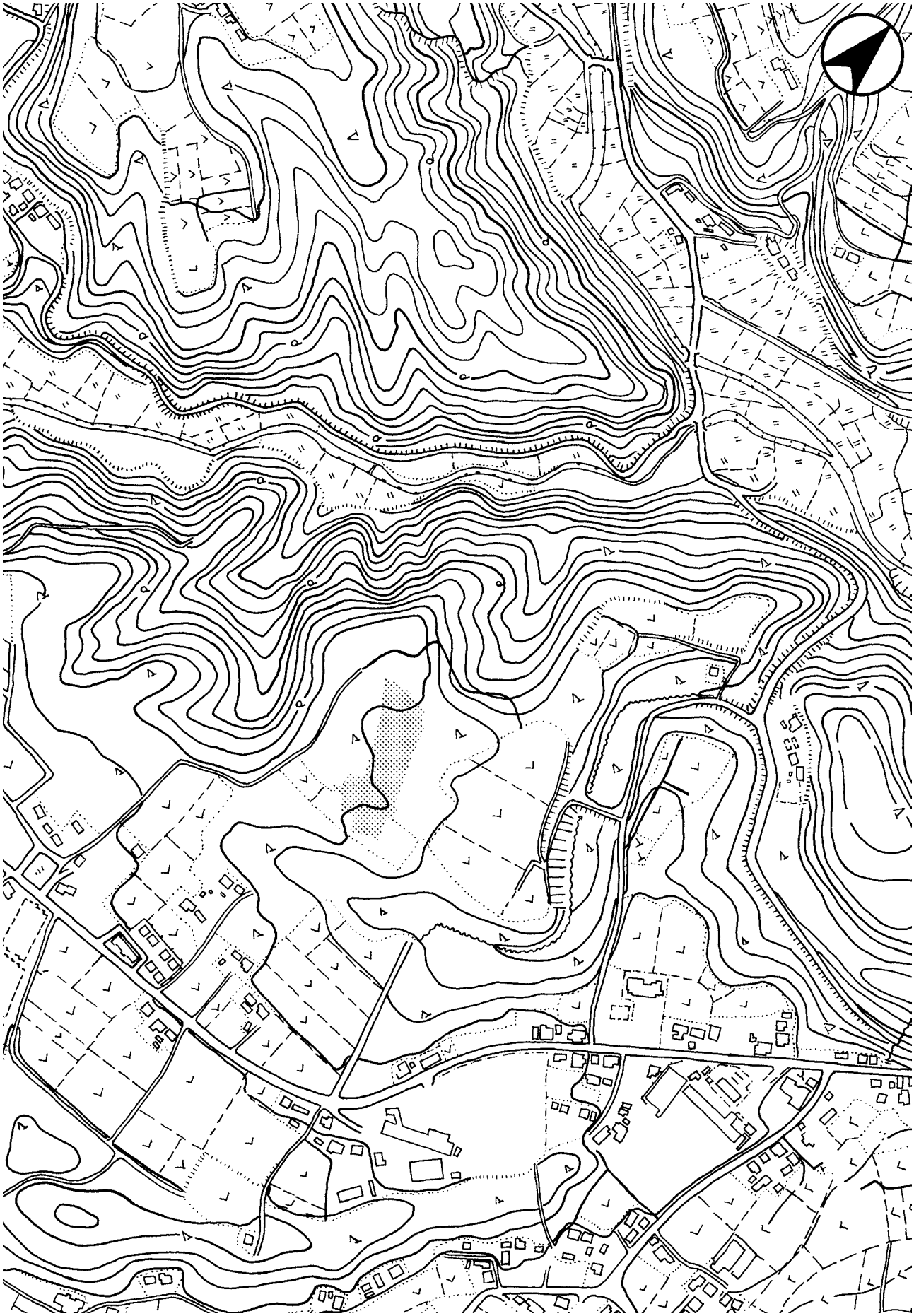
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	小坂元Ａ	福山町　比曽木野　小坂元		縄・古・歴	土器・成川式・土師器	
2	新村	〃　〃　新村	台地	縄(中)	岩崎式	
3	前原	〃　〃　前原	台地	縄・古・歴	土器・成川式・土師器	
4	城ヶ尾	〃　〃　城ヶ尾	台地	旧・縄・古	ナイフ形石器・塞ノ神式・成川式	H15.3 報告書
5	前原和田	〃　〃　前原和田	台地	旧・縄(早)	ナイフ形石器・押型文	H14.3 報告書
6	供養之元	〃　〃　供養之元	台地	縄・古	塞ノ神式・成川式	H14.3 報告書
7	長谷	〃　〃　長谷	台地	弥	大型石斧	
8	野谷下	〃　〃　野谷下		古・歴	成川式・土師器	
9	永磯	〃　〃　永磯	台地	旧・縄・歴	細石器・手向山式・土師器	H15.3 報告書
10	辰伴	福山町　佳例川　辰伴	台地	弥	土器	
11	栗ノ脇	〃　〃　栗ノ脇		縄	土器	
12	芹牟田	〃　〃　芹牟田		縄	土器	
13	赤松段	〃　〃　赤松段		縄	土器	
14	山神段	〃　〃　山神段		縄	土師器	
15	一本松	〃　〃　一本松	台地	縄(中・後)	阿高式・岩崎上層式・指宿式	H10 調査
16	花建原	〃　下牧之原　花建原			須恵器	
17	黒棚城棚	財部町　南俣　天子馬場				
18	花平陣跡	〃　〃　丸鶴城ヶ原				
19	黒棚	〃　北俣　黒棚	台地	縄(早)・歴	押型文・磨製石斧・土師器	
20	松峯	〃　〃　松峯	台地	歴	内黒土師器	
21	下戸越	〃　〃　下戸越	台地	歴	土師器	
22	柳ノ口	〃　〃　柳ノ口	台地	縄(前～後)	轟式・春日式・阿高式・指宿式・石鏃	
23	古井後ヶ谷	〃　〃　古井後ヶ谷	台地	縄		
24	西原	〃　〃　西原	台地	縄(早)・歴	押型文・土師器	
25	古井下原	〃　〃　古井下原	台地	歴	土師器	
26	宮後	〃　〃　宮後	台地	歴	土師器	
27	霧島迫Ｂ	〃　〃　霧島迫	台地	歴		
28	田代ノ上	〃　南俣　田代ノ上	台地	縄・歴	土師器・須恵器	
29	久保谷	〃　〃　久保谷	台地	歴	土師器	
30	八ヶ代上	〃　〃　八ヶ代上	台地	縄(早・後)・歴	前平式・土師器	
31	高篠坂	〃　〃　高篠坂	台地	縄(早)	前平式・手向山式	H15.3 報告書
32	**高篠**	〃　〃　**高篠**	**台地**	**古代**	**土師器・須恵器**	**本報告書**
33	大迫Ａ	〃　〃　大迫	台地	縄(早・前)	轟式・黒曜石	
34	炭山谷	〃　〃　井牧ヶ平俣迫	台地	縄・歴	石斧・土師器	
36	大迫Ｂ	〃　〃　大迫	台地	歴	土師器	
37	片蓋前	〃　〃　片蓋前	台地	縄(早・前)	押型文・塞ノ神Ｂ式・チャート	
35	炭山	〃　〃　炭山	台地	縄(後)・歴	指宿式・土師器	

第２表　遺跡地名表(２)

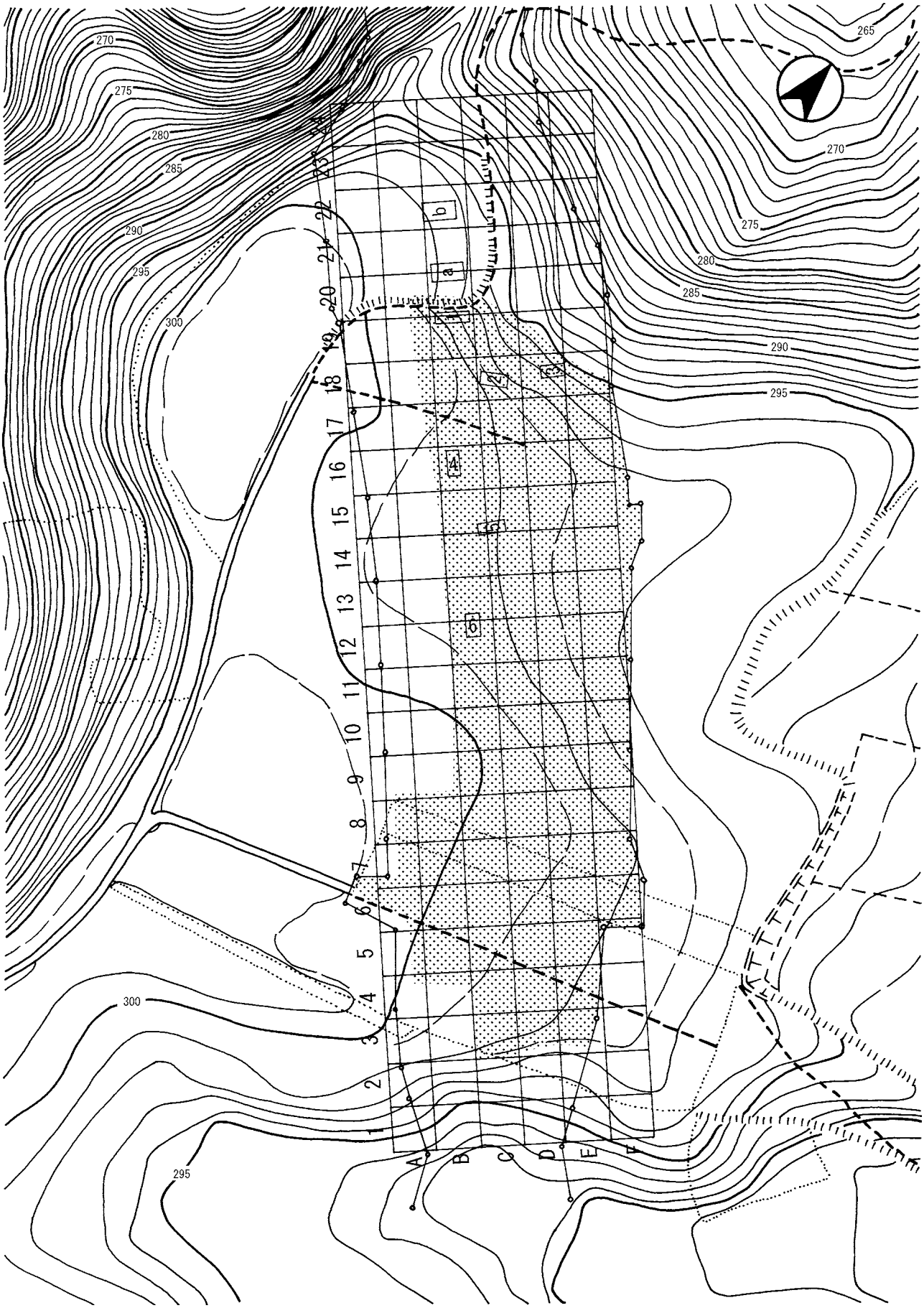
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
38	**九養岡**	**〃　〃　九養岡**	**台地**	**旧・縄・歴**	**三稜尖頭器・手向山式・土師器**	**本報告書**
39	馬立	〃　〃　馬立	台地	歴(奈良)	土師器・須恵器	
40	石仏段	〃　〃　石仏段	台地	縄(晩)・歴	黒色磨研土器・土師器	S61 調査
41	長十塚(城ヶ尾)	〃　〃　長十塚	台地	縄・歴	土器・石鏃・土師器・須恵器・土錘	S61 調査
42	**踊場**	**〃　〃　踊場**	**台地**	**縄(早)・歴**	**塞ノ神式・土師器・須恵器**	**本報告書**
43	王ヶ平	〃　〃　王ヶ平	台地	歴	土師器・須恵器	
44	九日田	〃　〃　九日田	台地	縄(早・後)・歴	石坂式・黒川式・土師器	H14.3 報告書
45	耳取	〃　〃　耳取	台地	旧・縄・歴	ナイフ形石器・吉田式・土師器・礫群	H11 ～ 12 調査
46	前山２	〃　〃　前山	台地	縄(晩)・歴	黒色磨研土器・土師器	
47	前山１	〃　〃　前山	台地	歴	土師器	
48	芭蕉ヶ迫２	〃　〃　芭蕉ヶ迫	台地	縄・歴	石皿・敲石・土師器	
49	芭蕉ヶ迫１	〃　〃　芭蕉ヶ迫	台地	縄・歴	土器・土師器	
50	中野	〃　〃　中野	台地	歴	土師器・須恵器	
51	長田	〃　〃　長田	台地	縄・歴	土器・土師器	
52	梅田	〃　〃　梅田	台地	縄・歴	土器・土師器	
53	荷床２	〃　〃　荷床	台地	歴	土師器	
54	八畝	〃　〃　八畝	台地	縄・歴	土器・土師器	
55	荷床１	〃　〃　荷床	台地	歴	土師器	
56	野方	〃　〃　野方	台地	縄・歴	土器・土師器・内黒土師器	
57	桐木	末吉町　諏訪方　桐木	台地	旧・縄・歴	ナイフ形石器・船元式・土師器	H9 ～ 13 調査
58	桐木Ｂ	〃　〃　桐木	台地	旧・縄・歴	塞ノ神式・深浦式・土師器・住居遺構	H12 ～ 13 調査
59	関山西	〃　〃　関山西	台地	縄・弥・中世	土器・土師器・須恵器	H13 調査
60	関山	〃　〃　関山	台地	縄	土器	H13 調査
61	通山上川路	〃　深川 五位塚通山上川路	台地	縄(晩)・中世	夜臼式	S59 調査
62	真方入口	〃　〃　真方入口	台地	縄(前・晩)	轟式	S59 調査
63	中牛牧	〃　〃　中牛牧	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61 調査
64	楠木岡Ｃ	〃　〃　楠木岡	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61 調査
65	楠木岡Ｂ	〃　〃　楠木岡	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61 調査
66	楠木岡Ａ	〃　〃　楠木岡	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61 調査
67	臼杵	〃　〃　臼杵	台地			
68	下ノ窪	〃　〃　五位塚下ノ窪	台地	縄(晩)・古代	入佐式・土師器	
69	四枝道	〃　〃　四枝道	台地	縄(晩)・古代	土師器	S61 調査
70	仮牧	〃　〃　五位塚仮牧	台地	古代	土師器・須恵器	S60 調査
71	五位塚渡り下	〃　〃　五位塚渡り下	台地	縄(早)	山形押型文	S60 調査



第２図　周辺遺跡地図



第３図　遺跡と周辺の地形



第４図　周辺地形と調査区及びグリッド配置図(1/1250)

第３節　遺跡の層位

Ⅰ層　　暗褐色土　現表土

Ⅱ層　　黄白色軽石層　P-３　通称文明ボラ　西暦1471年頃の桜島の噴出物　一部に残存

Ⅲ層　　黒色土　古代の遺物包含層

Ⅳa層　黄褐色土　Ⅳb層の腐植土　縄文時代晩期及び後期の遺物包含層

Ⅳb層　黄褐色細粒軽石混硬質土　御池軽石　約4200年前の霧島御池の噴出物

Ⅴa層　暗橙色土　Ⅴb層の腐植土　縄文時代前期の遺包含層

Ⅴb層　明橙色火山灰通称アカホヤ火山灰　約6400年前の鬼界カルデラの噴出物

Ⅵa層　黄褐色軽石混淡茶褐色土　縄文時代早期の遺物含層

Ⅵb層　黄褐色軽石層　P-11　約7400年前の桜島の噴出物

Ⅶ層　　明茶褐色土　縄文時代早期の遺物包含層

Ⅷ層　　黒褐色土

Ⅸ層　　黄白色火山灰　P-14　サツマ火山灰　約11000年前の桜島の噴出物

Ⅹ層　　黒褐色土

ⅩⅠ層　黄褐色軟質ローム

ⅩⅡ層　暗茶褐色軟質ローム　旧石器時代の遺物包含層

ⅩⅢ層　褐色土　旧石器時代の遺物包含層

ⅩⅣ層　暗褐色硬質土　旧石器時代の遺物包含層　赤褐色パミス(P-15)が点在する。

ⅩⅤ層　暗褐色硬質土　旧石器時代の遺物包含層

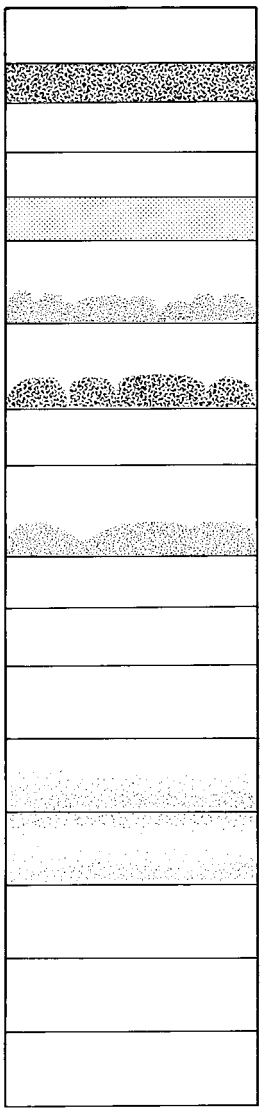
ⅩⅥ層　暗褐色硬質土　旧石器時代の遺物包含層　赤褐色パミス(P-17)が点在する。

ⅩⅦ層　濁黄白色砂質土

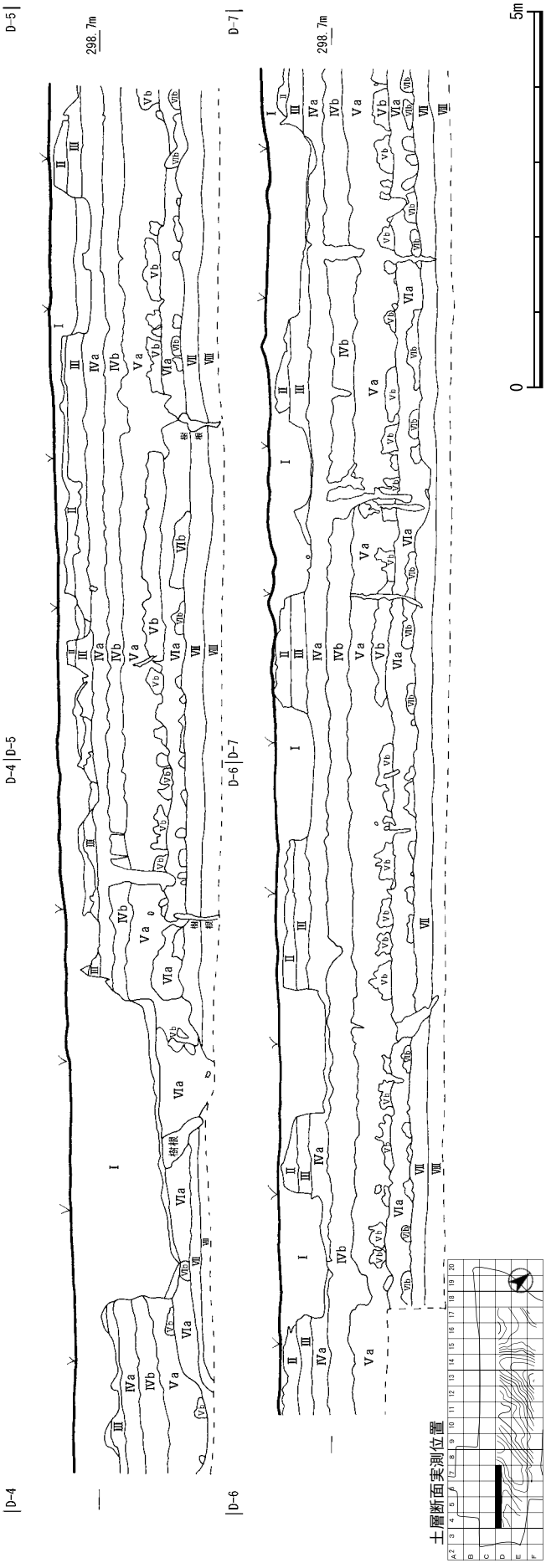
シラス　角礫混明黄白色砂質土約25000～28000年前の姶良カルデラの噴出物

※　P＝パミス＝軽石

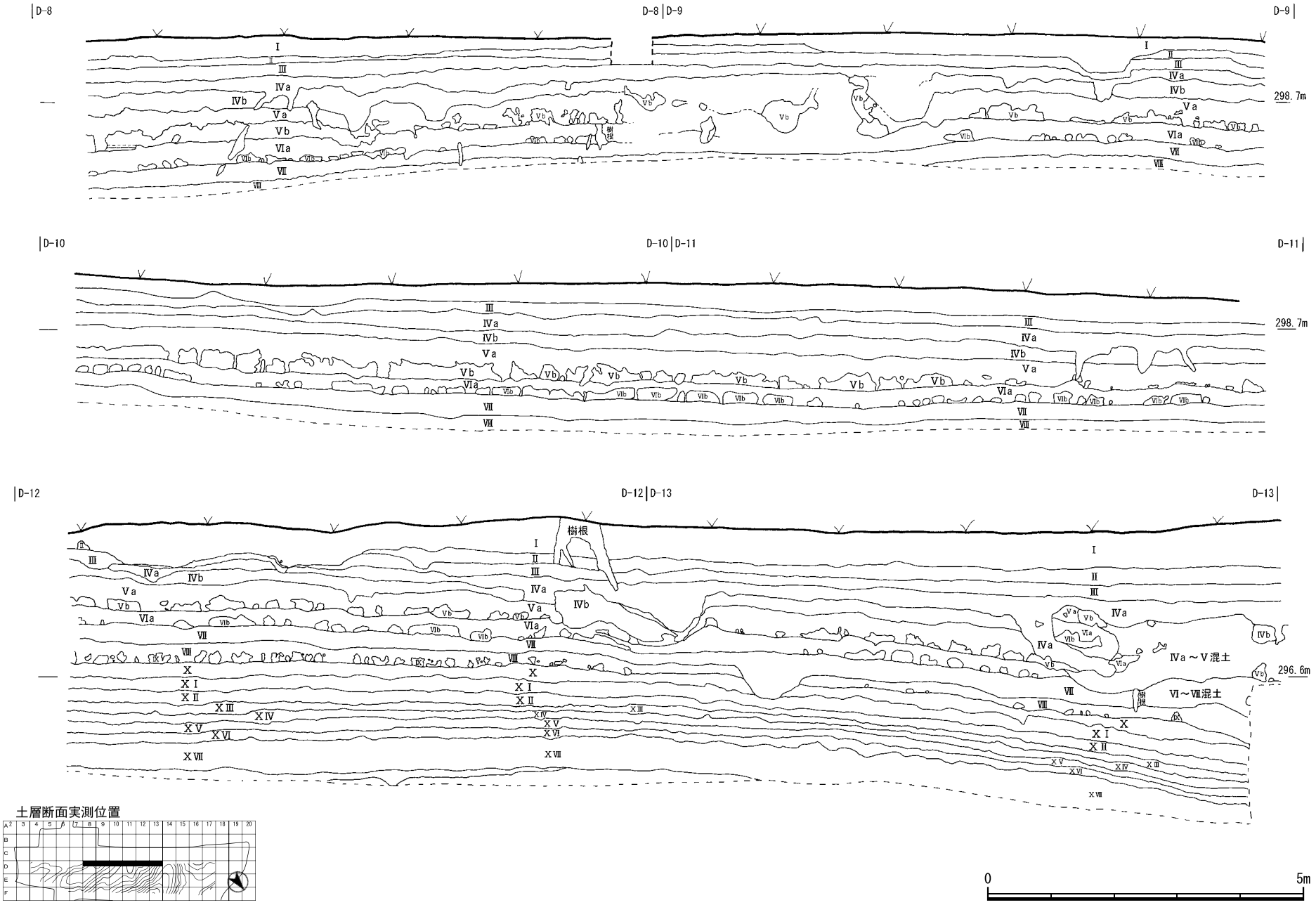
桜島の噴出物はP-1(大正３年)を基準に，新しいものから順に番号を付している。



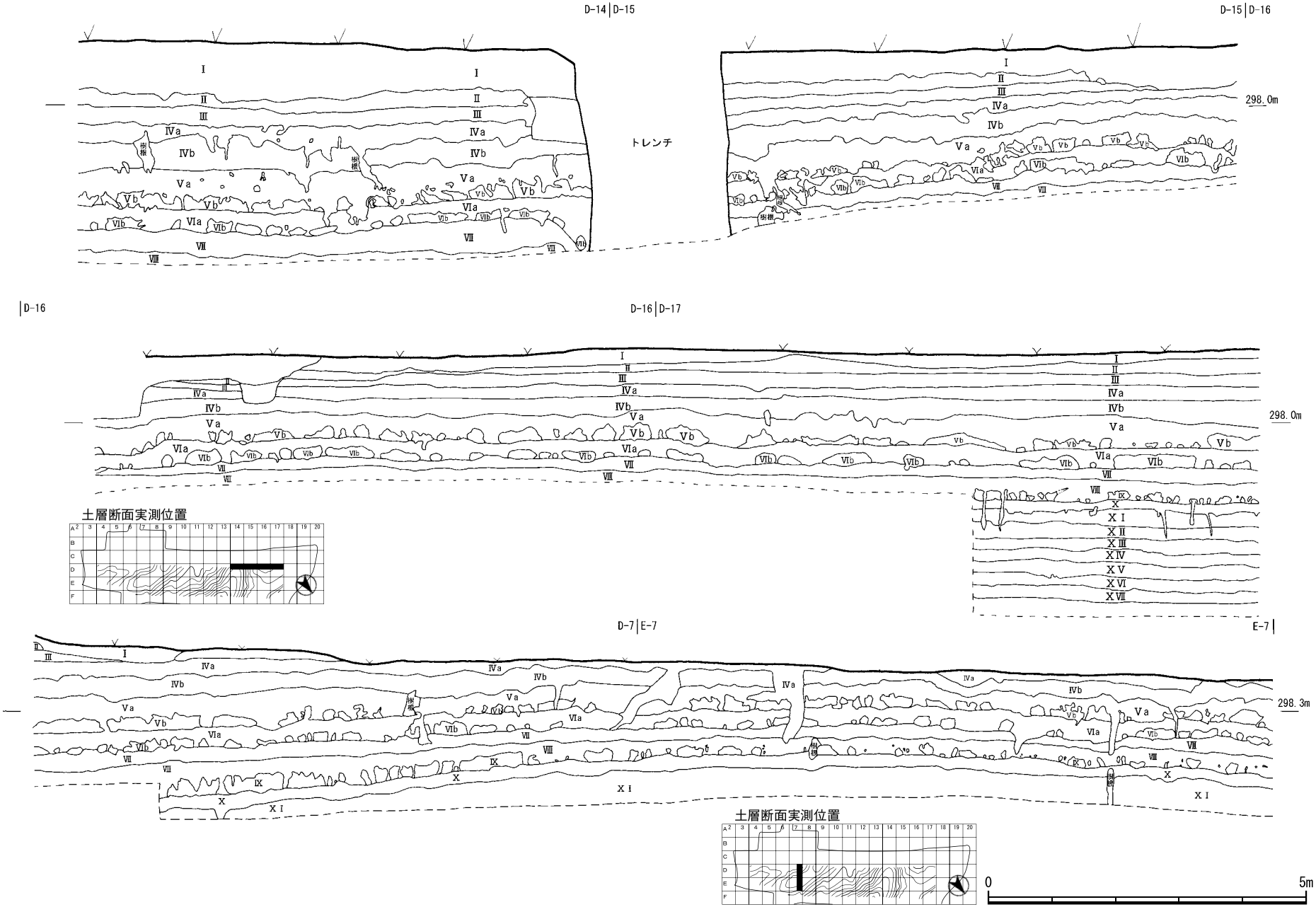
第５図　九養岡遺跡標準土層図



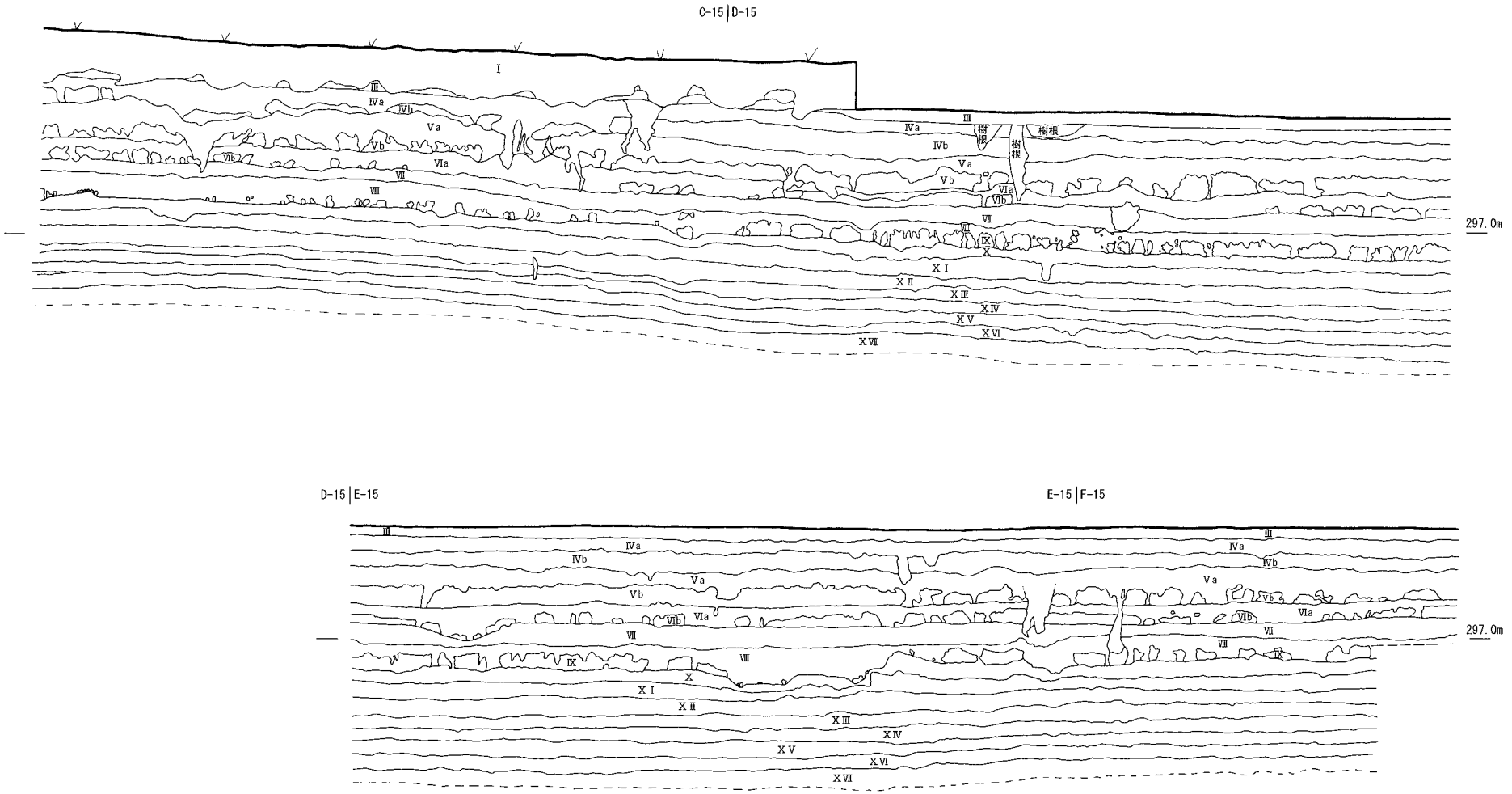
第６図　土層断面実測図(１)



第７図　土層断面実測図(２)



第８図　土層断面実測図(３)



第９図　土層断面実測図(４)

第Ⅲ章　旧石器時代の調査

第１節　調査の方法と概要

旧石器時代に該当する石器群は，ⅩⅥ層からⅩ層の間に出土し，総数2,326点に達している。また，それらの石器群はブロックを形成して分布することから，ブロックを設定し把握に努めることにした。

遺構については，ⅩⅤ層で礫群３基を検出した。詳細については，第２節に記載した。

ブロックについては，平面的に遺物が集中する最小単位を捉え，加えて，“ブロック”を構成する石材別の固まりも主要な構成要因との認識で，ブロック認定を行った。

次に，ブロックの位置関係を平面的に検討した結果，ブロックの集中に一定のまとまり（範囲）を把握できた。そのため，この範囲を“エリア”と呼称することとし，石器群及び製作集団の把握に努めることとした。

旧石器時代の調査は，発掘調査においてⅩⅥ層～Ⅹ層までを取り扱ったものである。

調査では，ⅩⅥ層にP-17，ⅩⅣ層にP-15の桜島起源の赤色パミスが点在することを確認している。

遺構，遺物は，調査区のD～F-14～16区（東西15m，南北18m，南向きの緩斜面）で出土し，遺構と遺物が近接する状況を提示している。また，複数の遺物集中域を検出している。

これらの遺物集中区域の検出状況及び遺構配置は，第10図，第11図に示した。

出土遺物の接合作業を行った結果，60個体の接合資料を確認し，また，剥離過程の検討可能な良好な資料が多数得られている。なお，確認した全ての接合状況は，第45図に石材別の接合パターンも併せて表示した。

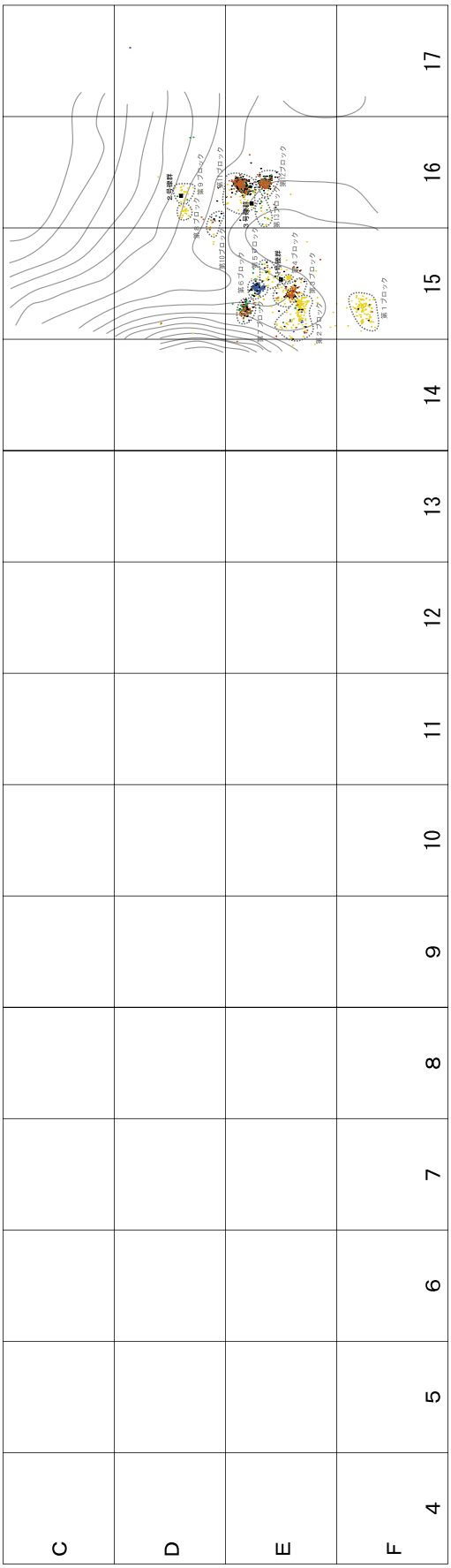
60個体分の接合資料が得られたことから，接合の相関関係を検証した。その結果，ⅩⅥ層からⅩⅡ層の５層間で接合し，ブロック間でも接合することが確認された。これらの接合関係は，同一母岩接合，破損石器接合で具体的に示している。そのため，接合資料の成果を重視することとし，ⅩⅥ層からⅩⅡ層を一文化層とした。

なお，No110がⅩⅠ層，No111がⅩ層から出土しているが，エリア外からの単独出土であり，ⅩⅥ層からⅩⅡ層の石器群とは切り離して捉えられる。

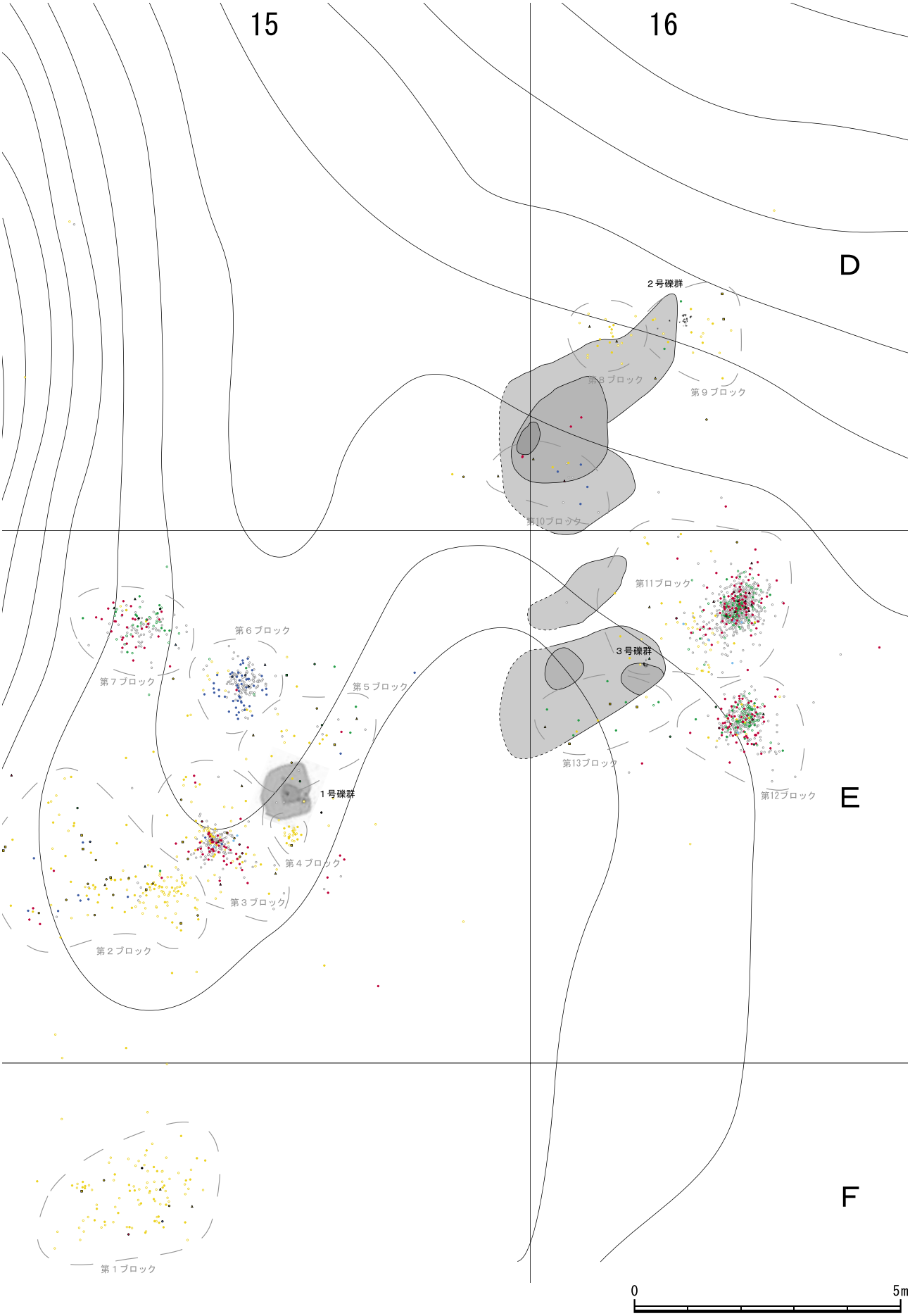
３基の礫群の分布は，北側急斜面から南側に入った北側平坦面にのみみられる。

１号礫群は，第１エリアの第４ブロックと第５ブロック内で検出した。２号礫群は第２エリアの第９ブロック内で検出した。３号礫群は，第２エリアの第11ブロック内で検出した。それぞれ礫群間は６ｍ～７ｍの距離を保ち，またブロック内で検出され，ブロックと密接な関わりが想定される。

本報告書で取り扱った器種は，ナイフ形石器，台形石器，三稜尖頭器，スクレイパー，二次加工痕のある剥片，微細剥離痕のある剥片，石核，剥片，ブランティングチップ，チップ，ハンマーストーンである。



第10図　旧石器遺物出土状況図



第11図　旧石器ブロック配置図



第12図　旧石器遺物出土状況図

さらにナイフ形石器については，刃潰し加工の部位により，基部加工，部分加工，一側縁加工，二側縁加工，両側縁加工と呼んでいる。スクレイパーについては，刃部の観察により，掻器，削器の区分もある。

石材は，肉眼的特徴によっておおむね次のように分類した。なお，観察表等においてはそれぞれ略号を使用し，石材ごとに色分け表示を行った。

黒曜石Ⅰ類(OB2B[●])

わずかに透明感があり，不純物を多く含むものを包括した。鹿児島市の三船，大口市の日東，五女木，肝属郡根占町長谷，熊本県球磨郡球磨村の白浜などで採取できる黒曜石に類似する。肉眼的特徴は，青みがかった灰色の色調を呈するもので，白色の不純物を多く含む。

黒曜石Ⅱ類(OB3A[●])(OB3B[●])

黒色～飴色の透明感があって不純物をほとんど含まない黒曜石を包括した。おおむね宮崎県えびの市の桑ノ木津留，大口市上青木などで採取できる黒曜石に類似するものであるが，既知の原産地資料と一致しないものも含まれている。

ギョクズイ(CC[●])

熱水鉱床等で発達する白色～黄色の珪質岩と鉄石英を包括した。

頁岩(SH[●])

摂理を多く内包する淡緑色頁岩や青灰色の珪質頁岩，光沢のない硬質の頁岩を包括している。

砂岩(SS)

本遺跡では，比較的緻密な砂岩がハンマーストーンや磨石，敲石，石皿，台石に利用されている。

輝石安山岩(PA)

黒色鉱物を含む，斑晶のあまり発達していない火成岩を一括して包括した。本遺跡では，磨石，敲石，石皿，台石に利用されている。

第２節　旧石器時代の遺構

(１)１号礫群(第12図)

Ｅ-15区，第１エリア，第４ブロックと第５ブロックの間で検出した。

輝石安山岩，頁岩，砂岩を使用し，５cm程の小型の礫を用いている。輝石安山岩は角礫，頁岩は円礫で被熱の度合いが激しく脆い。一方，砂岩は円礫で被熱赤化が顕著である。

礫群は炭化物の分布範囲内に包括され，径約60cmの範囲に細片状の炭化物が分布し，その周囲(径約150cm～200cm)を粒状の炭化物が取り囲んでいる。礫の集中に伴う掘り込みは，確認されていない。破砕礫に関しては，礫群内で４個体の接合も確認している。

(２)２号礫群(第12図)

D-16区，第２エリア，第９ブロック内で検出した。

１号礫群と同じ輝石安山岩，頁岩，砂岩を使用し，４cm程の小型の礫を用いている。礫の形状は，輝石安山岩は角礫で，頁岩は円礫と角礫で被熱の度合いが激しく脆い。砂岩と頁岩は，円礫で被熱赤化が顕著である。頁岩と砂岩が礫群内で２個体，礫群外で４個体接合し，熱破砕と判断される。

礫群の形状は，約50cmの範囲にまとまり，掘り込みは認められなかったが，礫集中部の下部まで炭化物が検出され，炭化物は２号礫群の東側に広がっている。

(３)３号礫群(第12図)

Ｅ-16区，第２エリア，第11ブロック内で検出した。

輝石安山岩，頁岩を使用し，５～10cm程の大きさの少数の礫で構成する。礫の形状は，輝石安山岩は角礫，頁岩は円礫で被熱度合いが激しく脆く，赤化も顕著である。

石材ごとに接合し，ほぼ原型に復元されている。

礫群の形状は，約20cmの範囲にまとまり，掘り込みは認められないが，礫群の南東側に炭化物の分布が確認できる。

第３節　旧石器時代の遺物

遺物は，Ｄ～Ｆ-14～16区に集中する。Ｅ,Ｆ-15区集中箇所を第１エリア(第１～第７ブロック)，D-16区，Ｅ-16区集中箇所を第２エリア(第８～第13ブロック)とした。

具体的なブロック及びエリアと，遺物出土状況は第10図と第11図に示した。

(１)第１エリア(第13～28図)

７か所のブロックで構成する。第１ブロック以外の６ブロックは，東側に延びる緩斜面に分布している。各ブロック間は，1,2mから２mほどの距離を保ち，石材ごとにブロックが異なる様相を示している。

各ブロックから石器が出土し，ナイフ形石器３点，台形石器２点，三稜尖頭器９点，削器１点，石核８点，ハンマーストーン３点，二次加工痕のある剥片２点のほか剥片が出土している。各ブロック内とブロック間で遺物が接合したため，各ブロックの同時性が判断できる。

①第１ブロック(第13～15図)

ブロックを構成する石材は，CCが主体で97点，OB2B１点，OB3B１点，SS１点が加わる。第２ブロック内の遺物と接合する。

三稜尖頭器未製品１点(No１)，微細剥離痕を持つ剥片１点(No２)，二次加工痕のある剥片１点(No６)，石核１点(No８)の他，剥片，ブランティングチップ１点(No４)，ハンマーストーン１点(No９)が出土している。

No１は，打面以外の３面が刃部となる。特に，下端部と右側縁角は，スクレイパーエッジ状であるが，左側縁部と下端部の剥離面には，ブランティングチップがそれぞれ１点ずつ接合する。(接合資料No11)このことから，三稜尖頭器の製作段階と判断した。

微細剥離痕を持つ剥片No２は，腹面左側縁部に背面からの微細剥離の痕跡が観察できる。No４はブランティングチップである。

二次加工痕のある剥片No６は，打面に背面からの剥離が連続し，背面の最終剥離面に剥片が１点接合し，剥片No５と第２，第３ブロック間の剥片，石核と接合する。（接合資料No３）

No７は他の剥片類と接合する。（接合資料No13）

石核No８は，先行した剥離面を打面とし，剥離作業を試みているが，意図する剥片が取り出された可能性は低い。剥片と接合している。（接合資料No９）

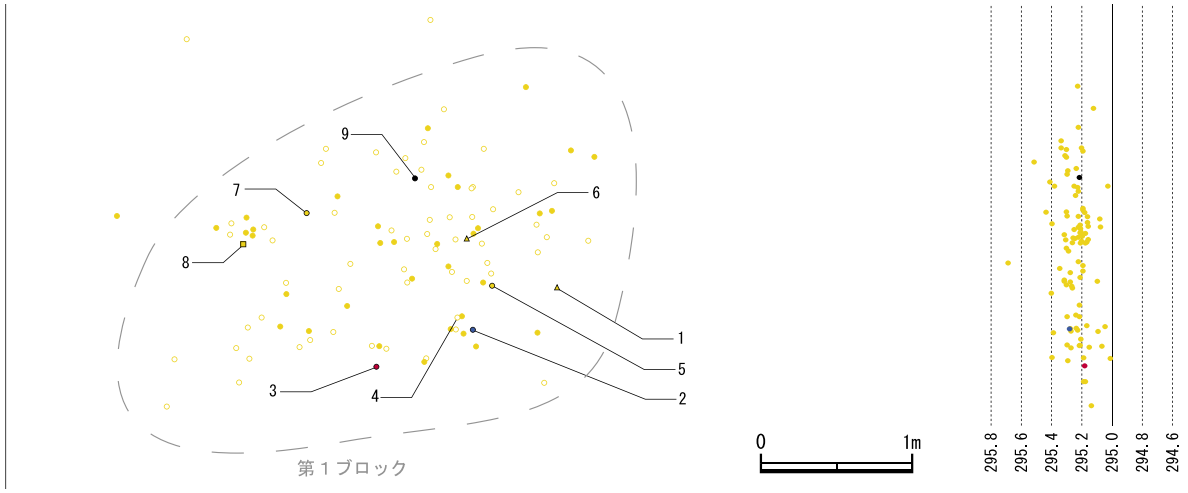
No９のハンマーストーンは砂岩を用い，両端と上面の左右のコーナーに敲打痕が明瞭に観察され，一部は欠落し，擦痕も残される。

②第２ブロック(第16～19図)

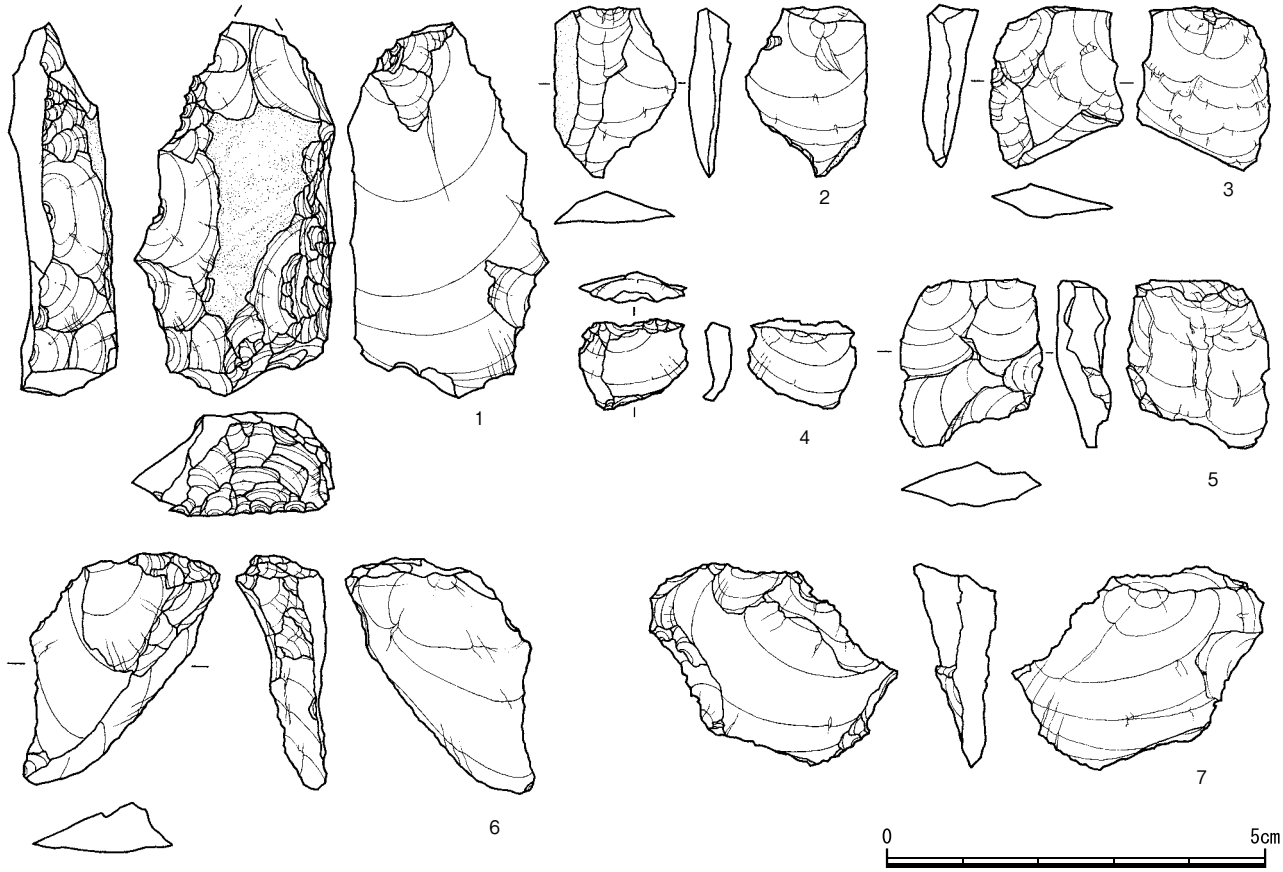
ブロックを構成する石材は，CCが主体で136点，OB８点，OB2B５点，OB3B９点，SH３点が加わる。第３ブロックと接す。CCは第１，第３ブロック内と，OB2類は第６ブロック内の遺物と接合する。

ナイフ形石器１点(No10)，三稜尖頭器２点(No11,29)，微細剥離痕を持つ剥片１点(No15)の他，剥片，ブランティングチップ１点(No25)，折断剥片２点(No14,26)，ギョクズイの石核４点(No16,23,24,28)が出土している。

ナイフ形石器No10は，横長剥片の打面方向を右側縁とし，背面加工と打瘤除去を行い，左側縁の中央部にも刃潰し加工を施している。一見，尖頭状石器の形状である。



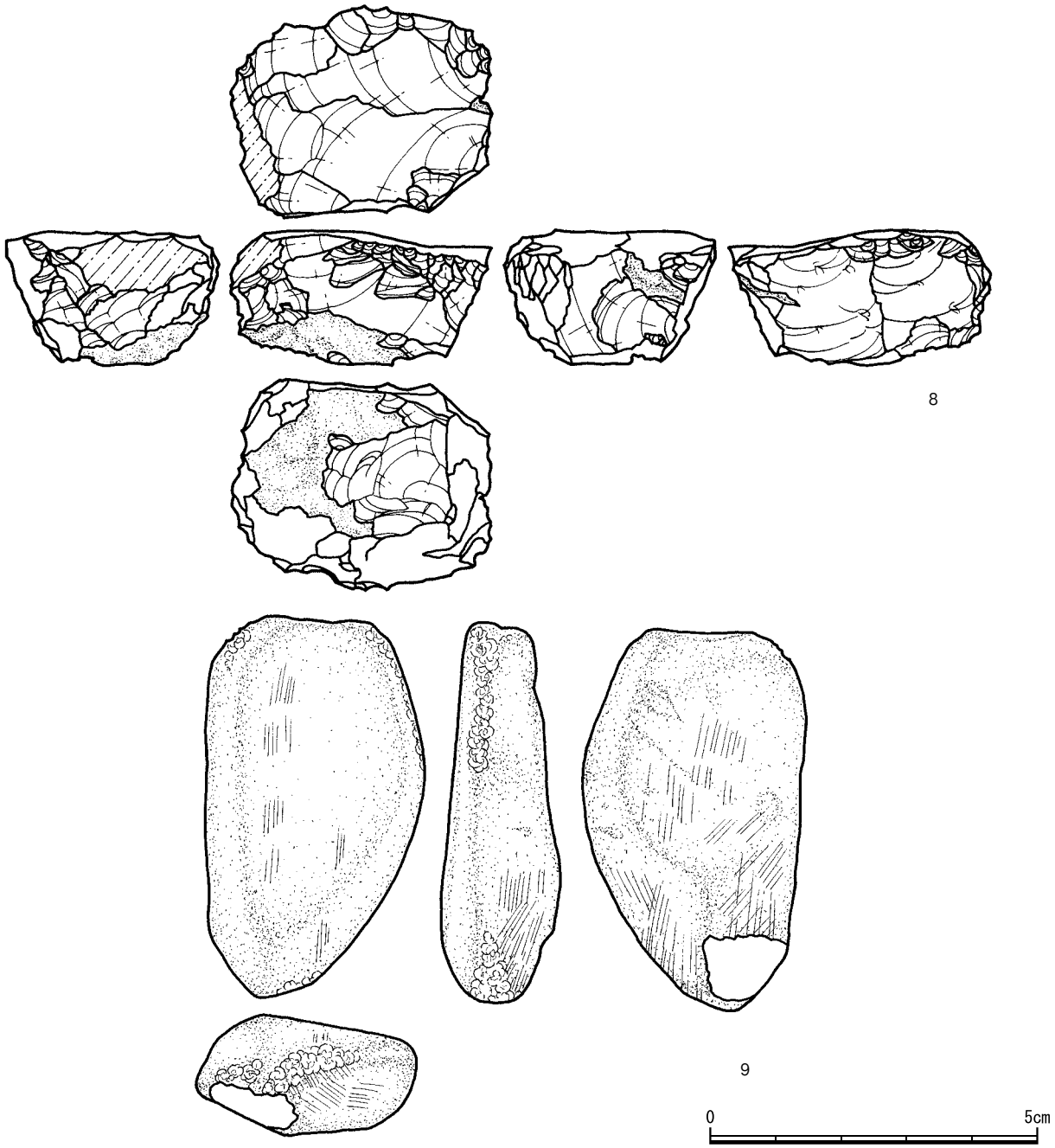
第13図　第１エリア第１ブロック遺物出土位置図



第14図　第１エリア第１ブロック出土石器実測図(１)

第３表　第１エリア第１ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
14	1	剥片石器	三稜尖頭器	A1	B1	CC	49.1	26.5	12.8	(16.45)	2980	XⅣ	-	F-15	接合資料No11
	2	剥片類	微細剥離痕剥片	A1	B1	OB3B	22.6	16.1	5.6	1.43	2962	XⅣ	-	F-15	-
	3	剥片類	剥片	A1	B1	OB2B	21.5	17.6	6.5	1.40	3250	XⅣ	-	F-15	-
	4	剥片類	ブランティングチップ	A1	B1	CC	11.2	14.1	4.1	0.40	2961	XⅣ	-	F-15	-
	5	剥片類	剥片	A1	B1	CC	22.4	19.0	6.3	2.47	2975	XⅣ	-	F-15	接合資料No３
	6	剥片石器	二次加工痕剥片	A1	B1	CC	31.9	26.3	11.1	4.74	3260	XⅣ	下	F-15	接合資料No３
	7	剥片類	剥片	A1	B1	CC	29.2	32.9	10.9	5.47	2892	XⅢ	-	F-15	接合資料No13
15	8	石核類	石核	A1	B1	CC	39.4	30.8	20.3	30.90	3615	XⅤ	上	F-15	接合資料No９
	9	礫石器	ハンマー	A1	B1	SS	57.9	33.4	17.6	(44.20)	2990	XⅣ	下	F-15	-



第15図　第１エリア第１ブロック出土石器実測図(２)

三稜尖頭器No11は分厚い横長剥片を用い，腹面からの整形剥離が先行し，その後，稜上剥離を加える。先端部には細かい調整剥離が重ねられている。

No15は，腹面下端部に背面からの微細剥離の痕跡が観察できる。

石核No16は，剥片No13と第３ブロックの石核No46と接合するが，剥片No13を剥離する段階で石核がNo16とNo46に二分割したため剥離を終えている。作業面の観察から単剥離面打面である。(接合資料No３)

No12は縦長剥片で，打面が石核No16の打面と接合する。(接合資料No３)

No14は他の剥片と接合し，石核No16と第３ブロックの石核No46と接合する。（接合資料No３）

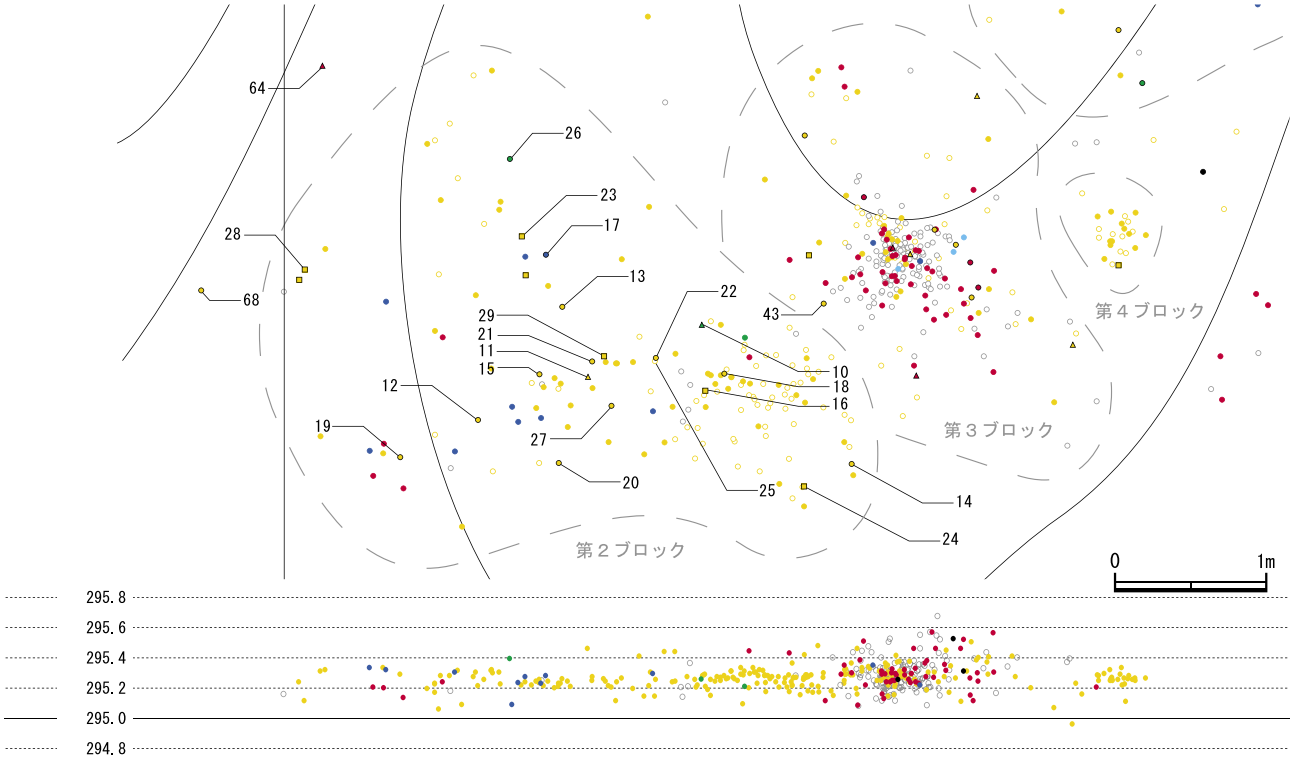
No17(接合資料No32)，No18(接合資料No33)，No19(接合資料No１)は，背面と主剥離面の観察から打面転位を行ったことが観察できる。

No20は素材剥片である。No21,22の剥片は，石核No23に21＋22の順に接合する。（接合資料No２）

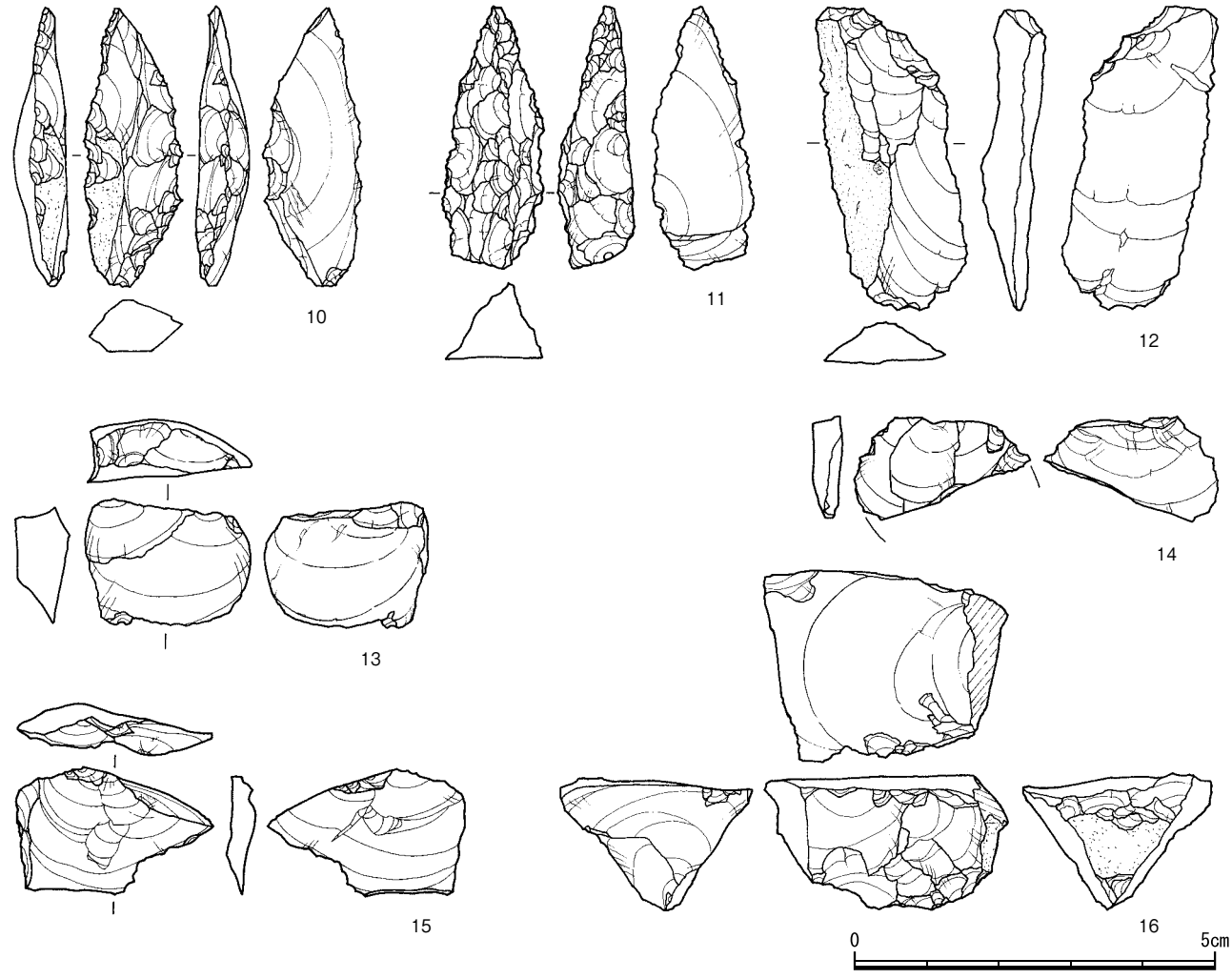
石核No24は打面転位を行い，横広の剥片を取り出している。（接合資料No６）

No25はブランティングチップであり，No26は折断剥片で，幅広の縦長剥片を背面方向からの圧力で分割している。剥片No27はブロック内で他の剥片と接合する。

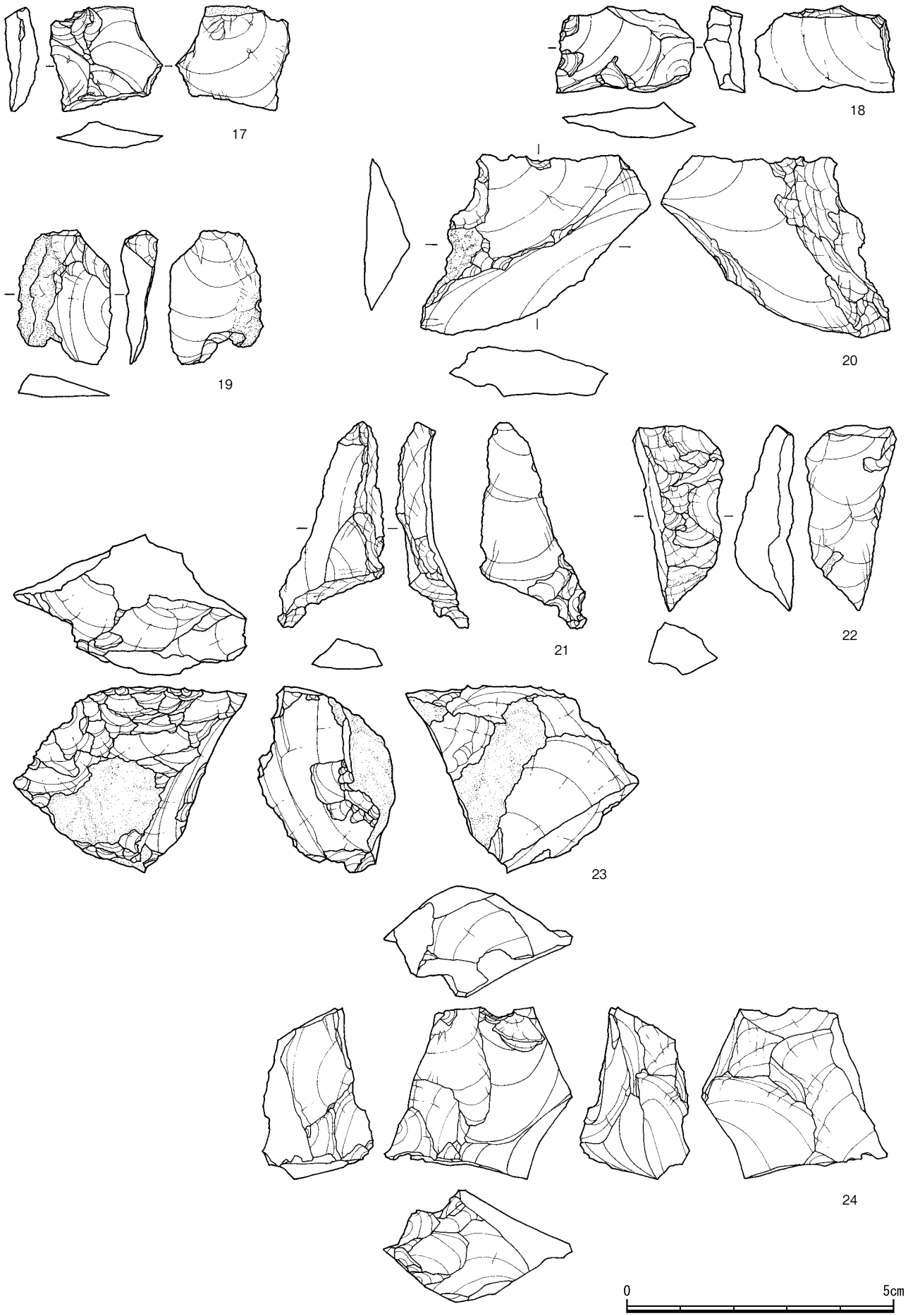
石核No28は，単剥離面打面で頭部調整がなされ，作業面に最終剥片と先行した頭部調整剥片，それに先行した剥片が接合する。（接合資料No23）



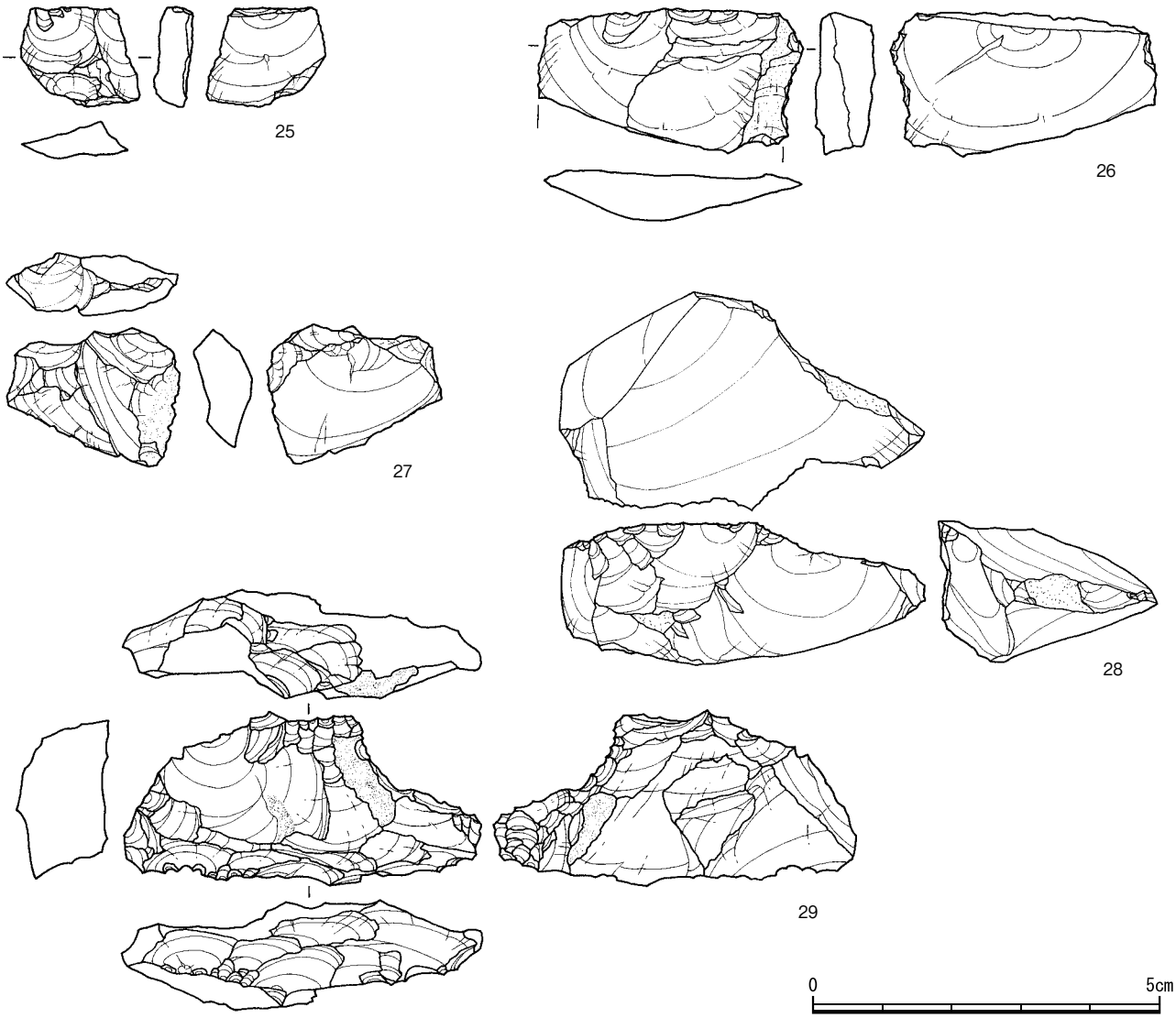
第16図　第１エリア第２ブロック遺物出土位置図



第17図　第１エリア第２ブロック出土石器実測図(１)



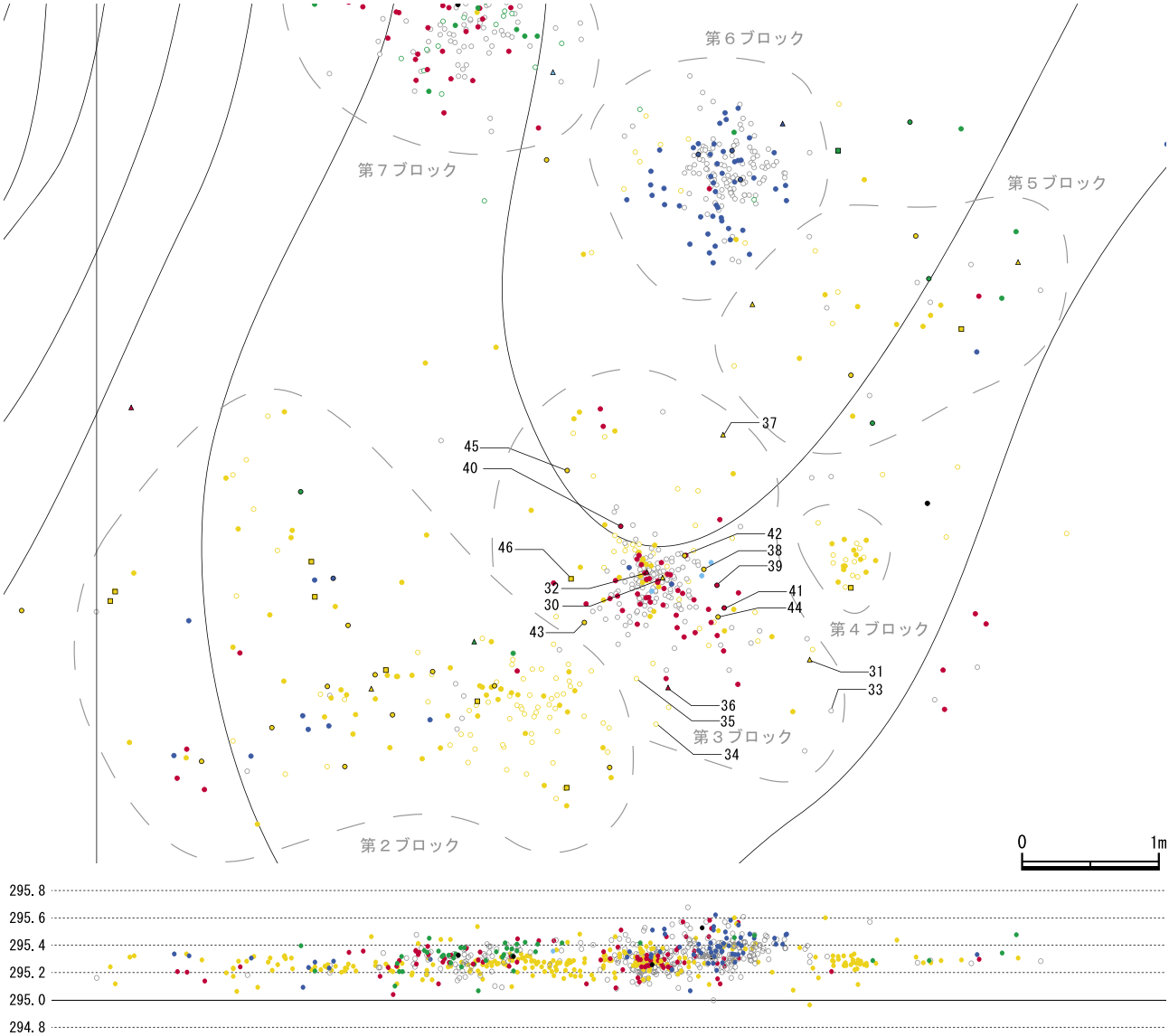
第18図　第１エリア第２ブロック出土石器実測図(２)



第19図　第１エリア第２ブロック出土石器実測図(３)

第４表　第１エリア第２ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
17	10	剥片石器	ナイフ形石器	A1	B2	SH	38.6	13.6	17.4	3.19	3918	XV	-	E-15	-
	11	剥片石器	三稜尖頭器	A1	B2	CC	36.2	10.0	14.1	4.44	2873	XIII	-	E-15	-
	12	剥片類	剥片	A1	B2	CC	41.6	17.3	7.4	4.59	3060	XVI	-	E-15	接合資料No３
	13	剥片類	剥片	A1	B2	CC	11.6	22.0	9.0	3.20	3078	XIV	下	E-15	接合資料No３
	14	剥片類	折断剥片	A1	B2	CC	(13.8)	(23.6)	3.6	(0.89)	3036	XIV	-	E-15	接合資料No３
	15	剥片類	微細剥離痕剥片	A1	B2	CC	17.2	27.4	6.5	1.73	3051	XIV	下	E-15	-
	16	石核類	石核	A1	B2	CC	18.5	34.0	26.5	15.03	3320	XIV	下	E-15	接合資料No３
18	17	剥片類	剥片	A1	B2	OB3B	20.1	21.2	6.0	1.97	3076	XIV	-	E-15	接合資料No32
	18	剥片類	剥片	A1	B2	CC	16.6	25.8	8.7	2.67	3319	XIV	下	E-15	接合資料No33
	19	剥片類	剥片	A1	B2	CC	24.2	17.3	5.9	2.13	2927	XIII	下	E-15	接合資料No１
	20	剥片類	剥片	A1	B2	CC	33.6	43.5	9.4	9.87	3046	XIV	下	E-15	-
	21	剥片類	剥片	A1	B2	CC	38.9	21.1	9.6	3.47	3054	XIV	下	E-15	接合資料No２
	22	剥片類	剥片	A1	B2	CC	34.5	16.3	11.1	4.75	3322	XV	-	E-15	接合資料No２
	23	石核類	石核	A1	B2	CC	37.2	42.2	24.0	26.77	3073	XIV	-	E-15	接合資料No２
	24	石核類	石核	A1	B2	CC	31.1	33.5	20.0	14.97	3595	XV	-	E-15	接合資料No６
19	25	剥片類	ブランティングチップ	A1	B2	CC	14.4	17.0	5.0	1.24	3580	XV	-	E-15	-
	26	剥片類	折断剥片	A1	B2	SH	(38.0)	20.6	8.2	(6.99)	2874	XIII	下	E-15	-
	27	剥片類	剥片	A1	B2	CC	19.3	23.5	8.8	3.05	3282	XVI	-	E-15	接合資料No１
	28	石核類	石核	A1	B2	CC	29.7	52.9	19.1	24.28	3067	XIV	下	E-15	接合資料No８
	29	石核類	三稜尖頭器	A1	B2	CC	24.6	51.8	15.7	15.65	3055	XIV	下	E-15	接合資料No13



第20図　第１エリア第３ブロック遺物出土位置図

三稜尖頭器の未製品No29は，正面，裏面に剥片を接合する。（接合資料No13）

③第３ブロック(第20図，第21図)

ブロックを構成する石材は，CCが78点で，OB142点，OB2B49点，OB3A３点とOB3B２点が加わる。第２ブロックと接す。CCは第１，第２，第３，第４ブロック内と接合し，OB2類は第３ブロック内と第２，第７ブロックと第２エリアの第12ブロックと広範囲に接合する。SHは第６ブロック内の遺物と接合する。

ナイフ形石器２点(No30,31)，台形石器１点(No32)，三稜尖頭器未製品１点(No37)，二次加工痕のある剥片１点(No36)，他に，剥片，ブランティングチップ３点(No33～35)，石核１点(No46)が出土している。

ナイフ形石器No30は，打面を左側縁とし背面から刃潰し加工を行い，右側縁の一部にも腹面からの刃潰し加工を施す。

No31は，腹面から刃潰し加工を施しているがアクシデントで折れている。（接合資料No14）

台形石器No32は，頭部調整のある不定形剥片を素材としたもので，両側縁を折断した後，背面の厚みを減じるためのスライス調整を行っている。

No33,34(接合資料No34),No35(接合資料No14)は，ブランティングチップである。No36は，二次加工痕のある剥片である。

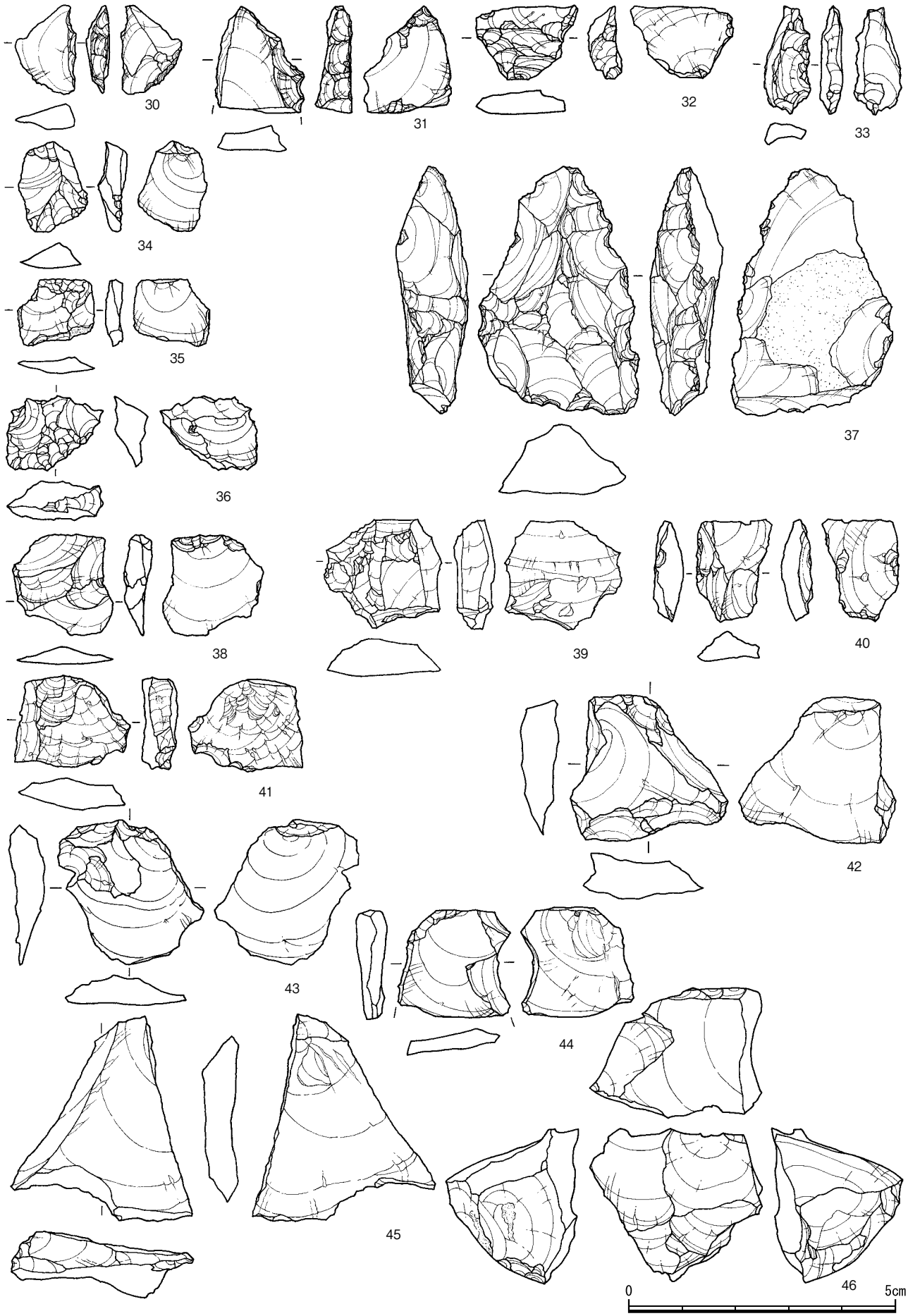
No37は，厚手の剥片素材の二側縁に腹面から連続してブランティングを行っている。左側縁部の最終剥離面とそれに先行する面にブランティングチップが４点接合する。以上のことから，三稜尖頭器の製作段階と解される。(接合資料No14)

剥片No38～41(接合資料No37)，No42(接合資料No30)，No43(接合資料No30)は，剥片剥離方向の移動する石核から取り出したものである。

剥片No44は，接合資料No35の一部である。

剥片No45は，接合資料No48の一部である。

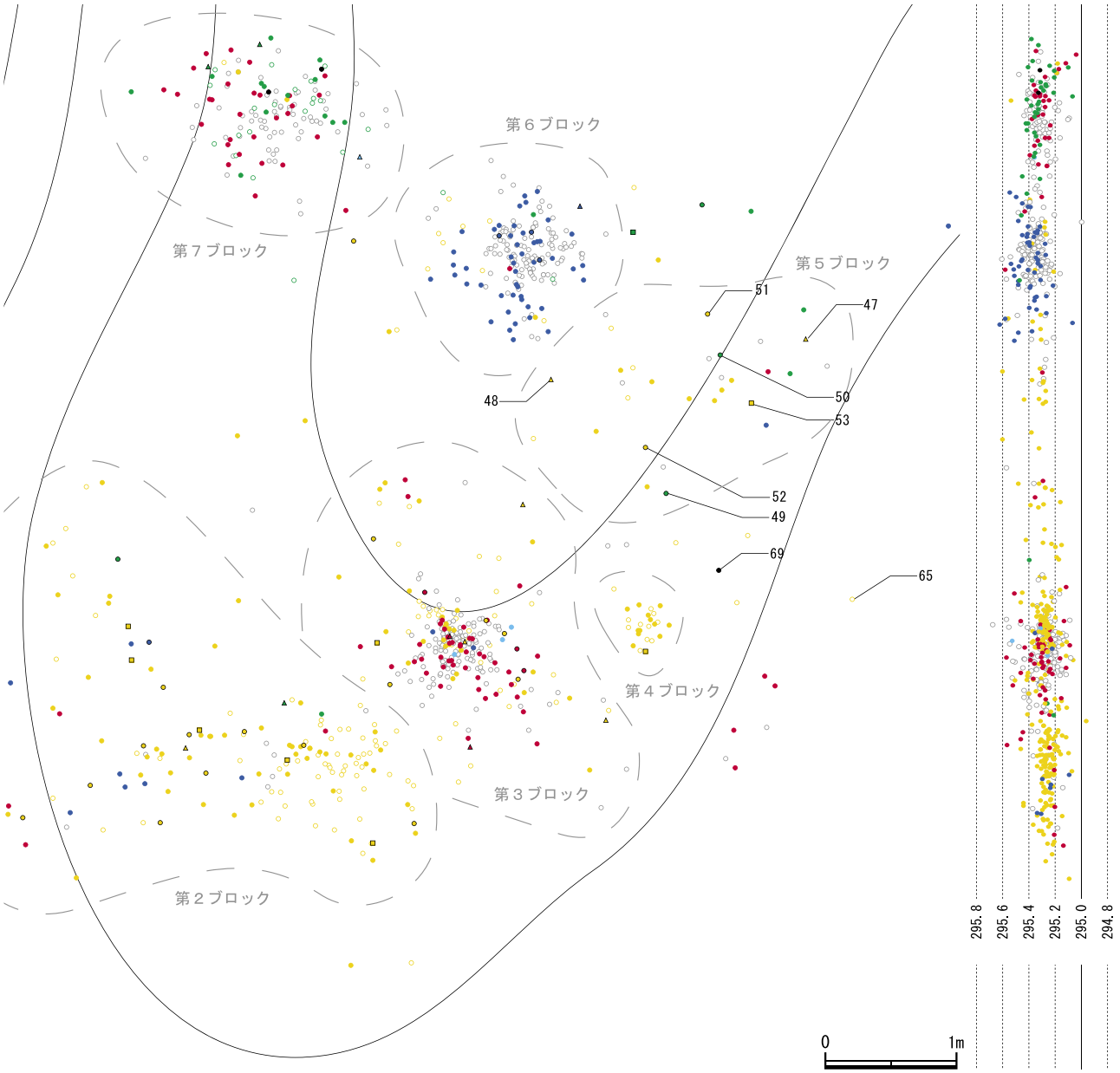
石核No46は，第２ブロックの石核No16と接合するが，剥片No13を剥離する段階で石核No16と二分割し，その後剥片



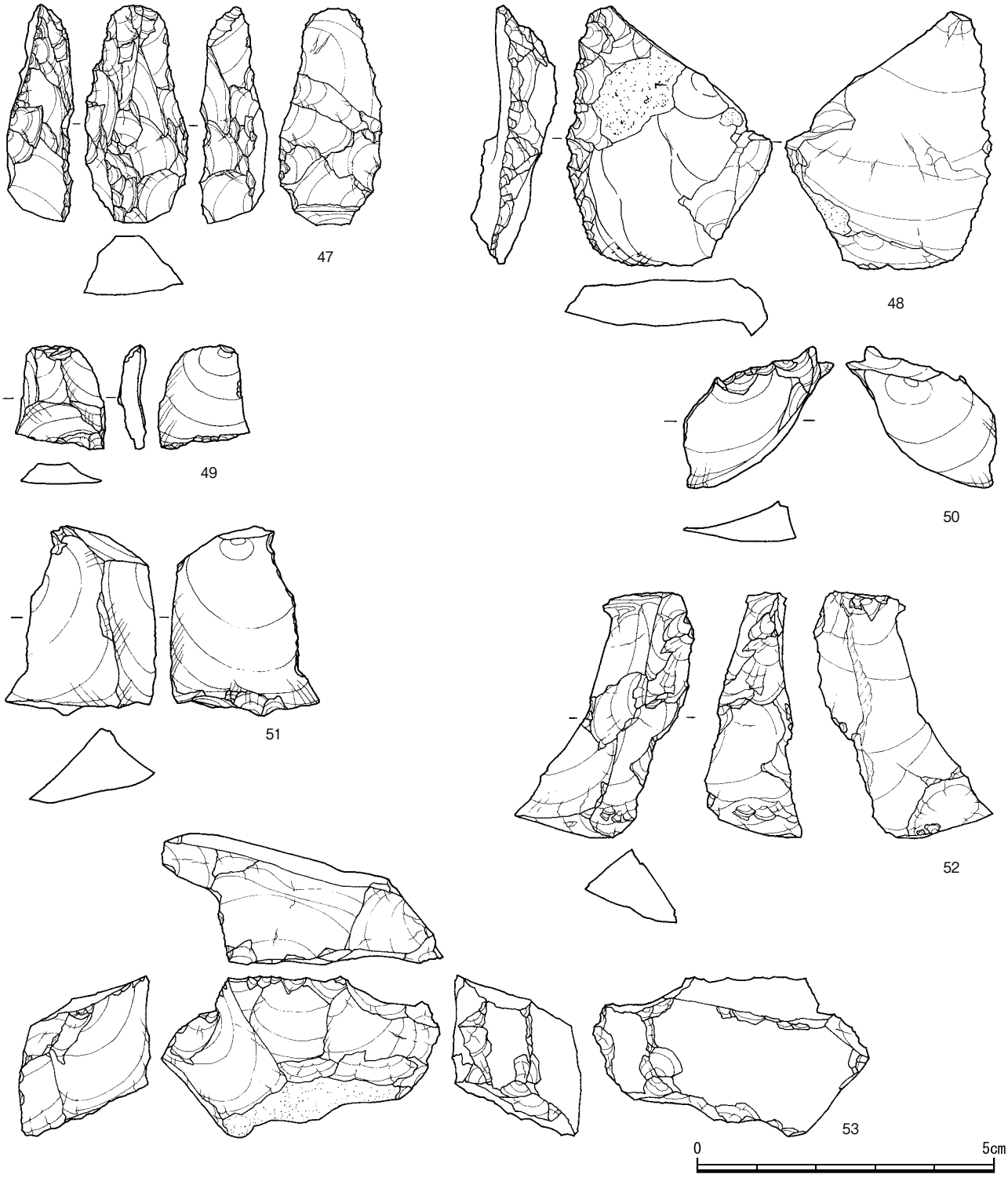
第21図　第１エリア第３ブロック出土石器実測図

第５表　第１エリア第３ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
	30	剥片石器	ナイフ形石器	A1	B3	CC	16.4	11.8	3.6	0.51	3023	Ⅹ Ⅳ	下	E-15	-
	31	剥片石器	ナイフ形石器	A1	B3	CC	(20.2)	16.9	6.5	(2.23)	4077	Ⅹ Ⅵ	-	E-15	接合資料No15
	32	剥片石器	台形石器	A1	B3	OB2B	13.4	19.0	12.7	1.27	3866	Ⅹ Ⅴ	-	E-15	-
	33	剥片類	ブランティングチップ	A1	B3	OB2B	20.0	8.6	4.0	0.59	3392	Ⅹ Ⅴ	-	E-15	-
	34	剥片類	ブランティングチップ	A1	B3	CC	16.7	12.3	4.8	0.78	3301	Ⅹ Ⅳ	下	E-15	接合資料No34
	35	剥片類	ブランティングチップ	A1	B3	CC	12.8	14.3	3.0	0.47	3304	Ⅹ Ⅴ	-	E-15	接合資料No14
	36	剥片石器	二次加工痕剥片	A1	B3	OB2B	14.3	17.8	7.9	1.24	3303	Ⅹ Ⅴ	-	E-15	-
	37	剥片石器	三稜尖頭器	A1	B3	CC	47.2	29.5	13.6	16.04	3030	Ⅹ Ⅳ	-	E-15	接合資料No14
21	38	剥片類	剥片	A1	B3	CC	18.8	18.6	4.7	1.31	3541	Ⅹ Ⅴ	-	E-15	-
	39	剥片類	剥片	A1	B3	OB2B	20.3	21.3	7.4	3.06	3383	Ⅹ Ⅴ	-	E-15	-
	40	剥片類	剥片	A1	B3	OB2B	19.0	14.2	5.3	1.05	2911	Ⅹ Ⅲ	-	E-15	-
	41	剥片類	剥片	A1	B3	OB2B	17.6	22.0	6.4	2.31	3385	Ⅹ Ⅴ	-	E-15	接合資料No37
	42	剥片類	剥片	A1	B3	CC	30.9	29.0	8.8	5.94	3377	Ⅹ Ⅳ	下	E-15	接合資料No30
	43	剥片類	剥片	A1	B3	CC	21.5	23.5	8.4	3.77	3333	Ⅹ Ⅳ	下	E-15	接合資料No30
	44	剥片類	剥片	A1	B3	CC	(20.1)	(21.1)	5.2	(2.00)	2907	Ⅹ Ⅲ	-	E-15	接合資料No35
	45	剥片類	剥片	A1	B3	CC	38.7	34.7	9.6	8.09	3032	Ⅹ Ⅳ	-	E-15	接合資料No48
	46	石核類	石核	A1	B3	CC	29.0	32.9	25.8	18.07	3335	Ⅹ Ⅴ	-	E-15	接合資料No３



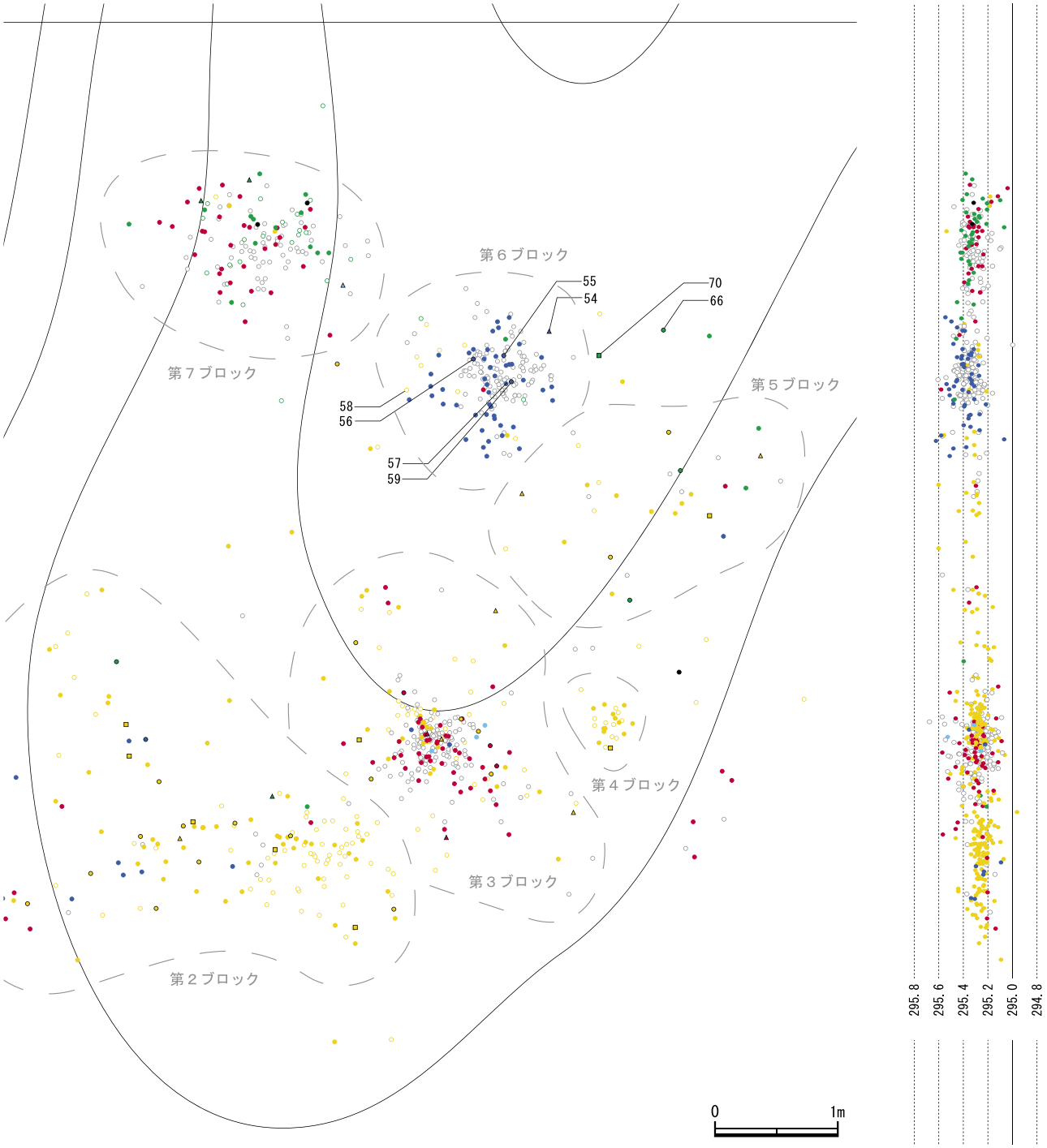
第22図　第１エリア第５ブロック遺物出土位置図



第23図　第１エリア第5ブロック出土石器実測図

第６表　第１エリア第５ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
23	47	剥片石器	三稜尖頭器	A1	B5	CH	36.6	17.7	13.1	6.72	3422	XⅣ	下	E-15	-
	48	剥片石器	削器	A1	B5	CC	43.8	35.0	12.8	13.33	3085	XⅣ	下	E-15	接合資料No18
	49	剥片類	調整剥片	A1	B5	SH	12.7	15.2	4.0	0.96	3419	XⅤ	-	E-15	接合資料No17
	50	剥片類	調整剥片	A1	B5	SH	21.3	21.6	8.6	2.68	3438	XⅤ	-	E-15	接合資料No17
	51	剥片類	剥片	A1	B5	CC	31.9	25.4	14.3	7.41	3429	XⅤ	-	E-15	-
	52	剥片類	剥片	A1	B5	CC	40.1	17.3	18.8	7.72	3420	XⅤ	-	E-15	-
	53	石核類	石核	A1	B5	CC	23.9	50.5	23.9	22.66	3433	XⅤ	-	E-15	接合資料No50



第24図　第１エリア第６ブロック遺物出土位置図

剥離を一回行っている。作業面の観察から頭部調整は施されず単剥離面打面である。（接合資料No３）

④第４ブロック

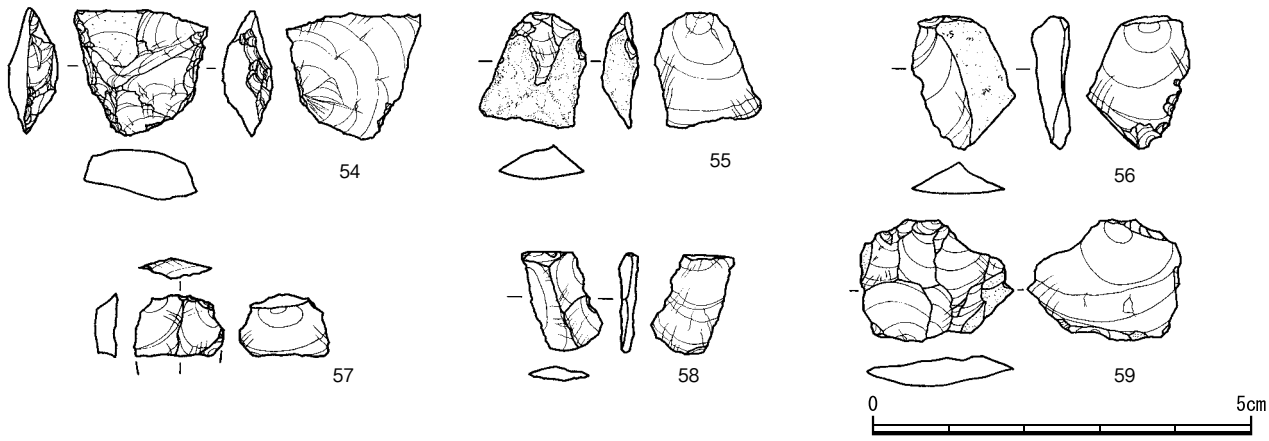
ブロックは単独石材のCC24点で構成する。ブロック内で接合はほぼ完結し，ブロック外では第３ブロックのナイフ形石器No31のみ接合する。

⑤第５ブロック(第22,23図)

ブロックを構成する石材は，CC主体で17点，OB７点，OB2BとOB3Bが１点ずつ，SH４点が加わる。E-15区の北側にあり，第１エリアの第３，第４，第６ブロックと接し，CCを主体とし，続いてSH，OB2類，OB3類が加わる。CCが第３ブロック間とSHが第７ブロック間と接合する。

三稜尖頭器１点(No47)，削器１点(No48)，調整剥片２点(No49,50)の他，剥片，石核１点(No53)が出土している。

No47はチャートであるが，母岩識別を行った結果，同一石材の石器はおろか剥片，チップ類も確認できない。そのため搬入品の可能性を強く指摘できる。素材剥片の腹面に残された基部側の厚みを減じるための腹面加工を行い，背面の厚みを減じるための稜上剥離を最終段階で実施している。先端部は丸みを帯び，基部は折断し欠落している。



第25図　第１エリア第６ブロック出土石器実測図

削器No48は，左側縁部に腹面からの細かな刃部加工の剥離が施され，ブランティングチップが２点接合する。(接合資料No18)

剥片No49,50は，三稜尖頭器製作時の調整剥片である。(接合資料No17)

剥片No51,52は，剥片剥離方向の移動する石核の存在を指摘できる。

石核No53は，単剥離打面で単打面であり，頭部調整が施され作業面の観察から横広の剥片を目的としたことが伺われる。頭部調整時に分割した剥片が接合する。(接合資料No50)

⑥第６ブロック(第24,25図)

ブロックを構成する石材は，OB116点，OB2B１点，OB3Bが52点，CC９点，SH３点加わる。E-15区の西側にあり，第１エリアの第５，第７ブロックと接し，OB3類を主体とし，CCが少数加わり，第３，第５ブロック間と接合する。

台形石器１点(No54)，微細剥離痕をもつ剥片2点(No55,56)，ブランティングチップ２点(No57,58),と剥片が出土している。

台形石器No54は，剥片剥離方向の移動する石核から取り出した不定形剥片を用い，右側縁は打面に相当する。刃潰し加工は，主に腹面から行い，左側縁は素材の特性をそのまま活かしている。

No55は，背面左側縁部に腹面からの微細剥離痕が観察できる。

No56は，腹面右側縁部に背面からの微細剥離痕が観察できる。(接合資料No36)

No57は，欠損部が接合した。(接合資料No58)

No58は，ブランティングチップの可能性がある。

No59は，剥片剥離方向の移動する石核から取り出された剥片である。

⑦第７ブロック(第26,27図)

ブロックを構成する石材は，OB67点，OB2B29点，SH34点に，CC３点，OB3A１点，SS２点が加わる。E-15区の西側にあり，第１エリアの第６ブロックと接し，OB2類を主体とし続いてOB3類，OB2類，CCで構成しOB2類がブロック内と第３ブロック間で，SHがブロック内と第５ブロック間で接合する。

三稜尖頭器３点(No60～62)と，ブロック内で接合するハンマーストーン１点(No63)が出土している。

No60は，腹面の先端部に主剥離面が残り側縁から平坦剥離を施し，背面は側縁の調整加工後，稜上調整剥離を実施する。先端部は欠落する。

No61も腹面に平坦剥離を行い，背面の調整を実施する。先端部には細かな調整加工が重なる。(接合資料No17)

No62は，腹面はそのままに，側縁，基部ともに腹面からの整形剥離を施しているが，その形状から制作途上とみられる。(接合資料No17)

No63は砂岩を用い上端部が欠落している。敲打痕が明瞭である。(接合資料No60)

⑧第１エリアブロック外(第28図)

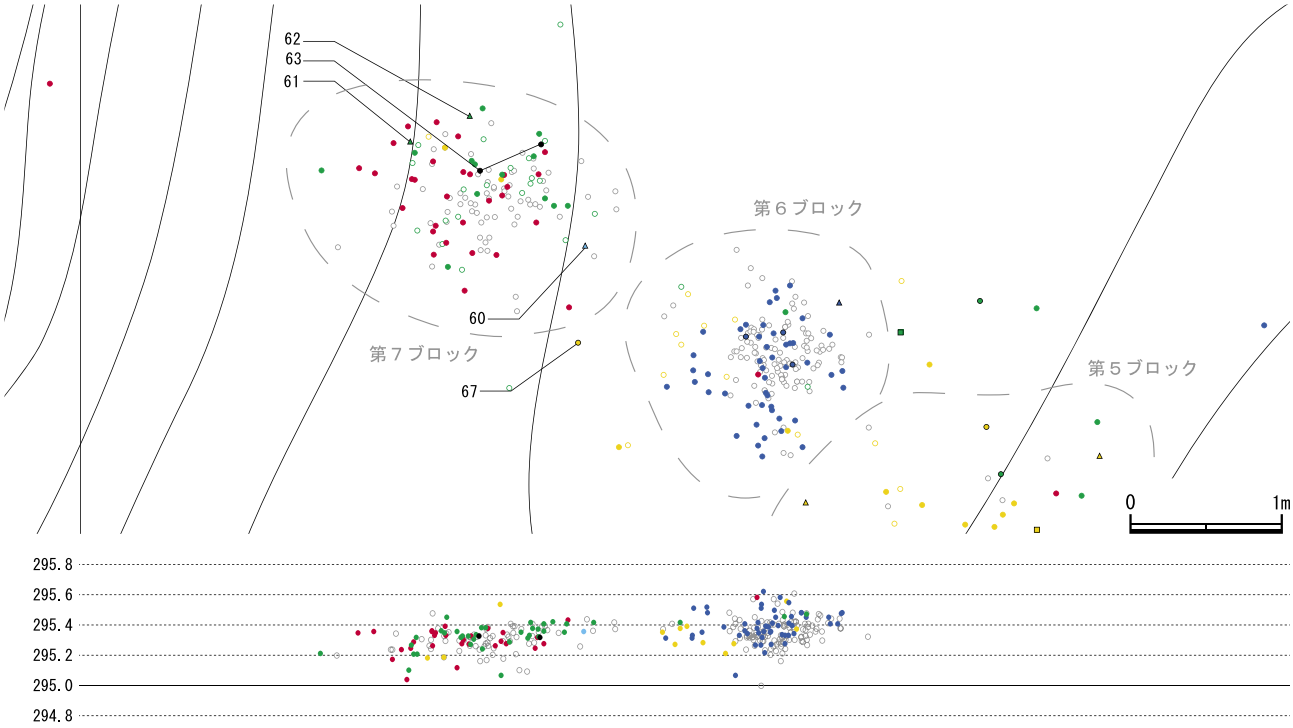
第１エリア内のブロックに該当しない遺物を包括した。石材は，CC24点，OB５点，OB2B７点とOB3B１点，SH５点SS１点である。

三稜尖頭器１点(No64)，ブランティングチップ１点(No65)の他，剥片，ハンマーストーン１点(No69)，石核１点(No70)が出土している。

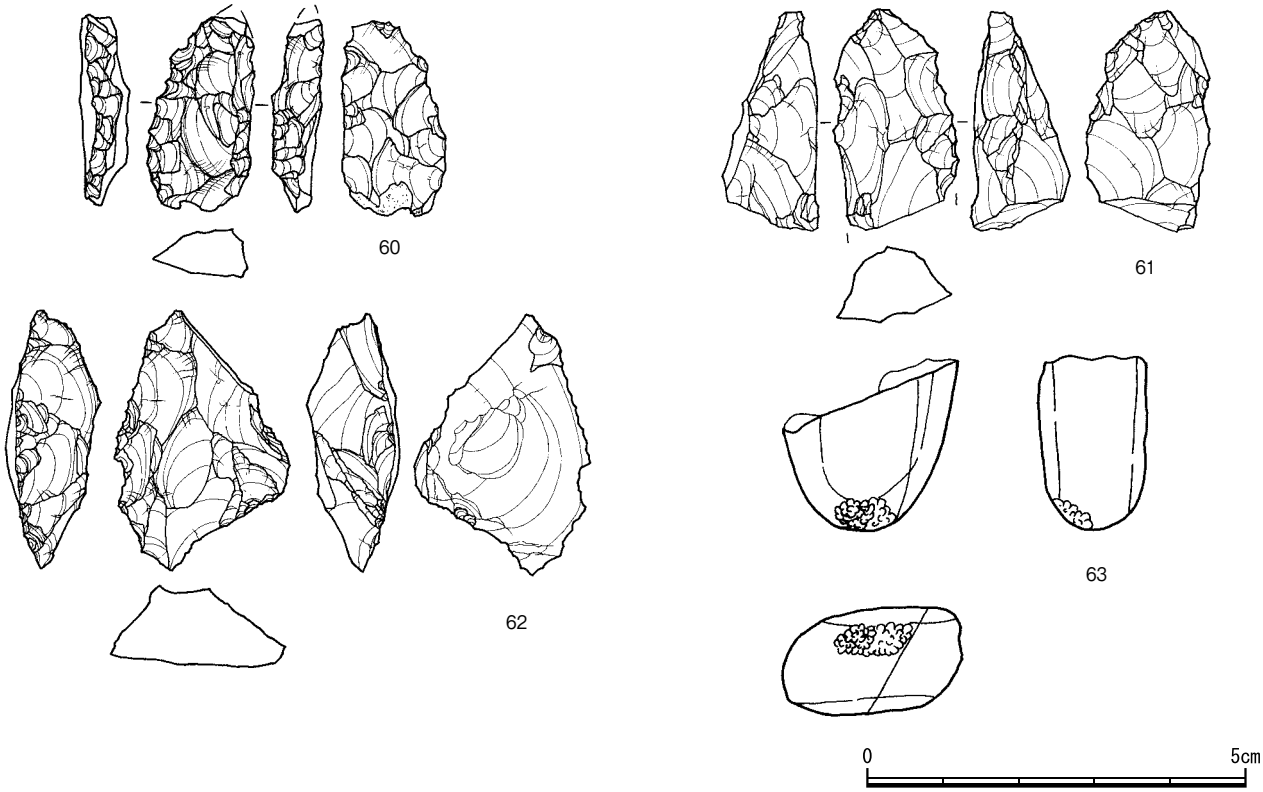
三稜尖頭器No64は，腹面の右側縁に平坦剥離を施し，背

第７表　第１エリア第６ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
25	54	剥片石器	台形石器	A1	B6	OB3B	16.4	17.5	5.8	1.32	3426	XⅣ	-	E-15	-
	55	剥片類	微細剥離痕剥片	A1	B6	OB3B	15.4	14.1	4.9	0.71	3754	XⅤ	-	E-15	-
	56	剥片類	微細剥離痕剥片	A1	B6	OB3B	17.5	12.0	4.6	0.73	3712	XⅤ	-	E-15	接合資料No36
	57	剥片類	ブランティングチップ	A1	B6	OB3B	(9.0)	12.1	2.9	(0.23)	3760	XⅤ	-	E-15	接合資料No58
	58	剥片類	ブランティングチップ	A1	B6	CC	13.4	10.5	2.5	0.23	3485	XⅣ	下	E-15	-
	59	剥片類	剥片	A1	B6	OB3B	16.1	19.7	5.1	1.23	3514	XⅣ	-	E-15	-



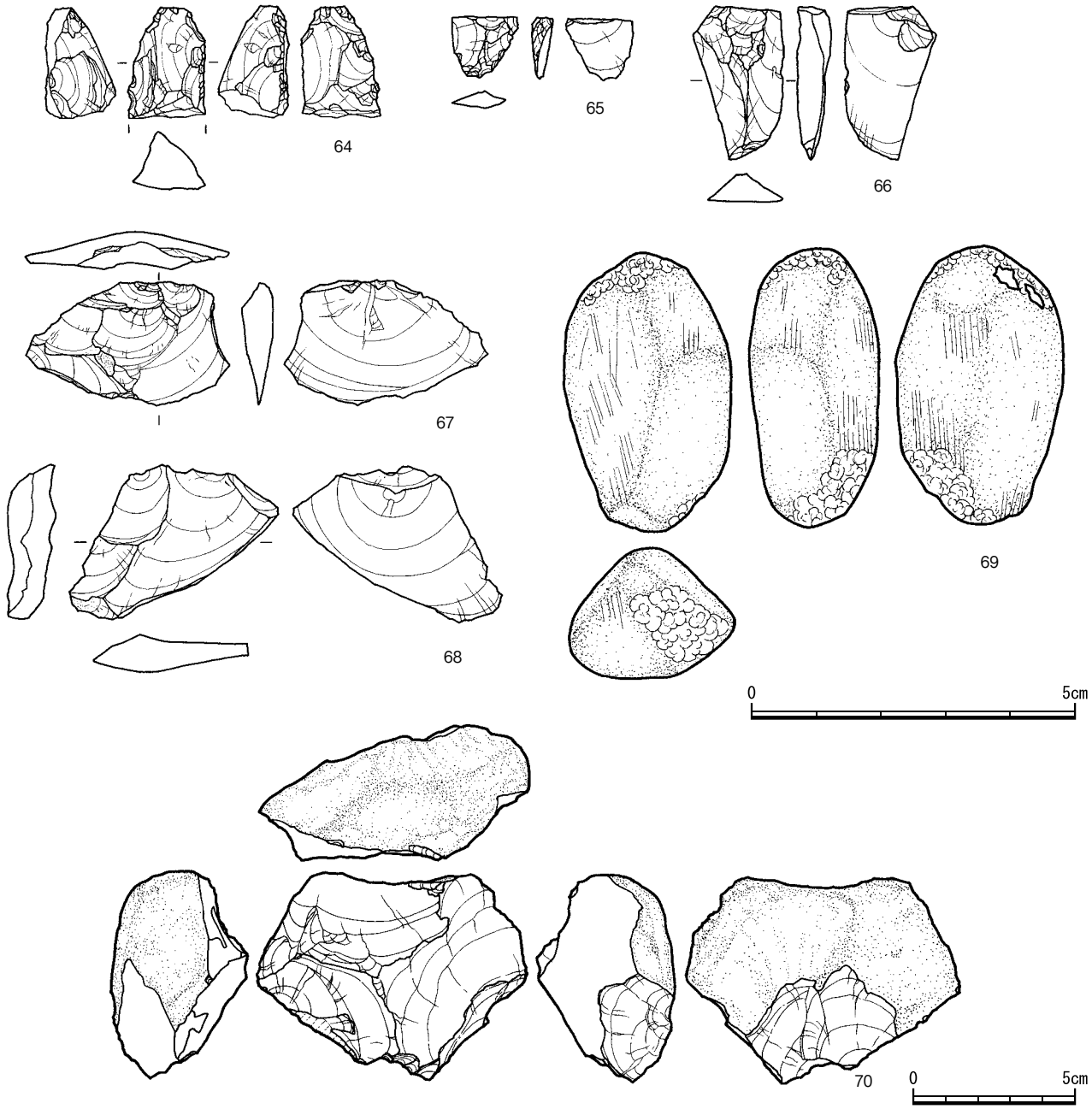
第26図　第１エリア第７ブロック遺物出土位置図



第27図　第１エリア第７ブロック出土石器実測図

第８表　第１エリア第７ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
27	60	剥片石器	三稜尖頭器	A1	B7	OB3A	(25.6)	14.2	6.6	(2.19)	3127	XⅣ	下	E-15	-
	61	剥片石器	三稜尖頭器	A1	B7	SH	29.0	17.4	12.8	4.97	3624	XⅥ	上	E-15	接合資料No17
	62	剥片石器	三稜尖頭器	A1	B7	SH	33.9	22.7	11.7	6.55	3151	XⅣ	-	E-15	接合資料No17
	63	礫石器	ハンマー	A1	B7	SS	(2.5)	(3.5)	(4.2)	(8.21)	3147 3627	XⅣ	下	E-15	接合資料No60



第28図　第１エリアブロック外出土石器実測図

面の側縁は腹面からの調整剥離がみられ，制作途中に基部が欠落したものと思われる。

No65はブランティングチップで，剥片No66は，三稜尖頭器製作時の調整剥片である。(接合資料No17)

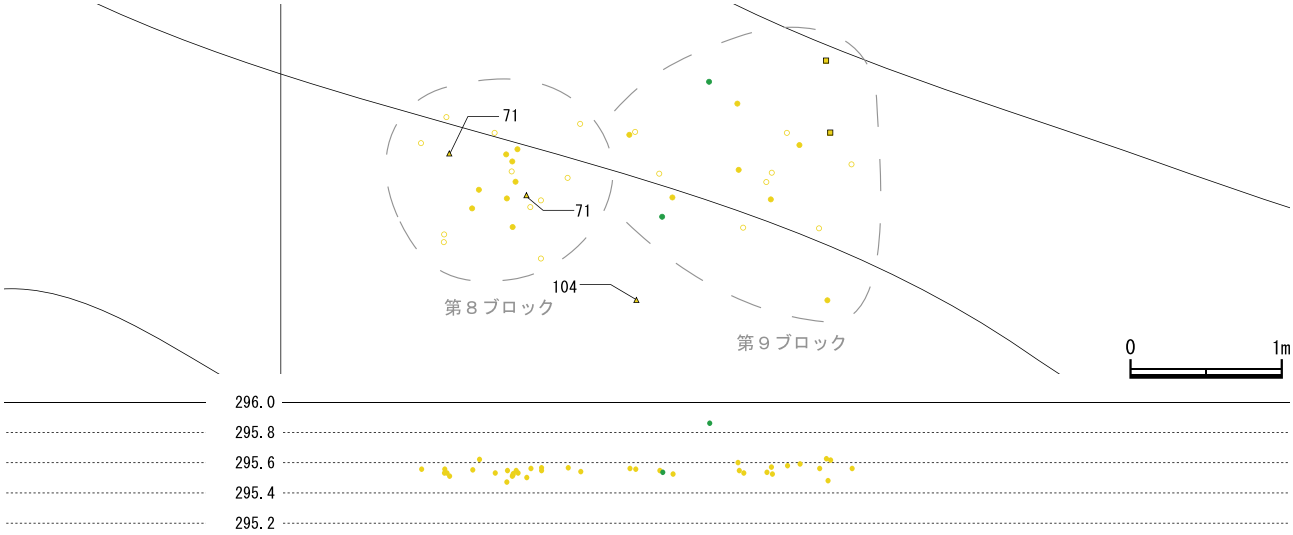
剥片No67は，剥片剥離方向の移動する石核から取り出したものである。

No68は，第２ブロックのNo28と接合する。(接合資料No8)

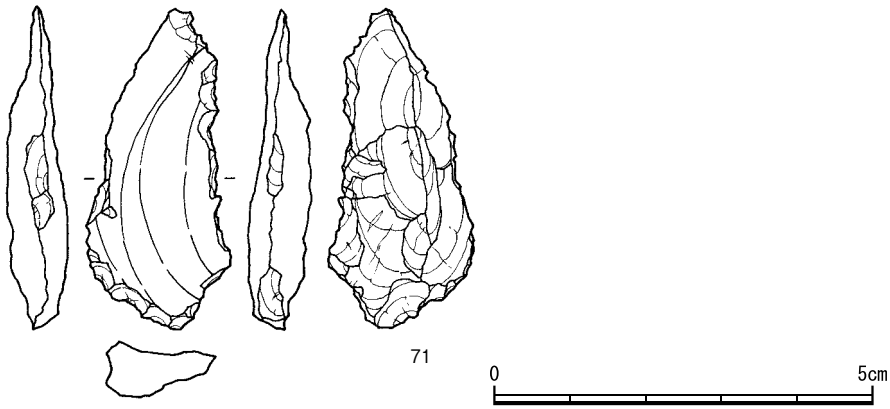
No69は，砂岩を用い両端に明瞭な敲打痕が観察され，擦痕も残される。石核No70は，礫皮面を打面に用い，横広の剥片を取り出している。

第９表　第１エリアブロック外出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
28	64	剥片石器	三稜尖頭器	A1	OB	OB2B	(17.7)	11.8	(10.5)	(1.71)	3577	ⅩⅤ	-	E-15	-
	65	剥片類	ブランティングチップ	A1	OB	CC	9.5	10.1	3.0	0.22	3401	ⅩⅤ	-	E-15	-
	66	剥片類	調整剥片	A1	OB	SH	2.3	1.5	0.6	1.48	3424	ⅩⅤ	-	E-15	接合資料No17
	67	剥片類	剥片	A1	OB	CC	18.8	31.4	5.6	2.47	3122	ⅩⅣ	-	E-15	-
	68	剥片類	剥片	A1	OB	CC	24.5	32.7	6.8	3.58	3065	ⅩⅣ	-	E-14	接合資料No８
	69	礫石器	ハンマー	A1	OB	SS	42.6	25.9	19.4	25.12	3403	ⅩⅤ	-	E-15	-
	70	石核類	石核	A1	OB	SH	65.8	87.0	36.7	176.57	3427	ⅩⅣ	下	E-15	-



第29図　第２エリア第８ブロック遺物出土位置図



第30図　第2エリア第８ブロック出土石器実測図

(２)第２エリア(第29～44図)

第８ブロックから第13ブロックの，６ブロックで構成する。第１エリアの西側に分布し，エリア間には空白地帯が存在する。

第８～10,13ブロックの構成石材は，CCを多用するが，第11,12ブロックではOB2BとSHがほぼ同数で構成している。第８,９ブロックと，第11ブロック間には５ｍ程の空白地帯が確認できる。

石器は，各ブロックで出土しており，三稜尖頭器９点，掻器２点，削器１点，石核４点，二次加工痕のある剥片６点の他，剥片が出土している。また，各ブロック内及びブロック間で遺物が接合することから，ブロックの同時性が指摘できる。

①第８ブロック(第29,30図)

第９ブロックに接し，石材CC21点のみで構成する。明瞭な石器はなく，二次加工痕のある剥片No71が出土している。

No71は，腹面から基部加工状の剥離をもつが，最終調整には至っていない。(接合資料No21)

②第９ブロック(第31,32図)

ブロックを構成する石材は，CC17点が主体で２点のSHが加わる。第８ブロックと接し，CCが第８ブロック間と接合し，SHが第11ブロック間と接合する。

剥片と石核１点No72が出土している。

No72は打面転位を行い，頭部調整が施され作業面の観察から横広の剥片を目的としている。(接合資料No7)

③第10ブロック(第33,34図)

ブロックを構成する石材は，CC４点，OB５点，OB2B３点，OB3B４点である。唯一このブロックのみ接合関係を確認していない。

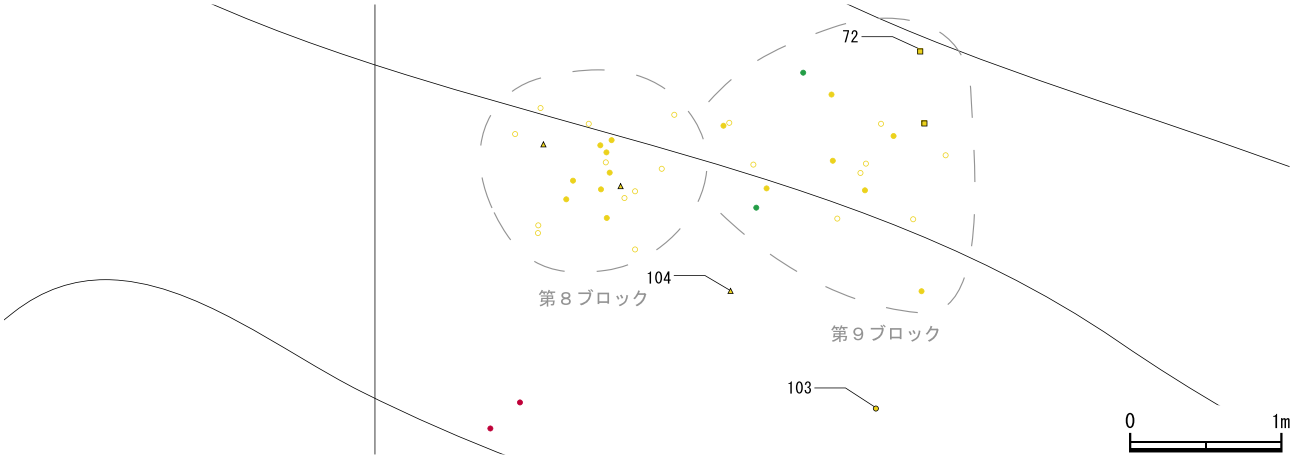
削器No73と二次加工剥片No74,75が出土している。

No73は打瘤除去，背面の両側縁に腹面から刃部を調整を行い，素材の特性を生かた縦型削器である。

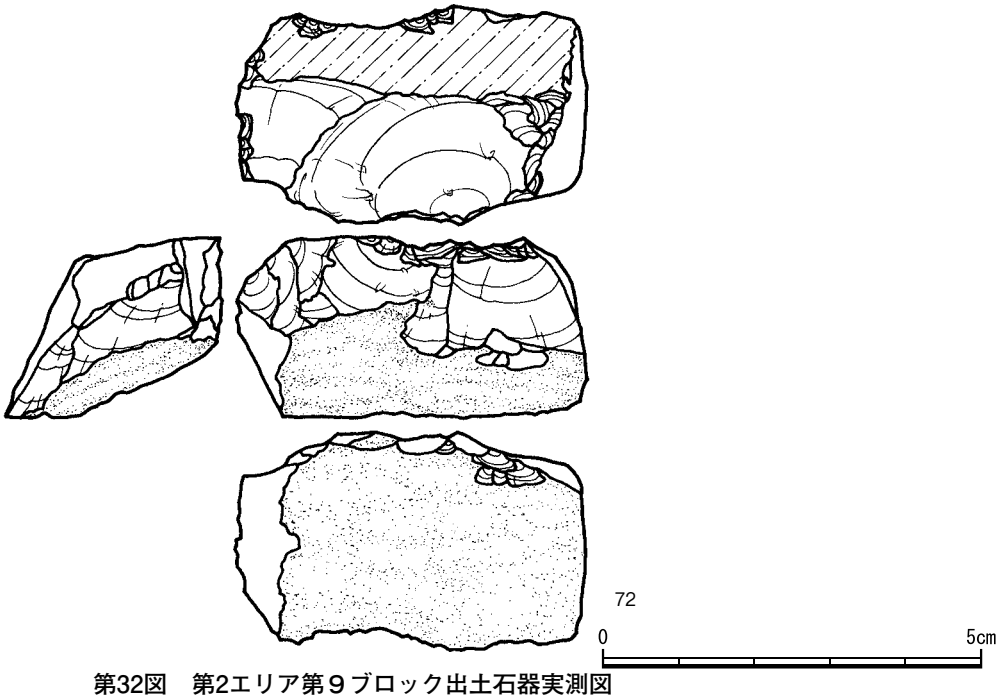
No74は両側縁に腹面からブランティング状の剥離が観察

第10表　第２エリア第８ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
30	71	剥片石器	二次加工痕剥片	A2	B8	CC	42.2	19.1	7.8	4.56	4778 4781	XV	-	D-16	接合資料No21



第31図　第２エリア第９ブロック遺物出土位置図



第32図　第2エリア第９ブロック出土石器実測図

でき，下端部は折断される。No75は，左側縁に腹面からの剥離が観察できる。

④第11ブロック(第35～37図)

ブロックを構成する石材は，CC42点，OB620点，OB2B105点，SH106点にOB3A６点が加わる。

OB2類はブロック内のみで接合し，SHはブロック内と第９，第12ブロック間で接合する。CCは第12ブロックと接合する。

三稜尖頭器７点(No76,77,[78＋81],79,80,83,86)，掻器１点(No87)，二次加工痕のある剥片1点(No84)，剥片，ブランティングチップ４点(No82,85,89,90)が出土している。

三稜尖頭器No76はその後，先端部と基部が接合した(接合資料No27)。腹面の左側縁に細かな調整加工を重ね，背面の右側縁に整形加工を施す。左側縁の中央部以下には打面の一部を残し，先端部は腹面から，中央部以下は打面に添って緩斜度の整形剥離を施す。緩斜度の整形剥離の途中で折れた可能性が高い。

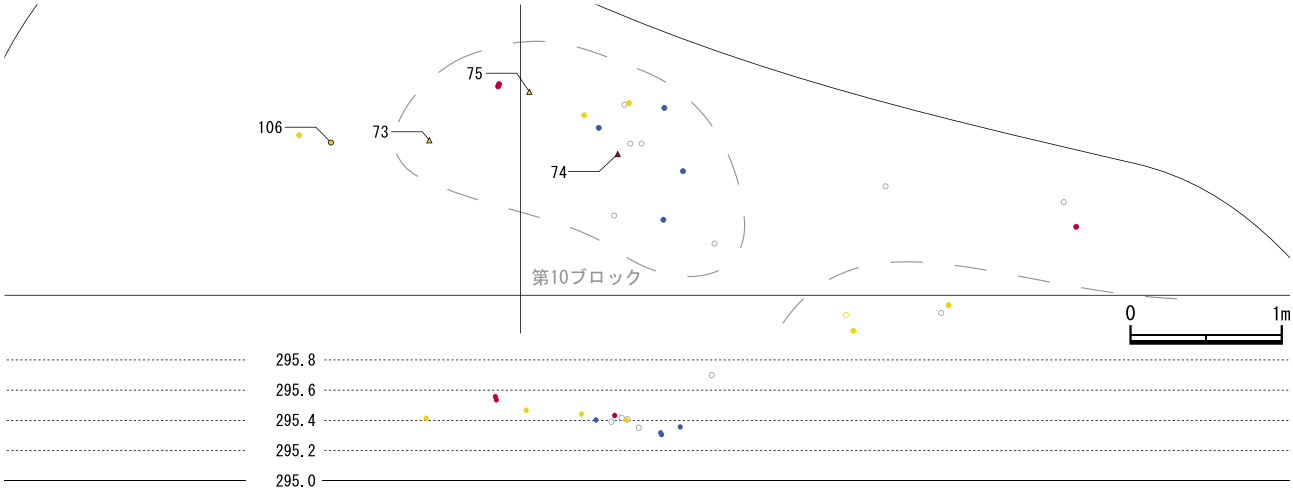
No77は，背面の二側縁に腹面からの整形加工を重ね，最終段階で背面の厚みを減じるための稜上剥離を行っているが，基部は欠落している。

No78は，81と接合する(接合資料No28)。左側縁に腹面から先行する整形加工を施し，右側縁にも細かい整形加工を施す。欠損は，稜上剥離でアクシデントが生じた可能性が高い。

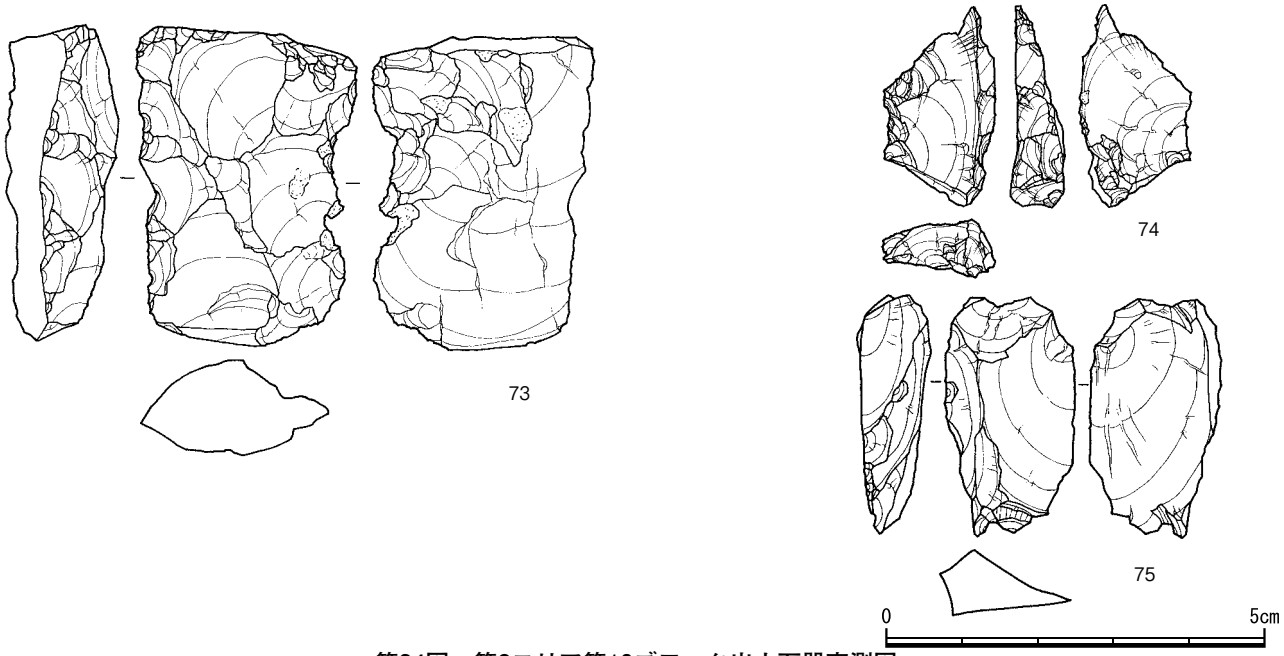
No79は腹面加工を施し，稜上剥離が先行し右側縁にも先行する剥離が残され二側縁に腹面からの調整剥離を施し，先

第11表　第２エリア第９ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
32	72	石核類	石核	A2	B9	CC	46.5	27.8	21.8	32.04	4216	ⅩⅤ	-	D-16	接合資料No７



第33図　第２エリア第10ブロック遺物出土位置図



第34図　第2エリア第10ブロック出土石器実測図

端部と基部がアクシデントによって欠落している。

No80は，素材剥片の腹面に残された厚みを減じ，特に，左側縁に急角度の整形加工がみられる。右側縁は先端部に加工が集中し，最終段階で稜上剥離を行っている。完成品の一例とみられる。

No82は，ブランティングチップである。

No83は，三稜尖頭器の稜上剥離を行った際，アクシデントで折れたものであり，腹面加工が施され，背面の二側縁に腹面からの調整剥離が施されている。（接合資料No29）

二次加工痕のある剥片No84は，右側縁に腹面からの剥離が観察される。

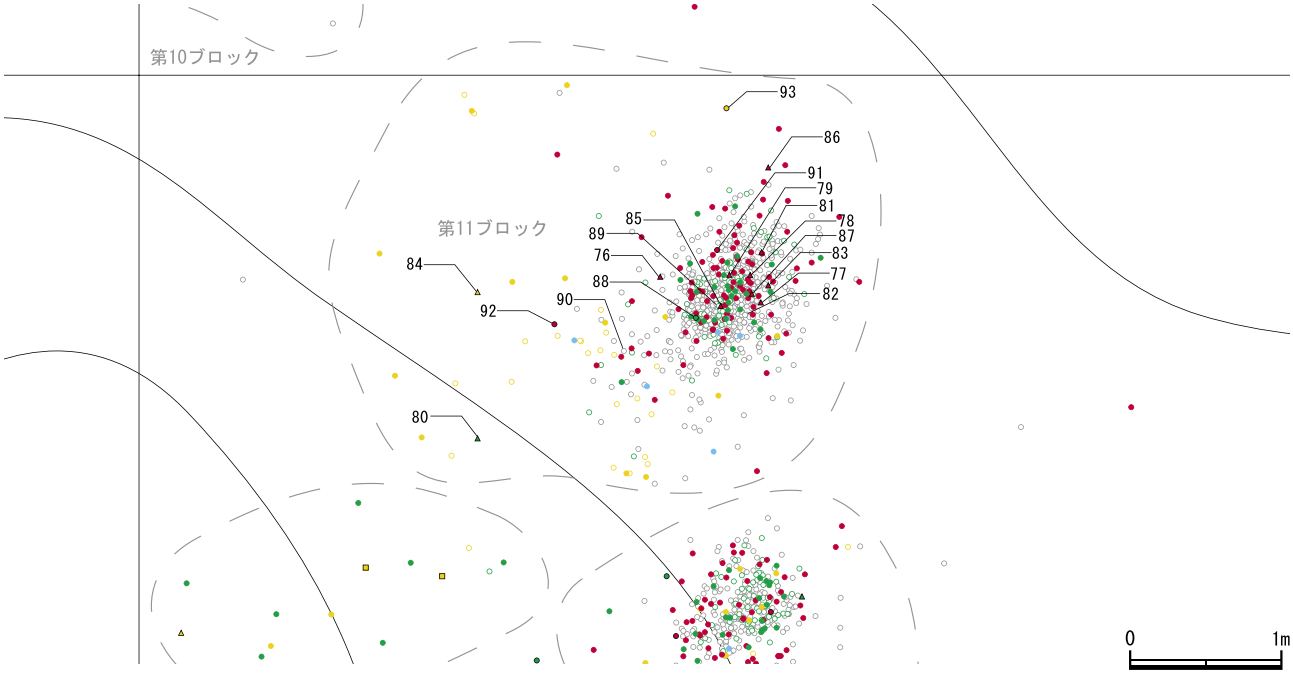
ブランティングチップNo85は，三稜尖頭器No86の右側縁の先行する調整剥離によって得られたものである。(接合資料No24)

三稜尖頭器No86は，先に右側縁の基部調整を施し，続いて右側縁に残った打面，基部の左側縁を腹面から調整剥離を施している。それぞれの剥離に剥片およびブランティングチップNo85が接合する。(接合資料No24)

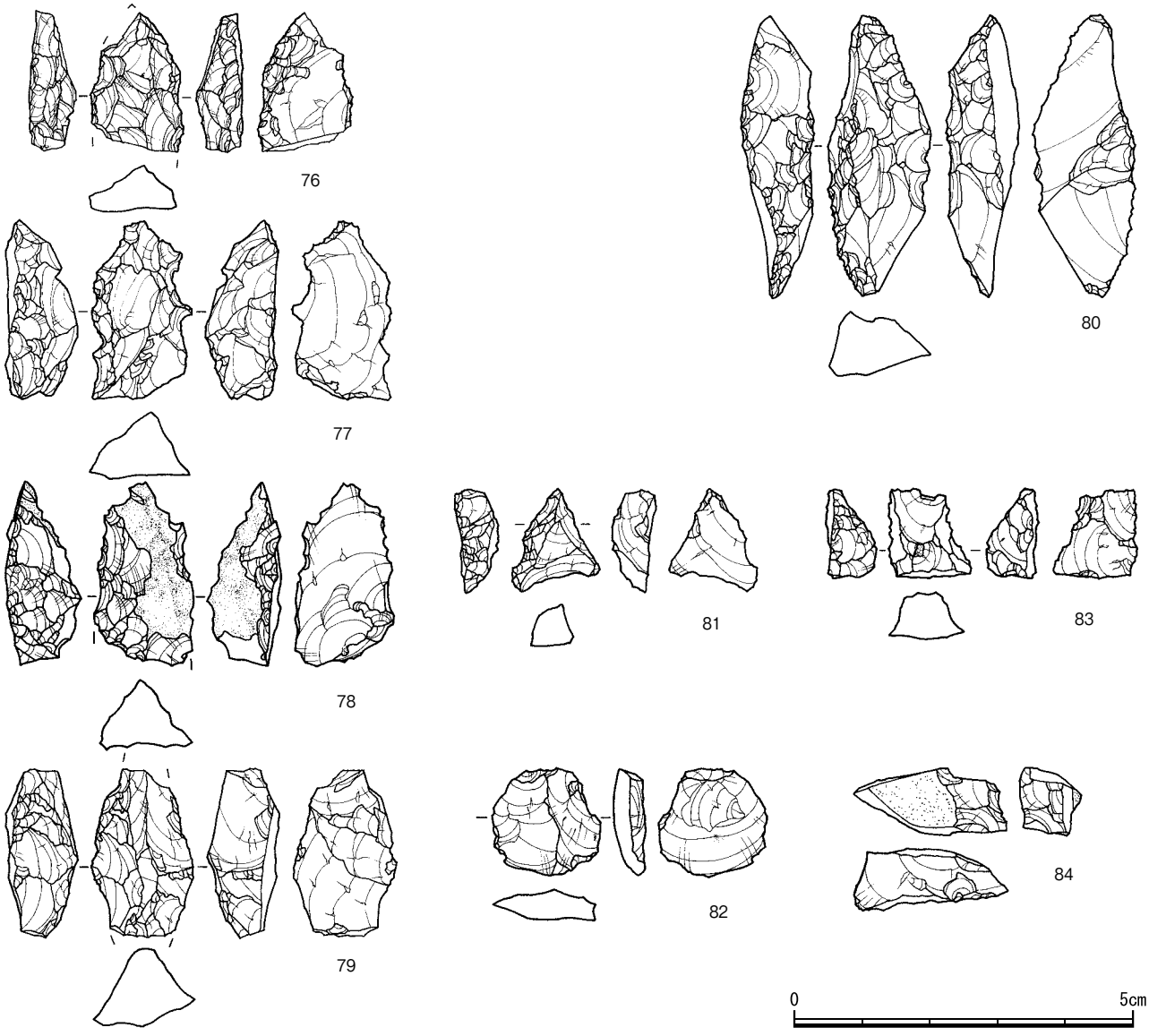
掻器No87は，腹面加工が全体に施され，下端部に刃部をもち，腹面からの刃部加工が施される。他器種の可能性もある。

第12表　第２エリア第10ブロック出土石器観察表

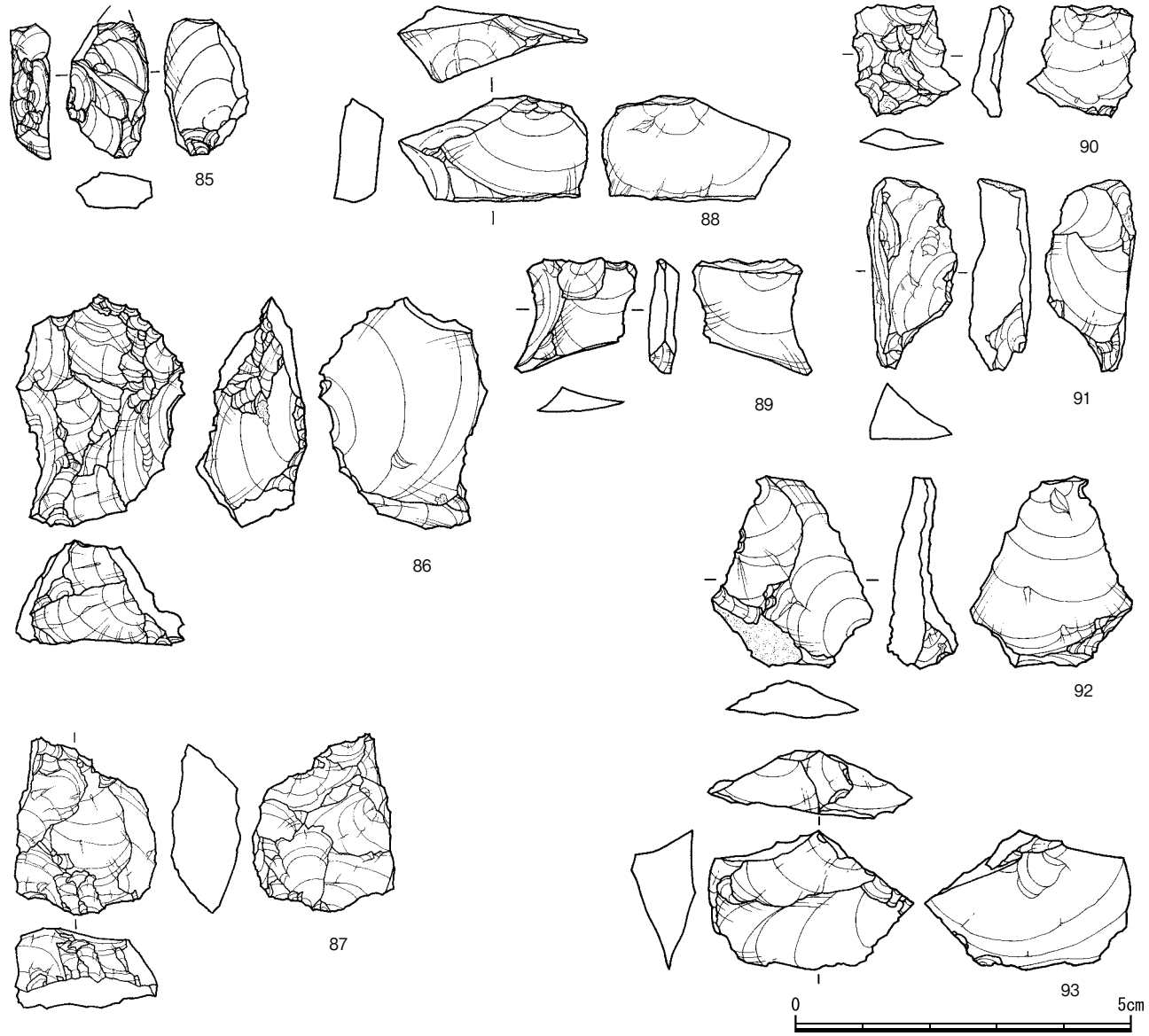
挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
34	73	剥片石器	削器	A2	B10	CC	42.5	29.7	15.5	18.30	3605	XⅣ	下	D-15	-
	74	剥片石器	二次加工痕剥片	A2	B10	OB2B	26.4	15.1	7.0	1.69	4600	XⅣ	下	D-16	-
	75	剥片石器	二次加工痕剥片	A2	B10	CC	31.1	17.3	9.2	4.09	5170	XⅣ	-	D-16	-



第35図　第２エリア第11ブロック遺物出土位置図



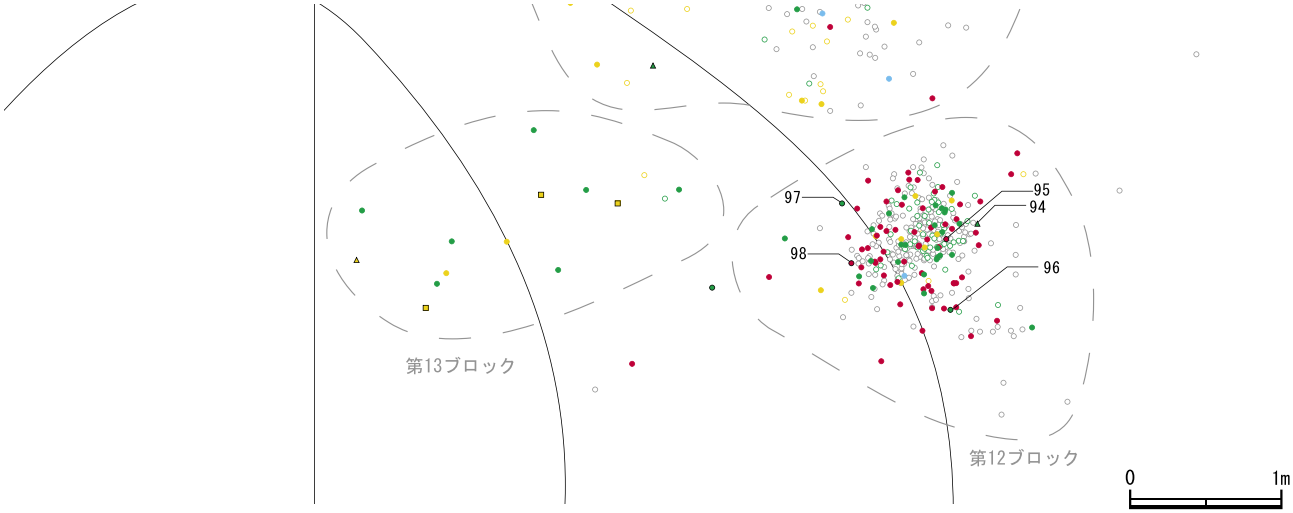
第36図　第2エリア第11ブロック出土石器実測図(１)



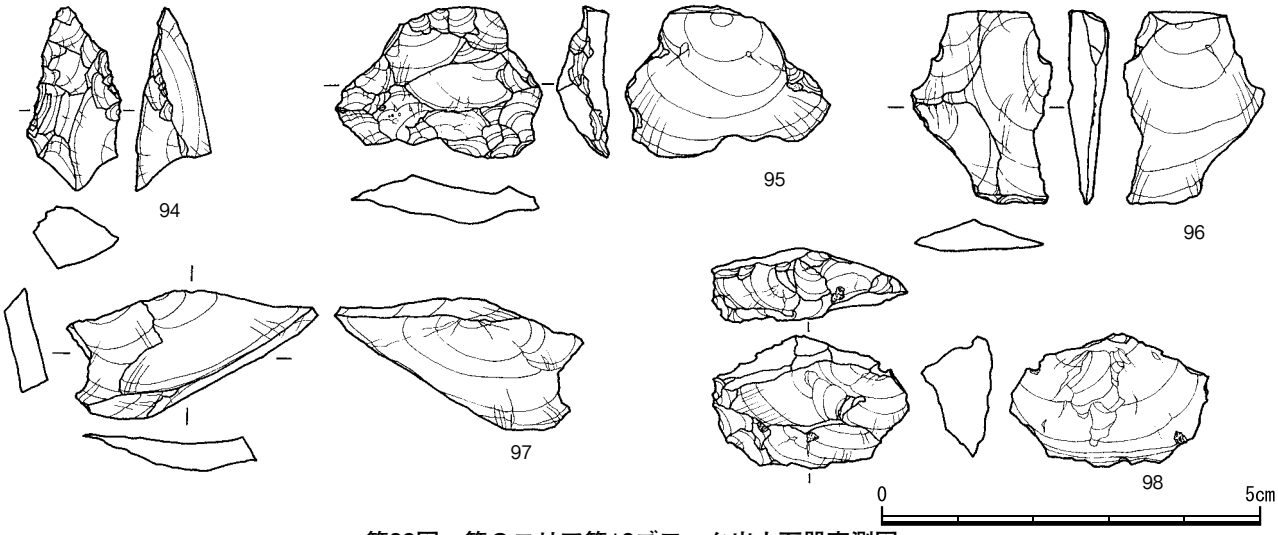
第37図　第2エリア第11ブロック出土石器実測図(２)

第13表　第２エリア第11ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
	76	剥片石器	三稜尖頭器	A2	B11	OB2B	(31.7)	13.8	7.2	(2.52)	3950	XⅢ	上	E-16	接合資料No27
	77	剥片石器	三稜尖頭器	A2	B11	OB2B	36.1	14.6	11.4	3.79	4569	XⅤ	-	E-16	接合資料No28
	78	剥片石器	三稜尖頭器	A2	B11	OB2B	(25.6)	14.7	10.2	(2.95)	5092	XⅤ	-	E-16	-
	79	剥片石器	三稜尖頭器	A2	B11	OB2B	(24.4)	15.0	10.2	(3.04)	5087	XⅤ	-	E-16	-
36	80	剥片石器	三稜尖頭器	A2	B11	SH	41.1	15.3	11.6	4.96	4700	XⅤ	-	E-16	-
	81	剥片石器	三稜尖頭器	A2	B11	OB2B	-	-	-	-	4603	XⅤ	-	E-16	接合資料No28
	82	剥片類	ブランティングチップ	A2	B11	OB2B	15.3	15.7	4.0	0.83	4753	XⅣ	下	E-16	-
	83	剥片石器	三稜尖頭器	A2	B11	OB2B	12.6	13.0	6.6	0.94	4161	XⅤ	-	E-16	接合資料No29
	84	剥片石器	二次加工痕剥片	A2	B11	CC	22.6	8.9	9.8	1.71	4719	XⅤ	-	E-16	-
	85	剥片石器	ブランティングチップ	A2	B11	OB2B	(20.1)	12.6	5.7	(1.54)	5296	XⅣ	下	E-16	接合資料No24
	86	剥片石器	三稜尖頭器	A2	B11	OB2B	33.6	24.3	14.6	9.25	4038	XⅣ	下	E-16	接合資料No24
	87	剥片石器	掻器	A2	B11	OB2B	24.7	20.4	12.0	5.91	4751	XⅣ	下	E-16	-
	88	剥片類	調整剥片	A2	B11	SH	15.5	27.3	10.2	3.60	4590	XⅣ	下	E-16	接合資料No22
37	89	剥片類	ブランティングチップ	A2	B11	SH	16.8	17.5	3.9	0.90	4628	XⅣ	下	E-16	接合資料No22
	90	剥片類	ブランティングチップ	A2	B11	OB2B	16.3	16.8	4.7	0.70	4234	XⅣ	下	E-16	-
	91	剥片類	剥片	A2	B11	OB2B	28.6	12.9	8.5	2.58	4148	XⅣ	下	E-16	-
	92	剥片類	剥片	A2	B11	OB2B	27.8	23.7	10.5	3.24	4356	XⅤ	-	E-16	接合資料No47
	93	剥片類	剥片	A2	B11	CC	20.2	30.0	8.7	3.73	4417	XⅤ	-	E-16	-



第38図　第２エリア第12ブロック遺物出土位置図



第39図　第２エリア第12ブロック出土石器実測図

剥片No88と89は，接合資料No22の中の一部であり，No88は調整剥片，No89はブランティングチップで，No90も同じである。

剥片No91～93は，剥片剥離方向の移動する石核から取り出したものであり，No92は先行する剥片と接合する。（接合資料No47）

⑤第12ブロック(第38,39図)

ブロックを構成する石材は，OB238点を主体にOB2B62点，OB3A１点，CC13点とSH82点が加わる。

OB2Bはブロック内と第１エリア第５ブロックと接合し，SHは第11，第13ブロック間で接合する。CCが１点第11ブロックと接合している。三稜尖頭器１点(No94)の他，剥片が出土している。

No94は，両側縁の先端部に細かな整形加工が重なり，右側縁の先行する剥離にブランティングチップが1点接合することから，三稜尖頭器の欠損品とみられる。(接合資料No23)

剥片No96は，接合資料23の一部である。(接合資料No23)

剥片No97は，接合資料22の一部である。(接合資料No22)

剥片No98は，剥片剥離方向の移動する石核から取り出したものである。

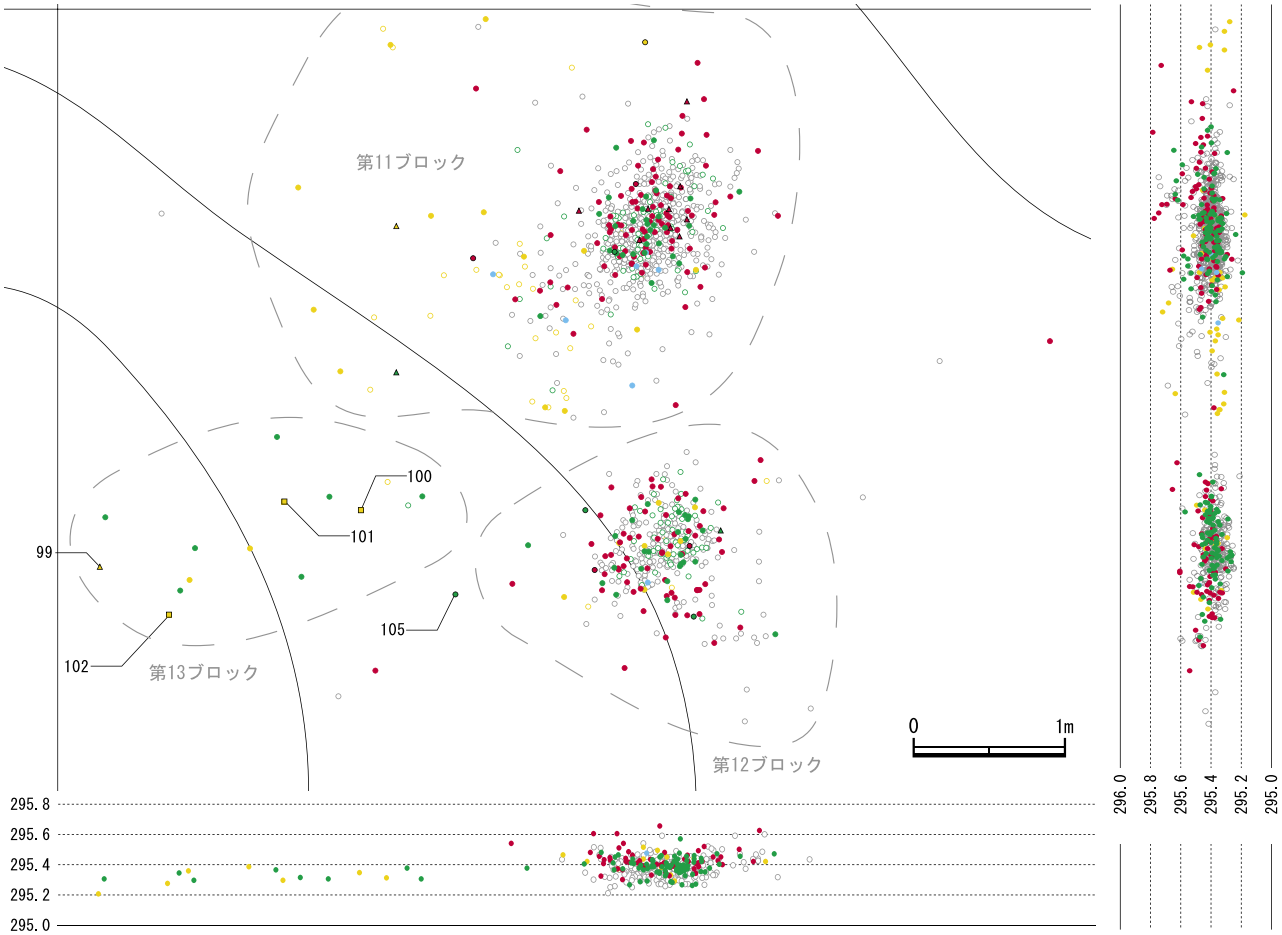
⑥第13ブロック(第40～42図)

第11，第12ブロックの東側にあり，CC７点，SH８点で構成する。掻器１点(No99)，石核３点(No100～102)が出土しているが，接合は確認できない。

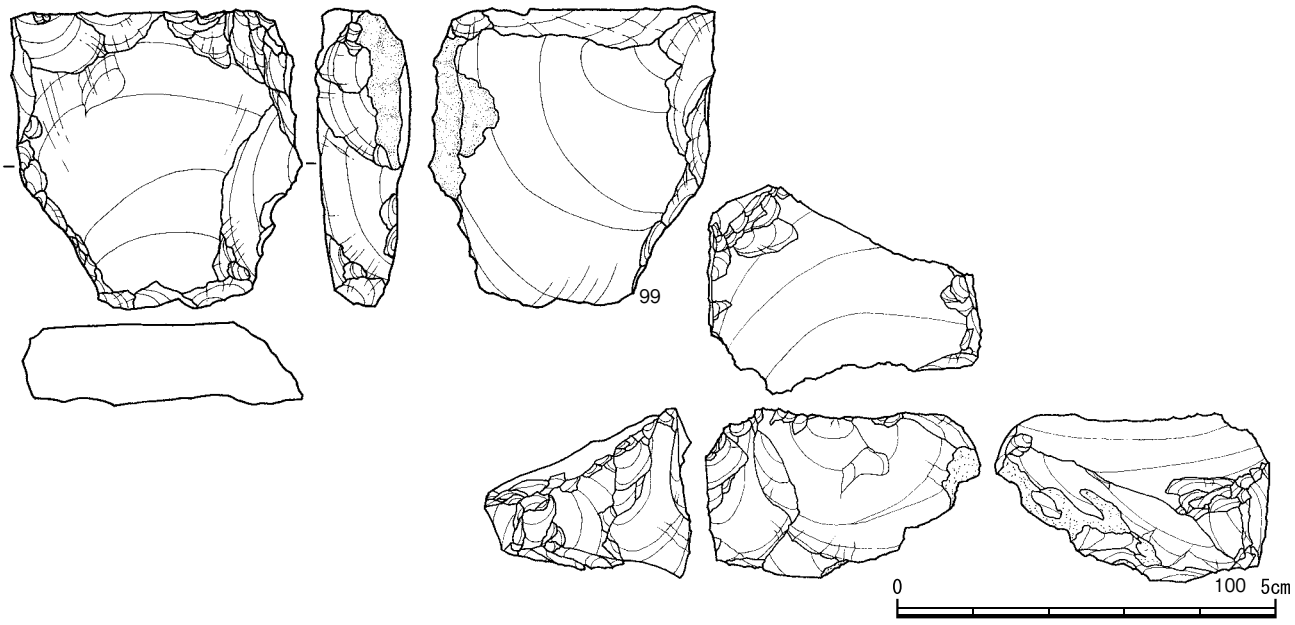
掻器No99は，素材の特性を活かし両側縁と下端部に急斜度の刃部を形成している。

第14表　第２エリア第12ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
39	94	剥片石器	三稜尖頭器	A2	B12	SH	24.7	12.4	10.0	1.84	4193	ⅩⅤ	-	E-16	接合資料No23
	95	剥片類	剥片	A2	B12	OB2B	20.2	27.6	6.2	2.57	4296	ⅩⅤ	-	E-16	-
	96	剥片類	剥片	A2	B12	SH	25.3	18.8	5.0	1.85	4514	ⅩⅤ	-	E-16	接合資料No23
	97	剥片類	剥片	A2	B12	SH	18.0	33.8	7.2	2.59	3998	ⅩⅣ	下	E-16	接合資料No22
	98	剥片類	剥片	A2	B12	OB2B	17.8	26.2	9.4	3.41	3967	ⅩⅢ	-	E-16	-



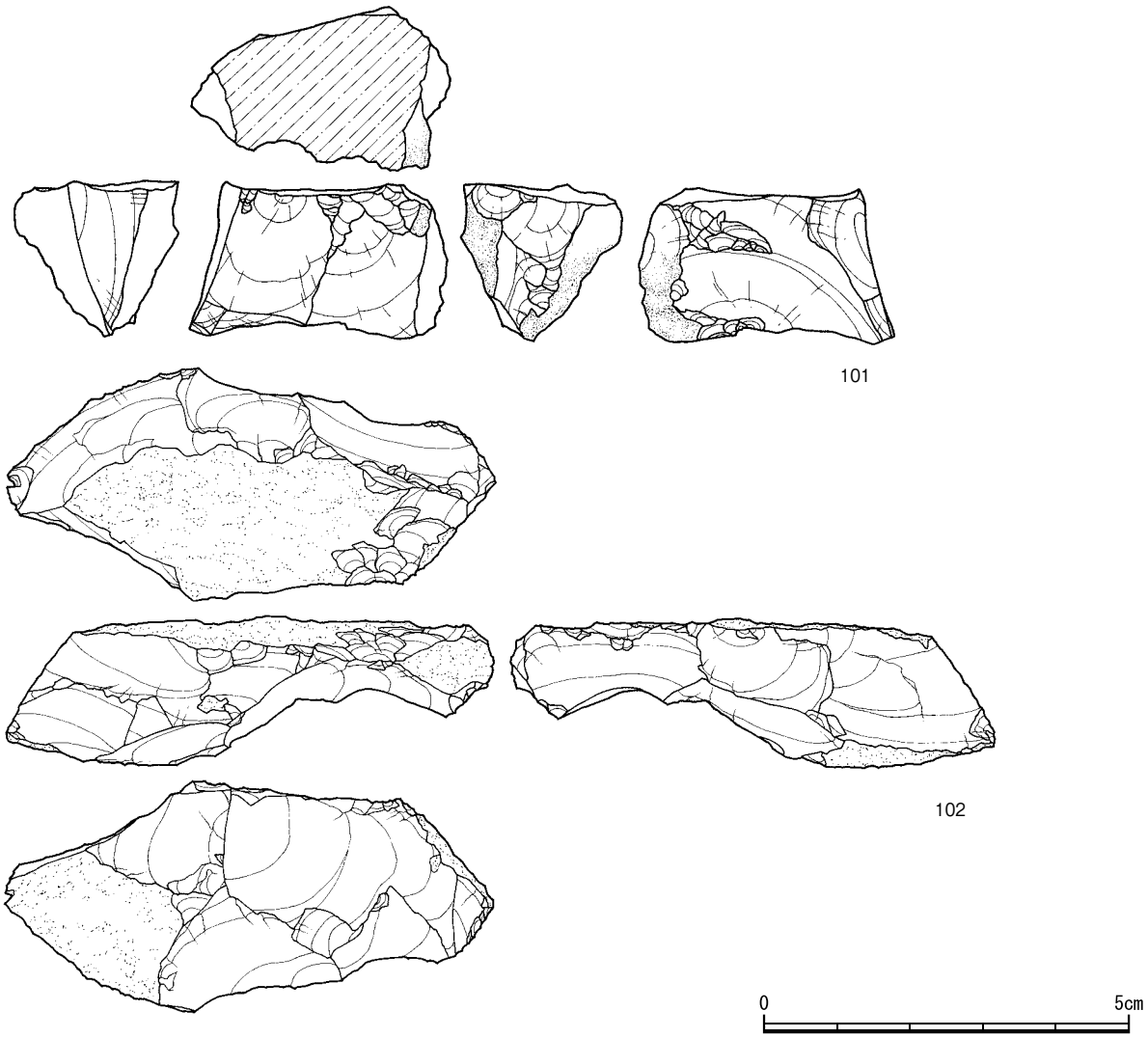
第40図　第２エリア第13ブロック遺物出土位置図



第41図　第2エリア第13ブロック出土石器実測図

第15表　第２エリア第13ブロック出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
41	99	剥片石器	掻器	A2	B13	CC	39.2	38.1	11.4	22.70	5177	XⅣ	下	E-16	-
	100	石核類	石核	A2	B13	CC	28.1	37.3	20.4	16.00	4468	XⅣ	下	E-16	-
42	101	石核類	石核	A2	B13	CC	21.8	35.5	21.0	13.63	4673	XⅣ	下	E-16	-
	102	石核類	石核	A2	B13	CC	31.3	66.1	20.6	31.56	4675	XⅣ	下	E-16	-



第42図　第2エリア第13ブロック出土石器実測図

石核No100は，先行した剥離面を打面とした単剥離面打面で，頭部調整を施し，作業面の観察から横広の剥片剥出を目的としている。

No101は，摂理面を打面とした単剥離面打面で，打面転位を繰り返し，丈の短い横広の剥片を取り出している。

No102は，扁平な原石を用い原石面を打面に，打面転位を繰り返している。作業面から横広の剥片を目的としたことが伺える。

⑦第２エリアブロック外(第43図)

第２エリア内のブロックに該当しない遺物を包括した。石材はCC５点，OB６点，OB2B５点，SH１点である。

明瞭な石器は出土していないが，調整剥片１点No103，二次加工痕のある剥片1点No104と剥片が出土している。

調整剥片No103は，背面右側に先行した剥離面が残り，側縁には調整剥離痕が残される。(接合資料No5)

二次加工痕のある剥片No104は，打面から左側縁にかけて細かな調整剥離が施されている。

剥片No105は，調整剥片の可能性がある。(接合資料No23)

No106は，剥片剥離方向の移動する石核から取り出したものである。

(３)エリア外(第44図)

第１エリア，第２エリアに該当しない遺物を包括した。石材はCC８点，OB４点，OB3B１点，SH３点である。

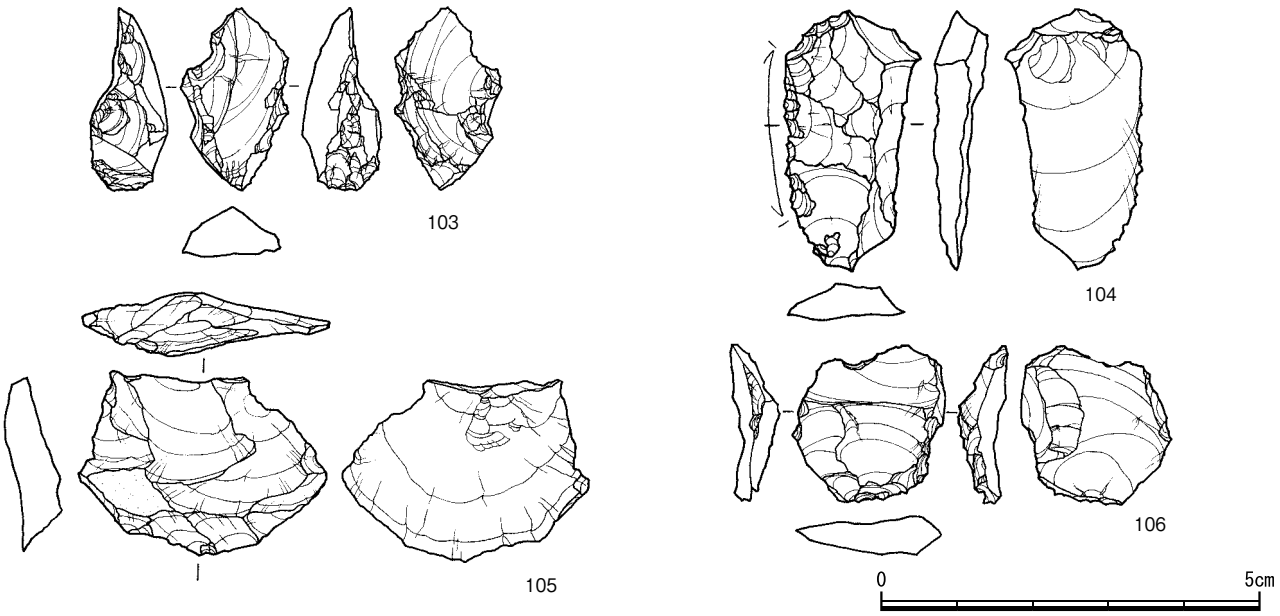
剥片No107は，頭部調整剥片の可能性がある。(接合資料No6)

No108は，剥片剥離方向の移動する石核から取り出した剥片である。

チップNo109は，右側縁に腹面からの微細剥離痕が観察できる。

No110は，Ｘ層の出土遺物で原石面が一部残りローリングを受けているため剥離の状況が観察できない。

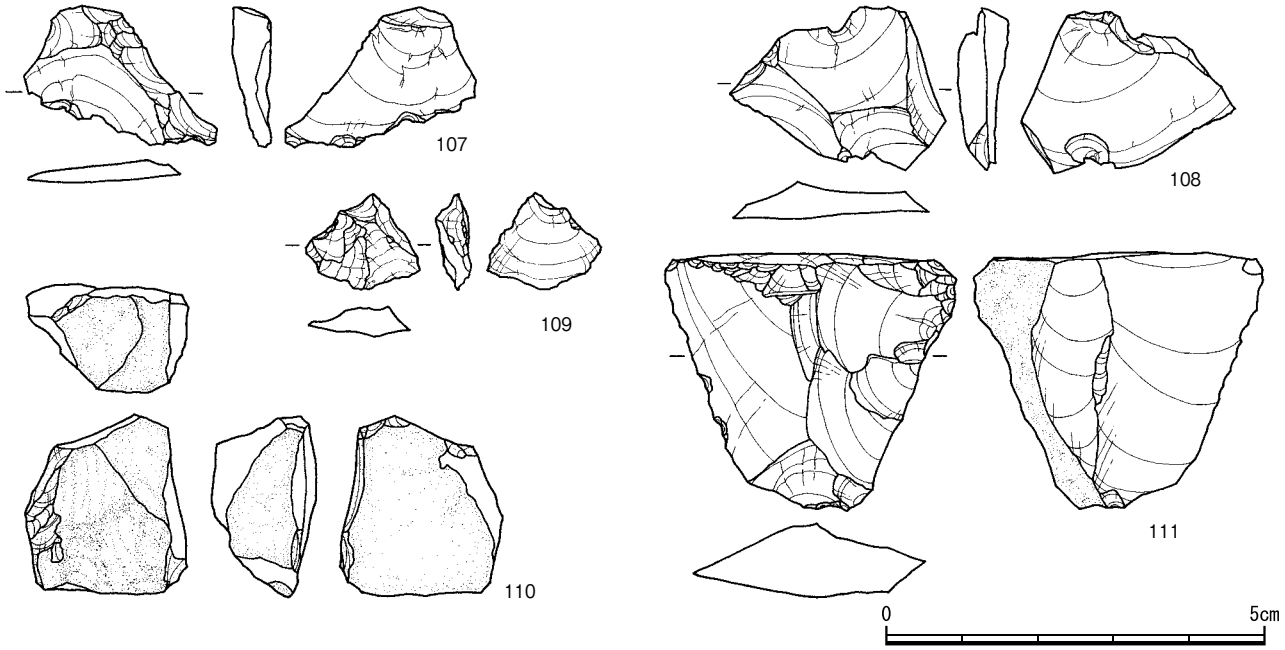
二次加工痕のある剥片No111は，Ⅺ層出土の剥片で，厚みを減じるため腹面加工を施し，背面の下端部は緩斜度の縁部調整が入り，続いて右側縁に階段状の細部調整が施され，背面側からの圧力で折断している。



第43図　第2エリアブロック外出土石器実測図

第16表　第２エリアブロック外出土石器観察表

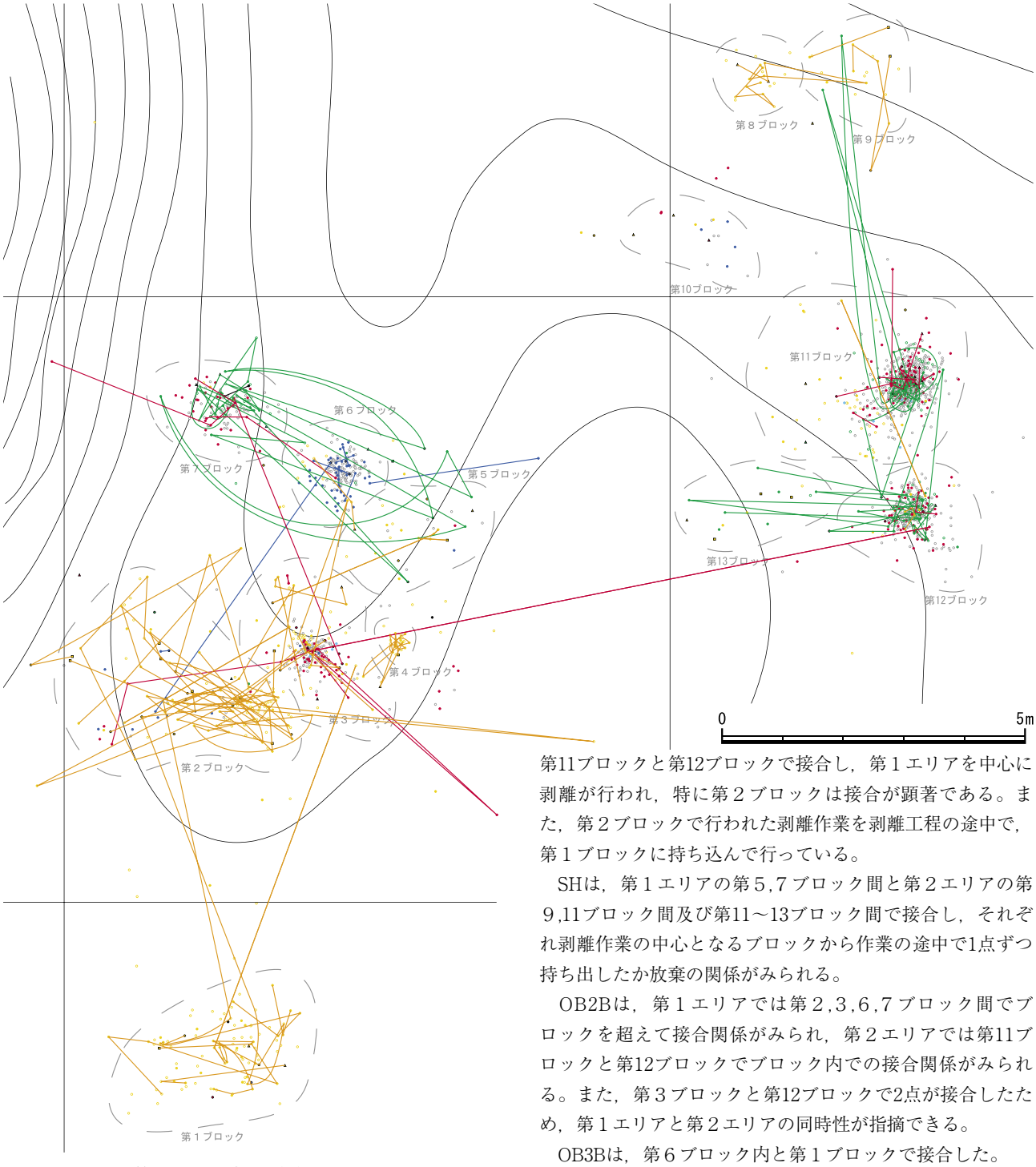
挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
43	103	剥片類	調整剥片	A2	OB	CC	23.8	13.8	10.2	2.32	3921	XⅢ	-	D-16	接合資料No５
	104	剥片石器	二次加工痕剥片	A2	OB	CC	33.6	17.5	6.6	2.99	5358	XⅤ	-	D-16	-
	105	剥片類	剥片	A2	OB	SH	23.5	32.8	8.9	4.59	4472	XⅣ	下	E-16	接合資料No23
	106	剥片類	剥片	A2	OB	CC	19.9	19.5	5.8	1.77	3606	XⅣ	-	D-15	-



第44図　エリア外出土石器実測図

第17表　エリア外出土石器観察表

挿図No	報告No	分類L1	分類L2	エリア	ブロック	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	取上No	層位L1	層位L2	グリッド	接合番号
44	107	剥片類	剥片	OA	OB	CC	17.0	26.3	4.7	1.27	3058	XⅣ	下	F-1	接合資料No６
	108	剥片類	剥片	OA	OB	CC	21.1	27.6	6.1	2.45	4415	XⅣ	下	F-1	-
	109	剥片類	チップ	OA	OB	OB	15.7	12.8	3.3	0.36	3608	XⅢ	-	D-15	-
	110	石核類	原礫	OA	OB	OB3B	23.4	21.4	13.2	6.43	3702	XⅠ	-	D-17	-
	111	剥片石器	二次加工痕剥片	OA	OB	SH	33.2	37.9	9.9	10.66	2715	X	-	D-11	-



第45図　石材別接合状況図

第４節　接合資料(第45～94図)

(１)石材別接合状況(第45図)

出土遺物の接合作業を行った結果，60個体の接合資料を確認し，剥離過程の検討可能な良好な資料が多数得られた。接合の相関関係を検証した結果，ⅩⅥ層からⅩⅡ層の５層間で接合し，ブロック間でも接合することが確認された。これらの接合関係は，同一母岩接合，破損石器接合で具体的に示している。なお，石材別接合状況は，第45図に示した。

石材別にみるとCCは第１エリアの第１ブロックから第６ブロック間と第２エリアの第８ブロックと第９ブロック間，第11ブロックと第12ブロックで接合し，第１エリアを中心に剥離が行われ，特に第２ブロックは接合が顕著である。また，第２ブロックで行われた剥離作業を剥離工程の途中で，第１ブロックに持ち込んで行っている。

SHは，第１エリアの第５,７ブロック間と第２エリアの第９,11ブロック間及び第11～13ブロック間で接合し，それぞれ剥離作業の中心となるブロックから作業の途中で1点ずつ持ち出したか放棄の関係がみられる。

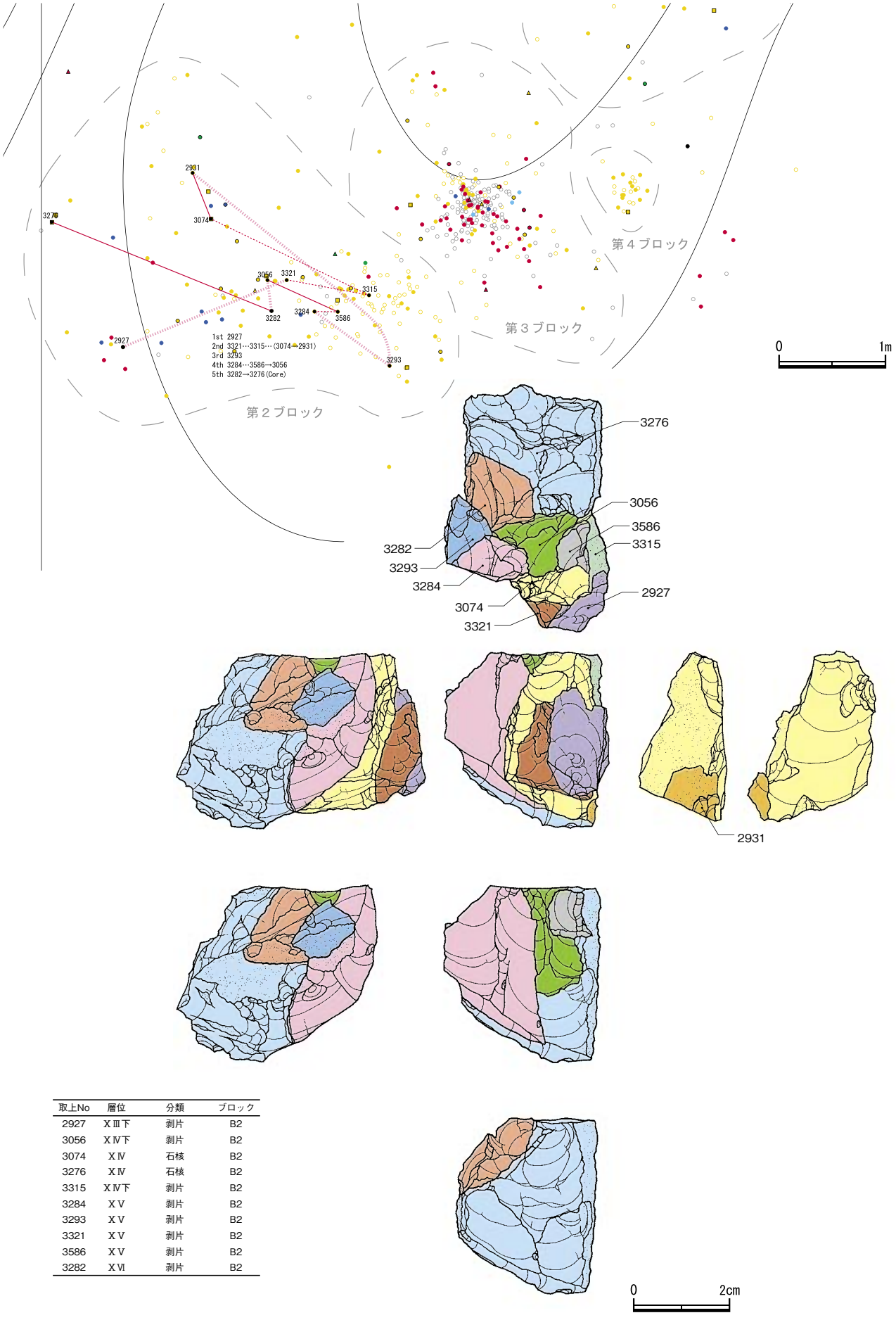
OB2Bは，第１エリアでは第２,３,６,７ブロック間でブロックを超えて接合関係がみられ，第２エリアでは第11ブロックと第12ブロックでブロック内での接合関係がみられる。また，第３ブロックと第12ブロックで2点が接合したため，第１エリアと第２エリアの同時性が指摘できる。

OB3Bは，第６ブロック内と第１ブロックで接合した。

(２)接合資料(第46～94図)

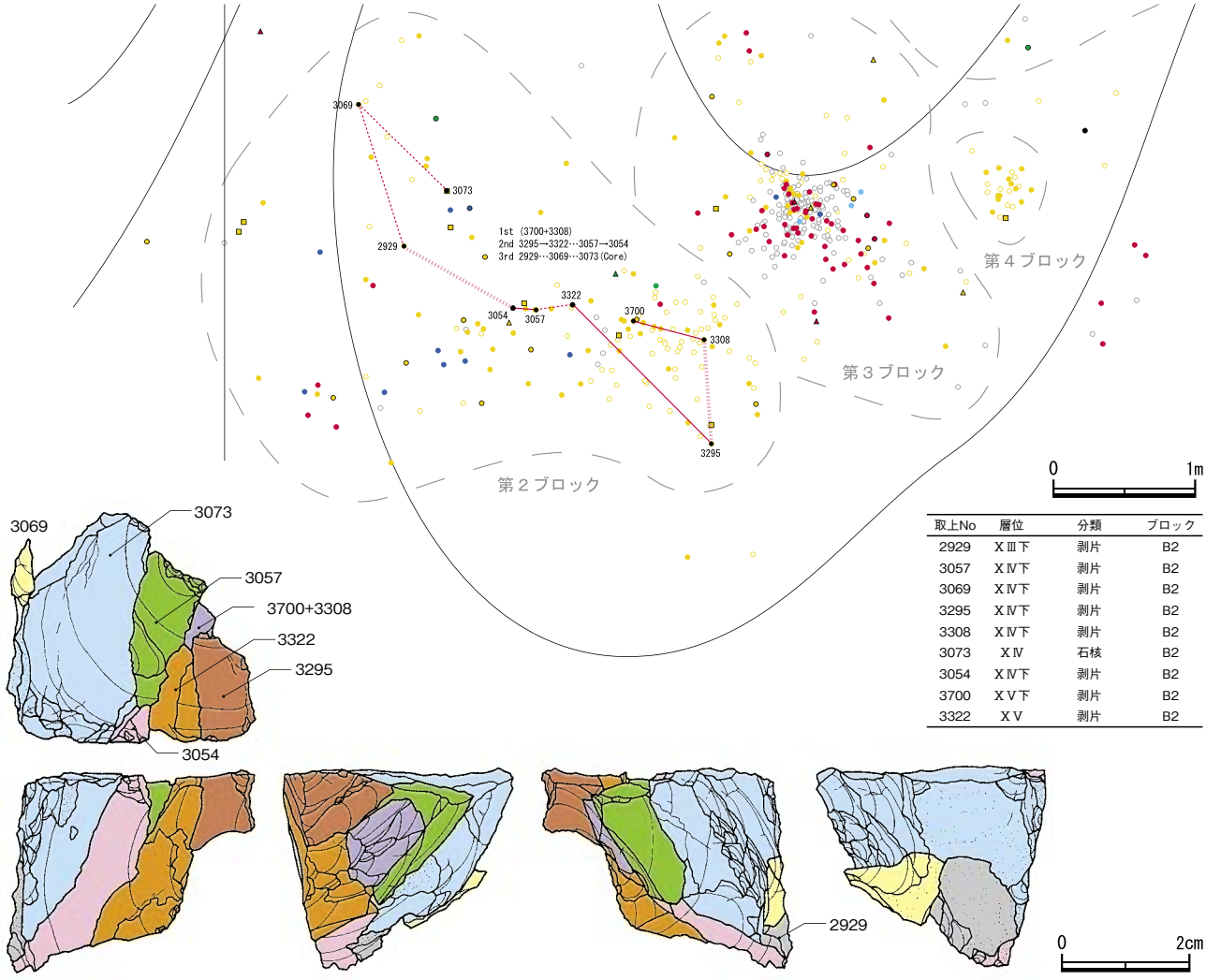
接合資料No1(第46図)

接合資料No1は，節理面に沿って割れている厚さ4cmほどの扁平礫を分割し，分割面を打面として剥離を行っている石核である。底面の分割面から2927を剥離した後，上面に打面を転移して3321…3315…(3074→2931)を剥離し，さらにその作業面に打面を転移して3293を剥離している。その後再び上面に打面を戻して3284…3586→3056を剥離し，最終的には再び作業面に打面を移して3282を剥離した後，石核が放棄されている。



取上No	層位	分類	ブロック
2927	Ⅹ Ⅲ下	剥片	B2
3056	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
3074	Ⅹ Ⅳ	石核	B2
3276	Ⅹ Ⅳ	石核	B2
3315	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
3284	Ⅹ Ⅴ	剥片	B2
3293	Ⅹ Ⅴ	剥片	B2
3321	Ⅹ Ⅴ	剥片	B2
3586	Ⅹ Ⅴ	剥片	B2
3282	Ⅹ Ⅵ	剥片	B2

第46図　接合資料No１実測図及び接合状況図



取上No	層位	分類	ブロック
2929	XⅢ下	剥片	B2
3057	XⅣ下	剥片	B2
3069	XⅣ下	剥片	B2
3295	XⅣ下	剥片	B2
3308	XⅣ下	剥片	B2
3073	XⅣ	石核	B2
3054	XⅣ下	剥片	B2
3700	XⅤ下	剥片	B2
3322	XⅤ	剥片	B2

第47図　接合資料No２実測図及び接合状況図

接合資料No２(第47図)

接合資料No２は，厚手の剥片を素材とし，(3700+3308)を剥離した後，打面を転移して3295→3322…3057→3054を剥離している。3054の剥離後，再度打面を転移して2929以降を剥離しているが，2929以降の打撃によって打面直下の作業面が潰れ，放棄されている。

接合資料No３(第48,49図)

接合資料No３は，節理面をもつ角礫を素材とし，ＡとＢの個体に分かれ，それぞれで複数回の打面転回を行いながら剥離を行っている。Ａはまず，素材剥片の主剥離面を打面として(3036+3582)→2999→(3053+3316+3599+3325+3080)を剥離し，その作業面に打面を転移して3078を剥離するが，このときの衝撃で石核が破断している。その後3320はそのまま放棄されるが，(3601+3335)は3601の剥離を行ってから放棄されている。Ｂは石核の接合はないものの，Ａを剥離した作業面を打面として(3077+3590)→(3600+3594)→3291…3318→3060が剥離され，想定される石核の側面に打面を転回した後，2899…2897→2975…2967を剥離し，さらにその作業面に打面を転移して3258→3260を剥離している。これ以降の剥離は石核の接合がないため判断できない。なお，個体Ａは第２ブロックで，個体Ｂは第３ブロックで剥離が行われている。

接合資料No４(第50図)

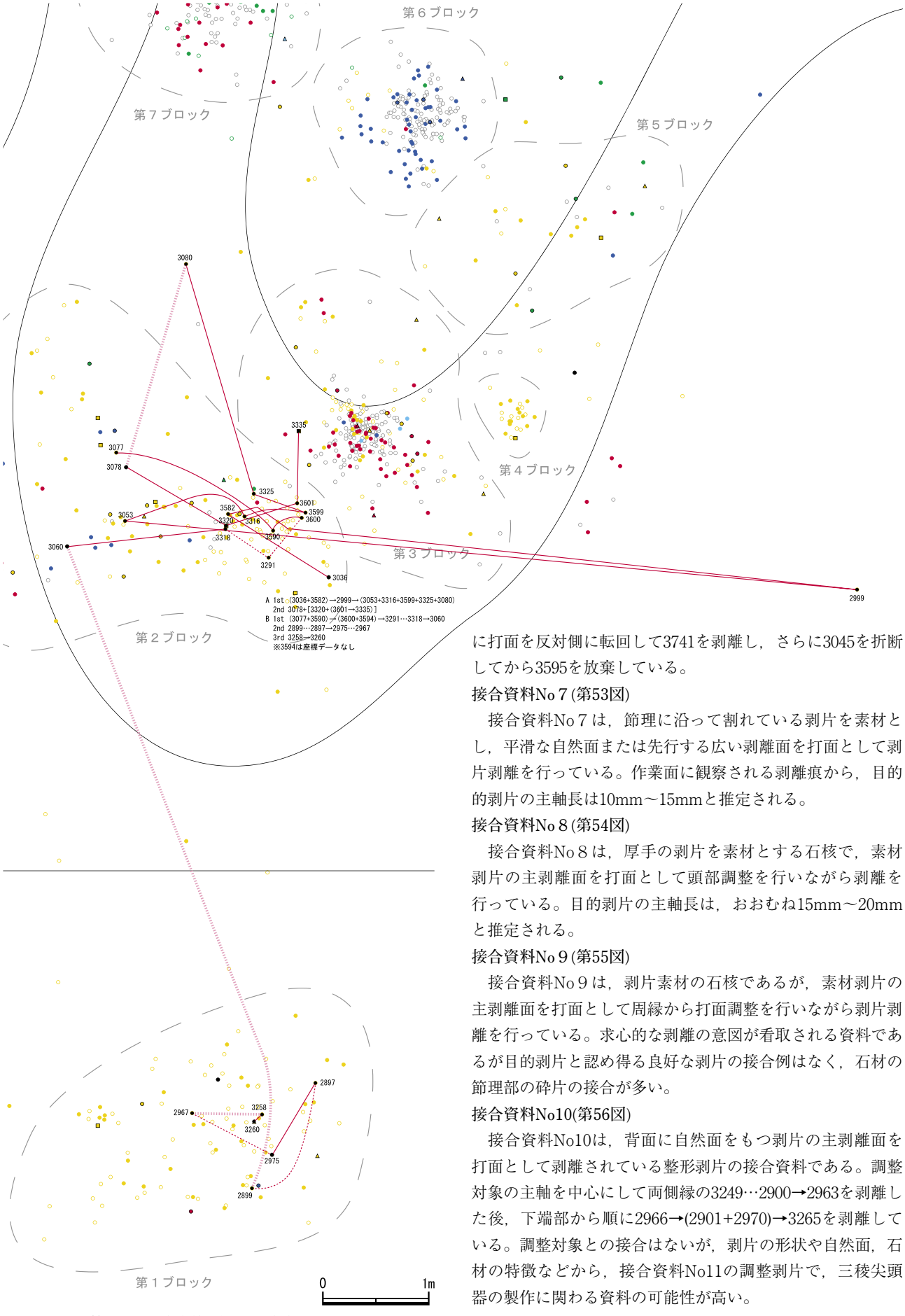
接合資料No４は，背面に礫面をもつ分厚い剥片を素材とする石核で，背面の平滑な自然面を打面として剥離を行っている。(3410+3406+3725+3409)の剥離時にはすでに素材剥片が破断しそれ以降は１回の剥離ごとに打面を転回しながら剥離を行っている。(3405+3537)は剥離後右側縁に二次加工が加えられている。

接合資料No５(第51図)

接合資料No５は，剥片素材を素材とする石核であるが，第１打面の中央部に節理が入っており，基本的には，この節理に並行する剥離が意識されている。しかし，素材剥片が小さいため積極的な剥離は行われず，数回の剥離で放棄されている。

接合資料No６(第52図)

接合資料Ｎｏ６は，滑らかな自然面をもつ礫から3323を剥離し，その剥離面を打面として3048と[3058→(2928+3044+3585)→(3298+3691)→(3741+3045+3595)]:Ａを剥離している。Ａは背面の平坦面を打面とする石核として転用され，3058→(2928+3044+3585)→(3298+3691)を剥離した後



第48図　接合資料No３接合状況図

に打面を反対側に転回して3741を剥離し，さらに3045を折断してから3595を放棄している。

接合資料No７(第53図)

接合資料No７は，節理に沿って割れている剥片を素材とし，平滑な自然面または先行する広い剥離面を打面として剥片剥離を行っている。作業面に観察される剥離痕から，目的的剥片の主軸長は10mm～15mmと推定される。

接合資料No８(第54図)

接合資料No８は，厚手の剥片を素材とする石核で，素材剥片の主剥離面を打面として頭部調整を行いながら剥離を行っている。目的剥片の主軸長は，おおむね15mm～20mmと推定される。

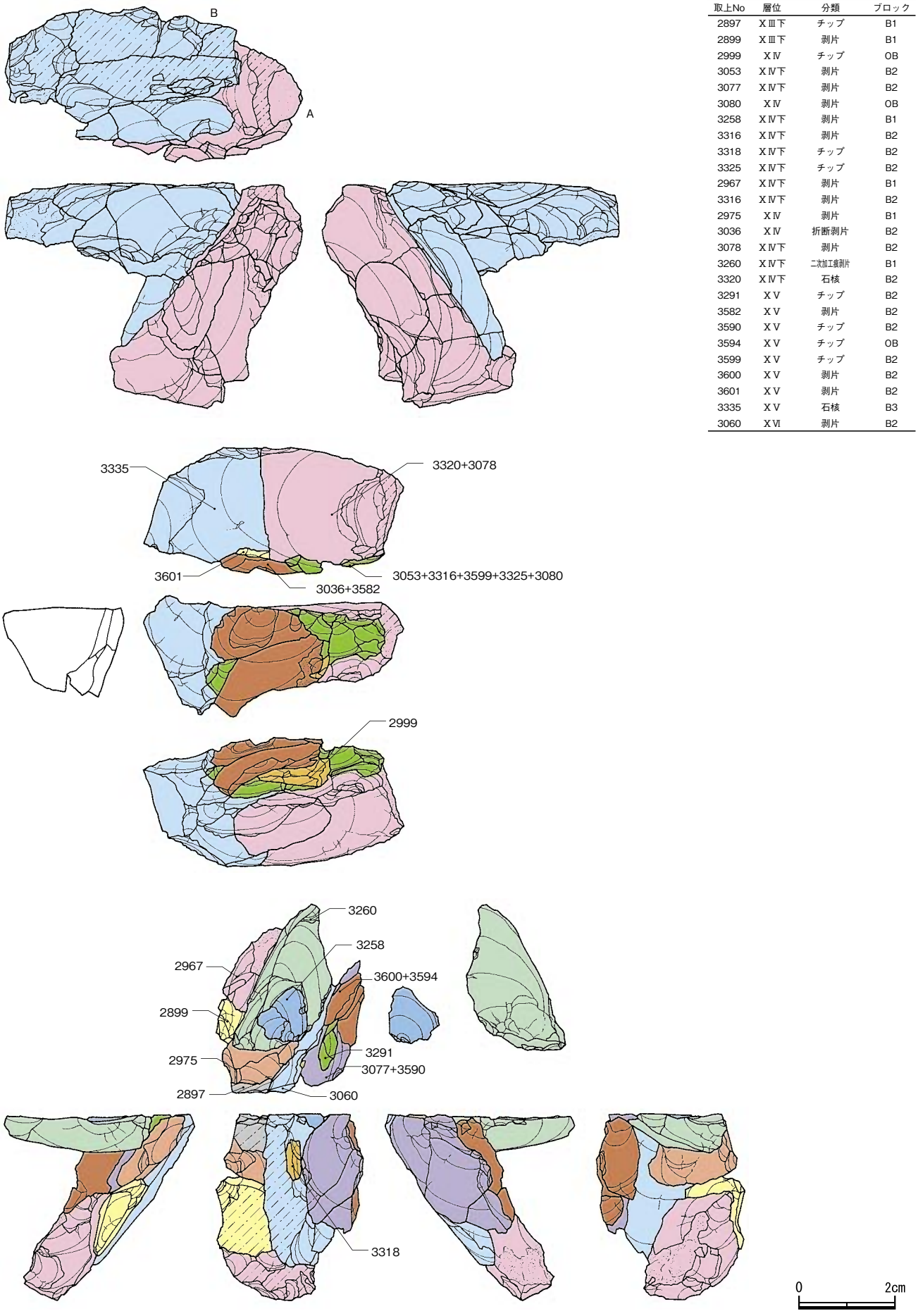
接合資料No９(第55図)

接合資料No９は，剥片素材の石核であるが，素材剥片の主剥離面を打面として周縁から打面調整を行いながら剥片剥離を行っている。求心的な剥離の意図が看取される資料であるが目的剥片と認め得る良好な剥片の接合例はなく，石材の節理部の砕片の接合が多い。

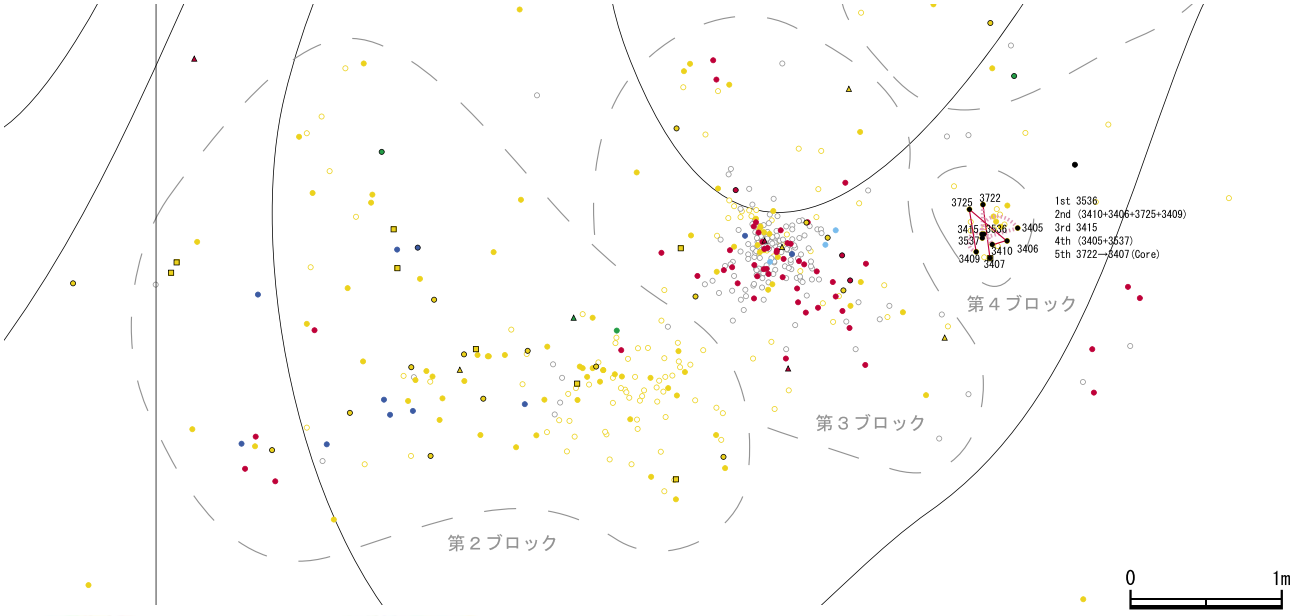
接合資料No10(第56図)

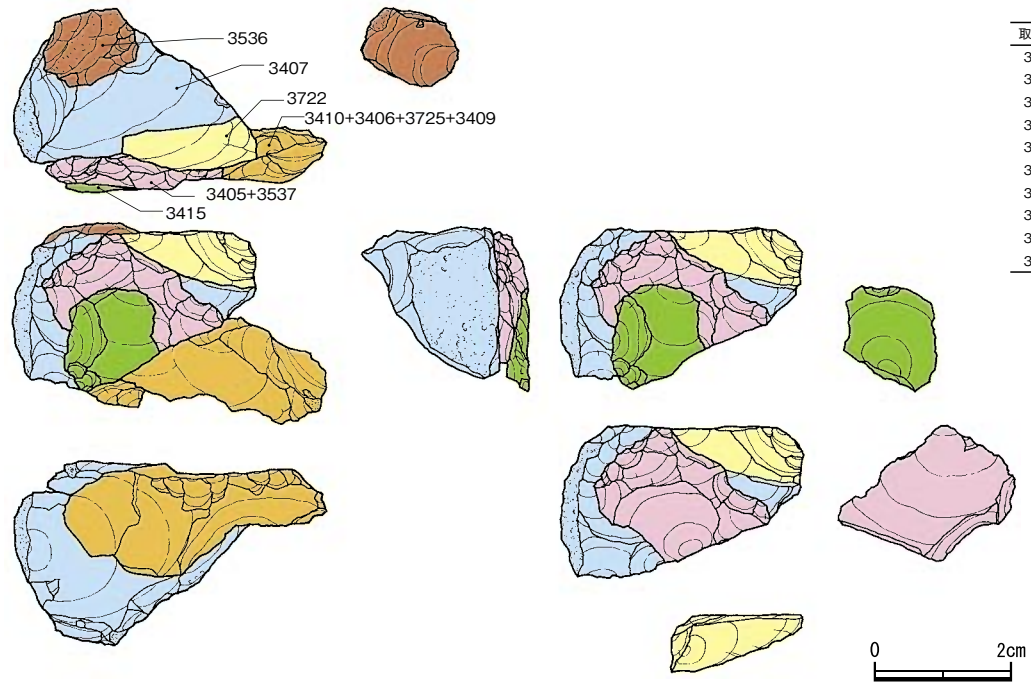
接合資料No10は，背面に自然面をもつ剥片の主剥離面を打面として剥離されている整形剥片の接合資料である。調整対象の主軸を中心にして両側縁の3249…2900→2963を剥離した後，下端部から順に2966→(2901+2970)→3265を剥離している。調整対象との接合はないが，剥片の形状や自然面，石材の特徴などから，接合資料No11の調整剥片で，三稜尖頭器の製作に関わる資料の可能性が高い。

取上No	層位	分類	ブロック
2897	Ⅹ Ⅲ下	チップ	B1
2899	Ⅹ Ⅲ下	剥片	B1
2999	Ⅹ Ⅳ	チップ	OB
3053	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
3077	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
3080	Ⅹ Ⅳ	剥片	OB
3258	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B1
3316	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
3318	Ⅹ Ⅳ下	チップ	B2
3325	Ⅹ Ⅳ下	チップ	B2
2967	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B1
3316	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
2975	Ⅹ Ⅳ	剥片	B1
3036	Ⅹ Ⅳ	折断剥片	B2
3078	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
3260	Ⅹ Ⅳ下	二次加工ある剥片	B1
3320	Ⅹ Ⅳ下	石核	B2
3291	Ⅹ Ⅴ	チップ	B2
3582	Ⅹ Ⅴ	剥片	B2
3590	Ⅹ Ⅴ	チップ	B2
3594	Ⅹ Ⅴ	チップ	OB
3599	Ⅹ Ⅴ	チップ	B2
3600	Ⅹ Ⅴ	剥片	B2
3601	Ⅹ Ⅴ	剥片	B2
3335	Ⅹ Ⅴ	石核	B3
3060	Ⅹ Ⅵ	剥片	B2



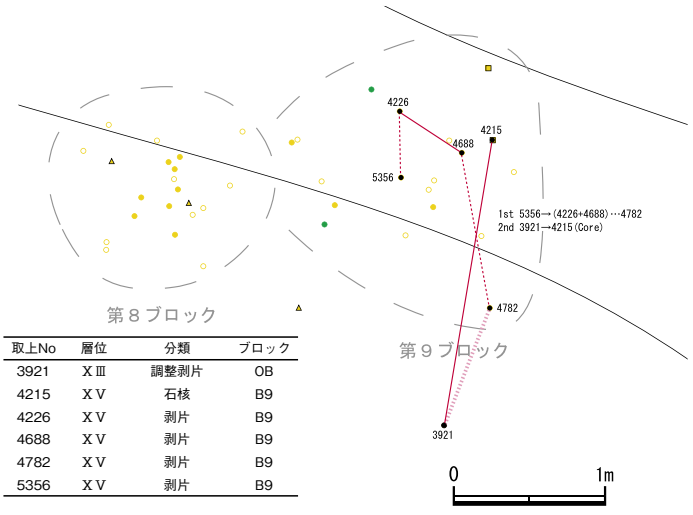
第49図　接合資料No３実測図

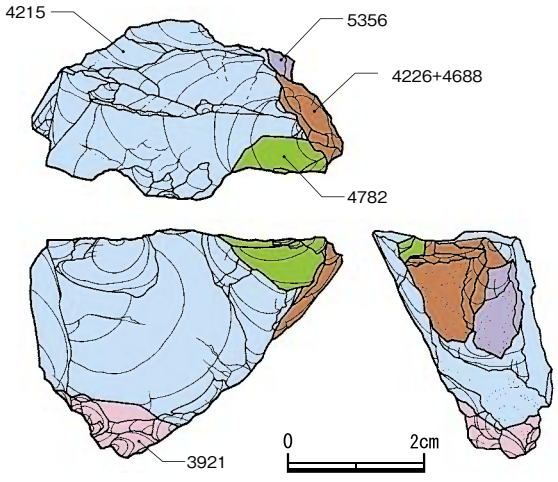




取上No	層位	分類	ブロック
3409	ⅩⅣ下	剥片	B4
3410	ⅩⅣ下	チップ	B4
3415	ⅩⅣ下	剥片	B4
3725	ⅩⅣ下	剥片	B4
3405	ⅩⅤ上	剥片	B4
3406	ⅩⅤ上	剥片	B4
3407	ⅩⅤ	石核	B4
3536	ⅩⅤ	剥片	B4
3537	ⅩⅤ	剥片	B4
3722	ⅩⅤ	剥片	B4

第50図　接合資料No４実測図及び接合状況図

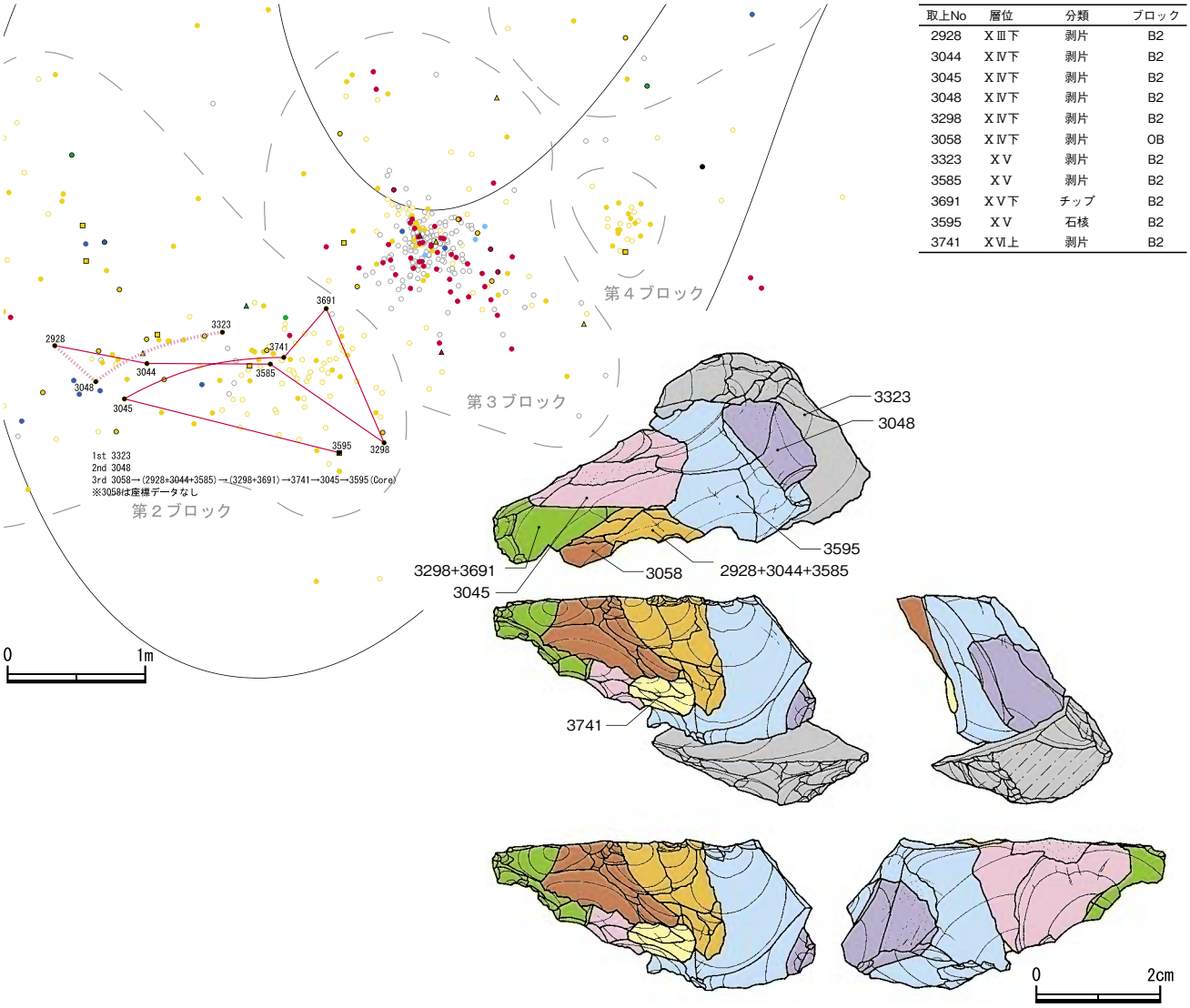




取上No	層位	分類	ブロック
3921	Ⅹ Ⅲ	調整剥片	OB
4215	ⅩⅤ	石核	B9
4226	ⅩⅤ	剥片	B9
4688	ⅩⅤ	剥片	B9
4782	ⅩⅤ	剥片	B9
5356	ⅩⅤ	剥片	B9

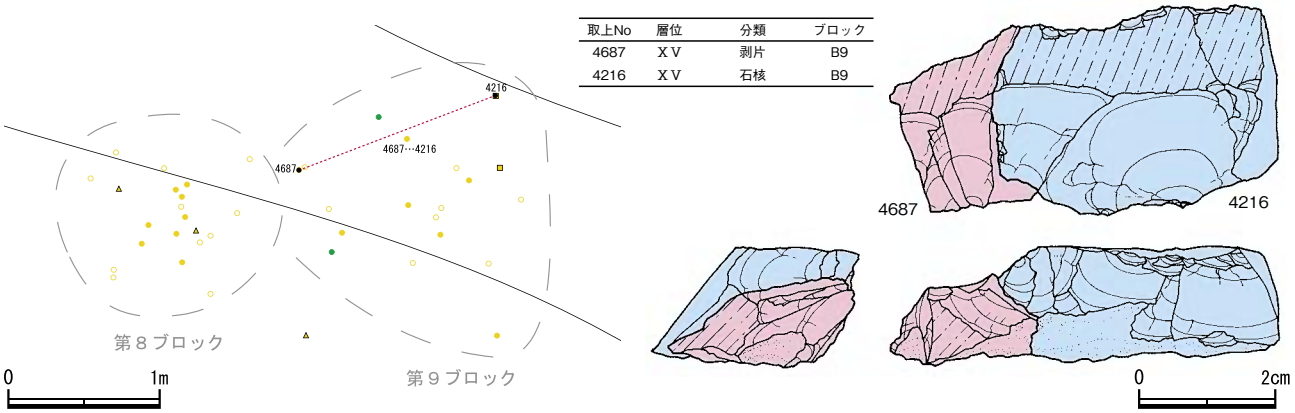
第51図　接合資料No５実測図及び接合状況図

取上No	層位	分類	ブロック
2928	Ⅹ Ⅲ下	剥片	B2
3044	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
3045	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
3048	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
3298	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B2
3058	Ⅹ Ⅳ下	剥片	OB
3323	Ⅹ Ⅴ	剥片	B2
3585	Ⅹ Ⅴ	剥片	B2
3691	Ⅹ Ⅴ下	チップ	B2
3595	Ⅹ Ⅴ	石核	B2
3741	Ⅹ Ⅵ上	剥片	B2



第52図　接合資料No６実測図及び接合状況図

取上No	層位	分類	ブロック
4687	Ⅹ Ⅴ	剥片	B9
4216	Ⅹ Ⅴ	石核	B9



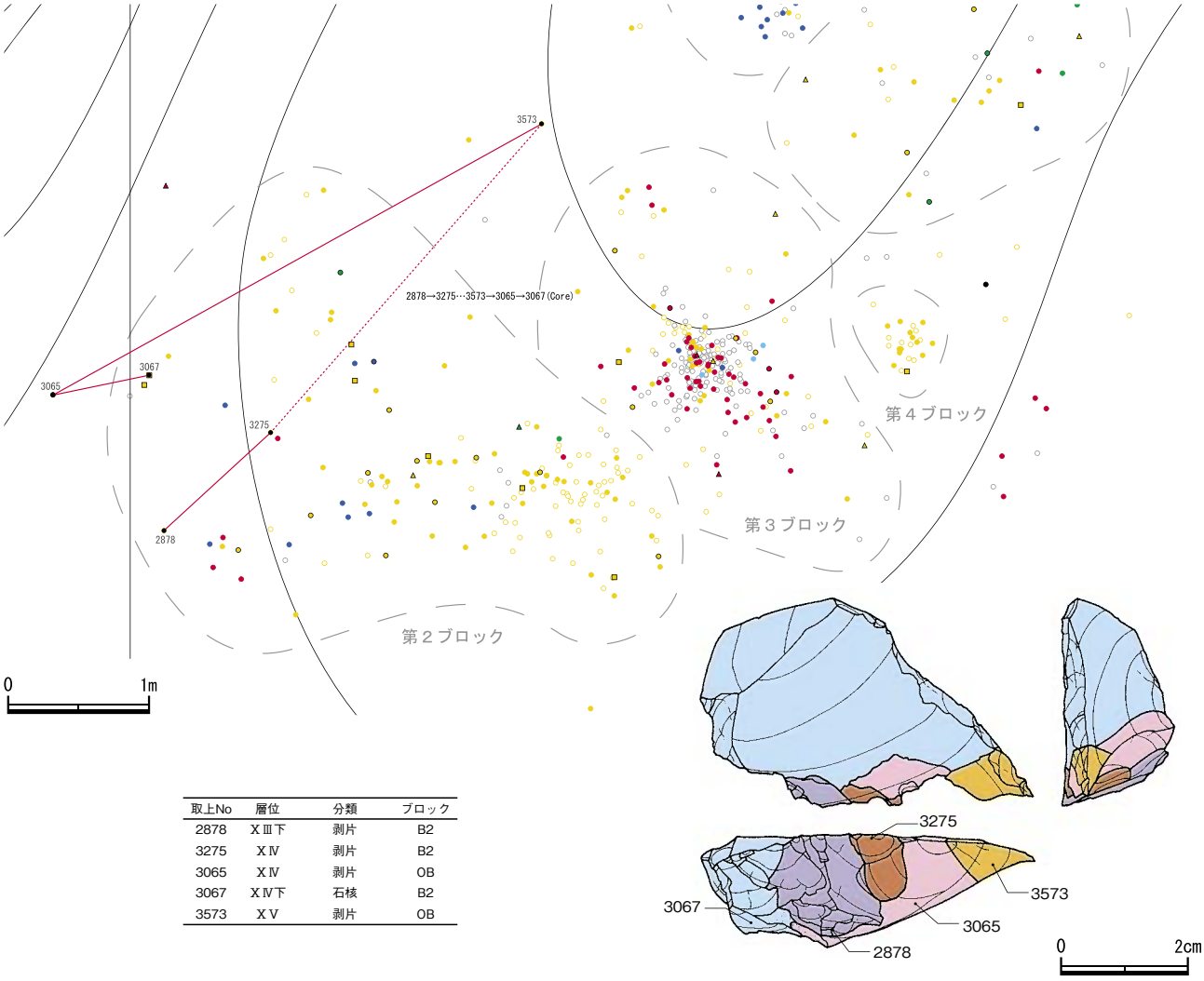
第53図　接合資料No７実測図及び接合状況図

接合資料No11(第57図)

接合資料No11は，調整剥片と三稜尖頭器の未製品の接合資料である。背面に礫面をもつ剥片の主剥離面を打面として調整剥離を行っている。調整剥離は素材の左側縁と基部のみにみられる。

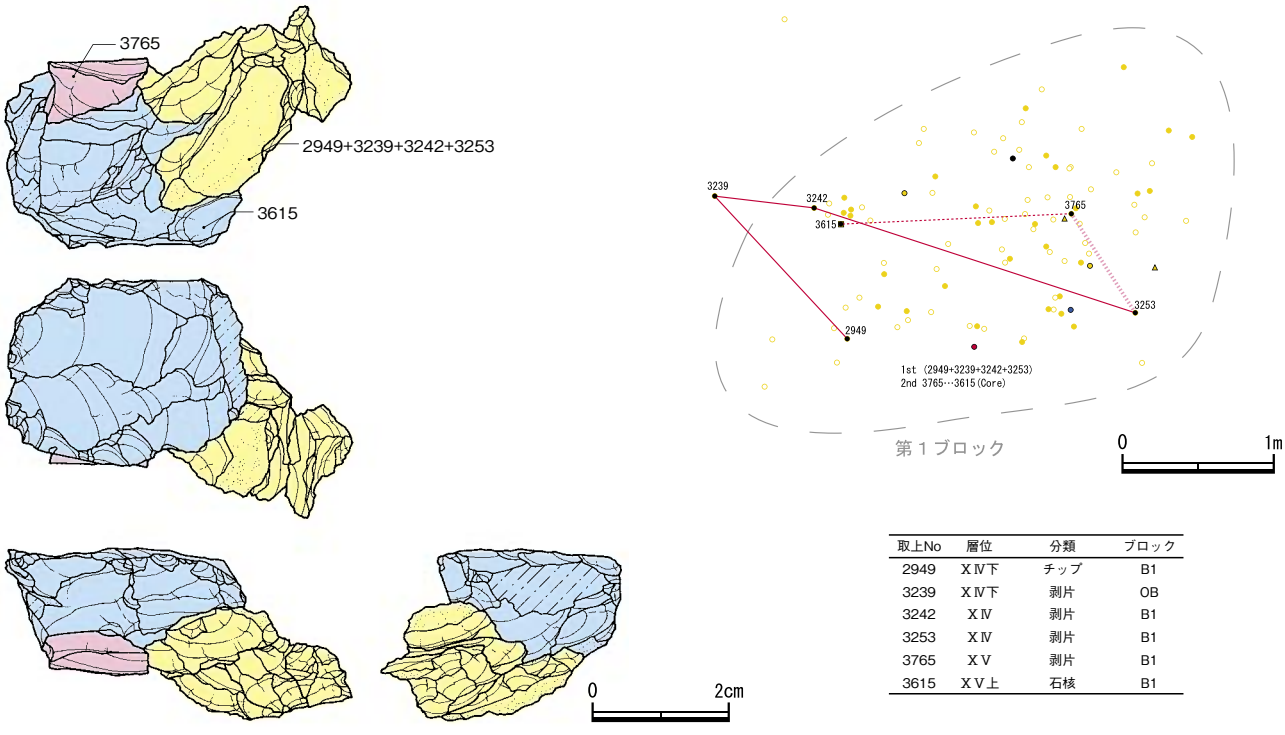
接合資料No12(第58図)

接合資料No12は，剥片のみの接合例であるが，節理面に沿って割れている扁平礫を素材とし，一方の平坦な節理面を打面として剥離を行っている。2991…3256…2995…3240は間をつなぐ資料が欠けるものの，打角や剥片の形状が近似しており，先行する剥離面の観察からみても連続的な整形剥離の結果と理解される。3616は剥離が大きく，整形剥離を施した後に作業対象の形状を変えるような剥離を行っていることがわかる。



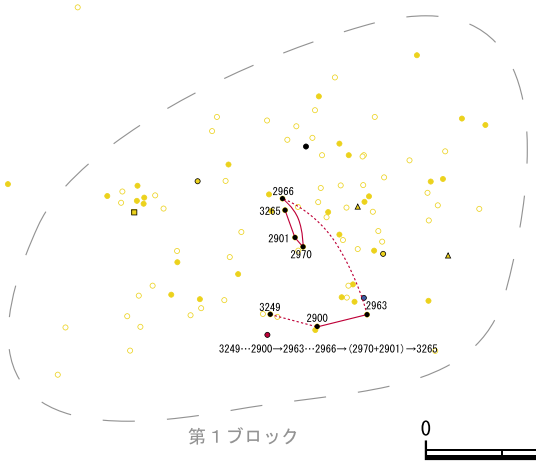
取上No	層位	分類	ブロック
2878	Ⅹ Ⅲ下	剥片	B2
3275	Ⅹ Ⅳ	剥片	B2
3065	Ⅹ Ⅳ	剥片	OB
3067	Ⅹ Ⅳ下	石核	B2
3573	Ⅹ Ⅴ	剥片	OB

第54図　接合資料No８実測図及び接合状況図

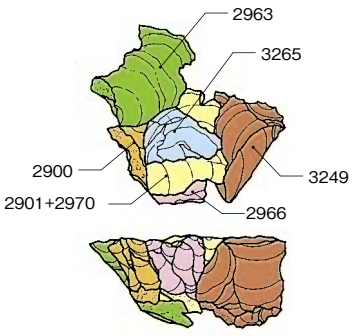


取上No	層位	分類	ブロック
2949	Ⅹ Ⅳ下	チップ	B1
3239	Ⅹ Ⅳ下	剥片	OB
3242	Ⅹ Ⅳ	剥片	B1
3253	Ⅹ Ⅳ	剥片	B1
3765	Ⅹ Ⅴ	剥片	B1
3615	Ⅹ Ⅴ上	石核	B1

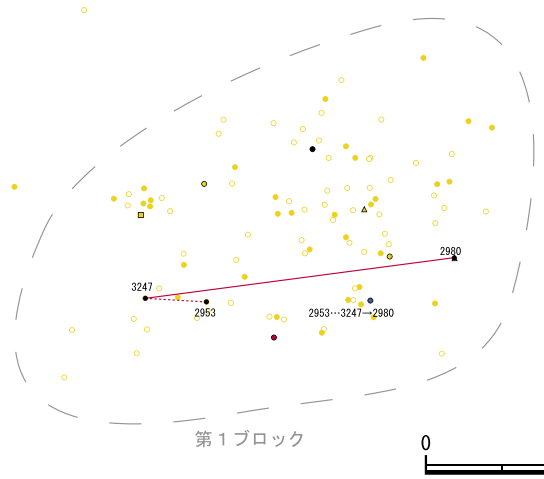
第55図　接合資料No９実測図及び接合状況図



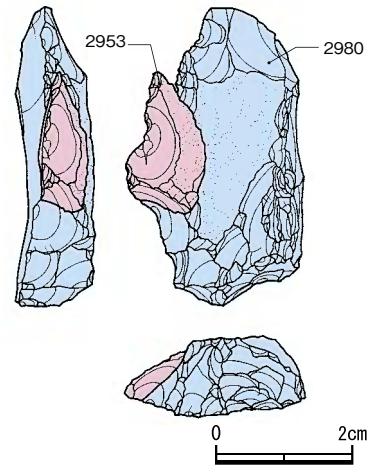
取上No	層位	分類	ブロック
2900	Ⅹ Ⅲ下	チップ	B1
2901	Ⅹ Ⅲ下	チップ	B1
2963	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B1
2966	Ⅹ Ⅳ	チップ	B1
2970	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B1
3249	Ⅹ Ⅳ	剥片	B1
3265	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B1



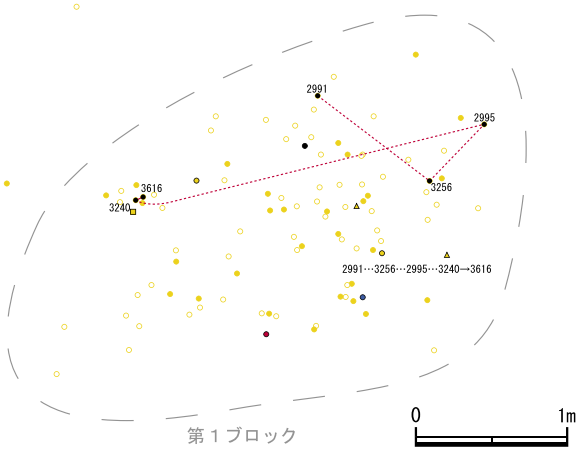
第56図　接合資料No10実測図及び接合状況図



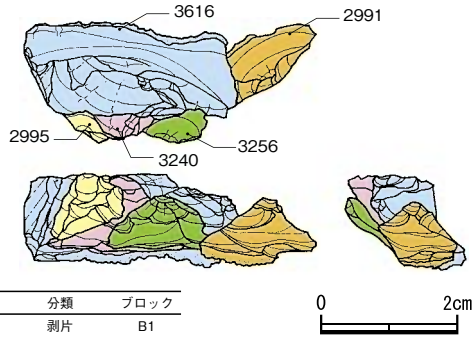
取上No	層位	分類	ブロック
2953	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B1
2980	Ⅹ Ⅳ	三稜尖頭器	B1
3247	Ⅹ Ⅵ	チップ	B1



第57図　接合資料No11実測図及び接合状況図



取上No	層位	分類	ブロック
2991	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B1
2995	Ⅹ Ⅳ	剥片	B1
3240	Ⅹ Ⅳ	剥片	B1
3256	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B1
3616	Ⅹ Ⅴ上	剥片	B1



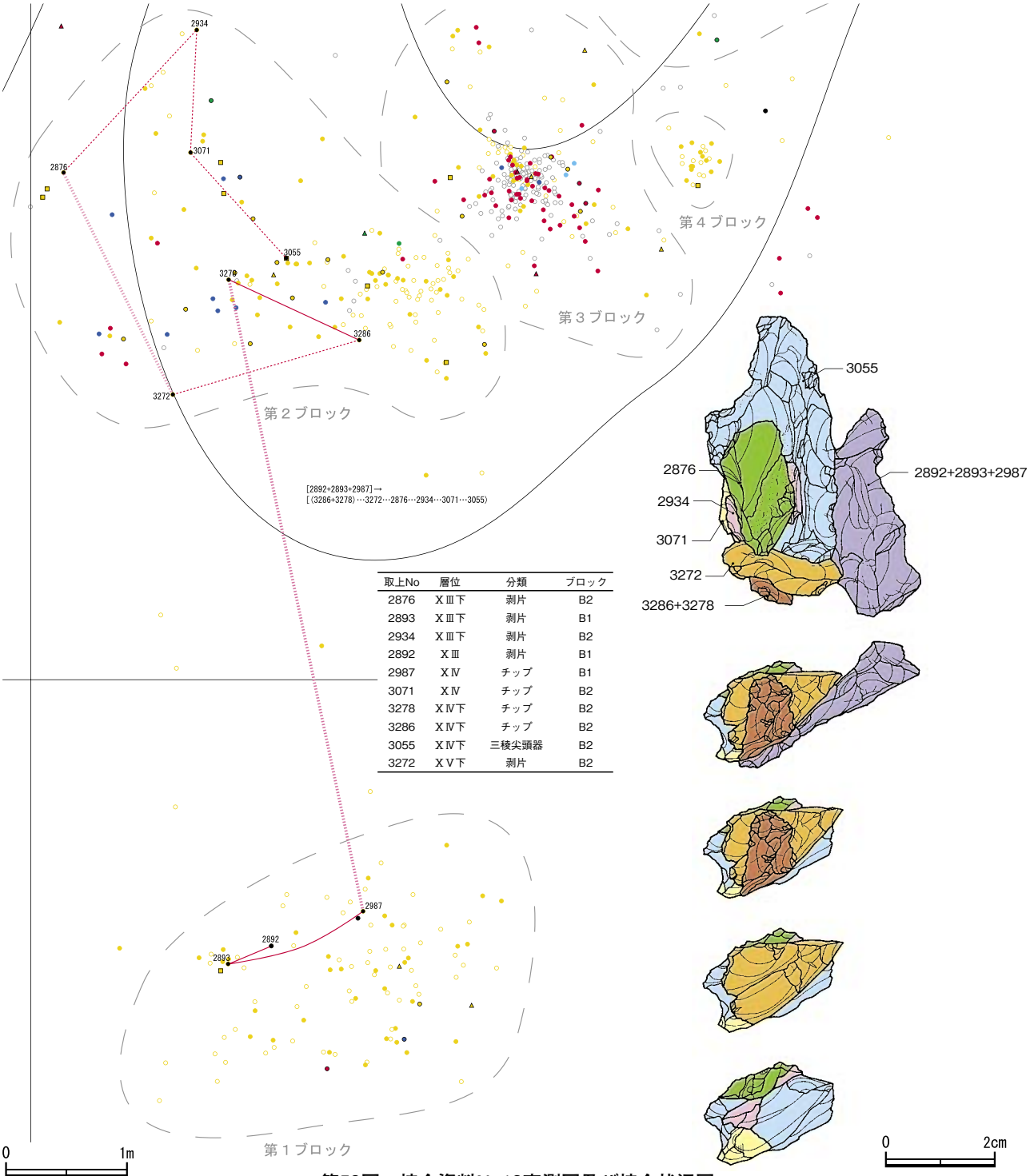
第58図　接合資料No12実測図及び接合状況図

接合資料No13(第59図)

接合資料No13は，大きくは[2892+2893+2987]:Aと[(3278+3286)…3272…2876…2934…3071…3055]:Bの２個体からなる接合資料である。両者の関係は，AがBに先行する。Aは剥片であり，１回の打撃によるアクシデントで３つに割れている。Bはまず素材の主剥離面を下にして素材の背面側から腹面側に向かって主軸長を減じる剥離[(3286+3278)…3272]を行い，次にこの剥離による剥離面を打面として，素材の主軸に沿って器厚を減じる剥離(2876…2934)を行っている。その後，右側縁に形状を整える整形剥離を施しているが，左側縁は分厚く加工が難しいため，基部左端を折り取るような剥離[3071]を行った後，整形剥離を数回加えたのみで加工を放棄している。Aは第１ブロックにまとまり，Bは第２ブロックにまとまっている。

接合資料No14(第60図)

接合資料No14は，節理に沿って割れている剥片または扁平な礫片を素材とし，整形剥離（ブランティング）を施している。整形剥離は両側縁に施されており，左側縁から先端部



取上No	層位	分類	ブロック
2876	Ⅹ Ⅲ下	剥片	B2
2893	Ⅹ Ⅲ下	剥片	B1
2934	Ⅹ Ⅲ下	剥片	B2
2892	Ⅹ Ⅲ	剥片	B1
2987	Ⅹ Ⅳ	チップ	B1
3071	Ⅹ Ⅳ	チップ	B2
3278	Ⅹ Ⅳ下	チップ	B2
3286	Ⅹ Ⅳ下	チップ	B2
3055	Ⅹ Ⅳ下	三稜尖頭器	B2
3272	Ⅹ Ⅴ下	剥片	B2

第59図　接合資料No13実測図及び接合状況図

にかけ，3304→2935→3570→3539の順で調整剥離が行われている。また，基部には素材の折断面を打面として主軸方向に器厚を減じる調整剥離も施されている。

接合資料No15(第61図)

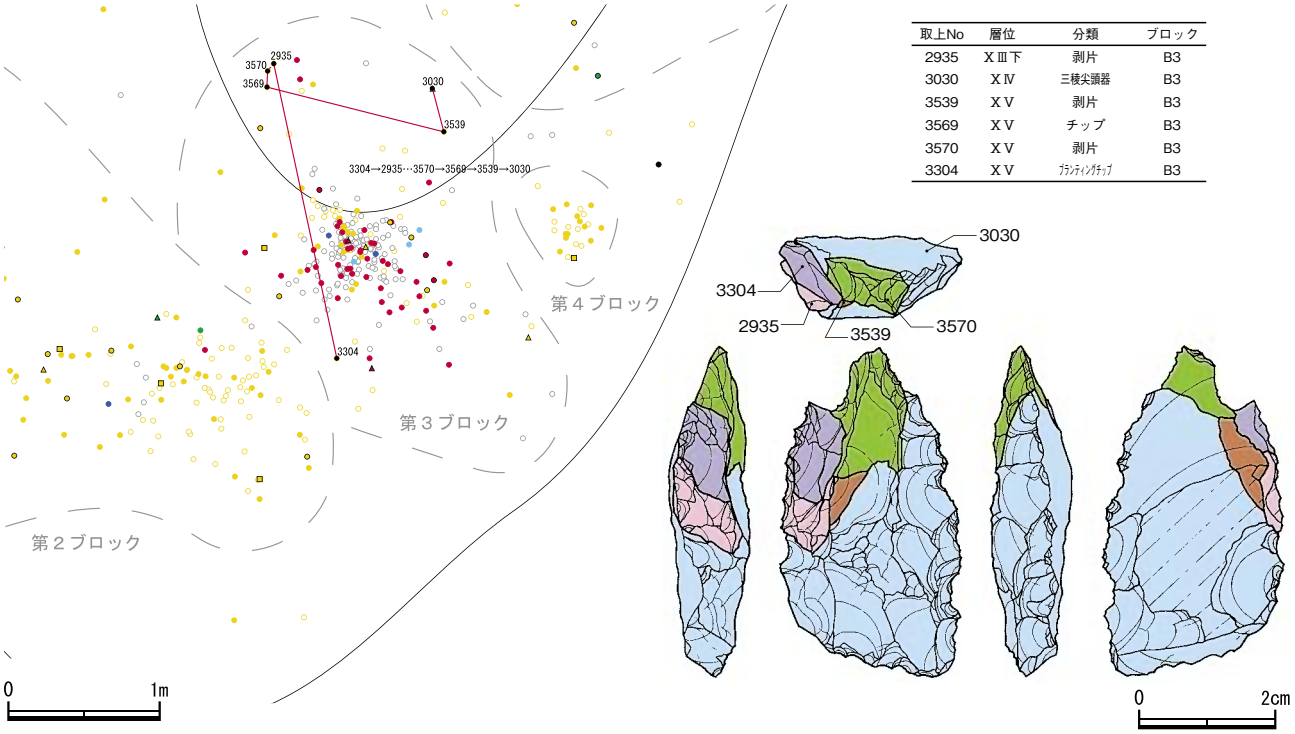
接合資料No15は，平滑な自然面から剥離された剥片を２分割し，一方に二次加工を加えている接合例である。(3723→4077)は分割後さらに4077が折断され，その後3723に二次加工が施されている。残された[3411→3391→3613→3413→3414]も剥離が順次進められてはいるが，刃部作出などを意識した加工は特にみられない。

接合資料No16(第62図)

接合資料No16は，２個体の剥片からなる接合である。[2869→3677→3000→3366→3738]は[(3064+3273)]に先行し，尾部から頭部にかけて背面方向から順次折断されている。[(3064+3273)]は中央部付近で破断している。

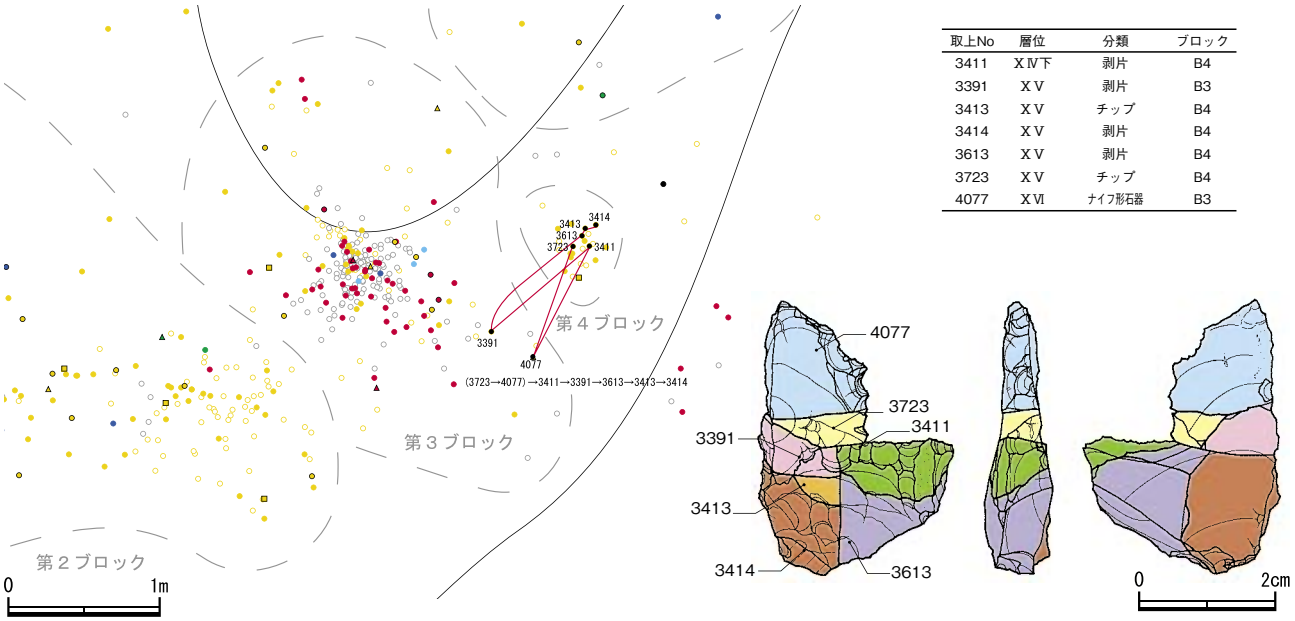
接合資料No17(第63図)

接合資料No17は，剥片素材の主剥離面を打面として剥片剥離を行い三稜尖頭器の製作まで至る接合資料である。まず最初に，素材剥片の主剥離面を打面として3160→([3168→3145…3181→3175→3151]+3143)→(3130+3460)を剥離する。



取上No	層位	分類	ブロック
2935	XⅢ下	剥片	B3
3030	XⅣ	三稜尖頭器	B3
3539	XⅤ	剥片	B3
3569	XⅤ	チップ	B3
3570	XⅤ	剥片	B3
3304	XⅤ	ﾌﾞﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	B3

第60図　接合資料No14実測図及び接合状況図



取上No	層位	分類	ブロック
3411	XⅣ下	剥片	B4
3391	XⅤ	剥片	B3
3413	XⅤ	チップ	B4
3414	XⅤ	剥片	B4
3613	XⅤ	剥片	B4
3723	XⅤ	チップ	B4
4077	XⅥ	ナイフ形石器	B3

第61図　接合資料No15実測図及び接合状況図

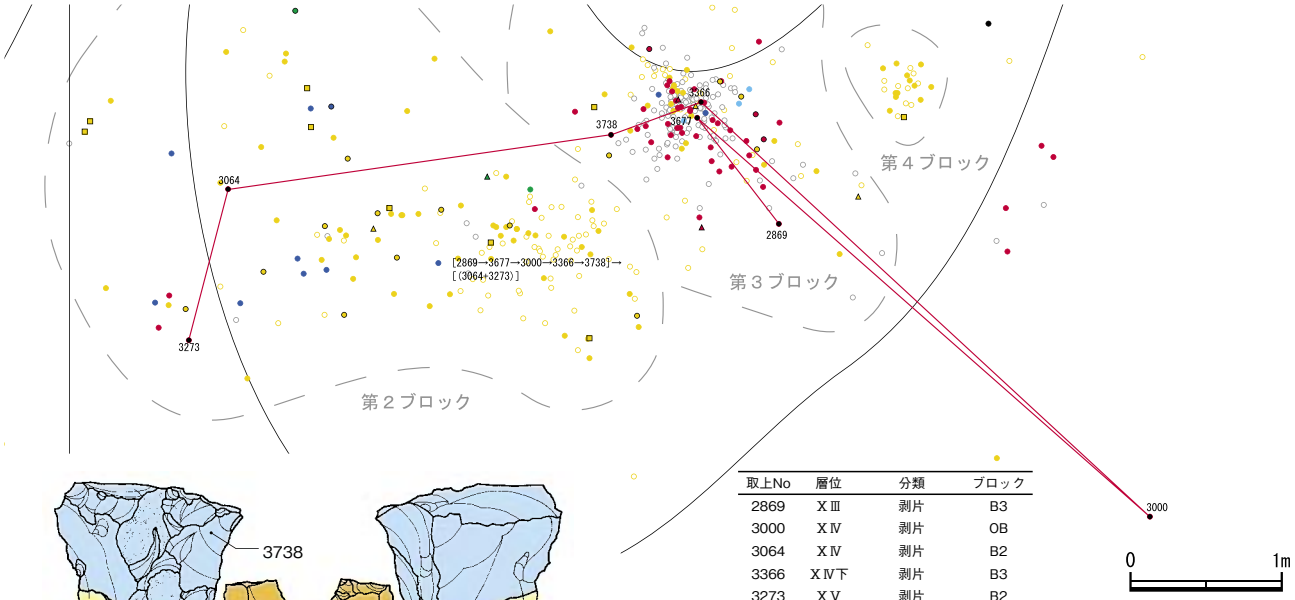
素材は節理を含んでいるが，まずこれらの剥離によって3143,3130が節理面に沿って脱落する。次に，素材剥片を回転して反対側の側縁部に打点を移動し(3082+3443)→3423を剥離する。この剥離によって3443が節理面に沿って脱落し，結果的に剥離に支障をきたす節理は除去される。次の段階では，3130の剥離面から加撃した剥離の剥離面を打面として3081→3459→3424を剥離している。その後素材剥片の腹面側から簡単な整形剥離を施し，最終的に主軸長約70mm,幅約30mmの断面三角形の中間素材を得ている。次の段階以降は，中間素材の形状を整える整形剥離が主体となる。まず，この中間素材の腹面を下にして稜上から3150→3438…3172の順に器幅を減じる整形剥離を施している。その後素材の左側面の平坦部を打面として2946…3450…3419→3632の順に主軸長を減じる調整剥離を行い，3451以降は転回を行いながら整形を行っている。その後，整形対象は加工の最終段階で水平稜上調整に伴う加撃によって破断している。

接合資料No18(第64図)

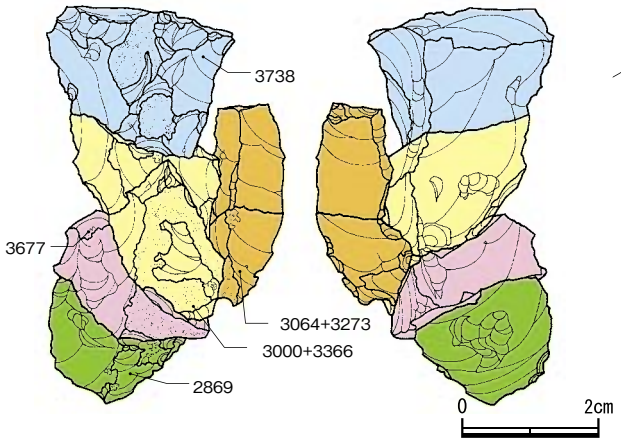
接合資料No18は，背面に自然面をもつ素材剥片の主剥離面を打面として刃部加工を行っている資料の接合例である。素材剥片の打点を残し，主剥離面を上にして左側縁に加工が施されている。

接合資料No19(第65図)

接合資料No19は，間をおくブランティングチップ同士の接合例である。ブランティングチップの底面には自然面が



取上No	層位	分類	ブロック
2869	XⅢ	剥片	B3
3000	XⅣ	剥片	OB
3064	XⅣ	剥片	B2
3366	XⅣ下	剥片	B3
3273	XⅤ	剥片	B2
3677	XⅤ	剥片	B3
3738	XⅥ上	剥片	B3



第62図　接合資料No16実測図及び接合状況図

観察され，調整対象は自然面を残す素材であったことがわかる。

接合資料No20(第66図)

接合資料No20は，素材に自然面をもつ同一打面の剥離の連続するブランティングチップ3101と3105の接合例である。3105は剥離後に左側縁に打面からの剥離が入り，その後打面には器幅を減じる剥離が背面から入る。

接合資料No21(第67図)

接合資料No21は，素材剥片の主剥離面を打面にしてリダクションを行っている。(4781+4778)→(4683+4229)→4218→(4217+5167)までは時計回りに，(4222+4227+4779)…(4223+4416)→4228は反時計回りに回転しながら剥離を行っている。リダクションの最終局面においてもブランティングは行われず，整形に失敗して放棄された資料と考えられる。

接合資料No22(第68図)

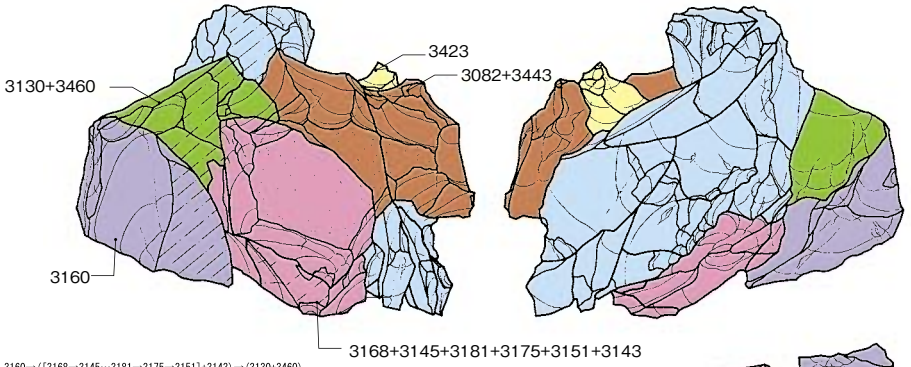
接合資料No22は，剥片素材でそれぞれで剥離が進行している２個体分の接合資料である。それぞれの個体は，素材の剥離時において直接的な前後関係をもち，[4626→5198…3998→(4059+5103)→(4580+5102)→5245→5325→5015]:Aの個体に[5074…4590→5191→4685→5350…3919→4101…4333…4577…3946…5036…5013→5003→4089…(5321+5201)…5302…4628]:Bの個体が後続する。ともに，基本的には素材の主剥離面を打面として剥離が進行している。Aは，[4626→5198],[3998→(4059+5103)]で素材剥片の頭部を上にして左から右へ，[5325→5015]で同じく右から左へ打点を移動しながら剥離を行っている。Bの個体は多くの剥片が接合し，剥片の間に残された空隙から間を埋める剥離は１枚ないし２枚と推定されることから，接合関係と背面に残された剥離痕の観察より，[3919→4101…4333…4577…3946…5036],[5074→4590→5191→4685→5350…5013→5003→4089…(5321+5201)],[5302…4628]の関係を見出せる。また，断面の切り合いは5321が4628を切り，3946と5036が5321を切り，さらに3946は4089と5013を切っていることから，少なくとも[3946…5036]より[4089…(5321+5201)]が新しく，[4089…(5321+5201)]より[5302…4628]が新しく，3946より5013が新しいことがわかる。つまり，この中では3946が最も古い剥離であり，3946が剥離されるまでは5036,5013以降は剥離され得ない。従って，3946に先行しうる剥離の遷移は[3919→4101…4333…4577]と[5074→4590→5191→4685→5350]に限定される。3919と5074の前後関係については，この資料からは判断できない。なお，これらの剥片の接合によって囲まれる素材剥片中央部の空隙は断面三角形を呈しており，この空隙から推定される剥離対象のサイズは第11ブロックなどで出土している三稜尖頭器のサイズとほぼ一致する。三稜尖頭器との直接的な接合はないものの，母岩レベルでは同一の個体資料が存在し，三稜尖頭器の製作に関連する接合資料である可能性が極めて高い。

接合資料No23(第69図)

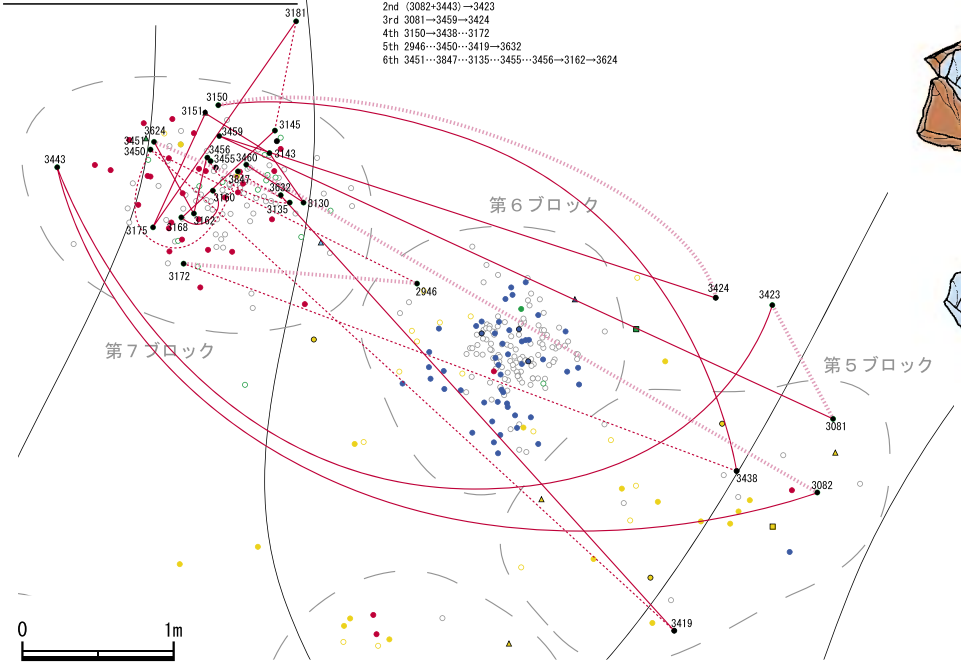
接合資料No23は，背面に礫面をもつ比較的薄い剥片を素材とし，素材の剥離面と節理面を打面として剥離を行っている。資料の下端部には，調整剥片と未製品の接合が観察される。(3983→4193,4706…4390は実測終了後接合した)

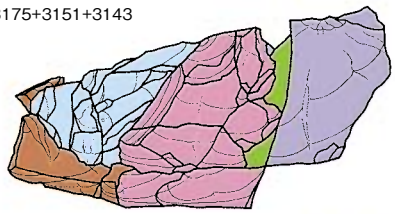
切り合い関係と打点の遷移，剥片の背面に残された剥離痕の観察から，A:[4674→(4499+4783)→4413…4706,B:[5176→3990…(4278+3932)…4514…4510],C:[4113…4375→(4670+4382)…4800],D:[4390…3989→4472→4284→3983→4193]の関係が抽出される。断面の切り合いは4375,4670を5176が切り，さら

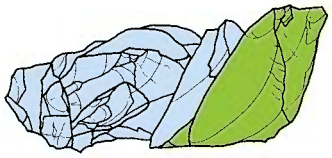
取上No	層位	分類	ブロック
2946	XⅣ上	チップ	B6
3081	XⅣ上	剥片	B5
3082	XⅣ下	剥片	B5
3130	XⅣ	剥片	B7
3135	XⅣ	剥片	B7
3143	XⅣ	剥片	B7
3145	XⅣ	剥片	B7
3150	XⅣ	剥片	B7
3160	XⅣ	剥片	B7
3162	XⅣ	チップ	B7
3168	XⅣ	チップ	B7
3172	XⅣ上	剥片	B7
3175	XⅣ	チップ	B7
3181	XⅣ下	チップ	OB
3423	XⅣ	剥片	OB
3443	XⅣ	剥片	B7



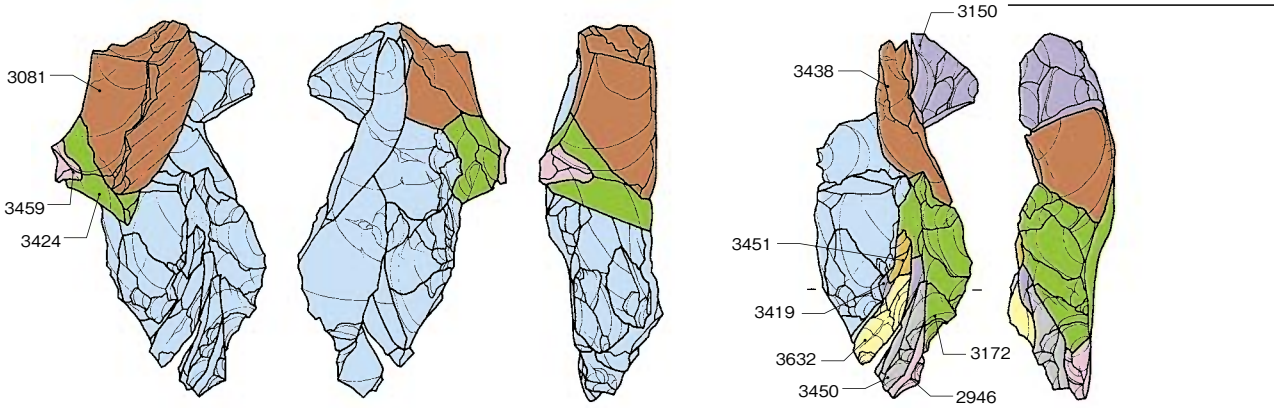
1st 3160→([3168→3145…3181→3175→3151]+3143)→(3130+3460)
2nd (3082+3443)→3423
3rd 3081→3459→3424
4th 3150→3438…3172
5th 2946…3450…3419→3632
6th 3451…3847…3135…3455…3456→3162→3624







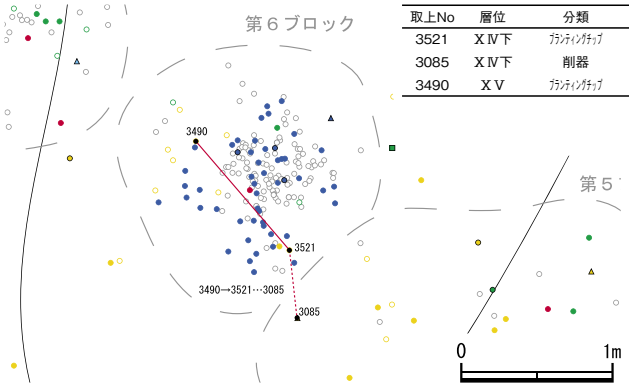
取上No	層位	分類	ブロック
3455	XⅣ下	剥片	B7
3460	XⅣ下	チップ	B7
3632	XⅣ下	剥片	B7
3151	XⅣ	三稜尖頭器	B7
3450	XⅤ	剥片	B7
3451	XⅤ	チップ	B7
3456	XⅤ	剥片	B7
3459	XⅤ	チップ	B7
3419	XⅤ	調整剥片	B5
3424	XⅤ	調整剥片	OB
3438	XⅤ	調整剥片	B5
3847	XⅥ上	剥片	B7
3624	XⅥ上	三稜尖頭器	B7



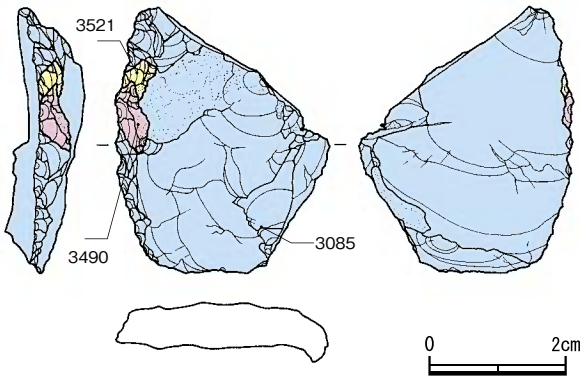




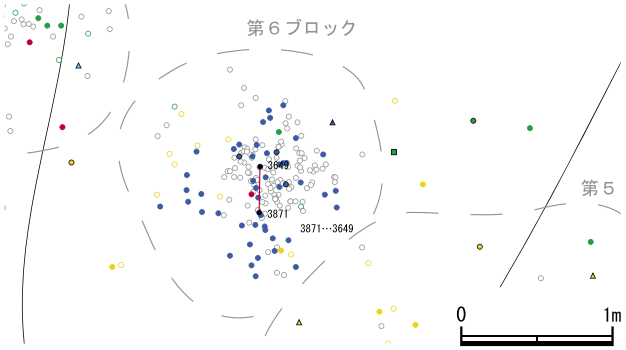
第63図　接合資料No17実測図及び接合状況図

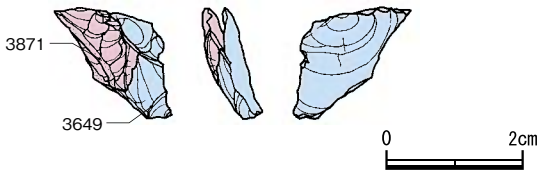


取上No	層位	分類	ブロック
3521	ⅩⅣ下	ﾌﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	B6
3085	ⅩⅣ下	削器	B5
3490	ⅩⅤ	ﾌﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	B6



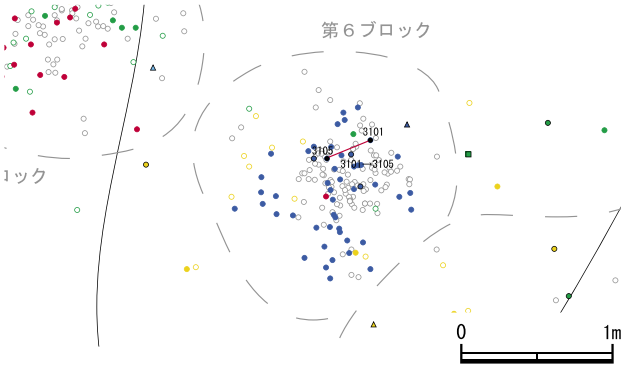
第64図　接合資料No18実測図及び接合状況図

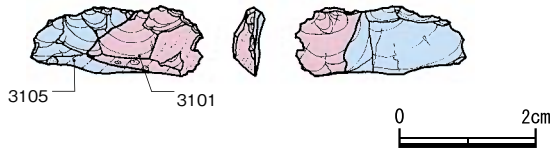




取上No	層位	分類	ブロック
3649	ⅩⅣ下	剥片	B6
3871	ⅩⅤ	剥片	B6

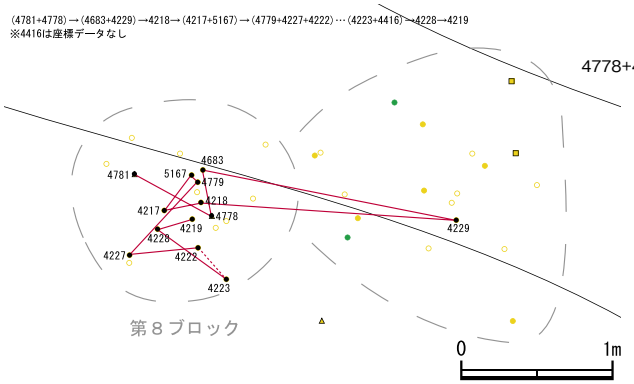
第65図　接合資料No19実測図及び接合状況図

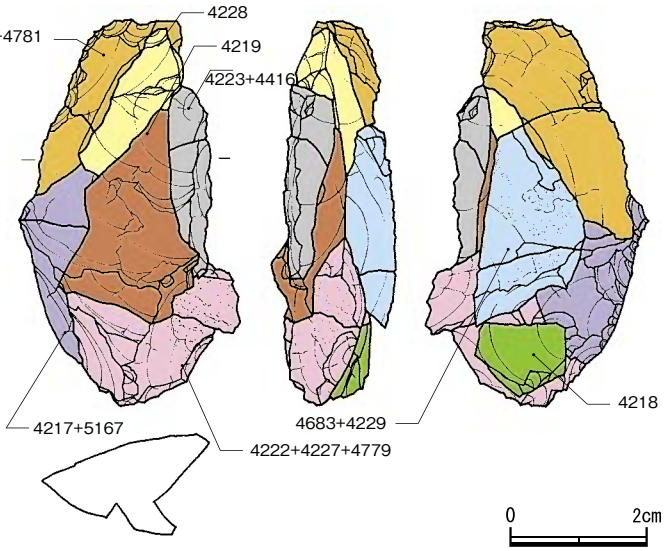




取上No	層位	分類	ブロック
3101	ⅩⅣ	剥片	B6
3105	ⅩⅣ下	剥片	B6

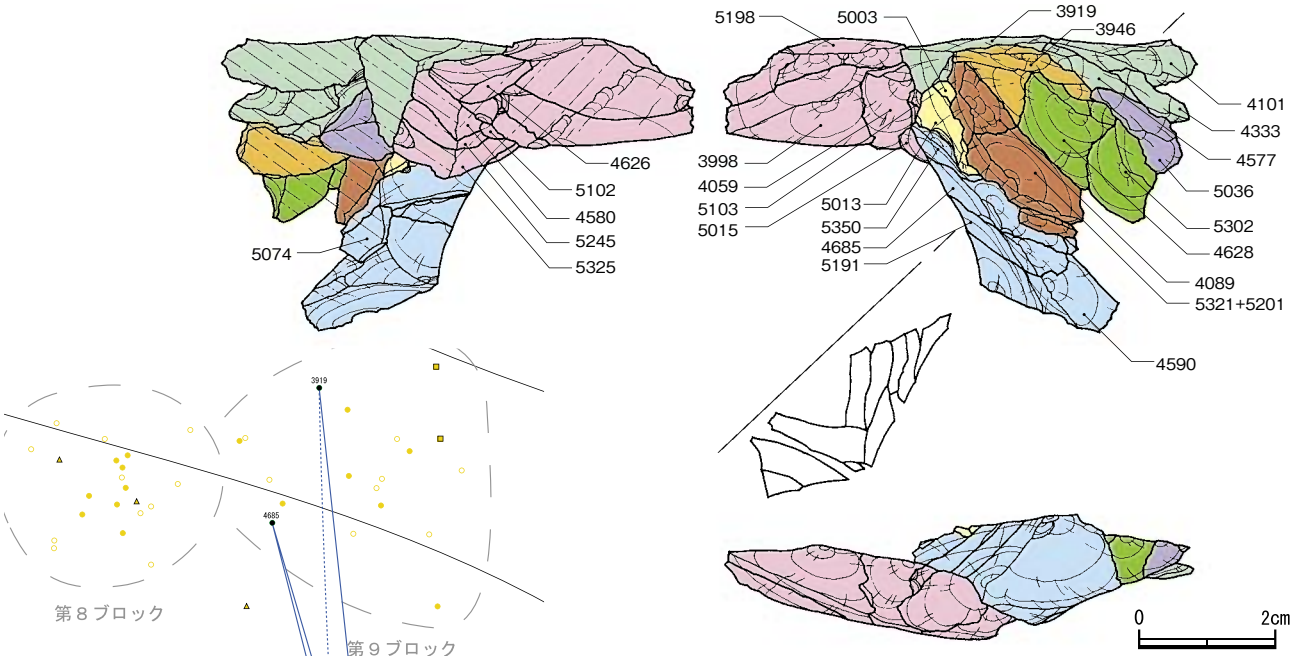
第66図　接合資料No20実測図及び接合状況図



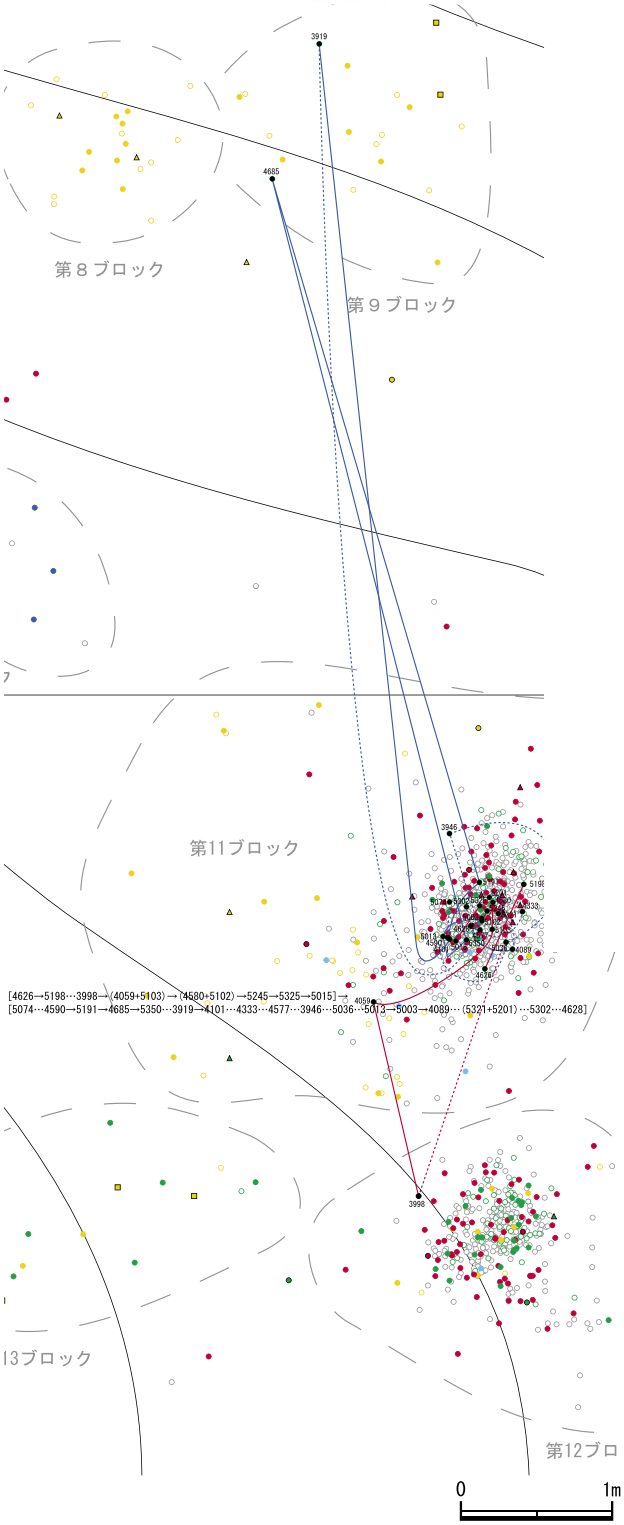


取上No	層位	分類	ブロッ	取上No	層位	分類	ブロック
4416	ⅩⅣ下	剥片	OB	4227	ⅩⅤ	チップ	B8
5167	ⅩⅣ下	剥片	B8	4228	ⅩⅤ	剥片	B8
4217	ⅩⅤ	剥片	B8	4229	ⅩⅤ	剥片	B9
4218	ⅩⅤ	剥片	B8	4683	ⅩⅤ	剥片	B8
4219	ⅩⅤ	剥片	B8	4779	ⅩⅤ	剥片	B8
4222	ⅩⅤ	剥片	B8	4778	ⅩⅤ	二次加工痕剥片	B8
4223	ⅩⅤ	チップ	B8	4781	ⅩⅤ	二次加工痕剥片	B8

第67図　接合資料No21実測図及び接合状況図



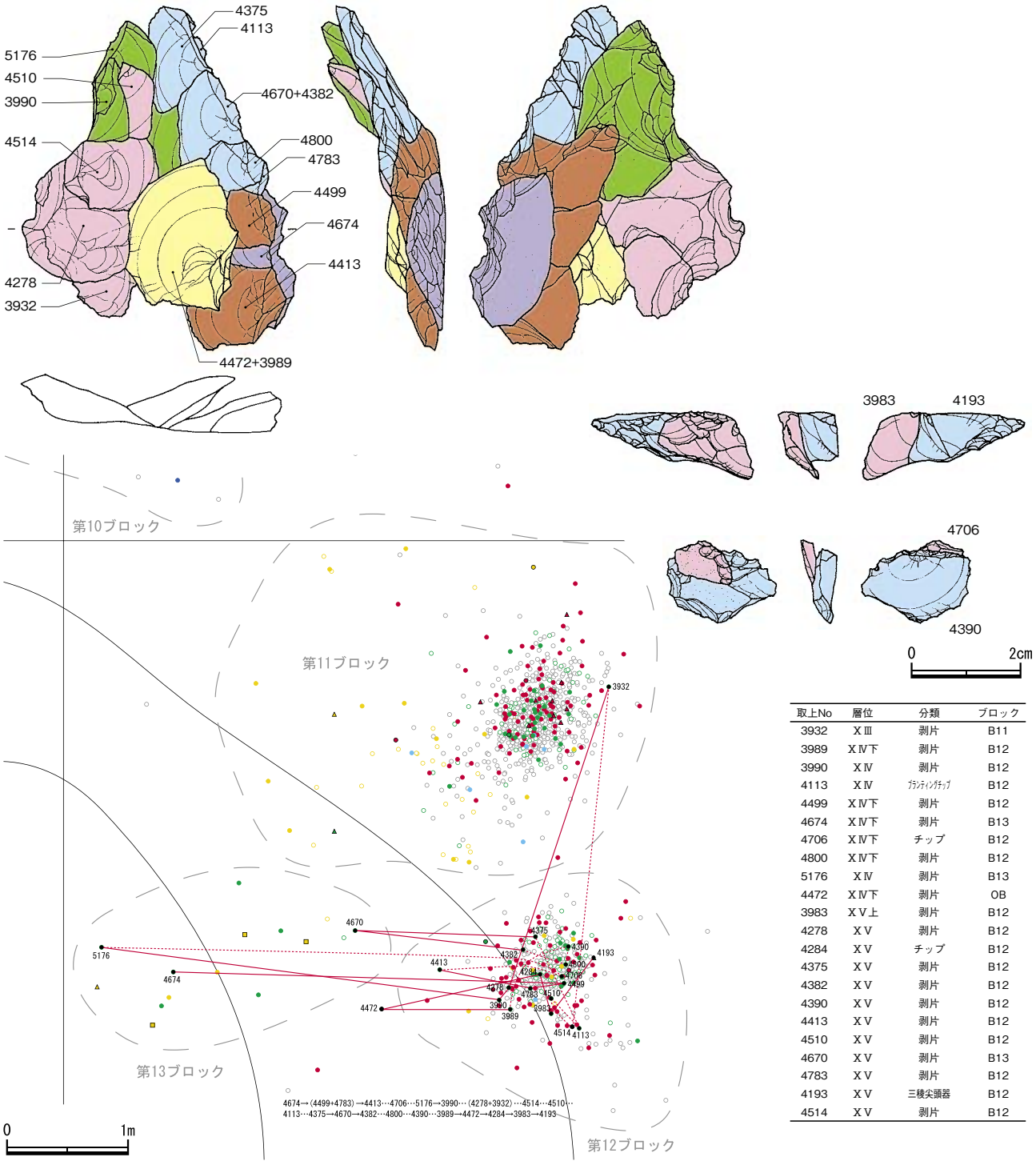
取上No	層位	分類	ブロック	取上No	層位	分類	ブロック
3919	XⅢ上	剥片	B9	5302	XⅣ下	剥片	B11
3946	XⅢ	剥片	B11	3998	XⅣ下	剥片	B12
4059	XⅣ	剥片	B11	4590	XⅣ下	調整剥片	B11
4089	XⅣ	剥片	B11	4628	XⅣ下	ﾌﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	B11
4101	XⅣ上	剥片	B11	4333	XⅤ	剥片	B11
4577	XⅣ下	剥片	B11	4626	XⅤ	剥片	B11
4580	XⅣ下	チップ	B11	4685	XⅤ	剥片	B9
5003	XⅣ下	チップ	B11	5013	XⅤ	剥片	B11
5015	XⅣ下	剥片	B11	5036	XⅤ	剥片	B11
5102	XⅣ下	チップ	B11	5074	XⅤ	チップ	B11
5191	XⅣ下	剥片	B11	5103	XⅤ	剥片	B11
5198	XⅣ下	剥片	B11	5321	XⅤ	剥片	B11
5201	XⅣ下	チップ	B11	5325	XⅤ	剥片	B11
5245	XⅣ下	剥片	B11	5350	XⅤ	剥片	B11



第68図　接合資料No22実測図及び接合状況図

に5719が4499を切っている。また，4499が4514を切っている。左側縁の剥離では相互の接合関係から5176が最も古い剥離であり，このことから調整剥離は素材の右側縁に4674から開始され，(4499+4783)…4413…4706を経て左側縁の5176→3990へ展開するものと判断される。ただし，(4499+4783)と4413の関係については，互いに接合面を共有しないため判断できない。

一方，左側縁においては，5176…3990の剥離は打点がやや遠く，(4278+3932)の打面と不連続であることから，B':[4278→4514…4510]は3990の剥離後に素材剥片の背面側から調整剥離を行った後に剥離されていることが分かる。一方，素材の右側縁にはA:[4674→(4499+4783)→4413…4706]と同一の打面からC:[4113…4375→(4670+4382)…4800]が剥離されているが，CとB'は直接の接合関係を有していないため，どちらが先かは判断できない。D:[4390…3989→4472→4284→3983→4193]については，4472が(4278+3932)と4514によって切られており，4472以降は少なくとも4514以降の剥離であることがわかる。4390は4706の，[3989→4472]は4800以前の打面とは不連続であり，これらの剥離の前には少なくとも１回は背面側からの打撃によって剥離が行われ，その剥離面を打面として剥離が行われている。4193は形状から三稜尖頭器の未製品と解釈できる。ただし，三稜尖頭器としての整形剥離は必ずしも素材の腹面から行われているわけではなく，4472以降の



取上No	層位	分類	ブロック
3932	XⅢ	剥片	B11
3989	XⅣ下	剥片	B12
3990	XⅣ	剥片	B12
4113	XⅣ	ﾌﾞﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	B12
4499	XⅣ下	剥片	B12
4674	XⅣ下	剥片	B13
4706	XⅣ下	チップ	B12
4800	XⅣ下	剥片	B12
5176	XⅣ	剥片	B13
4472	XⅣ下	剥片	OB
3983	XⅤ上	剥片	B12
4278	XⅤ	剥片	B12
4284	XⅤ	チップ	B12
4375	XⅤ	剥片	B12
4382	XⅤ	剥片	B12
4390	XⅤ	剥片	B12
4413	XⅤ	剥片	B12
4510	XⅤ	剥片	B12
4670	XⅤ	剥片	B13
4783	XⅤ	剥片	B12
4193	XⅤ	三稜尖頭器	B12
4514	XⅤ	剥片	B12

第69図　接合資料No23実測図及び接合状況図

中間素材を背面側から横広の剥離によって縦断した後，この剥離面と中間素材の腹面を打面として両側縁から加工している。最終的には背面側から腹面側へ向かって破断しており，調整剥離時のアクシデントによって加工が中止され，放棄されたものとみられる。

接合資料No24(第70図)

接合資料No24は，素材剥片の主剥離面を打面として，周縁から整形剥離を加えている。しかし，刃部作出などを意識したブランティング加工は見受けられず，整形剥離のみで加工をやめている。

接合資料No25(第71図)

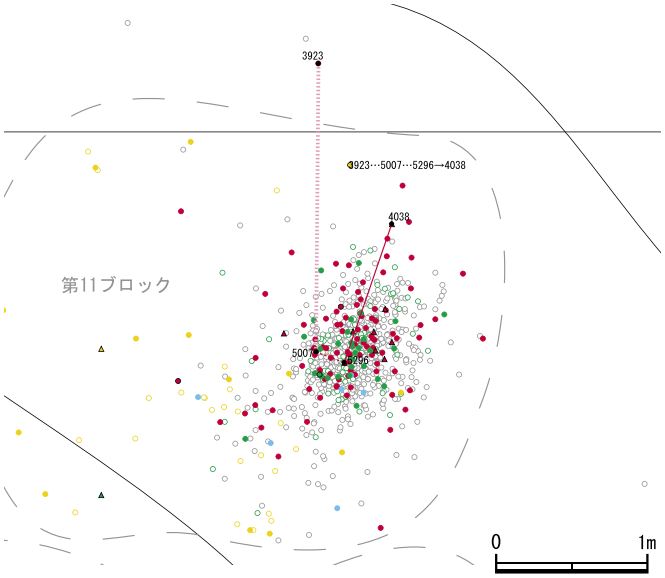
接合資料No25は，調整剥片の接合資料である。4130と4467は打面を共有せず4130の剥離後打面に対して剥離が行われている。

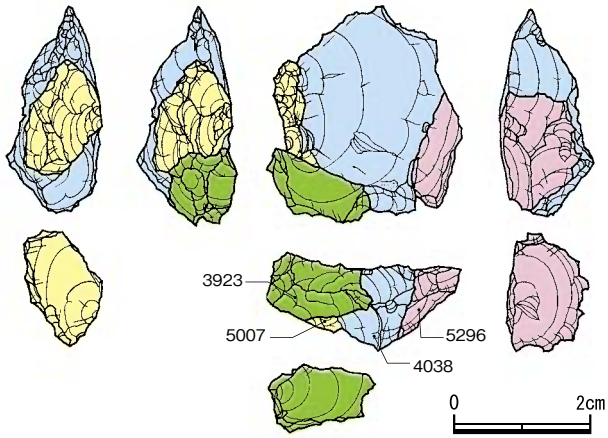
接合資料No26(第72図)

接合資料No26は，調整剥片の接合資料であるが4397と4273は打面を共有せず4397の剥離後に打面方向に調整剥離が入っていることがわかる。

接合資料No27(第73図)

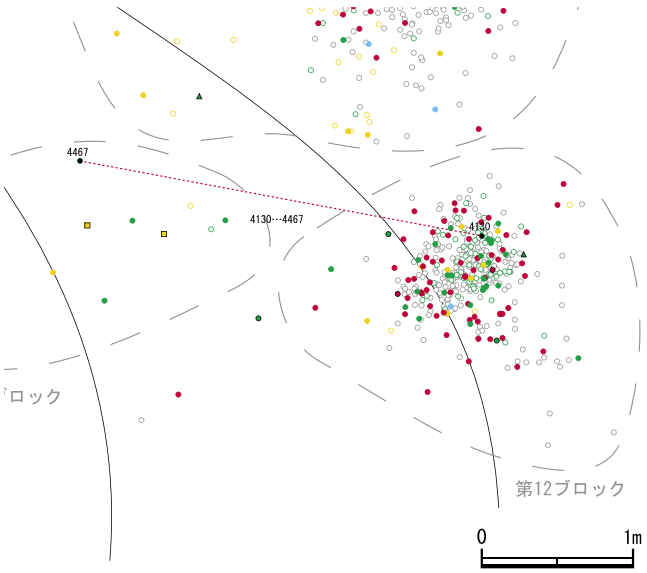
接合資料No27は，素材剥片を横位に使用し，素材の頭部

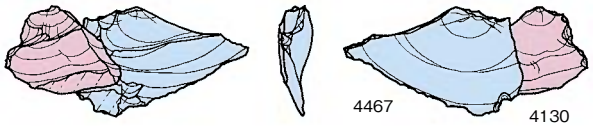




取上No	層位	分類	ブロック
3923	Ⅹ Ⅲ上	剥片	OB
4038	Ⅹ Ⅳ下	三稜尖頭器	B11
5296	Ⅹ Ⅳ下	ブランティングチップ	B11
5007	Ⅹ Ⅴ	剥片	B11

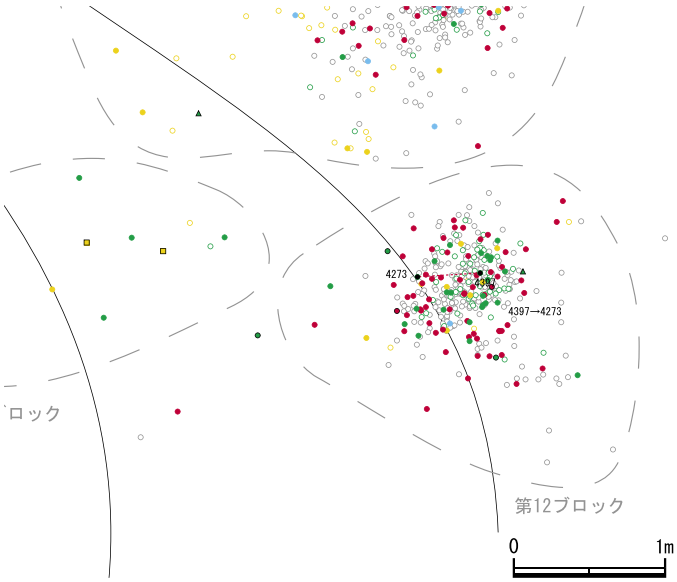
第70図　接合資料No24実測図及び接合状況図





取上No	層位	分類	ブロック
4130	Ⅹ Ⅳ	剥片	B12
4467	Ⅹ Ⅳ下	剥片	B13

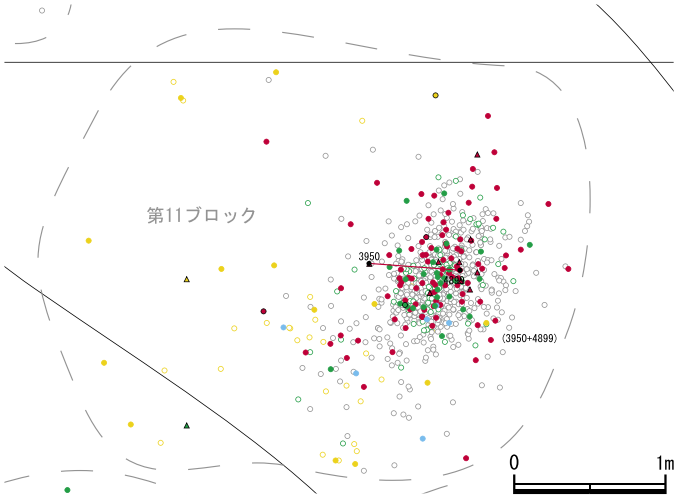
第71図　接合資料No25実測図及び接合状況図

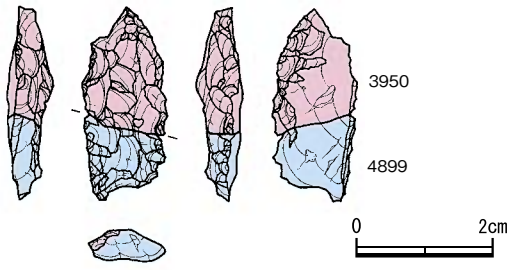




取上No	層位	分類	ブロック
4273	Ⅹ Ⅴ	剥片	B12
4397	Ⅹ Ⅴ	剥片	B12

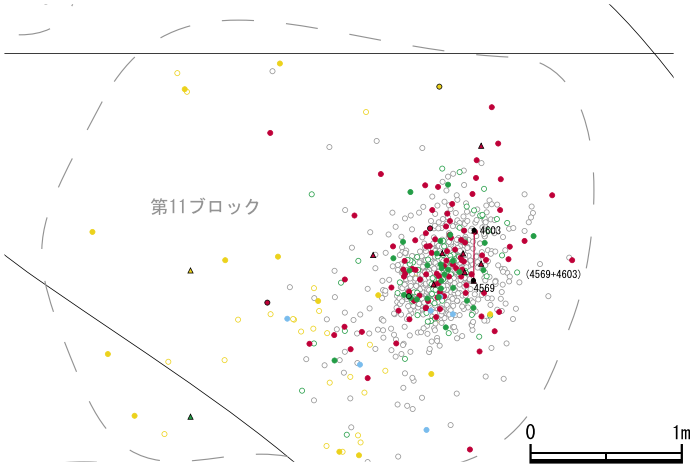
第72図　接合資料No26実測図及び接合状況図

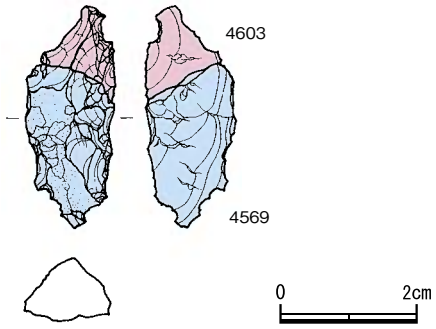




取上No	層位	分類	ブロック
3950	XⅢ上	三稜尖頭器	B11
4899	XⅣ下	剥片	B11

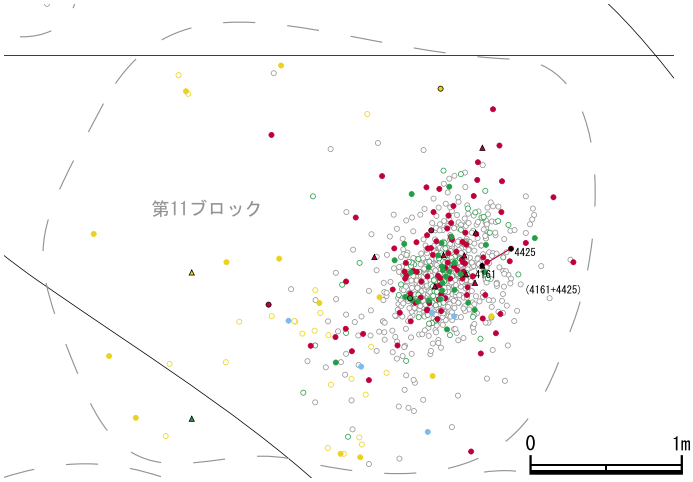
第73図　接合資料No27実測図及び接合状況図

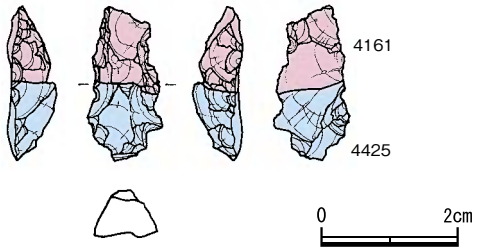




取上No	層位	分類	ブロック
4569	XV	三稜尖頭器	B11
4603	XV	三稜尖頭器	B11

第74図　接合資料No28実測図及び接合状況図





取上No	層位	分類	ブロック
4425	XV	剥片	B11
4161	XV	三稜尖頭器	B11

第75図　接合資料No29実測図及び接合状況図

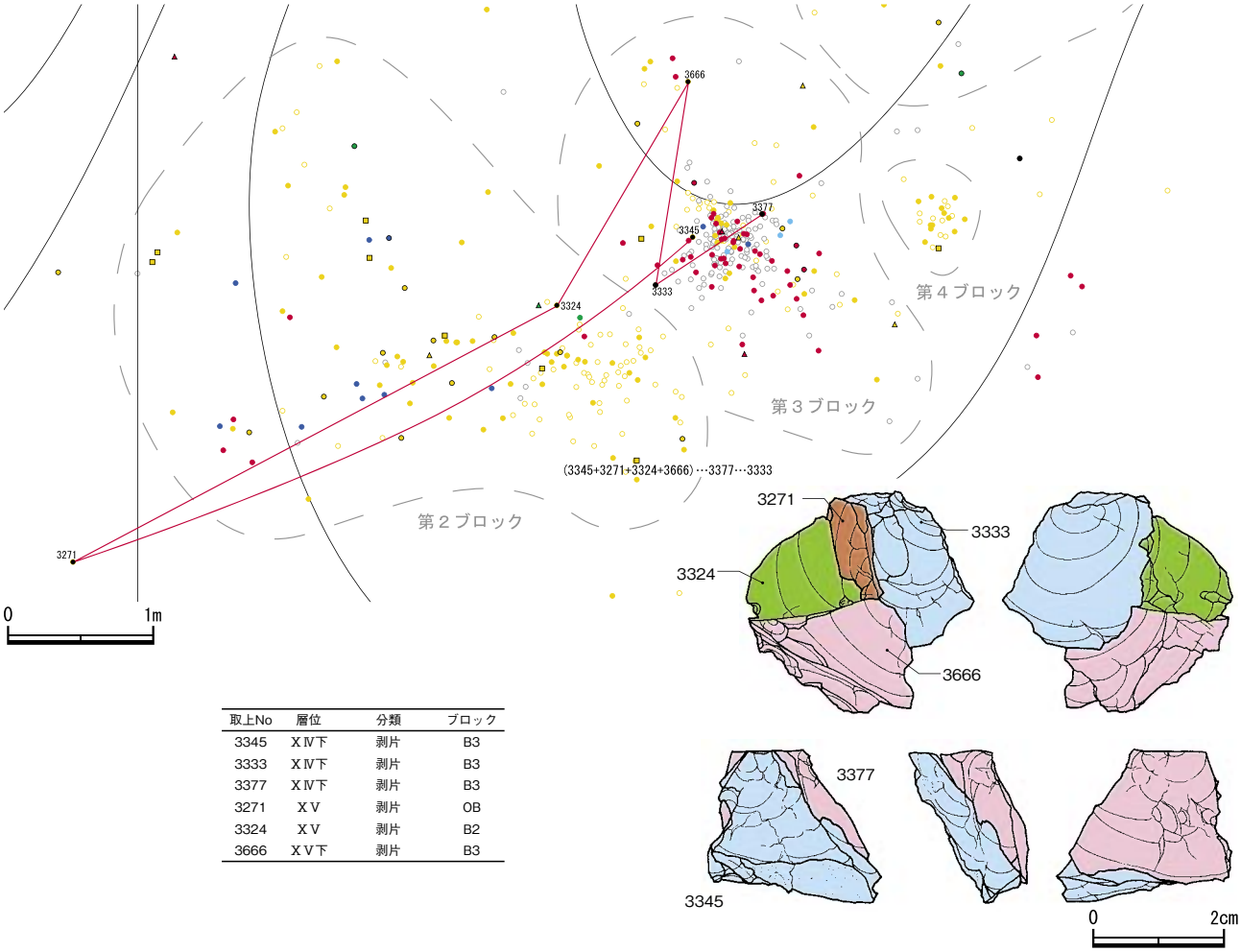
と尾部方向から調整を加えている三稜尖頭器の破断資料である。加工は主に素材の主剥離面を打面として行われているが，腹面側にも背面からの調整剥離が一部観察される。最終的な破断は右側縁の腹面側からの打撃によるものである。

接合資料No28(第74図)

接合資料No28は，横剥ぎの剥片を素材とし，打点側の右側縁を中心に整形剥離を加えている。上下に破断した資料の接合例であり，破断面の観察から，素材の主剥離面を下にして左方向からの水平稜上調整に伴って破断していることがわかる。

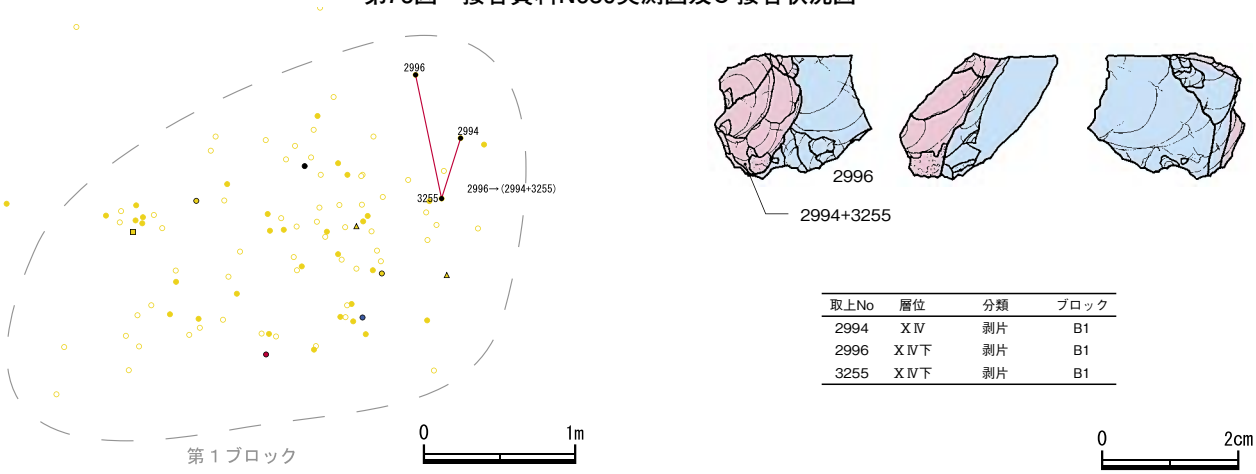
接合資料No29(第75図)

接合資料No29は，素材剥片を横位に使用し，素材剥片の頭部と尾部方向から調整剥離を加えている三稜尖頭器の破断資料である。整形剥離は素材の主剥離面を打面として行われており，破断も主剥離面からの調整剥離に伴うものである。



取上No	層位	分類	ブロック
3345	ⅩⅣ下	剥片	B3
3333	ⅩⅣ下	剥片	B3
3377	ⅩⅣ下	剥片	B3
3271	ⅩⅤ	剥片	OB
3324	ⅩⅤ	剥片	B2
3666	ⅩⅤ下	剥片	B3

第76図　接合資料No30実測図及び接合状況図



取上No	層位	分類	ブロック
2994	ⅩⅣ	剥片	B1
2996	ⅩⅣ下	剥片	B1
3255	ⅩⅣ下	剥片	B1

第77図　接合資料No31実測図及び接合状況図

接合資料No30(第76図)

接合資料No30は，２個体の接合資料，[3345+3377]と[(3271+3324+3666)→3333]が実測作業終了後に接合したものである。相互の接合関係から，平滑な節理面を打面として[3345+3271+3324+3666]→3377を剥離した後，打面を転回して3333を剥離している。[3345+3271+3324+3666]は，剥離時の衝撃によって複雑に破断している。

接合資料No31(第77図)

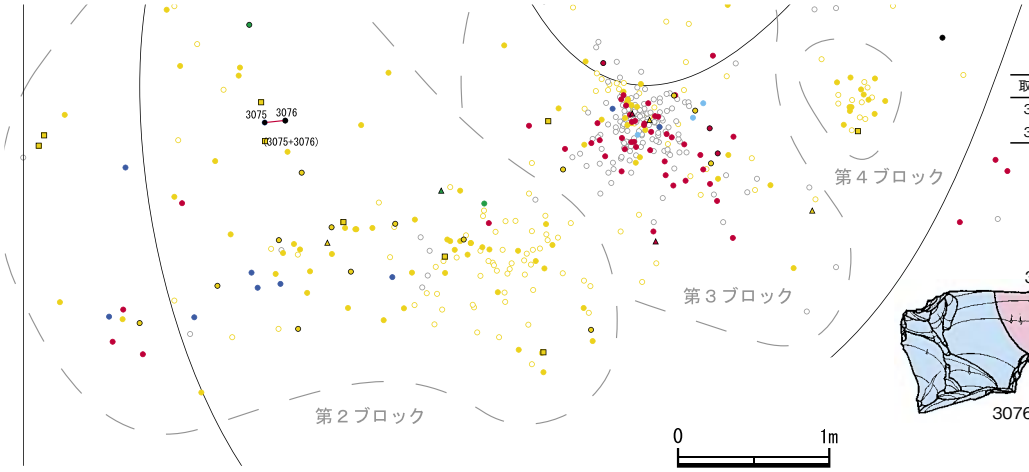
接合資料No31は，平滑な節理面を打面とし，単一の打面から同一方向に連続する剥離の接合例である。2996の剥離後の打面に対して[2994+3255]の剥離が行われている。

接合資料No32(第78図)

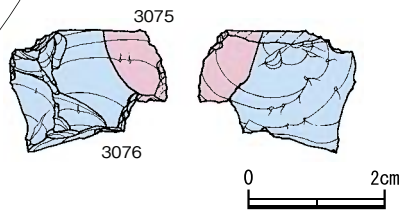
接合資料No32は，折断剥片の接合例である。平滑な自然面を打面に用いた剥片[3075+3076]の背面に圧力を加え3075を折断している。

接合資料No33(第79図)

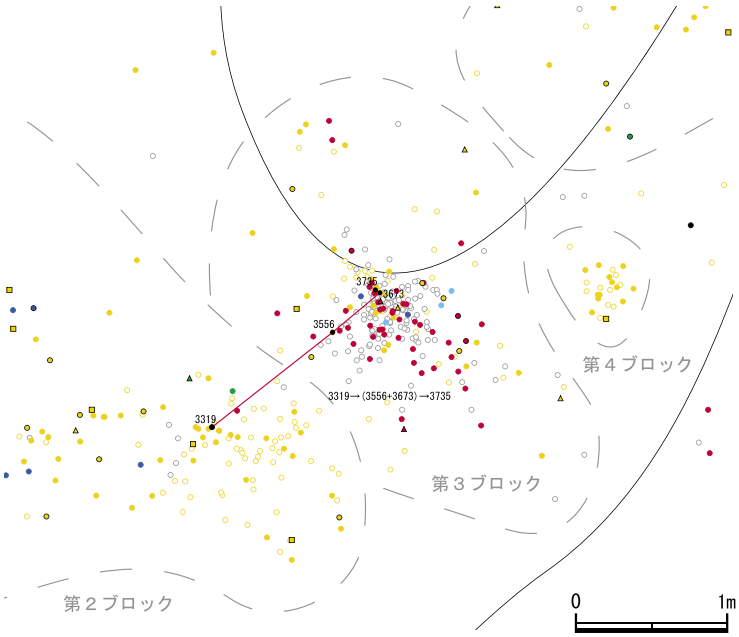
接合資料No33は，平滑な節理面を打面に用い単一の打面から同一方向に連続した剥離を行った剥片の接合例である。

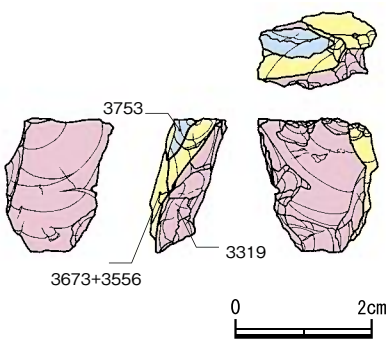


取上No	層位	分類	ブロック
3075	ⅩⅣ	剥片	B2
3076	ⅩⅣ	剥片	B2



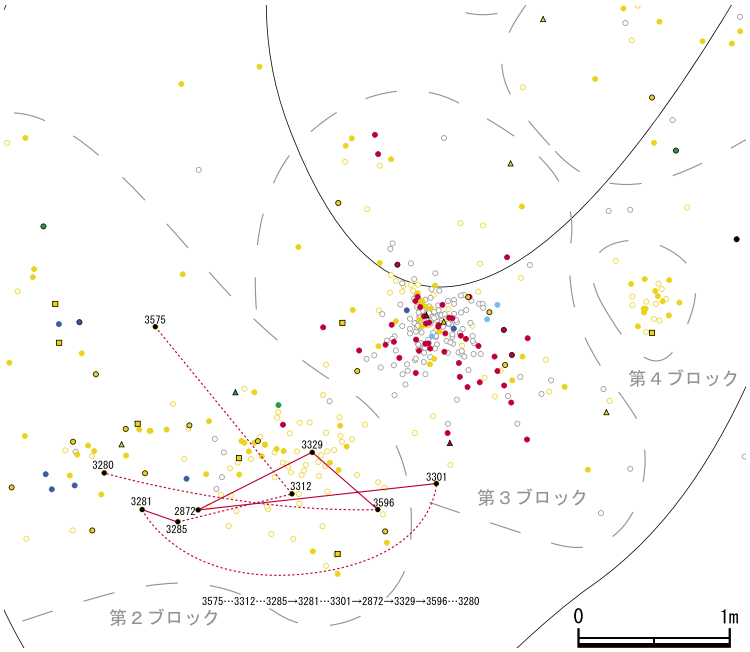
第78図　接合資料No32実測図及び接合状況図

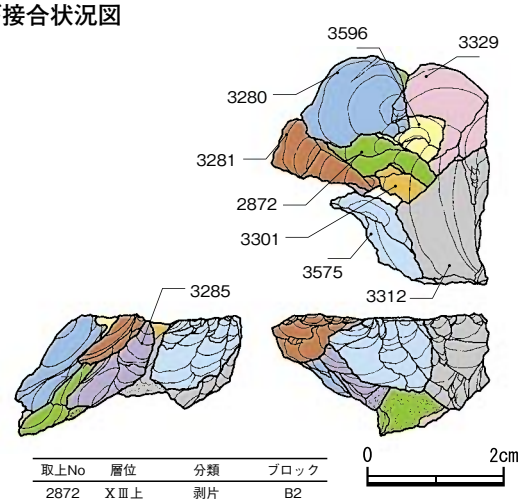




取上No	層位	分類	ブロック
3319	ⅩⅣ下	剥片	B2
3556	ⅩⅤ	剥片	B3
3673	ⅩⅤ	剥片	B3
3735	ⅩⅤ	剥片	B3

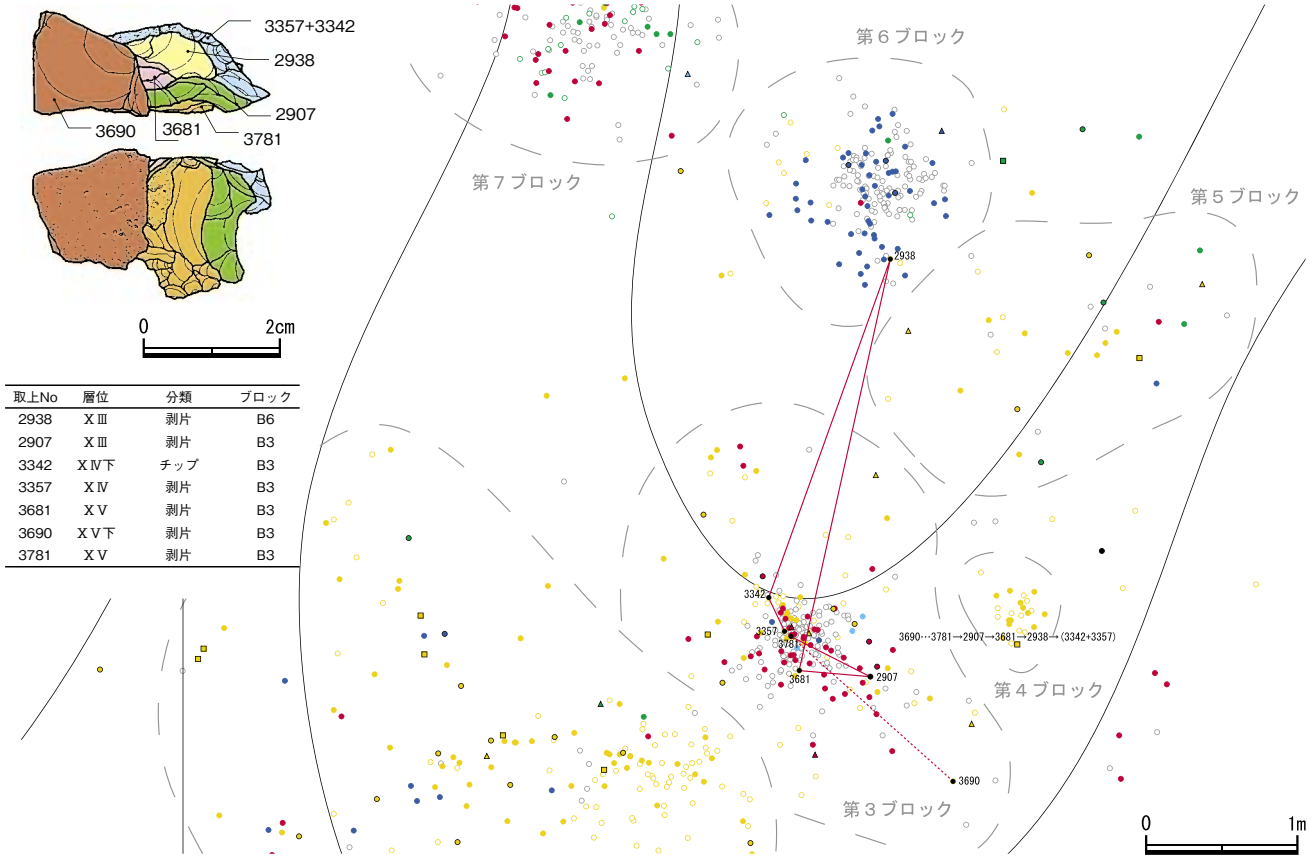
第79図　接合資料No33実測図及び接合状況図





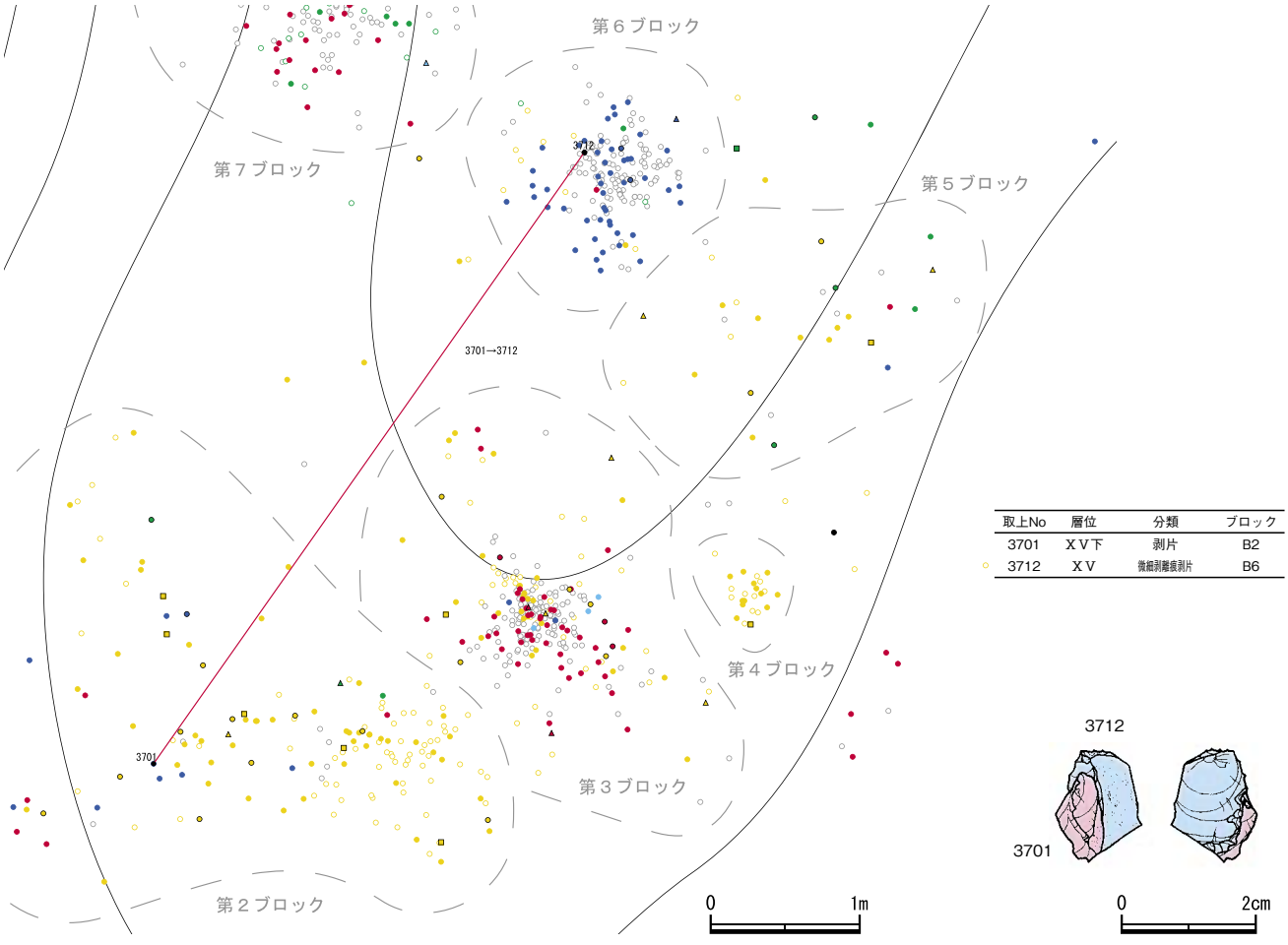
取上No	層位	分類	ブロック
2872	ⅩⅢ上	剥片	B2
3280	ⅩⅣ下	剥片	B2
3281	ⅩⅣ下	剥片	B2
3312	ⅩⅣ下	剥片	B2
3329	ⅩⅣ下	剥片	B2
3575	ⅩⅣ下	剥片	B2
3301	ⅩⅣ下	ﾌﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	B3
3285	ⅩⅤ	剥片	B2
3596	ⅩⅤ	剥片	B2

第80図　接合資料No34実測図及び接合状況図



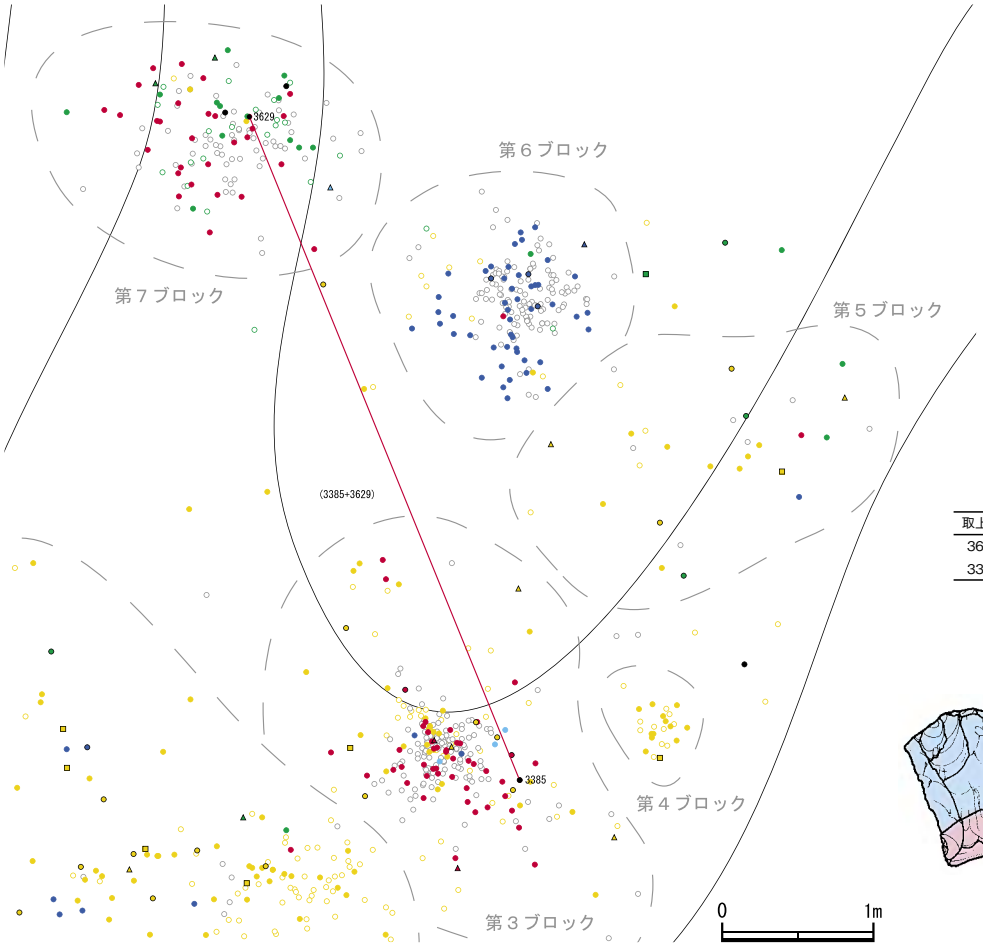
取上No	層位	分類	ブロック
2938	ＸⅢ	剥片	B6
2907	ＸⅢ	剥片	B3
3342	ⅩⅣ下	チップ	B3
3357	ⅩⅣ	剥片	B3
3681	ⅩⅤ	剥片	B3
3690	ⅩⅤ下	剥片	B3
3781	ⅩⅤ	剥片	B3

第81図　接合資料No35実測図及び接合状況図

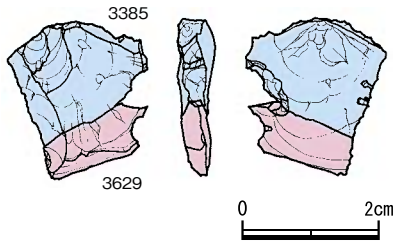


取上No	層位	分類	ブロック
3701	ⅩⅤ下	剥片	B2
3712	ⅩⅤ	微細剥離痕剥片	B6

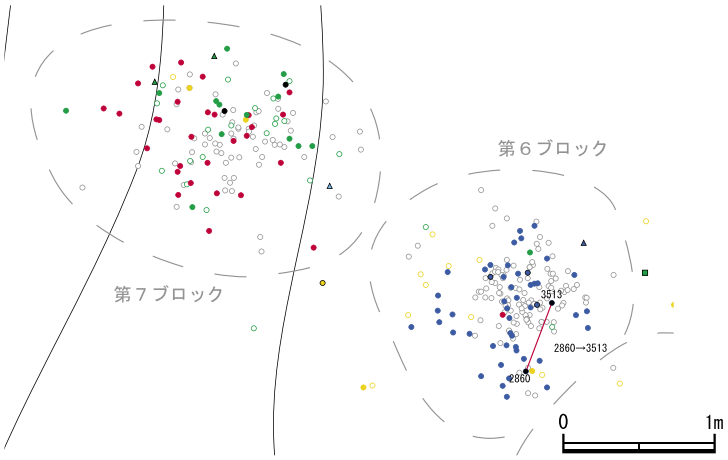
第82図　接合資料No36実測図及び接合状況図



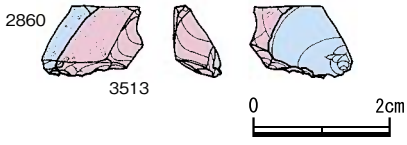
取上No	層位	分類	ブロック
3629	ⅩⅣ下	剥片	B7
3385	ⅩⅤ	剥片	B3



第83図　接合資料No37実測図及び接合状況図



取上No	層位	分類	ブロック
2860	ⅩⅢ	剥片	B6
3513	ⅩⅣ	剥片	B6



第84図　接合資料No38実測図及び接合状況図

接合資料No34(第80図)

接合資料No34は，平滑な節理面を打面として，単一の打面から同一方向に順次剥離を行っている。石核の接合はないが，形状の連続性や石材の特徴からして，数枚の剥離をおいてほぼ間違いなくSSG014に接合する資料である。

接合資料No35(第81図)

接合資料No35は，先行する剥離面を打面として，同一方向から剥離を行っている剥片の接合例である。大きな剥離によって3690を剥離した後，順次3781→2907→3681→2938→(3342+3357)を剥離している。

接合資料No36(第82図)

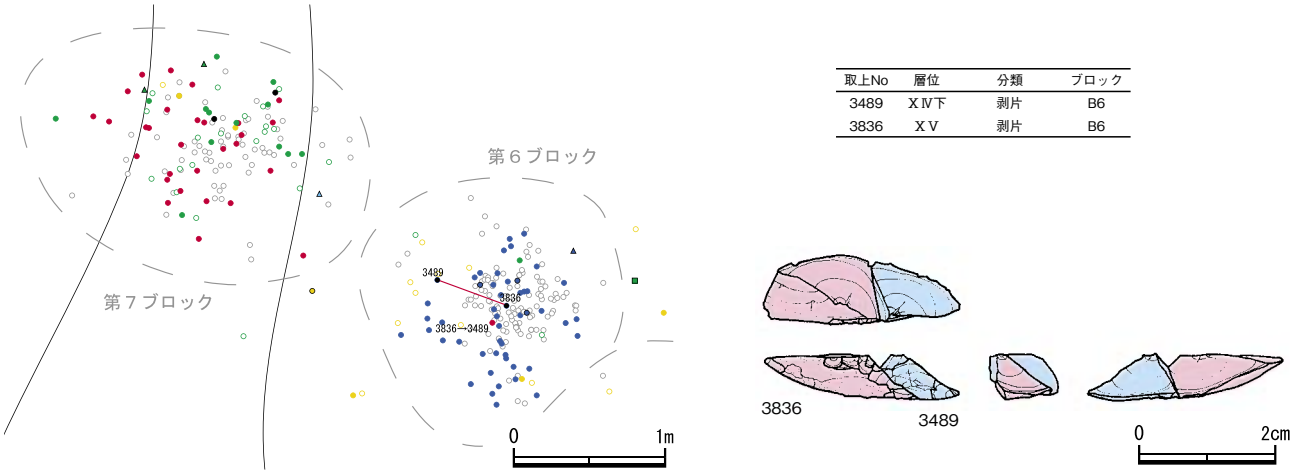
接合資料No36は，背面に自然面をもつ２点のチップ，あるいはブランティングチップの接合例で，3701が先行する。

接合資料No37(第83図)

接合資料Ｎｏ37は，折断剥片の接合例である。剥片[3385+3629]の腹面に圧力を加え3629を折断している。

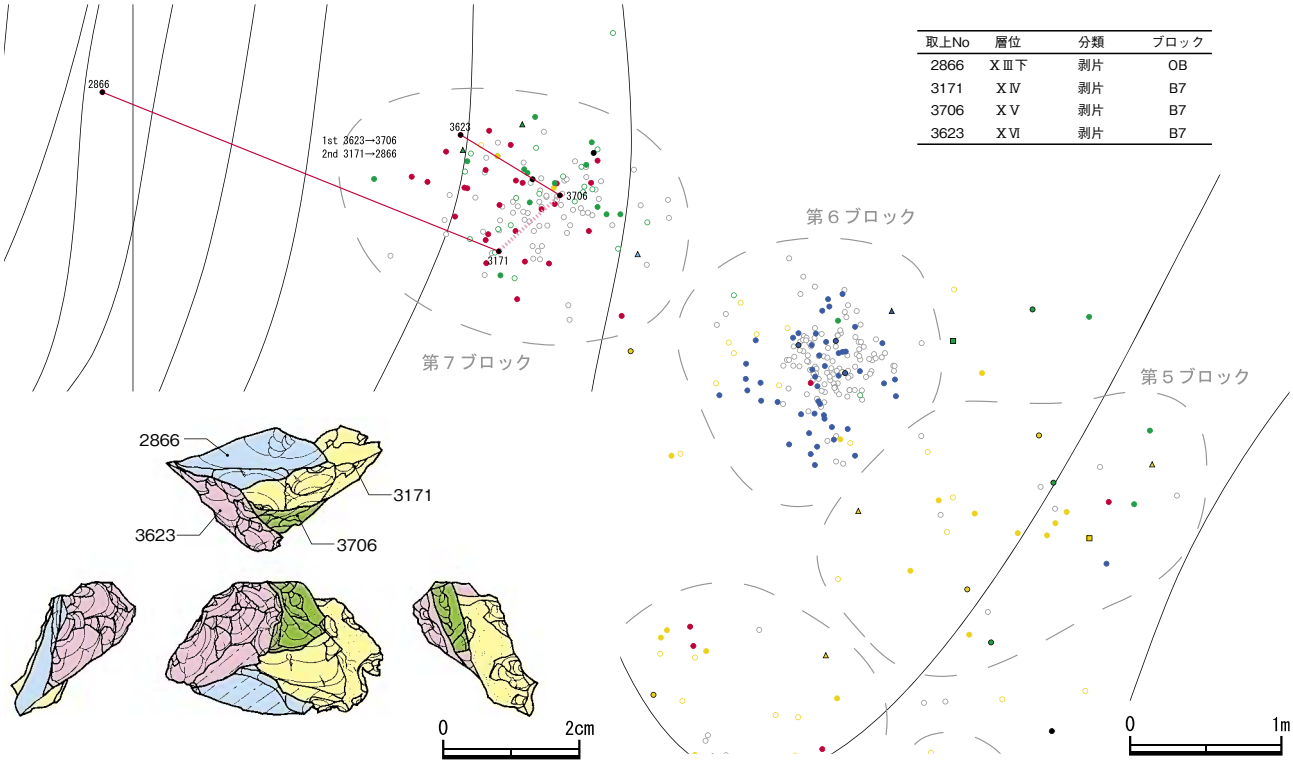
接合資料No38(第84図)

接合資料No38は，基本的には背面に自然面をもつ２点の打面転位を行っているブランティングチップの接合例で，3513が先行し，打面を右回り135°転回し2860を剥離してい



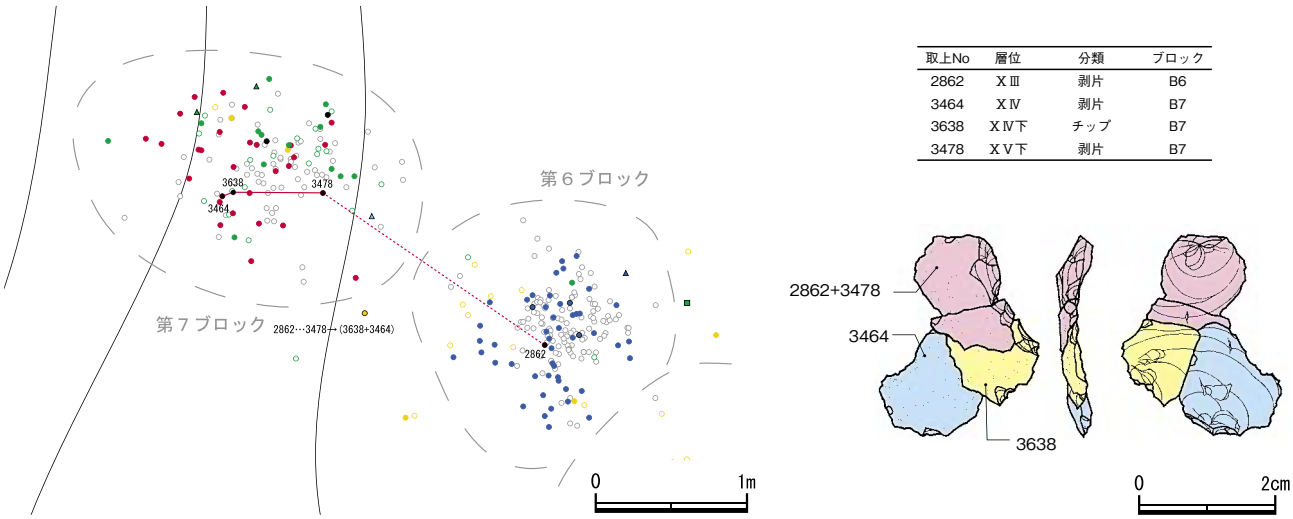
取上No	層位	分類	ブロック
3489	ⅩⅣ下	剥片	B6
3836	ⅩⅤ	剥片	B6

第85図　接合資料No39実測図及び接合状況図



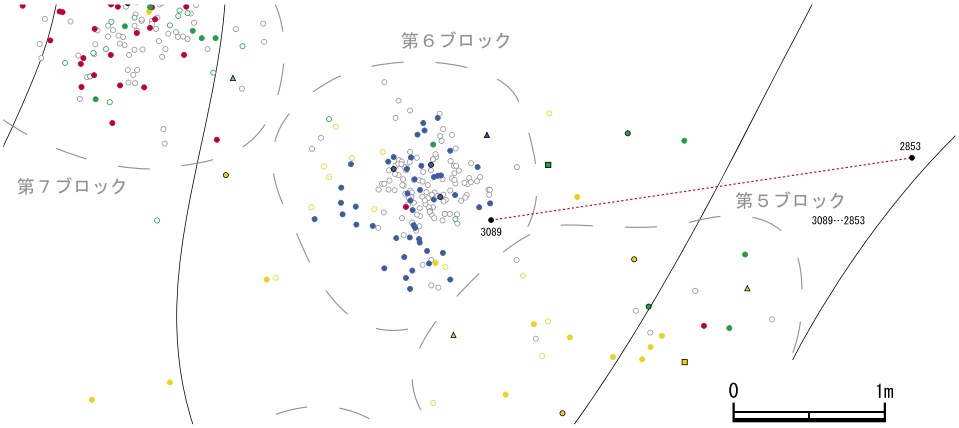
取上No	層位	分類	ブロック
2866	ⅩⅢ下	剥片	OB
3171	ⅩⅣ	剥片	B7
3706	ⅩⅤ	剥片	B7
3623	ⅩⅥ	剥片	B7

第86図　接合資料No40実測図及び接合状況図

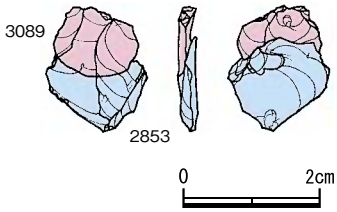


取上No	層位	分類	ブロック
2862	ⅩⅢ	剥片	B6
3464	ⅩⅣ	剥片	B7
3638	ⅩⅣ下	チップ	B7
3478	ⅩⅤ下	剥片	B7

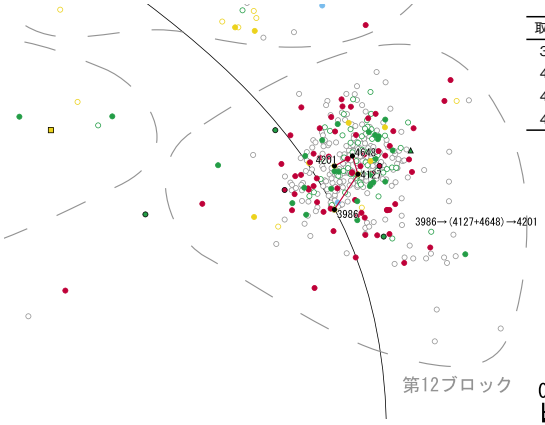
第87図　接合資料No41実測図及び接合状況図



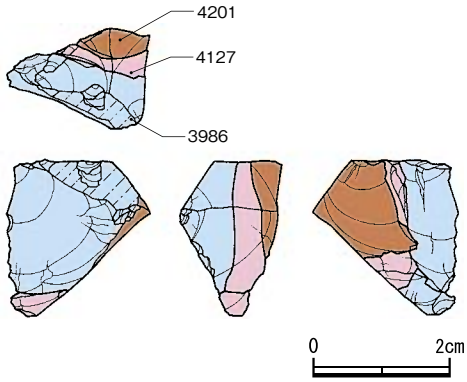
取上No	層位	分類	ブロック
2853	ⅩⅡ	剥片	OB
3089	ⅩⅣ	剥片	B6



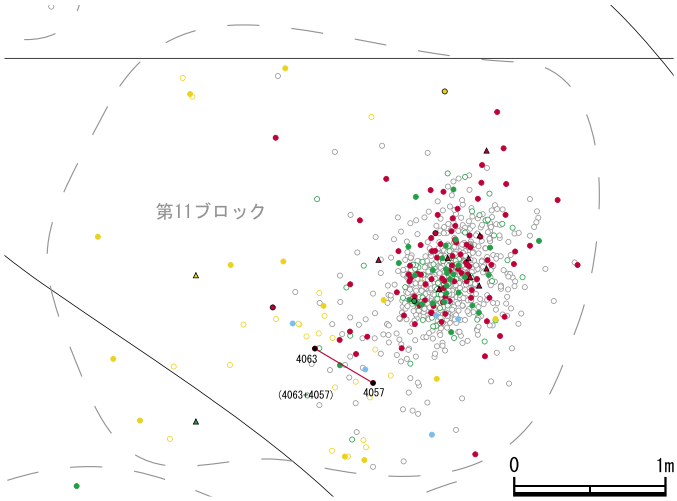
第88図　接合資料No42実測図及び接合状況図



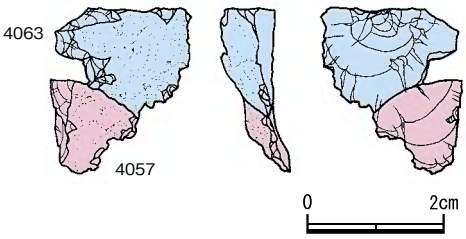
取上No	層位	分類	ブロック
3986	ⅩⅣ	剥片	B12
4127	ⅩⅣ	剥片	B12
4201	ⅩⅣ下	剥片	B12
4648	ⅩⅣ下	チップ	B12



第89図　接合資料No43実測図及び接合状況図



取上No	層位	分類	ブロック
4063	ⅩⅣ	剥片	B11
4057	ⅩⅤ	剥片	B11



第90図　接合資料No44実測図及び接合状況図

る。

接合資料No39(第85図)

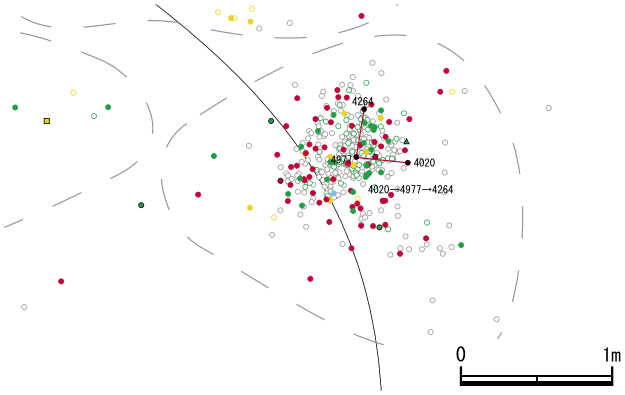
接合資料No39は，背面に自然面をもつ同一の打面から剥離した２点のチップあるいはブランティングチップの接合例で，3836の剥離後に同一方向に調整剥離が行われた後3489が剥離している。

接合資料No40(第86図)

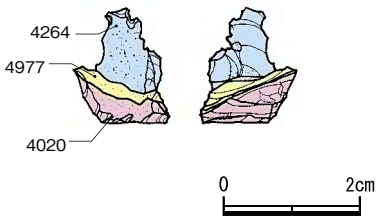
接合資料No40は，石核の接合はないが背面に自然面をもつ剥片同士の接合例である。いずれも先行する剥離面ないし自然面を打面としており，3623→3706を剥離後，打面を転回して3171→2866を剥離している。

接合資料No41(第87図)

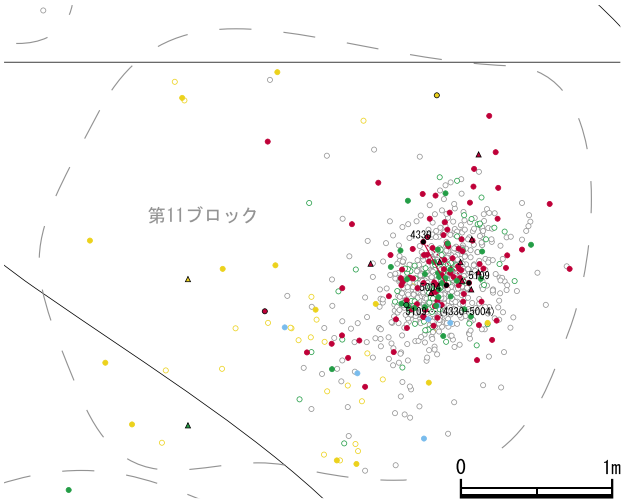
接合資料No41は，背面に自然面をもつ小剥片の接合例である。2862の剥離後素材を転回して異なる方向から3478→(3638+3464)を剥離しており，それぞれの打面の角度からこれらは打面を共有しない可能性が高い。剥離の大きさや形状から，素材剥片を得るための剥離ではなく，何らかの整形剥離によるものである可能性が高い。



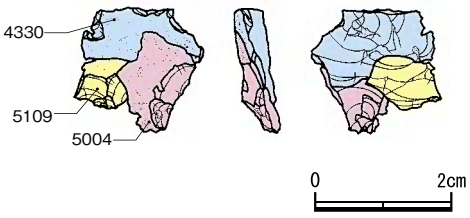
取上No	層位	分類	ブロック
4020	XⅣ	剥片	B12
4977	XⅣ下	剥片	B12
4264	XⅤ	剥片	B12



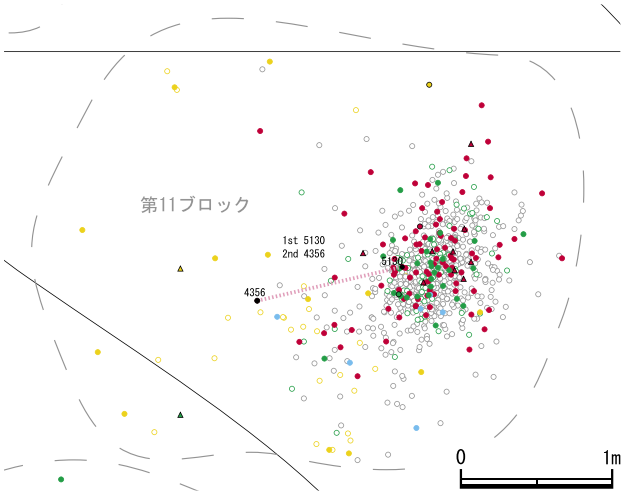
第91図　接合資料No45実測図及び接合状況図



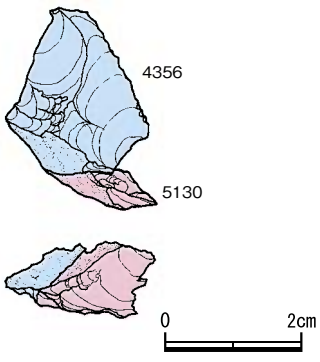
取上No	層位	分類	ブロック
4330	XⅣ下	剥片	B11
5004	XⅣ下	剥片	B11
5109	XⅣ下	剥片	B11



第92図　接合資料No46実測図及び接合状況図



取上No	層位	分類	ブロック
5130	XⅤ	剥片	B11
4356	XⅤ	剥片	B11



第93図　接合資料No47実測図及び接合状況図

接合資料No42(第88図)

接合資料No42は，打面転位を行い剥離した２点の小剥片の接合例である。3089が先行し，2853が相対する打面から剥離していることから石核が両設打面であることがわかる。

接合資料No43(第89図)

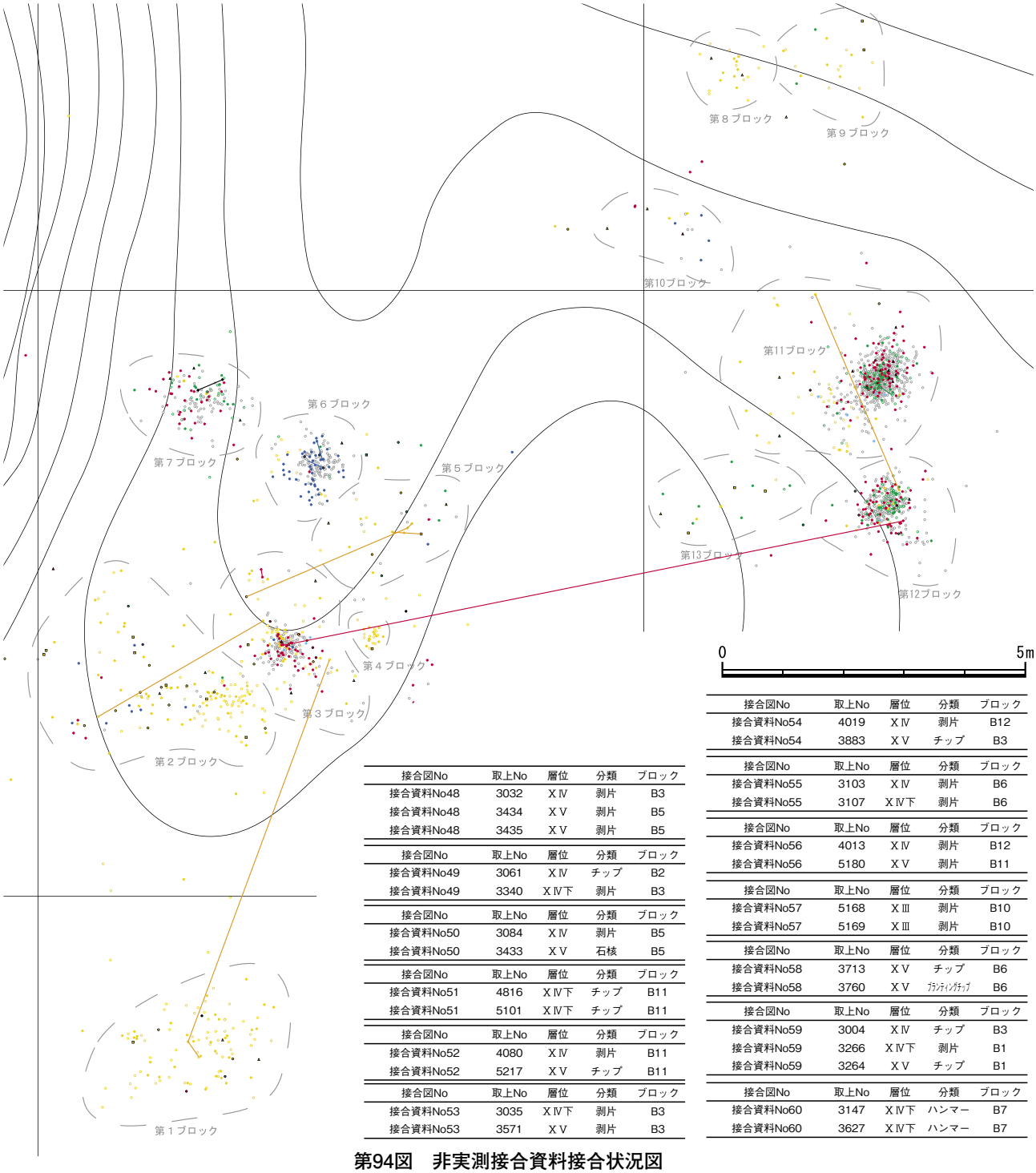
接合資料No43は，平滑な剥離面を打面としてほぼ垂直に連続的な剥離を行っている資料である。剥離痕の主軸長は15mm～20mm前後である。

接合資料No44(第90図)

接合資料No44は，折断剥片の接合例である。平滑な打面を用いた剥片[4063+4057]の背面に圧力を加え4057を折断している。

接合資料No45(第91図)

接合資料No45は，素材に自然面をもち打面転位を行い剥離した３点の小剥片の接合例である。4020→4977が同一の打面から連続して剥離した後，4977を剥離して生じた面を打面に用い4264を剥離している。



接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No48	3032	Ⅸ	剥片	B3
接合資料No48	3434	Ⅹ	剥片	B5
接合資料No48	3435	Ⅹ	剥片	B5

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No49	3061	Ⅸ	チップ	B2
接合資料No49	3340	Ⅸ下	剥片	B3

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No50	3084	Ⅸ	剥片	B5
接合資料No50	3433	Ⅹ	石核	B5

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No51	4816	Ⅸ下	チップ	B11
接合資料No51	5101	Ⅸ下	チップ	B11

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No52	4080	Ⅸ	剥片	B11
接合資料No52	5217	Ⅹ	チップ	B11

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No53	3035	Ⅸ下	剥片	B3
接合資料No53	3571	Ⅹ	剥片	B3

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No54	4019	Ⅸ	剥片	B12
接合資料No54	3883	Ⅹ	チップ	B3

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No55	3103	Ⅸ	剥片	B6
接合資料No55	3107	Ⅸ下	剥片	B6

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No56	4013	Ⅸ	剥片	B12
接合資料No56	5180	Ⅹ	剥片	B11

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No57	5168	Ⅷ	剥片	B10
接合資料No57	5169	Ⅷ	剥片	B10

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No58	3713	Ⅹ	チップ	B6
接合資料No58	3760	Ⅹ	ﾌﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	B6

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No59	3004	Ⅸ	チップ	B3
接合資料No59	3266	Ⅸ下	剥片	B1
接合資料No59	3264	Ⅹ	チップ	B1

接合図No	取上No	層位	分類	ブロック
接合資料No60	3147	Ⅸ下	ハンマー	B7
接合資料No60	3627	Ⅸ下	ハンマー	B7

第94図　非実測接合資料接合状況図

接合資料No46(第92図)

接合資料No46は，背面に自然面をもち打面転位を行い剥離した3点の小剥片の接合例である。5004の剥離後素材を転回して異なる方向から［4330+5109］を剥離しており，それぞれの打面の角度から両設打面の石核からの剥離であることが推定される。剥離の大きさや形状からして，素材剥片を得るための剥離ではなく，何らかの整形剥離によるものである可能性が高い。

接合資料No47(第93図)

接合資料No47は，素材に自然面をもち打面転位を行い剥離した２点の接合例である。平滑な面を打面に用い5130を剥離後素材を転回して異なる方向から4356を剥離している。剥離の大きさや形状から，5130は整形剥離，4356は素材剥片を得るための剥離である可能性が高い。

非実測接合資料No48～No60(第94図)

非実測接合資料No48～No60の13点は，2点のチップどうしの接合や，アクシデントによる破断した剥片同士の接合であったため実測を行わなかった。接合資料No54は，OB2Bのアクシデントによって破断したチップが第1エリアと第2エリア間で唯一エリアを越えて接合したものである。

第Ⅳ章　縄文時代の調査

第１節　調査の方法と概要

縄文時代の調査は10m四方のグリッドを設定し，全面発掘調査を行った。

遺構，遺物は，遺跡の北側と中央部の２か所に分布し，さらに，土器型式別に分布の偏りが認められる。

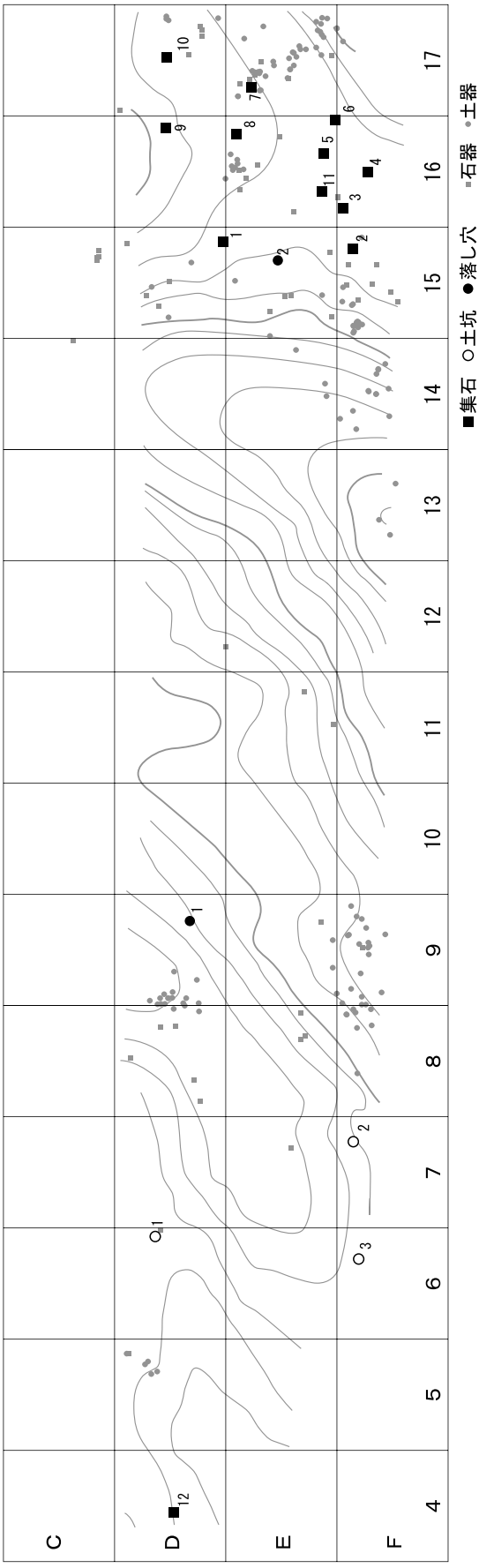
Ⅰ類土器は北側のE,F-15区，Ⅱ類土器は北側のD,E-15,16区と中央部のF-８,９区に，Ⅲ類土器は中央部のD-９区と一部がD-５区に，Ⅳ類土器は北側E,F-14,15区とE-17区に分布する。

遺構，遺物はⅨ層～Ⅲ層で出土し，遺構は，集石，土坑，落し穴状遺構を検出している。

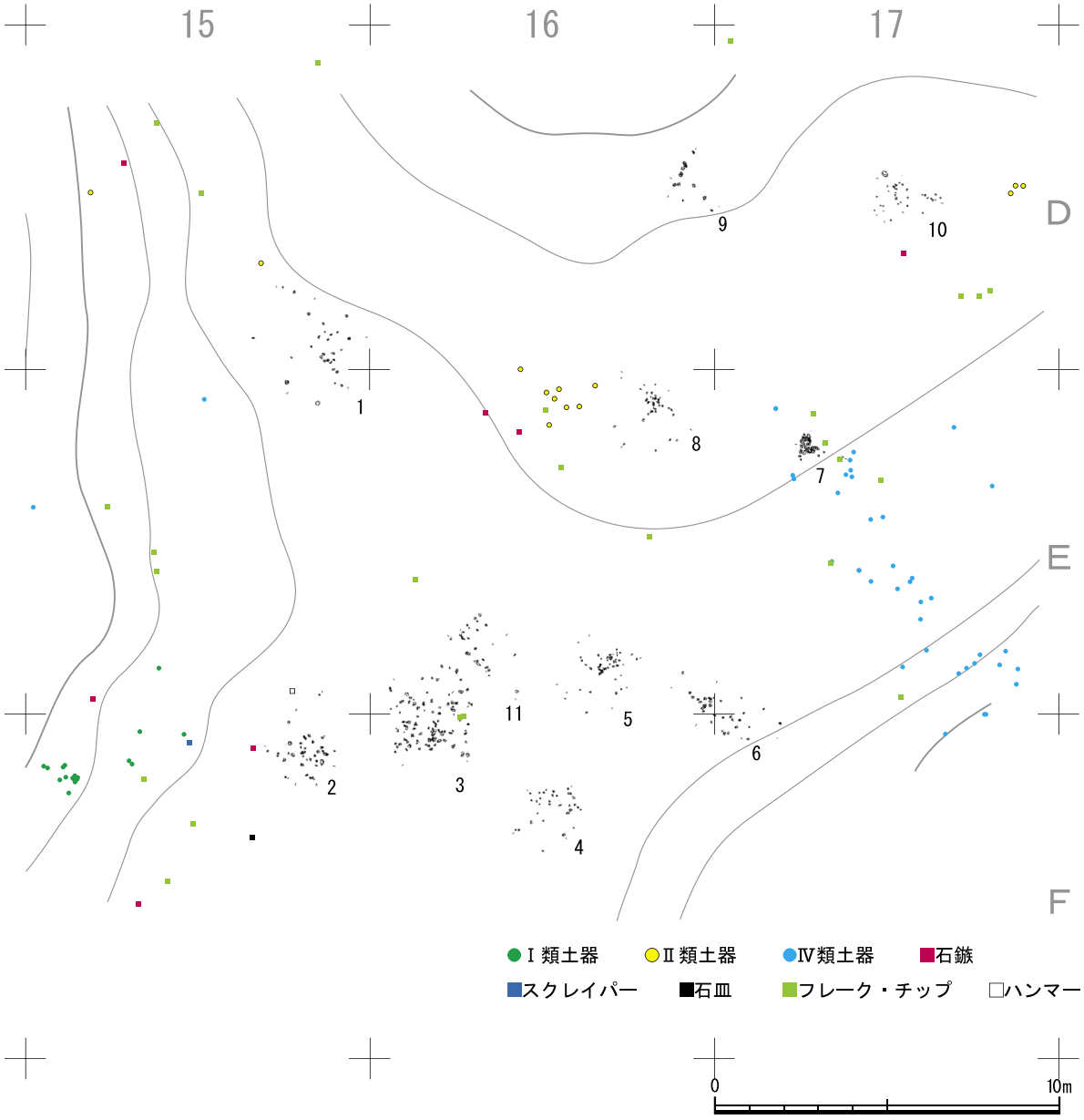
集石遺構は，Ⅶ層で９基，Ⅵa層で３基の12基を検出し，土坑は，Ⅸ層で３基，落し穴状遺構はⅦ層で１基，Ⅴa層で１基となる。

土坑３基は，Ⅱ類，Ⅲ類土器の出土する中央部より南側で検出した。Ⅶ層の集石遺構は，12号集石以外は北側の集中部で検出し，落し穴状遺構は，一基ずつ分散している。

これらの検出状況及び遺構配置は，第95図に示した。



第95図　Ⅶ層～Ⅴ層　遺構位置及び散石検出状況(1/600)



第96図　Ⅶ層　集石位置図

第２節　縄文時代の遺構

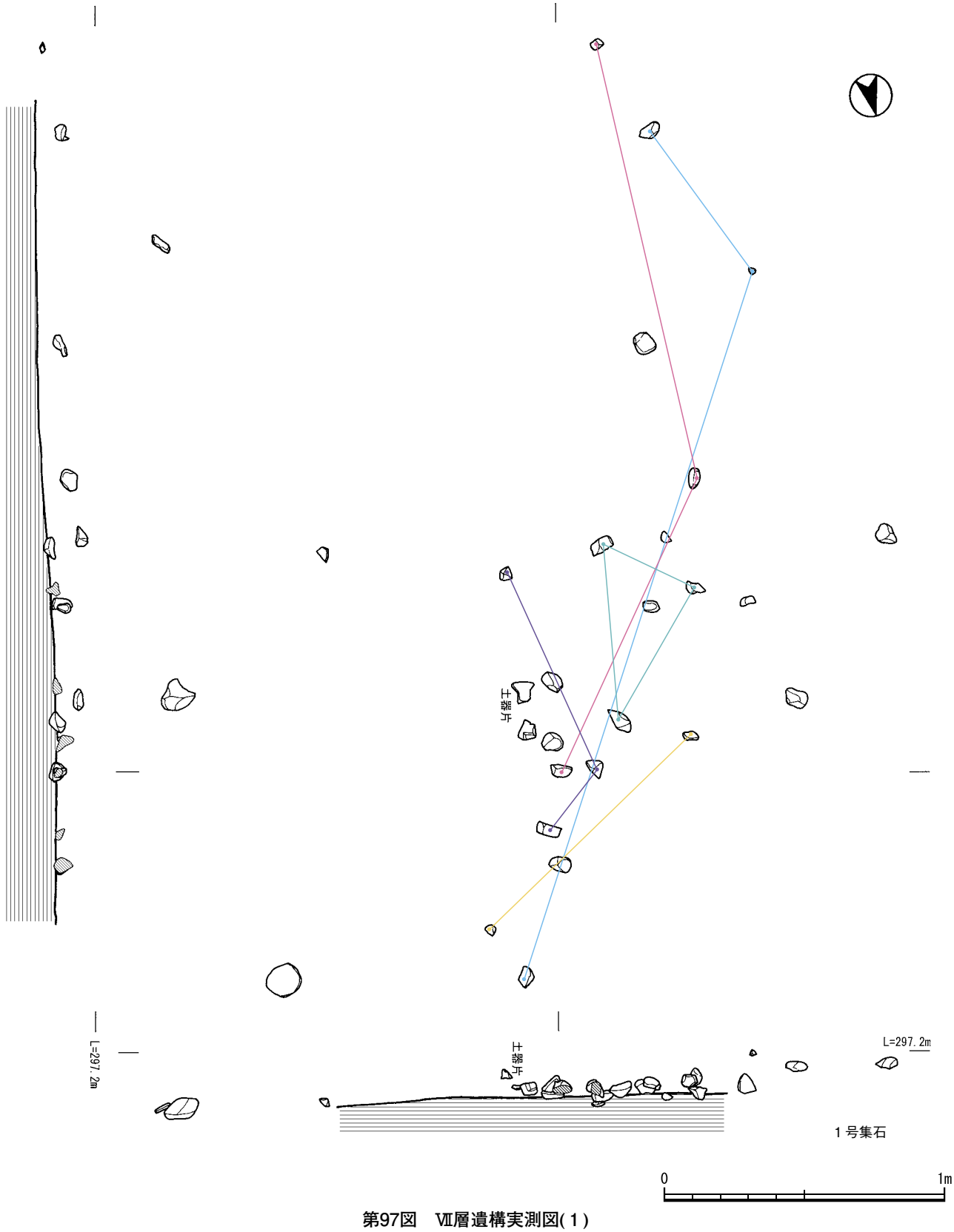
１　集石遺構

12基の集石は，北側集中部(D～F-15～17区)に11基が集中し，D-４区で東西15m，南北12mにまばらに散在する集石１基を検出し，遺物の出土状況から北と中央部の２地点に分かれるものと考えられる。

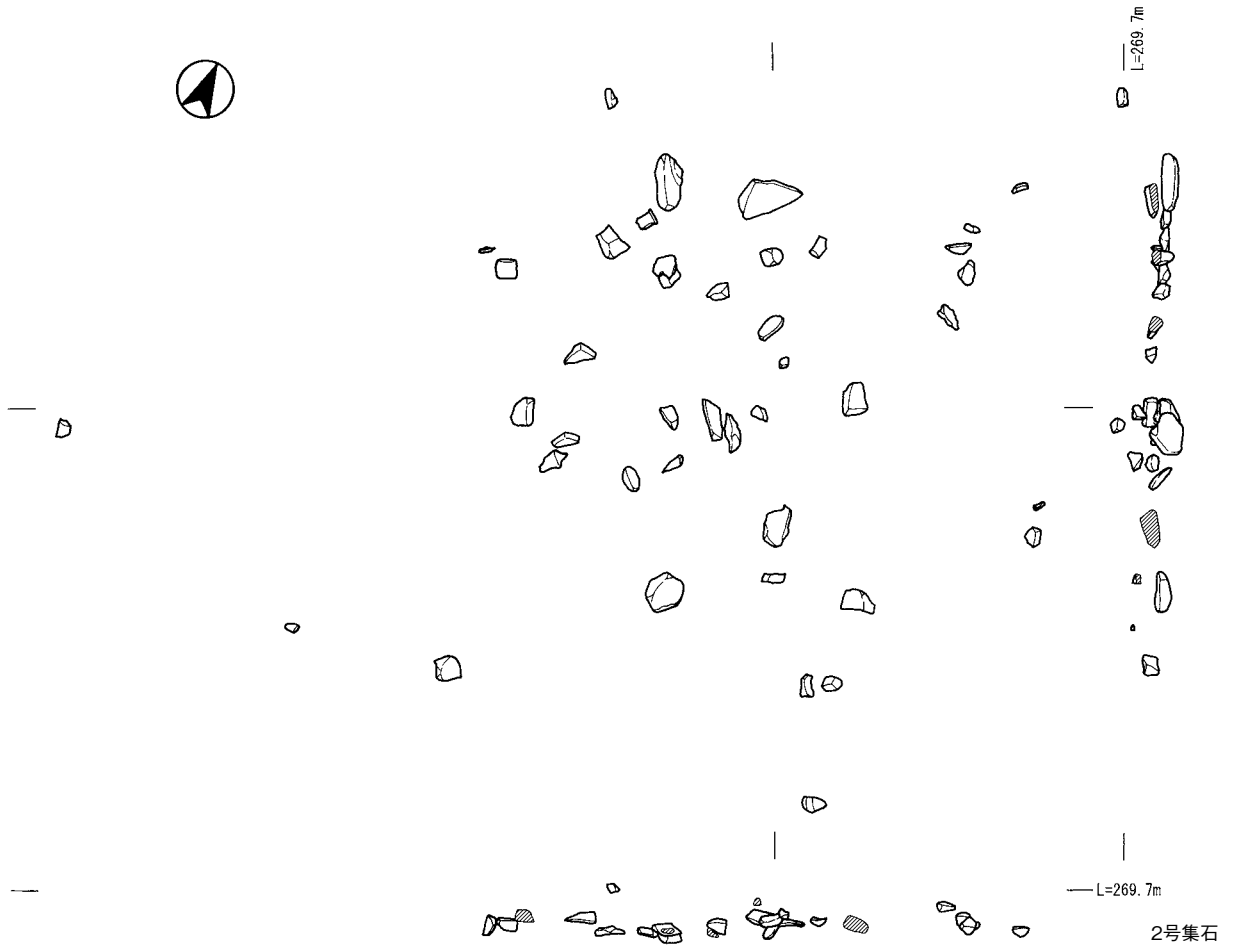
北側の集石は等高線を境に，２エリアに分けられる出土状況もみられる。すなわち，１号，７号～10号の５基と，２号～６号，11号の６基の区分である。ちなみに，エリア間にはフレークが２点出土している。

集石と遺物の関係は，１号集石内にⅣ類土器，７号集石に接するⅣ類土器，８号と10号に接するⅡ類土器，２号～６号，11号の６基は直接遺物との相関関係は把握できない。

掘り込みをもつものはなく，まばらに散在する礫が一定範囲に集中する状況で把握した。また，石材が判明しているのは１号集石のみである。



第97図　Ⅶ層遺構実測図(１)



第98図　Ⅶ層遺構実測図(２)　0　1m

(１)１号集石（第97図）

D-15区に位置し，Ⅵa層で検出した。礫は南北３ｍ，東西2.8mの平坦面にまばらに散在し，中央部にⅣ類の土器片No50(5361)が１点含まれる。輝石安山岩，頁岩，砂岩を用い，一部の礫には黒いスス状の付着物がみられ，被熱で赤化し，熱破砕した小礫もみられる。

(２)２号集石（第98図）

F-15区に位置し，Ⅶ層で検出した。南北2.1m，東西1.5mの狭い範囲の平坦面にまばらに散在する。

(３)３号集石（第99図）

F-16区に位置し，Ⅵa層で検出した。遺構に隣接する北西側に土層横転があり，その影響で礫が移動した状況がみられる。礫を157個使い，南北３ｍ，東西2.6mの範囲に散在し，本遺跡で最大規模であり，西側の11号集石と隣接する。

(４)４号集石（第100図）

F-16区に位置し，Ⅶ層で検出した。南北1.6m，東西2.0mの平坦面にまばらに散在し，礫の集中がみられない。

(５)５号集石（第101図）

E-16区に位置し，Ⅶ層で検出した。南北1.7m，東西2.0mの平坦面にまばらに散在し，中央部には礫の集中がみられる。

(６)６号集石（第102図）

E,F-16,17区の境界に位置し，Ⅶ層で検出した。南北2.7m，東西1.8mに散在し，一部で礫の集中があるが，北側の傾斜面に向かって流出する。

(７)７号集石（第102図）

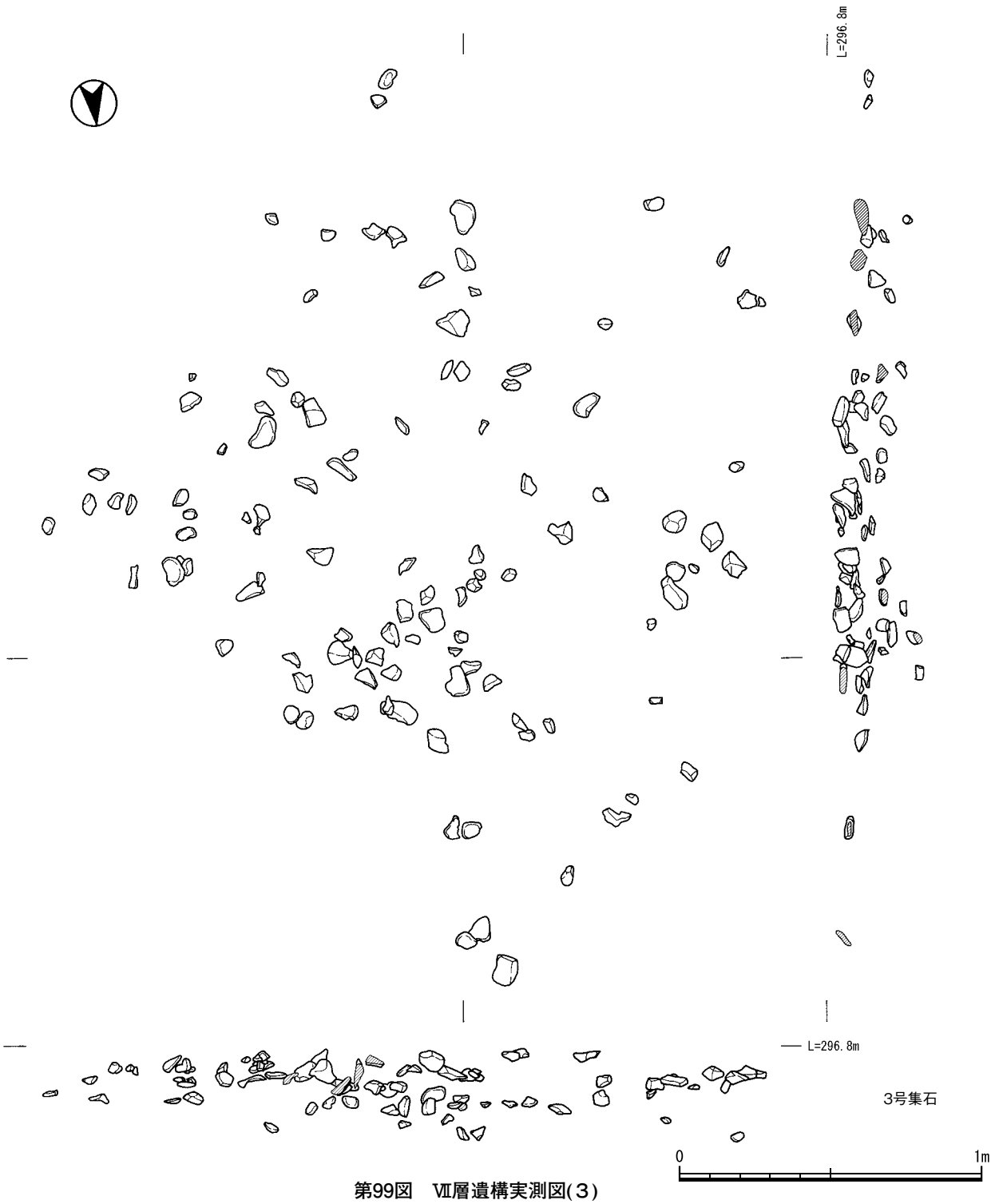
E-17区に位置し，Ⅶ層で検出した。中型から小型の礫を用い，南北1.4m，東西0.8mの範囲に37個の礫が集中する。また，集石の北側の緩斜面にかけてⅣ類土器が集中する。

(８)８号集石（第103図）

E-16区に位置し，Ⅶ層で検出した。南北2.5m，東西2.0mで，中央部では集中し，遺構の北側に土層横転があり，その影響が集石にも及んでいる。遺構の南側にⅡ類土器が集中する。

(９)９号集石（第104図）

D-16区に位置し，Ⅶ層で検出した。11個のやや大型の少数の礫で構成し，南北1.5m，東西1.5mに散在する。



第99図　Ⅶ層遺構実測図(３)

(10)10号集石（第104図）

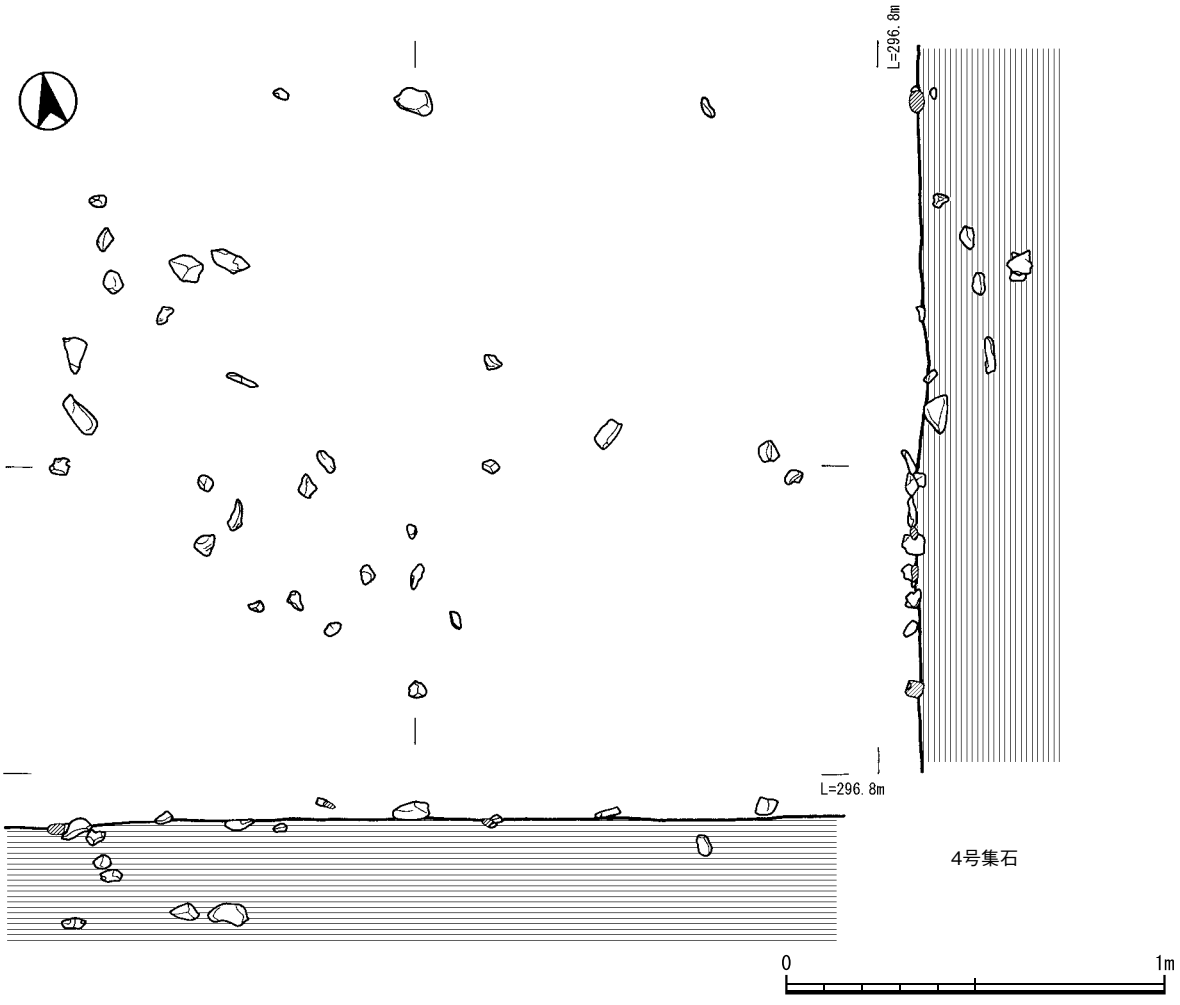
D-17区に位置し，Ⅵa層で検出した。小型の礫で構成し，南北1.7m，東西1.6m平坦面に散在する。

(11)11号集石（第105図）

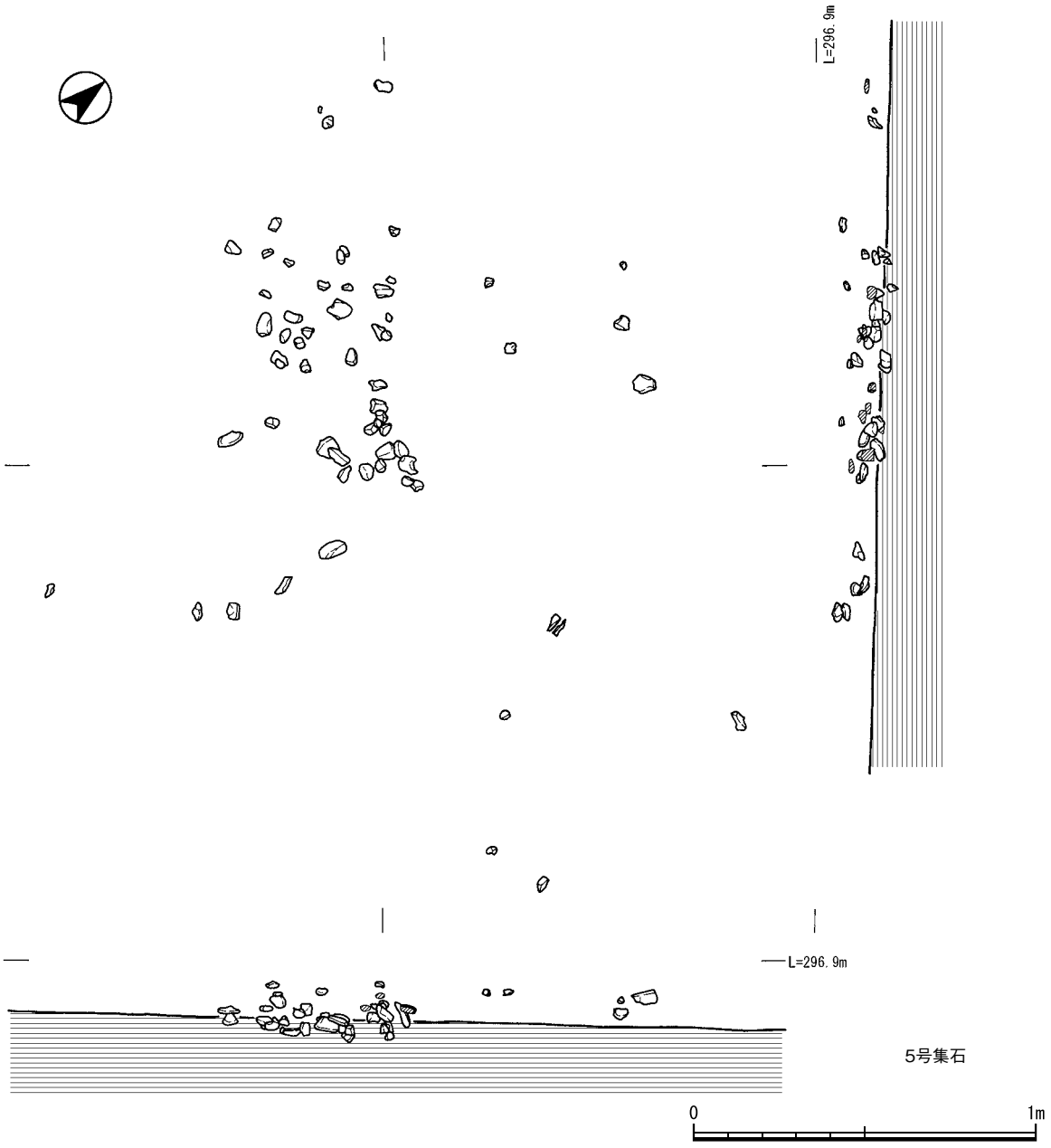
E-16区に位置し，Ⅶ層で検出した。南北2.4m，東西2.1mの範囲に散在し，３号集石が東側に隣接する。

(12)12号集石（第106図）

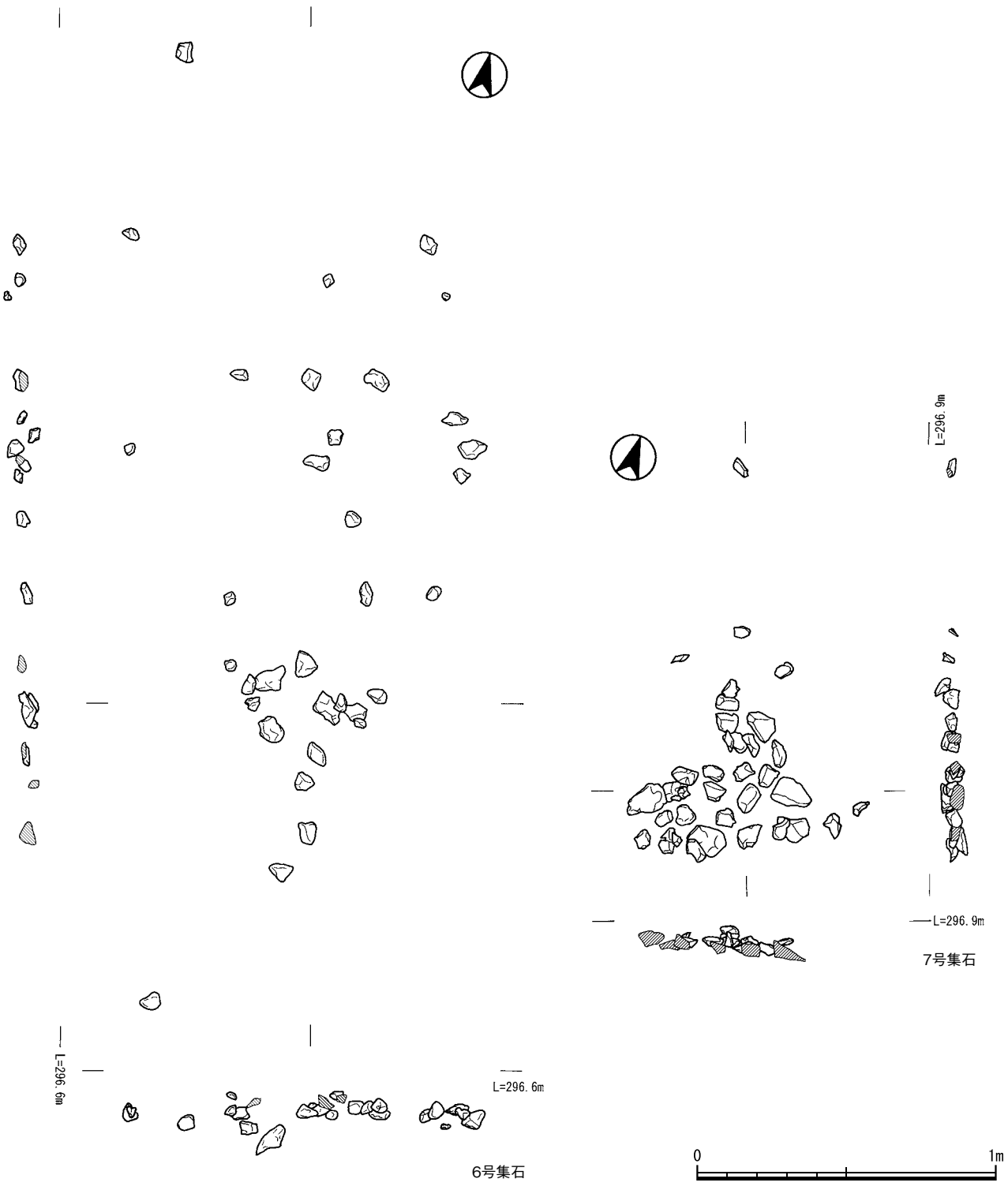
D-４区に位置し，Ⅶ層で検出した。南北12m，東西15mの広範囲に３か所の礫の集中が観察されるが，礫は東側に流れる状況がみられる。



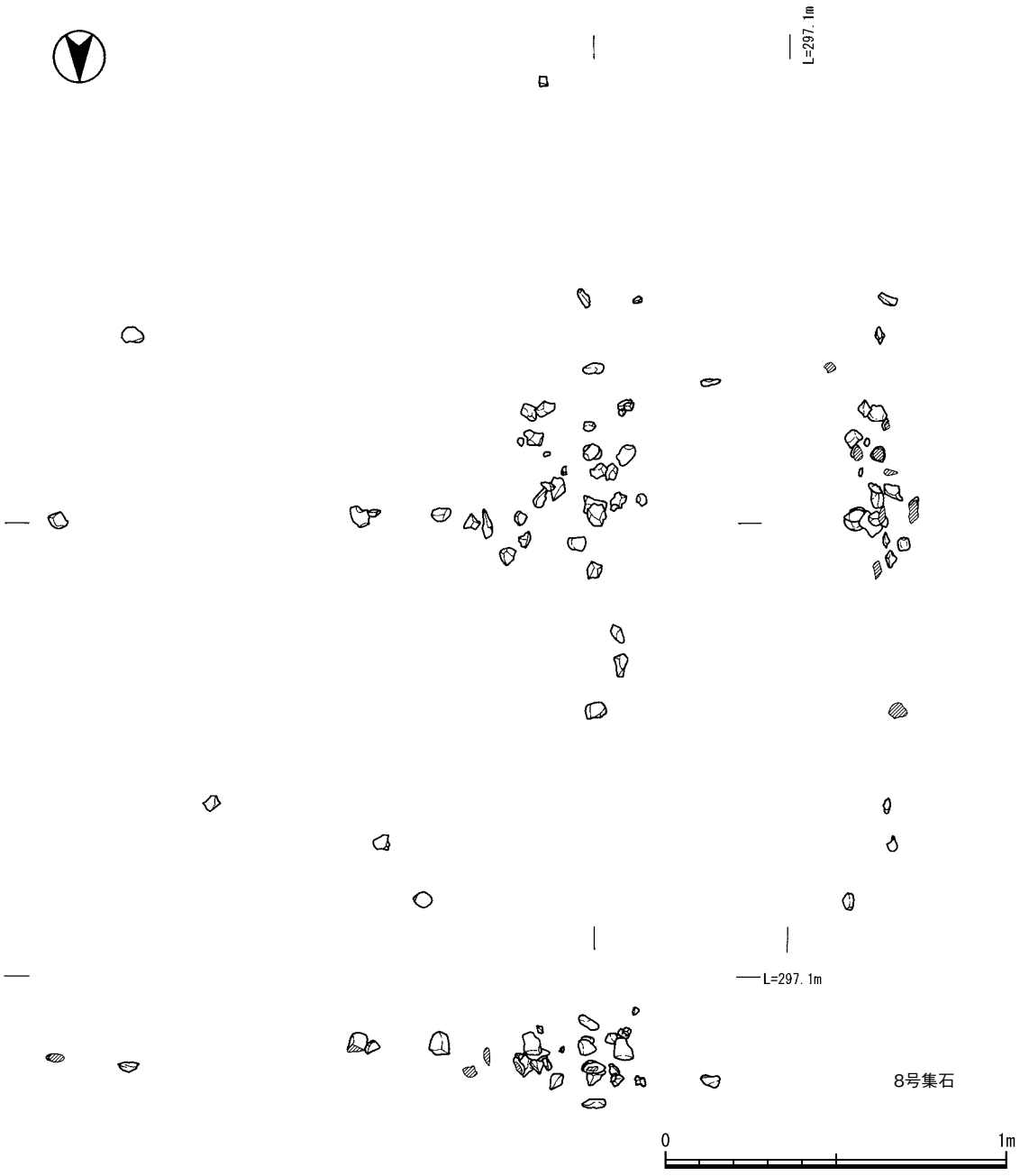
第100図　Ⅶ層遺構実測図(４)



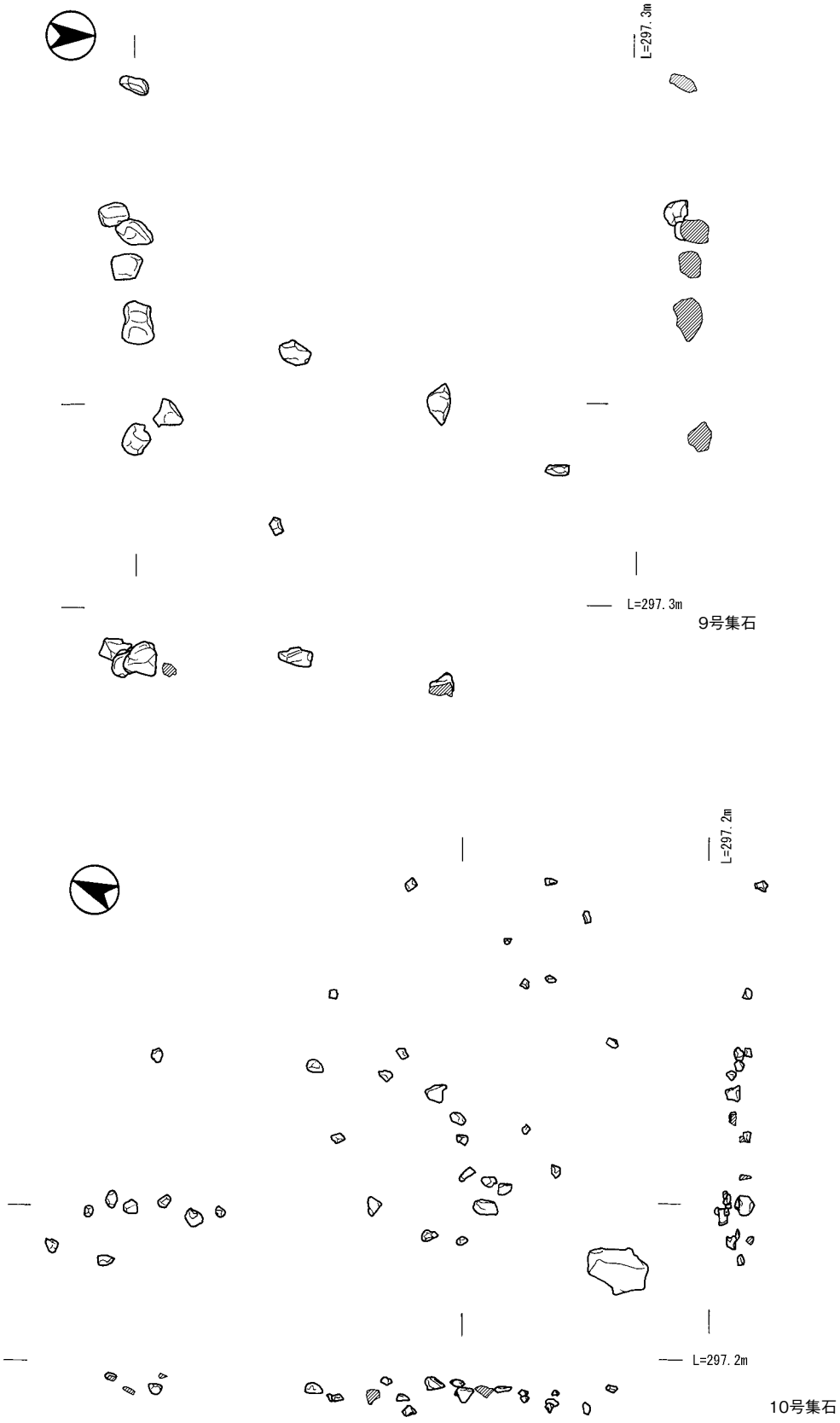
第101図　Ⅶ層遺構実測図(５)



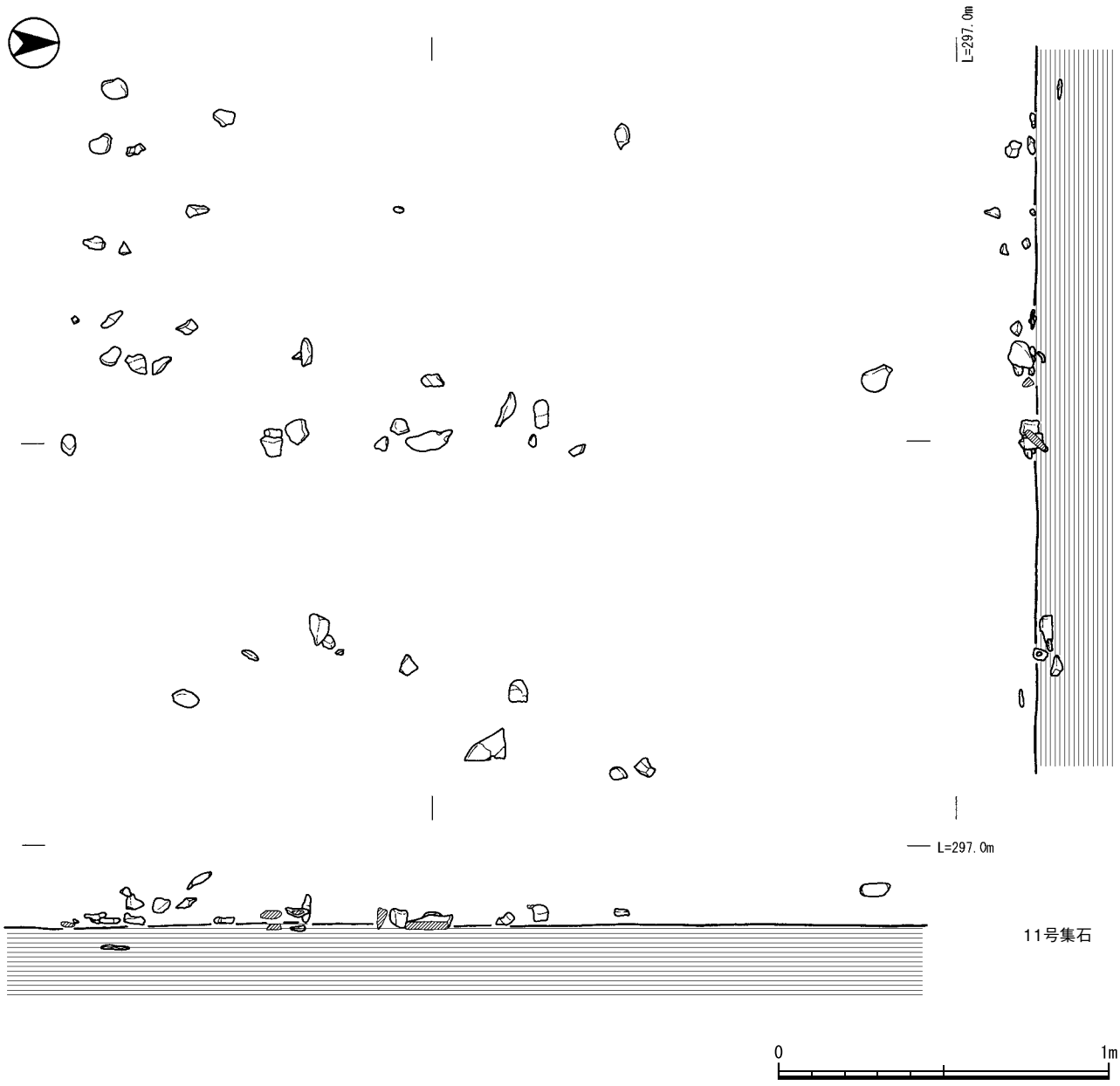
第102図　Ⅶ層遺構実測図(６)



第103図　Ⅶ層遺構実測図(７)



第104図　Ⅶ層遺構実測図(８)

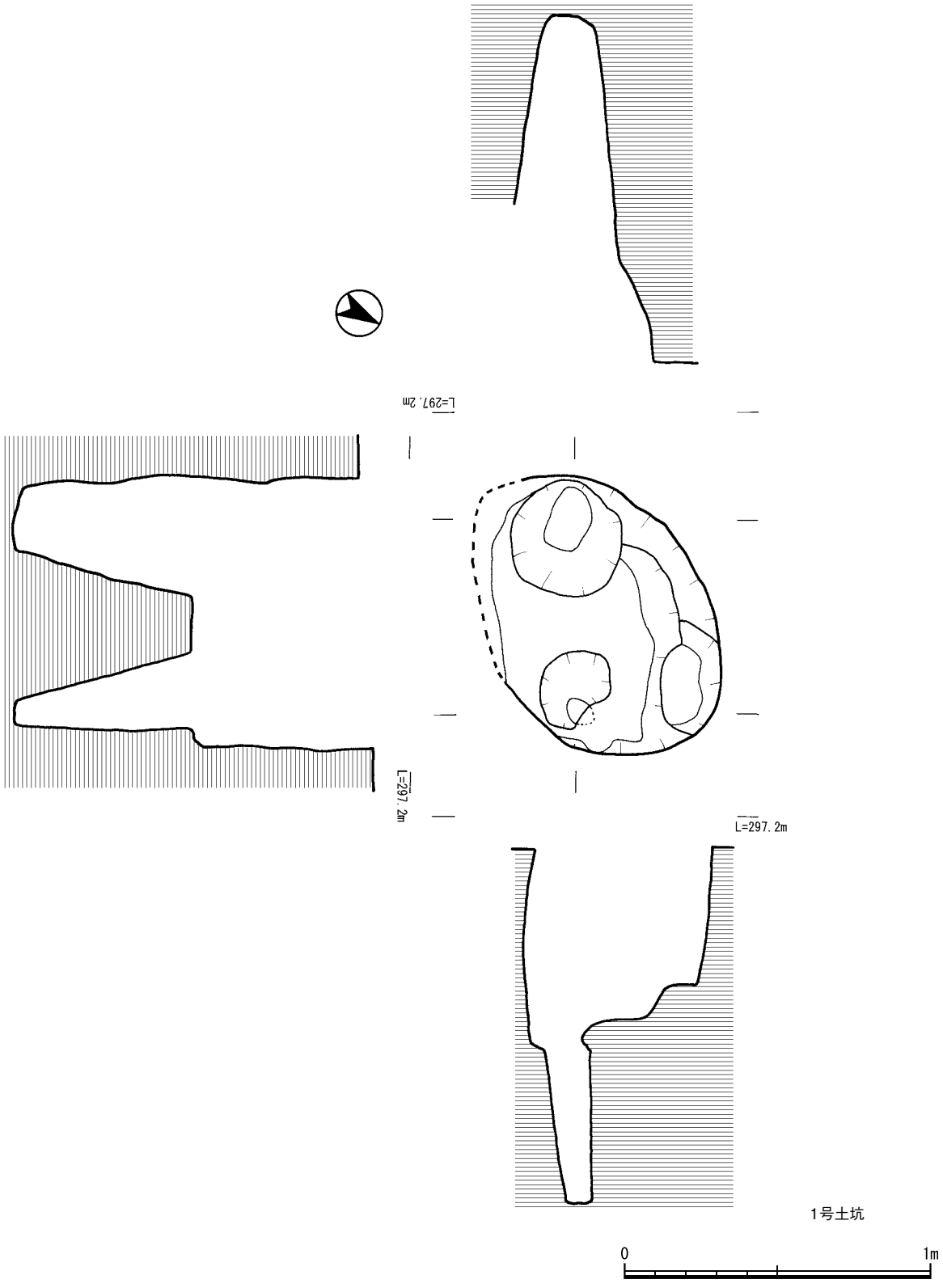


第105図　Ⅶ層遺構実測図(９)

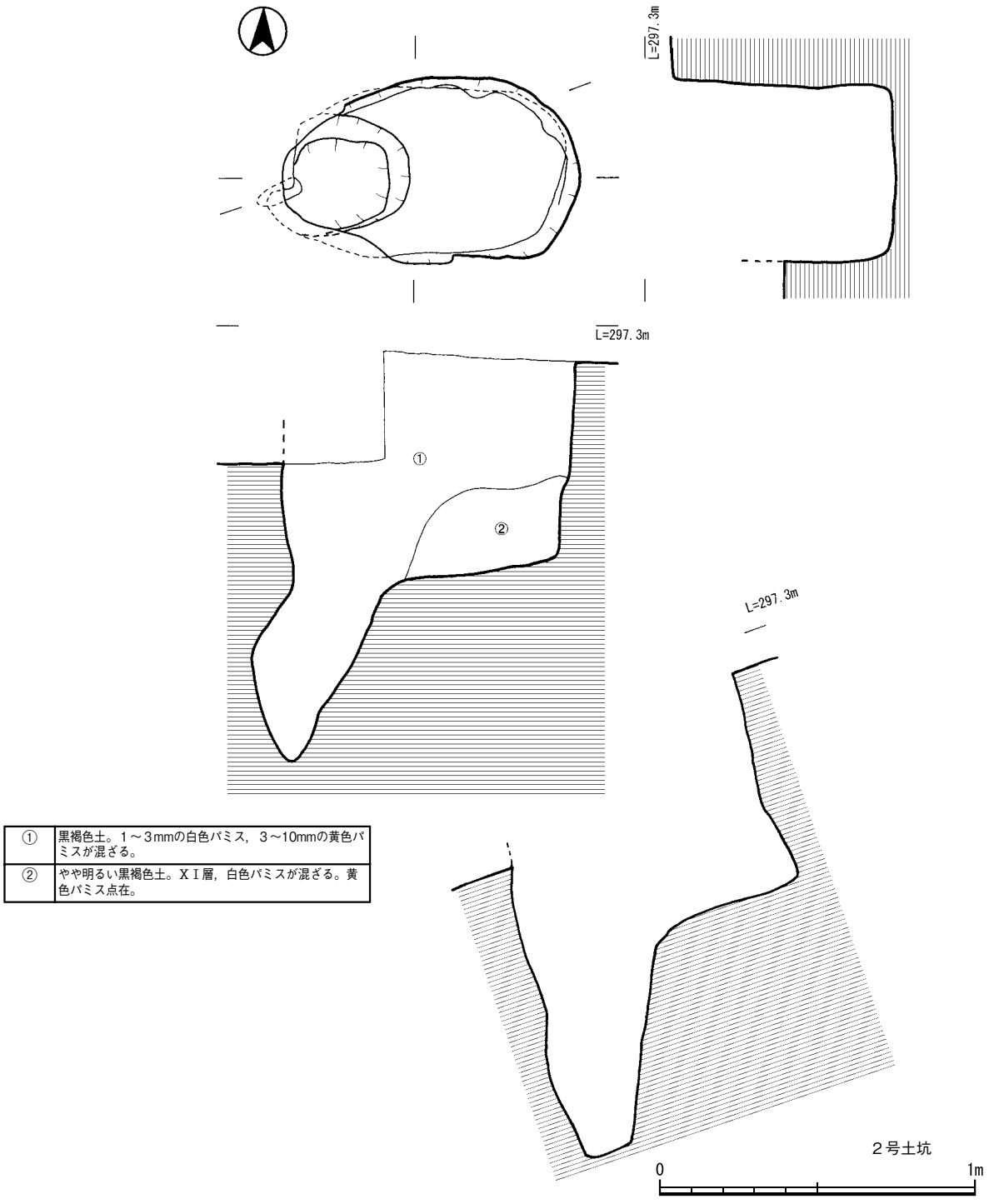


第106図　Ⅶ層遺構実測図(10)


L=297.5m
L=297.5m
12号集石
0
1m



第107図　Ⅶ層遺構実測図(11)

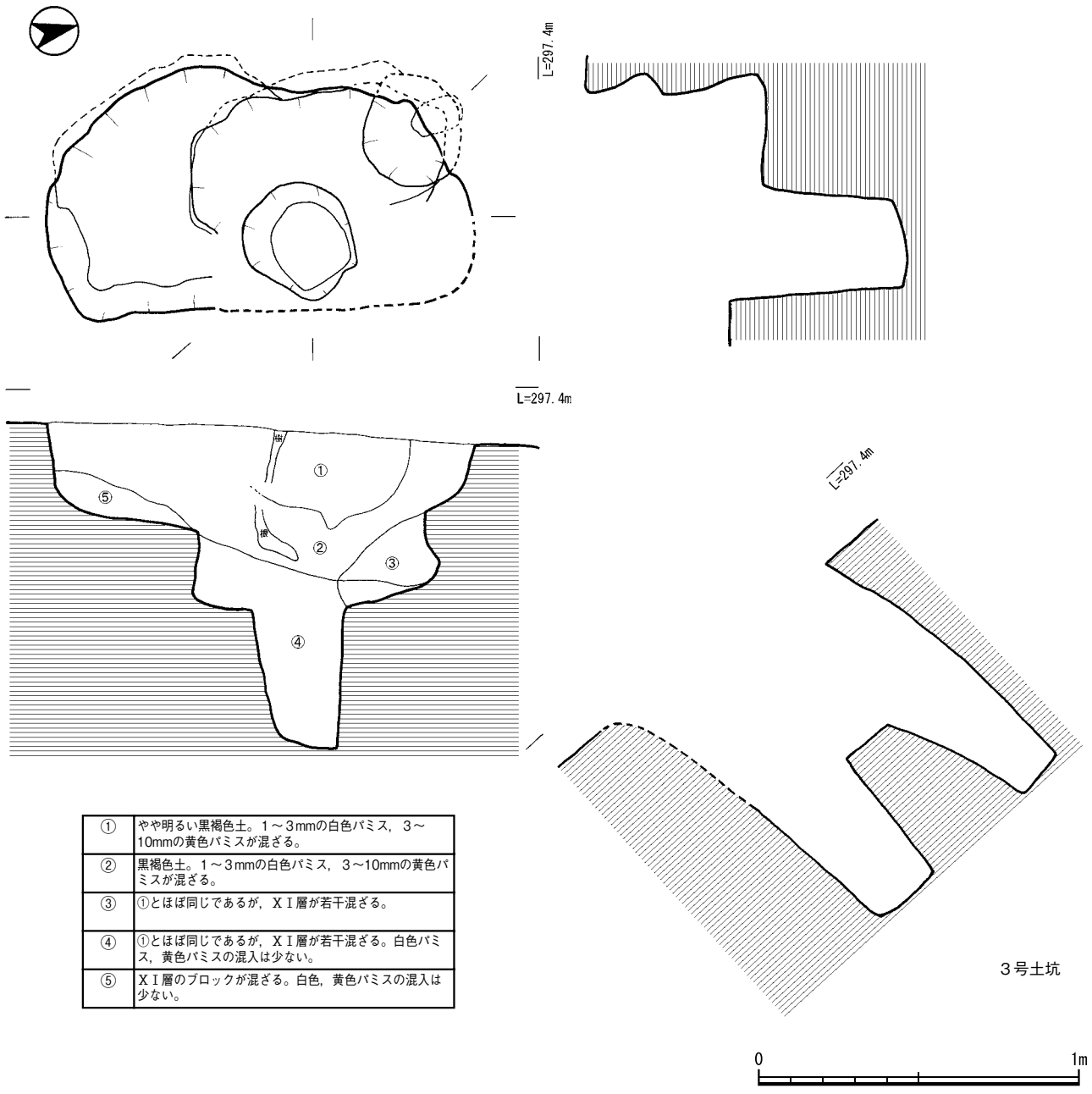


①	黒褐色土。1～3mmの白色パミス，3～10mmの黄色パミスが混ざる。
②	やや明るい黒褐色土。ＸＩ層，白色パミスが混ざる。黄色パミス点在。

第108図　Ⅶ層遺構実測図(12)

2　土坑

調査区の南側，Ⅸ層上面で３基の土坑を検出した。土坑の分布は１号土坑がD-６区の南側緩斜面に，２号，３号がF-6,7区の東側緩斜面に位置し，それぞれ土坑の内部に小穴をもつ。土坑が検出された周辺では遺物は出土しないが，10m北には，Ⅲ類とⅣ類の土器が出土している。



①	やや明るい黒褐色土。1～3mmの白色パミス，3～10mmの黄色パミスが混ざる。
②	黒褐色土。1～3mmの白色パミス，3～10mmの黄色パミスが混ざる。
③	①とほぼ同じであるが，ＸＩ層が若干混ざる。
④	①とほぼ同じであるが，ＸＩ層が若干混ざる。白色パミス，黄色パミスの混入は少ない。
⑤	ＸＩ層のブロックが混ざる。白色，黄色パミスの混入は少ない。

第109図　Ⅶ層遺構実測図(13)

(1)1号土坑（第107図）

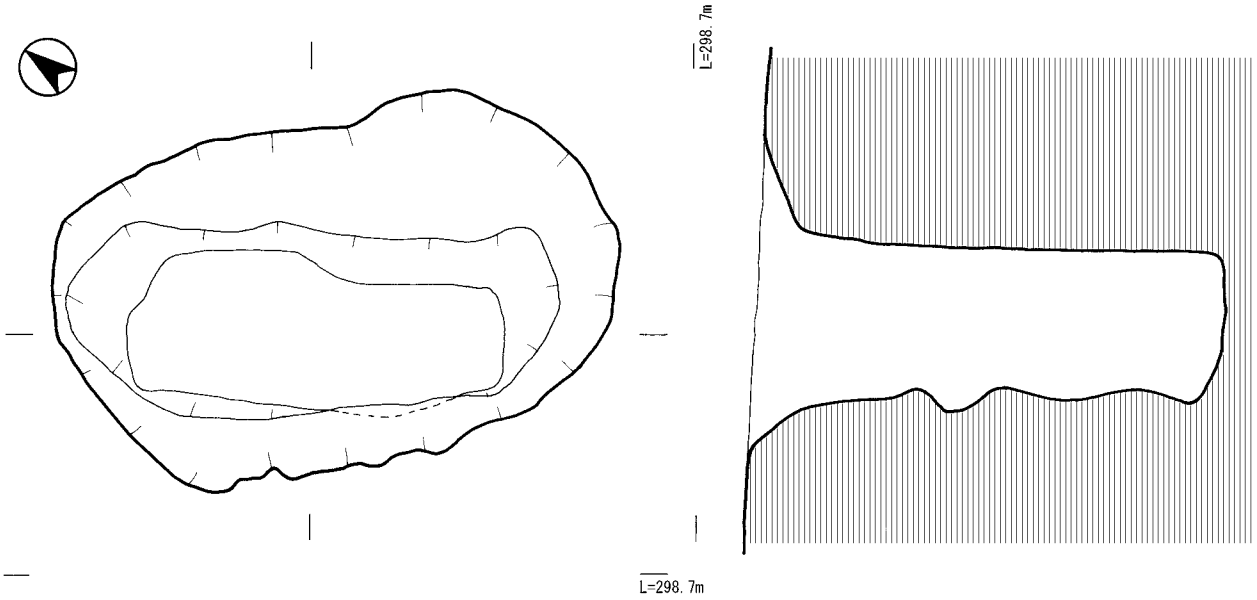
D-6区の南側緩斜面で検出した。平面プランは南北方向に楕円形で長軸105cm，短軸72cmで深さは検出面から58cmである。底面の南側と東側に小穴をもち，深さが南側69cm，東側68cmである。

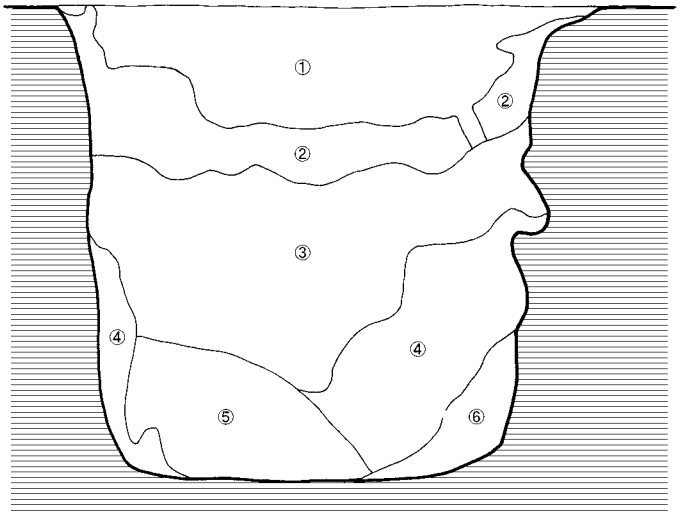
(2)2号土坑（第108図）

F-7区の東側緩斜面で検出した。平面プランは東西方向に主軸をもつ楕円形で長軸91cm，短軸62cmで深さは検出面から71cmで，東側の壁がほぼ垂直に立ち上がり底面がやや西側に傾斜する。西側に小穴をもち，深さが56cmで壁の中間部分が西側にふくらむ形状である。

(3)3号土坑（第109図）

F-6区の東側緩斜面で検出し，2号土坑との間隔は10.5mである。平面プランは南北方向に主軸をもつ楕円形で，長軸143cm，短軸77cmで，深さは検出面から59cm。底面は中央から西側が2段になり，中央部と北側に小穴をもつ。小穴の深さは，それぞれ中央45cm，北側46cmで中央部の小穴は垂直であるが，北側の小穴は外側にふくらんでいく形状である。

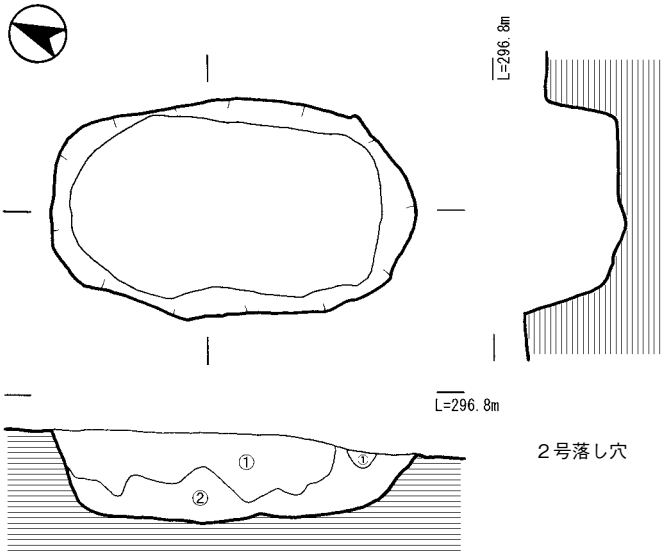




1号落し穴

①	黄褐色細粒軽石混硬質土。御池軽石が混ざる。
②	暗橙色粘質土。
③	暗橙色粘質土。濃色土に淡色土が点在する。
④	黄褐色土と灰褐色土が混在。P-11が混ざる。
⑤	黄褐色粘質土。P-11が混ざる。
⑥	黒褐色土。





2号落し穴

①	暗橙色土。黄褐色軽石がまばらに混入する。
②	①とほぼ同じだが，黄褐色軽石が細かく，やや灰褐色である。

3　落し穴状遺構

調査区の中央部D-９区，北向きの緩斜面でⅤa層上面から１号，E-15区南向き緩斜面のⅦ層上面で２号が，谷状地形を挟んで検出されている。

(1)１号落し穴状遺構（第110図）

D-９区，Ⅴa層上面から検出し，上面にⅣｂ層の御池軽石が20cm堆積し，下面にⅤa層のアカホヤ火山灰の腐植土が堆積していた。平面プランは，長軸が148cm，短軸が90cmで深さは検出面から126cmで，底面は平坦である。底面のプランは長軸100cm，短軸27cmで，南側の壁は検出面から12cmで段をもち，そこから垂直に底面に下がる形状である。

(2)２号落し穴状遺構（第110図）

E-15区，Ⅶ層上面から検出し，上面にⅤa層のアカホヤ火山灰の腐植土が17cm堆積していた。平面プランは，長軸が96cm，短軸が60cmで深さは検出面から26cmで，底面は中央部に凹凸がある。底面のプランは長軸83cm，短軸49cmで南側の壁は緩やかに立ち上がる形状である。

第110図　Ⅴ層遺構実測図

第３節　縄文時代の土器

縄文時代に該当する土器の総点数は942点で，土器の部位や文様等の識別困難な小片を除き，土器形式あるいは時期の確認できたものは167点である。出土層位はⅧ層～Ⅲ層で，167点について形式分類及び細別を行い，Ⅰ類～Ⅹ類の各類型として分類し本報告書に記載した。

Ⅷ～Ⅵ層にⅠ類からⅣ類土器，Ⅴ層にⅤ類土器，Ⅳ層～Ⅲ層にⅥ類からⅩ類土器が出土している。

１　Ⅰ類土器(第112図，No１～９)

No１は口縁部で，口唇部及び施文帯は入念にナデ，平坦な口唇部は丁寧にナデられ，内側に若干内弯し肥厚する。口縁端部から横位の貝殻刺突線文を重ね，瘤状突起部は縦位の貝殻刺突線文を複数施している。器面調整は内，外面共に，工具を用い丁寧にナデ光沢を残している。No８の横位の貝殻刺突文の上位には，瘤状突起が確認できる。全ての胎土に雲母を多量に含むことから，同一個体である可能性が高い。

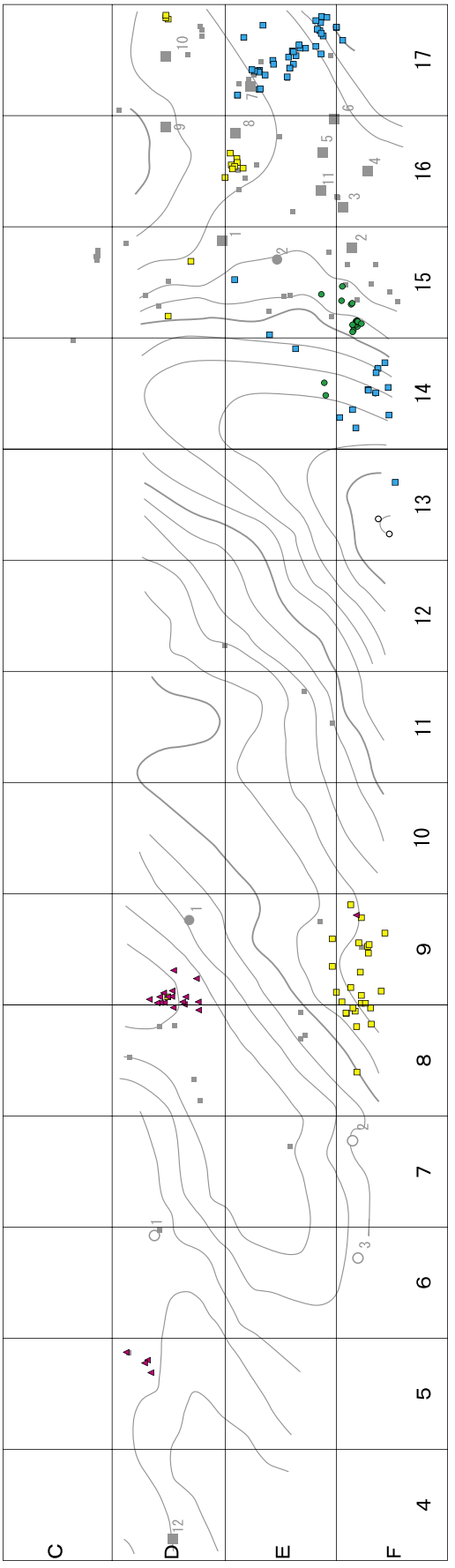
これらから推測すると，口縁部下位は横位の貝殻刺突文をそれ以下は縦位の貝殻刺突文を施文している。

２　Ⅱ類土器(第113図，No10～31)

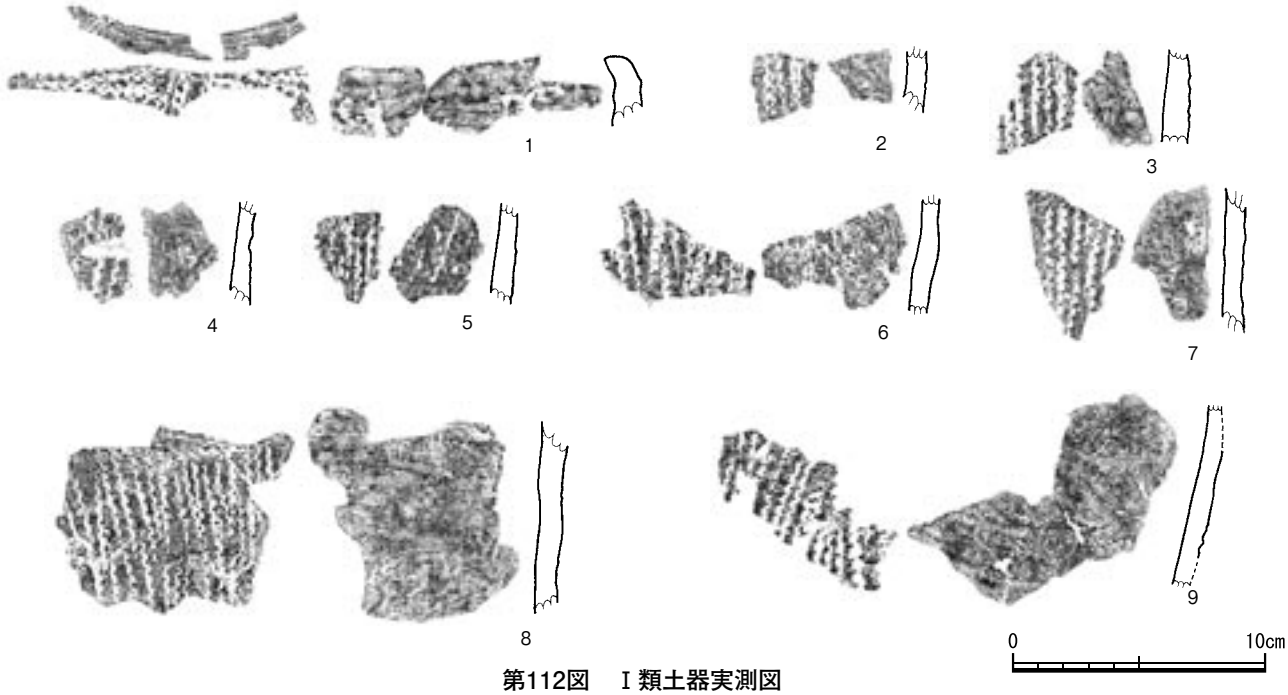
押型文を施文し，胴部の屈曲を経て，頸部から口縁部へ外反する土器群で手向山式土器に分類される。No10～14は山形押型文を縦位に施文している。No11は口縁部付近で，工具による刻み目突帯を巡らし，その下にはススが付着している。No13,15は胴部の屈曲部で，屈曲部上位にはススが付着する。No16は菱形押型文を縦位に施文し，内面は丁寧にナデられる。外面にはススが付着し，胎土には雲母が多く含まれる。

No19～26,No28～30は山形の回転原体を縦位に施文した後，棒状工具により沈線文を施している。No30は口縁部に２条の刻み目貼付突帯が巡る。刻みの工具と胴部の沈線工具は同一である。口唇部も刻まれ，外面はススが付着し，内面は入念にナデられる。No31は刻み目が施された５条の貼付突帯を横位に巡らし，突帯間には，貼付けを施した際の工具痕が残る。さらに横位の突帯を切るように，縦位に貼付突帯を重ねている。口唇部も刻まれ，内面の仕上げは丁寧である。

分布状況からは，山形押型文のNo11,13等，沈線文を重ねるNo21,30等は，F-８,９区に集中する。これに対し，菱形押型文のNo16や，縦位にも突帯を重ねたNo31は分布が異なる。



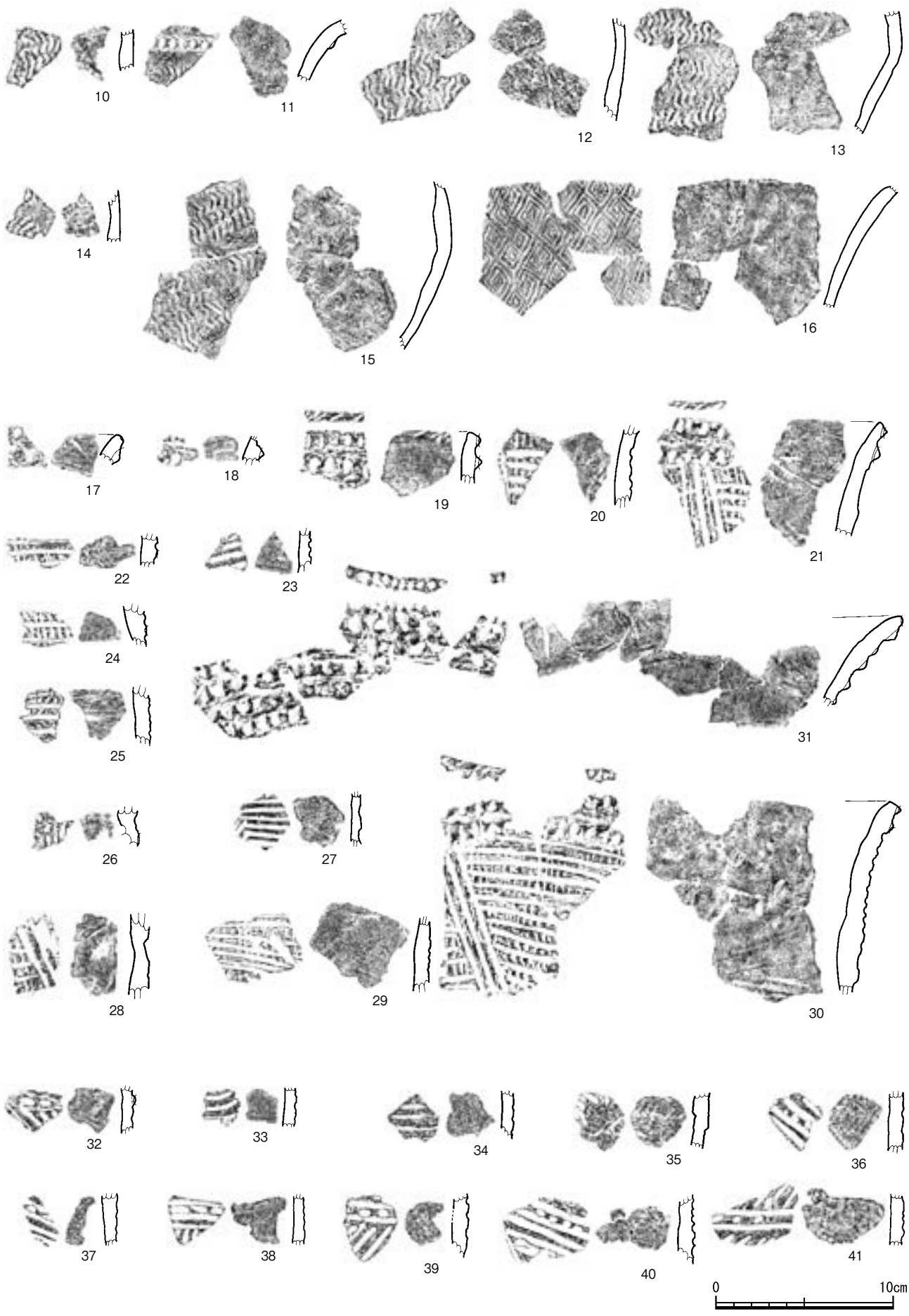
第111図　Ⅰ～Ⅴ類土器出土状況図(1/600)



第112図　Ⅰ類土器実測図

第18表　Ⅰ～Ⅲ類土器観察表(１)

挿図番号	図No.	取上番号(出土区/層位)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
112	1	2619(F-15/Ⅶ) 2620(F-15/Ⅶ) 2621(F-15/Ⅶ) 2623(F-15/Ⅶ)	長,雲	良好	2.5Y3/3 (暗オリーブ褐)	5Y3/1 (オリーブ黒)	ナデ	貝殻刺突 (縦位,横位)	口縁部 口唇部ていねいなナデ
	2	2696(E-14/Ⅵa)	長,雲	良好	2.5Y3/1 (黒褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	貝殻刺突(縦位)	胴部
	3	2848(F-15/ⅩⅢ)	長,雲	良好	10YR2/1 (黒)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	貝殻刺突(縦位)	胴部
	4	1870(F-15/Ⅵa)	長,雲	良好	2.5Y3/2 (黒褐)	10YR4/2 (灰黄褐)	ナデ	貝殻刺突(縦位)	胴部,押圧痕
	5	2849(F-15/ⅩⅡ)	長,雲	良好	10YR3/1 (黒褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	貝殻刺突(縦位)	胴部
	6	2624(F-15/Ⅶ)	長,雲	良好	10YR2/2 (黒褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	貝殻刺突(縦位)	胴部
	7	2625(E-15/Ⅶ)	長,雲	良好	10YR3/1 (黒褐)	7.5YR4/2 (灰褐)	ナデ	貝殻刺突(縦位)	胴部 押圧痕
	8	2617(F-15/Ⅶ) 2670(F-15/Ⅷ)	長,雲	良好	10YR3/1 (黒褐)	7.5YR4/3 (褐)	ナデ	貝殻刺突 (縦位,横位)	口縁部付近,瘤状突起あり
	9	2614(F-15/Ⅶ) 2615(F-15/Ⅶ) 2616(F-15/Ⅶ) 2618(F-15/Ⅶ) 2622(F-15/Ⅶ)	長,雲	良好	10YR3/1 (黒褐)	7.5YR4/3 (褐)	ナデ	貝殻刺突 (縦位,斜位)	胴部
113	10	1809(F-9/Ⅵa)	石,長,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	山形押型文	胴部
	11	2234(F-9/Ⅶ)	石,長,角	良好	7.5YR6/6 (橙)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	山形押型文 貼付突帯 (刻目あり)	口縁部付近
	12	1800(F-8/Ⅵa) 2225(F-9/Ⅶ) 2245(E-9/Ⅶ)	石,長,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	山形押型文	胴部
	13	2226(F-9/Ⅶ) 2227(F-9/Ⅶ)	石,長,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	10YR4/3 (にぶい黄褐)	ナデ	山形押型文	胴部
	14	2236(F-9/Ⅶ)	石,長,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR6/6 (橙)	ナデ	山形押型文	底部
	15	2205(F-8/Ⅶ)	石,長,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	山形押型文	胴部 (外)スス付着
	16	2664(D-17/Ⅶ) 2665(D-17/Ⅶ) 2666(D-17/Ⅷ)	石,角,雲	良好	2.5Y3/1 (黒褐)	2.5Y3/2 (黒褐)	ナデ	菱形押型文	胴部



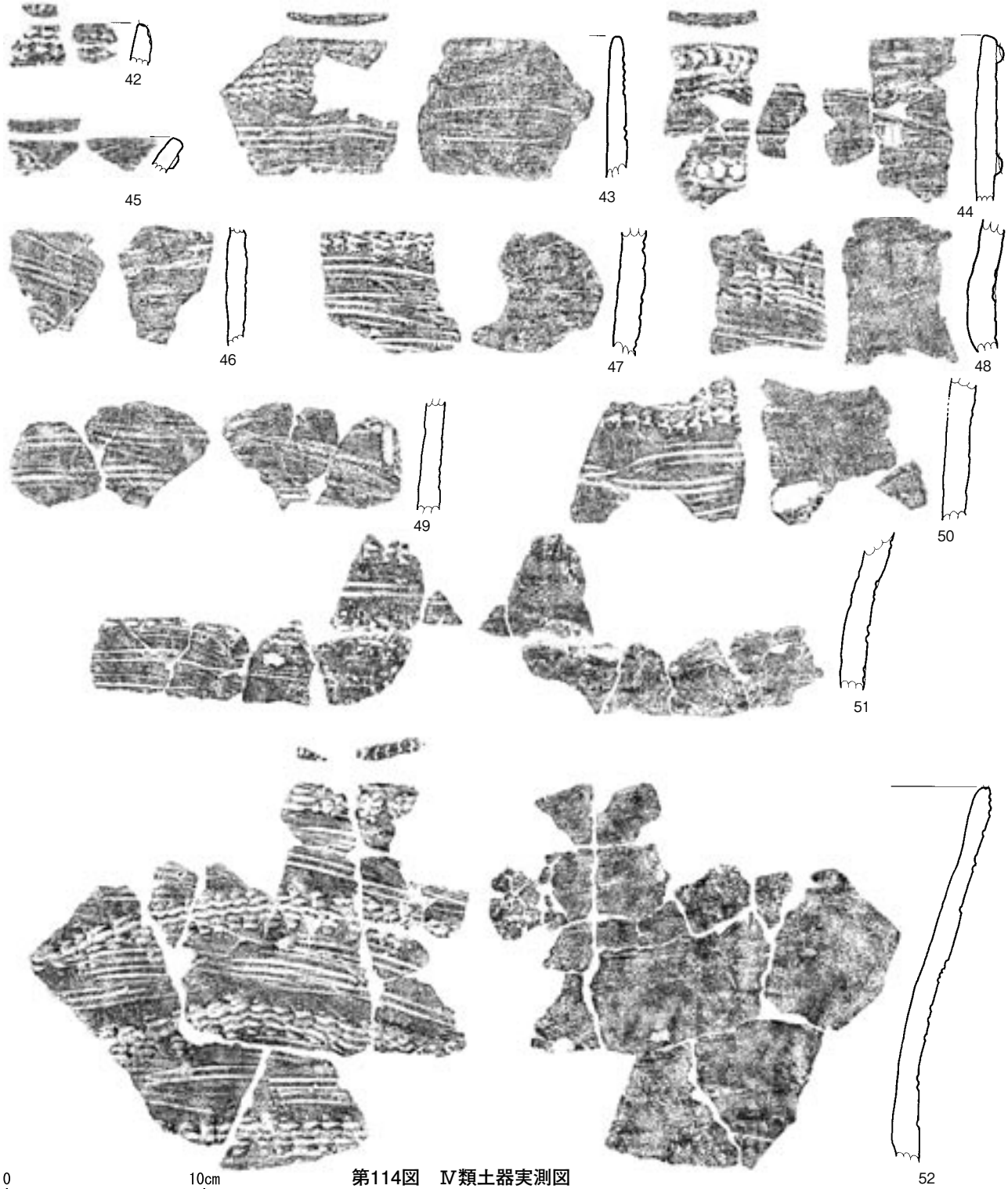
第113図　Ⅱ，Ⅲ類土器実測図

3　Ⅲ類土器(第113図，No32～41)

No41は，沈線文間に刺突文を充填し，沈線文の外には斜位の短沈線文を組み合わせている。胎土は砂粒が多く，内面のナデは粗といえる。No38も同じように沈線の間に刺突が確認できるが，No41に比べ若干間延びし，一方，内面は丁寧なナデがみられる。

第19表　Ⅰ～Ⅲ類土器観察表(２)

挿図番号	図No.	取上番号(出土区/層位)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
113	17	2679(E-16/Ⅵb)	長,石,輝	良好	7.5YR4/6 (褐)	5Y3/2 (オリーブ黒)	ナデ	貼付突帯 (刻目あり)	口縁部 口唇部刻目あり
	18	2271(D-9/Ⅶ)	長,石,角	良好	7.5YR4/4 (褐)	7.5YR3/4 (暗褐)	ナデ	貼付突帯 (刻目あり)	口縁部
	19	1797(F-8/Ⅵa)	長,石,輝,角	良好	5Y3/1 (オリーブ黒)	5Y2/1 (黒)	ナデ	貼付突帯(刻目あり) 棒状工具による沈線	口縁部 口唇部刻目あり
	20	1798(F-8/Ⅵa)	長,石,輝,角	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	10YR5/3 (にぶい黄褐)	ナデ	押型文,棒状工具による沈線	胴部 (外)ススト付着
	21	2216(F-9/Ⅶ) 2229(F-9/Ⅶ)	長,石,輝,角	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	押型文,棒状工具による沈線,貼付突帯 (刻目あり)	口縁部 口唇部刻目あり
	22	739(F-9/Ⅳa)	長,石,輝,角	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	10YR6/3 (にぶい黄橙)	ナデ	押型文,棒状工具による沈線	胴部
	23	2608(D-15/Ⅵa)	長,角,石	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	10YR6/3 (にぶい黄橙)	ナデ	棒状工具による沈線	胴部
	24	2212(F-9/Ⅷ)	長,石,輝,角	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	10YR6/3 (にぶい黄橙)	ナデ	押型文,棒状工具による沈線	胴部
	25	2213(F-9/Ⅶ)	長,石,輝,角	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデ	押型文,棒状工具による沈線	胴部 (外)ススト付着
	26	1799(F-9/Ⅵa)	長,石,輝,角	良好	10YR6/2 (灰黄褐)	10YR6/3 (にぶい黄橙)	ナデ	貼付突帯,押型文棒状工具による沈線	口縁部付近 剥落多
	27	2604(D-15/Ⅶ)	長,角,石	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	2.5Y3/2 (黒褐)	ナデ	棒状工具による沈線	胴部 (外)炭化物付着
	28	2242(E-9/Ⅶ)	長,石,輝,角	良好	5Y4/1 (灰)	5Y3/1 (オリーブ黒)	ナデ	押型文,棒状工具による沈線	胴部
	29	2211(F-9/Ⅶ)	長,石,輝,角	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	10YR5/3 (にぶい黄褐)	ナデ	押型文,棒状工具による沈線	胴部 (外)ススト付着
	30	2206(F-8/Ⅶ) 2207(F-8/Ⅶ) 2209(F-8/Ⅶ)	長,石,輝,角	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	10YR5/3 (にぶい黄褐)	ナデ	押型文,棒状工具による沈線,貼付突帯(刻目あり)	口縁部 (外)ススト付着 口唇部刻目あり
	31	2674(E-16/Ⅵb) 2675(E-16/Ⅶ) 2676(E-16/Ⅶ) 2677(E-16/Ⅶ) 2678(E-16/Ⅵb) 2680(E-16/Ⅶ) 2699(E-16/Ⅶ)	長,石,輝	良好	7.5YR4/4 (褐)	5Y3/1 (オリーブ黒)	ナデ	貼付突帯(刻目あり) 棒状工具による沈線	口縁部 口唇部刻目あり 貼付突帯(横位,縦位)
	32	2549(D-5/Ⅶ)	長,石,角	良好	5YR4/4 (にぶい赤褐)	5YR5/4 (にぶい赤褐)	ナデ	貼付突帯(刻目あり) 棒状工具による沈線	口縁部付近
	33	2595(D-5/Ⅶ)	石,長,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	棒状工具による沈線 (横位)	胴部
	34	2713(---/Ⅶ)	石,長,角	良好	7.5YR6/6 (橙)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	棒状工具による沈線 (横位)	胴部 砂粒多
	35	2277(D-9/Ⅶ)	長,石,角	良好	10YR4/2 (灰黄褐)	10YR4/3 (にぶい黄褐)	ナデ	棒状工具による沈線	胴部 砂粒多
	36	2267(D-9/Ⅶ)	長,石	良好	7.5YR4/3 (褐)	7.5YR4/4 (褐)	ナデ	棒状工具による沈線 刺突	胴部 砂粒多
	37	2272(D-9/Ⅶ)	長,石,角	良好	7.5YR4/3 (褐)	10YR5/3 (にぶい黄褐)	ナデ	棒状工具による沈線 (斜位),刺突	胴部 砂粒多
	38	2556(D-5/Ⅵ)	長,角,石	良好	7.5YR5/3 (にぶい褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	棒状工具による沈線 (横位,縦位)	胴部
	39	2264(D-9/Ⅶ)	長,石	良好	7.5YR4/3 (褐)	7.5YR4/2 (灰褐)	ナデ	棒状工具による沈線 (横位,斜位)刺突	胴部 砂粒多
	40	2270(D-9/Ⅶ)	長,石	やや軟弱	7.5YR4/3 (褐)	7.5YR4/2 (灰褐)	ナデ	棒状工具による沈線 刺突	胴部 砂粒多
	41	2276(D-9/Ⅶ)	長,石,角	良好	7.5YR4/3 (褐)	7.5YR5/3 (にぶい褐)	ナデ	棒状工具による沈線 (縦位,斜位),刺突	胴部 砂粒多



第114図　Ⅳ類土器実測図

4　Ⅳ類土器(第114図，No42～52)

円筒状の胴部にラッパ状に開く口縁部がつき，外面が貝殻条痕文，貝殻刺突文，貝殻押引文などで文様構成される一群で，塞ノ神B式土器に分類される。本遺跡では，口縁部に貼付突帯がつくもの(No44,45)とつかないもの(No42,43,52)がある。No52は，ゆるやかに外反する口縁部をもつが，屈曲部の明瞭な稜線はない。地紋である貝殻条痕文の上から，貝殻腹縁によるやや間延びした押引文が口縁部から胴部にかけて間隔をもって施され，口唇部は貝殻腹縁による刺突で刻まれる。内，外面の調整及び胎土などからNo42,47,48,50,51は，No52と同一個体である可能性が高い。No43は，貝殻条痕文とやや浅めの押引文を組み合わせ，口唇部は狭い平坦面をなし，内面は工具でナデられる。No44は，貼付突帯を刻み，突帯は部分的に施された可能性が高い。No45も貼付突帯がみられ，同一個体の可能性が高い。口唇部は狭い平坦面をなし，内面は工具でナデられる。No46の内面にも同様の工具によるナデが確認できる。



第115図　Ⅴ類土器実測図

5　Ⅴ類土器(第115図，No53,54)

小破片が２点出土し，地紋の貝殻条痕文に細隆起線文が横位に施文されている。細隆起線文は貼付を行った後に指頭で押さえられており，あたかも波状の隆起線を形成しているかのようにみえる。No53には内面にも指頭痕とみられるものが残っている。２点とも外面はススが付着しており，内面は丁寧なナデによる調整が施されている。同一個体である可能性が高い。

第20表　Ⅳ～Ⅴ類土器観察表

挿図番号	図No.	取上番号(出土区/層位)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
114	42	2651(E-17/Ⅵb)	長,石,角	良好	10YR4/2 (灰黄褐)	10YR4/2 (灰黄褐)	ナデ	貝殻押引(横位)	口縁部 口唇部刺突
	43	1876(E-15/Ⅵa)	長,石,角	良好	10YR4/2 (灰黄褐)	5YR6/6 (橙)	ナデ	貝殻条痕(横位) 貝殻押引(横位)	口縁部,砂粒多,剥落多
	44	2687(F-14/Ⅵa) 2691(F-14/Ⅵa) 2697(E-14/Ⅵa) 2703(F-14/Ⅵa)	長,石,角	良好	2.5Y4/2 (暗灰黄)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	貝殻条痕(横位) 貼付突帯(刻目あり)	口縁部,砂粒多
	45	2610(E-15/Ⅵa)	長,石,角	良好	2.5Y4/2 (暗灰黄)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	貼付突帯(刻目あり)	口縁部
	46	2690(F-14/Ⅵa)	長,石,角	やや軟弱	2.5Y4/2 (暗灰黄)	5YR5/6 (明赤褐)	ナデ	貝殻条痕(横位)	胴部,砂粒多
	47	2655(E-17/Ⅵb)	長,石,角	良好	2.5Y3/3 (暗オリーブ褐)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデ	貝殻条痕(横位) 貝殻押引(横位)	胴部
	48	2633(E-17/Ⅵb)	長,石,角	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	貝殻条痕(横位) 貝殻押引(横位)	胴部
	49	2693(F-14/Ⅵa) 2695(F-14/Ⅵa) 2704(F-14/Ⅵa)	長,石,角	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	5YR5/6 (明赤褐)	ナデ	貝殻条痕(横位)	胴部,砂粒多
	50	2640(E-17/Ⅵb) 5361(E-15/Ⅵa)	長,石,角	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	貝殻条痕(横位) 貝殻押引(横位)	胴部 1号集石内出土
	51	2335(E-17/Ⅵa) 2648(E-17/Ⅵb) 2649(E-17/Ⅵb) 2653(E-17/Ⅵb) 2654(E-17/Ⅵb) 2656(E-17/Ⅵb) 2667(E-17/Ⅵb)	長,石,角	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	貝殻条痕(横位) 貝殻押引(横位)	胴部 (外)炭化物付着
	52	2328(F-17/Ⅵa) 2631(F-17/Ⅵb) 2637(E-17/Ⅵb) 2638(E-17/Ⅵb) 2639(E-17/Ⅵb) 2641(E-17/Ⅵb) 2642(E-17/Ⅵb) 2643(E-17/Ⅵb) 2645(E-17/Ⅵb) 2646(E-17/Ⅵb) 2647(E-17/Ⅵb) 2668(E-17/Ⅵb) 2707(E-17/Ⅷ)	長,石,角	良好	2.5Y4/2 (暗灰黄)	7.5YR6/6 (橙)	ナデ	貝殻条痕(横位) 貝殻押引(横位)	口縁部～胴部 口唇部刺突
115	53	1824(F-13/Ⅴa)	石,長,角	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	5Y2/1 (黒)	ナデ	貼付突帯(横位)	口縁部付近 (外)炭化物付着
	54	1833(F-13/Ⅳa)	石,長,角	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	5Y4/1 (灰)	ナデ	貼付突帯(横位)	口縁部付近 (外)炭化物付着

6　Ⅵ類土器(第117図，No55～68)

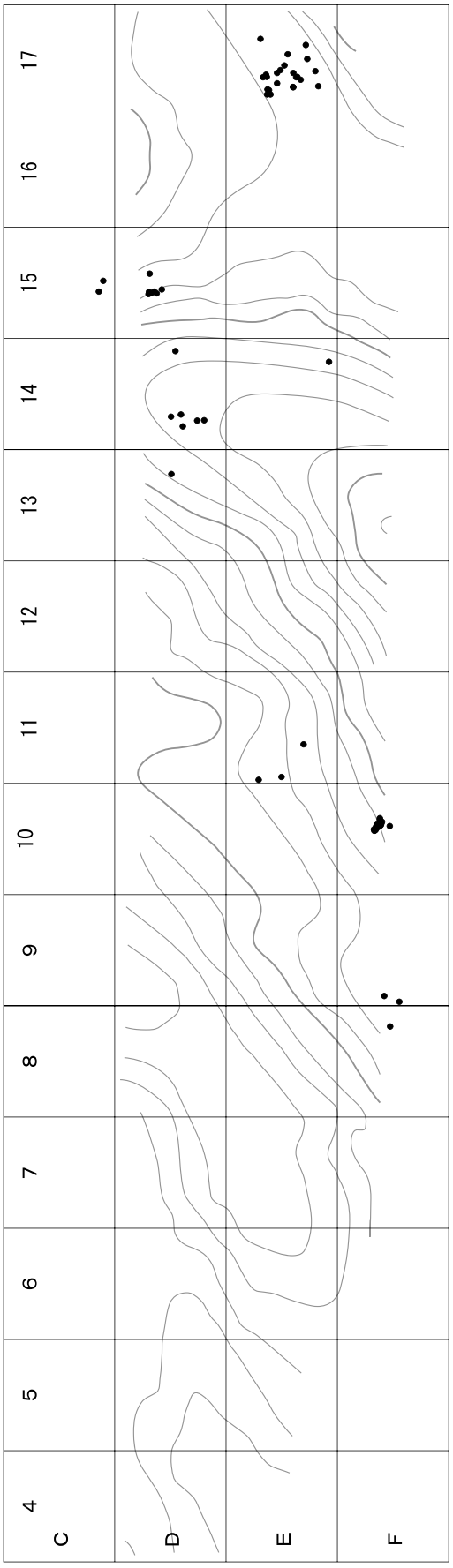
No57は，地紋である貝殻条痕文の上から，異なる棒状工具により斜位，縦位に沈線が施されている。斜位の沈線は端部の鈍い工具で，縦位の沈線はシャープな工具を用い，施文の開始と最後にアクセントをつけている。No56,62は器面の調整や条痕文単位もほぼ同じで，同一個体の可能性がある。No55の底径は8.1cmで，外周部を若干残す。外面，内面ともに工具及び指頭による器面調整が施されている。全体的に赤化しており，激しく熱を受けた可能性がある。胎土は長石，石英を多く含み，わずかではあるが磁鉄鉱も含まれる。

No61は，工具による器面調整を行った後，端部が鈍くなったヘラ状工具による凹線文(半月状)が横位に施されている。No58も同様の方法で施文されているが，凹線が途切れており，間をおいて新しい凹線が施されている。外面には両個体とも炭化物の付着が認められる。胎土，調整の面から同一個体である可能性が高い。

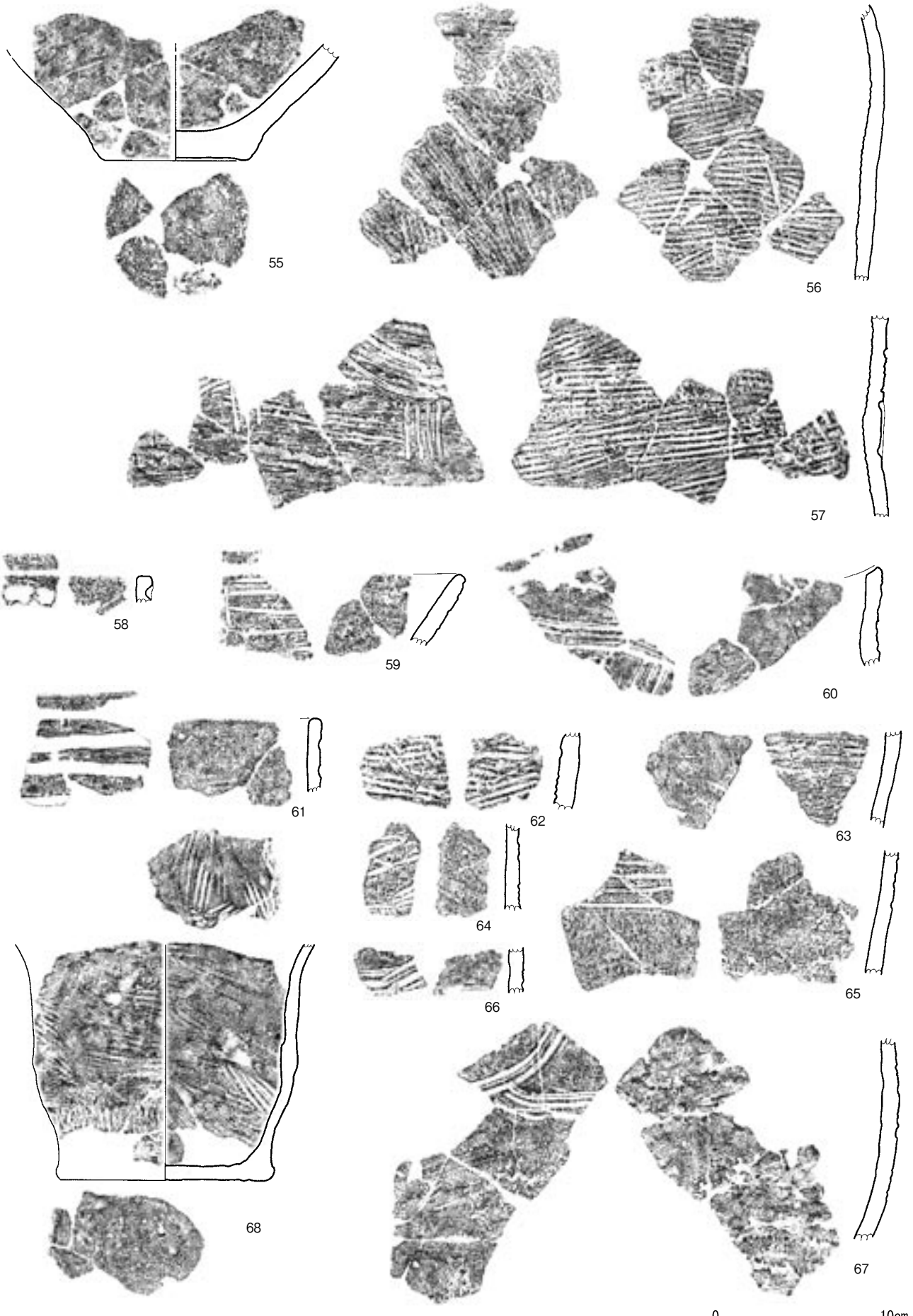
No59は，棒状工具による浅めの沈線が横位，縦位に施されている。No65も類似した施文具により，横位に浅めの沈線が施されている。No64も類似した施文具による沈線が確認できるが，斜位に施された沈線の端部にアクセントをつけた痕跡が見受けられる。

No60は，波状口縁になると考えられる。工具による器面調整の後，板状工具による凹線が斜位に施される。その上からさらに同様の板状工具による凹線が施され，あたかも幅の広い施文具による凹線が描かれているようにみえる。これは横位の凹線についても同様である。また，口唇部には爪形の刻み目がはいっている。No66,67もNo60の凹線と同じ施文具，方法で凹線が施されている。ただし，No67の斜位の凹線は横位の施文と異なり，重ねて施文されておらず，施文具本来の単位が観察される。またどの個体の胎土にも，赤色の砂粒が含まれている。

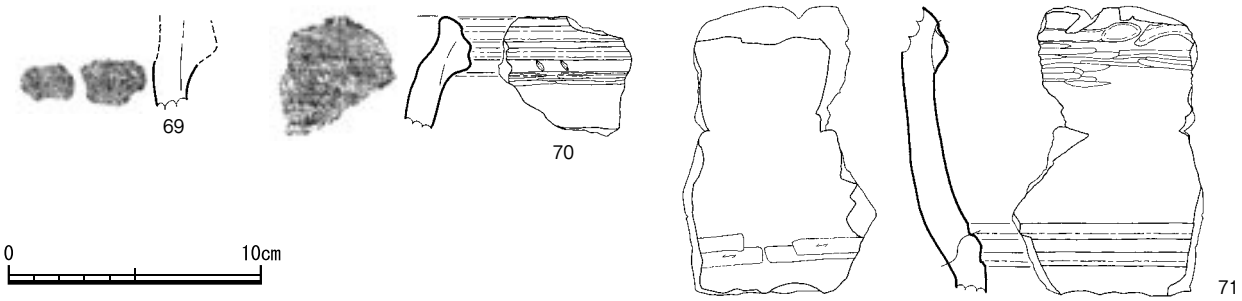
No68は底部から胴部にかけての資料であり，平底で底径は12.0cmである。外面は，底部付近では縦位に貝殻条痕文が施され，胴部では横位，斜位に施文されている。所々条痕がナデ消されており，指頭による可能性が高い。内面も貝殻腹縁による器面調整が施されているが，施文具の単位が異なる箇所があり，異なる施文具，もしくは貝殻腹縁と背頂部を使った可能性が高い。外面にはスス及び炭化物が付着しており，底部には灰釉とみられる付着物が確認できる。



第116図　Ⅵ～Ⅷ類土器出土状況図(1/750)



第117図　Ⅵ類土器実測図



第118図　Ⅶ類土器実測図

7　Ⅶ類土器(第118図，No69～71)

３点の出土であるが，どの資料も器壁が厚く，外面は丁寧なヘラ研磨が施されている。

No71は肩部に幅広の沈線を２条巡らせ，肥厚する口縁部にヘラ状工具により沈線を施す。内面は工具によりナデられ，胎土は砂粒が多い。肩部には，粘土紐のつなぎ目とみられる接合痕が観察できる。No70は５トレンチ出土の遺物で，肥厚する口縁部に幅広の沈線を２条巡らし，下位の沈線に三日月状の凹点文を刻む。No69は口縁部で，激しく熱を受けて赤化している。胎土には砂粒が多く含まれている。

第21表　Ⅵ～Ⅶ類土器観察表

挿図番号	図No.	取上番号(出土区/層位)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
117	55	1701(D-14/Ⅳa) 1702(D-14/Ⅳa) 1703(D-14/Ⅳa) 1705(D-14/Ⅳa) 1706(D-14/Ⅳa) 1828(D-13/Ⅳa)	長,石,角,磁	良好	7.5YR4/6 (褐)	7.5YR5/6 (明褐)	ナデ	ナデ	胴部～底部
	56	1631(E-17/Ⅳa) 2161(E-17/Ⅳa) 2163(E-17/Ⅳa) 2164(E-17/Ⅳa) 2165(E-17/Ⅳa) 2171(E-17/Ⅳa) 2172(E-17/Ⅳa) 2174(E-17/Ⅳa)	長,石,角	良好	10YR4/2 (灰黄褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	貝殻条痕 (横位,斜位)	貝殻条痕(斜位)	胴部,砂粒多
	57	2167(E-17/Ⅳa) 2168(E-17/Ⅳa) 2169(E-17/Ⅳa) 2176(E-17/Ⅳa) 2177(E-17/Ⅳa)	長,石,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	貝殻条痕(横位)	貝殻条痕(横位) 棒状工具による凹線 (斜位)	胴部 (外)スス付着 砂粒多
	58	1784(E-11/Ⅳa)	長,石,角	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデ	ヘラ状工具による凹線(横位)	口縁部 (外)炭化物付着
	59	1717(D-15/Ⅳa)	長,石,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	棒状工具による沈線 (縦位,横位)	口縁部
	60	1758(F-10/Ⅳa) 1765(F-10/Ⅳa)	長,石,角	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	10YR5/3 (にぶい黄褐)	ナデ	板状工具による凹線 (横位,斜位)	口縁部 口唇部刻みあり
	61	1448(E-11/Ⅲ) 1780(E-11/Ⅳa)	長,角,石	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR5/3 (にぶい黄褐)	ナデ	ヘラ状工具による凹線(横位)	口縁部 (外)炭化物付着
	62	2178(E-17/Ⅳa)	長,石,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR5/3 (にぶい褐)	貝殻条痕 (横位,斜位)	貝殻条痕 (横位,斜位)	胴部
	63	1725(D-15/Ⅲ)	長,石,角,雲	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	7.5YR5/6 (明褐)	貝殻条痕(横位)	ナデ	胴部
	64	1720(D-15/Ⅳa)	長,石,角	良好	10YR5/6 (黄褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	棒状工具による沈線 (横位)	胴部
	65	1718(D-15/Ⅳa) 1719(D-15/Ⅳa)	長,石,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	10YR5/4 (にぶい黄褐)	ナデ	棒状工具による沈線 (横位)	胴部
	66	1764(F-10/Ⅳa)	長,石,角	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	10YR5/3 (にぶい黄褐)	ナデ	板状工具による凹線 (斜位)	胴部
	67	1762(F-10/Ⅳa) 1766(F-10/Ⅳa) 1792(F-10/Ⅳa) 1793(F-10/Ⅳa) 1795(F-10/Ⅳa)	長,石,角	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	7.5YR5/6 (明褐)	ナデ	板状工具による凹線 (斜位)	胴部
	68	740(F-9/Ⅳa)	長,石,角	良好	5Y3/1 (オリーブ黒)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	貝殻条痕 (横位,斜位)	貝殻条痕 (横位,斜位,縦位)	胴部～底部 (外)(内)炭化物付着 底部白色付着物 (底内)貝条あり
118	69	1647(E-14/Ⅳa)	長,石,角	良好	5YR5/6 (明赤褐)	5YR5/6 (明赤褐)	工具によるナデ	-	口縁部付近,砂粒多
	70	24(F-8/Ⅲ)	長,石,角	良好	10YR3/3 (暗褐)	10YR3/3 (暗褐)	工具によるナデ	棒状工具による沈線 研磨	口縁部,砂粒多 (内)強いナデ
	71	2884(C-15/Ⅲ) 2885(C-15/Ⅲ)	長,石,角	良好	10YR4/3 (にぶい黄褐)	10Y2/1 (黒)	工具によるナデ	研磨 ヘラ状工具による沈線	口縁部付近～胴部 (外)スス付着 砂粒多

8　Ⅷ類土器(第120,121図，No72～99)

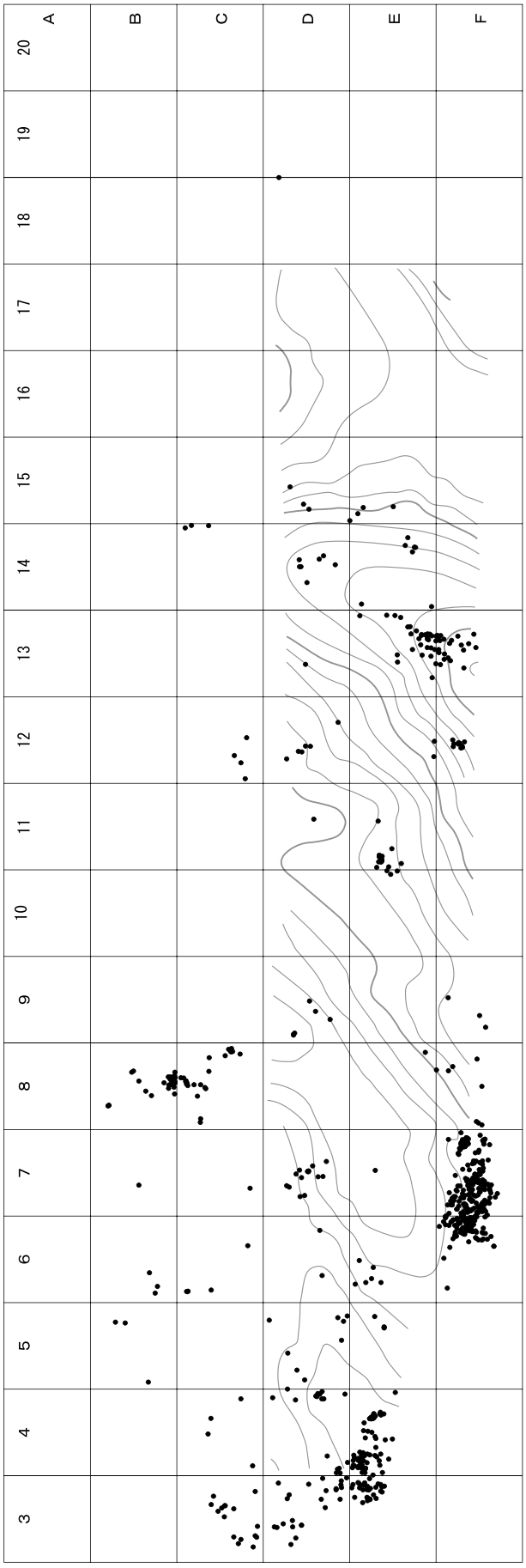
内面，外面ともに，丁寧な研磨が施されている浅鉢の一群である。口縁部の長さや，口縁部に施される沈線の有無等でさらに細分できる可能性があるが，資料が少ないため一括してⅧ類土器として扱っている。

No72,73,75,80,88,93は口縁部の内面，外面ともに沈線が施され，見かけ上口縁部の立ち上がりが看取できる。内面，外面ともに丁寧な研磨が施されているが，No73,88は摩耗が激しい。No80は口縁部が外反し，稜線を伴う頸部の屈曲を経て，胴部が球形に大きく張り出し，底部は欠如するが丸底と考えられる。口縁部は内面の沈線がやや深く施され，楕円形の口縁端部が若干内弯する印象を受ける。No79とNo80は，同一個体である可能性が高い。No93は丸みをもった口縁端部をなし，器形はNo80と同様で，稜線を伴う頸部を経て外反する口縁部をもつが，口縁部の長さは比較的短い。No72と同一個体である可能性が高い。

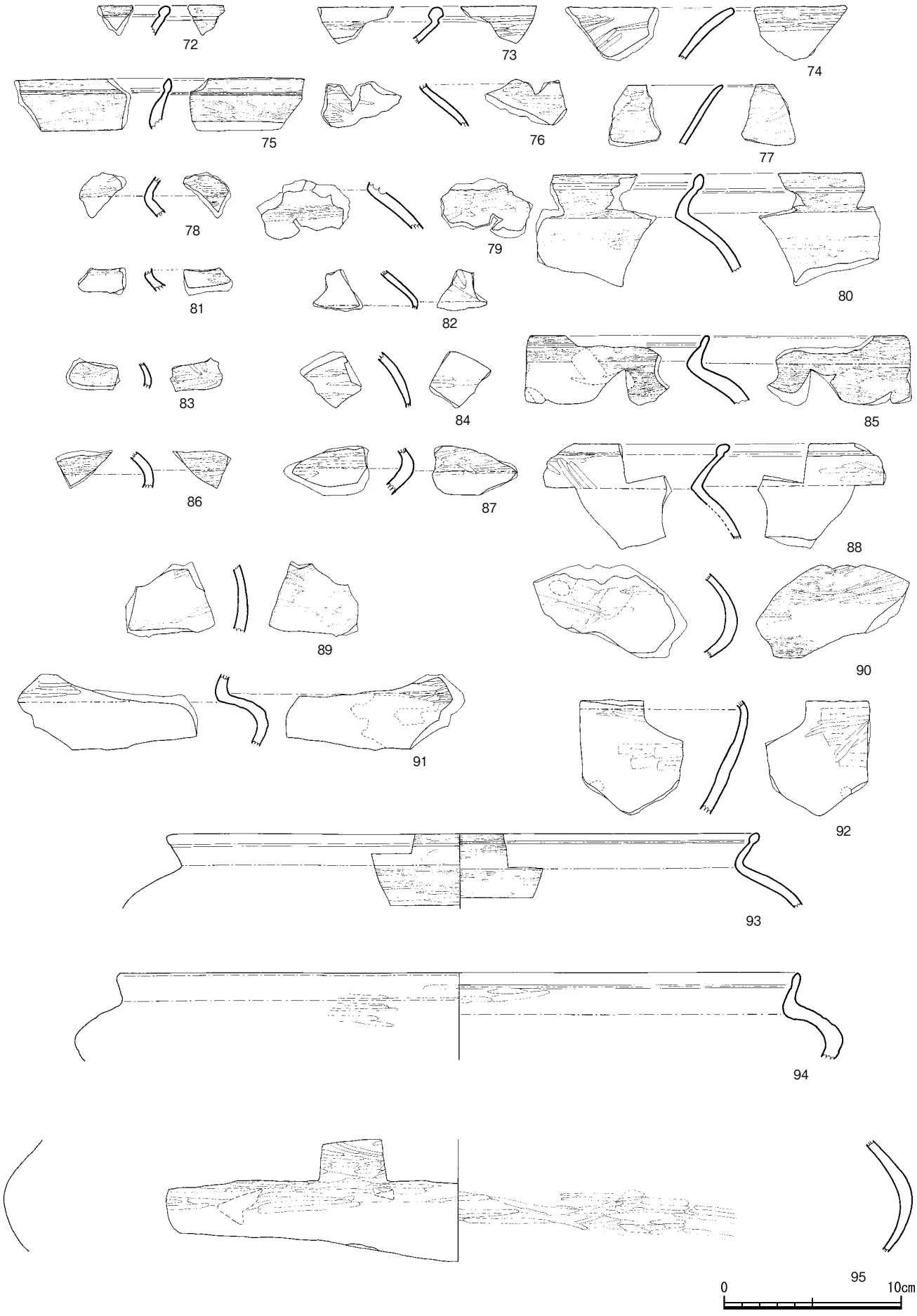
No85,94は口縁部の内面のみに沈線を施し，頸部の屈曲から口縁端部までの長さが比較的短い。口縁部は外反するが，頸部の屈曲はやや丸みを帯びている。No94は肩部にも屈曲をもつ。No91も頸部及び肩部に屈曲があり，口縁端部は欠如するが，No94と同様の器形を呈する可能性が高い。No94,91は摩耗が激しい。

No74,77は口縁部に沈線がなく，小破片のため全体の器形は明らかではないが，おそらく屈曲せずに底部からゆるやかに外弯していくものと考えられる。No76,78,81は同一個体である可能性が高く，頸部とみられる。No82,No92は屈曲をもつ肩部で，両個体とも摩耗が激しい。No92は激しく熱を受けた可能性がある。No83,84,86,87,89,90は球形に張り出す胴部の一部であると考えられる。No89はNo80と同一個体である可能性が高い。

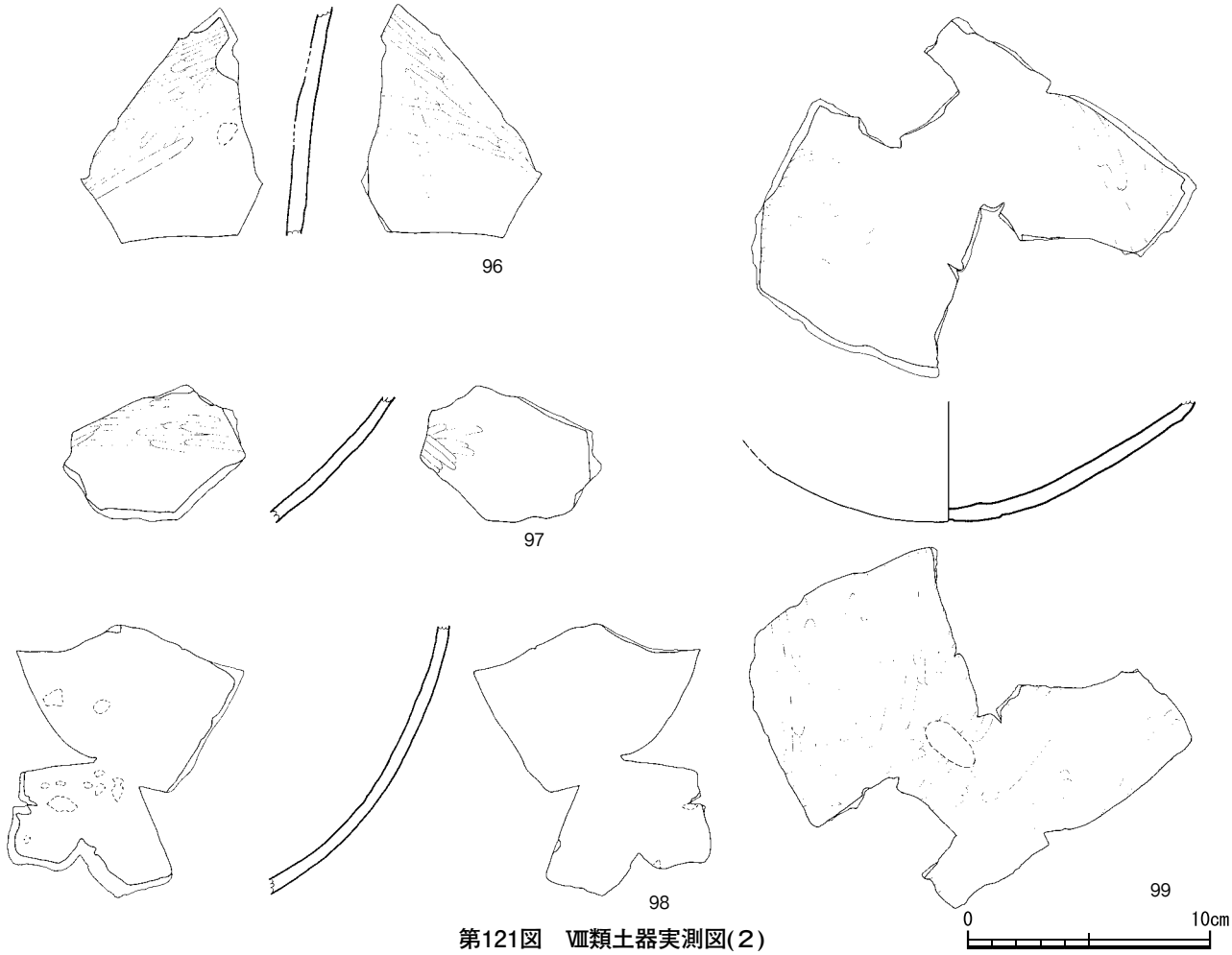
No96は傾き不明の資料で，底部付近の可能性はあるが，微妙な歪みがみられるため，調整がわかりやすいように掲載した。一部摩耗が激しい部分があるが，内外とも丁寧な研磨が施されている。No97,98は底部付近で，同一個体である可能性が高い。No97は一部摩耗が激しい部分があるが，丁寧な研磨が施されている。外面にはスス及び炭化物が付着している。No98は全体的に摩耗が激しく，内面にあばた状の剥落，外面にスス及び炭化物の付着が確認できる。No99は底部資料で，熱を受けた内面，外面ともにあばた状の剥落が確認できる。外面のほぼ中央部分に，人差し指の指頭ほどの浅いくぼみがあり，その周辺を起点もしくは終点としてヘラ研磨が施され，内面も丁寧に研磨される。



第119図　Ⅷ～Ⅹ類土器出土状況図(1/750)



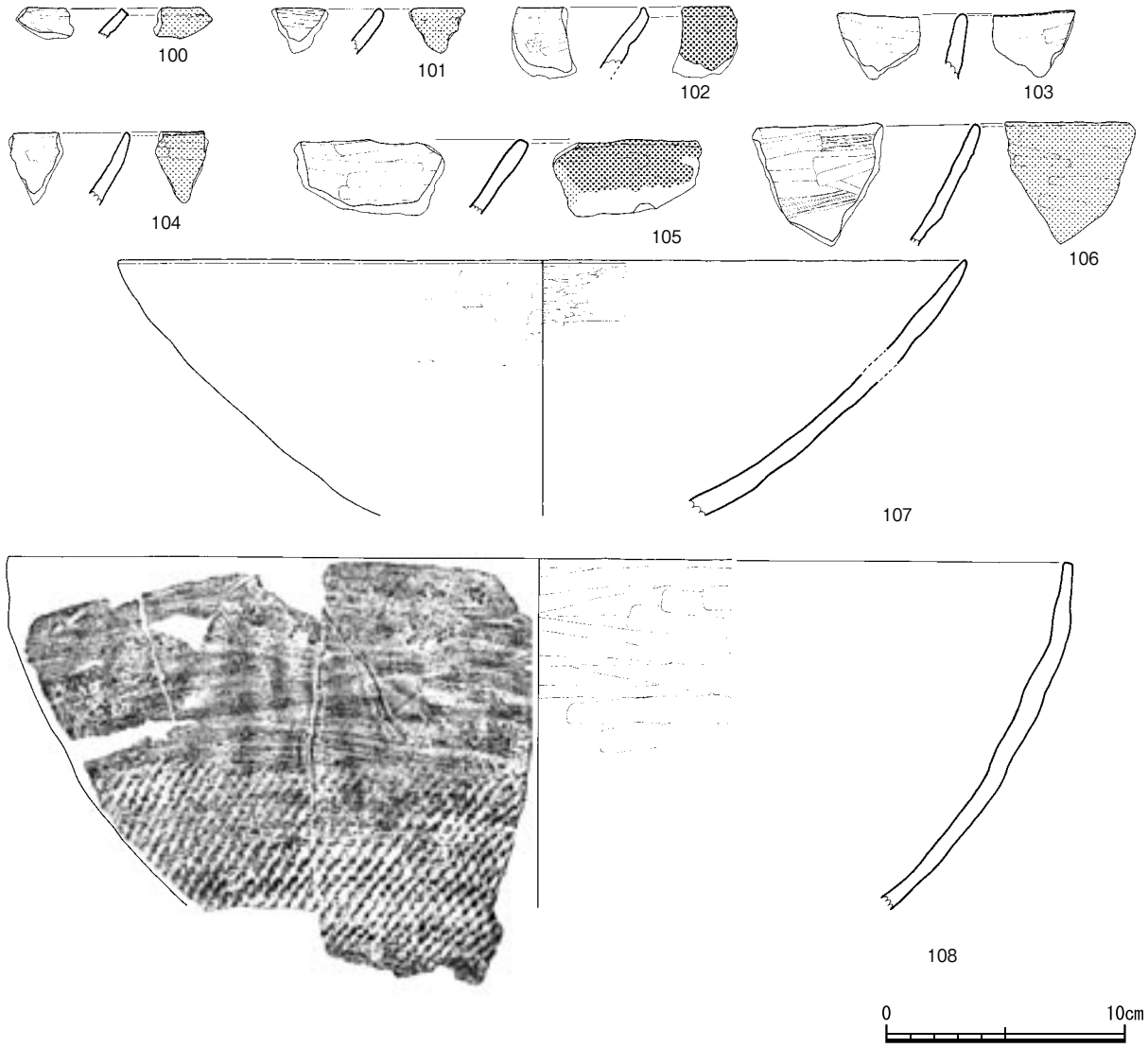
第120図　Ⅷ類土器実測図(１)



第121図　Ⅷ類土器実測図(２)

第22表　Ⅷ～Ⅸ類土器観察表(１)

挿図番号	図No.	取上番号(出土区/層位)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
120	72	1929(F-7/Ⅲ)	長	堅緻	7.5YR4/3 (褐)	7.5YR4/3 (褐)	研磨	研磨	口縁部,胎土密 (外)(内)沈線
	73	1997(F-6/Ⅳa)	長,角	良好	5Y4/1 (灰)	5Y3/1 (オリーブ黒)	研磨	研磨	口縁部,胎土密 (外)(内)沈線
	74	1486(F-7/Ⅲ)	長,石	堅緻	2.5Y2/1 (黒)	10YR4/3 (にぶい黄褐)	研磨	研磨	口縁部,胎土密 屈曲なし
	75	1974(F-7/Ⅲ)	石,長	堅緻	2.5Y5/1 (黄灰)	2.5Y6/3 (にぶい黄)	研磨	研磨	口縁部,胎土密 (外)(内)沈線
	76	1906(F-7/Ⅳa) 2138(F-7/Ⅳa)	長,石	堅緻	2.5Y4/1 (黄灰)	10YR4/2 (灰黄褐)	研磨	研磨	胴部,胎土密
	77	1484(F-7/Ⅲ)	長,角,石	堅緻	10YR3/1 (黒褐)	7.5YR4/3 (褐)	研磨	研磨	口縁部,胎土密 屈曲なし
	78	2111(F-6/Ⅳa)	長,石	堅緻	10YR3/1 (黒褐)	10YR3/1 (黒褐)	研磨	研磨	口縁部付近,胎土密
	79	2743(D-3/Ⅲ) 2749(D-3/Ⅲ)	長,石,角	堅緻	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y3/1 (黒褐)	研磨	研磨	口縁部付近,胎土密
	80	2750(D-3/Ⅲ) 2778(D-3/Ⅳa)	石,長	堅緻	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y4/1 (黄灰)	研磨	研磨	口縁部～胴部,胎土密 (外)(内)沈線
	81	31(F-7/Ⅲ)	長,石	堅緻	2.5Y4/1 (黄灰)	10YR4/2 (灰黄褐)	研磨	研磨	胴部,胎土密
	82	2081(F-6/Ⅳa)	石,角	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	2.5Y4/1 (黄灰)	-	研磨	胴部,胎土密
	83	1923(F-7/Ⅲ)	長,石	堅緻	7.5YR4/3 (褐)	7.5YR4/2 (灰褐)	研磨	研磨	胴部,胎土密
	84	2002(F-6/Ⅲ)	長,石	堅緻	2.5Y3/1 (黒褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	研磨	研磨	胴部,胎土密



第122図　Ⅸ類土器実測図

9　Ⅸ類土器(第122図，No100～108)

外面は工具等によるナデ，あるいは細条痕を伴う工具によるナデ等の粗い器面調整が施され，内面はヘラ研磨，あるいは工具等による丁寧なナデが施される浅鉢の一群である。図中のスクリーントーンは，うすい部分がスス，濃い部分が炭化物の付着を表す。ここでは，いわゆる二次被熱時に付着するものをスス，従来「吹きこぼれ」，「カーボン」，「こげつき」等呼称されていたものを炭化物としている。

No100～106は口縁部資料であるが，いずれも小破片で傾きは不明瞭である。No102,105は，外面に炭化物の付着が確認できるが，内面にはこげたような痕跡しか残っておらず，炭化物付着は確認できない。No106は器壁が薄く，内面は条痕を伴う工具によるナデが施される。

No107は口縁部から底部付近までの資料で，口径35.7cmである。底部付近は激しく熱を受けているが，外面，内面ともにスス及び炭化物の付着は確認できない。所々摩耗した部分があるが，内面の器面調整は他のⅨ類土器よりも丁寧である。

No108は口径44.4cmの大型の浅鉢である。外面は，胴部下半から底部付近にかけて編布が圧痕される。編布部から口縁部付近にかけてはやや肥厚し，口縁端部は若干細くなる。外面の調整は，工具によりナデられ，編布の一部をナデ消した跡も確認できる。外面はスス及び炭化物の付着が顕著で，炭化物は厚さが1mmを越えるところもある。内面は工具による丁寧なナデが施され，炭化物の付着は認められない。

第23表　Ⅷ～Ⅸ類土器観察表(２)

挿図番号	図No.	取上番号(出土区/層位)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
120	85	1976(F-6/Ⅲ) 1977(F-7/Ⅲ) 1987(F-6/Ⅲ) 2125(F-6/Ⅳa)	石,長	良好	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y4/1 (黄灰)	研磨	研磨	口縁部～胴部,胎土密 (内)沈線
	86	2029(F-6/Ⅲ)	長,石	良好	10YR4/1 (褐灰)	N2/ (黒)	研磨	研磨	胴部,胎土密
	87	2751(D-3/Ⅲ)	角,長,石	良好	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y3/1 (黒褐)	研磨	研磨	胴部,胎土密
	88	207(D-5/Ⅲ) 1494(F-7/Ⅲ)	長,角,石	良好	5Y3/1 (オリーブ黒)	5Y3/1 (オリーブ黒)	研磨	研磨	口縁部～胴部,剥落多 (外)(内)沈線
	89	2815(C-3/Ⅳa)	長,石,角	良好	5Y4/1 (灰)	5Y4/1 (灰)	研磨	研磨	胴部,剥落多
	90	49(F-7/Ⅲ)	角,長,石	良好	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y3/1 (黒褐)	研磨	研磨	胴部,胎土密
	91	2741(D-3/Ⅳa)	長,石,角	良好	2.5Y7/4 (浅黄)	2.5Y6/3 (にぶい黄)	研磨	研磨	口縁部付近～胴部 剥落多,胎土密
	92	2400(E-4/Ⅳa)	角,長,石	良好	2.5Y6/3 (にぶい黄)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	研磨	研磨	胴部,胎土密
	93	98(F-7/Ⅲ) 1941(F-7/Ⅲ) 2000(F-7/Ⅲ)	長,石	堅緻	10YR2/1 (黒)	10YR2/2 (黒褐)	研磨	研磨	口縁部～胴部,胎土密 (外)(内)沈線
	94	2053(F-6/Ⅲ) 2073(F-6/Ⅳa) 2109(F-6/Ⅳa) 2116(F-6/Ⅳa)	長,角	良好	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y6/3 (にぶい黄)	研磨	研磨	口縁部～胴部,胎土密 剥落多,(内)沈線
	95	2064(F-6/Ⅲ) 2074(F-6/Ⅲ) 2075(F-6/Ⅲ) 2110(F-6/Ⅳa)	石,角,長	堅緻	2.5Y3/1 (黒褐)	2.5Y3/2 (黒褐)	研磨	研磨	胴部,胎土密 剥落多
121	96	1516(F-7/Ⅲ)	石,角,長	良好	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y5/2 (暗灰黄)	研磨	研磨	胴部,胎土密 傾き不明
	97	2020(F-6/Ⅲ)	石,角,長	良好	5Y4/1 (灰)	5Y3/1 (オリーブ黒)	研磨	研磨	胴部,胎土密 (外)ススト付着,炭化物付着
	98	2007(F-6/Ⅲ) 2018(F-6/Ⅲ) 2062(F-6/Ⅲ) 2072(F-6/Ⅲ)	石,長	良好	2.5Y6/2 (灰黄)	2.5Y5/2 (暗灰黄)	研磨	研磨	胴部,胎土密 (外)ススト付着,炭化物付着
	99	2052(F-6/Ⅲ) 2054(F-6/Ⅲ) 2055(F-6/Ⅲ) 2056(F-6/Ⅲ) 2113(F-6/Ⅳa)	角,長,石	堅緻	2.5Y6/3 (にぶい黄)	10YR4/2 (灰黄褐)	研磨	研磨	底部,胎土密
122	100	2468(E-4/Ⅳa)	石,角,長	良好	5Y2/2 (オリーブ黒)	5GY2/1 (オリーブ黒)	研磨	工具によるナデ	口縁部 (外)ススト付着
	101	2098(E-6/Ⅳa)	長,角	良好	5YR4/4 (にぶい赤褐)	N2/ (黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)ススト付着
	102	1931(F-7/Ⅲ)	石,長,角	良好	7.5Y2/1 (黒)	7.5GY2/1 (緑黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)ススト付着
	103	38(F-7/Ⅲ)	石,角,長	良好	10YR3/1 (黒褐)	10YR3/1 (黒褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)ススト付着
	104	1993(F-6/Ⅳa)	石,長,角	良好	5YR4/4 (にぶい赤褐)	7.5GY2/1 (緑黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)ススト付着,炭化物付着
	105	2717(E-3/Ⅲ)	石,長,角	良好	10YR4/2 (灰黄褐)	N2/ (黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)ススト付着,炭化物付着
	106	1992(F-6/Ⅲ) 2117(F-6/Ⅳa)	石,長,角	良好	5YR4/4 (にぶい赤褐)	7.5GY2/1 (緑黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)ススト付着,炭化物付着
	107	1439(E-13/Ⅲ) 1442(F-13/Ⅲ) 1540(E-13/Ⅳa) 1541(E-13/Ⅳa) 1545(E-13/Ⅳa) 1558(E-13/Ⅳa) 1563(F-13/Ⅳa) 1569(F-13/Ⅳa) 1570(F-13/Ⅳa) 1577(F-13/Ⅳa) 1827(E-12/Ⅳa)	長,角,石	堅緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	2.5Y6/2 (灰黄)	研磨	工具によるナデ	口縁部～底部付近 胎土密
	108	2(D-9/Ⅲ) 3(D-9/Ⅲ) 4(D-9/Ⅲ) 747(D-9/Ⅲ) 748(D-9/Ⅲ)	石,角,長	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	10YR5/4 (にぶい黄褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)ススト付着,炭化物付着 組織痕

10　X類土器(第123～125図，No109～167)

精製の深鉢は確認されなかったため，粗製の深鉢のみ掲載した。深鉢は，口縁部の形態，突帯の有無等で細分が可能である。図中のスクリーントーンについては，Ⅸ類土器と同様である。以下分類ごとに述べていく。

XA類土器

外開きに立ち上がる口縁部をなし，頸部に明瞭な稜線をもつものである。本遺跡で確認できたのは２点のみであり，全体の器形は明らかではないが，おそらく肩部を有し，頸部から肩部にかけての距離がNo125等と比較して長いと考えられる。No109,110ともに摩耗が激しく，特に外面はスス及び炭化物が付着しているため，器面調整は明瞭ではない。ただ，内面の一部には研磨とみられる痕跡も残り，丁寧な器面調整が施された可能性が高い。口縁端部には，工具によるナデの痕が残り，平坦面を作ろうとした意図がうかがえる。調整，胎土等から，同一個体の可能性が高い。

XB類土器

口縁部が外反し，肩部に段を有する一群でX類土器の中で最も点数が多い。波状口縁をもつもの，頸部に稜線をもつものともたないものがある。

No113は，波状口縁で，外面，内面ともに工具によるナデが施され，外面全体にススが付着している。No111は，肩部にリボン状突起が施され，No113の一部の可能性がある。突起は丁寧にナデられる。No112は，リボン状突起が変化し，痕跡器官として口縁部に残ったものと考えられる。

No125,126,137は，頸部と胴部の屈曲部が近接し，頸部の屈曲が強調される。No125は，外面は入念にナデ，内面も工具によるナデが丁寧に施される。外面の肩部を中心にスス及び炭化物の付着が認められる。No137も肩部から胴部下にかけてスス及び炭化物の付着が認められる。No125ほど明瞭ではないが，頸部に稜線を有し，口縁部は直線的に外反する。No126はNo137と同一個体の可能性が高い。

No127,128,131,132,140等は，頸部から口縁部へ緩やかに外反していくものである。No128は，口径30.9cmで，外面のほぼ全体にスス，口縁部の一部に炭化物が付着する。内，外面ともに工具によるナデが比較的丁寧に施されている。No131の口径は，34.8cmである。外面に貝殻と考えられる条痕が一部残り，一次的な器面調整がなされた後，工具によるナデが二次的に施された過程が看取できる。No132も外面は条痕主体で上からヘラナデを重ねるが，条痕は残される。口径は40.8cmで，かなり大型の深鉢である。No140も大型の土器で肩部の径から推測すると，口径50cmを超える可能性がある。

No114～116,No118～123は，口縁部であるが，傾き等に若干疑問が残る。No118は，外面に一部条痕が残り，口縁部が波状になる可能性がある。No121は，直線的に外反する口縁部で，頸部に稜線を有するものと類似している。内面は，一部研磨が施されている。

No117,124,129,130,133,135,136,141,142は，屈曲部である。No136の内面は，工具による丁寧なナデが施されている。No142の外面は一部ヘラ研磨が施され，内面には工具により頸部の稜線を作ろうとした痕跡がみられる。

No134は，補修孔を試みているが，貫通していない。両面から，孔をあけようとした痕跡がみられる。傾きについては不明である。

No138,139は，胴部下半と考えられる資料である。No138は，内，外面ともに貝殻腹縁による器面調整後，工具によるナデが施されているが，内面よりも外面に明瞭な貝殻条痕が残る。No139も工具によるナデが一部確認できるが，内，外面ともに明瞭な貝殻条痕が残っている。

XC類土器

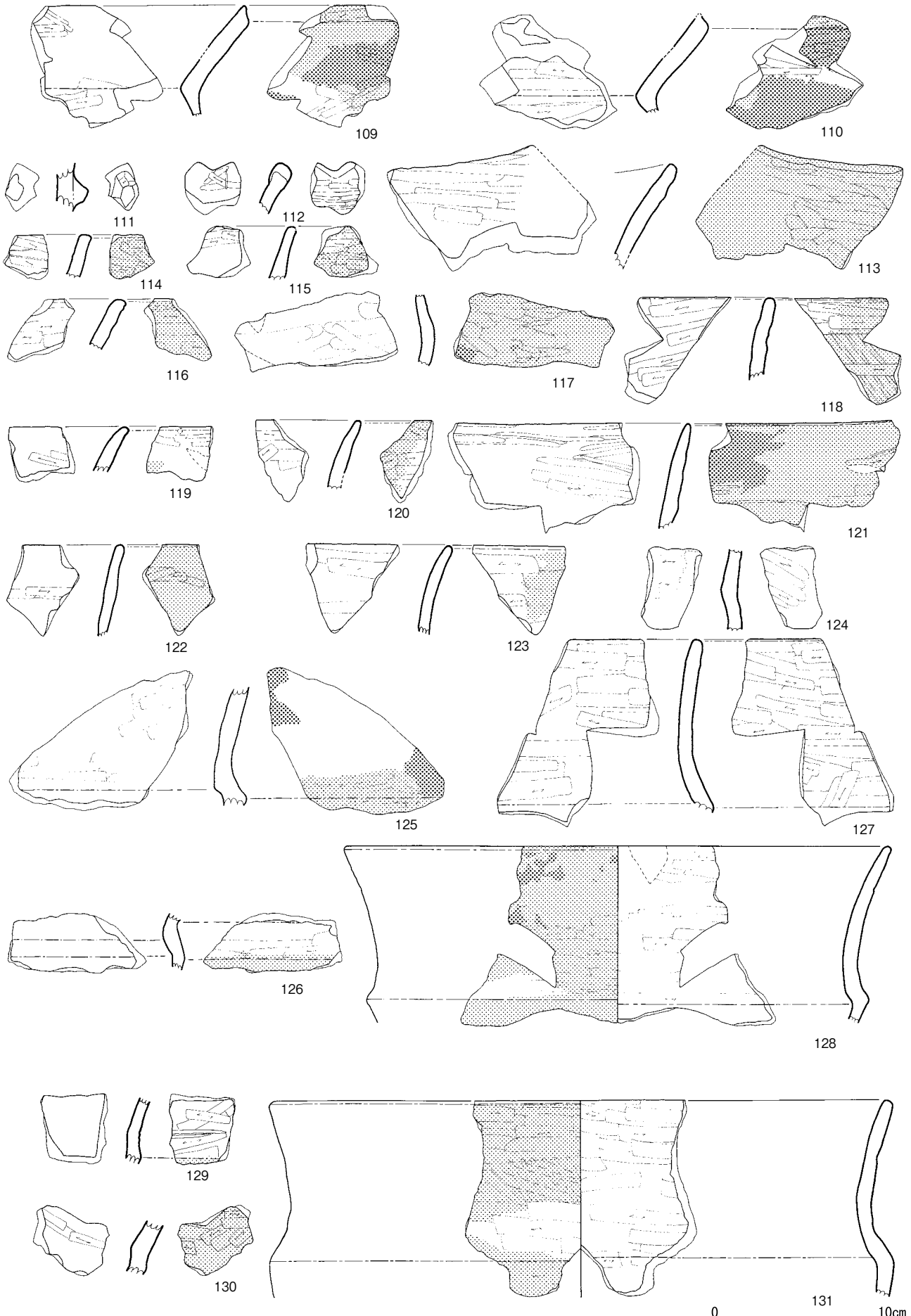
頸部及び胴部に屈曲がなく，底部からそのまま外傾していく口縁部をなすものである。No144は，外面に工具によるナデが施されているが，口縁部付近は，比較的調整が丁寧であるのに対し，胴部から底部付近にかけては粗雑になる傾向がある。外面の底部付近には，貝殻によるものと考えられる条痕が一部残っている。内面も，口縁部付近は比較的丁寧なナデが施され，口径は26.3cmである。No143は，胎土，調整等からNo144と同一個体である可能性が高い。

XD類土器

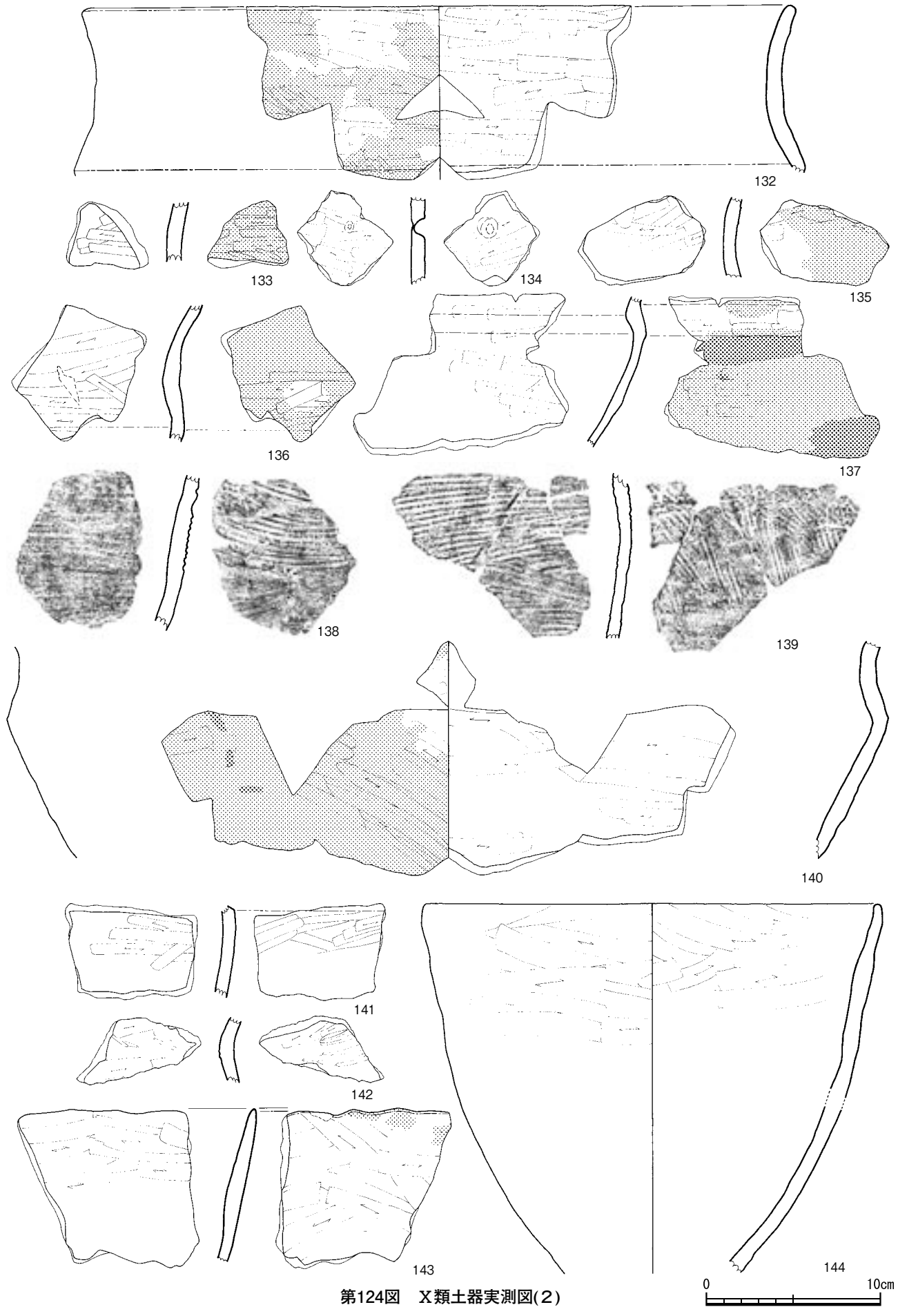
口縁部に肥厚帯をもつものや，断面三角形，台形に近い形状の突帯を１条貼り付けるものである。No145は，口縁端部を平坦にするとともに，外面に向かって若干肥厚させたものである。No146は，台形に近い形状の貼付突帯をもつものである。平坦な口縁端部をなし，接合面をみるとNo145と同様に外面に向かって若干肥厚させた後，突帯を貼り付けたことが確認できる。No147は口縁部に幅広の肥厚帯をもつ。No148は口縁端部を若干肥厚させたもので，口縁部が内弯する可能性がある。外面は異なる工具，あるいは同一の工具でも異なる部分での器面調整が施されている。No149～152は，断面三角形の貼付突帯を口縁直下に巡らせている。口縁端部に肥厚はみられない。No150は突帯の下部にススの付着が認められる。No151は若干内傾する口縁部をもち，その直下に貼付突帯を巡らせている。口縁端部から突帯及び内面の口縁直下にかけて指で押さえた痕跡がみられる。内，外面ともに調整は丁寧で，外面の一部には研磨の痕跡も認められる。No152は，口縁端部から突帯まで比較的距離がある。また，突帯の断面は角度の開いた三角形を呈している。

XE類土器

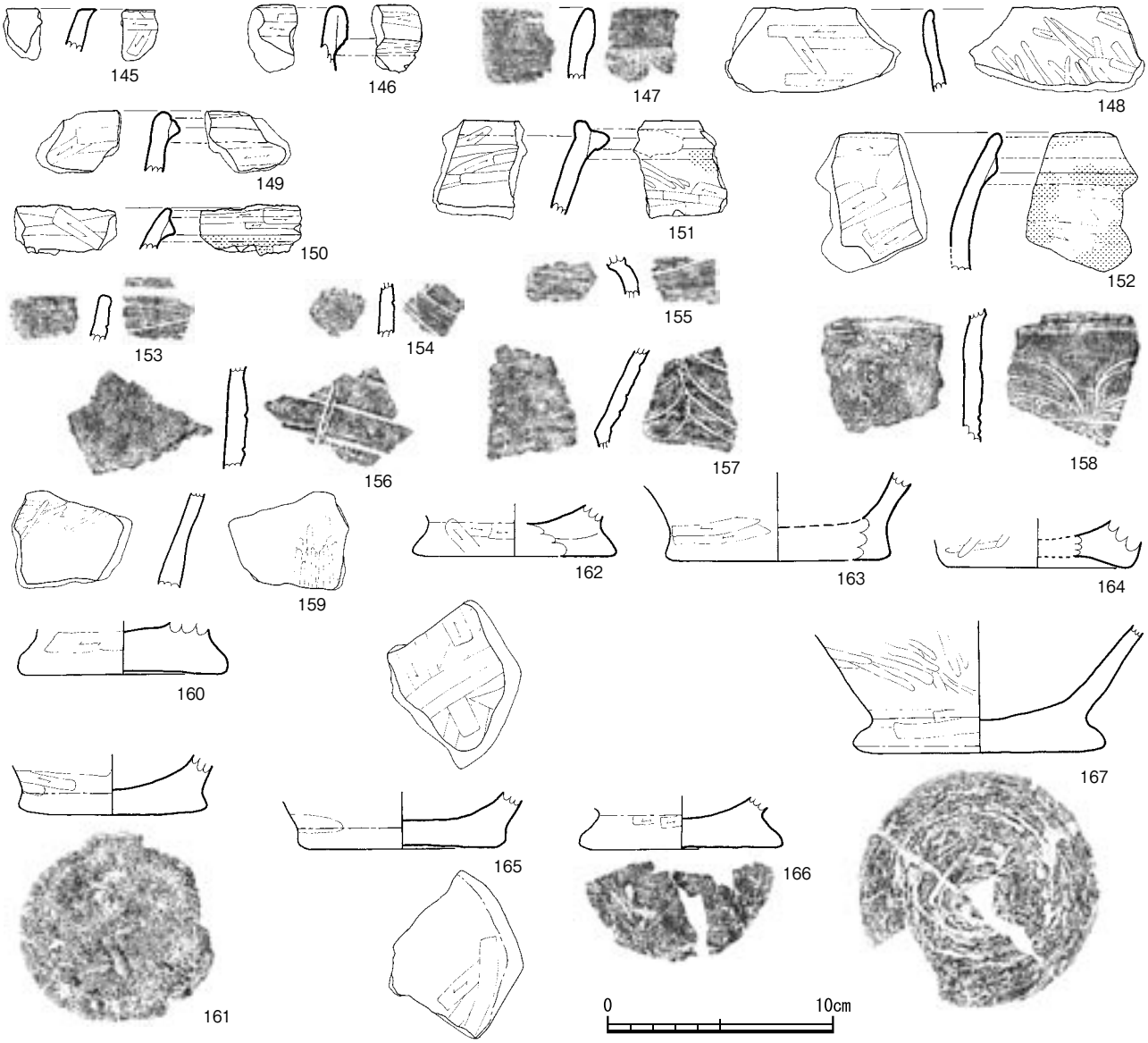
No153～158は有文の粗製深鉢の一部と考えられるものである。格子状のもの(No156)，あるいはその一部と考えられるもの(No153～155)，葉脈状のもの(No157,158)があるが，いずれもヘラ状の工具によるものである。内，外面は工具によるナデが施され，外面にはススの付着が認められる。どの資料も小破片のため，全体の器形等明らかではない。



第123図　X類土器実測図(１)



第124図　X類土器実測図(2)



第125図　X類土器実測図(３)

X類土器底部(第125図，No159～167)

No159～167は，X類土器の底部，もしくは底部付近の資料である。底部は円盤貼付けで，裾広がりに安定する形のものがつく。全ての資料で，底部側面の接合部分に指頭または工具による強いナデが施される。平底がほとんどであるが，No164は若干上げ底を呈する。また，接合部分に沿って横方向に亀裂を生じている資料が多い。No159は底部付近と考えられる資料で，内，外面ともに一部丁寧な研磨が施される。No160は激しく熱を受けて赤化しており，接合部分での亀裂が顕著である。No165は，底部外面及び内面に工具によるナデが施されている。No162は，底部側面の接合部分に指頭による調整を行った後，工具による強いナデを施している。No167は，底部側面にヘラ状工具による器面調整が施される。底部外面には，組織痕が圧痕する。

第24表　X類土器観察表(１)

挿図番号	図No.	取上番号(出土区/層位)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
123	109	1839(F-12/Ⅳa) 1853(F-12/Ⅳa)	長,石,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部,(外)(内)スス付着 炭化物付着
	110	1838(F-12/Ⅳa) 1840(F-12/Ⅳa)	長,石,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	2.5Y4/1 (黄灰)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部,(外)スス付着 炭化物付着
	111	1978(F-6/Ⅳa)	角,長,石	良好	10YR4/2 (灰黄褐)	2.5Y3/2 (黒褐)	-	工具によるナデ	口縁部付近 リボン状突起
	112	2772(E-4/Ⅳa)	角,長,石	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR3/4 (暗褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 リボン状突起

第25表　X類土器観察表(２)

挿図番号	図No.	取上番号(出土区/層位)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
123	113	2035(F-6/Ⅲ) 2037(F-6/Ⅲ) 2042(F-6/Ⅲ)	角,長,石	良好	5YR4/4 (にぶい赤褐)	7.5Y2/1 (黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部,波状口縁 (外)ス ス付着
	114	2132(F-7/Ⅳa)	角,長,石	良好	10Y2/1 (黒)	7.5Y3/1 (オリーブ黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)(内)ス ス付着
	115	1949(F-7/Ⅲ)	長,石,角	良好	5Y4/1 (灰)	7.5YR4/4 (褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)(内)ス ス付着
	116	2034(F-6/Ⅲ)	角,長,石	良好	2.5Y3/1 (黒褐)	5Y2/1 (黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)(内)ス ス付着
	117	2433(E-4/Ⅳa)	石,角,長	良好	2.5Y4/2 (暗灰黄)	10YR3/2 (黒褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部 (外)ス ス付着
	118	2036(F-6/Ⅲ) 2122(F-6/Ⅳa)	角,長,石	良好	7.5YR4/4 (褐)	7.5YR4/6 (褐)	工具によるナデ	工具によるナデ 貝殻条痕(斜位)	口縁部,波状口縁 (外)炭化物付着
	119	1560(F-13/Ⅳa)	長,角,石	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR5/2 (灰黄褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部
	120	2102(E-6/Ⅳa)	長,石,角	良好	5Y3/2 (オリーブ黒)	2.5Y3/3 (暗オリーブ褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)(内)ス ス付着
	121	2300(E-4/Ⅲ) 2384(E-4/Ⅳa) 2730(E-3/Ⅲ)	長,角,石	良好	5YR4/4 (にぶい赤褐)	5Y2/1 (黒)	工具によるナデ 研磨	工具によるナデ	口縁部 (外)ス ス付着 (内)一部ミガキ
	122	2104(F-6/Ⅳa)	長,角,石	良好	7.5YR4/3 (褐)	7.5Y2/1 (黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)炭化物付着
	123	1238(E-14/Ⅲ) 1502(F-7/Ⅲ) 1826(E-12/Ⅳa)	長,角,石	良好	2.5Y6/3 (にぶい黄)	2.5Y5/2 (暗灰黄)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部,剥落多 (外)ス ス付着
	124	2716(E-3/Ⅲ)	長,角,石	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部
	125	3182(B-8/Ⅳa) 3183(B-8/Ⅳa)	長,角,石	良好	7.5YR4/4 (褐)	7.5YR3/3 (暗褐)	工具によるナデ	工具によるナデ 研磨	口縁部付近 (外)(内)ス ス付着 (外)炭化物付着
	126	3204(B-8/Ⅳa)	長,石,角	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	5YR5/6 (明赤褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部 (外)ス ス付着
	127	1980(F-6/Ⅲ) 1984(F-6/Ⅲ)	長,角,石	良好	7.5YR4/3 (褐)	2.5Y3/1 (黒褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部～胴部 (外)ス ス付着
	128	212(D-14/Ⅲ) 1696(D-14/Ⅳa) 1697(D-14/Ⅳa) 1699(D-14/Ⅳa) 1708(D-14/Ⅳa)	長,角,石	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	10YR4/2 (灰黄褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部～胴部 (外)ス ス付着,炭化物付着
	129	1832(E-13/Ⅳa)	長,角,石	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR5/1 (褐灰)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部付近 (外)ス ス付着
	130	2060(F-6/Ⅲ)	角,長,石	良好	7.5YR4/3 (褐)	10YR3/1 (黒褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部 (外)ス ス付着
	131	2135(F-7/Ⅳa) 2137(F-7/Ⅳa) 2147(F-7/Ⅳa)	長,角,石	良好	5YR4/6 (赤褐)	5YR4/4 (にぶい赤褐)	工具によるナデ	工具によるナデ 貝殻条痕	口縁部～胴部 (外)(内)ス ス付着 (外)炭化物付着
124	132	63(F-7/Ⅲ) 1523(F-7/Ⅲ) 1958(F-7/Ⅲ) 2048(F-6/Ⅲ) 2057(F-6/Ⅲ) 2114(F-6/Ⅳa)	長,角,石	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	5YR4/4 (にぶい赤褐)	工具によるナデ	工具によるナデ 貝殻条痕	口縁部～胴部 (外)(内)ス ス付着 (外)炭化物付着
	133	2079(F-6/Ⅲ)	長,角	良好	7.5YR4/3 (褐)	7.5Y2/1 (黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部 (外)ス ス付着
	134	2019(F-6/Ⅲ)	角,長,石	良好	7.5YR4/3 (褐)	7.5YR3/1 (黒褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部 穿孔あり
	135	61(F-7/Ⅲ)	長,角,石	良好	7.5YR4/4 (褐)	7.5YR4/4 (褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部 (外)ス ス付着
	136	62(F-7/Ⅲ) 1525(F-7/Ⅲ)	長,角,石	良好	5Y2/1 (黒)	5Y3/1 (オリーブ黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部 (外)ス ス付着
	137	3196(B-8/Ⅳa) 3199(B-8/Ⅳa) 3201(B-8/Ⅳa) 3202(B-8/Ⅲ) 3203(B-8/Ⅳa) 3209(B-8/Ⅳa) 3224(C-8/Ⅳa)	長,角	良好	5YR4/6 (赤褐)	5YR4/6 (赤褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部(屈曲部) (外)(内)ス ス付着 (外)炭化物付着
	138	1534(F-7/Ⅲ)	石,長	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	工具によるナデ 貝殻条痕	工具によるナデ 貝殻条痕	胴部
	139	2420(E-4/Ⅳa) 2470(E-4/Ⅳa)	石,長,角	良好	10YR4/3 (にぶい黄褐)	2.5Y3/2 (黒褐)	貝殻条痕	工具によるナデ 貝殻条痕	胴部 (外)ス ス付着
	140	1533(F-7/Ⅲ) 1950(F-7/Ⅲ) 2030(F-6/Ⅲ) 2039(F-6/Ⅲ) 2040(F-6/Ⅲ) 2120(F-6/Ⅳa) 2121(F-6/Ⅳa)	長,角,石	良好	10YR4/3 (にぶい黄褐)	7.5YR3/3 (暗褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部 (外)ス ス付着,炭化物付着

第26表　X類土器観察表(3)

挿図番号	図No.	取上番号(出土区/層位)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
124	141	209(---/Ⅲ)	長,石,角	良好	2.5Y4/2 (暗灰黄)	10YR3/1 (黒褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	胴部,(屈曲部) (外)ススト付着,炭化物付着
	142	3230(C-8/Ⅳa)	長.角	良好	10YR4/3 (にぶい黄褐)	10YR3/2 (黒褐)	工具によるナデ	工具によるナデ ,研磨	胴部(屈曲部)
	143	1779(E-11/Ⅳa) 1781(E-11/Ⅳa)	長,角	良好	5YR5/6 (明赤褐)	5YR5/6 (明赤褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部 (外)炭化物付着,砂粒細
	144	144(E-11/Ⅲ) 147(E-11/Ⅲ) 148(E-11/Ⅲ) 149(E-11/Ⅲ) 150(E-11/Ⅲ) 1768(E-10/Ⅳa) 1771(E-11/Ⅳa) 1772(E-11/Ⅳa) 1773(E-11/Ⅳa) 1774(E-11/Ⅳa) 1775(E-11/Ⅳa) 1776(E-11/Ⅳa) 1777(E-11/Ⅳa) 1783(E-11/Ⅳa) 1855(E-11/Ⅳa) 1856(E-11/Ⅳa) 1857(E-11/Ⅳa)	長,角	良好	5YR5/6 (明赤褐)	5YR5/6 (明赤褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部,砂粒細
125	145	2785(E-3/Ⅳa)	角,長,石	良好	5Y2/1 (黒)	5Y3/2 (オリーブ黒)	工具によるナデ	工具によるナデ	口縁部,口縁部平坦
	146	2746(D-3/Ⅲ)	長,石,角	良好	10YR3/2 (黒褐)	10YR4/2 (灰黄褐)	工具によるナデ	工具によるナデ 貼付突帯	口縁部 幅広の貼付突帯
	147	2448(D-4/Ⅳa)	長,石,角	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	10YR5/3 (にぶい黄褐)	工具によるナデ	工具によるナデ 貼付突帯	口縁部 幅広の貼付突帯
	148	1928(F-7/Ⅲ)	長,石,角	良好	5YR5/6 (明赤褐)	5YR5/6 (明赤褐)	工具によるナデ	工具によるナデ 貝殻条痕	口縁部
	149	1790(D-11/Ⅳa)	長,石,角	良好	2.5Y4/2 (暗灰黄)	2.5Y3/2 (黒褐)	工具によるナデ	工具によるナデ 貼付突帯	口縁部 突帯断面半円状
	150	1531(F-7/Ⅲ)	長,角,石	良好	7.5YR6/6 (橙)	7.5YR6/6 (橙)	工具によるナデ	工具によるナデ 貼付突帯	口縁部,(外)ススト付着 突帯断面三角形
	151	2838(B-6/Ⅳa)	長,石,角	良好	10Y2/1 (黒)	5Y3/1 (オリーブ黒)	工具によるナデ	工具によるナデ 貼付突帯	口縁部,突帯断面三角形 (内)強いナデ
	152	1491(F-7/Ⅲ)	長,石,角	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	工具によるナデ	工具によるナデ 貼付突帯	口縁部,突帯断面三角形 (外)炭化物付着
	153	2139(F-8/Ⅲ)	角,長,石	良好	10YR3/2 (黒褐)	5Y3/1 (オリーブ黒)	工具によるナデ	工具によるナデ,ヘラ状工具による沈線	口縁部,(外)ススト付着
	154	2140(F-8/Ⅲ)	長,角	良好	7.5YR4/3 (褐)	5Y2/1 (黒)	工具によるナデ	工具によるナデ,ヘラ状工具による沈線	胴部,(外)ススト付着
	155	95(F-7/Ⅲ)	角,長,石	良好	7.5YR3/4 (暗褐)	7.5Y2/1 (黒)	工具によるナデ	工具によるナデ,ヘラ状工具による沈線	胴部(屈曲部),(外)ススト付着
	156	1981(F-6/Ⅲ)	角,長,石	良好	2.5Y3/1 (黒褐)	10YR4/2 (灰黄褐)	工具によるナデ	工具によるナデ,ヘラ状工具による沈線	胴部,(外)ススト付着
	157	1937(F-7/Ⅲ)	角,長,石	良好	7.5YR3/3 (暗褐)	10YR3/1 (黒褐)	工具によるナデ	工具によるナデ,ヘラ状工具による沈線	胴部,(外)ススト付着
	158	2816(C-3/Ⅳa)	長,石,角,軽	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	7.5YR3/4 (暗褐)	工具によるナデ	工具によるナデ,ヘラ状工具による沈線	胴部(屈曲部) (外)ススト付着
	159	1902(D-18/Ⅲ)	長,角,石,軽	良好	2.5Y6/4 (にぶい黄)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	工具によるナデ 研磨	研磨	底部付近
	160	1952(F-7/Ⅲ) 2022(F-6/Ⅲ)	石,長,角	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	工具によるナデ	工具によるナデ	底部,赤化 (外)強いナデ
	161	1688(E-14/Ⅳa)	石,長,角,軽	良好	5GY2/1 (オリーブ黒)	5YR4/6 (赤褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	底部 (外)強いナデ
	162	92(F-7/Ⅲ) 1932(F-7/Ⅲ)	石,長,角	良好	5YR5/6 (明赤褐)	5YR5/6 (明赤褐)	-	工具によるナデ	底部,(外)強いナデ 剥落多
	163	1447(E-13/Ⅲ) 1548(E-13/Ⅳa) 1554(E-13/Ⅳa)	石,長,角	良好	5GY2/1 (オリーブ黒)	5YR5/4 (にぶい赤褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	底部 (外)強いナデ
	164	2757(D-3/Ⅲ)	長,角,石	良好	5YR5/6 (明赤褐)	2.5Y5/3 (黄褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	底部,赤化 (外)強いナデ
	165	2759(D-3/Ⅲ)	長,角,石	良好	2.5Y5/3 (黄褐)	7.5YR4/4 (褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	底部 (外)強いナデ
	166	108(F-7/Ⅲ)	石,長,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	5YR5/6 (明赤褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	底部,(外)強いナデ,ススト付着
	167	3192(B-8/Ⅳa) 3193(B-8/Ⅳa) 3195(B-8/Ⅳa) 3200(B-8/Ⅳa) 3207(---/Ⅳa) 3208(B-8/Ⅳa) 3211(C-8/Ⅳa) 3214(C-8/Ⅳa) 3219(C-8/Ⅲ)	石,長,角	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	工具によるナデ	工具によるナデ	底部 (外)強いナデ 組織痕あり

第４節　縄文時代の石器

縄文時代の石器は，Ⅶ層，Ⅵa層，Ⅴa層，Ⅳa層，Ⅲ層から出土している。

石器の時期や組成については，出土層位や平面分布及び共伴する土器資料から，所属時期を判断した。

１　Ⅶ～Ⅵa層出土石器(第127～132図)

Ⅶ～Ⅵa層からは48点の石器が出土し，打製石鏃10点(No1～9,11)，磨製石鏃１点(No10)，抉入石器１点(No12)，石錐１点(No13)，ハンマーストーン１点(No14)，磨石・敲石４点(No15～18)，石皿４点(No19～22)が出土している。

石器の分布は，土器の分布と基本的に重なり，Ⅶ層段階の土器に平行すると判断できる。

①石鏃(第127図，No1～11)

合計10点の出土を確認している。

石鏃No１は，やや浅い抉りをもつ三角形鏃で，整形剥離は丁寧である。先端部は鋭い。No2は浅い抉りの長身の鏃で，裏面に素材剥離面を残すが整形剥離は丁寧で，全体を薄く仕上げる。先端部は鋭い。No3は先端部と基部が破損し，断面はやや厚い。No4は，舌状をなす基部にＵ字状の深い抉りをもつ長身の鏃で，整形剥離は丁寧であるが，先端部は欠損する。

No5は初期の石鏃製作段階のもので，素材剥離面を多く残す。背面の左側縁の平坦面が，素材剥片の打面に相当する。厚手の素材剥片で，打瘤や背面を薄くする調整剥離を試みているが，背面ではヒンジフラクチャー，打瘤除去ではステップフレイキングを生じ，製作を中断している。No6は両面に素材剥離面を残し，製作途上で放棄したとみられる。

No7は，やや深い抉りをもつ三角形鏃で背面に素材剥片が一部残るが，両面に施された整形剥離は丁寧である。先端部と左側縁の基部が欠損する。

No8は，姫島産の黒曜石を用い，深い抉りをもつ三角形鏃で，両面に素材面を残した整形である。基部の右側の欠損は，アクシデントとみられる。No9は深い抉りをもつ長身鏃で，整形剥離は丁寧であるが，先端部と基部を欠損する。

No10は，全面磨製の石鏃で両側縁部は，斜めに研磨され鋭くとがり，基部は緩やかに内弯し磨かれる。

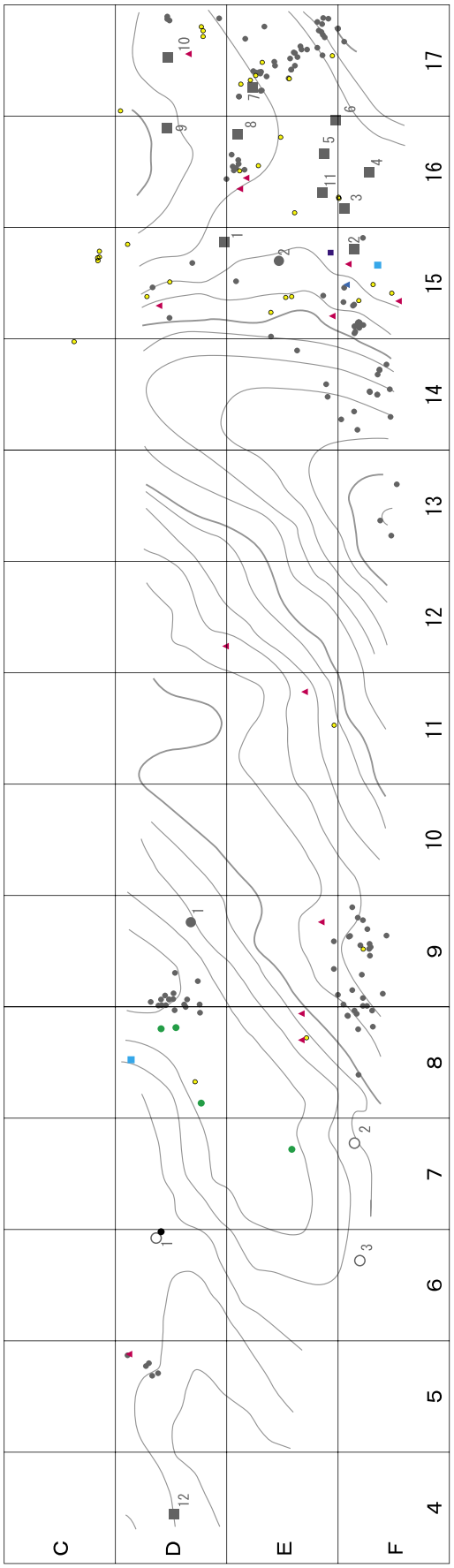
No11は，左側縁部がアクシデントで欠損したものである。

②抉入石器(第127図，No12)

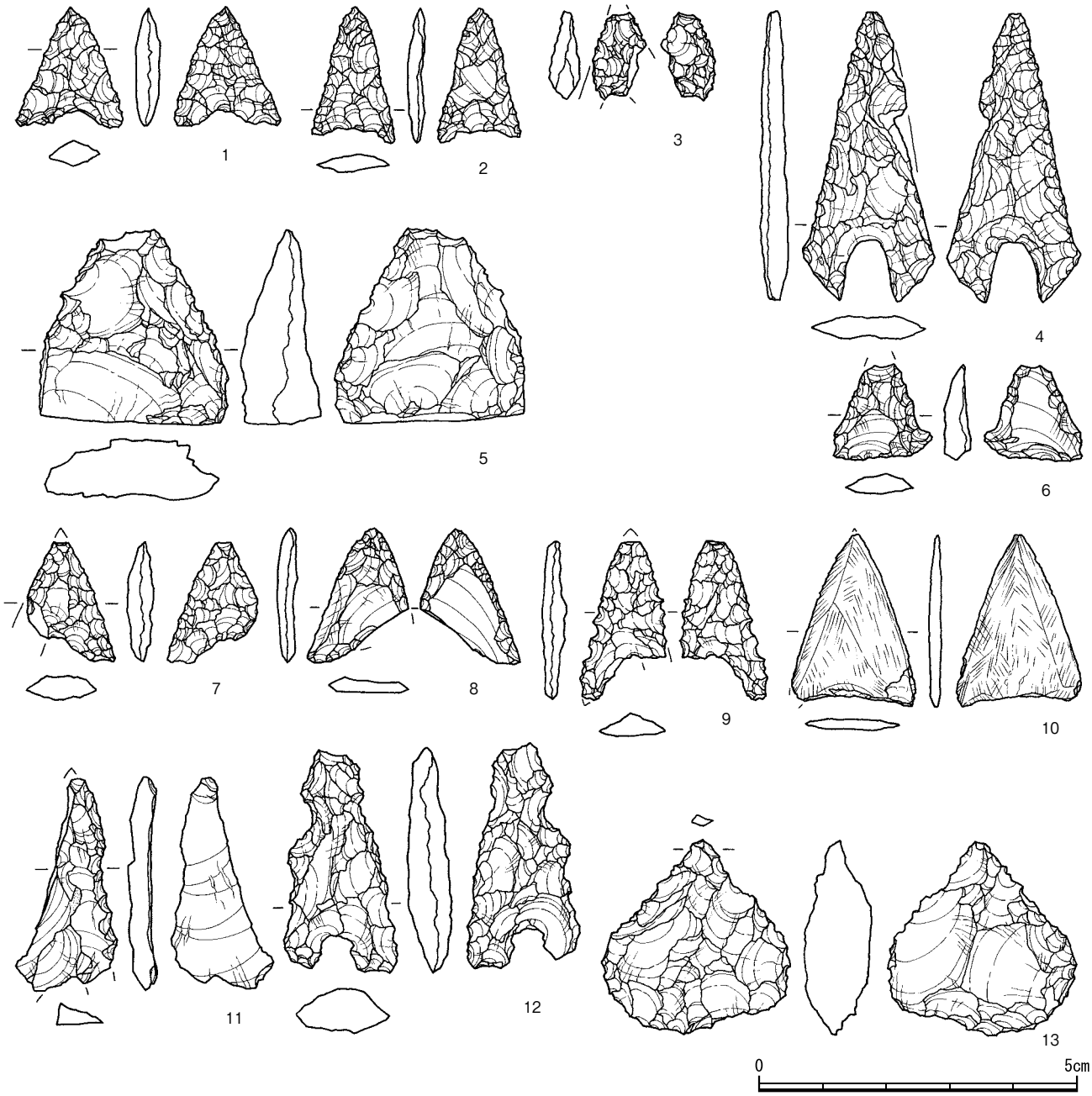
No12は，長身鏃の形態をなすが，二側縁と基部に抉入部を施すことから判断した。特に，基部の抉入は円形に丁寧に整形されている。

③石錐(第127図，No13)

No13は，腹面の素材面は全く残さない。体部は凸レンズ状に厚く，正面は分銅形に膨らむ。先端部は薄く，鋭い整形で作り出す。



第126図　Va～Ⅶ層石器分布図(1/600)



第127図　Ⅶ層出土石器実測図(１)

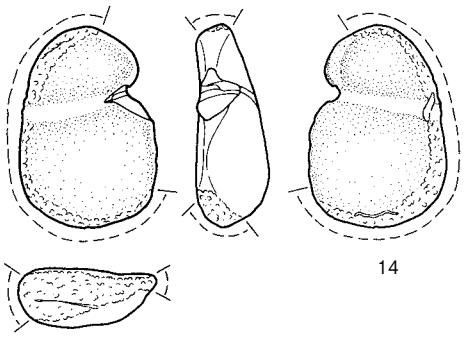
④ハンマーストーン(第128図，No14)

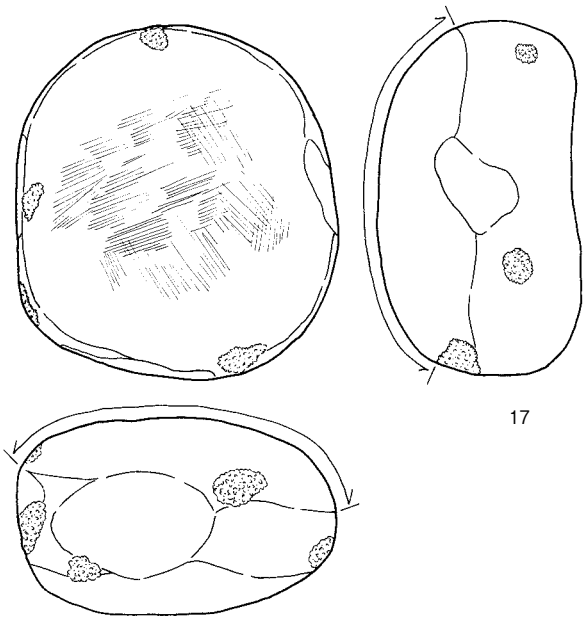
No14は，小判形の扁平礫の周囲に敲打痕あるいはリタッチャー痕を残す。

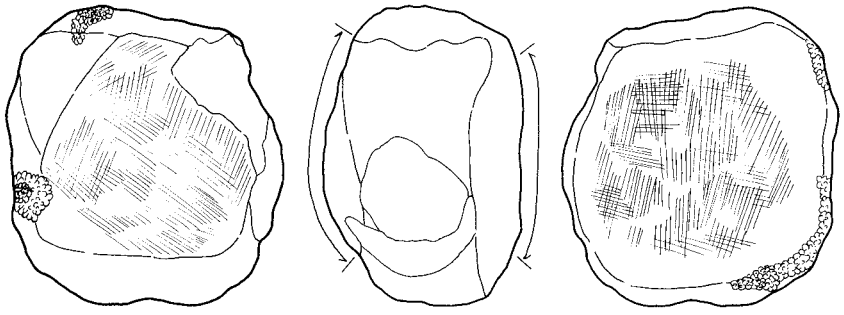
⑤磨石・敲石(第128,129図，No15～18)

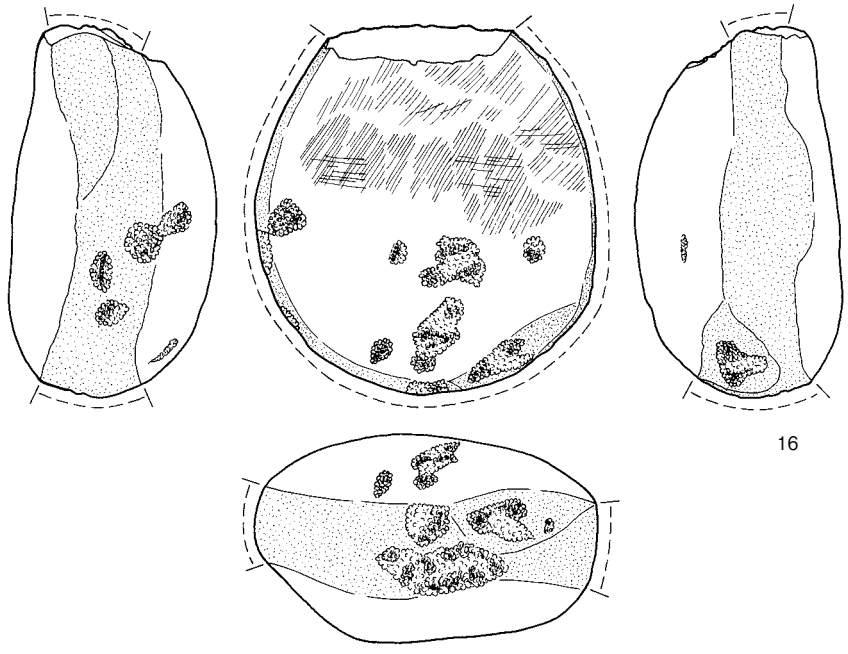
敲打痕と平滑面の両機能を兼ねたものを取り扱った。扁平な礫の使用は，No16,17のみである。

No15は，両面が平滑面，側縁や礫のコーナー部に敲打痕が残る。No16は，主に両面上半分に平滑面，側縁から下縁部に集中的に敲打痕が残る。上面の欠損も敲打のアクシデントとみられる。No17は，背面に平滑面，敲打痕が先端部と両側縁下部に観察できる。No18は，No15と類似した使用がみられる。



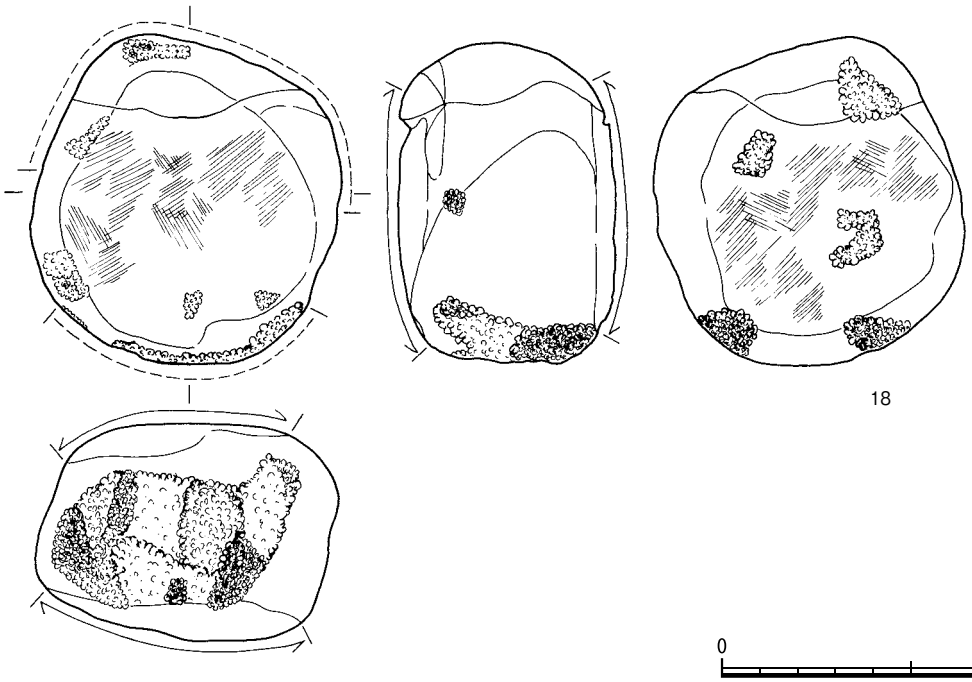








第128図　Ⅶ層出土石器実測図(２)



第129図　Ⅶ層出土石器実測図(３)

第27表　Ⅵ～Ⅶ層出土石器観察表(１)

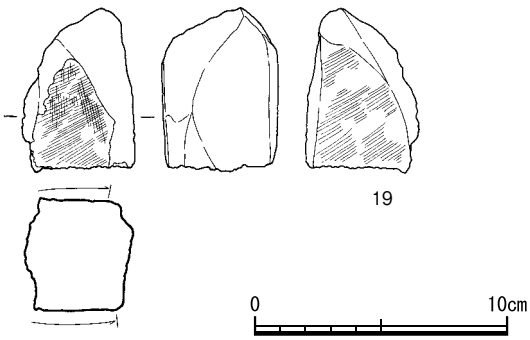
挿図番号	報告番号	取上番号 (出土区/層位)	器種	石材L1	石材L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
127	1	2607(D-15/Ⅶ)	石鏃	OB	3	18.3	16.6	3.9	0.81	-
	2	2246(E-9/Ⅶ)	石鏃	SH	-	20.9	12.9	2.8	0.49	-
	3	2612(E-15/Ⅶ)	石鏃	OB	3	(13.6)	(9.0)	5.0	(0.37)	-
	4	2683(E-16/Ⅶ)	石鏃	AN	-	45.8	21.3	4.3	(3.08)	-
	5	2628(F-15/Ⅶ)	石鏃	AN	-	30.5	29.0	12.0	9.62	-
	6	1873(F-15/Ⅴa)	石鏃	SH	-	(15.1)	15.4	3.8	(0.68)	-
	7	1814(E-8/Ⅵa)	石鏃	CC	-	(18.5)	(15.1)	4.0	(0.87)	-
	8	2377(D-12/Ⅵa)	石鏃	OB	8	(20.1)	(17.0)	3.0	(0.64)	-
	9	2681(E-16/Ⅵb)	石鏃	AN	-	(25.2)	(13.6)	3.8	(0.88)	-
	10	2663(D-17/Ⅵb)	石鏃	SH	-	(27.2)	(19.6)	1.7	(0.98)	-
	11	2258(E-8/Ⅶ)	石鏃	CC	-	(33.8)	(15.8)	(4.0)	(1.25)	-
	12	2596(D-5/Ⅶ)	石鏃	AN	-	35.4	17.7	6.8	3.09	-
	13	2195(E-11/Ⅵa)	石鏃	AN	-	29.9	29.4	10.7	6.71	-

⑥石皿(第130～132図，No19～22)

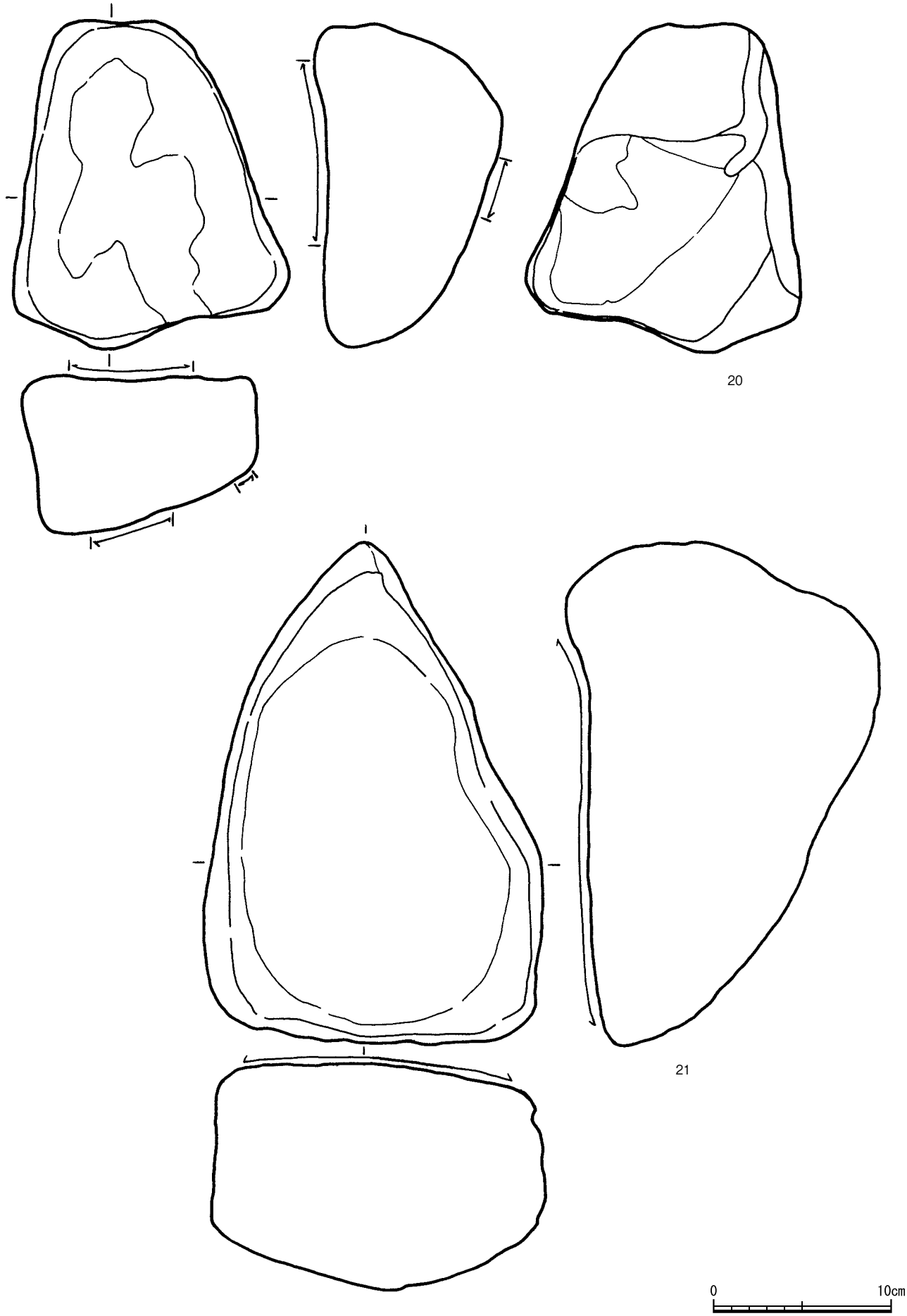
石皿は，４点出土している。

No19は大きく破損し，両面に磨跡が観察できる。No20は，正面に皿状の磨り面，裏面に接地による摩耗痕が残る。

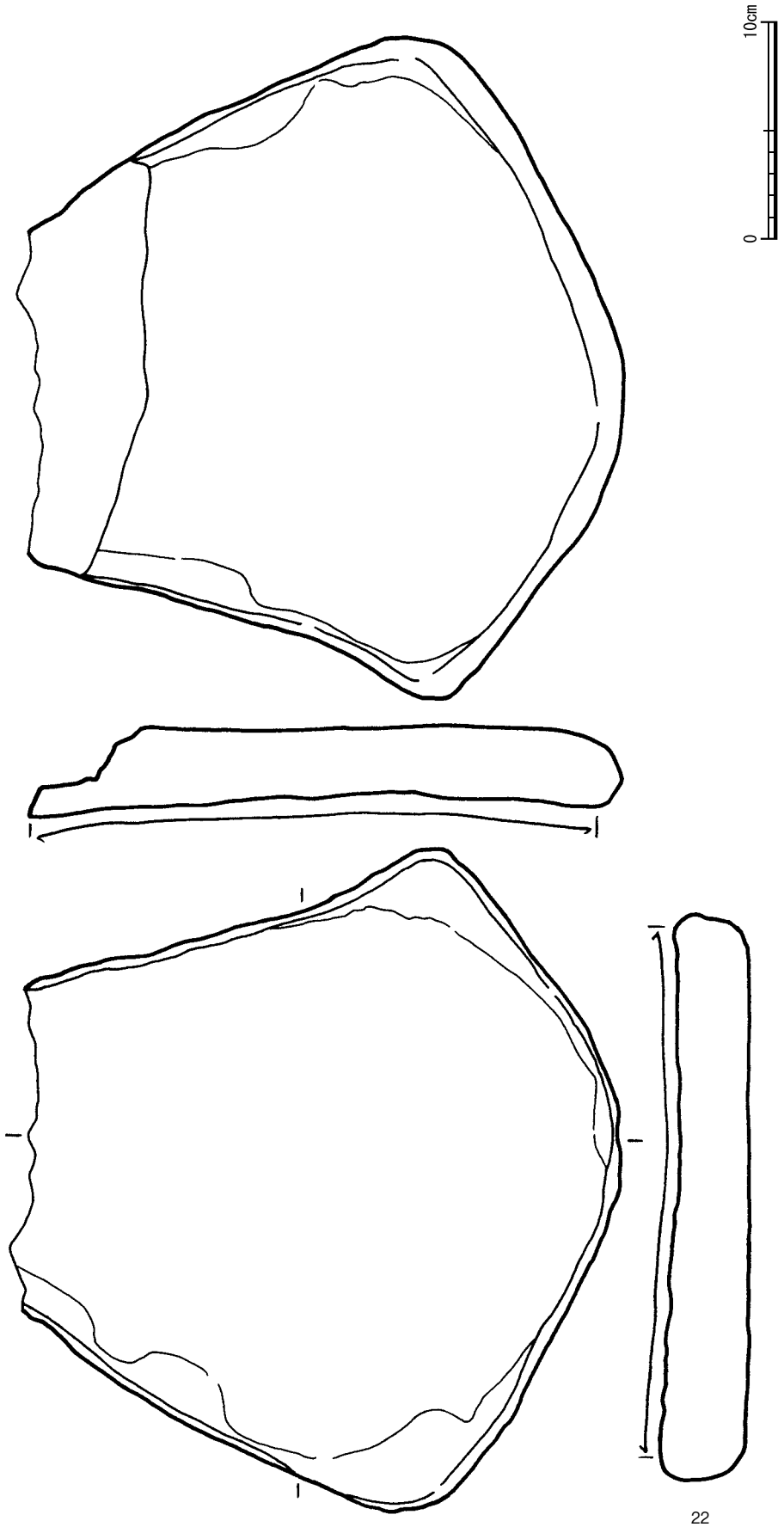
No21は，作業面が明瞭に皿状を呈す。No22は，扁平な礫を使用したもので，作業面は全域に認められ，明瞭な皿状面は残さないが，光沢のある平滑面を保つ。



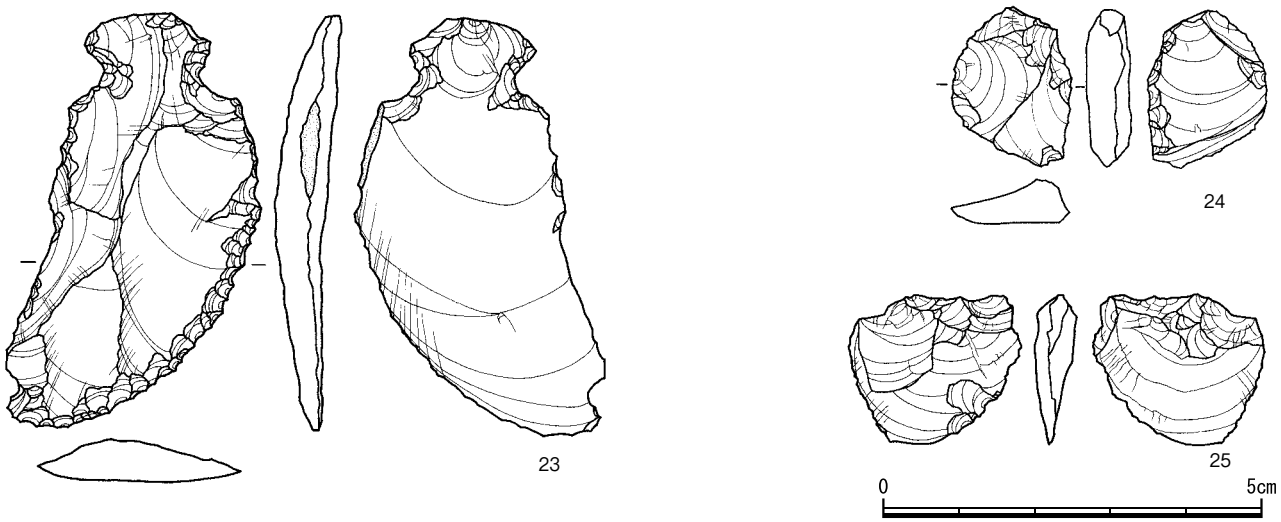
第130図　Ⅶ層出土石器実測図(４)



第131図　Ⅶ層出土石器実測図(５)



第132図　Ⅶ層出土石器実測図(６)



第133図　Ｖａ層出土石器実測図

２　Ｖa層出土石器(第133図，No23～25)

Ｖa層からは11点の石器が出土した。

石匙1点(No23)，削器１点(No24)，使用痕のある剥片(No25)が出土している。

①石匙(第133図，No23)

No23はチャートを用い，素材剥片を大きく変えずに斜刃のツールに仕上げ，摘み部付近と右側縁の刃部に重点的な加工を施す。

②削器(第133図，No24)

No24は姫島産黒曜石を用い，腹面の右側縁に刃部を設ける。

③剥片(第133図，No25)

No25は良質の黒曜石で，西北九州産である。

第28表　Ⅵ～Ⅶ層出土石器観察表(２)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層位)	器種	石材L1	石材L2	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
128	14	2364(E-15/Ⅵb)	ハンマー	SS	-	53.0	37.0	16.4	43.4	-
	15	2289(D-8/Ⅶ)	磨石/敲石	SS	-	78.4	74.0	52.0	471.0	-
	16	2711(E-5/Ⅶ)	磨石/敲石	AN	-	(98.1)	90.0	54.4	631.0	-
	17	2522(E-7/Ⅶ)	磨石/敲石	AN	-	94.3	85.7	54.0	651.0	-
129	18	2281(D-8/) 2282(D-8/Ⅶ)	磨石/敲石	AN	-	(87.0)	81.4	57.0	(562.0)	-
130	19	2347(F-15/Ⅶ)	石皿/台石	AN	-	(64.4)	(45.0)	(45.8)	(180.7)	-
131	20	-(---/-)	石皿/台石	AN	-	186.0	156.0	108.0	3628.0	-
	21	2285(D-8/Ⅶ)	石皿/台石	AN	-	282.0	194.0	179.0	10600.0	-
132	22	-(---/-)	石皿/台石	SS	-	(286.0)	305.0	48.0	(4800.0)	-

第29表　Ｖ層出土石器観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層位)	器種	石材L1	石材L2	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
133	23	877(D-6/Ｖa)	石匙	CH	-	54.8	34.0	9.0	58.02	-
	24	1871(F-15/Ｖa)	スクレイパー	OB	8	20.9	16.0	5.3	1.77	-
	25	1868(F-15/Ｖa)	剥片	OB	4	19.5	22.7	5.0	1.58	-

3　Ⅳa～Ⅲ層出土石器(第135,136図)

Ⅳa～Ⅲ層からは83点の石器が出土した。

石鏃12点(No26～37)，石斧７点(No38～44)，磨石・敲石８点(No45～52)が出土している。

①石鏃(第135図，No26～37)

合計12点の出土を確認している。

No26は浅い抉りの三角形鏃で，二側縁の整形剥離は並行に見事であるが，基部の整形にいたっていない。先端部と基部が欠損する。

No27は平基式の小型三角形鏃で，丁寧な整形剥離を両面に施す。No28も小型で，浅い抉りをもつ三角形鏃で先端部が欠損する。

No29は，未完成とみられる。

No30は浅い抉りをもつ三角形鏃で，整形剥離は丁寧であるが，腹面に自然面を残す。

No31は浅い抉りをもつ三角形鏃で，整形剥離は丁寧であるが，腹面の左側縁に素材剥離を残す。

No32は姫島産の黒曜石を用いた浅い抉りの三角形鏃で，先端部は鋭い。

No33,34はチャートを用いる。No33の抉りは深く，No34は大きく欠損する。No35も大きく欠損する。

No36,37はいわゆる五角形鏃で，黒曜石と頁岩を使い分ける。No36は浅い抉りで，細かい剥離が繰り返される。No37は平基で，整形剥離は深く，薄く仕上げている。

②磨製石斧(第135図，No38～42)

磨製石斧５点(No38～42)が出土している。

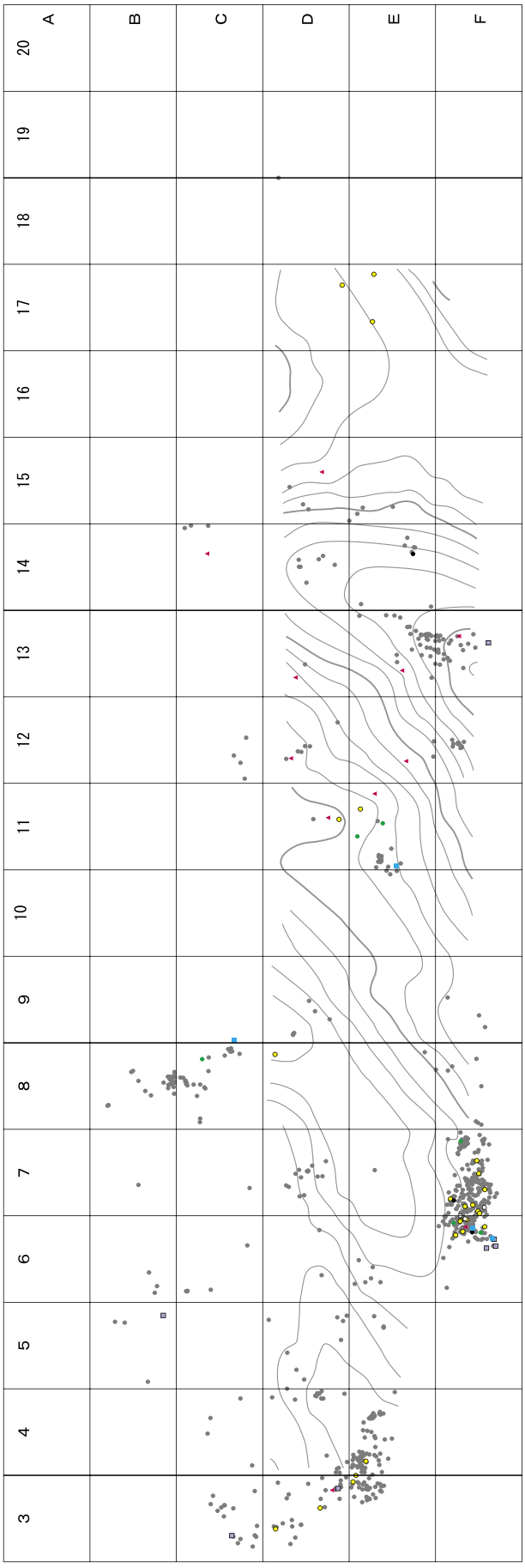
No38～40は蛇紋岩を用いる。

No38は，全面入念な研磨仕上げが施され，側面の面取りも明瞭で，刃部は左側縁から右側縁に向けて斜めに面取りし，入念な研磨で斜刃に仕上げている。刃部の刃潰れ痕は明瞭で，横断面の形状から片刃のノミ状工具と考えられる。No39は緑色で鮮やかな光沢を保つ。体部は，敲打整形後，入念な研磨仕上げが施され，側面の面取りも明瞭で，刃部は左側縁から右側縁に向けて斜めに面取りし，入念な研磨がなされ斜刃に仕上げている。また，刃部には，刃潰れ痕が観察される。また，頭部も体部より狭い片刃に仕上げ刃部を形成し，横断面の観察から片刃でノミ形を呈している。

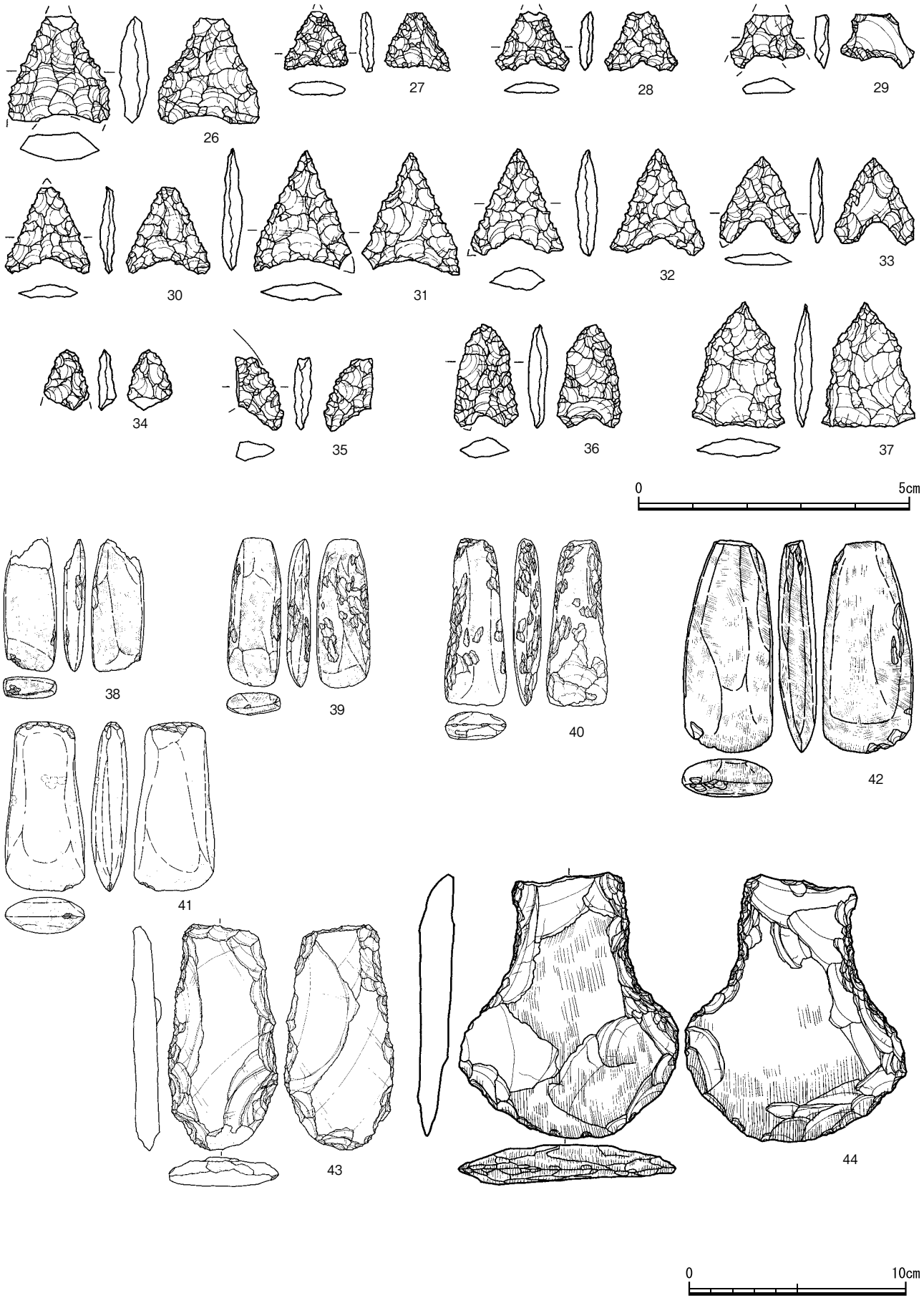
No40の体部は，敲打整形後入念な研磨仕上げが施され，刃部は体部より幅が広い両刃の直刃に仕上げる。刃部には，刃潰れ痕が残る。

No41はホルンフェルスで，体部は断面が凸レンズ状を呈し，敲打整形後入念に研磨し，刃部は体部より幅が広い両刃となる。

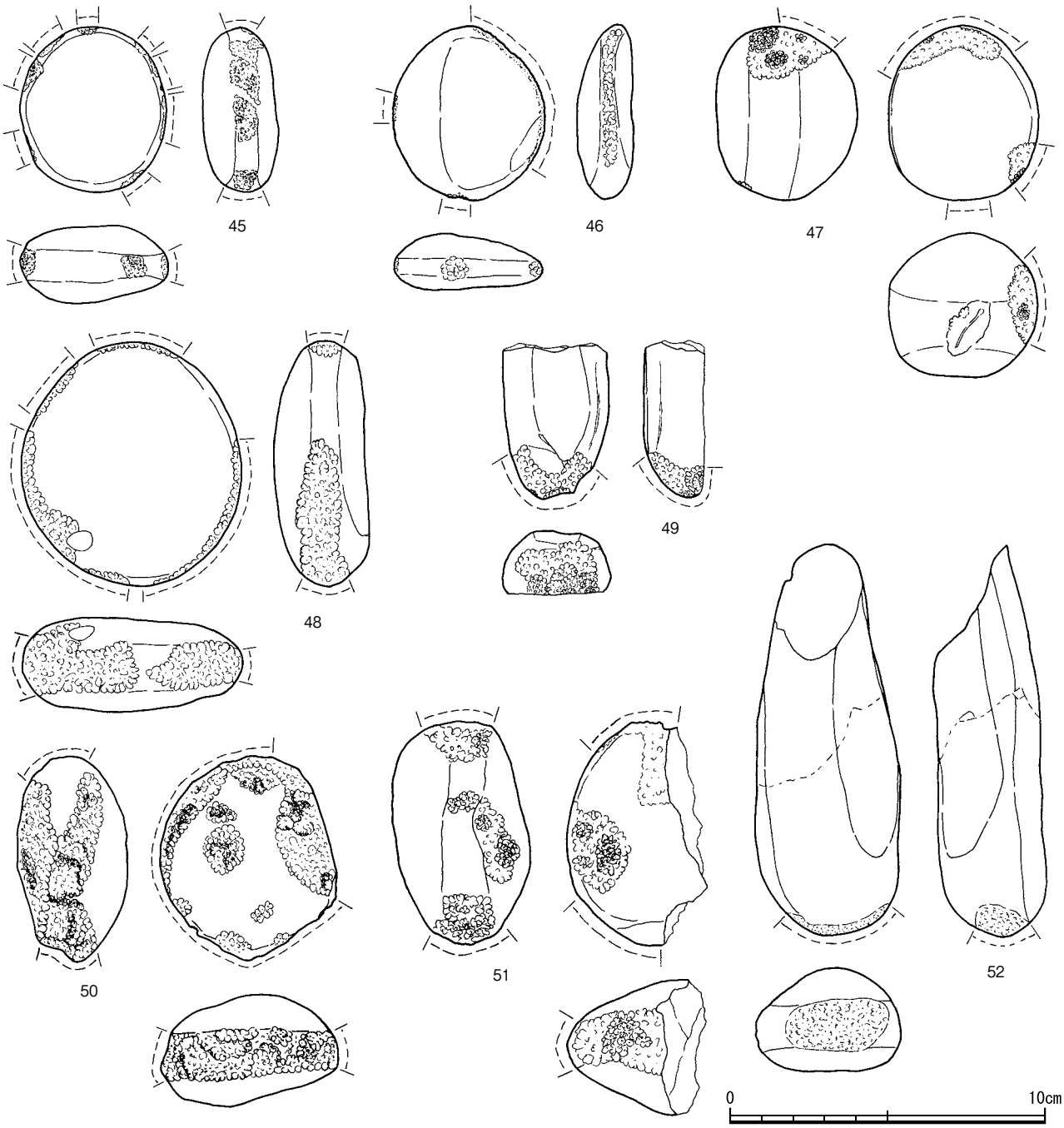
No42はホルンフェルスを用い，入念な研磨仕上げが施され，頭部は体部より狭い。頭部及び側面の面取りも明瞭で，刃部はさらに入念な研磨で両刃の弧刃に仕上げている。刃部の刃潰れ痕は明瞭である。



第134図　Ⅲ～Ⅳa層石器分布図(1/750)



第135図　Ⅲ～Ⅳａ層出土石器実測図(１)



第136図　Ⅲ～Ⅳａ層出土石器実測図(２)

③打製石斧(第135図，No43,44)

No43は，扁平な頁岩の素材剥片を用いた打製石斧で，裏面の整形剥離は少なく，表面に各縁部から整形剥離を施し，刃部の整形へと続き両刃の弧刃に仕上げている。また，刃部には刃潰れ痕が観察される。

No44は，扁平なホルンフェルスの素材剥片を用いた打製石斧で，基部はラケット状になる。刃部は，素材剥片の縁部を用いたため整形剥離が少なく，両刃の弧刃に仕上げており，刃潰れ痕と使用痕が観察できる。

④ハンマーストーン(第136図，No45～47,52)

No45,46は扁平礫を用い，敲打痕が先端部の左側縁から右側縁と両側縁下部に観察できる。

No47は，球状の礫を用い先端部と下部に敲打痕が観察できる。

No52は，棒状の礫の下端部に敲打痕が残り，頂頭部は欠損する。

⑤磨石・敲石(第136図，No48～51)

No49は，下端部に明瞭な敲打痕が残り，No48は，敲打痕が縁部をほぼ全周し，平坦面は摩耗する。No50は，敲打痕が右側縁部以外に残り，No51は，右半分が欠落しているが，敲打痕が先端部と左側縁部および下端部に，両面は摩耗する平坦面である。

第30表　Ⅲ～Ⅳ層出土石器観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層位)	器種	石材L1	石材L2	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
135	26	1785(E-11/Ⅳa)	石鏃	OB	-	(19.1)	18.0	5.0	(1.34)	-
	27	1846(E-12/Ⅳa)	石鏃	OB	-	(10.3)	11.5	3.4	(0.21)	-
	28	1851(D-12/Ⅳa)	石鏃	OB	-	(10.9)	13.4	3.4	(0.28)	-
	29	1995(F-6/Ⅲ)	石鏃	OB	-	(9.7)	(13.2)	2.6	(0.25)	-
	30	1726(D-15/Ⅲ)	石鏃	SH	-	15.9	15.3	2.8	0.49	-
	31	1830(D-13/Ⅳa)	石鏃	AN	-	(22.3)	(18.0)	3.7	(0.97)	-
	32	1831(E-13/Ⅳa)	石鏃	OB	8	(19.0)	(17.0)	4.2	(0.75)	-
	33	一括(F-7/Ⅲ)	石鏃	CH	-	(15.5)	14.6	2.0	(0.35)	-
	34	2777(D-3/Ⅳa)	石鏃	CH	-	(10.8)	(8.1)	(3.2)	(0.20)	-
	35	1582(F-13/Ⅳa)	石鏃	OB	-	(13.0)	(8.5)	3.2	(6.30)	-
	36	1788(D-11/Ⅳa)	石鏃	OB	-	(18.6)	11.5	3.2	(0.60)	-
	37	2890(C-14/Ⅲ)	石鏃	AN	-	22.7	16.7	3.2	1.11	-
	38	2080(F-6/Ⅳa)	石斧	JA	-	(60.6)	24.4	9.6	(24.77)	-
	39	2789(D-3/Ⅳa)	石斧	JA	-	68.4	25.0	10.4	29.71	-
	40	2085(F-6/Ⅲ)	石斧	JA	-	76.3	28.2	12.5	39.63	-
	41	2824(B-5/Ⅳa)	石斧	HO	-	77.6	36.8	16.1	67.58	-
	42	1585(F-13/Ⅳa)	石斧	HO	-	97.4	41.5	17.5	110.26	-
	43	2082(F-6/Ⅳa)	石斧	SH	-	104.1	50.8	10.9	74.41	-
	44	2818(C-3/Ⅳa)	石斧	HO	-	112.3	111.8	18.8	212.28	-
136	45	3234(C-9/Ⅳa)	ハンマー	AN	-	51.7	46.0	24.5	82.7	-
	46	2083(F-6/Ⅲ)	ハンマー	SS	-	44.5	48.0	17.5	59.7	-
	47	2045(F-6/Ⅲ)	ハンマー	AN	-	54.7	47.8	45.0	142.2	-
	48	3233(C-8/Ⅳa)	磨石/敲石	SS	-	77.5	70.0	30.2	221.3	-
	49	152(E-11/Ⅲ)	磨石/敲石	SS	-	(48.9)	(34.4)	(19.3)	(46.8)	-
	50	2069(F-6/Ⅲ)	磨石/敲石	OB	-	64.1	56.5	35.5	135.6	-
	51	1492(F-7/Ⅲ)	磨石/敲石	OB	-	(70.8)	(45.7)	(42.8)	(137.7)	-
	52	143(E-11/) 145(E-11/Ⅲ)	ハンマー	SS	-	(123.9)	46.6	33.4	(263.2)	-

第Ⅴ章　古代の調査

第１節　調査の方法と概要

古代の調査は10m四方のグリッドを設定し，調査区全体を発掘調査の対象とした。

遺構，遺物は，遺跡の中央部から南側に分布し，Ⅲ層～Ⅳ層で土坑5基を検出し，Ⅱ層の文明軽石を混入した古道も発見している。

５基の土坑は，遺物(土師器・軽石)分布と重なり，遺物集中域から検出している。これらの遺物集中域及び遺構配置は，第137図に示した。

第２節　古代の遺構

１土坑

土坑は，遺跡の中央部C～F-13～15区のⅣa層上面から５基が検出され，遺物と重複する。

(１)１号土坑(第138図)

D-15区，Ⅳa層上面で検出した。平面プランは円形で南北94cm，東西97cm，深さは検出面から31cmで，埋土は黒色土で，下面にⅣa層が混入する。土師器が１点，土坑内から検出された。

(２)２号土坑(第138図)

E-15区，Ⅳa層上面で検出した。平面プランは円形で南北58cm，東西59cm，深さは検出面から16cmと浅い。埋土は黒色土である。

(３)３号土坑(第138図)

E-14区，Ⅳa層上面で検出した。平面プランは円形で南北111cm，東西108cm，深さは検出面から16cm，埋土は黒色土で，下面にⅣa層が混入する。土師器が４点，土坑内から検出された。

(４)４号土坑(第138図)

C,D-13区，Ⅳa層上面で検出した。平面プランは円形で南北108cm，東西112cm，深さは検出面から30cm，埋土は黒色土である。

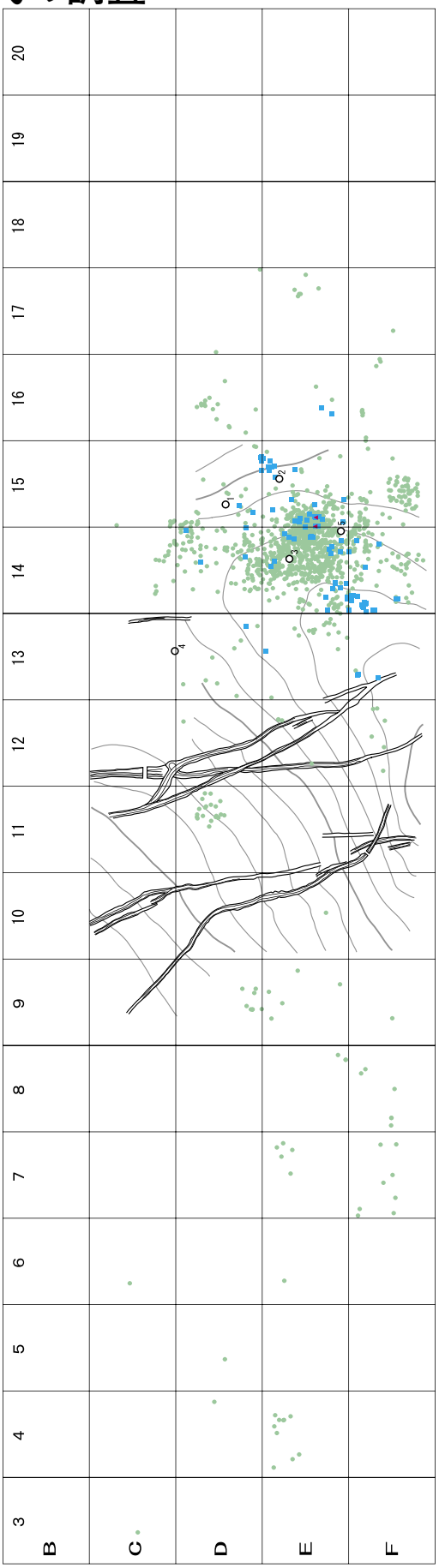
(５)５号土坑(第139図)

E-14区，Ⅳa層上面で検出した。平面プランは楕円形で南北53cm，東西37cm，深さは検出面から18cm，埋土は黒色土で，下面にⅣa層が混入する。土師器甕が検出された。

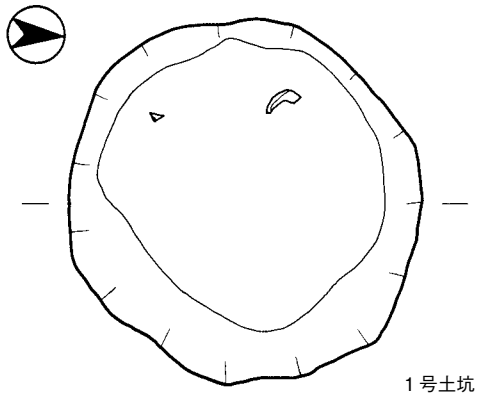
２古道（第140図）

古道は西から東に走り，C～F-９～13区の北西向き緩斜面から検出された。C～E-９～13区では，Ⅳb層まで掘り込まれ，埋土はⅢ層が主体で，底面に硬化面を形成している。E,F-11～13区では，掘り込みは確認されず，Ⅲ層とⅣa層上面に硬化面を検出した。

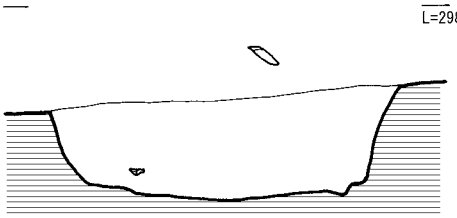
古道周辺は遺物の出土が少なく，一部文明軽石が埋土の上位に混入することから，古代以降，中世の古道と判断した。

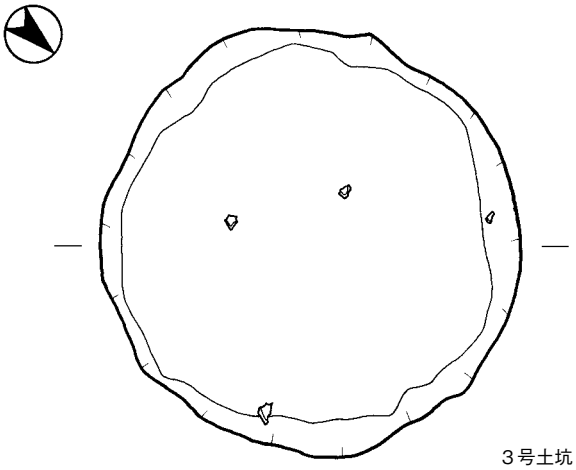


第137図　Ⅲ層　遺構位置及び遺物出土状況図(1/750)

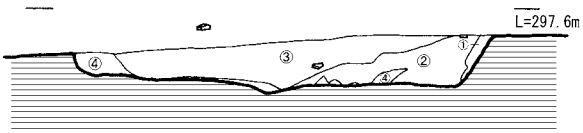


１号土坑

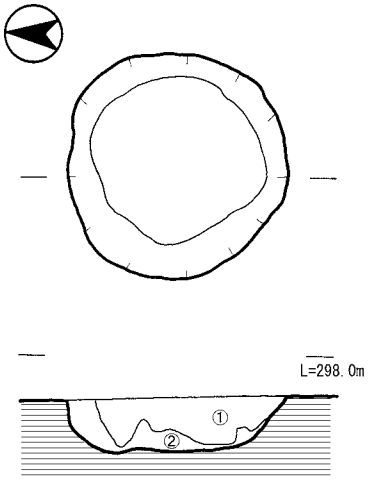




３号土坑

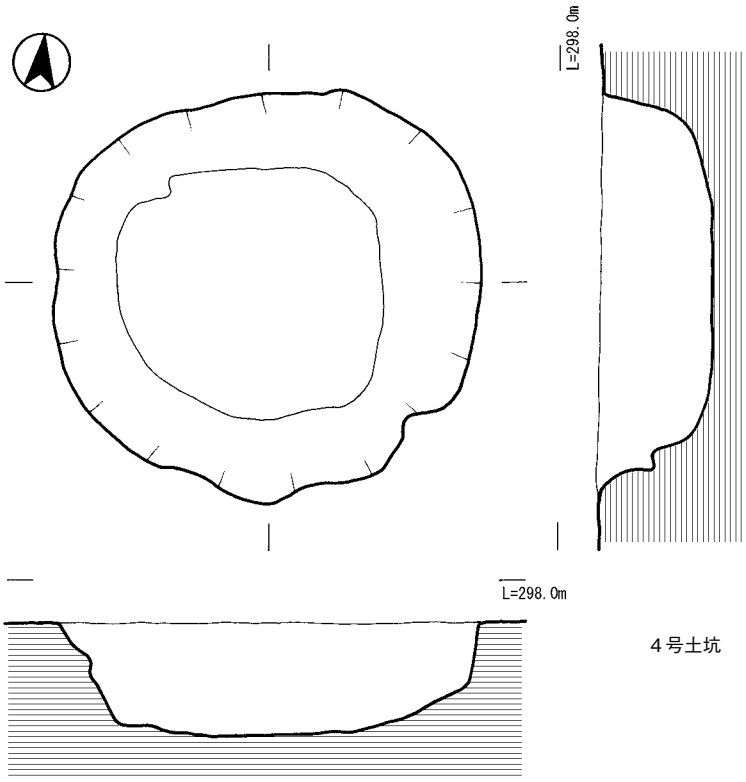


①	やや黄褐色を帯びた黒色土。
②	やや灰色を帯びた黒色土。
③	黒色腐食土(Ⅲ層)
④	黄褐色細粒軽石混を含む御池火山灰の腐食土。



２号土坑

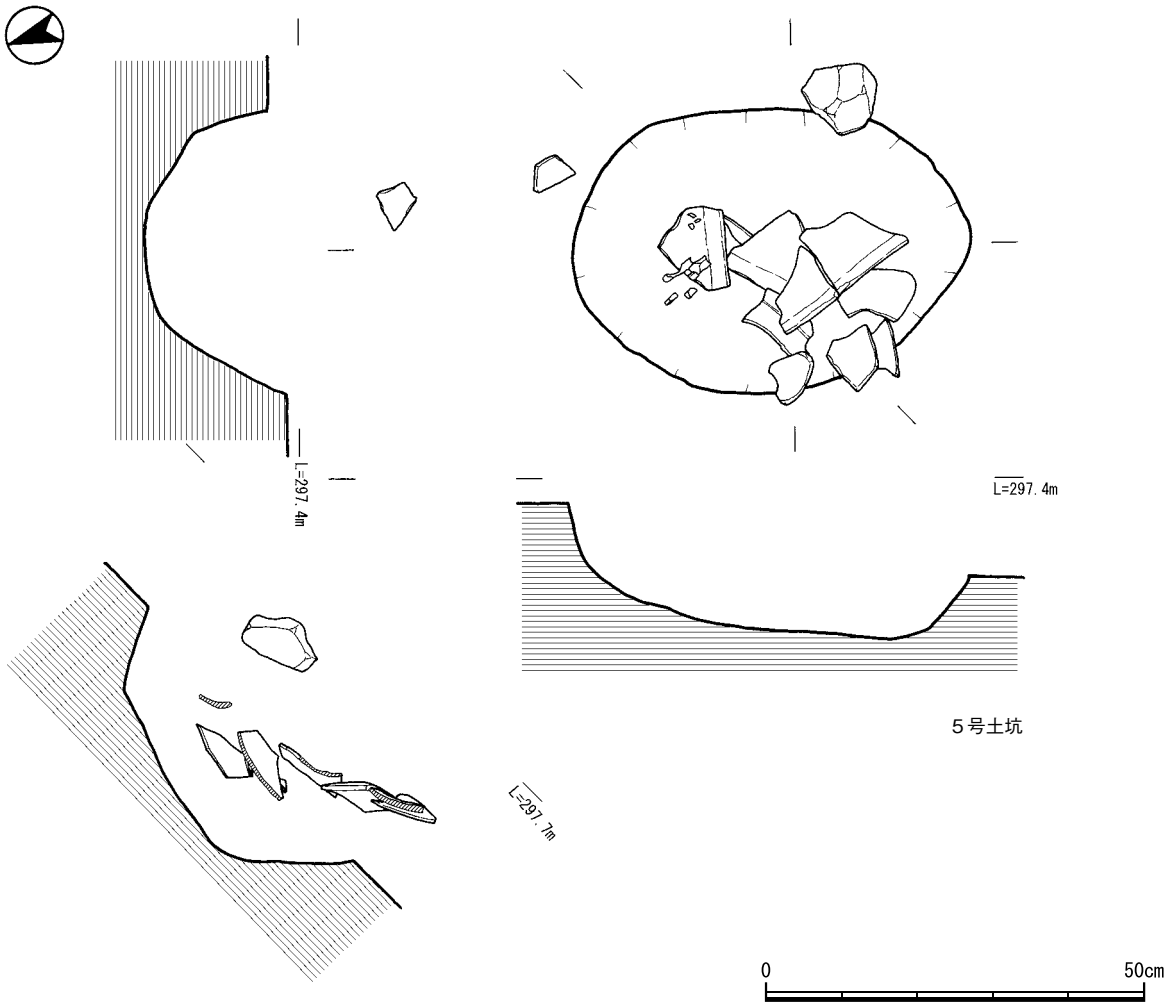
①	黒色土。
②	黒色土。



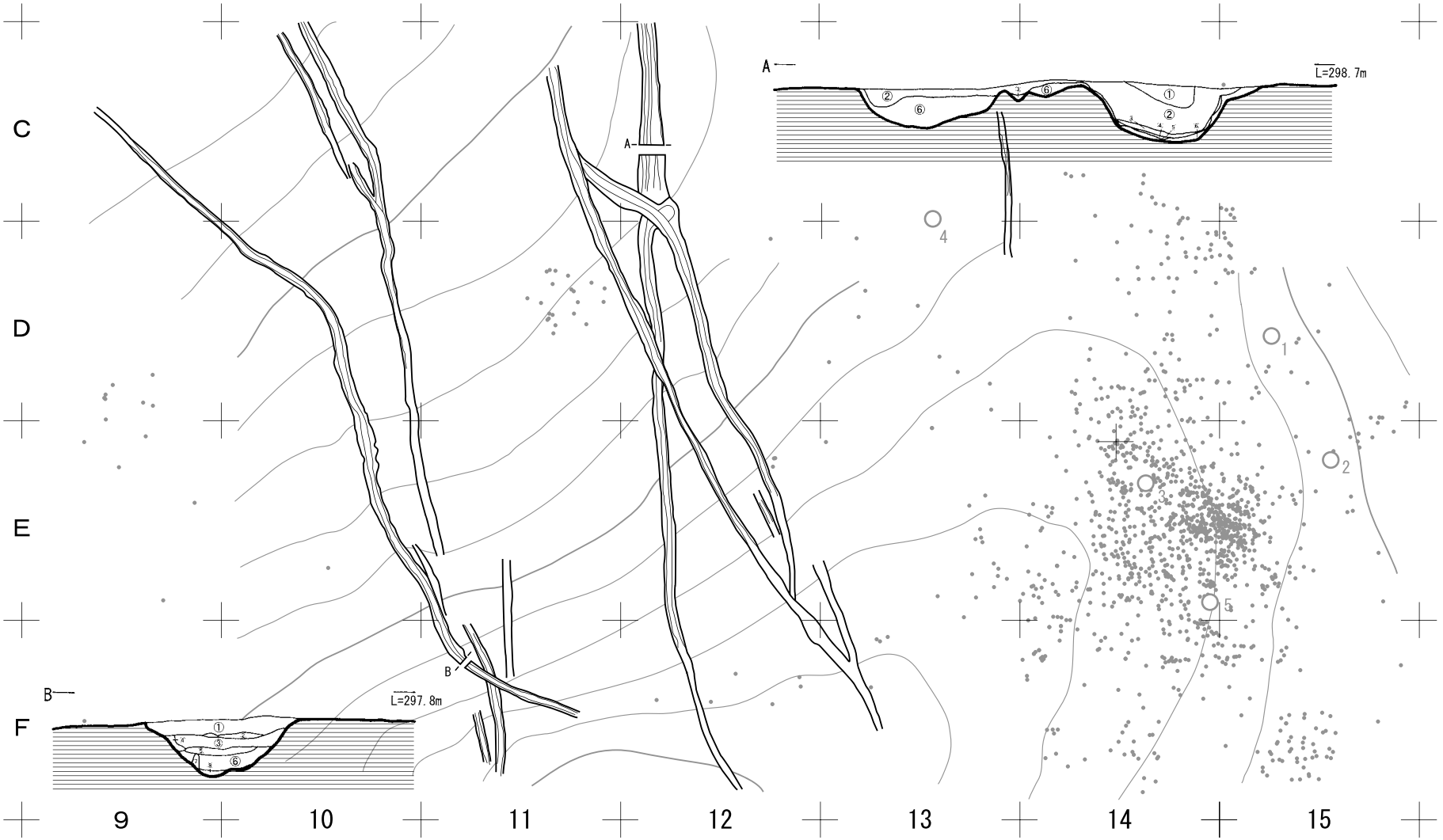
４号土坑



第138図　Ⅲ層遺構実測図(１)



第139図　Ⅲ層遺構実測図(２)



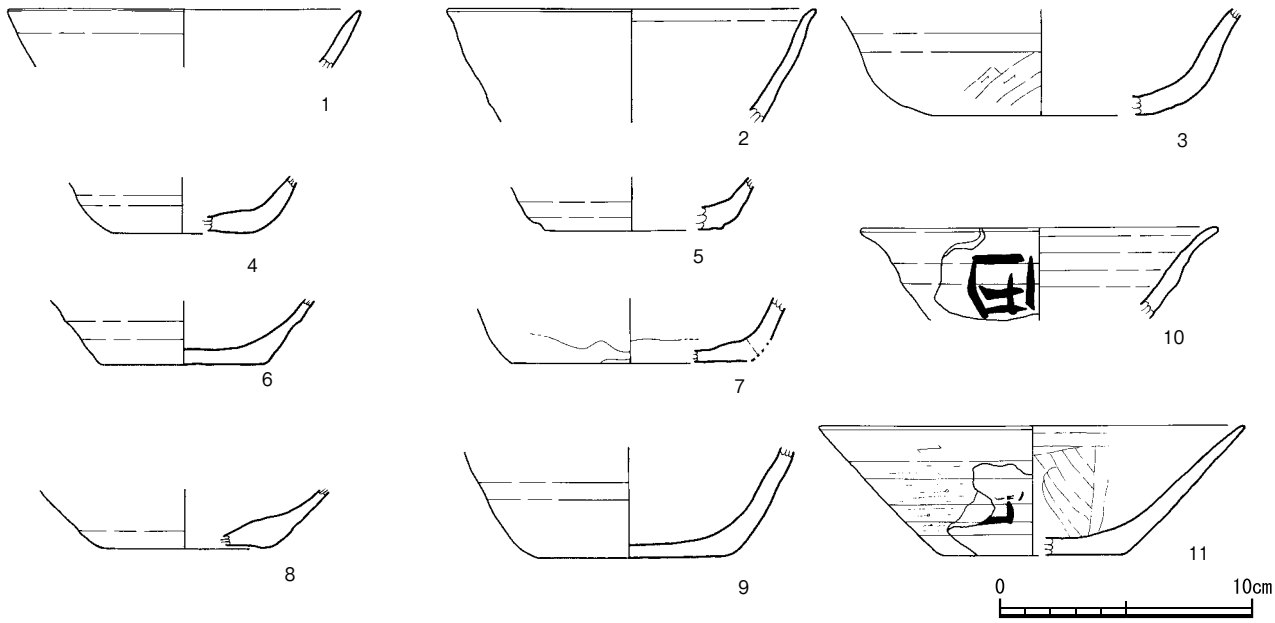
①	灰茶褐色粘質土。1mm弱の白色パミスが混入する。
②	①と同じであるが，若干灰色が強い。
③	黒褐色粘質土。
④	明黄茶褐色混灰色土。壁面のⅣa層がくずれて，③，⑤と混ざり合ったもの。

⑤	①と同じであるが，赤茶褐色土(鉄分の沈着？)が点在する。1mm弱の白色パミスが点在する。
⑥	明灰褐色硬質土。1mm強の白色パミスが点在する。状面に赤茶褐色の鉄分の帯が入る。(約3mm)
⑦	明黄茶褐色土。Ⅳa層が混ざる。
⑧	明黄灰白茶褐色土。1mm～2mmのパミス(御池)が混ざる。下部に赤茶褐色の鉄分の帯が入る。

①	Ⅲ層腐食土。軟質。
②	Ⅲ～Ⅳ層境界土。若干黄褐色土混入。軟質である。
③	黒色土。砂状粒子含み，やや硬質。

④	灰色土。砂状粒子含み，硬質。
⑤	赤みがかった灰褐色土。微粒子の硬質土。鉄分沈着が確認できる。
⑥	Ⅳ層土。黄褐色の細粒子が混入。

第140図　Ⅲ層　古道検出状況図(1/300)



第141図　古代出土遺物実測図(土師器坏)

第３節　古代の遺物

古代の遺物は，Ⅲ層からⅣa層にかけて出土した。そのほとんどがE-14区を中心とする遺跡北側に集中する。遺跡のほぼ中央を東西方向に延びる古道を挟んで，南側にもわずかではあるが，甕，坏，及び土錘が出土した。

１　土師器坏(第141図，No１～11)

総数89点。小片資料が多く，口縁部から底部まで完全に復元できたのは１点(No11)で，口径もしくは底径が復元できたものは10点である。

No１は，直線的に立ち上がる体部をもつと考えられ，調整は全てヨコナデで，明瞭ではないが外部の稜線が一部残る。

No２は，体部が若干曲線的に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。調整はすべてヨコナデである。口径は14.6cmである。

No４～９は底部資料で，底部と体部の境界が明瞭である。

No４は，底部のナデ消しが不十分で，一部ヘラ切り痕跡が残る。No５は，体部外面下端に回転ヘラ切りによる痕跡が残る。No６は，体部外面下端にヘラケズリの痕が残る。底部外面の回転ヘラ切り痕跡はナデ消されている。No７の底部は，亀裂から判断すると紡錘車の可能性があり，実測図には内面及び外面の亀裂の痕を示した。内面はきれいな割れ方であるが，外面は欠けている部分が多く，外側から割った可能性がある。No８は，底部がやや厚く，底部断面がやや突出している。調整は全てヨコナデである。No９は，底部内面がほぼ平坦をなし，直線的に立ち上がる体部をもつ。底部のヘラ切り痕跡は丁寧にナデ消されている。胎土内には，赤色の大粒が含まれる。

No３は，若干曲線的に立ち上がる体部をもつ。体部下半には，ヘラ状工具によるナデが確認できる。胎土内には，赤色の大粒が含まれる。

No10は，墨書土器である。若干曲線的に立ち上がる体部をなし，口縁部がやや外反する。体部外面は稜線が明瞭に残る。墨書は，体部に倒位に「田」が書かれ，肉眼でも識別できる。C-３区からの出土で，他の資料とは分布が異なる。小片資料のため，全体の器形は明らかではないが，埦の可能性もある。

No11は，内黒土師器で，口径は16.8cm，底径は7.2cm，器高は5.1cmである。底部と体部の境界は不明瞭で，直線的に立ち上がる体部をもつ。体部内面は丁寧なミガキ調整で，体部外面下半は横方向にヘラケズリ，上半は丁寧なナデ調整が施され，一部磨きがかかっている。底部外面の回転ヘラ切り痕跡は，丁寧にナデ消されている。体部外面に墨書の痕跡があるが，判読は不可能であった。胎土は精緻で少量の砂粒と赤色粒が含まれる。焼成は堅緻である。

２　土師器甕(第142,143図，No12～39)

総数1244点。小片資料が多く，完全に復元できたのは２点(No38,39)であった。破片資料については，特徴のある口縁部もしくは屈曲部の資料を提示した。なお，図中のスクリーントーンは，うすい部分がスス，濃い部分が炭化物の付着を表す。

No12～25は口径の復元は困難であるが，外反する口縁部をもつ。

No12,17,20,23～25は屈曲部内面に稜がみられないものである。No12は，緩やかに外反する比較的長い口縁部で，口縁部内面にはハケ目，他はナデられ，口縁部外面直下は強くナデられる。No17も外反する口縁部であるが，No12ほど長くない。内面にはハケ目が残り，ヘラケズリが施される。どち

らの胎土内にも赤色の大粒が含まれる。No20,23は他の資料よりも若干器壁が薄い。No20の外面には，ハケ目が残り，ススの付着が確認できる。どちらも内面にはヘラケズリが施される。No25は内面にススの付着が確認できる。

No16,18,19,21,22は内面に稜が残るもので，どの資料も内面にはヘラケズリが施されている。No16は，短く外反する口縁部である。No19は内面にハケ目が残り，胎土内に赤色の大粒が含まれる。No21は，内面の稜線より下に炭化物，上にススの付着が確認できる。

No13～15については，内面の稜の有無は確認できなかった。No13,14は短く外反する。No14は胎土内に小礫を多く含む。No15は，内面にハケ目が残る。

No26,27は，緩やかに外反する口縁部で，外面及び内面にハケ目を残す。No26の口縁部は比較的長く，胴部は若干膨らみ，外面は縦方向のハケ目が一部残り，縦位の調整後，横位の調整が施される。口縁部付近はナデ調整，内面は胴部上位までハケ目が残り，それらを切るように斜位のケズリが施される。さらにその上から指頭による圧痕も確認できる。胎土は砂粒が多く，小礫を含む。またF-８,９区からの出土で他の資料とは分布が異なる。No27の口縁部は短く，胴部はやや膨らむ。外面は，ハケ目が指頭によってナデ消されている部分があるが，No26と同様に縦位のハケ目が一部残る。また斜位に，異なる工具による調整痕が確認できる。口縁部付近は丁寧なナデ調整が施され，一部磨きがかかる。調整が半乾きの状態でなされた可能性がある。内面は，口縁部に横位のハケ目が残るが，一部は指頭によってナデ消され，屈曲部より下は，縦位または斜位のケズリが施されている。胎土には小礫が多く，赤色の大粒も含む。

No28～30は，緩やかに外反する口縁部をもち，外面にハケ目が残る。

No29は，やや短い口縁部で，胴部中位で若干膨らむ。外面は，胴部下半に斜位のハケ目を薄く残し，屈曲部にはやや強いナデを施す。内面はナデ調整後，斜位にケズリを施し，胴部の器壁は薄くなる。胎土には，小礫を多く含む。No30の口縁部は短く，胴部下位はやや膨らむ。外面は縦位のハケ目が残るが，ナデ消されている部分も多い。横位のハケ目は確認できない。屈曲部は強くナデられ，弱い稜を形成している。また，胴部中央にはススの付着が認められる。内面は，屈曲部まではナデ調整，その下は斜位のケズリが施される。胎土は砂粒が多く，少量ではあるが赤色の粒が含まれる。No28は，外反する口縁部で，胴部中位で若干膨らみ，口縁端部はやや丸みを帯びる。No29と同様に外面に縦位のハケ目が一部残るが，ほとんどの部分がナデ消されている。また屈曲部下には，強いナデが確認される。内面はナデ調整後，斜位のケズリが施され，胴部中位では若干器壁が薄くなる。胎土には，小礫，砂粒を多く含む。

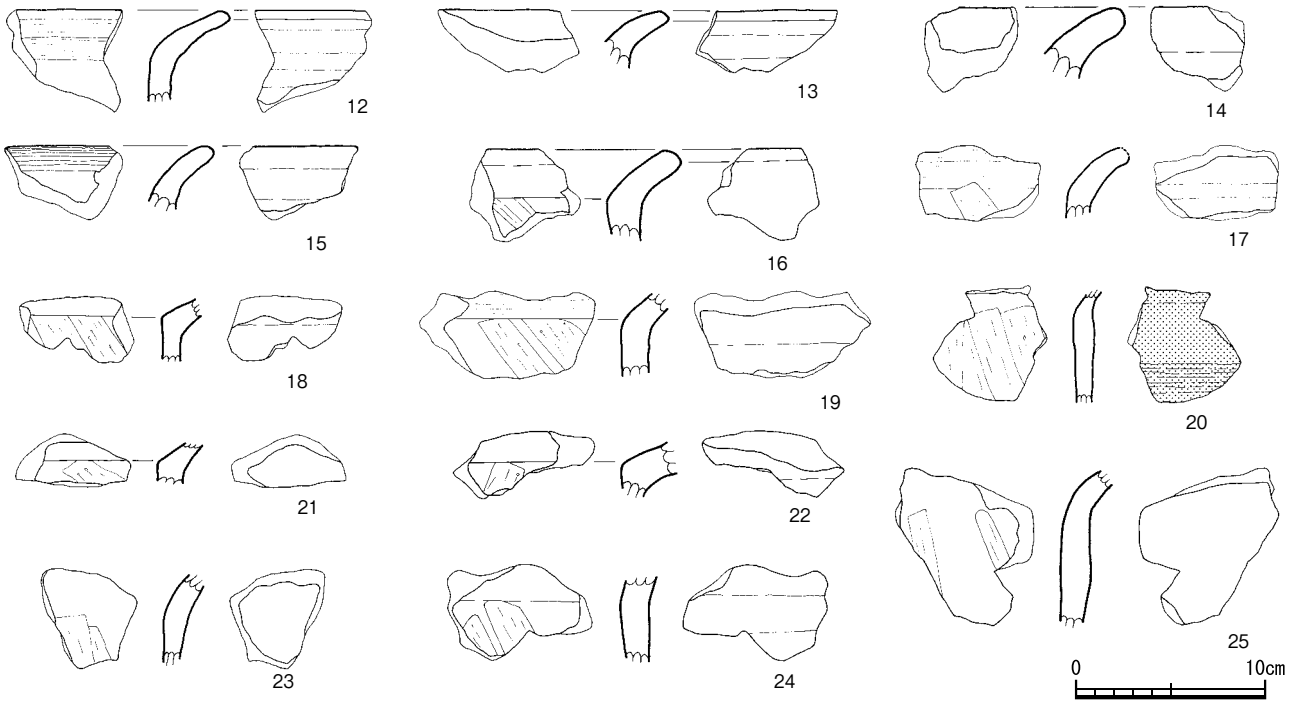
No31～35は，緩やかに外反する口縁部をもち，内，外面にハケ目が残らないものである。

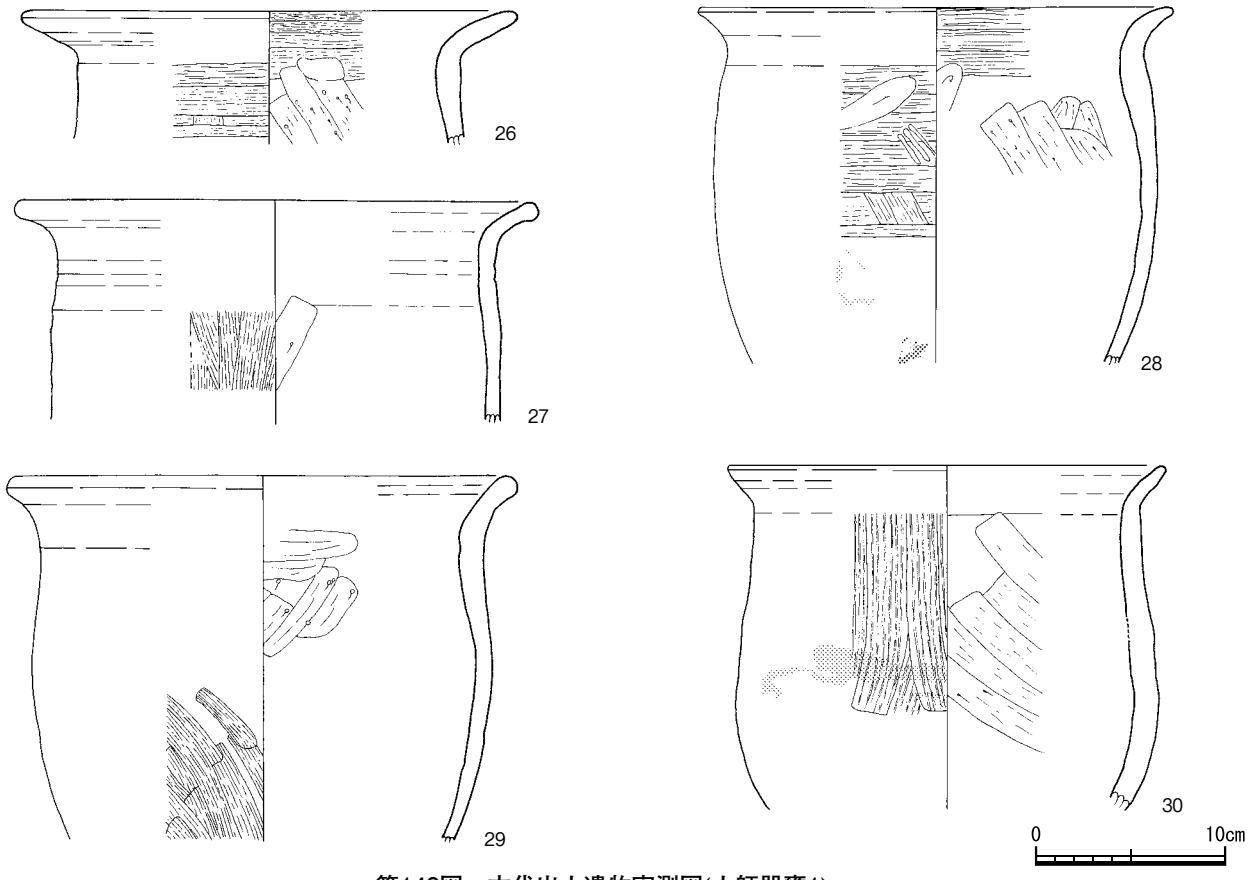
No31は，比較的長い口縁部をもち，胴部中位で若干膨らむと考えられる。内，外面共にナデ，内面には縦位から斜位のケズリが施される。胎土は砂粒が多く，少量の小礫を含む。No32の資料の一部は土坑５からの出土である。器形は，胴部中位で若干膨らむ。外面はナデ，口縁部直下には強いナデを施し，弱い稜を形成する。また，屈曲部下から胴部にかけてはススが付着する。内面はナデ調整の後，斜位のケズリを施し，口縁部から屈曲部にかけて一部ススの付着が確認できる。胎土は精緻である。No33,35は，同一個体の可能性がある。両資料とも比較的短い口縁部をもち，胴部はほぼ直線的に下方に伸びる。外面はナデ，屈曲部には強いナデを施す。No33はその下にススが付着し，また，内面はナデ調整後，斜位にケズリを施し，No33の胴部中位は器壁が薄くなる。両資料とも胎土には砂粒，小礫が含まれる。No34は，胴部がほぼ直線的に下方に伸びる。外面はナデ，屈曲部にやや強いナデを施し，内面は，ナデ調整後に斜位から横位のケズリを施す。また外面には，胴部上半に帯状のススが付着し，胎土は砂粒，小礫及び少量ではあるが赤色の大粒を含む。

No37,38は外反する口縁部をもち，内，外面にハケ目が残らず，屈曲部の内面に稜線をもつ。No38の口縁部は短く，胴部は中位で若干膨らむ。内，外面共にナデ調整であるが，内面にはその後斜位のケズリを施し，丁寧に施された部分は器壁が若干薄く，稜線が明瞭である。胎土内には砂粒，小礫を含み，胴部中央から底部にかけてススが付着する。No37の胴部はほぼ直線的に下方へ伸びると考えられ，内面のケズリは他の資料と比較すると横位に近く，屈曲部の稜線は明瞭である。胎土は砂粒，小礫を含む。

No39は小型の甕で，口縁部は短く外反し，胴部は中位でやや膨らむ。外面はナデ調整を施し，一部ハケ目を残す。屈曲部は強くナデ，弱い稜を形成する。内面は，口縁部にハケ目を残し，ナデ調整後，縦位のケズリが施されるが，他の資料よりも単位が小さく，使用された工具の大きさがうかがえる。胎土には砂粒，小礫を含む。

No36は屈曲部がなく，外傾する口縁部をもつもので，鉢といった方が妥当かもしれない。外面はナデ調整が施されるが，一部ハケ目が残る。また胴部上半は，このハケ目とは単位の異なる工具で調整している。この調整は比較的新しい段階で施されたもので，外面のナデ調整が一度行われた後と推測できるが，この調整も指頭により一部ナデ消されている。内面はナデ調整後に，ケズリが斜位に施されている。胎土は小礫が多く含まれる。また，外面にはスス及び炭化物の付着が確認できる。

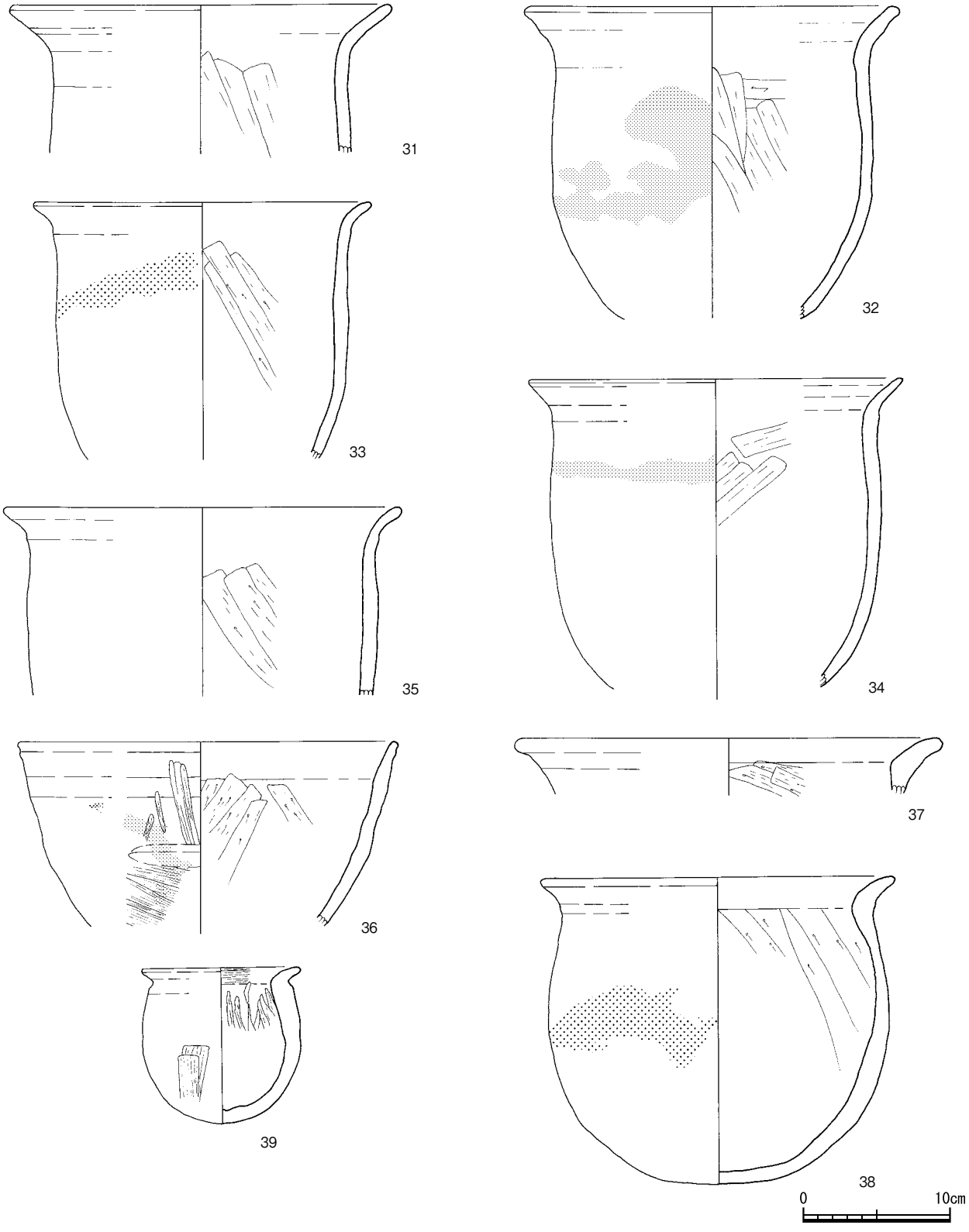




第142図　古代出土遺物実測図(土師器甕1)

第31表　古代出土遺物観察表(１)

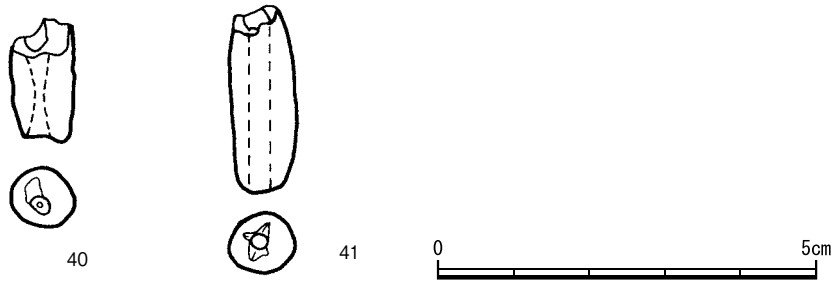
挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層位)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏末調整部	備考
141	1	1464(E-15/Ⅲ)	19.8	-	-	精緻 細砂	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	2	1730(E-15/Ⅳa),1351(D-14/Ⅲ) 1030(E-15/Ⅲ),1369(D-14/Ⅲ)	14.6	-	-	精緻 細砂	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	3	111(E-7/Ⅲ)	-	-	8.6	精緻 赤	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR7/6 (橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-



第143図　古代出土遺物実測図(土師器甕2)

3　土錘(第144図，No40,41)

本遺跡では２点のみ検出された。No40,41は共に管状土錘である。No41は，紡錘状のものに孔を貫通させたもので，ほぼ完全な形である。孔径は2.6mmである。No40もおそらく紡錘状を呈するものの一部と考えられる。孔径は2.8mmであるが，中央は若干狭くなる。両資料とも胎土は精緻である。



第144図　古代出土遺物実測図(土錘)

第32表　古代出土遺物観察表(２)

挿図番号	報告番号	取上番号 (出土区/層位)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏末調整部	備考
141	4	1065(E-14/Ⅲ),235(E-15/Ⅲ) 1366(D-14/Ⅲ),230(E-15/Ⅲ) 846(E-14/Ⅲ)	-	-	5.2	精緻 細砂	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	5	485(F-14/Ⅲ)	-	-	6.8	精緻 細砂 赤	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	6	1171(E-14/Ⅲ),1314(E-14/Ⅲ) 315(E-14/Ⅲ),936(E-14/Ⅲ)	-	-	6.4	精緻 細砂	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	○	-
	7	191(E-12/Ⅲ)	-	-	9.2	精緻 細砂 黒	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	紡錘車の可能性
	8	11(D-9/Ⅲ)	-	-	6.4	精緻 細砂 黒	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	9	1970(F-7/Ⅲ),2094(E-7/Ⅲ) 113(E-7/Ⅲ)	-	-	7.4	精緻 赤	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	10	2799(C-3/Ⅳa)	14.2	-	-	精緻	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	(田)
	11	488(F-14/Ⅲ),1265(E-14/Ⅲ) 1330(D-14/Ⅲ),1893(D-14/Ⅲ) 1173(D-14/Ⅲ),1685(E-14/Ⅲ) 1332(-/),888(D-14/Ⅲ)	16.8	5.1	7.2	精緻 細砂 白	堅緻	5YR2/1 (黒褐)	7.5YR7/8 (黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	ミガキ	横ケズリ	-	-
142	12	1114(E-14/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 赤	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	ハケ(横位)	-	-	-
	13	1011(D-15/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	14	1645(F-14/Ⅳa)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR6/6 (橙)	7.5YR6/6 (橙)	-	-	-	-	-
	15	544(E-14/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	ハケ(横位)	-	-	-
	16	827(E-14/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	7.5YR6/6 (橙)	-	ケズリ	-	-	-
	17	569(E-14/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 赤	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	ハケ(横位) ケズリ	-	-	-
	18	764(F-15/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR6/6 (橙)	-	ケズリ	-	-	-
	19	1007(E-14/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	ハケ(横位) ケズリ	-	-	-
	20	572(E-14/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	2.5YR2/1 (赤黒)	-	ケズリ	ハケ(横位)	-	-
	21	2100(E-6/Ⅳa)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	2.5YR3/1 (暗赤灰)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	-	ケズリ	-	-	-
	22	997(E-14/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	5YR5/6 (明赤褐)	-	ケズリ	-	-	-
	23	279(E-14/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR7/1 (明褐灰)	7.5YR7/6 (橙)	-	ケズリ	-	-	-
	24	2181(E-17/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR6/6 (橙)	7.5YR6/6 (橙)	-	ケズリ	-	-	-
	25	2190(E-13/Ⅲ)	-	-	-	砂粒 小礫	良好	5YR7/6 (橙)	5YR6/6 (橙)	-	ケズリ	-	-	-
	26	20(E-8/Ⅲ),19(E-8/Ⅲ),18(F-9/Ⅲ)	26	-	-	砂粒 小礫	良好	5YR7/8 (橙)	5YR7/8 (橙)	-	ハケ(横位) ケズリ	ハケ(縦位) ハケ(横位)	-	-
	27	895(E-14/Ⅲ),715(E-14/Ⅲ) 286(E-14/Ⅲ),1074(E-15/Ⅲ) 904(E-14/Ⅲ),1343(D-14/Ⅲ) 1338(D-14/Ⅲ),1046(E-15/Ⅲ) 1735(E-15/Ⅳa),571(E-14/Ⅲ) 1380(C-14/Ⅲ),900(E-14/Ⅲ) 1586(D-16/Ⅲ),1423(E-15/Ⅲ) 617(E-15/Ⅲ)	27.4	-	-	小礫 砂粒	良好	2.5YR5/6 (明赤褐)	2.5YR5/6 (明赤褐)	-	ケズリ	ハケ(縦位)	-	-

第33表　古代出土遺物観察表(３)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層位)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏末調整部	備考
142	28	886(D-14/Ⅲ),1269(-/Ⅲ) 1230(E-15),1095(E-14/) 1309(E-14/Ⅲ),931(E-14/Ⅲ) 1064(E-14/Ⅲ)935(E-14/Ⅲ) 1085(E-15/Ⅲ),402(F-15/Ⅲ) 275(E-14/Ⅲ),1070(E-15/Ⅲ) 1862(E-14/Ⅳa),692(E-14/Ⅲ) 378(E-14/Ⅲ),678(D-15/Ⅲ) 555(E-14/Ⅲ),814(E-14/Ⅲ) 1225(E-15/Ⅲ),1097(E-15/Ⅲ) 314(E-14/Ⅲ),798(F-14/Ⅲ) 1865(E-14/Ⅳa),171(E-12/Ⅲ) 170(E-12/Ⅲ),172(E-12/Ⅲ) 1613(F-16/Ⅲ),918(E-14/Ⅲ) 1608(F-16/Ⅲ),929(E-14/Ⅲ) 1609(F-16/Ⅲ),1089(E-15/Ⅲ) 1417(E-15/Ⅲ),1098(E-15/Ⅲ) 441(F-14/Ⅲ),1062(E-14/Ⅲ) 270(E-14/Ⅲ),1433(E-15/Ⅲ) 1014(D-15/Ⅲ),1016(D-15/Ⅲ) 1017(D-15/Ⅲ),1610(F-16/Ⅲ) 1605(E-16/Ⅲ),937(E-14/Ⅲ) 1305(E-14/Ⅲ),1213(E-14/Ⅲ) 1450(E-14/Ⅲ),1406(E-15/Ⅲ) 945(E-14/Ⅲ),1401(C-15/Ⅲ) 640(E-15/Ⅲ),1426(E-15/Ⅲ) 1357(D-14/Ⅲ),1414(E-15/Ⅲ) 1200(E-15/Ⅲ),1198(E-14/Ⅲ) 723(E-14/Ⅲ),1315(E-14/Ⅲ) 1864(E-14/Ⅳa),1861(E-14/Ⅳa) 1860(E-14/Ⅳa),795(E-14/Ⅲ) 794(E-14/Ⅲ),975(E-14/Ⅲ) 1316(E-14/Ⅲ),517(E-14/Ⅲ) 894(E-14/Ⅲ),868(E-15/Ⅲ) 933(E-14/Ⅲ),912(E-14/Ⅲ) 927(E-14/Ⅲ),1320(D-14/Ⅲ) 702(D-14/Ⅲ),289(D-14/Ⅲ) 1323(D-14/Ⅲ),1700(D-14/Ⅳa) 882(D-14/Ⅲ),292(D-14/Ⅲ) 926(E-14/Ⅲ)	25	20	-	小礫 赤	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	ハケ(横位) ケズリ	ハケ(横位) ハケ(縦位)	-	スス付着
	29	1081(E-15/Ⅲ),1083(E-15/Ⅲ) 631(E-15/Ⅲ),632(E-15/Ⅲ) 1080(E-15/Ⅲ),1337(D-14/Ⅲ)	26.9	-	-	小礫	良好	7.5YR5/3 (にぶい褐)	7.5YR7/6 (橙)	-	ケズリ	ハケ(斜位)	-	-
	30	751(F-14/Ⅲ),464(F-14/Ⅲ) 1143(F-14/Ⅲ),1125(E-15/Ⅲ) 1132(E-14/Ⅲ),1133(E-14/Ⅲ) 5388(-/Ⅳa),1135(E-14/Ⅲ) 1134(E-14/Ⅲ),1131(E-15/Ⅲ) 475(F-14/Ⅲ),750(F-14/Ⅲ) 465(F-14/Ⅲ),474(F-14/Ⅲ) 470(F-14/Ⅲ),471(F-14/Ⅲ) 511(E-14/Ⅲ),976(E-14/Ⅲ) 1165(F-14/Ⅲ),1886(F-14/Ⅲ) 429(F-14/Ⅲ),1166(F-14/Ⅲ) 166(E-13/Ⅲ),1137(E-14/Ⅲ) 586(E-14/Ⅲ),1136(E-14/Ⅲ) 800(E-14/Ⅲ),1128(E-15/Ⅲ) 1127(E-15/Ⅲ),510(E-14/Ⅲ)	24.6	21	-	砂粒 赤	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-	ケズリ	ハケ(縦位) ナデ	-	胴部下半赤化
143	31	1431(E-14/Ⅲ),1393(D-14/Ⅲ) 1412(E-15/Ⅲ),1299(E-14/Ⅲ) 1430(E-14/Ⅲ),1116(E-15/Ⅲ) 967(E-14/Ⅲ),1228(E-15/Ⅲ)	25.8	-	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR7/6 (橙)	5YR6/6 (橙)	-	ケズリ	-	-	-
	32	1887(F-14/Ⅲ),1885(F-14/Ⅲ) 1884(F-14/Ⅲ),1889(F-14/Ⅲ) 431(F-15/Ⅲ),1278(E-14/Ⅲ) 423(F-15/Ⅲ),1399(C-15/Ⅲ) 1126(E-15/Ⅲ),1005(E-14/Ⅲ) 351(E-14/Ⅲ),1878(F-14/Ⅲ) 721(E-14/Ⅲ),597(E-14/Ⅲ) 985(E-14/Ⅲ),450(F-14/Ⅲ) 451(F-14/Ⅲ),427(F-14/Ⅲ) 1288(E-14/Ⅲ),784(F-14/Ⅲ) 783(F-14/Ⅲ),1031(E-15/Ⅲ) 1032(E-15/Ⅲ),1124(E-15/Ⅲ) 1167(F-14/Ⅲ),428(F-14/Ⅲ) 779(F-15/Ⅲ),1879(F-14/Ⅲ) 780(F-15/Ⅲ),425(F-15/Ⅲ) 1138(F-15/Ⅲ),426(F-14/Ⅲ)	25.4	24	-	精緻 細砂	良好	5YR7/8 (橙)	5YR6/6 (橙)	-	ケズリ	-	-	スス付着
	33	159(D-13/Ⅲ),154(D-13/Ⅲ) 1129(E-15/Ⅲ),412(F-15/Ⅲ) 1478(E-14/Ⅲ),1139(F-15/Ⅲ) 421(F-15/Ⅲ),155(D-13/Ⅲ) 1738(E-15/Ⅳa),1233(E-14/Ⅲ) 578(E-14/Ⅲ),430(F-14/Ⅲ) 411(F-15/Ⅲ),1119(E-15/Ⅲ) 409(F-15/Ⅲ),422(F-15/Ⅲ) 417(F-15/Ⅲ),415(F-15/Ⅲ) 436(F-14/Ⅲ),416(F-15/Ⅲ)	23	-	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	ケズリ	-	-	胴下半剥落多

第34表　古代出土遺物観察表(４)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層位)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏末調整部	備考
143	34	1660(E-14/Ⅳa),953(E-14/Ⅲ) 1741(E-14/Ⅳa),1459(E-15/Ⅲ) 1750(E-15/Ⅳa),1742(E-15/Ⅳa) 1749(E-15/Ⅳa),1321(D-14/Ⅲ) 1276(E-14/Ⅲ),1275(E-14/Ⅲ) 298(D-14/Ⅲ),700(E-14/Ⅲ) 299(D-14/Ⅲ),1361(D-15/Ⅲ) 1695(D-14/Ⅳa),1009(E-14/Ⅲ) 1211(E-14/Ⅲ),1429(E-15/Ⅲ) 1222(E-15/Ⅲ),1115(E-14/Ⅲ) 964(E-14/Ⅲ),1400(C-15/Ⅲ) 957(E-14/Ⅲ),728(E-14/Ⅲ) 344(E-14/Ⅲ),1405(E-15/Ⅲ) 1247(E-14/Ⅲ),1664(E-14/Ⅳa)	25.4	23	-	砂粒 小礫 赤	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-	ケズリ	-	-	スス付着
	35	1724(D-15/Ⅲ),1434(E-15/Ⅲ) 1639(F-14/Ⅳa),1638(F-14/Ⅳa) 1637(F-14/Ⅳa),1253(E-14/Ⅲ) 444(F-14/Ⅲ),1164(F-14/Ⅲ)	26.8	-	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	ケズリ	-	-	-
	36	1104(E-15/Ⅲ),670(E-15/Ⅲ) 1311(E-14/Ⅲ),1452(E-14/Ⅲ) 932(E-14/Ⅲ),1728(E-15/Ⅲ) 669(E-15/Ⅲ),1190(E-14/Ⅲ) 1111(E-15/Ⅲ),979(E-14/Ⅲ) 1394(D-14/Ⅲ),1460(E-15/Ⅲ) 1219(E-15/Ⅲ),969(E-14/Ⅲ) 1424(E-15/Ⅲ),960(E-14/Ⅲ) 259(E-14/Ⅲ),1092(E-14/Ⅲ) 1383(C-14/Ⅲ),1420(E-15/Ⅲ) 1110(E-15/Ⅲ),1216(E-14/Ⅲ) 607(E-14/Ⅲ),1069(E-15/Ⅲ) 253(E-15/Ⅲ),1290(E-14/Ⅲ) 966(E-14/Ⅲ),1061(E-14/Ⅲ) 774(E-15/Ⅲ),371(E-14/Ⅲ) 1251(E-14/Ⅲ),1077(E-15/Ⅲ) 1075(E-15/Ⅲ),1076(E-15/Ⅲ) 633(E-15/Ⅲ),1292(E-14/Ⅲ)	26.8	16.4	-	小礫	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-	ケズリ	ハケ(斜位) ハケ(横位)	-	スス炭化物付着,口縁部屈曲なし
	37	126(D-11/Ⅲ),142(D-11/Ⅲ) 124(D-11/Ⅲ)	29	-	-	砂粒 小礫	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	ケズリ	-	-	-
	38	952(E-14/Ⅲ),1094(E-14/Ⅲ) 1381(C-14/Ⅲ),237(E-15/Ⅲ) 1084(E-15/Ⅲ),534(E-14/Ⅲ) 991(E-14/Ⅲ),1266(E-14/Ⅲ) 655(D-15/Ⅲ),1690(E-14/Ⅳa) 1300(E-14/Ⅲ),296(D-14/Ⅲ) 822(E-14/Ⅲ),308(D-14/Ⅲ) 285(E-14/Ⅲ),282(E-14/Ⅲ) 434(F-14/Ⅲ),1732(E-15/Ⅳa) 1038(E-15/Ⅲ),249(E-15/Ⅲ) 1027(E-15/Ⅲ),1224(E-15/Ⅲ) 1456(E-15/Ⅲ),1312(E-14/Ⅲ) 1313(E-14/Ⅲ),1465(E-15/Ⅲ) 946(E-14/Ⅲ),339(E-14/Ⅲ) 1303(E-14/Ⅲ),1044(E-15/Ⅲ) 319(E-14/Ⅲ),1286(E-14/Ⅲ) 956(E-14/Ⅲ),1454(E-15/Ⅲ) 656(D-15/Ⅲ),880(D-14/Ⅲ) 903(E-14/Ⅲ),922(E-14/Ⅲ) 313(E-14/Ⅲ),1347(D-14/Ⅲ) 405(F-15/Ⅲ),623(E-15/Ⅲ) 1121(E-15/Ⅲ),605(E-14/Ⅲ) 1122(E-15/Ⅲ)	24	21	-	砂粒 小礫	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-	ケズリ	-	-	-
	39	1195(E-14/Ⅲ),947(E-14/Ⅲ) 729(E-14/Ⅲ),850(E-14/Ⅲ) 1341(D-14/Ⅲ),1340(D-14/Ⅲ) 1344(D-14/Ⅲ),1346(D-14/Ⅲ) 1455(E-15/Ⅲ),844(E-14/Ⅲ) 1264(E-14/Ⅲ),1731(E-15/Ⅳa) 615(E-15/Ⅲ),1043(E-15/Ⅲ) 1753(E-15/Ⅳa),1042(E-15/Ⅲ) 1360(D-15/Ⅲ),1421(E-15/Ⅲ) 1028(E-15/Ⅲ),1034(E-15/Ⅲ)	10.8	10.6	-	細砂 小礫	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-	ハケ(横位) ケズリ	ハケ(縦位)	-	小型甕

第35表　古代出土遺物観察表(５)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	長さ(cm)	径(cm)	重さ(g)	穿孔径(cm)	胎土	焼成	色調(外)	備考
144	40	1528(F-7/Ⅲ)	1.66	0.88	(0.99)	0.28	長,角	良好	5YR5/6 (明赤褐)	管状土錘
	41	1915(F-7/Ⅳa)	2.49	0.91	1.92	0.26	長,角	良好	5YR6/6 (橙)	管状土錘



第145図　古代出土遺物実測図(軽石製品1)



第146図　古代出土遺物実測図(軽石製品2)

0　10cm

4　軽石製品(第145,146図，No42～64)

No42～64は，軽石製品である。軽石製品の分布は，D～F-13～16区に分布し，土坑や土師器の分布と重なる。D,E-15区から，東南方向のF-14区西側にかけて集中している。

軽石製品は小破片も含め110点出土したがその中から実測可能なものを掲載し，形状により以下の５タイプに分類した。

A-線刻のあるもの
B-穿孔のあるもの
C-段をもつもの
D-磨面のあるもの
E-面取りの行われているもの

第36表　古代出土遺物観察表(６)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層位)	器種	分類	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
145	42	1733(E-15/Ⅳa)	軽石製品	A	軽石	106.0	54.0	39.0	71.63
	43	1146(F-14/Ⅲ)	軽石製品	A	軽石	129.0	44.0	29.0	39.35
	44	1161(F-14/Ⅲ)	軽石製品	A	軽石	141.0	56.0	41.0	71.08
	45	1436(E-13/Ⅲ)	軽石製品	B	軽石	73.0	37.0	35.0	25.67
	46	1008(E-14/Ⅲ)	軽石製品	B	軽石	(34.0)	49.0	36.0	(22.15)
	47	1019(D-15/Ⅲ)	軽石製品	B	軽石	(54.0)	(58.0)	37.0	(38.11)
	48	1036(E-15/Ⅲ)	軽石製品	B	軽石	81.0	85.0	25.0	68.35
	49	1006(E-14/Ⅲ)	軽石製品	C	軽石	(62.0)	(52.0)	37.0	(47.80)
	50	1601(E-16/Ⅲ)	軽石製品	C	軽石	(54.0)	(73.0)	51.0	(53.31)
	51	503(E-14/Ⅲ)	軽石製品	C	軽石	(57.0)	(94.0)	54.0	(113.40)
	52	775(E-15/Ⅲ)	軽石製品	C	軽石	(61.0)	(69.0)	50.0	(65.99)
	53	788(F-14/Ⅲ)	軽石製品	C	軽石	(59.0)	(73.0)	29.0	(48.66)
	54	987(E-14/Ⅲ)	軽石製品	C	軽石	(53.0)	(108.0)	59.0	(104.56)
146	55	659(E-15/Ⅲ)	軽石製品	D	軽石	(63.0)	(130.0)	64.0	(140.21)
	56	885(D-14/Ⅲ)	軽石製品	D	軽石	(141.0)	(59.0)	90.0	(380.00)
	57	1227(E-15/Ⅲ)	軽石製品	D	軽石	(137.0)	126.0	81.0	(289.20)
	58	1048(E-15/Ⅲ)	軽石製品	E	軽石	(48.0)	(53.0)	19.0	(20.40)
	59	1156(F-14/Ⅲ)	軽石製品	E	軽石	(58.0)	(47.0)	34.0	(33.98)
	60	1155(F-14/Ⅲ)	軽石製品	E	軽石	(64.0)	41.0	30.0	(34.90)
	61	1158(F-14/Ⅲ)	軽石製品	E	軽石	(66.0)	80.0	37.0	(76.41)
	62	1641(F-14/Ⅳa)	軽石製品	E	軽石	(65.0)	(45.0)	21.0	(27.96)
	63	1163(F-14/Ⅲ)	軽石製品	E	軽石	(42.5)	99.0	27.0	(51.16)
	64	1336(E-13/Ⅲ)	軽石製品	E	軽石	164.0	(139.0)	54.0	(355.00)

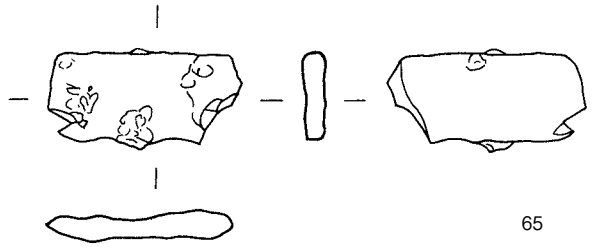
No42～44はＡタイプで，大きさはほぼ揃っている。No42は，中央部に横断する２本の線刻がある。No43は線刻に疑問も残るが，正面下端に３段に削り込んだ痕が観察される。No44は，両側縁を大きく抉る。

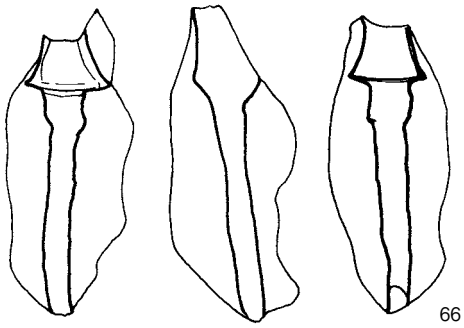
No45～48は，Ｂタイプで穿孔と形状は様々である。No45は，正面に７mm大の穿孔が５か所観察できる。No46は，中央部が凹状に加工がされている。No47,48は，扁平な板状の軽石の側縁に加工を施し，抉りが入る。No47は左側縁が欠損しているが，No48はその形状から石錘の可能性がある。

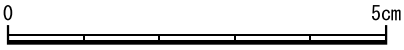
No49～54は，Ｃタイプで表面の加工により，縁状の段をもつものを包括した。いずれも欠損し，形状は不明である。No49～52は，緩斜度の段をもつ。No53,54は，ほぼ直角に近い急斜度の段をもち，No53は軽石の目を斜めに切るように明瞭な段がつけられている。

No55～57は，Ｄタイプで石皿状の磨面をもつものを包括した。いずれも欠損しており，形状は不明である。No55は，表面中央に溝状の凹みがあり，表面に磨面が観察される。No56は，表面，裏面共に磨面がみられるが，形状は不明である。

No58～64は，Ｅタイプで扁平な板状素材に面取りがされているものを包括した。No58は，左側縁から下端部にかけて斜めに削られた痕が観察できる。No60は，右側縁から下端部にかけて斜めに削られた痕がみられ，No61は，中央が反る形状である。







第147図　古代出土遺物実測図(鉄器)

第37表　古代出土遺物観察表(７)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層位)	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
147	65	869(E-15/Ⅲ)	鉄器	刀子	13.5	25.5	5.0	1.55	-
147	66	1112(E-15/Ⅲ)	鉄器	鉄鏃	45.8	17.6	18.0	6.84	-

５　鉄器(第147図，No65,66)

No65,66は，鉄器である。鉄器の分布は，Ｅ-15区の南側平坦面で出土し，土師器や軽石製品の分布と重なる。

No65は鉄製刀子である。刃部が欠損しているため部位ははっきりしないが，形状から基部の可能性がある。

No66は，鉄鏃である。外観は,酸化が進み形状がはっきりしないが，Ｘ線写真撮影を行った結果，先端部が欠損する鉄鏃であることが判明した。鏃身の中央部から茎が，完全な状況で観察できる。有茎式で鏃身も細い形状から，尖根式の切っ先をもっていたことが推測される。また，断面が四角の茎の下端部は，両面とも斜めに面取りを施し，尖った形状である。

第Ⅵ章　まとめ

第１節　旧石器時代

(１)旧石器時代の遺構および遺物分布について

旧石器時代の遺構・遺物分布は，Ｄ～Ｆ-15～16区に限られ，礫群がＸⅤ層で検出され，遺物はＸⅥ層からＸⅡ層にかけて出土した。ブロックを合計で13か所検出し，さらにこれらが相互に近接する状態がみとめられたため，ブロックが空間的に集合する単位を「エリア」と呼称し，２つのエリアを設定した。

検出された３基の礫群は，１号礫群と２号礫群19個，３号礫群７個の礫で構成され，掘り込みは確認していない。また，３基の礫群は中央に細片，その周りに粉状の炭化物を伴っており，礫群の使用に伴うものと考えられる。

各礫群と遺物の出土状況をみると，礫群の構成礫と礫群に近接するブロックの遺物の垂直分布の間には重複がみられ，ブロックと礫群の形成は同時期である可能性が高い。

また各礫群及び炭化物の分布域の平面的位置は，遺物が濃密に分布するブロックとは若干ずれる傾向があり，３基の礫群はいずれも遺物の分布密度が低い位置に形成されている。

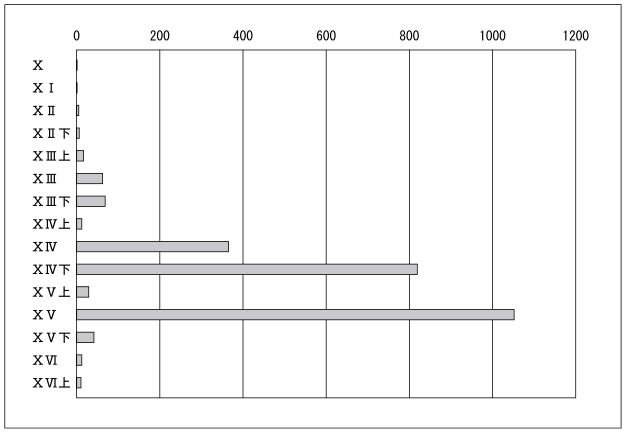
遺物は各層ごとに取り上げを行ったが，接合作業の結果，ＸⅥ層～ＸⅡ層の遺物2,326点の内336点が接合し，60個体の接合資料を得た。接合率は14.4％である。また，第45図にみるようにブロック間ないしエリア間の接合も多数確認された。これらの豊富な接合例はブロック形成の同時性を示すものと評価できる。さらに，これらの資料は層位を越えて接合する事例が多く，遺跡形成過程における遺物の上下移動の実態をよく表している。ブロック認定において，発掘調査時の層位認定と遺物の上下移動の評価の重要性をあらためて強く認識させるものである。

なお，第148図にみるように，遺物の垂直分布はＸⅣ層下部～ＸⅤ層を主体としている。層位的にみれば，P-17とP-15の赤色パミスの間に位置づけられると考えられる。

第149～151図には，接合状況を石材別工程別に表示し，各ブロックでの代表的資料を抽出した。以下，この図に従って各ブロックの評価を行いたい。

玉髄(第149図)

第1ブロックでは，三稜尖頭器の製作資料（接合資料No10,11,12)と求心的剥片剥離(接合資料No９)が確認される。また第２ブロックと素材を共有する接合例が数点認められる。



第148図　出土層位別石器数

第２ブロックでは三稜尖頭器が出土し，三稜尖頭器の製作に関連する接合例がある（接合資料No13）。また石核からの剥片剥離に関連する接合例（接合資料No１,２,３,６)がある。石核の接合資料(接合資料No３)は，剥離の中途段階で一部が第１ブロックに移動しており遺物の分布状況と剥片剥離のプロセスは矛盾しない。剥片剥離が複数のブロックにまたがって空間的に移動している事例として理解できる。

三稜尖頭器製作関連資料(接合資料No13)は，三稜尖頭器製作の調整剥離は第２ブロックで行われるものの三稜尖頭器の素材と直接的な前後関係をもつ別個体の剥片が第１ブロックで出土している。これらの剥片を遺跡内で生産した痕跡はみられず，石器素材を遺跡外から別々のブロックに搬入している事例と理解できよう。

第１ブロックと第２ブロックに関しては，共通の接合事例が複数あり，しかもこれらは石器製作工程に沿った移動パターンと矛盾しない。三稜尖頭器素材が同時に搬入されている事例からも分かるように，第１ブロックと第２ブロックは極めて高い同時性をもつものと評価できる。

第３ブロックは，小型のナイフ形石器(第21図30)と三稜尖頭器製作関連の接合資料を含んでいる。

三稜尖頭器に関連する接合資料(接合資料No14)は，整形剥離段階の接合資料である。

第４ブロックは，ナイフ形石器に関連する接合例(接合資料No15)と，石核からの剥片剥離に関連する接合例(接合資料No４)がある。接合資料No４から剥離された剥片の一部には側縁に二次加工が施されており，石核からの剥片剥離と石器製作が同一ブロックで行われている事例である。

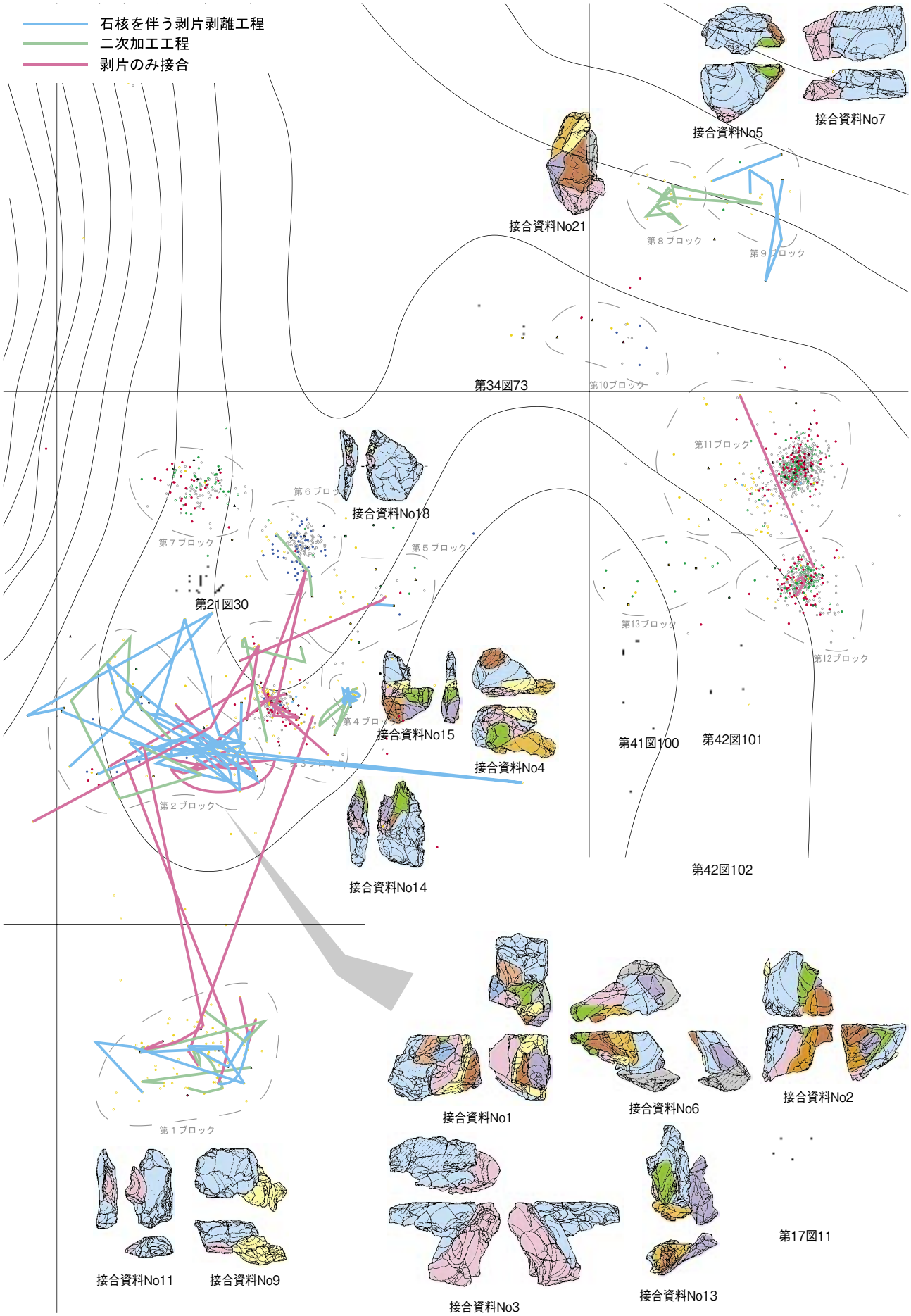
第５,６ブロックは，CCの剥片がまばらに点在し，削器とブランティングチップの接合例(接合資料No18)がある。

ただし，接合資料No18の出土状況は第６ブロックにおいて客体的な存在であり，CCを用いた積極的な石器製作の痕跡はうかがえない。

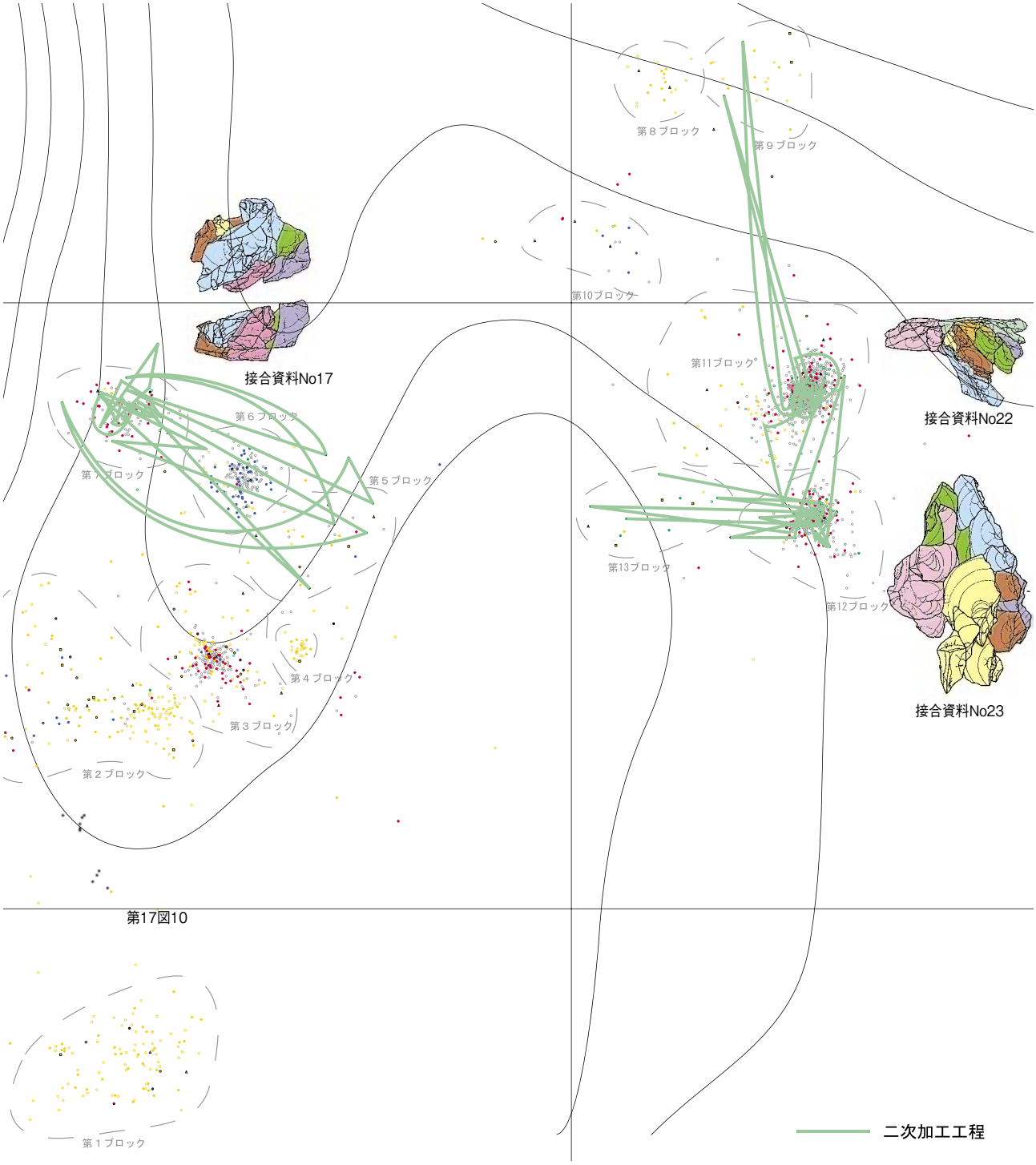
第８,９ブロックは，CCを主体とするブロックであり，明確なタイプツールの出土はないが，第８ブロックには三稜尖頭器の制作に関連するとみられる資料(接合資料No21)がある。また，第９ブロックでは石核からの剥片剥離に関連する接合例が２点(接合資料No５,９)あり，剥片の主軸長が15mm～20mm程度の剥片を剥離している。しかし，この剥片を素材とする石器の出土例は少なく，その目的とする器種は判断できない。

頁岩(第150図)

頁岩は，第２ブロック出土の横長剥片素材のナイフ形石器(No10)と，三稜尖頭器の製作に関連する３点の接合例がある。これ以外に剥片剥離などの石器製作の痕跡は希薄であり，頁岩の出土例はほぼ製品単体での搬入と三稜尖頭器製作



第149図　工程別接合状況図(CC)



第150図　工程別接合状況図(SH)

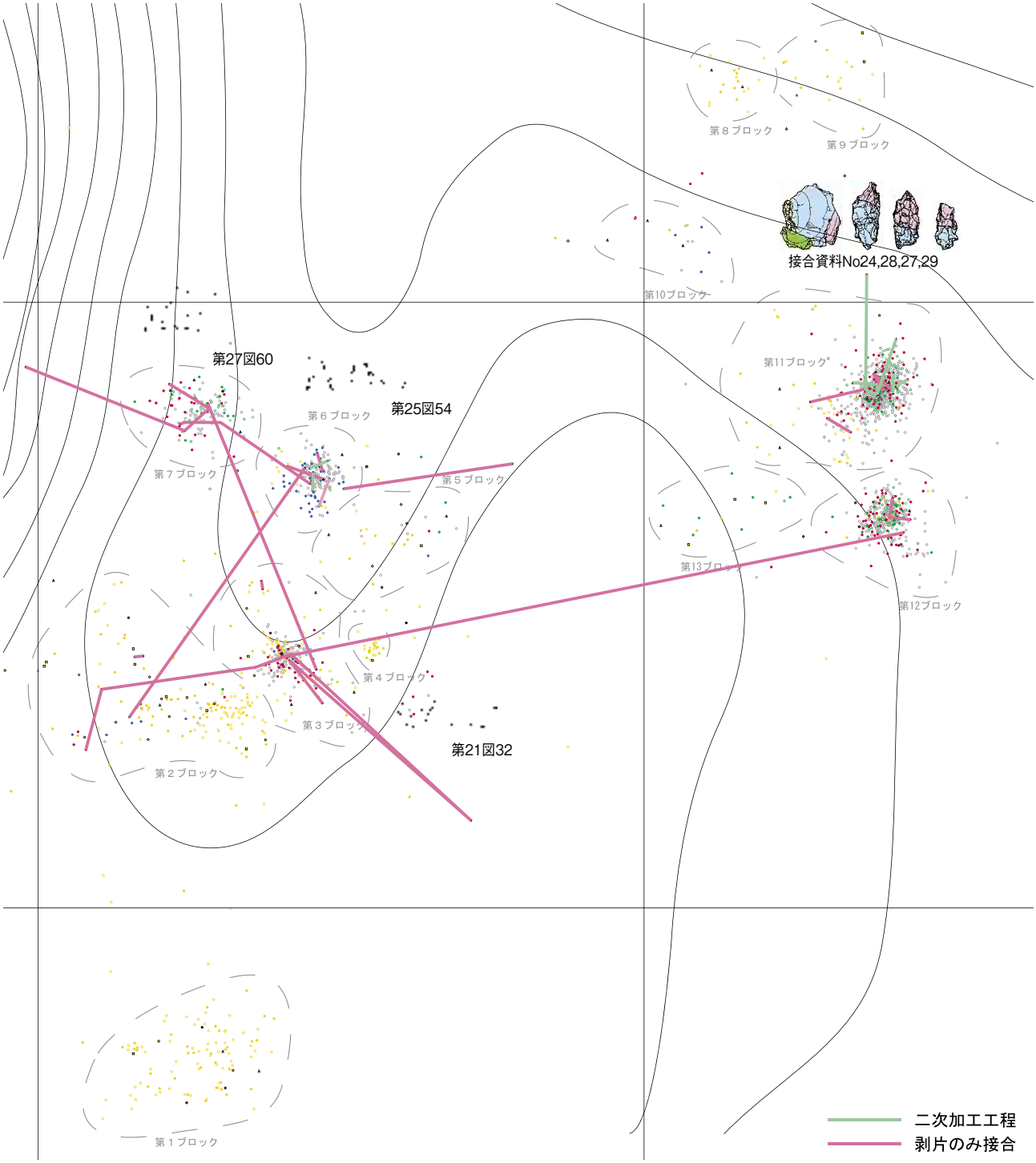
に限定される。

第１エリアでは，第７ブロックを主体として，素材剥片から三稜尖頭器の製作に至る良好な接合例がある(接合資料No17)。この資料の接合状況は，一部の剥片が第７ブロックから第６ブロックを飛び越えて第５ブロックに移動しているやや特異な事例である。地形的に舌状の尾根をまたぐ形になっており，自然的要因による移動はやや考えにくい。移動している剥片の分布状況も剥片剥離のプロセスとは合理的な関係を見いだせない。慎重な検討を要するものの，このような状況を積極的に評価すればこれらの剥片は廃棄行為等による移動の結果と推測することができる。

第２エリアでは，第11,12ブロックで三稜尖頭器の製作に関連する良好な接合事例が得られている。特に接合資料No22とNo23は三稜尖頭器の製作工程がほぼ復元できる接合資料であり，加工の目的とする製品には規格性がみられる。

黒曜石(第151図)

黒曜石は小剥片が多く剥片同士の接合がほとんどである。分布状況をみると，第３，第６，第７，第11，第12ブロックで濃密な分布を形成しており，石材的な分布の偏りがみられる。



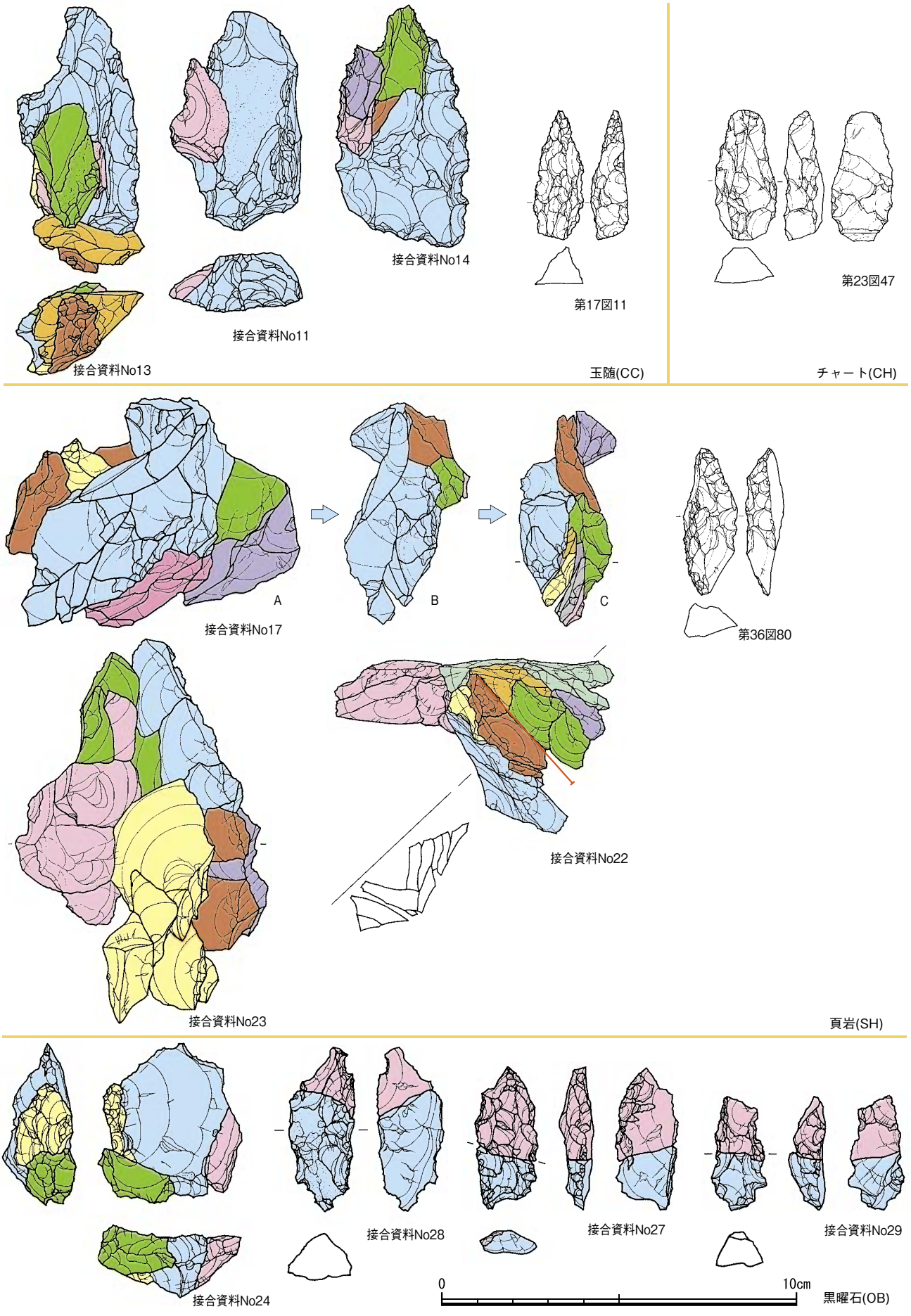
第151図　工程別接合状況図(OB)

第１エリアでは，３ブロックでOB2Bの台形石器(No32)が出土している。第３ブロックではOB2Bの大型剥片の折断資料(接合資料No16)もあり，何らかの石器製作を行っているものと思われるが，明確な接合例はなく石器製作の内容は評価できない。第６ブロックはOB3Bが集中的に分布するブロックである。ブロック内で同一石材の台形石器(No54)が出土しており，このブロックは台形石器製作に関連するものである可能性が高い。

隣接する第７ブロックでは，OB3Aの三稜尖頭器(No60)が出土している。同一ブロックで頁岩の三稜尖頭器製作関連資料(接合資料No17)があり関連が注目されるところである。

第２エリアでは，第11，第12ブロックで濃密な集中を示す。第11ブロックでは三稜尖頭器製作に関連する接合例(接合資料No24,27,28,29)と掻器が出土している。

出土している三稜尖頭器は，玉随や頁岩に比べるとやや小型で中央部で破断しているものが多い。同一ブロックで頁岩の三稜尖頭器製作関連資料(接合資料No22)がある。第12ブロックでは明確なタイプツールの出土はなく，石器製作の内容は評価できない。ただし，第12ブロックからは第１エリアと第２エリアをつなぐ接合例(接合資料No54)が出土してい



第152図　三稜尖頭器の製作工程と関連遺物

る。接合資料の出土位置はそれぞれが所属するブロックの中心部付近であり，層位的にも極端な浮き上がりはみられないため，自然的営為による移動の可能性は少ないと判断した。

本遺跡で認定したブロックには，遺物分布密度が濃密で接合例が豊富なブロック(第１～第４，第６～第９，第11,第12ブロック)と，比較的分布密度が低く，接合例が少ないブロック(第５，第10，第13ブロック)の二者が認められる。

これらの遺物分布密度の差異は，接合例とチップ等の分布傾向から，ブロック内の石器製作行為の有無に関連するものと考えられる。

これらを検討する具体的事例として，第13ブロックで接合例を伴わない石核(第41図100，第42図101,102)がまとまって出土している事例や接合資料No22の第11ブロックから第９ブロックへの移動，接合資料No17の第７ブロックから第５ブロックへの移動を挙げることができる。特に接合資料No22や接合資料No17を構成する一部の剥片の移動には，石器製作工程上の脈絡を見いだすことはできない。地形的にみても自然的営為による移動は考えにくいため，積極的に評価すれば廃棄等の行為によるブロック形成の可能性を指摘できる。礫群との位置関係にも相関性を見いだすことができ，今後，検討を要する課題である。

(2)三稜尖頭器の製作技術について

前項で検討したように，本遺跡では各ブロックで三稜尖頭器およびその製作に関する接合資料が多く認められる。ブロック間の接合例が多く層位的にも安定しているため，ブロックを形成する石器群は一括性が極めて高いものと判断される。三稜尖頭器を製作する石材は，製品での搬入品と判断できる第５ブロックのチャート製の資料を除いて，玉随，頁岩，黒曜石の三者に限定される。またこれらの石材についても，遺跡内に素材剥片の生産をうかがわせるような石核や大形の剥片などはみられず，剥片ないし小型の偏平礫を遺跡内に搬入し，これを素材として石器製作が行われたものと推測される。

ここでは，石器製作技術が検討可能な資料を石材ごとに抽出し，本遺跡における三稜尖頭器の製作技術についてまとめておきたい。

玉随

接合資料３点，製品１点を抽出した。

接合資料No13は幅広の不定形剥片を横位に，接合資料No12は縦長剥片を縦位に，接合資料No14は節理面に沿って割れている偏平礫ないし剥片を素材としている。素材の形態には多様性が認められる。

接合資料から看取される製作技術で最も注目すべき特徴は，接合資料No13に代表されるように整形剥離の中途で製品の主軸長を減じる調整剥離が加えられている点である。石器に残された剥離面の切り合いを観察すると，接合資料No11とNo14も同様に，基部の調整剥離が周縁の整形剥離に先行して施されていることがわかる。

これらの観察の結果，玉随においては①主軸長を減じる剥離→(②器厚を減じる剥離)→③周縁からの整形剥離の順位で調整剥離が進行するものと判断される。

なお，この調整剥離の結果，石器の主軸長はいずれも65mm前後に調整されている。ただし第17図11のような製品資料と比べると，依然としてかなり幅広で側縁の調整剥離の角度が浅い。最終的な形状に整えられるまでには，まだ数段階の工程を残している可能性が考えられる。

頁岩

接合資料３点，製品１点を抽出した。

接合資料No17は厚手の剥片素材を利用し，中間素材を生成しながら加工を進行させる資料である。接合資料No23とNo22は薄手で幅広の剥片を使用し，周辺から規則的な整形剥離を加えている。

これらの接合資料はいずれも剥片を素材として利用するものの，整形剥離の手法には違いがみられる。つまり，接合資料No23とNo22は，最初から素材の形状に合わせて製品の主軸をレイアウトし，側縁に沿って調整剥離を連続的に進行させるなど，計画的な加工の意図が読みとれる。一方，接合資料No17は中間素材のＢ段階から素材の形状に応じて複雑に転回しながら，素材の形状に合わせて臨機応変に加工を行っている。特にＣ段階にみられるようなスポール的な剥離は，素材の表裏の概念にすらとらわれない柔軟な剥離技術を象徴するものと評価できる。

製品や接合資料を観察すると，頁岩においても製品に対する規格意識がある程度看取できる。接合資料No17は前述のスポール状の剥離によって明らかに主軸長を減じる調整が施されている。接合No23も周縁からの調整剥離が一周した段階で中間素材に対してかなり大きな剥離が施されており，サイズ調整が意識されている可能性がある。接合資料No22は素材のサイズが製品の規格に適合しており主軸長を減じる調整剥離は必要ないものと解される。

また，接合No22およびNo23は周縁からの調整剥離の段階で，時折素材の背面側からの調整剥離が見受けられる。この剥離には打面の角度を調整し腹面側からの剥離を素材の中央付近まで到達させる作用が考えられ，器厚を減じる効果が予測できる。このような調整も製品の規格を前提に意図されたものであると判断される。

なお，接合資料No17やNo23の調整剥片には二次加工が施されているものがある。整形剥片の石器素材への利用にも注意しておく必要がある。

黒曜石

接合資料４点を抽出できる。抽出した４点は，剥片素材を横位に利用している。玉随や頁岩と比べると，やや小型の資料が多い。素材の大きさや比較的軟らかくもろい石材の性質に起因するものであろう。

本遺跡で検出された接合資料を総括して指摘できるのは，まず，製品のサイズに，一定の規格性がみとめられることである。玉随に関しては最終的な製品の前段階である可能性が

あるものの，製品の主軸長は玉随でおおむね65mm前後，頁岩で40mm前後，黒曜石で30mm前後となる。接合資料の中には素材のサイズからより大きな製品を製作可能であるにもかかわらず，意図的に主軸長を減じる加工が行われているものが少なくない。このことは，製品の規格に関して明確な規範意識が作用していることのあらわれと理解できる。

さらに，石材ごとに製品の規格が若干異なることも興味深い。素材の形状や石材の性質，石器製作工程上の所属段階などが製品の規格に影響を与えているものと理解できる。

三稜尖頭器の製作技術に関しては，玉随で素材利用に多様性がみられるものの，加工手順には共通性がみとめられる。頁岩については剥片素材を利用する点では共通するが，素材の利用形態や石器製作技術には多様性がみとめられる。特に，最初から素材に製品の主軸をレイアウトした計画的な石器製作が意図される一方で素材の利用方法や剥片剥離技術に柔軟性がみられるのは興味深い。黒曜石については，良好な接合資料が得られなかったため，十分な様相を明らかにすることはできなかった。

これらをまとめると，三稜尖頭器の製作に関しては，一定の規範を有しながらも条件に応じて柔軟に技術を選択する様相が浮かび上がる。ベースとなる定型的な石器製作技術を有しながらも，必ずしもそれに固執しない技術のあり方は，この遺跡の三稜尖頭器製作技術の特徴と言える。

ところで，本遺跡で検出された石器群は層位的にはP-15とP-17の間に位置する。小型の三稜尖頭器が主体を占め，それ以外のタイプツールが少ないことが本遺跡の石器群の特徴である。しかし，豊富な接合例が示すように，石器群としての一括性は高く，三稜尖頭器の製作工程をほぼ完全に復元できる資料を含んでいる。検討の結果，製作技術の選択や製品の規格性には一定の規制を見いだすことができるが，同時に技術的，形態的な多様性も看取できる。今後，石器の最終形態のみならず石器製作技術をふまえた総合的な評価が重要になるものと思われる。

第２節　縄文時代

(１)縄文時代早期

遺構

縄文時代早期では,集石12基と土坑３基を検出している。遺構の配置状況からみると，調査区北側の尾根状の平坦面の遺物集中部付近に集石11基が集中しさらに東西の２エリアに分かれる。これは，遺物の出土状況とも重なり，Ⅱ類とⅣ類の土器との関連が強く疑われる。

また，調査区北側で検出されている集石は，７号集石のみ礫が一か所に集中するが，３基の集石で一部に礫の集中部をもつ以外ほとんどの礫がまばらに散在する。

また，調査区南側では，まばらに散在する12号集石１基と土坑３基が検出されたが，遺構の周辺では遺物の出土がなく近接するグリッドの尾根状の平坦面から東側緩斜面にかけてⅡ類とⅢ類土器及び石器が出土しているのみで遺構との関連は低いものと思われる。

12号集石は，少数の礫が集まる集中部が３か所あるが全体的に礫のまとまりがみられず広範囲にまばらに散在する。

また，土坑は３基とも中に小ピットをもつが，逆茂木痕の可能性は低く土坑の性格は判断できない。

12基の集石は，ほとんどが散石状であることから使用された礫を外方向に散石状に廃棄したものとみられる。また，集石間の礫接合を行なったので，礫の他集石での二次的な使用や各集石の時間的な違いについては検証できてない。

また，土地利用の観点では，調査区北側の遺物と集石の集中部は，下層の旧石器時代の遺物遺構の出土と重なり，調査区南側でも尾根上のコンタの高い部分に遺物と遺構の分布がみられることから，土地利用の傾向が同じであることを示唆できる。

土器

Ⅰ類からⅣ類までの土器が出土している。

Ⅰ類土器は下剥峯式土器に分類される。調整方法，胎土，分布状況から判断して，１個体と考えられる。

Ⅱ類土器は，手向山式土器に分類される。当初，山形押型文を施文後に沈線を施すタイプ(No21,30等)と施さないタイプ(No12,13等)では分布状況が異なるのではないかと考えていたが，実際はほぼ同一の場所(F-8,9区)からの出土であった。これに対し，菱形押型文を施文するもの(No16)はE-16区からの出土で前述のタイプのものと分布が異なる。沈線が施されるタイプと施されないタイプの分布状況が同様であること，施される押型文の種類によって分布状況が異なることは興味深い。

Ⅲ類土器は平栫式土器に分類される。小破片がほとんどであるが，胎土，分布状況等から判断して２ないしは３個体存在した可能性がある。

Ⅳ類土器は塞ノ神Ｂ式土器に分類される。１号集石から出土した土器は，E-17区出土の土器と接合している(No50)。この資料は，胎土，調整等から判断して，E-17区から出土したNo51,52等と同一個体であると考えられる。１号集石とⅣ類土器が関連しているとすれば，集石から少し離れた場に土器

を廃棄したことになる。

石器

縄文時代早期では，点数は少ないものの調査区から石鏃，ハンマーストーン，磨石・敲石，石皿が出土し，その分布は，土器や集石の平面的な分布と重なる。石鏃は三角形鏃から長身の鏃まで形状も石材も様々であるが，剥片やチップの出土が少ない中で未製品が含まれていることは興味深い。

また，ハンマーストーンNo14は，扁平礫の右側縁に抉りがあり，紐状の物を巻いていた痕跡がある。

(２)縄文時代前期

Ｖ類土器，石器が出土している。

Ｖ類土器は，小破片のため全体の器形は不明であるが，地紋である貝殻条痕や細隆起線文等から，轟Ｂ式土器の範疇に含まれると考えられる。

石器

石器は，チャート製石匙とスクレイパーが出土している。スクレイパーは大分県姫島産の黒曜石を用いている。

(３)縄文時代中期・後期

落し穴状遺構が２基検出されている。埋土の状況，形状など福山町永磯遺跡の18号落し穴状遺構に似る。永磯遺跡の落し穴状遺構は縄文時代をとおして40基検出され，配置が谷状地形から登りきる緩斜面に扇状に配置されているが，本遺跡の遺構は，平坦面に位置し，検出も２基である。調査区の東南から南側に谷状地形があるため落し穴状遺構は遺跡外のエリアに広がるものと推測される。

土器

Ⅵ類，Ⅶ類土器が検出されている。Ⅵ類土器については傾き等が不明なものが多く，細分が困難であったため，まとめて掲載した。その中でNo56,57,62は器形，調整等から春日式土器の可能性が高い。また，No55はその底部であると考えられる。またNo58,61は，宮之迫遺跡Ａ類土器に類似しているが詳細は不明である。その他の土器については，後期土器の範疇に含まれると考えられるが，若干古くなる可能性もあり，類例を待ちたい。Ⅶ類土器は，中岳式土器に分類される。

(４)縄文時代晩期

縄文時代晩期では，調査区からの遺構の検出はなかったものの，縄文時代の他の時期に比べ出土遺物の量も多く遺物の集中部が他の時期と異なり，調査区中央部から南側の緩斜面にあり，土地利用に変化がみられ，調査区南東側の未調査部分の平坦面に広がる様相を呈している。

土器

縄文時代晩期で出土した土器の総数は732点である。小片資料が多く，分類できたのは深鉢，浅鉢を合わせて95点であった。そのほとんどが，黒川式土器の範疇におさまると考えられる。

浅鉢形土器については，いずれも点数が少なく，細分類までには至らなかったが，口縁端部の直下に施される沈線と口縁部の長さとの相関関係が注目される。本遺跡において，内外面ともに沈線が施されるタイプは比較的口縁部が長く，内面のみに沈線が施されるタイプは口縁部が短い傾向がある。この要因が時間的なものかどうかは不明であるが，少なくとも本遺跡においては相関が高いといえそうである。また，屈曲をもたないタイプや傾きの不明な土器等については今後の資料の増加を期待したい。

鉢形土器については，いわゆる半粗半精製といわれる内面に研磨が施され，外面に組織痕をもつもの(No108)の他に，外面に組織痕をもたず，工具によるナデが施されるもの(No107)があった。前者には，炭化物及びススの付着が顕著にみられるのに対し，後者は底部付近の赤化は確認できるものの，炭化物やススの付着は確認できなかった。また，前者と比べ，後者の内面の研磨はさらに丁寧である。この差異はおそらく機能的な要因によるものであると考えられるが，詳細については不明である。

深鉢形土器については，５つに分類することができる。分布状況をみると、大きく分けてE-3,4区付近，F-6,7区付近，E-14区付近，B,C-8区の４か所に集中する。

ＸＡ類土器は若干古手の様相をみせ，入佐式に含まれる可能性もある。２点のみ(No109,110)であったが，F-12区からの出土で，他のＸ類土器と分布が異なる。

ＸＢ類土器は，晩期出土遺物の中で最も点数が多く，本遺跡では晩期深鉢の主流をなすと考えられる。さらに細分すれば，頸部内面に稜線をもつもの(No117,119,120)ともたないもの(No97～100,129等)に分けることができるが，稜線をもつものは数点のみであった。頸部に稜線をもつものはB,C-８区，稜線をもたないものはF-6,7区及びE-14区を中心に分布する。形状と分布状況だけで判断することはできないが，２つのタイプには時期差が存在する可能性がある。

ＸＣ類土器は，屈曲せずそのまま立ち上がるタイプのもので，2点(同一個体の可能性大)のみであった。F-11区からの出土で，他のＸ類土器と分布状況が若干異なる。

ＸＤ類土器は，口縁部に肥厚帯や突帯をもつものである。点数は少ないが，口縁部端部を若干肥厚させるもの（No145,148），台形に近い突帯(No146,147)，断面三角形の突帯(No149～152)がある。No146の観察から，突帯は口縁端部を若干肥厚させた後，台形状の突帯を貼り付けていることがわかった。このことから，黒川式土器の終末に位置づけられる無刻目の突帯をもつ一群は，口縁端部を肥厚させるタイプからの移行の可能性がある。そして，台形状の貼付突帯から断面三角形へと移行し，その後刻目突帯文土器へとつながるのではないかと考えられる。点数も少なく，明確に時期差を肯定することは困難であるが，その可能性は示唆できよう。

ＸＥ類は有文の深鉢の一部である。No158は横位にほぼ水平に沈線が施され，それを軸として，重層的に弧線が施されている。軸となる沈線の下部については，小片資料のためよくわからないが，おそらく上部と同じような弧線が施されて

いたと考えられる。このような文様は滋賀里Ⅱ式，Ⅲ式土器でよくみられる橿原文様に類似している。推測の域をでないが，橿原文様の施された土器をモチーフにこの文様が施された可能性がある。

Ｘ類土器の底部は，平底で胴部と底部の境でくびれ，底部側縁は断面三角形に近いもの(No160,162,166,167等)がほとんどである。胴部と底部の境が比較的曖昧なものは，No163,165等である。前者のうちNo167以外の底部資料はF-7区からの出土で，ＸB類土器の底部と考えられる。No167については，B,C-8区からの出土で頚部に稜をもつタイプのＸB類土器の底部と考えられる。後者については，E-3,4区に集中する深鉢の一群の底部の可能性が高いが，この付近からの土器は小片が多く，細分が不可能であった。晩期深鉢土器の底部については，上げ底から平底へ，胴部と底部の境が緩やかなものから明確にくびれるものへという流れが示唆されているが，本遺跡では境界が緩やかな底部は上げ底ではなく，接合状況もよくないため，時期差については不明であった。

石器

縄文時代晩期では，点数は少ないものの調査区から石鏃，磨製石斧，打製石斧，ハンマーストーン，磨石・敲石が出土し，その分布は，土器の分布と重なる。石鏃は平基式の小型三角形鏃や五角形鏃などが出土している。

また，磨製石斧は全て小型で全面に入念な研磨仕上げが施されており，中でもNo38,39は片刃でノミ状を呈しているため工具に用いていた可能性がある。

第３節　古代

遺構

古代では，５基の土坑と古道跡が調査区の中央部から数条検出されている。土坑は，遺物の出土と重なり，５号土坑内からは土師甕No32が出土しているが，他の土坑を含めて検出面から底面までが浅く遺構の性格は不明である。

古道跡は，古代の遺物集中区に隣接する南側のグリッドから検出され，それぞれ切りあっている。基本的には，調査区外の西側平坦面から北東側緩斜面に古道跡が走り，東西に広がる台地上を行き来していたものと推測され，C～F-9～11区から検出されたものはその切りあい関係から少なくとも３回にわたって方向が変化し，C～F-11,12区から検出されたものは４回方向を変えている。

遺物

土師器坏，甕，土錘，軽石製品，鉄器が出土した。

土師器坏は，甕に較べて出土量が少ない。底部と体部の境界が明瞭であるものがほとんどであるが，No３は若干曲線的に立ち上がる体部をもち，境界が明瞭ではない。墨書土器は２点出土し，うち１点は「田」と書かれている。薩摩国分寺跡で「田」，小倉畑遺跡で「田人」の出土例がある。

土師器甕は，点数は少ないもののバリエーションに富む。

復元できた個体のほとんどが遺物集中区であるE-14区付近からの出土であった。その中で内外面にハケ目が残り，口縁部が比較的長い若干古手と考えられるNo26は，遺物集中区からは離れたF-9,E-8区からの出土であった。また，屈曲部内面に稜をもち若干新しいと考えられるNo37は，D-11区からの出土であった。同じく屈曲部内面に稜をもつNo38の胴部が若干他の土器よりも膨らんでいることを考えると，本遺跡の中で，若干古いと考えられるもの，また，新しいと考えられるものとその他の土器の分布状況が異なっている点は興味深い。

土錘は２点のみであった。ともにE-7区からの出土で，遺物集中区からは離れている。

軽石製品

軽石製品は，形状のはっきりしているものがほとんどない中で，No48は両側縁に明瞭な抉りがあり石錘の可能性がある。また，No55,56は明瞭な磨面があり，形状は不明であるが，厚みなどから石皿のような使途が考えられる。

鉄器

鉄器は，刀子と鉄鏃が1点ずつ出土している。鉄鏃は，先端部が欠損しているが，鏃身が細く茎の断面はやや方形を呈することより長頚鏃の類型と思われるが，征矢の可能性は不明である。

参考文献

堂込　秀人　「南九州縄文暁期土器の再検討―入佐式と黒川式の細分―」『鹿児島考古』第31号　1997
坂口　隆　「刻目突帯文土器の成立」『先史考古学研究』第６号　1996
鹿屋市教育委員会　『水の谷遺跡』　鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(５)　1986
鹿児島県立埋蔵文化財センター　『高篠遺跡・永磯遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(61)　2003
鹿児島県立埋蔵文化財センター　『榎崎Ｂ遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(４)　1993

踊　場　遺　跡

例　言

1　この報告書は，東九州自動車道建設(末吉財部IC～国分IC間)に伴う「踊場遺跡」の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所の受託事業として，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

3　本書で用いたレベル数値はすべて海抜高である。

4　本書の遺物番号は各節ごとの通し番号とし，挿図，表，図版の番号と一致する。

5　発掘調査の実施においては，財部町教育委員会の協力を得た。

6　発掘調査における実測及び写真撮影は，調査担当者が行った。

7　遺構実測の一部は，(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

8　遺物実測の一部は(株)九州文化財研究所に依頼し，その監修については長野眞一が行った。

9　遺物に関する写真撮影等は，鶴田靜彦・福永修一・西園勝彦が行った。

10　踊場遺跡出土炭化材の樹種同定，土壌中のリン酸分析及び植物珪酸体分析については，パリノサーヴェイ株式会社に依頼し，その分析結果報告を掲載した。

11　本報告書の制作・整理作業にはデジタル技術を導入し，図版等の作成及び編集に係るデータ処理は，有馬孝一と岩澤和徳が行った。

12　本書の執筆，編集は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い，有馬孝一と岩澤和徳が行った。各項目の執筆分担は以下の通りである。なお，監修は長野眞一が行った。

第Ⅰ章　……有馬孝一

第Ⅱ章

　第１節　……有馬孝一

　第２節　……岩澤和徳

　第３節　……有馬孝一

　第４節　……岩澤和徳

第Ⅲ章

　第１節　……岩澤和徳

　第２節　……有馬孝一

　第３節　……岩澤和徳

13　掲載遺物の縮尺は，土器が1/3，石器は1/1を基本とする。しかし，礫石器等大型のものについてはこの限りではない。また，遺構については，1/20を基本としたがこれについても大型の遺構についてはこの限りではない。各々，図中に示したスケールを参考とされたい。

14　土器，石器等の出土位置については，各節ごとに記載した。スケールについては，原則として1/500で，図中にグリッドラインが表示されているので参考にされたい。

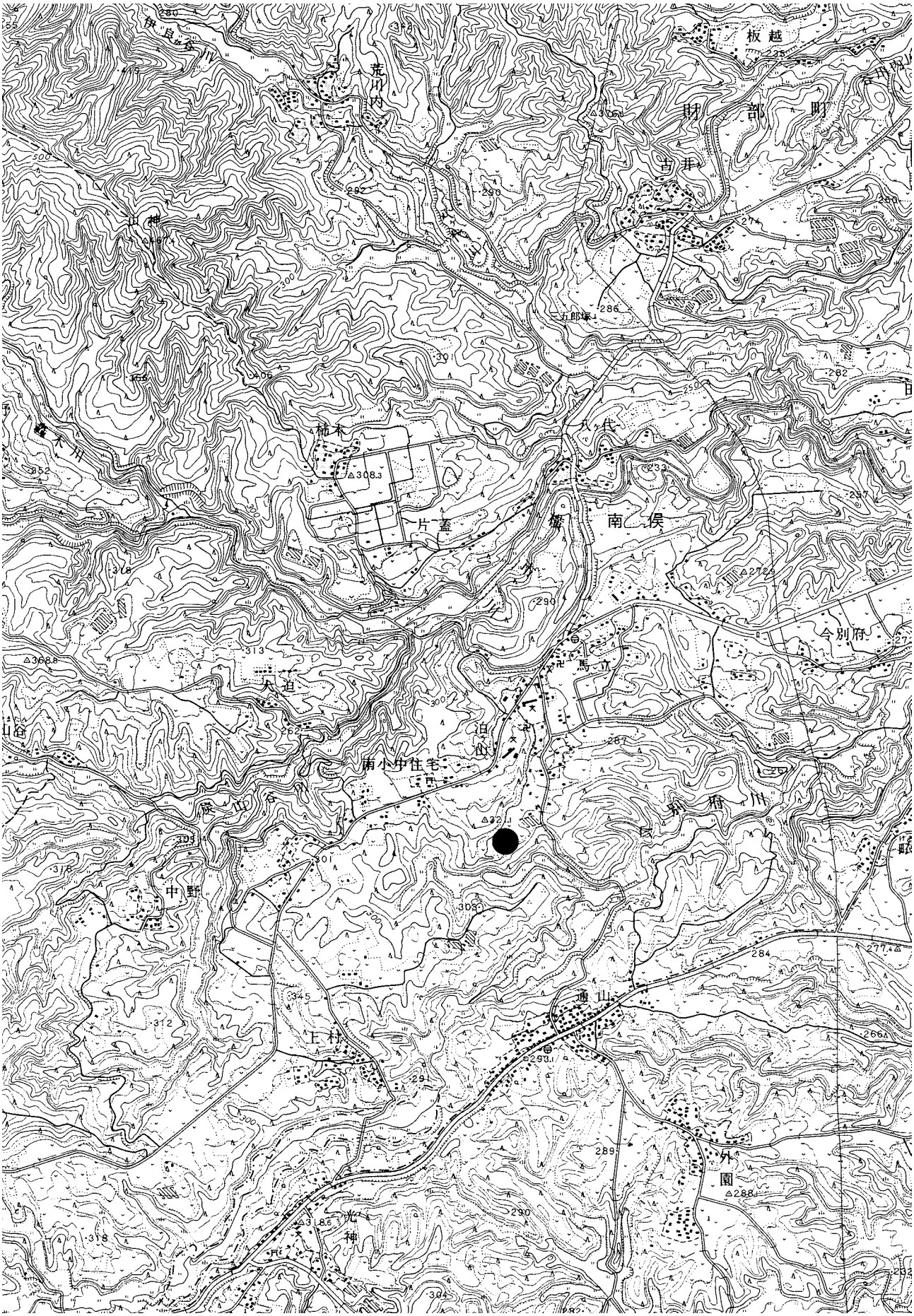
15　本報告書に掲載した出土遺物・図面・写真等は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し活用する。なお，本報告書に使用したデータの一部は，鹿児島県埋蔵文化財情報管理システムおよび埋蔵文化財情報データベース(http://www.jomon-no-mori.jp)で公開する予定である。

報　告　書　抄　録

ふりがな	おどりばいせき
書　　名	踊場遺跡
副 書 名	東九州自動車道 (末吉財部 IC ～国分 IC 間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅳ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	71
編 著 者 名	有馬孝一・岩澤和徳
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 899-4461　鹿児島県国分市上之段 1175-1　　TEL 0995-48-5811
発行年月日	2004 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m^2)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
おどりば 踊　場	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曽於郡 たからべちょうみなみまた 財部町南俣	46443	65-97-0	31° 41' 20"	130° 56' 29"	本調査 20000612 ～ 20001225	4,390	東九州自動車道建設 (末吉財部 IC ～国分 IC 間) に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
踊　場	包含地	縄文早期	土坑３基，集石４基	押型文，下剥峯式，手向山式，平栫式，塞ノ神式 石鏃，磨石／敲石，石皿，etc	
		後期		岩崎下層式，阿高Ⅲ類，岩崎上層式，綾式	
		晩期	集石１基	入佐式土器，黒川式土器 石鏃，石製垂飾品，石匙，石斧，石皿，磨石／敲石，etc	
		古代	掘立柱建物跡７棟，焼土５か所，土坑５基，古道６条 軽石集積１基，礫集積２基	土師器 (坏 , 高台付坏 , 黒色，墨書土器 , 甕 , 紡錘車) 焼塩壺，甑 , 猿面硯 , 須恵器 (坏 , 甕 , 壺) 鉄製品，鉄滓	
		中世	畠跡		



遺跡の位置図

本　文　目　次

第Ⅰ章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
　第１節　調査に至るまでの経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
　第２節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
　第３節　発掘調査の概要と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
第Ⅱ章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
　第１節　遺跡の層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
　第２節　縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
　　１　調査の方法と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
　　２　縄文時代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
(１)　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
(２)　集石遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
　　３　縄文時代の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
(１)　Ⅰ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
(２)　Ⅱ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
(３)　Ⅲ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
(４)　Ⅳ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
(５)　Ⅴ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
(６)　Ⅵ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
(７)　Ⅶ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
(８)　Ⅷ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
(９)　Ⅸ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
(10)　Ⅹ類土器　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
(11)　ⅩⅠ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・167
(12)　ⅩⅡ類土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・167
　　４　縄文時代の石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179
(１)　縄文時代早期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179
(２)　縄文時代晩期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・182
　第３節　古代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・193
　　１　調査の方法と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・193
　　２　古代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・193
(１)　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・193
(２)　軽石集積・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・195
(３)　礫集積・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・195
(４)　焼土跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・195
(５)　古道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・196
(６)　掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・201
　　３　古代の出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・211
(１)　７号掘立柱建物跡とその周辺出土遺物・・・・・・・・・・・・・211
(２)　調査区出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・221
　第４節　中世の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・241
　　１　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・241
　　２　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・241
第Ⅲ章　発掘成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・242
　第１節縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・242
(１)　縄文時代早期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・242
(２)　縄文時代後期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・242
(３)　縄文時代晩期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・242
　第２節　古代の遺物，遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・242
(１)　１号掘立柱建物跡について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・243
(２)　７号掘立柱建物跡について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・243
(３)　出土遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・244
　第３節　中世の畠跡について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・245

挿　図　目　次

第１図　遺跡と周辺の地形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144
第２図　周辺地形と調査区及びグリッド配置図・・・・・・・・・・・・145
第３図　踊場遺跡標準土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
第４図　土層断面実測図(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
第５図　土層断面実測図(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147
第６図　土層断面実測図(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
第７図　縄文時代早期遺構配置状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
第８図　縄文時代早期土坑(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・150
第９図　縄文時代早期土坑(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・151
第10図　縄文時代早期集石(１)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・151
第11図　縄文時代早期集石(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・152
第12図　縄文時代早期集石(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・153
第13図　縄文時代晩期集石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
第14図　Ⅰ類～Ⅸ類土器出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
第15図　Ⅰ～Ⅴ類土器実測図(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・156
第16図　Ⅰ～Ⅴ類土器実測図(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・157
第17図　Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・160
第18図　Ⅷ，Ⅸ類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
第19図　Ⅹ類～ⅩⅡ類土器出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
第20図　ⅩA類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163
第21図　ⅩA，XB類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・164
第22図　XC，ⅩⅠA類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166
第23図　ⅩⅠA，ⅩⅠB類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・168
第24図　ⅩⅠB類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
第25図　ⅩⅠB類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・170
第26図　ⅩⅠB，ⅩⅠC類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・171
第27図　ⅩⅠC類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・172
第28図　ⅩⅠC，ⅩⅡA，ⅩⅡB類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・173
第29図　ⅩⅡB類土器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・177
第30図　縄文早期石器出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179
第31図　縄文早期出土遺物実測図(スクレイパー・石鏃・磨石)・・・・・180
第32図　縄文早期出土遺物実測図(石皿)・・・・・・・・・・・・・・・181
第33図　縄文晩期石器出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・183
第34図　縄文晩期出土遺物実測図(石鏃１)・・・・・・・・・・・・・・184
第35図　縄文晩期出土遺物実測図(石鏃２)・・・・・・・・・・・・・・185
第36図　縄文晩期出土遺物実測図(石錐)・・・・・・・・・・・・・・・185
第37図　縄文晩期出土遺物実測図(抉入石器・楔・スクレイパー・石匙)・187
第38図　縄文晩期出土遺物実測図(石斧)・・・・・・・・・・・・・・・188
第39図　縄文晩期出土遺物実測図(石製垂飾品・石錘)・・・・・・・・・189
第40図　縄文晩期出土遺物実測図(ハンマーストーン)・・・・・・・・・189
第41図　縄文晩期出土遺物実測図(磨石・敲石)・・・・・・・・・・・・190
第42図　縄文晩期出土遺物実測図(剥片・二次加工剥片・両極石核)・・・191
第43図　縄文晩期出土遺物実測図(剥片)・・・・・・・・・・・・・・・192
第44図　古代遺構配置状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・193
第45図　古代土坑(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・194
第46図　古代土坑(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・195
第47図　古代軽石集積・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・196
第48図　古代礫集積(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・196
第49図　古代礫集積(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・197
第50図　古代礫集積内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・197
第51図　古代焼土・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・198
第52図　古代古道断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・198
第53図　古代掘立柱建物跡(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・199
第54図　１号掘立柱建物跡内土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・200
第55図　１号掘立柱建物跡内焼土・・・・・・・・・・・・・・・・・・・200
第56図　古代掘立柱建物跡(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・201
第57図　古代掘立柱建物跡(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・202
第58図　古代掘立柱建物跡(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・203
第59図　古代掘立柱建物跡(５)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・204
第60図　古代掘立柱建物跡(６)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・205
第61図　古代掘立柱建物跡(７)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・206
第62図　古代７号掘立柱建物跡埋土状況及び遺物出土状況・・・・・・・208
第63図　７号掘立柱建物跡内焼土・・・・・・・・・・・・・・・・・・・210
第64図　古代遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・211
第65図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(土師器坏)・・・・212
第66図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(土師器高台付坏)・213
第67図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(土師器椀・黒色土器)・216
第68図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(土師器甕・甑・須恵器甕)・218
第69図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(墨書土器)・・・・218
第70図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(土師器小型壺・猿面硯・紡錘車)・218

挿　図　目　次

第71図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(鉄製品)・・・・・218
第72図　古代出土遺物実測図(土師器坏)・・・・・・・・・・・・・・・222
第73図　古代出土遺物実測図(土師器高台付坏・椀・黒色土器)・・・・・225
第74図　古代出土遺物実測図(土師器皿・鉢・焼塩壺)・・・・・・・・・227
第75図　古代出土遺物実測図(紡錘車・土錘)・・・・・・・・・・・・・227
第76図　古代出土遺物実測図(須恵器坏)・・・・・・・・・・・・・・・228
第77図　古代出土遺物実測図(土師器甕１)・・・・・・・・・・・・・・230
第78図　古代出土遺物実測図(土師器甕２)・・・・・・・・・・・・・・232
第79図　古代出土遺物実測図(甑)・・・・・・・・・・・・・・・・・・235
第80図　古代出土遺物実測図(須恵器甕)・・・・・・・・・・・・・・・235
第81図　古代出土遺物実測図(須恵器甕・壺)・・・・・・・・・・・・・236
第82図　古代出土遺物実測図(墨書土器)・・・・・・・・・・・・・・・238
第83図　古代出土遺物実測図(軽石製品・鉄製品・鉄滓・羽口)・・・・・238
第84図　中世畠跡検出状況実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・240
第85図　中世畠跡断面実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・241
第86図　建物主軸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・243
第87図　柱配置見取図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・244

表　目　次

第１表　Ⅰ～Ⅴ類土器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・157
第２表　Ⅰ～Ⅴ類土器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・158
第３表　Ⅰ～Ⅴ類土器観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
第４表　Ⅵ～Ⅸ類土器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
第５表　Ⅵ～Ⅸ類土器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
第６表　Ⅹ類土器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165
第７表　Ⅹ類土器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・167
第８表　ⅩⅠ類土器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・174
第９表　ⅩⅠ類土器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・175
第10表　ⅩⅠ類土器観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・176
第11表　ⅩⅡ類土器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・177
第12表　ⅩⅡ類土器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・178
第13表　縄文時代早期石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・182
第14表　縄文時代晩期石器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・185
第15表　縄文時代晩期石器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・186
第16表　縄文時代晩期石器観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・189
第17表　縄文時代晩期石器観察表(４)・・・・・・・・・・・・・・・・192
第18表　古代遺構内出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・198
第19表　古代出土遺物観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・214
第20表　古代出土遺物観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・215
第21表　古代出土遺物観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・217
第22表　古代出土遺物観察表(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・220
第23表　古代出土遺物観察表(５)・・・・・・・・・・・・・・・・・・220
第24表　古代出土遺物観察表(６)・・・・・・・・・・・・・・・・・・220
第25表　古代出土遺物観察表(７)・・・・・・・・・・・・・・・・・・223
第26表　古代出土遺物観察表(８)・・・・・・・・・・・・・・・・・・224
第27表　古代出土遺物観察表(９)・・・・・・・・・・・・・・・・・・225
第28表　古代出土遺物観察表(10)・・・・・・・・・・・・・・・・・・226
第29表　古代出土遺物観察表(11)・・・・・・・・・・・・・・・・・・227
第30表　古代出土遺物観察表(12)・・・・・・・・・・・・・・・・・・228
第31表　古代出土遺物観察表(13)・・・・・・・・・・・・・・・・・・229
第32表　古代出土遺物観察表(14)・・・・・・・・・・・・・・・・・・230
第33表　古代出土遺物観察表(15)・・・・・・・・・・・・・・・・・・233
第34表　古代出土遺物観察表(16)・・・・・・・・・・・・・・・・・・234
第35表　古代出土遺物観察表(17)・・・・・・・・・・・・・・・・・・236
第36表　古代出土遺物観察表(18)・・・・・・・・・・・・・・・・・・237
第37表　古代出土遺物観察表(19)・・・・・・・・・・・・・・・・・・239
第38表　古代出土遺物観察表(20)・・・・・・・・・・・・・・・・・・239

図　版　目　次

発掘調査風景他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版29
２号集石検出状況他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版30
Ⅴ類土器出土状況(１)他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版31
縄文時代早期出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版32
縄文時代早期出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版33
縄文時代後期出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版34
縄文時代晩期出土土器(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版35
縄文時代晩期出土土器(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版36
縄文時代晩期出土石器(石製錘飾品クローズアップ)他・・・・・・・・図版37
縄文時代晩期出土石器(石斧)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版38
縄文時代晩期遺物出土状況(１)他・・・・・・・・・・・・・・・・・図版39
７号掘立柱建物跡掘削面完掘状況他・・・・・・・・・・・・・・・・図版40
７号掘立柱建物跡ピット12断面他・・・・・・・・・・・・・・・・・図版41
７号掘立柱建物跡及び周辺遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・図版42
古道硬化面検出状況他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版43
７号掘立柱建物跡及び周辺出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・図版44
調査区内出土土器(古代)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版45
古代出土土器(土師器坏・高台付坏・小型壺・黒色土器)・・・・・・図版46
土師甕器面調整(外面・内面)他・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版47
古代出土土器(墨書土器)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版48
古代出土鉄製品(刀子・釘・鉄滓・銅製品)他・・・・・・・・・・・・図版49
中世畠跡検出状況(ボラ除去前)他・・・・・・・・・・・・・・・・・図版50

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道(末吉財部IC～国分IC間)の建設を計画し，事業区域内の埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会に照会した。

これを受けて，鹿児島県教育委員会，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県立埋蔵文化財センターとの間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきた。協議の結果，工事予定区域内の埋蔵文化財の分布調査を行うこととし，分布調査は平成６年10月と平成７年５月に実施した。その結果，13か所の遺物散布地や調査の必要な地点が存在することが判明した。これらの調査結果に基づいて，平成８年４月以降順次確認調査及び本調査を行ってきた。

本遺跡は平成12年６月12日から確認調査を開始し，引き続き本調査に移行し，平成12年12月25日(実働113日間)まで実施した。

第２節　調査の組織

平成12年度　本調査

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者
　鹿児島県立埋蔵文化財センター　　所長　井上　明文
調査企画者

	次長兼総務課長	黒木　友幸
	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	課長補佐	立神　次郎
	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮　久志
	主任文化財主事	長野　眞一

調査担当者

	文化財主事	立部　剛
	〃	高見　憲次
	文化財研究員	藤野　義久
	〃	山崎　克之
	〃	有馬　孝一

調査事務担当者

	総務係長	有村　貢
	主　査	栗山　和己
	〃	溜池　佳子

平成14年度　報告書作成

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

作成主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成責任者
　鹿児島県立埋蔵文化財センター　　所長　井上　明文
作成企画者

	次長兼総務課長	田中　文雄
	調査課長	新東　晃一
	調査課長補佐	立神　次郎
	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮　久志
	主任文化財主事	長野　眞一

作成担当者

	文化財主事	岩戸　孝夫
	文化財研究員	福永　修一

事務担当者

	総務係長	前田　信昭
	主　査	栗山　和己

平成15年度　報告書作成

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

作成主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成責任者
　鹿児島県立埋蔵文化財センター　　所長　木原　俊孝
作成企画者

	次長兼総務課長	田中　文雄
	調査課長	新東　晃一
	調査課長補佐	立神　次郎
	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮　久志
	主任文化財主事	長野　眞一

作成担当者

	文化財主事	岩澤　和徳
	〃	有馬　孝一

事務担当者

	総務係長	平野　浩二
	主　事	福山恵一郎

報告書作成検討委員会　平成15年12月25日所長他　　８名
報告書作成指導委員会　平成15年12月24日調査課長他３名
企画担当者　　長野眞一・中村和美

指導者・協力者
日本道路公団九州支社
日本道路公団鹿児島工事事務所
財部町教育委員会
橘　昌信(別府大学文学部教授)
東野浩之(奈良大学文学部教授)
小畑弘己(熊本大学文学部助教授)
大澤正己(九州テクノリサーチ・ＴＡＣセンター)
平田信芳(鹿児島地名研究会世話役)

坂本嘉弘，高橋信武，阿部芳郎，立部剛，井ノ上秀文
桑波田武志，栗山葉子，桑畑光博，四元誠
整理作業員
仮屋涼子，迫間洋子，猿川美和子

第３節　発掘調査の概要と経過

平成12年６月12日から12月25日まで本調査を行った。

踊場遺跡の調査対象面積は当初約3,160m^{2}で，調査前は畑地及び宅地となっていた。本遺跡では確認調査終了後，本調査に移行し調査を実施した。確認調査の結果，中世，古代，縄文時代の遺構，遺物を包含する複合遺跡であり，さらに遺跡範囲が北側丘陵方向へ拡大することも判明し，最終的な調査対象面積は4,390m^{2}となった。

発掘調査では，計画路線センター杭，STA.No.21＋20杭とSTA.No.21+60杭を結んだ線を基準軸とし，10m間隔の区画(グリッド)を設定して調査を実施した。

グリッドは南から北へ１・２・３…，東から西へA・B・C…，と呼ぶこととし，１グリッドはA-1区というようにアルファベットと数字を組み合わせた呼称とした。

調査の経過については，日誌抄をもってかえる。

平成12年　本調査

６月12日～６月28日
プレハブ設置
表土剥ぎ
D～F-９～11区，Ⅲ,Ⅳ層掘り下げ
D,E-10,11区畠跡検出状況撮影，実測
D-９区Ⅳ層上面コンタ図作成
D,E-10,11区Ⅲ層上面コンタ図作成
C～F-９,10区遺物出土状況撮影，取り上げ
C～F-９区土層断面実測

７月３日～７月28日
C～F-８～11区，Ⅲ～Ⅵa層掘り下げ，遺物出土状況撮影，取り上げ
F-10区，軽石集積遺構検出状況撮影，実測
D,E-９区，古道検出状況撮影，実測
C～E-９～11区Ⅳ層上面コンタ図作成
C～F-８～10区，ピット検出状況撮影，実測
E,F-９区，土層断面実測
D-11区，土坑検出状況撮影，実測

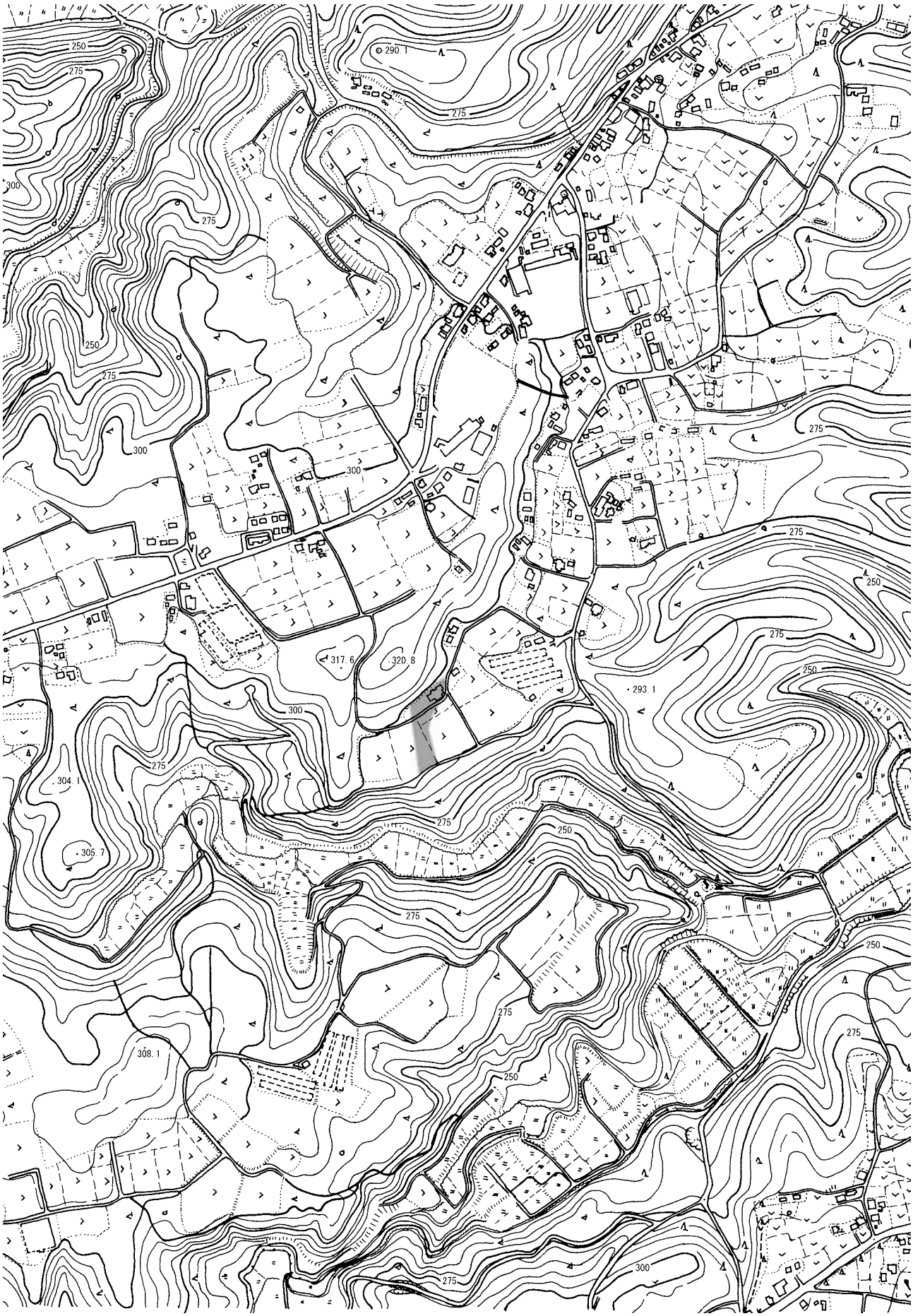
８月１日～８月28日
遺跡拡大部，表土剥ぎ
C～F-８～11区，Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ
D-９,10区，先行トレンチ(Ⅹ～ⅩⅦ層)掘り下げ
D-８区，Ⅲ,Ⅳ層掘り下げ
D-８区，遺物出土状況撮影，取り上げ，土層断面撮影，実測
E,F-９,10区土層断面撮影，実測，掘立柱建物跡１号，２号撮影，実測
C～F-９～11区，遺物出土状況撮影，取り上げ，Ⅸ層上面コンタ図作成
E-８区焼土跡撮影，実測

９月１日～９月29日
プレハブ増設
A,B-14,15区，Ⅳ～Ⅵ層掘り下げ
B～F-10～13区，Ⅲ,Ⅳa層掘り下げ
C～F-８区，Ⅳ～ⅩⅦ層掘り下げ
C～F-６,７区，Ⅲ,Ⅳa層掘り下げ
B,C-12～14区，表土剥ぎ
B～D-12,13区，テラス状遺構検出状況撮影，Ⅲ層畠跡撮影，実測，礫集積検出状況撮影，実測
C～F-10～12区，畠跡検出状況撮影，実測，古道検出状況撮影，実測，遺物出土状況撮影，取り上げ
C～F-６～９区，畠跡検出状況撮影，実測，古道検出状況撮影，実測，遺物出土状況撮影，取り上げ，Ⅸ層上面コンタ図作成，土坑，ピット検出状況撮影，実測，土層断面撮影
９月22日財部町立財部南小学校発掘体験(32名)

10月３日～10月26日
B～F-10～13区，Ⅲ～Ⅸ層掘り下げ
C～G-４～８区，Ⅲ～Ⅸ層掘り下げ
A,B-14,15区，Ⅴ～ⅩⅡ層掘り下げ
C,D-３区，Ⅲ,Ⅳ層掘り下げ
C,D-12,13区，Ⅷ,Ⅸ層掘り下げ
C～F-４～７区，遺物出土状況撮影，取り上げ，Ⅳ層上面コンタ図作成，畠跡検出状況撮影，実測
C,D-５～８区，Ⅸ層上面コンタ図作成，Ⅳ～Ⅷ層遺物出土状況撮影，取り上げ
C～F-６区，土層断面撮影，実測
C～F-10～12区，Ⅳb層上面コンタ図作成，土坑検出状況撮影，実測，古道検出状況撮影，実測
B～F-11,12区，Ⅸ層上面コンタ図作成，集石検出状況撮影，実測
C,D-12～14区，Ⅸ層上面コンタ図作成，７号掘立柱建物跡検出状況撮影，実測
F-10,11区，土層断面撮影，実測

11月１日～11月28日
C～F-４～７区，Ⅵ～ⅩⅦ層掘り下げ
D～F-４,５区，Ⅲ,Ⅳ層掘り下げ
C～F-２～６区，柱穴検出状況撮影，実測，Ⅲ層上面コンタ図作成，Ⅳb層上面コンタ図作成，Ⅸ層上面コンタ図作成
D～F-６,７区，Ⅶ,Ⅷ層遺物出土状況撮影，取り上げ，Ⅸ層上面コンタ図作成
D～F-３,４区，Ⅲ,Ⅳ層遺物出土状況撮影，取り上げ

12月１日～12月25日
D～F-４,５区，Ⅷ～ⅩⅦ層掘り下げ
D～F-３～６区，遺物出土状況撮影，取り上げ，Ⅸ層上面コンタ図作成，集石検出状況撮影，実測，土層断面撮影，実測，完掘状況撮影
プレハブ撤去



第１図　遺跡と周辺の地形



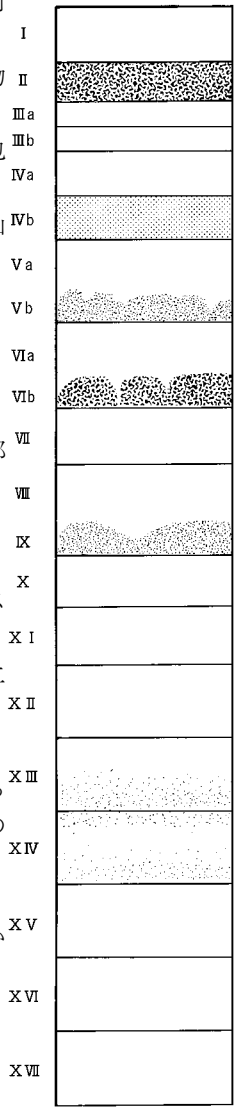
第２図　周辺地形と調査区及びグリッド配置図(1/1000)

第Ⅱ章　発掘調査の概要

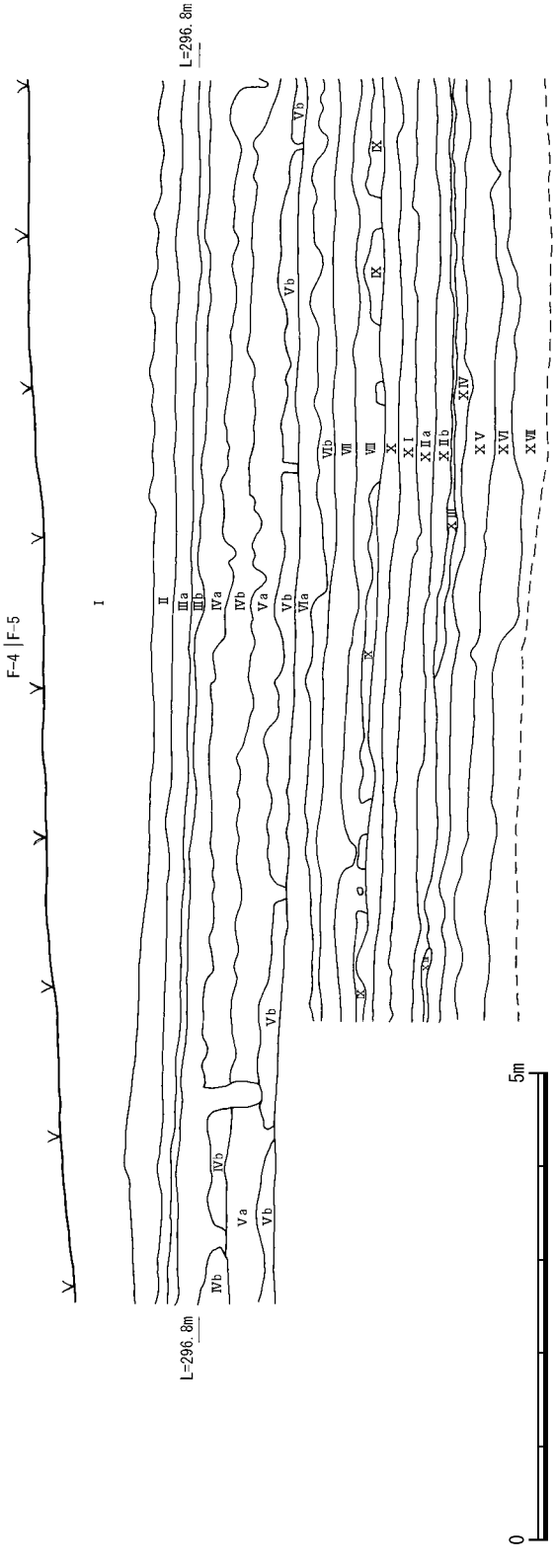
第１節　遺跡の層位

Ⅰ層　暗褐色土　現表土
Ⅱ層　黄白色軽石層　P-３　文明ボラ　西暦1471年頃の桜島の噴出物(一部に残存)
Ⅲa層　黒色腐植土　古代，縄文晩期遺物包含層
Ⅲb層　暗黄褐色土　古代，縄文晩期の遺物包含層
Ⅳa層　黄褐色細粒軽石混硬質土　縄文時代晩期の遺物が出土し，下部に火山灰のピークがみられる。
Ⅳb層　黄褐色細粒軽石混硬質土　御池軽石　約4200年前の霧島御池の噴出物を多量に含む。
Ⅴa層　暗橙色土　Ⅴb層の腐植土
Ⅴb層　明橙色火山灰　(K-Ah)　約6400年前の鬼界カルデラの噴出物
Ⅵa層　黄褐色軽石混暗青灰色土　縄文時代早期の遺物包含層
Ⅵb層　黄褐色軽石層　P-11　約7400年前の桜島の噴出物
Ⅶ層　明茶褐色土　縄文時代早期の遺物包含層
Ⅷ層　黒褐色土　縄文時代早期の遺物包含層
Ⅸ層　黄白色火山灰　P-14　サツマ火山灰　約11000年前の桜島の噴出物
Ⅹ層　黒褐色土
ⅩⅠ層　暗黄褐色軟質ローム
ⅩⅡ層　灰褐色硬質ローム
ⅩⅢ層　暗黄橙色軟質ローム
ⅩⅣ層　灰褐色硬質ローム　当該層上部及び下部付近に，小粒の赤色パミスが点在する。
ⅩⅤ層　橙褐色軟質ローム
ⅩⅥ層　明黄白色角礫混砂質土　シラスの二次堆積？
ⅩⅦ層　灰白色礫混砂質土　シラスの二次堆積？
ⅩⅧ層　角礫混明黄白色砂質土　明白色の大きな軽石の混入がみられるシラス層　約24000～28000年前の始良カルデラの噴出物

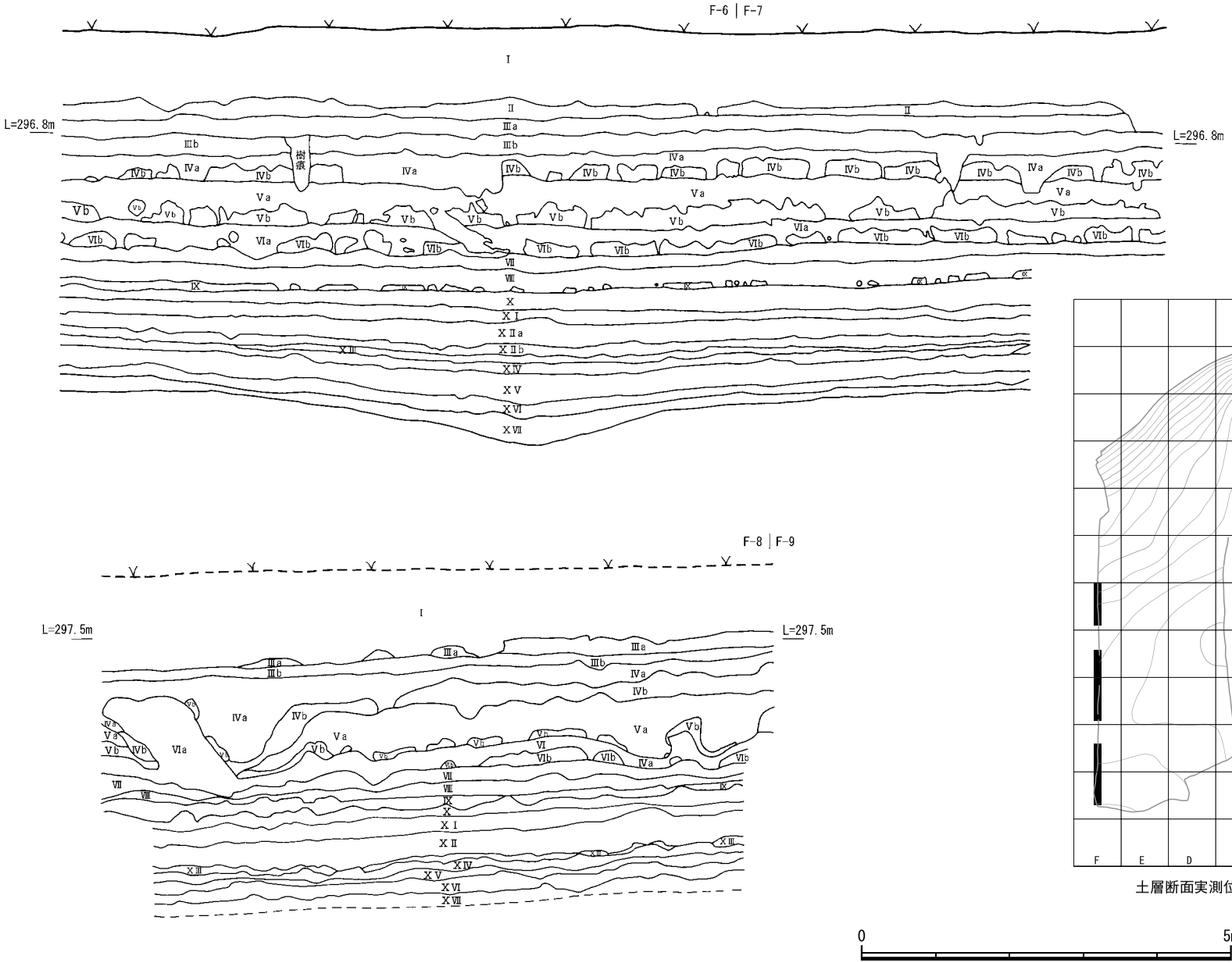
P＝パミス＝軽石　桜島の噴出物に新しいものから順に番号を付している。



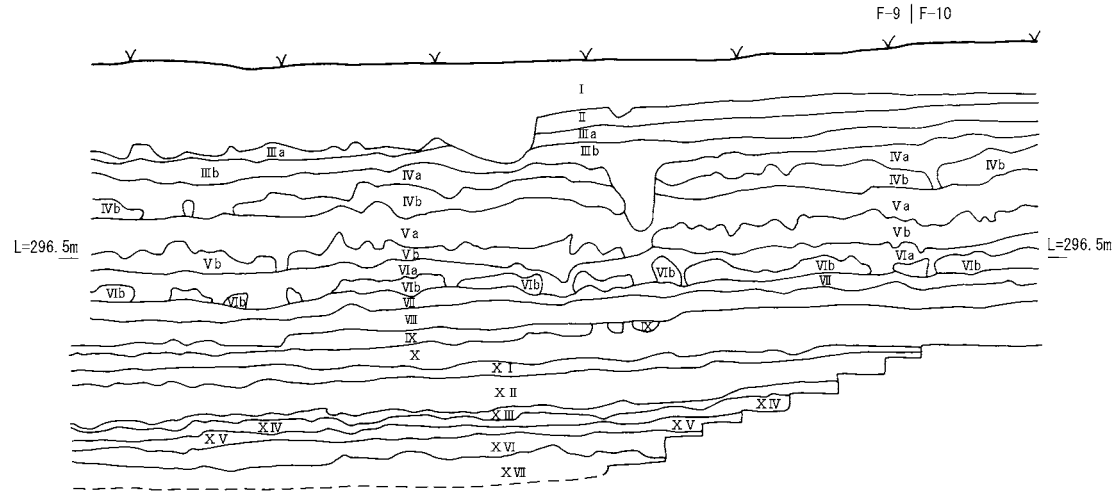
第３図　踊場遺跡標準土層

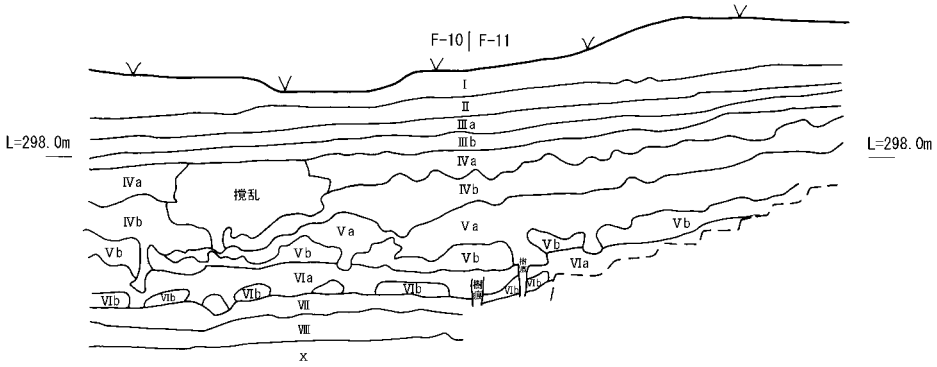


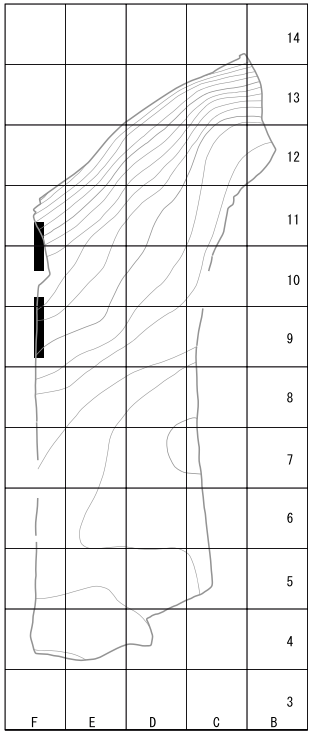
第４図　土層断面実測図(１)



第５図　土層断面実測図(２)







土層断面実測位置

0 5m

第６図　土層断面実測図(３)

第２節　縄文時代

１　調査の方法と概要

縄文時代の調査は10m四方のグリッドを基本とし，調査区全体にグリッドを設定して発掘調査を行った。

調査区内は，中世相当の層では一部削平がみられたが，古代から縄文時代の遺物包含層は，整然と堆積した複数の火山噴出物に挟まれ，良好な保存状況が確認された。

Ⅸ層のサツマ火山灰層(P-14)とⅥb層の桜島起源軽石噴出(P-11)との間に縄文時代早期の遺構と遺物が，Ⅳb層御池軽石火山灰層の上位に縄文時代後期及び晩期の遺構，遺物が，縄文時代層の上位に古代の遺構，遺物が，また，Ⅱ層の桜島起源軽石(通称文明ボラ，P-3)の直下では中世の畠遺構が発見されている。

縄文時代早期では土坑３基，集石遺構４基を，縄文時代晩期では集石遺構１基を確認している。

縄文時代早期の７基の遺構は，南側に１号から３号の３基の集石遺構と１号土坑が，北側に４号集石遺構と２号，３号の２基の土坑が分布し，その間の約40mは空白地帯を形成している。この空白地帯が，意図して形成されたか否かの判断はできていない。

Ⅶ層からは，塞ノ神式土器が１個体潰れた状態で出土しているが，土器に関わる遺構は確認していない。

晩期該当の遺物は，多数出土しているが，遺構は１基のみ検出した。

２　縄文時代の遺構

(1)　土坑

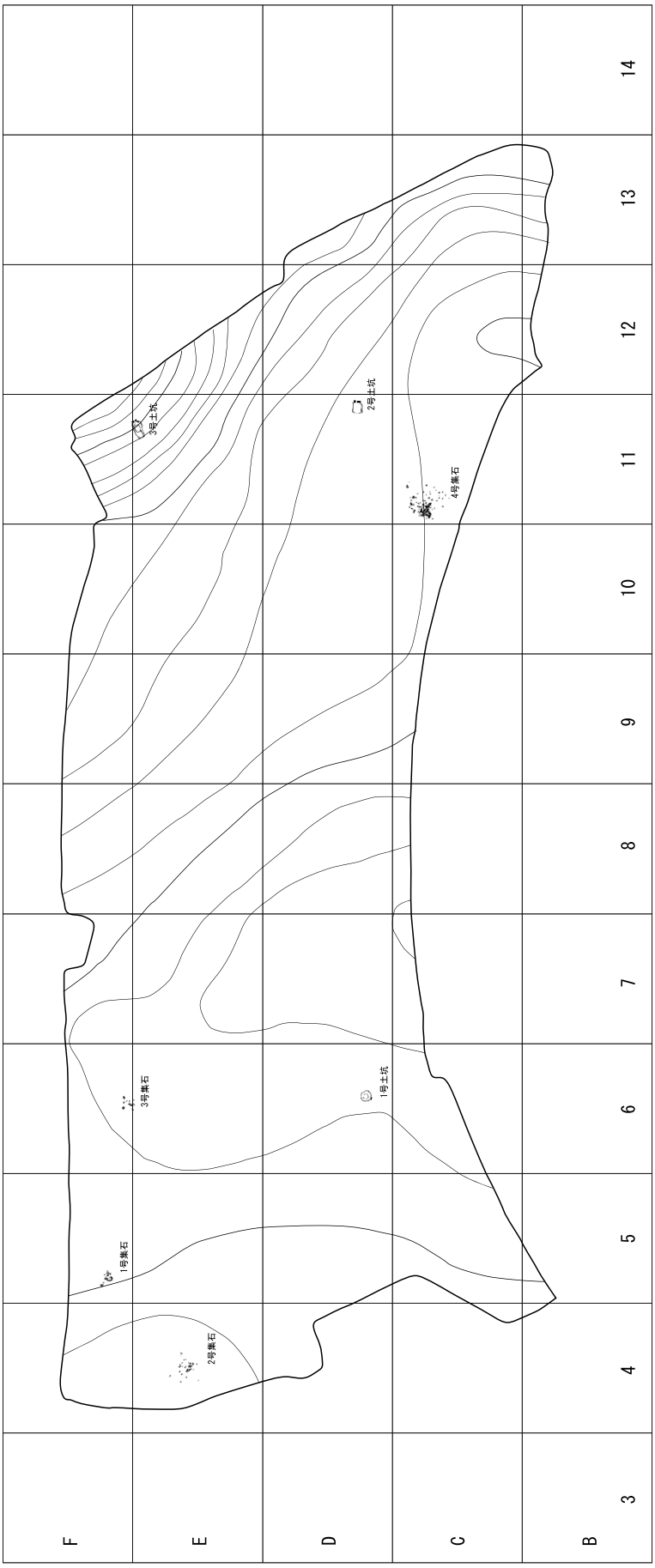
Ⅶ層上面で検出し，縄文時代早期該当の土坑と判断した。

１号土坑(第８図)

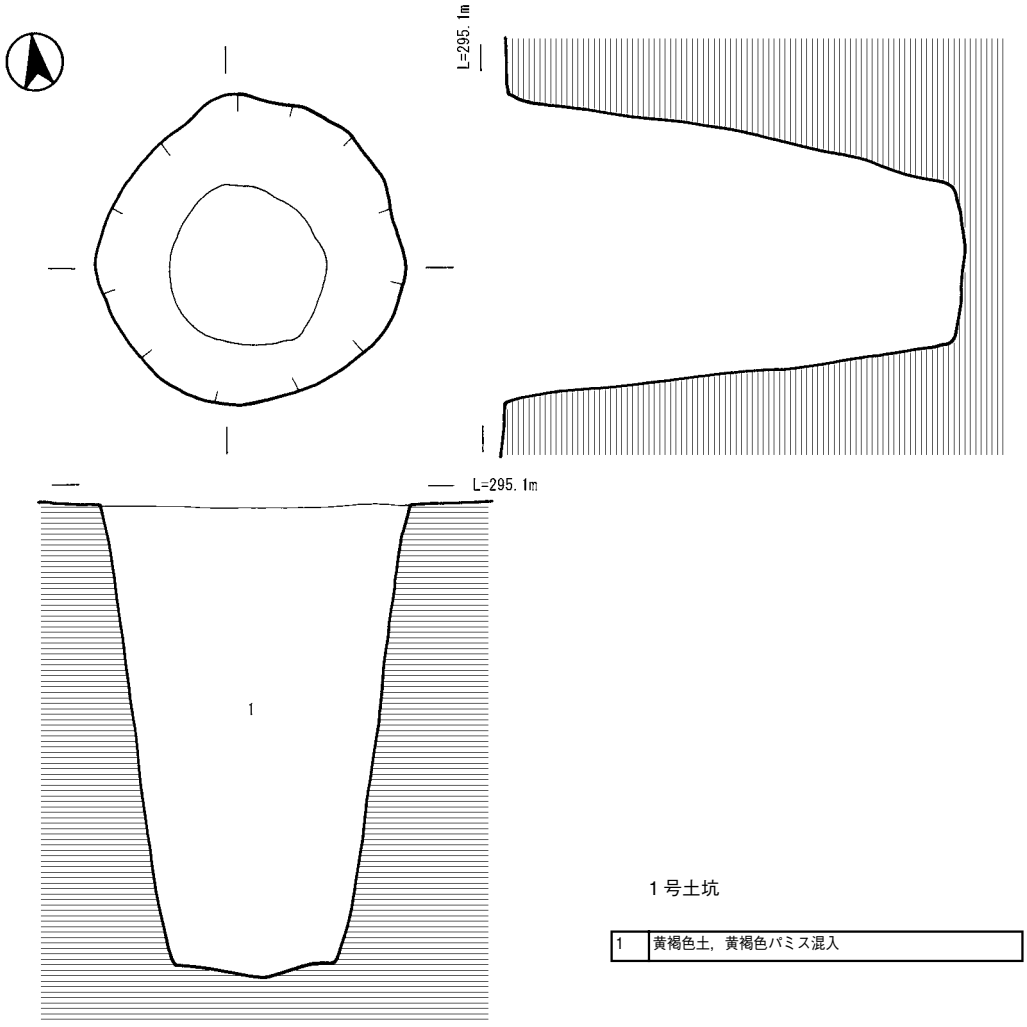
D-6区，Ⅶ層上面で検出した。平面プランは長軸82cm，短軸80cm，深さは検出面から120cmのほぼ円形である。底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。

２号土坑(第８図)

D-11区，Ⅶ層上面で検出した。平面プランは角丸長方形で長軸91cm，短軸67cm，深さは検出面から35cmである。底部は不安定ではあるが，若干北側に緩やかに傾斜している。

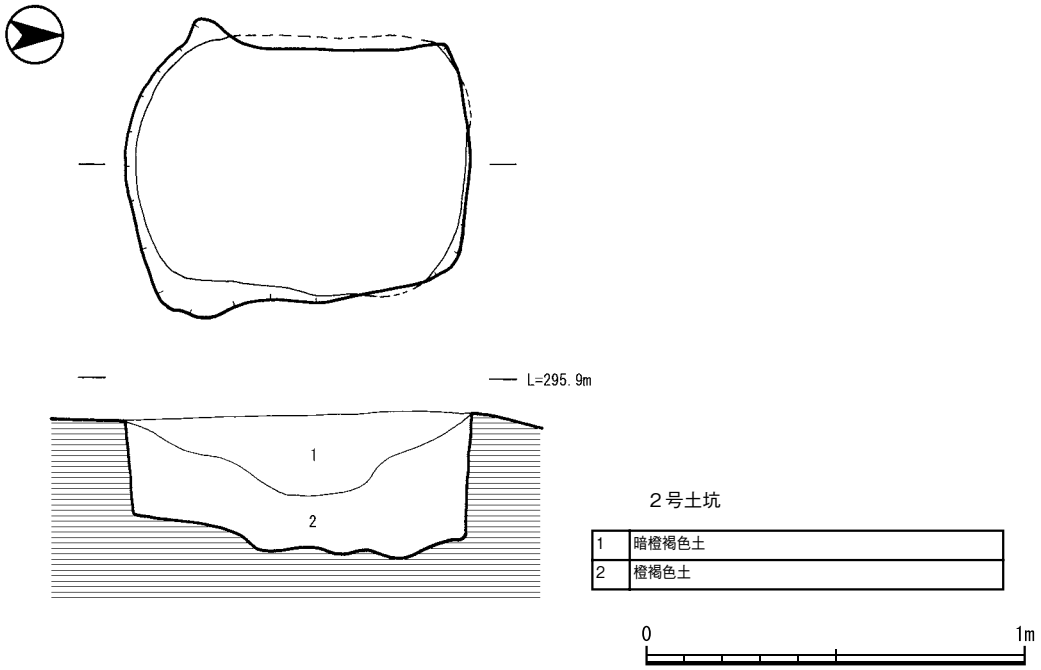


第７図　縄文時代早期遺構配置状況(1/500)



1号土坑

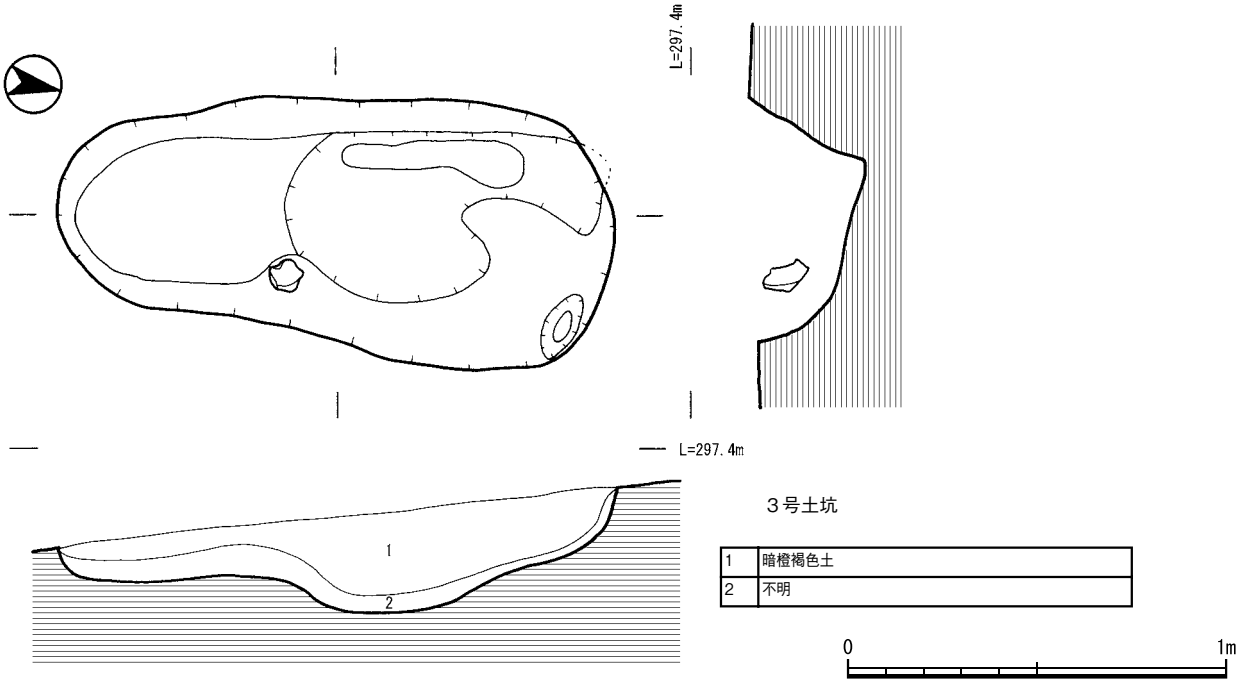
1	黄褐色土，黄褐色パミス混入



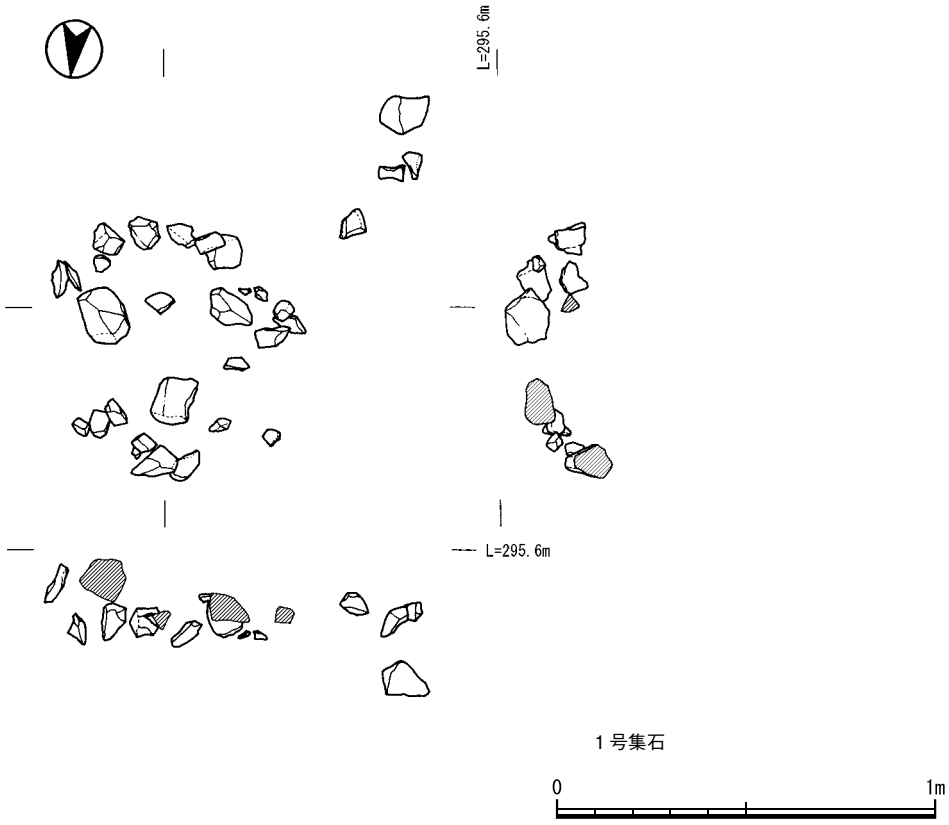
2号土坑

1	暗橙褐色土
2	橙褐色土

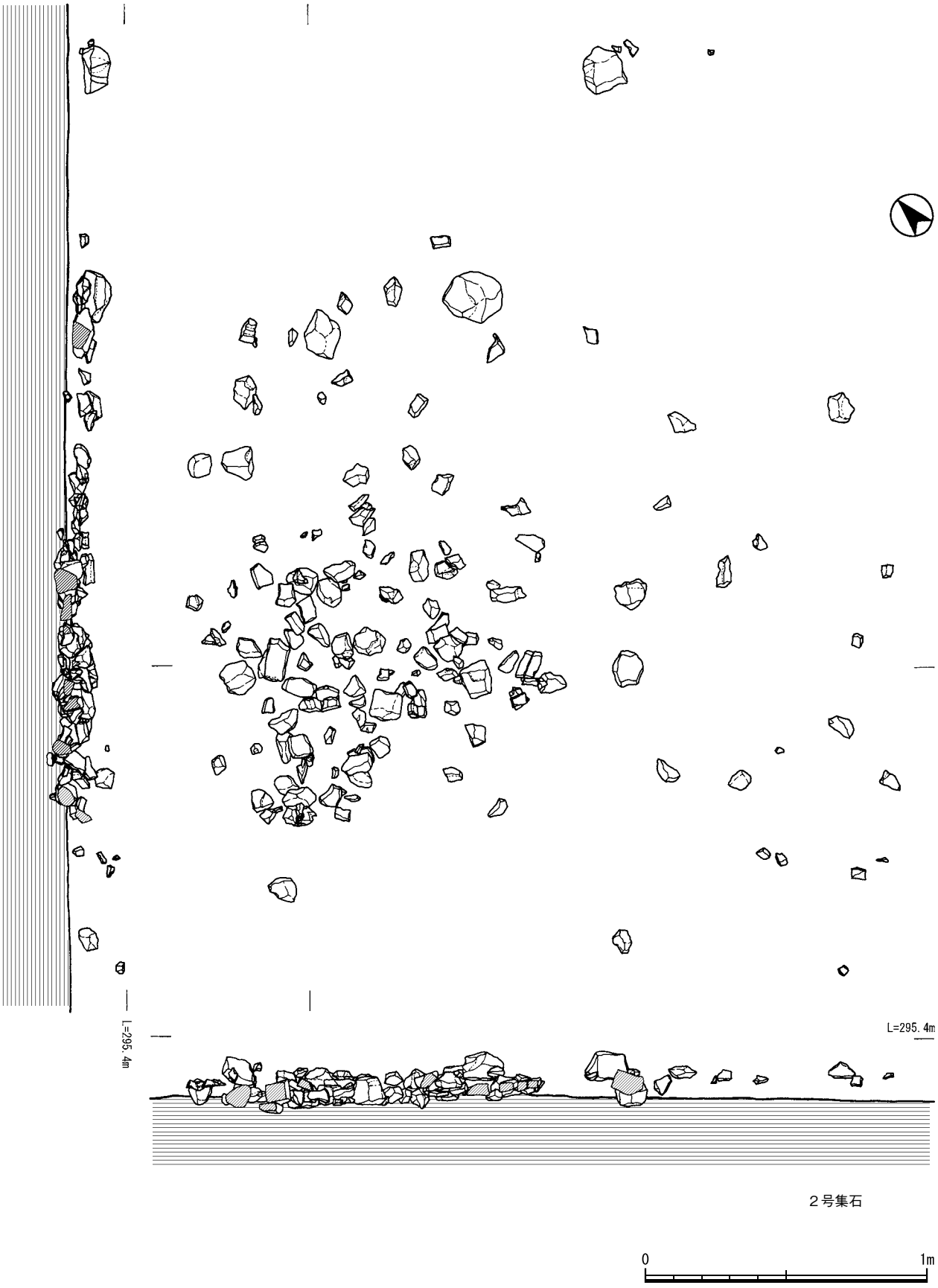
第８図　縄文時代早期土坑(１)



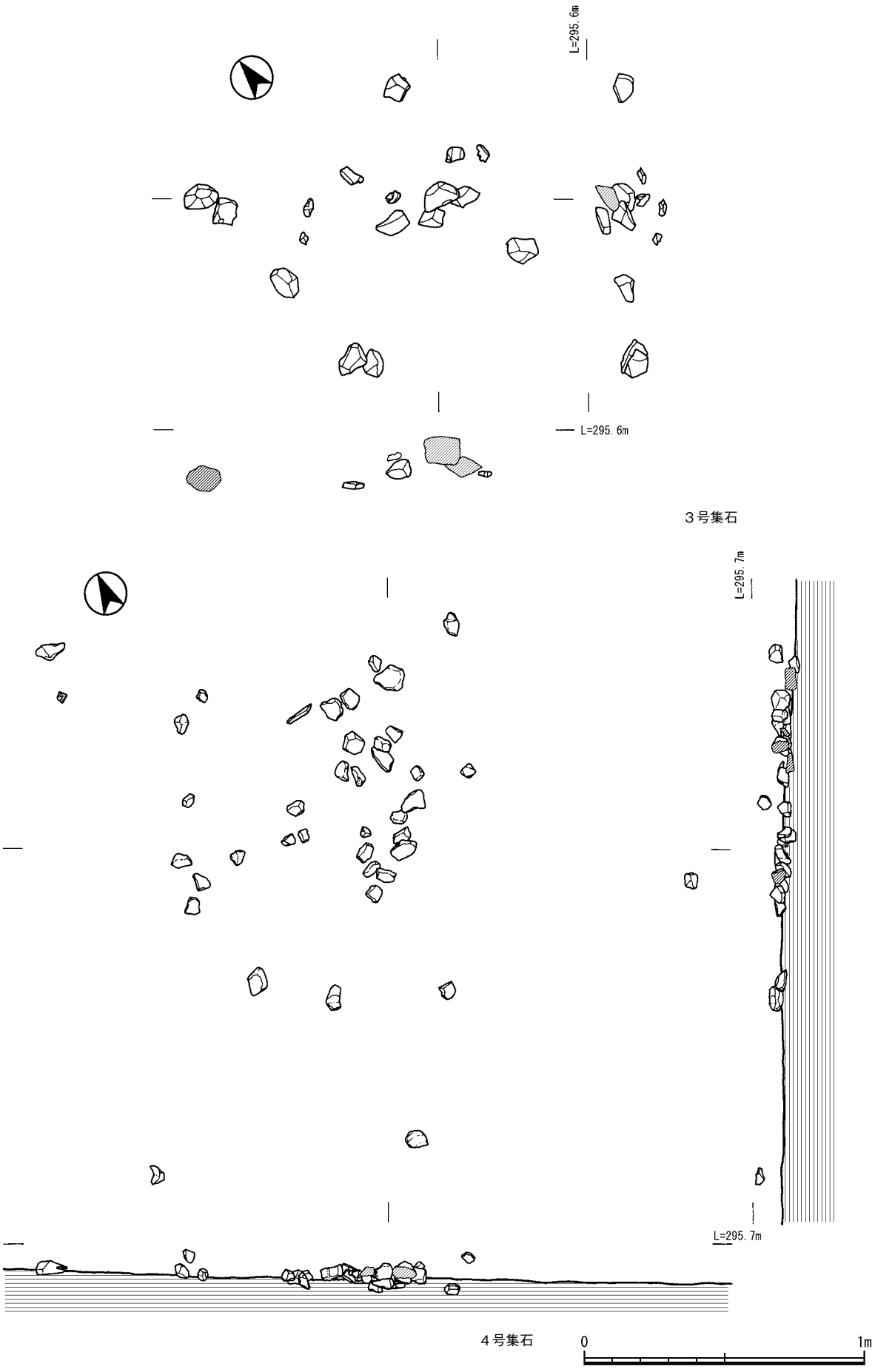
第９図　縄文時代早期土坑(２)



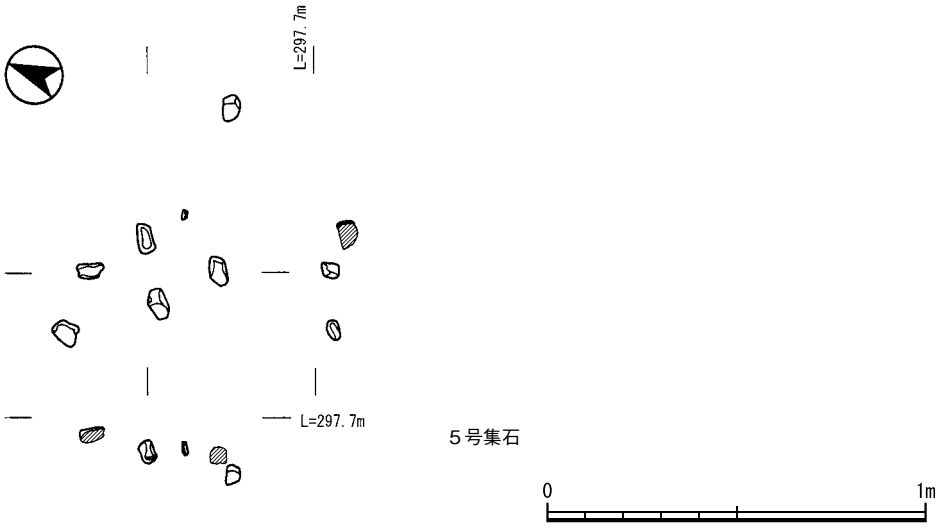
第10図　縄文時代早期集石(１)



第11図　縄文時代早期集石(２)



第12図　縄文時代早期集石(３)



第13図　縄文時代晩期集石

３号土坑(第９図)

E-11区，Ⅶ層上面で検出した。平面プランは楕円形状で長軸147cmで，短軸62cm，深さは検出面から24cmである。中央部に若干の窪み，北西部に直径18cmの楕円形状の小穴がみられる。

礫１点を伴う土坑である。

(2)　集石遺構

Ⅷ層で２基，Ⅶ層で２基，Ⅳ層で１基検出している。

１～３号集石はグリッドを違え，調査区南側に点在する状況で検出している。

１号集石(Ⅷ層)(第10図)

F-5区で検出した。大型から中型の大きめの凝灰岩，安山岩を主に使用している。礫の半数は被熱している。

遺構の南西側は新規の土層横転が重なり，遺構構成礫の一部に影響を及ぼし，礫の上下動が確認されるが，礫群の集中状況は観察される。

２号集石(Ⅷ層)(第11図)

E-4区で検出される。大型の礫もあるが，ほとんどを中型から小型の礫161個で構成している。100cm×100cmの間に礫が散在するが，礫群の集中箇所は想定できる。礫の一部は北方向から東方向へと移動した状況を呈している。

中央部の掘り込みは確認できず，礫の接地はほぼ水平である。

３号集石(Ⅶ層)(第12図)

E,F-6区で検出した。安山岩，砂岩を主に使用した中型の礫が多い。礫のほとんどは被熱により赤化がみられ，一部破砕した礫もみられる。

礫群の散在状況を呈している。

４号集石(Ⅶ層)(第12図)

C-11区で検出した。中型の礫がほとんどで，集石とそれを取り巻く散在礫で構成する。

礫の接地はほぼ水平で，掘り込みはないと判断される。礫群の散在状況と判断される。

５号集石(Ⅳ層)(第13図)

E-11区のⅣ層で検出した。中型の頁岩，安山岩を主に使用している。被熱は確認できない。少数の礫で構成し，いわゆる集石遺構と同一機能を有していたかについては疑問も残る。縄文時代晩期に該当し，土器も伴っている。

3　縄文時代の土器

縄文時代の土器は，早期132点，後期60点，晩期1785点の総計1977点である。この1977点の型式分類及び細別を行い，225点を掲載した。

取り扱った225点に関しては，Ⅰ類～ⅩⅡ類に分類している。

Ⅷ～Ⅶ層は早期でⅠ類からⅤ類，Ⅳ～Ⅲ層は後期，晩期でⅥ類からⅩⅡ類の土器が出土している。

(1)Ⅰ類土器(第15図，No１)

口縁部片が１点で，若干外反する。施文は，回転原体による楕円文で，口唇部及び内面にも斜位にベルト状に施文される。

(2)Ⅱ類土器(第15図，No２～14)

４個体の資料が確認できる。口縁部が直立し，口唇部がやや丸みをなす(２)。器の最大径が口縁部にあり，口縁部上位がやや内弯し，口唇部は内に傾き，胴部は貝殻刺突線文で羽状に施文する(3～9)。口縁部はないが，棒状工具で沈線文や短沈線文で羽状文を描く(10～12)。10～12よりやや太めの短沈線文を組み合わせたもので，器壁はやや薄い傾向にある(13,14)。

４は器面を丁寧にナデた後，口縁部外面に貝殻刺突線文を横位に６条，胴部は貝殻腹縁刺突による羽状を連続して施す。器壁は厚く，胎土に粒子を多く含み粗な仕上がりを呈している。12等の外面は入念にナデ光沢を呈し，内面はヘラ状工具で丁寧に仕上げている。

(3)Ⅲ類土器(第15図，No15～26)

12点全てを掲載した。微隆起線文いわゆるミミズバレ文(15～19,25)，山形押型文(20,22,23)，菱形押型文(21,24)の３タイプがみられる。

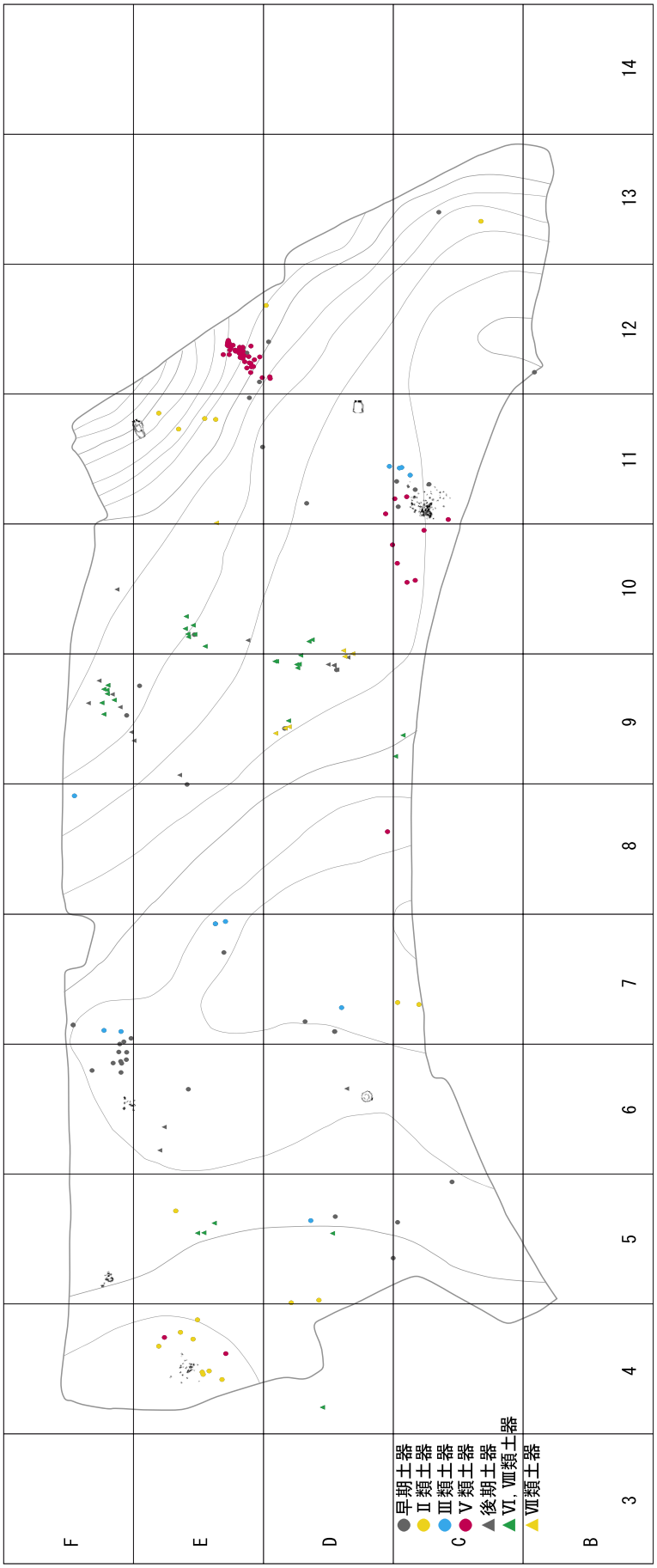
15,17は口縁部で，口唇部は尖り気味に作られ，総じて器壁は薄い。

26は外反する口縁部の両面に縄文を押捺することから，この類に含めた。口縁部は急激に外反し，口唇部は尖り気味に引き延ばされる。

(4)Ⅳ類土器(第16図，No27,28)

壺型土器の頸部と判断したもので，器面を丁寧にナデた後，縄文を押捺する。

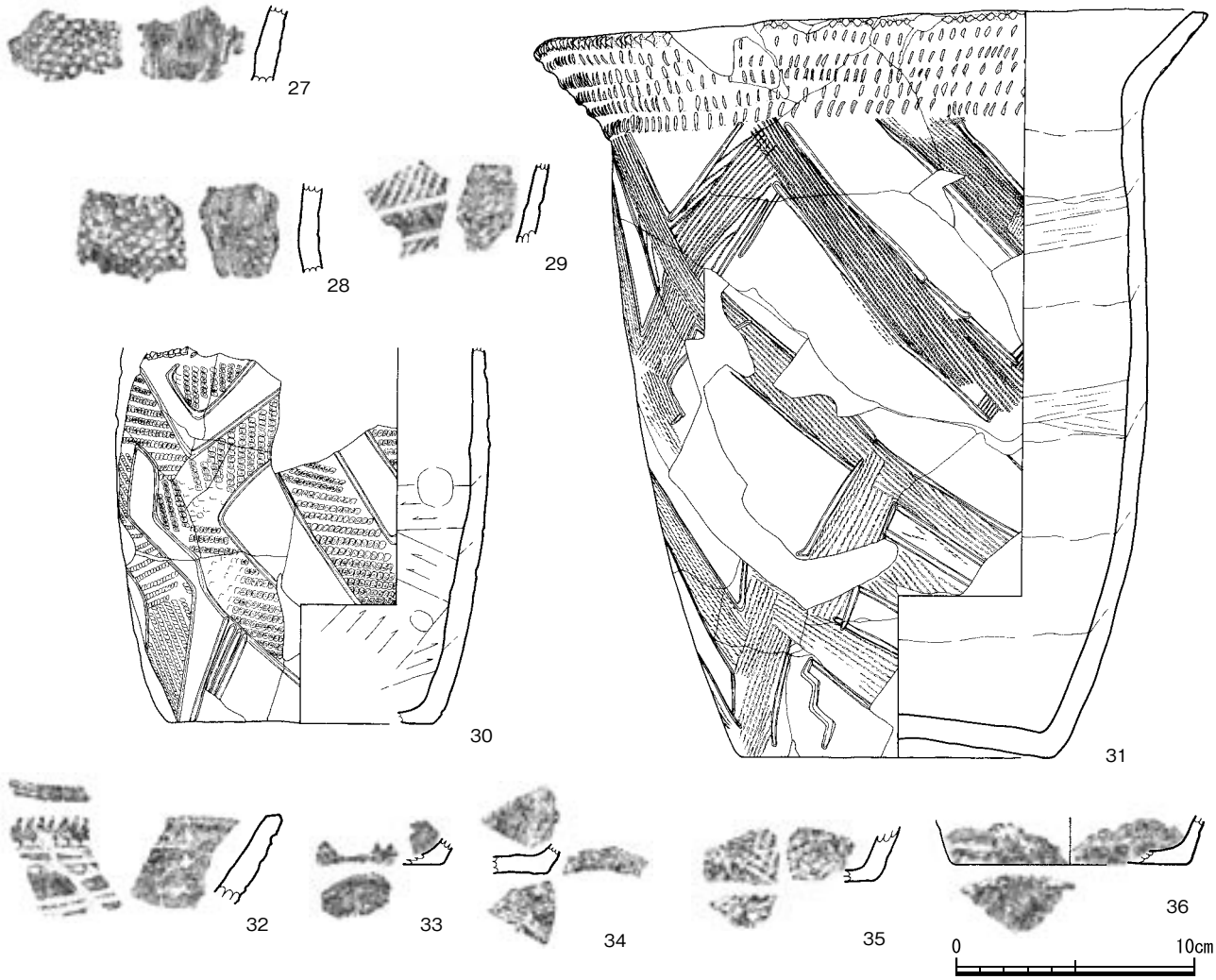
２点ともやや屈曲する破片で，頸部に相当する可能性もある。



第14図　Ⅰ類～Ⅸ類土器出土状況(1/500)



第15図　Ⅰ～Ⅴ類土器実測図(１)



第16図　Ⅰ～Ⅴ類土器実測図(２)

第１表　Ⅰ～Ⅴ類土器観察表(１)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
15	1	6434(E-11/Ⅶ)	角,石,長	良好	7.5YR6/6(橙)	7.5YR6/6(橙)	ナデ,楕円押型	楕円押型	-
	2	一括(--/-)	長,石,雲	良好	10YR5/3(にぶい黄褐)	10YR5/4(にぶい黄褐)	ナデ	ナデ,貝殻刺突線文	-
	3	7097(E-4/Ⅶ)	長,石	良好	10YR5/4(にぶい黄褐)	5YR5/6(明赤褐)	ナデ	ナデ,貝殻刺突線文	-
	4	6429(E-11/Ⅶ) 6430(E-11/Ⅶ) 6436(E-11/Ⅶ) 6437(E-11/Ⅶ)	長,雲	良好	10YR4/6(褐)	2.5Y5/3(黄褐)	ー	ナデ,貝殻刺突線文	-
	5	7096(E-4/Ⅶ)	長,石	良好	10YR4/3(にぶい黄褐)	5YR5/6(明赤褐)	ナデ	ナデ,貝殻刺突線文	-
	6	7098(E-4/Ⅶ)	白	良好	10YR5/4(にぶい黄褐)	5YR5/6(明赤褐)	ナデ	ナデ,貝殻刺突線文	-
	7	7091(E-4/Ⅶ)	長,雲	良好	7.5YR4/4(褐)	7.5YR4/6(褐)	ナデ	ナデ,貝殻刺突線文	-
	8	6426(D-12/Ⅶ)	白,金雲	良好	10YR4/6(褐)	2.5Y5/3(黄褐)	ナデ	ナデ,貝殻刺突線文	-
	9	6703(C-13/Ⅷ)	石,長,白,赤	良好	10YR4/3(にぶい黄褐)	10YR4/4(褐)	ナデ	ナデ,貝殻刺突線文	-
	10	7083(E-5/Ⅶ)	石,長,角	良好	2.5Y5/3(黄褐)	10YR5/4(にぶい黄褐)	ナデ	ナデ,貝殻刺突線文	-
	11	7081(D-5/Ⅷ) 7082(D-4/Ⅷ)	長,石,雲,小礫,赤	良好	2.5Y5/3(黄褐)	7.5YR4/6(褐)	ナデ	ナデ,貝殻刺突線文	-
	12	7092(E-4/Ⅶ) 7093(E-4/Ⅶ) 7103(E-4/Ⅶ)	白,長,雲	良好	2.5Y5/3(黄褐)	7.5YR4/6(褐)	ミガキ	ナデ,沈線文 貝殻刺突線文	-
	13	7090(E-4/Ⅶ)	長,雲	良好	2.5Y5/3(黄褐)	7.5YR4/6(褐)	ナデ	ナデ,沈線文	-

第２表　Ⅰ～Ⅴ類土器観察表(２)

挿図番号	報告番号	取上番号 (出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
15	14	5395(C-7/Ⅶ) 5396(C-7/Ⅶ)	白,石,長,雲	良好	7.5YR5/6 (明褐)	2.5Y5/3 (黄褐)	ナデ	ナデ,沈線文	-
	15	6779(F-7/Ⅷ)	石,長,角	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ,微隆起線文	ナデ,微隆起線文	-
	16	4573(D-11/Ⅶ)	石,角	良好	2.5Y7/4 (浅黄)	2.5Y7/4 (浅黄)	ナデ	ナデ,微隆起線文	-
	17	6781(F-7/Ⅷ)	赤,石,角	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/6 (明黄褐)	ナデ,微隆起線文	ナデ,微隆起線文	-
	18	5397(D-7/Ⅶ)	石,長,角	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/6 (明黄褐)	ナデ	ナデ,微隆起線文	-
	19	一括(--/-)	石,角	良好	7.5YR6/6 (橙)	7.5YR6/6 (橙)	ナデ	ナデ,微隆起線文	-
	20	4574(C-11/Ⅶ)	長,石	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,山形押型文	-
	21	4577(C-11/Ⅷ)	長,石	良好	2.5Y7/4 (浅黄)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,菱形押型文	-
	22	6756(E-7/Ⅶ)	長,雲	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,山形押型文	-
	23	6757(E-7/Ⅶ)	長,雲	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,山形押型文	-
	24	3269(F-8/Ⅶ)	雲,細砂	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,菱形押型文	-
	25	4575(C-11/Ⅷ)	石,角	良好	2.5Y7/4 (浅黄)	2.5Y7/4 (浅黄)	ナデ	ナデ,微隆起線文	-
	26	7078(D-5/Ⅷ)	石,黒	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	2.5Y6/3 (にぶい黄)	ナデ	ナデ,縄文	-
16	27	6776(F-6/Ⅷ)	石,長,角,雲	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,縄文	-
	28	6769(F-6/Ⅶ)	軽石,長,石	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,縄文	-
	29	4582(C-11/Ⅵ)	石,角	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,沈線,撚糸	-
	30	3079(C-11/Ⅶ) 3081(D-11/横転) 3092(D-10/Ⅶ) 3094(C-10/Ⅶ) 3095(C-10/Ⅶ) 3096(C-10/Ⅶ)	石,長,白,黒,赤	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ハケナデ	ナデ,縄文,沈線	-
	31	6357(E-12/Ⅶ) 6358(D-12/Ⅶ) 6359(D-12/Ⅶ) 6360(E-12/Ⅶ) 6361(E-12/Ⅶ) 6362(E-12/Ⅶ) 6363(E-12/Ⅶ) 6364(E-12/Ⅶ) 6365(E-12/Ⅶ) 6366(E-12/Ⅶ) 6367(E-12/Ⅶ) 6368(E-12/Ⅶ) 6371(E-12/Ⅶ) 6374(E-12/Ⅶ) 6375(E-12/Ⅶ) 6376(E-12/Ⅶ) 6377(E-12/Ⅶ) 6378(E-12/Ⅶ) 6379(E-12/Ⅶ) 6381(E-12/Ⅶ) 6384(E-12/Ⅶ) 6386(E-12/Ⅶ) 6388(E-12/Ⅶ) 6389(E-12/Ⅶ) 6390(E-12/Ⅶ) 6392(E-12/Ⅶ) 6394(E-12/Ⅶ) 6395(E-12/Ⅶ) 6396(E-12/Ⅶ) 6398(E-12/Ⅶ) 6400(E-12/Ⅶ) 6402(E-12/Ⅶ) 6405(E-12/Ⅶ) 6406(E-12/Ⅶ) 6409(E-12/Ⅶ) 6410(E-12/Ⅶ) 6413(E-12/Ⅶ) 6414(E-12/Ⅶ) 6415(E-12/Ⅶ) 6416(E-12/Ⅶ) 6417(E-12/Ⅶ) 6418(E-12/Ⅶ) 6420(E-12/Ⅶ) 6423(E-12/Ⅶ)	小礫	良好	2.5Y8/4 (淡黄)	2.5Y8/4 (淡黄)	ナデ,指押し	貝殻条痕後ナデ 撚糸文,沈線	-

第３表　Ⅰ～Ⅴ類土器観察表(３)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
16	32	4555(D-8/Ⅵa)	石,長,角	良好	7.5YR6/6 (橙)	7.5YR6/6 (橙)	ナデ	ナデ,ヘラ刻み,刺突文 沈線文	-
	33	7095(E-4/Ⅶ)	長	良好	7.5YR5/6 (明褐)	7.5YR5/6 (明褐)	ナデ	ナデ	-
	34	4580(C-11/Ⅶ)	角,石	良好	5Y7/4 (浅黄)	2.5Y7/4 (浅黄)	ナデ	ナデ	-
	35	4581(C-10/Ⅵ)	石,長,角	良好	10YR6/6 (明黄褐)	10YR6/6 (明黄褐)	ナデ	ナデ	-
	36	7087(E-4/Ⅶ)	長,角	良好	2.5Y5/3 (黄褐)	10YR5/4 (にぶい黄褐)	ナデ	ナデ	-

(５)Ⅴ類土器(第16図，No29～36)

31は円筒状の胴部に，外反する短い口縁部で，口唇部は狭い平坦面を形成し，底部は中部が明瞭な上底をなす。口径28.8cm，高さ31.0cm，底部径13.0cmで，口唇部端部を工具で刻む。口縁部は，略Ｓ字状の貝殻刺突文が左から右方向に併走する。胴部の撚糸文では縦位に回転押捺させた後，沈線で囲む。１個体がそのまま埋もれた状態で，発見されている。

30は，縄文を充填する。平底の可能性が高い。

33～36の底部は，形状や施文から判断した。

(６)Ⅵ類土器(第17図，No37,39)

37は口縁端部外面を粘土紐で肥厚し，狭い口唇部平坦面を形成し，指頭で深く押圧する。

39は口唇部内面に粘土紐を貼り付け，肥厚した平坦な口唇部を指頭で深く押圧し，器面はナデられ浅い押線文を１条巡らし，口縁端部と押線文間にも浅い斜めの押線文を施す。

(７)Ⅶ類土器(第17図，No38,40～42)

38,40～42は棒状工具で規格性のある沈線文を構成し，施文は口縁部周辺に集中する。

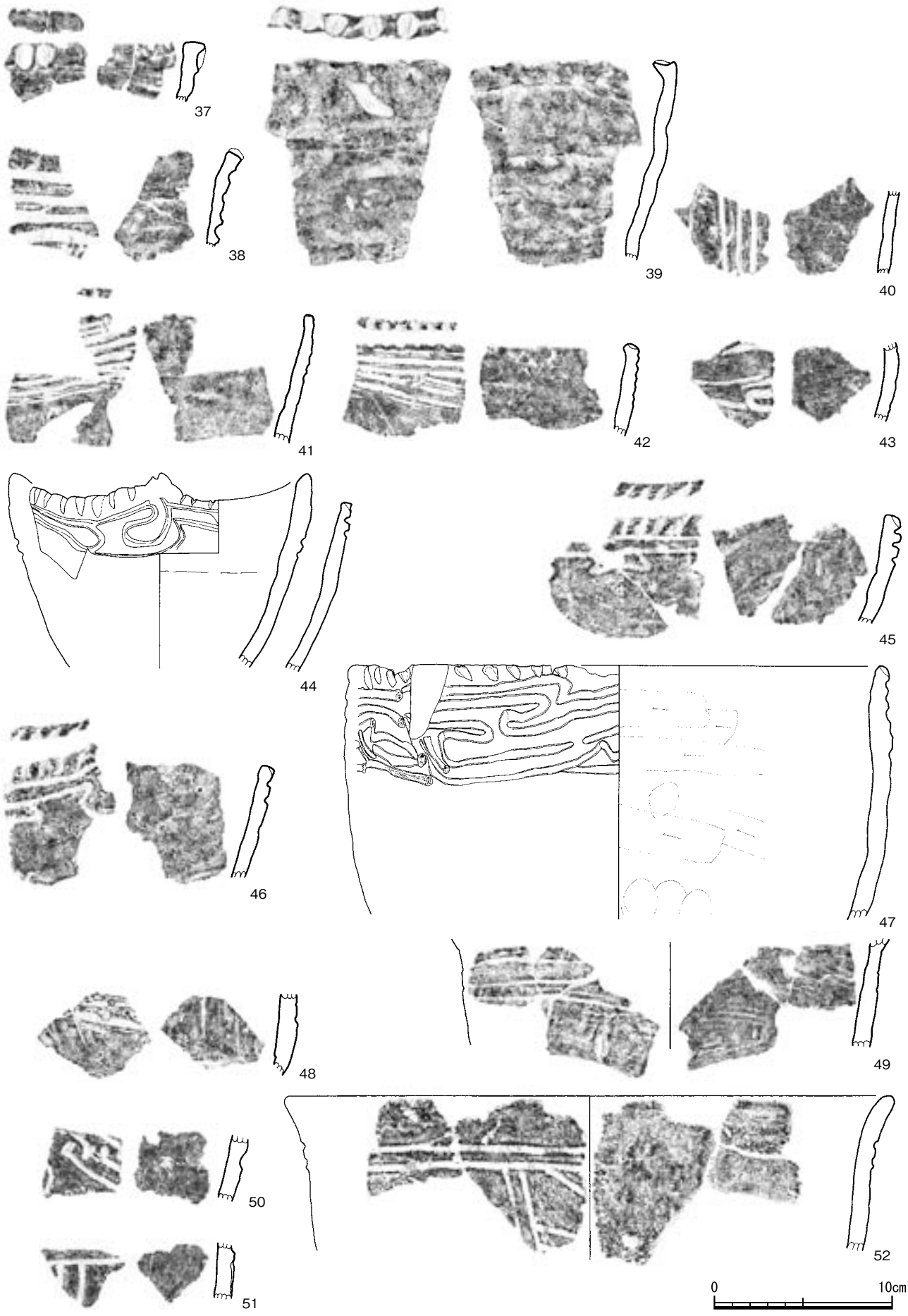
38,41,42の器面調整は，ヘラ状工具でナデ，施文帯も同じである。口唇部は平坦に仕上げた後，工具で連続して刻み波状口縁となる。

(８)Ⅷ類土器(第17,18図，No43～58)

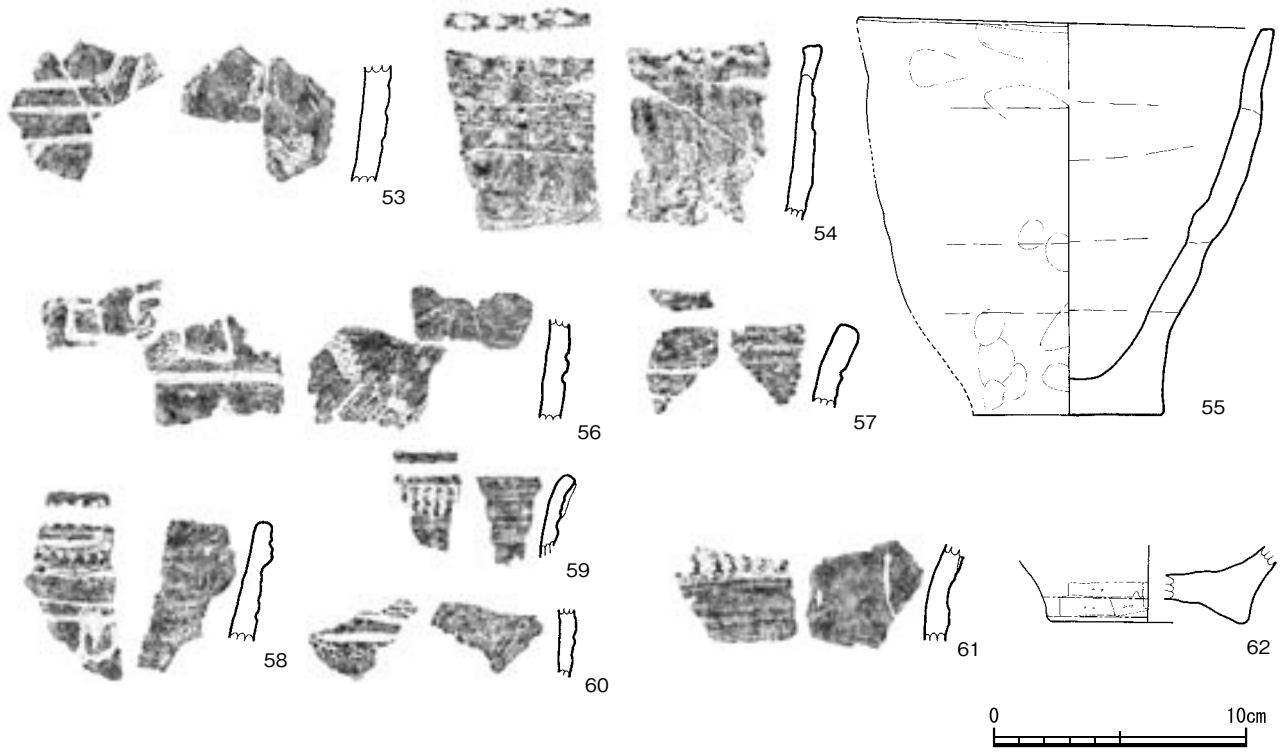
Ⅶ類土器と並行する在地の土器群で，文様構成等にⅦ類土器の強い影響をみることができる。Ⅶ類土器との違いは沈線

第４表　Ⅵ～Ⅸ類土器観察表(１)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
17	37	2913(C-9/Ⅳ)	長,石,角	良好	2.5YR7/3 (淡赤橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,指頭圧痕 凹線文	-
	38	1900(D-9/Ⅳ) 3059(D-10/Ⅳ)	石,角,雲	良好	7.5YR6/6 (橙)	2.5Y5/3 (黄褐)	ナデ	ナデ,太目の沈線文	-
	39	6826(D-4/Ⅲb)	石,長,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	7.5YR4/3 (褐)	ナデ	ナデ,浅めの押線文	-
	40	1356(D-10/Ⅲ)	長,石,角	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	10YR5/4 (にぶい黄褐)	ナデ	ナデ,沈線	-
	41	2945(D-9/Ⅳ) 2947(D-9/Ⅳ)	黒,長,角	良好	10YR6/6 (明黄褐)	10YR6/6 (明黄褐)	ナデ	ナデ,ヘラ刻み,沈線	-
	42	2942(D-9/Ⅳ)	砂,長	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	ナデ,ヘラ刻み,沈線	-
	43	2009(E-11/Ⅳ)	長,石,角	良好	7.5YR5/6 (明褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ナデ	ナデ,沈線	-
	44	1539(E-10/Ⅲ) 1991(E-10/Ⅳ) 2776(E-10/Ⅳ) 2965(E-10/Ⅳ)	石,角	良好	2.5Y6/4 (にぶい黄)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,ヘラ刻み,沈線	-
	45	2774(E-10/Ⅳ) 2781(E-10/Ⅳ)	長,石	良好	7.5YR6/6 (橙)	7.5YR6/6 (橙)	ナデ	ナデ,ヘラ刻み,沈線	-
	46	2780(E-10/Ⅳ)	長,石	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	7.5YR6/6 (橙)	ナデ	ナデ,ヘラ刻み,沈線	-
	47	2970(D-9/Ⅳ) ?(--/-)	石,長,角,小礫	良好	2.5YR5/8 (明赤褐)	2.5YR5/8 (明赤褐)	ナデ	ナデ,ヘラ刻み,沈線	-
	48	1917(D-9/Ⅳ)	石,角	良好	7.5YR5/6 (明褐)	7.5YR5/6 (明褐)	ナデ	ナデ,沈線	-
	49	5207(D-5/Ⅳa) 5371(E-5/Ⅳa) 6528(E-5/Ⅳa)	白,石,長,角	良好	7.5YR6/6 (橙)	10YR6/6 (明黄褐)	ナデ	ナデ,沈線	-
	50	3026(F-9/Ⅲb)	石,長,角	良好	2.5Y7/4 (浅黄)	10YR6/6 (明黄褐)	ナデ	ナデ,沈線	-
	51	3027(F-9/Ⅲb)	長,石	良好	2.5Y7/4 (浅黄)	2.5Y7/4 (浅黄)	ナデ	ナデ,沈線	-
	52	3029(F-9/Ⅳ) 3046(F-9/Ⅳ)	精緻,石,長,白	良好	10YR7/6 (明黄褐)	10YR7/6 (明黄褐)	ナデ	ナデ,沈線	-



第17図　Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ類土器実測図



第18図　Ⅷ，Ⅸ類土器実測図

第５表　Ⅵ～Ⅸ類土器観察表(２)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
18	53	3052(F-9/Ⅳ)	長,石,角	良好	7.5YR6/6 (橙)	7.5YR7/6 (橙)	ナデ	ナデ,沈線	-
	54	1876(D-9/Ⅳ)	砂,石,長,角	良好	7.5YR6/6 (橙)	5YR5/6 (明赤褐)	ナデ	ナデ,沈線	-
	55	1285(D-9/Ⅲ) 1352(D-10/Ⅳ) 1881(D-9/Ⅳ) 1883(D-9/Ⅳ) 1884(D-9/Ⅳ) 2924(D-10/Ⅳ)	精緻	良好	5YR5/6 (明赤褐)	5YR5/6 (明赤褐)	ナデ	ナデ,条痕後ナデ 指頭圧痕	-
	56	3045(F-9/Ⅳ) 3048(F-9/Ⅳ)	小礫,石,角,雲	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ,沈線	-
	57	1916(C-9/Ⅳ)	長,石	良好	2.5Y7/3 (浅黄)	2.5Y8/3 (淡黄)	ナデ	ナデ,沈線	-
	58	5370(E-5/Ⅳa)	長,石,角	良好	5YR7/8 (橙)	5YR7/8 (橙)	ナデ	ナデ,沈線,貝殻刺突文	-
	59	3078(F-9/Ⅳ)	長,石	良好	5YR5/4 (にぶい赤褐)	5YR6/4 (にぶい橙)	ナデ	ナデ,沈線 貝殻刺突線文,押線文	-
	60	3076(F-9/Ⅳ)	白,長,石,角	良好	2.5Y6/4 (にぶい黄)	2.5Y6/4 (にぶい黄)	ナデ	ナデ,沈線 貝殻刺突線文	-
	61	765(F-9/Ⅲ)	長,石	良好	5YR4/4 (にぶい赤褐)	5YR5/6 (明赤褐)	ナデ	ナデ,沈線 貝殻刺突線文,押線文	-
	62	3713(E-6/Ⅳa) 4008(E-6/Ⅳa)	石、長,砂	良好	7.5YR6/6 (橙)	5YR5/6 (明赤褐)	ナデ	ナデ	-

文が細くなり，また曲線を多用する文様構成が行われることである。

47は，最大径が胴部中央部で口縁部はやや締まる。施文は口縁部に集中し，棒状工具で押線文様に曲線で描き，押線文の起点と終点は強く押さえる。

44～46は同一個体で胴部からそのまま口縁部に移行し，口縁部に最大幅があり，波状で山形口縁となる。

54,55は小型平底の粗製の無文土器で，粘土の接合ラインが消されることなく，そのまま残される。内，外面共に，条痕整形の後，ナデや指頭で軽く再調整を行っている。54は波状口縁，55は平坦面をなす。

50の施文の起点と終点は強調される。

58は口縁端部を肥厚し，沈線文と刺突文を組み合わせているが，施文の起点と終点は踏襲している。

(９)　Ⅸ類土器(第18図，No59～61)

59～61の３点で，60は棒状工具による沈線文間に疑似縄文を，59と61は口縁部に貝殻腹縁文を縦に連続的に施文し，その下位は押線文が確認できる。

(10)X類土器(第20～22図)

Ｘ類をＸＡ類(浅鉢形土器)，ＸＢ類(深鉢形土器)，ＸＣ類(鉢形土器)に分けた。

ＸＡ類土器

本遺跡の浅鉢形土器は，内面，外面ともに入念なヘラ磨きを行い，器面は光沢を呈している。口縁部の径が胴部の最大径を上回るという特徴がある。

63～76は，屈曲する明瞭な肩部をもち，頸部から直線的に外反し口縁部を形成する。

63,65,66は屈曲部付近に，炭化物の付着を確認する。68の口唇部は粘土紐の貼り付けにより立ち上がる。67,68は口縁部の内外に沈線をもち，64,70は，外面にのみ沈線が施される。

67,70は，他の土器に比べ，特に入念な研磨が観察される。

72の取っ手の着装は，外側下部は指ナデ，内側は棒状工具のナデで丁寧な作業がみえる。

77～88は肩部で屈曲した後，大きく外反し口縁部までは短い。

85,87を除く土器は，口縁部内外に明瞭な沈線をもち，特に外面の沈線は顕著で，粘土紐を貼り付け作り出している。85はリボンを貼り付けるが，形状からこの類とした。87は，口縁端部に粘土を一条貼り付け構成する作りになっている。

79,82,88は特に入念なヘラ研磨が認められる。88は頸部の屈曲は強いが，肩部は丸くなる。

ＸＢ類土器

深鉢形土器で，内，外面共に貝殻条痕やヘラ等の工具で器面整形を行っている。肩部は緩やかに屈曲し，屈曲部から口縁部へは直線的に立ち上がる。89,91は口縁部直下に穿孔され，89は外面から内面に，91は両面から穿たれる。

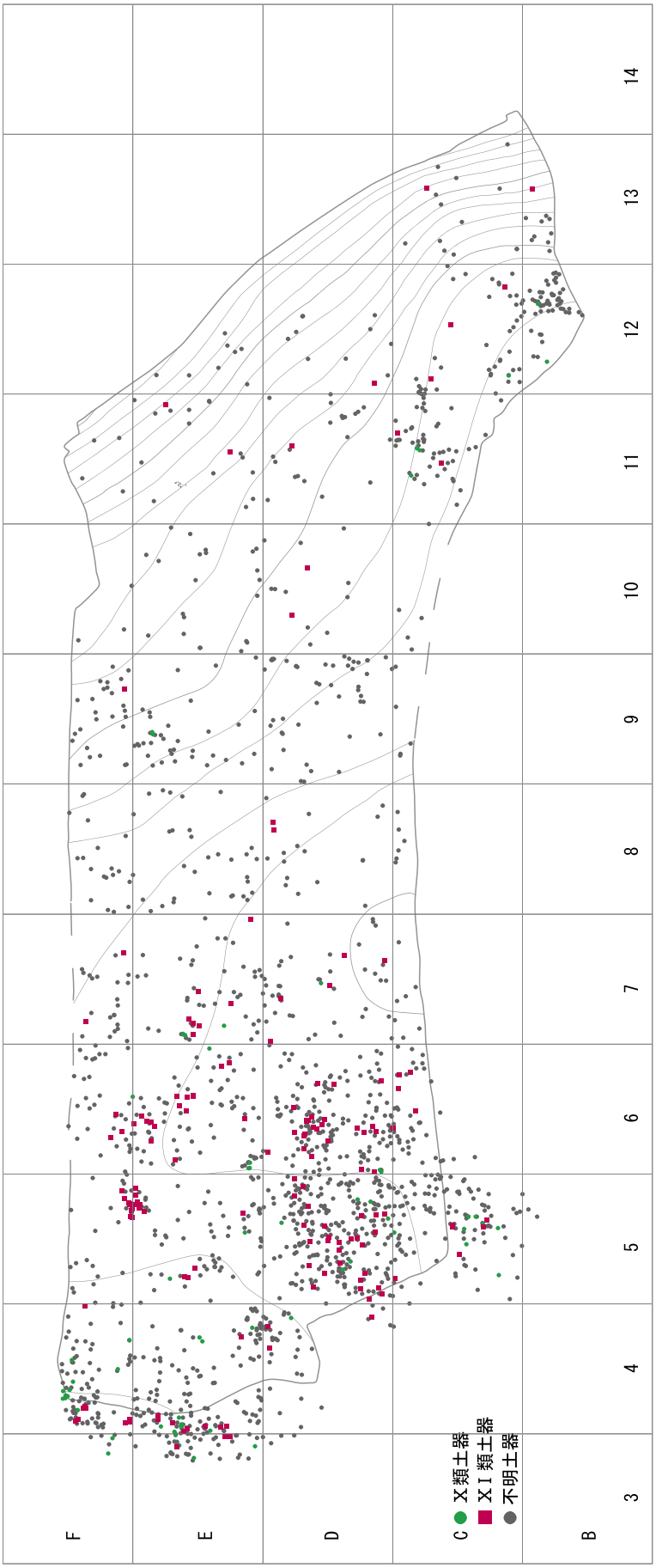
93の外面は丁寧にナデられ，内，外面にススが付着するもので，小型の深鉢形土器と判断した。

95,96は，工具で屈曲部上方をナデるため，若干肥厚する口縁部に仕上がっている。

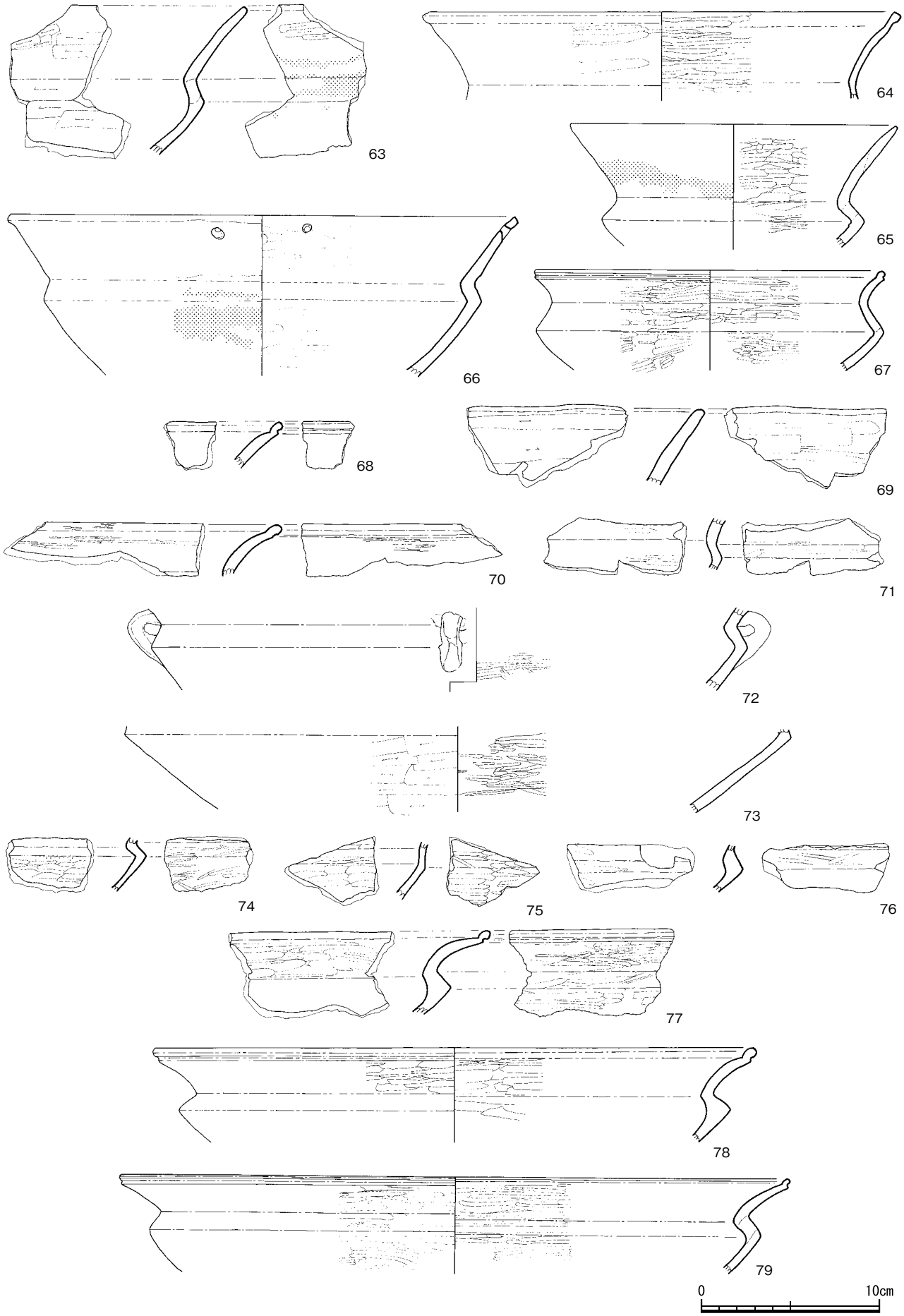
ＸＣ類土器

97は椀形，あるいはマリ形土器と呼ばれる鉢形土器である。

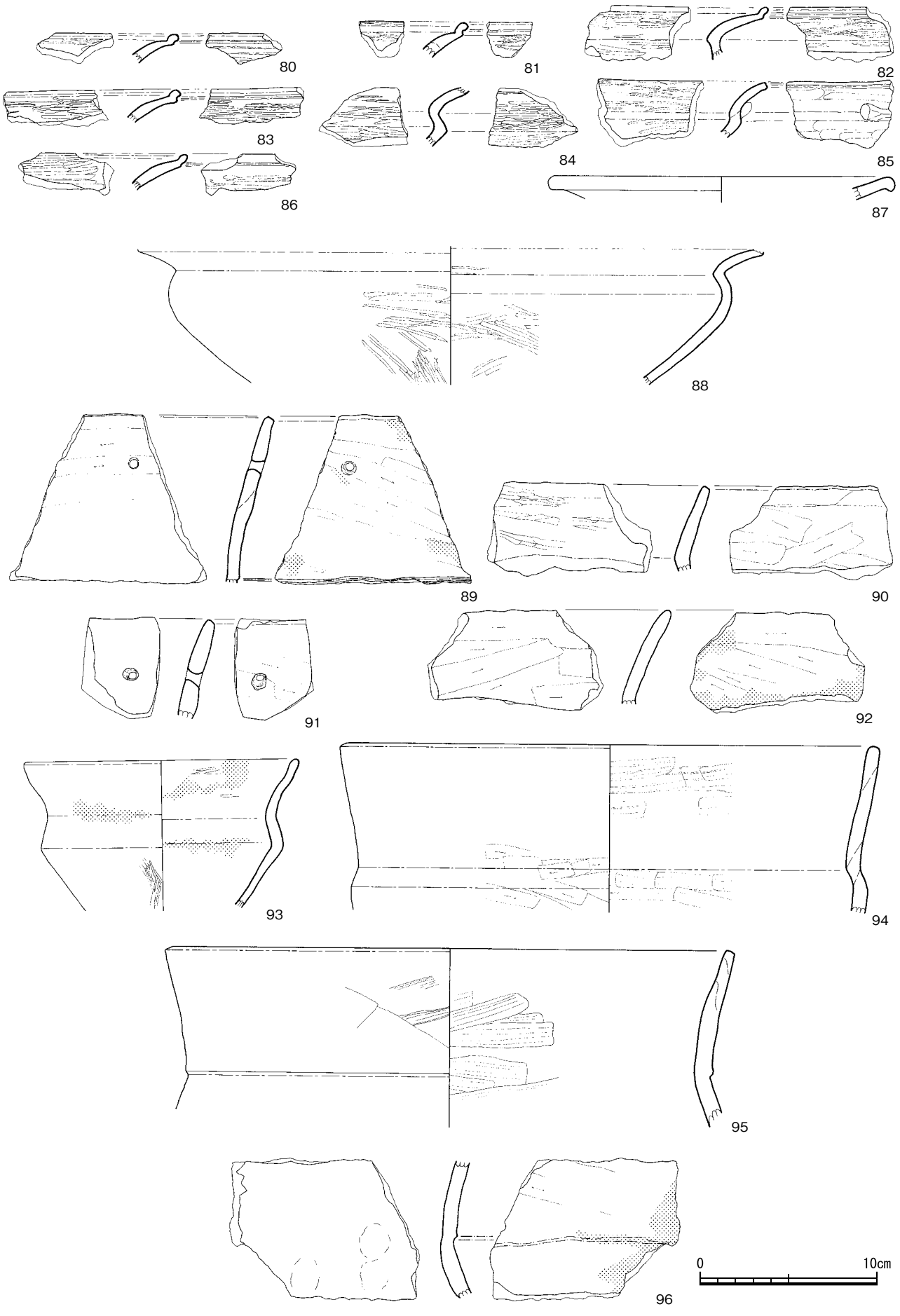
緩やかに内弯しながら口唇部を形成し，口唇部は水平な平坦面をもつ。外面中央付近にはススが付着し，底部は欠如するが丸底を呈すると思われる。調整は，内，外面ともに貝殻条痕を施した後，それをナデ消し器面を整えている。



第19図　Ｘ類～ＸⅡ類土器出土状況(1/500)



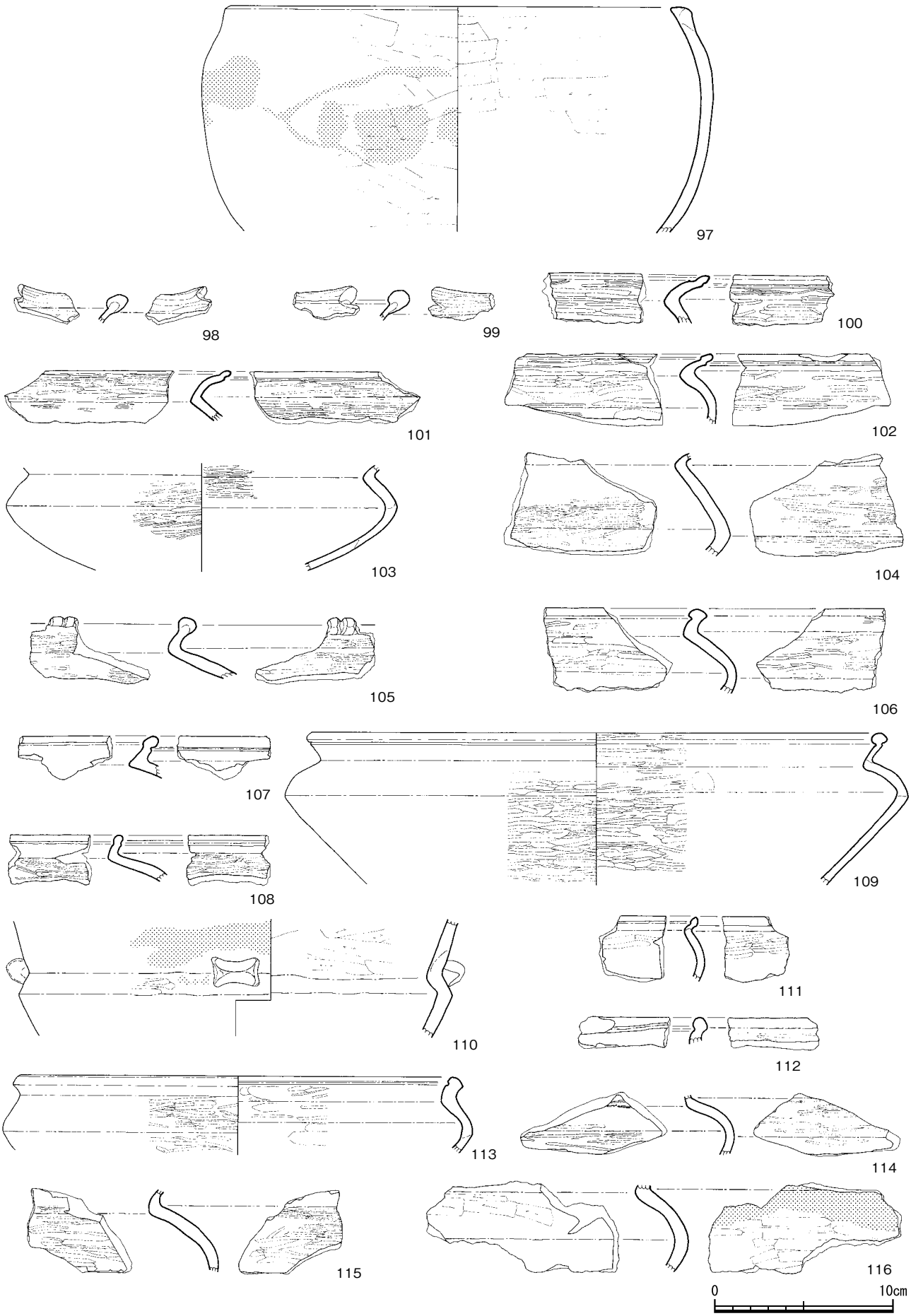
第20図　XA類土器実測図



第21図　XA，XB類土器実測図

第６表　Ｘ類土器観察表(１)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
20	63	6835(E-3/Ⅳa) 6867(E-4/Ⅲb)	白,石	良好	10YR4/2 (灰黄褐)	10YR4/3 (にぶい黄褐)	ナデ	ナデ	-
	64	5171(D-5/Ⅳa) 5230(D-5/Ⅳa)	精緻	良好	2.5Y8/4 (淡黄)	2.5Y8/3 (淡黄)	ミガキ	ハケナデ後ミガキ	-
	65	4530(F-6/Ⅳa) 一括(--/-)	石,白	良好	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y5/3 (黄褐)	ヘラミガキ	丁寧なナデ	-
	66	6959(E-4/Ⅲb)	砂	良好,堅緻	N2/ (黒)	5YR3/3 (暗赤褐)	ハケナデ	ナデ,ミガキ	-
	67	4668(C-5/Ⅳa)	精緻	良好	10YR3/2 (黒褐)	10YR3/2 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	68	6609(F-4/Ⅳa)	精緻,石	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ミガキ	ミガキ	-
	69	5144(C-5/Ⅳa) 5185(D-5/Ⅳa)	角	良好	2.5Y4/1 (黄灰)	N2/ (黒)	ナデ	丁寧なナデ	-
	70	4790(E-4/Ⅲb) 7126(F-3/Ⅳa)	精緻	良好,堅緻	10YR3/2 (黒褐)	10YR3/2 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	71	4892(F-4/Ⅲb) 7063(F-3/Ⅲb)	精緻	良好,堅緻	2.5Y6/2 (灰黄)	2.5Y8/3 (淡黄)	ミガキ	ミガキ	-
	72	7176(F-4/Ⅳa)	角	良好	2.5YR5/8 (明赤褐)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ミガキ	ナデ	-
	73	7163(F-4/Ⅳa) 7183(F-4/Ⅳa) 7184(F-4/Ⅲb) 7188(F-4/Ⅳa) 7189(F-4/Ⅳa) 7231(F-4/Ⅳa) 7235(F-4/Ⅳa)	精緻,角	良好	2.5Y3/2 (黒褐)	7.5YR3/1 (黒褐)	ミガキ	ナデ	-
	74	6233(C-12/Ⅳa)	精緻	良好	10YR4/3 (にぶい黄褐)	10YR3/2 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	75	5364(E-5/Ⅳa)	精緻	良好,堅緻	2.5Y5/2 (暗灰黄)	10YR2/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
	76	5169(D-5/Ⅳa)	精緻,石	良好,堅緻	2.5Y5/2 (暗灰黄)	7.5YR7/6 (橙)	ミガキ	ミガキ	-
	77	4656(C-5/Ⅳa) 4667(C-5/Ⅳa)	精緻,石,砂	良好,堅緻	2.5Y6/3 (にぶい黄)	10YR6/2 (灰黄褐)	ミガキ	ミガキ	-
	78	6905(E-3/Ⅳa) 6964(E-4/Ⅲb) 7042(E-3/Ⅳa)	精緻,白	良好,堅緻	10YR5/1 (褐灰)	10YR5/2 (灰黄褐)	ミガキ	ミガキ	-
	79	5349(E-4/Ⅳa)	精緻	良好	5YR5/4 (にぶい赤褐)	7.5YR5/6 (明褐)	ミガキ	ミガキ	-
21	80	4837(E-5/Ⅲb)	精緻	良好,堅緻	2.5Y3/2 (黒褐)	10YR4/2 (灰黄褐)	ミガキ	ミガキ	-
	81	4623(C-5/Ⅳa)	精緻	良好	10YR6/2 (灰黄褐)	10YR5/2 (灰黄褐)	ミガキ	ミガキ	-
	82	6634(F-4/Ⅳa)	精緻	良好,堅緻	7.5YR1.7/1 (黒)	2.5Y3/1 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	83	5350(E-4/Ⅳa)	精緻	良好,堅緻	2.5Y6/3 (にぶい黄)	10YR4/2 (灰黄褐)	ミガキ	ミガキ	-
	84	4641(C-5/Ⅳa)	精緻,長,砂	良好,堅緻	10YR6/2 (灰黄褐)	7.5YR6/3 (にぶい褐)	ミガキ	ミガキ	-
	85	6973(E-4/Ⅲb)	長,石	良好,堅緻	2.5Y3/1 (黒褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	ミガキ	ミガキ	-
	86	5218(D-4/Ⅳa)	精緻	良好,堅緻	7.5YR7/4 (にぶい橙)	2.5Y3/1 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	87	1935(E-9/Ⅳ) 1936(E-9/Ⅳ)	角,金雲	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	2.5Y6/4 (にぶい黄)	ナデ	ナデ	-
	88	6971(E-4/Ⅲb) 6972(E-4/Ⅲb) 7044(E-4/Ⅳa)	精緻,白	良好	10YR5/1 (褐灰)	10YR3/2 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	89	6901(E-3/Ⅲb)	長,石,角	良好	5YR4/4 (にぶい赤褐)	7.5YR3/2 (黒褐)	ナデ	貝殻条痕後ナデ	-
	90	4748(D-5/Ⅲb) 5033(D-5/Ⅳa)	角	良好	10YR4/2 (灰黄褐)	5YR2/1 (黒褐)	ミガキ	貝殻条痕後ナデ	-
	91	6657(F-4/Ⅳa)	石,長	良好	7.5YR7/8 (黄橙)	10YR3/3 (暗褐)	ナデ	ナデ	-
	92	6103(D-7/Ⅳa)	長,石	良好	10YR3/2 (黒褐)	7.5YR4/3 (褐)	ナデ	ナデ	-
	93	4148(C-11/Ⅳa) 6322(B-12/Ⅳa)	精緻	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	5YR5/6 (明赤褐)	ミガキ	ミガキ	-
	94	4500(E-7/Ⅳa) 4501(E-7/Ⅳa) 4502(E-7/Ⅳa) 5498(E-7/Ⅲa) 6152(E-6/Ⅳa)	角,長,石,白	良好	2.5Y5/1 (黄灰)	2.5Y7/3 (浅黄)	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	-
	95	4166(C-11/Ⅳa) 4167(C-11/Ⅳa) 6239(B-12/Ⅳa)	細粒,赤,長	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	貝殻条痕	貝殻条痕,ナデ	-
	96	6888(E-3/Ⅳa)	角,長,石	良好	7.5YR5/8 (明褐)	5YR4/4 (にぶい赤褐)	ナデ,指押さえ	貝殻条痕後ナデ	-



第22図　ＸＣ，ＸＩＡ類土器実測図

(11)ＸＩ類土器(第22～28図)

ＸＩ類土器は，ＸＩＡ類浅鉢形土器，ＸＩＢ類深鉢形土器，ＸＩＣ類鉢形土器に分けた。

ＸＩＡ類土器

浅鉢形土器の肩部は球形を呈し，器の最大幅が肩部に設けられる。全てに入念なヘラ研磨がみられ，黒色，灰色，赤褐色の光沢のある器面をなしている。口縁部の長短，沈線の有無，口唇部のバリエーション等の特徴も指摘できるが，細片であることから，口縁部形状に絞り検討した。

１類(No98～104)

頸部で強く屈曲し，口縁部は明瞭に外反する。また，最大幅は頸部に設けるが，口径との差異は大きくない。

98,99は口唇部に鰭状突起をもち，100～102の口唇部内外は浅い沈線文で締める。

２類(No105～118)

屈曲部はやや緩慢で，口縁部が立ち上がり，頸部にある最大幅が口径を大きく上回る。

105の口唇部には丸みを帯びたリボン状突起，110の傾きは若干課題を残すが，リボン状突起をもつ。

107の頸部の屈曲は充実し，109は明瞭である。一方，111,113では緩やかとなり，口縁部も短くなる傾向がある。109や110の肩部の屈曲はやや鋭角に作られるが，他は稜をもたず球形に近い形を呈している。

３類(No122～124)

３点については，屈曲部をもたない浅鉢であると判断した124は，器壁は全体的に肥厚させ貝殻条痕を施した後，丁寧に研磨したことが看取される。

ＸＩＢ類土器

深鉢形土器は，肩部に屈曲をもち口縁部へは緩やかに弓状に外反する１類，肩部の屈曲点から内傾し口縁部に至る２類，口縁部付近に突帯を加え肥厚する口縁部を形成し，口縁部は直線的に外反する３類に区分した。器面調整は貝殻条痕，工具等でナデられた，いわゆる粗製土器である。

１類(No125～137)

125の内，外面，126,128,129の外面は貝殻条痕で整形した後，工具ナデを重ねている。136は明瞭な肩をもつもので，肩部は指で丁寧にナデて仕上げる。132,133は屈曲部にリボン状突起を，138は頸部から口縁部の間に瘤状突起を貼り付けている。

128～130,132,135の外面にはスス状の付着物が確認できる。

２類(No139,140,150)

139と140の２点は，同一個体の可能性もある。肩から内傾し口縁部に至り，口縁端部に突帯を加え断面が三角形状に肥厚する。器面は，内，外面ともに条痕を横位，斜位に施し調整する。

３類(No125～155)

口縁端部及び直下を肥厚する一群で，143,152,154は，波状口縁をなし，143と152の頂部は刻まれる。

149は補修孔で，両面から穿孔されているが，器壁に対して斜めに穿たれる。頸部以下の資料を抽出できていないため，形状の復元は困難である。

ＸＩＣ類土器

鉢形土器を包括した。特に，工具等ナデやヘラ磨きで内面の整形を入念に行うが，外面はヘラナデや条痕で終始する。いわゆる，半粗半精製土器に該当する。中でも167～184の内面はヘラで入念に研磨され，光沢のある器面を維持している。184は小片であるが，内面は光沢を保ち，外面の接地面には編布が圧痕される。

胴部から口縁部に直線的に，若干開きながら立ち上がるものと，やや内弯しながら口縁部に至るものがある。

157,159は穿孔をもつ。157の穿孔はやや小さい。159は補修孔以外を想定すべきか。157,163,176は口唇部に鰭状突起を施す。

173～175の３点は，口縁部下位に弯曲がみられ，器壁がやや厚めに用いられる。

182の器壁は口縁部へと徐々に薄くなるが，亀裂が入った箇所に粘土を充填したことが観察される。

183は，外面口縁部端から内面にかけて炭化物が付着している。厚くはないものの，内面上部は特にしっかり炭化物がこびり付いている状態が観察される。

(12)　ＸⅡ類土器　(晩期土器底部)(第28,29図)

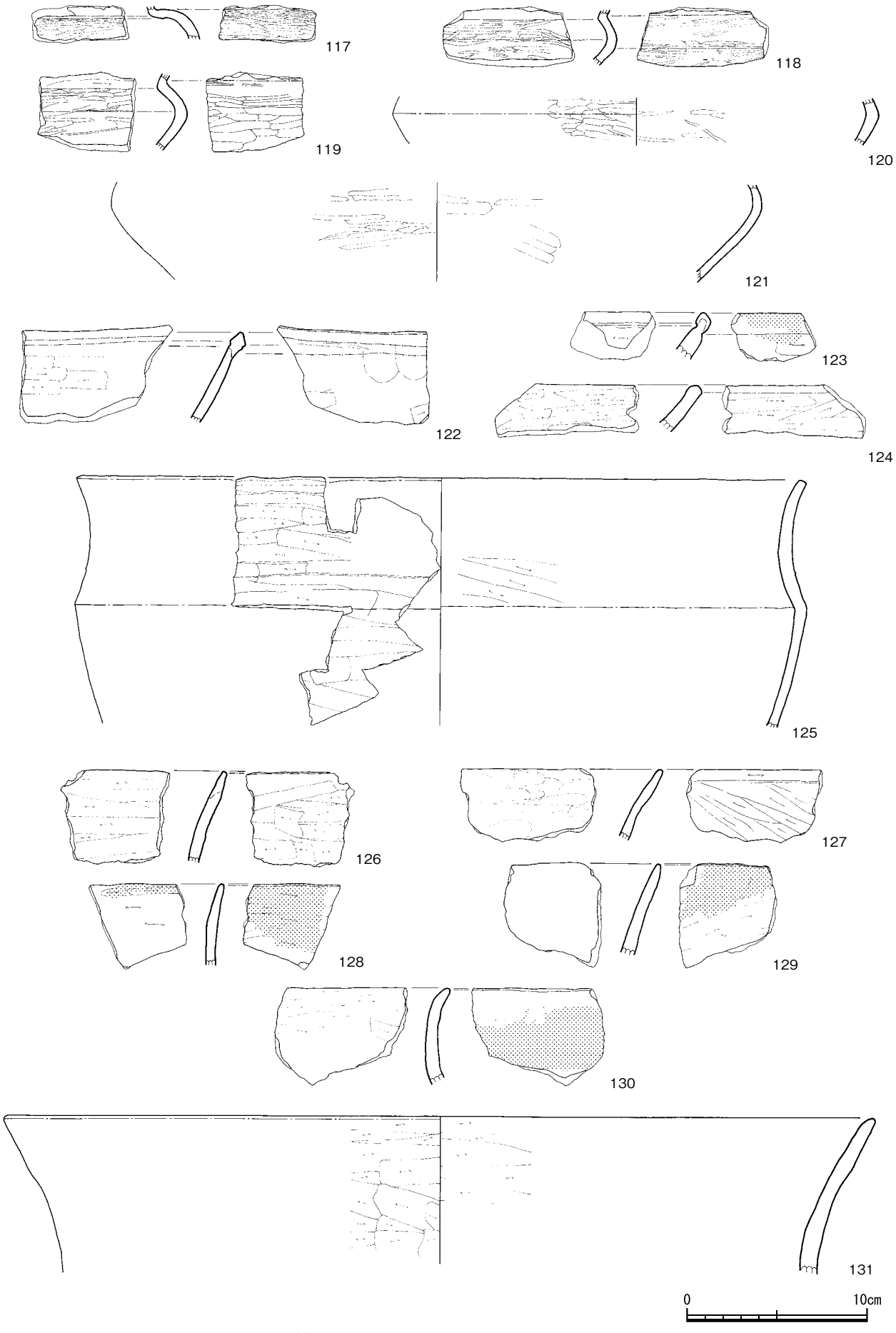
ＸⅡ類は，晩期土器の底部を一括し，丸底と平底がある。丸底は３点だけで，いずれも内，外面ともに丁寧なヘラ研磨が施される。

186は，小型の鉢形土器，185,187は浅鉢形土器の底部で，187ではあばた状の剥落がある。

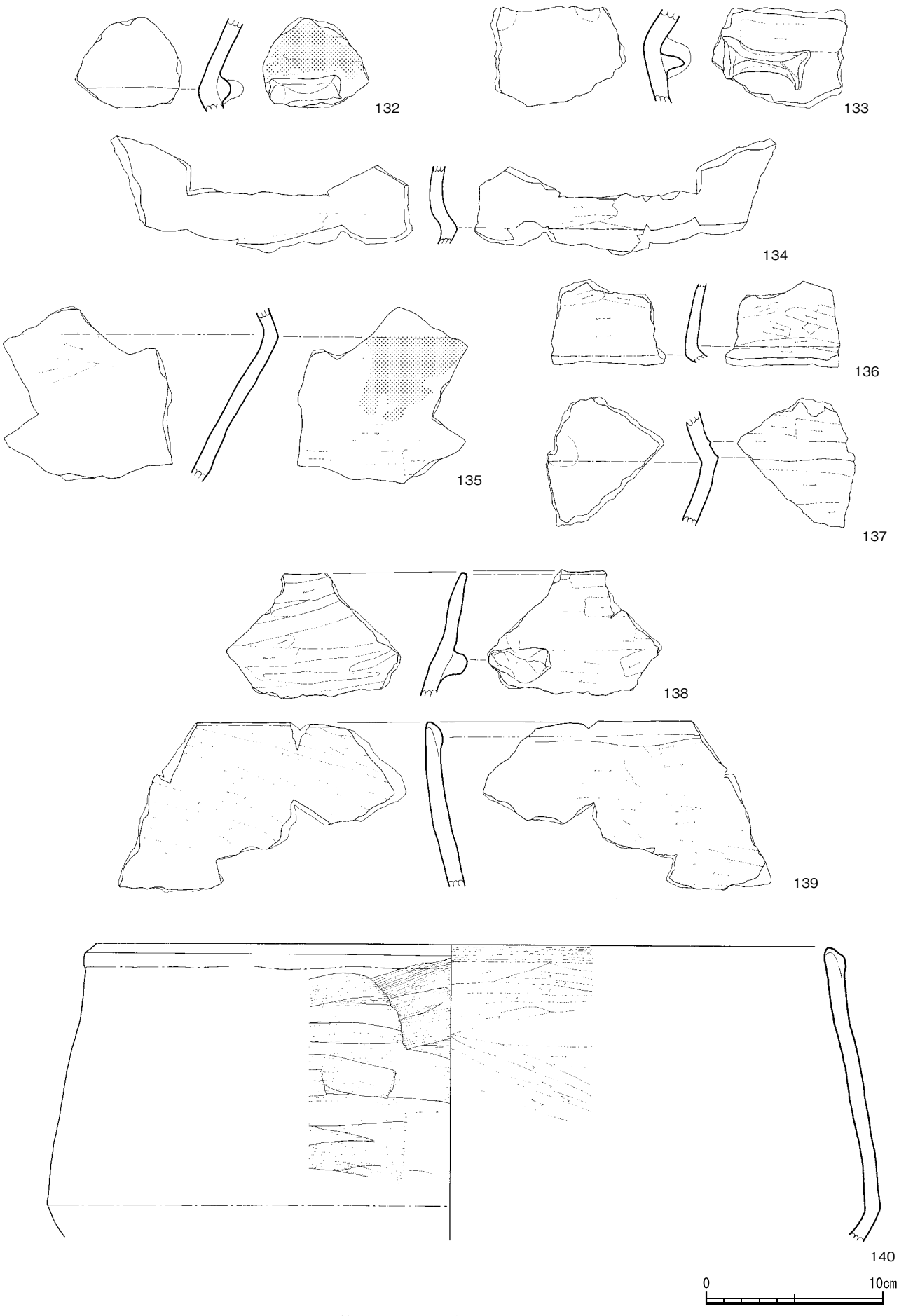
平底は38点出土し，全体的な特徴として張り出し状の厚めの底を呈するものが多い。その中でも特に223の底部は，胴部立ち上がり部まで４cmの充実高台である。

第７表　Ｘ類土器観察表(２)

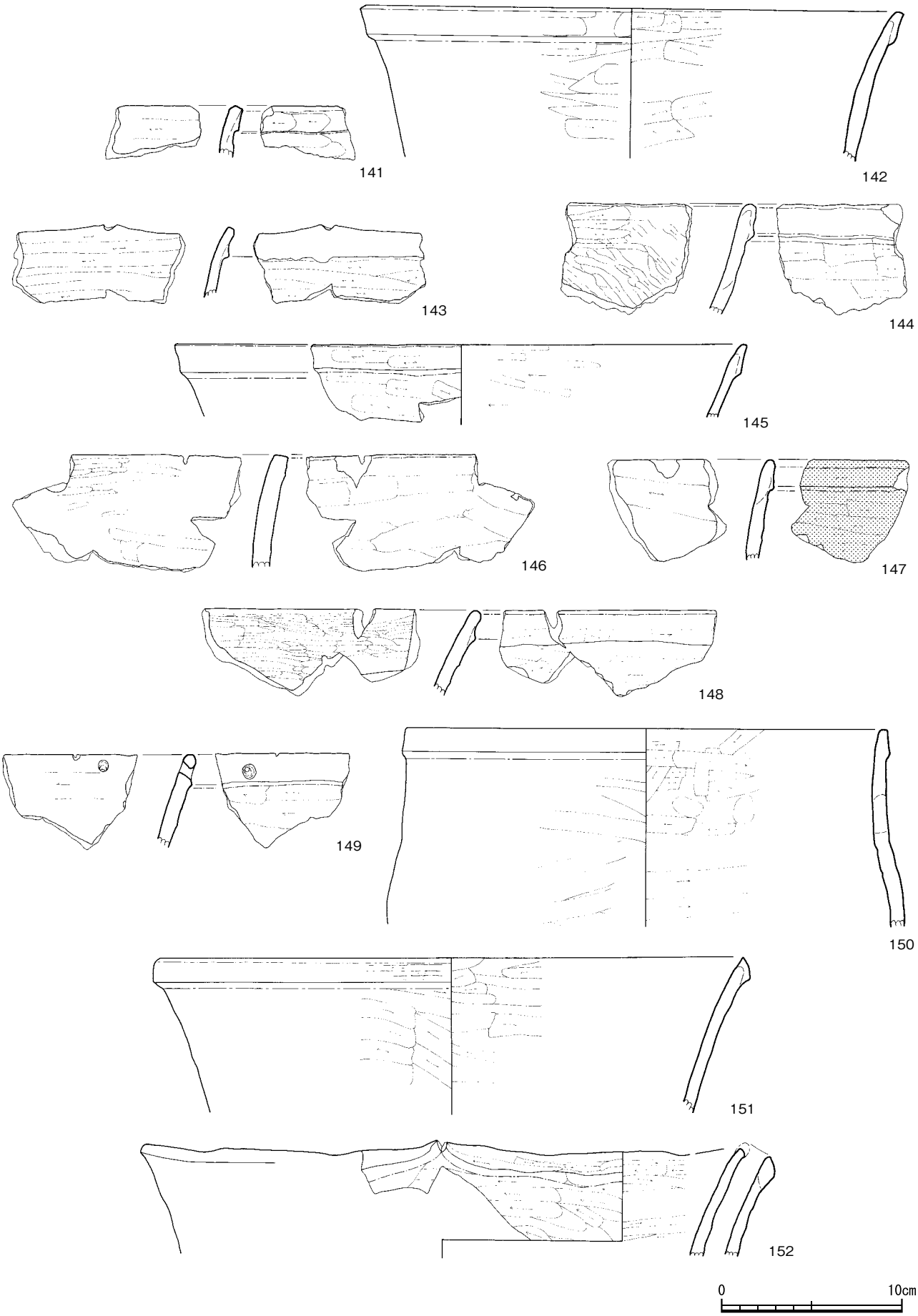
挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
22	97	3689(E-6/Ⅳa) 4626(C-5/Ⅳa) 4645(C-5/Ⅳa) 5151(D-6/Ⅳa) 5152(D-6/Ⅳa) 6532(E-6/Ⅳa) 6533(E-6/Ⅳa)	石,長,角	良好	2.5Y6/3 (にぶい黄)	10YR5/2 (灰黄褐)	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	-



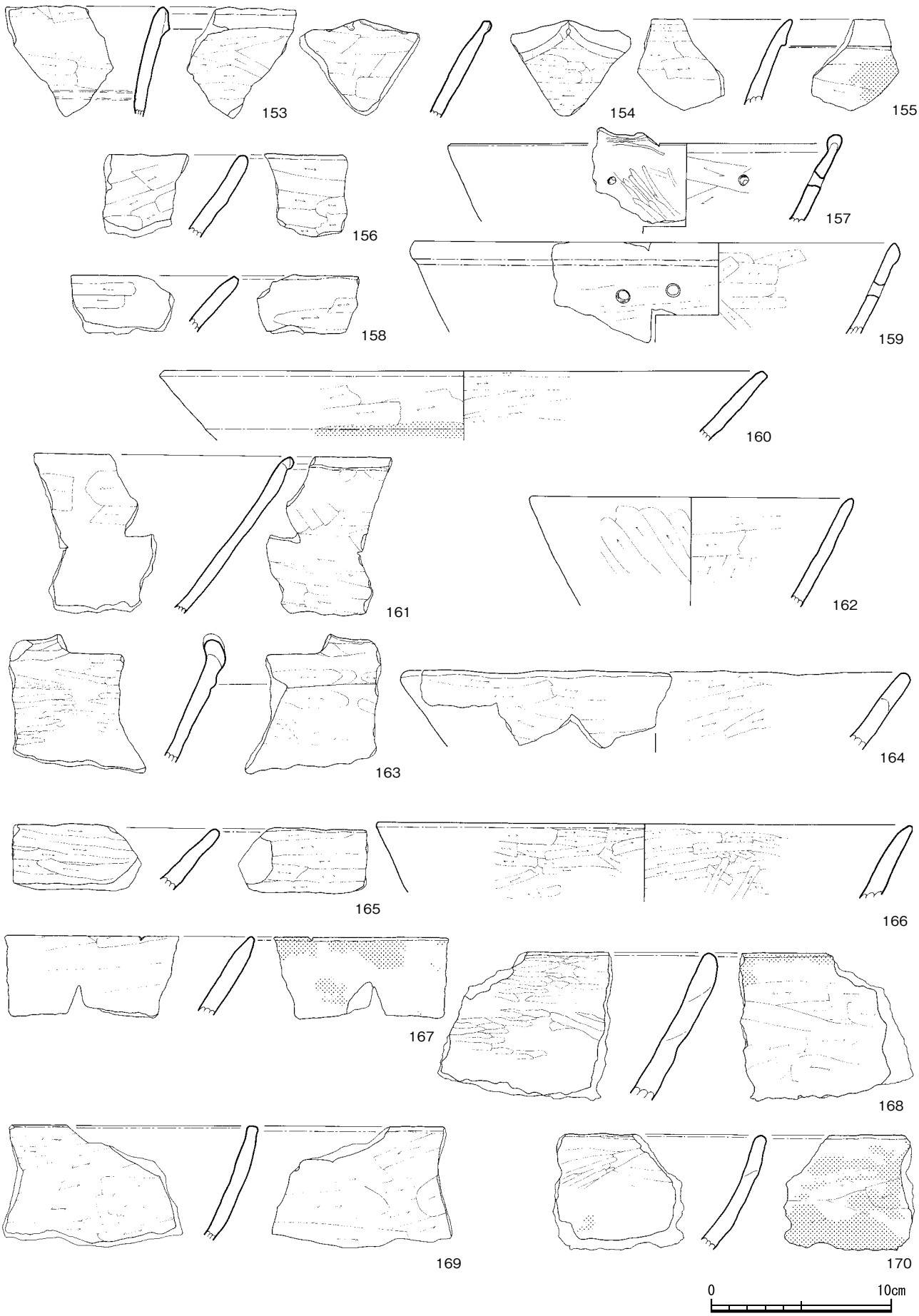
第23図　ＸＩA，ＸＩB類土器実測図



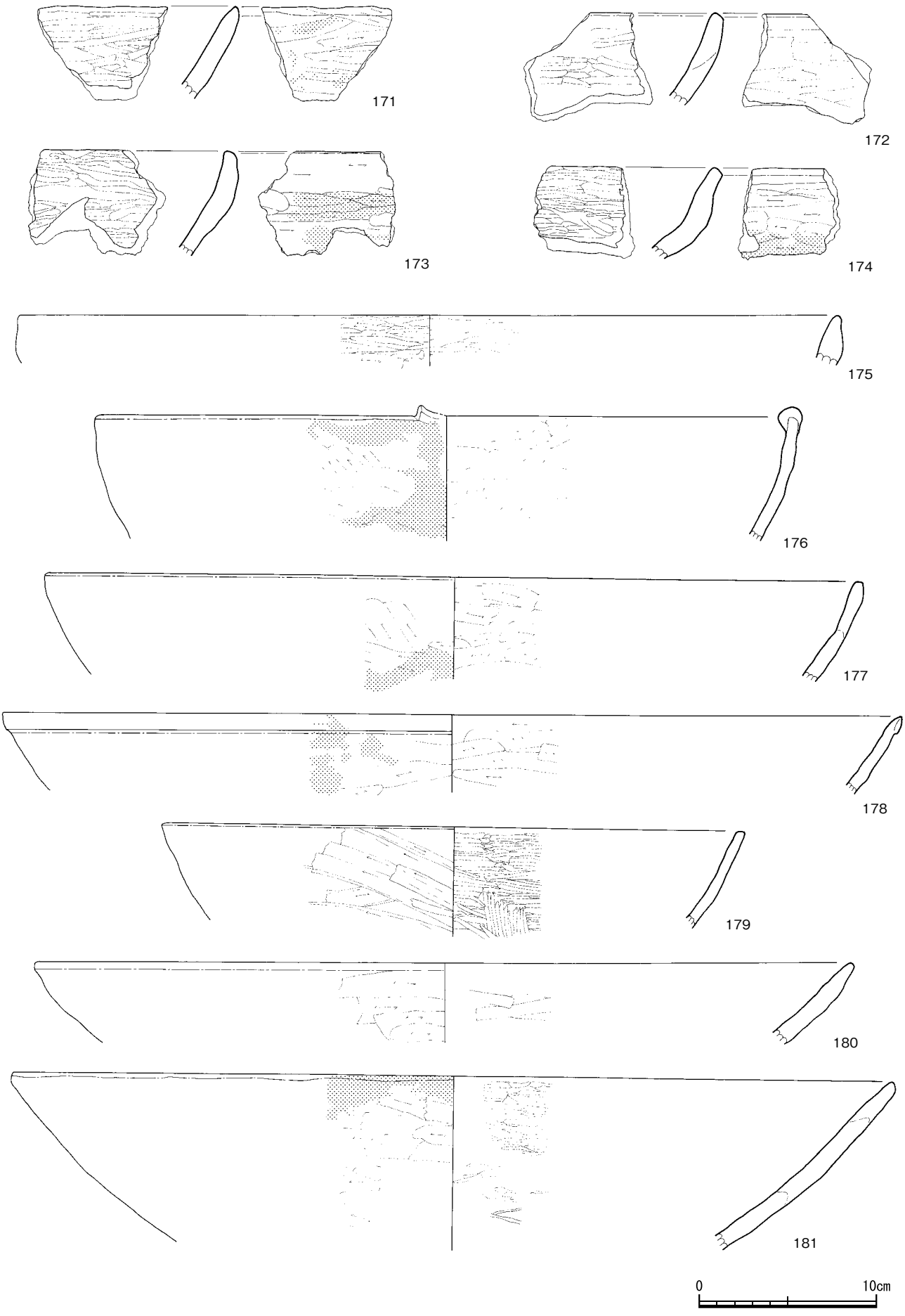
第24図　ＸＩＢ類土器実測図



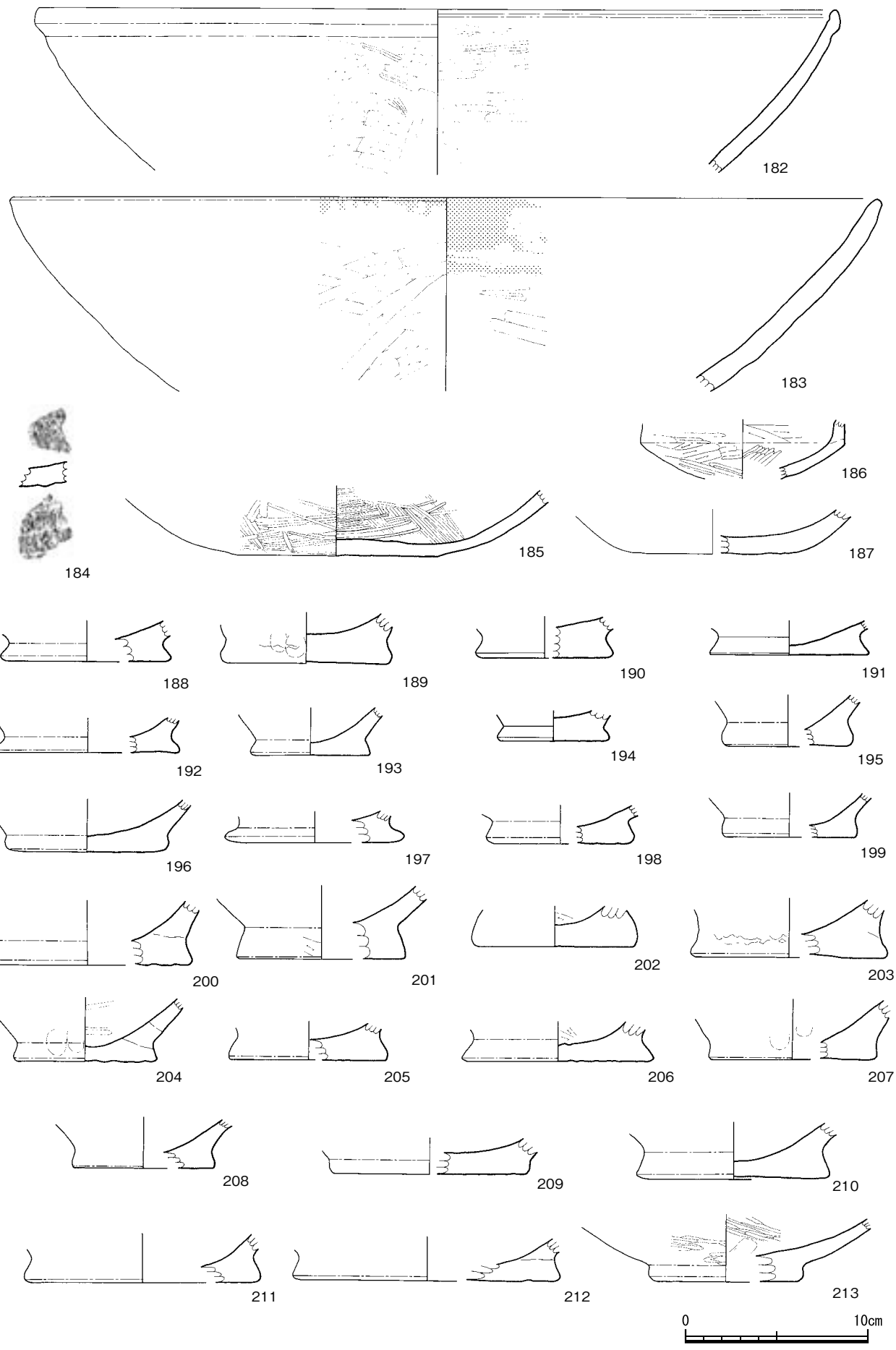
第25図　ＸＩＢ類土器実測図



第26図　ＸＩB，ＸＩC類土器実測図



第27図　ＸＩＣ類土器実測図



第28図　ＸＩＣ，ＸⅡA，ＸⅡB類土器実測図

第８表　ＸＩ類土器観察表(１)

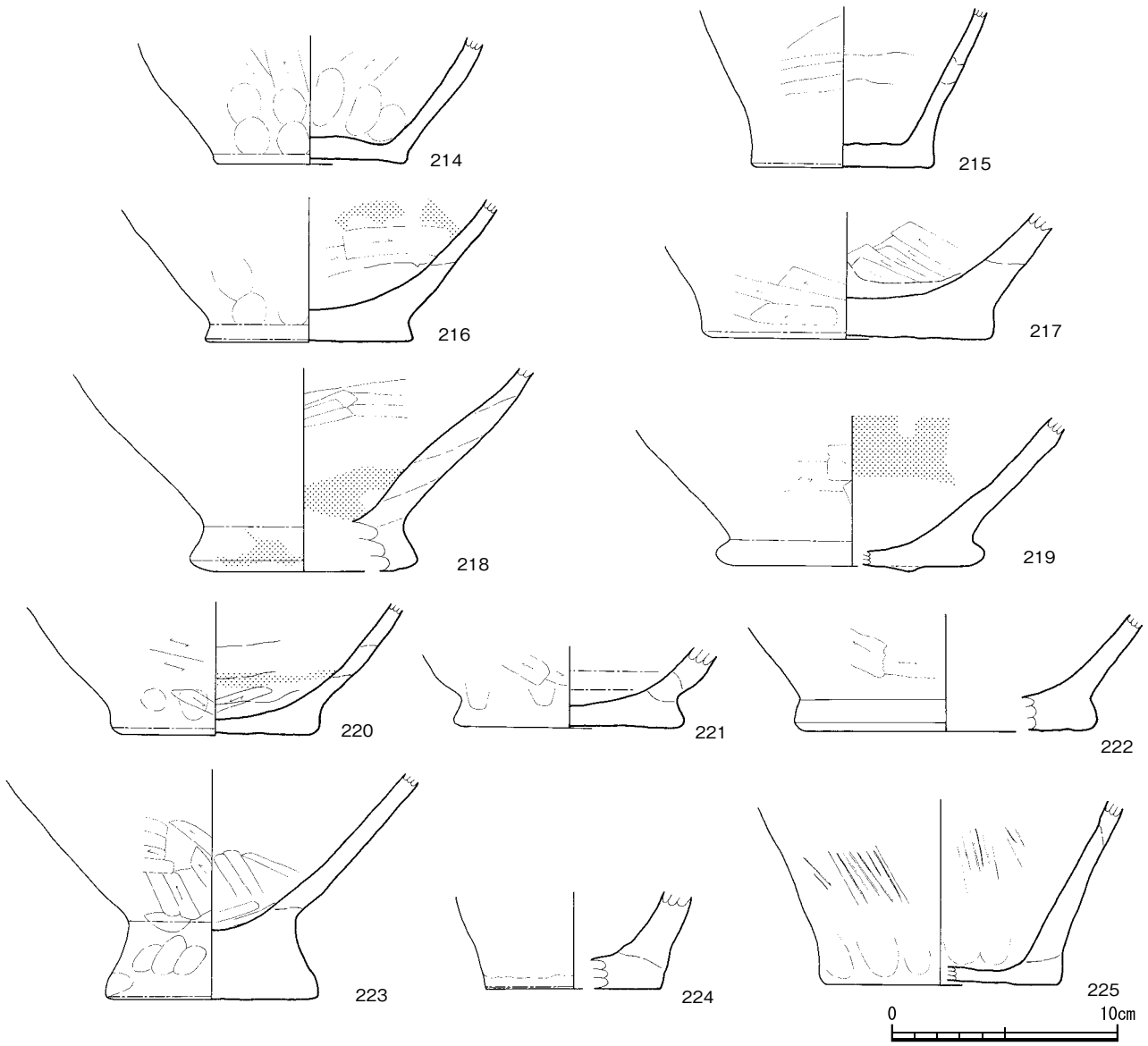
挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
22	98	4841(E-5/Ⅲb)	精緻	良好,堅緻	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y4/1 (黄灰)	ミガキ	ミガキ	-
	99	3678(E-6/Ⅳa)	精緻	良好	2.5Y6/3 (にぶい黄)	2.5Y5/3 (黄褐)	ミガキ	ミガキ	-
	100	4628(C-5/Ⅳa)	精緻,白	良好	10YR3/2 (黒褐)	10YR3/2 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	101	7173(F-4/Ⅳa)	精緻	良好	10YR3/2 (黒褐)	10YR3/2 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	102	6676(E-5/Ⅳa)	精緻,白,石	良好,堅緻	5YR1.7/1 (黒)	2.5Y3/1 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	103	2973(D-8/Ⅳ) 3253(D-8/Ⅳa)	精緻	良好	10YR4/1 (褐灰)	2.5Y3/1 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	104	6033(D-6/Ⅳa)	精緻	良好,堅緻	10YR4/1 (褐灰)	2.5Y3/1 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	105	4139(C-11/Ⅳa)	精緻	良好,堅緻	10YR4/1 (褐灰)	2.5Y3/1 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	106	4840(E-5/Ⅲ)	精緻	良好,堅緻	10YR5/1 (褐灰)	10YR5/2 (灰黄褐)	ミガキ	ミガキ	-
	107	4496(E-7/Ⅳa)	精緻	良好	2.5Y3/2 (黒褐)	2.5Y3/2 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	108	6261(D-12/Ⅳa)	精緻,白	良好	2.5Y6/3 (にぶい黄)	7.5YR2/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
	109	4110(E-11/Ⅳa)	精緻	良好,堅緻	10YR3/2 (黒褐)	10YR3/2 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	110	7045(E-4/Ⅳa)	長,石	良好	2.5Y2/1 (黒)	7.5YR3/2 (黒褐)	丁寧なナデ	ミガキ	-
	111	7066(E-4/Ⅲa)	精緻	良好,堅緻	2.5Y3/2 (黒褐)	2.5Y3/1 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	112	4989(D-5/Ⅳa) 5492(E-7/Ⅲb)	角,石	良好	5YR5/6 (明赤褐)	5YR5/6 (明赤褐)	ミガキ	ミガキ	-
	113	5022(D-5/Ⅳa) 6790(D-5/Ⅳa) 6799(D-5/Ⅳa)	石,長,砂	良好	10YR4/3 (にぶい黄褐)	10YR4/4 (褐)	ミガキ	ミガキ	-
	114	6440(B-13/Ⅳa)	精緻	良好	2.5Y6/1 (黄灰)	10YR3/2 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	115	6460(C-13/Ⅳa)	精緻	良好,堅緻	10YR2/1 (黒)	7.5YR2/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
	116	7162(F-4/Ⅳa) 7165(F-4/Ⅳa)	精緻,石,長	良好	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y6/2 (灰黄)	ナデ	ミガキ	-
23	117	5990(D-6/Ⅳa)	精緻,細赤,白	良好,堅緻	2.5Y6/1 (黄灰)	2.5Y3/1 (黒褐)	ミガキ	ミガキ	-
	118	4157(C-11/Ⅳa)	精緻	良好,堅緻	10YR4/1 (褐灰)	10YR2/1 (黒)	ミガキ	ミガキ	-
	119	6270(C-12/Ⅳa)	精緻,赤	良好,堅緻	5Y4/1 (灰)	2.5Y6/2 (灰黄)	ミガキ	ミガキ	-
	120	4957(D-5/Ⅳa) 5008(D-5/Ⅳa) 6490(D-5/Ⅳa) 一括(--/-)	精緻	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	2.5YR5/8 (明赤褐)	ミガキ	ミガキ	-
	121	4498(E-7/Ⅳa) 6182(E-7/Ⅳa) 一括(--/-)	細砂,長	良好	2.5Y5/3 (黄褐)	10YR3/2 (黒褐)	ナデ	ミガキ	-
	122	5123(C-5/Ⅳa)	精緻,石,長,砂	良好	10YR3/2 (黒褐)	10YR3/1 (黒褐)	ナデ	ナデ	-
	123	4839(E-5/Ⅲb)	石,長	良好	10YR5/1 (褐灰)	10YR4/2 (灰黄褐)	ナデ	ナデ	-
	124	5028(D-5/Ⅳa)	石,角	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	2.5Y2/1 (黒)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	-
	125	3495(D-6/Ⅳa) 3496(D-6/Ⅳa) 3566(D-6/Ⅳa) 6076(C-6/Ⅳa) 一括(--/-)	角,長,石	良好	7.5YR4/4 (褐)	2.5YR4/6 (赤褐)	貝殻条痕	貝殻条痕	-
	126	4654(C-5/Ⅳa)	石,長,角	良好	2.5Y2/1 (黒)	5YR3/3 (暗赤褐)	ナデ	ナデ	-
	127	7006(E-4/Ⅲb)	石,長,角	良好	10YR3/1 (黒褐)	10YR4/1 (褐灰)	ナデ	ナデ	-
	128	3522(C-6/Ⅳa)	石,角	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	ナデ	貝殻条痕	-
	129	6147(E-6/Ⅳa)	長,石	良好	2.5Y3/1 (黒褐)	5YR5/6 (明赤褐)	ナデ	貝殻条痕	-
	130	6987(E-4/Ⅲb)	石	良好	10YR6/2 (灰黄褐)	10YR6/3 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ	-
	131	5265(F-4/Ⅳa) 6955(E-4/Ⅲb) 6956(E-4/Ⅲb) 6965(E-4/Ⅲa)	角,石,砂	良好	5YR6/6 (橙)	5YR5/6 (明赤褐)	ナデ	ナデ	-

第９表　ＸＩ類土器観察表(２)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
24	132	6084(D-7/Ⅳa)	長,角	良好	5Y5/6 (オリーブ)	5YR4/4 (にぶい赤褐)	ナデ	ナデ	-
	133	6853(E-3/Ⅳa)	粗粒,白,石,長,角	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	5YR3/1 (黒褐)	ナデ	ナデ	-
	134	1312(D-10/Ⅲ) 4326(D-11/Ⅳa) 一括(--/-) 一括(--/-)	石,角	良好	10YR5/3 (にぶい黄褐)	5YR4/4 (にぶい赤褐)	ナデ	ナデ	-
	135	3514(C-6/Ⅳa) 6851(E-3/Ⅳa)	石,角	良好	2.5Y7/3 (浅黄)	5Y5/1 (灰)	ナデ	ナデ	-
	136	6900(E-3/Ⅲb)	石,角	良好	10YR3/1 (黒褐)	7.5YR3/1 (黒褐)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	-
	137	6179(E-7/Ⅳa)	角,長,石	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	10YR2/1 (黒)	ナデ	ナデ	-
	138	4620(C-5/Ⅳa) 4994(D-5/Ⅳa) 5072(C-5/Ⅳa)	長,砂	良好	10YR2/1 (黒)	10YR4/2 (灰黄褐)	ナデ	ナデ	-
	139	6083(D-6/Ⅳa) 6667(F-5/Ⅳa) 6687(E-5/Ⅳa) 6710(F-5/Ⅳa)	石,長	良好	2.5Y7/3 (浅黄)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕	-
	140	4868(E-5/Ⅲb) 5245(F-5/Ⅳa) 6664(F-5/Ⅳa) 6668(F-5/Ⅳa) 6671(F-5/Ⅳa) 6672(F-5/Ⅳa) 6673(F-5/Ⅳa) 6674(E-5/Ⅳa) 6678(E-5/Ⅳa) 6685(E-5/Ⅳa) 6692(E-5/Ⅳa) 6709(E-5/Ⅳa) 6711(F-5/Ⅳa)	赤,白,石,角,砂	良好	2.5Y7/3 (浅黄)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕	-
25	141	5042(D-5/Ⅳa)	角,長,石	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	10YR3/3 (暗褐)	ナデ	ナデ	-
	142	3550(D-6/Ⅳa) 5111(D-5/Ⅳa) 6102(D-7/Ⅳa)	石,長	良好	2.5Y3/1 (黒褐)	2.5Y6/2 (灰黄)	ナデ	ナデ	-
	143	695(F-9/Ⅲ) 3733(E-6/Ⅲ)	長,角,白	良好	5YR4/6 (赤褐)	5YR4/6 (赤褐)	ナデ	ナデ	-
	144	3638(D-6/Ⅲ)	石,長	良好	5Y7/3 (浅黄)	2.5Y2/1 (黒)	ミガキ	ナデ	-
	145	5040(D-5/Ⅳa) 6105(D-7/Ⅳa)	精緻,白	良好	5Y2/1 (黒)	5Y5/1 (灰)	ナデ	ナデ	-
	146	6745(D-5/Ⅳa) 6747(D-5/Ⅳa) 6809(D-5/Ⅳa)	精緻,長,石	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR4/4 (褐)	ミガキ	ナデ	-
	147	5116(D-5/Ⅳa)	小礫,角,長,石	良好	7.5YR6/6 (橙)	10YR2/1 (黒)	ナデ	ナデ	-
	148	5997(D-6/Ⅳa) 5998(D-6/Ⅳa) 6134(D-6/Ⅳa) 6135(D-6/Ⅳa)	石,角	良好	10YR7/2 (にぶい黄橙)	10YR3/1 (黒褐)	ミガキ	ナデ	-
	149	3636(D-6/Ⅲ) 3652(D-6/Ⅳa)	角,石	良好	2.5Y7/4 (浅黄)	2.5Y6/3 (にぶい黄)	ナデ	ナデ	-
	150	3642(D-6/Ⅲ) 4693(D-6/Ⅲb) 4709(D-5/Ⅲb) 5051(D-5/Ⅳa) 5999(D-6/Ⅳa)	精緻,白,一部黄橙色の胎土	良好	10YR4/1 (褐灰)	10YR3/1 (黒褐)	ナデ 指頭圧痕	貝殻条痕後ナデ	-
	151	3763(F-6/Ⅲ) 4510(E-6/Ⅳa) 4511(E-6/Ⅳa)	石,長,角	良好	7.5YR7/6 (橙)	10YR2/1 (黒)	貝殻条痕後ナデ	ナデ	-
	152	3707(E-6/Ⅲ) 4013(F-6/Ⅳa) 4512(E-6/Ⅳa) 4518(E-6/Ⅳa) 4520(E-6/Ⅳa)	石,長,角	良好	7.5YR7/6 (橙)	10YR2/1 (黒)	ナデ	ナデ	-
26	153	4517(E-6/Ⅳa)	石,長	良好	2.5Y5/3 (黄褐)	5YR4/2 (灰褐)	ナデ	ナデ	-
	154	3747(F-6/Ⅳa)	石,長,角	良好	10YR4/1 (褐灰)	10YR2/1 (黒)	ナデ	ナデ	-
	155	6053(D-6/Ⅳa)	長	良好	5Y5/2 (灰オリーブ)	5Y4/1 (灰)	ナデ	ナデ	-
	156	4415(C-12/Ⅲb)	白,石	良好	2.5Y5/1 (黄灰)	2.5Y6/2 (灰黄)	ナデ	ナデ	-
	157	3481(D-6/Ⅳa) 5968(D-6/Ⅳa) 5977(D-6/Ⅳa)	石,白	良好,堅緻	2.5Y6/2 (灰黄)	2.5Y6/3 (にぶい黄)	ミガキ	ミガキ	-
	158	6299(C-12/Ⅳa)	角	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR4/2 (灰黄褐)	ナデ	ナデ	-

第10表　ＸＩ類土器観察表(３)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
26	159	4801(E-4/Ⅲb) 4914(D-4/Ⅳa) 5523(E-7/Ⅲa)	砂,石,長	良好	2.5Y7/4 (浅黄)	2.5Y7/4 (浅黄)	ナデ	ナデ	-
	160	7171(F-4/Ⅳa) 7245(F-4/Ⅳa)	角,白	良好	10YR3/1 (黒褐)	10YR5/2 (灰黄褐)	ナデ	ナデ	-
	161	4925(D-4/Ⅳa)	砂,石,長	良好	2.5Y5/3 (黄褐)	2.5Y3/2 (黒褐)	ナデ	ナデ	-
	162	3471(D-6/Ⅳa) 3527(C-6/Ⅳa) 6060(C-6/Ⅳa)	石,長	良好	2.5Y7/3 (浅黄)	2.5Y6/3 (にぶい黄)	ナデ	ナデ	-
	163	6014(D-6/Ⅳa)	石,長,角	良好	2.5Y7/3 (浅黄)	5Y2/1 (黒)	ミガキ	ナデ	-
	164	6791(D-5/Ⅳa) 6802(D-5/Ⅳa) 6807(D-5/Ⅳa)	石,長,角	良好	2.5Y8/4 (淡黄)	2.5Y7/4 (浅黄)	ナデ	ナデ	-
	165	6994(E-4/Ⅳa)	石,長,角	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	7.5YR7/6 (橙)	丁寧なナデ	ナデ	-
	166	4976(D-5/Ⅳa)	精緻,白	良好	2.5Y6/1 (黄灰)	2.5Y5/1 (黄灰)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	-
	167	5216(D-5/Ⅳa)	砂,石,角	良好,堅緻	10YR3/2 (黒褐)	5Y2/1 (黒)	丁寧なナデ	ナデ	-
	168	6175(E-7/Ⅳa)	石,長,角	良好	5Y5/2 (灰オリーブ)	10YR6/2 (灰黄褐)	ミガキ	ナデ	-
	169	3805(F-7/Ⅲ) 6124(D-7/Ⅳa)	石,角,赤	良好,堅緻	10YR3/3 (暗褐)	10YR3/2 (黒褐)	ミガキ	ナデ	-
	170	5107(D-4/Ⅳa)	長,石	良好	10YR5/2 (灰黄褐)	10YR5/3 (にぶい黄褐)	ミガキ	ナデ	-
27	171	4540(E-11/Ⅳa)	角,長,石	良好	5YR3/2 (暗赤褐)	7.5Y2/1 (黒)	ミガキ	ナデ	-
	172	6183(D-7/Ⅳa)	長,石,砂	良好	5Y2/1 (黒)	5Y2/1 (黒)	ミガキ	ナデ	-
	173	5167(D-5/Ⅳa) 6522(E-5/Ⅳa)	赤,白,赤,長	良好	5YR4/3 (にぶい赤褐)	7.5YR5/3 (にぶい褐)	ミガキ	ナデ	-
	174	5220(D-5/Ⅳa)	長,石,赤	良好	5YR4/3 (にぶい赤褐)	7.5YR5/3 (にぶい褐)	ミガキ	ナデ	-
	175	4661(C-5/Ⅳa) 5228(D-5/Ⅳa)	赤,石,長	良好	5YR4/3 (にぶい赤褐)	7.5YR5/3 (にぶい褐)	ミガキ	ナデ	-
	176	5153(D-6/Ⅳa)	精緻,石,角,小礫	良好	2.5Y7/2 (灰黄)	2.5Y7/3 (浅黄)	丁寧なナデ	ナデ	-
	177	3609(D-6/Ⅳa) 6003(D-6/Ⅳa) 6150(E-6/Ⅳa)	角,石,赤	良好,堅緻	2.5Y6/1 (黄灰)	2.5Y7/3 (浅黄)	丁寧なナデ	ナデ	-
	178	3545(D-6/Ⅳa)	砂,長,石	良好	10YR5/4 (にぶい黄褐)	10YR4/2 (灰黄褐)	ナデ	ナデ	-
	179	3711(E-6/Ⅳa) 3715(E-6/Ⅳa) 3753(F-6/Ⅳa) 3900(F-7/Ⅳa) 4513(E-6/Ⅳa) 4515(E-6/Ⅳa)	黒雲	良好	5YR4/6 (赤褐)	5YR6/8 (橙)	ミガキ	ナデ	-
	180	5114(D-5/Ⅳa) 6024(D-6/Ⅳa)	石,長,角	良好	2.5Y6/3 (にぶい黄)	2.5Y6/2 (灰黄)	丁寧なナデ	ナデ	-
	181	1270(D-10/Ⅲ)	角,白	良好,堅緻	7.5YR5/4 (にぶい褐)	10YR5/3 (にぶい黄褐)	ミガキ	ナデ	-
28	182	6941(F-4/Ⅳa) 6942(F-4/Ⅳa) 7144(F-4/Ⅲb)	小礫,角,石	良好	5YR5/6 (明赤褐)	5YR6/6 (橙)	ミガキ	丁寧なナデ	-
	183	4613(C-5/Ⅳa) 4614(C-5/Ⅳa)	小礫,長,石	良好	2.5Y4/1 (黄灰)	2.5Y6/2 (灰黄)	ミガキ	ナデ	-
	184	6749(D-5/Ⅳa)	長,石	良好	2.5Y6/3 (にぶい黄)	2.5Y3/2 (黒褐)	丁寧なナデ	組織痕	-



第29図　ＸⅡB類土器実測図

第11表　ＸⅡ類土器観察表(１)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
28	185	4769(D-5/Ⅲb) 5029(D-5/Ⅳa) 5050(D-5/Ⅳa)	石,角,赤	良好	2.5Y5/2 (暗灰黄)	7.5YR5/3 (にぶい褐)	ミガキ	ミガキ	-
	186	6925(F-4/Ⅲb)	精緻,砂	良好	2.5YR6/8 (橙)	2.5YR5/8 (明赤褐)	ミガキ	ミガキ	-
	187	4795(E-4/Ⅲb) 4903(E-4/Ⅳa)	石,長,角	良好	7.5YR5/2 (灰褐)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	ミガキ	丁寧なナデ	-
	188	2841(E-9/Ⅳ)	角,長,石	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	5YR7/8 (橙)	丁寧なナデ	ナデ	-
	189	6856(E-3/Ⅲb)	角,長,石	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	2.5Y5/3 (黄褐)	ナデ	ナデ	-
	190	6258(C-11/Ⅲb)	石,長,角	良好	7.5YR5/4 (にぶい褐)	2.5YR5/8 (明赤褐)	ナデ	ナデ	-
	191	5917(B-12/Ⅲb) 6285(B-12/Ⅳa)	角,長,石	良好	5YR6/6 (橙)	5YR7/6 (橙)	ミガキ	ナデ	-
	192	4691(C-6/Ⅳa)	石,角	良好	7.5YR4/2 (灰褐)	5YR6/6 (橙)	ナデ	ナデ	-
	193	6643(F-4/Ⅳa)	石,長	良好	10YR2/2 (黒褐)	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデ	ナデ	-
	194	5129(D-5/Ⅳa)	精緻,角	良好	10YR5/1 (褐灰)	5YR6/6 (橙)	ナデ	ナデ	-
	195	4864(E-4/Ⅲb) 6954(E-4/Ⅲb)	角,長,石	良好	7.5YR7/6 (橙)	5YR6/8 (橙)	ナデ	ナデ	-

第12表　ＸⅡ類土器観察表(２)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考
28	196	4542(E-11/Ⅳa)	石,長	良好	2.5Y5/2 (暗灰黄)	2.5Y6/3 (にぶい黄)	ナデ	ナデ	-
	197	5300(F-4/Ⅳa)	角	良好	7.5YR5/3 (にぶい褐)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ	-
	198	6451(C-13/Ⅳa)	石,長	良好	10YR3/1 (黒褐)	10YR6/3 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ	-
	199	4200(C-11/Ⅳa)	角	良好	10YR3/1 (黒褐)	10YR3/2 (黒褐)	ナデ	ナデ	-
	200	5348(E-4/Ⅳa)	角,石	良好	7.5YR4/1 (褐灰)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデ	ナデ	-
	201	4102(F-11/Ⅳa)	石,長	良好	2.5Y8/3 (淡黄)	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデ	ナデ	-
	202	6040(D-6/Ⅳa)	角,長,石	良好	5YR4/6 (赤褐)	2.5YR4/4 (にぶい赤褐)	ナデ	ナデ	-
	203	5303(F-4/Ⅳa) 5305(F-4/Ⅳa) 6026(D-6/Ⅳa) 6717(F-4/Ⅳa)	砂,角,長,石	良好	2.5Y6/2 (灰黄)	7.5YR7/6 (橙)	ナデ	ナデ	-
	204	6970(E-4/Ⅲb)	角,長,石	良好	10YR2/1 (黒)	10YR8/4 (浅黄橙)	ミガキ	ナデ	-
	205	4899(E-4/Ⅳa)	長,雲	良好	N3/ (暗灰)	5Y6/8 (オリーブ)	ナデ	ナデ	-
	206	4936(D-4/Ⅳa) 5187(D-5/Ⅳa)	石	良好	7.5YR4/1 (褐灰)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	丁寧なナデ	ナデ	-
	207	6927(F-4/Ⅲb)	角	良好	2.5Y8/3 (淡黄)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	ナデ	ナデ	-
	208	7055(E-4/Ⅳa)	角,長,石	良好	2.5Y7/2 (灰黄)	5YR7/6 (橙)	ナデ	ナデ	-
	209	4610(C-5/Ⅳa)	石,長	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	ナデ	ナデ	-
	210	7004(E-4/Ⅲa) 一括(--/-)	角,石,長,小礫	良好	2.5Y7/3 (浅黄)	10YR7/6 (明黄褐)	ナデ	ナデ	-
	211	2987(E-8/Ⅲb)	石,角	良好	2.5Y7/2 (灰黄)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデ	ナデ	-
	212	7200(F-4/Ⅳa)	小礫	良好	2.5Y8/2 (灰白)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ	-
	213	6738(D-5/Ⅳa)	長,石	良好	2.5Y7/1 (灰白)	5YR7/6 (橙)	ミガキ	ミガキ	-
29	214	1922(D-9/Ⅳ) 3060(D-9/Ⅳ)	石,長	良好	10YR4/2 (灰黄褐)	5YR5/6 (明赤褐)	貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	-
	215	4941(E-4/Ⅳa) 4944(D-4/Ⅳa) 5103(C-4/Ⅳa) 5128(D-5/Ⅳa)	角,長,石	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	5YR5/4 (にぶい赤褐)	ナデ	貝殻条痕後ナデ	-
	216	10091(F-4/Ⅳa)	石,角	良好	2.5Y7/2 (灰黄)	2.5Y7/3 (浅黄)	ナデ	ナデ	-
	217	4509(E-6/Ⅳa) 4808(E-4/Ⅲ) 4820(E-5/Ⅲb) 6689(E-5/Ⅳa)	小礫,石,長,砂	良好	2.5Y7/3 (浅黄)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデ	ナデ	-
	218	4003(E-7/Ⅳa)	赤,石,角	良好	10YR8/6 (黄橙)	7.5YR7/6 (橙)	ナデ	ナデ	-
	219	6444(B-13/Ⅳa)	長,角	良好	2.5Y8/3 (淡黄)	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデ	ナデ	-
	220	4004(E-7/Ⅳa) 6163(E-7/Ⅳa)	石,長	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	5Y5/6 (オリーブ)	ナデ	ナデ	-
	221	6975(E-4/Ⅳa)	石,長	良好	2.5Y6/2 (灰黄)	2.5YR5/6 (明赤褐)	ナデ	ナデ	-
	222	6079(C-7/Ⅳa) 6087(D-7/Ⅳa)	赤,長,角	良好	2.5Y5/2 (暗灰黄)	2.5Y8/4 (淡黄)	ナデ	貝殻条痕後ナデ	-
	223	4147(C-11/Ⅳa) 4163(C-11/Ⅳa) 4164(C-11/Ⅳa)	長,石,角	良好	2.5Y7/2 (灰黄)	2.5YR6/6 (橙)	ナデ	ナデ	-
	224	1885(D-9/Ⅳ) 2938(D-9/Ⅳ) 3064(D-10/Ⅳ)	砂	良好	2.5Y5/3 (黄褐)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	ナデ	ナデ	-
	225	3056(F-9/Ⅳ)	角,長,石	良好	5YR6/6 (橙)	2.5YR5/6 (明赤褐)	ナデ	ナデ	-

4　縄文時代の石器

縄文時代の石器は，縄文時代早期(Ⅶ，Ⅷ層)で91点，縄文時代晩期(Ⅲ，Ⅳ層)で844点の合計935点が出土している。

(1)縄文時代早期(第30図)

Ⅶ，Ⅷ層から出土した石器で，石鏃２点，削器１，磨石４点，石皿３点を掲載した。出土位置等に特定の傾向は見出せない。

石鏃(第31図)

小型の正三角形鏃227と深い抉りをもつ二等辺三角形鏃226で，黒曜石，チャートを用いる。

削器(第31図)

228はチャート石材の扁平な横長剥片を用い，全周に入念な刃部加工が認められる。

磨石・敲石(第31図)

４点とも磨石，敲石の両機能を備えている。

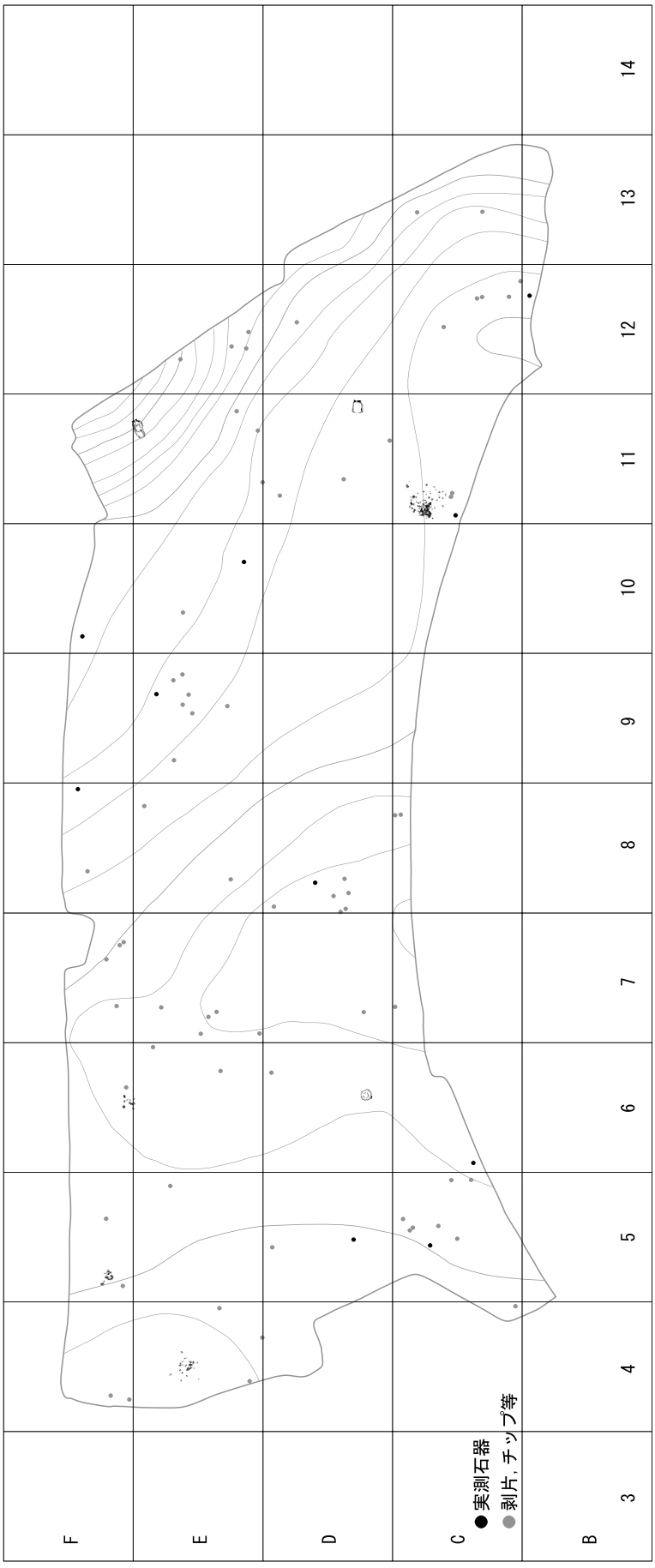
231の両面は平滑に摩耗し，側面は敲石痕が著しい。232も同様の使用がみられる。

229と230は主に磨石に機能の主眼が置かれるが，敲打痕跡も認められる。

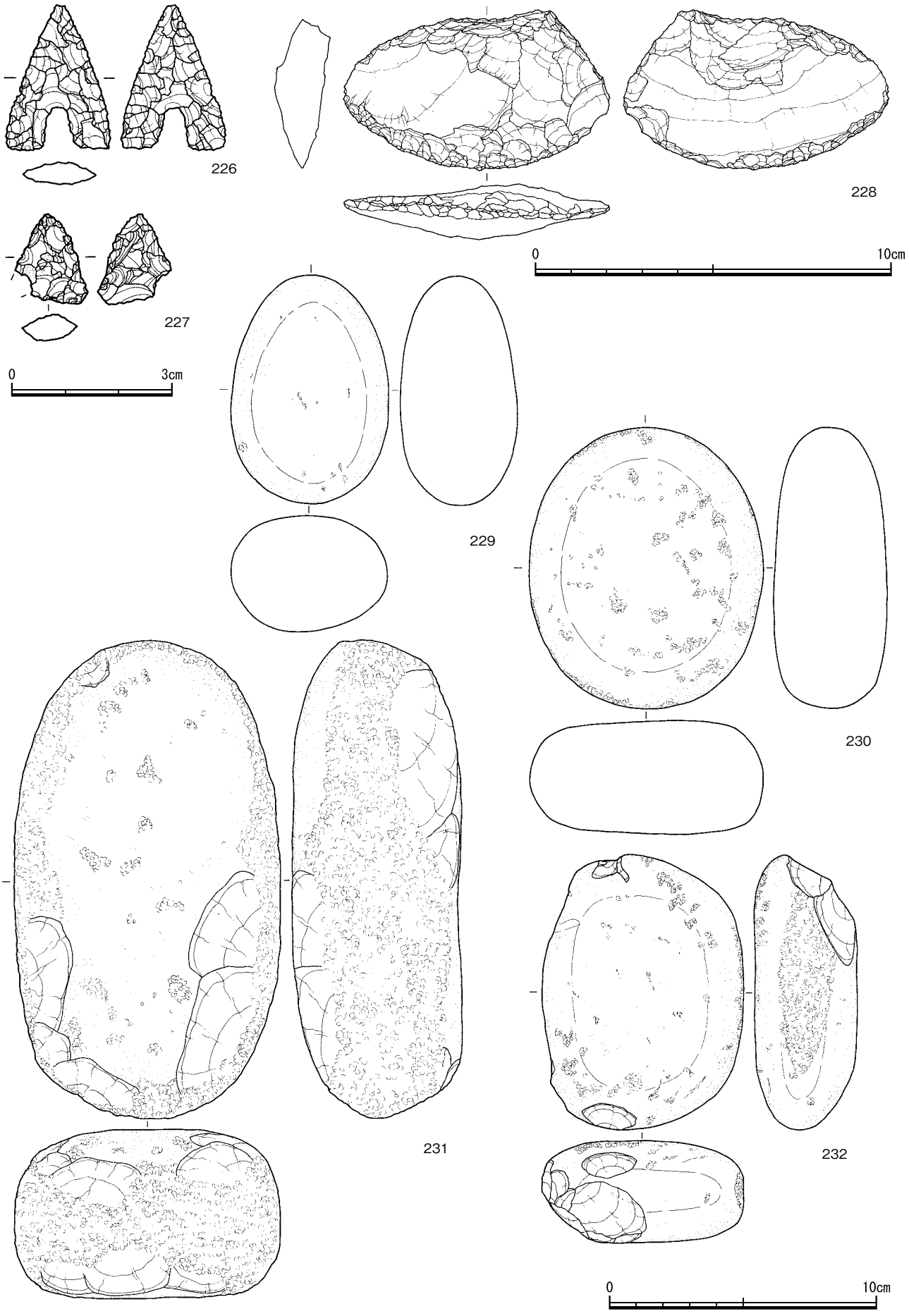
石皿(第32図)

233は扁平な板状の角礫を使用し，両面に使用の痕跡がみられる。234は４分の１程の欠損品で，底面はやや丸みを呈している。

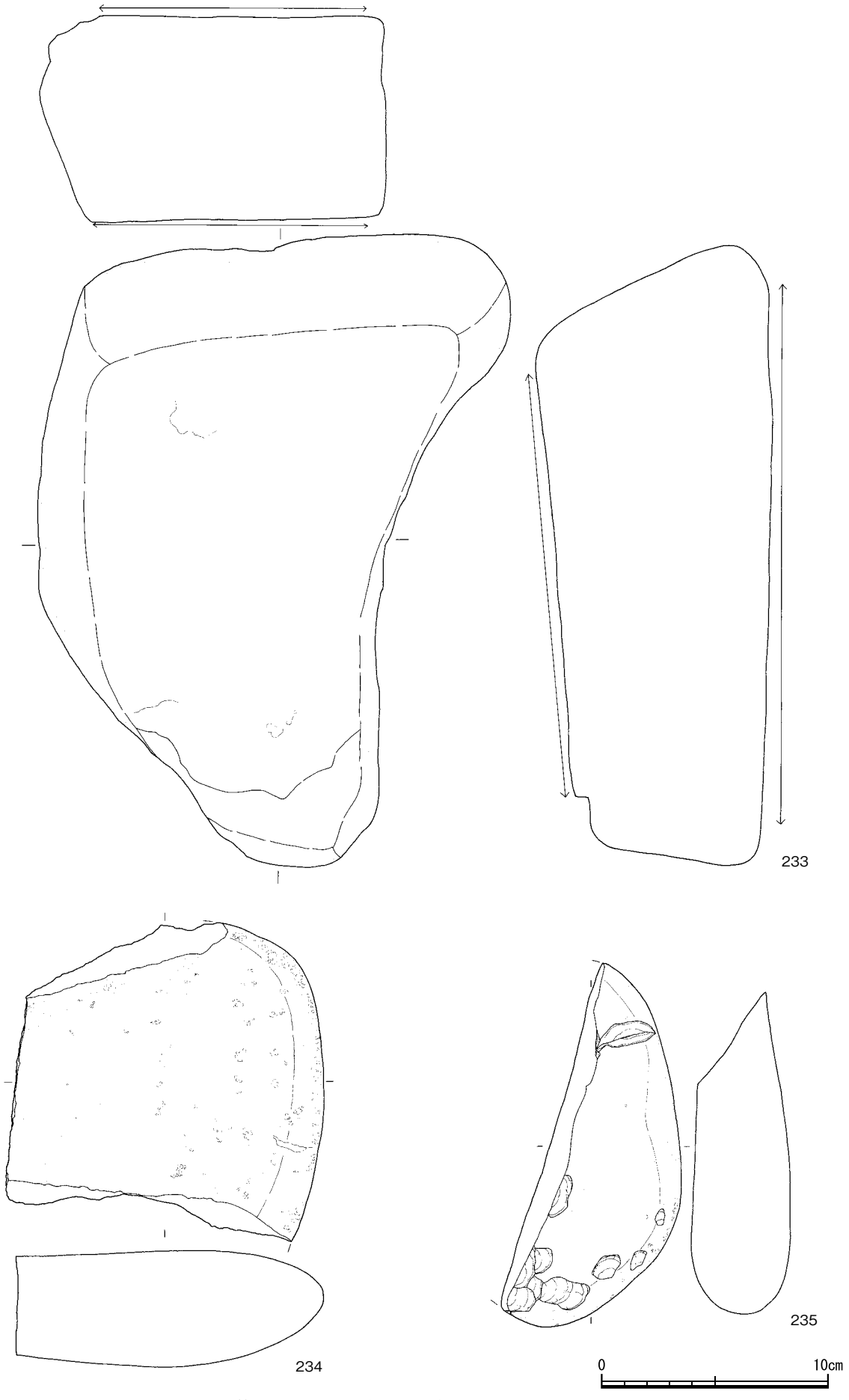
235は小型で砥石の可能性もある。



第30図　縄文早期石器出土状況(1/500)



第31図　縄文早期出土遺物実測図(スクレイパー・石鏃・磨石)



第32図　縄文早期出土遺物実測図(石皿)

第13表　縄文時代早期石器観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	器種	石材L1	石材L2	石材L3	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
31	226	4561(D-/Ⅷ//Ⅷ)	石鏃	CH	2	-	27.00	19.00	4.00	1.53
	227	6474(C-5//Ⅶ)	石鏃	OB	3	-	16.00	(13.50)	5.00	(0.78)
	228	3107(E-9//Ⅶ)	スクレイパー	CH	3	-	75.00	45.00	14.00	45.72
	229	7076(D-5//Ⅷ)	磨石	SS	-	-	86.00	59.00	43.00	315.00
	230	3268(F-/Ⅷ//Ⅶ)	磨石	SS	-	-	105.00	87.50	42.00	540.00
	231	3100(E-10//Ⅶ)	磨石	SS	-	-	173.00	100.00	62.00	1700.00
	232	6480(C-6//Ⅶ)	磨石/敲石	SS	-	-	103.00	(76.00)	38.00	(440.00)
32	233	4583(C-11//Ⅶ)	石皿	SS	-	-	280.00	194.00	95.00	-
	234	3103(F-10//Ⅶ)	石皿	SS	-	-	(133.00)	(128.00)	50.00	(1400.00)
	235	4586(B-12//Ⅷ)	石皿	SS	-	-	(163.00)	(80.00)	43.50	(575.00)

(２)縄文時代晩期(第33図)

Ⅲ，Ⅳ層から出土した石器で，本報告書では110点を掲載している。出土地点としては，全体的に広がっているが，Ｅ,Ｆ-３,４区付近にはチップ剥片を中心にやや集中する傾向にある。

石鏃(第34図)

Ⅲ層から18点，Ⅳ層から41点の合計59点出土している。形態もいくつかに分けられるため，類別に報告する。

Ⅰ類(第34図，No236～243)

長幅比が大方１：１の三角形鏃で，浅い抉りをもつものと平基が認められる。243は大型と解される。237,242は素材面を多く残し，周辺に細かい調整剥離を加えている。239は未製品の可能性もある。

Ⅱ類(第34図，No244～261)

長身鏃あるいは二等辺三角形鏃と呼ぶもので，基部は平基と抉りが施されるものがある。248で長幅比１：1.5で，259で１：２，他は１：1.5以内に納まる。また，246,247,255,259は大型と区分できる。

Ⅲ類(第34,35図，No263～288)

両側縁の一角が張り出すいわゆる五角形で，平基の基部と抉りを施すものがあり，長身なものもある。

282は上位に，284は下位に側縁の屈曲がつく。

274,275,277等は長身で，屈曲部は突起状を成し，抉りは深く，側縁も明確に仕上げている。279,280は小型で，突起は明確である。

Ⅳ類(第34図，No262)

先端部を残す磨製石鏃で，薄く丁寧に磨かれる。使用石材は，粘板岩とみられる。

その他(第35図，No289～294)

未製品と判断したものを一括して取り扱った。

292～294は断面が厚く残ることから，未製品とみられる。

ドリル(第36図，No295～297)

先端部が凸状をなす一群で，体部も意図的に厚く作り出したものを取り扱った。

抉入石器(第37図，No298～301)

抉入石器については，石器周縁の一部に二次加工によって抉りが作り出されているものとした。

299は平坦面に対し，左右両側の明瞭な抉りと下方に浅い抉りが確認できる。298は，抉りとしては２か所確認されるが，明瞭な抉りの作出までは至っていない。300は，両側縁に抉りが確認される。301は先端部両面と右側縁が抉られるが，石鏃の未製品あるいはドリルの欠損品の可能性もある。

楔形石器(第37図，No302～304)

上面の二次剥離の打撃角が垂直に近く，下端部に微細剥離痕が観察される。

304は水晶の結晶体をそのまま楔形石器に利用している。302と303は形状，二次加工から判断した。

削器(第37図，No305,306)

素材剥片の側縁に連続した調整を行い，刃部を作り出したもので，扁平な横長剥片を選択している。

305は，片刃で削器状の機能をもっている。306は，両面から交互に刃部の作出がみられるが，刃部は弯曲し，上端には整形加工が認められる。

石匙(第37図，No307～309)

３点の石匙が出土し，いずれも刃部は入念に作り出されている。

307は横長，308は縦長剥片，309は横広の剥片を素材とし，素材剥離面を大きく残して刃部を作出している。307は両面から刃部作出を行い，摘みも明確に作り出しているが，素材面を全域に剥離が及ぶことはない。308では，摘み部の作り出しは形骸化している。309も308に近い。

石斧(第38図，No310～320)

320以外は破損品で，11点出土している。

311～314を打製，310,316,320を部分磨製，315,317～319を磨製の石斧とした。

320の部分磨製石斧は片面の自然面を活かし，素材の周縁部を加工している。

312はホルンフェルスを用い，315の側縁部は敲打により丁

寧に作り出される。

石製垂飾品(第39図，No321,322)

蛇紋岩を使用した垂飾品が２点出土している。

321は，中央部に溝状の痕跡がみられ，管玉の破損品を再加工した垂飾品と推測される。体長は1.4cm，穿たれた孔は溝の関係で多少歪んではいるが2mm程である。

322は，体長1cmの小型の勾玉で，一方向から穿孔され，穿たれた穴の形状は直径2mmの正円を呈している。

石錘(第39図，No323)

楕円形の頁岩の長軸方向に鋭い切れ込みを入れた石錘で，左右対称に加工している。

ハンマーストーン(第40図，No324～328)

敲打痕の位置や形状からハンマーストーンと判断したもので，側縁に使用痕が残される。いずれも小型の円礫を選択している。

磨石・敲石(第41図，No329～336)

両面に摩耗面，側縁部に敲打痕を残し，全てが磨石と敲石の両方の機能を兼ね備えていたとみられる。

329以外の両面は，扁平でその使用頻度の高さを示している。

微細剥離痕の有る剥片(第42図，No337,338)

剥片の一角に微細な刃こぼれ状の剥離痕をもつもので，使用痕のある剥片とほぼ同意である。

二次加工剥片(第42図，No339)

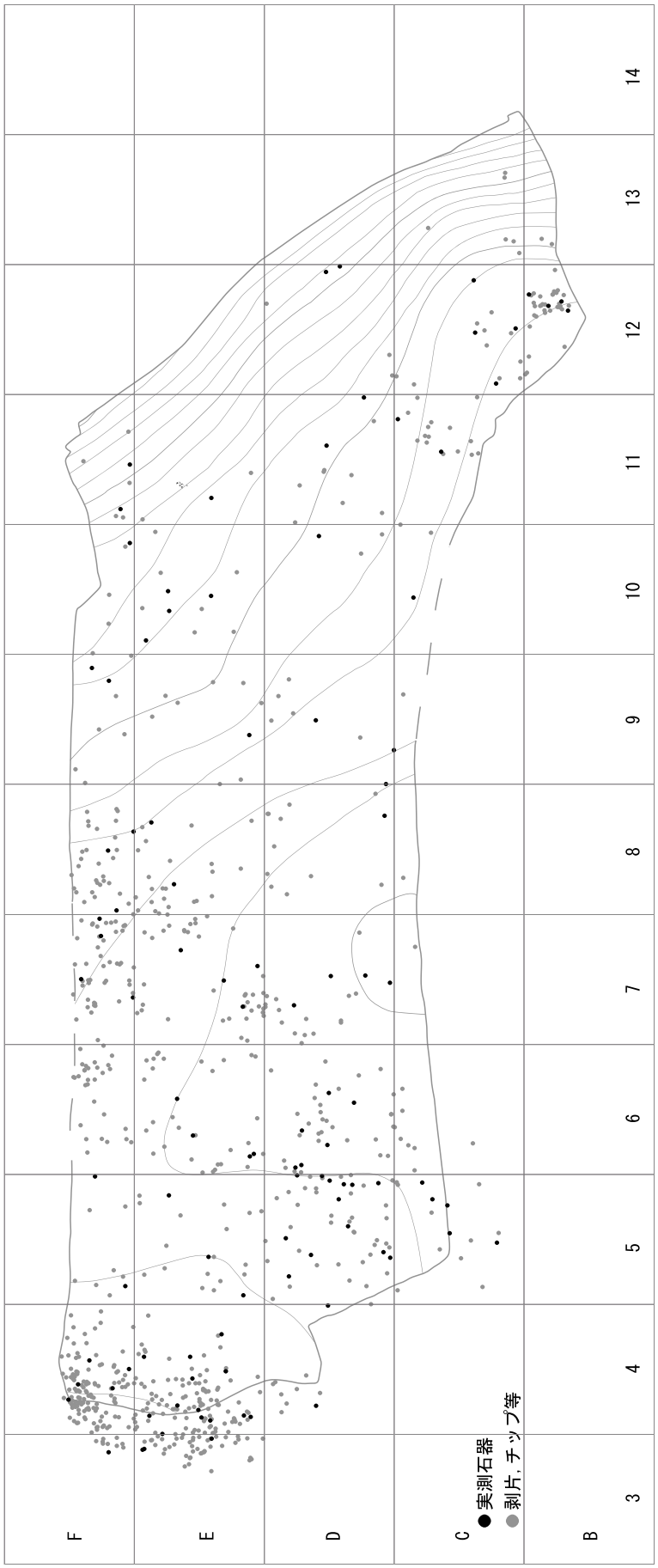
剥片の一部に二次加工の痕跡を確認できるもので，石材はチャートである。

石核(第42図，No340)

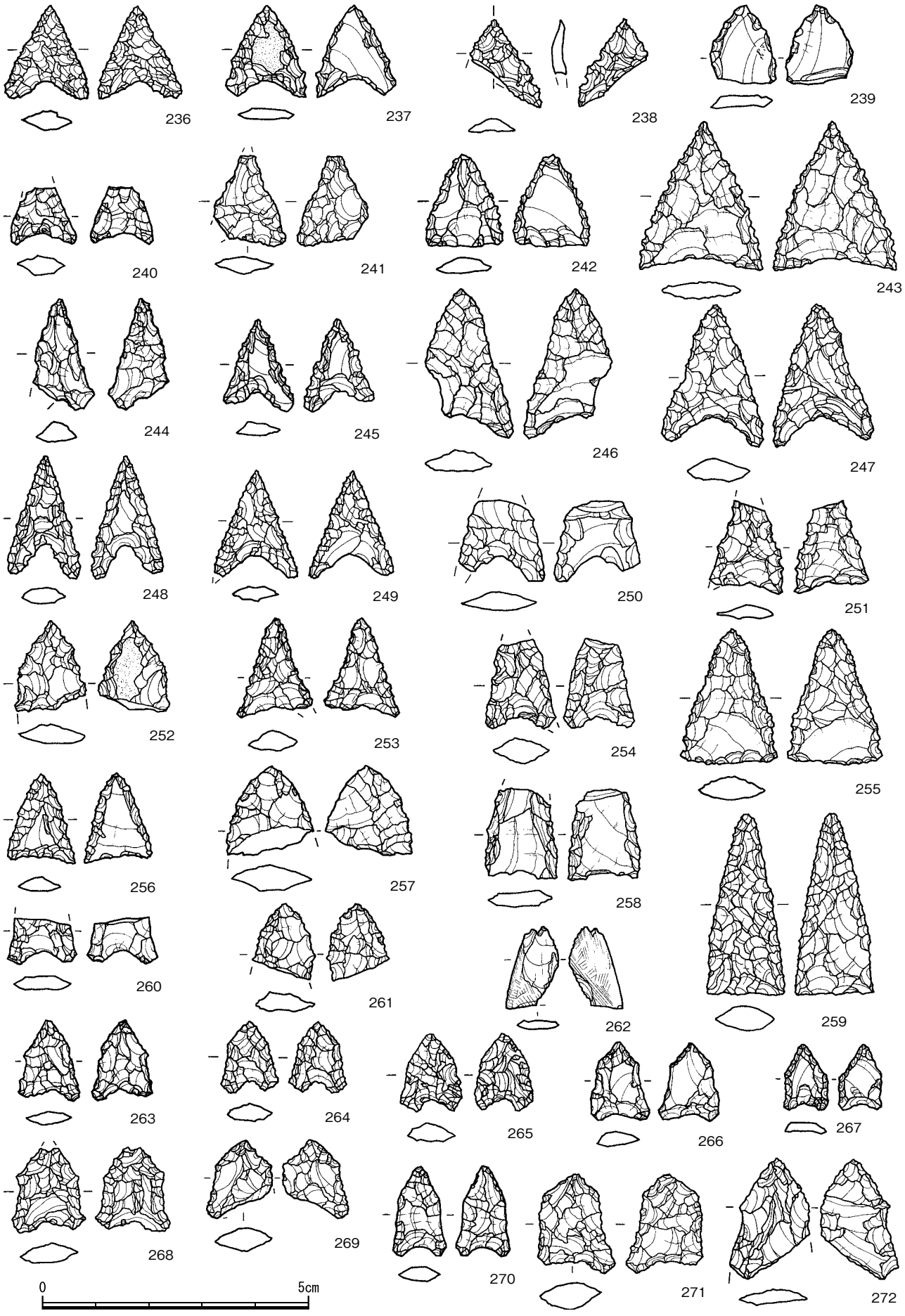
上下に打撃面をもついわゆる両極石核である。衝撃を受けた跡が階段状剥離になっていることも観察される。

剥片(第42,43図，No341,342)

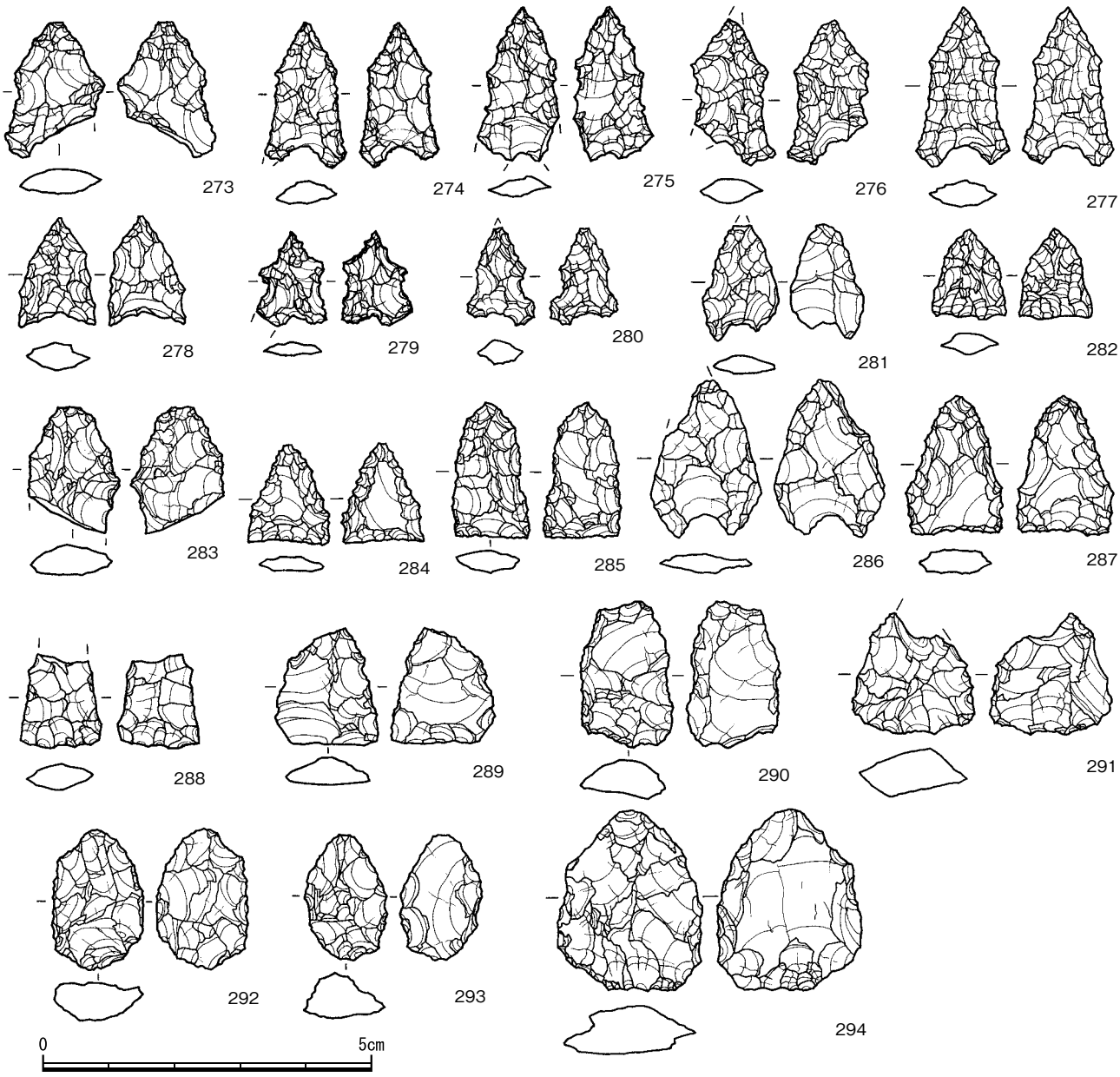
多数出土したが，大型の代表的なものを２点掲載した。材質はホルンフェルスと頁岩である。



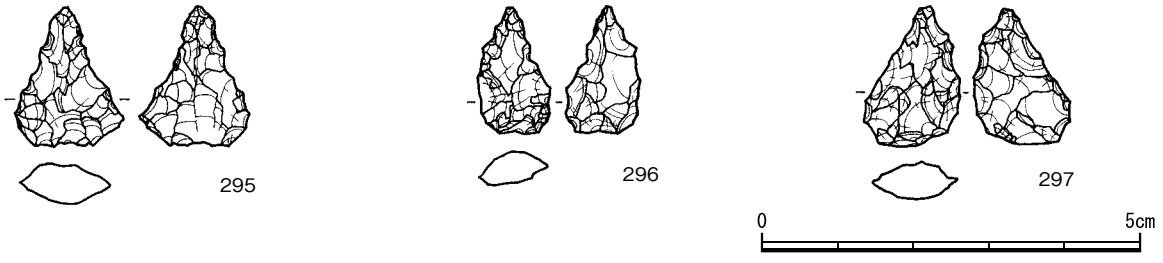
第33図　縄文晩期石器出土状況(1/500)



第34図　縄文晩期出土遺物実測図(石鏃１)



第35図　縄文晩期出土遺物実測図(石鏃２)



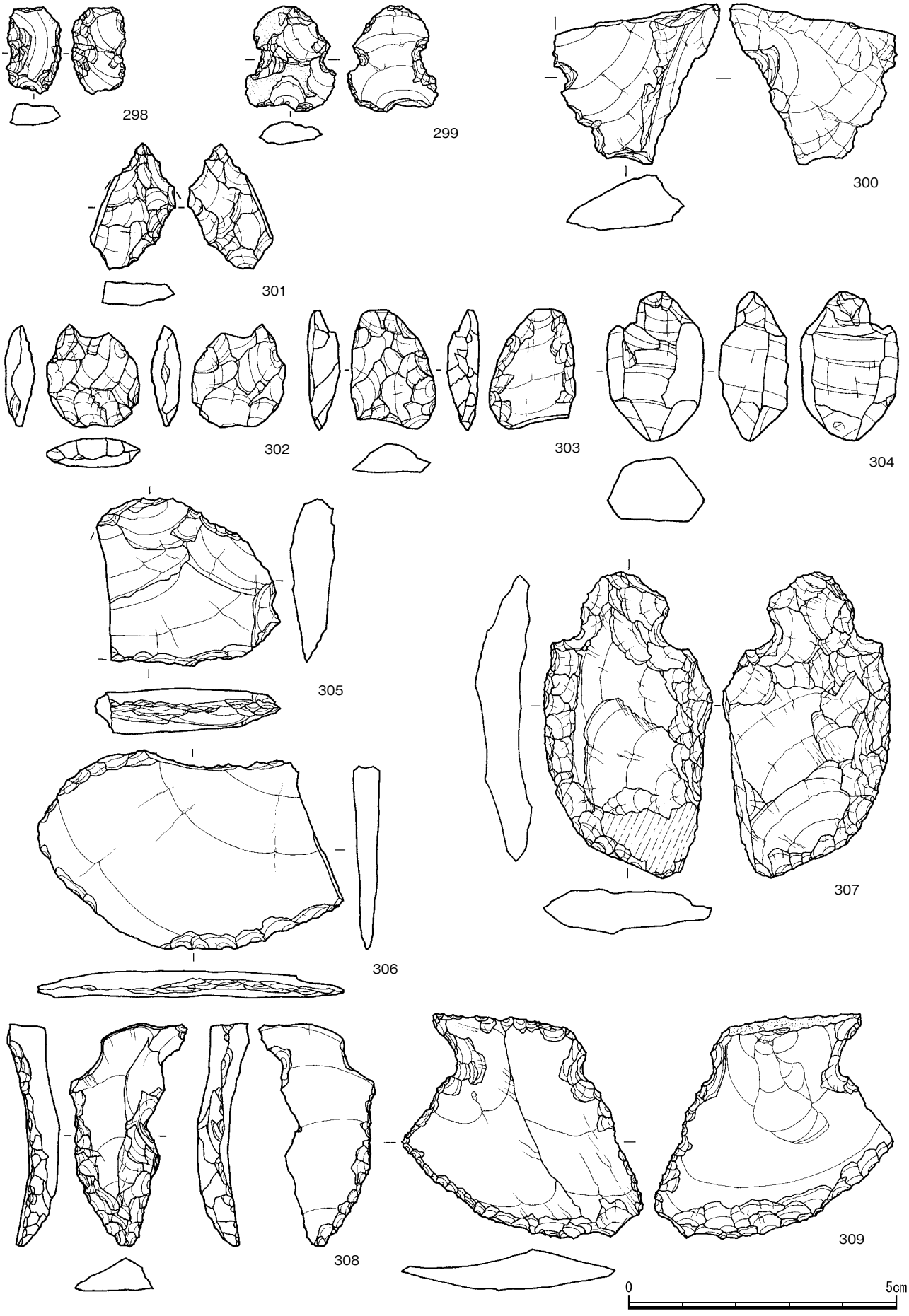
第36図　縄文晩期出土遺物実測図(石錐)

第14表　縄文時代晩期石器観察表(１)

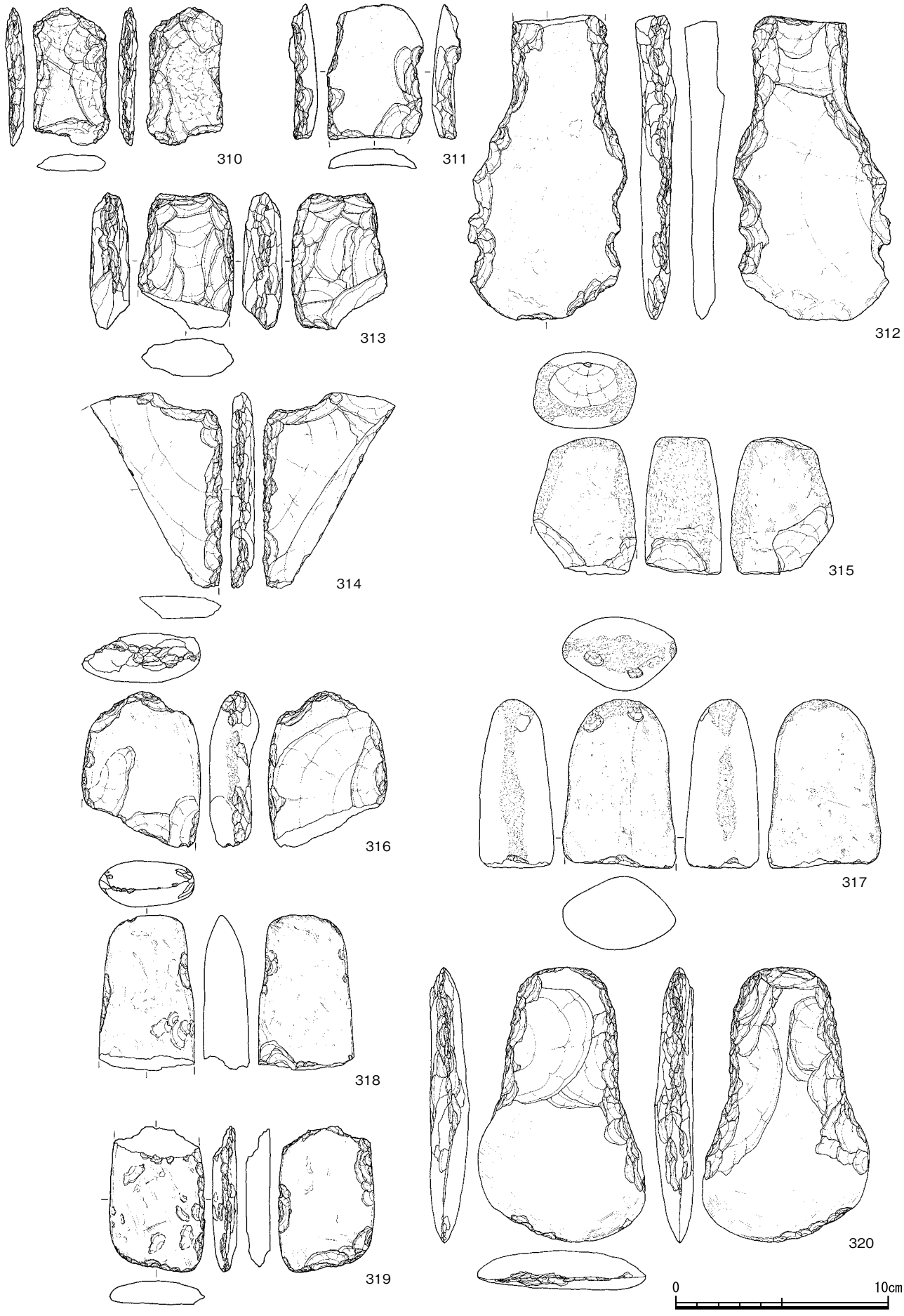
挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	器種	石材L1	石材L2	石材L3	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
34	236	5331(E-4/Ⅳa)	石鏃	OB	4	-	18.00	16.00	3.00	0.51
	237	5772(D-12/Ⅲa)	石鏃	SH	-	-	18.00	(15.00)	2.00	(0.44)
	238	6635(F-4/Ⅳa)	石鏃	CH	2	-	18.00	(9.00)	3.00	(0.29)
	239	6207(C-12/Ⅳa)	石鏃	CH	3	-	(15.00)	(12.00)	3.00	(0.62)
	240	2909(D-9/Ⅳ)	石鏃	OB	1	-	(11.00)	13.00	4.00	(0.40)

第15表　縄文時代晩期石器観察表(２)

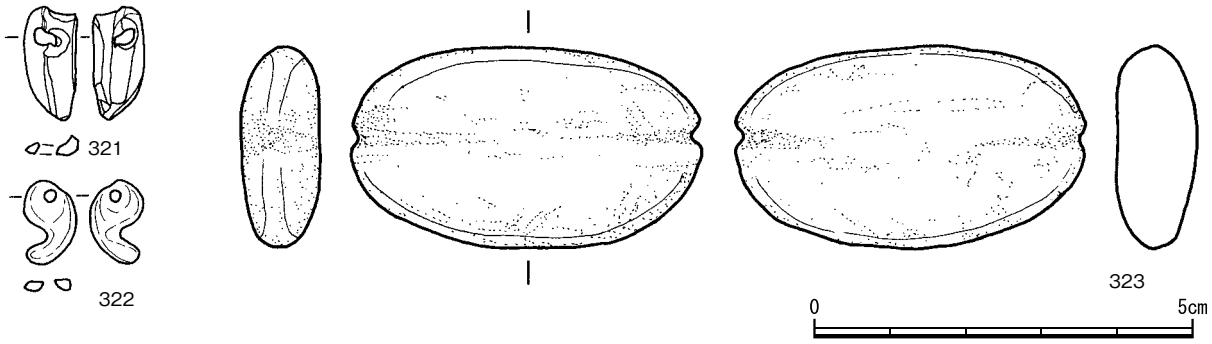
挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	器種	石材L1	石材L2	石材L3	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
34	241	4266(F-11/Ⅲ)	石鏃	SH	-	-	(17.00)	(14.00)	(3.00)	(0.69)
	242	一括(-)	石鏃	SH	-	-	17.00	14.00	4.00	0.68
	243	1915(C-9/Ⅳ)	石鏃	AN	-	-	29.00	22.00	3.00	1.67
	244	6862(E-3/Ⅲb)	石鏃	CH	2	-	21.00	(11.00)	5.00	(0.75)
	245	6089(D-/Ⅶ/Ⅳa)	石鏃	CH	2	-	17.00	13.00	3.00	0.38
	246	5851(C-12/Ⅲa)	石鏃	CC	-	-	29.00	(13.00)	4.00	(1.42)
	247	4827(E-5/Ⅲ)	石鏃	SH	-	-	26.00	19.00	4.00	1.39
	248	2768(E-10/Ⅳ)	石鏃	SH	-	-	22.00	14.00	3.00	0.66
	249	4554(D-9/Ⅳa)	石鏃	AN	-	-	20.00	16.00	3.00	0.49
	250	5773(D-12/Ⅲa)	石鏃	SH	-	-	(15.00)	(17.00)	3.00	(0.52)
	251	2457(F-/Ⅷ/Ⅲ)	石鏃	SH	-	-	(17.00)	14.00	3.00	(0.76)
	252	6611(F-4/Ⅳa)	石鏃	SH	-	-	(17.00)	(14.00)	4.00	(0.75)
	253	4763(D-6/Ⅳb)	石鏃	CC	-	-	19.00	14.00	4.00	0.63
	254	7012(E-4/Ⅲb)	石鏃	CH	1	-	(17.00)	13.00	5.00	(0.86)
	255	4344(C-11/Ⅲb)	石鏃	AN	-	-	25.00	18.00	4.00	1.46
	256	5004(D-5/Ⅳa)	石鏃	AN	-	-	17.00	13.00	3.00	0.49
	257	6217(C-12/Ⅳa)	石鏃	CH	3	-	(17.00)	(16.00)	6.00	(1.07)
	258	4796(E-4/Ⅲ)	石鏃	SH	-	-	(17.00)	14.00	4.00	(0.87)
	259	4317(E-11/Ⅳa)	石鏃	CH	3	-	34.00	15.00	5.00	2.17
	260	6355(B-12/Ⅳa)	石鏃	CH	2	-	(9.00)	13.00	3.00	(0.32)
	261	6989(E-4/Ⅲb)	石鏃	CH	2	-	(14.00)	(11.00)	4.00	(0.55)
	262	3985(E-/Ⅶ/Ⅳa)	磨製石鏃	SH	-	-	(16.00)	(11.00)	2.00	(0.27)
	263	7190(F-4/Ⅳa)	石鏃	CH	3	-	15.00	11.00	3.00	0.40
	264	5530(E-/Ⅶ/Ⅲb)	石鏃	CH	1	-	13.00	11.00	3.00	0.35
	265	一括(-)	石鏃	OB	4	-	15.00	11.00	3.00	0.41
	266	6558(E-4/Ⅳa)	石鏃	CC	-	-	15.00	11.00	4.00	0.55
	267	5318(F-4/Ⅳa)	石鏃	OB	4	-	12.00	8.00	3.00	0.27
	268	4328(D-11/Ⅲb)	石鏃	CH	2	-	(17.00)	13.00	4.00	(0.78)
	269	6185(E-/Ⅶ/Ⅳa)	石鏃	CH	4	-	14.50	(12.00)	4.00	(0.52)
	270	4606(C-5/Ⅳa)	石鏃	CH	3	-	17.00	10.00	3.00	0.41
	271	6278(B-12/Ⅳa)	石鏃	OB	2	-	(18.00)	(14.00)	4.50	(1.00)
	272	4875(F-5/Ⅲb)	石鏃	CH	3	-	23.00	(13.00)	4.00	(1.15)
35	273	3954(E-/Ⅶ/Ⅳa)	石鏃	CH	2	-	(21.00)	(13.50)	4.00	(0.91)
	274	6911(E-3/Ⅲa)	石鏃	CH	3	-	22.00	12.00	4.00	0.78
	275	2989(E-/Ⅷ/Ⅳ)	石鏃	CH	2	-	22.00	(12.00)	4.00	(0.87)
	276	5001(D-5/Ⅳa)	石鏃	OB	4	-	22.00	(11.00)	3.00	(0.69)
	277	2851(E-9/Ⅳ)	石鏃	CH	2	-	25.00	14.00	4.00	1.08
	278	5368(E-5/Ⅳa)	石鏃	SH	-	-	17.00	12.00	4.00	0.61
	279	3916(F-/Ⅷ/Ⅳa)	石鏃	OB	4	-	(14.00)	(11.00)	3.00	(0.36)
	280	6115(D-/Ⅶ/Ⅳa)	石鏃	CH	3	-	15.00	10.00	4.00	0.36
	281	4258(F-11/Ⅳa)	石鏃	AN	-	-	(18.00)	(11.00)	3.00	(0.45)
	282	5358(E-5/Ⅳa)	石鏃	OB	2	-	14.00	11.00	3.00	0.40
	283	4479(F-/Ⅶ/Ⅳa)	石鏃	CH	2	-	(18.00)	(13.50)	4.50	(1.00)
	284	5219(D-4/Ⅳa)	石鏃	CH	2	-	15.00	12.00	2.00	0.44
	285	4617(C-5/Ⅳa)	石鏃	CH	4	-	20.00	11.50	3.00	0.71
	286	4424(D-11/Ⅳa)	石鏃	AN	-	-	24.00	17.00	3.00	0.96
	287	3436(D-/Ⅶ/Ⅳa)	石鏃	SH	-	-	20.00	15.00	3.00	1.00
	288	4201(C-11/Ⅳa)	石鏃	CC	-	-	(14.00)	14.00	4.00	(0.65)
	289	5132(D-5/Ⅳa)	石鏃未製品	SH	-	-	18.00	15.00	6.00	1.31
	290	7142(E-4/Ⅳa)	石鏃未製品	SH	-	-	22.00	14.00	5.50	1.61
	291	6006(D-6/Ⅳa)	石鏃未製品	CH	1	-	(18.00)	19.00	7.00	(2.22)
	292	2736(F-/Ⅷ/Ⅲ)	石鏃未製品	CH	4	-	21.00	14.00	6.00	1.65
	293	6962(E-3/Ⅲb)	石鏃未製品	SH	-	-	19.00	12.00	7.00	1.35
	294	4782(E-4/Ⅲ)	石鏃未製品	CH	3	-	27.00	22.00	7.00	4.63
36	295	6503(D-5/Ⅳa)	石錐	SH	-	-	(18.00)	(14.00)	6.00	(1.18)
	296	4473(F-/Ⅶ/Ⅳa)	石錐	CH	3	-	17.00	(10.00)	5.00	(0.60)
	297	3878(F-/Ⅶ/Ⅲ)	石錐	CH	2	-	18.00	(12.00)	5.00	(1.02)



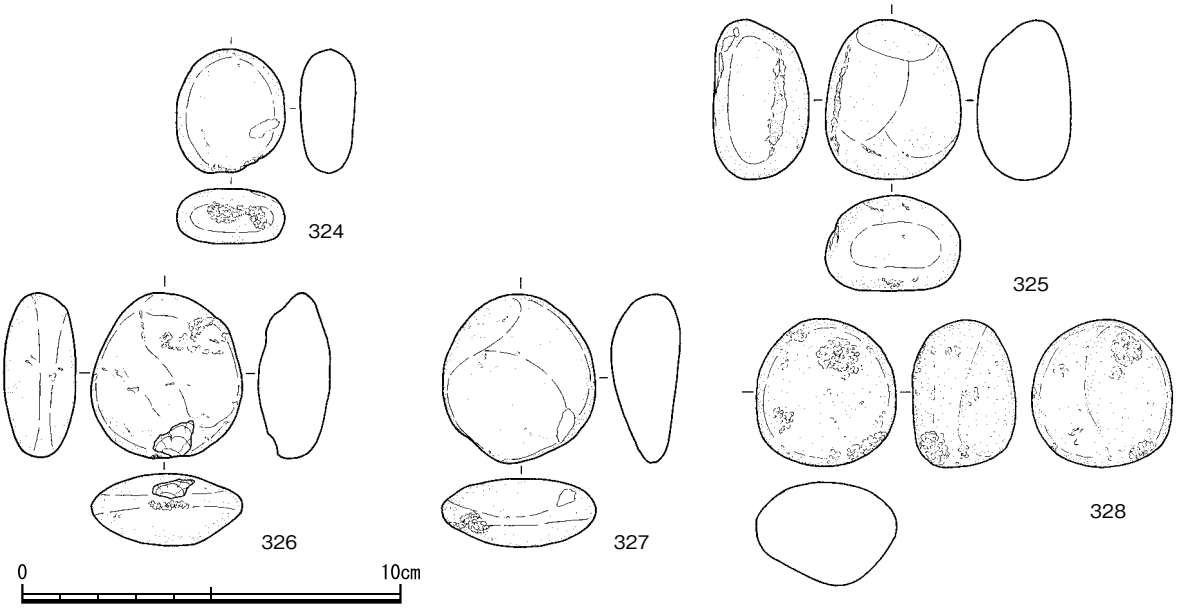
第37図　縄文晩期出土遺物実測図(扶入石器・楔・スクレイパー・石匙)



第38図　縄文晩期出土遺物実測図(石斧)



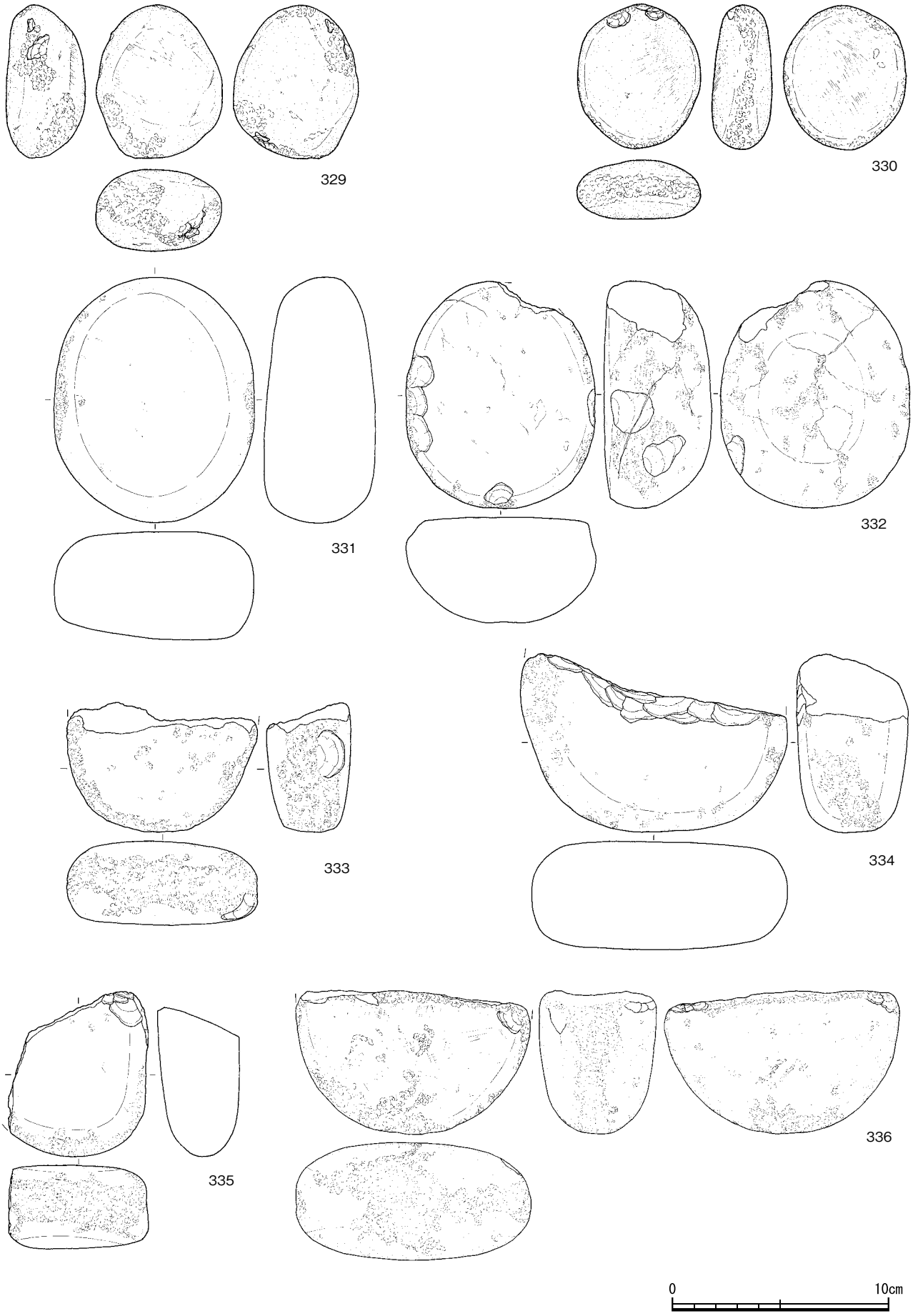
第39図　縄文晩期出土遺物実測図(石製垂飾品・石錘)



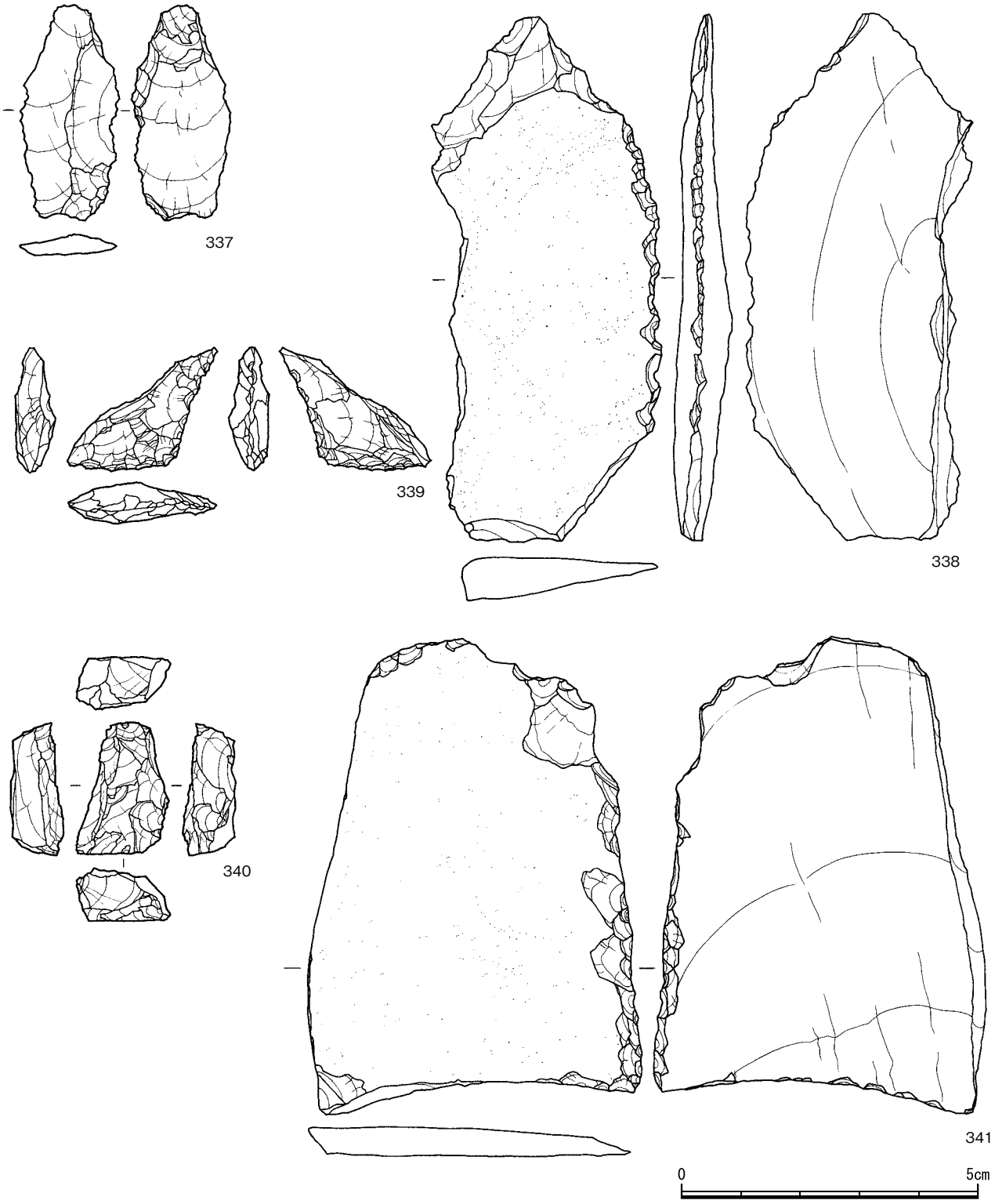
第40図　縄文晩期出土遺物実測図(ハンマーストーン)

第16表　縄文時代晩期石器観察表(３)

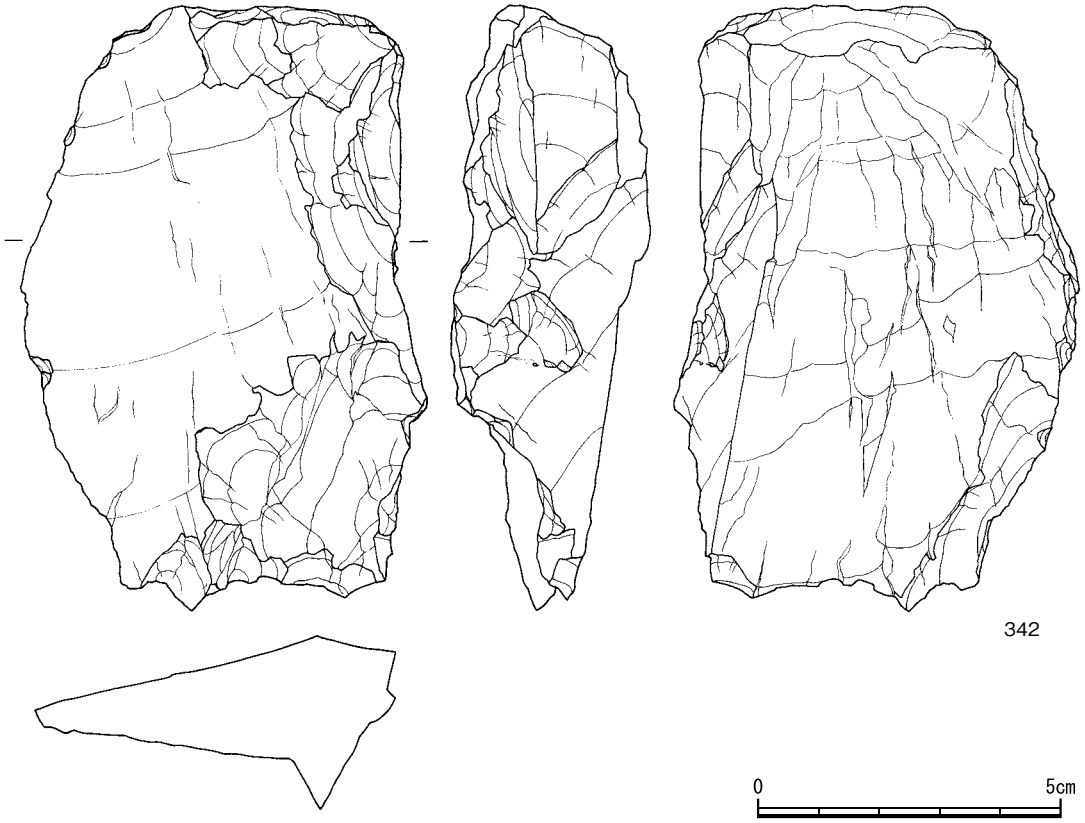
挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	器種	石材L1	石材L2	石材L3	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
37	298	3721(E-6/Ⅳa)	抉入石器	OB	4	-	16.00	10.00	3.00	0.59
	299	4221(F-10/Ⅳa)	抉入石器	OB	2	-	19.50	17.00	4.50	1.33
	300	4884(F-4/Ⅲb)	抉入石器	SH	-	-	31.00	31.00	11.00	7.45
	301	6501(D-5/Ⅳa)	抉入石器	CH	1	-	(23.00)	(16.00)	5.00	(1.60)
	302	6309(B-12/Ⅳa)	楔形石器	CH	2	-	20.00	18.00	6.00	1.86
	303	6912(E-3/Ⅲb)	楔形石器	CH	2	-	23.00	16.00	6.00	2.09
	304	3570(D-6/Ⅳa)	楔形石器	CR	-	-	28.00	18.00	13.00	6.59
	305	6104(D-/Ⅶ/Ⅳa)	スクレイパー	HO	-	-	31.00	(33.00)	8.00	(10.71)
	306	1997(E-10/Ⅳ)	スクレイパー	HO	-	-	34.00	(57.50)	4.50	(11.69)
	307	4955(D-5/Ⅳa)	石匙	CC	-	-	57.00	32.00	9.00	16.61
	308	一括(-)	石匙	SH	-	-	42.00	18.00	6.00	4.36
	309	918(E-10/Ⅲ)	石匙	AN	-	-	38.00	45.00	11.00	13.18
38	310	3398(D-/Ⅷ/Ⅳa)	石斧	SH	-	-	(65.00)	34.00	8.00	(20.98)
	311	2718(E-/Ⅷ/Ⅳ)	石斧	HO	-	-	(62.00)	45.00	(9.00)	(35.10)
	312	6815(D-4/Ⅲa)	石斧	HO	-	-	141.00	73.00	15.00	206.77
	313	6998(E-4/Ⅲa)	石斧	HO	-	-	(63.00)	44.00	18.00	(68.06)
	314	3655(D-6/Ⅳa)	石斧	HO	-	-	(95.00)	(63.00)	10.00	(62.14)
	315	6016(D-6/Ⅳa)	石斧	SH	-	-	(66.00)	(48.00)	36.00	(164.32)
	316	4595(C-5/Ⅳa)	石斧	HO	-	-	(73.00)	(56.00)	23.00	(107.70)
	317	6916(F-3/Ⅲa)	石斧	SS	-	-	(79.00)	(53.00)	35.00	(191.16)
	318	2014(D-10/Ⅳ)	石斧	HO	-	-	(75.00)	(45.00)	22.00	(102.67)
	319	5882(B-12/Ⅳa)	石斧	SH	-	-	(69.00)	44.00	11.00	(53.36)
	320	2869(F-9/Ⅳ)	石斧	HO	-	-	128.00	78.00	17.00	209.06



第41図　縄文晩期出土遺物実測図(磨石・敲石)



第42図　縄文晩期出土遺物実測図(剥片・二次加工剥片・両極石核)



第43図　縄文晩期出土遺物実測図(剥片)

第17表　縄文時代晩期石器観察表(４)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	器種	石材L1	石材L2	石材L3	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
39	321	4759(D-5/Ⅲb)	石製垂飾品	JA	-	-	15.00	7.00	3.00	0.31
	322	4862(D-5/Ⅲb)	石製垂飾品	JA	-	-	11.00	7.00	3.00	0.25
	323	6029(D-6/Ⅳa)	石錘	SH	-	-	46.00	26.00	10.00	20.25
40	324	5066(D-5/Ⅳa)	ハンマーストーン	SS	-	-	32.00	28.00	14.50	18.58
	325	6510(D-5/Ⅳa)	ハンマーストーン	SS	-	-	42.00	35.50	25.00	52.14
	326	6231(C-12/Ⅳa)	ハンマーストーン	HO	-	-	44.00	40.00	19.00	40.98
	327	2963(E-10/Ⅳ)	ハンマーストーン	SS	-	-	44.50	41.00	18.00	38.85
	328	6714(F-5/Ⅳa)	敲石	PA	-	-	39.00	37.00	27.00	54.40
41	329	4700(D-5/Ⅲb)	磨石/敲石	SS	-	-	55.00	45.00	31.00	102.35
	330	5337(E-4/Ⅳa)	磨石/敲石	SS	-	-	52.00	46.00	22.00	71.04
	331	4799(E-4/Ⅲb)	磨石/敲石	SS	-	-	113.50	92.00	50.00	845.00
	332	5962(E-6/Ⅳa)	磨石/敲石	SS	-	-	105.00	82.00	49.00	620.00
	333	5961(E-6/Ⅳa)	磨石/敲石	SS	-	-	(61.00)	(86.00)	40.00	(275.00)
	334	5131(D-5/Ⅳa)	磨石/敲石	SS	-	-	(82.00)	(123.00)	51.00	(610.00)
	335	6560(E-4/Ⅳa)	磨石/敲石	SS	-	-	(75.00)	(64.00)	39.00	(255.00)
	336	4965(D-5/Ⅳa)	磨石/敲石	SS	-	-	(66.00)	(107.00)	54.00	(545.00)
42	337	7058(E-4/Ⅳa)	微細剥離痕剥片	CH	2	-	36.00	17.00	4.00	2.17
	338	2928(C-10/Ⅳ)	微細剥離痕剥片	SS	-	-	89.00	35.00	9.00	26.27
	339	3815(F-/Ⅶ/Ⅲ)	二次加工剥片	CH	3	-	31.00	15.00	7.00	1.95
	340	4609(C-5/Ⅳa)	両極石核	SH	-	-	21.00	16.00	8.00	3.12
	341	4514(E-6/Ⅳa)	剥片	HO	-	-	82.00	56.00	6.00	34.39
43	342	2902(F-9/Ⅳ)	剥片	SH	-	-	99.00	67.00	31.00	156.20

第３節　古代

１　調査の方法と概要

当初，調査範囲は遺跡北側の傾斜面にまで及んでいなかったが，上層で検出された畠跡が北側に延びることが判明したことから調査範囲の拡大の手続きを行った。

古代の遺構，遺物はⅢ層～Ⅳ層上部で検出している。遺構では土坑，軽石集積，礫集積，焼土跡，掘立柱建物跡，ピットが検出されている。

土坑は遺跡北側，丘陵寄りに５基検出し，軽石集積１基，礫集積は２基，焼土は５か所検出し，４か所は掘立柱建物跡に関連すると思われる。掘立柱建物跡は７棟を検出し，１棟は丘陵傾斜面を削平し平坦面を設けた後，建物の設置を行っている。また，建物として認定できないピット(柱穴)を多数検出しているが，本報告では検出状況を平面図で記録するにとどめる。

２　古代の遺構

(１)土坑

５基の土坑はⅣ層で検出し，１号土坑は，１号掘立柱建物跡の内側で検出した。２号土坑はD,E-11区で，３号，４号土坑はD-8区，５号土坑はE-8区で検出し，北側丘陵よりに分布する。(１号土坑については１号掘立柱建物跡に詳細を記す)

２号土坑(第45図)

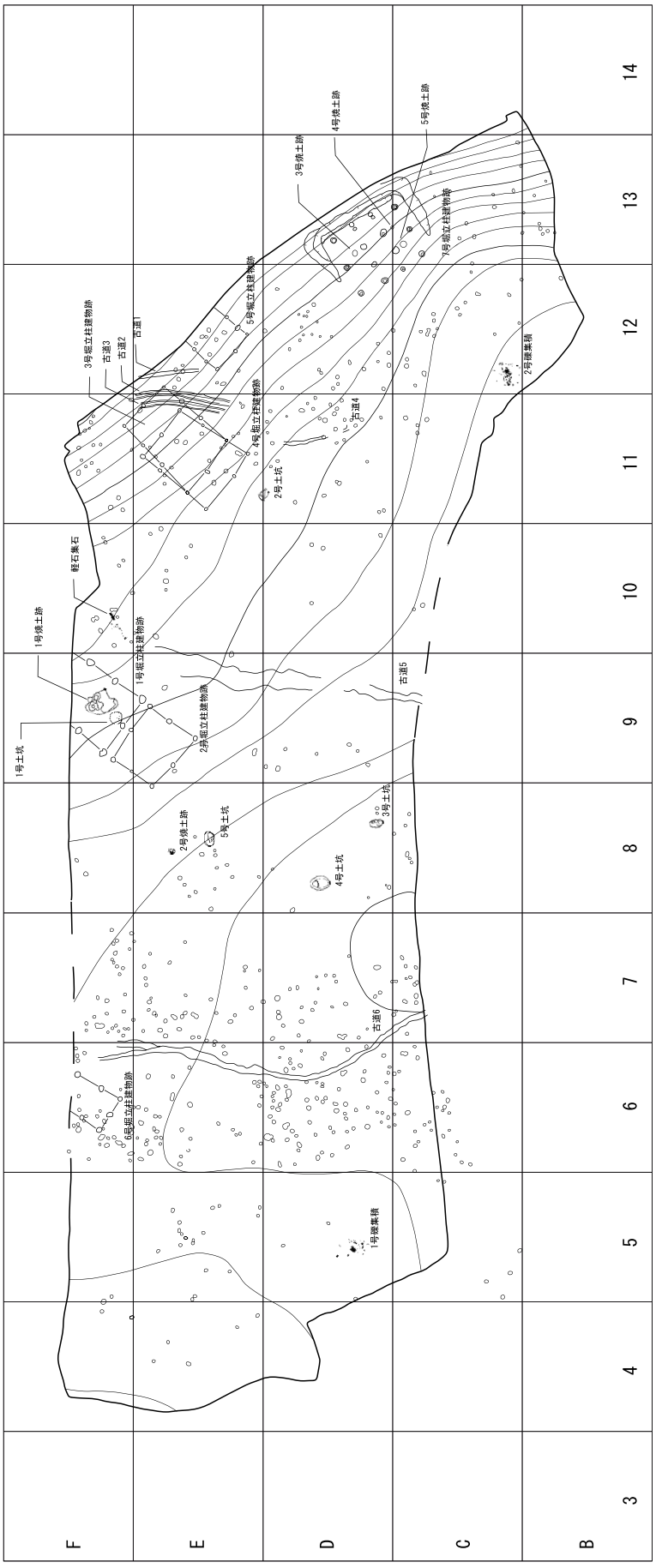
D,E-11区，Ⅳa層上面で検出し，長軸80cm，短軸53cm，深さ61cmの楕円形である。長軸南西側の掘り込みがやや深くなっている。

３号土坑(第45図)

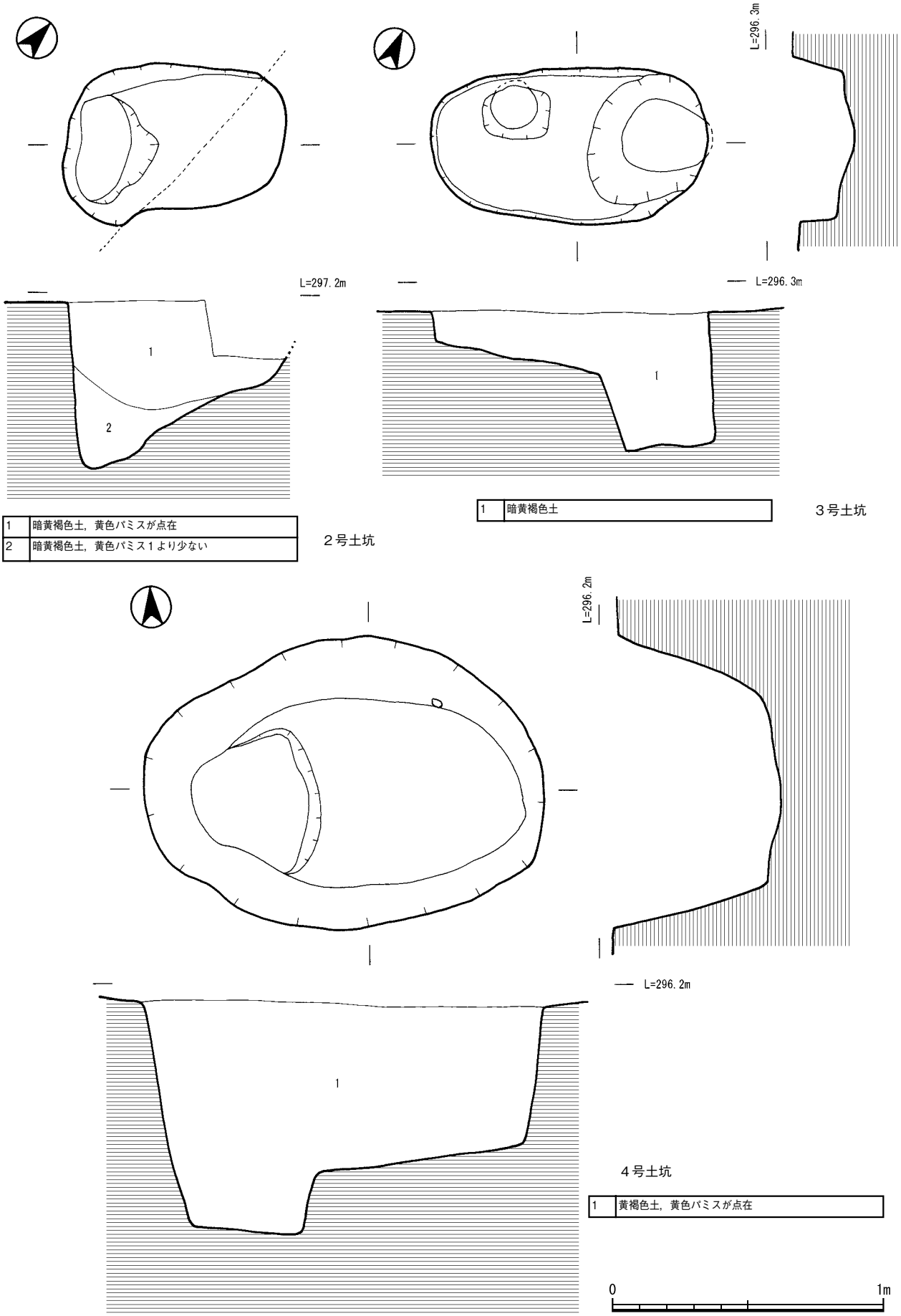
D-8区，Ⅳb層上面で検出し，長軸120cm，短軸57cm，深さ10cm～20cmの楕円形で，長軸北東側に深さ30cmの円形の落ち込みがみられる。また，中央付近にも直径25cm，深さ62cmの円形ピットがみられるが，土坑との切り合い関係は確認できなかった。

４号土坑(第45図)

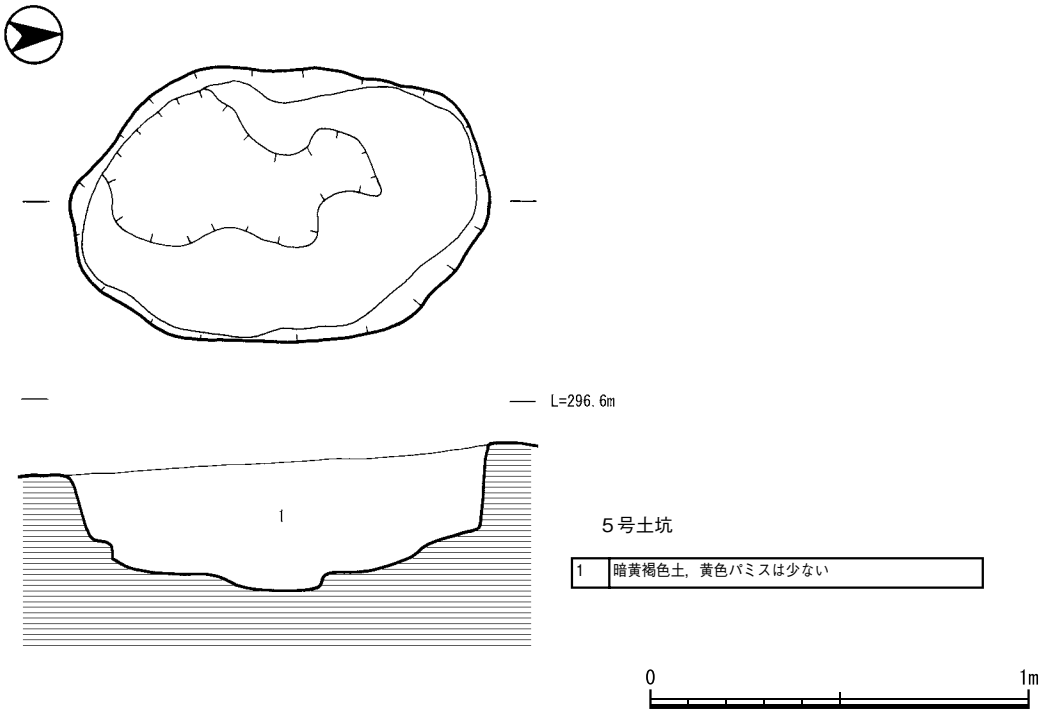
D-8区，Ⅳb層上面で検出し，長軸148cm，短軸106cm，深さ60cmの楕円形である。底面はほぼ平坦で，長軸西側に深さ23cmの落ち込みがみられる。埋土中に土師甕片が１点出土している。



第44図　古代遺構配置状況(1/500)


L=296.3m
L=297.2m
L=296.3m
1
2
1
1
暗黄褐色土，黄色パミスが点在
暗黄褐色土，黄色パミス１より少ない
暗黄褐色土
２号土坑
３号土坑
L=296.2m
L=296.2m
1
４号土坑
黄褐色土，黄色パミスが点在
0
1m

第45図　古代土坑(１)



第46図　古代土坑(２)

５号土坑(第46図)

E-8区，Ⅳb層上面で検出し，長軸111cm，短軸70cm，深さは検出面から33cmの楕円形で，底面には凹凸がみられる。

(２)　軽石集積(第47図)

F-10区，Ⅳa層上面で検出した。

１号掘立柱建物跡の北側に位置し，大小の軽石で構成し，土師甕片が混在するが小片のみである。軽石は南東方向に広がるが，集積主体部からの流出と考えられる。遺構を構成する軽石には加工の痕跡や被熱は認められず，また，集積主体部で掘り込み等は確認できない。

(３)　礫集積

２基の礫集積はⅣa層上面で検出した。

１号礫集積はD-5区，２号礫集積はC-12区に検出し，遺跡の東寄りに，南北に離れた状態で検出している。

１号礫集積(第48,50図)

D-5区，30cm×50cm程の礫集中部は40個程の礫で構成し，そのほとんどを5cm～10cmの砂岩で占め，被熱の痕跡は認められない。北東側に散在する礫は，集中部からの流出とみられる。礫集中部下部で，須恵器甕胴部片１点を確認したが，掘り込みは確認できていない。

1は須恵器大甕の胴部片で，内面に平行タタキの痕跡が明瞭に残る。

２号礫集積(第49,50図)

C-12区，概ね100cm×150cmの範囲に集中し，10cm～20cmの砂岩で構成する。構成する礫は，接合が確認できるものもある。一部の礫からは，被熱の痕跡が確認できる。掘り込みは確認できず，被熱礫は一部含まれるが炭化物等の存在は顕著でない。

礫集積内には土師器片15点も伴っており，２点図化した。２は土師器高台付坏の口縁部片で，復元口径14.2cmを測る。３,４は土師器椀高台片で，３の高台接合部の指押さえは明瞭で，４の高台端部は断面三角形で鋭角に仕上げられ，磨滅が進んでいるが体部内面の処理は丁寧で黒味を帯びることから黒色土器と思われる。

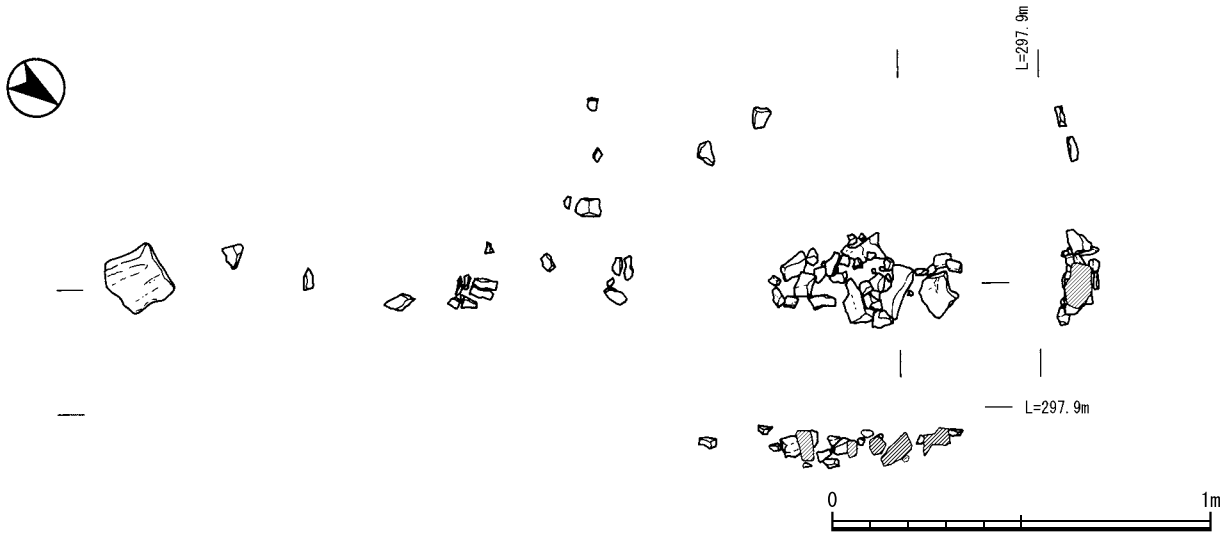
(４)　焼土跡

Ⅳa層上面で５か所の焼土跡を確認し，１号焼土はF-9区で，２号焼土はE-8区，３号焼土，４号焼土はD-13区，５号焼土はC-13区で検出した。２号焼土を除く４か所の焼土は掘立柱建物跡内で検出されている。(１号焼土については１号掘立柱建物跡，３～５号焼土については７号掘立柱建物跡に詳細を記す)

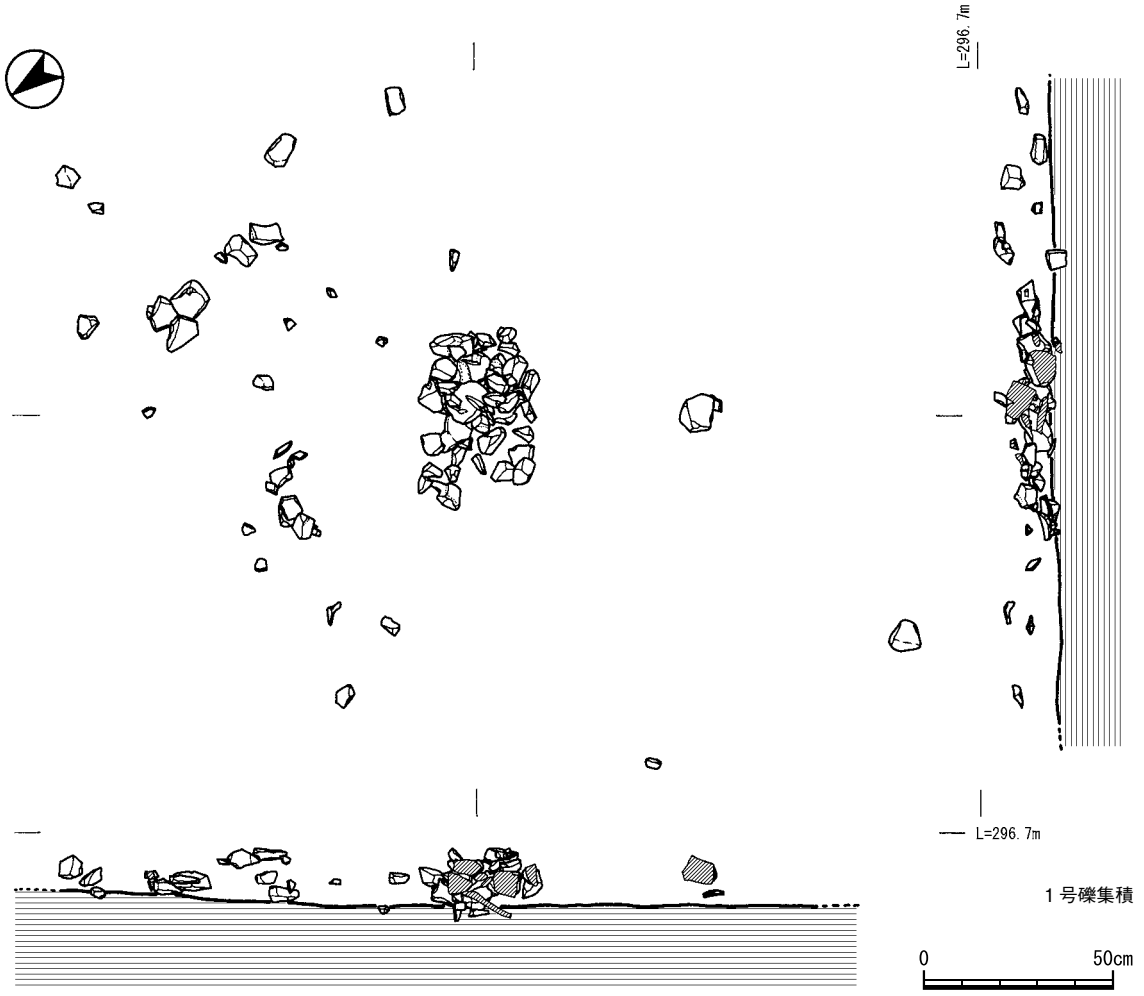
２号焼土跡(第51図)

E-8区，Ⅳa層上面で検出し，直径約40cmで，掘り込みは約12cmである。埋土は明赤褐色を呈し，被熱の痕跡が顕著である。焼土内には５cm弱の破砕した小型礫，軽石，微細な土師器片が混入している。

同一層からは，鉄滓，鞴羽口等も少量出土していることから，鍛冶炉の可能性も推測される。



第47図　古代軽石集積



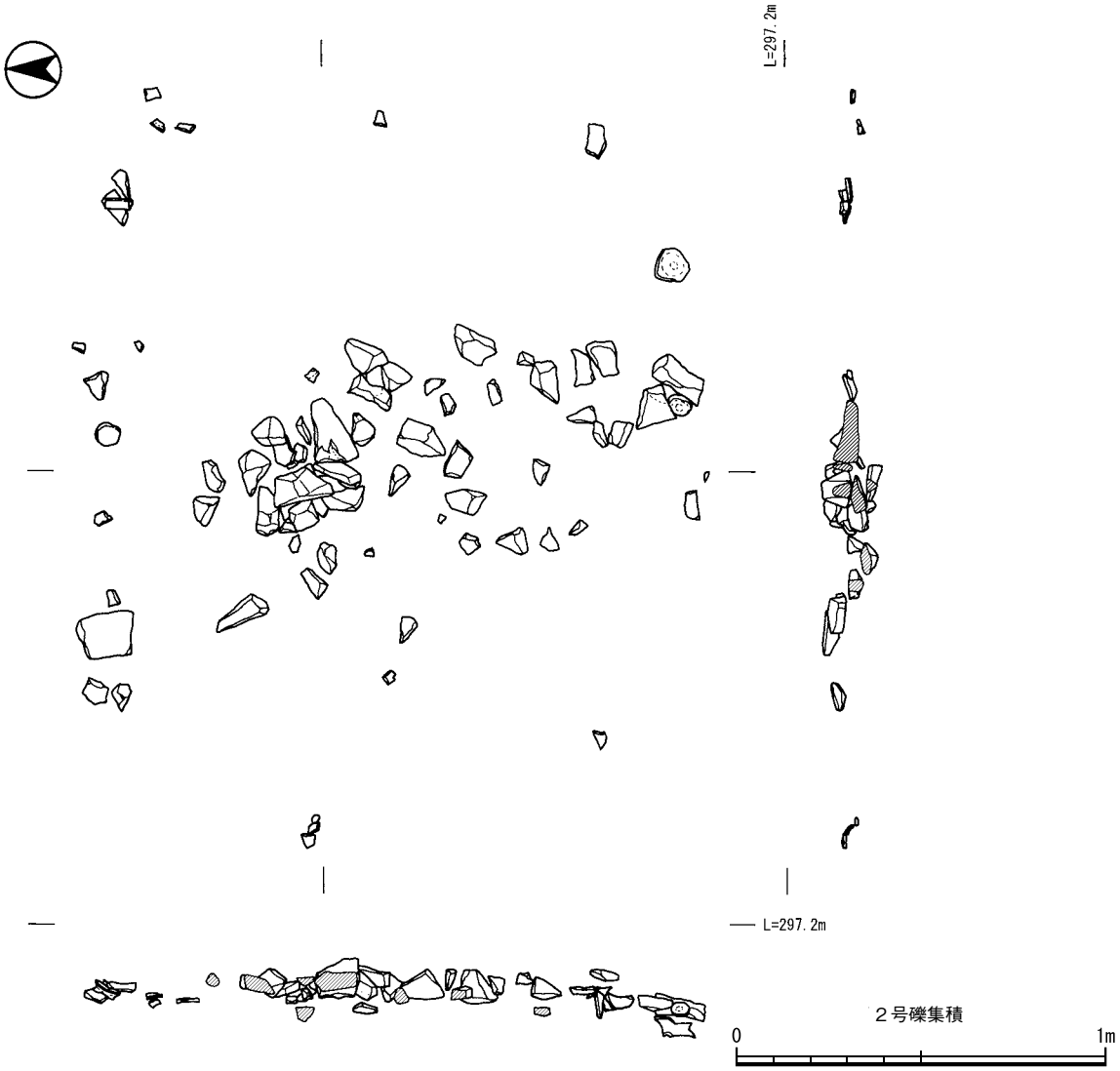
第48図　古代礫集積(１)

（５） 古道

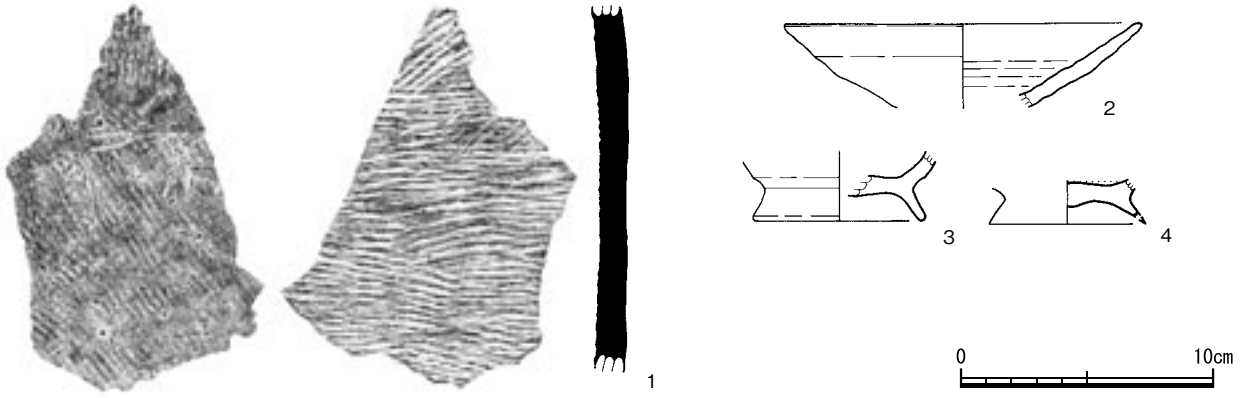
Ⅳa層上面で，ほぼ東西方向に延びる古道６条を確認し，E-12区に１条，E-11区に２条，D-11区に１条，C～E-9区に１条，C～F-6,7区で１条を検出した。

古道１(第44図)

E-12区，幅約30cm，長さ4m40cmで東西方向に走る。Ⅲ層の黒色土が帯状に残されるが，明確な硬化面は確認していない。遺物が確認できず，詳細な時期については不明である



第49図　古代礫集積(２)



第50図　古代礫集積内出土遺物

が，ピットを切ることから，古道が新しくなる。

古道２(第44,52図)

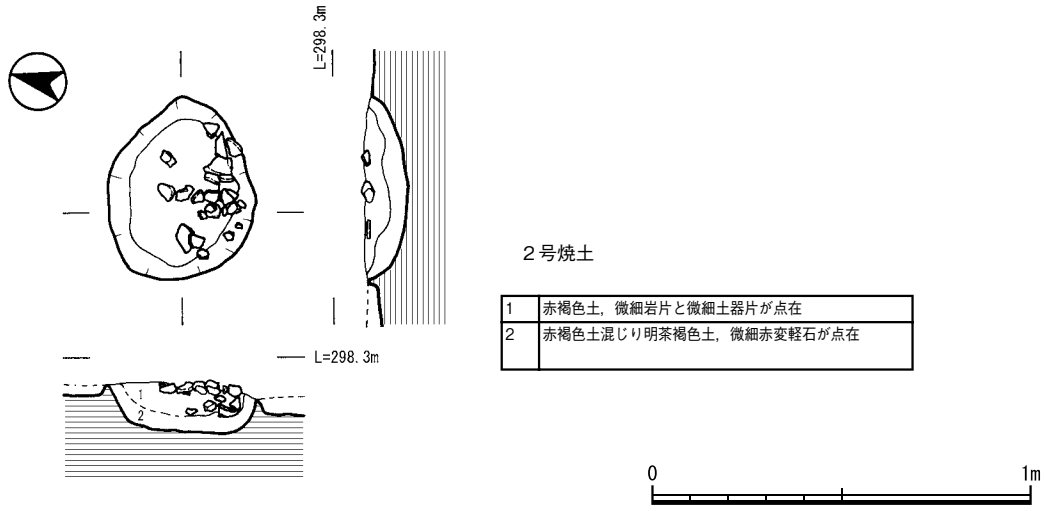
E-11区，幅約40cm，長さ7m50cmで東西方向に走り，溝状を呈する。Ⅲ層の黒色土が帯状に２条平行して残されたうちの，北側に該当する。明確な硬化面は確認されなかった。遺物等は出土しておらず，詳細な時期については不明であるが３号掘立柱建物跡を切ることから，古道が新しくなる。

古道３(第44,52図)

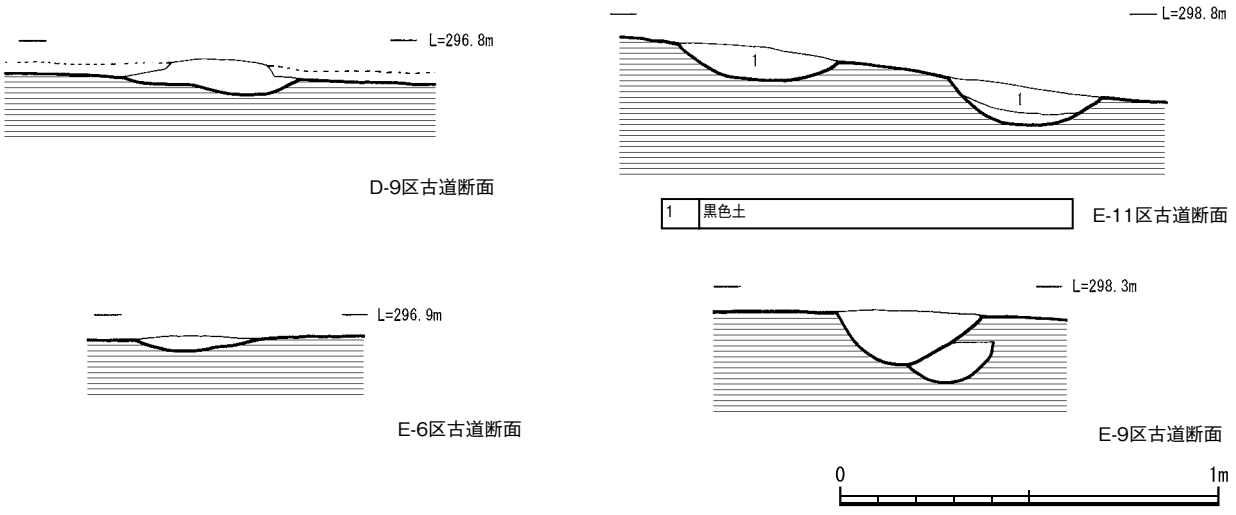
E-11区，幅約40cm，長さ約6m50cmで東西方向に走り，溝状を呈する。Ⅲ層の黒色土が帯状に延び，２号古道と平

第18表　古代遺構内出土遺物観察表

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
50	1	集石Ⅳa層　(--/-)	-	(14.5)	-	-	精緻,石	良好 堅緻	N5/ (灰)	N5/ (灰)	-	平行タタキ	-	-	-
	2	2号礫集積(C12/Ⅲ)	14.2	(3.3)	-	-	精緻	良好	2.5Y8/3 (淡黄)	2.5Y8/3 (淡黄)	-	-	-	-	-
	3	2号礫集積(C12/Ⅲ)	-	(2.8)	6.8	1.1	精緻	良好	10YR6/4 (にぶい橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	4	32(D-9/Ⅲ)	-	(1.5)	-	(0.4)	精緻	良好	10YR5/1 (褐灰)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-



第51図　古代焼土

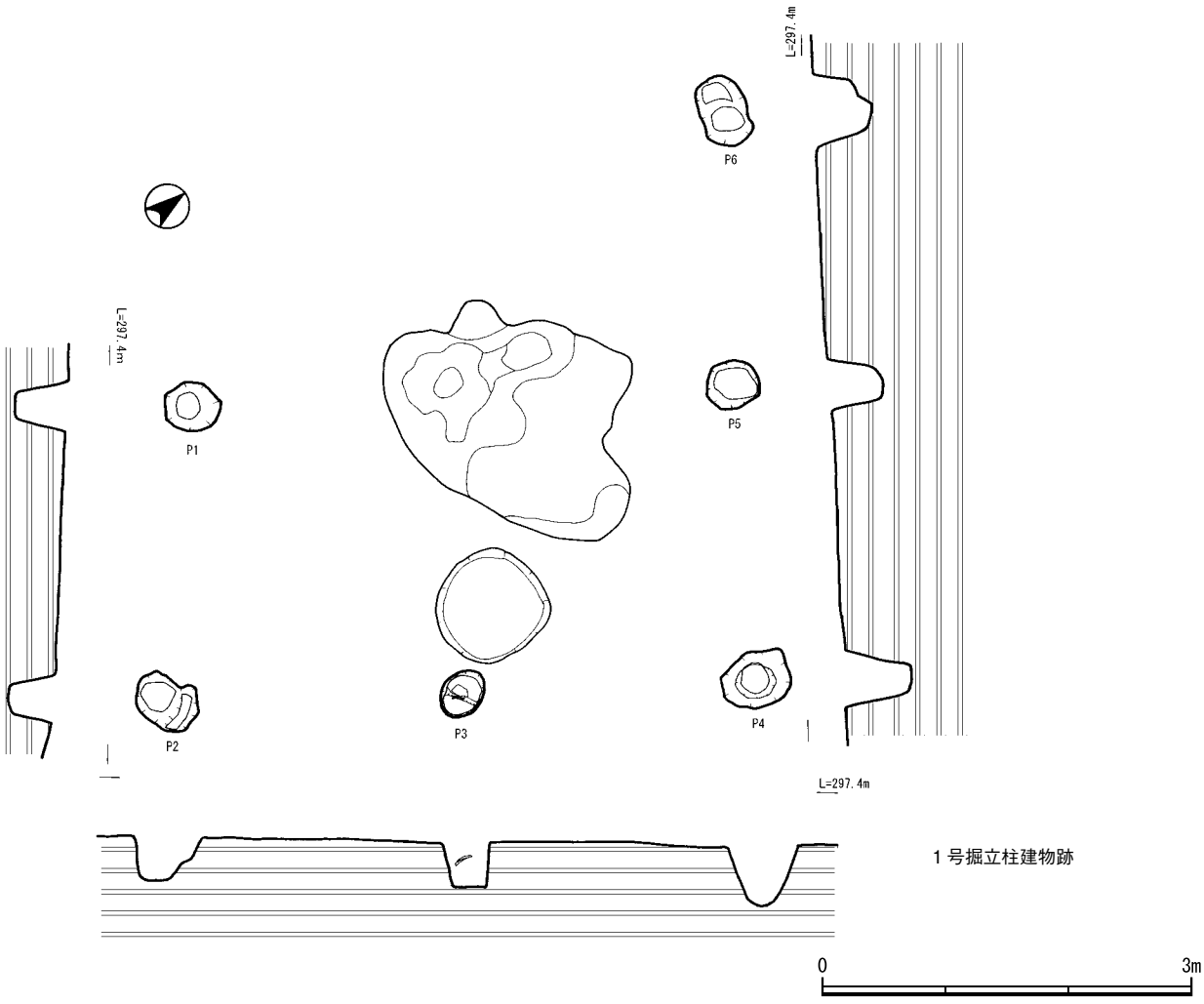


第52図　古代古道断面

行している。埋土下部には灰褐色砂混じりの硬化面が形成され，一部はマンガン分により赤化している部分もみられ，降雨時には流路となったことも推測される。時期については，３号掘立柱建物跡を切っており，３号建物跡より新しい。

古道４(第44図)

D-11区，幅約25cm，長さ約5m30cm(一部削平を受ける)で東西方向に走り，灰褐色砂混じりの硬化面を検出した。部分的に喪失した硬化面は，Ⅲ層の埋没畠の影響と判断される。一部ピットを切ることから，周辺ピット群より新しい時期が想定できる。



1号掘立柱建物跡					
P1	径(cm)	43		柱間(cm)	
	深さ(cm)	45		P1-P2	253
P2	径(cm)	40		P2-P3	255
	深さ(cm)	38		P3-P4	252
P3	径(cm)	37		P4-P5	253
	深さ(cm)	38		P5-P6	234
P4	径(cm)	49		P6-P1	600
	深さ(cm)	56			
P5	径(cm)	42			
	深さ(cm)	46			
P6	径(cm)	63			
	深さ(cm)	50			

第53図　古代掘立柱建物跡(１)

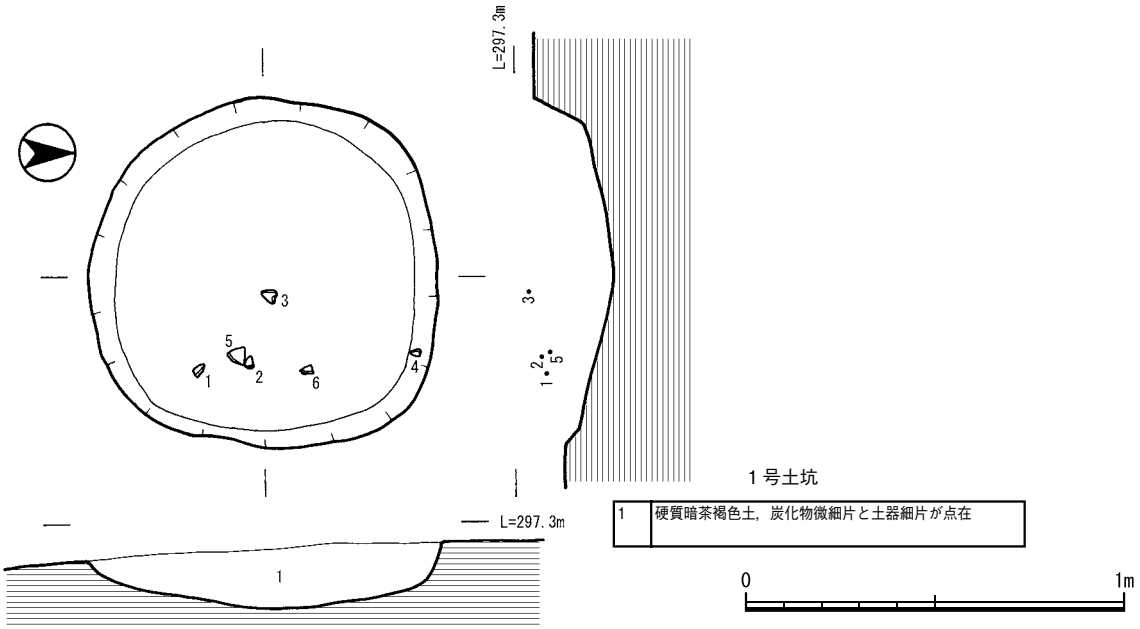
古道５(第44,52図)

C～E-9区，幅50cm～1m50cm，長さ21ｍで(一部削平を受ける)東西方向に走る。硬化面を検出し，スジ状に残存する部分とブロック状に点在して残存する。Ⅲ層の埋没畠の耕作の影響で，硬化面が破壊された可能性もある。硬化面が部分的には重なり，長期間継続的に使用した可能性もある。

周辺からは土師器片が多量に出土しているが，詳細な時期は確定できない。

古道６(第44,52図)

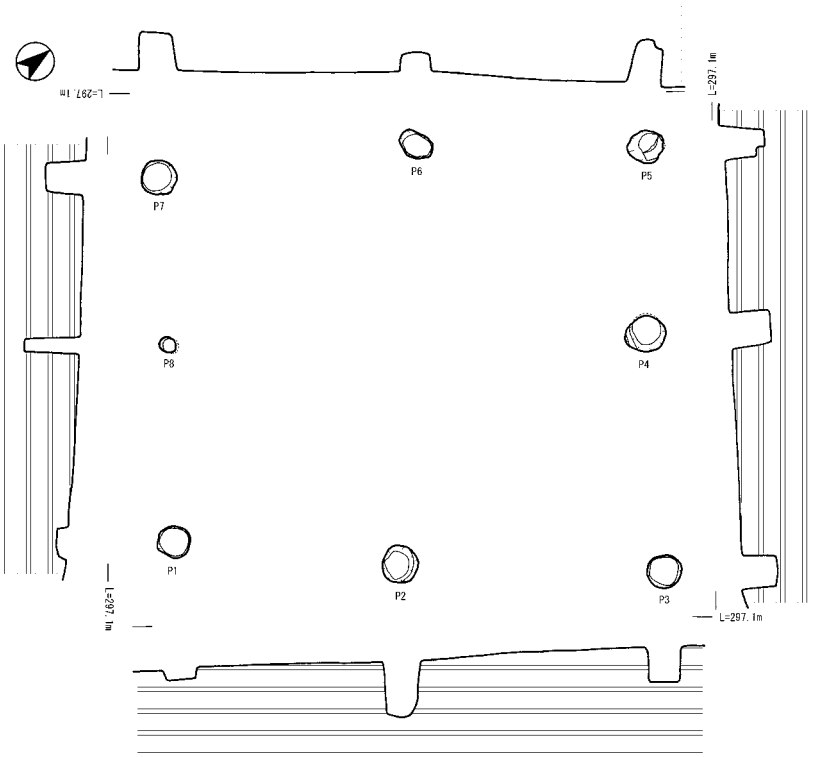
C～F-6,7区，幅約50cm，長さ27m30cmで東西方向に走る。緩やかに蛇行し，西側で２条に分かれる。灰褐色の硬化面を検出し，硬化面は一部で消失するが残存状況は良好である。時期については，多数検出された周辺ピット群との切り合い関係がみられないことから，このピット群とほぼ同時期であると想定される。



第54図　1号掘立柱建物跡内土坑



第55図　1号掘立柱建物跡内焼土



２号掘立柱建物跡

0　3m

2号掘立柱建物跡					
P1	径(cm)	32		柱間(cm)	
	深さ(cm)	11		P1-P2	230
P2	径(cm)	36		P2-P3	270
	深さ(cm)	56		P3-P4	240
P3	径(cm)	33		P4-P5	185
	深さ(cm)	35		P5-P6	233
P4	径(cm)	37		P6-P7	262
	深さ(cm)	39		P7-P8	163
P5	径(cm)	34		P8-P1	192
	深さ(cm)	44			
P6	径(cm)	32			
	深さ(cm)	20			
P7	径(cm)	34			
	深さ(cm)	38			
P8	径(cm)	16			
	深さ(cm)	54			

第56図　古代掘立柱建物跡(２)

（6） 掘立柱建物跡

Ⅳa層～Ⅳb層上面で７棟の掘立柱建物跡を検出した。

１号と２号掘立柱建物跡は隣接し，１号をF-9区，２号をE-9区で検出した。３号と４号掘立柱建物跡は一部ピットを共有し，E-11区で検出した。５号掘立柱建物跡はE-12区で，６号掘立柱建物跡はF-6区で検出した。

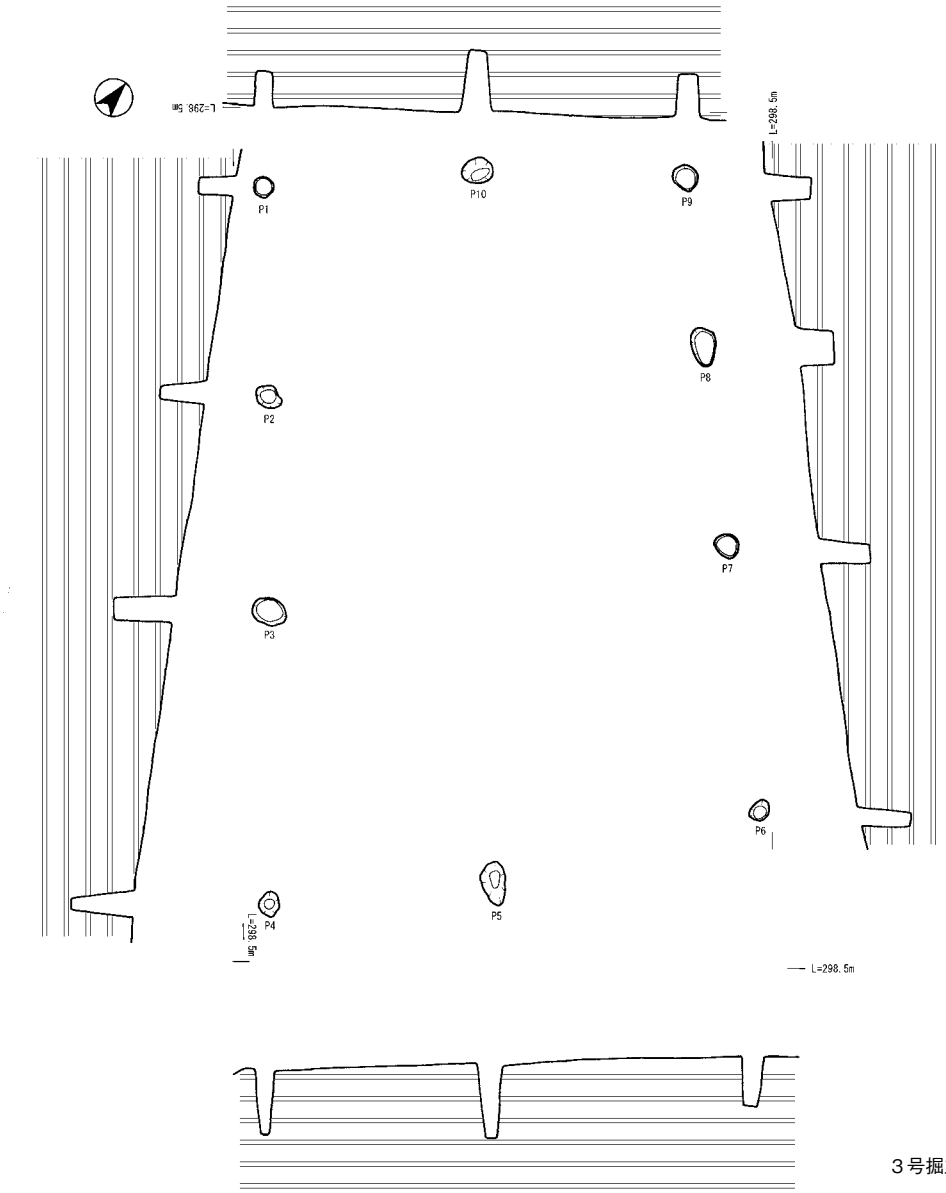
７号掘立柱建物跡はC,D-12,13区で，遺跡北側の丘陵斜面の一部を削平し設置している。

建物跡は，北側丘陵寄りに４棟，中央部の平坦部に３棟と偏る分布が観察される。

１号掘立柱建物跡(第53図)

F-9区，Ⅳb層上面で検出し，建物は調査区外に延び，２間×３間以上が想定される。建物主軸は遺構拡大の可能性を考慮に入れるとN-53°-Wとなる。確認された柱穴は６基で平均直径45cm，深さ45cmで，底面はほぼ平坦である。

柱穴からは土師甕の胴部，焼塩壺の小破片が出土し，建物内に土坑(１号)，焼土跡(１号)を伴っている。土坑は柱穴３に隣接し，焼土跡は土坑に隣接し建物の中央に位置する。

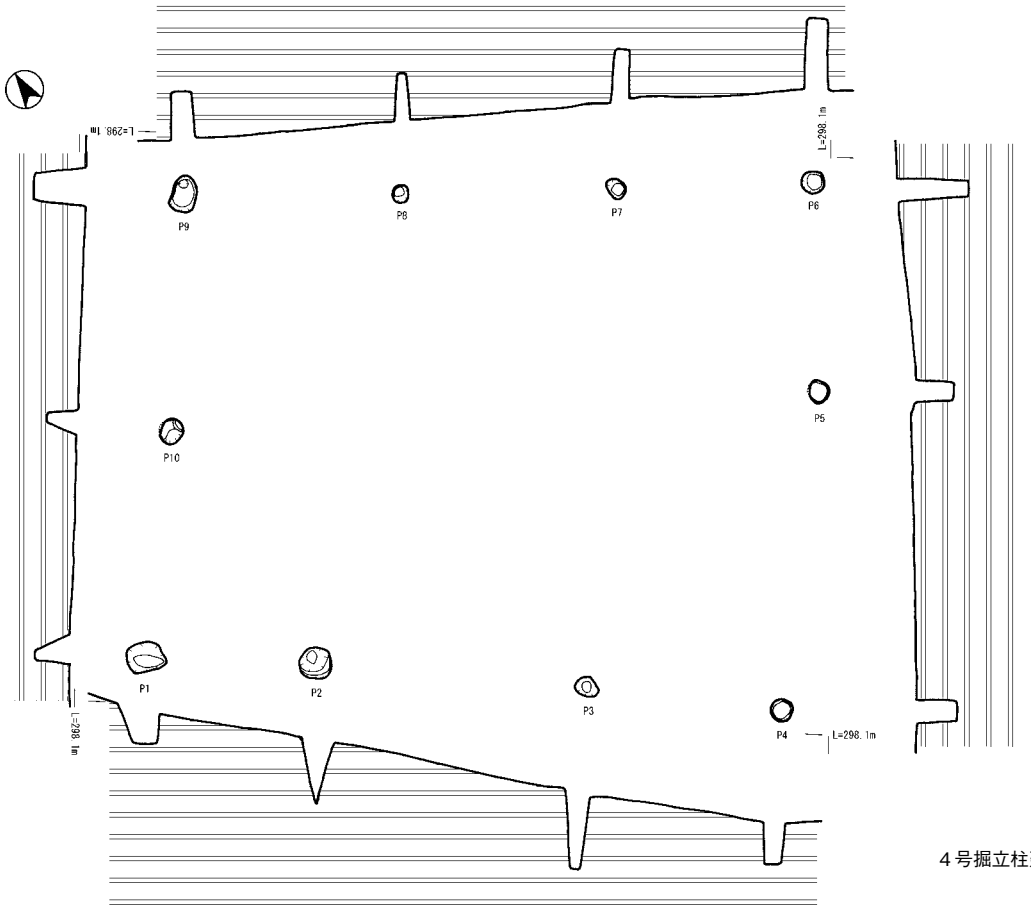


3号掘立柱建物跡

0 3m

3号掘立柱建物跡					
P1	径(cm)	21		柱間(cm)	
	深さ(cm)	35		P1-P2	208
P2	径(cm)	23		P2-P3	210
	深さ(cm)	44		P3-P4	288
P3	径(cm)	27		P4-P5	225
	深さ(cm)	62		P5-P6	270
P4	径(cm)	20		P6-P7	266
	深さ(cm)	62		P7-P8	198
P5	径(cm)	26		P8-P9	168
	深さ(cm)	73		P9-P10	202
P6	径(cm)	18		P10-P1	216
	深さ(cm)	53			
P7	径(cm)	25			
	深さ(cm)	50			
P8	径(cm)	39			
	深さ(cm)	36			
P9	径(cm)	25			
	深さ(cm)	45			
P10	径(cm)	31			
	深さ(cm)	61			

第57図　古代掘立柱建物跡(３)



4号掘立柱建物跡

0 3m

4号掘立柱建物跡					
P1	径(cm)	42		柱間(cm)	
	深さ(cm)	34		P1-P2	160
P2	径(cm)	33		P2-P3	272
	深さ(cm)	64		P3-P4	198
P3	径(cm)	20		P4-P5	316
	深さ(cm)	62		P5-P6	206
P4	径(cm)	12		P6-P7	192
	深さ(cm)	41		P7-P8	220
P5	径(cm)	22		P8-P9	214
	深さ(cm)	39		P9-P10	234
P6	径(cm)	23		P10-P1	222
	深さ(cm)	71			
P7	径(cm)	18			
	深さ(cm)	53			
P8	径(cm)	16			
	深さ(cm)	48			
P9	径(cm)	25			
	深さ(cm)	52			
P10	径(cm)	26			
	深さ(cm)	31			

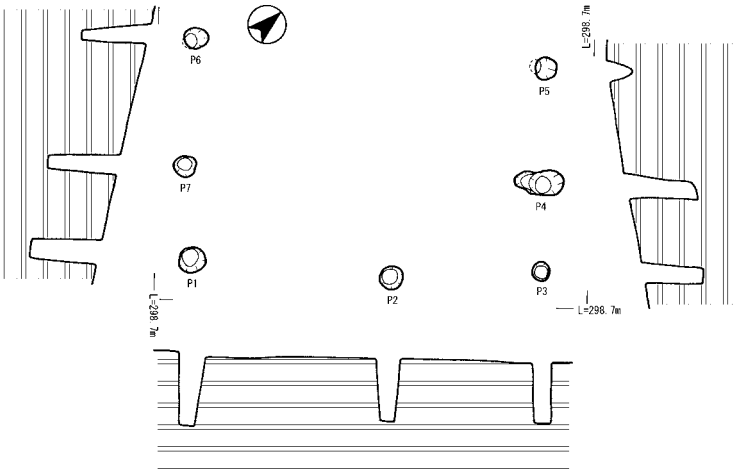
第58図　古代掘立柱建物跡(４)

１号土坑(第54図)

１号掘立柱建物跡内で検出し，ほぼ円形で直径92cm，深さ15cmと浅い。底面はほぼ平坦で，土師甕胴部小片６点を出土した。土坑は建物跡の東側短軸寄りに形成され，焼土跡に隣接している。

１号焼土(第55図)

１号掘立柱建物跡内で検出し，長軸2m44cm，短軸1m70cmの不定形であるが，西側の1m30cm×60cmが顕著な焼土痕が観察できる。土師器の微細片が若干みられた。



5号掘立柱建物跡					
P1	径(cm)	26		柱間(cm)	
	深さ(cm)	70		P1-P2	200
P2	径(cm)	25		P2-P3	148
	深さ(cm)	57		P3-P4	90
P3	径(cm)	21		P4-P5	116
	深さ(cm)	60		P5-P6	342
P4	径(cm)	25		P6-P7	126
	深さ(cm)	69		P7-P8	95
P5	径(cm)	23			
	深さ(cm)	25			
P6	径(cm)	21			
	深さ(cm)	65			
P7	径(cm)	21			
	深さ(cm)	70			

第59図　古代掘立柱建物跡(５)

２号掘立柱建物跡(第56図)

E-9区，Ⅳb層上面で検出した２間×２間の建物で，柱穴の平均直径は32cm，深さは37cmである。柱穴の底面は平坦で，硬化面がみられた。

１号掘立柱建物跡が約50cmと隣接し，建物主軸も同一である。柱穴からは土師甕胴部片が出土し，遺物の出土状況，建物の配置状況から１号建物跡と同時期の可能性が高い。

３号掘立柱建物跡(第57図)

E-11区，Ⅳb層上面で検出し，遺跡北側の丘陵斜面裾部に位置する。２間×３間の建物で柱穴の平均直径25cm，深さ52cmである。建物主軸はN-39°-Wでコンタ線にほぼ直行する。

４号掘立柱建物跡(第58図)

E-11区，Ⅳb層上面で検出し，２間×３間の建物で柱穴の平均直径は24cm，深さ50cmである。

３号掘立柱建物跡の柱穴４を柱穴３，柱穴６を柱穴７として共有している。建物主軸はN-57°-Wである。３号建物跡と切り合い関係をもつが，前後関係については判断できない。

５号掘立柱建物跡(第59図)

E-12区，Ⅳb層上面で検出し，建物は北側に拡がる可能性があるが，削平を受けているため確定できない。建物は検出部で２間×２間で柱穴の平均直径は23cm，深さ60cmである。建物主軸は，遺構が調査区北側へ拡がる可能性を考慮に入れるとN-48°-Wで３号，４号同様にコンタ線にほぼ直交する。

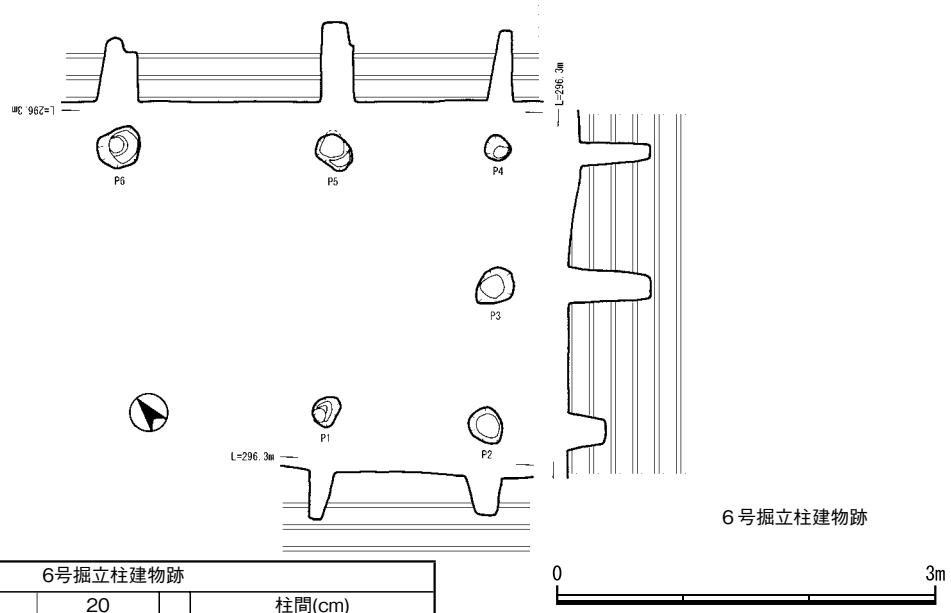
６号掘立柱建物跡(第60図)

F-6区，Ⅳb層上面で検出し，建物は調査区西側に拡がる可能性がある。検出部は２間×２間で，柱穴の平均直径は27cm，深さ63cm，建物主軸はN-51°-Wである。

７号掘立柱建物跡(第61,62図)

C,D-12,13区で，Ⅳb層上面で検出し，北側の丘陵裾部の斜面の一部を掘削し，平坦面を造成している。この造成面は，Ⅳa層上面の精査時点に，Ⅲ層土が方形に落ち込むことから確認された。斜面掘削の範囲は幅9m50cm，奥行き約5m，最大掘削深度約1m50cmで，「コ」字状の平坦面を造り出している。

この平坦面の最奥部には長さ約6m50cm，幅20cm～45cm，



6号掘立柱建物跡					
P1	径(cm)	20		柱間(cm)	
	深さ(cm)	48		P1-P2	160
P2	径(cm)	29		P2-P3	140
	深さ(cm)	38		P3-P4	136
P3	径(cm)	29		P4-P5	164
	深さ(cm)	82		P5-P6	214
P4	径(cm)	21		P6-P7	336
	深さ(cm)	70			
P5	径(cm)	28			
	深さ(cm)	79			
P6	径(cm)	34			
	深さ(cm)	63			

第60図　古代掘立柱建物跡(６)

深さ約4cmの溝が巡る。なお，この溝は，丘陵側からの水の流入を防ぐ目的とみられる。溝の埋土は砂質土で堅く締る。

７号建物跡は他の６棟の建物跡とは異なり，総柱建物風である。柱穴の平均直径は40cmで，柱穴２と柱穴３が67cmと浅く，その他の柱穴は95cm程である。建物主軸は，N-25°-Wで，他の建物跡とはやや方向が異なる。

建物の構造は柱配列，各柱穴の深さ等を考慮に入れればP1,P4～P10,P15,P16が建物外周，P11～P14が建物内部支柱，P2,P3が建物外張り出し柱と想定できる。次に，内部支柱としたP11～P14の柱穴の外側にはそれぞれ焼土跡を，さらに柱間には白化したエリアも確認している。

遺物は，建物跡とその周辺に集中し，赤色顔料を塗彩し肩部に穿孔した小型土師壺，高い脚台をもつ坏，黒色土器，墨書土器，銅製品等特殊な遺物が出土している。一方，建物外の東側の緩斜面には大型の破片が集中している。

遺構内，柱穴からは，炭化材も出土し遺構の性格，上屋構造を解明するひとつの手がかりとなる。

３号焼土(第63図)

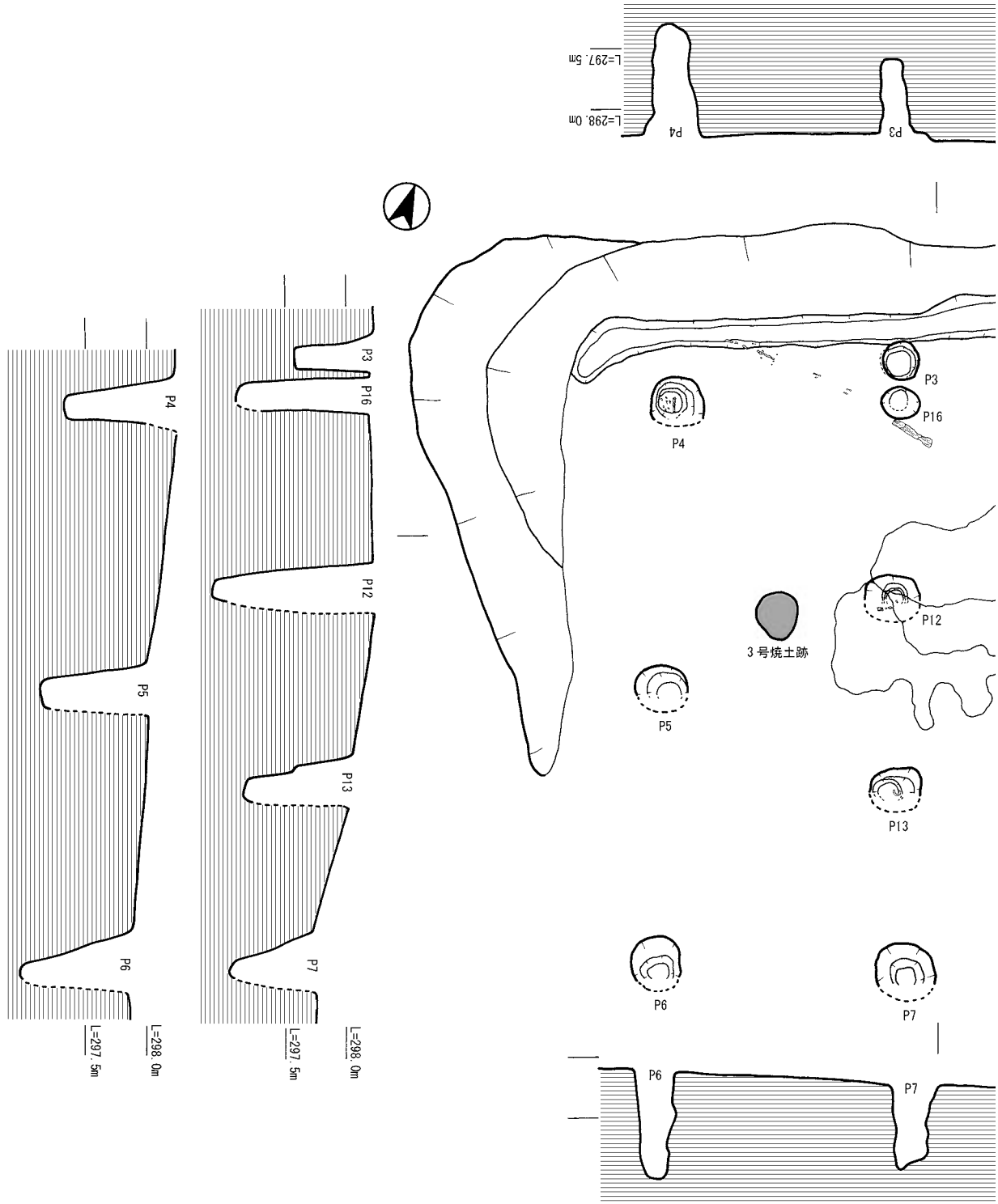
７号掘立柱建物跡の柱穴12の西側で検出し，略円形で直径35cmで，やや硬質で茶褐色を呈する。面的確認はできるが，堆積は薄く，被熱の度合いは比較的軽いと判断される。

４号焼土(第63図)

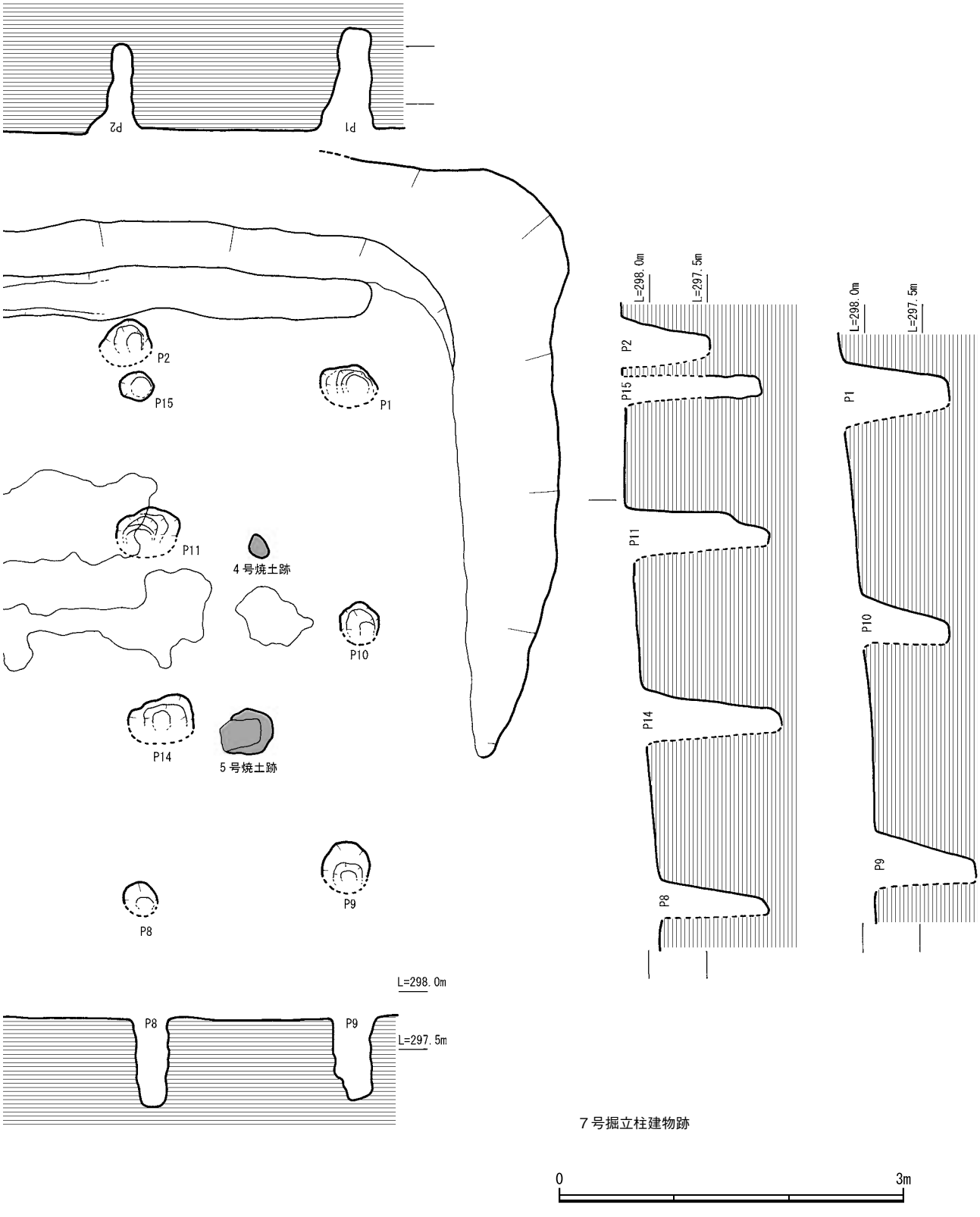
７号掘立柱建物跡の柱穴11の東側で検出し，略円形で直径20cmと若干小さい。土色，被熱の状況ともに３号焼土と酷似する。

５号焼土(第63図)

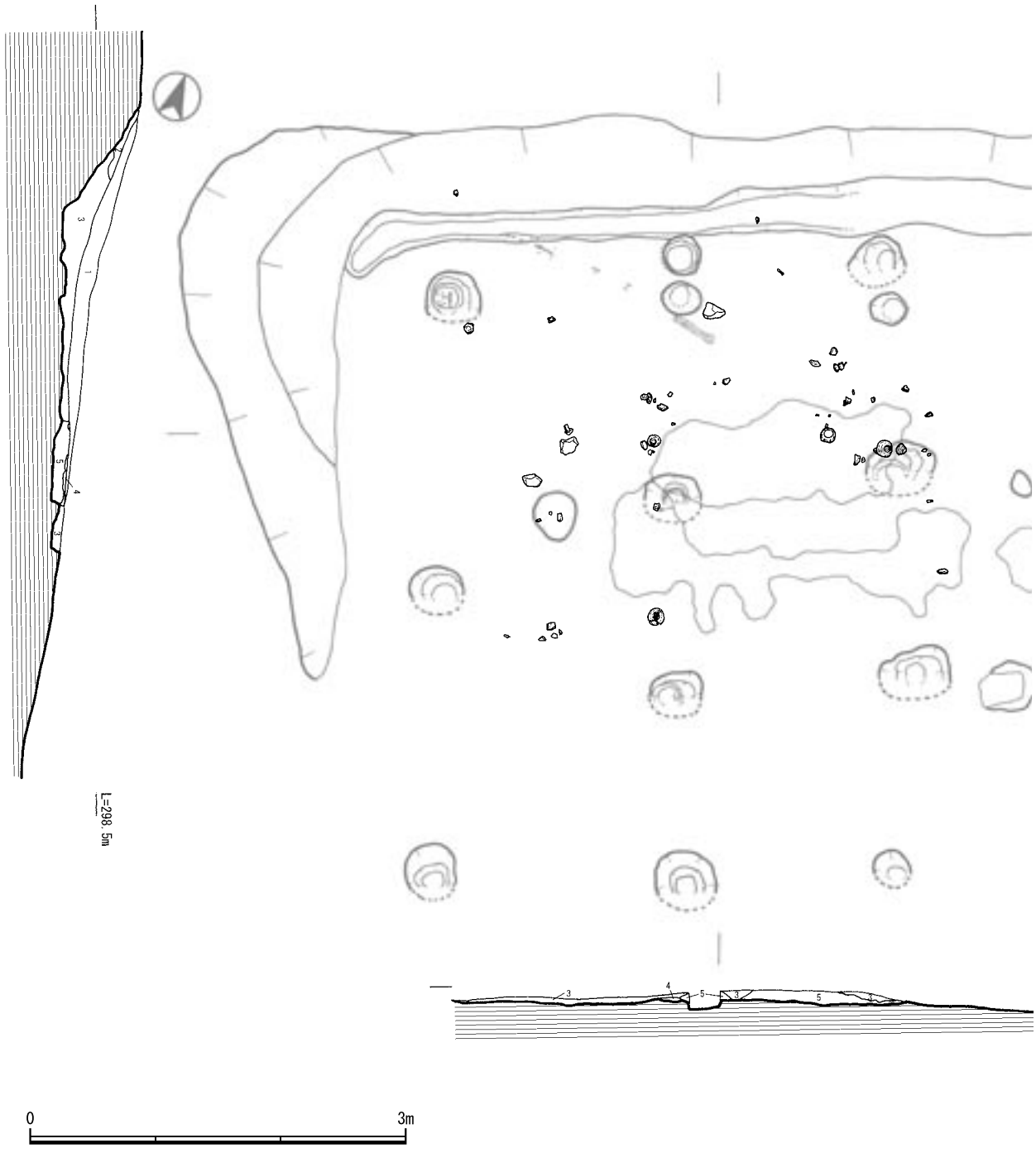
７号掘立柱建物跡の柱穴14の東側で検出し，略円形で直径45cmである。橙褐色の硬質土が表面に観察され，３号，４号焼土と比較すると被熱の度合いが明瞭である。



第61図　古代掘立柱建物跡(7)

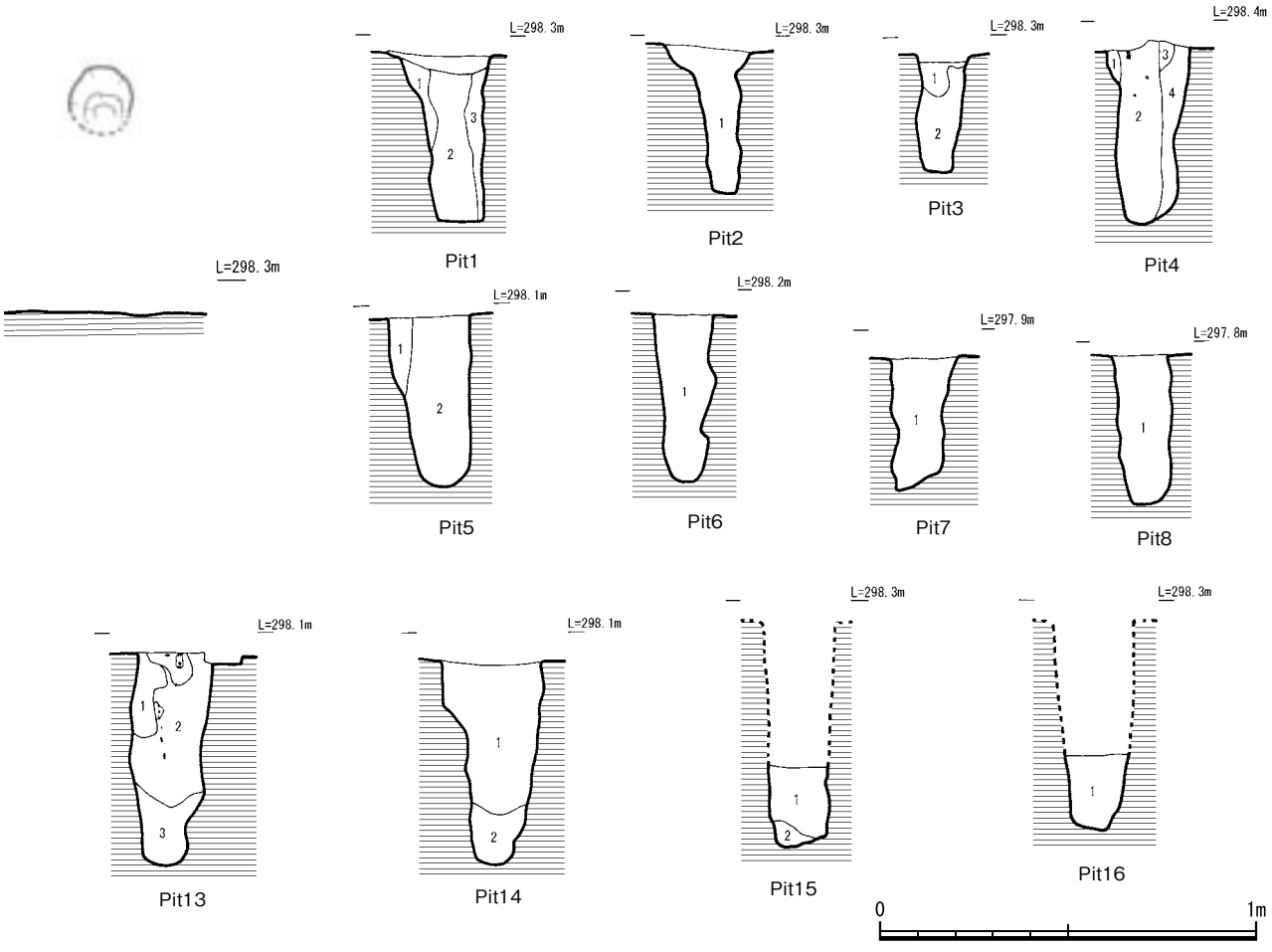

P2
P1
P2
P15
P1
P11
4号焼土跡
P10
P14
5号焼土跡
P9
P8
L=298.0m
L=297.5m
P8
P9
L=298.0m
L=297.5m
P2
P15
P11
P14
P8
L=298.0m
L=297.5m
P1
P10
P9
0
3m

7号掘立柱建物跡



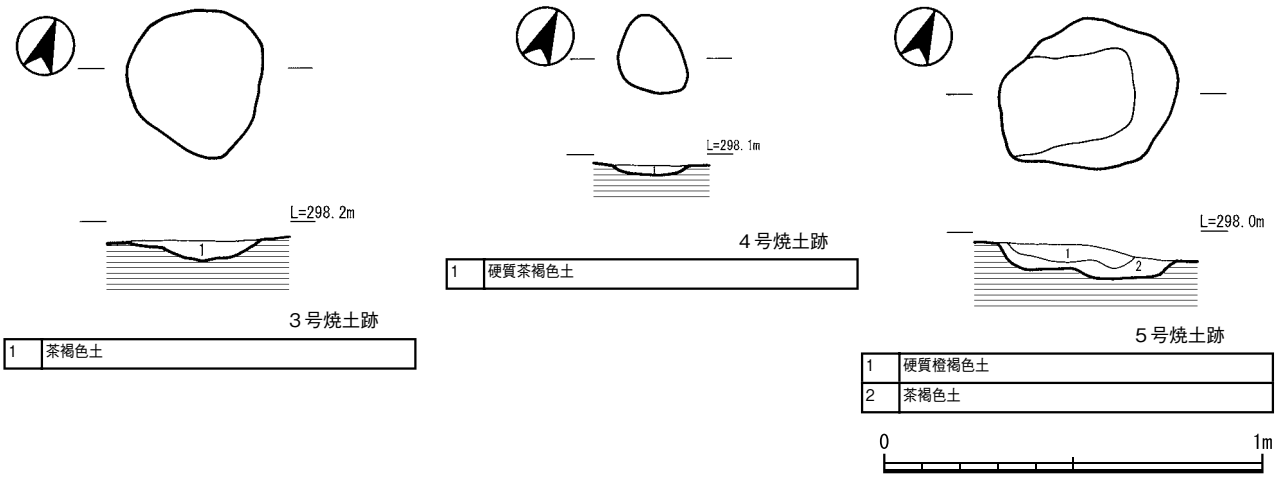
第62図　古代７号掘立柱建物跡埋土状況及び遺物出土状況




L=298.3m
Pit1
L=298.3m
Pit2
L=298.3m
Pit3
L=298.4m
Pit4
L=298.3m
L=298.1m
Pit5
L=298.2m
Pit6
L=297.9m
Pit7
L=297.8m
Pit8
L=298.1m
Pit13
L=298.1m
Pit14
L=298.3m
Pit15
L=298.3m
Pit16
0
1m

7号掘立柱建物跡					
P1	径(cm)	49		柱間(cm)	
	深さ(cm)	88		P1-P2	190
P2	径(cm)	46		P2-P3	156
	深さ(cm)	76		P3-P4	186
P3	径(cm)	29		P4-P5	236
	深さ(cm)	58		P5-P6	222
P4	径(cm)	43		P6-P7	204
	深さ(cm)	92		P7-P8	164
P5	径(cm)	41		P8-P9	182
	深さ(cm)	86		P9-P10	210
P6	径(cm)	32		P10-P1	214
	深さ(cm)	88			
P7	径(cm)	45		P1-P15	180
	深さ(cm)	68		P4-P16	184
P8	径(cm)	30			
	深さ(cm)	78		P2-P15	36
P9	径(cm)	38		P15-P11	130
	深さ(cm)	72		P11-P14	162
P10	径(cm)	30		P14-P8	156
	深さ(cm)	74			
P11	径(cm)	52		P3-P16	34
	深さ(cm)	122		P16-P12	162
P12	径(cm)	45		P12-P13	160
	深さ(cm)	132		P13-P7	148
P13	径(cm)	41			
	深さ(cm)	86		P15-P16	164
P14	径(cm)	56		P11-P12	187
	深さ(cm)	118		P13-P14	190
P15	径(cm)	29			
	深さ(cm)	120		P5-P12	202
P16	径(cm)	31		P5-P13	205
	深さ(cm)	108		P10-P11	200
				P10-P14	194

Pit1	1	横褐色土，黄色パミス少ない
	2	暗茶褐色軟質土
	3	暗茶褐色軟質土，２より赤みが強い
Pit2	1	暗黄褐色土，黄色パミス混入
Pit3	1	暗黄褐色土，黄色パミス混入
	2	暗黄褐色土，１よりパミス少ない
Pit4	1	暗黄褐色軟質土，黄色パミス混入
	2	暗黄褐色土，黄色パミス少ない，2～3cmの炭化物
	3	暗黄褐色土，２よりやや明るい，炭化物なし
	4	暗黄褐色軟質土，黄色パミス混入
Pit5	1	暗黄褐色軟質土，黄色パミス混入
	2	暗黄褐色軟質土，黄色パミス少ない，下位色調やや暗い
Pit6	1	暗黄褐色軟質土，黄色パミス混入
Pit7	1	暗黄褐色軟質土，黄色パミス混入
Pit8	1	暗黄褐色軟質土，黄色パミス少ない
Pit9	1	暗黄褐色軟質土，黄色パミス少ない
Pit10	1	暗黄褐色軟質土，黄色パミス少ない
Pit11	1	黄褐色軟質土，黄色パミス少ない
	2	暗黄褐色土，黄色パミス少ない
	3	暗黄褐色土，２よりやや硬い
	4	灰褐色硬質土
Pit12	1	灰白色軟質土
	2	黄褐色軟質土，黄色パミス少ない
	3	黄褐色軟質土，黄色パミス混入，上位に炭化物
	4	暗黄褐色硬質土，アカホヤがブロック状に混入
Pit13	1	黄褐色軟質土，黄色パミス多い
	2	黄褐色軟質土，上位に炭化物
	3	黄褐色硬質土，アカホヤがブロック状に混入
Pit14	1	黄褐色軟質土，黄色パミス混入
	2	黄褐色硬質土，１より暗い
Pit15	1	黄褐色軟質土
Pit16	1	黄褐色軟質土
	2	橙褐色硬質土，アカホヤが主体である



３号焼土跡

1	茶褐色土

４号焼土跡

1	硬質茶褐色土

５号焼土跡

1	硬質橙褐色土
2	茶褐色土

第63図　７号掘立柱建物跡内焼土

3　古代の出土遺物

出土遺物については，７号掘立柱建物跡に関わる資料(建物内及び北東集中部)と遺跡中央部から南側の平坦面に出土した資料に区分し，記述を行う。また，土師器坏，甕については型式分類し説明を行う。

坏

体部と底部形態の違いにより，ⅠからⅣ類に分類した。

Ⅰ類…底部と体部の境界が明瞭で，底部内面が平坦で，体部は直線的に立ち上がる。

Ⅱ類…底部と体部の境界が不明瞭で厚みがあり，底部断面がやや突出し，体部は若干曲線的に立ち上がる。

Ⅲ類…底部が厚く，下位にやや突出したいわゆる充実高台(円盤状高台，円柱状高台)の様相を呈する。体部はやや曲線的に立ち上がる。

Ⅳ類…Ⅲ類同様充実高台であるが高台部がハの字状に踏ん張る。体部まで接合できた資料はなかった。

甕

内，外面の調整，口縁部形態の違いにより，ⅠからⅣ類に分類した。

Ⅰ類…外面及び内面に器面調整のハケ目が残る。胴部内面のケズリがほぼ縦方向から斜め方向である。縁屈曲が比較的弱く，口縁，胴部の境界に稜線を生じない。

Ⅱ類…外面及び内面にハケ目が残らず，ナデ調整を行う。胴部内面のケズリがほぼ横方向から斜め方向である。縁屈曲がやや発達するがそれほど明瞭ではない。口縁部，胴部の境界に弱い稜線を生ずる。

Ⅲ類…外面及び内面にハケ目が残らず，ナデ調整を行う。胴部内面のケズリがほぼ横方向から斜め方向である。縁屈曲が明瞭で，口縁部，胴部の境界に胴部内面調整の結果による明瞭な稜線が生じる。

Ⅳ類…外面，内面にタタキ痕がみられる。また胴部内面下位縦方向のケズリ調整を施す。１点のみの出土にとどまる。

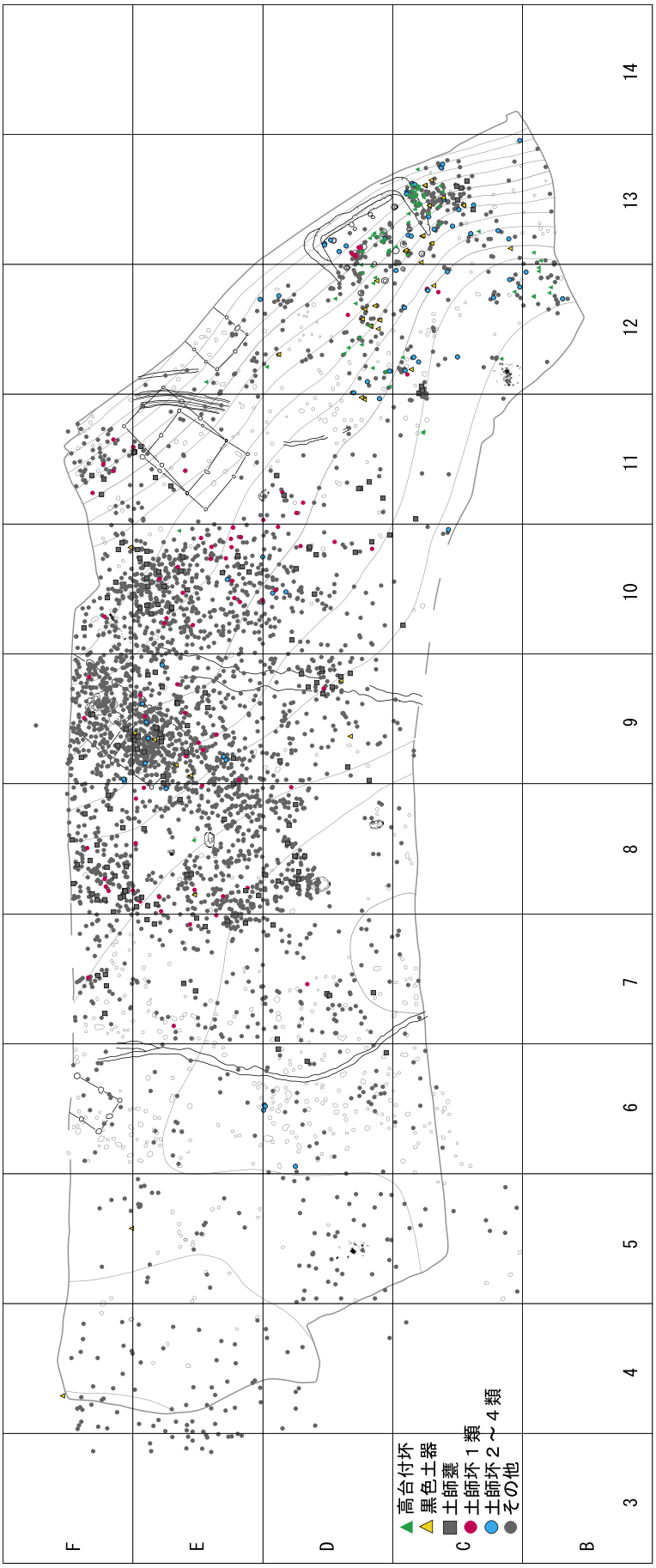
(1)７号掘立柱建物跡とその周辺出土遺物

７号掘立柱建物跡とその東側斜面，南側斜面においては遺物残存状況が良好で接合復元可能なものが多量に出土した

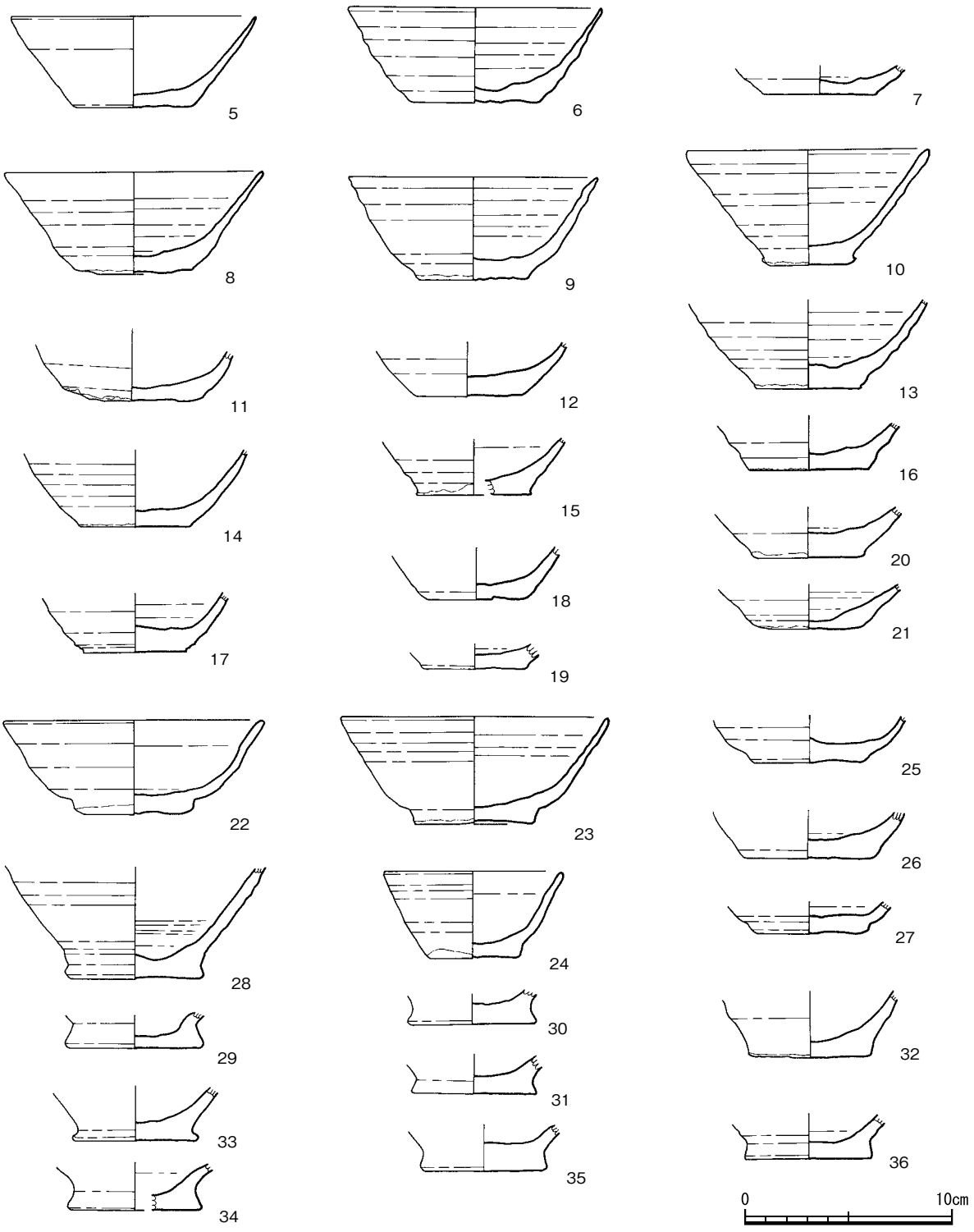
土師器坏

Ⅰ類(第65図，No5～7)

３点とも底部切り離しは，回転ヘラ切りで行わ



第64図　古代遺物出土状況(1/500)



第65図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(土師器坏)

れている。５の器壁は薄く，丁寧にナデられる。６は体部成形時のナデ調整が稜線を残し，底部切り離し痕はそのまま残る。７の底部も同じである。

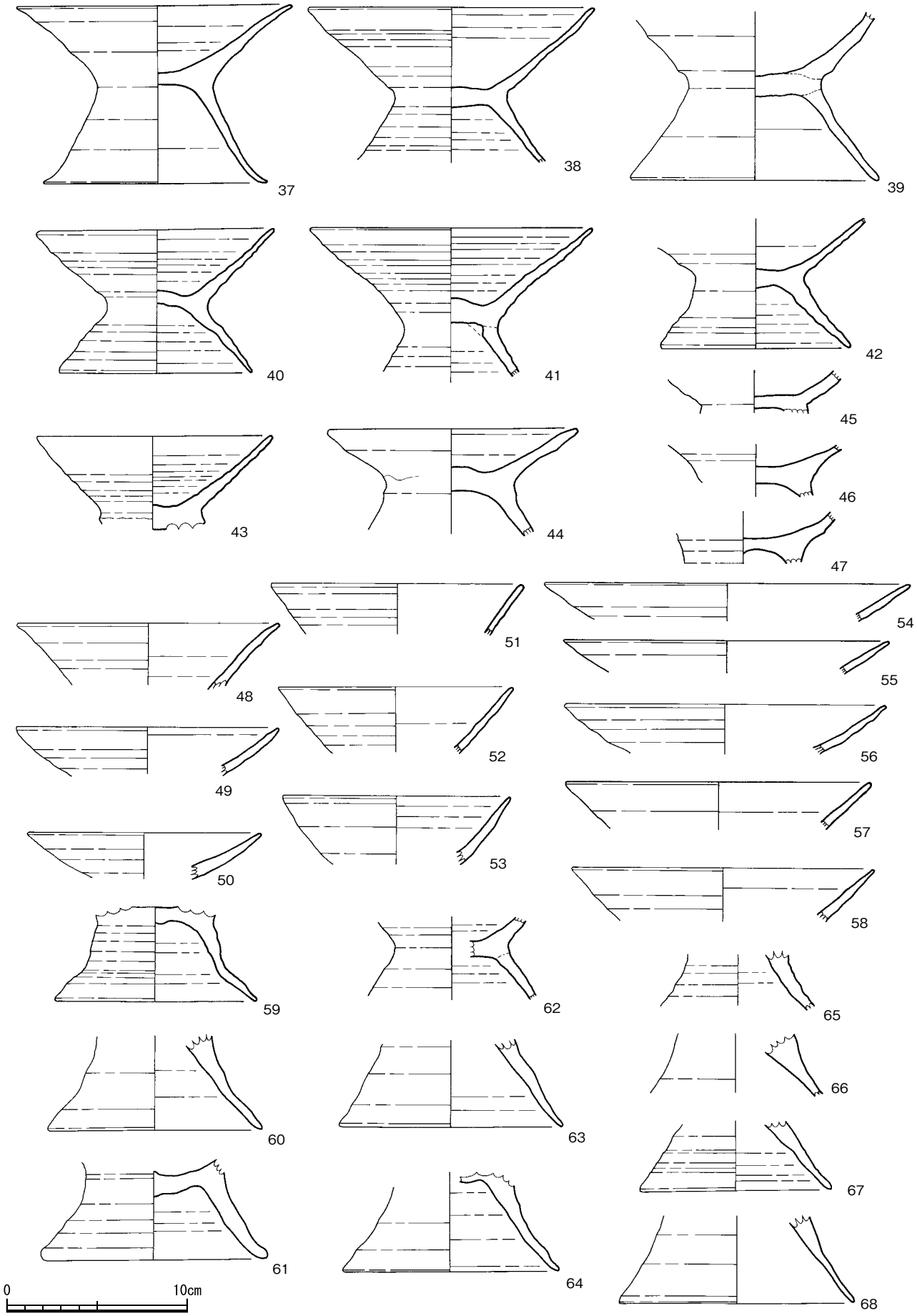
Ⅱ類(第65図，No８～21)

いずれも底部切り離しは，回転ヘラ切りで行われている。

８～10,13,15～17は，体部外面にナデ稜線が残る。８,９の内面中央は指頭により窪む。10は体部は直線的で口唇部がやや肥厚する。12,13,20は底部が厚い。12は内面中央で指頭押さえを行っているがS字切れが発生している。

14は内面全体にススが付着し，18,19は接合片の一部に黒化した二次焼成の跡がみられる。

20は器壁が若干厚い。21の底部は内面中央の指頭押さえが著しく，底部は著しく薄い。



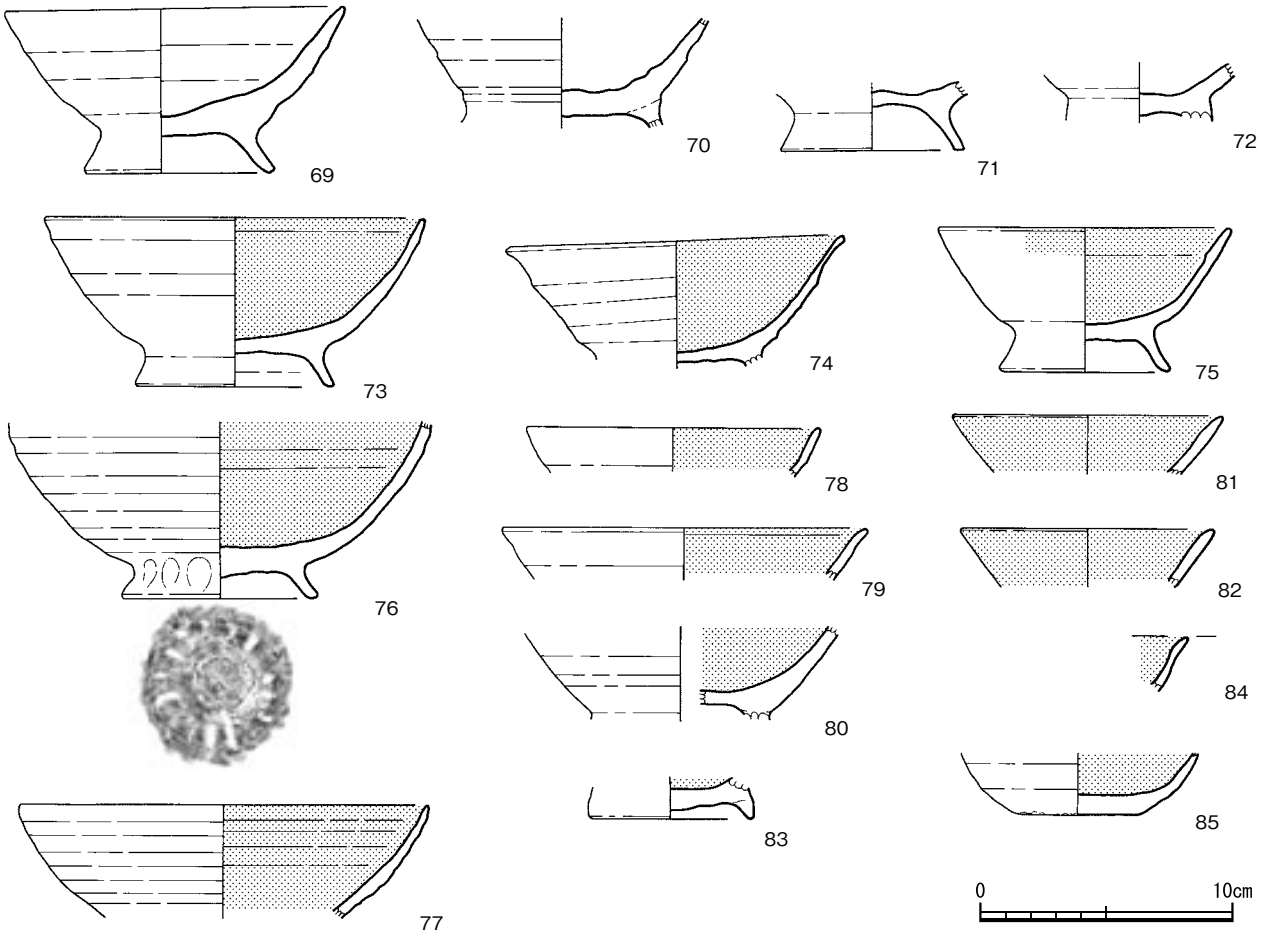
第66図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(土師器高台付坏)

第19表　古代出土遺物観察表(１)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
65	5	4378(C-12/Ⅲb) 5840(C-12/Ⅲa) 5864(C-12/Ⅲa) 5909(C-12/Ⅳa)	(11.8)	4.3	(5.6)	-	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	5YR6/6 (橙)	回転ヘラ切り (反時計回り) 横ナデ	-	-	-	-
	6	5762(D-13/Ⅲa) 5763(D-13/Ⅲa) 5764(D-13/Ⅲa) 10011(D-13/Ⅲ) 10014(D-13/Ⅲ) 10080(D-13/Ⅲ)	(12.1)	4.6	(6.2)	-	精緻	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR7/6 (橙)	-	-	-	-	-
	7	5795(D-12/Ⅲa)	-	(1.4)	(5.6)	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ヘラ切り (時計回り) 回転ナデ	-	-	-	-
	8	5576(C-13/Ⅲa) 5578(C-13/Ⅲa) 10041(C-13/Ⅲ) 10043(C-13/Ⅲ)	(12.5)	4.9	(5.6)	-	精緻	良好	10YR6/2 (灰黄褐)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	9	3382(D-12/Ⅲa)	(12.0)	4.8	(5.5)	-	精緻	良好	2.5Y8/2 (灰白)	10YR8/2 (灰白)	ヘラ切り (時計回り)	-	-	-	-
	10	4412(C-12/Ⅳa)	(11.8)	5.6	(4.5)	-	精緻	良好	10YR8/2 (灰白)	10YR8/3 (浅黄橙)	ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	11	4315(D-12/Ⅲ) 4421(D-12/Ⅲb)	-	(2.6)	7.0	-	精緻,赤	良好	7.5YR7/2 (明褐灰)	7.5YR7/3 (にぶい橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	12	5717(C-13/Ⅲa)	-	(2.6)	5.0	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	13	5586(C-13/Ⅲa) 7号掘立一括(--/-)	-	(4.3)	(4.8)	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ヘラ切り (方向不明)	-	-	-	-
	14	5832(C-12/Ⅲa)	-	(3.7)	(5.3)	-	精緻	良好	N4/ (灰)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止	-	-	-	-
	15	5572(C-13/Ⅲa)	-	(2.7)	(5.6)	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR6/1 (褐灰)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	16	5577(C-13/Ⅲa)	-	(2.2)	(5.8)	-	精緻	良好	10YR7/2 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ヘラ切り (時計回り) 回転ナデ	-	-	○	-
	17	10067(C-13/Ⅲ) 10070(C-13/Ⅲ)	-	(2.9)	(4.8)	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	18	10037(C-13/Ⅲ)	-	(2.5)	(5.0)	-	精緻	良好	7.5YR6/3 (にぶい褐)	7.5YR5/3 (にぶい褐)	回転ヘラ切り (時計回り) 若干ナデ	-	-	-	-
	19	4414(C-12/Ⅲb)	-	(1.3)	4.9	-	精緻	良好 堅緻	10YR7/3 (にぶい黄橙)	5YR7/6 (橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	20	5630(C-13/Ⅲa) 5726(C-13/Ⅲa)	-	(2.5)	(5.4)	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	21	5662(C-13/Ⅲa)	-	(2.2)	(4.8)	-	精緻	良好	5YR7/6 (橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	22	5844(C-12/Ⅲa) 一括(--/-)	(12.6)	4.5	(5.8)	-	精緻,赤黒	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	ヘラ切り (方向不明)	-	-	-	-
	23	5770(D-13/Ⅲa) 5771(D-13/Ⅲa) 10008(D-13/Ⅲ) 10009(D-13/Ⅲ) 10010(D-13/Ⅲ) 7号掘立一括(--/-)	(13.0)	5.2	(5.9)	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ヘラ切り (反時計回り) 若干の静止ナデ	-	-	-	-
	24	10075(D-13/Ⅲ)	8.7	4.2	4.5	-	精緻	良好	10YR6/2 (灰黄褐)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	25	5618(C-13/Ⅲa)	-	(2.2)	(5.1)	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	26	5666(C-13/Ⅲa)	-	(2.3)	(6.0)	-	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	27	5853(C-12/Ⅲa)	-	(1.6)	(5.2)	-	精緻	良好	10YR7/2 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 植物繊維痕あり	-	-	-	-
	28	5681(C-13/Ⅲa)	-	(5.4)	(6.2)	-	精緻	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	29	5841(C-12/Ⅲa)	-	(1.7)	(6.4)	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	30	5614(C-13/Ⅲa)	-	(1.7)	(6.0)	-	精緻	良好	10YR7/2 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-

第20表　古代出土遺物観察表(２)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
65	31	5933(C-12/Ⅳa)	-	(1.9)	(6.0)	-	精緻	良好 堅緻	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR5/1 (褐灰)	回転ヘラ切り (反時計回り)	-	-	-	-
	32	5838(C-12/Ⅲa)	-	(3.2)	(6.0)	-	精緻,微粒	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	33	5724(C-13/Ⅲa)	-	(2.6)	(6.0)	-	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	34	5871(C-12/Ⅲa)	-	(2.3)	(6.2)	0.9	精緻	良好	5YR7/6 (橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明)	-	-	-	-
	35	4377(C-12/Ⅲb)	-	(2.2)	(6.2)	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	36	5856(C-12/Ⅲa)	-	(2.1)	(6.1)	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
66	37	10038(C-13/Ⅲ)	(16.5)	9.8	(11.9)	5.4	精緻	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	2.5Y7/2 (灰黄)	回転ヘラ切り (反時計回り)	-	-	-	-
	38	4417(D-12/Ⅲb) 4418(D-12/Ⅲb) 5828(D-12/Ⅲa)	(15.9)	(8.6)	-	(3.2)	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	(時計回り)	-	-	-	-
	39	4386(C-12/Ⅲb) 4391(D-12/Ⅲb) 4395(D-12/Ⅲb) 4398(D-12/Ⅲb) 5892(B-13/Ⅲa) 5896(B-13/Ⅲa)	-	(9.4)	(13.9)	4.8	精緻	良好	10YR7/2 (にぶい黄橙)	10YR7/2 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	40	5753(D-13/Ⅲa) 10022(D-13/Ⅲ) 10023(D-13/Ⅲ) 10027(D-13/Ⅲ) 10028(D-13/Ⅲ) 10029(D-13/Ⅲ)	12.9	8.0	10.6	3.8	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	41	4403(D-12/Ⅲb) 5574(C-13/Ⅲa) 5583(C-13/Ⅲa) 5591(C-13/Ⅲa) 5597(C-13/Ⅲa) 10040(C-13/Ⅲ) 10050(C-13/Ⅲ)	15.7	(8.0)	-	(2.7)	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	42	10058(C-13/Ⅲ)	-	(7.2)	10.6	3.6	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	43	10047(C-13/Ⅲ) 10049(C-13/Ⅲ) 7号掘立一括(--/-)	13.1	(5.2)	-	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	-
	44	10005(D-12/Ⅲ)	(13.9)	(6.0)	-	(2.4)	精緻	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR7/6 (橙)	-	-	-	-	-
	45	5757(D-13/Ⅲa) 5796(D-12/Ⅲa)	-	(2.6)	(6.0)	-	精緻,赤黒	良好	10YR8/2 (灰白)	10YR8/2 (灰白)	回転ヘラ切り (時計回り)ナデ	-	-	-	-
	46	3367(D-12/Ⅲa)	-	(3.1)	-	-	精緻	良好	10YR8/2 (灰白)	10YR8/2 (灰白)	-	-	-	-	-
	47	5887(B-12/Ⅳa) 一括(--/-)	-	(2.7)	-	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 回転ナデ	-	-	-	-
	48	5621(C-13/Ⅲa)	(14.5)	(3.5)	-	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	49	10030(D-13/Ⅲ) 10076(D-13/Ⅲ)	(14.6)	(2.8)	-	-	精緻,黒赤	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	50	10016(D-13/Ⅲ)	(13.0)	(2.5)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	51	5601(C-13/Ⅲa)	(14.0)	(2.7)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	52	5562(C-13/Ⅲa)	(13.0)	(3.6)	-	-	精緻	良好	10YR8/2 (灰白)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	53	5661(C-13/Ⅲa) 5859(C-12/Ⅳa)	(12.6)	(3.8)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	54	5794(D-12/Ⅲa) 5805(D-12/Ⅲa)	(20.3)	(2.0)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	55	5580(C-13/Ⅲa) 5604(C-13/Ⅲa)	(18.0)	(1.8)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	56	5587(C-13/Ⅲa) 5592(C-13/Ⅲa) 5596(C-13/Ⅲa)	(17.8)	(2.7)	-	-	精緻,黒	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	57	10034(C-13/Ⅲ)	(16.9)	(2.6)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	58	5741(D-13/Ⅲa) 5743(D-13/Ⅲa)	(16.8)	(2.9)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	59	5588(C-13/Ⅲa) 10052(C-13/Ⅲ)	-	(5.2)	(11.1)	4.4	精緻	良好	5YR6/6 (橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-



第67図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(土師器椀・黒色土器)

Ⅲ類(第65図，No22～27)

底部の切り離しは，回転ヘラ切りで，丁寧にナデられる。

22は底部付近で体部が曲線的に立ち上がり口縁部は外反し，23は底部付近で体部が曲線的に立ち上がる。24は全体的に小型である。25,27は内，外面ともに丁寧なナデ調整で仕上げている。

26は内面に若干のススが付着する。

Ⅳ類(第65図，No28～36)

底部の切り離しは，回転ヘラ切り後丁寧にナデ，内，外面は丁寧にナデている。

28～31,35,36は体部と底部の接合部付近を強く押さえ，中央部より窪む。32～34は指頭押さえにより中央部が窪む。

33は底部内面中央にS字切れがみられる。

土師器高台付坏(第66図，No37～68)

高さ3cm～5cm強の高い高台がつき，体部が大きく外開きする一群である。

37は底部内面，外面ともに平坦で，器面のナデ調整も丁寧に仕上げている。口縁部，高台端部ともにやや外反する。38は底部内面，外面ともに中央でやや張り，レンズ状を呈する。器面には成形時のナデ調整による稜線が残る。

39は底部外面は平坦で，S字切れがみられ，器面ナデ調整は丁寧である。

40,41は底部内面が体部側へ張る。器面はナデ調整による稜線が明瞭に残る。41は，製作時半乾きの状態でつまみ上げたのであろう，口唇部につぶれ歪んだ部分がみられる。42は底部外面にやや張る。底部内，外面にS字切れがみられる。

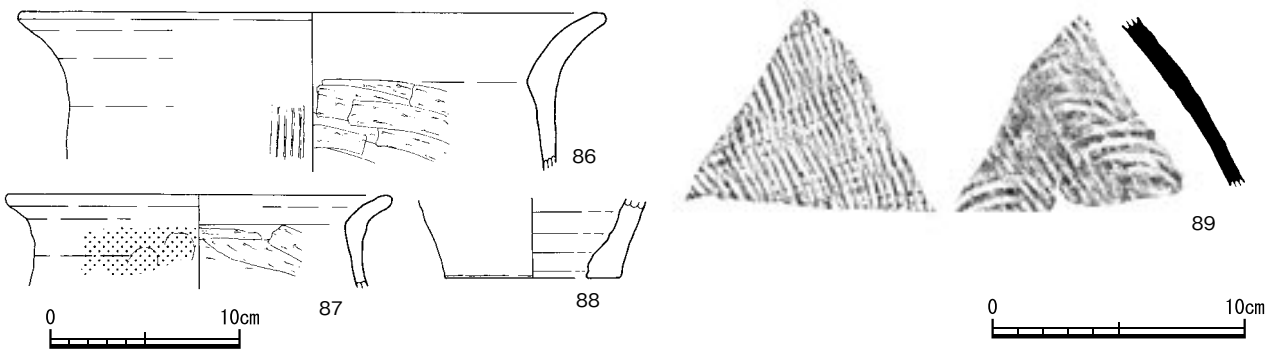
43は高台を完全に欠損し，平坦な接合面をみせる。44は体部高が低く，全体的に器壁が厚い。45～47は体部，高台部の接合部付近で，ほぼ同程度の大きさであろうと推測される。46の底部内，外面にはS字切れがみられる。

48～58は口縁部片である。48～53は口径約13cm～15cmの小型の一群で，54～58は口径約18cm～20cmの大型の一群である。48は口縁部付近でやや外反する。51～53は体部が直線的に鋭角に立ち上がる。54～58は体部が直線的に鈍角に立ち上がる。

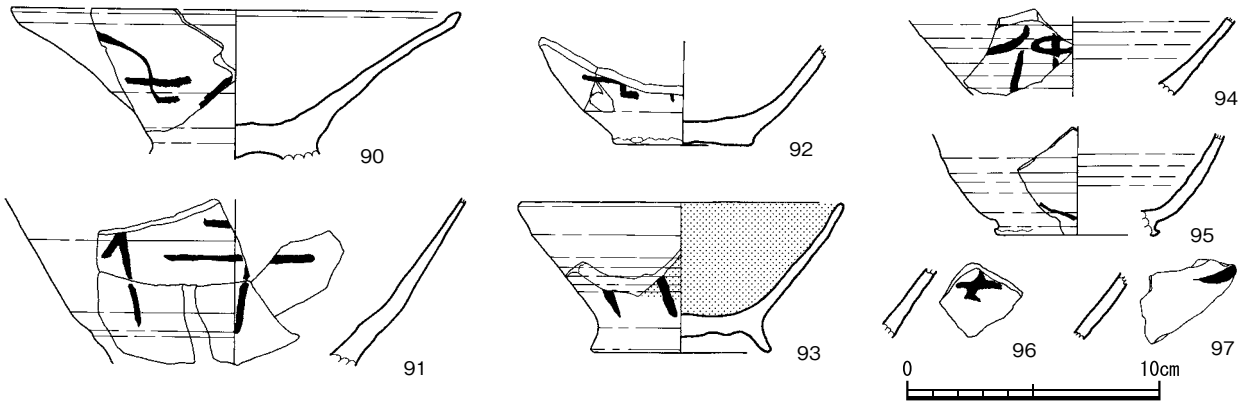
59～68は脚部片である。59,60,64は高台中位で屈曲気味に外反する。61は高台接合部の指押さえ痕が明瞭で，底部外面中央が張り，端部を丸く納める。器壁は厚手である。63,67,68は直線的に開く。65～67は高台径が10cm弱と推測され，他と比べやや小さい。

第21表　古代出土遺物観察表(３)

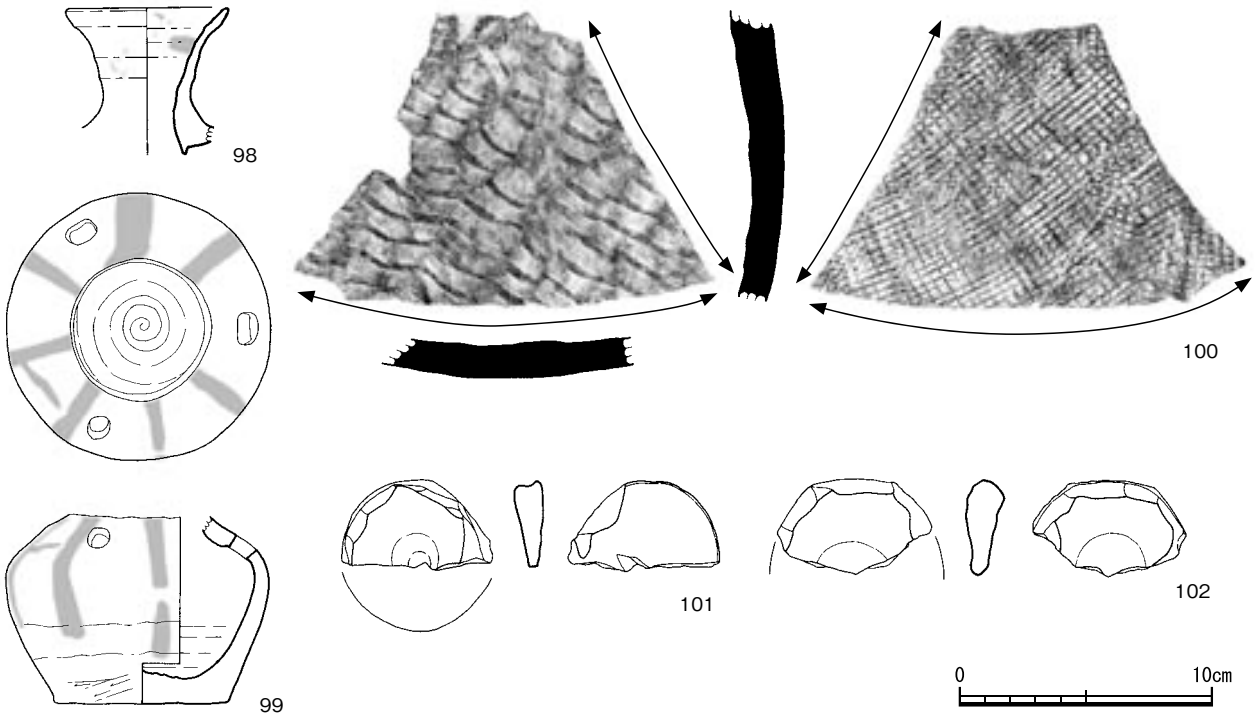
挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
66	60	5581(C-13/Ⅲa) 5599(C-13/Ⅲa) 5613(C-13/Ⅲa) 10044(C-13/Ⅲ)	-	(5.2)	(11.9)	-	精緻	良好	7.5YR8/3 (浅黄橙)	7.5YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	61	10039(C-13/Ⅲ)	-	(5.5)	12.7	4.0	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	62	5938(C-12/Ⅲb) 一括(--/-) 注記なし(--/-)	-	(4.5)	-	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	63	5804(D-12/Ⅲa) 10004(D-12/Ⅲ)	-	(4.9)	12.4	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	64	10057(C-13/Ⅲ)	-	(5.5)	12.0	(4.9)	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	65	5819(D-12/Ⅲa)	-	(3.1)	-	-	精緻,軽石,赤,黒	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	66	5633(C-13/Ⅲa)	-	(3.5)	-	-	精緻,黒赤	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	67	10015(D-13/Ⅲ)	-	(3.9)	10.6	-	精緻,微細礫	良好	2.5Y8/3 (淡黄)	2.5Y8/4 (淡黄)	-	-	-	-	-
	68	5886(B-12/Ⅲa) 5889(B-12/Ⅲa) 5890(B-12/Ⅲa)	-	(4.8)	(13.0)	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
67	69	10054(C-13/Ⅲ) 10055(C-13/Ⅲ)	13.5	6.5	7.6	1.4	精緻,赤	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	70	5683(C-13/Ⅲa) 5697(C-13/Ⅲa) 5713(C-13/Ⅲa)	-	(4.4)	-	-	精緻,赤	良好	5YR7/6 (橙)	5YR7/6 (橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	71	5872(C-12/Ⅲa) 5873(C-12/Ⅲa)	-	(2.7)	(7.2)	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	72	5835(C-12/Ⅲa) 5836(C-12/Ⅲa)	-	(2.2)	-	-	精緻,黒	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	73	5799(D-12/Ⅲa) 5830(D-12/Ⅲa)	(15.1)	6.7	(7.9)	1.3	精緻	良好	N3/ (暗灰)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明)	ミガキ	-	-	-
	74	5590(C-13/Ⅲa) 5682(C-13/Ⅲa) 6459(C-13/Ⅳa) 6461(C-13/Ⅳa) 10056(C-13/Ⅲ)	13.4	(5.2)	-	-	精緻,赤	良好	N3/ (暗灰)	5YR7/8 (橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	ミガキ	-	-	-
	75	5628(C-13/Ⅲa) 10036(C-13/Ⅲ)	(11.6)	5.6	(6.8)	1.2	精緻	良好	N3/ (暗灰)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	ミガキ	-	-	-
	76	5566(C-13/Ⅲa) 5567(C-13/Ⅲa) 5568(C-13/Ⅲa) 5569(C-13/Ⅲa)	-	(7.0)	(7.8)	1.1	精緻	良好	N3/ (暗灰)	10YR6/2 (灰黄褐)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	ミガキ	-	-	-
	77	5817(D-12/Ⅲa) 5818(D-12/Ⅲa)	(16.2)	(4.5)	-	-	精緻	良好	N3/ (暗灰)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	ミガキ	-	-	-
	78	5806(D-12/Ⅲa)	(11.6)	(1.9)	-	-	精緻	良好	N3/ (暗灰)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	ミガキ	-	-	-
	79	5671(C-13/Ⅲa)	(14.6)	(2.1)	-	-	精緻	良好	N3/ (暗灰)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	-	ミガキ	-	-	-
	80	5727(C-13/Ⅲa)	-	(3.4)	(7.2)	-	精緻	良好 堅緻	N2/ (黒)	7.5YR7/6 (橙)	切り離し不明 回転ナデ	ミガキ	-	-	-
	81	10089(C-13/Ⅲ)	(10.7)	(2.3)	-	-	精緻	良好	N3/ (暗灰)	N3/ (暗灰)	-	ミガキ	-	-	-
	82	5624(C-13/Ⅲa)	(10.0)	(2.3)	-	-	精緻	良好	N3/ (暗灰)	N3/ (暗灰)	-	ミガキ	-	-	-
	83	5842(C-12/Ⅲa)	-	(1.6)	(6.6)	0.6	精緻	良好	2.5Y5/1 (黄灰)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	84	5814(D-12/Ⅲa)	-	(2.0)	-	-	精緻	良好	N2/ (黒)	2.5Y7/2 (灰黄)	-	ミガキ	-	-	-
	85	4376(C-12/Ⅲb) 5811(D-12/Ⅲa) 5826(D-12/Ⅲa)	-	(2.4)	(5.0)	-	精緻	良好	N3/ (暗灰)	2.5Y7/3 (浅黄)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	ミガキ	-	-	-



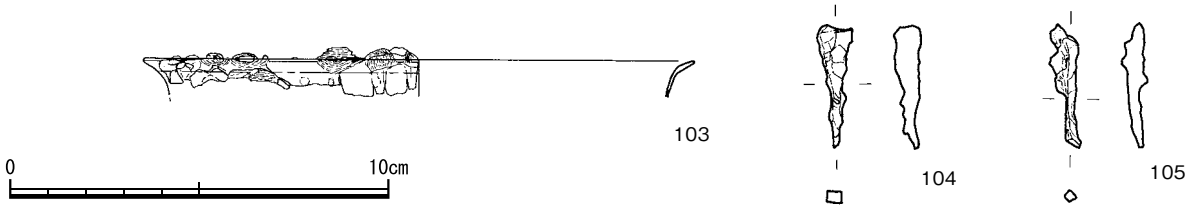
第68図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(土師器甕・甑・須恵器甕)



第69図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(墨書土器)



第70図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(土師器小型壺・猿面硯・紡錘車)



第71図　掘立柱建物跡７号内及び周辺出土遺物実測図(鉄製品)

土師器椀(第67図，No69～72)

69は高台の取り付けが粗雑なため，体部が傾き，器壁は厚い。

70は体部が直線的に開く。胎土は69と同様で赤色粒が多く混入する。71,72は現存部において体部が大きく開くように立ち上がる。71は高台端部が平坦面をもつ。

黒色土器(第67図，No73～85)

73～76は内面に丁寧なミガキ調整が施され，底部外面もナデ調整により丁寧に仕上げられている。

74は高台を欠損し，口縁部はわずかに外反する。75は口縁部外面まで黒化処理がなされる。

81,82は75と同一個体の可能性が高い。76は高台内，外面に指頭圧痕がみられる。

77は76と同一個体と思われる。

79と80も同一個体で，口縁部でわずかに外反し，74と同様な器形と思われる。83の高台は6mmと非常に低い。

84,85は同一個体と思われ，口縁部はわずかに外反し，高台をもたない坏である。

土師器甕(第68図，No86,87)

86はⅡ類に分類される。口縁部内，外面，体部外面ともに丁寧な横ナデ調整が行われ，外面にはかすかに縦ハケの痕跡を残す。

87はⅢ類に分類される。口径約20.4cmと小型で，口縁部内面に横方向のケズリで明瞭な稜線が形成され，外面に若干ススが付着する。

土師器甑(第68図，No88)

底径9.4cmで器壁が厚く，底部が全て抜け落ちるタイプの甑である。

須恵器甕(第68図，No89)

外面は平行タタキ，内面は平行タタキと同心円状タタキがみられる甕肩部であると思われる。

墨書土器(第69図，No90～97)

90は高台付坏の体部で，底部内，外面ともにS字切れがみられる。

墨書は体部に倒位に「仟」が書かれる。隷書体風の特異な書風をみせ，何らかの宗教的，祭祀的な意味をもつ墨書と推定される。

92,96も90と同一文字の一部で，倒位に書かれる。

91は□□２文字もしくは大きく「仟」と１文字正位に書かれている。

94の墨書は肉眼ではほとんど判別できない。赤外線写真で「仲」と判別できる。高台付坏の体部と思われる破片に正位に書かれる。

93,95,97は墨書の痕跡がうかがえるものである。

土師器小型壺(第70図，No98,99)

98は口縁部片である。内，外面ともにわずかに赤色顔料が残存する。

99は頸部から上位を欠損する小型の壺である。肩部に製作当初から穿たれた円形から楕円形の穿孔が３か所存在する。体部外面には赤色顔料により縦方向に７条の彩色を施す。香炉的な使用法が推測されるが，内面にはスス等の付着は全くみられない。

猿面硯(第70図，No100)

100は須恵器甕胴部片を利用した転用硯である。外面に格子目状タタキ，内面に間隔の広い平行状タタキが施される。破断面４面の内，２側面は明らかに研磨され面取りが行われている。内面の一部は磨滅してなめらかである。肉眼観察では一部黒みを帯びるが，赤外線照射による観察では墨の反応は観察されない。

紡錘車(第70図，No101,102)

101は充実高台の土師器坏底部を再利用し，体部を打ち欠き紡錘車へ転用しようとする未製品である。

102は土師器椀高台と体部を打ち欠いた未製品である。

鉄製品(第71図，No103～105)

103は全面に緑青がつく銅製品である。弯曲する板状の製品で端部で如意状に曲がる。復元形状は端部に向かいハの字状に開く椀を想定できる。復元口径14.5cmで，体部の厚さは0.5mmと非常に薄く，端部は厚さ2mmと体部に比べ厚手に仕上げられている。

104,105は鉄釘である。断面形状は四角である。

第22表　古代出土遺物観察表(４)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
68	86	5675(C-13/Ⅲa) 5703(C-13/Ⅲa) 5704(C-13/Ⅲa) 5718(C-13/Ⅲa) 10065(C-13/Ⅲ)	(38.5)	(7.9)	-	-	砂	良好 堅緻	7.5YR6/4 (にぶい橙)	5YR5/4 (にぶい赤褐)	-	-	-	-	器厚 (7～15mm)
	87	5901(C-13/Ⅲa) 4359(C-12/Ⅲb) 4363(C-12/Ⅲb) 4368(C-12/Ⅲb)	(20.4)	(4.9)	-	-	精緻,細砂	良好	7.5YR5/3 (にぶい褐)	7.5YR4/2 (灰褐)	-	-	-	-	器厚 (5～11mm)
	88	5735(D-13/Ⅲa) 5736(D-13/Ⅲa) 5737(D-13/Ⅲa)	-	(4.1)	(9.4)	-	精緻,石	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	-
	89	5820(D-12/Ⅲa) 5821(D-12/Ⅲa)	-	(3.9)	-	-	精緻,長石	良好 堅緻	7.5Y3/2 (オリーブ黒)	7.5Y3/2 (オリーブ黒)	-	同心円タタキ	平行タタキ	-	-
69	90	5611(C-13/Ⅲa) 5670(C-13/Ⅲa) 10068(C-13/Ⅲ)	(17.8)	(6.0)	-	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	(方向不明) ナデ	-	-	-	「仟」
	91	5845(C-12/Ⅲa) 表採(--/-)	-	(6.5)	-	-	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	92	5615(C-13/Ⅲa) 6465(C-13/Ⅳa)	-	(3.9)	(5.6)	-	精緻	良好	2.5Y8/3 (淡黄)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	93	5602(C-13/Ⅲa) 5632(C-13/Ⅲa) 5706(C-13/Ⅲa) 5708(C-13/Ⅲa) 5709(C-13/Ⅲa) 10060(C-13/Ⅲ) 10074(C-13/Ⅲ)	(12.4)	6.0	(7.2)	0.8	精緻	良好	N2/ (黒)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	ミガキ	-	-	-
	94	7号掘立一括(--/-)	-	(3.1)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	「仲」
	95	4185(C-12/Ⅳa)	-	(4.1)	(6.5)	-	精緻	良好	10YR8/2 (灰白)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	96	5654(C-13/Ⅲa)	-	-	-	-	精緻	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	97	5674(C-13/Ⅲa) 一括(--/-)	-	-	-	-	精緻	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
70	98	10024(D-13/Ⅲ)	(6.5)	(5.9)	-	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	99	10026(D-13/Ⅲ)	-	(7.5)	6.9	-	精緻	良好 堅緻	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	100	4342(C-11/Ⅲb) 4371(C-12/Ⅲb)	-	(11.0)	-	-	精緻	良好	2.5Y6/1 (黄灰)	2.5Y6/1 (黄灰)	-	平行タタキ	格子タタキ	-	猿面硯

第23表　古代出土遺物観察表(５)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	胎土	焼成	色調(外)	備考
70	101	5874(C-12/Ⅲa)	6.0	1.2	(23.7)	精緻,赤	良好	10YR8/3(浅黄橙)	紡錘車
	102	4307(D-12/Ⅲ)	-	1.4	(23.8)	精緻,赤	良好	10YR8/3(浅黄橙)	紡錘車
71	103	5895(C-13/Ⅳa)	14.6	(1.0)	(7.9)	-	-	-	銅

第24表　古代出土遺物観察表(６)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	備考
71	104	10025(D-13/Ⅲ)	(3.1)	0.4	(1.3)	釘
	105	10086(D-13/Ⅲ)	(2.8)	0.2	(1.0)	釘

(２)調査区出土の遺物

遺物はⅢ層からⅣ層上位に出土し，分布状況は１号，２号掘立柱建物跡を検出したE,F-8～10区，遺跡中央部と遺跡北側傾斜面に集中する。

土師器坏

土師器坏は，Ⅰ類が平坦面に，Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ類が遺跡北側傾斜面寄りに偏在する。

Ⅰ類(第72図，No106～138)

106,107,110は口縁部でやや外反し，106は体部下位を手持ちヘラケズリする。107は体部外面下端をヘラケズリする。

109,111～113は器高4～5cmで体部が直線的に立ち上がる。112,113は体部外面下端をヘラケズリし，113は底部切り離しヘラ切り痕をナデ消している。

117,118は器高3.5cm程度でやや低く，胎土内に赤色の大粒が目立つ。

108,114～116は胎土に白色粒，赤色の大粒が目立つ。

114～116は器高約3cmで浅い。

119は口縁部片で109とほぼ同様の器形に復元でき，内面に厚くススが付着し，体部外面下端はヘラケズリする。

120～138は底部で，120～126は底径8cm前後とやや大ぶりである。120,121は胎土に赤色の大粒が目立つ。

127～131は底径7cm前後で復元できた個体とほぼ同程度である。129は内面に厚くススが付着し，119と同一個体と思われる。

132,133は体部の傾きがやや鈍角である。

134は底径6cm，135は底径5cmとややこぶりである。

136～138は底径9cm前後と大きい。体部下位はやや曲線的に立ち上がる。底部切り離しヘラ切り痕跡は丁寧なナデにより消される。

Ⅱ類(第72図，No139～147)

139のみ完形に復元でき，体部内，外面，底部ともに丁寧にナデられる。

140は胎土が粗で，体部下端にヘラケズリ痕が残る。142,143は底部のヘラ切り痕跡は丁寧にナデ消される。

146は底部径7.6cmとやや大きい。147は底部の張り出しがやや大きい。

Ⅳ類(第72図，No148～150)

148～150は底部のヘラ切り痕を丁寧にナデ消している。150は底径8cmとやや大きい。

土師器高台付坏(第73図，No151～155)

151は口縁部片で口径13.6cmである。152～155は高台部片である。152は高台端部がやや外反し，底部外面にS字切れが残る。153,155の高台は直線的で，成形時ナデ調整による稜線が明瞭に残る。

土師器椀(第73図，No156～168)

158の底部外面のみ平坦面がなく，中央部からそのまま高台端部へとなだらかに続く。

156,159は外面に成形時のナデによる稜線を明瞭に残し，体部内面，底部外面は丁寧にナデている。159の高台接地面は平坦で，底部外面にはS字切れが生じ，その補修のため指ナデを行った形跡が認められる。

157,160,161は全体を丁寧なナデで仕上げる。

166～168は体部片で166は外面にススが付着する。168は器壁が厚く，体部底径が8.6cmと大きい。

黒色土器(第73図，No169～177)

169～171は高台をもたず，体部が曲線的に立ち上がる。169は口縁部に１条の界線が巡る。170,171は底部，体部外面を丁寧にナデている。

173～176は高台を有する椀で，174の底部外面は平坦である。173,175,176は高台接合部のナデ調整が強く底部中央がやや膨らみ，底部外面のナデはやや粗である。

177は体部の開きが大きい高台付の皿で，底部外面は丁寧なナデにより，中央は緩やかな凹面を呈し，高台端部は断面三角形を示す。

土師器皿(第74図，No178,179)

１号，２号掘立柱建物跡周辺で出土し，178は口径19cm，深さ9mmで，底面は平坦に仕上げられ安定感がある。

179は口径14cmで深さ7mmで底面にやや丸みがあり，若干不安定である。

土師器鉢(第74図，No180)

土師器鉢は１点のみの出土で，１号，２号掘立柱建物跡周辺で出土している。

180は口径30.3cm，口縁部で外反し内面の屈曲部に稜線を有する。体部内面には横位の強い指ナデ痕がみられる。体部外面には指頭圧痕が顕著で，屈曲部付近にススの付着がみられる。口縁部内面にもススが付着する。

焼塩壺(第74図，No181～190)

１号，２号掘立柱建物跡を中心に広範囲で出土した。完全に復元できたものは無く，口縁部形状と底部から底部の丸まった逆円錐形状の器形が想定される。

181～184,188,189は口唇部が外に傾き，三角形を呈する。185の口唇部は外に傾き，平坦面をもち，186,187では丸く仕上げる。

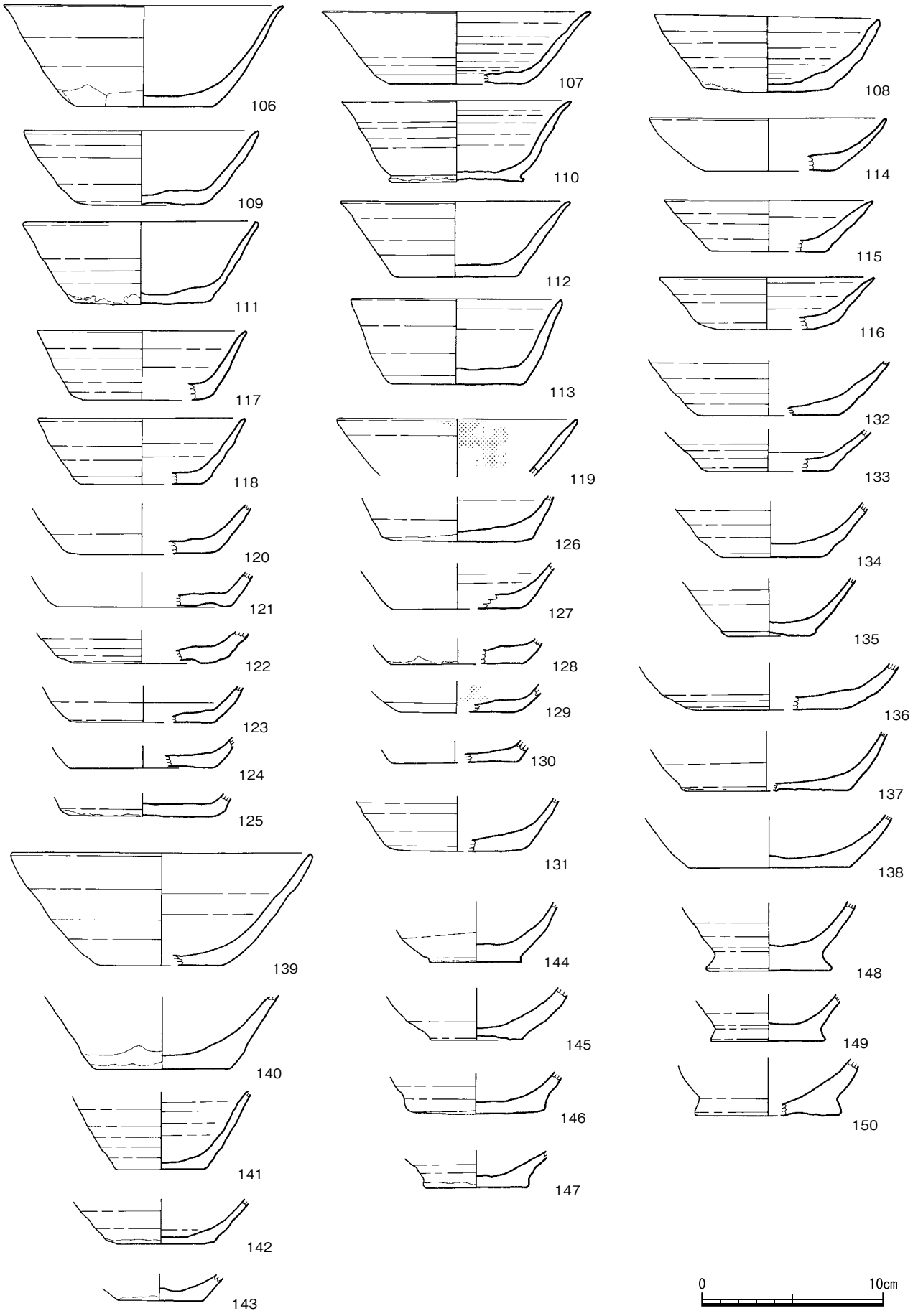
内部の布目痕は繊維間1mm弱の目の細かいものが残される。182は布目の繊維が他と比べ太く，布目間隔が5mm程度に広がっているところがみられる。

胎土中には小礫の混じるものが多い。

紡錘車(第75図，No191～199)

191～193は中央を穿孔し，外周は面取した完成品である。

194～199は未製品であろう。194は穿孔途上で，195,196は坏体部を打ち欠き円盤を作成したと思われる。197～199は円盤の外縁を研磨している。未製品も含めて製品の平均的な直



第72図　古代出土遺物実測図(土師器坏)

第25表　古代出土遺物観察表(7)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
72	106	1219(D-11/Ⅲ) 1367(D-11/Ⅲ) 1368(D-11/Ⅲ)	(15.4)	5.6	(7.6)	-	精緻,黒	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	○	-
	107	1076(E-10/Ⅲ) 1089(E-10/Ⅲ) 1168(E-10/Ⅲ)	(14.8)	4.0	(7.5)	-	精緻	良好 堅緻	7.5YR7/4 (にぶい橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	(時計回り) 静止ナデ	-	-	○	-
	108	1043(E-10/Ⅲ) 1093(E-10/Ⅲ) 1234(D-10/Ⅲ) 1260(D-10/Ⅲ) 1553(E-10/Ⅲ) 1581(D-11/Ⅲ) 1811(E-9/Ⅲ) 一括(--/-)	12.2	4.3	7.2	-	精緻	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ヘラ切り (方向不明)	-	-	-	-
	109	2427(E-8/Ⅲ) 3036(F-9/Ⅲb)	(13.0)	4.1	(6.6)	-	精緻,赤	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR7/6 (橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	110	335(E-9/Ⅲ) 2064(E-8/Ⅲ) 2579(F-8/Ⅲ) 2581(F-8/Ⅲ) 3282(F-11/Ⅲa) 5439(D-7/Ⅲb)	(12.5)	4.5	(7.2)	-	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	ヘラ切り (時計回り) ナデ	-	-	-	-
	111	1491(E-10/Ⅲ) 1507(E-10/Ⅲ) 1893(D-9/Ⅳ) 3203(D-8/Ⅲb) 一括(--/-)	(12.7)	4.6	(8.0)	-	精緻,黒	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	ヘラ切り (反時計回り) ナデ	-	-	-	-
	112	2277(E-8/Ⅲ) 3977(E-7/Ⅲ)	(12.3)	4.1	(6.6)	-	精緻,黒	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り)	-	-	○	-
	113	1753(E-9/Ⅲ) 2411(E-8/Ⅲ) 2491(F-8/Ⅲ) 2577(F-8/Ⅲ)	(11.6)	4.7	(7.2)	-	精緻	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止	-	-	○	-
	114	1578(E-10/Ⅲ)	(13.0)	2.9	(7.0)	-	精緻,赤	良好	7.5YR7/6 (橙)	5YR7/6 (橙)	(方向不明) ナデ	-	-	-	-
	115	2384(E-8/Ⅲ)	(11.6)	2.8	(6.4)	-	精緻,赤	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR7/6 (橙)	(方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	116	1562(E-10/Ⅲ)	(11.8)	2.9	(7.6)	-	精緻	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	117	1841(E-9/Ⅲ)	(11.6)	3.8	(8.0)	-	精緻,赤	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR7/6 (橙)	-	-	-	-	-
	118	?(--/-)	(11.4)	3.6	(6.6)	-	精緻	良好	5YR6/6 (橙)	5YR6/6 (橙)	ヘラ切り (方向不明)	-	-	○	-
	119	890(E-10/Ⅲ)	(13.3)	(3.2)	-	-	精緻	良好	7.5YR7/6 (橙)	5YR7/6 (橙)	-	-	-	-	-
	120	3857(E-7/Ⅲ) 一括(--/-)	-	(2.7)	(7.8)	-	精緻	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR7/6 (橙)	-	-	-	-	-
	121	3968(E-7/Ⅲ)	-	(1.9)	(10.0)	-	精緻	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	10YR7/2 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	122	826(F-10/Ⅲ) 4206(F-11/Ⅳa)	-	(1.8)	(7.9)	-	精緻	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	123	729(F-9/Ⅲ) 2844(E-9/Ⅳ)	-	(2.0)	(7.8)	-	精緻,砂	良好	7.5YR7/6 (橙)	5YR6/6 (橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	124	963(E-10/Ⅲ) 2006(E-10/Ⅳ)	-	(1.7)	(8.0)	-	精緻	良好	2.5YR7/6 (橙)	5YR7/6 (橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	125	2425(E-8/Ⅲ) 2715(E-8/Ⅲ)	-	(1.3)	(8.2)	-	精緻,細砂	良好	10YR8/2 (灰白)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	126	2219(E-8/Ⅲ) 2559(F-8/Ⅲ)	-	(2.5)	(6.8)	-	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR7/6 (橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止	-	-	-	-
	127	3818(F-7/Ⅲ)	-	(2.5)	(8.0)	-	精緻	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR7/6 (橙)	(方向不明) ナデ	-	-	-	-
	128	358(E-9/Ⅲ)	-	(1.5)	(7.8)	-	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	129	1142(E-10/Ⅲ)	-	-	(6.5)	-	精緻	良好	7.5YR7/8 (黄橙)	5YR7/6(橙)	-	-	-	○	-
	130	3275(F-11/Ⅲa)	-	(1.2)	(7.0)	-	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	131	1387(E-10/Ⅲ) 1388(E-10/Ⅲ) 1559(E-10/Ⅲ)	-	(3.0)	(7.8)	-	精緻,赤	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR7/6 (橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-

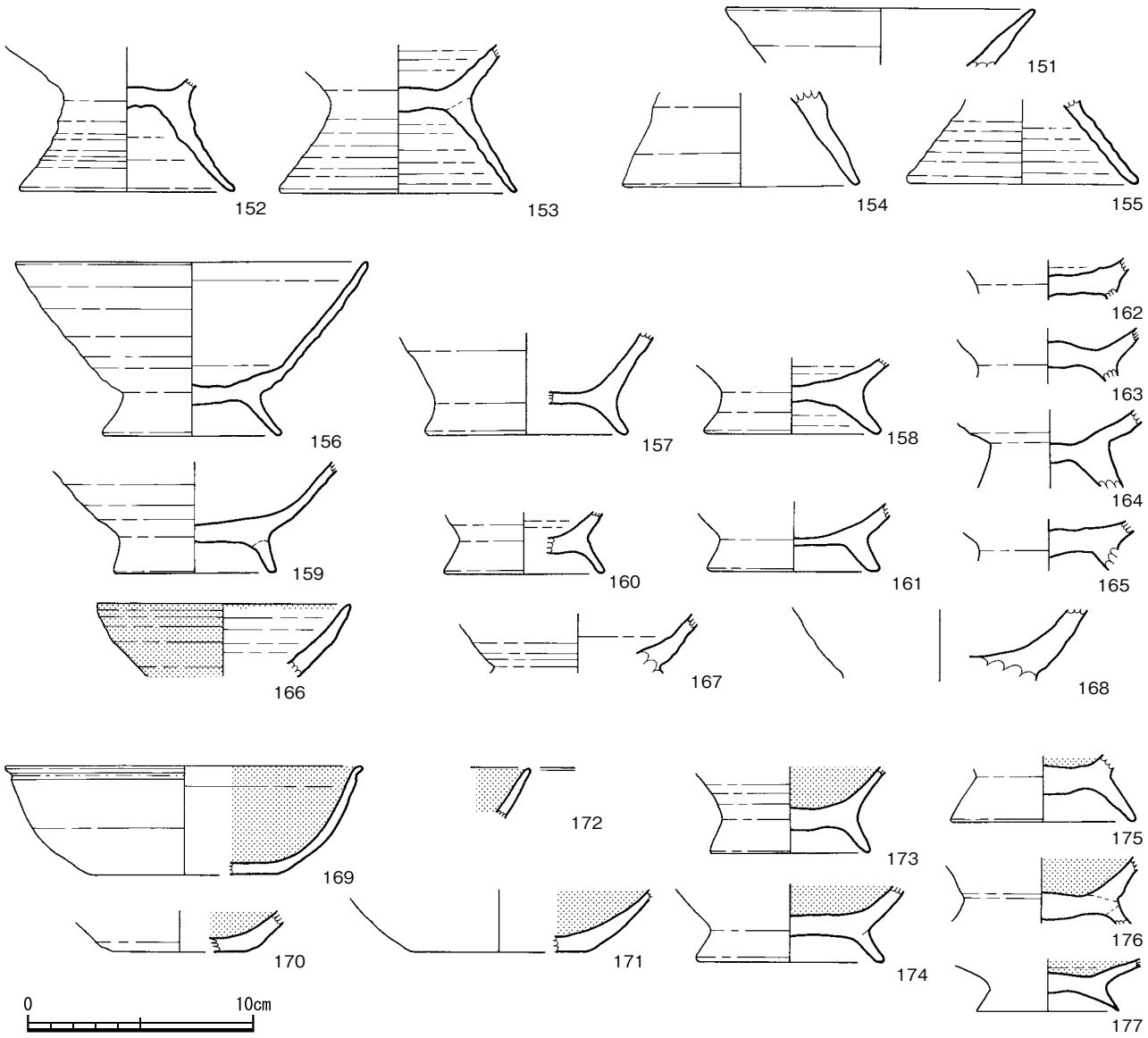
第26表　古代出土遺物観察表(８)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
72	132	3309(F-11/Ⅲa) 3313(F-11/Ⅲa)	-	(3.0)	(7.9)	-	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	ヘラ切り (時計回り) 回転ナデ	-	-	-	-
	133	2709(E-8/Ⅲ)	-	(2.3)	(6.8)	-	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	ヘラ切り (方向不明)	-	-	-	-
	134	3941(E-8/Ⅲ)	-	(3.1)	(5.5)	-	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	○	-
	135	4298(E-11/Ⅳa)	-	(3.2)	(4.5)	-	精緻	良好	5YR7/6 (橙)	5YR7/6 (橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	○	-
	136	2629(E-9/Ⅲ) 2792(F-9/Ⅳ)	-	(2.6)	(9.4)	-	精緻,黒	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	137	1143(E-10/Ⅲ) 1291(D-10/Ⅲ) 1298(D-10/Ⅲ) 1306(D-10/Ⅲ)	-	(3.3)	(9.4)	-	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	138	485(E-9/Ⅲ) 498(E-9/Ⅲ) 889(E-10/Ⅲ)	-	(2.9)	(8.8)	-	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	139	509(E-9/Ⅲ) 1718(E-9/Ⅲ) 1933(E-9/Ⅳ) 2632(E-8/Ⅲ) 2882(E-9/Ⅳ)	(16.6)	(6.2)	(7.4)	-	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) ナデ	-	-	-	-
	140	3548(D-6/Ⅳa)	-	(4.0)	(7.3)	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	○	-
	141	3343(E-12/Ⅲa)	-	(4.3)	(4.8)	-	精緻	良好	10YR7/2 (にぶい黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	142	4388(D-12/Ⅲb)	-	(2.5)	(6.0)	-	精緻	良好	10YR7/2 (にぶい黄橙)	10YR7/2 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	143	259(E-9/Ⅲ) 260(E-9/Ⅲ)	-	-	5.0	-	精緻,石	良好	10YR4/3 (にぶい黄褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	不明	-	-	-	-
	144	3603(D-6/Ⅲ) 3604(D-6/Ⅲ) 3605(D-6/Ⅲ)	-	-	5.0	-	精緻	良好	10YR8/2 (灰白)	10YR8/2 (灰白)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	145	1706(F-9/Ⅲ) 1947(F-9/Ⅲ)	-	(2.4)	(5.2)	-	精緻	良好	2.5YR5/4 (にぶい赤褐)	2.5YR6/6 (橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	146	347(E-9/Ⅲ) 1099(E-10/Ⅲ) 1238(E-10/Ⅲ) 1261(D-10/Ⅲ) 1262(D-10/Ⅲ)	-	(2.3)	(7.5)	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	147	5877(B-12/Ⅲb)	-	(2.0)	(5.8)	-	精緻	良好	10YR5/1 (褐灰)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	148	5927(B-12/Ⅲb)	-	(3.7)	(7.0)	0.9	精緻	良好	5YR6/6 (橙)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	149	4119(C-10/Ⅳa)	-	(2.6)	(6.3)	0.7	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	150	4338(D-11/Ⅲb)	-	(3.1)	(8.0)	-	精緻,黒	良好	2.5Y8/3 (淡黄)	2.5Y8/3 (淡黄)	回転ヘラ切り (方向不明)	-	-	-	-

径は6cm～7cmと推測され，規格性がうかがえる。

土錘(第75図，No200)

穿孔径６mmで，重量11.59gを測る。



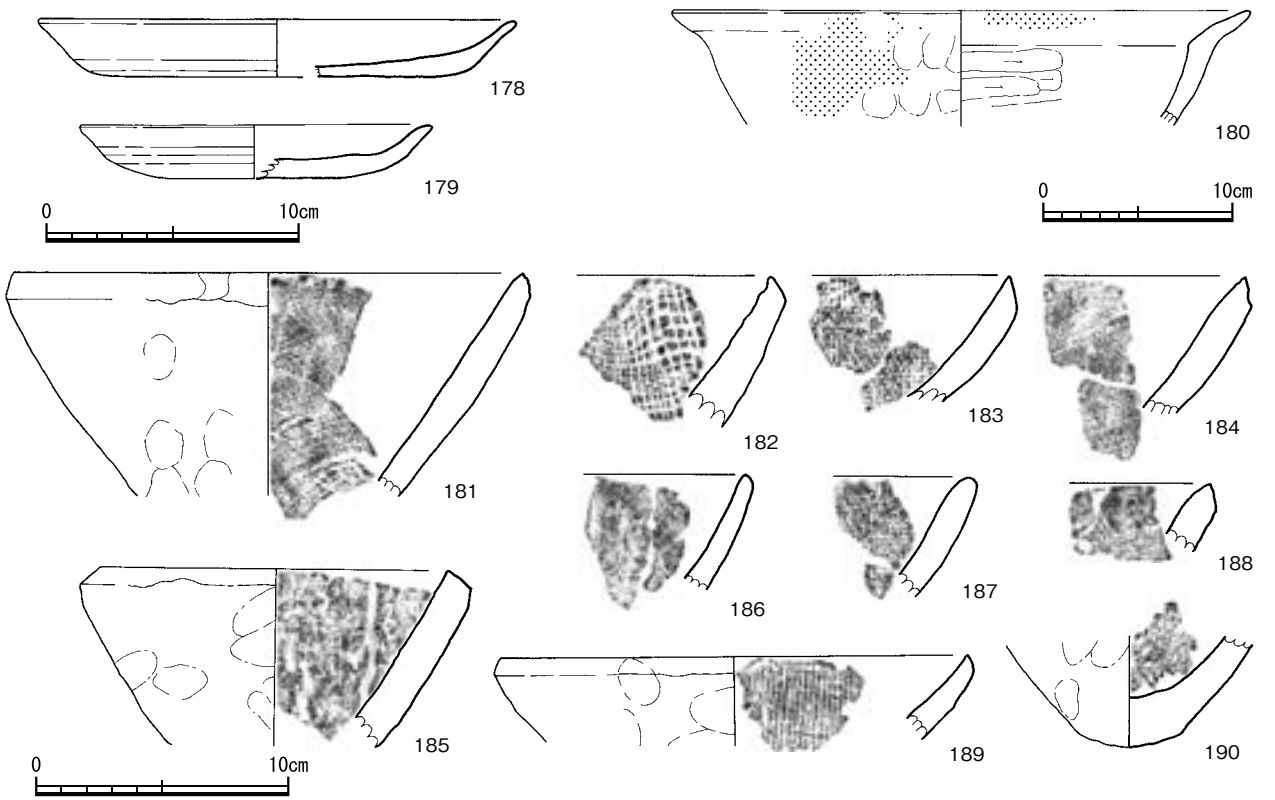
第73図　古代出土遺物実測図(土師器高台付坏・椀・黒色土器)

第27表　古代出土遺物観察表(９)

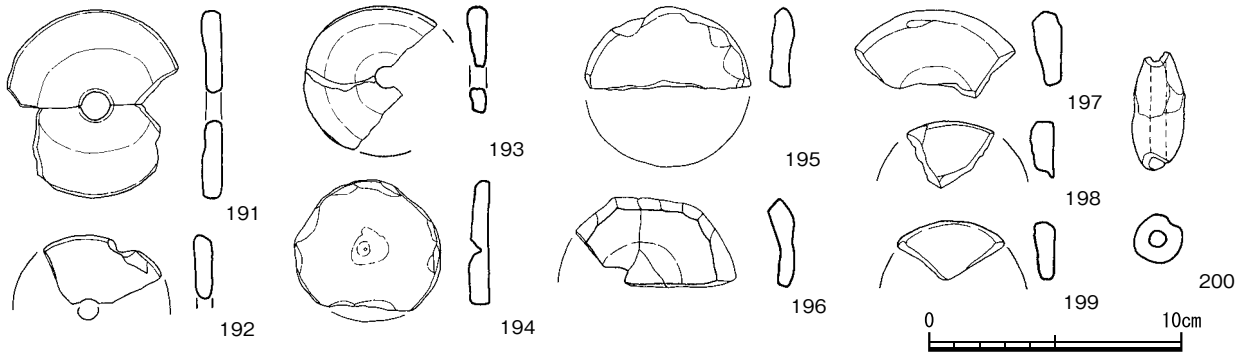
挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
73	151	2324(E-8/Ⅲ)	(13.8)	(2.5)	-	-	精緻	良好	10YR8/2(灰白)	10YR8/2(灰白)	-	-	-	-	-
	152	注記なし(--/-)	-	(6.4)	(9.6)	3.8	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	7.5YR7/6(橙)	-	-	-	-	-
	153	4177(C-11/Ⅳa) 4204(C-11/Ⅳa) 5883(B-12/Ⅳa) 6253(B-12/Ⅲb)	-	(6.5)	10.5	3.5	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	10YR8/4(浅黄橙)	-	-	-	-	-
	154	4284(E-10/Ⅲ)	-	(4.2)	(10.5)	-	精緻	良好	7.5YR8/3(浅黄橙)	7.5YR8/3(浅黄橙)	-	-	-	-	-
	155	3352(E-12/Ⅲa)	-	(3.7)	(10.2)	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	10YR8/4(浅黄橙)	-	-	-	-	-
	156	4304(E-11/Ⅲ) 4306(E-11/Ⅲ) 4321(E-11/Ⅳa) 4539(E-11/Ⅲb)	(15.6)	7.7	(8.0)	1.6	精緻,黒	良好	10YR8/3(浅黄橙)	10YR8/3(浅黄橙)	回転ヘラ切り(方向不明) ナデ	-	-	-	-
	157	注記なし(--/-)	(11.2)	(4.5)	(9.0)	1.3	精緻	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	7.5YR8/6(浅黄橙)	-	-	-	-	-
	158	51(D-9/Ⅲ)	-	(3.4)	(7.9)	1.4	精緻	良好	10YR8/3(浅黄橙)	10YR8/3(浅黄橙)	-	-	-	-	-
	159	1096(E-10/Ⅲ) 3300(F-11/Ⅲa) 4299(E-11/Ⅲ) 5500(E-7/Ⅲb)	-	(4.4)	(7.2)	1.4	精緻	良好	7.5YR7/8(黄橙)	7.5YR8/6(浅黄橙)	回転ヘラ切り(方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-

第28表　古代出土遺物観察表(10)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
73	160	4180(C-11/Ⅳa)	-	(2.7)	(7.1)	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	161	5876(B-12/Ⅲb)	-	(3.1)	(7.6)	1.2	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	162	6347(B-12/Ⅳa)	-	(1.8)	-	-	精緻	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 回転ナデ	-	-	-	-
	163	1212(D-11/Ⅲ)	-	(2.4)	-	-	精緻,黒	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明)	-	-	-	-
	164	88(D-9/Ⅲ 4068(E-12/Ⅲb) 4331(D-11/Ⅲb)	-	(3.3)	(6.5)	-	精緻,赤砂	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	7.5YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	165	5880(B-12/Ⅳa)	-	(2.3)	-	-	精緻	良好	10YR7/2 (にぶい黄橙)	10YR7/2 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) ナデ	-	-	-	-
	166	1652(F-9/Ⅲ)	(11.0)	(3.2)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	N3/ (暗灰)	-	-	-	-	-
	167	5891(B-13/Ⅲa) 5893(B-13/Ⅲa)	-	(2.7)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	168	3139(D-8/Ⅲ) 3140(D-8/Ⅲ) 3141(D-8/Ⅲ)	-	(3.1)	-	-	精緻,赤黒	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	169	1783(E-9/Ⅲ) 1795(E-9/Ⅲ) 2367(E-8/Ⅲ)	(15.9)	4.8	(8.3)	-	精緻	良好	N3/ (暗灰)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	(方向不明) 回転ナデ	ミガキ	-	-	-
	170	760(F-9/Ⅲ) 1938(E-9/Ⅳ)	-	(1.8)	(3.8)	-	精緻	良好	N3/ (暗灰)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) ナデ	ミガキ	-	-	-
	171	4229(F-10/Ⅳa)	-	(2.7)	(7.7)	-	精緻	良好	N3/ (暗灰)	10YR8/2 (灰白)	切り離し不明 回転ナデ	ミガキ	-	-	-
	172	4869(F-5/Ⅲb)	-	(1.6)	-	-	精緻	良好	N3/ (暗灰)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	ミガキ	-	-	-
	173	注記なし(--/-)	-	(3.8)	(7.0)	1.1	精緻	良好	N2/ (黒)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	(方向不明) ナデ	ミガキ	-	-	-
	174	7185(F-4/Ⅲa)	-	(3.4)	(8.4)	1.2	精緻	良好	N2/ (黒)	10YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	ミガキ	-	-	-
	175	4312(D-11/Ⅲ) 4314(D-11/Ⅲ)	-	(2.9)	(8.2)	1.4	精緻	良好 堅緻	N3/ (暗灰)	2.5Y8/2 (灰白)	切り離し不明 回転ナデ	ミガキ	-	-	-
	176	3368(D-12/Ⅲa)	-	(2.4)	-	-	精緻,細砂	良好	2.5Y6/1 (黄灰)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) ナデ	-	-	-	-
	177	46(D-9/Ⅲ)	-	(2.3)	(6.3)	0.8	精緻	良好	N3/ (暗灰)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	ミガキ	-	-	-
74	178	2796(E-9/Ⅳ) 2800(E-9/Ⅳ) 2888(F-9/Ⅳ)	(19.0)	(2.3)	(15.0)	-	精緻	良好	2.5Y8/2 (灰白)	2.5Y8/2 (灰白)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	179	285(E-9/Ⅲ) 448(E-9/Ⅲ) 493(E-9/Ⅲ) 581(F-9/Ⅲ) 1989(E-9/Ⅳ)	(13.9)	2.1	(6.8)	-	精緻	良好	5YR7/6 (橙)	5YR7/6 (橙)	(方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	180	180(E-9/Ⅲ) 1818(E-9/Ⅲ)	(30.3)	(6.0)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	181	456(E-9/Ⅲ) 563(E-9/Ⅲ)	(22.0)	(8.9)	-	-	赤	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	7.5YR7/6 (橙)	-	-	-	-	-
	182	2600(F-8/Ⅲ)	-	(6.0)	-	-	精緻,赤	脆弱	2.5YR7/8 (橙)	2.5YR7/8 (橙)	-	-	-	-	-
	183	546(E-9/Ⅲ) 784(F-9/Ⅲ)	-	(5.0)	-	-	精緻,赤	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	184	283(E-9/Ⅲ) 1590(F-9/Ⅲ)	-	(5.4)	-	-	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	-
	185	2197(D-8/Ⅲ) 2199(D-8/Ⅲ)	(15.5)	(7.0)	-	-	精緻	脆弱	5YR7/8 (橙)	5YR7/8 (橙)	-	-	-	-	-
	186	292(E-9/Ⅲ) 362(E-9/Ⅲ)	-	(4.6)	-	-	精緻	脆弱	5YR6/4 (にぶい橙)	5YR7/6 (橙)	-	-	-	-	-
	187	2721(E-8/Ⅳ)	-	(4.8)	-	-	精緻,細砂	脆弱	2.5YR6/8 (橙)	2.5YR6/8 (橙)	-	-	-	-	-
	188	一括(--/-)	-	(2.7)	-	-	精緻	脆弱	5Y6/2 (灰オリーブ)	5YR7/6 (橙)	-	-	-	-	-
	189	1364(C-10/Ⅲ)	(18.6)	(3.3)	-	-	精緻,赤	脆弱	5YR6/6 (橙)	5YR6/6 (橙)	-	-	-	-	-
	190	190(E-9/Ⅲ) 1378(D-10/Ⅲ)	-	(4.4)	(0.7)	-	精緻,赤	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR7/6 (橙)	-	-	-	-	-



第74図　古代出土遺物実測図(土師器皿・鉢・焼塩壺)



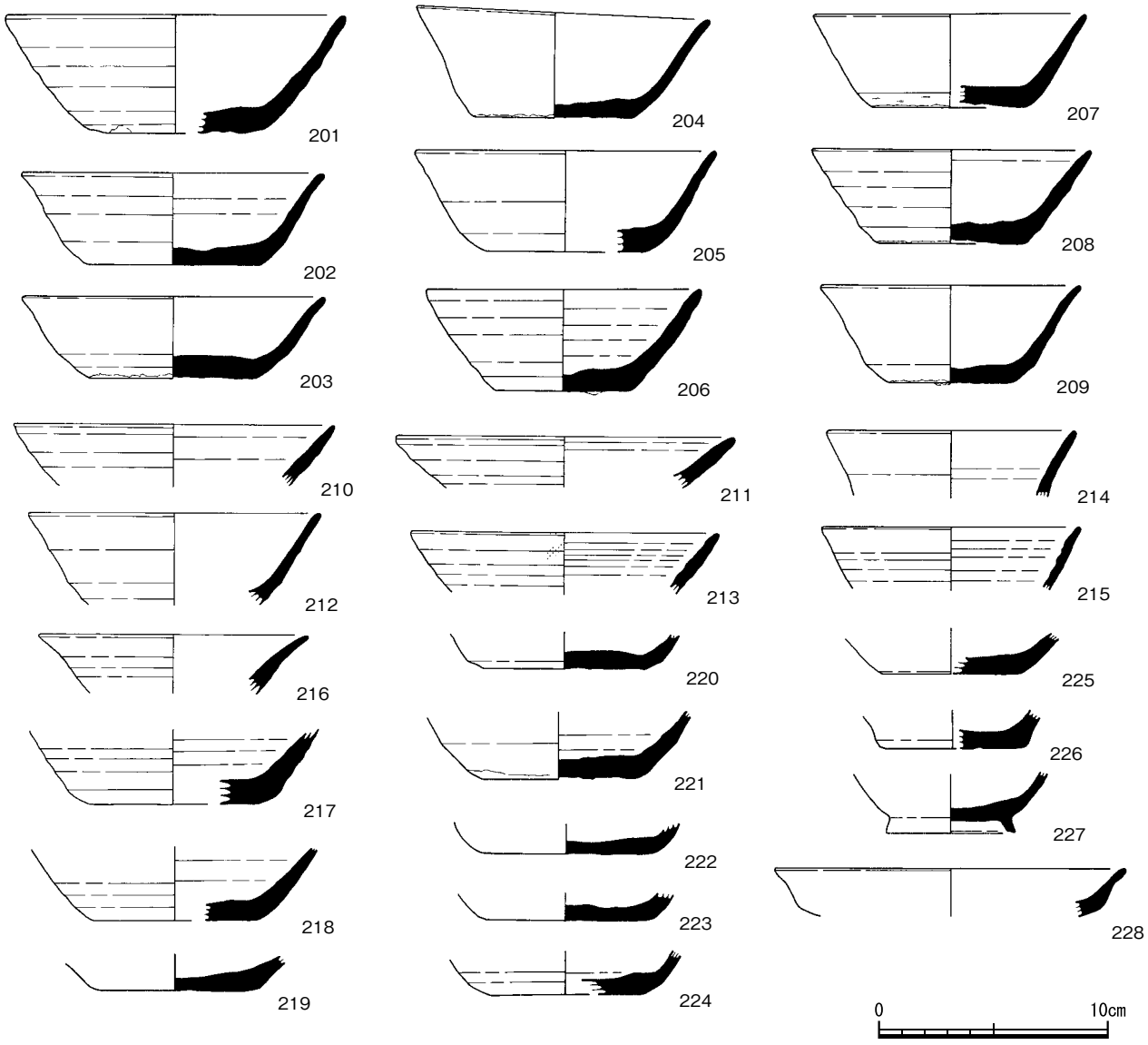
第75図　古代出土遺物実測図(紡錘車・土錘)

第29表　古代出土遺物観察表(11)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(外)	備考
75	191	724(F-9/Ⅲ) 757(F-9/Ⅲ)	7.3	0.8	(39.1)	-	精緻,石,角	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	紡錘車
	192	一括(--/-)	-	0.8	(8.7)	-	石,長,角	良好	7.5YR7/6 (橙)	紡錘車
	193	1188(E-10/Ⅲ) 1588(---/)	6.0	0.8	(18.6)	-	精緻,石,角,赤	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	紡錘車
	194	1951(F-9/Ⅳ)	5.8	0.8	(29.5)	-	精緻,角	良好	10YR8/1 (灰白)	紡錘車
	195	3875(F-8/Ⅲ)	6.5	0.8	(21.2)	-	精緻,石,赤	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	紡錘車
	196	2819(F-10/Ⅳ)	-	1.0	(17.8)	-	精緻,赤	良好	7.5YR7/6 (橙)	紡錘車
	197	322(E-9/Ⅲ)	-	1.2	(23.1)	-	精緻,角	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	紡錘車
	198	3429(D-7/Ⅲ)	-	0.9	(7.2)	-	精緻,長,赤	良好	7.5YR7/6 (橙)	紡錘車
	199	1166(E-10/Ⅲ)	-	0.9	(6.9)	-	精緻,石,長,角,赤	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	紡錘車

第30表　古代出土遺物観察表(12)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	長さ(cm)	径(cm)	重さ(g)	穿孔径(cm)	胎土	焼成	色調(外)	備考
75	200	71(D-9/Ⅲ)	(4.7)	2.0	(11.5)	0.6	精緻,角	良好	7.5YR6/6 (橙)	土錘



第76図　古代出土遺物実測図(須恵器坏)

須恵器坏(第76図，No201～226)

須恵器は集中的な出土はみられず，他遺物同様１号，２号掘立柱建物跡を中心とした平坦面に散在する。

201～209は完形に復元できた坏である。201は口径15cmと大きい。底部ナデ調整が粗雑で，ヘラ切り痕を残し，焼成は不完全で浅黄橙色を呈する。202～205は口径13cm前後である。202,203は口縁部がやや外反し，器面はナデ調整される。204は体部に歪みがみられるが，丁寧なナデ調整で仕上げる。206～209は口径12cm程である。206～208は体部外面下端にヘラケズリ痕が残る。

210～216は口縁部で，210,211は口径14cm～15cmで体部の傾きが大きい。213～215はナデ調整による稜線が明瞭で，213には外面の一部にススが付着する。215は口径11.4cmと小型である。216は口縁部が外反する。

217～226は底部片である。217～224は底径7cm程で，217は体部外面下端にヘラケズリ痕が残る。

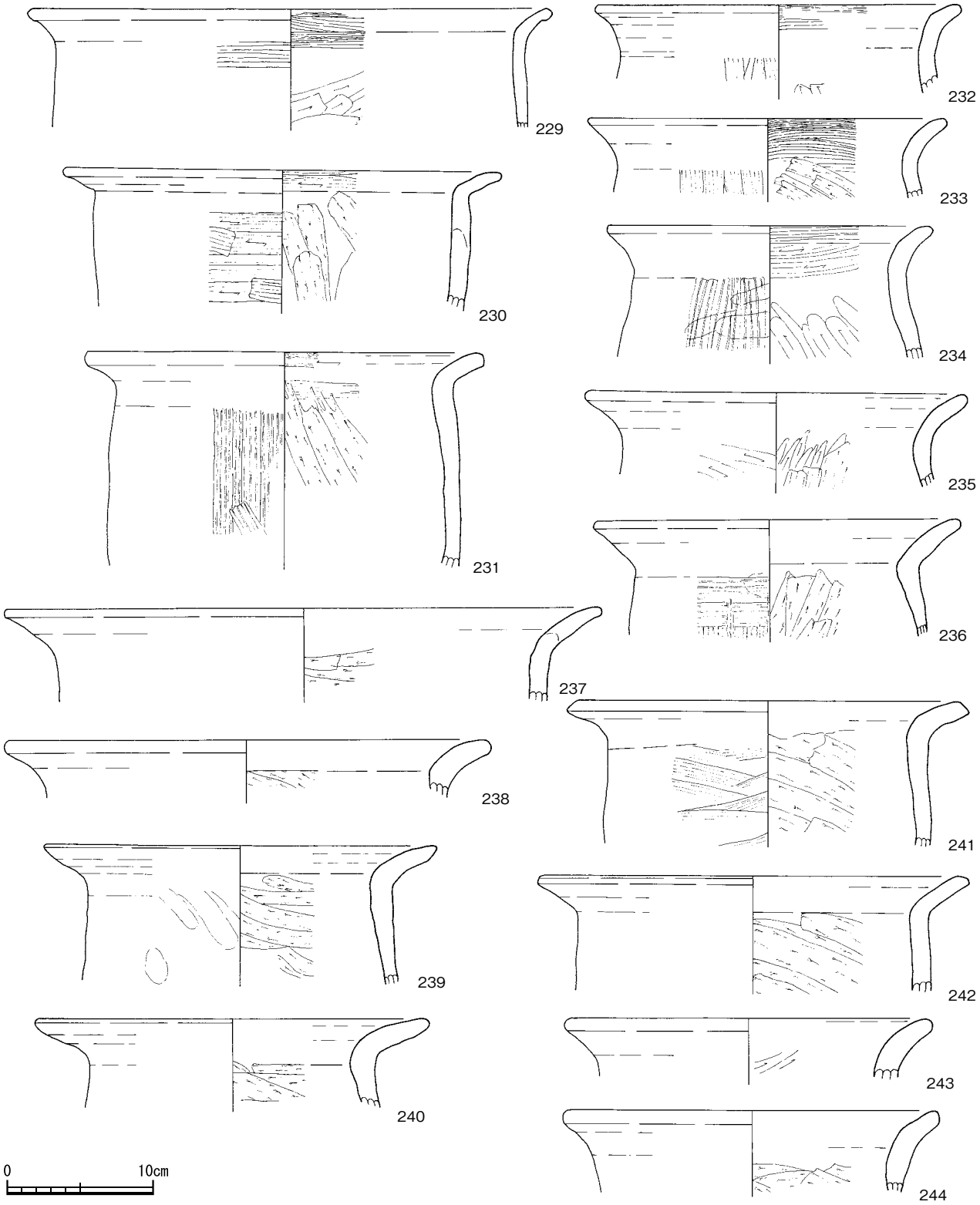
225,226は底径6cmと小型である。

第31表　古代出土遺物観察表(13)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
76	201	402(E-9/Ⅲ) 1773(E-9/Ⅲ) 1786(E-9/Ⅲ) 2125(E-8/Ⅲ) 5937(C-12/Ⅲb)	(14.8)	5.2	(7.6)	-	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	202	2329(E-8/Ⅲ) 3764(F-6/Ⅲ) 5510(E-7/Ⅲb)	(13.2)	4.0	(7.8)	-	精緻	良好	2.5Y8/1 (灰白)	2.5Y8/1 (灰白)	ヘラ切り (時計回り) 回転ナデ	-	-	-	-
	203	230(E-9/Ⅲ) 855(F-10/Ⅲ) 873(E-10/Ⅲ) 1035(E-10/Ⅲ) 1263(D-10/Ⅲ) 1314(D-10/Ⅲ) 1315(D-10/Ⅲ) 1434(E-10/Ⅲ) 3278(F-11/Ⅲa)	(13.2)	3.6	(7.2)	-	精緻,石長	良好 堅緻	5YR6/6 (橙)	5YR7/6 (橙)	回転ヘラ切り (時計回り)	-	-	-	-
	204	3568(D-6/Ⅳa) 3573(D-6/Ⅲ) 3576(D-6/Ⅳa) 3577(D-6/Ⅳa) 3581(D-6/Ⅲ) 3584(D-6/Ⅲ) 3586(D-6/Ⅳa) 3590(D-6/Ⅲ) 一括(--/-)	12.8	4.9	6.8	-	精緻,長	良好 堅緻	7.5Y5/1 (灰)	5Y6/1 (灰)	回転ヘラ切り (反時計回り)	-	-	-	-
	205	3321(F-11/Ⅲa) 3324(F-11/Ⅲa) 4095(F-11/Ⅲa)	(13.2)	4.4	(6.8)	-	精緻,白	良好 堅緻	10Y6/1 (灰)	10Y5/1 (灰)	不明	-	-	-	-
	206	832(F-10/Ⅲ) 1056(E-10/Ⅲ)	12.0	4.4	6.0	-	精緻,長	良好	7.5Y5/1 (灰)	7.5Y4/1 (灰)	-	-	-	-	-
	207	134(D-9/Ⅲ) 135(E-9/Ⅲ) 311(E-9/Ⅲ) 1054(E-10/Ⅲ) 2152(E-8/Ⅲ) 一括(--/-)	(12.0)	4.1	(6.8)	-	精緻,石	良好 堅緻	2.5Y6/1 (黄灰)	2.5Y6/1 (黄灰)	回転ヘラ切り (反時計回り)	-	-	○	-
	208	638(F-9/Ⅲ) 4300(E-11/Ⅲ) 4301(E-11/Ⅲ) 4302(E-11/Ⅲ)	(12.2)	4.1	(6.4)	-	精緻,石長	良好 堅緻	2.5Y6/1 (黄灰)	2.5Y6/2 (灰黄)	回転ヘラ切り (時計回り) ナデ	-	-	○	-
	209	162(D-9/Ⅲ) 1124(E-10/Ⅲ) 2325(E-8/Ⅲ) 2433(F-9/Ⅲ) 2435(F-8/Ⅲ) 2723(E-8/Ⅲ)	(11.4)	4.2	(5.6)	-	精緻,白	良好 堅緻	N6/ (灰)	N6/ (灰)	回転ヘラ切り (時計回り)	-	-	-	-
	210	127(D-9/Ⅲ) 458(E-9/Ⅲ)	(14.0)	(2.7)	-	-	精緻	良好 堅緻	2.5Y7/3 (浅黄)	2.5Y7/3 (浅黄)	-	-	-	-	-
	211	注記なし一括(--/-)	(14.8)	(2.2)	-	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	212	818(F-10/Ⅲ)	(12.8)	(3.9)	-	-	精緻	良好 堅緻	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	-
	213	185(E-9/Ⅲ) 1350(D-10/Ⅲ)	(13.4)	(2.7)	-	-	精緻	良好 堅緻	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	214	3470(D-6/Ⅲ) 3578(D-6/Ⅳa)	(10.9)	(2.9)	-	-	精緻	良好 堅緻	7.5Y6/1 (灰)	7.5Y6/1 (灰)	-	-	-	-	-
	215	126(D-9/Ⅲ) 136(D-9/Ⅲ)	(11.4)	(2.7)	-	-	精緻	良好 堅緻	7.5Y7/1 (灰白)	7.5Y6/1 (灰)	-	-	-	-	-
	216	10090(E-11/Ⅳa)	(11.7)	(2.5)	-	-	精緻	良好	2.5Y8/1 (灰白)	2.5Y8/1 (灰白)	-	-	-	-	-
	217	1121(E-10/Ⅲ)	-	(3.2)	(8.0)	-	精緻	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	-
	218	1268(D-10/Ⅲ) 1324(D-10/Ⅲ) 1327(D-10/Ⅲ)	-	(3.1)	(7.1)	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) ナデ	-	-	-	-
	219	371(E-9/Ⅲ)	-	(1.5)	(7.4)	-	精緻	良好 堅緻	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り) ナデ	-	-	-	-
	220	221(E-9/Ⅲ) 348(E-9/Ⅲ)	-	(1.5)	(7.0)	-	精緻	良好 堅緻	7.5Y7/1 (灰白)	5Y6/1 (灰)	回転ヘラ切り (時計回り)	-	-	-	-
	221	1833(E-9/Ⅲ) 4263(E-11/Ⅳa) 4268(E-11/Ⅳa)	-	(2.9)	(7.0)	-	精緻	良好	10YR6/1 (褐灰)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (時計回り)	-	-	-	-
	222	962(E-10/Ⅲ)	-	(1.3)	(7.4)	-	精緻	良好	2.5Y8/2 (灰白)	2.5Y8/2 (灰白)	回転ヘラ切り (時計回り) ナデ	-	-	-	-
	223	2958(F-9/Ⅳ)	(9.4)	(1.1)	(7.2)	-	精緻	良好	2.5Y8/1 (灰白)	2.5Y8/1 (灰白)	(方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-
	224	1176(E-10/Ⅲ)	-	(1.9)	(6.7)	-	精緻	良好	N4/ (灰)	10YR7/1 (灰白)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止	-	-	-	-
	225	3922(F-8/Ⅲ)	-	(1.7)	6.4	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	(方向不明) ナデ	-	-	-	-

第32表　古代出土遺物観察表(14)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
76	226	2627(F-8/Ⅲ)	-	(1.8)	(6.1)	-	精緻	良好 堅緻	2.5Y8/2 (灰白)	2.5Y8/2 (灰白)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止	-	-	-	-
	227	2266(E-8/Ⅲ)	-	(2.5)	(5.6)	(0.5)	精緻	良好 堅緻	5Y6/1 (灰)	5Y6/1 (灰)	回転ヘラ切り (時計回り)	-	-	-	-
	228	2806(E-9/Ⅳ)	(14.4)	(2.1)	-	-	精緻	良好 堅緻	5Y6/1 (灰)	5Y6/1 (灰)	-	-	-	-	-



第77図　古代出土遺物実測図(土師器甕１)

須恵器椀(第76図，No227)

高さ4mm程の高台がつき，全面に丁寧なナデ調整が施される。高台畳付に窪みがみられる。

須恵器皿(第76図，No228)

口縁部１点で，口径15.4cmの皿状を呈し，器面調整は丁寧である。

土師器甕

甕は１号，２号掘立柱建物跡を中心とするE,F-8～10区に集中し，南側の谷部にも散在する。破片が中心で，全体の器形復元はできていない。

甕Ⅰ類(第77図，No229～236)

229～231は体部がほとんど張らない。229は口径34.8cmで他と比較して大きい。230は口径29.6cm，胴部にススが付着する。231は口径27.2cm，口唇部にススが付着する。

232～234は口縁部が緩やかに外反し胴部は張り，調整，器形の類似から同一個体の可能性もある。

235,236は口縁部の屈曲は強く長い。

甕Ⅱ類(第77図，No237～244)

237は口径40.8cmと大型で，口縁部屈曲から口唇までも長い。238は口径33cmとやや大きく，239～244は口径25cm～29.4cmである。

239,240は同一個体の可能性もあり，口唇部が尖り気味で，胴部は内面ケズリで器壁が薄い。241は口唇部が外に傾斜し，器壁は総じて厚い。242の口唇部は狭い平坦面をもち，243,244は口縁屈曲が弱い。244は口縁部内面に強い指ナデによる浅いくぼみが巡る。

甕Ⅲ類(第78図，No245～258)

245は口縁部がL字状に大きく外反し，口唇部は尖り気味で，口径32cmを測る。

246～258は口径24cm～30cmにおさまり，口縁部がくの字状に外反するが短い。胴部の器壁は薄く真っ直ぐ下方へ伸びる。246,247は同一個体と思われる。

253は胴部外面に縦方向のナデ痕跡がみられる。

256は口縁屈曲部外面にススが付着する。

258は比較的器高の低い甕の可能性もある。

259,260は口縁部の屈曲が弱く，短い。口径は25cmから26.4cmとやや大きい。

甕Ⅳ類(第78図,No261)

１点のみの出土である。胴部が丸く張り，口縁部は頸部から強くL字状に曲がる。体部外面には平行状タタキ，内面上位には同心円状タタキが残され，内面下位は縦方向のケズリが施される。須恵器甕と土師器甕の製作手法が混在している。

小型土師器甕(第78図，No262～265)

口径12cm～20cmの小型の甕の一群である。262は外面にヘラ磨きがみられ，口縁部に交差する直線が刻まれるが文字か記号か判断できない。265は特に小型で，口縁部は屈曲も弱くごく短い。

甑(第79図，No266,267)

甑の２点はD-5区で出土し，266は口径26cmで，口縁部は直行し口唇部は平坦である。器壁は厚く，胎土には2mm～4mmの小礫を混入する。

267は橋状取手が付き，口径35cmで，口縁部は直行し，口唇部には棒状工具による浅い溝状の窪みが巡る。口縁部の両端は，横方向に強くナデられる。内，外面ともに丁寧なナデ調整により仕上げられている。

須恵器甕(第80,81図，No268～278)

須恵器甕は１号，２号掘立柱建物跡を中心とし，遺跡平坦面に広く点在するが，全体の復元には至っていない。

268は口縁部片。269は肩部から頸部にかけての破片で，肩部外面は格子状タタキ，内面は同心円タタキの後ナデている。また，頸部内面屈曲部にタタキを行った際の工具柄の痕跡が４か所残る。

270～275は肩部片で，270～272は外面に平行タタキ，内面に同心円タタキが残る。273は外面平行タタキ，内面に車輪文風のタタキが残る。内面の車輪文風のタタキは同心円中心から放射状に伸びる直線が中心部では欠落し，外側に２単位認められる。274は内，外面ともに平行状タタキを残す。275は外面に格子目状タタキ，内面上位に同心円タタキ，下位に縦方向の平行状タタキが残り，外面には自然釉を認める。276は外面に格子状タタキ，内面が平行状タタキで，外面には一部ナデの痕跡ある。

277の外面は間隔の狭い平行状タタキ，内面は同心円状タタキと間隔の広い平行状タタキが認められる。278は底部付近で，277と同一個体の可能性がある。

須恵器壺(第81図，No279～290)

壺は出土が少なくD,E-9,10区を中心に散在する。

279～286は口縁部から頸部で，279～281は口縁部立ち上がりに稜線をもつが，282の立ち上がりは緩やかで稜線はみえない。280,281は口唇部は平坦に仕上げ，283,285,286は外面に自然釉がかかる。286は他と色調が異なりにぶい赤褐色を呈する。

287～290は肩部から底部で，287は高台をもつ。288,289は同一個体と推定され，底径10.8cm，内面に回転ナデ調整が明瞭で，外面には自然釉がかかり，底部外面には同心円状タタキが残る。また，底部外面には焼成時に別個体が融着する。290は復元底径12.6cmで，自然釉がかかる。

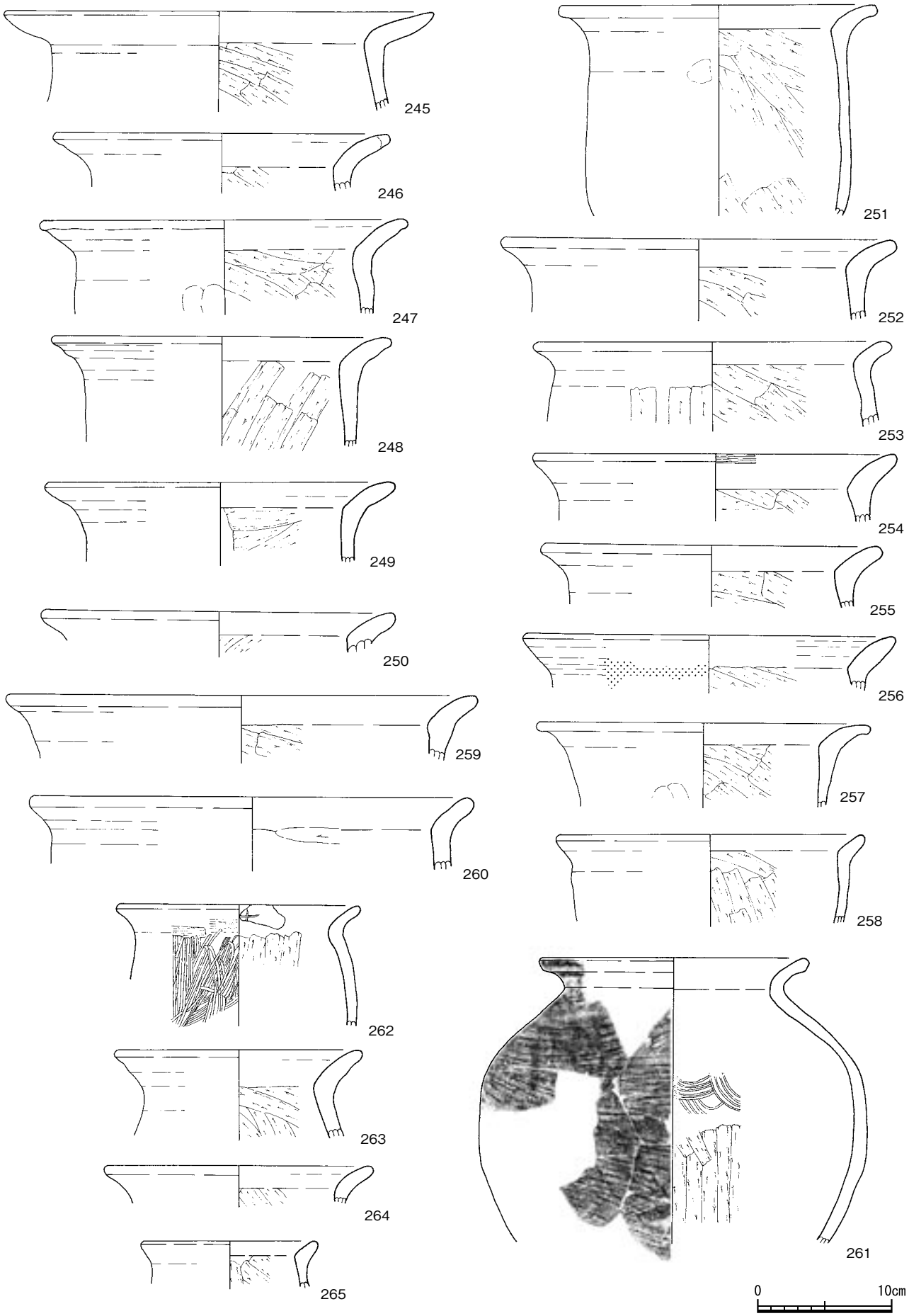
墨書土器(第82図，No291～300)

291は底部外面に「仲」と書かれる。

292は肉眼では判読できないが，赤外線撮影で横位に書かれた「行司」が判読された。

293～295は「仟」の一部と推定される。293は遺跡北側傾斜面からの出土で，底部内面に円形で褐色の汚れが付着する。

294,295は一括資料で出土地点は不明である。



第78図　古代出土遺物実測図(土師器甕２)

第33表　古代出土遺物観察表(15)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
77	229	2500(F-8/Ⅲ) 2511(F-8/Ⅲ) 2569(F-8/Ⅲ)	(34.8)	(8.2)	-	-	精緻,赤黒	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	器厚 (7～9mm)
	230	293(E-9/Ⅲ) 300(E-9/Ⅲ) 1282(D-10/Ⅲ)	(29.6)	(9.6)	-	-	精緻,赤黒,砂	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	器厚 (11～12mm)
	231	28(D-9/Ⅲ) 31(D-9/Ⅲ) 69(D-9/Ⅲ) 150(D-9/Ⅲ) 164(D-9/Ⅲ) 834(F-10/Ⅲ) 1895(D-9/Ⅳ) 4255(E-10/Ⅳa) 一括(--/-)	(27.2)	(14.7)	-	-	砂	良好	7.5YR7/3 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (9～15mm)
	232	47(D-9/Ⅲ) 3406(D-9/Ⅳa)	(24.9)	(6.0)	-	-	精緻,礫	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	器厚 (11～12mm)
	233	821(F-10/Ⅲ) 1156(E-10/Ⅲ)	(24.6)	(5.5)	-	-	精緻	良好	10YR6/3 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	器厚 (10～12mm)
	234	901(E-10/Ⅲ) 940(E-10/Ⅲ) 984(E-10/Ⅲ) 1287(D-10/Ⅲ) 1290(D-10/Ⅲ) 1481(E-10/Ⅲ) 1482(E-10/Ⅲ) 1506(E-10/Ⅲ) 1671(F-9/Ⅲ) 4236(F-10/Ⅳa) 4260(E-10/Ⅳa) 一括(--/-)	(23.2)	(9.0)	-	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	器厚 (10～13mm)
	235	1175(E-10/Ⅲ) 1550(E-10/Ⅲ)	(26.1)	(6.5)	-	-	長,石,礫砂	良好 堅緻	2.5YR5/6 (明赤褐)	2.5YR5/4 (にぶい赤褐)	-	-	-	-	器厚 (9～12mm)
	236	287(E-9/Ⅲ)	(25.2)	(8.1)	-	-	礫多い赤,黒	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	器厚 (7～15mm)
	237	2131(E-8/Ⅲ) 3599(D-6/Ⅳa) 3831(F-7/Ⅲ) 3987(E-7/Ⅳa) 5520(E-7/Ⅲb) 一括(--/-)	(40.8)	(6.4)	-	-	白,細砂	良好	7.5YR6/3 (にぶい褐)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (12～13mm)
	238	4271(E-11/Ⅳa) 4272(E-11/Ⅳa)	(33.0)	(4.0)	-	-	石,長,角	良好	5YR6/4 (にぶい橙)	5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (13～17mm)
	239	354(E-9/Ⅲ) 465(E-9/Ⅲ) 466(E-9/Ⅲ) 1220(D-11/Ⅲ) 4323(D-11/Ⅳa)	(26.4)	(9.5)	-	-	精緻	良好	5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR6/6 (橙)	-	-	-	-	器厚 (8～17mm)
	240	526(E-9/Ⅲ) 1640(F-9/Ⅲ) 1767(E-9/Ⅲ)	(26.4)	(6.2)	-	-	精緻,白砂	良好	5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (12～17mm)
	241	3316(F-11/Ⅲa) 3317(F-11/Ⅲa) 4207(F-11/Ⅳa)	(27.4)	(9.9)	-	-	小礫,角石	良好 堅緻	5YR6/4 (にぶい橙)	5YR6/6 (橙)	-	-	-	-	器厚 (10～15mm)
	242	1749(E-9/Ⅲ) 1750(E-9/Ⅲ)	(29.4)	(7.8)	-	-	小礫,粗砂	良好 堅緻	5YR6/4 (にぶい橙)	5YR5/3 (にぶい赤褐)	-	-	-	-	器厚 (12～13mm)
	243	4225(F-10/Ⅳa) 4226(F-10/Ⅳa) 一括(--/-)	(25.1)	(4.0)	-	-	小礫,砂	良好	5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 不明
	244	1200(D-11/Ⅲ) 1206(D-11/Ⅲ) 1208(D-11/Ⅲ) 1209(D-11/Ⅲ)	(25.6)	(5.6)	-	-	赤,砂	良好 堅緻	5YR6/6 (橙)	5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (9～15mm)
78	245	660(F-9/Ⅲ) 1611(F-9/Ⅲ) 2564(F-8/Ⅲ) 2753(F-8/Ⅲ) 一括(--/-)	(32.0)	(6.8)	-	-	白,粗砂	良好 堅緻	5YR6/6 (橙)	5YR6/6 (橙)	-	-	-	-	器厚 (9～16mm)
	246	57(D-9/Ⅲ) 66(D-9/Ⅲ) 78(D-9/Ⅲ)	(25.0)	(4.2)	-	-	岩片,砂長	良好	5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR6/3 (にぶい褐)	-	-	-	-	器厚 (11～15mm)
	247	1293(D-10/Ⅲ) 1303(D-10/Ⅲ) 1304(D-10/Ⅲ) 1311(D-10/Ⅲ) 1323(D-10/Ⅲ) 1374(D-10/Ⅲ)	(27.4)	(12.0)	-	-	岩片,砂長	良好	5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR6/3 (にぶい褐)	-	-	-	-	器厚 (9～14mm)
	248	2876(E-9/Ⅳ) 3183(D-8/Ⅲb) 3196(D-8/Ⅲ)	(25.4)	(8.0)	-	-	精緻,微粒	良好	5YR6/4 (にぶい橙)	5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (9～17mm)
	249	3173(D-8/Ⅲb) 3176(D-8/Ⅲ) 3225(D-8/Ⅲb)	(26.0)	(5.8)	-	-	長,石,小礫	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (9～16mm)
	250	1363(C-10/Ⅲ) 4113(C-11/Ⅳa)	(26.2)	(2.3)	-	-	精緻,長石,白	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 不明

第34表　古代出土遺物観察表(16)

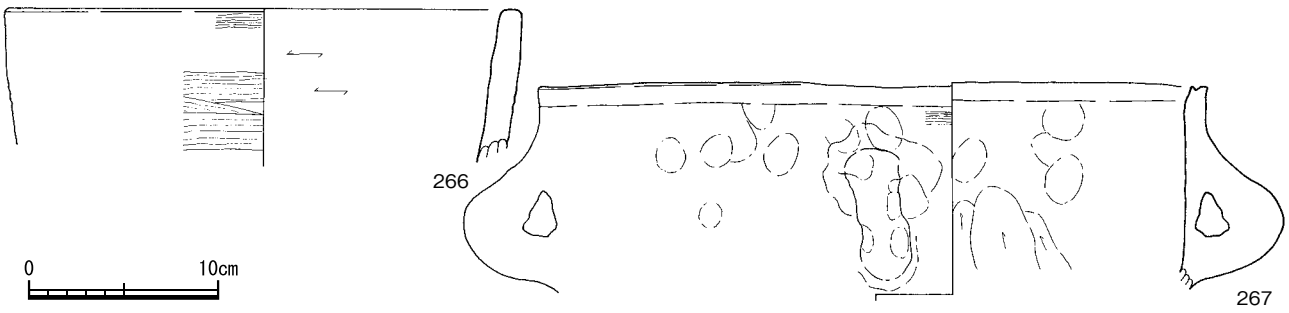
挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
78	251	763(F-9/Ⅲ) 1645(F-9/Ⅲ)	(23.6)	(15.8)	-	-	礫,砂,長	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	器厚 (7～16mm)
	252	9293(--/-)	(28.6)	(6.0)	-	-	白,長	良好 堅緻	2.5YR5/4 (にぶい赤褐)	2.5YR5/6 (明赤褐)	-	-	-	-	器厚 (11～18mm)
	253	3276(E-11/Ⅲa) 3332(E-11/Ⅲa) 3384(F-11/Ⅲa)	(26.6)	(6.0)	-	-	赤,砂	良好	7.5YR8/4 (浅黄橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (11～13mm)
	254	2341(E-8/Ⅲ)	(27.0)	(5.0)	-	-	砂	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	器厚 (10～19mm)
	255	1805(E-9/Ⅲ) 2035(E-9/Ⅲ)	(24.8)	(4.5)	-	-	小礫,石長	良好 堅緻	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (8～17mm)
	256	1004(E-10/Ⅲ) 4245(E-10/Ⅳa)	(27.0)	(4.0)	-	-	精緻,赤砂,岩片	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR6/3 (にぶい褐)	-	-	-	-	器厚 (10～15mm)
	257	514(E-9/Ⅲ) 554(E-9/Ⅲ)	(24.8)	(6.2)	-	-	長,石,小礫	良好 堅緻	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (6～15mm)
	258	245(E-9/Ⅲ) 2456(F-8/Ⅲ)	(29.9)	(6.4)	-	-	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	器厚 (6～12mm)
	259	906(E-10/Ⅲ) 911(E-10/Ⅲ) 929(E-10/Ⅲ)	(35.0)	(4.9)	-	-	石,長,細砂	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (11～18mm)
	260	2496(F-8/Ⅲ)	(32.4)	(5.3)	-	-	精緻,赤長,砂	良好 堅緻	7.5YR8/6 (浅黄橙)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (13～16mm)
	261	430(E-9/Ⅲ) 432(E-9/Ⅲ) 1890(D-9/Ⅳ) 2046(E-9/Ⅲ) 2048(E-9/Ⅲ) 2153(E-8/Ⅲ) 2220(E-8/Ⅲ) 2349(E-8/Ⅲ) 2864(E-9/Ⅳ) 3163(D-8/Ⅲ) 3175(D-8/Ⅲ) 3211(D-8/Ⅲb) 3595(D-6/Ⅲ) 3912(F-8/Ⅲ) 3924(E-8/Ⅲ) 3965(E-7/Ⅲ) 5401(D-7/Ⅲ) 5442(D-7/Ⅲb) 5443(D-7/Ⅲa) 5470(D-7/Ⅲa) 39?(--/-) 400?(--/-) 一括(--/-)	(20.0)	(21.4)	-	-	精緻	良好	7.5YR8/3 (浅黄橙)	7.5YR8/3 (浅黄橙)	-	同心円タタキケズリ	平行タタキ	-	器厚 (7～12mm)
	262	2392(E-8/Ⅲ) 2395(E-8/Ⅲ) 2499(F-8/Ⅲ) 2582(F-8/Ⅲ) 2585(F-8/Ⅲ) 2716(E-8/Ⅲ) 3801(F-7/Ⅲ) 3936(E-7/Ⅲ) 3996(E-7/Ⅳa) 5549(E-7/Ⅲb) 6132(D-6/Ⅳa)	(18.1)	(9.0)	-	-	赤,白,石長,角	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	7.5YR6/6 (橙)	-	-	-	-	器厚 (8～12mm)
	263	5527(E-7/Ⅲb)	(18.4)	(6.6)	-	-	精緻 砂,礫長	良好	7.5YR5/3 (にぶい褐)	7.5YR5/4 (にぶい褐)	-	-	-	-	器厚 (10～16mm)
	264	1956(F-9/Ⅲ)	(20.0)	(2.8)	-	-	角,石,小礫,粗砂	良好	7.5YR5/2 (灰褐)	5YR6/4 (にぶい橙)	-	-	-	-	器厚 (8～12mm)
	265	1162(E-10/Ⅲ) 2413(E-8/Ⅲ) 4261(E-10/Ⅳa)	(12.8)	(3.4)	-	-	砂,長	良好	7.5YR7/3 (にぶい橙)	7.5YR6/3 (にぶい褐)	-	-	-	-	器厚 (6～12mm)

296～299は文字としては認識できないが墨の付着がみられるものである。

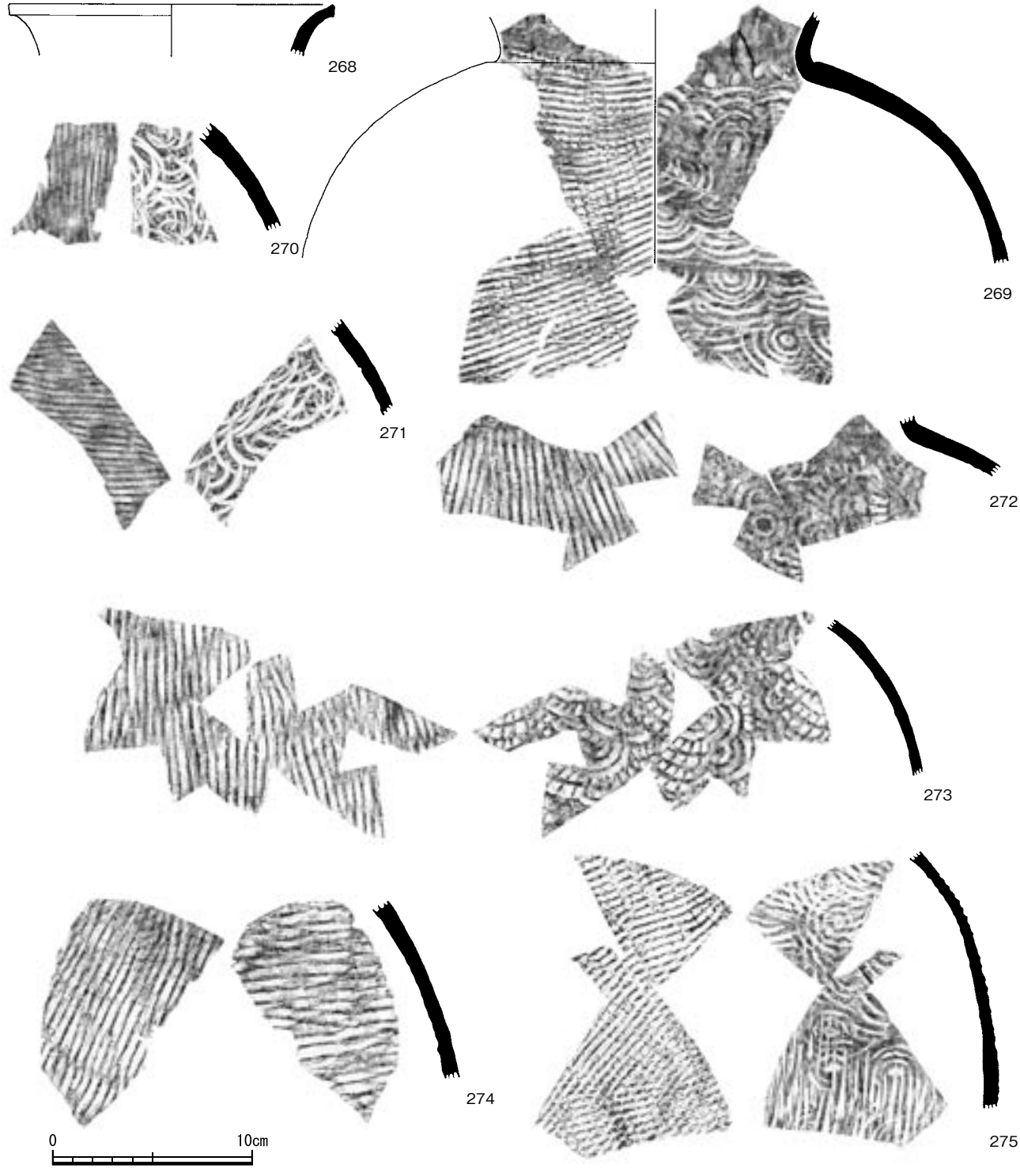
300は底部外面に短い直線，体部外面に交差する線が刻書される。

軽石製品(第82図，No301～303)

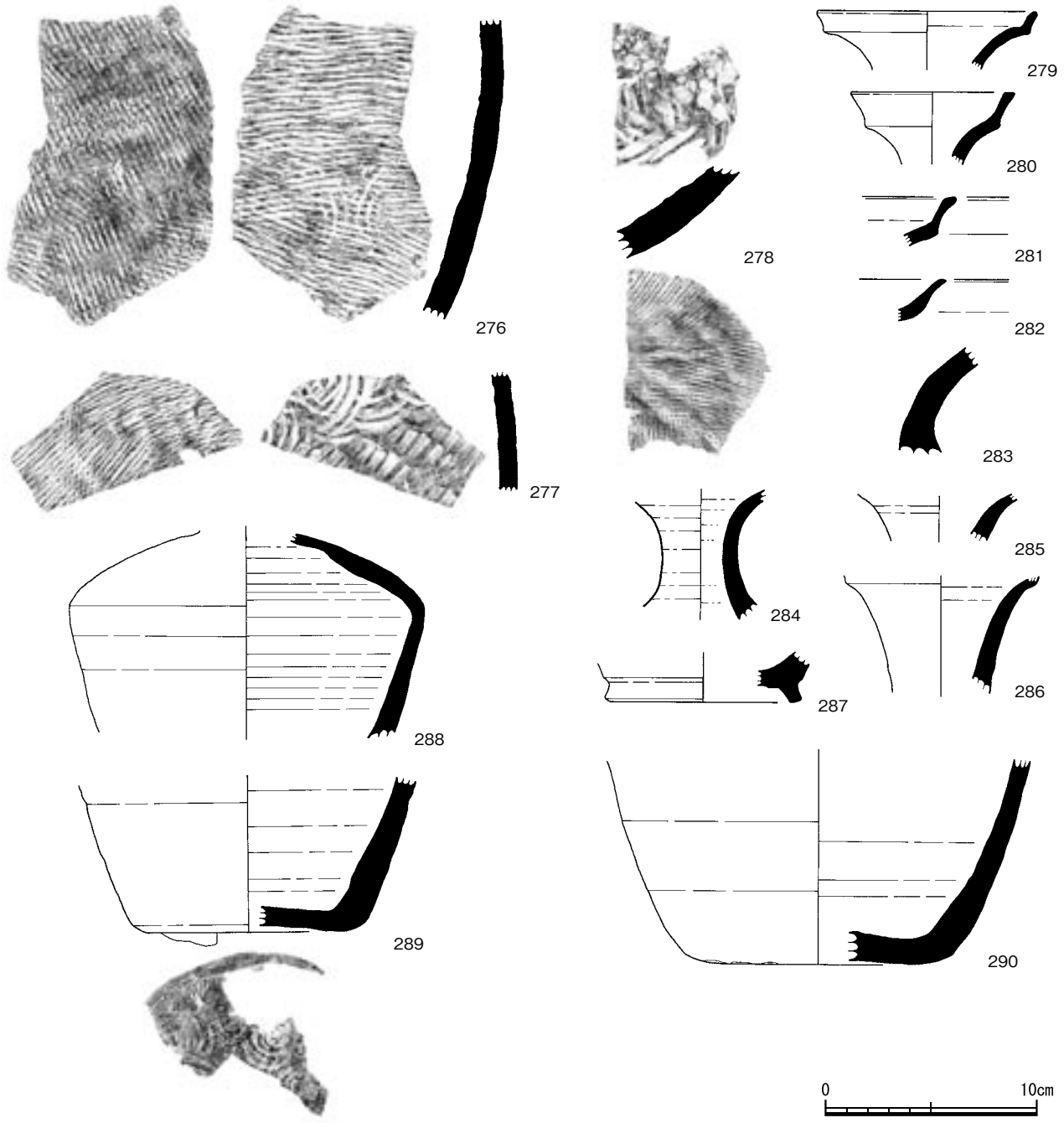
301は１側面を弯曲に成形する。302は円盤状に成形した浮きで，両面から穿孔を試みているが貫通していない。303は片面から径8mm，深さ14mmの穴を穿つが貫通していない。



第79図　古代出土遺物実測図(甑)



第80図　古代出土遺物実測図(須恵器甕)



第81図　古代出土遺物実測図(須恵器甕・壺)

第35表　古代出土遺物観察表(17)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
79	266	4743(D-5/Ⅲb) 4744(D-5/Ⅲb)	(26.0)	(8.0)	-	-	赤,岩片砂	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	267	4750(D-5/Ⅲb) 4751(D-5/Ⅲb) 4774(D-5/Ⅲb) 6489(D-5/Ⅳa) 6491(D-5/Ⅳa) 6805(D-5/Ⅲb)	(35.0)	(11.5)	-	-	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	10YR8/4 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
80	268	表土一括(--/-)	(16.4)	(2.6)	-	-	精緻,白	良好 堅緻	5Y5/1 (灰)	5Y5/1 (灰)	-	-	-	-	-
	269	3624(D-6/Ⅲ) 4151(C-11/Ⅳa) 4277(E-11/Ⅲ) 4290(E-10/Ⅳa)	-	(12.0)	-	-	赤,黒,石長	良好 堅緻	N4/ (灰)	N5/ (灰)	-	同心円タタキ	格子タタキ	-	-
	270	4265(F-11/Ⅲ)	-	(5.2)	-	-	精緻	良好 堅緻	10Y5/1 (灰)	10Y4/1 (灰)	-	同心円タタキ	平行タタキ	-	-

第36表　古代出土遺物観察表(18)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
80	271	4828(E-5/Ⅲ)	-	(4.9)	-	-	精緻	良好 堅緻	10Y5/1 (灰)	10Y5/1 (灰)	-	同心円タタキ	平行タタキ	-	-
	272	123(D-9/Ⅲ) 307(E-9/Ⅲ) 1960(E-9/Ⅳ) 2839(E-9/Ⅳ)	-	(3.0)	-	-	精緻,石赤	良好 堅緻	10YR4/2 (灰黄褐)	10BG4/1 (暗青灰)	-	同心円タタキ	平行タタキ	-	-
	273	338(E-9/Ⅲ) 480(E-9/Ⅲ) 666(F-9/Ⅲ) 806(F-10/Ⅲ) 1044(E-10/Ⅲ) 1053(E-9/Ⅲ) 1418(E-10/Ⅲ) 2962(E-10/Ⅳ)	-	(8.5)	-	-	精緻,赤	良好 堅緻	10YR4/2 (灰黄褐)	10BG4/1 (暗青灰)	-	車輪文風タタキ	平行タタキ	-	-
	274	3410(C-8/Ⅲ) 3448(C-8/Ⅳa)	-	(8.9)	-	-	長,石,角	良好 堅緻	10YR4/2 (灰黄褐)	10BG5/1 (青灰)	-	平行タタキ	平行タタキ	-	-
	275	1215(D-11/Ⅲ) 4227(F-10/Ⅳa) 4233(F-10/Ⅳa)	-	(13.3)	-	-	精緻	良好 堅緻	5BG5/1 (青灰)	5GY3/1 (暗オリーブ灰)	-	同心円タタキ 平行タタキ	格子タタキ	-	-
81	276	4476(F-7/Ⅳa)	-	(14.2)	-	-	精緻,石長	良好 堅緻	N4/ (灰)	5GY5/1 (オリーブ灰)	-	平行タタキ	格子タタキ	-	-
	277	3494(D-6/Ⅲ)	-	(5.5)	-	-	精緻	良好 堅緻	5GY4/1 (暗オリーブ灰)	2.5GY3/1 (暗オリーブ灰)	-	同心円タタキ 平行タタキ	平行タタキ	-	-
	278	4205(F-11/Ⅳa) 一括(--/-)	-	(4.0)	-	-	精緻,長石	良好 堅緻	10G5/1 (緑灰)	10GY4/1 (暗緑灰)	-	平行タタキ	平行タタキ	-	-
	279	2516(F-8/Ⅲ) 3881(F-7/Ⅲ)	(10.5)	(2.8)	-	-	精緻	良好 堅緻	10Y7/1 (灰白)	N5/ (灰)	-	-	-	-	-
	280	1349(D-10/Ⅲ)	(7.8)	(3.4)	-	-	精緻	良好 堅緻	10Y6/1 (灰)	10Y5/1 (灰)	-	-	-	-	-
	281	477(E-9/Ⅲ)	-	(2.4)	-	-	精緻	良好 堅緻	10Y5/1 (灰)	10Y5/1 (灰)	-	-	-	-	-
	282	2483(F-8/Ⅲ)	-	(2.0)	-	-	精緻,石	良好 堅緻	7.5Y6/1 (灰)	10Y7/1 (灰白)	-	-	-	-	-
	283	1332(D-10/Ⅲ)	-	(5.7)	-	-	精緻,黒石	良好 堅緻	5BG5/1 (青灰)	10BG5/1 (青灰)	-	-	-	-	-
	284	462(E-9/Ⅲ) 1050(E-10/Ⅲ) 1422(E-10/Ⅲ) 1823(E-9/Ⅲ)	-	(6.2)	-	-	長,石	良好 堅緻	5GY3/1 (暗オリーブ灰)	5GY3/1 (暗オリーブ灰)	-	-	-	-	-
	285	137(D-9/Ⅲ) 1866(E-9/Ⅲ)	-	(2.3)	-	-	精緻,黒	良好 堅緻	-	10BG5/1 (青灰)	-	-	-	-	-
	286	1429(E-10/Ⅲ) 5629(C-13/Ⅲa) 一括(--/-)	-	(5.5)	-	-	精緻,石長	良好	5YR5/3 (にぶい赤褐)	5YR5/3 (にぶい赤褐)	-	-	-	-	-
	287	2377(E-8/Ⅲ)	-	(1.8)	(9.3)	0.7	精緻	良好 堅緻	10Y6/1 (灰)	10Y5/1 (灰)	-	-	-	-	-
	288	154(D-9/Ⅲ) 206(E-9/Ⅲ) 1787(E-8/Ⅲ) 1865(E-9/Ⅲ) 3788(F-6/Ⅲ)	-	(10.2)	-	-	精緻	良好 堅緻	5GY3/1 (暗オリーブ灰)	10Y5/1 (灰)	-	-	-	-	-
	289	1271(D-10/Ⅲ) 1309(D-10/Ⅲ) 3121(D-9/Ⅲ)	-	(7.2)	(10.8)	-	精緻,石長	良好 堅緻	5GY3/1 (暗オリーブ灰)	10Y5/1 (灰)	同心円タタキ	-	-	-	-
	290	5815(D-12/Ⅲa)	-	(9.6)	(6.3)	-	精緻,白	良好 堅緻	10BG4/1 (暗青灰)	10Y5/1 (灰)	-	-	-	-	-

鉄製品(第83図，No304～307)

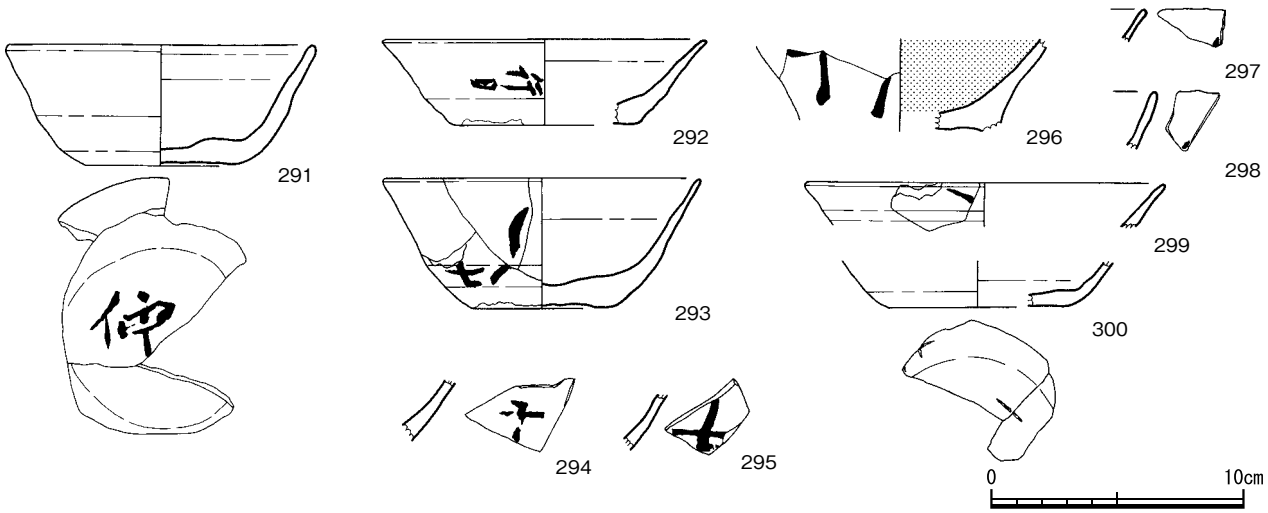
304～306は刀子と推定され，基部と先端部は欠損する。307の釘は，現存長3cmで先端部は欠損する。

鉄滓(第83図，No308～310)

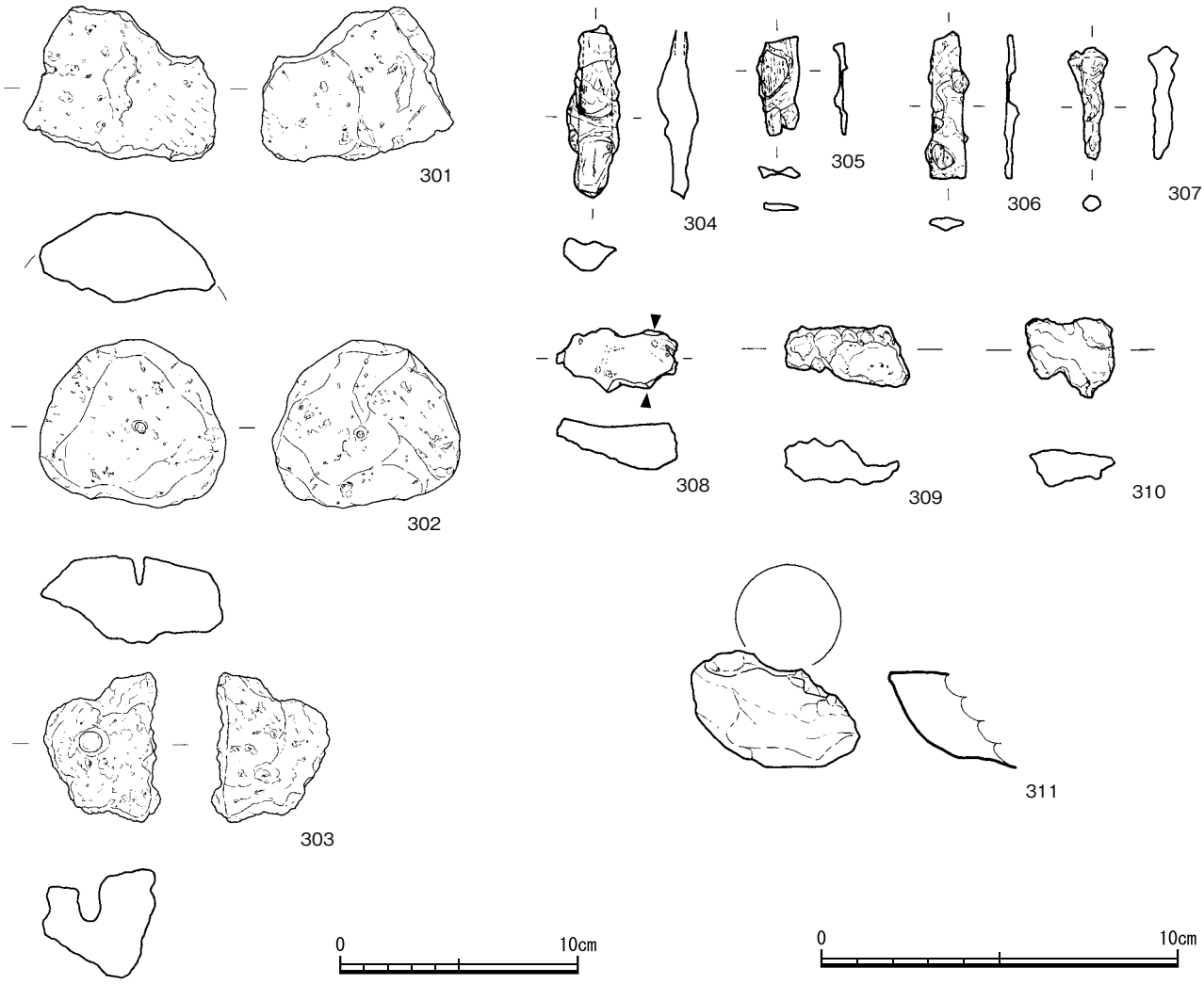
308～310は椀形鍛冶滓片で，308は分析の結果，精錬鍛冶滓の可能性を指摘された。

鞴羽口(第83図，No311)

311は鞴羽口の先端部片で，外面は溶融しガラス質に変化している。



第82図　古代出土遺物実測図(墨書土器)



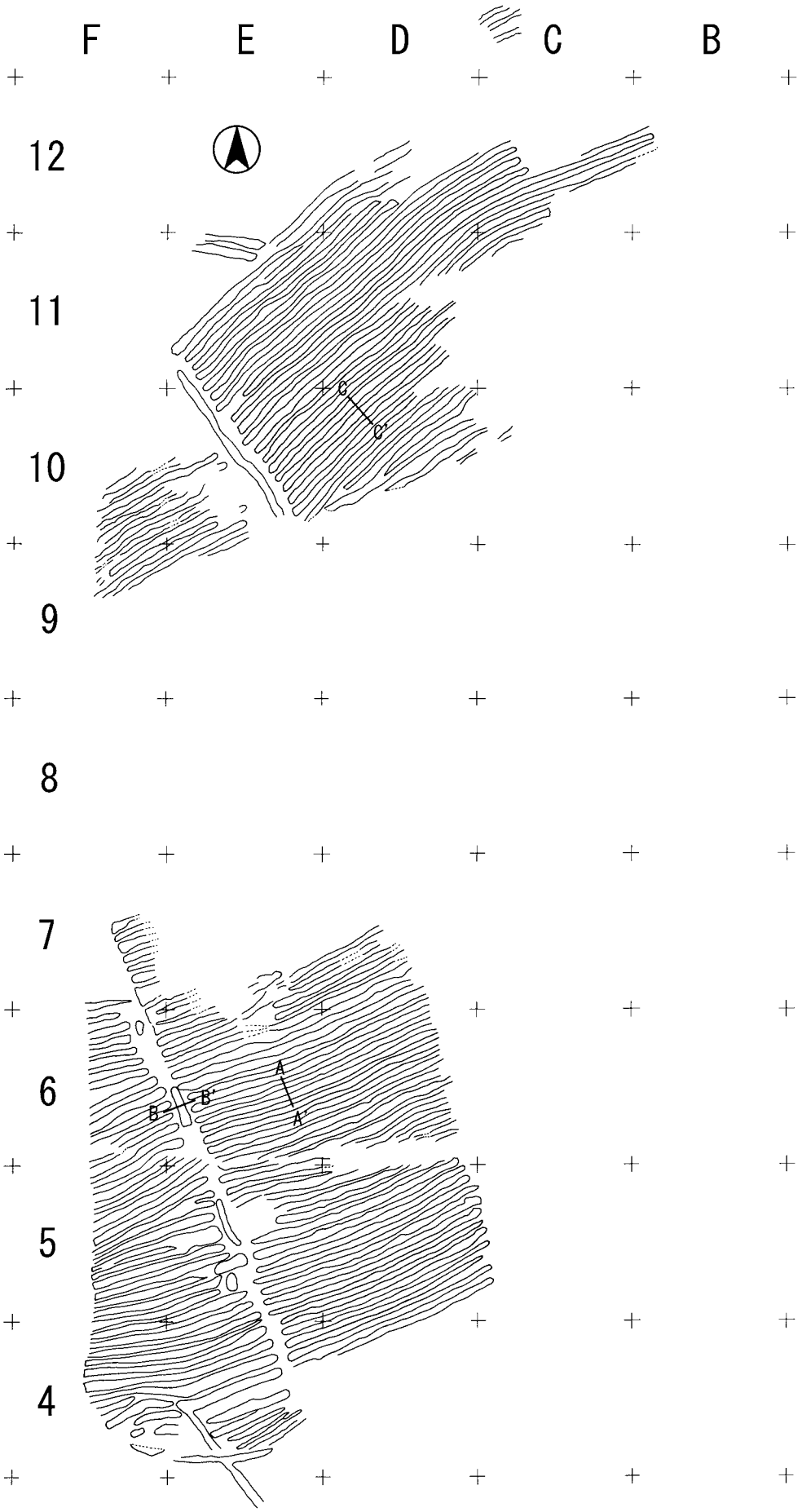
第83図　古代出土遺物実測図(軽石製品・鉄製品・鉄滓・羽口)

第37表　古代出土遺物観察表(19)

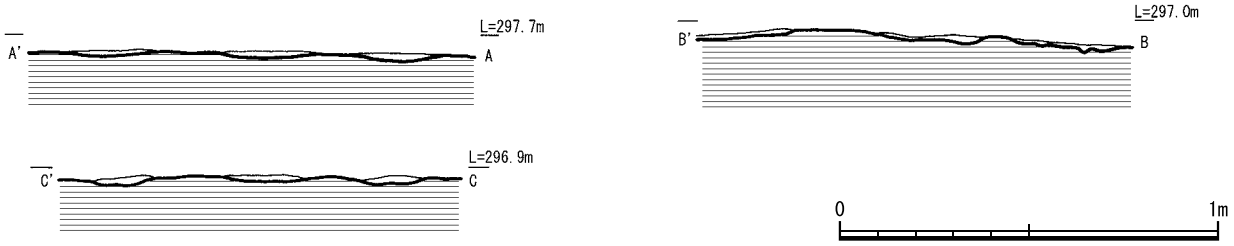
挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(内)	色調(外)	底部切り離し	調整(内)	調整(外)	坏未調整部	備考
82	291	1299(D-10/Ⅲ) 1688(F-9/Ⅲ) 1973(F-9/Ⅲ)	(12.3)	4.8	(6.2)	-	精緻	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	「仲」
	292	37(D-9/Ⅲ) 1703(F-9/Ⅲ) 2436(F-8/Ⅲ)	(13.0)	3.4	(7.6)	-	精緻,白	良好	7.5YR7/6 (橙)	7.5YR7/6 (橙)	ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	「行司」
	293	4062(E-12/Ⅲb) 4073(E-12/Ⅲb)	(12.6)	5.2	(5.4)	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/2 (灰白)	回転ヘラ切り (時計回り) 静止ナデ	-	-	-	「仟」
	294	一括(--/-)	-	-	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	295	注記なし(--/-)	-	-	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	296	4310(D-11/Ⅲ) 4311(D-11/Ⅲ)	-	(3.7)	-	-	精緻	良好	N2/ (黒)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	(時計回り) 回転ナデ	ミガキ	-	-	-
	297	注記なし(--/-)	-	(1.3)	-	-	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	-	-	-	-
	298	注記なし(--/-)	-	(2.3)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	299	注記なし(--/-)	(14.8)	(1.7)	-	-	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	10YR8/3 (浅黄橙)	-	-	-	-	-
	300	3579(D-6/Ⅳa) 3623(D-6/Ⅲ)	-	(1.8)	(7.8)	-	精緻	良好	2.5Y8/2 (灰白)	2.5Y7/1 (灰白)	回転ヘラ切り (方向不明) 静止ナデ	-	-	-	-

第38表　古代出土遺物観察表(20)

挿図番号	報告番号	取上番号(出土区/層)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
83	301	3960(F8/Ⅳa)	8.0	6.5	3.8	54.7	軽石
	302	1462(F10/Ⅲ)	7.9	7.1	3.7	48.8	軽石
	303	113(E9/Ⅲ)	4.9	6.3	4.6	31.4	軽石
	304	5895(B-13/Ⅳa)	(4.9)	1.5	0.2	(5.8)	刀子
	305	一括(--/-)	(2.8)	1.2	0.2	(1.2)	刀子
	306	7490(--/-)	(4.1)	1.3	0.2	(1.8)	刀子
	307	3851(E-7/Ⅲ)	(3.1)	0.5	-	(3.2)	釘
	308	23(D-9/Ⅲ)	3.3	1.5	1.3	9.5	鉄滓
	309	1627(F9/Ⅲ)	3.5	1.7	1.3	6.3	鉄滓
	310	32(D10/Ⅲ)	2.4	2.3	1.0	5.0	鉄滓
	311	1908(D-9/Ⅳ)	-	-	-	-	羽口



第84図　中世畠跡検出状況実測図(1/400)



第85図　中世畠跡断面実測図

第４節　中世の調査

１　調査の概要

調査は，Ⅰ層の表土，Ⅱ層の軽石層を重機で除去し，Ⅲ層上面を検出することから開始した。調査区の中央部３分の１程でⅡ層が既に削平を受けており，Ⅲ層下位が露出していたが，他の部分では安定した層堆積が認められた。軽石層が削平を受けていない場所では，Ⅲ層上面に軽石が並行し帯状に残されることが判明し，その検出を行った。Ⅱ層は文明ボラと呼称される軽石層で，1471年桜島起源の降下軽石(Ｐ-3)に該当する。

畠跡検出後，写真で記録し，畝と畝間の検出に努め軽石の除去を行い，その都度写真と実測で記録に努めた。しかし，畝間に残る軽石の量は少なく，畝を復元することは予想以上に困難であった。そのため畝と畝間を明確に区分することは出来ず，軽石が残る位置を畝間と判断した。

２　遺構(第84,85図)

Ⅲ層上面で検出した帯状の軽石帯については畝状遺構と判断し，軽石に被覆された畠跡の遺構を確認した。

軽石の残存は良好な部分で２cm～３cm，一方，数mmと観察の困難な場所もある。したがって，畝は軽石の降下やその後の土圧等の二次的影響で押しつぶされ，平坦化が進行したと思われる。なお，畝間の観察からは，深耕はⅢ層内で止まっている。

遺跡中央部7～9区が削平され，全体を鳥瞰できないが，同一方向に並行して走る畝間が断ち切られる箇所を畠境とし，４枚の畠を想定した。その結果，約1000m^{2}の畠が復元できる。なお，直接結びつくと思われる遺物は確認していない。

畠１(E,F-4～6区)

ほぼ東西に38条の畝間が確認され，東側は畠２との畠境が確認でき，西側は調査区外に延びる。南方向のE-4区では，不規則な畝間が観察されるが，畝間の保存状態が悪いことに起因する。

畠２(D,E-5,6区)

ほぼ東西に40条の畝間が確認され，西側は畠１との畝境が残される。なお，この畠境付近は高く拵えられ，東端より約20cm程高くなる。北側は大きく削平を受け，中央部の一部にも削平がみられる。畠境は110cm程確認される。

畠３(E,F-9,10区)

東側に畠４との畠境，西側の多くは調査範囲外のため，一部を検出し，９条の畝間を確認している。

畠４(C,D,E-10～12区)

西側に畠３と畠境をなし，東西方向に延びる25条の畝間が確認できる。このうち３条は35mほどの長さの畝(畝の端から端までが検出されるのは，この３本のみ)である。畠３と畠４は，等高線に沿って，南西から北東へと畝が続いているという特徴がある。

第Ⅲ章　発掘成果のまとめ

第１節　縄文時代

(1)縄文時代早期

縄文時代早期では５類の土器を抽出したが，絶対量は少ない。

Ⅰ類土器の押型文土器は，口縁部資料で類推にすぎないが，高山寺式土器の範疇と判断する。

Ⅱ類土器は下剥峯式土器としたが，桑ノ丸３類土器との区分に苦慮した。器形及び口唇部の整形，貝殻腹縁による繰り返される羽状文手法等，今後，改めて押型文土器との相関関係を検討すべきと反省している。

Ⅲ類土器は手向山式土器で，残念ながら検証できる量ではなかった。

Ⅳ類土器はその破片形状から壺形土器と判断し，平栫式土器とした。

Ⅴ類土器は塞ノ神Aa式土器で，30と31がそれぞれ１個体潰れた状態で出土した。31は，E-12区に単独に出土し，遺構との関係は確認できていない。31のように，完形土器が単独で出土する事例が増加してきている。興味深い事例であり，注目していきたい。

遺構は，土坑３基と集石４基を検出した。２号集石遺構にⅡ類土器が共伴し，４号集石遺構にⅤ類土器の30が伴う。

次に，遺跡における遺構の配置及び遺物の分布について，記録しておきたい。

１号，２号，３号集石遺構と１号土坑が南側で検出し，４号集石遺構と２号，３号土坑を北側で検出している。２号集石遺構にⅡ類土器が，４号集石遺構にⅤ類土器が関連することから，集石遺構が同時期の所産でないことは明らかである。しかし，遺構は南側と北側に集中し，遺跡中央部の40m程が空白となる。出土遺物も遺跡中央部を避ける傾向が読みとれる。特に，遺構配置からこの状況を類推すると，縄文人の土地利用は時間を超越して，理想とする場を共有していた可能性を提示している。すなわち，台地の中央は避け，先端部や奥部を必要とした可能性がみえてくる。

(2)縄文時代後期

縄文時代後期は４類，60点の土器が出土している。

Ⅵ類土器を，口唇部や口縁部の肥厚整形と指頭文から岩崎下層式土器とした。

Ⅶ類土器を，沈線文による規格性のある文様構成をもつことから阿高Ⅲ式土器とした。

Ⅷ類土器の曲線を多用した沈線文や押線文を，Ⅶ類土器の延長線上で捉え，岩崎上層式土器とした。

Ⅸ類土器の貝殻による連続刺突を疑縄文と判断し，綾式土器とした。

(3)縄文時代晩期

晩期の土器は，入佐式土器と黒川式土器の２種類で，総数1785点が出土し，入佐式土器67点，黒川式土器164点は確認している。晩期の土器は深鉢形土器，浅鉢形土器，鉢形土器と細分化し掲載した。

入佐式土器の浅鉢形土器は，胴部からそのまま口唇部に至るものと，口唇端部に粘土紐一条を貼り付け立ち上げるものがみられる。前者には，63,65,66,85等があげられるが，これらは入佐式土器の中葉から後葉段階に相当する。特に，85にはリボン状突起をもち，黒川式土器に相似する65から63，66に従い肩部が短くなる傾向があり，編年の一要素の可能性もある。後者は，口唇部を強調し粘土紐を貼り付け，内，外面に沈線を施す。この手法は，黒川式土器までも継承される。

深鉢形土器は，遺物が少ないが，肩部は短く頸部屈曲の土器もある。これは，入佐式土器後葉の特徴であろう。

黒川式土器の浅鉢形土器は，頸部から口縁部が短く外反の傾向を残すものと，頸部から口縁部までがさらに短くなり立ち上がりの傾向を示し始めるものがある。前者では，口径と胴部径が近似し，後者では胴部径が口径を上回る。

深鉢形土器では，口縁部を肥厚するものも含まれ，黒川式土器の最終段階とされるものもある。

鉢形土器の占有率は高い傾向がみえる。内面を工具等で入念に研磨し，外面はヘラナデや条痕で整える。口縁部等の残存率は高いが，胴部以下の保存状況は良くないことは，本遺跡でも同じである。このことは，指摘されるように，土器の製作手法に起因すると思われる。底部に編布が圧痕されることが知られているが，本遺跡でも一点出土している。

第２節　古代の遺物，遺構について

検出した７棟の掘立柱建物跡は，１号から６号の掘立柱建物跡と７号掘立柱建物跡に区分して捉えることとする。

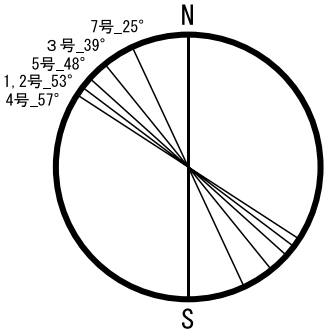
特に，特異な柱配置構造の７号掘立柱建物跡からは，それに直接関連する遺物を確認できており，一括遺物として評価することができる。一方，１号から６号掘立柱建物跡及びその周辺からも良好な資料が出土し，これらも建物に伴う遺物として評価できる。そこで，それらについて検討を加え判断材料としたい。

７棟の掘立柱建物跡は，１号建物，２号建物，６号建物の３棟が西側の平坦な場所に，３号建物，４号建物，５号建物，７号建物の４棟が西から北側の緩傾斜面に配置される。調査範囲が限定されるため推測の域を出ないが，この建物の配置状況からは，７号建物を中心に時計回りに，６号建物→２号建物→１号建物→４号建物→３号建物→５号建物→７号建物と半環状に配置した可能性も読みとれる。さらに，半環状の内側(１号から７号建物の東側)に空白地帯が存在し，これらを中央広場と想定することも可能であろう。

７号建物跡が特異な構造をもつことは，即ち特殊な機能を保持していたとも解釈できる。北側の傾斜面を選地し，敷地を造成していることも，他の建物群とは大いに異なる。この特異性を背景に，７号建物を中心或いは頂点とした建物配置が存在した可能性を想起したい。

次に，建物主軸の変異を基準に検討を加えてみると，１号～６号建物跡はN-48°～57°-Wの範囲内(４号の柱穴を共有し，時間的前後関係が考慮される３号はN-39°-W)であり，７号掘立柱建物跡のみN-25°-Wで他の建物と約25°建物主軸を異にする(第86図)。

以上の他に，遺物の出土傾向からにも方向性を得ることができたので後述する。



第86図　建物主軸

(1)１号掘立柱建物跡について

１号掘立柱建物跡は１号～６号の中で，唯一建物に関連すると思われる遺構を伴うものである。

建物中心部に焼土跡，短軸寄りに土坑が検出される。また，建物内から鉄滓も出土し，鍛冶炉の可能性も想定される。しかし，焼土跡からは，直接鍛冶炉の存在を裏付ける資料は得られていない。

なお，出土地点を異にするが，E-8区には赤褐色で焼成の明瞭な焼土跡が検出され，D-9区からは鞴羽口と鉄滓２点が出土している。鉄滓２点の内１点からは，精錬鍛冶滓との分析結果が得られている。出土点数は少ないが，精錬鍛冶工程の作業が行われた可能性はある。

(2)７号掘立柱建物跡について

７号建物跡は，他６棟の建物跡とは異なり北側緩傾斜面の一部を掘削整地し，建物主軸も他と異なっている。この主軸のズレの要因は，緩傾斜面を選地したことから生じた地形的制約と解釈するよりも，建物自体の機能に起因すると判断している。

建物の性格について，柱穴配列，関連遺構，遺構遺物を検討し考察を加えてみたい。

柱穴配列は外周２間×３間(P1～P10)，中央に１間×１間(P11～P14)，建物奥中心よりの柱穴２か所(P11,P12)の背後に張り出しと推測される柱穴２本(P15,P16)を確認した。変則的な柱穴配列であるが，基本的には総柱建物と捉え，建物の復元が可能である。しかし，建物内から出土した遺物の保存状態は良好で，破損も少なく，出土位置も原位置に近いと判断される。これらのことから，平地式の掘立柱建物の可能性も考慮したい。

中央部のP11とP12の間に，白の強い色調エリアを確認し，慎重を期すため科学分析を依頼した。分析結果からは，リン酸含量の値が極めて低く，烽火等の痕跡は無いことが指摘された。結果として，粒子の細かい白砂等を散布した可能性が考えられる。

また，P11,P12,P14の外側に併設した，３か所の焼土跡を検出した。焼土痕の色調及び断面観察からは，恒常的な使用を裏付ける強い被熱痕やその他の材料は認められず，むしろ一過性の烽火の可能性を強く提示している。

したがって，建物中央部の意図的白砂の散布と，柱に併設した規格性の高い烽火からは，建物造営の際の地鎮祭儀礼行為が想起される。

建物跡及び周辺の遺物からも，その特異性が指摘できる。高台高４cm～５cmの高坏状の坏の集中出土，肩部に穿孔と体部に赤色顔料を施す小型壺の存在，椀形の銅製器の存在，多くの墨書土器，猿面硯の存在等である。

墨書土器の“仟”，“仲”の存在。中でも“仟”は隷書体を変形したような特異な字風で，宗教的，祭祀的色彩を強く意識させる書体選択である。

建物跡及び柱穴から炭化物も採取され，分析の結果，イスノキとヒノキ属と判明した。ヒノキ属の材質は，宮殿や寺院等の特殊な建物の柱材，構築材として利用することが指摘されている。イスノキについても，イスノキは九州に自生し，強度，耐朽性に優れ，柱材としては適材であるとの指摘を受けた。したがって，建物機能に基づいた，用材選択が行われていたと言える。

以上，総合的に判断し，７号掘立柱建物跡は宗教的，祭祀的施設であった可能性が指摘できる。

そこで，宗教的建物の観点から柱穴配置を考えてみたい。

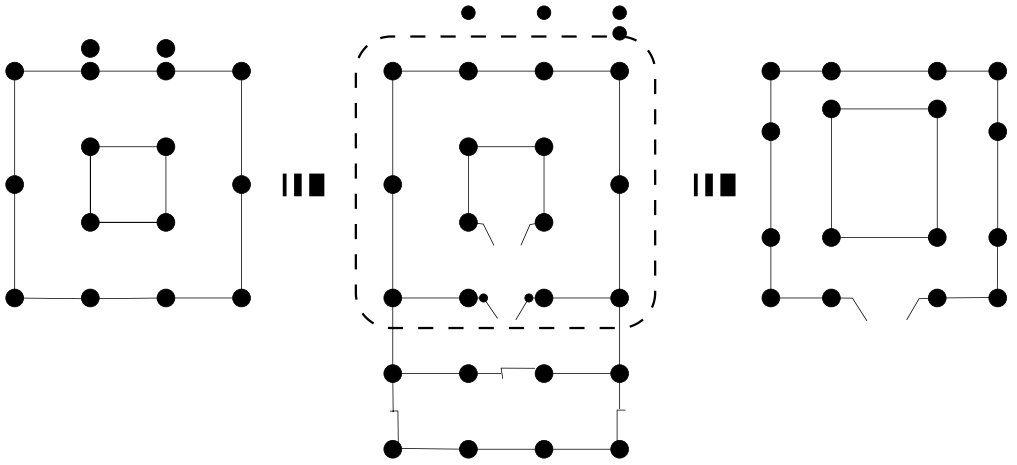
仏殿・仏堂は，母屋と４面の庇が構造の基本とされる。

平安時代に建立された高野山御影堂の柱配置(寿永３年，1184年)は，中世仏堂の成立及び，地方寺院仏堂の初源形態を考える上で重要な資料である。高野山御影堂の柱配置は，２間×３間の母屋の正面に庇，孫庇をもつ構造である。(第87図)

現存する鹿児島県大口市の白木神社(1408年)の柱配置は，３間×３間の母屋で庇はもたない(第87図)。｛建築技術の向上により梁行き３間に梁間を拡張することができた１間４面の構造である。内陣後柱のズレは，それまでの２間×３間母屋の内陣柱のズレが名残としてみられると捉えられなくもない。｝

本遺跡７号建物跡(第87図)が，高野山御影堂や白木神社の柱配置に酷似していることが理解される。特に，高野山御影堂母屋構造は酷似し，庇を欠落した構造と解される。

上記を踏まえ，本遺跡７号建物跡を仏堂の初源的形態を反映したと解すべきか，地方寺院の簡素化と解すべきか興味深い資料提示となった。



踊場遺跡7号掘立柱建物跡
（９c末～10c初）

高野山御影堂図
（12C）

白木神社（鹿児島県大口市）
（15c）

第87図　柱配置見取図

(３)出土遺物について

出土遺物の特徴的傾向をまとめる。

土師器坏は，ナデ調整を体部下端から口唇部まで全体に施すものが多く，体部外面下端にケズリ痕を残すものは少ない。器形は底部と体部の境界に明瞭な稜線をもち，体部は直線的に立ち上がる。底部は厚くやや突出がみられもの，突出(円盤状高台)が著しいものがある。さらに突出がハの字状に踏ん張り，体部ナデ調整が強く器面に稜線がみられるものがある。全体的な傾向としては，底部にやや突出がみられ厚い底部をもつものが多くみられるという特徴がある。

土師器椀，黒色土器は，高台高が1cm～1.5cmで端部を丸くおさめる。高台内面に面があるものが多く，一部高台接合部をナデ，中央部が若干突出するものがみられる。また，底部外面に放射状の指頭調整痕が施されるものもある。黒色土器には，高台接合部外面にユビ押さえによるナデが巡り，見かけ上高台高が高くみえるものが存在する。また高台をもたない坏，やや大ぶりの坏(鉢？)もある。

須恵器坏は，土師器坏と同様ナデ調整を体部下端から口唇部まで全体に施すものが多く，体部外面下端にケズリ痕が残るものは少ない。器形は体部，底部の境界に明瞭な稜線をもち体部が直線的に開く，底部は突出をもつとはいえないが比較的厚手のものが多い。

土師器甕は，器面にハケメが残るものは少なく体部が張るものも少ない。体部は下方に垂下するものが多く，口縁部は極端に屈曲するものはみられず，くの字状で長いものから如意状で短いものがみられる。

須恵器甕は絶対量が少なく，傾向的特徴をつかむには至らない。体部内，外面にタタキ後の横ナデ調整痕がみられるものがある。

須恵器壺についても絶対量が少なく，傾向的特徴をつかむには至らないが，回転ナデにより仕上げられタタキは認められない。１点のみ底部に同心円タタキがみられる。

墨書土器については，「仟」「仲」「行司」が判読され，中でも「仟」が先行する。遺跡内で同一文字が多用される事例に関し，集落あるいは集団の識別のためとの見解もあり，本遺跡もこれに該当する可能性もあるが，書体の独自性(仟と仲)と７号掘立柱建物跡の特異性に視点を置くと，課題は残る。

猿面硯の出土からは，識字層の存在も示唆される。

一方，一般的な字風で書かれた「行司」は，職掌分担に関わる可能性が高いとの指摘がある。古代においては「行司」は「行事」と書かれることが多いが，飛鳥京苑地遺構出土の７世紀末の木簡に「行司」例が知られる。

出土遺物の分布傾向について

遺物の編年的位置づけについては，“総括”で記述する。

遺物分布傾向からは，７号掘立柱建物跡の周辺と，その他の地区(主に遺跡内平坦面)の２地区に大きく分かれる。

７号掘立柱建物跡とその周辺からは，高台部がハの字状に張る円盤状高台を有する土師器坏や，体部の稜線が明瞭な坏が多く出土している。土師椀は，器壁が厚く，体部に稜線を残している。

高台付坏については，熊本県神水遺跡に類似した形態が出土し，９世紀後半台の年代が与えられている。また，黒色土器の底部外面に放射状の指頭調整痕をもつものについては，宮崎県小山尻東遺跡に先例があり，10世紀前半頃の所産としている。また，同県蕨野遺跡西ノ原地区遺跡の調査では，同種の黒色土器が焼成遺構から出土し，日向産であることが立証されている。

その他の地区からは，体部と底部の境界に明瞭な稜線を形成し，口縁部へ直線的に立ち上がる土師器坏。底部がやや厚みをもつ坏がみられる。法量については口径13cm前後，器高4cm前後のものが主体を占め，一部に口径15cm程の大型品や器高３cmの小型品も含まれる。土師器椀，黒色土器については体部に厚みのあるものはなく，器形的には７号掘立

柱建物跡とほぼ同様である。高台端部が断面三角形を呈する皿形状のものが１点みられる。

須恵器坏・土師器甕・須恵器甕・壺の煮炊具は，このエリアのみに分布する。個々の特徴については，先述したとおりである。この他，甑，焼塩壺，鉢，皿などが若干出土している。

７号掘立柱建物は顕著な円盤状高台をもつ土師器坏，高台付坏，底部外面に放射状指頭調整痕を施す黒色土器椀の存在などから，９世紀末から10世紀前半の時期が想定される。一方，その他の地区の土師器・須恵器坏・土師甕等は，９世紀後半代が想定され，遺物の構成からは日常的生活の場としての機能が想定される。

第３節　中世の畠跡について

“はたけ”の使い分けについて，「畠」は乾いた耕作地を意味するとともに古代～中世に使用され，「畑」は近世以降の焼き畑を表していたが，中世末以降に混同されて現在に至るとされる。本遺跡では，文明の桜島火山活動により埋没したことを前提に，「畠」で統一して記述する。

畝間の深耕がⅢ層に限られ，下位の層への撹乱が認められないことから，大規模な深耕や天地返しは行っていないと判断される。また，本遺跡の畝及び畝間，畠境から採取した試料を植物珪酸体分析した結果，イネ属やムギ類などの栽培植物は全く検出されていない。また，耕作深度が大きくないことから，ダイコン，ゴボウ，長イモ等のような深く根を伸ばす根菜類の栽培も想定しづらい。一方，畝と畝間の比高差が認められないことを前提に考慮すると，休閑期であり長期間放棄されていたことも予想される。

いずれにしても，今後，科学分析等を駆使し，栽培作物を明らかにすること，畑地利用を明らかにすることは，栽培作物の解明にとどまらず当時の社会構造に言及できる可能性を秘めている。

(参考文献)

出合　宏光「九州南部における平安時代の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』第15号　2000　日本中近世土器研究会
中野　政樹　編「正倉院の金工」『日本の美術２』No141
伊藤　延男　編「密教建築」『日本の美術４』No143
『かごしま文化財辞典』　2002　鹿児島県教育委員会

高　篠　遺　跡

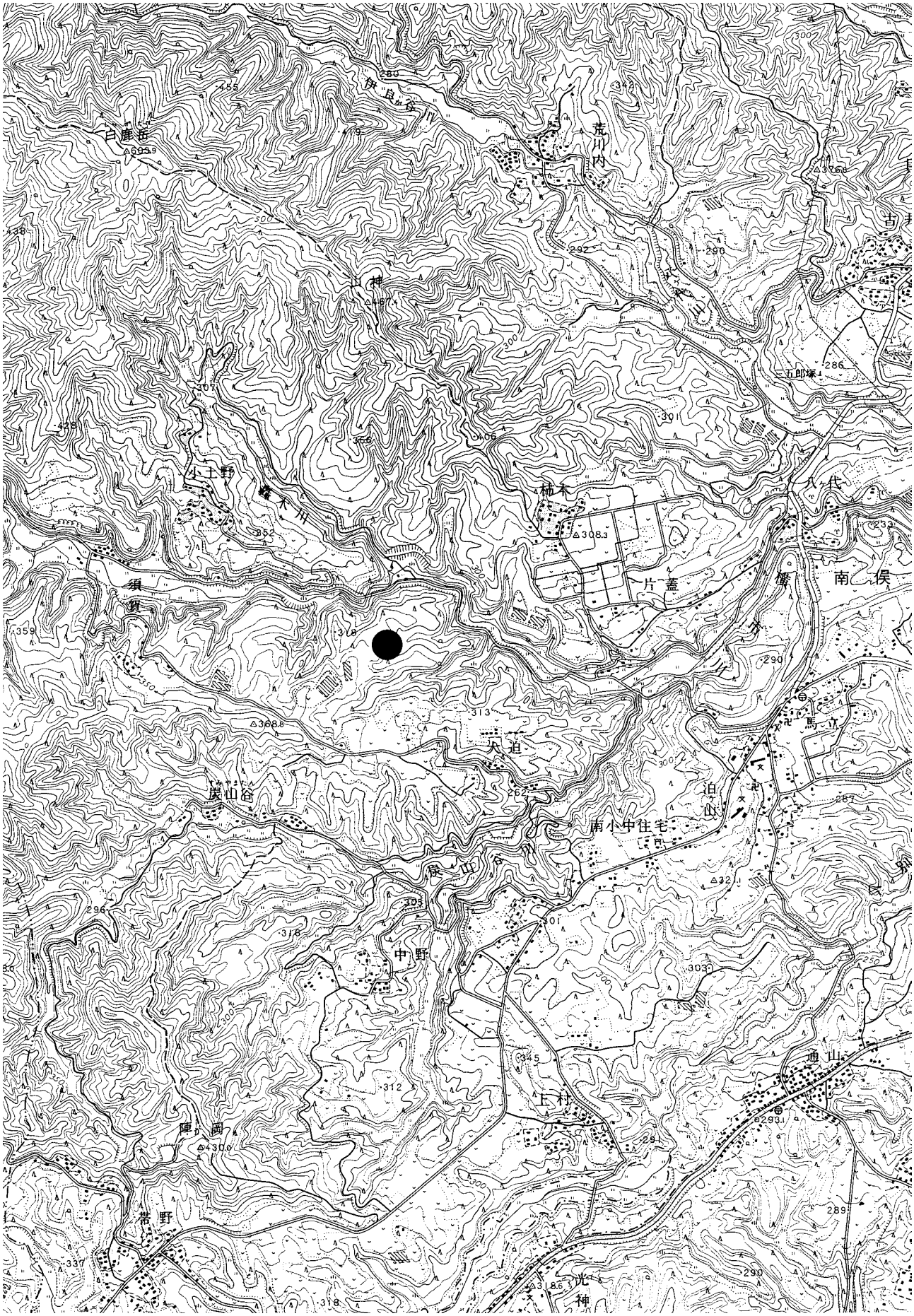
Takashino Site

報　告　書　抄　録

ふりがな	たかしのいせき
書　　名	高篠遺跡
副 書 名	東九州自動車道（末吉財部 IC ～国分 IC 間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅳ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	71
編 著 者 名	山崎克之・松田朝由
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 899-4461　鹿児島県国分市上之段 1175-1　　TEL 0995-48-5811
発行年月日	2004 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
たかしの 高篠	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曽於郡 たからべちょうみなみまた 財部町南俣	46443	65-101-0	31° 41' 56"	130° 55' 33"	確認調査 19960823 ～ 19961014 本調査 20000105 ～ 20000331 20000508 ～ 20000831	8,800	東九州自動車道建設（末吉財部 IC ～国分 IC 間）に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高篠	包含地	縄文後期		石鏃，土器	
		平安時代	掘建柱建物 柱穴 軽石集積遺構 焼土 土坑 道状遺構 畝状遺構 落し穴	土師器（杯，碗） 黒色土器 墨書土器 須恵器（壺，甕） 焼塩土器 石帯，銅環，帯金具 紡錘車，土錘 羽口 鉄滓 刀子	



遺跡の位置図

例　言

1　この報告書は，東九州自動車道建設(末吉財部ＩＣ～国分ＩＣ間)に伴う「高篠遺跡」の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所の受託事業として，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
3　本報告書で用いたレベル数値はすべて海抜高である。
4　本報告書の遺物番号は各章または各節ごとの通し番号とし，挿図，表，図版と一致する。
5　発掘調査において財部町教育委員会の協力を得た。
6　発掘調査における実測及び写真撮影は，調査担当者が行った。
7　遺構実測の一部は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
8　遺物実測の一部は（株）九州文化財研究所に依頼し，その監修については長野が行った。
9　本報告書の制作・整理作業にはデジタル技術を導入し，図版等の作成及び編集に係るデータ処理は馬籠，鮫島の協力を得た。
10　本報告書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い，松田，山崎が担当した。各項目の担当は以下の通りである。なお，監修は長野眞一が行った。

第Ⅰ章・・・・・・・・・・・・・・山崎克之
第Ⅱ章
　第1,3－1節・・・・・・・・・山崎克之
　第2,3－2節・・・・・・・・・松田朝由
第Ⅲ章
　第1節・・・・・・・・・・・・松田朝由
　第2節・・・・・・・・・・・・山崎克之
　第3節・・・・・・・・・・・・松田朝由，岩澤和徳
付編・・・・・・・・・・・・・・永濱功治

11　遺物に関する写真撮影は鶴田靜彦，福永修一，横手浩二郎，西園勝彦が行った。
12　高篠遺跡，踊場遺跡出土の精錬・鍛冶関連遺物の科学分析は（株）テクノリサーチに依頼し，その分析結果を付編に掲載した。
13　掲載遺物の縮尺は，土器は1/3，石器は1/1を基本とする。しかし，遺物によってはその限りではない。各々，図中に示したスケールを参考とされたい。
14　土器，石器等の出土位置については，各章，各節において分類ごとに掲載した。スケールは原則として1/100ないし1/200である。図中にグリッドラインまたはグリッド杭を示す十字を表示したので参考にされたい。
15　本報告書に掲載した出土遺物，図面，写真等は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，活用する。なお，本報告書に使用したデータの一部は埋蔵文化財情報管理システム及び埋蔵文化財情報データベース（http//www．jomon－no－mori．jp）で公開する予定である。

本 文 目 次

第Ⅰ章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247
　第１節　調査に至るまでの経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247
　第２節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247
　第３節　調査の経過(日誌抄)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・248
第Ⅱ章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・252
　第１節　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・252
　第２節　縄文時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・254
　　１　土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・254
　　２　石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・255
　第３節　平安時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・258
　　１　古代の遺構，遺構内遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・258
　　(１)　掘立柱建物跡及び建物内軽石集積・焼土・・・・・・・・・・・258
　　(２)　軽石集積・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・276
　　(３)　集石１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・284
　　(４)　焼土・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・284
　　(５)　遺物集中地点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・286
　　(６)　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・289
　　(７)　古道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・293
　　(８)　溝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・294
　　(９)　畝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・294
　　２　古代の出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・301
　　(１)　遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・301
　　(２)　遺物の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・301
　　土師器坏・皿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・301
　　土師器椀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・314
　　須恵器坏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・321
　　黒色土器坏・皿・椀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・324
　　焼塩壷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・334
　　赤彩土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・342
　　土錘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・342
　　把手・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・342
　　紡錘車・円盤状土製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・343
　　土師器甕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・346
　　須恵器壷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・362
　　須恵器甕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・368
　　墨書・刻書土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・369
　　石帯(巡方)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・378
　　平玉石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・378
　　鉄製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・378
　　銅製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・379
　　鍛冶関連遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・380
　　砥石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・380
　　羽口・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・380
第Ⅲ章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・387
　第１節　土器の製作技術と土器様相・・・・・・・・・・・・・・・・・387
　　１　土師器坏の製作技術と型式変遷・・・・・・・・・・・・・・・・387
　　(１) 回転台の回転方向について・・・・・・・・・・・・・・・・・387
　　(２) 土師器坏の型式組列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・387
　　２　黒色土器坏・椀の製作技術と型式変遷・・・・・・・・・・・・389
　　(１) 体部外面のケズリ調整について・・・・・・・・・・・・・・・389
　　(２) 形態分類と調整技法の時期的変遷について・・・・・・・・・・390
　　３　土師器甕の製作技術と形態変遷・・・・・・・・・・・・・・・391
　　(１) 属性分析と類型の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・391
　　(２) 各遺跡の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・392
　　(３) 土師器甕の変遷と歴史的な評価・・・・・・・・・・・・・・・393
　　４　本遺跡出土須恵器の製作技術と菱刈町岡野窯跡との比較について・・・・・393
　　(１) 高篠遺跡出土須恵器壷・甕・坏の特質・・・・・・・・・・・・394
　　(２) 岡野窯須恵器の特徴と高篠遺跡須恵器の比較・・・・・・・・・394
　　５　各期の土器様相と本遺跡の時期的な位置付け・・・・・・・・・395
　　(１) 各期の設定と土器様相について・・・・・・・・・・・・・・・395
　　(２) 高篠遺跡の時期的な位置付けと土器様相・・・・・・・・・・・398
　　６　高篠遺跡出土墨書土器について・・・・・・・・・・・・・・・399
　　７　高篠遺跡出土石帯について・・・・・・・・・・・・・・・・・399
　　８　高篠遺跡出土銅環について・・・・・・・・・・・・・・・・・399
　第２節　平安時代の遺構のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・399
　　１　掘立柱建物から見た遺跡の性格・・・・・・・・・・・・・・・399
　　２　逆茂木痕を伴う土抗について・・・・・・・・・・・・・・・・401
　第３節　高篠遺跡の特質と歴史的な位置付け・・・・・・・・・・・・405
　　１　古代牧との関わりについて・・・・・・・・・・・・・・・・・405
　　２　高篠遺跡と古代交通路・・・・・・・・・・・・・・・・・・・406
　　３　古代官道と牧について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・410

挿　図　目　次

第１図　遺跡と周辺の地形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・250
第２図　周辺地形と調査区及びグリッド配置図・・・・・・・・・・・・・・251
第３図　土層柱状図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・252
第４図　土層断面図(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・252
第５図　土層断面図(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・253
第６図　縄文土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・254
第７図　石器（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・256
第８図　石器（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・257
第９図　遺構配置図(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・259
第10図　遺構配置図(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・261
第11図　遺構配置図(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・262
第12図　１号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・263
第13図　１号掘立柱建物跡内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・263
第14図　２号掘立柱建物跡及び軽石集積４・・・・・・・・・・・・・・・・264
第15図　２号掘立柱建物跡及び軽石集積４内出土遺物・・・・・・・・・・・265
第16図　３号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・265
第17図　３号掘立柱建物跡内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・265
第18図　４号掘立柱建物跡及び焼土１・・・・・・・・・・・・・・・・・・266
第19図　焼土１内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・266
第20図　５,６号掘立柱建物跡及び焼土３,４,５(１)・・・・・・・・・・・・267
第21図　５,６号掘立柱建物跡及び焼土３,４,５(２)・・・・・・・・・・・・268
第22図　５号掘立柱建物跡及び焼土５内出土遺物・・・・・・・・・・・・・268
第23図　７号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・269
第24図　７号掘立柱建物跡及び８号掘立柱建物跡及び焼土６内出土遺物・・・・・・・271
第25図　８号掘立柱建物跡及び焼土６，７，８・・・・・・・・・・・・・271
第26図　９号掘立柱建物跡及び焼土９，10，11，12・・・・・・・・・・・272
第27図　９号掘立柱建物跡内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・272
第28図　10号掘立柱建物跡及び軽石集積５・・・・・・・・・・・・・・・・274
第29図　軽石集積５内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・275
第30図　11号掘立柱建物跡及び焼土13・・・・・・・・・・・・・・・・・・275
第31図　12号掘立柱建物跡及び焼土14,15,17・・・・・・・・・・・・・・・277
第32図　13号掘立柱建物跡及び焼土18，19，20・・・・・・・・・・・・・・278
第33図　焼土18内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・279
第34図　14号掘立柱建物及び焼土21・・・・・・・・・・・・・・・・・・・279
第35図　15,16号掘立柱建物及び焼土21・・・・・・・・・・・・・・・・・280
第36図　軽石集積１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・281
第37図　軽石集積２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・282
第38図　軽石集積２内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・282
第39図　３号軽石集積・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・283
第40図　軽石集積３内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・283
第41図　軽石集積４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・284
第42図　集石１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・284
第43図　焼土16,23,24,25,26,27,28・・・・・・・・・・・・・・・・・・・285
第44図　焼土７内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・286
第45図　焼土29・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・287
第46図　焼土29内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・287
第47図　遺物集中地点１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・288
第48図　遺物集中地点１内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・288
第49図　遺物集中地点２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・289
第50図　遺物集中地点２出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・289
第51図　土抗１及び土抗１出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・290
第52図　土抗２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・290
第53図　土抗３,４,５,６・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・291
第54図　土抗５内出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・291
第55図　土抗７,８,９,10,11,12,13・・・・・・・・・・・・・・・・・・・292
第56図　古道及び溝状遺構及び畝状遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・294
第57図　土師器坏底部出土状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・302
第58図　黒色土器底部出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・302
第59図　土師器甕口縁部出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・303
第60図　須恵器壷・甕口縁部出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・303
第61図　土師器甕(報告番号606)出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・304
第62図　土師器甕(報告番号607)出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・304
第63図　須恵器甕(報告番号756)出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・305
第64図　須恵器甕(報告番号757)出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・305
第65図　土師器坏(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・306
第66図　土師器坏(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・307
第67図　土師器坏(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・308
第68図　土師器坏(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・309
第69図　土師器坏(５)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・310
第70図　土師器坏(６)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・311
第71図　土師器坏(７)及び土師器皿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・312
第72図　土師器椀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・313
第73図　須恵器坏(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・322
第74図　須恵器坏(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・323
第75図　黒色土器坏，皿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・325
第76図　黒色土器椀（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・326
第77図　黒色土器椀（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・327
第78図　黒色土器椀（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・328
第79図　黒色土器椀（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・329
第80図　焼塩壷出土状況　(破片数)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・335
第81図　焼塩壷（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・336
第82図　焼塩壷（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・337
第83図　焼塩壷（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・338
第84図　焼塩壷（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・339
第85図　赤彩土器及び土錘及び把手・・・・・・・・・・・・・・・・・・・343
第86図　紡錘車及び円盤状土製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・344
第87図　土師器甕分類表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・347
第88図　土師器甕（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・349
第89図　土師器甕（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・350
第90図　土師器甕（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・351
第91図　土師器甕（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・352
第92図　土師器甕（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・353
第93図　土師器甕（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・354
第94図　土師器甕（７）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・355
第95図　土師器甕（８）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・356
第96図　土師器鉢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・357
第97図　須恵器壷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・363
第98図　須恵器甕（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・364
第99図　須恵器甕（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・365
第100図　須恵器甕（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・366
第101図　須恵器甕（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・367
第102図　墨書土器出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・370
第103図　墨書土器（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・371
第104図　墨書土器（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・372
第105図　墨書土器（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・373
第106図　墨書土器（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・374
第107図　石帯及び平玉石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・378
第108図　鉄製品及び銅製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・379
第109図　鍛冶関連遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・381
第110図　鉄滓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・382
第111図　砥石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・383
第112図　羽口・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・386
第113図　土師器坏の砂粒の動きと渦巻状痕・・・・・・・・・・・・・・・・387
第114図　土師器杯分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・388
第115図　黒色土器坏・椀分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・390
第116図　土師器甕型式組列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・392
第117図　土師器甕の地域性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・393
第118図　Ⅰ期の土器様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・395
第119図　Ⅱ期の土器様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・396
第120図　Ⅲ期の土器様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・396
第121図　Ⅳ期の土器様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・397
第122図　Ⅴ期の土器様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・397
第123図　Ⅵ期の土器様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・398
第124図　逆茂木痕を伴う土抗集成(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・402
第125図　逆茂木痕を伴う土抗集成(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・403
第126図　逆茂木痕を伴う土抗集成(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・404
第127図　高篠遺跡周辺図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・405
第128図　高篠ルートと大川原ルート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・407

表 目 次

第１表　縄文土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・255
第２表　石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・257
第３表　１号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・294
第４表　２号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・295
第５表　３号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・295
第６表　４号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・295
第７表　５号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・295
第８表　６号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・296
第９表　７号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・296
第10表　８号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・296
第11表　９号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・296
第12表　10号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・297
第13表　11号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・297
第14表　12号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・297
第15表　13号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・297
第16表　14号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・298
第17表　15号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・298
第18表　16号掘立柱建物跡観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・298
第19表　軽石集積観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・298
第20表　焼土観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・298
第21表　焼土観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・299
第22表　土抗観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・299
第23表　遺構内遺物観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・299
第24表　遺構内遺物観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・300
第25表　土師器坏遺物観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・315
第26表　土師器坏遺物観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・316
第27表　土師器坏遺物観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・317
第28表　土師器坏遺物観察表(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・318
第29表　土師器坏遺物観察表(５)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・319
第30表　土師器坏遺物観察表(６)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・320
第31表　土師器坏遺物観察表(７)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・321
第32表　須恵器坏観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・324
第33表　黒色土器杯・椀観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・331
第34表　黒色土器杯・椀観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・332
第35表　黒色土器杯・椀観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・333
第36表　黒色土器杯・椀観察表(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・334
第37表　焼塩壷観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・340
第38表　焼塩壷観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・341
第39表　焼塩壷観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・342
第40表　赤彩土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・343
第41表　土錘及び把手観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・343
第42表　紡錘車及び円盤状土製品観察表(１)・・・・・・・・・・・・・345
第43表　土師器甕観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・358
第44表　土師器甕観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・359
第45表　土師器甕観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・360
第46表　土師器甕観察表(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・361
第47表　土師器甕観察表(５)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・362
第48表　須恵器壷及び甕観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・368
第49表　須恵器壷及び甕観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・369
第50表　文字の判明している墨書土器の出土区・・・・・・・・・・・・・370
第51表　墨書土器観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・375
第52表　墨書土器観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・376
第53表　墨書土器観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・377
第54表　石帯及び平玉石観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・378
第55表　鉄製品遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・378
第56表　銅製品遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・378
第57表　鉄滓観察表(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・383
第58表　鉄滓観察表(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・384
第59表　鉄滓観察表(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・385
第60表　砥石観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・385
第61表　羽口観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・385
第62表　土師器坏の砂粒の動きと渦巻状痕の観察表・・・・・・・・・・・387
第63表　土師器坏属性分析表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・388
第64表　黒色土器坏・椀属性分析表・・・・・・・・・・・・・・・・・・390
第65表　土師器甕属性分析表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・391
第66表　高篠遺跡食膳具器種組成表(底部の破片をカウント)・・・・・・399
第67表　検出棟数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・400
第68表　掘立柱建物跡の配置の分類表・・・・・・・・・・・・・・・・・400
第69表　規模・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・400
第70表　鹿児島県における柱間値の状況・・・・・・・・・・・・・・・・400
第71表　椙粉山遺跡　逆茂木を伴う土抗観察表・・・・・・・・・・・・・405
第72表　荒迫遺跡　逆茂木を伴う土抗観察表・・・・・・・・・・・・・・405
第73表　中ノ原遺跡　逆茂木を伴う土抗観察表・・・・・・・・・・・・・405
第74表　北田遺跡　逆茂木を伴う土抗観察表・・・・・・・・・・・・・・405
第75表　永磯遺跡　逆茂木を伴う土抗観察表・・・・・・・・・・・・・・405

図 版 目 次

高篠遺跡遠景(東から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版51
焼土20ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版52
軽石集積３ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版53
土師器甕　色調(左・麻黄橙色，中・橙色，右・褐色)ほか・・・・・・図版54
須恵器坏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版55
掘立柱建物検出状況ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版56
２号掘立柱建物，軽石集積４ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版57
土坑１，２ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版58
古道１ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版59
縄文時代出土石器(石鏃，石匙)ほか・・・・・・・・・・・・・・・・図版60
土師器坏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版61
土師器坏，椀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版62
黒色土器坏，皿，椀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版63
見込みの静止ナデほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版64
土師器甕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版65
土師器甕，鉢ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版66
須恵器壷，甕(左・外面，中・内面)・・・・・・・・・・・・・・・・図版67
墨書土器(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版68
墨書土器(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版69
石帯(裏面)，平玉石，鉸具，銅環，不明銅製品，土錘ほか・・・・・・図版70
石帯(表)，鉸具，銅環ほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版71
鍛冶関連遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版72
焼塩壷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版73

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道（末吉財部IC～国分IC間）の建設を計画し，事業区域内の埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会に照会した。

これを受けて，鹿児島県教育委員会は日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所と協議を行い，鹿児島県立埋蔵文化財センターが工事予定区域内を対象にして，埋蔵文化財の分布調査を行うこととなった。分布調査は平成６年10月と平成７年５月に実施した。

この結果，工事予定区域内に13か所の遺物散布地や確認調査の必要な地点の所在することが判明した。そこで，再度協議を行い，平成8年4月から用地買収等の条件が整った区域を対象として順次確認調査を実施することとなった。

高篠遺跡は，工事施工区域内の112㎡を対象にして平成８年８月23日から10月14日まで確認調査を実施した。

確認調査の結果，縄文時代晩期，平安時代の遺物包含層が残存することが明らかになった。この結果をもとに，鹿児島県教育委員会と日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所が協議を行い，緊急発掘調査の必要な8,800㎡について，鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

本調査は平成９年度から12年度にかけて３度実施した。

平成10年１月５日～３月24日（実働50日）

平成12年１月５日～３月24日（実働50日）

平成12年５月８日～８月31日（実働72日）

第2節　調査の組織

平成８年度　確認調査

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者

鹿児島県立埋蔵文化財センター　所　長	吉元　正幸

調査企画者

次長兼総務課長	尾﨑　　進
主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
主任文化財主事兼課長補佐	新東　晃一
主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎

調査担当者

文化財主事	宮田　栄二
文化財研究員	寺師　孝則
〃	寺原　徹
文化財調査員	松村　智行

事務担当者

主　　査	成尾　雅明
〃	前屋敷裕徳
主　　事	溜池　佳子

平成９年度　本調査

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者

鹿児島県立埋蔵文化財センター　所　長	吉永　和人

調査企画者

次長兼総務課長	尾﨑　　進
主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
主任文化財主事兼課長補佐	新東　晃一
主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎

調査担当者

文化財研究員	有馬　孝一
〃	西村　喜一

事務担当者

主　　査	前屋敷裕徳
〃	政倉　孝弘
主　　事	溜池　佳子

平成11年度　本調査

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者

鹿児島県立埋蔵文化財センター　所　長	吉永　和人

調査企画者

次長兼総務課長	黒木　友幸
主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎
主任文化財主事	長野　眞一

調査担当者

文化財主事	井ノ上秀文
〃	松尾　勉
〃	高見　憲次
文化財研究員	福永　修一

事務担当者

総務係長	有村　貢
主　　査	政倉　孝弘
〃	今村孝一郎
主　　事	溜池　佳子

平成12年度　本調査

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者

鹿児島県立埋蔵文化財センター　　所　長　井上　明文
調査企画者
次長兼総務課長　黒木　友幸
主任文化財主事兼調査課長　新東　晃一
課長補佐　立神　次郎
主任文化財主事兼第二調査係長　彌榮　久志
主任文化財主事　長野　眞一
調査担当者
文化財主事　井ノ上秀文
〃　高見　憲次
文化財研究員　藤野　義久
〃　山崎　克之
事務担当者
総務係長　有村　貢
主　　査　栗山　和己

平成14年度　整理作業
事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
作成主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
制作責任者
鹿児島県立埋蔵文化財センター　　所　長　井上　明文
作成企画者
次長兼総務課長　田中　文雄
調査課長　新東　晃一
課長課長補佐　立神　次郎
主任文化財主事兼第二調査係長　彌榮　久志
主任文化財主事　長野　眞一
作成担当者
文化財主事　吉井秀一郎
文化財研究員　山崎　克之
事務担当者
総務係長　前田　昭信
主　　査　栗山　和己

平成15年度　整理・報告書作成作業
事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
作成主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
制作責任者
鹿児島県立埋蔵文化財センター　　所　長　木原　俊孝
制作企画者
次長兼総務課長　田中　文雄
調査課長　新東　晃一
課長課長補佐　立神　次郎
主任文化財主事兼第二調査係長　彌榮　久志
主任文化財主事　長野　眞一
制作担当者
文化財主事　山崎　克之
文化財調査員　松田　朝由
事務担当者
総務係長　平野　浩二
主　　査　福山恵一郎
報告書作成検討委員会　平成15年12月25日　所長他　９名
報告書作成指導委員会　平成15年12月24日　調査課長他名
企画担当者　長野眞一・中村和美

指導者・協力者
東野治之（奈良大学文学部教授）
大澤正己（九州テクノリサーチ・ＴＡＣセンター）
平田信芳・倉元良文・児玉健一郎・堂込秀人・高島英之・堤隆・福島邦夫・網田龍生・桒畑光博・坂口一・原田義壽四元誠・濱岡大介・山本命

第3節　調査の経過（日誌抄）

平成８年８月23日から10月14日まで確認調査を行い，その後，平成10年１月５日から３月24日，平成12年１月５日から３月24日，平成12年５月８日から８月31日までの３回にわたり本調査を実施した。

調査の経過については，日誌抄を持ってかえる。なお，調査期間が複数年にわたるため月単位の記載とした。

平成８年度（確認調査）

８月

調査可能な土地に地形を考慮し，１～７トレンチを設定した。１,２ＴのⅢa,b層で遺物出土。ⅩⅢ層まで掘り下げ終了。３ＴのⅢa,ｂ層で遺物出土。ⅩⅤ層まで掘り下げ終了。４～６ＴのⅢa層で遺物出土。ⅩⅡ層まで掘り下げ終了。７ＴのⅤ層を調査。

９月

８Ｔを追加し調査を行った。Ⅲ～Ⅳ層上部で遺物出土。

平成9年度（本調査）

1月

５日より調査を開始する。調査対象区はＥ－11～16区，Ｆ－９～16区，Ｇ,Ｈ－８～16区の1,520㎡である。

Ｆ,Ｇ－13～16区を表土から掘り下げ。Ⅲ層遺物取り上げ・撮影，Ⅳ層上面で焼土遺構を検出し，撮影と実測を行った。同層にて20cmコンタライン図を作成。土層断面図の作成を行った。Ｆ,Ｇ－15,16区に先行トレンチを設定し下層確認（～ⅩⅧ層）を行ったが，遺構・遺物の確認はされなかった。

２月

Ｆ,Ｇ－９～14区の掘り下げ。Ⅲ層遺物取り上げ・撮影，Ⅳ層上面で掘立柱建物遺構１棟，ピットを検出し，撮影と実測を行った。同層にて20cmコンタライン図を作成。土層断面図の作成を行った。

３月

Ｆ,Ｇ－９～14区のⅣa,Ⅳb層掘り下げ。遺物出土状況の撮影，実測を行った。土坑，ピットを検出し，撮影と実測を行った。Ⅴ層上面で20cmコンタライン図を作成する。Ｆ,Ｇ

－12区，Ｇ－13,14区に先行トレンチを設定し下層確認（Ⅶ～Ⅷ層）を行ったが，遺構・遺物の確認はされなかった。

平成11年度（　〃　）

1月

５日から調査を開始する。Ｋ～Ｍ－７～16区，Ⅳ層上面まで掘り下げ。土師器，須恵器，鉄滓が出土し，出土状況の撮影，実測を行った。

2月

Ｋ～Ｍ－２～16区，Ⅳ層上面まで掘り下げ。Ｉ－６区，Ｊ－４～６区，Ｊ－15,16区，Ⅲ層まで掘り下げ。焼土，畝状遺構検出。土師器，須恵器，鉄滓出土。撮影，実測を行った。

3月

掘立柱建物検出。Ｋ～Ｎ－３～16区まで掘り下げ終了。調査事務所等諸施設の撤収を行い調査終了。

平成12年度（　〃　）

5月

８日から発掘調査を開始する。H,I,J－11～14，Ｅ,Ｆ,I,J－６～７区，Ⅲ～Ⅳa層掘り下げ。Ⅳa層上面でコンタライン図を作成する。Ⅳa層上面で軽石集石遺構，焼土，土坑を検出し撮影と実測を行った。Ⅲ～Ⅳa層上面で縄文晩期，古代の遺物が出土し撮影と実測を行った。Ｉ－14区Ⅳa上層で銅環が出土した。

6月

H,I,J－５～16，Ｅ,Ｆ,I,J－６～７区，Ⅲ～Ⅳa層掘り下げ。Ⅳa層上面でコンタライン図を作成する。Ⅳa層上面で焼土，軽石集石遺構，落し穴状遺構，土器集中地点を検出し撮影と実測を行った。H,Ｉ,Ｊ－13～16区で掘立柱建物跡，ピットを検出し精査を行った。Ⅲ～Ⅳa層上面で古代の遺物が出土し撮影と実測を行った。

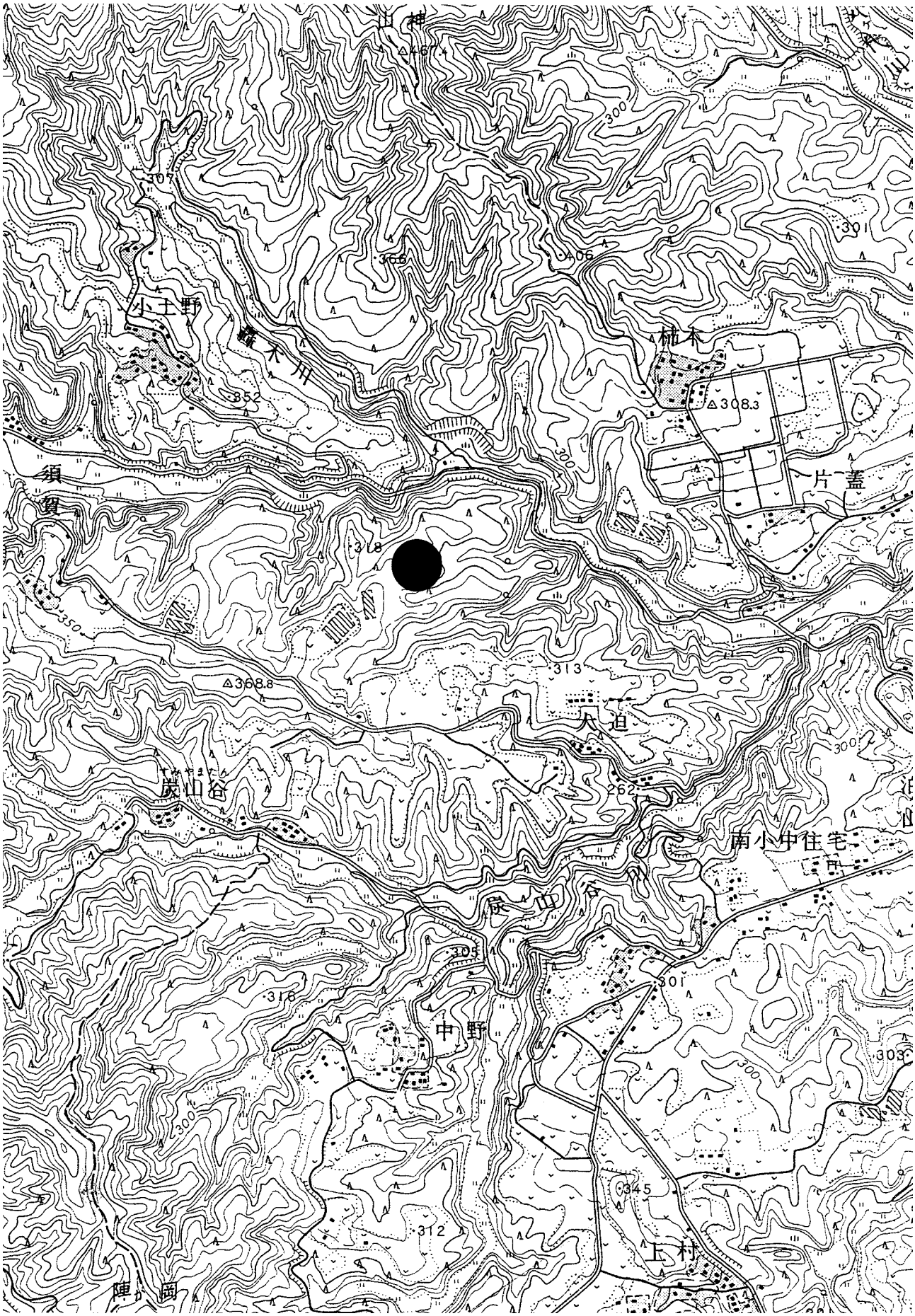
掘立柱建物跡，ピット群の検出状況の航空写真撮影を行った。

7月

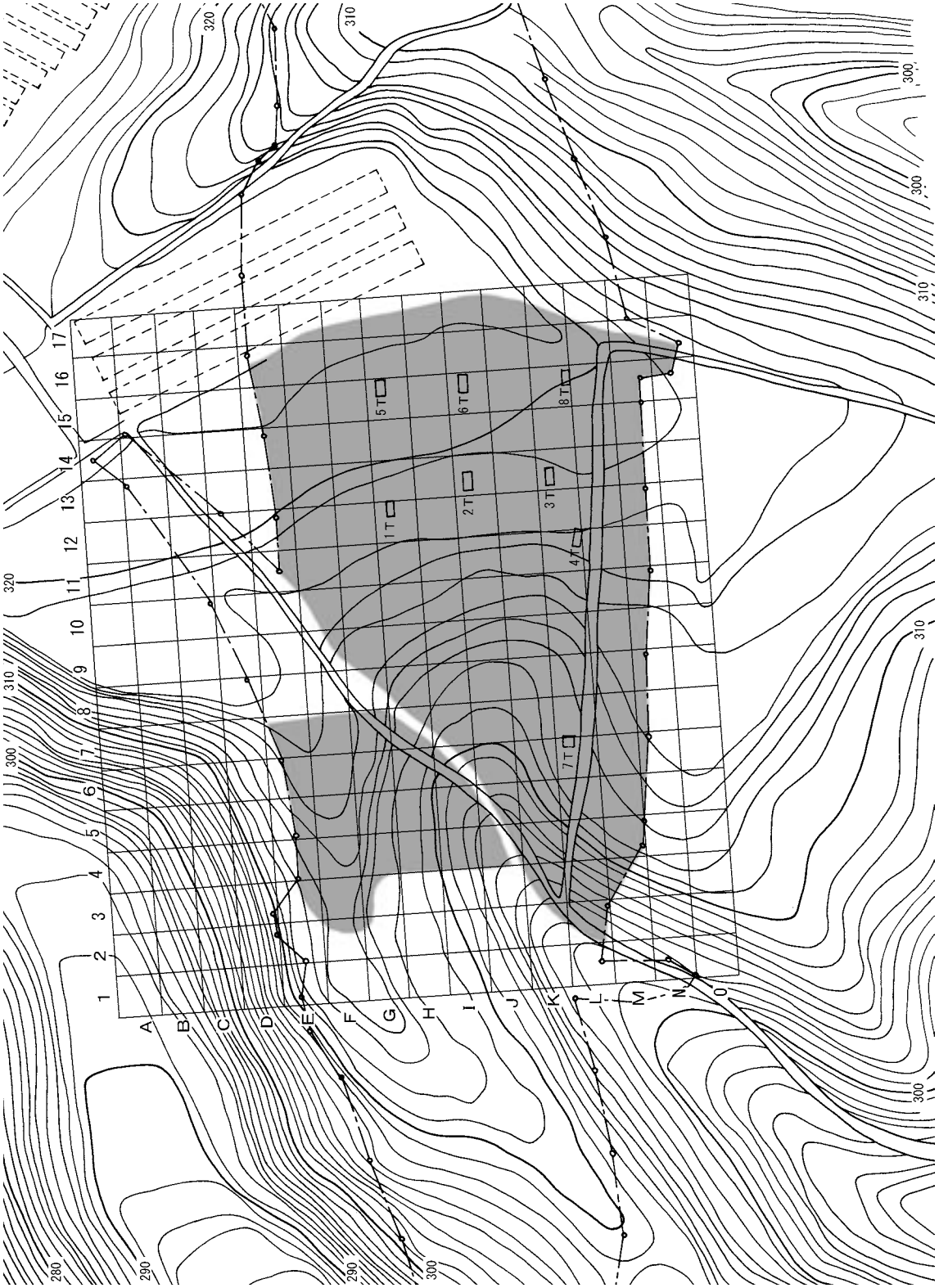
Ｅ～Ｇ－３～８区，Ｈ～Ｊ－５～８区，Ⅲ～Ⅳa層掘り下げ。Ⅳa層上面でコンタライン図を作成する。Ⅲ～Ⅳa層上面で古代の遺物が出土し撮影と実測を行った。掘立柱建物跡，ピット，焼土，土坑を検出し撮影と実測を行った。Ｉ,Ｊ－５～８区，Ⅳb層まで調査終了。

8月

Ｅ,Ｆ－８，Ｊ－５～８区，H,Ｉ－４～９区，掘り下げ。Ⅲ～Ⅳa層上面で古代の遺物が出土し撮影と実測を行った。砂岩集石遺構，ピット，焼土，道状遺構を検出し撮影と実測を行った。Ⅳa層上面でコンタライン図を作成する。I－5区Ⅳa上層で石帯が出土した。調査事務所等諸施設の撤収を行い調査終了。



第１図　遺跡と周辺の地形



第２図　周辺地形と調査区及びグリッド配置図(1/1000)

第Ⅱ章　発掘調査の概要

第１節　層序

本遺跡の基本層序及び遺物包含層・年代・文化との関係は下図のとおりである。各層は，霧島山系を噴出源とする火山堆積物，喜界カルデラの火山堆積物，桜島の火山堆積物，シラス等をはじめ良好な状態で堆積している。

遺跡の標準土層はＪ－14区の側を基準とした。

Ⅰ層　　暗褐色土　　表土

Ⅱ層　　黄白色軽石層(P-３,通称文明ボラ,1,471年頃の桜島の噴出物）

Ⅲ層　　黒色土　古代（平安時代）の包含層

Ⅳa層　　黄褐色土　Ⅳb層の腐植土，古代，縄文時代後期の遺物包含層

Ⅳb層　　黄褐色細粒混硬質土(御池軽石,約4,200年前の霧島御池の噴出物）。下部に軽石が多い。

Ⅴa層　　暗橙色土

Ⅴb層　　橙色火山灰(約6,400年前の喜界カルデラ起源の火山灰)

Ⅵa層　　黄褐色軽石混淡茶褐色土層

Ⅵb層　　黄褐色軽石層(P-11,約7,400年前の桜島起源の軽石)

Ⅶ層　　明茶褐色土

Ⅷ層　　黒褐色土

Ⅸ層　　黄白色火山灰層(P-14,サツマ火山灰,約11,000年前の軽石)

Ｘ層　　黒褐色土

ＸⅠ層　黄褐色軟質ローム

ＸⅡ層　暗茶褐色軟質ローム

ＸⅢ層　褐色土

ＸⅣ層　暗褐色土　赤色のパミス（P-15）が点在する。

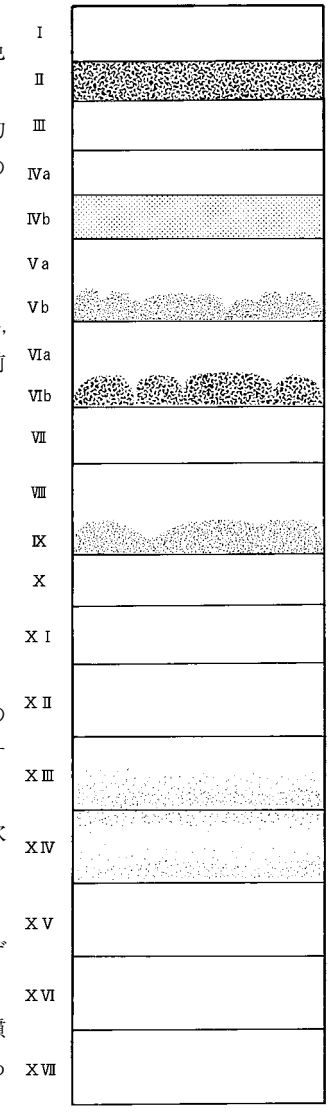
ＸⅤ層　暗褐色硬質土

ＸⅥ層　暗褐色硬質土　赤色のパミス（P-17）が点在する。

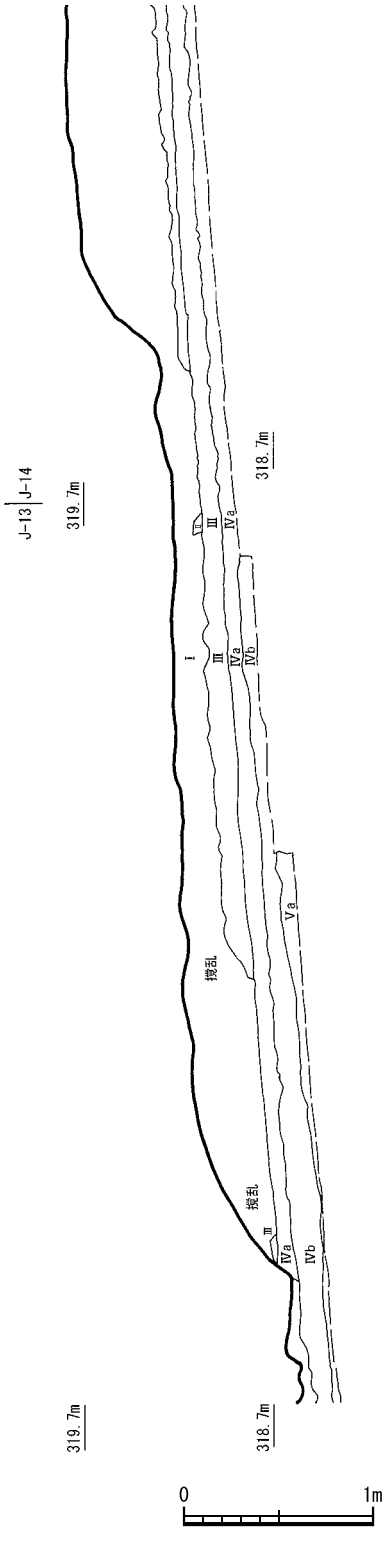
ＸⅦ層　濁黄白色砂質土（二次シラス）

ＸⅧ層　シラス　約24,000～28,000年前の姶良カルデラの噴出物

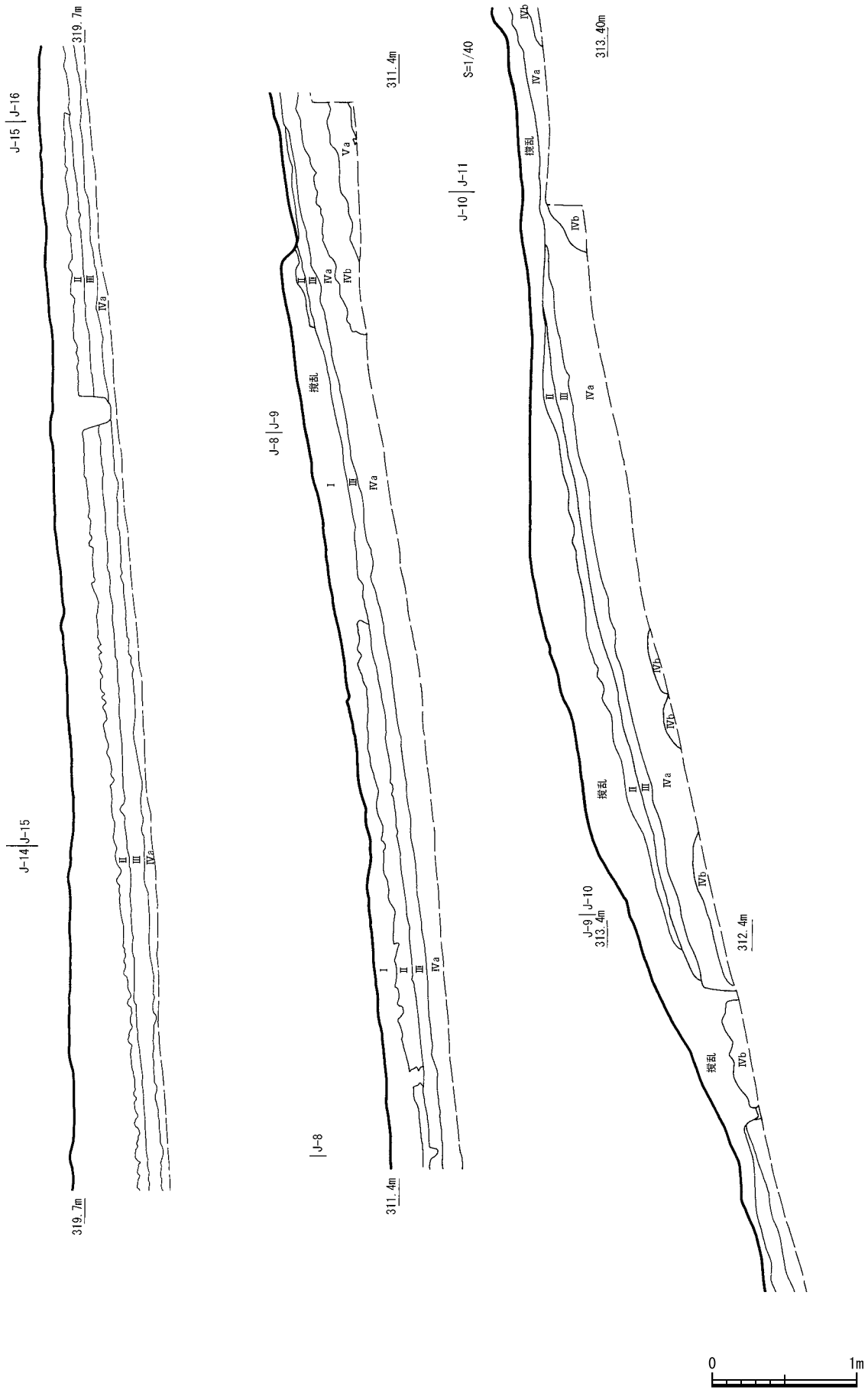
Ｐ＝パミス＝軽石（桜島の噴出物を新しい順に番号をつけてある）



第３図　土層柱状図



第４図　土層断面図(１)


J-14
J-15
J-16
319.7m
319.7m
J-8
J-9
311.4m
311.4m
J-10
J-11
313.40m
J-9
313.4m
J-10
312.4m
S=1/40
撹乱
0
1m

第５図　土層断面図(２)

第２節　縄文時代の遺物

古代の遺構面の下位からの出土もあるが，大多数は古代の包含層でみられた。縄文時代後期の土器(阿高式・岩崎上層式)が出土し，石器には石鏃，石匙，磨石，叩石がみられる。

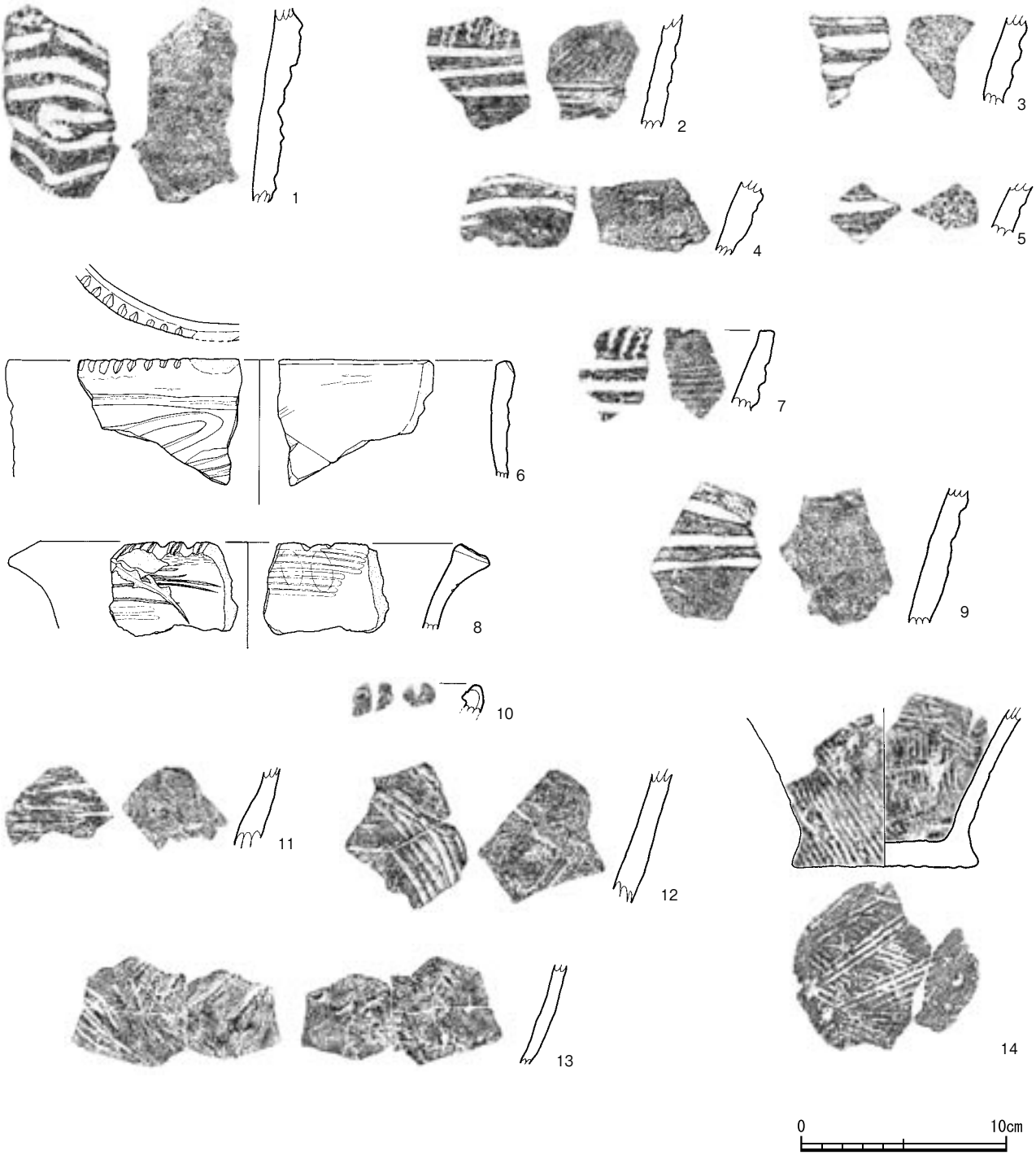
遺構は確認していない。

１．土器(第６図，No１～14)

高篠遺跡からは縄文土器が15点出土し，全て後期である。主に古代の包含層であるⅣa層から出土し，古墳時代以前のⅣb層からは３点出土している。

No１～５は幅0.4～0.7cmの比較的太い沈線による施文が認められ，沈線の断面からは棒状の工具を用いている。

No１は菱形の区画内に渦巻文を表現し，調整はナデが認め



第6図　縄文土器

られる。No２～５は直線的に並行する沈線が数条施され，調整はナデである。

No６～９は貝殻刺突文が認められる。文様の沈線は断面が方形に近い。沈線の幅は0.4～0.5cmでNo１～５より若干せまい。No６は口縁端部を貝殻で刻み，文様は曲線文と直線文を組み合わせる。口唇部は平坦で，ナデで仕上げ，胎土に雲母を含む。No７とNo９は口縁部外面に貝殻刺突文を施し，下位には数条の直線の沈線を描く。調整は内外面にナデが認められるが，内面には条痕が残されている。No７の口唇部は平坦である。

No８は口縁部が肥厚し，断面三角形を呈する。口縁端部には平坦面に直交して貝殻刺突文が連続して入り，また，幅0.4～0.5cmの沈線も２条確認できる。内外面には横方向の条痕が認められる。

No11～13は胴部である。内外面に条痕が確認できる。No13は器壁がうすい。No14は底部で，内外面と底部外面に条痕が認められ，部分的にナデによって消されている。底部は若干張りだし気味になっている。

時期は御池軽石層のⅣb層以上で全て出土していることから縄文時代後期以降である。土器型式としては阿高Ⅲ式土器の系統をもつもの(No１)や，綾式土器貝殻刺突文や岩崎上層式土器に属するもの(No７,９)がある。また，No８は松山式土器に類似するが，口縁端部の平坦面が若干水平に近くなっており，古く位置付けられる可能性もある。

２．石器(第７,８図,No14～36)

打製石鏃，磨製石鏃，抉入石器，剥片，磨石が出土した。出土地点は古代の包含層であるⅢ層・Ⅳa層で，点数は23点と少ない。

石鏃(第７図,No15～29,31)

打製石鏃15点，磨製石鏃１点である。基部は，破損しているものを除いて全て凹基式である。抉りの深さや形態はさまざまである。

No15,16は黒曜石製である。No15は五角形を呈し，基部の抉りが丸い。No16は片面に素材面を多く残す。No17は両方の脚部先端が欠損している。No19はチャート製で，先端部と片方の脚部が欠損している。

No20とNo21は頁岩製である。No20は二等辺三角形を呈し，直線的に先端部に至る。No21は抉りが深い。

No22とNo23は安山岩製である。No22は先端部と片方の脚部を欠損している。脚部は直線的にのび先端が鋭い。No23は抉りが深く丸みを呈し，両脚部の先端は鋭い。

No24～27は玉髄製である。No24は平基，No25は片面に素材面を残す。No27の抉りは深い。

No28とNo29は石鏃の未製品の可能性がある。

剥片(第７図,No30)

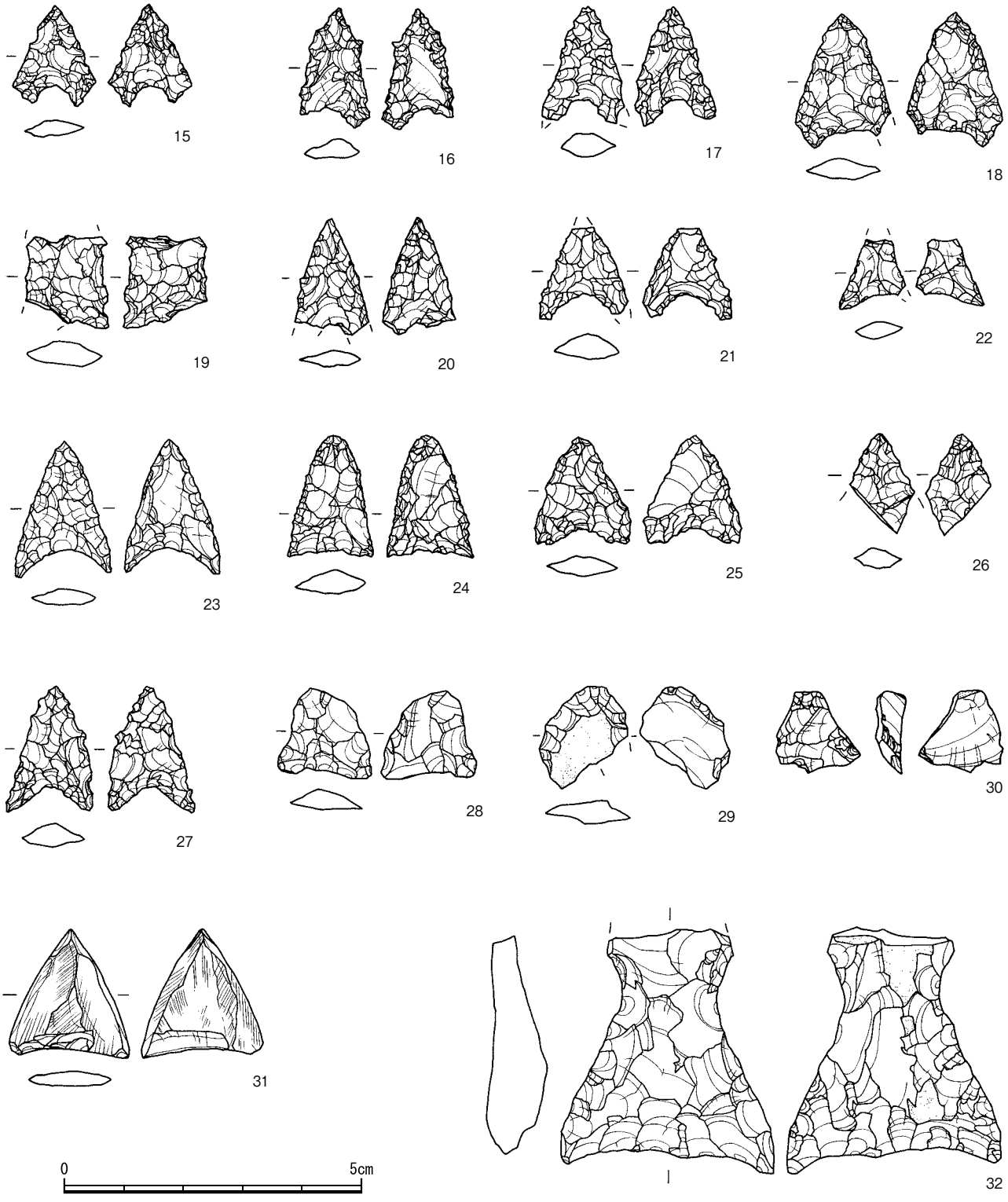
No30は黒曜石の剥片で，背面に加工痕が認められ，調整剥片と見られる。

磨製石鏃(第７図,No31)

No31は頁岩製の磨製石鏃で，均整のとれた正三角形で，扁平な頁岩素材剥片を入念に磨いている。脚部から若干膨ら

第1表　縄文土器観察表

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成	色調	調整	備考
6	1	F-11/Ⅳa	-	-	-	0.9～1.4	石，角	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)		阿高系
	2	F-11/Ⅳa	-	-	-	0.9～1.3	石，砂粒	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)		
	3	F-12/Ⅳa	-	-	-	0.9～1.3	角，砂粒	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)		
	4	F-11/Ⅳa	-	-	-	0.9～1.3	石，角，砂粒	良好	5YR6/8(橙)		
	5	F-11/Ⅳa	-	-	-	0.8～1.0	砂粒，石	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)		
	6	J-8/Ⅳb上	24.1	-	-	0.6～1.1	石，雲母	良好	7.5YR7/6(橙)		
	7	F-12/Ⅳa	-	-	-	0.7～1.3	石,鉄石	不良	7.5YR6/6(橙)		岩崎上層式
	8	不明	25.5	-	-	0.8～1.9	雲母，石，砂粒	不良	5YR6/6(橙)		
	9	E-12/Ⅳa	-	-	-	0.7～0.9	石，精緻	良好	5YR4/3(にぶい赤褐)		岩崎上層式
	10	F-10/Ⅳa	-	-	-	1.3	石，堅緻	不良	5YR6/6(橙)		
	11	F-8/Ⅳa	-	-	-	0.8～1.3	石，砂粒	不良	5YR6/6(橙)		
	12	F-8/Ⅳb	-	-	-	0.9～1.1	石	不良	5YR6/8(橙)		
	13	K-7/Ⅳb	-	-	-	0.5～0.8	精緻	良好	2.5YR5/6(明赤褐)		
	14	G-6/Ⅳa	-	(7.5)	8.8	0.6～1.3	精緻	不良	2.5YR5/8(明赤褐)		



第7図　石器（1）

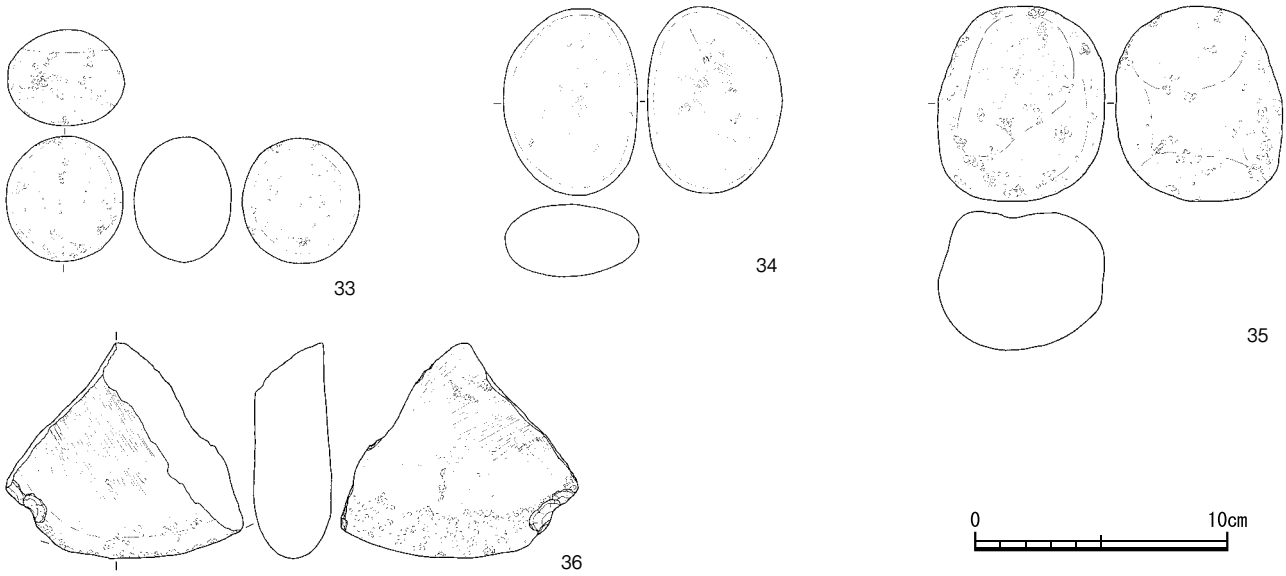
み気味に先端に至る。

石匙(第７図,No32)

No32は玉髄製で，一部に自然面を残す。頭部は欠損し，摘み部とやや内弯する刃部が残される。

叩石・磨石(第８図,No33～36)

No33は安山岩製で若干敲打痕が残り，形状は球形に近い。No34は楕円形を呈し，２面に研磨痕が認められる。No36は砂岩製で両面に研磨痕が認められる。



第8図　石器（2）

第2表　石器観察表

挿図番号	報告番号	出土区/層	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材
7	15	J-14/Ⅳa上	石鏃	1.7	1.4	0.31	0.45	黒曜石
	16	K-15/Ⅲa	石鏃	2.0	1.1	0.33	0.62	黒曜石
	17	K-15/Ⅳa	石鏃	2.0	(1.5)	0.39	0.69	黒曜石
	18	表土	石鏃	2.4	1.6	0.33	0.98	黒曜石
	19	I-15/Ⅲ	石鏃	(1.5)	(1.4)	0.46	1.17	ﾁｬｰﾄ
	20	G-12/Ⅲ下	石鏃	1.9	1.2	0.25	0.62	頁岩
	21	I-16/Ⅳa	石鏃	1.5	1.5	0.43	0.73	頁岩
	22	J-6/Ⅳa	石鏃	(1.2)	(1.2)	0.28	0.25	安山岩
	23	J-7/Ⅳa	石鏃	2.3	1.6	0.34	0.72	安山岩
	24	J-6/Ⅳa	石鏃	2.1	1.4	0.35	0.92	玉髄
	25	6T/Ⅲb	石鏃	1.8	(1.6)	0.33	0.8	玉髄
	26	J-14/Ⅳa上	石鏃	1.7	(0.7)	0.39	0.54	玉髄
	27	J-7/Ⅳa	石鏃	2.1	1.4	0.36	0.79	玉髄
	28	L-9/Ⅲa	石鏃	(1.5)	1.6	0.32	0.67	玉髄
	29	L-13/Ⅳa上	石鏃	1.7	(1.2)	0.41	0.87	玉髄
	30	一括	剥片	1.5	1.2	0.39	0.67	黒曜石
	31	H-6/Ⅳa	磨製石鏃	2.2	2.0	0.23	1.09	頁岩
	32	I-13/Ⅲ	石匙	4.1	3.7	0.85	10.85	玉髄
8	33	J-15/Ⅲ	叩石/磨石	5.0	4.6	3.8	120	安山岩
	34	J-15/Ⅳa	叩石/磨石	7.1	5.3	2.1	170	砂岩
	35	J-14/Ⅳa	叩石/磨石	7.7	6.6	5.2	290	安山岩
	36	J-14/Ⅳa	叩石/磨石	(8.5)	(9.2)	3	260	砂岩

第３節　平安時代の調査

高篠遺跡における平安時代の調査は，Ⅲ・Ⅳa,b層を中心に行った。遺構はⅣa,b層で検出され，遺物はⅢ層下部からⅣa層上面で大半が出土する傾向を確認している。

遺構は掘立柱建物跡，軽石集積遺構，焼土跡，遺物集中地点，土坑とピットが数多く検出された。これらの遺構は包含層に古代以外の遺物をほとんど含まないことからすべて同時期に近い年代と推測されるが，焼土，軽石集積と掘立柱建物跡との関係に問題点がある。それは検出面が焼土，軽石集積がⅣa層，掘立柱建物跡がⅣb層で検出面が異なることである。本来，検出面の違いは時期差を想定する必要があるが，焼土と軽石集積の多くが掘立柱建物跡内に位置することや，層によって遺物に時期差の認められないことから，ほぼ同時期に機能し，共伴関係にあったと考えられる。

掘立柱建物跡が16棟，焼土跡28基，軽石集積遺構が７基，集石１基，土坑13基とピットが数多く検出された。なお，遺構配置図では掘立柱建物をSBと表記する。

規模等の詳細な数値データは観察表に記した。

１　古代の遺構，遺構内遺物

掘立柱建物跡(第９,10,11図)

16棟を検出した。13棟はⅣb層上面で検出したが,３棟は近年まで行われていた畑作の影響で土層が掘削されたためⅤb 層上面での検出となった。検出区はG～K－12～16区（12棟），M－5,6区（3棟）に集中しており，この地区外での検出は２棟のみである。G～K－12～16区は本遺跡で最も平坦で安定した地形であるが，微細なレベル差によりさらに3区に細分できる。H～K－12～14区は傾斜が緩く最も平坦で安定しており８棟検出された。遺物量も最多である。15区は東から西へ微小な傾斜があるためか１棟のみの検出である。16区は遺跡内でも最もレベルが高度な地区で14区とは約２ｍの比高差があるが平面的には安定している。ここでは１棟とピット群が検出されているが建物を構成するには至らなかった。

建物の規模は２間×３間を主体とする。主軸は南北軸に沿っているが，２棟が東西を軸にしている。上屋や床構造が直接分かるものは無い。

平面形態は長方形が大半で，柱穴の掘り形は円もしくは楕円形である。柱痕が確認できたものは１基，その他は柱穴のみの検出である。柱間隔は等間隔にはならないものが多い。床面積の平均値は21.64㎡，最大で31.44㎡，最小で14.34㎡である。梁行平均は2.77m，最大値5.79m，最小値1.62m，桁行平均は2.58m，最大値4.85m，最小値1.44mである。

７棟が切り合っており，数回の建て替えが想定される。集積遺構，焼土，土坑を共伴する建物も14棟ある。これら建物に伴う遺構の詳細と実測図は，共伴する検出状況を優先し掘立柱建物の項で記載する。

焼土

火力の使用による被熱によって土層が赤色化，または黒色化したものを焼土とする。29基の大半がⅣa層で検出されている。その中で20基が掘立柱建物の中，２基が建物に隣接して検出されている。堀立柱建物と共伴する際，１基のみの場合は平面形状が大きく建物の中心に位置し，複数基ではそれに比して小型で中心から外れて検出される傾向がみられる。住居を構成するピットと切り合うこともあり，使用には時期差のあるものもある。全焼土跡の最長幅は平均1.00m，最短幅平均0.76m，焼成の深さの平均は0.12mである。なお，軽石を伴うが少量で明確な集積状況がみられないものも焼土に含めた。

軽石集積遺構

軽石を利用し石組みを行い，火力使用による被熱の痕跡が残るものを軽石集積遺構とし，それ以外の石材を利用した集石とは区別した。H,J,K-14,15区，Ⅳa層上面で検出されている。大半が掘立柱建物，焼土と共伴している。

検出状況に特徴があり，まず焼土と少量の軽石が検出され，赤化した被熱部を掘削すると多くの軽石が確認される例が多い。

(１)掘立柱建物跡及び建物内軽石集積・焼土

１号掘立柱建物（SB１)(第12図)

H-16区で検出された。梁間柱間平均235cm，桁行柱間平均166cmで，面積は最小の14.34㎡である。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で，深さは19～63cmである。調査範囲の最西端に位置する建物で，レベルも遺跡中最高度の320ｍである。建物が最も集中する区域からは約10ｍ離れる。北側にはピットが30基前後検出されたが，建物を構成する様相は確認できない。Ｐ２の南東１ｍ以内に土坑３,４が隣接する。

１号掘立柱建物跡出土遺物(第13図)

甕片が２点出土した。図化したNo37は器壁が薄く口縁端部が若干肥厚する。

２号掘立柱建物（SB２）(第14図)

H,I-14区で検出した。西側から東側に傾斜し，比高差は40cmある。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で，深さは50～87cmである。Ｐ１が外側にずれる。中心から南東寄りに軽石集積４を共伴している。

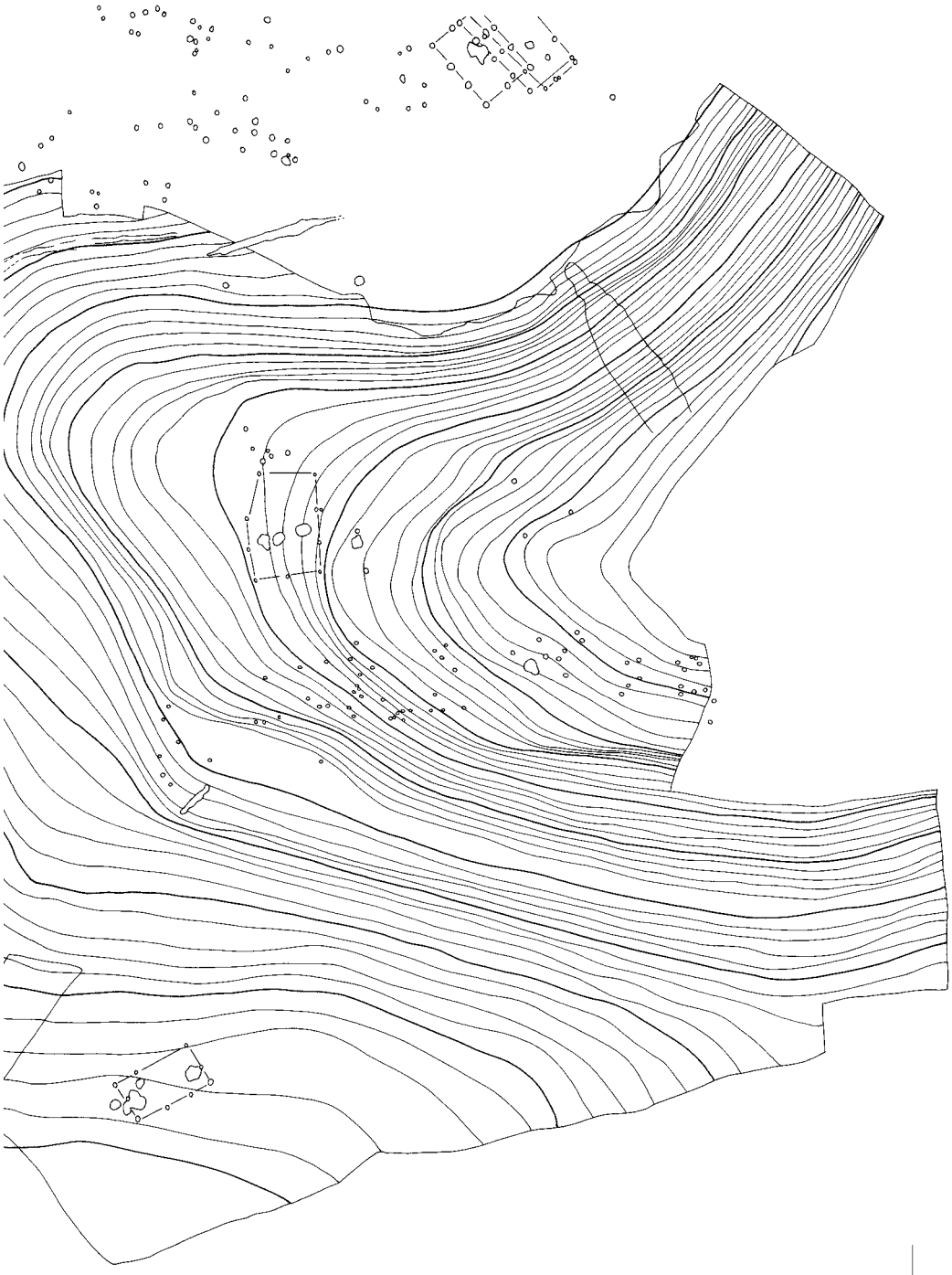
P10の底面で，軽石６個を確認し，ピット中心部から外側に集積している。10cm大の軽石を縦向きにし，その上に最大の礫の比較的平らな面を上向きにする。その周囲に小さな軽石が５個ある。最大のものでも10cm程度で，小さいが根石の可能性がある。北東側40cmに４号掘立柱建物跡，南東側１ｍに３号掘立柱建物跡がある。建物内北側にピットを２基検出しているが，建物の構成との関連性は把握していない。

軽石集積４(第14,41図)

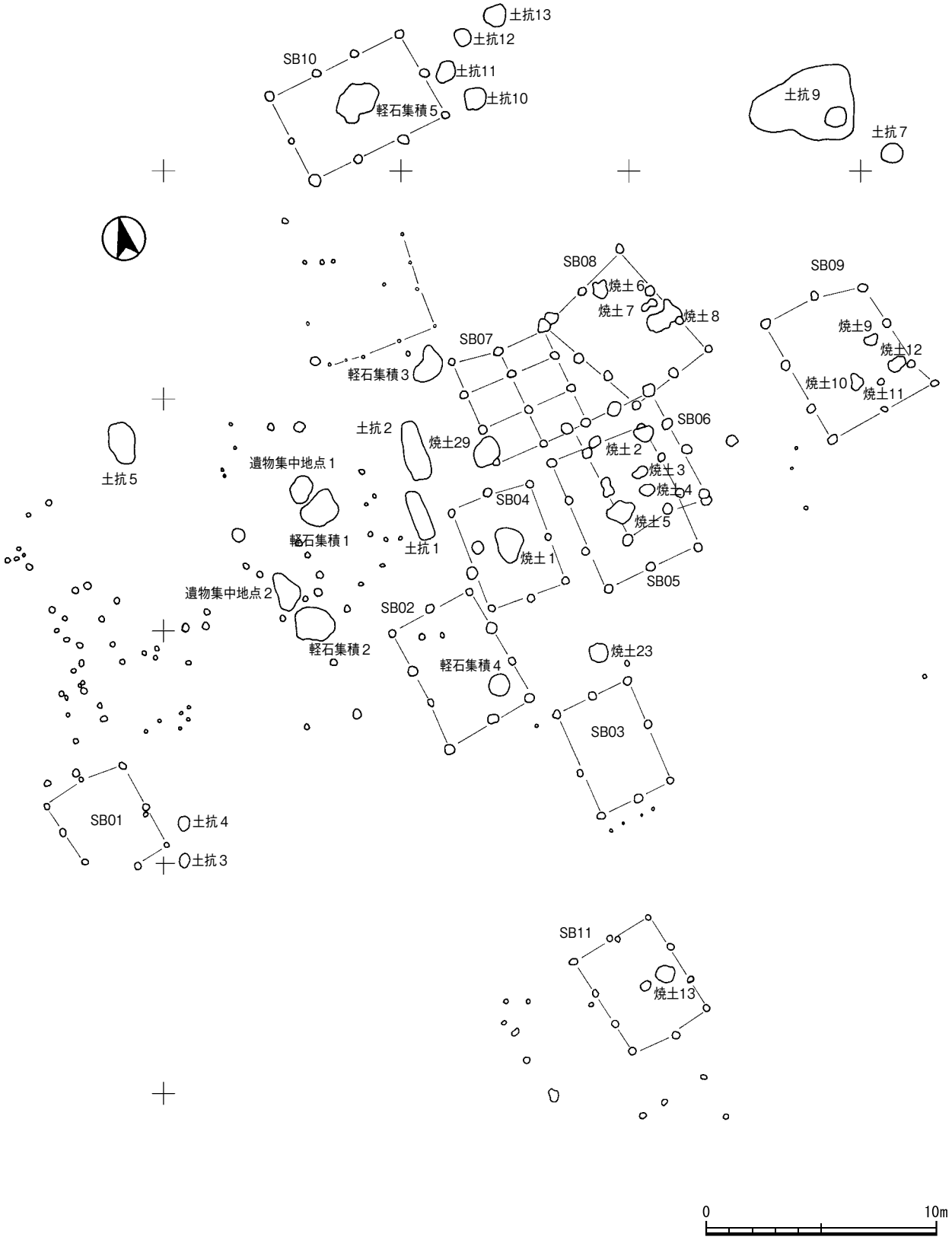
Ⅳａ層上面，建物の南東角で検出している。最大長



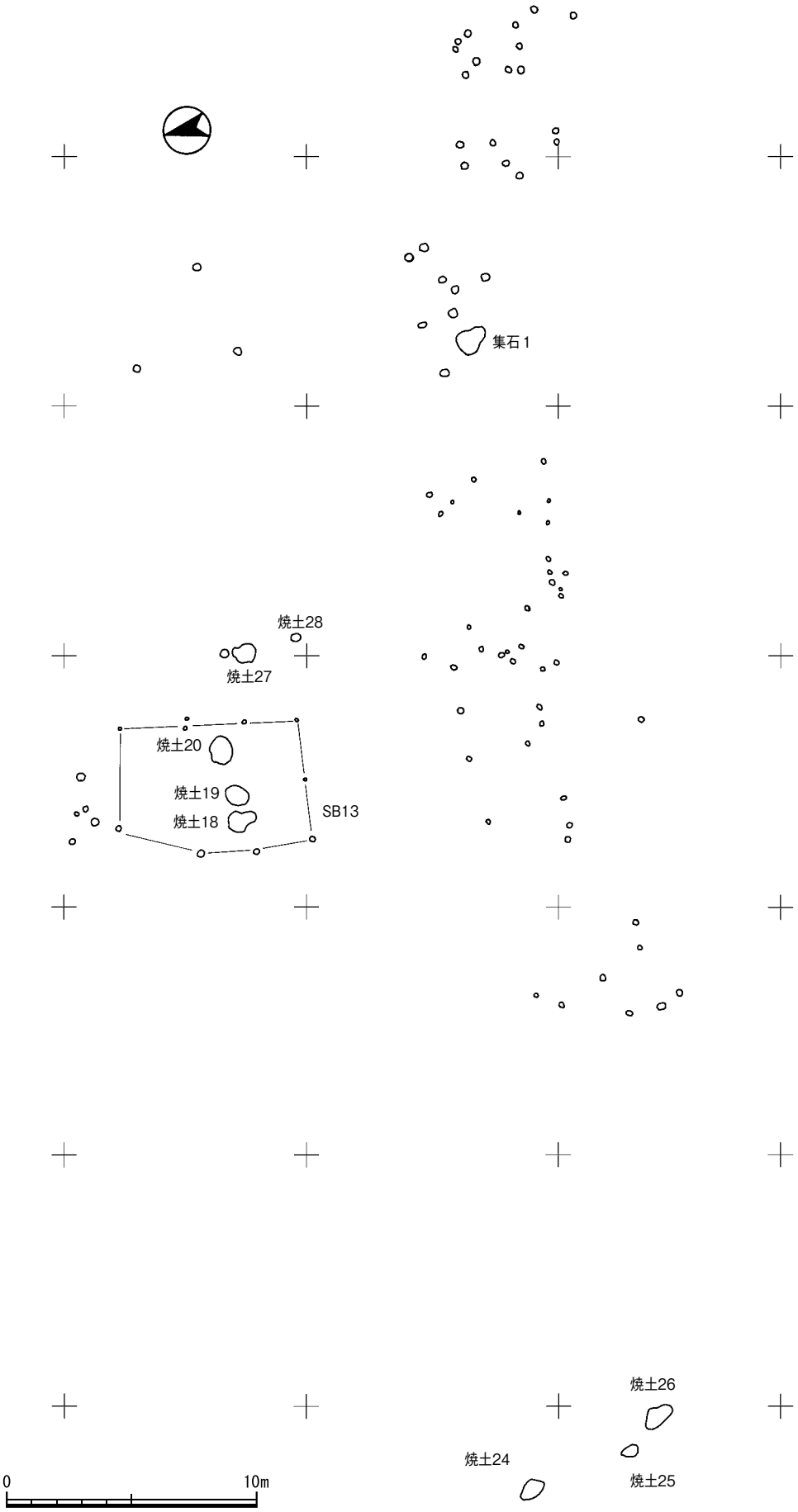
第9図　遺構配置図(１)



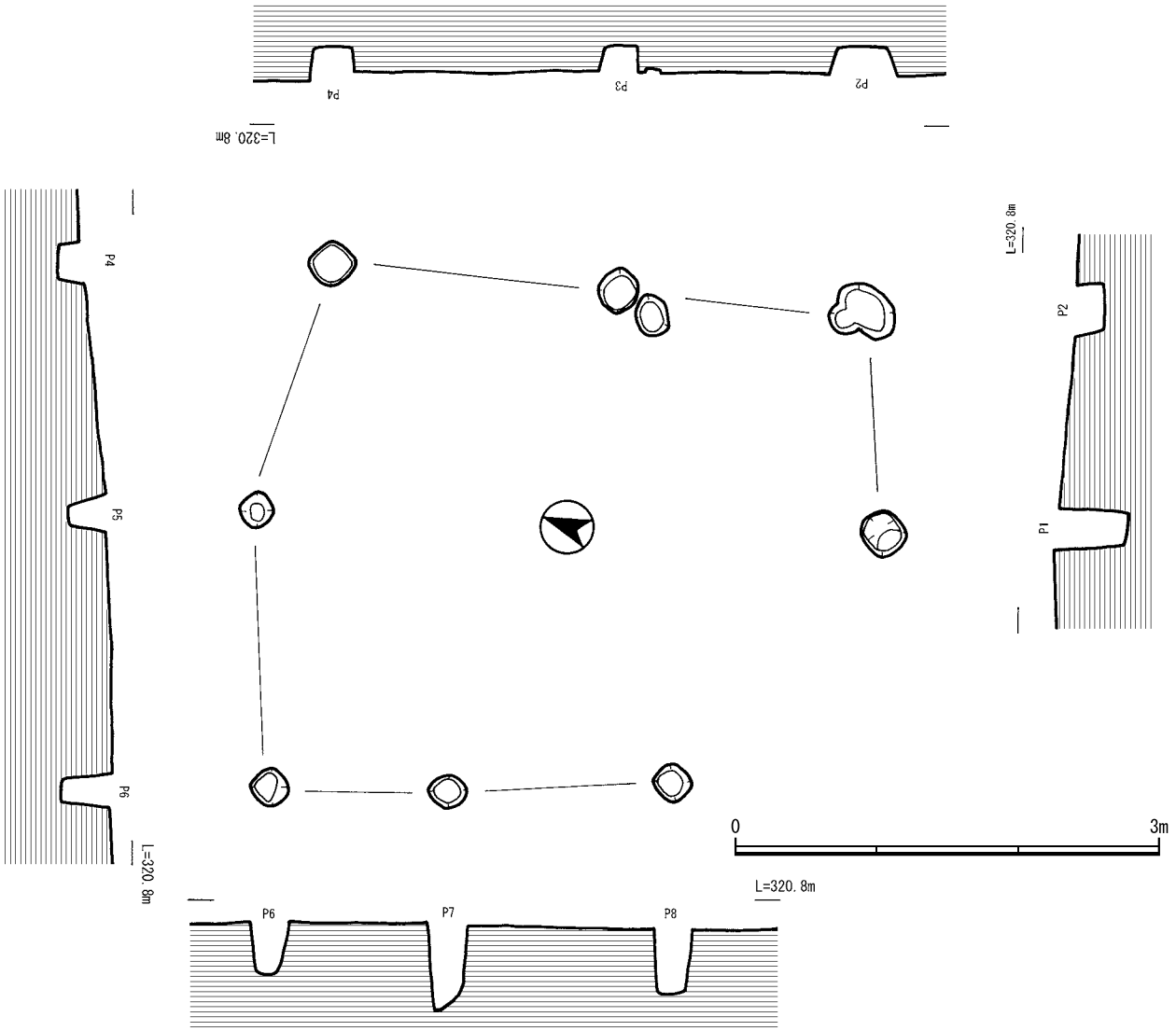
0 100m


土抗13
土抗12
SB10
土抗11
土抗10
軽石集積5
土抗9
土抗7
SB08
焼土6
焼土7
焼土8
SB09
焼土9
焼土12
焼土10
焼土11
SB07
軽石集積3
SB06
土抗2
焼土29
焼土2
焼土3
焼土4
焼土5
遺物集中地点1
土抗5
SB04
軽石集積1
土抗1
焼土1
SB05
遺物集中地点2
SB02
軽石集積2
軽石集積4
焼土23
SB03
SB01
土抗4
土抗3
SB11
焼土13
0
10m

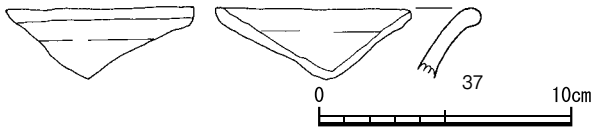
第10図　遺構配置図(２)



第11図　遺構配置図(３)



第12図　１号掘立柱建物跡



第13図　１号掘立柱建物跡内出土遺物

0.36m，最短長0.27mで，15～20cm大の礫で構成される。礫数は８個で最小であるがまとまりはある。

２号掘立柱建物跡及び軽石集積４内出土遺物(第15図)

柱穴内から土師器坏・椀片５点と焼塩壺片1点，土師器甕片７点が出土した。

No38は土師器甕の口縁部である。内面のケズリ上端はケズリラインを水平にそろえ鋭い稜を呈している。柱穴出土の土師器椀は，高台を欠損している。図化しなかった土師器甕は褐色を呈する。

軽石集積４からは土師器坏片が１点，黒色土器片１点，土師器甕片が８点出土した。

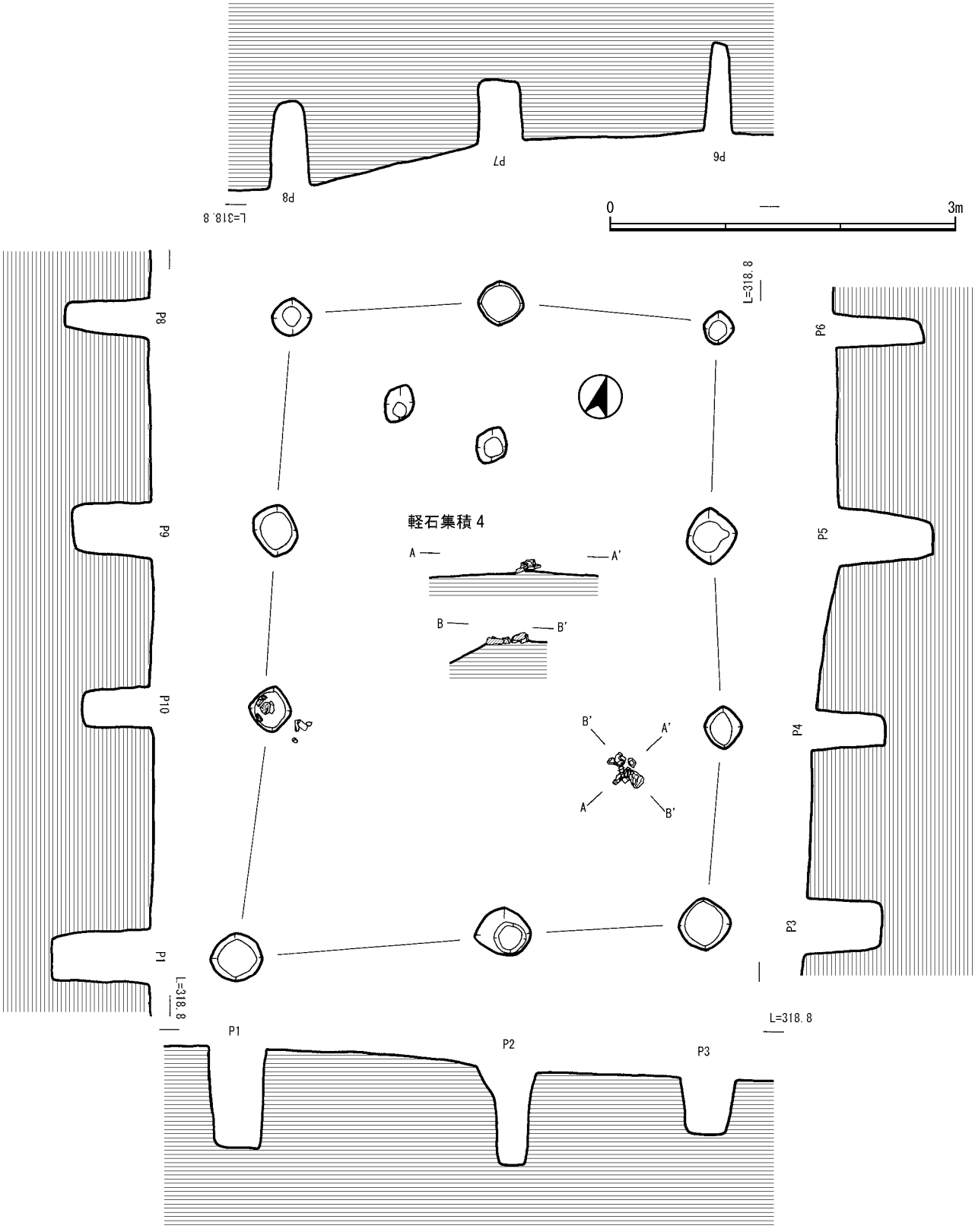
No39は浅黄橙色を呈し軟質である。土師器甕のNo40は明赤褐色を呈し，内面のケズリ上端はケズリラインをそろえていない。口縁部以外に胴部小片が２点認められ，同一個体と考えられる。

３号掘立柱建物跡（SB３）(第16図)

H-13,14区で検出し，西から東方向に比高差は約20cmある。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で，深さは32～64cmである。Ｐ７とＰ８間以外は，柱穴間隔がほぼ等しい。南側にピット４基が東西方向に並列して検出され，柵あるいは杭列と思われる。建物のピットと比較すると柱間間隔は80～90cmと短く，平面形も小型である。北北西１ｍには２号掘立柱建物跡がある。焼土８が１m北側に隣接する。

３号掘立柱建物跡出土遺物(第17図)

柱穴から土師器甕３点が出土している。No41は小型の甕で，外面は頸部につよい横ナデが認められ，その下位には煤の付着が認められる。この甕は破片２点が接合しているが，それぞれの破片は異なる柱穴から出土した。他の土師器甕片の１点は褐色を呈する。



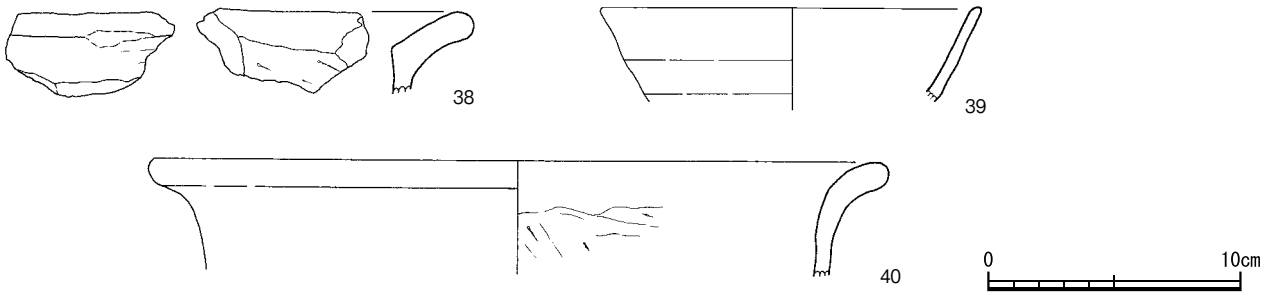
第14図　２号掘立柱建物跡及び軽石集積４

４号掘立柱建物跡（SB４）(第18図)

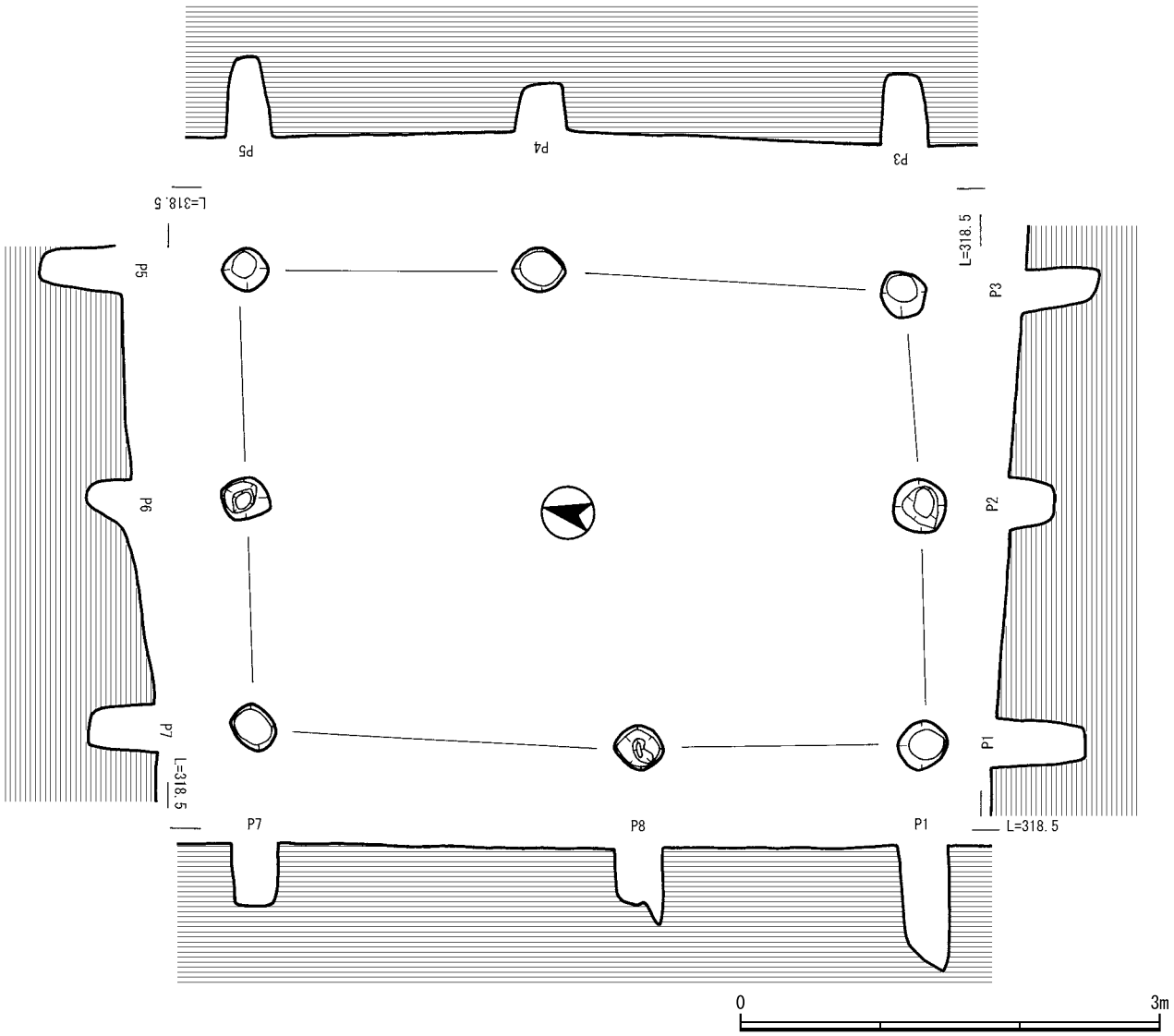
I-14区で検出し，床面積は14.82㎡で小型である。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で，深さは40～63cmである。集中地区内にあり，２号,３号,５号,７号掘立柱建物跡に囲まれている。焼土跡１が中央からやや南に位置し，Ｐ３で軽石が１点出土している。

焼土１(第18図)

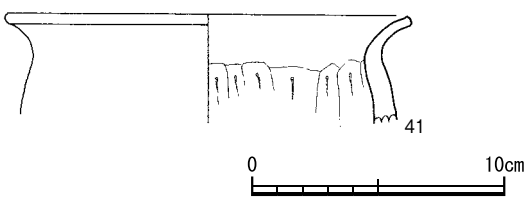
Ⅲ層の黒色土とⅣa上層の境目で検出し，黒色土が薄く残る状態でレンズ状に赤化したエリアが観察された。この地区



第15図　２号掘立柱建物跡及び軽石集積４内出土遺物



第16図　３号掘立柱建物跡



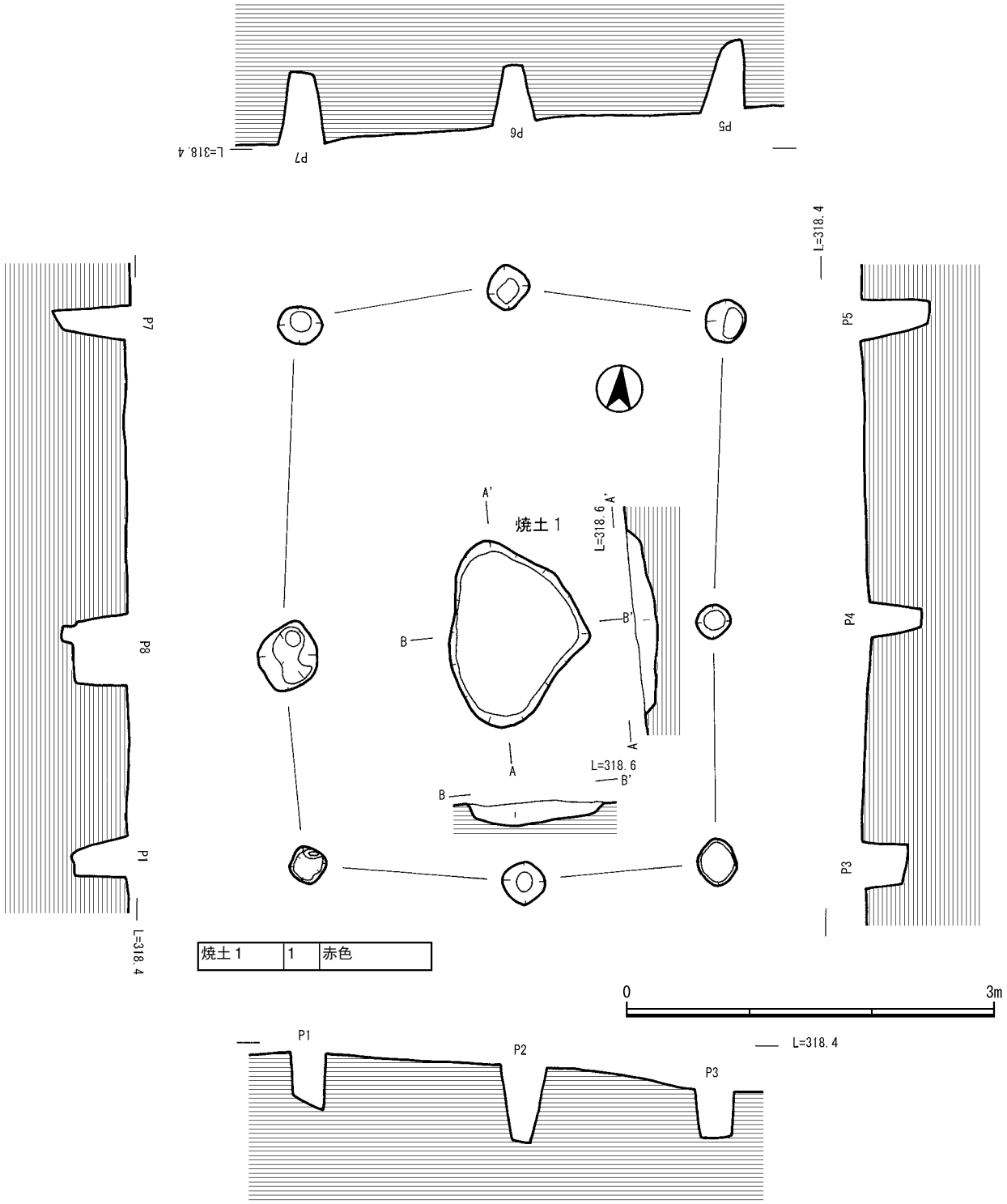
第17図　３号掘立柱建物跡内出土遺物

は Ⅲ 層での遺物の出土が多く，焼土内でも土師器が出土している。

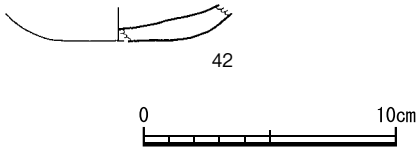
４号掘立柱建物跡内焼土１出土遺物(第19図)

土師器坏片５点，焼塩壺片13点，土師器甕片４点，鉄製品片１点，椀形鉄滓２点が出土した。

No42は土師器坏の底部である。底部と体部の境は丸く，内面に煤の付着が認められる。土師器甕は褐色を呈する。焼塩壺はすべて細片で口縁部や底部は認められない。



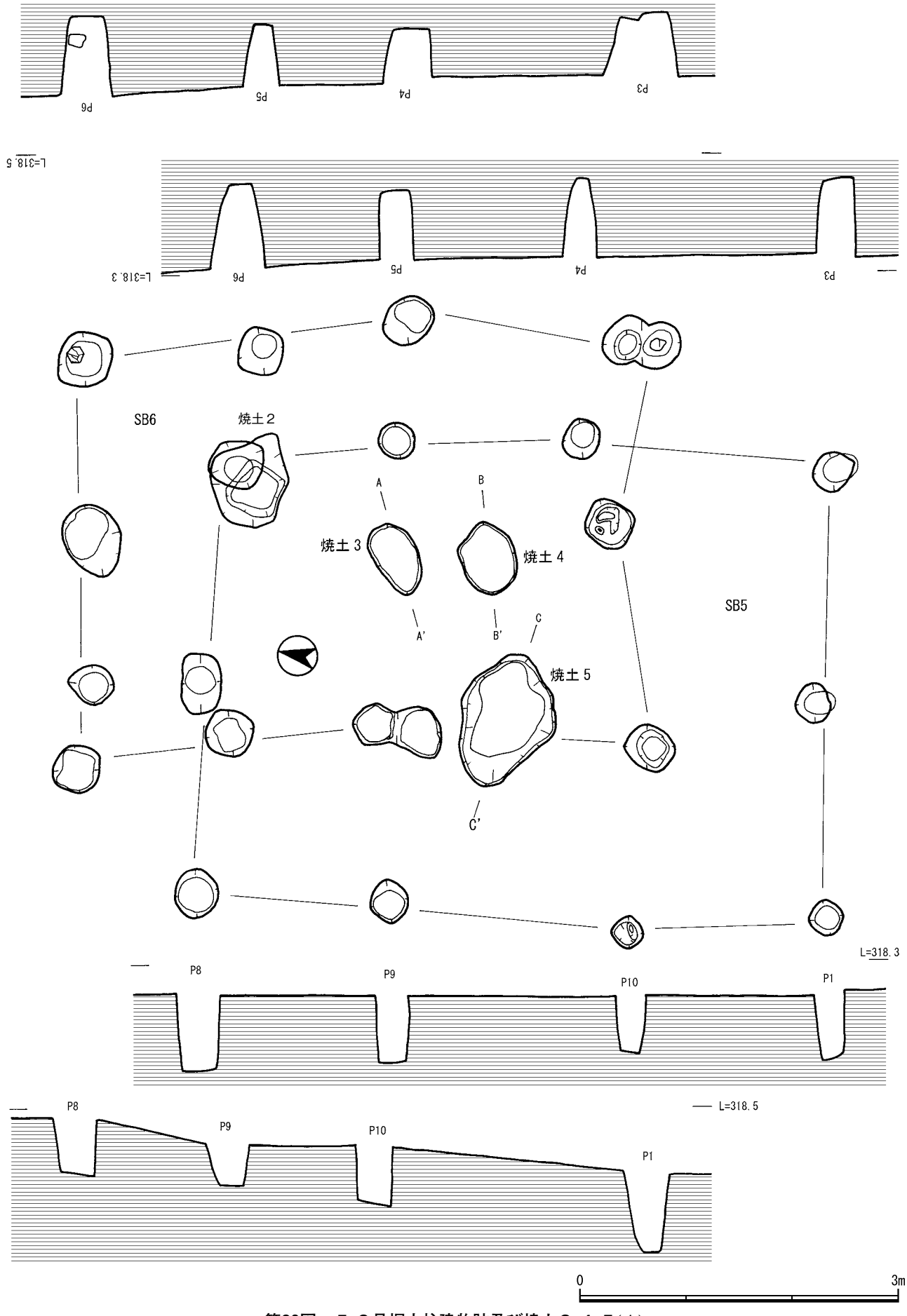
第18図　４号掘立柱建物跡及び焼土１



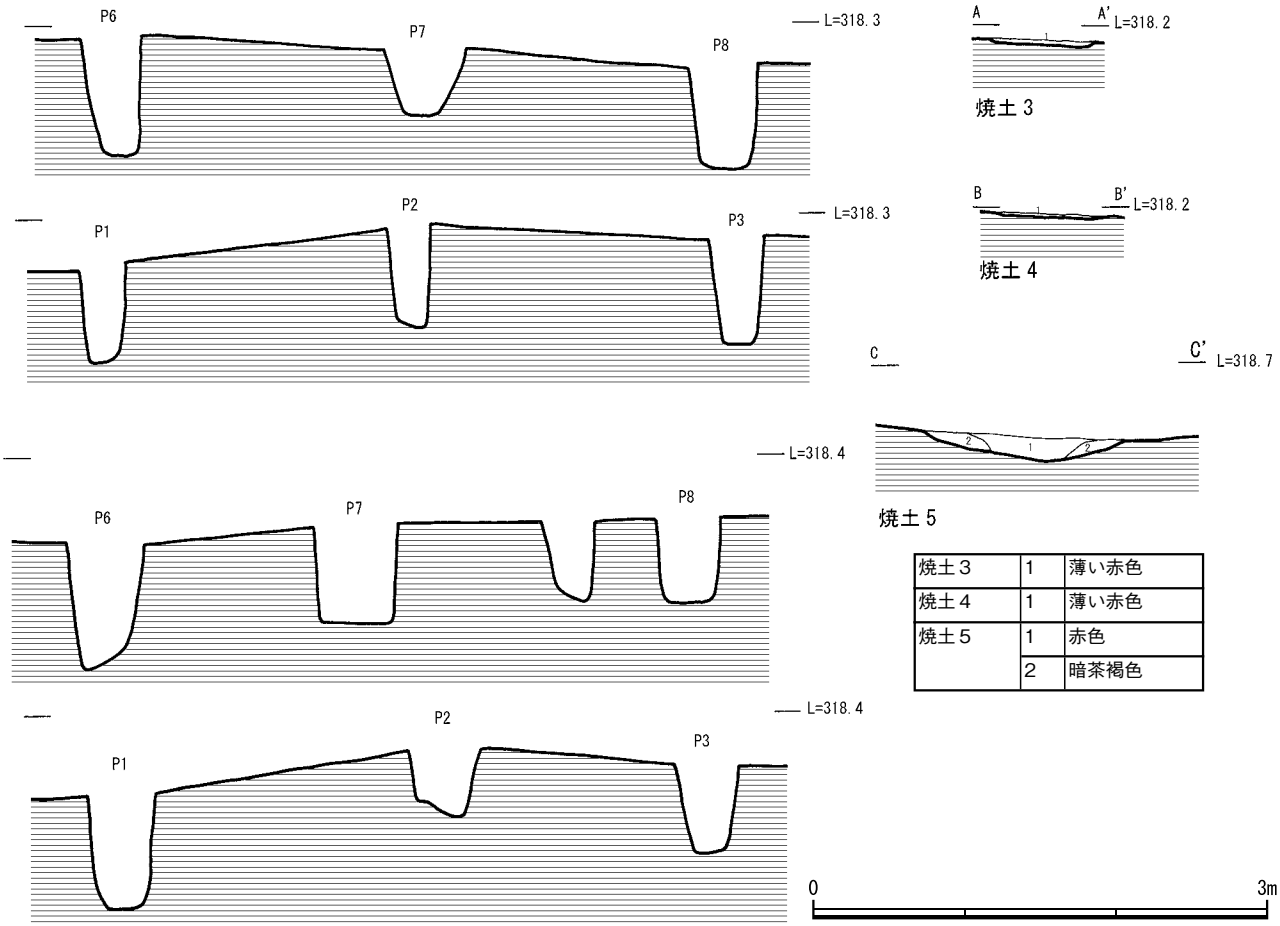
第19図　焼土１内出土遺物

５号掘立柱建物（SB５）(第20,21図)

I-13,14区で検出された。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で，深さは47～81cmである。６号掘立柱建物と切り合い，焼土２～５を共伴する。建物中心部にある焼土５を，６号掘立柱建物跡が切るため，５号掘立柱建物跡が先行

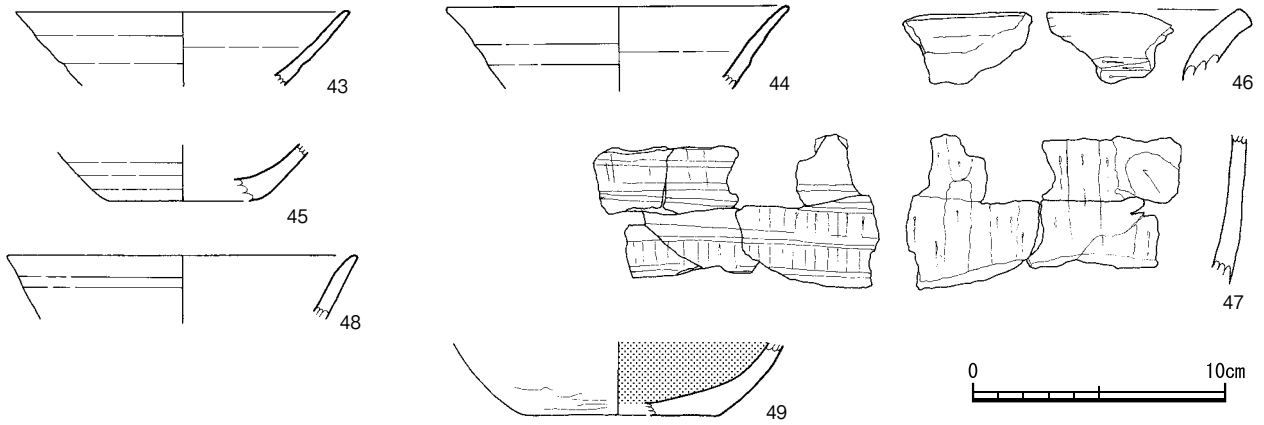


第20図　５,６号掘立柱建物跡及び焼土３,４,５(１)



焼土３	1	薄い赤色
焼土４	1	薄い赤色
焼土５	1	赤色
	2	暗茶褐色

第21図　５,６号掘立柱建物跡及び焼土３,４,５(２)



第22図　５号掘立柱建物跡及び焼土５内出土遺物

したと判断した。Ｐ３,Ｐ６は，底面で最大長15cmの礫が1点ずつ出土している。

焼土２(第20図)

中心部が白味を帯びた赤さで，周縁部に向かうにしたがい赤みが薄れる。中心部は深さが12cm，周縁部は２cm程度である。帽子を逆さにした形状である。遺物が数点出土している。

焼土３(第20,21図)

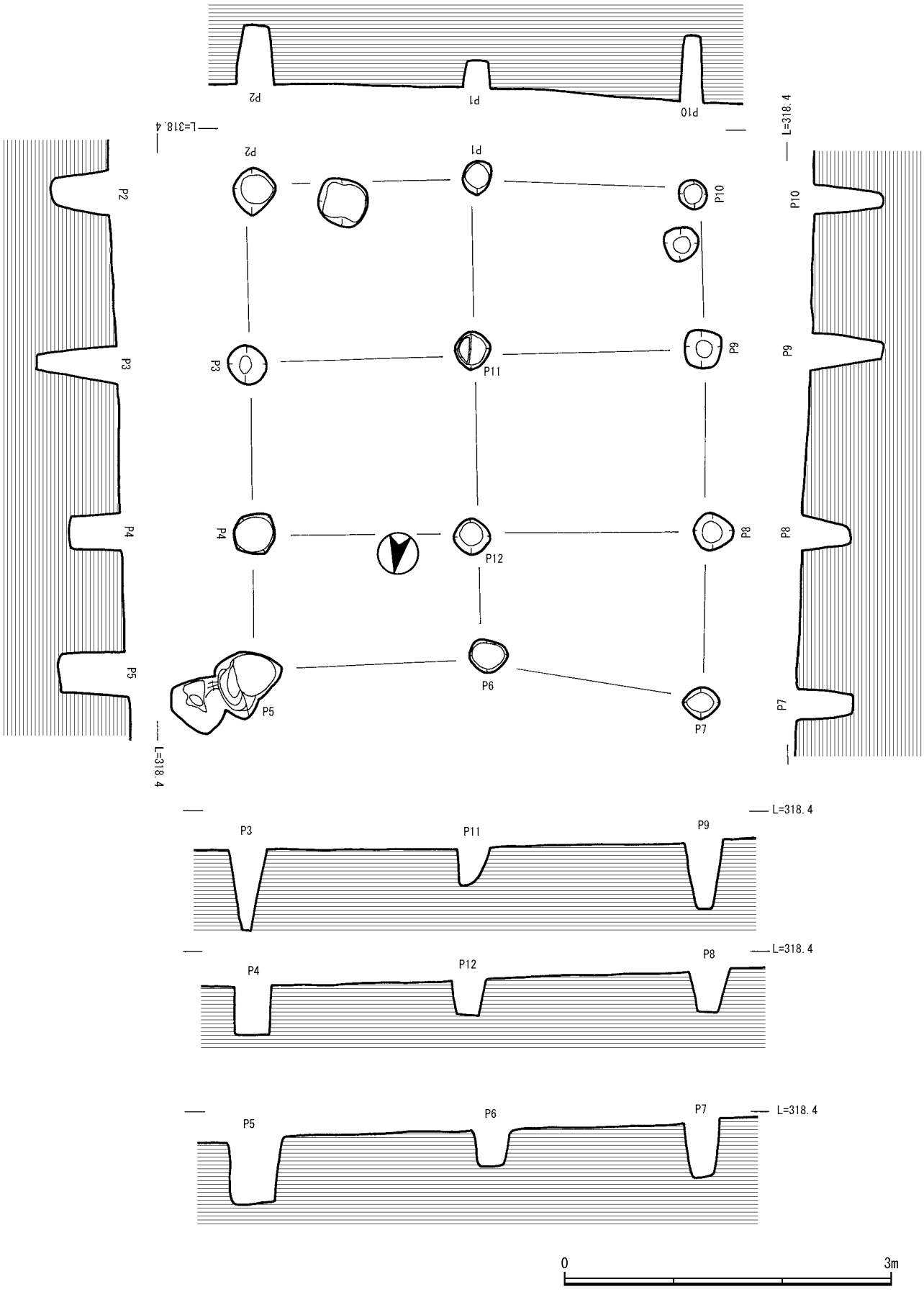
平面形が長楕円形で，赤色化の程度も薄く，周辺の土色との差も弱い。深さも全体的に浅いことから被熱の頻度が低かったと判断した。

焼土４(第20,21図)

中心部は薄く赤みを帯び，周縁部は黒褐色である。削平を受けたためか形状は小さく，赤化の深さも全体的に１cm前後で浅い。遺物が２点と10cm程度の軽石が１点出土している。

焼土５(第20,21図)

中心部は底部まで赤化し，周縁部は暗茶褐色化している。



第23図　７号掘立柱建物跡

遺構内北側で遺物が10点出土している。

５号掘立柱建物跡・焼土３・焼土５出土遺物(第22図)

５号建物の柱穴からは土師器坏片14点，黒色土器片１点，焼塩壺片10点，土師器甕片18点が出土した。

土師器坏は砂粒を含むものが多く，11点中５点に確認できる。No43とNo44は橙色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。No45は見込み部分に光沢が認められる。土師器甕は砂粒を含みハケを施し，器壁の薄いものが多く胴部12点中9点を占める。

No46は胎土に砂粒を多く含み，口縁端部はナデて面を形成している。No47の外面は縦ハケの後，回転の横ハケを施し，器壁は薄く堅緻，胎土に砂粒を多く含む。

焼土３からは土師器甕が１点出土し，口縁端部は若干面をもつが細片のために図化しなかった。

焼土５からは土師器坏片４点，黒色土器片２点，焼塩壺片23点，土師器甕片11点が出土している。

土師器坏は砂粒を含むものが多い。No48は土師器坏の口縁部で，暗灰色を呈し，胎土に石英を多く含む。No49は黒色土器の坏で，外面は底部から体部にかけて丁寧なミガキが認められる。土師器甕は橙色と浅黄橙色が認められる。

６号掘立柱建物（SB６）(第20,21図)

I,J-13,14区で検出し，柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で，深さは41～75cmである。Ｐ３,Ｐ６で根石と思われる最大径15cmの礫が１点ずつ検出されている。Ｐ２,Ｐ３が柱間ラインより内側にずれ，平面形が歪んでいる。５号,７号,８号掘立柱建物と切り合い，焼土２～４を共伴する。

柱穴から土師器坏片３点，土師器椀の高台部片１点，黒色土器口縁部片２点，焼塩壺片11点，土師器甕片17点が出土している。土師器甕は器壁の薄いものが目立つ。全て細片で図化していない。

７号掘立柱建物（SB７）(第23図)

I-14区で検出し，柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で，深さは28～74cmである。Ｐ６がやや柱間ラインより内側になるが，平面形に影響は感じられない。６号,８号掘立柱建物と切り合い，軽石集積４を共伴する。平均床面積（20.77㎡）よりは小型（18.24㎡）だが，総柱を２本持つ。南側のJ-14,15区にかけてL字形になるピットが６基検出されている（P261参照）。南北に軸をとり２間×３間の建物を構成することも想定できるが，残りのピットが検出されていない。

焼土跡29

中心部にわずかな掘り込みを持ち，赤化が激しく，共伴する軽石の破砕が激しい。そのためか，10cmを超える軽石はない。遺構中心部の土は黒っぽく，外側に向かい赤い焼土，黒い焼土へと変化していく。軽石は中心部には無く，両側に集中している。炉のような機能をもっていた可能性がある。

７号掘立柱建物跡出土遺物(第24図)

柱穴から土師器坏３点，黒色土器鉢１点と黒色土器１点，焼塩壺片5点，土師器甕４点出土した。

No50は外面に黒斑が認められ，内面は横方向の丁寧なミガキが認められるが，黒色土器のような黒化処理は行っていない。No51は，内面に黒化処理とミガキが認められ，外面はナデ調整である。No52は橙色の土師甕の口縁部で，胎土に砂粒と茶色粒を多く含み，外面はハケが施されている。

８号掘立柱建物（SB８）(第25図)

J-13,14区で検出し，柱穴の位置が不規則で建物自体の平面形も不規則である。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で，深さは29～62cmである。６号,７号掘立柱建物跡と切り合い，焼土６～７はＰ５,Ｐ７と隣接し，焼土８はＰ４と切り合っている。８号掘立柱建物跡とは時期差があったと考えられる。６号,７号掘立柱建物跡とは柱穴が隣接し，また，６号,７号掘立柱建物跡に対し主軸が西側にずれている。

焼土６(第25図)

平面形は変則的で，中心部が暗茶褐色化し，その周辺は薄く赤色化している。底部は平坦で，均一に５cm程度の深さしかない。

焼土７(第25図)

小型のひょうたん型の形状を呈し，建物より内側の部分が赤色化し，外側で黒色化している。北東側にＰ５が接し，南側20cmで焼土跡８と隣接している。

焼土７出土遺物(第44図)

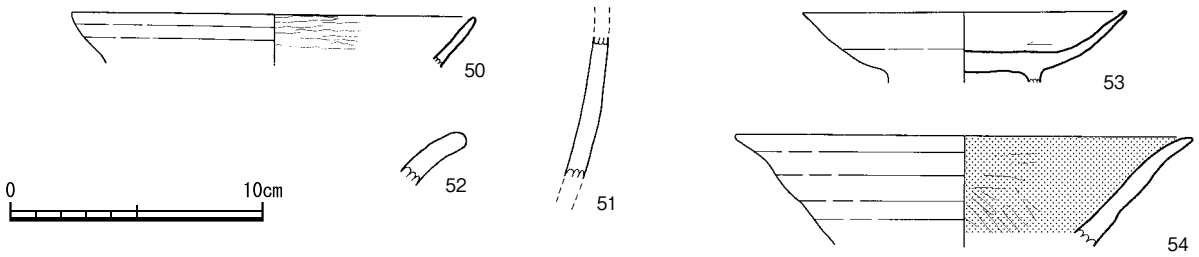
土師器甕片16点が出土し，全て厚手のナデ調整で，ハケは認められない。

No62は器面が脆弱である。No63は口縁部が胴部から強く屈曲し，口縁端部は幅の狭い面を持つ。No64は外面に指押さえが多く認められ,内面のケズリは比較的低い位置から認められる。No65は器壁の薄い胴部に対して，口縁部の器壁は厚い。胎土は角閃石を多く含む。No66は土器片７点が接合関係にあり，多くはＪ-７区から出土している。胴部外面に煤の付着が認められる。No67は口縁部で，褐色を呈し，内外面には丁寧な横ナデが認められる。外面には煤の付着が認められる。

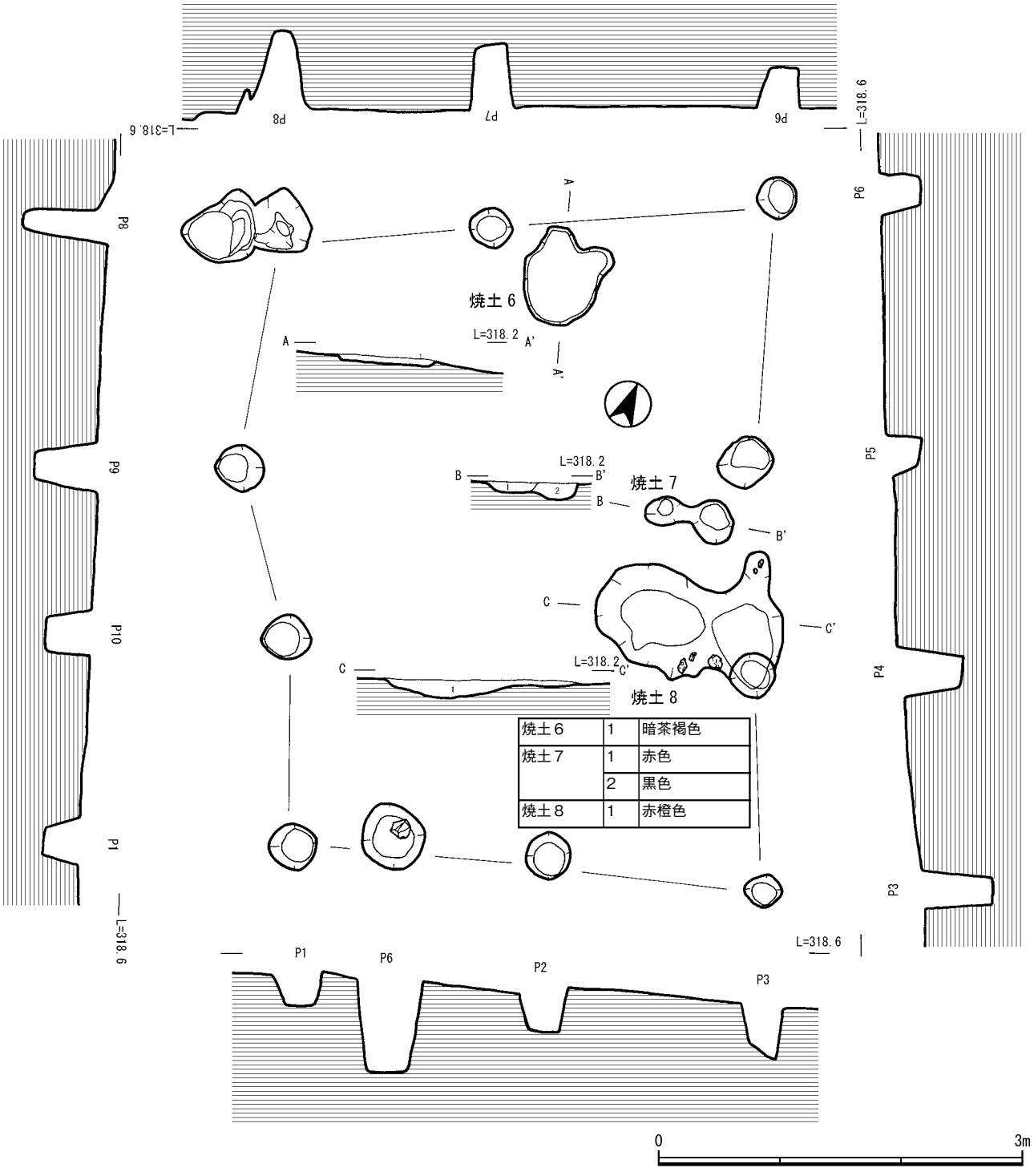
焼土８(第25図)

平面形は赤化の中心部が２か所あるような不定形な形状である。被熱部分は中心が赤燈色，周縁部が黒色化している。周縁部で軽石が５点共伴しているが炭化物も少量確認できた。

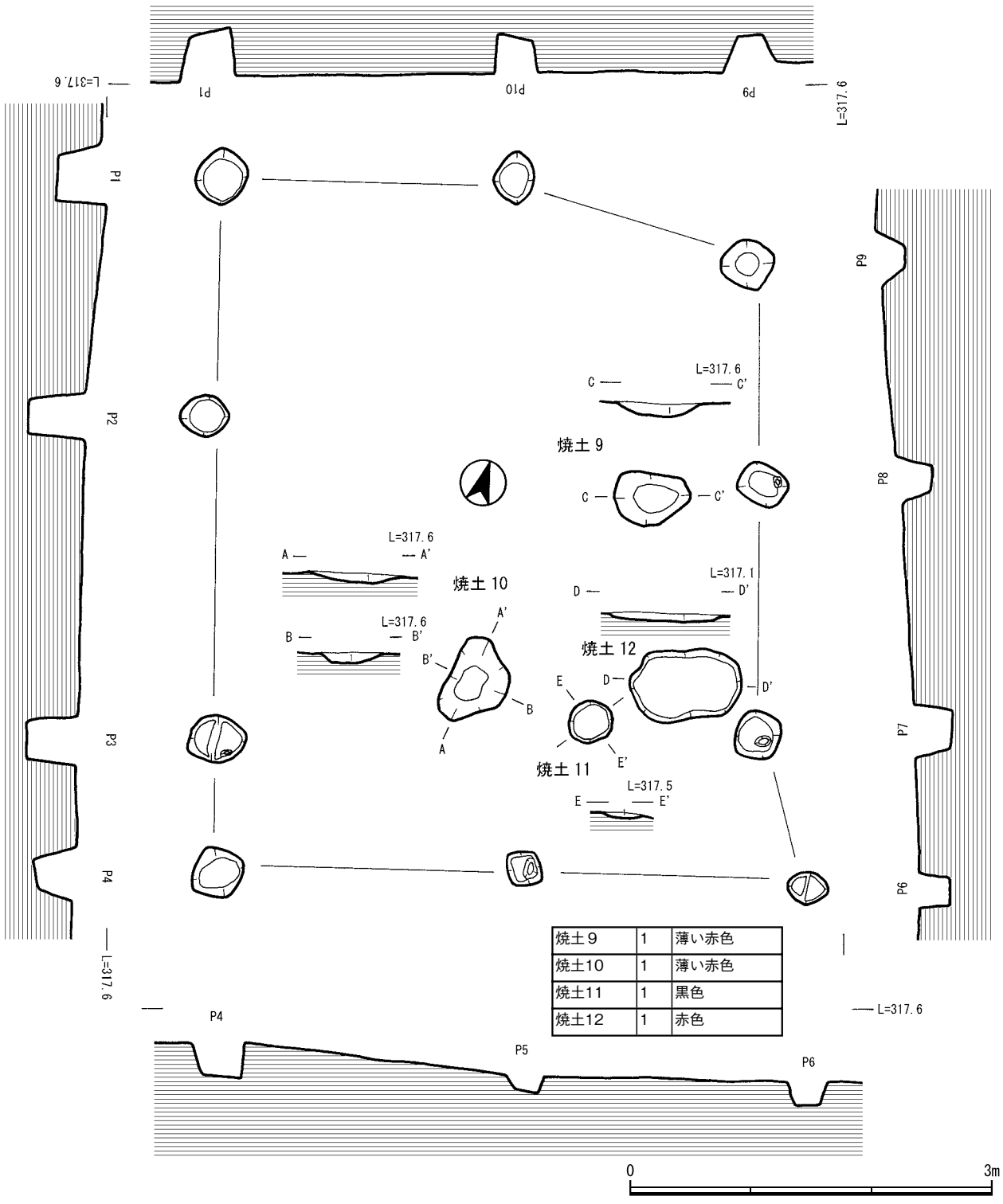
８号掘立柱建物跡・焼土６出土遺物(第24図)



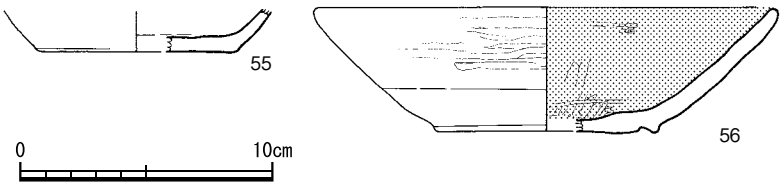
第24図　７号掘立柱建物跡及び８号掘立柱建物跡及び焼土６内出土遺物



第25図　８号掘立柱建物跡及び焼土６，７，８



第26図　９号掘立柱建物跡及び焼土９，10，11，12



第27図　９号掘立柱建物跡内出土遺物

柱穴から土師器坏１点，土師器椀１点，焼塩壺１点，土師器甕５点が出土した。No53は底部から曲線をもって体部が短く立ち上がる。高台は剥がれた状態である。内面は丁寧なナデによりヘラミガキ状である。I-15区一括遺物と接合関係にある。

土師器坏は砂粒を多く含む。土師器甕は外面

にハケ目，胎土に砂粒を多く含む。

焼土は土師器坏片２点，土師器椀片１点が出土した。No54は内面の口縁部付近まで全体にヘラミガキが認められ，内面にも横方向のヘラミガキが認められる。

９号掘立柱建物（SB９）(第26図)

集中地点からは東に2.8m離れ，南東に緩やかに傾斜した地点に立地する。この地点から東側は傾斜が顕著となる。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で，深さは14～48cmである。P７,P８,P９は柱間ラインより内側に入っている。SB９の桁行柱間の平均は184cmだが，P３～P４，P６～P７は柱間距離が113,43cmしかなく短い。焼土跡９～12を共伴する。

焼土９(第26図)

他の焼土跡からは離れて検出されている。被熱部の形状はレンズ状で深さも10と類似している。

焼土10(第26図)

平面形は台形状である。共伴する４基では最も中心部に近い。

焼土11(第26図)

平面形はほぼ円形で，９号掘立柱建物跡内の焼土跡では最小である。被熱部は黒色化している。削平を受けたためか断面は浅い。

焼土12(第26図)

９号掘立柱建物跡内の焼土跡では最大である。被熱部は赤く，形状は皿状になる。P７が12cm南東側にあり９号掘立柱建物跡との共伴性は薄い。

９号掘立柱建物跡出土遺物(第27図)

土師器坏１点，黒色土器１点，焼塩壺片４点，土師器甕２点が出土した。

No55は胎土に砂粒を多く含む。体部外面下半まで丁寧なナデが認められる。見込みには不整方向の静止ナデが認められる。No56は高さ２cm程度の低い高台を有する。体部上位に横方向のヘラミガキが認められる。

10号掘立柱建物（SB10）(第28図)

J,K－14,15区で検出し，集中地区では最も北側にあり，長方形の整った平面形である。東西を主軸にし，西から東に向かう緩やかな傾斜地に立地する。他に主軸が南北軸に対し大きくずれるのは12号掘立柱建物跡である。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で対称的に並び，深さも検出面から66～120cm，平均95cmで他の建物に比べ深い。ピットの断面形は不揃いで，床面とピットの深さの関係は断面観察からは判断できない。中心部に軽石集積６を共伴する。東側には弧状に並ぶ土坑10～13がある。

軽石集積５(第28図)

建物のほぼ中心部にあり，掘り込みの深さは45cmで，検出面では若干赤みが見られる程度である。底部に向かって赤みが増し，底部から上方10cm程が最も赤い。底部は焼成により黒褐色になる。土質はやわらかいが軽石（Ⅳb層相当）を多く含みザクザクした感じである。小鍛冶段階の鍛造剥片が１点出土している。

10号掘立柱建物跡内軽石集積５出土遺物(第29図)

土師器坏片３点，焼塩壺片６点，土師器甕片６点が出土した。土師器坏は浅黄橙色が２点と橙色が１点，土師器甕は浅黄橙色が１点，褐色が５点出土している。

No57は焼塩壺の胴部である。

11号掘立柱建物（SB11）(第30図)

G-13,14区で検出された。３号掘立柱建物跡から南に約4.80m離れる。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で，深さは25～91cmである。レベル差は約50cmあり若干の傾斜がある。焼土跡13を共伴する。南，西にピットが数基検出されているが遺構は構成しない。

焼土13(第30図)

焼成の度合いにより色調が異なる。中心部は赤化が激しく全体が硬化し砂粒が粗い。周縁部は暗紫色に変色しており，周辺の土より硬化している。少量赤色の焼け土が混ざる。赤化の深さはⅣb層に達している。

12号掘立柱建物（SB12）(第31図)

F-８区で検出し，本遺跡中，最南端に位置する。北東側は傾斜が強く，南側12mからは急傾斜の谷になっている。主軸は東西で，他の掘立柱建物跡とは異なるが等高線に沿っており，地形に合わせての立地とも考えられる。建物集中区からは約50m離れる。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で深さは31～92cmである。P１,P６は柱間ラインより内側にずれており，建物自体の平面形は若干不規則になる。焼土跡14,15,17を共伴する。焼土跡17はP12と切り合い，焼土跡16が隣接する。P９の埋土は他のピットと同様のⅢ，Ⅳa層の混在した土である。このことから，12号掘立柱建物跡は焼土17の使用後に建てられたと判断することが妥当である。

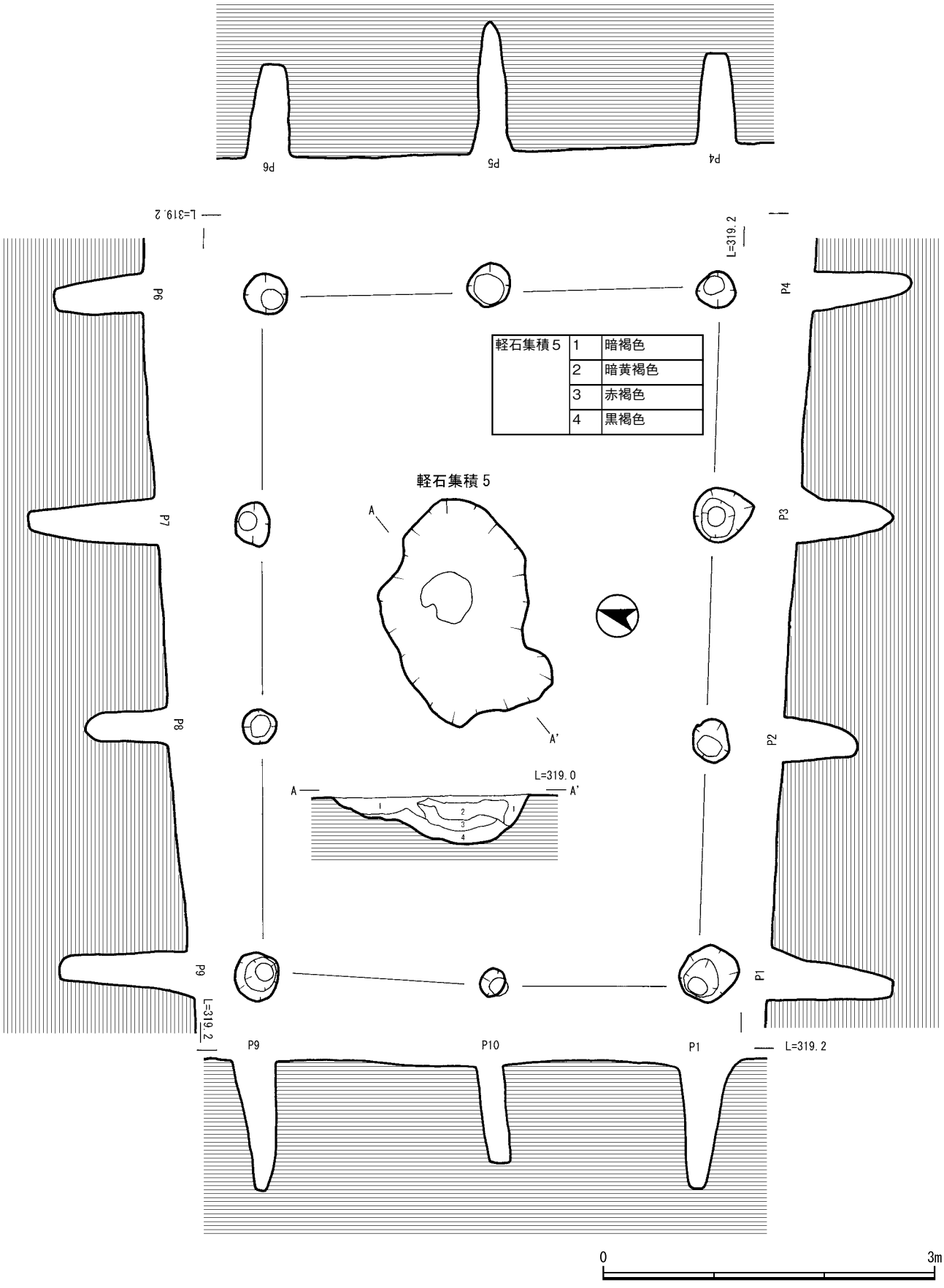
土師器甕片４点が出土しているが，図化には至っていない。

焼土14(第31図)

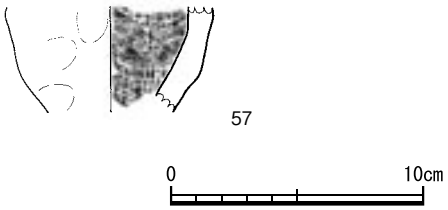
中心部の赤化は強く朱色を呈する。深さ16cmの底部まで同様の色調で赤化しており，被熱はかなり強かったと思われる。周辺部は暗茶褐色を呈し，P５に隣接する。

焼土15(第31図)

平面形が楕円形である。断面は浅いレンズ状になる。赤化部分は14cm下の底部（Ⅳb層）まで及んでいる。



第28図　10号掘立柱建物跡及び軽石集積５

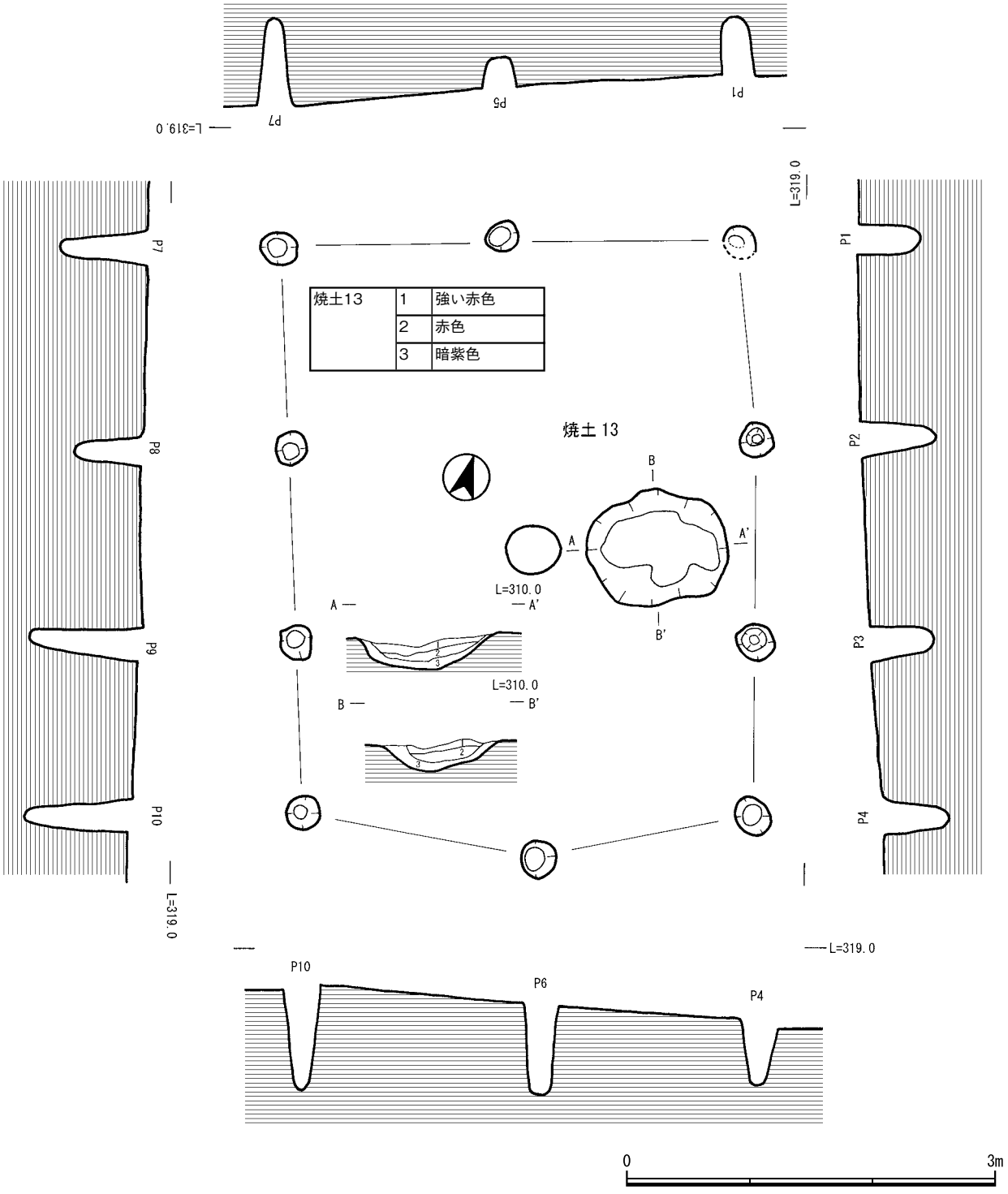


第29図　軽石集積５内出土遺物

焼土16(第43図)

建物と切り合わないが，東側に50cmの近い位置にあるため本項に記載した。中心部は上部が浅橙色で，下部が薄く黒色化している。周辺部全体が暗茶褐色化を呈する。

なお，土師器坏２点，土師器甕3点が出土した。土師器坏は浅黄橙色，土師器甕は褐色を呈する。



第30図　11号掘立柱建物跡及び焼土13

焼土17(第31図)

平面形が変則的で12号掘立柱建物跡のＰ９と切り合っている。中心部は明茶褐色が広がり，周囲は朱色,最周辺部が暗茶褐色を呈する。被熱部の上部全体は赤化が強く，下部ではやや弱く色調が薄くなる傾向がみられる。

土師器坏の口縁部が1点出土し，器壁は薄手で丁寧な整形が認められる。

13号掘立柱建物（SB13）(第32図)

J-７区で検出し，谷状地形の最小幅20m弱の狭小な平坦地にある。建物自体は比高差80cmで西から東に傾斜する。軸は北北東に10°ずれる。梁間柱間の平均は375cm，桁行柱間の平均が247cmで面積は16棟中最大の31.44㎡である。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で深さは11～76cmである。P1～P9がP4～Ｐ６より短く，Ｐ２,Ｐ３が外側に張り出すため平面形が不規則になる。焼土18～20を共伴する。南側のⅠ－４～７区ではピットが約40基検出されたが遺構を構成するには至らない。同区で石帯（P378第107図参照）と集石１が出土している。

焼土18(第32図)

平面形が変則的である。中心部は白桃色で硬化している。周辺部は縁取るように黒色化している。
焼土19とは約30cm離れているだけで，ほぼ並列する状況で検出されている。２基に相関性は確定できない。

焼土19(第32図)

平面形は楕円形だが焼土18と同様に中心部は白桃色で硬化している。周辺部は縁取るように黒色化している。

焼土20(第32図)

被熱部は中心が朱色に赤化し，周辺部と底部が黒色化している。火力の影響が強かったと思われ，深さが25cmで全焼土中最も深い。

13号掘立柱建物跡内焼土18出土遺物(第33図)

土師器甕２点出土している。No58は口縁端部に若干丸みをもった面をもつ。土器片７点を接合できたが焼土内出土は１片のみで他は焼土から30m内に散布している。焼土内の１片は他と比べて還元色を呈していることから，この土師器甕は焼土外で投棄，破壊され，その内の１片が焼土内に混入された後で焼土遺構の使用によって還元されたものと考えられる。
土師器甕のもう1点は褐色を呈し器壁が厚い。細片のために図化していない。

14号掘立柱建物（SB14）(第34図)

M,N-５,６区のＶb層上面で検出し，柱穴の平面プランは楕円形で深さは38～86cmである。並びは東西対照的に整然としている。北端のピットは調査範囲外になり検出できなかった。15号,16号掘立柱建物跡と切り合っている。焼土21が中央部で検出されている。

焼土21(第34図)

建物の中心部にある。15号掘立柱建物跡の外側，16号掘立柱建物跡のＰ２～Ｐ３の柱間ライン上に切り合っているため，14号掘立柱建物跡に共伴すると判断した。畑作による削平のため正確な平面形は確定できない。

15号掘立柱建物（SB15）(第35図)

M-５,６区のＶb層上面で検出し，２間×４間の構成で縦長な平面形である。これは本遺跡では16号掘立柱建物跡と２基のみである。柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で深さは19～41cm，平均30cmで最も浅い。梁間柱間が他の掘立柱建物跡より短く平均144cmである。14号,16号掘立柱建物跡，焼土22と切り合っている。北側は調査範囲外になりピットの検出ができなかった。

16号掘立柱建物（SB16）(第35図)

M-５,６区のＶb層上面で検出し，柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形で深さは18～80cmである。梁間柱間が他の掘立柱建物跡より長く平均398cmである。Ｐ５,Ｐ６間はピットが検出されず１間になる。14号,15号掘立柱建物跡，焼土跡21,22と切り合っている。北側は調査範囲外になりピットの検出ができなかった。

柱穴

＜M,N-５～13区ピット群＞(第9図)

この区域は最近まで畑作が行われていたため，Ｖa～b層まで削平を受けていた。ピットは広範に検出されているが建物，柵列等の遺構を構成するには至らなかった。

＜H,I-15～16区ピット群＞(第10図)

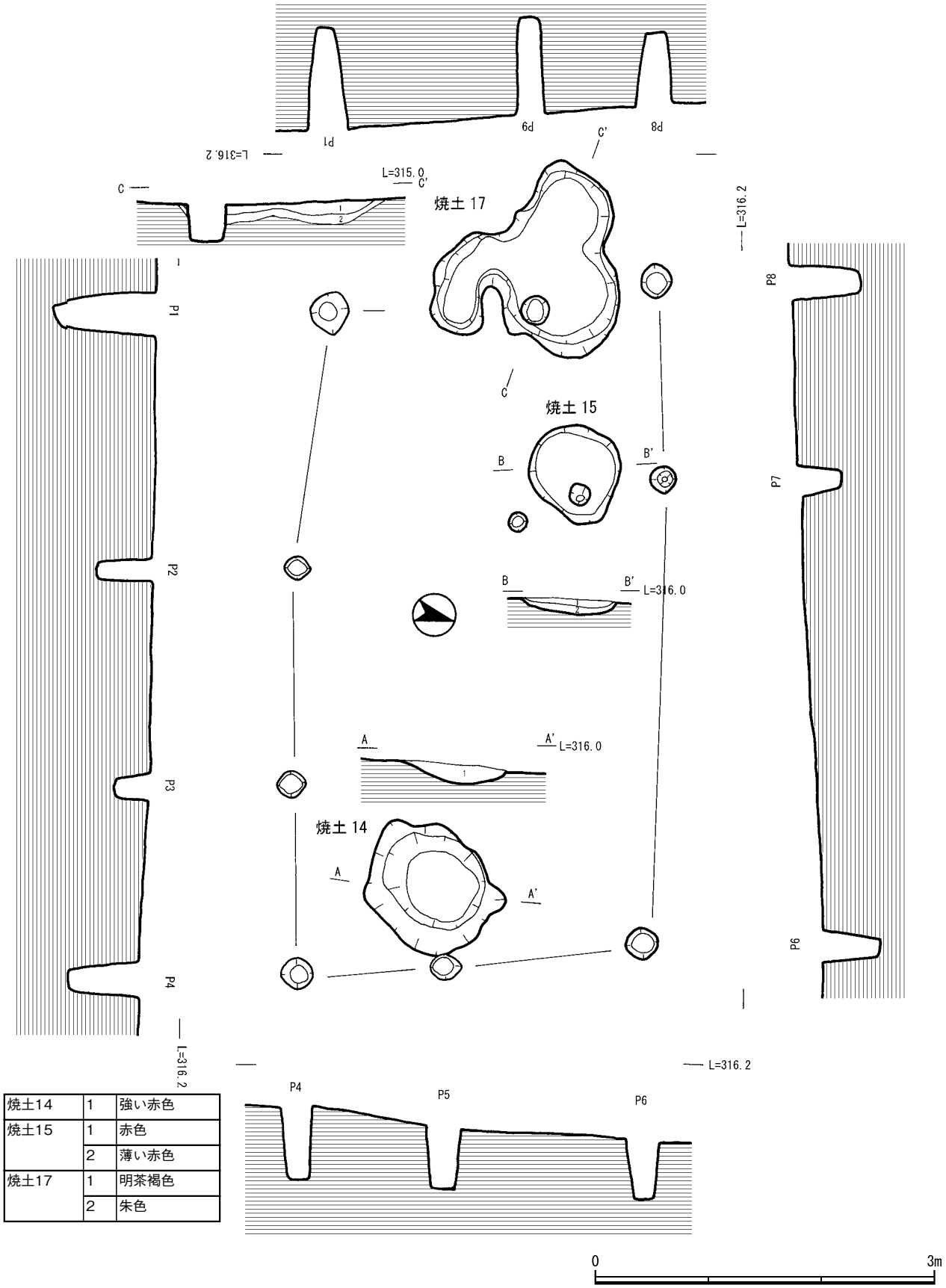
建物及びその他の遺構を構成するには至らなかったが，同区で多数のピットを検出している。Ｊ-14,15区にはＬ字状に並ぶ６基のピットが検出された。建物を構成するピットに比べ径が小さく遺物，切石等の共伴もみられない。７号掘立柱建物跡と10号掘立柱建物跡の中間に位置しており，柵あるいは物を掛ける杭として使用されたことも考えられる。その他に土師器の杯を共伴するピットが1基あったので本項で採り上げる。同区では遺物集中地点や軽石集積遺構が検出されている。

(２)軽石集積

軽石集積１(第36図)

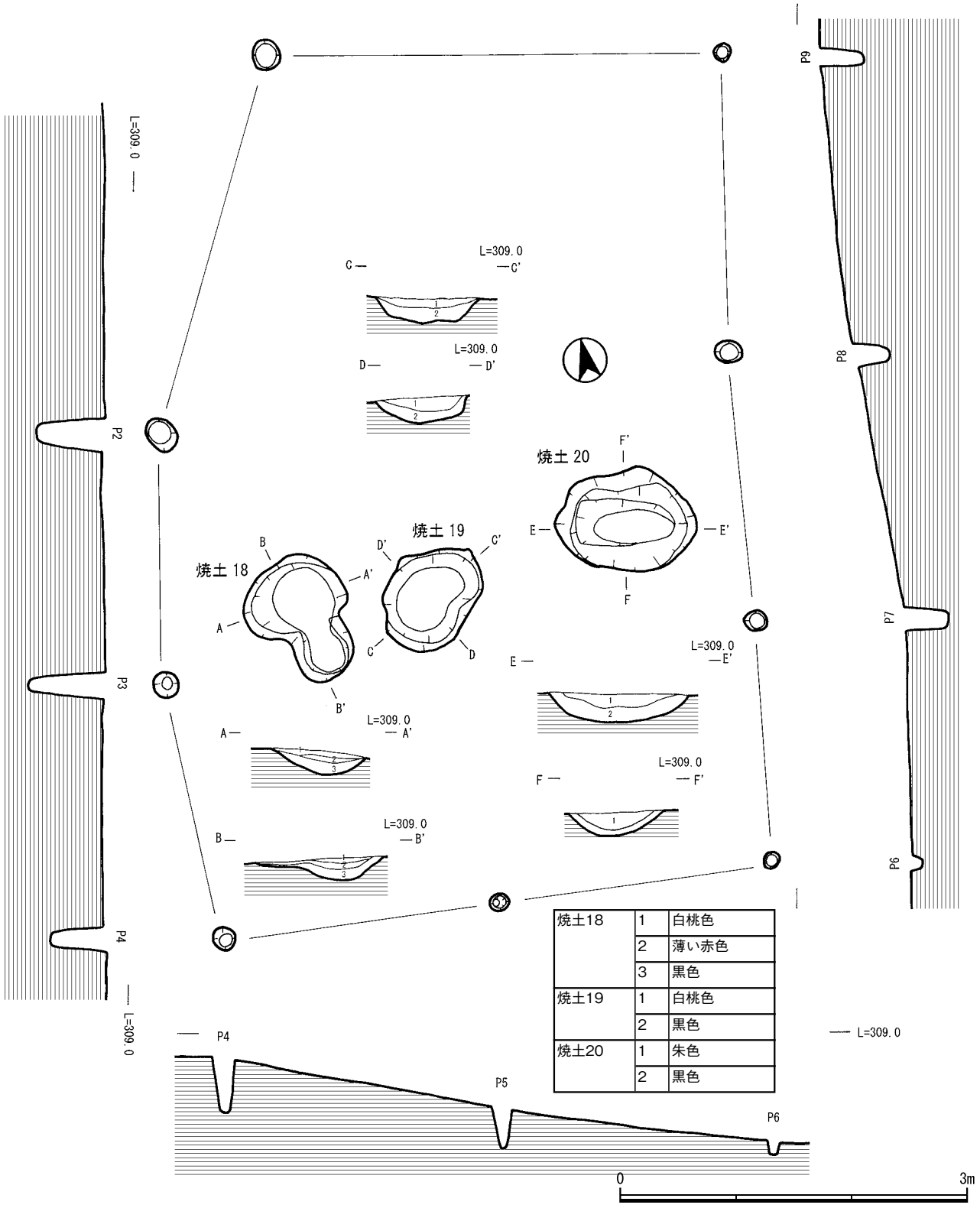
I-15区Ⅳa上層で検出し，最大幅2.11m，最短幅1.49m，礫数163個で，７基中一番大きい。

中心に掘り込みがみられるが，軽石が東側斜面に流れている。軽石は石の目に沿って割れており，角状のものが多く，中央部の礫ほど赤化の度合いが強い。



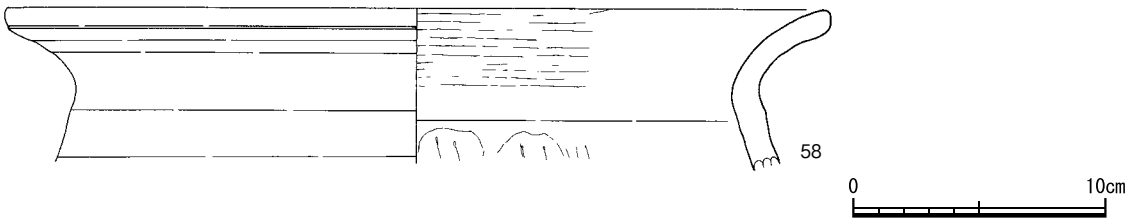
焼土14	1	強い赤色
焼土15	1	赤色
	2	薄い赤色
焼土17	1	明茶褐色
	2	朱色

第31図　12号掘立柱建物跡及び焼土14,15,17

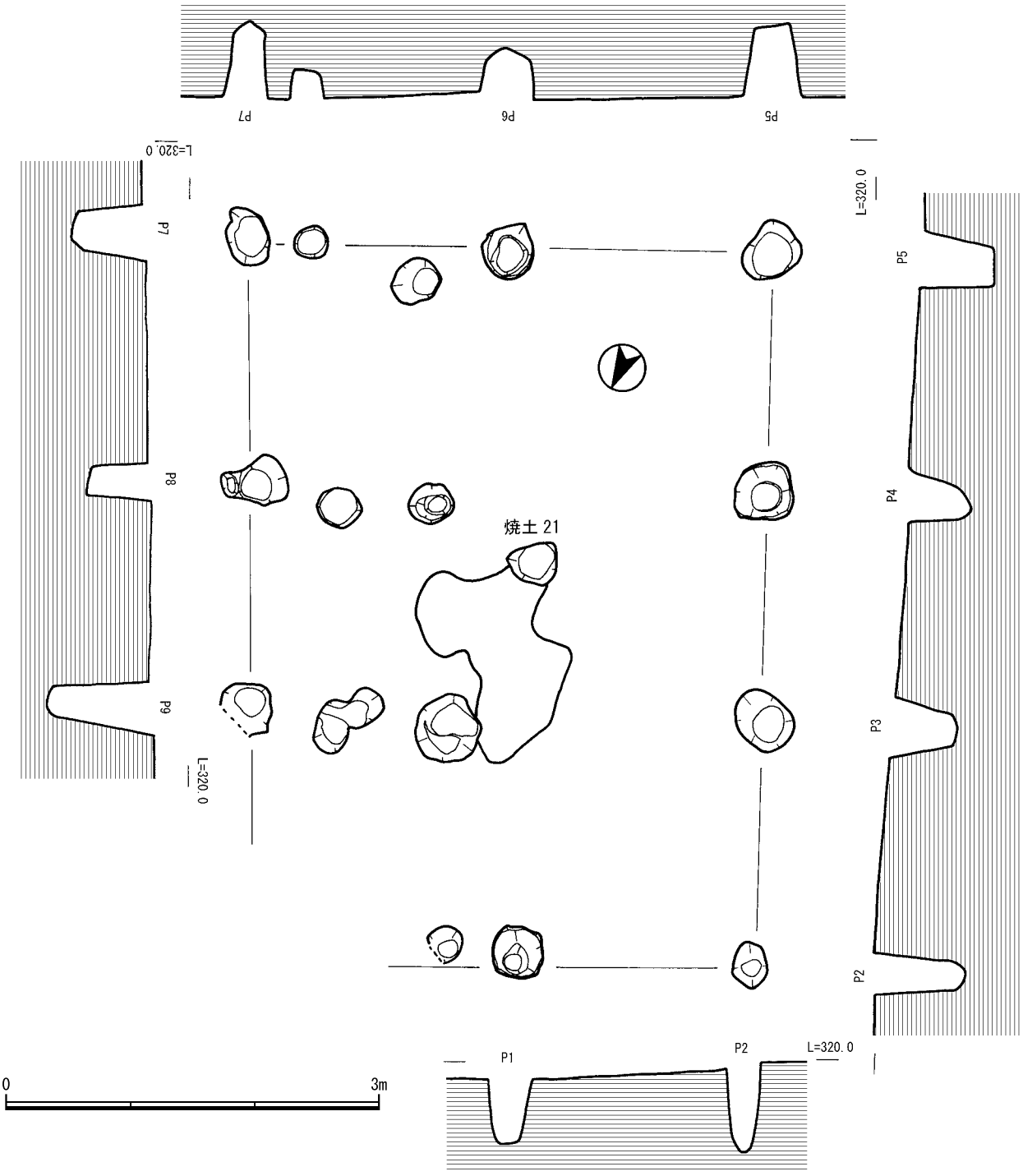


焼土18	1	白桃色
	2	薄い赤色
	3	黒色
焼土19	1	白桃色
	2	黒色
焼土20	1	朱色
	2	黒色

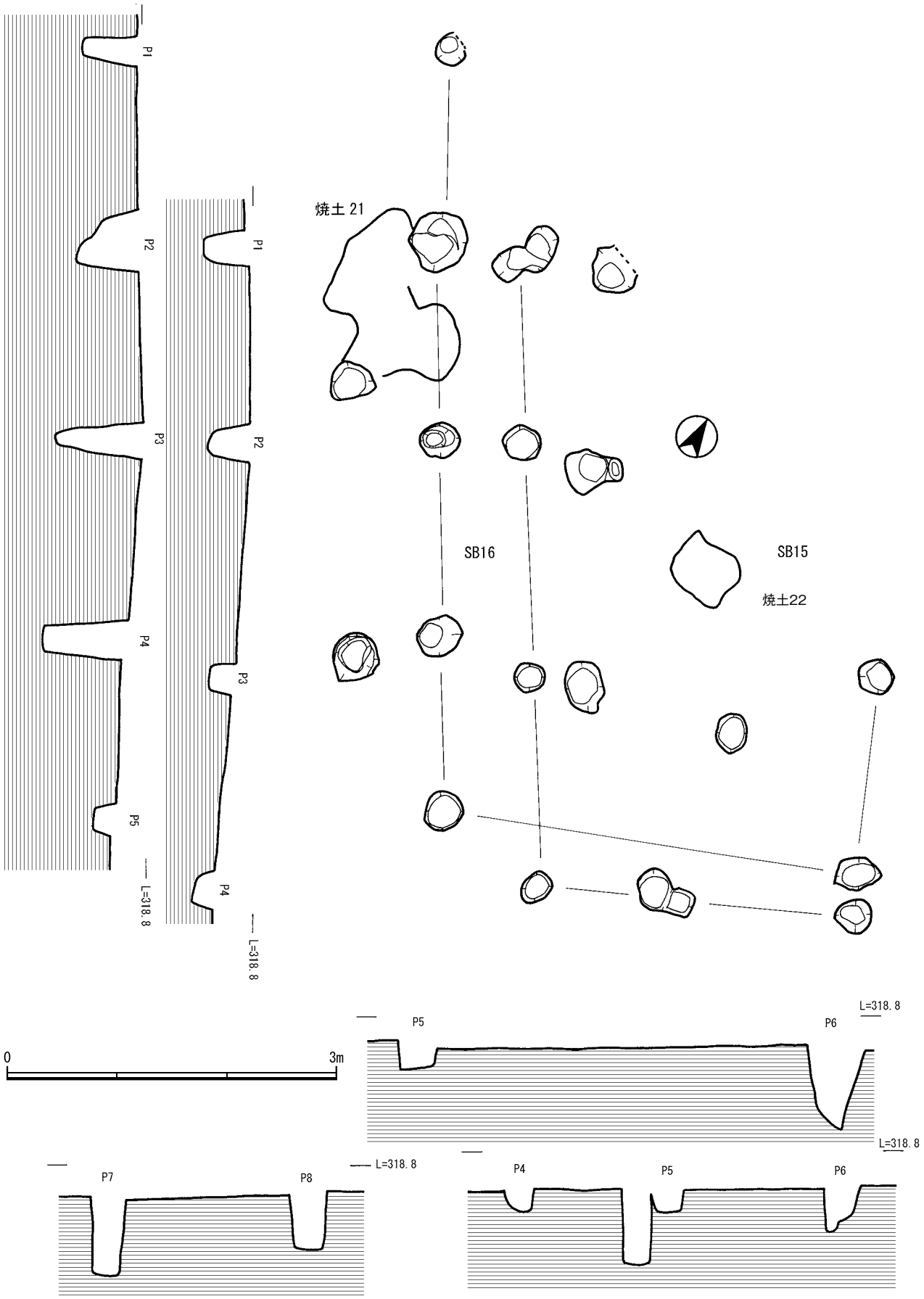
第32図　13号掘立柱建物跡及び焼土18，19，20



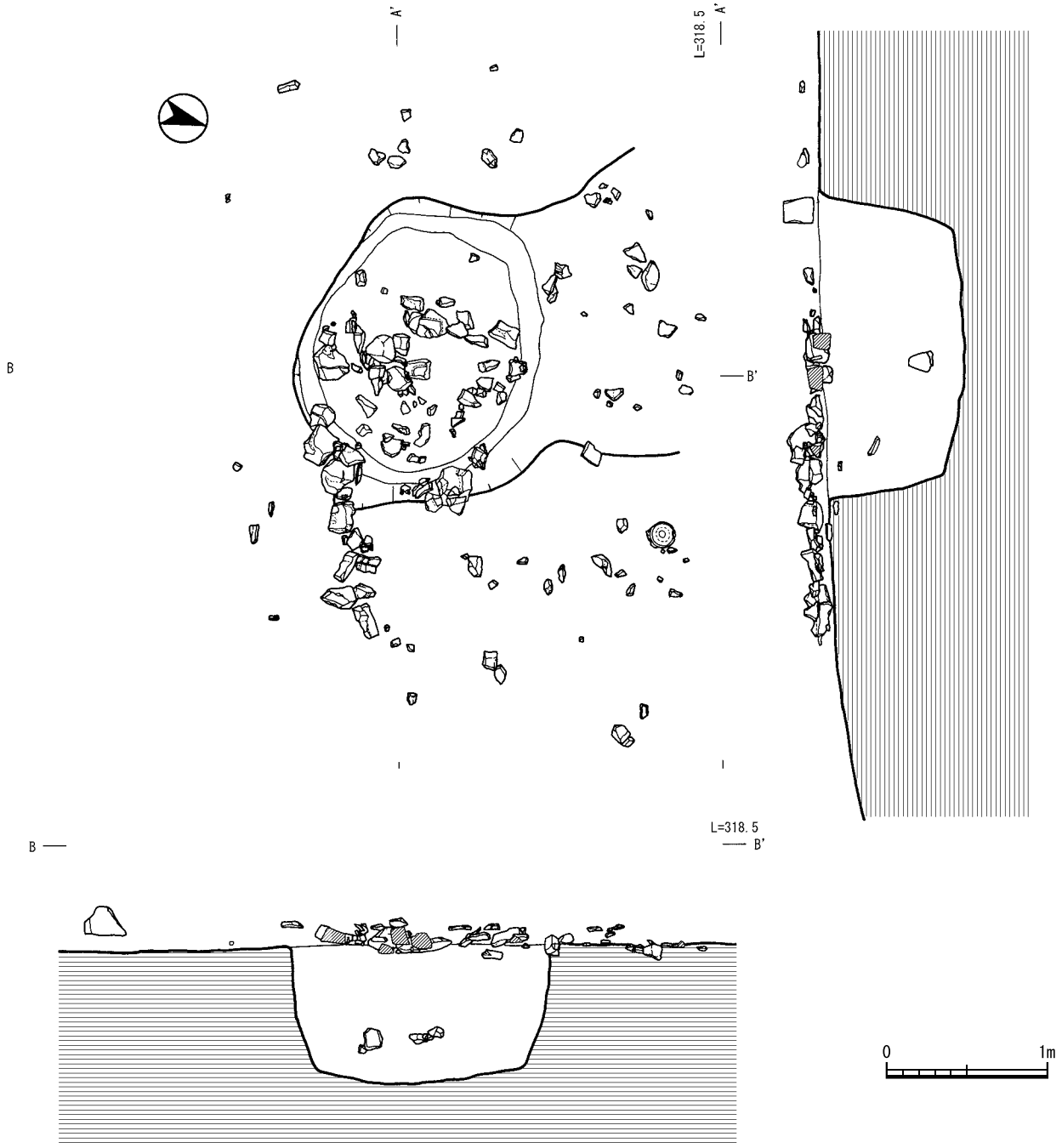
第33図　焼土18内出土遺物



第34図　14号掘立柱建物及び焼土21



第35図　15,16号掘立柱建物及び焼土21



第36図　軽石集積１

土師器甕，坏の小片，碗の底部が共伴している。碗の底部調整はヘラ切りである。

軽石集積遺構１出土遺物

土師器甕２点が出土し，褐色を呈し，外面にはハケが認められる。細片のため図化しなかった。

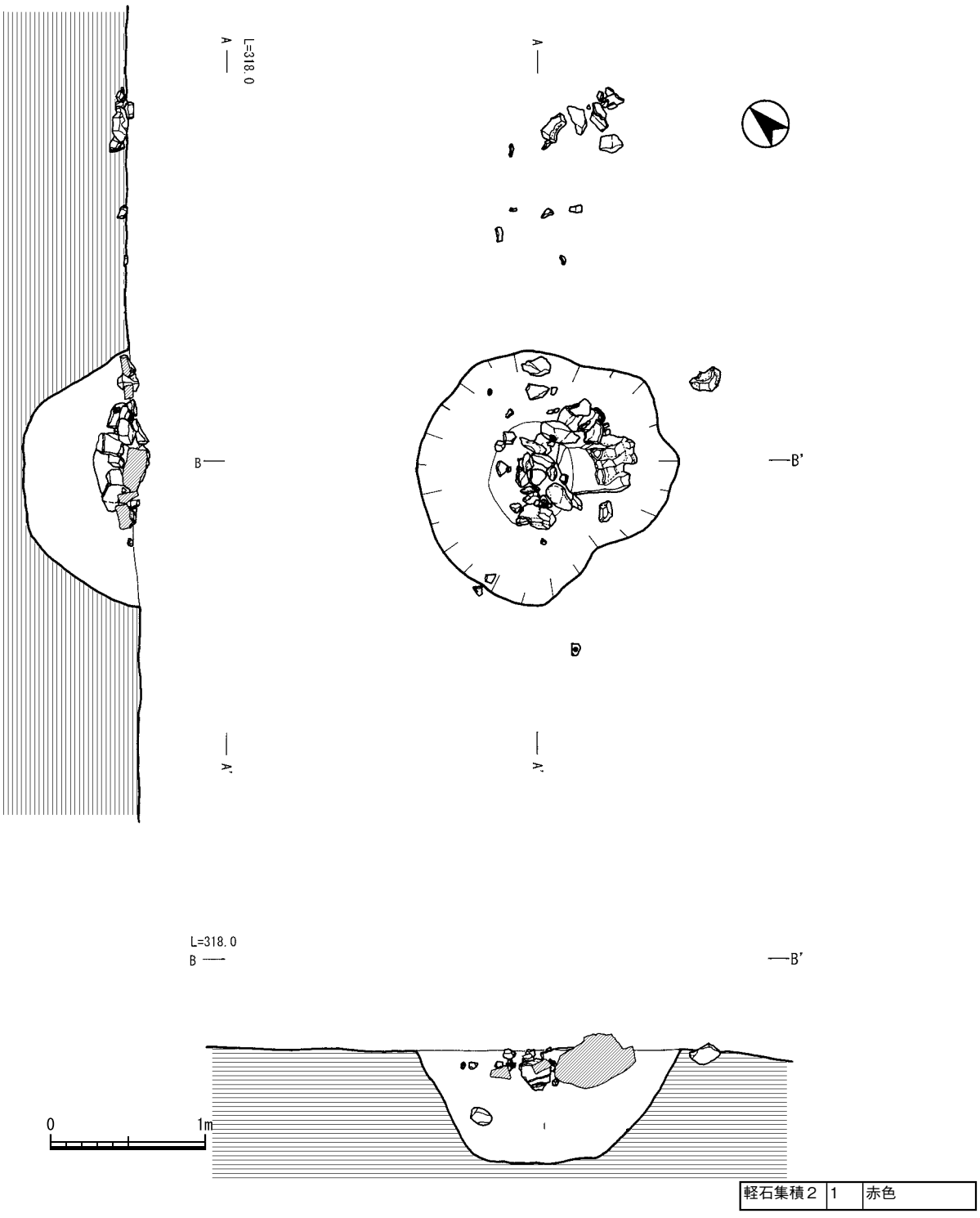
軽石集積２(第37図)

H,I-15区，Ⅳa上層で検出された。最大幅1.64m，最短幅0.80m，礫数56個である。軽石は火を受けており，下部にその傾向が強い。中央部に大きな軽石を配し，土師器坏，甕が共伴する。周辺５m以内に，焼土を２基検出している。

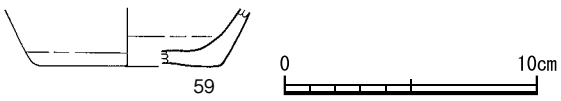
軽石集積遺構２出土遺物(第38図)

土師器坏１点，焼塩壺２点が出土した。

No59は浅黄橙色を呈する。体部外面にまで丁寧なナデが認められる。



第37図　軽石集積２

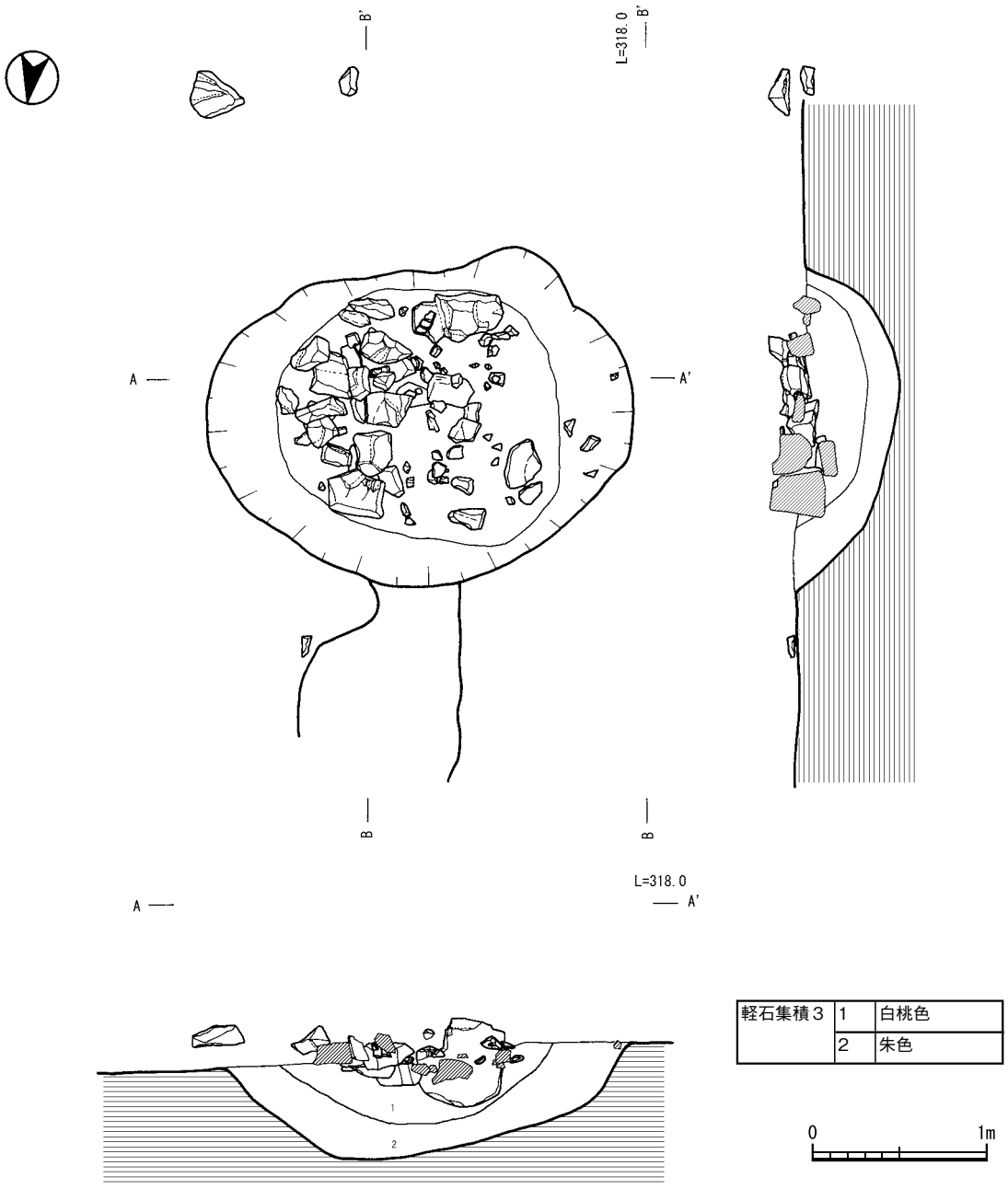


第38図　軽石集積２内出土遺物

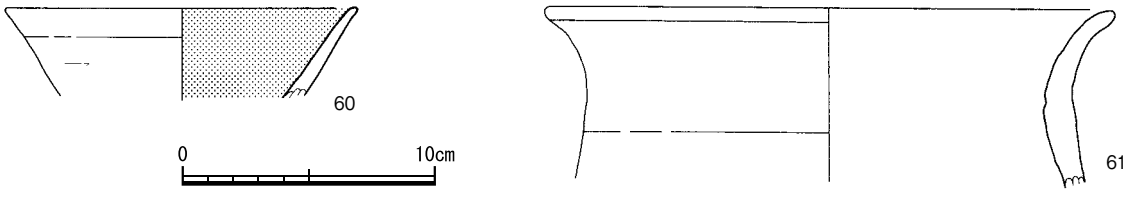
軽石集積３(第39図)

J-14区，Ⅳa上層で検出し，最大幅1.69m，最短幅1.22m，礫数80個である。焼土９と共伴し，5～25cm程度の軽石を利用している。中央部には掘り込みがあり，中央部の軽石ほど赤化が激しい。被熱による土層の赤化は中心部が白く，周縁部は赤くなる傾向を示す。北面部に軽石が少ないことから，炊き口の可能性もある。

被熱部上部は，肌色に変化し硬く締まり，細かい軽石を含み，灰が固結した可能性もある。底部は赤く厚く焼けているが，上部と比較すると柔らかい。Ⅳb層のパミスを含むため



第39図　３号軽石集積

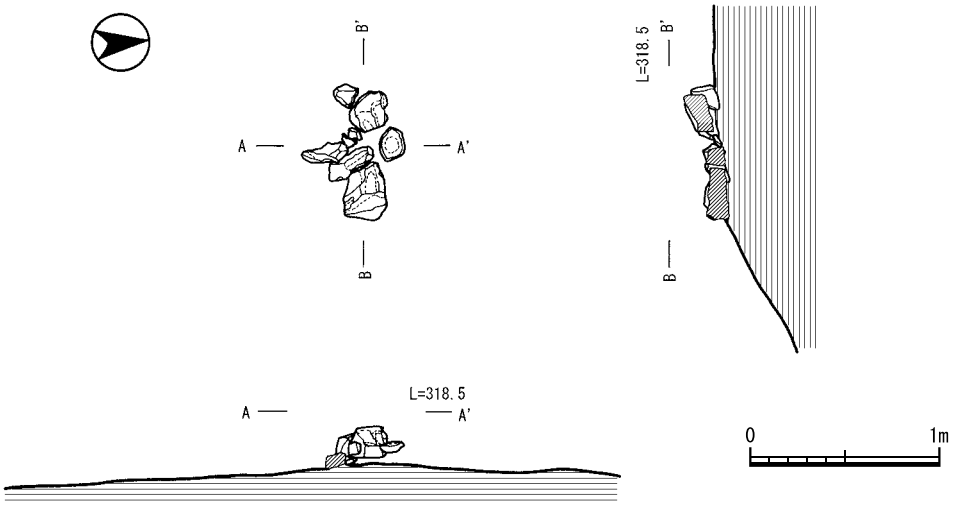


第40図　軽石集積３内出土遺物

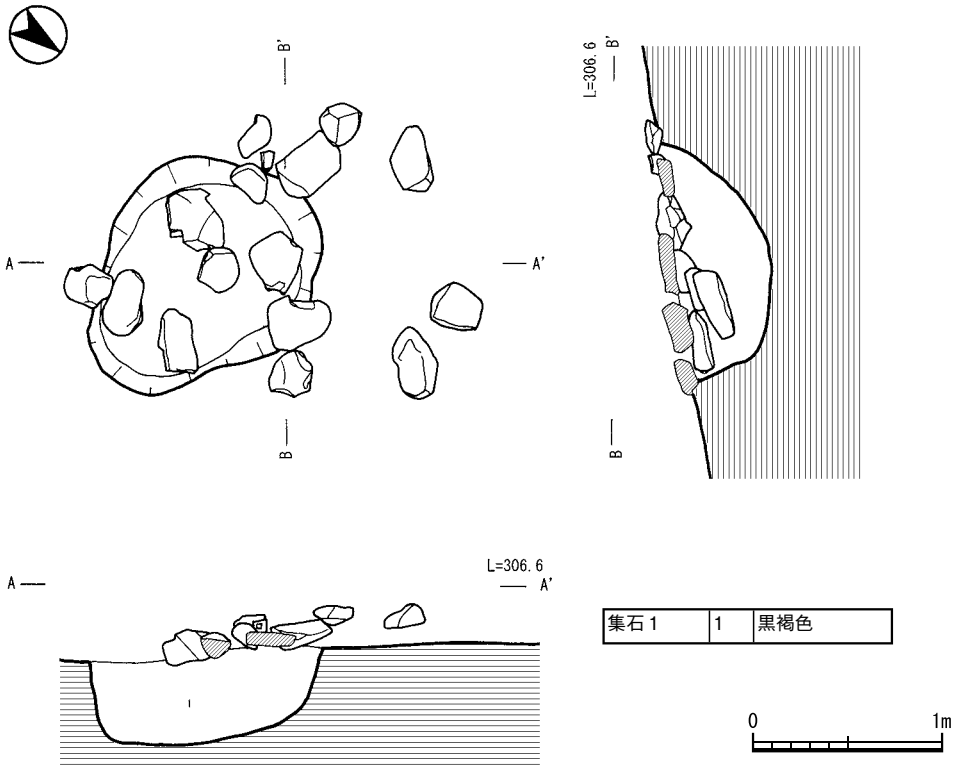
かザラついた感触である。

軽石集積遺構３出土遺物(第40図)

土師坏片６点，黒色土器片11点，土師器甕片17点が出土し，特に，土師器坏は浅黄橙色を呈している。No60は黒色土器で外面にケズリが認められる。多くの土師器甕は褐色で，胎土が精緻なものと礫を多く含む薄手のものがある。No61は褐色を呈し，器壁は比較的薄く，内面のケズリは低い位置から認められる。



第41図　軽石集積４



第42図　集石１

軽石集積６

K－16区，Ⅳa上層で検出された。検出時は少数の軽石が散在した状況だったため集積遺構と認めず，実測等は行うに至らなかった。

(３)集石１(第42図)

I-５区で検出し，30cm東側で石帯（P378参照）が出土している。15～20cmの比較的大きな砂岩を利用しているが，礫数は15個で丸みを帯びた礫が多く赤化，劣化はみられない。地形の傾斜に沿って配置されており，掘り込みも無い。砥石とみられる礫が１点共伴している。

(４)焼土

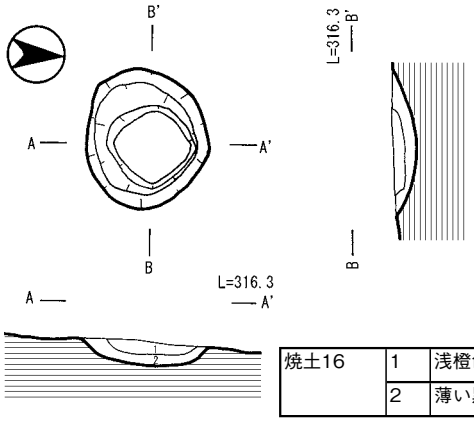
焼土23(第43図)

被熱部分は平面が円形で断面がレンズ状になり，２層に分層でき，中心部はⅣa上層が赤化している。周縁部は同層が暗茶褐色を呈している。

焼土24(第43図)

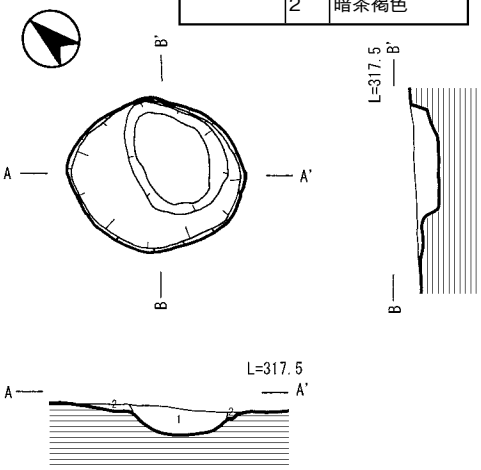
平面形は楕円形である。被熱部分は中心部が円錐状に赤

焼土16



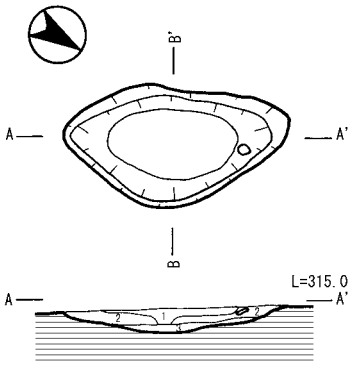
焼土16	1	浅橙色
	2	薄い黒色

焼土23



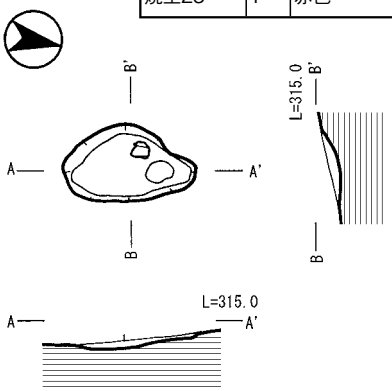
焼土23	1	赤色
	2	暗茶褐色

焼土24



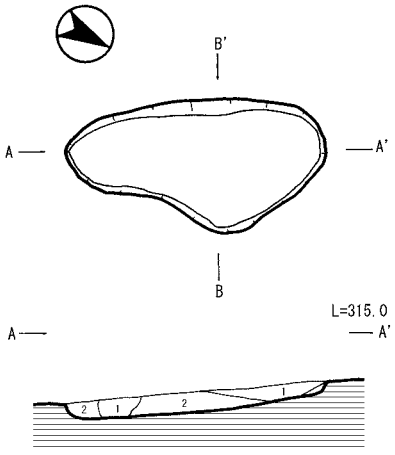
焼土24	1	赤色
	2	薄い赤色
	3	黒褐色

焼土25



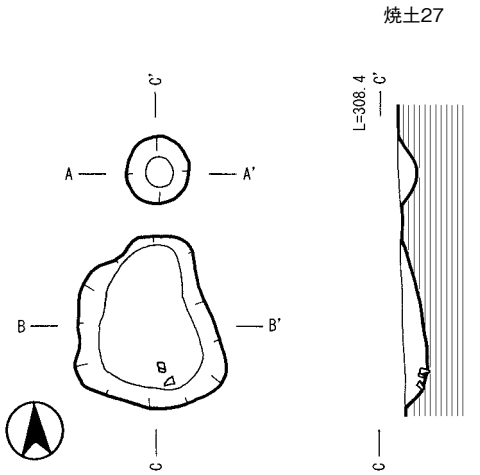
焼土25	1	赤色

焼土26



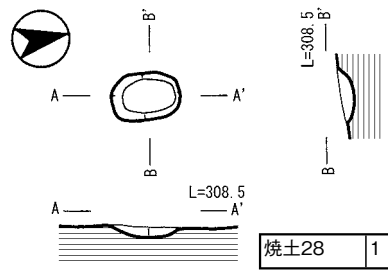
焼土26	1	強い赤色
	2	暗茶褐色

焼土27



焼土27	1	強い黒色

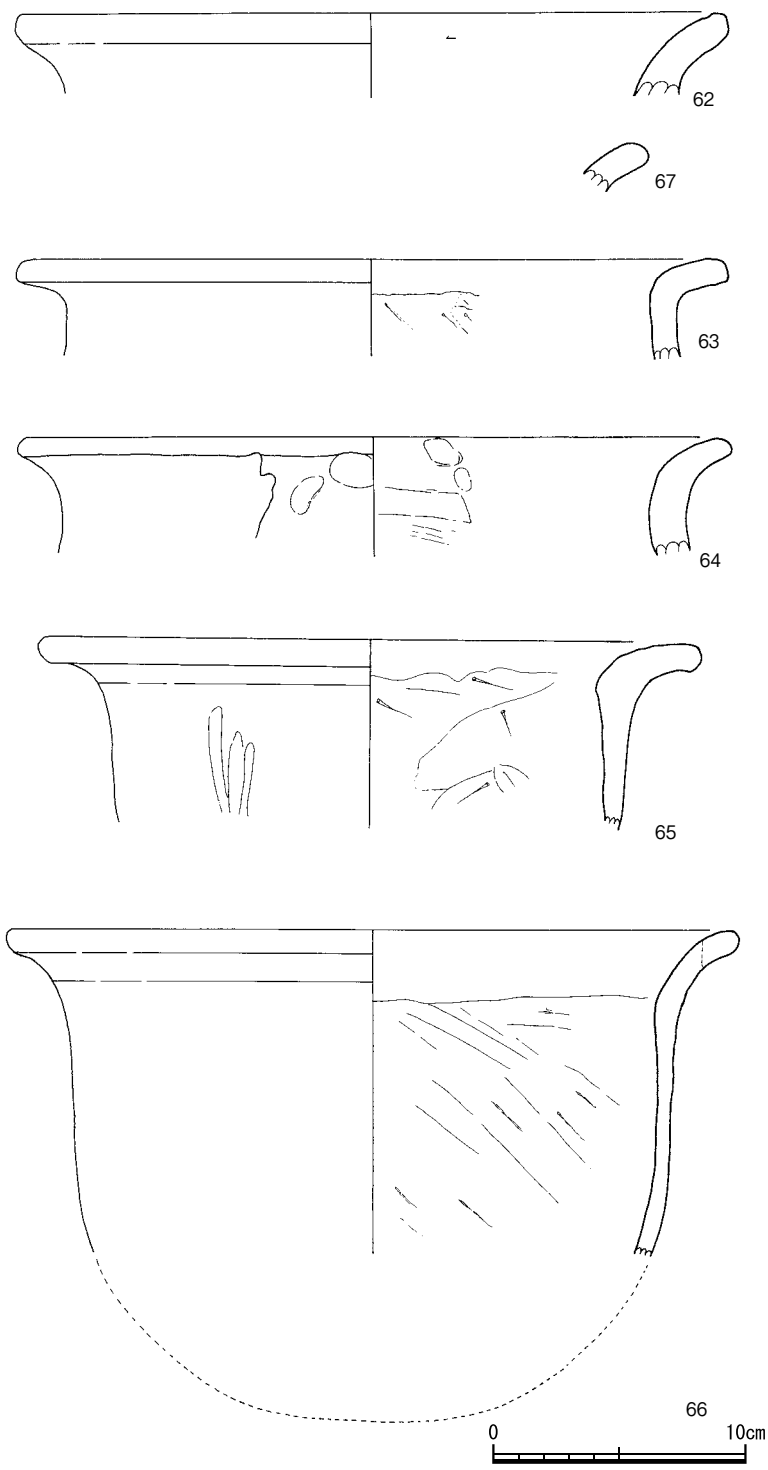
焼土28



焼土28	1	明るい赤色

0 1m

第43図　焼土16,23,24,25,26,27,28



第44図　焼土７内出土遺物

く，底部全体が黒褐色を呈している。10cm足らずの炭化物が１点共伴している。焼土25,26と同様，東西に傾斜する地点にある。

焼土25(第43図)

遺構中央部付近で，約10cmの炭化物を検出している。被熱部は，径15cm程度が赤化しているが大半は黒っぽく浅いレンズ状の断面になる。

焼土26(第43図)

平面形は変則的な楕円形で，平面･断面ともに赤化が強い部分が２か所あるが，検出面の土色とは境界があいまいな状態である。東西に傾斜する地形にあるため，短軸での比高差が20cmある。

焼土27(第43図)

円形の焼土と楕円の焼土で構成する。焼土27－1の埋土は黒色が強く鉄滓が混在し，焼土27－2の被熱部分は北端，南端で赤みが強い。南端では土師甕が３点共伴している。2.5m西側で13号掘立柱建物跡，1.2m南側で焼土28が検出されている。

焼土27出土遺物(第44図)

焼塩壺片4点，土師器甕片５点が出土した。全て細片で，土師器甕は褐色を呈する。

焼土28(第43図)

最大幅0.36m，最短幅0.26m，深さ0.5m，本遺跡では最小の焼土である。他の焼土に比べ赤化部分は明るい色調で，面的に広がるのではなく，点在しているような状況である。2.5m北側に焼土27，3.3m東側で13号掘立柱建物跡が検出されている。

焼土28出土遺物

土師器坏片１点，焼塩壺片４点，土師器甕5点が出土した。土師器坏は浅黄橙色，土師器甕は褐色を呈する。細片のため，図化しなかった。

焼土29出土遺物(第46図)

土師器坏片２点，土師器甕片３点が出土する。

No68は全面に丁寧なナデが認められ，胎土に砂粒を多く含む。No69は小型の土師甕の口縁部で，胎土に礫を多く含む。No70は橙色を呈し胎土に礫を多く含む。胴部中位から下位の部位と思われ，上位には横ハケが，下位には不整方向のハケが認められる。No71は厚手で軟質で，砂粒は少ない。外面には縦ハケが認められる。

(５)遺物集中地点

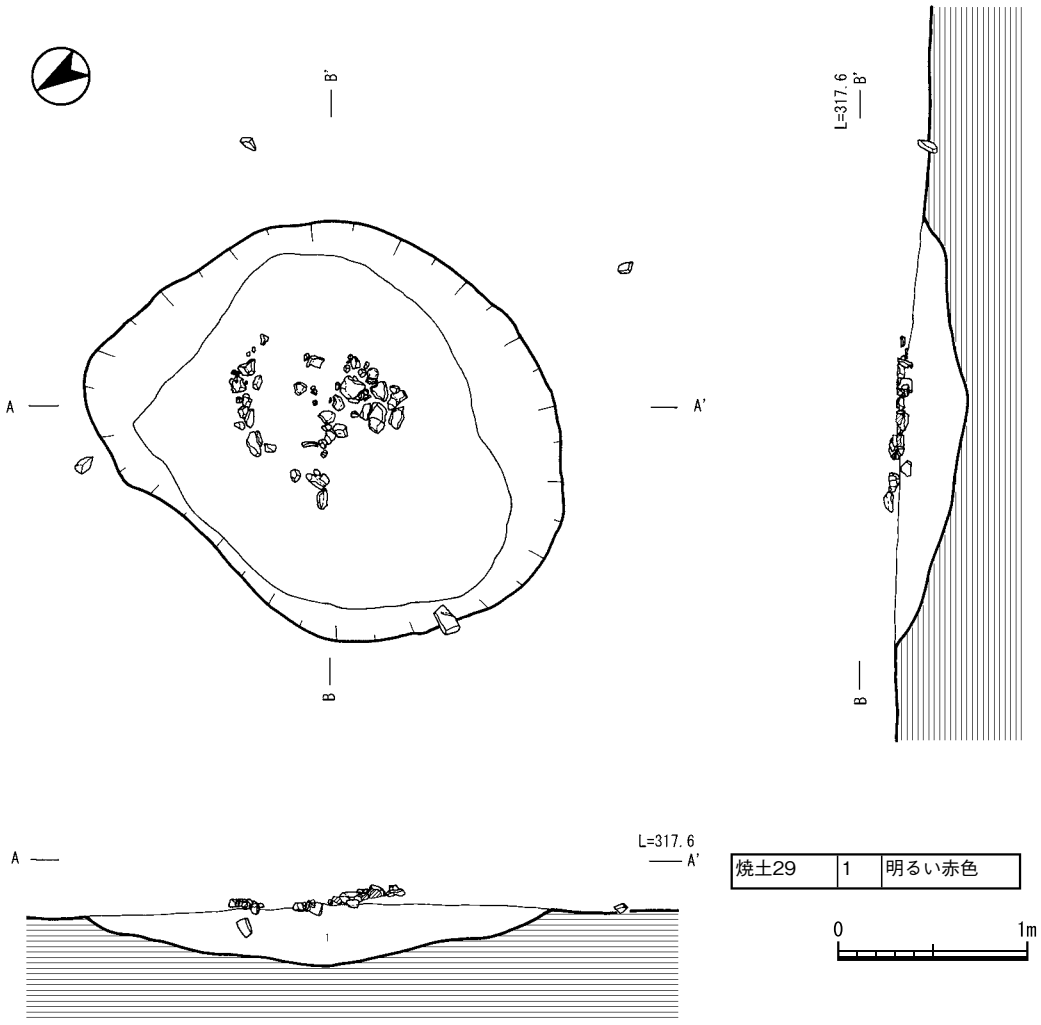
遺物集中地点１(第47図)

集中地点１出土遺物(第48図)

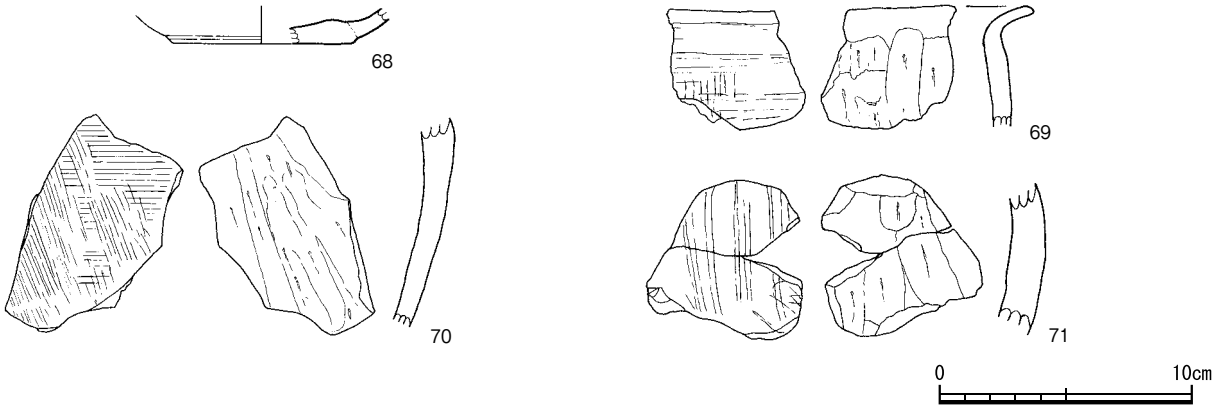
土師器坏片３点，黒色土器片１点，土師器甕片約140点，須恵器甕片１点が出土した。焼塩壺は約5点認められる。

土師器坏は浅黄橙色を呈し軟質である。細片のため図化しなかった。No72は黒色土器の底部で，高台端部は丸くおさめる。

土師器甕は褐色が多い。No73は口縁部に向かってすぼま



第45図　焼土29



第46図　焼土29内出土遺物

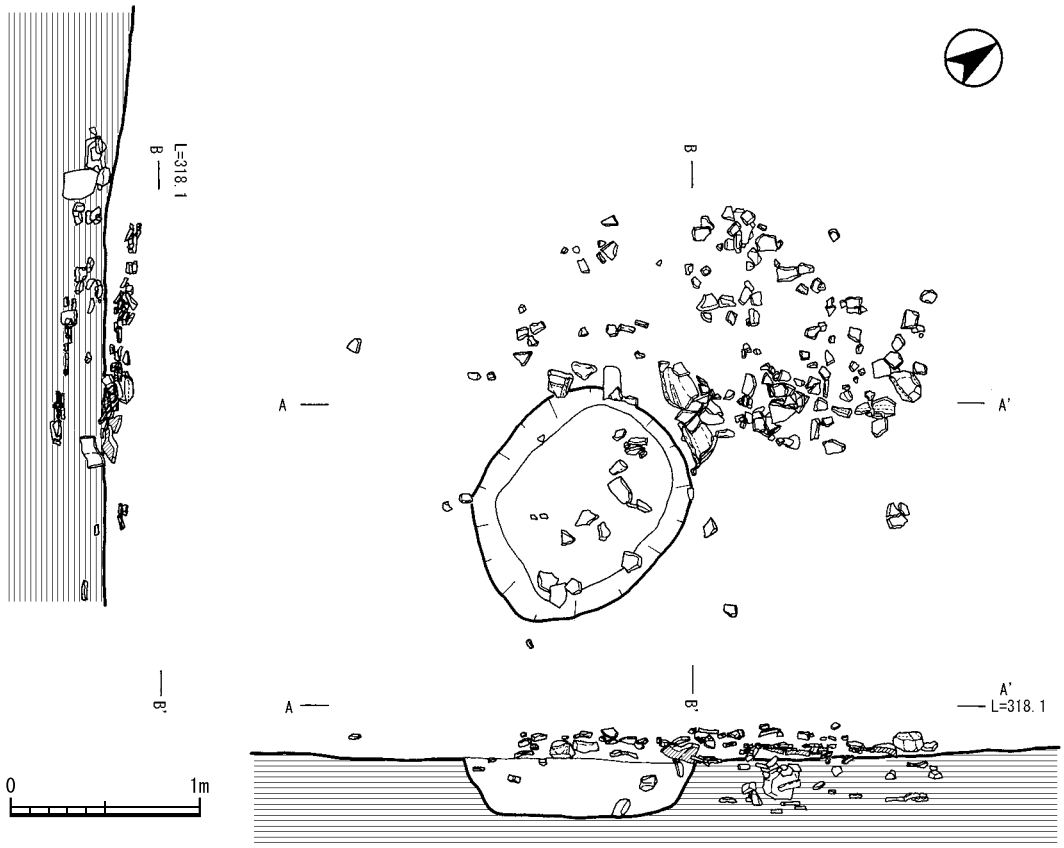
り，褐色を呈する。No74は器壁が薄く，口縁部にむかってゆるやかに外反する。No75は褐色を呈し，器面は脆弱である。No76は口縁端部に面を持ち，外面には縦ハケが認められる。色調は赤褐色を呈し硬質である。No77とNo78は鍋で，浅黄橙色を呈し軟質である。土師器甕は他に浅黄橙色の小型が認められる。口縁部分であるが細片のために図化していない。

No79は須恵器甕片である。I-14区の一括遺物２点と接合関係にある。

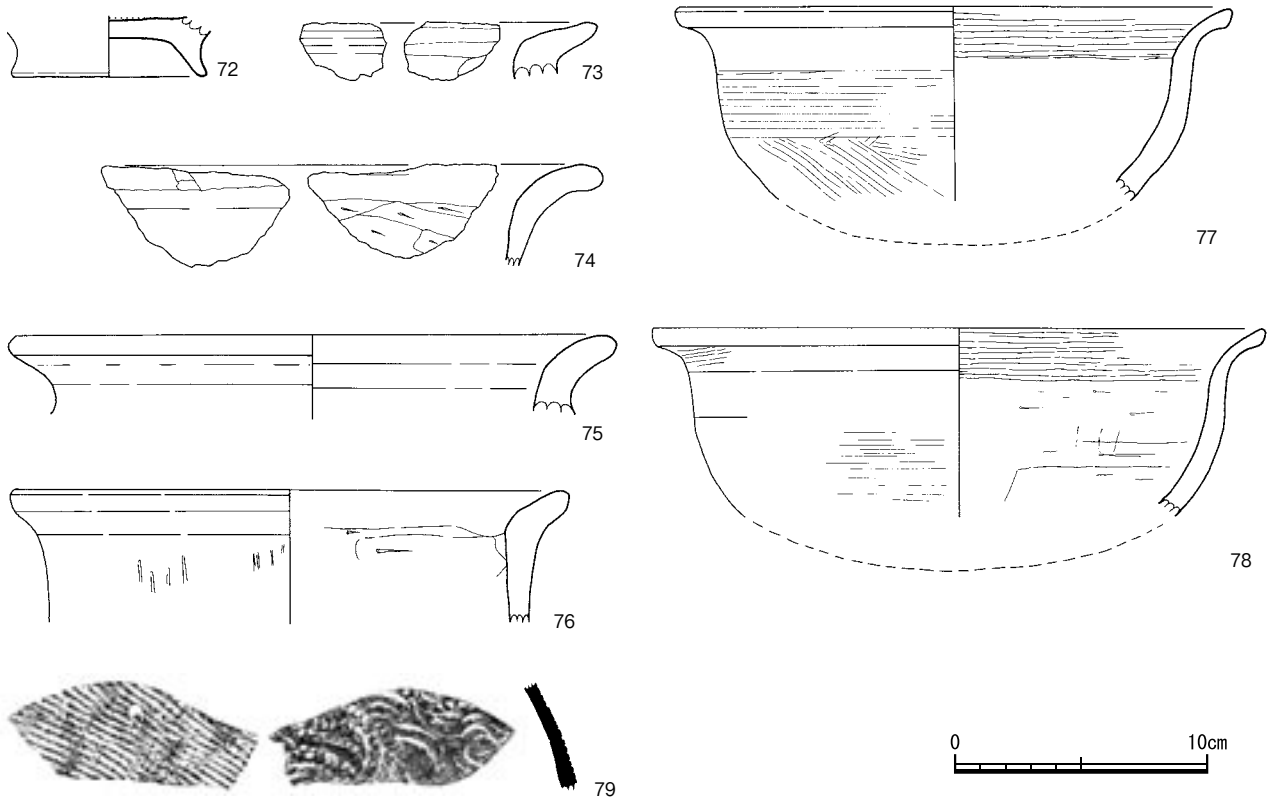
遺物集中地点２(第49図)

遺物集中地点２出土遺物(第50図)

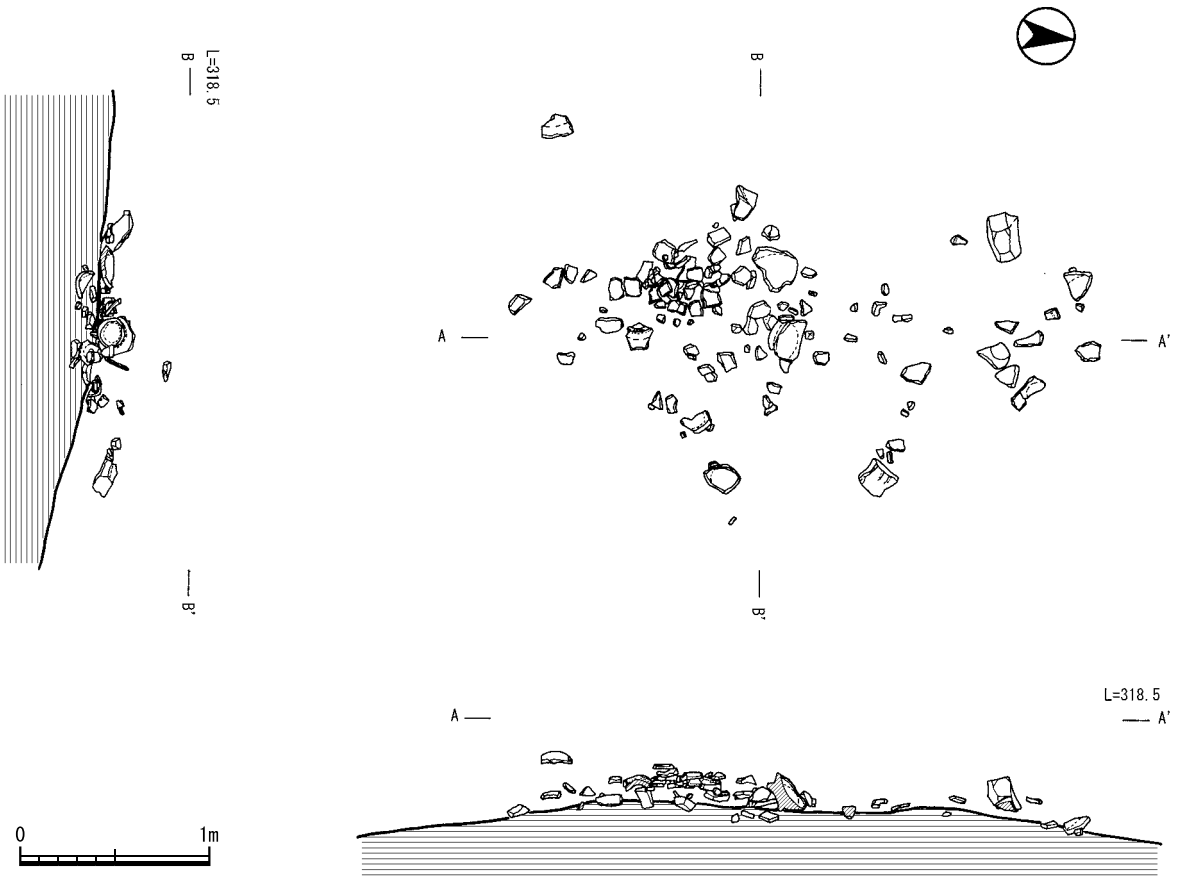
土師器坏片６点，黒色土器片４点，土師器甕片６点，焼塩壺片70点が出土し，焼塩壺の多さが目立ち，焼塩壺の認めら



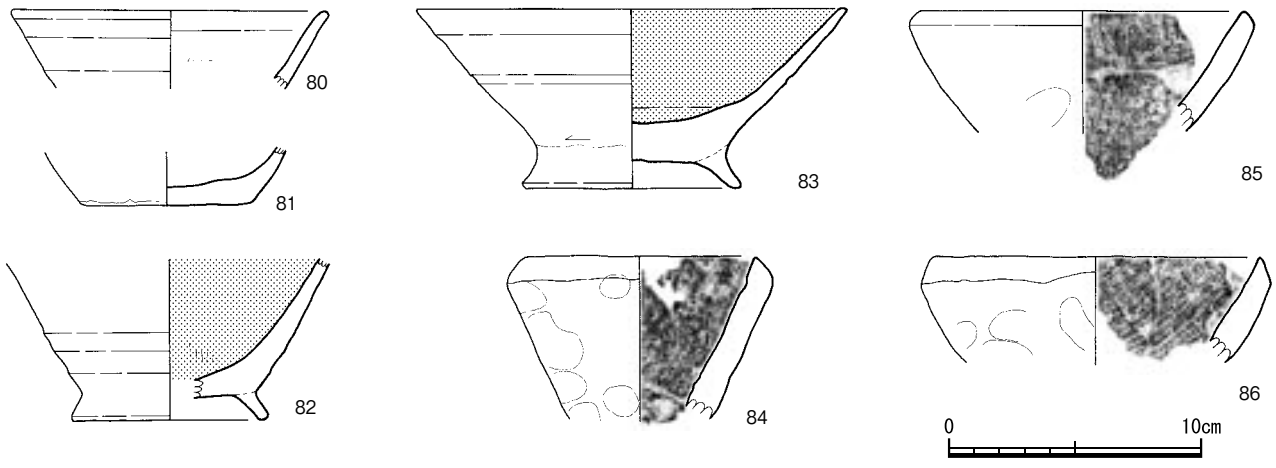
第47図　遺物集中地点１



第48図　遺物集中地点１内出土遺物



第49図　遺物集中地点２



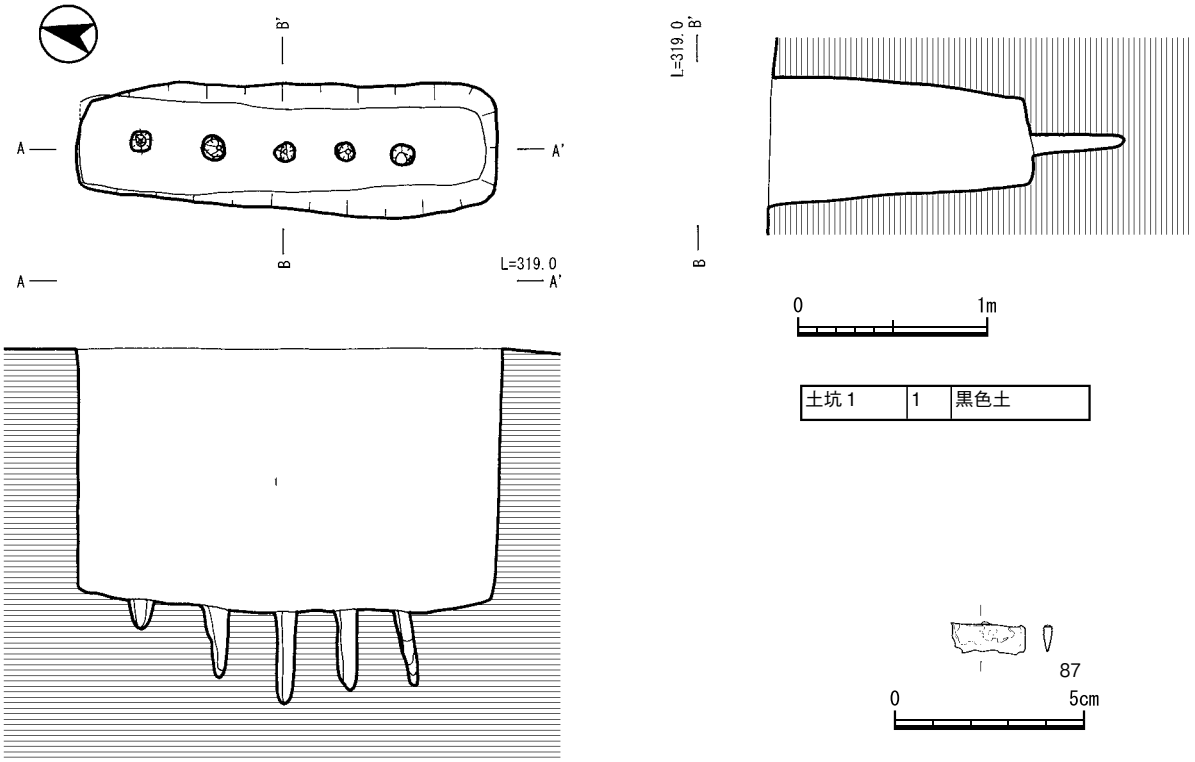
第50図　遺物集中地点２出土遺物

れなかった遺物集中地点１と異なる。

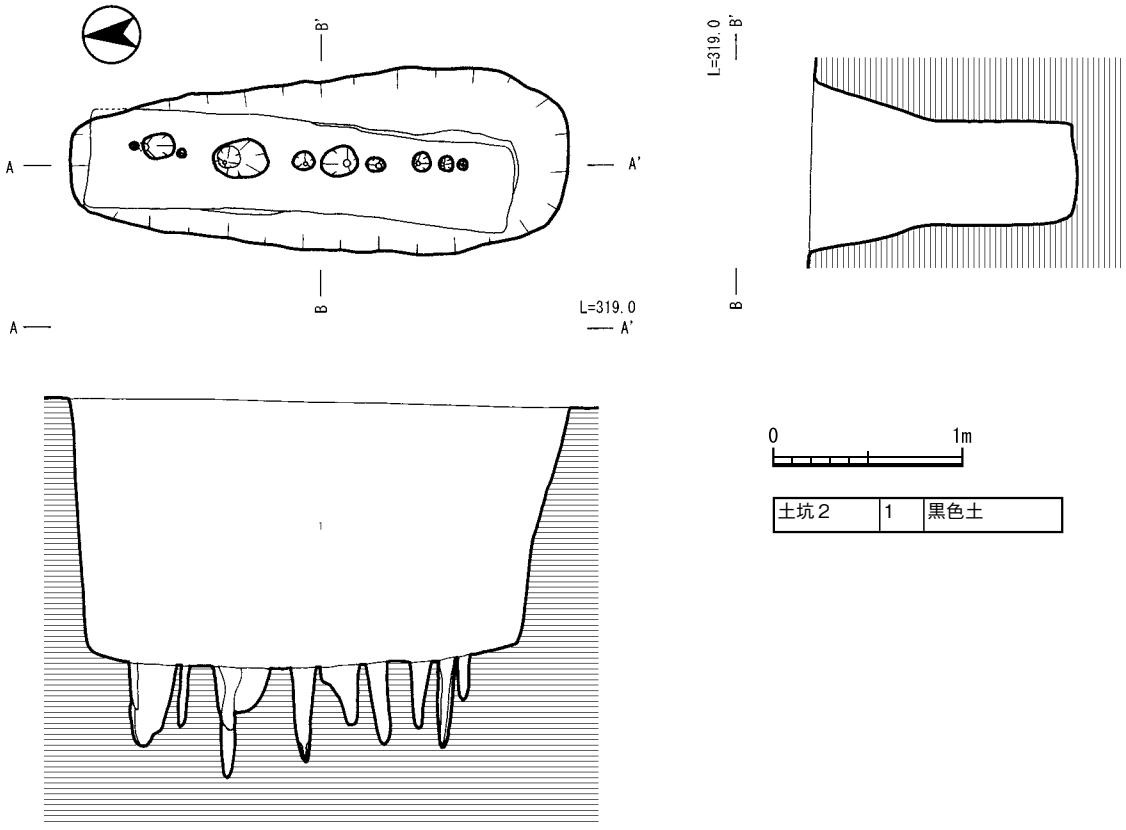
No80は橙色を呈する。No81は土師器坏の底部で，色調は浅黄橙色を呈する。No82とNo83は黒色土器の椀である。体は直線的に立ち上がり，高台は外側に開いている。土師器甕は細片ばかりですべて褐色を呈する。No84～86は焼塩壺である。図化したものの他にも比較的大きな破片は確認できる。

(６)土坑

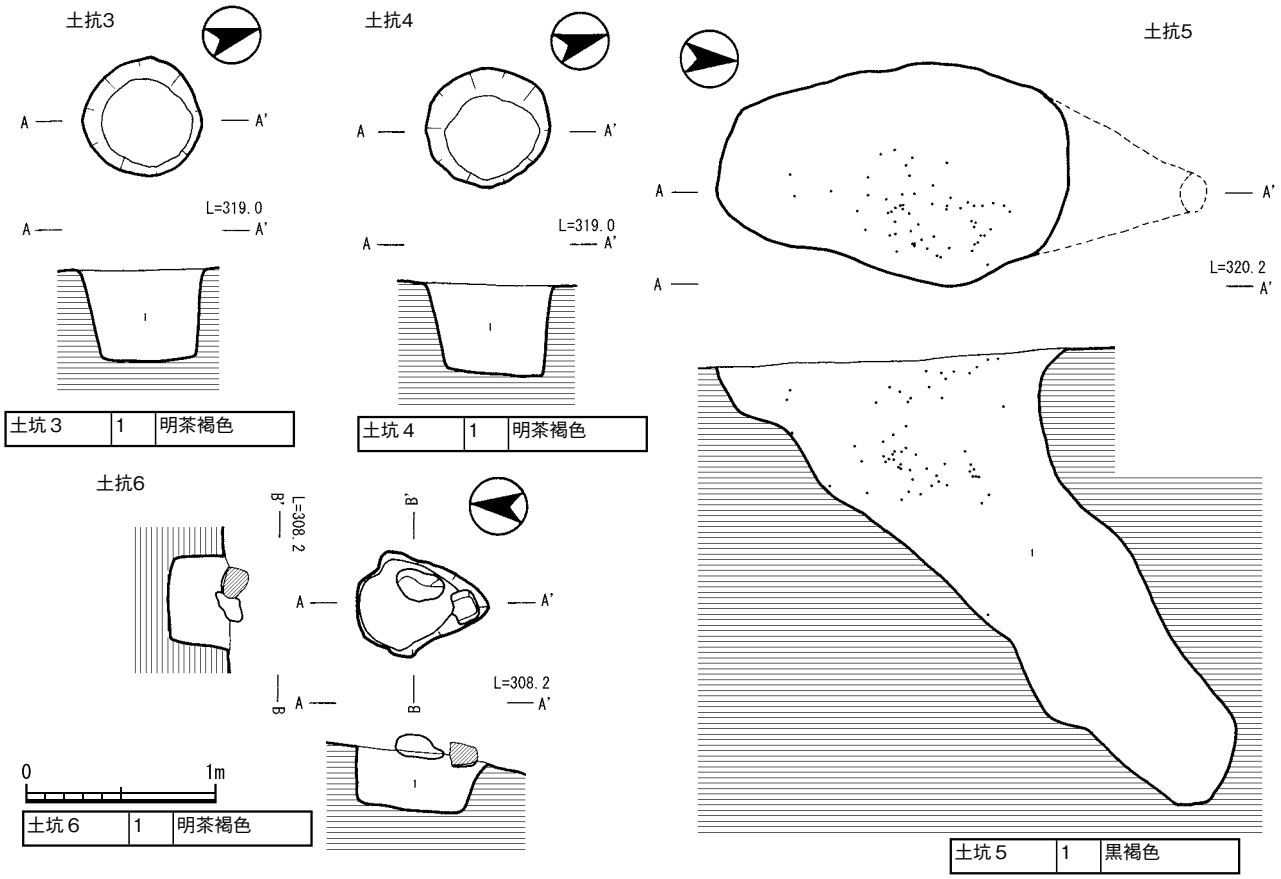
14区を中心に13基検出した。使用状況が異なる土坑１,土坑２を除き，平面形の最大幅を基準にした場合，60cmを超えるもの，88cm前後のもの，それ以上のものの３類に大別できる。150cmを超えるものは４基，その他は土坑数が３,４基で平均している。埋土は土坑１,２が上部に文明ボラ下部にⅢ層黒色土，土坑３～13はⅢ層とⅣa層が混在した単一の明茶褐色土である。土坑１,２を除いて，平面形，深さ



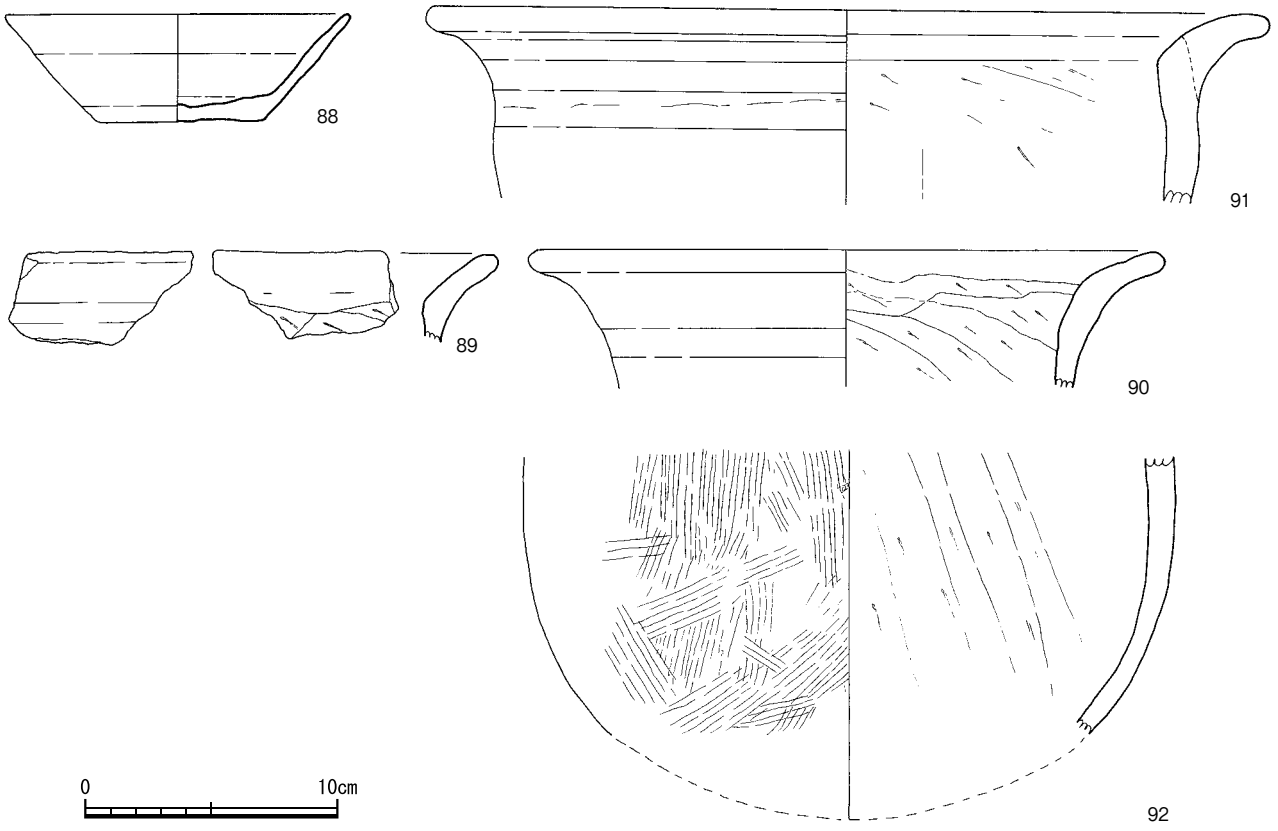
第51図　土抗１及び土抗１出土遺物



第52図　土抗２

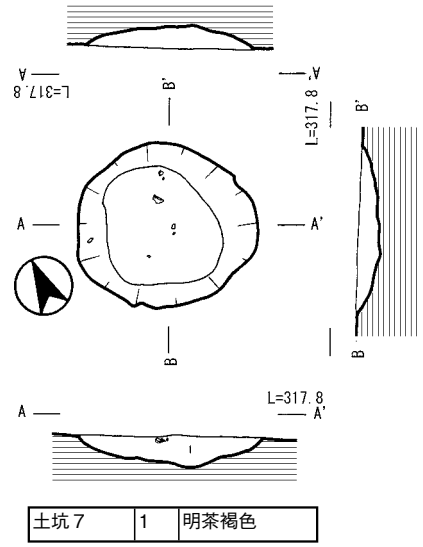


第53図　土坑３,４,５,６



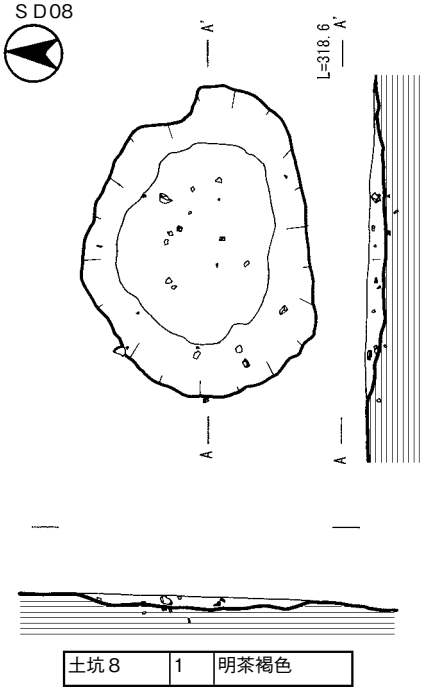
第54図　土坑５内出土遺物

SD07



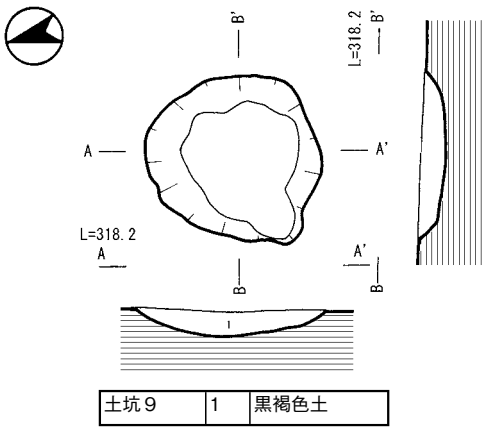
土坑7	1	明茶褐色

SD08



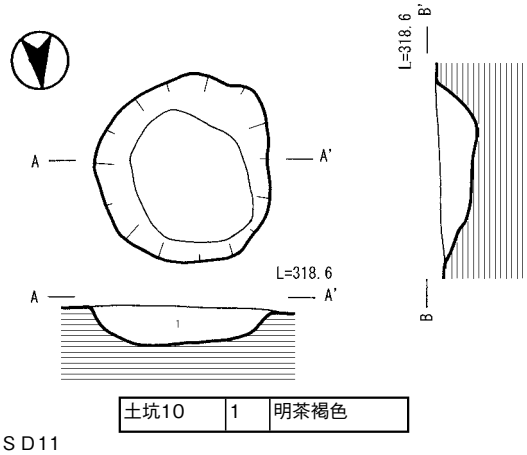
土坑8	1	明茶褐色

SD09



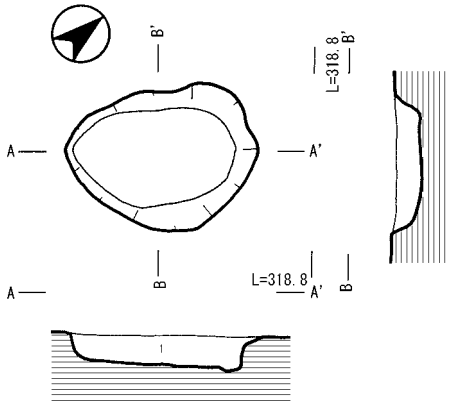
土坑9	1	黒褐色土

SaD10



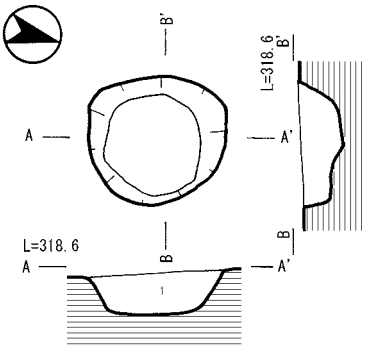
土坑10	1	明茶褐色

SD11



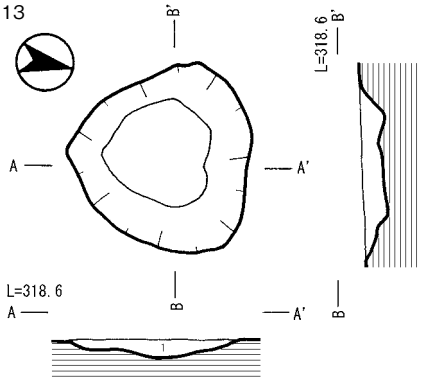
土坑11	1	明茶褐色

SD12

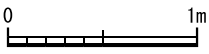


土坑12	1	明茶褐色

SD13



土坑13	1	明茶褐色



第55図　土抗７,８,９,10,11,12,13

は小規模である。全土坑の計測値の平均は最大幅1.22m，最短幅は0.84m，深さ0.58mである。

土坑１(第51図)

土坑２と南北に縦列の状態で検出した。形状は隅丸長方形竪穴である。最大幅2.22m，最短幅0.71m，底部までの深さは1.39mである。Ⅲ層（黒色土）で検出され，埋土は上部に文明軽石(P-3)が50cm前後あり，以降底部まではⅢ層相当の黒色土であった。文明軽石を除去した時点での土坑底部と検出面の土層が同じⅢ層であったため，当初，近年の畑作等による耕作痕と判断しⅢ層（検出面）の掘削を継続した。しかし，Ⅳa層上面での観察の結果，Ⅲ層を埋土とする隅丸長方形の平面形を検出したため精査を行い，ほぼ垂直に掘り込まれ，平坦な底面をもつことが判明した。なお，この検出状況は土坑２も同じである。

底面には５本の逆茂木痕があり，3本で腐食した樹皮とみられる白く粘質化した部分を確認した。逆茂木痕の最も深いものは48cm，最も浅いものは15cmで，平均の深さは36.4cmで，先端部が鋭角となる。平面の形状・規模が類似する土坑２と南北に縦列した状態で検出されている。

土抗１出土遺物

土師器坏６点，黒色土器１点，須恵器坏１点，土師器甕22点，焼塩壺２点，鉄製品として刀子片が1点(No87)出土している。須恵器坏は軟質で外面に若干釉が認められ，土師器甕はすべて褐色を呈する。

土坑２(第52図)

形状は隅丸長方形で最大幅2.62m，最短幅1.01m，底部までの深さは1.43mで検出土坑中，最大である。Ⅲ層（黒色土）で検出し，埋土は上部に文明軽石，以降底部まではⅢ層の黒色土である。調査時の状況は土坑１と同様である。

底部には９本の逆茂木痕があり，うち４本で腐食した樹皮が確認できた。逆茂木痕の最も深いものは59cm，最も浅いものは23cmで，平均の深さは40.7cmである。形状は先端部が鋭角になる。

東側は堀立柱建物の集中区をはじめ遺物量も最多のエリアである。

土坑３及び土坑４(第53図)

G,H-15区，Ⅳa層で検出し，平面形は円形で掘り込みはバケツ状である。土坑３,４が1.3m離れて並列した状態で，共伴遺物は無い。

土坑５(第53図)

I-14区，Ⅳa層上面で検出した。埋土はⅢ，Ⅳa層が混在した暗黒褐色土で，２～３mmの黄白色パミスが全体にみられる。平面は楕円形でレンズ状の掘り込みを持ち，全土坑中最多の遺物量（60点）は全てこの部分で出土している。

土坑の底面付近で，粘質の弱いさらさらした埋土を確認したが，人力による掘削の範囲を超えたため遺構全体を重機により半截した。その結果，土坑は樹痕と重なることが明らかになり，土坑は樹痕上に掘り込まれたと判断した。土坑の平面の最大幅1.85m，最短幅1.18m，最深部0.82mである。

土抗５出土遺物(第54図)

土師器坏４点，土師器甕30点，焼塩壺２点，紡錘車片１点，鉄滓２点が出土している。

No88は橙色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。土師器甕は浅黄橙色が２点認められる他はすべて褐色である。No89は全体的に器壁が薄い。No90は胎土に角閃石を多く含む。No91は口縁部の器壁が厚く，外面には黒斑が認められる。No92は胴部から底部で，底部に向かって器壁は薄くなり，外面にはハケが認められる。

土坑６(第53図)

J-５区，Ⅳa層上面で検出し，検出面で15～25cmの大きめの軽石が２点並んで共伴している。軽石１は火を受け赤く変色し，破砕している。軽石２は一部が火を受け赤く変色しているが大部分は白色である。風化しているが破砕はみられない。

土坑７(第55図)

K-12区，Ⅳa層上面で検出し，埋土の全体に大豆くらいの炭化物を含む。埋土内に土師器，焼塩壺が含まれる。

土坑８(第55図)

I-14区，Ⅳa層上面で検出し，浅いが遺構内遺物が26点出土している。出土位置は遺構全体に点在している。

土坑９(第55図)

I-14区，Ⅳa層上面で検出し，平面形は楕円形で断面は浅い。埋土はⅢ，Ⅳa層が混在し，Ⅳb層がまばらに混ざる黒褐色土に，炭化物を多く含んでいる。

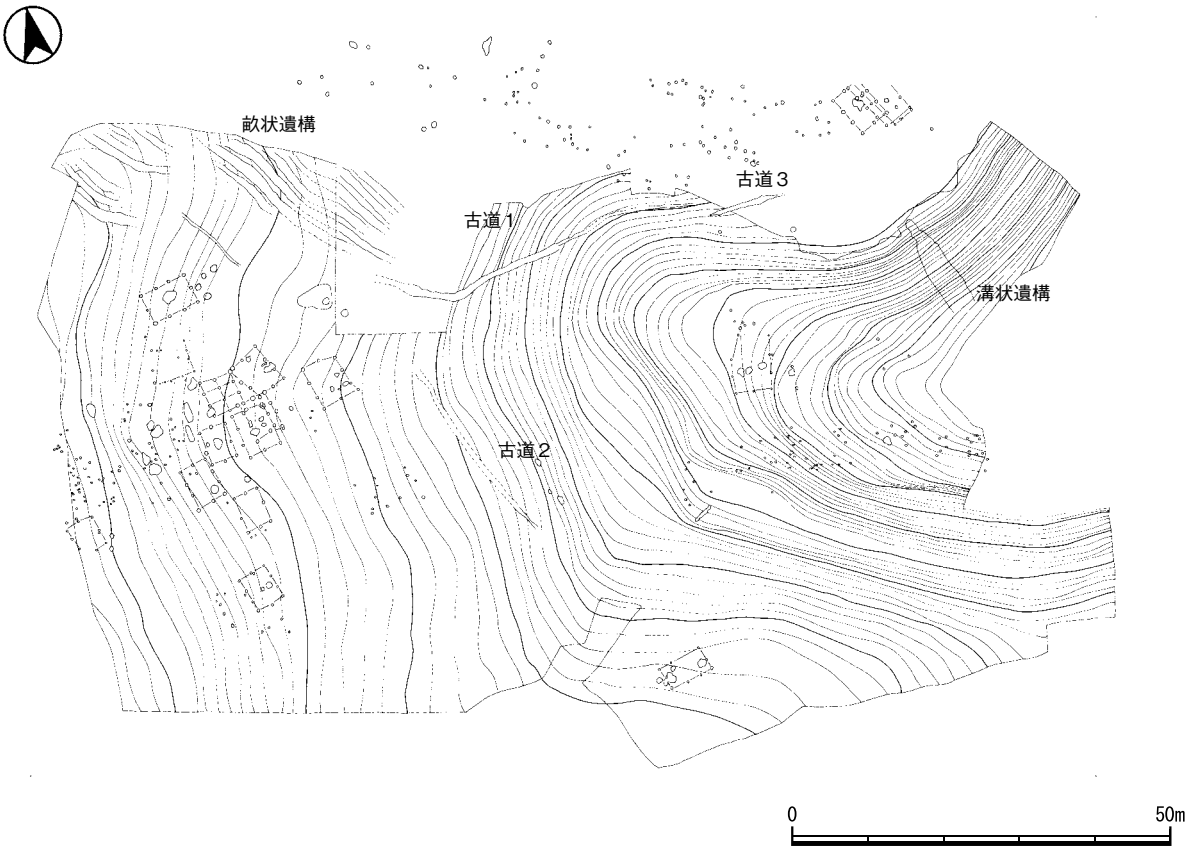
土坑10～13（第55図）

K-14区，Ⅳb層で４基がL字状に並んで検出した。埋土はⅢ,Ⅳa層混在の明茶褐色土，掘り込みは浅く４基の平均の深さは17.75cmである。10号掘立柱建物跡から５m以内の位置であるが共伴遺物は確認されていない。その他，形状に明確な規格・共通性は多くみられない。

(７)古道

古道１(第56図)

調査区の北側で確認した。K-12区からL-8区にかけて横断し，東端は削平により消滅している。検出面はⅣa層であるが，L-8区付近は削平のためにⅣb層で確認した。現存長約50m，削平されていない部分で道幅約0.88m,深さ約0.1mを測る。埋土は，Ⅳa層混じりの黄褐色で掘立柱建物跡の埋土に共通し，床面は硬化面となる。



第56図　古道及び溝状遺構及び畝状遺構配置図

地形的には西から緩傾斜面を通り，L-8区付近から傾斜がつよくなるために縁辺部を通る。この古道1は，M-6区付近の掘立柱建物群とI-14付近の掘立柱建物群を結ぶ役割が推測され，また，おおよその方位が掘立柱建物跡と軸を合わせている。

古道２(第56図)

I, J -11区とH-10区に部分的に残存する。両者を結ぶと，I-14付近の掘立柱建物群と12号掘立柱建物をつなぐ道として推測される。現状で長さ約25m，道幅約0.35m，深さ0.03mを測る。なお，この古道２も古道１と同様に掘立柱建物群と軸を合わせている。

古道３(第56図)

古道１の東端で確認した。現状で，長さ10mを測る。現存長が短いためにどの方向に延びていたか断定できないが，古道１よりも若干南側の谷部側に傾いていることから，13号掘立柱建物跡の方に延びていた可能性も推測される。

(８)溝状遺構(第56図)

L-5区からK-4区で確認した。急傾斜面に直行し，上端はすぼまり，下端はそのまま消滅する。現状で長さ15m，最大幅約0.59m，深さ0.05mを測り浅い。この溝状遺構も掘立柱建物群と軸を合わせている。なお，硬化面は認められなかった。

(９)畝状遺構(第56図)

遺跡の北西部で検出し，10数条の畝が認められる。畝幅は平均80cmと広く，深さは約３cmでほとんど高低差が認められない。畝軸は，掘立柱建物や古道などとは若干ずれる。検出面はⅣa層上面で，埋土にはⅢ層が混ざる。

第３表　１号掘立柱建物跡観察表

２×３	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)		桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P6-P5	247	429	P6-P7	127	285	1	51	34	33	円	14.34	
P5-P4	182		P7-P8	158		2	19	49	29	楕円		
P8-P3	350	510	P4-P3	204	377	3	19	34	29	円		
P1-P2	160		P3-P2	173	331	4	25	34	33	円		
						5	27	27	25	円		
						6	36	29	28	円		
						7	63	37	25	円		
						8	46	28	27	円		
平均	235	470		166	331		36	34	29			

第４表　２号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-14-W	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P8-P7	182	372	P8-P9	183	557	1	87	47	43	円	20.60	軽石集積５が共伴する
P7-P6	190		P9-P10	156		2	84	50	47	楕円		
P9-P5	375		P10-P1	218		3	50	46	45	円		
P10-P4	393		P6-P5	178	517	4	62	37	33	楕円		
P1-P2	235	405	P5-P4	167		5	82	50	43	円		
P2-P3	170		P4-P3	172		6	78	29	26	円		
						7	54	38	36	円		
						8	75	35	33	円		
						9	70	43	36	楕円		
						10	61	39	37	円		
平均	256	389		179	537		70	41	38			

第５表　３号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-11-W	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P3-P2	157	327	P3-P4	260	472	1	64	37	35	円	15.33	焼土８が隣接する
P2-P1	170		P4-P5	212		2	32	37	36	円		
P4-P8	348	348	P1-P8	205	489	3	53	34	32	円		
P5-P6	168	332	P8-P7	284		4	35	38	32	楕円		
P6-P7	164					5	56	33	31	円		
						6	32	37	33	楕円		
						7	49	28	33	楕円		
						8	41	34	32	円		
平均	201	336		240	481		45	35	33			

第６表　４号掘立柱建物跡観察表

2間×２間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-5-W	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P7-P6	172	381	P7-P8	270	445	1	45	33	31	円	14.82	焼土１を共伴する
P6-P5	179		P8-P1	175		2	63	37	35	円		
P8-P4	349	349	P5-P4	244	491	3	40	39	33	楕円		
P1-P2	177	335	P4-P3	247		4	43	30	30	円		
P2-P3	158					5	55	35	33	円		
	207					6	48	38	36	円		
						7	61	37	32	楕円		
						8	53	61	51	楕円		
平均	207	355		234	468		51	39	35			

第７表　５号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-8-W	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P3-P2	218	422	P3-P4	241	568	1	65	35	33	円	22.64	掘立柱建物6号と切り合い，焼土2～5を共伴する
P2-P1	204		P4-P5	174		2	47	39	35	円		
P4-P10	463	463	P5-P6	153		3	58	44	38	楕円		
P5-P9	435	435	P1-P10	188	594	4	75	38	37	円		
P6-P7	203	455	P10-P9	222		5	65	38	35	円		
P7-P8	252		P9-P8	184		6	81	58	51	楕円		
						7	67	60	39	楕円		
						8	56	48	42	楕円		
						9	65	43	37	楕円		
						10	55	32	31	円		
平均	296	444		194	581		63	44	38			

第８表　６号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-8-W	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P3-P2	218	422	P3-P4	241	568	1	65	35	33	円	22.64	掘立柱建物6号と切り合い，焼土2～5を共伴する
P2-P1	204		P4-P5	174		2	47	39	35	円		
P4-P10	463	463	P5-P6	153		3	58	44	38	楕円		
P5-P9	435	435	P1-P10	188	594	4	75	38	37	円		
P6-P7	203	455	P10-P9	222		5	65	38	35	円		
P7-P8	252		P9-P8	184		6	81	58	51	楕円		
						7	67	60	39	楕円		
						8	56	48	42	楕円		
						9	65	43	37	楕円		
						10	55	32	31	円		
平均	296	444		194	581		63	44	38			

第９表　７号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-10-W	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P2-P1	205	401	P2-P3	162	496	1	28	31	26	楕円	18.24	掘立柱建物6･8号と切り合い，軽石集積４を共伴する。総柱を２本持つ。
P1-10	196		P3-P4	157		2	55	44	40	円		
P3-P11	207	420	P4-P5	177		3	74	37	34	円		
P11-P9	213		P10-P9	142	465	4	48	40	39	円		
P4-P12	200	417	P9-P8	167		5	62	70	52	楕円		
P12-P8	217		P8-P7	156		6	33	37	31	楕円		
P5-P6	215	413				7	55	34	32	楕円		
P6-P7	198					8	46	37	35	円		
						9	66	37	35	楕円		
						10	64	28	27	円		
						11	35	35	34	円		
						12	32	35	34	円		
平均	206	413		160	481		50	39	35			

第10表　８号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-27-W	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P8-P7	172	415	P8-P9	200	517	1	29	40	39	円	22.28	堀立柱6･7と切り合い，焼土6･8を共伴する。
P7-P6	243		P9-P10	147		2	36	39	37	円		
P9-P5	423	423	P10-P1	170		3	60	33	27	楕円		
P10-P4	387	387	P6-P5	220	575	4	54	39	38	円		
P1-P2	207	385	P5-P4	175		5	29	46	38	楕円		
P2-P3	178		P4-P3	180		6	34	34	33	円		
						7	60	37	33	円		
						8	62	60	51	楕円		
						9	54	40	38	円		
						10	38	40	37	円		
平均	268	403		182	546		46	41	37			

第11表　９号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-16-W	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
P6-P5	228	488	P6-P7	134	529	1	42	46	40	楕円	25.37	焼土9～12を共伴する。
P5-P4	260		P7-P8	212		2	48	41	36	楕円		
P7-P3	455	455	P8-P9	183		3	42	49	39	楕円		
P8-P2	462	462	P4-P3	113	580	4	35	41	39	楕円		
P9-P10	205	448	P3-P2	270		5	14	36	33	楕円		
P10-P1	243		P2-P1	197		6	20	34	27	楕円		
						7	31	43	41	楕円		
						8	28	39	33	楕円		
						9	24	46	44	楕円		
						10	34	44	33	楕円		
平均	309	463		184	555		32	42	37			

第12表　10号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間(cm)	梁間間(cm)	N-75-E	桁行柱間(cm)	桁行間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方	床面積(㎡)	備考
P6-P5	244	447	P6-P7	201	609	1	115	55	52	楕円	24.57	軽石集積6を共伴する。
P5-P4	203		P7-P8	187		2	66	39	33	楕円		
P7-P3	422	422	P8-P9	221		3	84	57	49	楕円		
P8-P2	403	403	P4-P3	207	622	4	81	36	29	楕円		
P9-P10	211	391	P3-P2	209		5	120	40	38	楕円		
P10-P1	180		P2-P1	216		6	83	40	35	楕円		
						7	116	42	36	楕円		
						8	75	32	31	円		
						9	120	46	38	楕円		
						10	87	28	23	楕円		
平均	277	416		207	616		95	42	36			

第13表　11号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間(cm)	梁間間(cm)	N-18-W	桁行柱間(cm)	桁行間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方	床面積(㎡)	備考
P7-P5	183	376	P7-P8	165	459	1	47	29	26	円	17.07	焼土13を共伴する。
P5-P1	193		P8-P9	154		2	57	31	29	円		
P8-P2	380	380	P9-P10	140		3	52	31	30	円		
P9-P3	375	375	P1-P2	162	466	4	53	34	28	楕円		
P10-P6	196	375	P2-P3	162		5	25	29	27	円		
P6-P4	179		P3-P4	142		6	74	32	31	円		
						7	72	33	29	楕円		
						8	53	29	27	円		
						9	91	31	29	楕円		
						10	84	31	29	円		
平均	251	377		154	463		61	31	29			

第14表　12号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間(cm)	梁間間(cm)	N-75-E	桁行柱間(cm)	桁行間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方	床面積(㎡)	備考
P1-P9	182	116	P1-P2	227	589	1	92	40	35	楕円	18.00	焼土14･15･17を共伴し，16が隣接する。
P9-P8	110		P2-P3	193		2	50	25	19	楕円		
P2-P7	334	134	P3-P4	169		3	31	25	24	円		
P3-？			P8-P7	175	584	4	62	29	29	円		
P4-P5	128	305	P7-P6	409		5	55	29	24	楕円		
P5-P6	177					6	51	31	29	円		
						7	38	25	24	円		
						8	62	31	30	円		
						9	89	25	24	円		
平均	186	185		235	587		59	29	26			

第15表　13号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間(cm)	梁間間(cm)	N-10-E	桁行柱間(cm)	桁行間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方	床面積(㎡)	備考
P1-P9	393	393	P1-P2	339	781	1	76	28	26	円	31.44	焼土18～20を共伴する。
P2-P8	495	495	P2-P3	217		2	56	32	25	楕円		
P3-P7	512	512	P3-P4	225		3	68	24	24	円		
P4-P5	237	473	P9-P8	259	698	4	49	22	20	円		
P5-P6	236		P8-P7	232		5	34	16	15	円		
			P7-P6	207		6	11	16	12	円		
						7	37	22	18	円		
						8	30	24	21	楕円		
						9	39	17	14	円		
平均	375	468		247	740		44	22	19			

第16表　14号掘立柱建物跡観察表

2間×3間	梁間柱間(cm)	梁間間(cm)	N-28-W	桁行柱間(cm)	桁行間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方	床面積(㎡)	備考
P7-P6	208	418	P7-P8	197	371	1	54	42	40	楕円	24.02	掘立柱建物15･16と切り合い，焼土21を共伴する。
P6-P5	210		P8-P9	174		2	72	40	29	楕円		
P8-P4	410	410	P5-P4	188	466	3	51	52	42	楕円		
P9-P3	415	415	P4-P3	181		4	51	54	50	楕円		
P1-P2	192		P3-P2	197		5	57	51	41	楕円		
						6	38	48	42	楕円		
						7	62	51	34	楕円		
						8	52	55	42	楕円		
						9	86	49	45	楕円		
平均	287	414		187	419		58	49	41			

第17表　15号掘立柱建物跡観察表

2間×4間	梁間柱間(cm)	梁間間(cm)	N-30-W	桁行柱間(cm)	桁行間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方	床面積(㎡)	備考
P6-P5	157	287	P4-P3	190	560	1	41	65	28	変則的	16.39+a	掘立柱建物14･16と切り合い，焼土21を共伴する。
P5-P4	(130)		P3-P2	212		2	39	35	32	円		
			P2-P1	158		3	22	40	35	円		
						4	19	32	23	楕円		
						5	21	34	26	楕円		
						6	39	35	33	楕円		
平均	144			187			30	40	30			

第18表　16号掘立柱建物跡観察表

2間×4間	梁間柱間(cm)	梁間間(cm)	N-30-W	桁行柱間(cm)	桁行間(cm)	Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方	床面積(㎡)	備考
P5-P6	378		P5-P4	160	693	1	48	31	29	円	26.34+a	掘立柱建物14･15と切り合い，焼土21を共伴する。
P7-P4	417		P4-P3	178		2	56	57	51	楕円		
			P3-P2	175		3	80	38	33	円		
			P2-P1	180		4	73	42	35	円		
						5	18	39	36	円		
						6	23	44	32	楕円		
						7	74	35	33	円		
平均	398			173			53	41	36			

第19表　軽石集積観察表

挿図No	遺構No	検出区/層	最大長(m)	最短長(m)	礫数	石材	備考
36	軽石集積1	I-15/Ⅳa上	2.11	1.49	163	軽石	
37	軽石集積2	H･I-15/Ⅳa上	1.64	0.80	56	〃	
39	軽石集積3	J-14/Ⅳa上	1.69	1.22	80	〃	焼土9と共伴
41	軽石集積4	I-14/Ⅳa上	1.49	1.30	60	〃	掘立柱建物2と共伴
28	軽石集積5	H-14/Ⅳa上	0.36	0.27	8	〃	掘立柱建物10と共伴
	軽石集積6	K-16/Ⅳa上				〃	掘立柱建物10と共伴
42	集石1	I-5/Ⅳa	1.10	0.77	16	砂岩	

第20表　焼土観察表(1)

挿図番号	遺構番号	検出区/層	最大幅(m)	最短幅(m)	焼成深度(m)	備考
18	焼土1	I-14/Ⅳa上	1.54	1.15	0.18	掘立柱建物4内
20	焼土2	I-13･14/Ⅳa上	0.92	0.72	0.11	掘立柱建物6内
	焼土3	I-13･14/Ⅳa上	0.70	0.45	0.03	掘立柱建物6内
	焼土4	I-13/Ⅳa上	0.68	0.51	0.01	掘立柱建物6内
	焼土5	I-14/Ⅳa上	1.29	0.92	0.16	掘立柱建物5内
25	焼土6	J-14/Ⅳa上	0.79	0.70	0.05	掘立柱建物8内
	焼土7	J-13/Ⅳa上	0.74	0.36	0.12	堀立柱建物８内
	焼土8	J-13/Ⅳa上	1.55	1.16	0.14	掘立柱建物8内
26	焼土9	J-12･13/Ⅳa上	0.64	0.46	0.09	掘立柱建物9号に近接
	焼土10	J-13/Ⅳa上	0.75	0.50	0.08	掘立柱建物9内
	焼土11	J-12/Ⅳa上	0.36	0.33	0.04	掘立柱建物9内
	焼土12	J-12/Ⅳa上	0.91	0.58	0.06	掘立柱建物9内
30	焼土13	G-13/Ⅳa上	1.16	0.96	0.23	掘立柱建物11内
31	焼土14	F-8/Ⅳa上	1.25	1.16	0.16	掘立柱建物12内
	焼土15	F-8/Ⅳa上	0.89	0.81	0.13	掘立柱建物12号
31	焼土16	F-8/Ⅳa上	0.66	0.75	0.13	掘立柱建物12内
31	焼土17	F-8/Ⅳb	1.63	1.47	0.18	掘立柱建物12内
32	焼土18	J-7/Ⅳa上	1.14	0.89	0.20	掘立柱建物13内
	焼土19	J-7/Ⅳa上	0.98	0.80	0.21	掘立柱建物13内

第21表　焼土観察表(２)

挿図番号	遺構番号	検出区/層	最大幅(m)	最短幅(m)	焼成深度(m)	備考
32	焼土20	J-7/Ⅳa上	1.22	0.90	0.25	掘立柱建物13内
34	焼土21	M-6/Ⅳb	1.50	1.31	0.12	掘立柱建物14内
35	焼土22	M-5/Ⅳb	0.73	0.60	0.13	掘立柱建物16内
43	焼土23	H-14/Ⅳa上	1.00	0.82	0.02	単独
	焼土24	I-10/Ⅳa上	1.16	0.67	0.12	単独
	焼土25	H-10/Ⅳb	0.69	0.41	0.05	単独
	焼土26	H-10/Ⅳb	1.36	0.71	0.10	単独
	焼土27	J-6･7/Ⅳa上	1.44	0.80	0.13	単独
	焼土28	J-6/Ⅳa上	0.36	0.26	0.05	単独
	平均		1.00	0.76	0.12	
	最大値		1.63	1.47	0.25	
	最小値		0.36	0.26	0.01	

第22表　土抗観察表(１)

挿図No	遺構No	検出区/層	最大幅(m)	最短幅(m)	最深部(m)	備考
52	土坑1	I-14/Ⅳa上	2.22	0.71	1.39	
	土坑2	I-14/Ⅳa上	2.62	1.01	1.43	
53	土坑3	G･H-15/Ⅳa上	0.64	0.63	0.48	4と形状が類似
	土坑4	H-15/Ⅳa上	0.65	0.64	0.45	3と形状が類似
	土坑5	I-16/Ⅳb上層	1.85	1.18	2.40	樹痕を掘り込む
	土坑6	J-5/Ⅳb上層	0.69	0.54	0.30	15～25cmの軽石が2点共伴
55	土坑7	K-12/Ⅳa上	0.95	0.87	0.16	
	土坑8	K-13/Ⅳb上層	1.65	1.24	0.08	
	土坑9	K-13/Ⅳa上	0.87	0.83	0.12	炭化物を多く含む
	土坑10	K-14/Ⅳb上層	1.00	0.93	0.20	
	土坑11	K-14/Ⅳb上層	1.05	0.74	0.18	
	土坑12	K-14/Ⅳb上層	0.72	0.67	0.24	
	土坑13	K-14/Ⅳb上層	1.00	0.96	0.11	
	平均		1.22	0.84	0.58	
	最大値		2.62	1.24	2.40	
	最小値		0.64	0.54	0.08	

第23表　遺構内遺物観察表（１）

挿図番号	報告番号	出土区/層	遺構	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成	色調	備考
13	37	H-16/Ⅳb	１号堀立柱建物跡	土師器甕	-	(2.8)	-	0.6～0.8	精緻	良好	10YR8/3 (浅黄橙)	-
15	38	H-14/	２号堀立柱建物跡	土師器甕	-	(3.2)	-	0.7～1.4	精緻	良好	7.5YR6/6 (橙)	-
	39	H-14/	軽石集積４	土師器杯	15.0	(3.6)	-	0.5～0.6	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	-
	40	I-6/Ⅳa	軽石集積４	土師器甕	22.2	6.5	-	0.9～1.8	精緻	良好	5YR6/6 (橙)	-
17	41	H-13/Ⅳa	３号堀立柱建物跡	土師器甕	13.4	(4.2)	-	0.4～1.0	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-
19	42	Ⅳa	焼土１	土師器杯	(9.0)	(1.4)	6.0	0.5～0.9	精緻	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	-
22	43	I-6/	５号堀立柱建物跡	土師器杯	13.2	(3.0)	-	0.4～0.5	砂・石多い	良好	5YR6/6 (橙)	-
	44	I-13/Ⅳa	５号堀立柱建物跡	土師器杯	13.6	(3.3)	-	0.3～0.6	精緻	良好	5YR7/8 (橙)	-
	45	I-13/Ⅳa	５号堀立柱建物跡	土師器杯	(10.0)	(2.2)	-	0.5～1.0	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-
	46	I-13/	５号堀立柱建物跡	土師器甕	-	(2.8)	-	0.8～1.0	礫多い	不良	7.5YR5/4 (にぶい褐)	-
	47	J-13～15/ 2T	５号堀立柱建物跡	土師器甕	-	(5.8)	-	0.6～0.8	精緻	良好	5YR6/6 (橙)	-
	48	I-14/	焼土５	土師器杯	14.0	(2.5)	-	0.3～0.6	精緻	良好	2.5Y4/1 (黄灰)	-
	49	I-12/Ⅲ I-14/Ⅳa	焼土５	黒色土器	(13.2)	(3.0)	7.6	0.6～1.1	精緻	良好	7.5YR7/6 (橙)	-
24	50	I, J-14/Ⅳa	７号堀立柱建物跡	土師器杯	16.0	(2.0)	-	0.3～0.5	精緻	良好	2.5Y3/1 (黒褐)	-
	51	I-14/	７号堀立柱建物跡	土師器甕	-	-	-	0.6～0.7	精緻	良好	7.5YR5/3 (にぶい褐)	-
	52	I-14/	７号堀立柱建物跡	土師器甕	-	-	-	0.7～0.8	精緻	不良	5YR7/8 (橙)	-
	53	I～J-13/ I-15/Ⅲ	８号堀立柱建物跡	土師器杯	12.8	(2.8)	(6.0)	0.3～0.4	精緻	良好	7.5YR7/6 (橙)	-
	54	J-14/	焼土６	黒色土器	18.2	(3.9)	-	0.3～0.9	精緻	良好	7.5YR6/6 (橙)	-
27	55	J-13/Ⅳa	９号堀立柱建物跡	土師器杯	(10.6)	(1.6)	7.6	0.4～0.6	礫多い	良好	5YR7/6 (橙)	-
	56	I, J-13/Ⅳa	９号堀立柱建物跡	黒色土器	18.4	4.9	8.6	0.5～1.1	精緻	良好	2.5Y6/4 (にぶい黄)	-
29	57	K-15/	軽石集積５	焼塩壺	(8.0)	(4.2)	-	0.8～1.1	2～3㎜の礫	良好	5YR6/6(橙)	-
33	58	J-6/Ⅲ J-7/ J-7/Ⅲ	焼土18	土師器甕	32.2	(6.0)	-	0.8～1.1	精緻	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙)	-
38	59	I-15/Ⅳa	軽石集積２	土師器杯	(9.6)	(2.3)	7.2	0.5～1.0	精緻	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	-
40	60	J-14/Ⅳa	軽石集積３	黒色土器	14.0	(3.6)	-	0.4～0.6	精緻	不良	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-
	61	J-14/Ⅳa	軽石集積３	土師器甕	22.3	(6.8)	-	0.7～1.3	精緻	良好	5YR5/6 (明赤褐)	-

第24表　遺構内遺物観察表（2）

挿図番号	報告番号	出土区/層	遺構	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成	色調	備考
44	62	K-7/	焼土７	土師器甕	28.0	(3.0)	-	1.2～1.6	やや砂質	良好	7.5YR7/6 (橙)	-
	63	K-7/	焼土７	土師器甕	28.0	(3.8)	-	0.9～1.2	やや砂質	不良	5YR4/6 (赤褐)	-
	64	K-7/	焼土７	土師器甕	28.0	(4.2)	-	0.9～1.5	やや砂質	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	-
	65	1，2T/Ⅲa	軽石集積４	土師器甕	25.0	(2.8)	-	1.0～1.3	精緻	不良	7.5YR5/4 (にぶい褐)	-
	66	J-7，8/Ⅳa K-7/	軽石集積４	土師器甕	28.4	(13.0)	-	0.6～0.9	砂粒・石・赤	良好	5YR7/8 (橙)	-
	67	K-7/	軽石集積４	土師器甕	-	-	-	1.0～1.1	精緻	良好	5YR3/1 (黒褐)	-
46	68	I-14/Ⅳa	焼土29	土師器杯	(10.0)	(1.4)	7.0	0.6～1.0	精緻	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	-
	69	I-14/	焼土29	土師器甕	-	(4.7)	-	0.5～0.7	精緻	良好	5YR7/8 (橙)	-
	70	I-14/	焼土29	土師器甕	-	(8.3)	-	0.7～1.2	精緻	良好	5YR6/8 (橙)	-
	71	I-14/	焼土29	土師器甕	-	(6.0)	-	1.3～1.5	精緻	不良	7.5YR5/4 (にぶい褐)	-
48	72	I-15/	土器集中地点１	黒色土器	(8.0)	(2.4)	7.6	0.7～1.3	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	-
	73	I-15/	土器集中地点１	土師器甕	-	(2.1)	-	0.6～1.7	精緻	良好	5YR5/4 (にぶい赤褐)	-
	74	I-15/	土器集中地点１	土師器甕	-	(4.0)	-	0.5～1.1	精緻	良好	7.5YR5/3 (にぶい褐)	-
	75	I-15/	土器集中地点１	土師器甕	24.0	(3.0)	-	0.9～1.6	精緻	良好	7.5YR5/3 (にぶい褐)	-
	76	I-15/	土器集中地点１	土師器甕	21.6	(5.2)	-	0.8～1.5	精緻	良好	2.5YR5/6 (明赤褐)	-
	77	I-15/	土器集中地点１	土師器甕	21.6	(7.7)	-	0.6～0.9	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	-
	78	I-15/	土器集中地点１	土師器甕	24.0	(7.5)	-	0.5～0.9	精緻	不良	10YR8/4 (浅黄橙)	軟質
	79	I-14/Ⅲ I-15/	土器集中地点１	須恵器甕	-	(4.0)	-	0.4～0.6	精緻	良好	10Y4/1 (灰)	-
50	80	H-15/	土器集中地点２	土師器杯	12.6	(3.0)	-	0.4～0.6	精緻	良好	5YR6/6 (橙)	-
	81	H-15/	土器集中地点２	土師器杯	(9.6)	(2.1)	6.0	0.5～1.1	精緻	良好	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-
	82	H-15/	土器集中地点２	黒色土器	(12.8)	(6.4)	7.8	0.5～1.4	精緻	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	高台高0.9
	83	H-15/	土器集中地点２	黒色土器	17.0	7.1	8.6	0.4～1.7	精緻	良好	10YR7/4 (にぶい黄橙)	高台高1.1
	84	H-15/	土器集中地点２	焼塩壺	9.0	(6.5)	-	1.0～1.3	3～6㎜の礫	良好	7.5YR7/6 (橙)	-
	85	H-15/	土器集中地点２	焼塩壺	12.6	(5.8)	-	0.7～1.0	2～7㎜の礫	良好	7.5YR7/6 (橙)	-
	86	H-15/	土器集中地点２	焼塩壺	13.0	(4.2)	-	1.1～1.3	2～4㎜の礫	良好	7.5YR6/6 (橙)	-
54	87	I-14	土抗１	刀子	長 (2.8)	幅1.2	-	0.3	-	-	-	-
	88	G-4/表採 I-13/Ⅲ I-16/Ⅳa	土抗５	土師器杯	13.6	4.3	6.2	0.4	石・角・赤	良好	2.5YR6/8 (橙)	砂粒多い
	89	I-16/	土抗５	土師器甕	-	(3.5)	-	0.7～1.1	精緻	不良	10YR4/2 (灰黄褐)	-
	90	I-16/	土抗５	土師器甕	25.0	(5.4)	-	0.8～1.3	精緻	不良	7.5YR5/3 (にぶい褐)	-
	91	I-16/Ⅳa，Ⅳb	土抗５	土師器甕	32.4	(7.7)	-	1.1～2.0	精緻	良好	7.5YR6/4 (にぶい橙)	-
	92	I-16/Ⅳb	土抗５	土師器甕	-	(11.5)	-	0.7～1.1	精緻	良好	7.5YR5/3 (にぶい褐)	-

2　古代の出土遺物

Ⅲ・Ⅳa層から出土している。土師器杯・皿・椀，須恵器杯，黒色土器杯・皿・椀，赤彩土器，把手，焼塩壷，土師器甕，須恵器壷・甕，紡錘車，墨書土器，石帯，鉄製品，鉄，研石，羽口がみられる。

(1)　遺物出土状況(第57～64図)

高篠遺跡ではⅢ層とⅣa層から古代の遺物が出土した。遺物の取上げは出土地点をおさえたものもあるが多くはグリット一括で取上げた。そこで，遺物出土状況の傾向を各グリットごとの出土遺物点数によって示すことにする。遺物は食膳具については底部を，煮炊・貯蔵具については口縁部を小片も含め全てカウントした。

食膳具である土師器坏・椀と黒色土器の出土状況は掘立柱建物跡が複数認められる平坦地上と柱穴のある谷部に多くの遺物が認められ，居住域に遺物が集中する傾向にある。また，土師器坏・椀と黒色土器で出土状況に違いは認められない。

煮炊・貯蔵具である土師器甕，須恵器壷・甕の状況は食膳具と同様で，やはり居住域に多く認められる。こうした傾向は他の遺物でも認められ，ゴミ捨て場のような一定の空間は想定できない。

次にこうした遺物の分布がどのような経過を経て形成されたか検討する。遺物が廃棄時の様子を留めているのか，二次的な移動が想定されるかに着目したい。遺物は土師器甕と須恵器甕の接合資料を観察の対象として用い，1個体分の遺物の広がりについてみてみた。

第62図からは，土師器甕No607が1グリットからの出土であり，廃棄された状態か，廃棄された土器がほぼ完形の状態で二次的な移動をして破砕したものかであろう。他のほとんどの遺物は破片が３～５グリット四方に散布しており，広い範囲への二次的な移動が想定される。また，多くで破片の集中している場所が認められるが，必ずしも破片同士が隣接して接合しているわけでもないので，二次的な攪拌は顕著であったと思われる。

また，遺構内遺物においても遺構外遺物と接合関係にあるものが多いことから意図的な埋納ではなく，二次的な流れ込みが多いものと思われる。

このように高篠遺跡出土の遺物は二次的な攪拌が想定され，遺構内遺物としての一括性には乏しい。

以下個々の遺物の説明では出土状況については特に触れないが，焼塩壷，墨書土器，石帯，鉄製鋏具はそれぞれの項で若干触れることにする。

(2)　遺物の概要

土師器坏・皿

平底を「坏」として分類し、高さが２cm以内のものを皿とした。法量、形態、色調から以下のように分類する。

(法量)

大型…口径13～16cm，底径6～9cm

中型…口径10～13cm，底径5～7cm

小型…口径10cm以内，底径4～7cm

(形態)

Ⅰ類…体部が直線的に立ち上がる平底のもの

Ⅱ類…体部が曲線的に立ちあがる平底のもの

Ⅲ類…円盤状の底部を有するもの

(色調)

橙色

浅黄橙色

まず，本遺跡で出土した土師器坏・皿の数量的な傾向についてみていく。カウントの方法は出土資料の底部を対象とした。まず，形態はⅠ・Ⅱ類が主体で総計1284点を数える。一方，Ⅲ類は総計17点，皿に関してはわずかに２点であり，圧倒的にⅠ・Ⅱ類の多いことが指摘できる。色調は橙色が515点，浅黄橙色が724点を数え，浅黄橙色の方が多い。ただ，概して浅黄橙色は脆弱であり，破損率も考慮すればほぼ同数である可能性はある。形態と法量の関係は橙色でⅠ類が多く，浅黄橙色で若干Ⅱ類が多い傾向にあるが，橙色のⅡ類，浅黄橙色のⅠ類も確認できることから明確に区分されるものではない。法量は本遺跡では，小型が確認できず，大型と中型があり，中型が主体である。また，大型例では胎土に砂粒を多く含むものが認められ特異である。

製作・調整技法としては内外両面の回転ナデ，回転ヘラ切り，見込みの不整方向のナデ，体部外面下端のケズリ，底部外面のナデ仕上げが確認できる。また，一部に体部と底部の境に接合痕が断面で観察された。

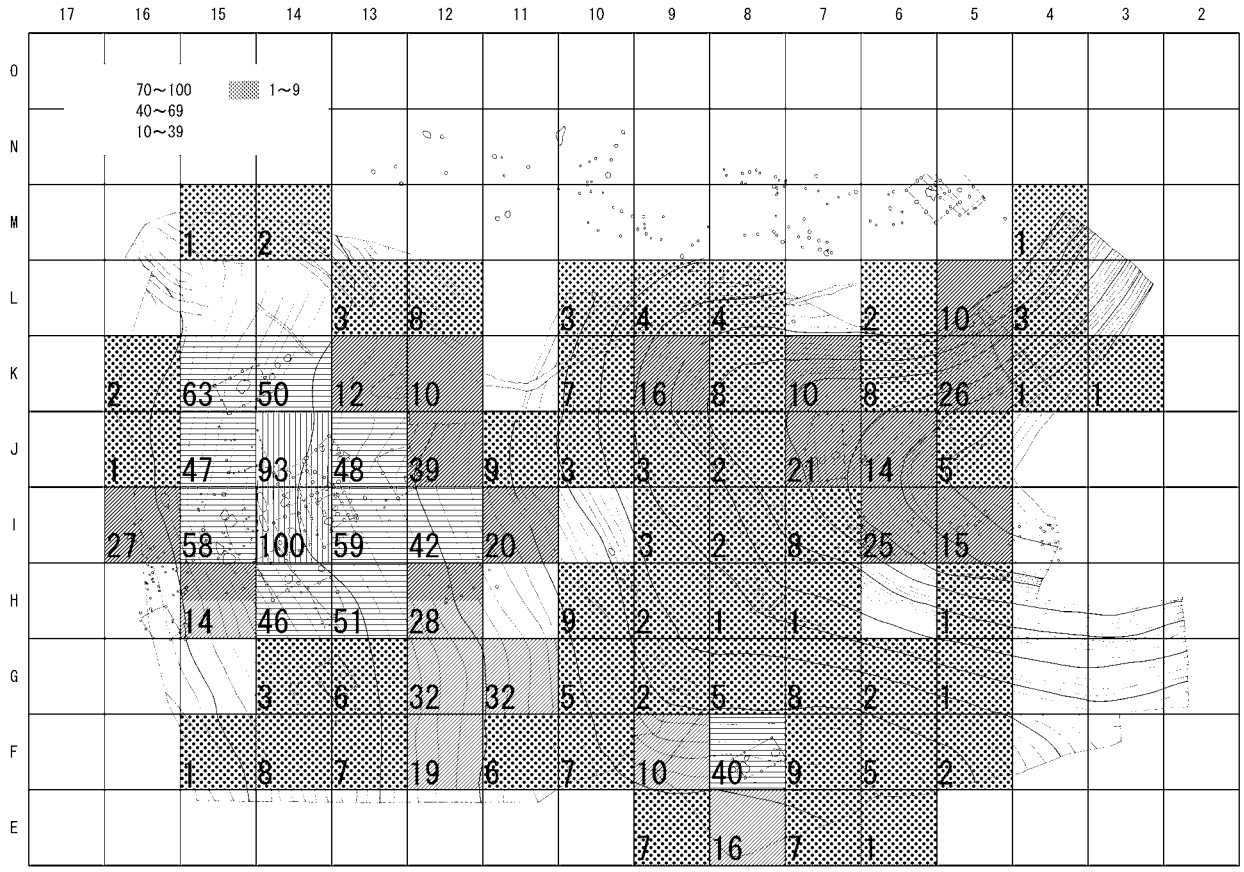
以下では個別の説明を行う。

No93～111は大型のⅠ類である。胎土に0.1～0.2cmの砂粒を多く含むのが特徴で，色調は橙色が多い。

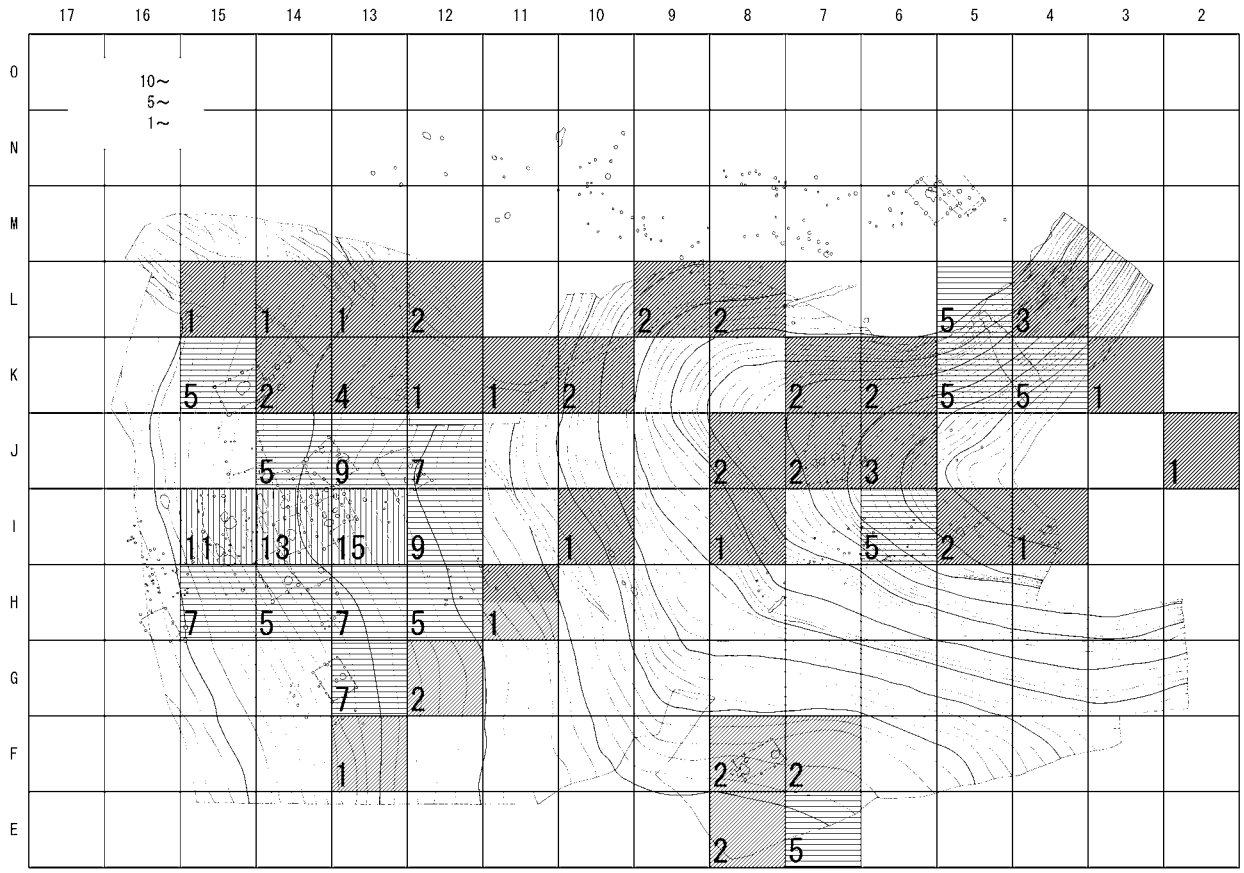
No95は，底部から体部に同じ厚さを保ちながら立ち上がり，体部外面下端からナデが認められる。底部は丁寧なナデで，見込みには時計回りに渦巻き状のナデが残る。No97,98は口縁部に向かい外反気味に立ちあがる。底部外面には，ヘラ切り痕を認める。No98の体部下端には，接合痕が断面で観察される。No101は底部が若干上げ底である。また，内面の底部と体部の境には強いナデにより窪みを認める。外面には，煤が部分的に付着し，胎土は黒色鉱物や石英が多く特異である。No105は浅黄橙色を呈する。底部と体部の境には，接合痕が断面で観察される。No107,108は，底部外面にヘラ切り痕が時計回りに渦巻き状に認められる。No109～111はにぶい橙色を呈し，表面には0.1～0.2cmの窪みが多数認められる。これは胎土に含まれていた赤色粒が焼成時に消滅し，窪みとなって残ったものと思われる。よって，直接火を受けていない断面中には赤色粒が多く認められる。

No112～121は大型のⅠ類で，胎土の精緻なタイプである。No112～115は浅黄橙色を呈する。No116は表面に複数の窪みが認められる。底部はヘラ切り痕，見込みには不整方向のナデが認められる。No117～119は橙色を呈し，比較的堅緻である。No120,121も橙色を呈するが若干脆弱で，底部はやや上げ底気味になっている。

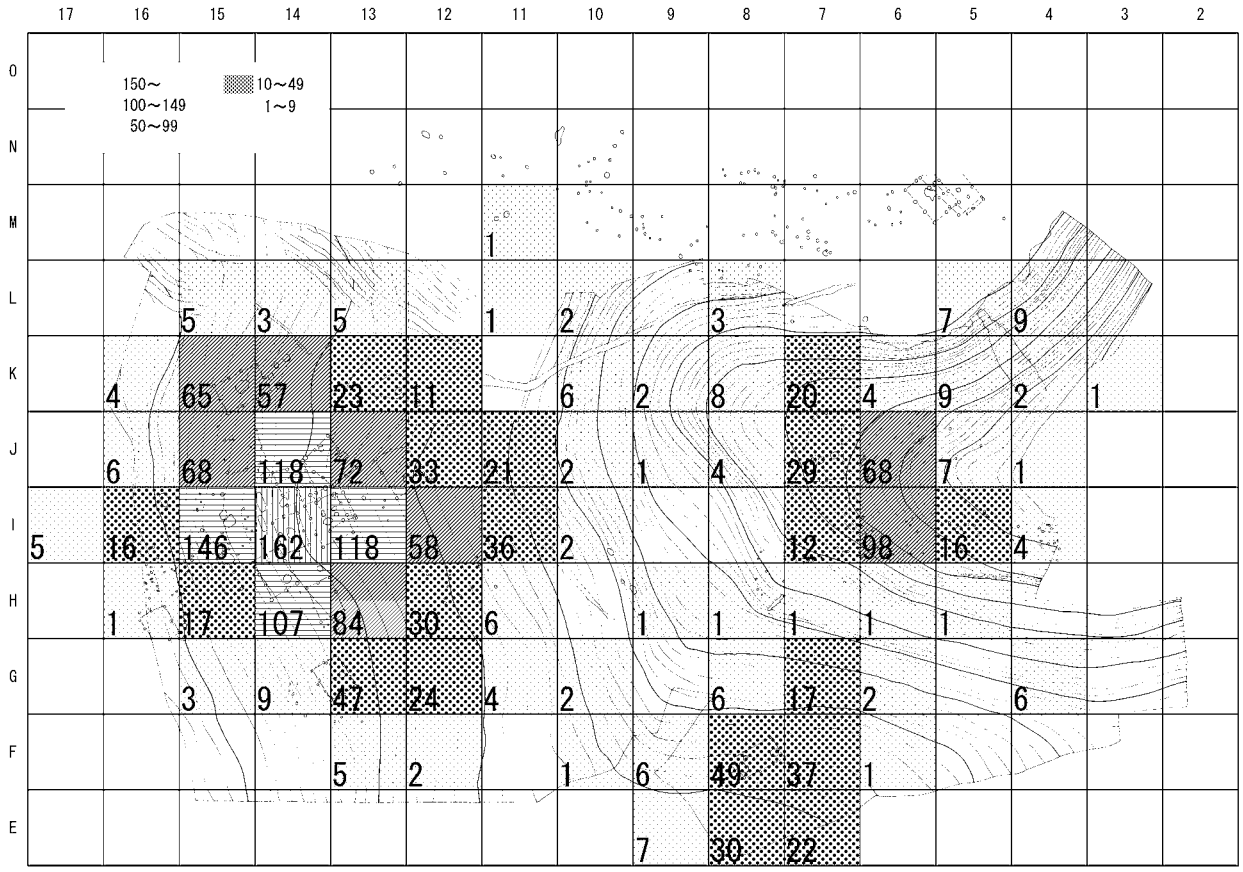
No122～135は中型のⅠ類で，高さが4～5cmの深手のタイプである。



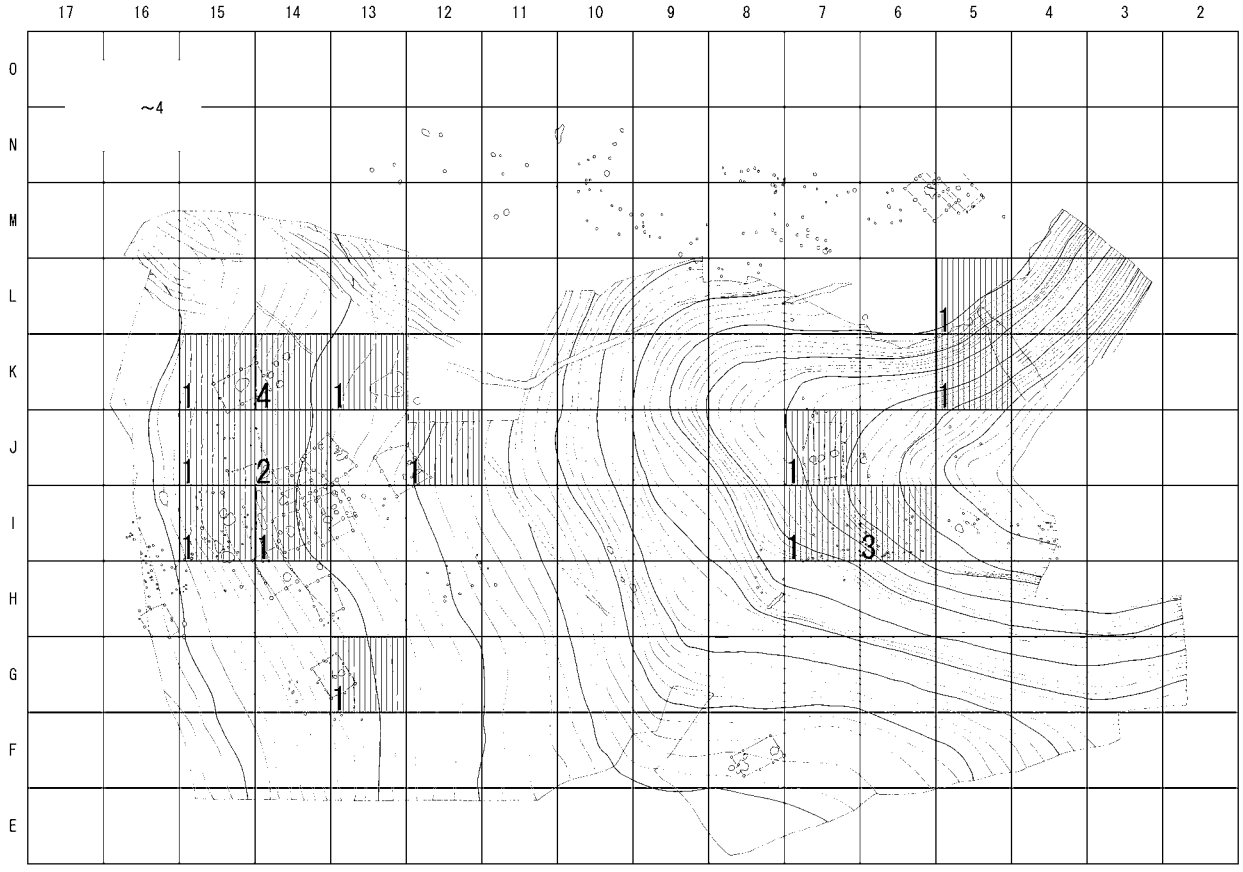
第57図　土師器坏底部出土状況(S=1/1000)



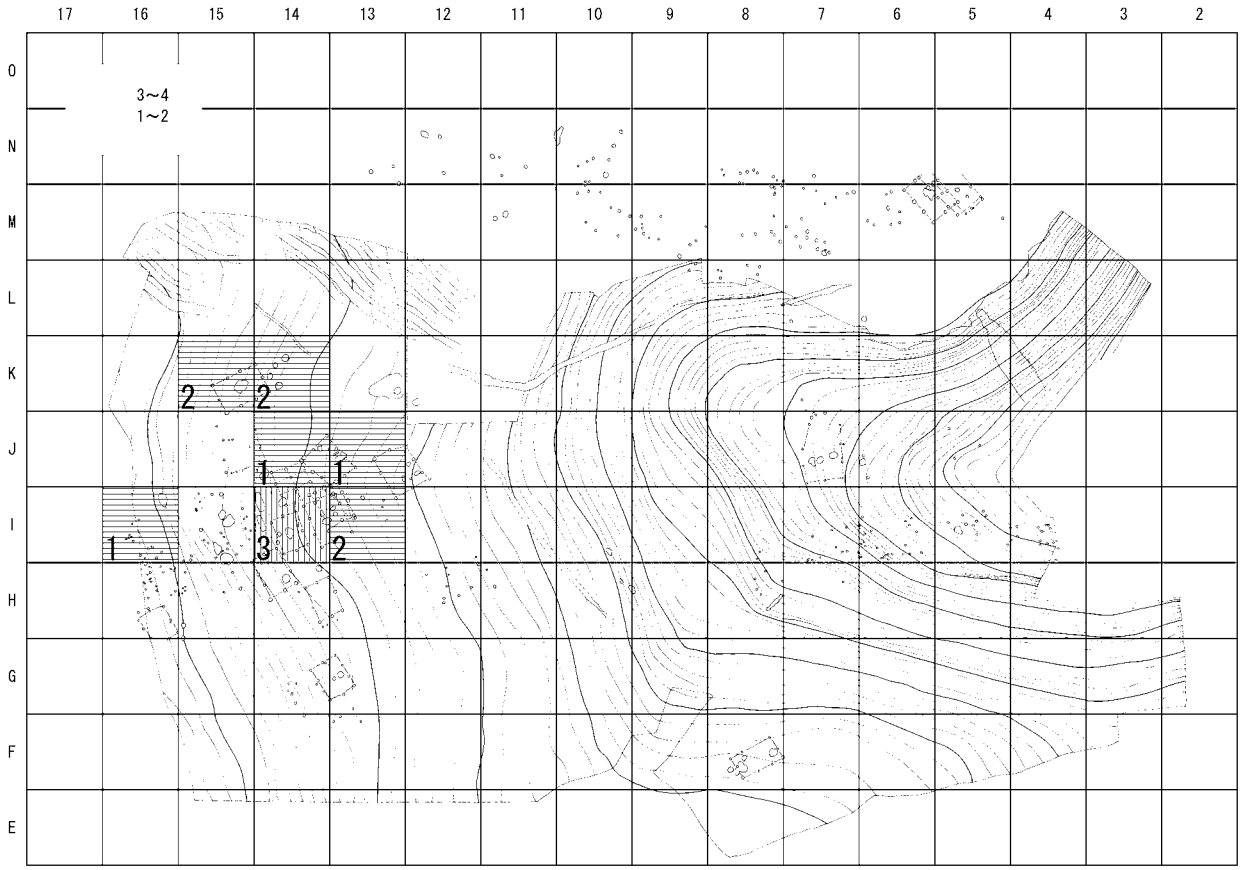
第58図　黒色土器底部出土状況(S=1/1000)



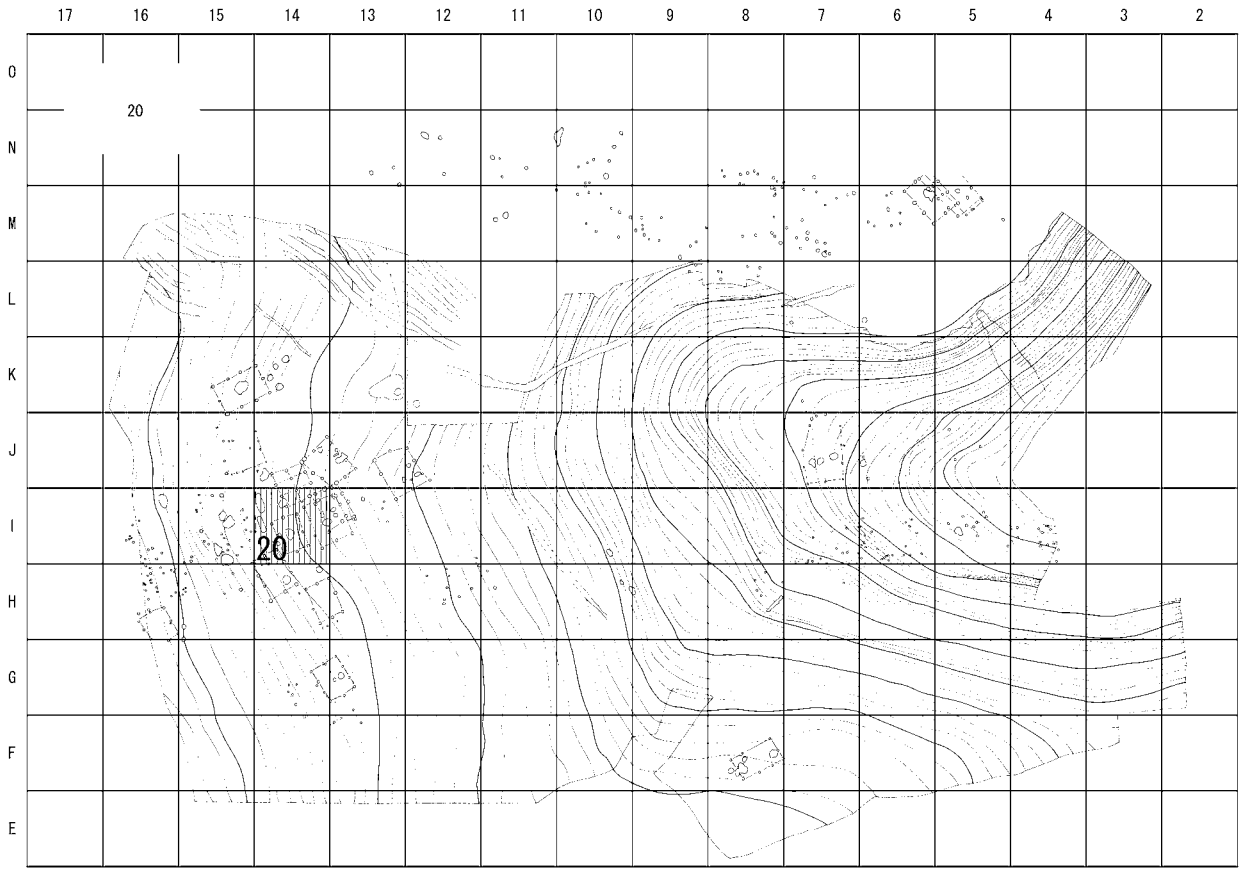
第59図　土師器甕口縁部出土状況(S=1/1000)



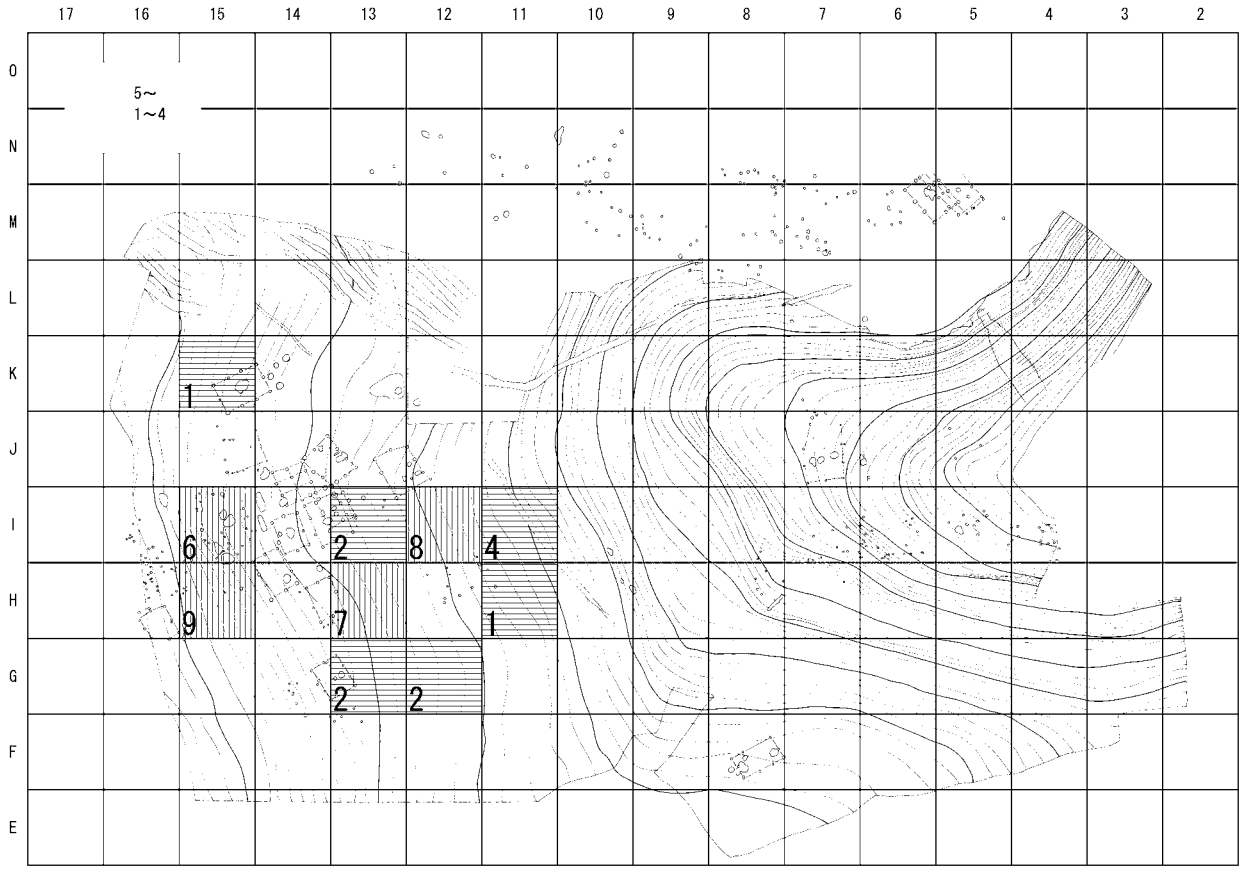
第60図　須恵器壷・甕口縁部出土状況(S=1/1000)



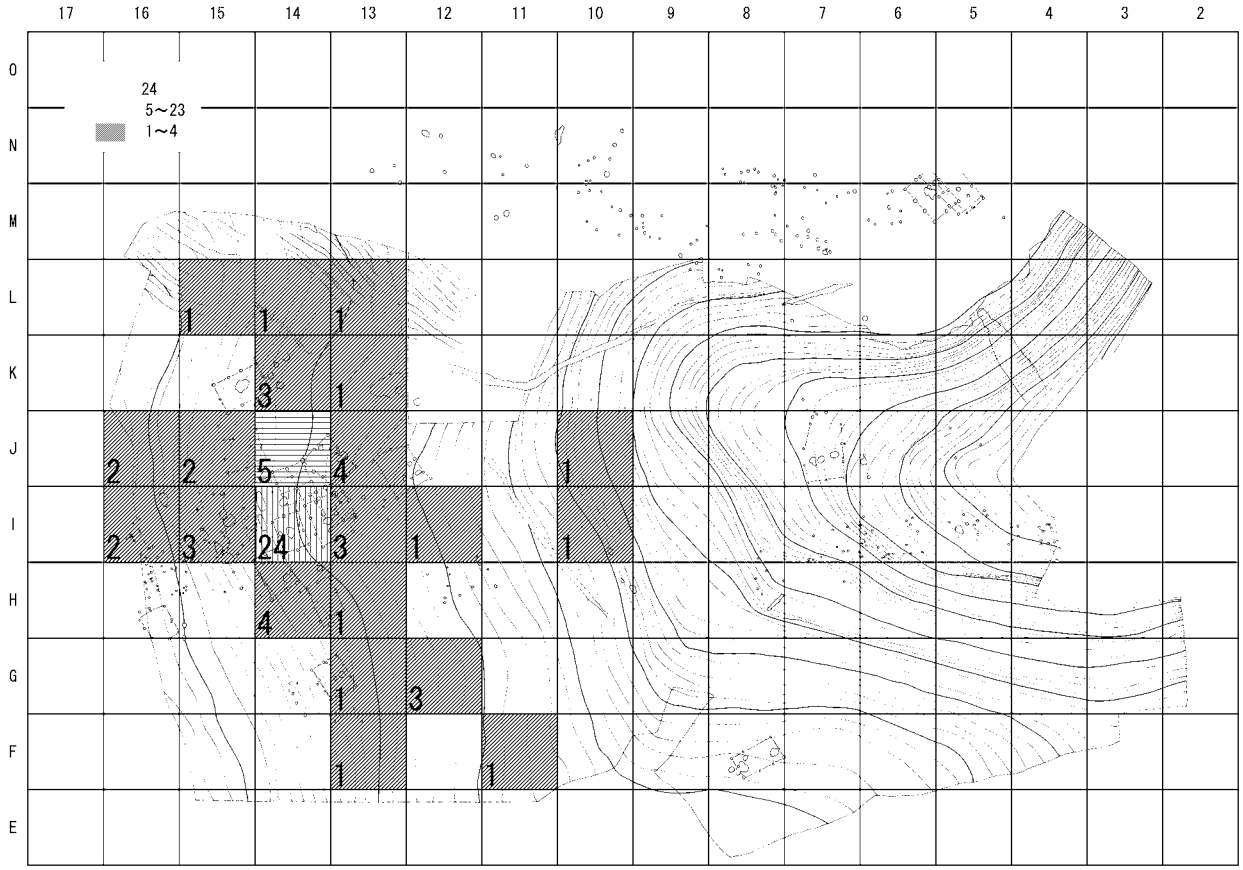
第61図　土師器甕(報告番号606)出土状況(S=1/1000)



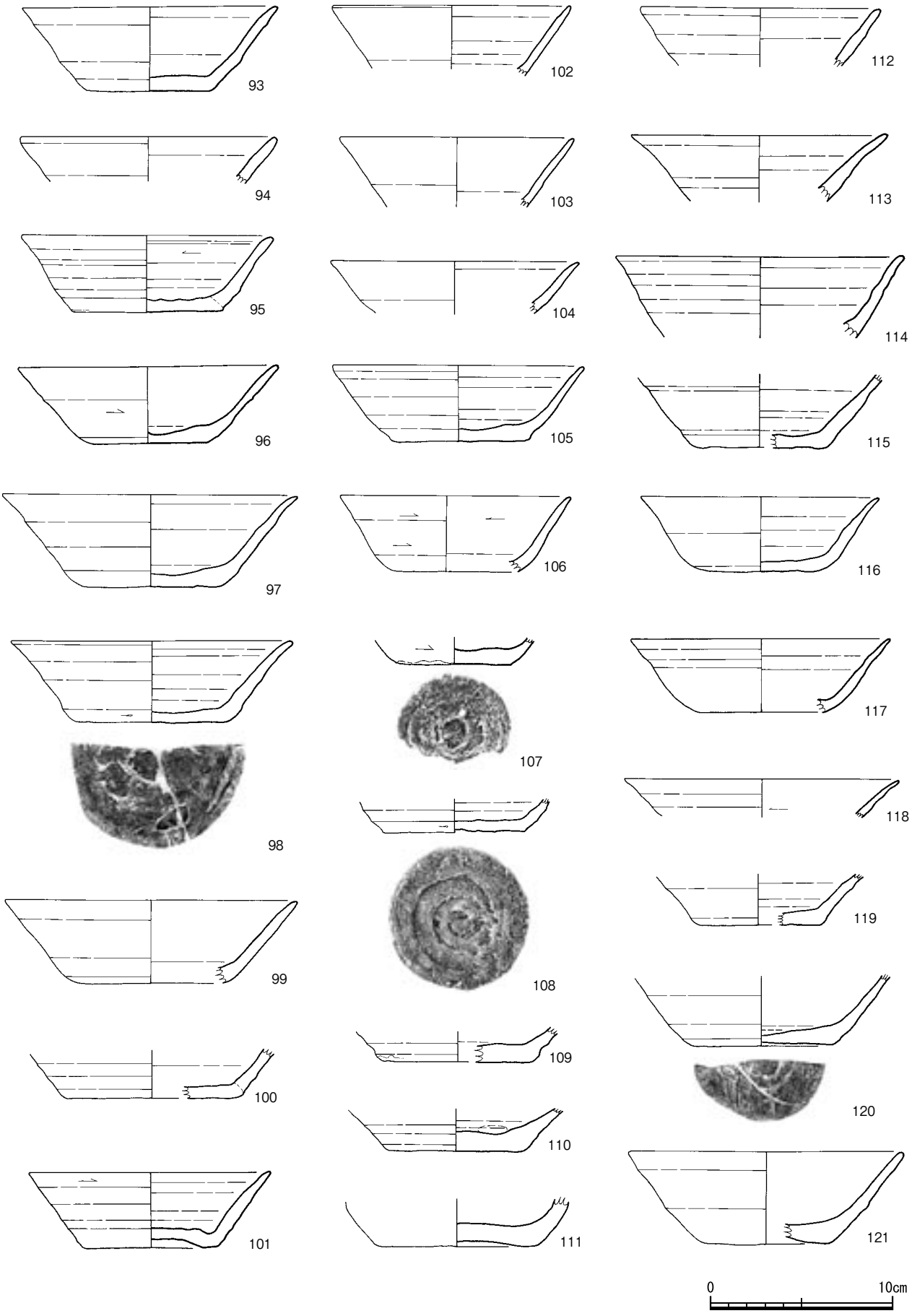
第62図　土師器甕(報告番号607)出土状況(S=1/1000)



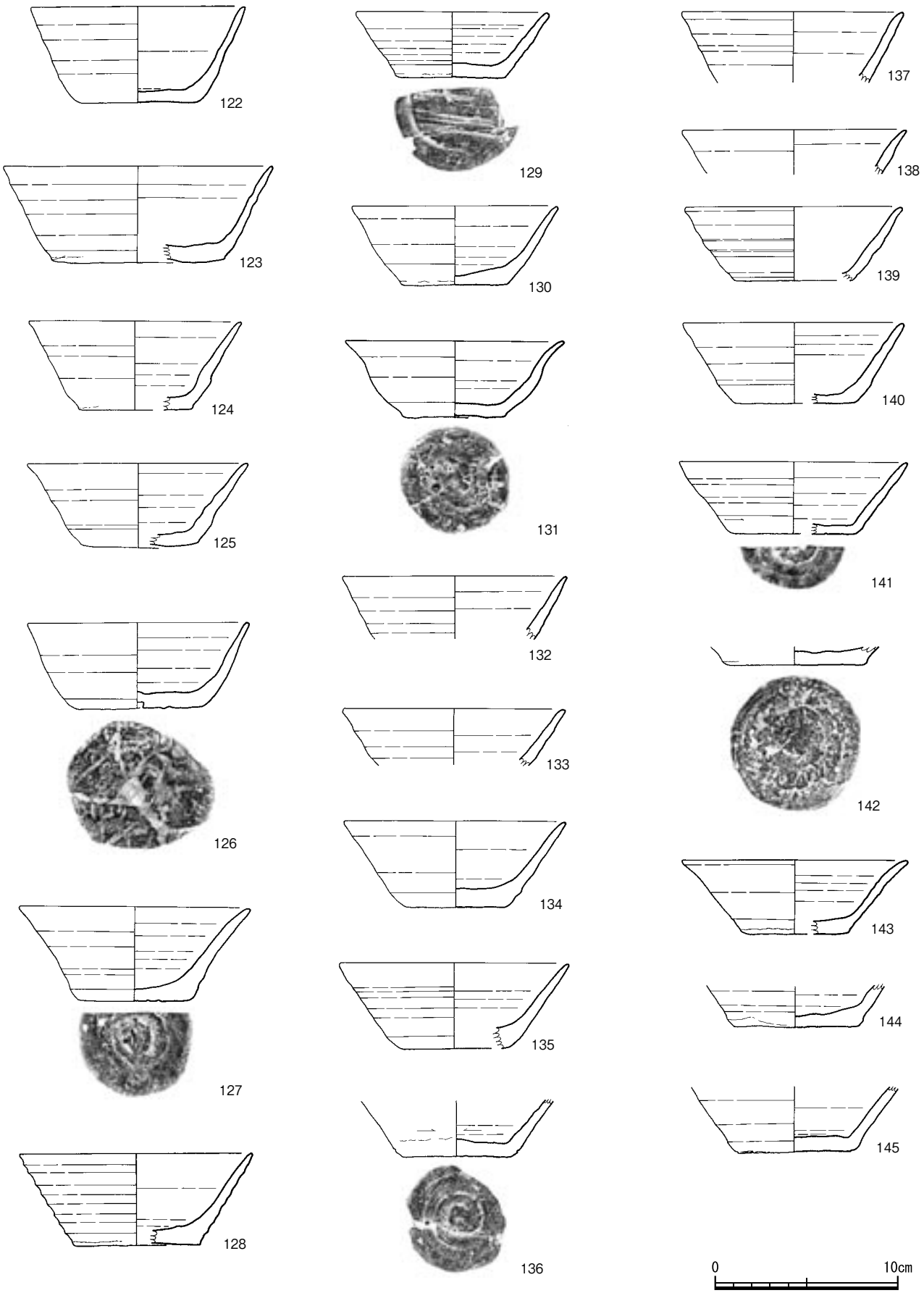
第63図　須恵器甕(報告番号756)出土状況(S=1/1000)



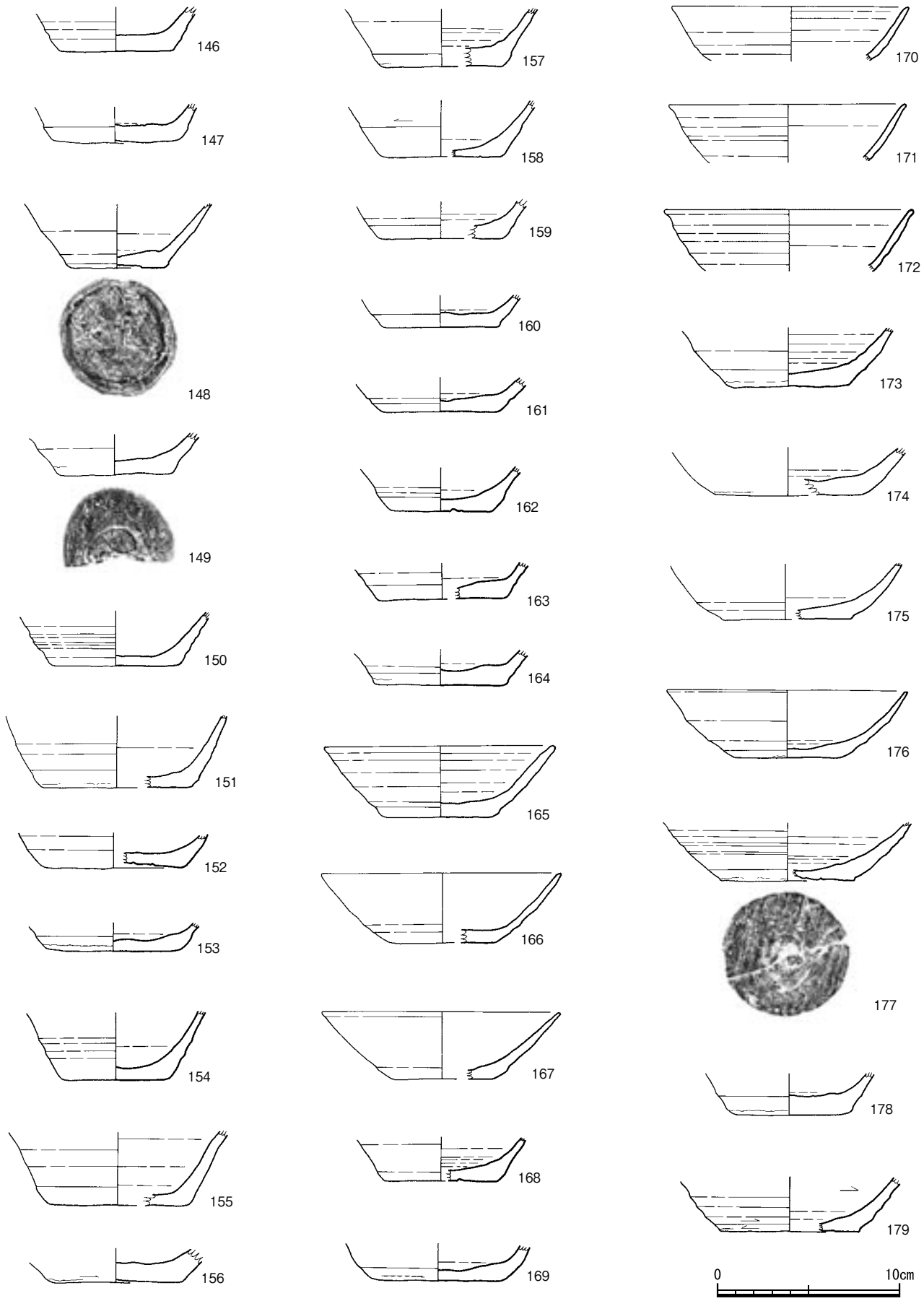
第64図　須恵器甕(報告番号757)出土状況(S=1/1000)


93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
0
10cm

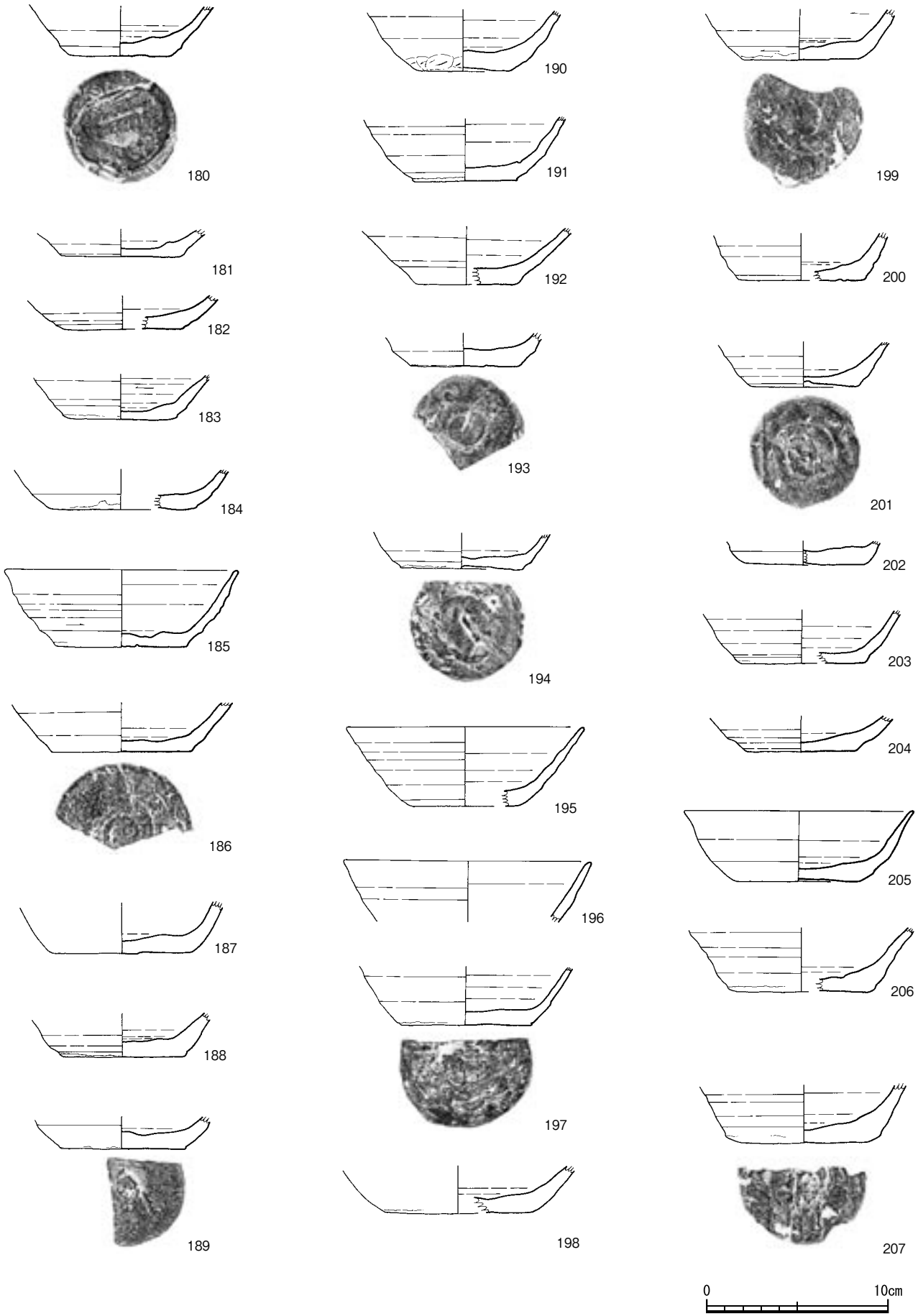
第65図　土師器坏(１)


122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
0
10cm

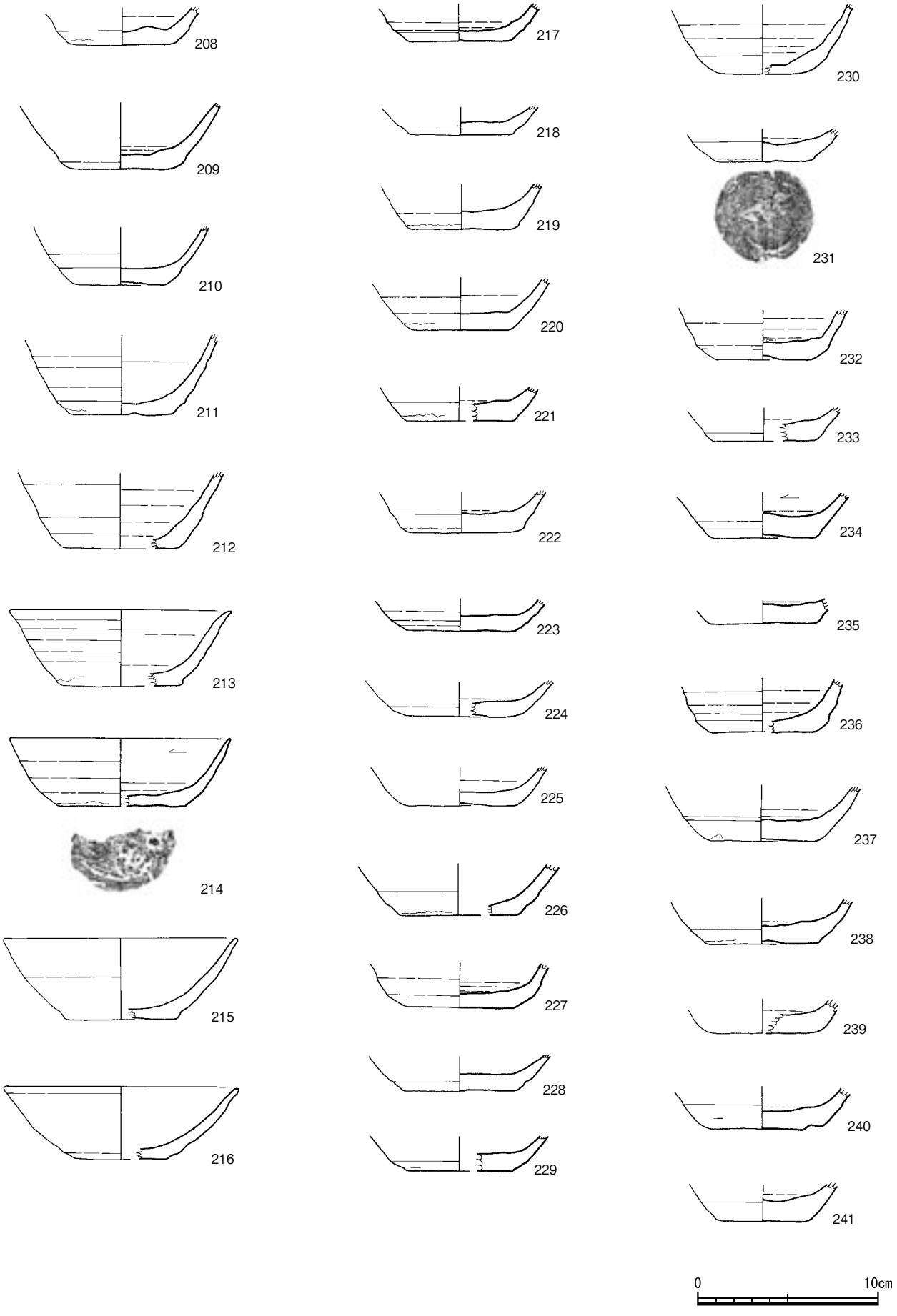
第66図　土師器坏(２)


146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
0
10cm

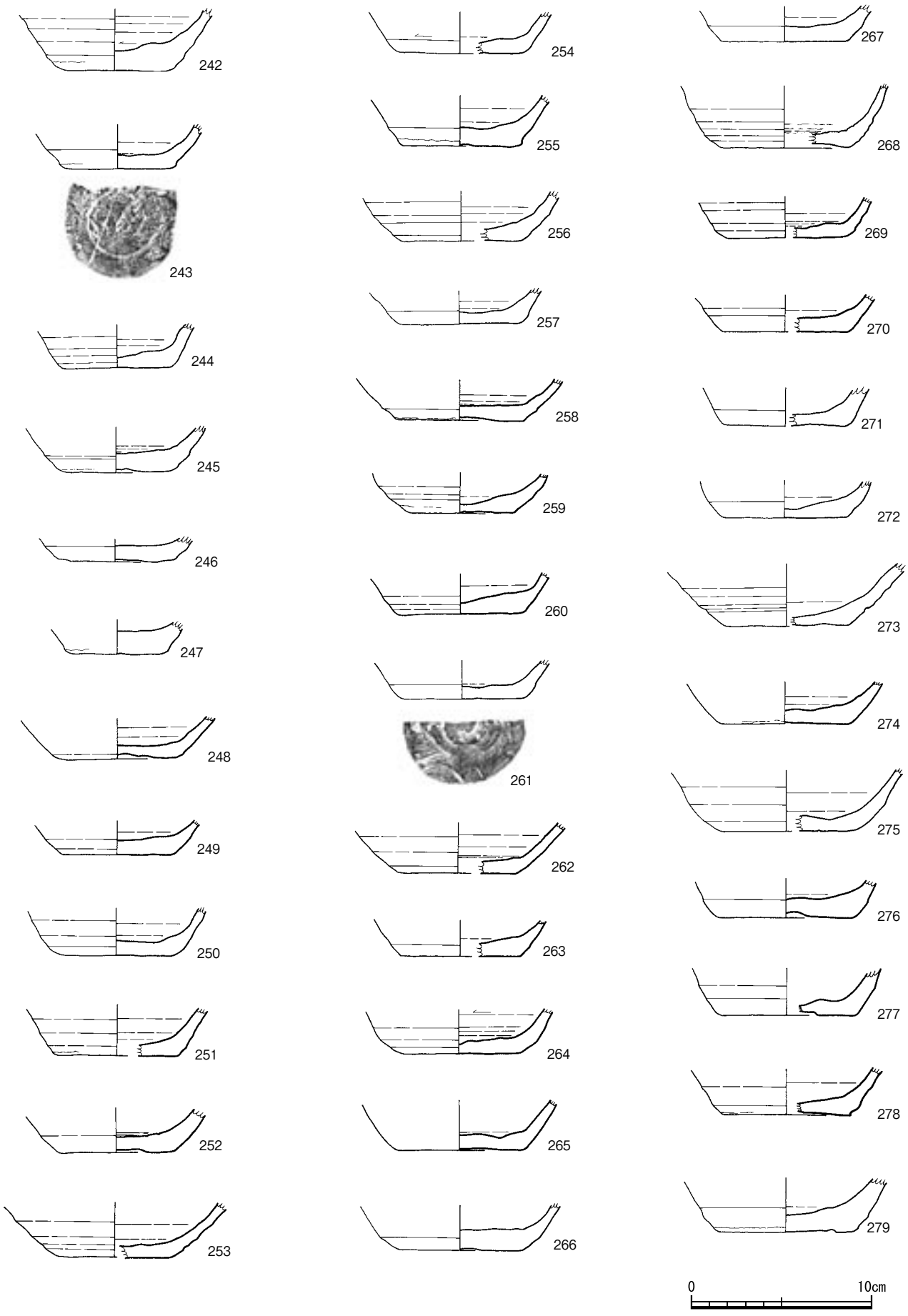
第67図　土師器坏(３)


180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
0
10cm

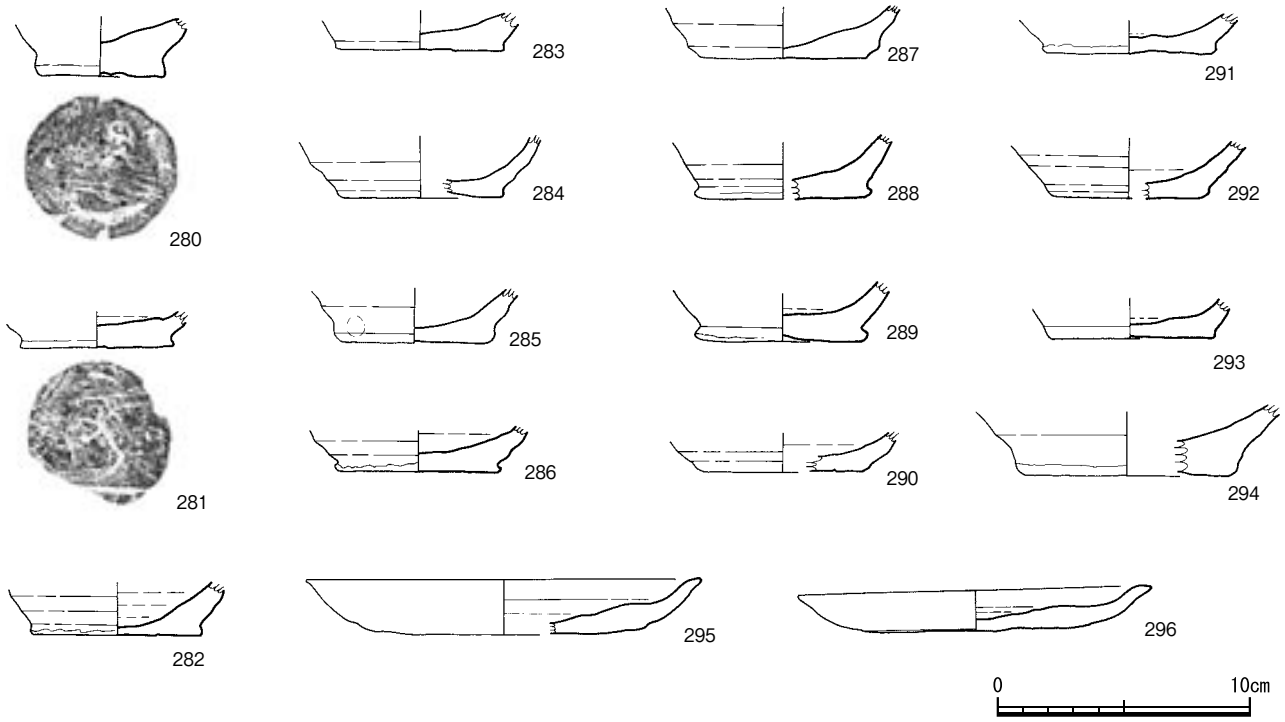
第68図　土師器坏(４)


208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
0
10cm

第69図　土師器坏(５)


242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
0
10cm

第70図　土師器坏(６)



第71図　土師器坏(７)及び土師器皿

No122,123は口径と比較して底径が大きく，体部の立ち上がりの強い箱形を呈する。No125は堅緻で，内外面ともに強いナデで，体部外面下端にはナデきっていない部分が明瞭に残る。No126は見込みに強い渦巻き状のナデを時計回りに認める。底部の仕上げ整形があまく，中央に深い窪みが残る。No127は体部下位から強く外反しながら口縁部に達し，底部にはヘラ切り痕を渦巻き状に認める。No128,129は体部外面のナデ幅が狭く，数条の稜線を残す。No129の底部には簾状の圧痕が見られる。No130はにぶい黄色を呈し硬質である。No131は体部中位から大きく口縁部にかけて外反し，表面には複数の窪みが認められ，体部を貫通しているものもある。No132,133は明黄褐色を呈し，硬質である。132の内面には煤が付着する。No134はほぼ完形で，色調は浅黄橙色を呈し，脆弱である。No135は若干硬質で，体部外面のナデ幅が狭く，外面下端にはナデきれていない部分がある。

No136は見込みの中心部分が若干盛り上がり，底部外面には，時計回りに渦巻き状のヘラ切り痕が残る。

No139～153は中型のⅠ類で，高さが4cm程度の浅いタイプで，色調は橙色を呈するものが多い。No139は体部上位になるにつれナデ幅が広くなる。No140は浅黄橙色を呈し，体部外面下端にケズリ調整が認められる。No141は内面の底部と体部の境が明瞭で，底部外面にはヘラ切り痕が渦巻き状に残る。

No142は底部で，外面はヘラ切り痕，内面は不整方向のナデが認められる。No143は体部外面下端にケズリが明瞭に残る。No145は体部外面下端まで丁寧にナデる。No148は体部外面下端のナデが強く，下位のケズリとの境に段差がある。No149も体部外面下端に強いナデがある。No150は体部外面に0.5cm幅の狭いナデを残し，外面は橙色に発色するが，内面は浅黄橙色である。No151,152は底部にヘラ切り痕が明瞭に残り，深く抉れている。

No154～169は中型のⅠ類で浅黄橙色を呈し，高さは不明である。

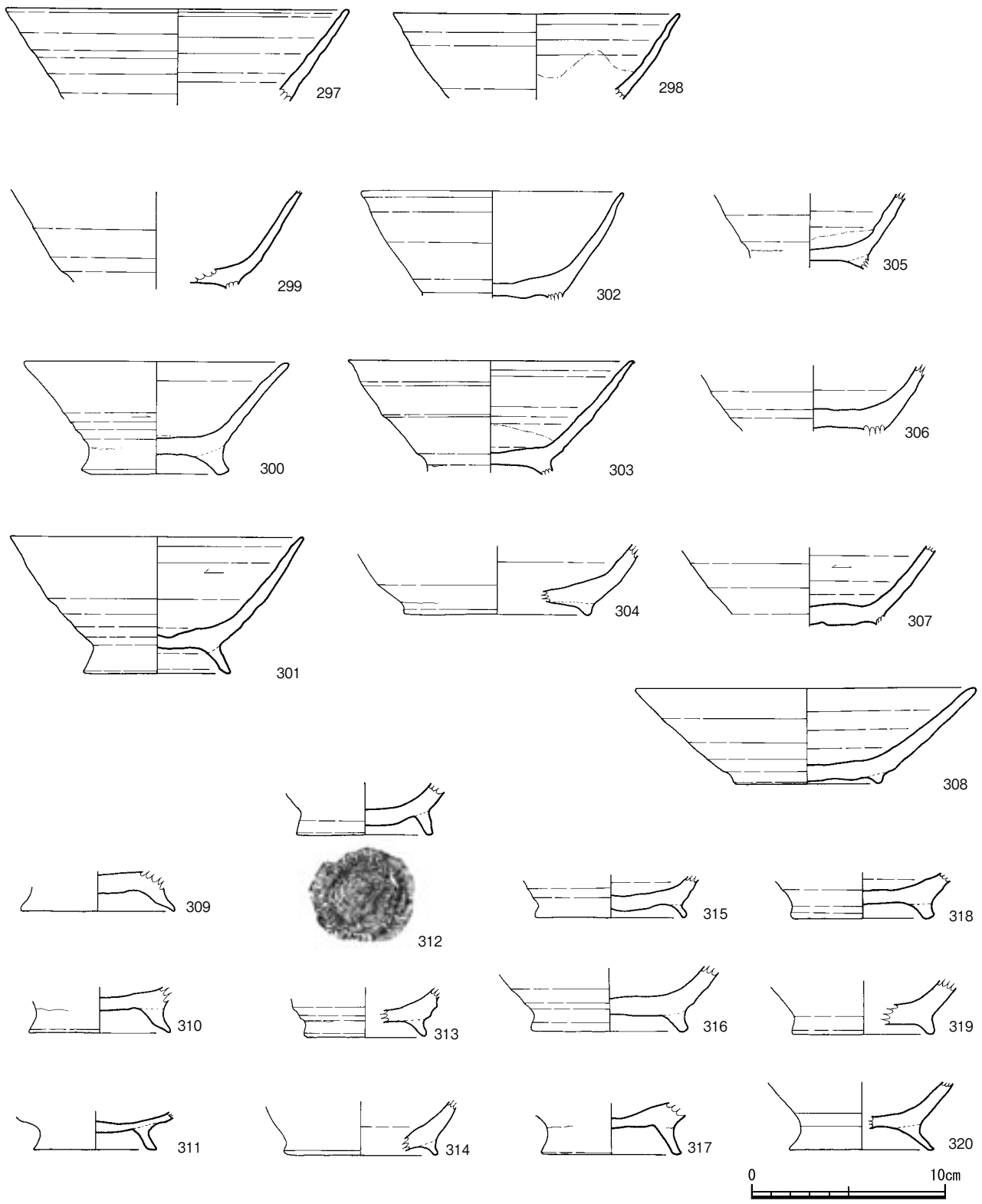
No156の底部は丁寧にナデられ，ヘラ切り痕は完全に消えている。No158は，体部外面のナデ開始が比較的高い位置にある。No159はやや硬質である。No160は見込みの中心部分が若干盛り上がる。No162は橙色気味で，底径が5.4cmと小さい。No163は胎土に赤色粒を少量含む。No165は橙色と浅黄橙色との中間的な発色を呈し，体部外面下端のナデが強く，下位のケズリ痕との間に段差がある。No166,167は器壁が細身で，口縁部に向かってシャープにすぼまり口縁端部は鋭利である。No168,169は体部に比べて底部の器壁が厚い。

No170～179は大型のⅡ類で，色調は橙色のものが多い。

No171は部分的に煤が付着する。No173は硬質で，見込みに不整方向のナデが認められる。No174は内面で底部と体部の境が若干窪んでいる。No176は体部外面のナデの稜線が少なく2条で，見込みは大きく凹む。No177は底部に簾状の圧痕が，見込みには時計回りの渦巻き状のナデを認める。No178は幅0.5cm程度の狭い間隔でナデられる。No179は浅黄橙色を呈し，胎土には赤色粒を多く含む。

No180～207は中型のⅡ類で橙色を呈す。

No180は見込みに大きなひび割れが円孤状に，内面の体部と底部との境にはナデによる段を認める。No181も見込みにS字上のひび割れがある。No183は硬質で内面が黄褐色を呈し，見込みには不整方向のナデが見られる。No186,187は胎土に砂粒を多く含む。No186にはわずかにヘラ切り痕が渦



第72図　土師器椀

巻き状に残される。No188は見込みと体部の境に強いナデ，中央には不整方向のナデがある。No189は見込みの中心部分に盛り上がる。No190は体部外面下端に手持ちによるケズリが認められ，このケズリは底部を切り離した後で施されている。No191は内面の見込みと体部との境に「の」の字状にナデがある。No192は底部が若干突出気味である。No193は見込みに渦巻き状のナデが時計回りに見られる。No194の底部は若干上げ底気味になり，ヘラ切り痕が認められる。No197は体部の器壁が薄い。No198は表面に複数の窪みが見られ，No109～111と色調，胎土で類似する。No199は見込みが窪

み，体部外面には煤が部分的に付着する。No201,203,204は見込みの中心から傾斜して立ち上がり，底部中心部の器壁は薄くなる。No205は体部が丸みを持ちながら立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。No207は底部にヘラ切りによるひびが見られる。

No208～279は中型のⅡ類で，色調は浅黄橙色を呈す。全体的に軟質のものが多く，保存状態も脆弱である。

No208は体部外面下のケズリが明瞭に残り，見込みのナデ仕上げも不十分である。No209は保存状態がよくないため，口縁部が残存しているかどうかが不明確である。No210は底部が若干上げ底になる。No212はやや厚い器壁をもつ。No213は体部外面のナデが強く，それぞれのナデのラインが沈線状になる。No214は底部にヘラ切り痕，見込みに不整方向のナデが認められる。No215は体部立ち上がりの傾斜が緩く，焼成は不十分で断面は黒灰色を呈する。No216は若干硬質を呈し，口縁部外面が一部黒色に変色している。体部外面のナデは下端まで丁寧に施されている。No217は体部外面下端に，幅１cm程のナデきれていない部分が認められる。No219は内外面に茶色状の付着物がある。No221と222は体部外面下端に，幅1cm程のナデきれていない部分が明瞭に見られる。No224は体部立ち上がりの傾斜角度が緩い 。No225は外面が一部黒褐色に変色している。No227～229は体部外面下端から丁寧にナデられ，底部外面の仕上げナデも丁寧である。No230は内面に幅の狭いナデが数条認められる。No231は見込みに渦巻き状のナデが時計回りに見られる。また，体部外面下端には回転ナデによってナデきれていない部分があり，再度それをナデているがそれも十分ではない。底部外面は丁寧にナデで仕上げている。No232は底部と体部で器壁の厚さが大きく異なる。また，内面において底部から体部への境界が明瞭である。No234も底部と体部で器壁の厚さが大きく異なる。No235は見込みに渦巻き状のナデが時計回りに確認できる。No236は体部外面下端のナデが強い段を呈している。No237,238は見込みの渦巻き状のナデが明瞭に残る。No240は底部外面に幅１～1.5cm程度の凹みが３か所以上認められる。No242は底部に黒灰色の煤を認め，体部外面下端のナデきれていない部分が明瞭で，底部の器壁が厚い。No243は見込みに不整方向のナデがある。No246は部分的に焼成が不十分である。247は体部外面の回転ナデの施されていない部分が残存するため，外面は非常に粗い。No248は底部から体部までほぼ同じ器壁である。No251は体部外面下端からナデが確認できる。No252は見込みに煤が部分的に付着する。No253は体部立ち上がりの傾斜が緩やかである。No257は底部外面を丁寧にナデ仕上げている。No259は底部外面，体部外面に亀裂が多い。胎土には赤色粒が多い。No260は体部外面から低部外面に丁寧なナデを施し，見込みも不整方向の丁寧なナデが認められる。No261は底部，体部ともに薄い器壁を呈する。No262は内面の体部と底部の境にナデが認められる。No263は硬質で橙色気味である。No267の底部外面は丁寧にナデられる。No268は内面の見込みから体部にかけて沈線が4条見られる。No269は外面の底部と体部の境が丸くなる。No272は底部の中心ほど器壁の厚さが薄くなる。No273は外面の回転ナデのナデ開始が深く，沈線状を呈している。No274は底部，体部ともに薄い器壁である。No275はNo269と同様に薄い器壁を有する。No276は底部外面に複数の亀裂が認められる。No279は底部外端から約１cm内側で強く回転を利用してナデられ，底部外端は高台のようにみえる。

No280～294はⅢ類である。全て底部付近のみの残存で，全体の形状は伺い知れない。色調はにぶい黄色，橙色，浅黄橙色が認められ，法量は底径６cmのものが多い。

No280は円盤状の底部が高く約１cmを測り，充実高台の範疇に入る。本遺跡では唯一の資料である。底部外面はヘラ切りの後に丁寧なナデが認められる。底部端部の調整は簡単にすまされ，所々に亀裂が認められる。見込みの中心部は大きく窪む。色調は浅黄橙色を呈する。No281はにぶい黄色を呈し，底部外面に植物繊維の圧痕が複数確認される。No282はヘラ切りによる粘土のはみ出しで，円盤状にみえ，底部の器壁は中心になるにつれ薄くなっている。No283は橙色を呈し，見込みの中心部分が凹っている。No285の底部は丁寧なナデで調整する。No286はヘラ切りによる粘土のはみ出しが顕著である。No287はわずかに円盤状を呈し，見込みの中心には窪みが認められる。No288は硬質な橙色である。No289は浅黄橙色を呈し，底部外面の中心は若干上げ底気味である。No291は器壁の薄い円盤状底部である。No289は胎土に赤色粒を含む。No293はわずかに円盤状を呈している。

No295,296は皿で，高さが1.6～2.0cmを測る。胎土に砂粒を多く含み，体部は内弯しながら短く立ち上がり，口縁端部は短く外反する。底部から体部にかけて丁寧にナデられ，体部と底部の境界は不明確であるが，部分的にわずかな突出が認められ，内面は見込みが若干窪む。

土師器椀(第72図)

高台付きを椀とした。

椀は口径13cmから17cmを測り，坏よりも大型である。底部は総計72点で，坏に比べて少ない。体部は直線的に立ち上がるものが大多数を占め，比較的曲線的な立ち上がりの多い黒色土器椀との相違が認められる。調整方法は内面にミガキ状の丁寧なナデが認められるものが多く，土師器坏との相違点として指摘できる。また，底部の断面観察からは底部押出し技法が想定される。色調は橙色と浅黄橙色があり，橙色が主体である。なお，本遺跡ではNo308のように体部の立ちあがりの緩いものもあるが皿の形状と判断できるものはなく，高台坏の土師器をすべて椀として分類した。以下では個別に説明を行う。

No297,298は体部から口縁部で，色調が橙色を呈し胎土は精緻である。No299は橙色を呈し，脆弱で保存状態は不良で，胎土に若干赤色粒を含む。No300は硬質で，体部は直線的に立ち上がり，内面の見込みにはミガキ状の丁寧なナデが認められる。高台端部は面をもち，若干内側から外側に傾斜している。No301も硬質で部分的に灰色気味の変色が見ら

れ，内面は全面にミガキ状の丁寧なナデで，色は橙色を呈する。No302は体部が直線的に立ちあがり，口縁部付近でわずかに外反する。内面は見込み部分にミガキ状のナデが確認でき，高台の内側には幅１cm程度の強いナデが認められる。No303は直線的に大きく開く体部をもち，内面の見込みにはミガキ状の丁寧なナデが認められる。No304は曲線的に立ち上がる体部で，内面にミガキ，色調はにぶい褐色を呈することから黒色土器に分類され得る可能性もある。高台の高さは低く，高台の内側は緩やかに反っている。No305も見込み付近にミガキ状の丁寧なナデが見られ，部分的ににぶい褐色を呈している。No306は胎土に赤色粒を多く含み数か所に窪みがあり，色調は橙色であるが見込み付近がにぶい褐色に変色する。底部外面には丁寧なナデが確認できる。No308は直線的で傾斜の緩い体部を有し，胎土には石英を多く含む。高台は低くNo304に共通する。内面のミガキ状の丁寧なナデは認められず，外面には煤が付着している。

No309～320は底部である。

No309,310は高台端部にナデが認められ，内側から外側にかけて傾斜している。No309の見込み，底部外面にはひび割れが見られる。No311も高台端部に幅0.5cm程度の面が認められる。見込みの一部分に押圧が認められ，底部外面が若干膨らんでいる。No312は高台端部に幅0.2cm程度の面が見られ，内面はミガキ，底部外面は見込みの押し出しによって丸く膨らんでいる。No313～314は細くて低い高台を有し，高台端部は丸くおさめる。No313は硬質でにぶい赤褐色を呈し，内面にはミガキが認められる。No314,315は見込みの押圧によって底部外面が丸く膨らんでいる。No316は外反する高台を有し，端部は丸くおさめ，高台の器壁は薄く，高さは他の土師器椀に比べて長い。No316～318は短くて太い高台をもつ。No318は高台端部が若干面を持ち，見込みには不整

第25表　土師器坏遺物観察表(１)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	調整				備考
								底部ヘラ切り	見込ナデ	静止ナデ	未調整	-
65	93	I-10/Ⅲ	14.0	6.6	4.5	礫多い (砂粒含む)	2.5YR6/8 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	94	J-13	14.0	(10.6)	(2.5)	砂粒・石	10YR7/3 (にぶい黄橙)	不明	-	不明	×	-
	95	I-12/Ⅲ I-14/Ⅳa K-14/Ⅲ	14.0	8.4	4.1	礫多い (石、角、赤含む)	7.5YR7/6 (橙)	ナデでほぼ消滅	時計回り	×	○	-
	96	H-13/Ⅳa	14.1	6.5	4.2	礫多い (石、角、赤含む)	10YR8/6 (黄橙)	ナデで消滅	時計回り	×	○	-
	97	I-6/Ⅳa K-12・13/Ⅲ	15.6	7.4	5.0	礫多い（赤）	7.5YR7/6 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-
	98	J-13/Ⅳa	15.4	8.4	4.4	礫多い(石、赤含む)	7.5YR6/8 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	×	-
	99	I-12/Ⅳa	16.0	(8.0)	(4.4)	赤多く含む	7.5YR6/6 (橙)	不明	-	不明	○	-
	100	2T/Ⅲa	(13.2)	9.0	(2.4)	礫多い(石、赤含む)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	×	-
	101	K-13/Ⅲ	13.2	7.4	4.1	角多く含む・石含む	10YR6/6 (明黄褐)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	102	L-12/Ⅲ	13.0	(8.0)	(4.0)	砂粒・石多く含む	5YR7/8 (橙)	不明	-	不明	×	-
	103	I-6/Ⅳa	12.8	(8.8)	(3.7)	砂粒・石多く含む	7.5YR7/6 (橙)	不明	-	不明	×	-
	104	H-12/Ⅲ	13.6	(8.6)	(2.7)	砂粒・石多く含む	7.5YR6/6 (橙)	不明	-	不明	×	-
	105	F-9/Ⅳa	13.8	7.2	4.1	礫多い (石、赤含む)	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	時計回り	×	×	-
	106	I-15/焼土 I-15/Ⅲ J-12/Ⅳa	13.6	(8.0)	(4.0)	砂粒・石多く含む	5YR6/8 (橙)	不明	-	不明	不明	-
	107	L-12/Ⅲ	(8.6)	6.2	3.6	礫多い (砂粒含む)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	時計回り (ナデあり)	-	○	×	-
	108	E-8/Ⅳa	(10.4)	7.2	(1.7)	赤 (砂粒の抜けた孔多い)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	時計回り (ナデあり)	時計回り	×	○	見込に指押さえ有り
	109	J-15/Ⅲ K-15/Ⅲ	(11.0)	8.0	(1.6)	精緻	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデで消滅	-	○	×	見込に指押さえ有り
	110	I-15/Ⅳa I-16/Ⅲ	(11.6)	7.6	(2.2)	精緻 (砂粒の抜けた孔多い)	5YR6/3 (にぶい橙)	ナデで消滅	-	○	×	-
	111	F-14/表採	(12.2)	8.8	(2.4)	赤多い	5YR7/8 (橙)	ナデで消滅	-	○	×	-
	112	H-15/Ⅲ	13.0	(9.0)	(3.1)	精緻	7.5YR7/6 (橙)	不明	-	不明	×	-
	113	F-13/Ⅲb	14.0	(7.4)	(3.7)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	不明	-	不明	×	-
	114	I-16/Ⅳa	15.8	(10.4)	(4.5)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	不明	-	不明	×	-
	115	H-14/Ⅲ	(13.4)	6.8	(3.7)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-
	116	G-12/Ⅲb	13.0	5.6	4.1	精緻 (砂粒の抜けた孔多い)	10YR7/6 (明黄褐)	時計回り (ナデあり)	-	○	○	-

第26表　土師器坏遺物観察表(２)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	調整				備考
								底部ヘラ切り	見込ナデ	静止ナデ	未調整	-
65	117	I-16/表土 K-15/Ⅳa	14.2	(6.8)	(4.0)	砂粒・石	10YR8/4 (浅黄橙)	不明	-	不明	×	-
	118	K-14/Ⅳa H-15/Ⅲ	15.0	(13.0)	(2.0)	砂粒	7.5YR7/6 (橙)	不明	-	不明	×	-
	119	J-15/Ⅳa	(11.4)	6.8	(2.7)	精緻	7.5YR7/6 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	×	-
	120	I-14/Ⅳa	(14.0)	7.6	(3.8)	精緻	7.5YR8/6 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	-
	121	I-14/Ⅳa	15.0	6.8	5.0	精緻 (砂粒の抜けた孔あり)	10YR8/6 (黄橙)	不明	-	不明	×	-
66	122	K-15/Ⅲ	11.8	6.4	5.2	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	時計回り(ナデあり)	-	○	×	-
	123	I-6/Ⅳa J-6/Ⅳa	14.8	7.2	5.3	精緻 (わずかに赤含む)	7.5YR6/6 (橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	124	G-15/Ⅳa	11.6	6.0	4.8	精緻	7.5YR6/4 (にぶい橙)	不明	-	不明	×	-
	125	K-9/Ⅳa上	12.1	5.4	4.5	精緻	7.5YR6/6 (橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	126	G-13/Ⅲa G-12/表土	12.0	6.8	4.7	精緻 (砂粒の抜けた孔あり)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	ナデで消滅	時計回り	不明	○	-
	127	F-13/Ⅲ G-14/表採 K-8/Ⅲ	13.6	6.0	5.1	精緻 (砂粒の抜けた孔あり)	7.5YR7/6 (橙)	反時計回り(ナデあり)	-	○	○	-
	128	K-13/Ⅲ	13.8	7.0	5.0	精緻 (砂粒の抜けた孔多い)	7.5YR6/6 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	硬質
	129	H-15/Ⅳa	10.6	5.8	3.6	精緻	7.5YR8/6 (浅黄橙)	板状の圧痕	-	○	○	-
	130	I-15/Ⅲ K-15/Ⅲ	11.4	5.6	4.3	精緻	2.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	131	G-13/Ⅲa G-13/Ⅲb	12.0	5.4	4.1	精緻 (砂粒の抜けた孔多い)	7.5YR6/6 (橙)	時計回り (ナデあり)	時計回り	○	○	-
	132	J-13/Ⅳa J-14/Ⅲ	12.2	(8.6)	(3.5)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	不明	-	不明	×	-
	133	J-10/Ⅳa J-13/Ⅳ	12.2	(8.2)	(3.1)	精緻	10YR6/4 (にぶい黄橙)	不明	-	不明	×	-
	134	注記なし	12.0	5.4	4.7	精緻	7.5YR7/6 (橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	135	G-13/Ⅲb H-13/Ⅲ H-14/Ⅲ	12.4	5.2	4.5	精緻	7.5YR6/6 (橙)	不明	-	不明	○	-
	136	J-14/ Ⅳa	(5.2)	6.0	(3.1)	精緻	7.5YR8/8 (黄橙)	時計回り (ナデあり)	時計回り	×	○	-
	137	J-12/Ⅳa	12.0	(8.4)	(4.0)	精緻	7.5YR8/8 (黄橙)	不明	-	不明	×	-
	138	J-13	12.2	(9.6)	(2.4)	精緻	5YR5/8 (明赤褐)	不明	-	不明	×	-
	139	G-12/Ⅲb G-13/Ⅲb	11.8	(6.2)	(4.0)	精緻	7.5YR7/6 (橙)	不明	-	不明	○	-
	140	G-13/Ⅳa	12.0	6.6	4.4	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	141	I-7/Ⅳa	10.6	6.8	3.9	精緻	5YR7/6 (橙)	明瞭に残る	-	×	○	-
	142	K-14/Ⅲ	(9.2)	7.2	(1.0)	精緻	7.5YR7/6 (橙)	時計回り (明瞭に残る)	-	○	×	-
	143	I-16/Ⅲ	12.2	6.2	4.0	精緻	10YR7/6 (明黄褐)	ナデでほぼ消滅	-	×	○	-
	144	H-13/Ⅳa	(9.6)	6.8	(2.2)	精緻	7.5YR7/4 (にぶい橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	×	-
	145	I-13/Ⅳa	(11.2)	6.6	3.0	精緻 (わずかに赤含む)	2.5YR6/8 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	×	-
67	146	I-11/Ⅲ	(8.6)	6.2	(2.0)	精緻 (砂粒の抜けた孔あり)	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	×	-
	147	H-15/Ⅲ	(8.8)	6.8	(1.9)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	-
	148	I-12/Ⅲ L-12/Ⅲ	(10.0)	5.2	(3.4)	精緻	7.5YR7/8 (黄橙)	時計回り (ナデあり)	時計回り	○	○	-
	149	Ⅳa	(9.2)	6.0	(2.0)	精緻	5YR6/6 (橙)	ヘラ切り痕残る	-	○	×	-
	150	I-15/Ⅳa	(10.2)	6.8	(2.7)	精緻	5YR6/6 (橙)	ナデで消滅	-	不明	×	-
	151	I-7/Ⅲ	(12.0)	8.2	(3.8)	精緻	7.5YR7/6 (橙)	明瞭に残る	-	不明	○	-
	152	G-12/Ⅳa G-13/Ⅲ	(10.2)	7.6	(1.9)	精緻 (砂粒の抜けた孔多い)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	明瞭に残る	-	不明	×	-
	153	I-16/Ⅲ	(9.2)	7.2	(1.5)	精緻 (砂粒の抜けた孔あり)	7.5YR8/6 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-

第27表　土師器坏遺物観察表(3)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	調整				備考
								底部ヘラ切り	見込ナデ	静止ナデ	未調整	-
67	154	K-15/Ⅲ	(8.4)	6.0	(1.2)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	○	不明	-
	155	2T/Ⅲa	(12.0)	7.8	(3.9)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-
	156	H-14/Ⅲ	(9.4)	7.2	(1.1)	精緻	2.5Y8/3 (淡黄)	ナデで消滅	時計回り	×	○	-
	157	J-5/Ⅲ	(10.4)	6.6	(3.1)	精緻	7.5YR8/6 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	158	I-13/Ⅳa	(10.2)	6.6	(2.0)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	明瞭に残る	-	不明	○	-
	159	I-6/Ⅳa	(9.2)	6.8	(1.7)	精緻	5YR7/6 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-
	160	F-12/Ⅳa	(8.6)	6.2	(1.6)	精緻	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	161	J-15/Ⅳa	(9.2)	6.2	(1.5)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	時計回り (ナデあり)	時計回り	×	○	-
	162	L-10/Ⅲ	(8.8)	5.4	(2.2)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-
	163	J-14/Ⅳa	(11.4)	7.0	(1.7)	1mm程度の砂粒	2.5Y8/2 (灰白)	明瞭に残る	-	×	○	-
	164	I-13/Ⅲ	(9.4)	7.2	(1.7)	精緻	10YR7/3 (にぶい黄橙)	明瞭に残る	時計回り	×	○	-
	165	E-12/Ⅲa F-12/Ⅲb	12.6	5.5	5.5	精緻 (砂粒の抜けた孔多い)	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	-
	166	G-13/Ⅳa I-15/Ⅲ	11.2	6.0	3.8	精緻	2.5Y8/3 (淡黄)	不明	-	不明	不明	-
	167	J-14/Ⅳa	13.0	5.6	3.7	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	明瞭に残る	-	○	不明	-
	168	I-15/Ⅲ	(9.2)	6.2	(2.2)	精緻 (赤含む)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	169	E-7/Ⅲ F-7/Ⅲ	(10.0)	7.0	(2.0)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	170	I-13/Ⅳa	13.0	(8.8)	(2.9)	精緻	5YR7/8 (橙)	不明	-	不明	×	-
	171	K-15/Ⅲ	13.0	(8.3)	(3.3)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	不明	-	不明	×	-
	172	I-12/Ⅳa I-13/Ⅲ, Ⅳa	13.0	(8.8)	(3.3)	精緻	7.5YR7/6 (橙)	不明	-	不明	×	-
	173	I-12/Ⅲ	(11.6)	6.4	(3.0)	精緻 (わずかに石含む)	5YR6/6 (橙)	ナデで消滅	-	○	○	-
	174	I-7/Ⅲ	(10.8)	7.2	(2.6)	精緻	5YR7/8 (橙)	明瞭に残る	-	不明	×	-
	175	F-10/Ⅲb	(12.8)	7.0	(3.1)	砂粒、石多く含む	10YR7/6 (明黄褐)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	底部に簾状の工具痕あり
	176	I-14/Ⅲ	13.2	5.8	3.7	精緻	7.5YR7/6 (橙)	ナデで消滅	-	○	○	-
	177	I-13/Ⅳa K-14/Ⅲ	13.6	7.0	(3.2)	精緻	7.5YR6/6 (橙)	反時計回り (ナデあり)	反時計回り	×	○	-
	178	H-15/Ⅲ	14.8	8.0	(4.1)	砂粒、石	5YR7/6 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-
	179	L-5/表土	(12.0)	7.6	(2.7)	砂粒	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	-
68	180	G-11/Ⅲb G-11/Ⅳa	(10.0)	5.2	(2.8)	精緻 (わずかに石含む)	5YR7/6 (橙)	工具により消滅	反時計回り	○	○	-
	181	I-15/Ⅲ	(9.2)	6.4	(1.2)	精緻 (砂粒の抜けた孔多い)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデで消滅	-	○	×	硬質
	182	H-15/Ⅲ	(10.6)	6.4	(1.6)	精緻	10YR6/6 (明黄褐)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-
	183	I-12/Ⅲ I-13/Ⅲ	(9.6)	5.6	(2.3)	精緻	2.5YR5/6 (明赤褐)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	-
	184	J-14/ Ⅳa	(11.8)	8.0	(2.1)	精緻	7.5YR7/8 (黄橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	185	K-15/Ⅲ	12.8	7.2	4.2	赤多く含む	7.5YR7/8 (黄橙)	ナデでほぼ消滅	時計回り	×	○	-
	186	I-13/Ⅳa	(12.0)	7.6	(2.6)	礫多い (石、角、赤含む)	7.5YR8/4 (浅黄橙)	時計回り (ナデあり)	時計回り	○	×	-
	187	I-15/Ⅲ	(11.0)	7.8	(2.9)	砂粒 (砂粒の抜けた孔多い)	7.5YR7/6 (橙)	ナデでほぼ消滅	時計回り	不明	×	-
	188	I-5/Ⅳa	(9.7)	6.8	(2.1)	精緻	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	胴部下端にケズリ
	189	L-12/Ⅲ	(4.7)	6.6	(1.8)	精緻	7.5YR7/6 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	×	○	見込に圏線状のつよいナデ
	190	H-12/ Ⅳa I-11/Ⅲ	(10.4)	5.0	(3.2)	精緻	5YR7/6 (橙)	ナデで消滅	-	○	×	-

第28表　土師器坏遺物観察表(４)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	調整				備考
								底部ヘラ切り	見込ナデ	静止ナデ	未調整	-
68	191	K-15/Ⅲ	(11.0)	5.5	(3.4)	精緻	7.5YR6/6(橙)	ナデでほぼ消滅	反時計回り	不明	○	-
	192	G-13/Ⅲb	(11.6)	5.6	(2.8)	精緻	7.5YR7/4(にぶい橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	193	I-14/Ⅳa	8.4	6.0	(1.5)	精緻	7.5YR7/4(にぶい橙)	時計回り(わずかにナデ)	反時計回り	×	×	-
	194	I-11/Ⅳa	(9.4)	6.4	(2.0)	精緻(砂粒の抜けた孔あり)	7.5YR7/6(橙)	時計回り(わずかにナデ)	時計回り	×	○	-
	195	J-12/Ⅲ	13.0	6.0	4.3	精緻	5YR7/6(橙)	不明	-	不明	○	-
	196	K-7/Ⅳa K-11/Ⅳa	13.6	(10.0)	(3.3)	砂粒	2.5YR5/6(明赤褐)	不明	-	不明	×	-
	197	J-7/Ⅳa	(10.6)	7.6	(2.2)	精緻	7.5YR7/6(橙)	時計回り	-	不明	不明	-
	198	H-15/Ⅲ	(11.8)	8.0	(2.3)	赤(砂粒の抜けた孔多い)	5YR6/8(橙)	ナデで消滅	-	○	○	-
	199	-	(10.4)	6.4	2.5	精緻(石含む)	5YR5/6(明赤褐)	時計回り(ナデでほぼ消滅)	-	○	○	-
	200	H-14/Ⅲ	(9.4)	7.0	(2.4)	精緻	10YR5/6(黄褐)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	201	K-15/Ⅲ		5.8	(2.3)	精緻(砂粒の抜けた孔あり)	7.5YR7/6(橙)	時計回り(わずかにナデ)	時計回り	×	○	-
	202	K-13/Ⅲ	(8.5)	6.4	(1.2)	精緻	2.5y6/2(灰黄)	ナデで消滅	-	×	○	-
	203	K-14/Ⅳa	(9.6)	7.0	(2.3)	精緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	204	J-12/Ⅲ	(10.0)	6.0	(1.8)	精緻	10YR6/3(にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	205	H-14/Ⅲ	12.6	6.8	3.9	精緻	5YR7/6(橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	-
	206	H-12/Ⅲ	(12.4)	7.6	3.3	精緻(砂粒の抜けた孔あり)	5YR6/6(橙)	ナデで消滅	時計回り	×	○	-
	207	I-11/Ⅲ I-11/Ⅳ	(11.4)	6.0	(3.2)	精緻	10YR6/4(にぶい黄橙)	時計回り(ナデあり)	時計回り	×	○	-
69	208	K-12/Ⅳa	(8.4)	5.4	(1.7)	精緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	明瞭に残る	-	×	○	-
	209	K-10/Ⅲ	(11.0)	5.4	(3.5)	精緻(わずかに赤あり)	10YR7/6(明黄褐)	ナデで消滅	-	○	不明	-
	210	K-12/Ⅳa	(9.6)	4.8	(3.2)	精緻	10YR8/4(浅黄橙)	不明	-	不明	○	-
	211	H-13/Ⅲ	(10.6)	5.6	(4.1)	精緻	10YR8/3(浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-
	212	J-16/Ⅲ	(11.4)	6.4	(4.2)	精緻	2.5YR7/3(淡赤橙)	ナデあり	-	不明	○	-
	213	K-14/Ⅲ J-14/Ⅲ K-14/Ⅲ	12.2	6.6	4.2	精緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	不明	-	不明	-	-
	214	H-14/Ⅲ	12.2	6.8	3.8	精緻	10YR8/4(浅黄橙)	明瞭に残る	-	○	×	口縁部に煤付着
	215	K-14/Ⅲ	13.0	6.1	4.4	精緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	○	×	-
	216	I-14/Ⅳa	13.0	5.0	4.0	精緻	10YR7/3(にぶい黄橙)	不明	-	不明	×	-
	217	H-13/Ⅳa	(8.8)	5.6	(1.8)	精緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	×	○	-
	218	I-5/Ⅲ	(8.6)	5.6	(1.5)	精緻(砂粒の抜けた孔あり)	7.5YR8/4(浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	不明	-
	219	J-4/Ⅳa	(8.4)	5.4	(2.5)	精緻	7.5YR8/4(浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	220	H-14/Ⅲ	(10.0)	5.4	(2.5)	精緻	7.5YR7/6(橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	-
	221	I-14/Ⅲ I-14/Ⅳa	(8.6)	5.8	3.6	精緻	10YR8/4(浅黄橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	222	I-14/Ⅲ	(9.2)	6.0	(2.2)	精緻	10YR8/4(浅黄橙)	ナデで消滅	時計回り	×	○	-
	223	I-15/Ⅲ	(9.4)	6.0	(1.7)	精緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	-
	224	L-5/表土	(10.4)	6.0	(1.9)	精緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	○	○	-
	225	2T/Ⅳa	(5.8)	6.4	(2.1)	精緻	7.5YR7/6(橙)	明瞭に残る	-	○	不明	-
	226	H-8/Ⅲ H-9/Ⅲ	(11.0)	6.4	2.7	精緻	10YR8/4(浅黄橙)	ヘラ切り痕残る	-	○	○	-
	227	J-14/Ⅲ	(9.8)	6.0	(2.3)	精緻	7.5YR7/6(橙)	ナデで消滅	時計回り	○	×	-

第29表　土師器坏遺物観察表(５)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	調整				備考
								底部ヘラ切り	見込ナデ	静止ナデ	未調整	-
69	228	J-10/Ⅲ	(10.0)	6.2	(1.9)	精緻	7.5YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	229	I-8/Ⅲ	(12.4)	5.8	(1.8)	精緻	7.5YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	230	K-15/Ⅲ	(10.0)	5.0	(3.7)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	不明	-	不明	○	-
	231	H-14/Ⅲ	(8.2)	5.0	(1.5)	精緻	7.5YR7/6 (橙)	時計回り (ナデあり)	時計回り	×	○	-
	232	K-5/Ⅲ	(9.2)	5.0	(2.8)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	同心円状	×	○	-
	233	K-15	(8.4)	5.6	(1.6)	精緻	10YR8/3 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	234	J-14/Ⅳa	(9.4)	5.6	(2.4)	精緻	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	235	G-13/Ⅲb	(7.2)	5.8	(1.3)	精緻	10YR8/3 (浅黄橙)	ナデで消滅	時計回り	×	○	-
	236	I-14/Ⅳa	(8.8)	5.8	(2.6)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	明瞭に残る	-	×	○	-
	237	K～L-13～14	(10.8)	5.8	(2.9)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	時計回り	×	○	-
	238	L-5/表土	(10.0)	6.0	(2.3)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	時計回り	×	○	-
	239	I-13/Ⅲ	(8.2)	6.0	(1.2)	精緻	10YR8/3 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	240	G-12/Ⅲ	(9.6)	6.0	(2.0)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	時計回り	×	○	-
	241	K-6/Ⅳa	(8.2)	6.0	(1.2)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	不明	-	不明	○	-
70	242	I-12/Ⅲ	(10.6)	6.0	(3.0)	精緻	10YR8/6 (黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	×	-	-
	243	J-14/Ⅳa	(9.2)	6.0	(2.4)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	時計回り (ナデあり)	-	○	○	-
	244	J-12/Ⅳa	(8.2)	6.0	(2.1)	精緻	10YR8/3 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	×	-
	245	K-5/Ⅲ	(9.8)	6.0	(2.5)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	時計回り	×	○	-
	246	I-14/Ⅲ	(8.4)	6.0	(1.2)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	明瞭に残る	時計回り	×	○	-
	247	I-14	(10.0)	6.2	(2.5)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	248	J-15/Ⅲ	(10.6)	6.2	(2.2)	精緻	2.5Y8/3 (淡黄)	明瞭に残る	-	不明	×	-
	249	J-14/Ⅳa	(9.6)	6.2	(1.6)	精緻	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	×	不明	-
	250	I-14	(10.0)	6.2	(2.5)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	251	I-14/Ⅳa	(10.0)	6.2	(2.5)	精緻	2.5YR5/6 (明赤褐)	明瞭に残る	-	×	×	-
	252	J～K-14/Ⅲ	(10.0)	6.4	(2.0)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	×	×	-
	253	J-13/Ⅳa	(12.2)	6.4	(2.7)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	254	I-14/Ⅳa	(10.2)	7.0	(2.2)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	×	×	-
	255	K-5/Ⅲ	(9.8)	6.4	(2.5)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	時計回り	×	○	-
	256	H-14/Ⅳa	(10.8)	6.6	(2.4)	精緻	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	257	G-7/Ⅲ G-8/Ⅳa	(9.9)	6.6	(2.4)	精緻	2.5Y7/3 (浅黄)	ナデで消滅	-	×	○	-
	258	I-11/Ⅲ	(11.4)	6.8	(2.2)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	-
	259	I-6/Ⅳa	(9.8)	6.8	(2.2)	赤多く含む	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	×	○	-
	260	L-4/Ⅲ	(10.0)	6.8	(2.0)	精緻	10YR7/3 (にぶい黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	×	-
	261	I-14/Ⅳa	(9.6)	6.8	(2.0)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	時計回り(ナデあり)	-	×	○	-
	262	I-16/Ⅲ	(11.8)	6.8	(3.6)	精緻	7.5YR8/6 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-
	263	L-5/表土	(9.4)	6.6	(2.0)	精緻	5YR8/4 (淡橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	264	K-13/Ⅲ	(10.0)	6.8	(2.4)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデで消滅	時計回り	×	○	-
	265	J-6/Ⅲ J-7/Ⅳa	(10.8)	6.8	(2.6)	砂粒・石・赤	7.5YR8/6 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	不明	-

第30表　土師器坏遺物観察表(６)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	調整				備考
								底部ヘラ切り	見込ナデ	静止ナデ	未調整	-
70	266	K-14/Ⅲ	(11.0)	7.0	(2.5)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	不明	-	不明	○	-
	267	J-15/Ⅳa	(9.4)	7.0	(1.7)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	268	J-10/Ⅳa	(11.4)	7.0	(3.4)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	×	-
	269	I-6/Ⅲ	(9.6)	7.0	(1.9)	精緻	2.5YR6/3 (にぶい橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	×	-
	270	J-15/Ⅲ	(9.6)	7.0	(1.8)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	○	-
	271	H-12	(9.2)	7.0	(2.0)	精緻	2.5Y8/4 (淡黄)	ナデでほぼ消滅	-	○	○	-
	272	K-9/Ⅳa	(9.2)	7.0	(1.9)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
	273	K-6/Ⅳa	(13.0)	7.0	(3.5)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	不明	-
	274	I-13/Ⅳa	(10.6)	7.2	(2.3)	精緻	10YR8/3 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	×	-
	275	J-14/Ⅲ	(12.8)	7.4	(3.2)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	276	G-13/Ⅲb	(10.0)	7.6	(2.0)	赤多く含む	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	○	-
	277	J～K-13/ Ⅲ～Ⅳ	(10.4)	7.6	(2.6)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	明瞭に残る	-	不明	○	-
	278	注記なし	(10.6)	7.0	(2.6)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	不明	-	不明	○	-
	279	L-12/Ⅲ	(11.2)	7.4	(2.8)	精緻	10YR8/3 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	×	○	-
71	280	J-7/Ⅳa	(6.8)	5.2	(2.2)	精緻 (赤含む)	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデでほぼ消滅	時計回り	×	×	-
	281	G-13/Ⅲb	(7.0)	6.0	(1.0)	精緻	2.5YR6/3 (にぶい橙)	ナデでほぼ消滅	-	○	×	-
	282	K-15/Ⅲ	(8.4)	6.8	(1.7)	精緻	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	283	J-14/Ⅲ	(7.8)	6.6	(1.1)	精緻	7.5YR6/6 (橙)	ナデで消滅	時計回り	×	×	-
	284	G-13/Ⅲb	(9.4)	6.4	(2.2)	精緻	7.5YR8/6 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	不明	×	-
	285	K-15/Ⅲ	(8.2)	6.0	(1.9)	砂粒、石	10YR8/4 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	×	×	-
	286	K-9/Ⅲ	(8.6)	6.4	(1.6)	砂粒、石	5YR6/6 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	287	I-7/Ⅳa	(9.2)	6.6	(1.9)	砂粒、石	5YR6/8 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	288	J-7/Ⅲ	(8.6)	6.4	(1.9)	精緻	5YR7/8 (橙)	ナデで消滅	-	×	×	-
	289	J-7/Ⅳa	(8.6)	6.4	(2.3)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	×	×	-
	290	G-13/Ⅲb	(8.8)	6.0	(1.2)	精緻 (赤含む)	2.5YR6/8 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	291	L-5/表土	(8.4)	6.4	(1.3)	砂粒	5YR7/6 (橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	292	J-7/Ⅳa	(9.2)	5.8	(2.0)	精緻 (赤含む)	7.5YR7/4 (にぶい橙)	ナデでほぼ消滅	-	不明	×	-
	293	J-15/Ⅲ	(7.8)	6.8	(1.2)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	明瞭に残る	-	○	○	-
	294	K-15/Ⅳa	(12.0)	8.0	(2.5)	精緻	10YR8/6 (黄橙)	ナデでほぼ消滅	-	×	×	-
	295	J-13/Ⅲ Ⅰ-14/Ⅲa	14.0	(7.6)	1.6	礫多い	7.5YR7/6 (橙)	ナデで消滅	-	○	×	-
	296	Ⅰ-6/Ⅳa Ⅰ-13/Ⅲ	15.6	(10.8)	2.0	礫多い	7.5YR8/6 (浅黄橙)	ナデで消滅	-	-	×	-
72	297	H-14/Ⅲ	17.6	(9.6)	(4.7)	精緻	5YR6/8 (橙)	不明	-	不明	×	高台高=不明
	298	K-14/Ⅲ J-14/Ⅲ	14.8	(9.0)	(4.3)	精緻	5YR7/6 (橙)	不明	-	ミガキ	×	高台高=1.5
	299	H-12/Ⅳa	(15.0)	8.4	(4.9)	赤わずかに含む	7.5YR7/6 (橙)	不明	-	不明	×	内面=にぶい黄橙 (10YR6/4)　高台高=1.5
	300	J-12/ⅢⅣa J～I-13/Ⅲ	13.6	7.4	5.8	精緻	7.5YR6/6 (橙)	ナデで消滅	ミガキ	ミガキ	×	-
	301	I-14/Ⅲ I-14/Ⅳa J-14/Ⅲ K-14/Ⅳa	15.2	7.1	7.6	精緻	7.5YR5/6 (明褐)	ナデで消滅	ミガキ	ミガキ	×	-
	302	K-4/Ⅲ	(13.6)	(7.0)	(5.5)	砂粒・石	10YR7/6 (明黄褐)	高台付近にナデ	-	ミガキ	○	内面=にぶい褐 (7.5YR5/4)　高台高=0.5

第31表　土師器坏遺物観察表(7)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	調整				備考
								底部ヘラ切り	見込ナデ	静止ナデ	未調整	-
72	303	I-14/Ⅲ	14.8	(6.2)	5.6	精緻	7.5YR8/8 (黄橙)	高台付近にナデ	ミガキ	ミガキ	×	内面=赤(10R5/8)
	304	I-12/Ⅲ I-14/Ⅲ	(14.4)	9.4	(3.1)	精緻	5YR6/4 (にぶい橙)	不明	-	ミガキ	不明	-
	305	K-15/Ⅳa	(9.8)	(5.4)	(3.7)	精緻	7.5YR6/4 (にぶい橙)	高台付近にナデ	ミガキ	ミガキ	×	-
	306	I-16/Ⅲ	(11.6)	(6.6)	(3.0)	精緻	10YR8/4 (浅黄橙)	高台付近にナデ	ミガキ	ミガキ	×	高台高=0.3
	307	H-14/Ⅲ J-15/Ⅳa	(13.0)	(7.2)	(3.8)	精緻 (砂粒の抜けた孔多い)	2.5YR6/8 (橙)	時計回り (ナデあり)	-	○	×	高台高=1.2
	308	K-15/Ⅳa	17.6	7.2	4.9	砂粒・石	7.5YR7/4 (にぶい橙)	高台付近にナデ	-	○	×	内面=にぶい黄橙 (10YR7/4)　高台高=1.5
	309	F-12/Ⅲb	(6.8)	8.0	(1.2)	精緻	5YR7/8 (橙)	ナデで消滅	-	不明	×	高台高=1.0
	310	J-11/Ⅳa	(7.0)	7.2	(1.6)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	高台付近にナデ	-	○	不明	高台高=1.2
	311	3T/Ⅲb	(8.0)	6.4	(1.7)	精緻	5YR7/8 (橙)	ナデで消滅	-	不明	×	内面=赤褐(5YR4/6)
	312	K-15/Ⅲ	(4.2)	7.0	(2.1)	精緻	7.5YR6/4 (にぶい橙)	ナデで消滅	ミガキ	ミガキ	×	高台高=0.4
	313	J～K-14/Ⅲ	(7.6)	6.2	(2.2)	精緻	5YR5/4 (にぶい赤褐)	高台付近にナデ	ミガキ	ミガキ	不明	高台高=0.6
	314	K-10/Ⅲ	(9.8)	7.4	(2.5)	砂粒・石	7.5YR6/6 (橙)	不明	-	不明	×	高台高=0.8
	315	G-12/Ⅲ	(9.0)	7.6	(1.9)	赤	10YR7/3 (にぶい黄橙)	不明	-	○	×	内面=橙(5YR7/6)
	316	G-15/Ⅲ	(10.0)	8.2	(3.0)	精緻	2.5YR6/8 (橙)	高台付近にナデ	-	不明	×	高台高=0.8
	317	I-11/Ⅲ H-12/Ⅲ I-14/Ⅳa	(7.8)	7.2	(2.0)	精緻	5YR7/6 (橙)	高台付近にナデ	ミガキ	反時計回り	×	高台高=0.9
	318	H-14/Ⅲ	(9.0)	6.8	(1.9)	精緻 (砂粒の抜けた孔多い)	7.5YR7/8 (黄橙)	高台付近にナデ	-	○	-	高台高=1.1
	319	K-8/Ⅲ	(9.6)	7.2	(2.4)	精緻	10YR7/4 (にぶい黄橙)	ナデで消滅	-	不明	×	-
	320	L-4/Ⅲ	(9.6)	7.4	(3.4)	砂粒・石	5YR6/6 (橙)	ナデで消滅	-	不明	×	-

方向のナデが認められミガキは施されていない。表面に窪みが複数確認される。No319は浅黄橙色を呈し軟質で，No320は高台が大きく外反し，高台の器壁は薄く端部は丸くすぼまる。高台内側は底部外面から緩やかに反りながら端部に至る。

須恵器坏(第73,74図)

底部39点を確認した。土師器坏，黒色土器椀に比べて少数である。高台をもつものはなく，全て平底で，蓋も確認できない。

形態は大多数が直線的に立ち上がる体部で，曲線的な立ち上がりはNo214の1点である。法量は，口径12～13cm程度の中型と16～17cm程度の大型が認められる。高さは４cm前後のものが多い。

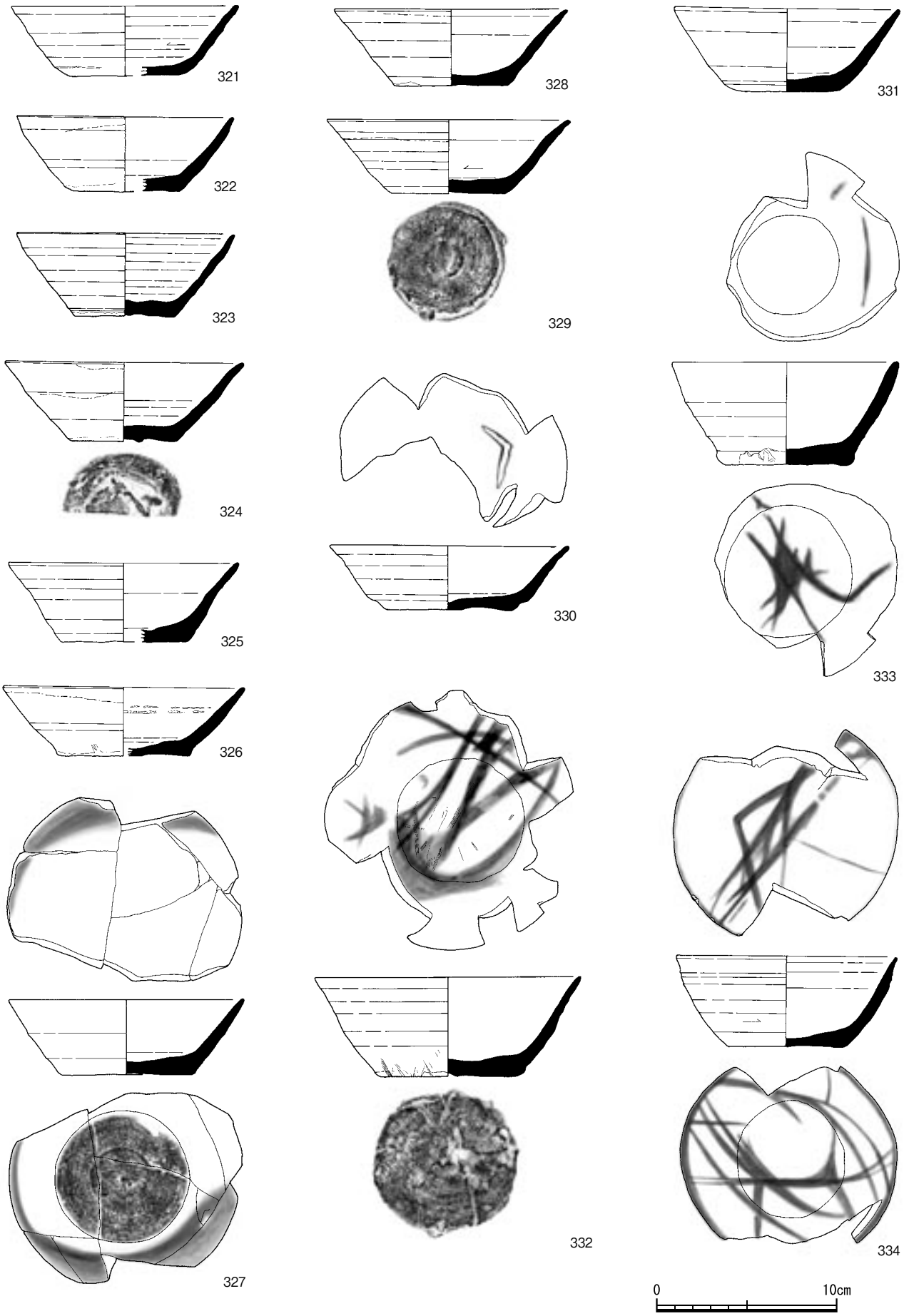
本遺跡出土の須恵器坏の最大の特徴は色調である。標準的な須恵器色である灰色を呈するものは少なく，多くは酸化焔焼成により橙色を呈する。また，多くに火襷状の痕跡が認められその部分だけ灰色を呈する。これは，窯詰め段階で土器どうしの釉付を防ぐため，植物繊維状のものを土器に巻き付けたために生じたものと思われる。火襷は内外面に認められるものと，内面のみに認められるものがある。また，外面が灰色を呈し内面が橙色を呈するもの，口縁部付近のみに灰色が認められるものなど色調の様子はさまざまなパターンが認められる。これらもおそらく窯詰めの方法，場所によって生じた違いであると思われる。

製作技法は，土師器坏と比較して須恵器坏の方が丁寧な作りとなっている。体部外面の回転ナデは土師器坏の場合，下端にナデきれていない部分が目立っていたのに対し，須恵器坏の場合は下端から丁寧にナデられている。一方，底部外面は土師器坏に比べてヘラ切りによる粘土のはみ出しが少なく，ナデ仕上げも丁寧である。ただ，それでもヘラ切り痕が残るものは多く認められる。

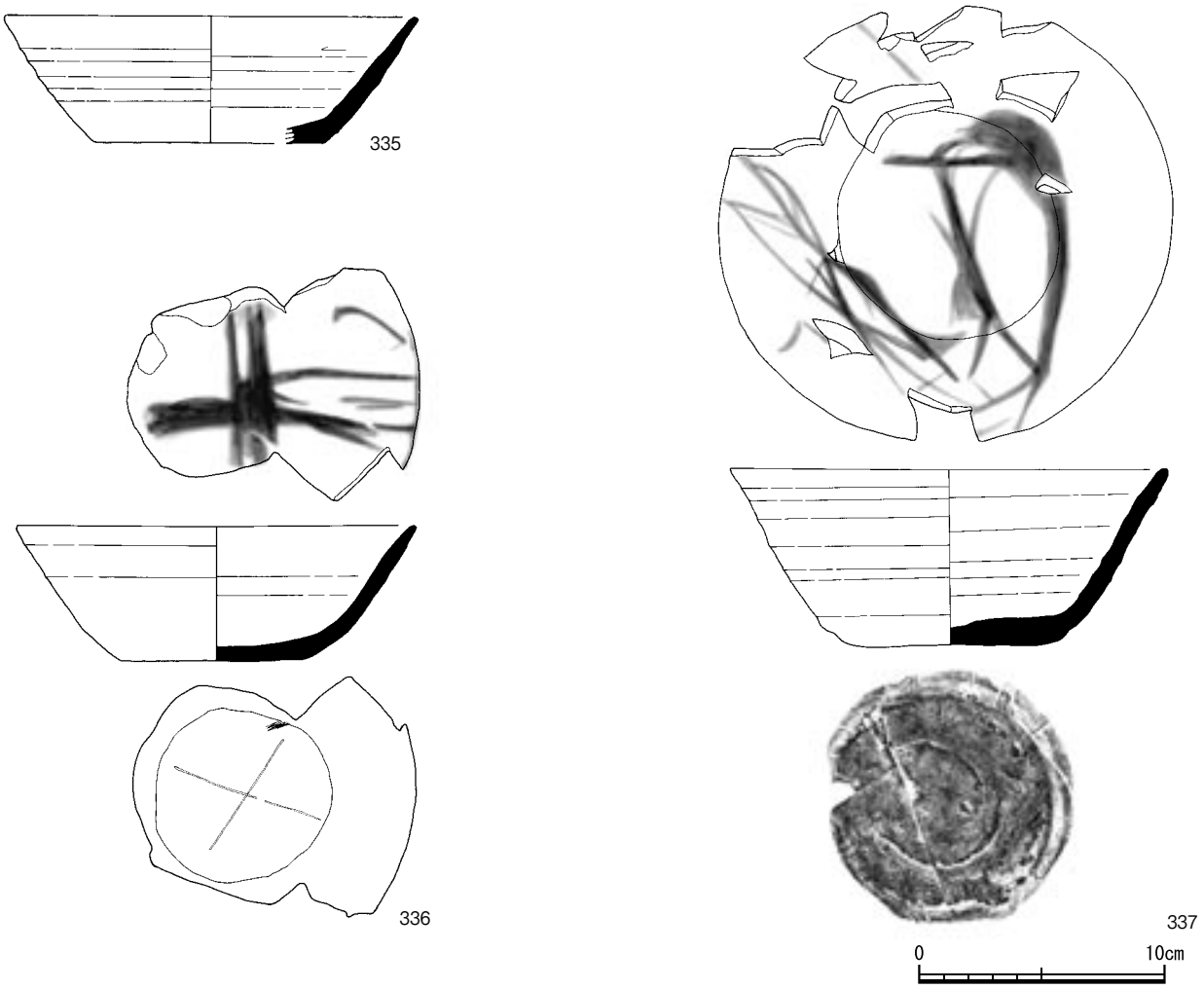
以下では個別の説明を行う。

No321～331は中型の浅手である。

No321は黄橙色を呈し軟質で，灰色の部分はほとんど残されない。体部外面の回転ナデは丁寧で，体部外面下端から認められる。内面では，底部と体部の境は明確で見込みには不整方向のナデが認められ，底部外面にはヘラ切り痕がある。No322も軟質で，内外面の口縁部付近が一部灰色に変色している。保存状態は良くないが，体部外面下端から丁寧なナデが看取される。底部外面はヘラ切り痕が明瞭に残る。No323も軟質で浅黄橙色を呈し，外面では口縁部から約１cmの幅が灰色に変色している。体部外面は丁寧なナデが認められるが下端に若干ナデきれていない部分がある。底部外面には



第73図　須恵器坏(１)



第74図　須恵器坏(２)

ヘラ切り痕が明瞭に残る。No325は硬質でにぶい黄褐色を呈し，不完全な還元である。体部は口縁部にかけてわずかに外反し，体部外面のナデは下端から丁寧にナデ，底部外面も丁寧なナデによってヘラ切り痕を消している。No326は内面が暗灰黄色，外面が明黄褐色を呈し，内面と外面の口縁部付近が還元された状態である。体部は若干曲線をもって立ち上がり，ナデは体部下端から丁寧にナデられている。また，体部外面の一部にケズリ痕が認められる。内面の暗灰黄色は部分的に剥落し橙色で，体部内面の中位で横方向に２条沈線状の圧痕が破線状に認められる。No327は内外面ともに明黄褐色を呈し，内面の口縁部付近の一部，外面の口縁部付近と一部が体部下半にかけて灰色の還元色が見られる。体部外面下端から丁寧なナデが認められ，内面も見込みの中心部分から丁寧なナデが施される。底部外面も丁寧にナデられるがヘラ切りの痕がわずかに残り，時計回りの渦巻き状になる。No328は内外面とも灰色の還元色を呈すが還元度は良くなく，黄色がかっている部分も見られる。体部外面下端には幅0.5cm程度のナデきれていない部分もあり，底部端にはヘラ切りによってはみ出た粘土も若干ある。No329は内外面ともに灰色を呈し標準的な須恵器の色調で，体部は若干内弯気味に立ち上がり口縁部付近で外反する。口縁部の平面形は若干いびつになり，外面の口縁部付近は幅１cm程度で灰オリーブに変色している。No330も標準的な須恵器の色調を呈し，高さが3.6cmで本遺跡の中では一番浅い。口縁部の平面形はいびつになっている。体部外面のナデは強く，下端から丁寧にナデられている。稜線は５条を数える。底部外面はヘラ切り痕が残り，一部は表面から深く切り込み，体部，底部に複数の指紋が認められる。No331は橙色を呈し，一部が灰色となり，体部外面下端にはナデきれていない部分がある。

No332～334は中型の深手で，高さは５cmを越える。

No332は口径14.8cmと若干大きい。内面には数か所に火襷が，外面は内面に比べて少ないが同様に認められる。なお，底部外面から体部外面にかけては，火襷と関わると思われる植物繊維状の圧痕が複数残る。底部外面のナデ仕上げは不十分で，器面は荒れている。No333は体部中位まで若干曲線状，上位は傾斜変換して丸みをもって立ち上がり，他に比べて器壁が厚い。色調は浅黄橙色を呈し，底部外面から体部に複数の火襷，内面には残存部で２条の火襷が認められる。底部は若干突出気味で，底部外面はナデによって丁寧に仕上げられるが，一部に粘土塊が付着している。

No334は体部が曲線状に立ち上がり，他と比べて特異である。口縁端部は強いナデでシャープに仕上げ，その部分は灰

色に変色している。色調は明黄褐色を基調とし，内外面に火襷が認められる。調整は全面が丁寧にナデられ，部分的にケズリや植物繊維状の圧痕が見られる。

No335～337は大型である。No335が浅手，No336と337が深手である。

No335は硬質でにぶい黄褐色を呈し，不完全な還元であ

る。丁寧なナデが体部外面下端から認められ，底部外面も残存部が少ないが丁寧にナデで仕上げる。内外面の一部に煤が付着している。No336は淡黄色を呈し軟質で，内面に火襷が，赤灰色となる。外面は部分的に灰色で，底部外面には「×」のヘラ記号が確認できる。調整は体部外面下端から丁寧にナデ，底部と体部の境は丸みをもつ。No337は口径17.8cmで，本遺跡の中で最大である。外面は褐灰色で底部付近が一

第32表　須恵器坏観察表(１)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	調整			備考
								外面	底部ヘラ切り	見込ナデ	見込静止ナデ	
73	321	H-15/Ⅳa	12.6	6.2	3.9	精緻	良好	10YR8/6 (黄橙)	-	-	○	
	322	J-15/Ⅳa	12	5.8	4.2	精緻	不良	10YR8/6 (黄橙)	不明	-	×	
	323	K-14/Ⅳa	12	5.6	4.6	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	時計回り	反時計回り	×	
	324	K-12/Ⅲ	13.2	5.8	4.4	精緻	良好	2.5Y7/3 (浅黄)	-	-	○	
	325	F-13/Ⅳa，J-15/Ⅳa	12.8	7	4.4	精緻	不良	10YR5/3 (にぶい黄褐)	-	-	×	
	326	J-6/Ⅳa	13.4	7.4	3.8	精緻	良好	10YR6/4 (にぶい黄橙)	-	-	×	
	327	J-7/ Ⅳa，J-13/Ⅲ J-13/Ⅳa，K-13/Ⅲ	13	7.2	4.2	精緻	良好	2.5GY6/1 (オリーブ灰)	時計回り	時計回り	×	
	328	K-14/Ⅲ	12.8	6.2	4.2	精緻	良好	5Y6/2 (灰オリーブ)	-	-	×	
	329	H-14/Ⅲ，I-14/Ⅲ I-14/Ⅳa，I-15/Ⅲ J-13/Ⅳa，J-14/Ⅲ J-14/Ⅳa	13.4	6	4.1	精緻	良好	7.5Y6/1 (灰)	時計回り	-	×	
	330	I-13/Ⅳa，I-14/Ⅳa J-13/Ⅲ，J-14/Ⅲ	13.2	7	3.6	精緻	良好	5Y6/2 (灰オリーブ)	-	-	?	
	331	H-13/Ⅲ下	12.4	6	4.6	精緻	不良	7.5YR7/6 (橙)	-	-	○	
	332	L-13/Ⅲ，K-13/Ⅲ	14.8	7.4	5.5	精緻	良好	10YR7/3 (にぶい黄橙)	-	-	○	
	333	I-11/Ⅲ，I-14/Ⅳa， J-12/Ⅲ，J-14/Ⅲ	12.6	6.7	5.6	精緻	良好	10YR8/4 (浅黄橙)	不明	時計回り	-	
	334	F-6/Ⅲ，F-6/Ⅳa G-7/Ⅳa	12.2	6.4	5.1	精緻	良好	10YR7/6 (明黄褐)	時計回り	-	○	
74	335	1T/Ⅲ，F-12/Ⅲb F-13/表採	17	9	5.2	精緻	不良	2.5Y6/3 (にぶい黄)	-	-	?	
	336	I-6/Ⅲ，I-7/Ⅳa J-7/Ⅳa，I-11/Ⅳa	16.4	7.6	5.6	精緻	不良	5Y8/3 (淡黄)	-	-	○	外.底部ヘラ記号あり
	337	2T/Ⅲa，6T/Ⅲb G-13/Ⅲa，H-13/Ⅳa J-13，J-14/Ⅲ J-14/Ⅳa，K-12/Ⅲ K-14/Ⅲ，K-14/Ⅳa K-13/Ⅳa，K-15/Ⅲ K-15/Ⅳa	17.8	8.2	7	精緻	良好	10YR4/1 (褐灰)	時計回り	時計回り	○	

部橙色を呈し，内面は火襷が認められる。調整は体部外面下端から丁寧なナデで，底部と体部の境は丸みをもつ。見込みには不整方向のナデ，底部外面は仕上げのナデが施されているがヘラ切り痕をわずかに残し，指紋が底部外面に数か所見られる。

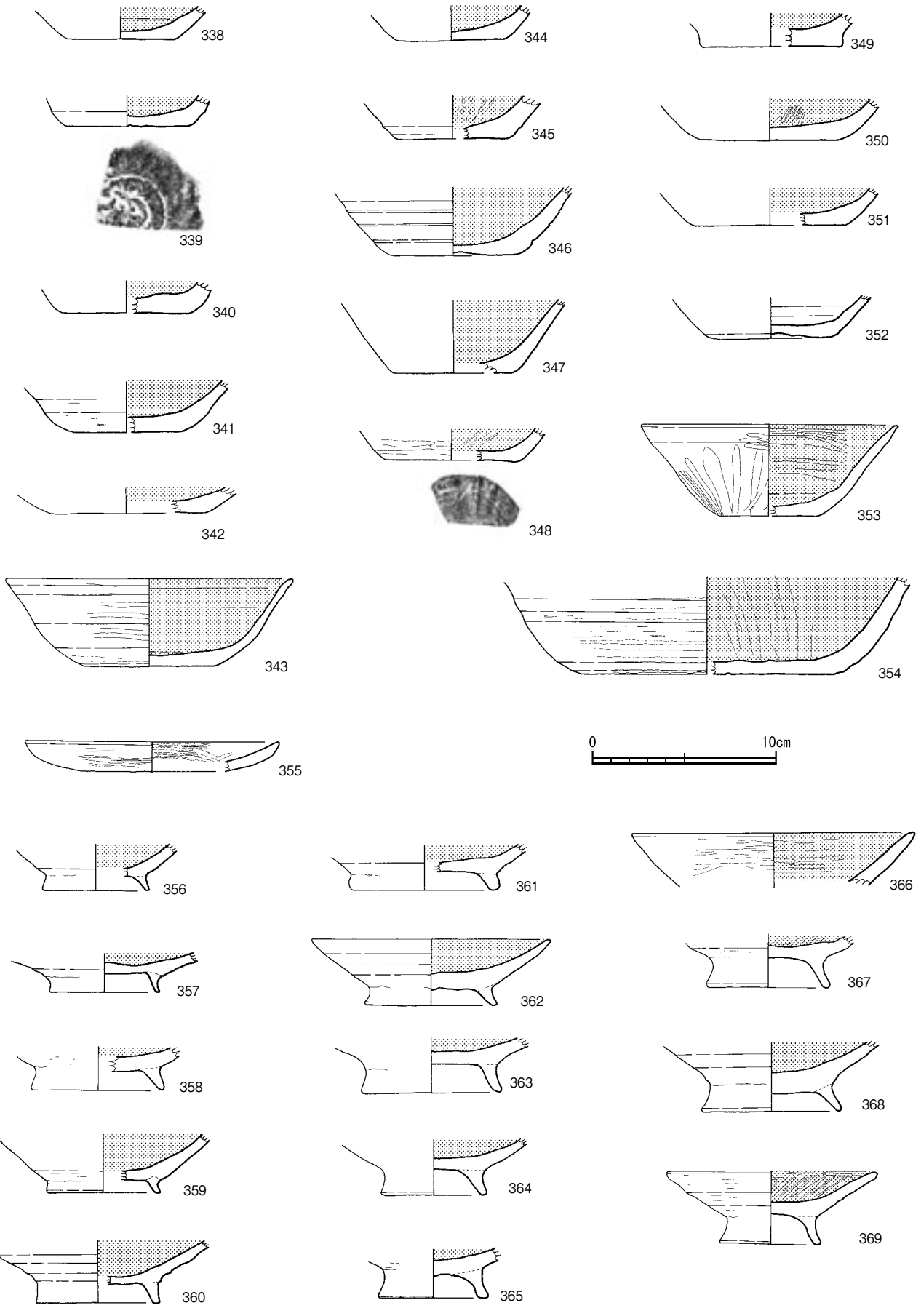
黒色土器坏・Ⅲ・椀(第75～79図)

黒色土器は平底を坏，高台付きを椀とし，器高が低いものを皿とした。皿には平底と，高台付きの両者を含む。出土状況は第58図で示した。

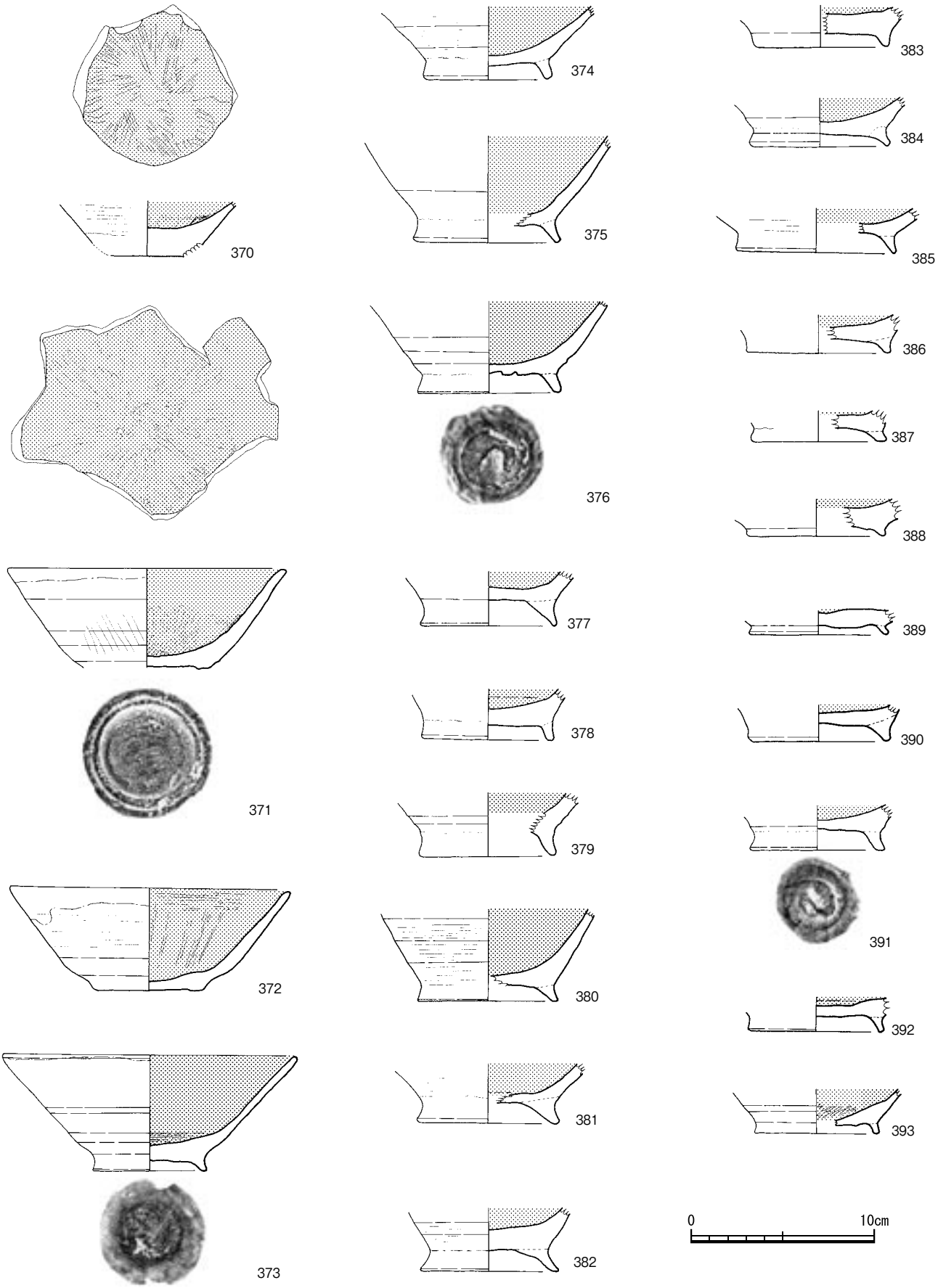
黒色土器は土師器杯に比べて少ない。底部カウントによるとおおよそ土師器杯と黒色土器の割合は６対１である。

器種の中でもっとも多いのが椀である。底部カウントからは高台付きが146点，平底が34点で高台付きが圧倒的に多い。底部カウントのために椀と皿との割合は明確にし得ないが，体部の残存しているものからは椀が圧倒的に多いと思われる。

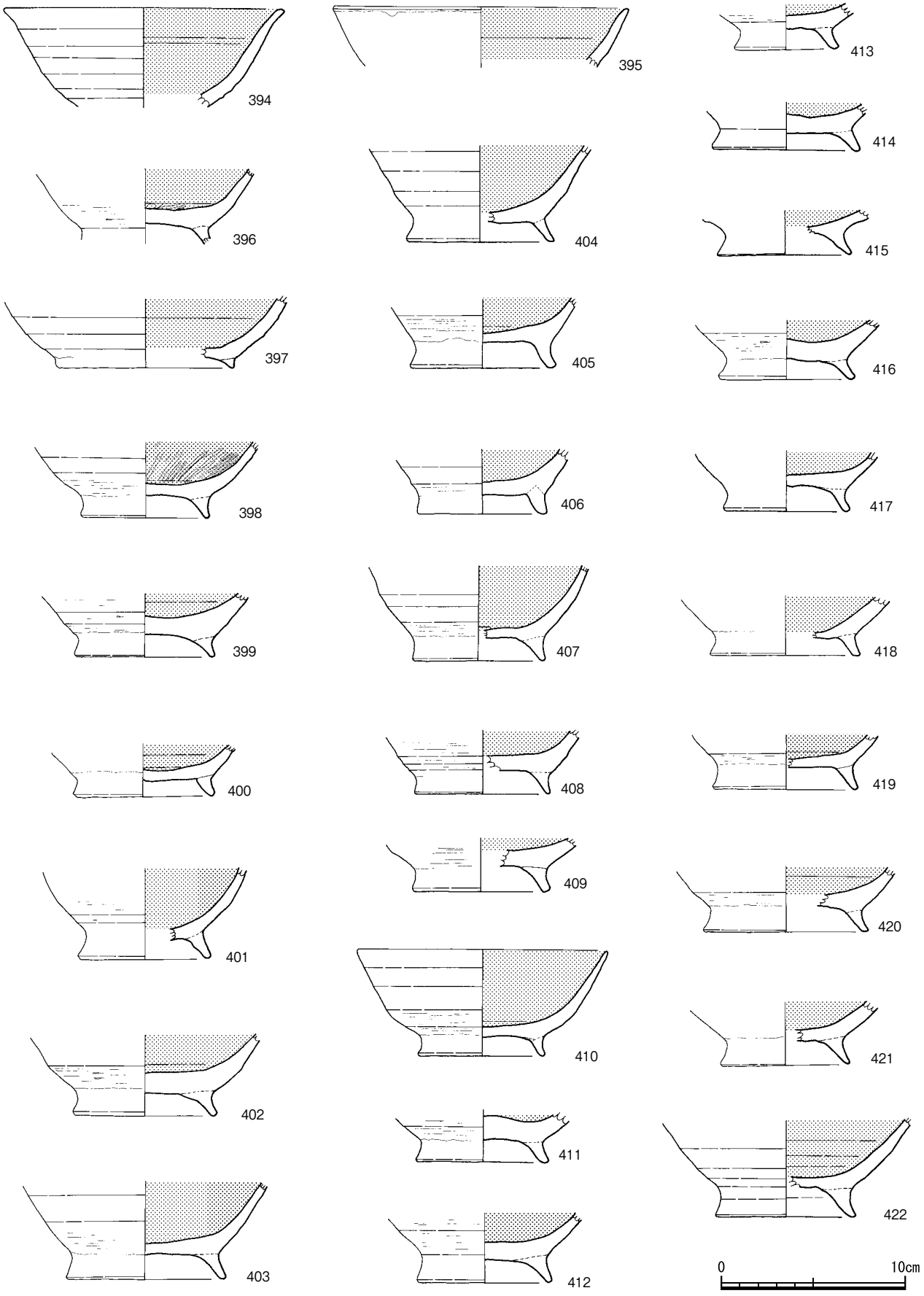
次に器種ごとの特徴についてみていく。まず，坏は内面のみならず，外面にもミガキが多く認められる。これは森隆氏の指摘に符号する。外面のミガキは横方向の回転を使ったミガキが多く，ミガキきれていない部分が多く残る。また，ケズリ痕がミガキの合間に確認できるものもある。内面は，放射状のミガキが認められるものが多い。土師器の坏と比較して，底部から口縁部にかけて丸みをもち角のとれているもの


338
344
349
345
350
339
346
351
340
347
352
341
348
353
342
343
354
0
10cm
355
356
361
366
357
362
367
358
363
368
359
364
369
360
365

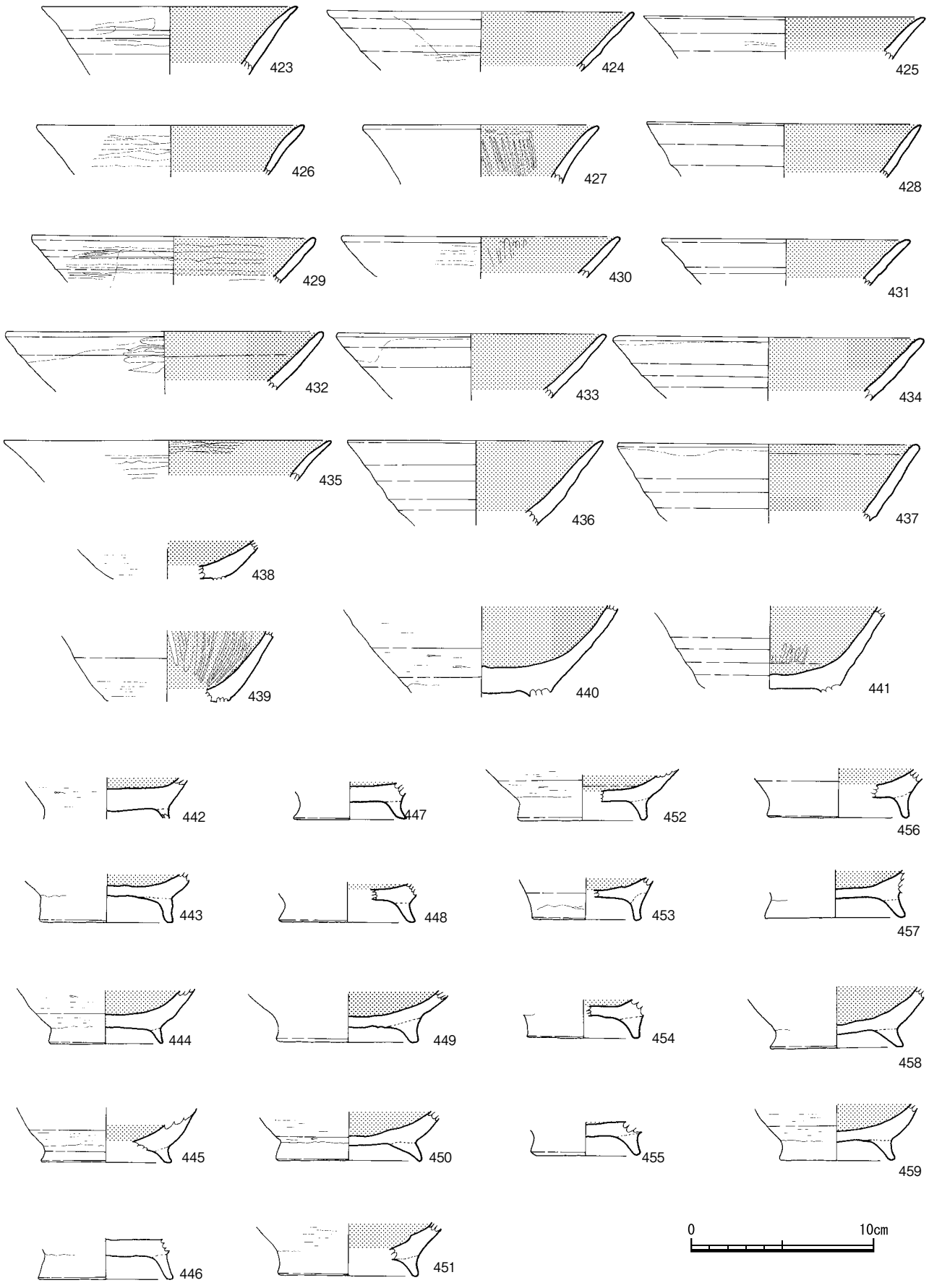
第75図　黒色土器坏，皿


370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
0
10cm

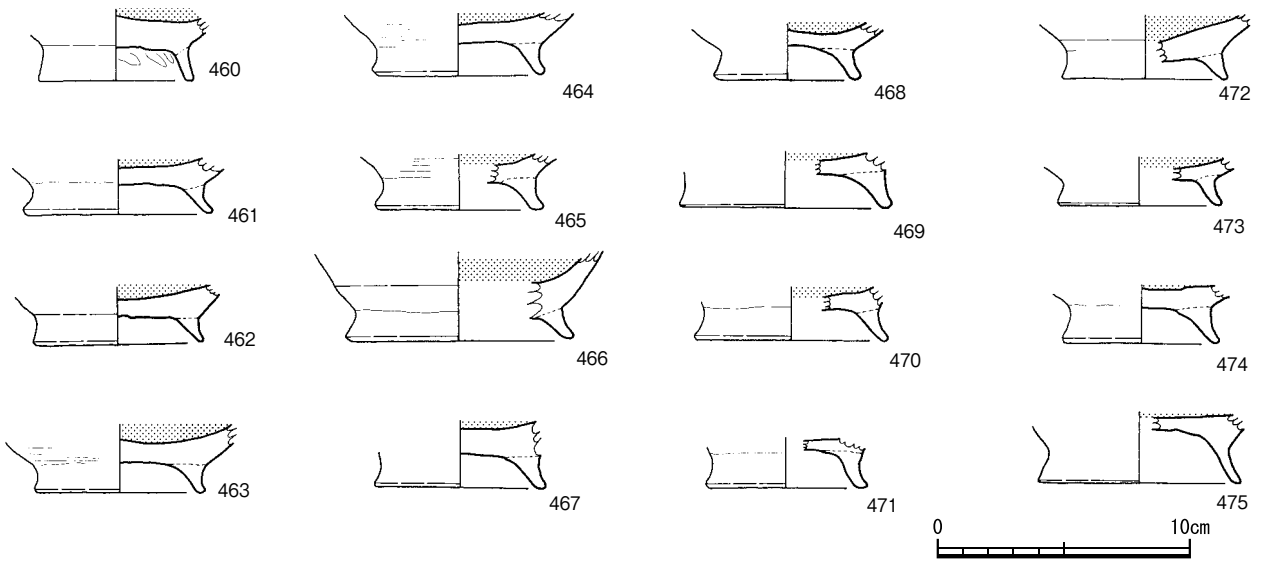
第76図　黒色土器椀（1）


394
395
413
414
396
404
415
397
405
416
398
406
417
399
407
418
400
408
419
401
409
420
402
410
421
403
411
422
412
0
10cm

第77図　黒色土器椀（2）


423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
447
452
456
443
448
453
457
444
449
454
458
445
450
455
459
446
451
0
10cm

第78図　黒色土器椀（３）



第79図　黒色土器椀（４）

が目立つ。底部外面にまで丁寧なミガキを施すものも認められる。

皿は高台付が多く，本遺跡では平底の皿は墨書が認められるものを含め2点と少ない。平底の皿は形態が土師器皿と共通する。また，皿は内外面のミガキの確認できるものは少ない。

椀は体部が直線的に立ち上がるものと，曲線的に立ち上がるものの２タイプ認められる。その割合は似通っているが，若干曲線のタイプが多いようである。また，高台は高台高が１cm以内のものと1.5cm前後のものがある。高台端部は面をもつものが多く，次いで丸くおさめるものが多い。先端にかけてすぼまり，外反するタイプもあるが少数である。

調整技法としては，体部外面にケズリが認められ，ケズリによる砂粒の動きの確認できるものは左方向が多い。こうした傾向は，土師器坏で右方向が多いのと相違する。土師器坏の場合は，回転を用いて下から上に水引きあるいは器面調整した際に生じたと思われ，回転方向が時計回りのために砂粒は左方向に動いたものと考えられる。一方，黒色土器外面の砂粒は成形を終えた後に土器を引っくり返してケズリを行ったため砂粒が反対方向になったと考えられる。高台の内側は高台を接合した際のナデが認められる。このナデは接合部分に限定して施されており，底部外面の中心部分にナデを施している例は少ない。従って，ヘラ切り痕がのこるものも多く確認される。高台の接合は接合痕が残り，貼りつけの状況が観察できるものが多い。

色調は橙色も認められるが，多くは浅黄橙色を呈する。これは，橙色と浅黄橙色がほぼ同じである土師器坏と異なる。また，内面は黒色を呈するが若干灰色を帯びたり，色が斑になって黒色の発色が不十分なものがある。中には土師器との区別の難しいものも認められる。また，１点のみであるが高台と体部で胎土の異なるものが認められ，両者で異なる発色を呈する。

胎土は精緻なタイプが主で，土師器坏に認められた砂粒の多いタイプは認められない。

①黒色土器坏(第75図)

No338～354は坏であるが，No354は法量から鉢に分類される可能性がある。

No338～340は体部外面にミガキが認められない。No339は底部にヘラ切り痕が明瞭に残る。No341は体部外面にケズリを認める。No343は体部外面に横方向の回転ミガキが見られる。No344は底径5.8cmの小型で，形態は土師器坏とほとんど変わらない。No345は内面に放射状のミガキがかろうじて確認できる。No346は器面が粗く，体部外面のナデも粗雑である。内面の黒色の燻しも不十分で，内面が曲線的に立ちあがり見込みの中心部分の器壁は薄い。No347は外面にミガキが認められる。No349は突出気味の底部をもつ。No350は内面に放射状のミガキが見られ，外面にミガキは確認できない。No351,352は内面の燻しが不十分である。No352は底部と体部の境が丸くなる。No353は外面を放射状，内面と口縁部外面を横方向にミガキを施している。体部は内弯しながら立ちあがり体部中位で外反する。底部と体部の境は丸くなり，底部は部分的に黒色に変色している箇所がある。No354は外面の調整としてケズリ⇒回転ミガキが認められる。一方，内面は放射状のミガキが，底部にも丁寧なミガキが認められる。形態的な特徴としては，底部の器壁が体部に比べて薄くなっている。

②黒色土器皿(第75図)

No355～369が皿である。

No355は平底の皿で，体部から口縁部にかけて残存するが，下端は水平で，底部との境は不明瞭である。体部は緩や

かに内弯しながらわずかに立ち上がり，口縁部付近で傾斜変換して外反する。内面は緩やかに立ち上がり口縁端部はすぼまっている。内外面に横方向のミガキが認められ，内面の黒色面は口縁部外面にまで及んでいる。

No356～369は高台付きの皿である。

No356～358は高さ１cm以内の低い高台を持ち，高台端部は丸くすぼまる。No359,360は低い高台を成し，端部に面を持つ。No361も低い高台を持つが，他に比べて高台の器壁が若干厚い。No362～365，No367～369は高台の高さが１cm以上を測る。No362は橙色を呈し，内面は見込み付近から広く剥離し調整の観察はできない。No363の高台は外側に若干反り，端部を丸くおさめる。No364は体部が内弯気味に立ち上がる。No365は高台端部に面を持ち，他例に比べて高台径は小さく，見込みにひび割れが見られる。No366は他の皿よりも大型で器壁も若干厚く，体部の傾きが緩やかで皿とした。内外面に横方向の回転ミガキが認められる。No367は内面に放射状のミガキ，体部外面にはケズリが認められ，高台は外反気味に広がり，端部は丸い。No368は体部の立ち上がりが若干高く皿とした。高台はまっすぐに外に開き端部はまるく，色調は明赤褐色を呈する。No369はほぼ完形である。高台径が小さく，高台は外反し，端部は丸みをもった面を呈する。体部外面にケズリ，内面には放射状のミガキが認められる。

③黒色土器椀(第76～79図)

No370～382は体部が直線的に立ち上がる。

No370は高台が剥離し，外面にケズリ，見込みには放射状のミガキを認める。No371も高台が剥離し，高台部分には沈線が１条認められるが，高台との接合を良くするために施したと考えられる。内外面には放射状のミガキ，底部外面には並行にミガキが認められ，高台の接合時のナデで一部消す。372は体部外面下端の強いナデ，底部外面は内側を環状に若干窪ますことで高台状を呈す。外面の体部中位から上は鋭利な沈線状のラインが６条見られ，内面の体部には放射状，口縁部付近には横方向のミガキが認められる。No373は橙色を呈し，高さ１cm以内の低い高台で，高台内側は接合部分をナデで一回転する。内側の黒色は外面の口縁部付近にまで及び，見込みには不整方向のミガキを認める。No374～376は高台が直線的に外に開き，端部に面を持つ。No376の底部外面にはヘラ切り痕が認められる。No377～380も直線的に外開きとなる高台を持ち，端部は若干丸みを持つ。No381は高台が外反し，端部は若干丸みをなす。高台内側は緩やかに端部に向けて傾斜している。No383～393は低い高台で，口縁端部は丸い。No391は底部外面にヘラ切り痕，No392は丁寧なナデを認めるがヘラ切りを完全には消し切っていない。

No394～422は体部が曲線的に立ち上がる。

No394,395は口縁部から体部である。No394は内弯しながら立ち上がり口縁部付近で外反し，外面にミガキは認められない。No395は厚い器壁をもつ。口縁部は外反せず端部はそのまま丸くおさめる。No396は見込み部分のみ放射状のミガキが認められる。No397は低い高台を持ち，内面はミガキが行われるが，色調が黒色ではなく明赤褐色を呈する。No398は外面に横方向のケズリ，内面に放射条のミガキが認められる。No399は高台端部に面をもつ。見込みの中心部分は若干盛り上がる。No400は体部の器壁が薄く，高台の接合は稚拙で高台内側で接合ラインを明瞭に残し，高台部の一部に縦方向のひび割れを認める。

No401～422は高さ1.5cm前後の高い高台で，端部を丸くおさめるタイプが多い。No402は体部の色調がにぶい黄橙色，高台が橙色を呈し，異なった粘土を用いている。No403は底部外面の中心部分まで丁寧にナデ，内面は剥離によって調整は確認できない。No404は高台端部に面を持つ。No405は底部外面の中心部分まで丁寧にナデ，時計回りに渦巻き状のナデが認められる。No407は内面の黒色が不十分で部分的に浅黄橙色である。No410は体部中位まで内弯して立ち上がり，そこから上は直線的に広がる。ケズリは体部外面の中位までに顕著に認められる。No411は底部外面の焼成が不十分で黒色の部分が広がり，見込みの中心部分は若干盛り上がる。No412は高台端部に面をもつ。No413は他に比べて高台径が小さく，皿の可能性もあるが体部の残りが不十分なために断定できない。No414は硬質で橙色を呈し，内面は広く剥離する。No415は強い外反高台で，器壁は薄く，皿の可能性もある。No416は見込みの中心部分が若干盛り上がる。No417は底部外面の中心にヘラ切り痕が認められる。No418は体部に比べて底部の器壁が著しく薄い。No419は底部外面の中心まで丁寧にナデ，ヘラ切り痕を完全に消し，内面の底部と体部の境が窪む。No420の高台は外反し広がり，端部には面を有する。No422の内面は剥離が著しく，黒化処理が不十分で灰色を呈し，高台は外反し長く広がり，端部は丸くおさめる。

No423～437は体部から口縁部で，多くが体部中位から上位のため，体部の立ち上がりの形状は判断できない。

No423,424は外面に横方向の回転ミガキ，No427～430は内面に放射状のミガキが見られる。形態的な特徴として口縁端部に向かってすぼまるタイプ(No423,435,436等)と，口縁部まで同じ太さで端部に至るもの(No434,437)がある。

No438～441は底部から体部である。

No439と441は内面に放射状のミガキが，No438と440には外面にケズリが認められる。

No442～475は底部である。

No443は高台端部まで直行するが，本遺跡では直線的に外開のものや外反するものが多数を占め，当例は希少である。No444は低く器壁の薄い高台を持ち，No445～449は高台端部に面を持つ。No450は断面三角形状の高台で，接合ラインが外面で明瞭に認められる。No451以降は端部を丸くおさめ，底部外面は丁寧にナデられるがNo460と462はヘラ切り痕が認められる。No445と457は内面の黒色の発色が不十分である。No460では高台内面に，高台の接合或いは底部外面のナデ整形時についたと思われる爪痕が認められる。

第33表　黒色土器杯・椀観察表(１)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(外)	ケズリ	ミガキ(外)	備考
75	338	I, J-15/Ⅳa	(9.2)	5.8	(1.5)	-	精緻	良好	10YR8/3(浅黄橙)	-	×	-
	339	I-6/Ⅳa	(8.8)	6.8	(1.7)	-	精緻	良好	2.5Y7/3(浅黄)	-	×	-
	340	G-13/表土 G-13/層不明	(8.2)	6.8	(1.3)	-	精緻	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	341	J-14/Ⅲ L-14/Ⅳa	(11.2)	6.0	(2.5)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	砂粒左に移動
	342	I-12/Ⅲ L-8/Ⅲ L-9/Ⅳa	(12.0)	8.4	(1.4)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	343	H-14, 15/表土	15.6	7.0	4.8	-	精緻	良好	5YR6/6(橙)	○	○	-
	344	I-12/Ⅲ	(8.6)	5.8	(1.4)	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	×	-
	345	K-13/Ⅲ	(9.6)	(6.2)	(1.9)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	346	J-6/Ⅲ L-8/Ⅲ	(12.8)	7.0	(3.4)	-	表面粗	不良	2.5Y8/4(淡黄)	-	×	-
	347	E-7/Ⅲ	(12.0)	(6.8)	(4.0)	-	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	-	×	-
	348	J-7/Ⅳa	(10.0)	7.4	(1.8)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	○	-
	349	J-2/Ⅲ	(6.8)	7.4	(1.7)	-	精緻	良好	2.5Y8/3(淡黄)	-	×	-
	350	I-12, 13/Ⅲ H-13/Ⅲ下	(11.8)	7.4	(1.8)	-	赤含む	良好	7.5YR7/6(橙)	-	×	-
	351	I-12/Ⅲ	(11.8)	8.2	(2.0)	-	精緻	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	-	×	-
	352	G-13/Ⅲa	(10.8)	(6.6)	(1.7)	-	精緻	良好	2.5Y4/1(黄灰)	-	×	-
	353	H-15/Ⅲ	14.0	(5.2)	5.0	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	○	-
	354	I-12/Ⅳa J-13,14/Ⅲ,Ⅳa	(22.0)	13.6	(4.9)	-	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	○	○	スス付着，砂粒左に移動
	355	I-6/Ⅳa I-7/Ⅳa	13.8	9.0	1.6	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	○	皿
	356	H-12/Ⅳa	(8.8)	5.8	(2.6)	0.80	精緻	良好	10YR8/3(浅黄橙)	-	×	-
	357	J-6/Ⅳa	(10.0)	6.0	(2.1)	1.00	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	358	L-12/Ⅲ	(7.8)	7.0	(1.7)	1.20	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	359	I-14/Ⅳa	(11.6)	6.2	(3.2)	0.80	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	360	I-15/Ⅲ	(12.0)	6.7	(3.4)	1.10	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	361	I-15/Ⅳa	(10.8)	7.8	(2.1)	1.00	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	-	×	-
	362	I-5/Ⅳa上	13.0	7.2	3.6	0.80	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-	×	-
	363	E-8/Ⅳa	(9.2)	7.4	(2.5)	1.30	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-	×	-
	364	表土	(10.0)	5.6	(2.8)	1.40	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-	×	-
	365	注記不明	(7.0)	5.8	1.9	1.4	精緻	良好	5YR6/6(橙)	○	×	-
	366	J-13/Ⅲ	15.4	-	(2.9)	-	精緻	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	-	○	-
	367	K-4/Ⅲ	(9.2)	6.6	(2.8)	1.6	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	○	×	-
	368	K-5/Ⅲ	(11.6)	7.6	(3.8)	1.50	精緻	良好	5YR5/6(明赤褐)	-	×	-
	369	I-4/Ⅳa	11.6	5.4	4.8	1.50	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	○	×	-
76	370	K-13/Ⅲ	(9.6)	(4.0)	(3.0)	-	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	○	×	-
	371	H-13/Ⅲ I-12/Ⅳa	15.2	(6.8)	(5.4)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	○	-
	372	K-4/Ⅲ L-4/Ⅳa	15.3	6.0	5.6	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	373	I-5/Ⅳa	16.0	6.2	6.3	0.60	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-	×	-
	374	H-15/Ⅳa	(11.6)	6.8	(4.0)	1.00	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	375	J-11/Ⅲ	(13.4)	8.0	(5.8)	0.9	精緻	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	-	×	-

第34表　黒色土器杯・椀観察表(２)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調（外）	ケズリ	ミガキ（外）	備考
76	376	6T/Ⅲa	(13.0)	7.9	(5.0)	1.05	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	377	I-13/Ⅳa	(9.0)	7.4	(3.0)	1.4	礫含む	不良	2.5Y8/3(淡黄)	-	×	-
	378	J-13/Ⅲ	(8.8)	7.2	(2.8)	0.80	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-	×	-
	379	H-14/Ⅲ	(8.0)	7.2	(3.0)	1.30	精緻	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	380	K-11/Ⅳa上 H-12/Ⅲ I-14/Ⅳa	(11.6)	7.6	5.0	0.90	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	381	I-13/Ⅳa	(10.2)	7.8	(3.3)	1.10	精緻	不良	10YR8/4(浅黄橙)	○	×	-
	382	K-10/Ⅳa上	(8.8)	7.6	(3.5)	1.2	精緻	良好	2.5Y5/2(暗灰黄)	○	×	内面色調7.5YR8/6(浅黄橙)
	383	I-6/Ⅳa	(8.6)	7.2	(1.5)	1.05	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-	×	-
	384	K-7/Ⅲ	(9.2)	7.6	(2.7)	1.00	精緻	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	385	L-5/Ⅲ	(11.0)	8.6	(2.5)	1.00	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	○	×	-
	386	K-15/Ⅲ	(8.4)	7.8	(2.1)	0.60	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	387	J-15/Ⅲ K-15/Ⅲ G-13/Ⅲ	(7.2)	7.4	(1.0)	1.00	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-	×	-
	388	I-14/Ⅳa上 I-13/Ⅲ	(8.2)	(7.6)	(0.9)	0.40	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-	×	-
	389	I-13/Ⅲ J-13/Ⅲ H-13/Ⅲ	(8.0)	7.4	(1.3)	0.40	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	390	I-6/Ⅲ	(8.8)	7.6	(2.0)	0.95	精緻	良好	10YR8/3(浅黄橙)	-	×	-
	391	L-5/表土	(8.0)	7.4	(2.4)	1.00	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	×	-
	392	J-6/Ⅳa	(7.6)	7.2	(1.9)	0.80	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	×	-
	393	表土	(9.0)	6.8	(2.2)	0.60	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
77	394	G-13/Ⅲ	15.4	-	(5.3)	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	×	-
	395	F-8/Ⅲ	16.0	-	(3.2)	-	精緻	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	-	×	-
	396	I-11/Ⅲ	(11.8)	(3.6)	(7.0)	(0.6)	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	○	×	-
	397	H-12/Ⅲ I-14/Ⅲ	(14.4)	9.2	(3.5)	0.60	精緻	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-	×	内面色調5YR6/6(橙)
	398	K-15/Ⅳa	(12.0)	7.0	(3.8)	1.2	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	○	×	-
	399	K-13/Ⅲ	(11.2)	7.6	(3.4)	1.20	精緻	不良	10YR6/4(にぶい黄橙)	○	×	砂粒左に移動
	400	I-15/Ⅲ	(9.8)	7.2	(2.8)	0.90	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	×	-
	401	K-4/Ⅲ	(11.0)	7.2	(4.7)	1.1	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	○	×	-
	402	I-14/Ⅳa	(12.4)	7.8	(4.5)	1.3	礫含む	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	体部と高台で粘土が異なる
	403	6T/Ⅲa 6T/Ⅲb	(13.2)	8.6	(5.1)	1.30	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	404	IJ-15/Ⅳa	(12.0)	8.0	(5.3)	1.1	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	405	H-15/表土	(10.0)	7.6	(3.8)	1.40	精緻	不良	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	406	J-15/Ⅳa	(9.2)	7.0	(2.9)	1.00	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	○	×	-
	407	E-7/Ⅲ	(11.8)	7.2	(5.2)	1.20	精緻	良好	2.5YR6/2(灰赤)	○	×	-
	408	I-15/Ⅲ	(10.4)	7.2	(3.1)	1.00	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	409	G-13/Ⅲ	(4.5)	7.4	(2.5)	1.20	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	○	×	-
	410	E-8/Ⅳa F-7/Ⅳa	13.6	6.8	5.8	1.1	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	○	×	-
	411	K-14/Ⅳa	(9.4)	7.2	(2.3)	1.10	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	412	2T/Ⅲa	(10.5)	7.4	(3.8)	1.50	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	○	×	-
	413	I-13/Ⅲ	(7.2)	5.4	(2.4)	1.10	精緻	不良	7.5YR8/6(浅黄橙)	○	×	-

第35表　黒色土器杯・椀観察表(３)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(外)	ケズリ	ミガキ(外)	備考
77	414	H-14/Ⅲ	(8.6)	8.0	(2.5)	0.9	精緻	良好	2.5Y6/6(明黄褐)	-	×	内面色調5YR6/6(橙)
	415	F-8/Ⅲ	(9.2)	7.2	(1.9)	1.00	精緻	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	416	L-5/表土	(10.0)	7.4	(3.2)	1.10	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	砂粒左に移動
	417	K-12/Ⅲ下	(9.8)	6.8	(3.3)	1.4	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-	×	-
	418	Ⅰ-5/Ⅲ	(11.2)	8.2	(3.0)	1.00	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	×	-
	419	J-13/Ⅳa	(10.0)	7.8	(3.0)	1.2	精緻	良好	2.5YR6/3(にぶい橙)	○	×	スス付着
	420	G-13/表土	(11.8)	9.0	(3.5)	1.4	精緻	不良	10YR6/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	421	K-5/Ⅲ	(10.2)	7.0	(3.0)	1.30	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	422	F-7/Ⅳa	(13.6)	7.6	(5.0)	1.50	精緻	不良	2.5YR6/6(橙)	-	×	-
78	423	I-12/ⅢⅣa	14.0	-	(3.7)	-	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-	○	-
	424	I-15/Ⅲ	16.8	-	(3.2)	-	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	-	○	-
	425	I-6/Ⅲ	15.4	-	(2.3)	-	精緻	良好	2.5Y6/2(灰黄)	-	×	-
	426	I-6/Ⅳa	14.6	-	(2.8)	-	精緻	不良	10YR6/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	427	F-7/Ⅳa	13.0	-	(3.2)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	428	I-15/Ⅲ	15.0	-	(2.9)	-	精緻	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	429	I-15/Ⅲ	15.6	-	(2.5)	-	精緻	良好	10YR7/6(明黄褐)	-	○	内面色調7.5YR2/2(黒褐)
	430	J-13/Ⅲ	15.4	-	(2.2)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	431	K-15/Ⅳa上	13.6	-	(2.4)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	432	J-13/ⅢⅣa	17.4	-	3.2	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	○	-
	433	I-16/Ⅲ	14.6	-	(3.6)	-	精緻	良好	2.5Y8/2(灰白)	-	×	-
	434	Ⅰ-13/Ⅳa Ⅰ-13/Ⅲ	17.0	-	(3.4)	-	精緻	良好	2.5Y8/4(淡黄)	-	×	(口縁) N2/0 (黒)
	435	J-7/Ⅳa	18.0	-	(2.2)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	○	(口縁) N2/0 (黒)
	436	I-16/Ⅲ	14.0	-	(4.6)	-	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	-	×	-
	437	K-14/Ⅳa上	16.6	-	(4.2)	-	精緻	良好	2.5Y8/3(淡黄)	-	×	内面色調2.5Y6/1(黄灰)
	438	H-13/Ⅲ I-14/Ⅳa	(9.8)	(6.0)	(1.6)	-	精緻	不良	2.5Y7/2(灰黄)	○	×	底部スス付着
	439	F-8/Ⅲ	(11.2)	6.6	(3.8)	-	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	○	×	-
	440	J-13/Ⅳa	(15.0)	7.0	(4.9)	-	精緻	良好	5YR7/6(橙)	○	×	砂粒左に移動
	441	L-15/Ⅲ	(12.6)	7.2	(4.1)	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	×	-
	442	K-6/Ⅲ	(8.8)	(7.0)	(2.4)	-	精緻	良好	5YR7/6(橙)	○	×	-
	443	H-15/Ⅲ	(8.8)	7.2	(2.3)	1.30	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	444	K-15/Ⅲ	(9.6)	6.2	(3.0)	0.90	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	445	J-14/Ⅲ	(5.8)	7.2	(3.0)	0.60	精緻	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	○	×	-
	446	H-11/Ⅳa	(3.3)	7.4	(2.2)	1.30	精緻	良好	2.5Y7/3(浅黄)	-	×	-
	447	I-13/Ⅲ,Ⅳa	(6.0)	6.2	(1.9)	0.9	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	448	K-14/Ⅳa	(7.4)	7.4	(1.5)	1.2	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	449	K-7/Ⅲ	(11.0)	7.4	(2.6)	0.80	精緻	良好	10YR8/3(浅黄橙)	-	×	-
	450	J-12/Ⅲ下	(9.8)	7.8	(2.7)	0.80	精緻	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	○	×	-
	451	I-14, 15/Ⅲ	(10.0)	7.8	(3.0)	0.9	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	○	×	-
	452	J-13/Ⅳa	(10.6)	7.0	(2.8)	1.00	精緻	良好	10YR7/6(明黄褐)	○	×	砂粒左に移動

第36表　黒色土器杯・椀観察表(４)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台高(cm)	胎土	焼成	色調(外)	ケズリ	ミガキ(外)	備考
78	453	L-4/Ⅲ	(7.2)	5.8	(2.3)	1.2	精緻	良好	10YR8/3(浅黄橙)	-	×	-
	454	J-14/Ⅳ	(6.4)	6.2	(1.2)	1.10	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	×	-
	455	I-13/Ⅳa	(6.2)	6.0	(1.8)	1.00	精緻	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	-	×	-
	456	I-12/Ⅳa	(9.2)	7.8	(2.7)	1.1	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	×	-
	457	G-13/Ⅲ	(7.2)	7.6	(1.4)	0.90	精緻	良好	2.5GY2/1(黒)	-	×	内面色調5YR6/8(橙)
	458	L-5/表土	(9.6)	7.2	(2.7)	1.00	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	-	×	-
	459	K-4/Ⅲ	(7.4)	(6.2)	(3.5)	1.10	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
79	460	K-5/Ⅳa上	(7.0)	6.2	(2.5)	1.30	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	461	I-12/Ⅳa上	(8.4)	7.4	(2.2)	1.20	精緻	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	462	H-12/Ⅲ	(8.0)	6.8	(2.3)	1.00	精緻	不良	7.5YR7/6(橙)	-	×	-
	463	H-14/Ⅲ	(9.0)	6.4	(2.7)	1.15	精緻	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	○	×	-
	464	J-8/Ⅲ	(9.0)	6.4	(2.5)	1.35	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	○	×	-
	465	2T/Ⅲa	(7.8)	6.6	(2.1)	1.10	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	×	-
	466	I-10/Ⅲ	(11.4)	(8.6)	(3.5)	0.90	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-	×	-
	467	J-7/Ⅳa	(3.7)	6.8	(2.7)	1.30	精緻	良好	5YR7/8(橙)	-	×	-
	468	L-9/Ⅲ	(7.6)	5.6	(2.2)	1.30	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-	×	-
	469	J-8/Ⅳa	(8.0)	8.2	(1.4)	1.40	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	470	J-13/ 層不明	(7.2)	7.4	(1.5)	1.20	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	-	×	-
	471	I-13/Ⅳa	(6.2)	6.4	(2.0)	1.5	精緻	不良	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	472	J-13/層不明	(7.2)	6.6	(2.2)	1.00	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-	×	-
	473	I-13/Ⅲ	(7.4)	6.4	(1.9)	1.0	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	×	-
	474	G-12/Ⅲ	(7.0)	6.2	(2.4)	1.50	精緻	不良	7.5YR7/4(にぶい橙)	-	×	-
	475	J-12/Ⅲ	(4.4)	8.0	(2.2)	2.10	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-	×	-

焼塩壷

出土状況(第80図)

焼塩壷は破片全てをカウントした。出土状況は，他の遺物と同様に主として掘立柱建物の周辺に集中する。特に，J-13区とK-14区で量的に突出し，集中的に廃棄した場の可能性が高くなる。これらのことから，遺跡の特定の箇所に廃棄場を設けず，各建物ごとに建物に近接してゴミなどを廃棄していた可能性がある。なお，J-13区は８号掘立柱建物跡の東側，９号掘立柱建物跡の北側に位置し，K-14区は建物５の東側に位置する。

遺物(第81～84図)

焼塩壷の出土点数は総数2609点で，殆どが砕片である。全体を復元できたのは１点で，比較的復元が行えた資料を参考にすると逆円錐形が主体を占め，一部丸底に復元されるものがある(No557)。口径は全て図上復元で，残存している口縁部の平面形がいびつなこともあり誤差は生じる。

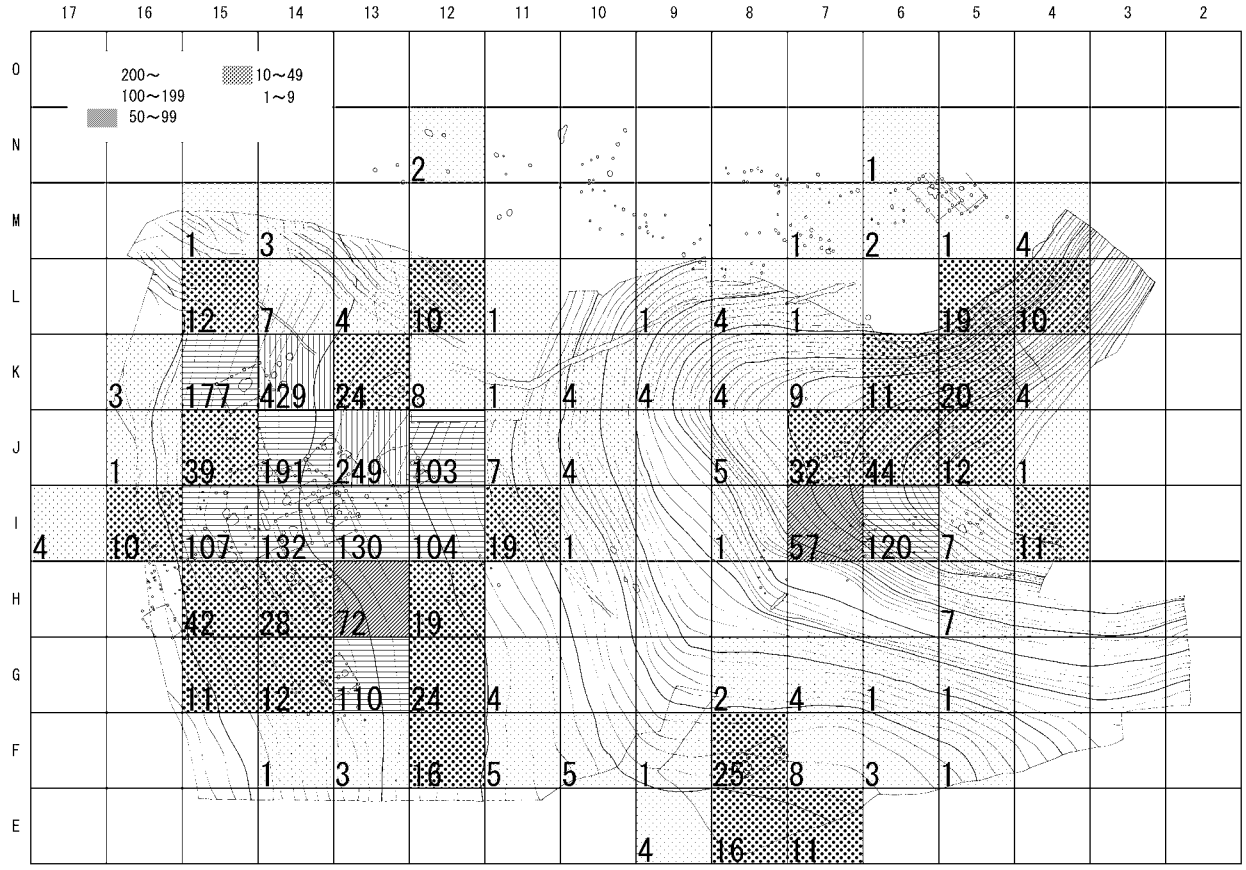
復元口径からは9cm前後の小型，13cm前後の中型，16cm前後の大型が認められるが，それぞれの中間となる法量もあり規格性の把握は難しい。製作技法が型作りで，復元方法の精度の問題か，実体かは今回の資料では判断し得ない。

その殆が内面に布目を圧痕するが，無いものも存在する。圧痕の無いものが存在したのか，摩耗等の結果かの判断は難しいが，貝殻条痕やヘラ状工具，ナデによる調整が施されたものはない。また，ナデ仕上げやヘラ状工具で調整すると器壁が薄くなること指摘されているが，本遺跡の資料は厚手のものが多い。

口縁部は，①口縁端部が，体部の傾斜に対して斜めになるもの②口縁端部が，体部に直角になるものが存在する。後者は比較的大型で器壁の厚いものが多く，また，両者に共通し口縁端部が若干内側に延びるものがある。

底部は極めて少なく，確認される大半は尖頭形を呈し，丸底は１点である。

調整は外面に指ナデや指押さえが認められ，色調は橙色が



第80図　焼塩壷出土状況　(破片数)

多く，一部灰色に変色している例があるが二次焼成の可能性もある。胎土は0.5～１cm程度の茶色の丸みをおびた礫を含むものが多く，数は少ないが細かな砂粒を多く含むものもある。

No476～484は口径９～12cm程度の小型である。

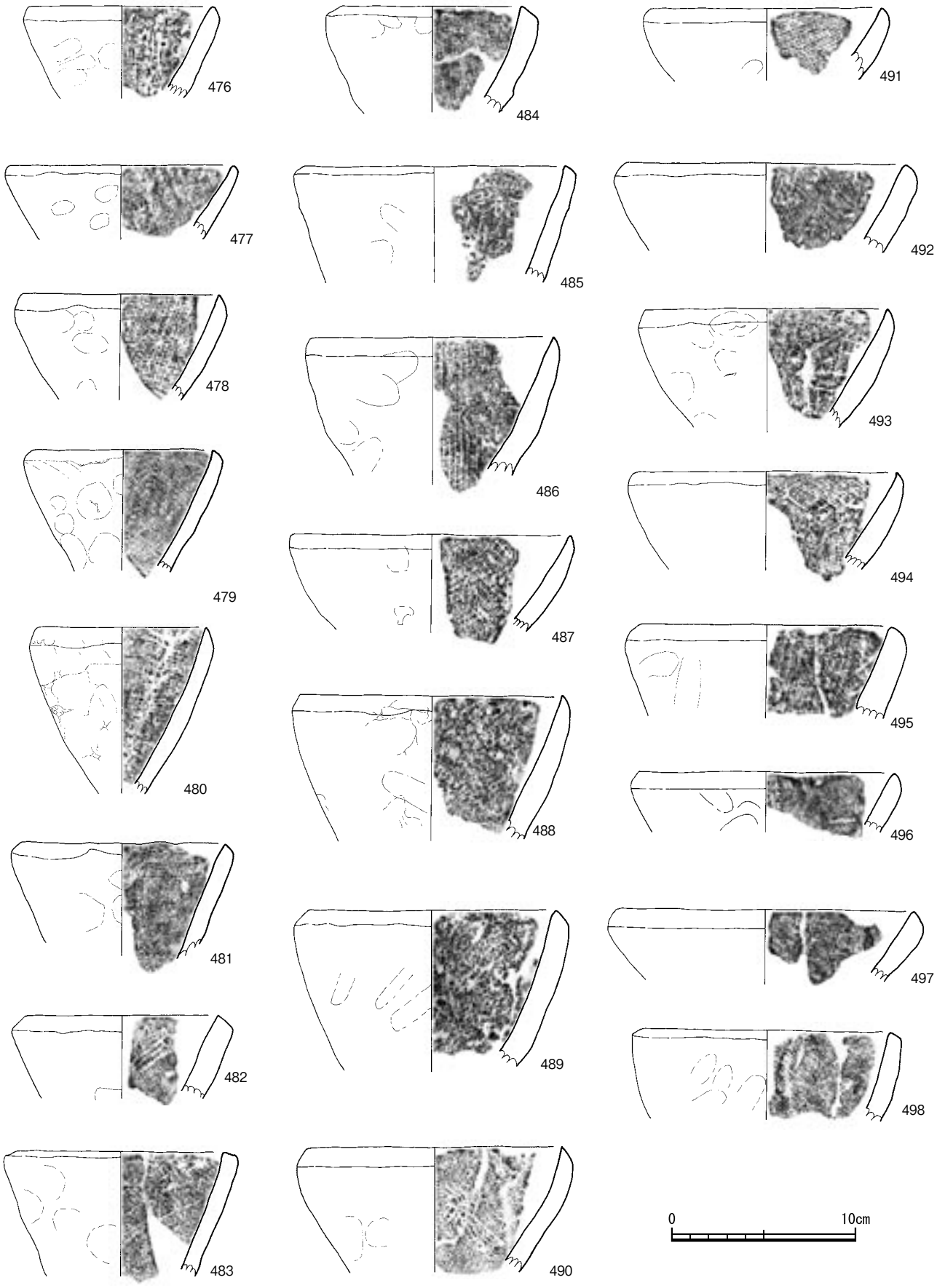
No477は光沢を持つ灰黄色状の付着を認める。No478は口縁部の一部が灰色に変色し，内面の布目痕は横軸がほぼ水平であるが縦軸は斜めで，横軸と縦軸が直行しない。No480は硬質で口縁部分は灰色，下位は橙色を呈し，内面は灰色で，表面に放射状のひびを認める。No482も硬質で，外面が灰色，内面は橙色に発色する。No483は口縁端部に面をもち，ほぼ水平である。

No485は内面に布目を認めないが，保存状態に起因するのか判然としない。No486,487は器壁の厚い体部下半から口縁部にかけて鋭くすぼまる。No488も内面に布目を認めないが，これも原因は明らかでない。No489は比較的細かな砂粒を多く含み，0.5cm程度の赤色粒が所々に認められ，内外面は橙色，断面は赤色に近い橙色である。

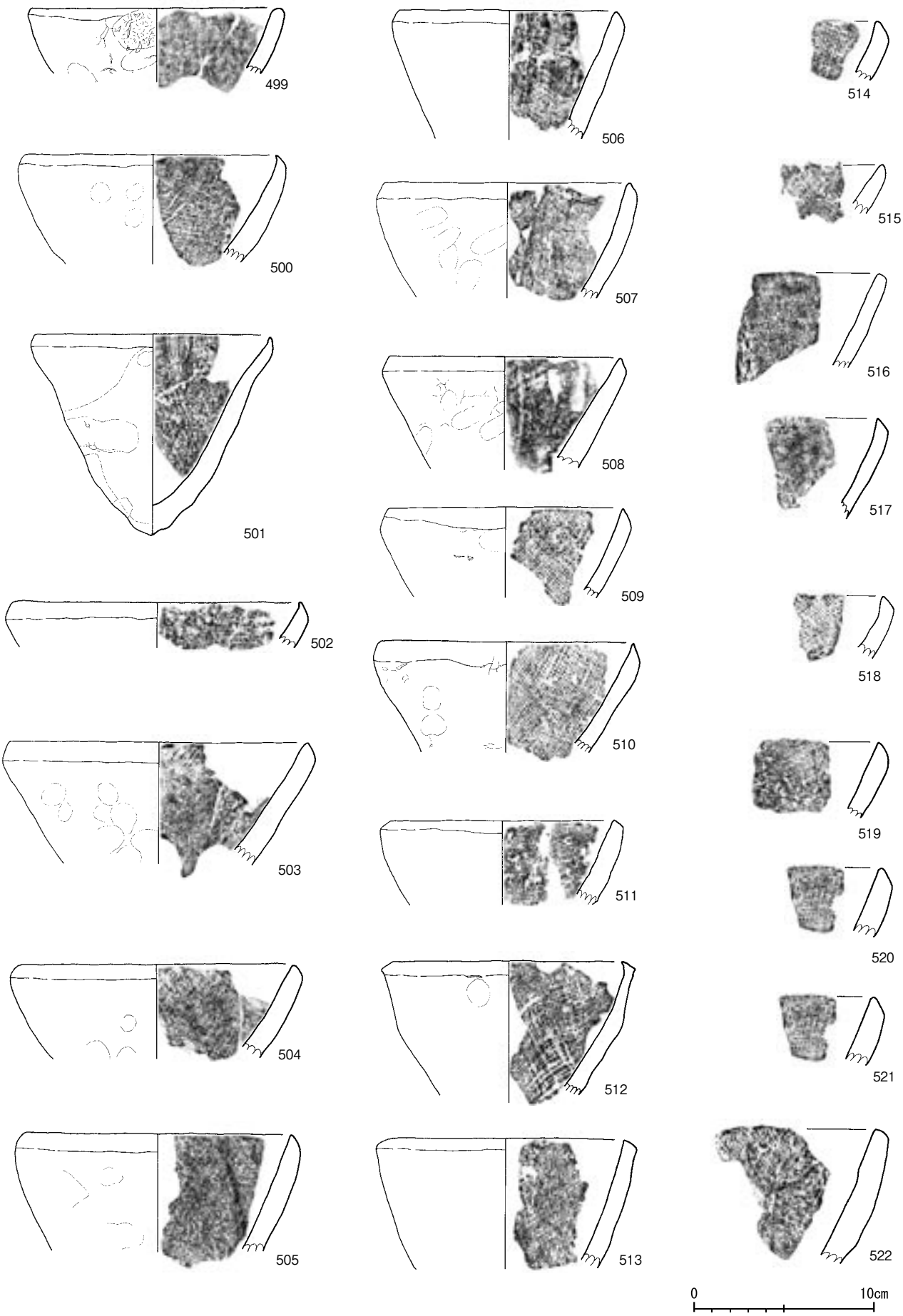
No490は外面から内面の口縁部付近に，光沢を持つ灰黄色状の付着が，内面の布目痕は布目間の広い箇所が一部認められる。No492は内面に複数のひびがみられる。No494は口縁端部が若干内側に延びる。

No495は中型の中では器壁が厚い。No496は目の細かな布目が認められる。No497はわずかに布目の痕跡を残し，硬質で意図的なナデ消しの可能性も考えられる。No498は硬質で，内面は縦方向に凹凸のある縦線が認められる。No499は外面にひびを複数認め，形態もいびつで，内面には目の細かい布目が認められる。No500は口縁端部が内側に延びる。No501は唯一全体が復元できた資料で，底部付近まで指で押さえ，外面は一部灰色に変色する。No503は布目痕の一部に乱れを認める。No505は内面に布目が認められず，保存状態は脆弱である。No506は内面に縦方向の窪みが認められ，上から下にかけて剣先状にすぼまり，隣接して一部布目幅の広い箇所がある。No507は口縁部の凸凹が顕著で，No508は比較的口縁部のまわる良好な資料で，外面上位は若干灰色に変色する。No510は外面が灰黄色に変色し，No511は胎土に細かな砂粒を多く含む。No512は底部付近が焼成不良で断面が灰色を呈し，内面の布目痕には布目幅の広い箇所を認める。No513は体部外面上位と内側が灰色に変色し，No516は水平に近い口縁端部を持つ。No520は内面に縦方向の凹線があり，その中にも布目痕を認める。No525は内面に複数のひびが，No528は口縁部内面の粘土が若干内側にはみ出す。No529は布目痕に乱れを生じ，口縁部は1.5cm程度の面をなす。No531は外面が光沢のある灰色を呈し，内面には凹凸のある縦線が見られる。

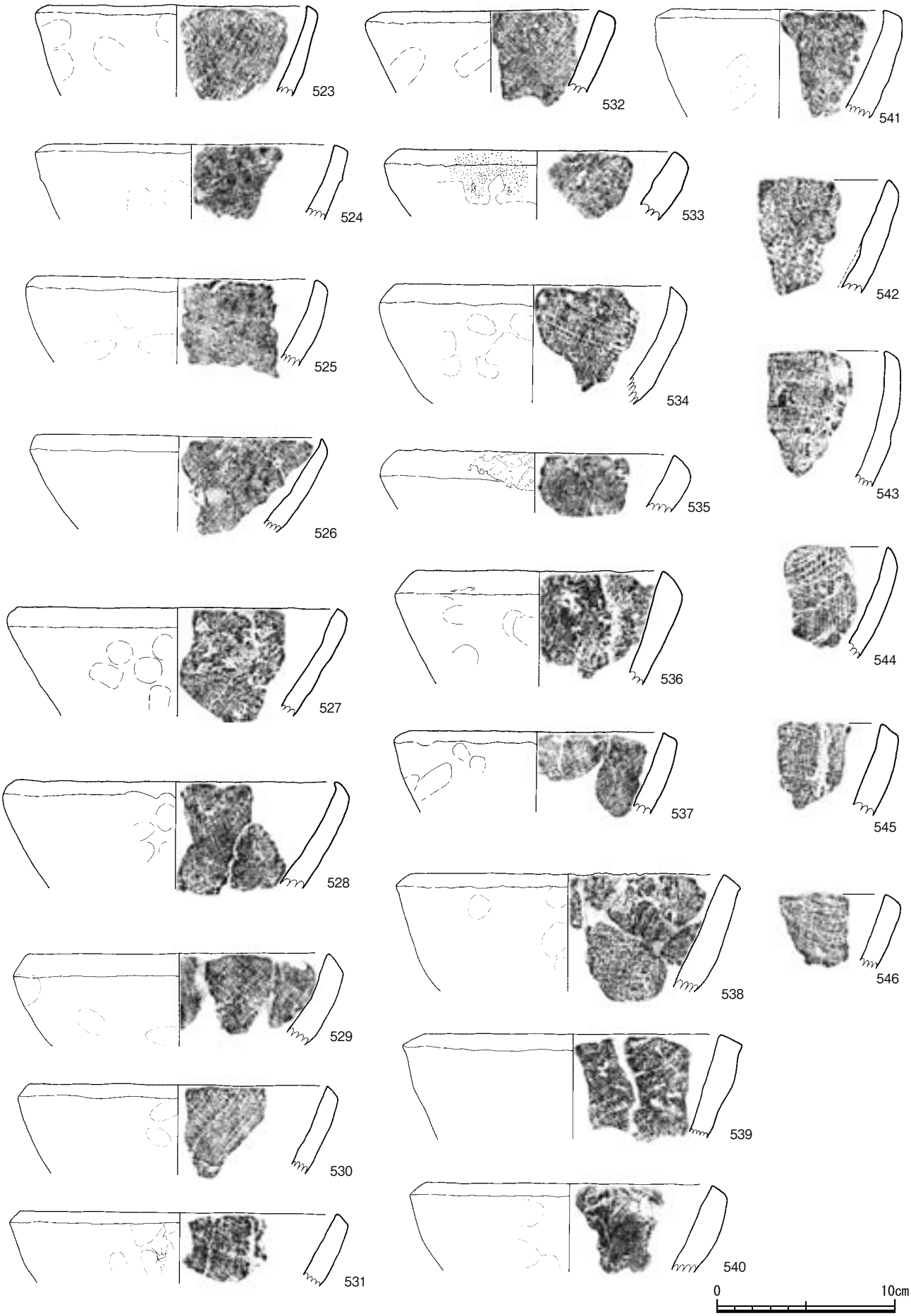
No534～541は口縁端部に比較的安定した面を持ち，中に


476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
0
10cm

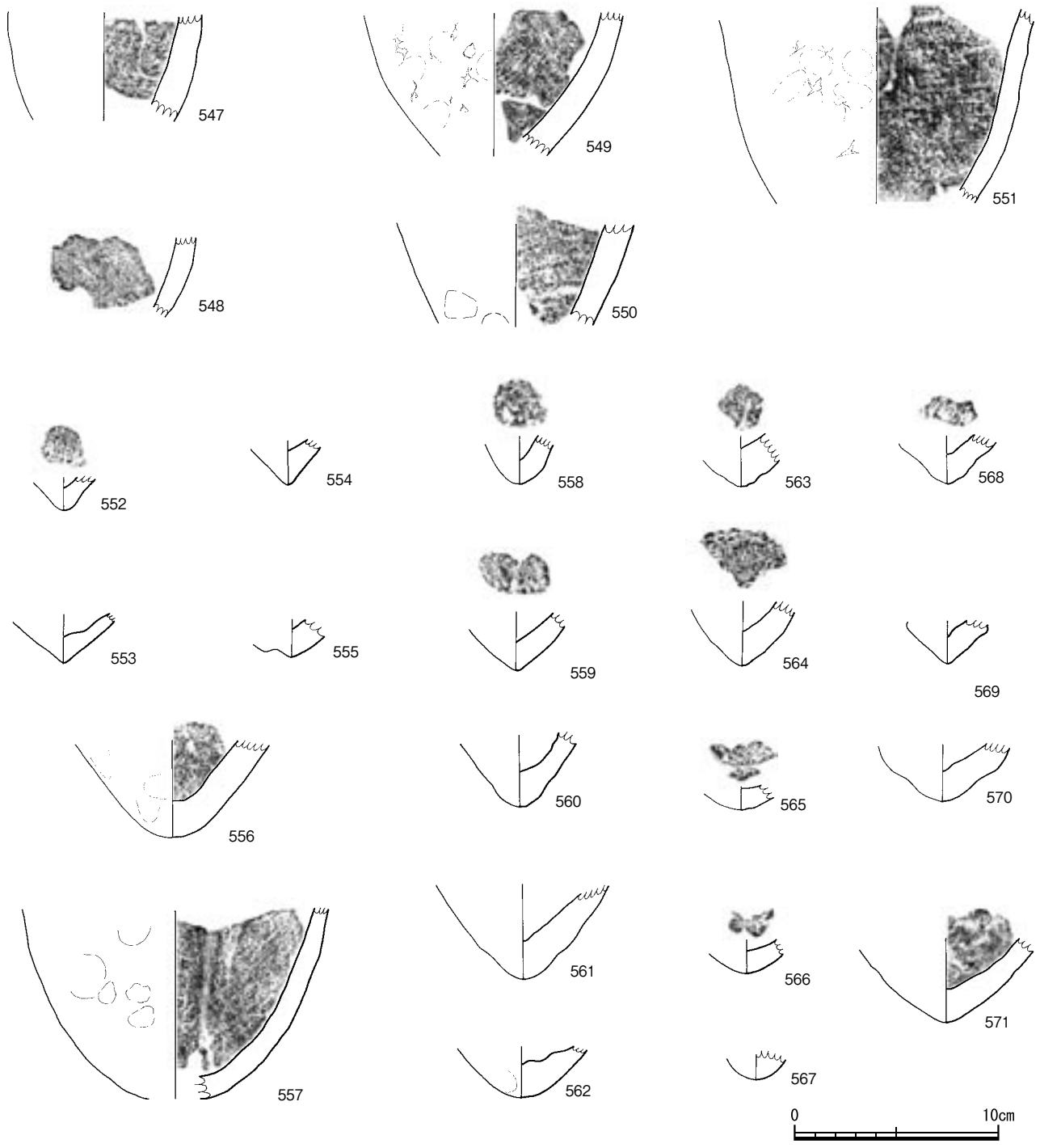
第81図　焼塩壷（1）


499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
0
10cm

第82図　焼塩壷（2）


523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
0
10cm

第83図　焼塩壷（３）



第84図　焼塩壷（４）

は幅1.5cm程度の幅の広い資料もある。No535は口縁端部に粘土塊が認められる。No536は外面が橙色，内面が赤色に近い橙色を発する。No537は硬質で，口縁部の一部に光沢を持つ灰色が付着する。No538は外面に細かな白色粒を多く含み，口縁端部にはオリーブ色をした釉が確認できる。質は硬質である。No545は内面に縦方向の凹線が，凹線の内部に布目が認められる。

No547～551は体部である。

No547は下部に向かって厚さを増すことから底部付近と思われる。No548は内面が灰色，硬質で，外面は橙色を呈する。No549は外面に光沢をもった黄灰色が一面に付着し，内外面に複数のひびを認める。No550は内面で，横方向に長さ1～３cm程度の圧痕を数条認める。No551は比較的残存率が良く，外面は複数のひびを認める。

No552～571は底部である。尖底の度合いの強いタイプ(No552,553,554,559,568,569)や弱いタイプ(No562,565,566)が認められる。また，底部端部は残存しないが，丸底が想定される(No557)タイプもある。内面は大多数に布目痕が認められ

る。

第37表　焼塩壷観察表(１)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成	色調	備考
81	476	K-14/Ⅳa	10.0	(5.0)	1.0～1.3	2～4mmの礫	良好	5YR7/6(橙)	
	477	L-12/Ⅲ	12.0	(4.0)	0.6～0.8	精緻～6㎜の礫	良好	5YR7/6(橙)	-
	478	L-7/Ⅲ	10.6	(5.7)	0.7～1.0	精緻～4mmの礫	良好	2.5YR6/8(橙)	-
	479	注記なし	9.6	(6.6)	0.6～0.9	4～5mmの礫	良好	5YR6/6(橙)	-
	480	J-12/ⅢⅣ H-13/Ⅳ	9.2	(9.1)	0.8～1.2	4～5mmの礫	良好	5YR7/6(橙)	-
	481	I-14/Ⅲ	13.0	(5.4)	0.8～1.0	精緻	良好	5YR6/8(橙)	-
	482	K-14/Ⅳa	10.4	(4.5)	1.1～1.3	5～6mmの礫	良好	5YR6/1(褐灰)	-
	483	K-15/Ⅳa	12.8	(6.8)	0.8～1.0	精緻～4mmの礫	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	484	I-6/Ⅳa	9.4	(5.8)	1.1～1.3	2～3㎜の礫	良好	5YR6/8(橙)	-
	485	H-14/Ⅳa	14.0	(6.3)	0.9～1.1	2～5㎜の礫	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	486	E-7/Ⅲ I-14/Ⅳa	13.0	(7.5)	0.9～1.3	精緻～3㎜の礫	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	487	I-15/Ⅳa	15.0	(5.2)	0.6～1.1	精緻～2㎜の礫	良好	5YR6/8(橙)	-
	488	I-6/Ⅳa	14.4	(7.8)	0.9～1.2	5～6mmの礫	良好	5YR6/8(橙)	-
	489	I-15/Ⅳa	13.4	(8.5)	0.9～1.3	3～7mmの礫	不良	5YR6/8(橙)	礫が多い
	490	I-14/Ⅳa	14.0	(6.8)	0.8～1.2	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-
	491	6T/Ⅲ	12.4	(3.9)	0.7～1.2	2～4㎜の礫	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	492	J-13/Ⅲ	15.3	(4.7)	1.1～1.3	4～5mmの礫	良好	5YR5/6(明赤褐)	-
	493	G-14/Ⅳ	13.0	(6.4)	1.0～1.3	2～4mmの礫	良好	7.5YR5/3(にぶい褐)	-
	494	I-15/Ⅲ	14.4	(5.3)	0.8～1.1	2～4mmの礫	良好	5YR7/6(橙)	-
	495	J-12，14/Ⅲ	13.6	(5.0)	1.3～1.4	精緻～2㎜の礫	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	-
	496	J-14/Ⅳ	13.8	(3.2)	0.9～1.0	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-
	497	k L/Ⅳa	16.0	(3.8)	1.0～1.3	2～8㎜の礫	良好	2.5YR6/8(橙)	口縁部に釉の付着あり
	498	I-14/Ⅳ J-13/Ⅳa	13.2	(4.7)	0.8～1.0	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-
82	499	H I-13/Ⅲ	13.8	(3.6)	0.8～0.9	5～6mmの礫	良好	5YR6/6(橙)	-
	500	J-6/Ⅳa	13.6	(6.0)	0.9～1.4	3～7mmの礫	良好	5YR7/8(橙)	-
	501	I-15/Ⅲ，J-16/Ⅳa	13.0	11.1	0.6～1.7	2～6㎜の礫	良好	2.5YR7/8(橙)	口縁から底部にかけ変色
	502	注記なし	16.0	(2.5)	0.8～0.9	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	503	J-10，13/Ⅳa	16.4	(6.8)	1.1～1.3	2～精緻7㎜の礫	良好	5YR6/6(橙)	-
	504	K-14/ⅢⅣ	15.2	(5.2)	1.0～1.2	1～6㎜の礫	良好	5YR7/6(橙)	-
	505	H-15/Ⅳa	14.8	(6.5)	1.0～1.3	精緻	良好	5YR7/8(橙)	-
	506	I J-11/Ⅲ，I-14/Ⅳa	12.0	(7.0)	0.6～1.1	2～3㎜の礫	良好	5YR6/8(橙)	-
	507	I-14/Ⅳa	13.6	(6.4)	0.7～1.0	精緻～5㎜の礫	良好	5YR6/8(橙)	-
	508	I-15/Ⅲ	12.6	(6.2)	0.9～1.3	4～5mmの礫	良好	2.5YR6/8(橙)	-
	509	I-6/Ⅳa	13.0	(4.9)	0.7～0.9	2～3㎜の礫	良好	2.5YR6/6(橙)	-

第38表　焼塩壷観察表(２)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成	色調	備考
82	510	J-14/Ⅳa	14.0	(6.1)	0.9～1.3	7～8mmの礫	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	511	F-8/Ⅲ	12.6	(4.6)	0.7～1.2	2～3mmの礫	良好	5YR6/8(橙)	-
	512	J-13/Ⅳa	13.0	(7.4)	0.5～1.1	2～4mmの礫	不良	5YR7/6(橙)	-
	513	1T/Ⅲa	13.0	(5.2)	1.0～1.3	精緻～8mmの礫	良好	5YR7/6(橙)	-
	514	M-6/層不明	-	(2.7)	1.0～1.1	精緻	良好	5YR5/6(明赤褐)	-
	515	G-12/Ⅲ	-	(2.7)	0.4～1.0	5～6mmの礫	良好	7.5YR7/8(黄橙)	-
	516	J-5/Ⅳa	-	(5.1)	0.7～0.9	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-
	517	K-14/Ⅳa	-	(5.6)	0.7～0.9	1～2mmの礫	良好	7.5YR6/6(橙)	-
	518	J-7/Ⅳa	-	(3.4)	0.8～1.0	2～5mmの礫	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-
	519	J-12/Ⅳa	-	(4.2)	1.0～1.1	精緻	不良	7.5YR7/6(橙)	-
	520	J-14/Ⅲ	-	(3.9)	1.2～1.3	1～8mmの礫	良好	7.5YR6/6(橙)	-
	521	J-12/Ⅲ	-	(3.8)	1.1～1.2	2～3mmの礫	良好	5YR6/8(橙)	-
	522	I-13/Ⅳa	-	(7.4)	1.0～1.2	5～6mmの礫	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	-
83	523	I-7/Ⅳa	15.8	(5.0)	0.7～1.1	4～5mmの礫	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-
	524	I-4，5/Ⅳa	16.4	(3.7)	0.9～1.1	2～3mmの礫	良好	5YR6/8(橙)	-
	525	J-13/Ⅳa	15.6	(4.8)	0.9～1.0	5～9mmの礫	良好	5YR6/6(橙)	-
	526	J-6/Ⅳa	16.0	(5.3)	0.7～1.0	2～6mmの礫	良好	5YR7/6(橙)	-
	527	J-6/Ⅳa	18.0	(6.0)	0.9～1.3	精緻	良好	5YR7/6(橙)	-
	528	K-15/ⅢⅣa	17.8	(6.0)	0.9～1.2	1～9mmの礫	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	529	I J-12/Ⅲ I-13/Ⅲ	16.6	(5.2)	1.3～1.4	精緻	不良	7.5YR7/6(橙)	-
	530	2T/Ⅲb	16.4	(5.0)	0.9～1.1	精緻	良好	10YR7/6(明黄褐)	-
	531	L-14/Ⅳ	18.0	(4.0)	1.0～1.2	精緻	良好	5YR5/2(灰褐)	-
	532	I-7/Ⅳa	11.6	(4.7)	1.1～1.2	精緻	良好	5YR6/8(橙)	-
	533	I-14/Ⅲ	15.4	3.8	1.4～1.7	精緻	不良	7.5YR5/6(明褐)	-
	534	J-6/Ⅳa	15.4	(6.6)	1.2～1.4	5～6mmの礫	良好	5YR6/6(橙)	-
	535	L-4/Ⅲ	15.4	(3.3)	1.2～1.4	2～6mmの礫	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	-
	536	J-12/層不明	13.8	(6.3)	0.9～1.6	4～5mmの礫	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	537	J-12/Ⅳa J K-14/ⅢⅣa	14.2	(4.6)	0.9～1.2	精緻	良好	5YR5/6(明赤褐)	-
	538	I K-14/Ⅳa	17.4	(6.5)	1.2～1.7	2～4mmの礫	良好	5YR6/8(橙)	口縁端部に釉の付着あり
	539	J-13/Ⅳa	16.4	(5.8)	1.1～1.7	3～4mmの礫	良好	5YR7/8(橙)	-
	540	J-11/Ⅳa	16.0	(4.9)	1.1～1.5	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	541	H-14/Ⅲ	11.6	(6.0)	0.9～1.4	7～8mmの礫	良好	7.5YR6/6(橙)	-
	542	K-6/表土	-	(6.3)	1.1～1.3	2～7mmの礫	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	543	I-6/Ⅳa	-	(7.5)	0.9～1.0	2～8mmの礫	良好	5YR6/6(橙)	-
	544	K-14/Ⅳa	-	(6.2)	0.8～0.9	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	-
	545	J-14/Ⅲ	-	(5.2)	1.2～1.4	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	546	J-15/Ⅲ	-	(4.2)	1.0～1.2	1～9mmの礫	良好	5YR6/6(橙)	-
84	547	I-14/ⅢⅣa	(9.6)	(5.3)	1.2～1.6	2～5mmの礫	良好	5YR7/6(橙)	-
	548	H-13/Ⅲ	-	(3.8)	0.8～1.0	1～6mmの礫	良好	2.5YR6/6(橙)	-

第39表　焼塩壺観察表(３)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成	色調	備考
84	549	K-15/Ⅲ	(9.8)	(7.0)	1.0～1.4	2～5mmの礫	良好	2.5GY6/1(オリーブ灰)	-
	550	J-13/Ⅳa	(11.4)	(4.9)	0.9～1.4	2～6㎜の礫	良好	2.5YR7/8(橙)	-
	551	I-13/Ⅳa	(14.4)	(9.5)	0.9～1.0	4～5mmの礫	不良	5YR6/8(橙)	-
	552	K-14/Ⅳa	(1.4)	(0.8)	1.0～1.4	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	553	注記なし	(5.0)	(2.0)	0.6～1.3	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	554	J13/Ⅲ	(3.6)	(2.2)	0.5～1.7	3㎜の礫	良好	5YR7/6(橙)	-
	555	2T/Ⅲ	(1.5)	(1.8)	1.1～1.2	精緻	良好	5YR6/8(橙)	-
	556	K-14/Ⅲ	(9.4)	(4.7)	1.3～1.8	6～8㎜の礫	良好	7.5YR6/6(橙)	-
	557	I-13/Ⅲ J-13/Ⅲ L-12/Ⅲ	(7.5)	(9.2)	0.7～1.1	3～5mmの礫	不良	7.5YR6/6(橙)	-
	558	J-13/Ⅲ	(3.4)	(2.5)	0.9～1.2	2～5㎜の礫	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	-
	559	K-14/Ⅳa	(4.6)	(2.7)	0.8～1.4	2～3㎜の礫	良好	5YR7/6(橙)	-
	560	L-5/表土	(2.8)	(3.6)	0.9～1.9	3～4㎜の礫	良好	2.5YR6/3(にぶい橙)	-
	561	J-6/Ⅳa	(8.4)	(4.6)	0.7 ～1.9	小さい礫を含む	不良	5YR7/6(橙)	-
	562	K-15/Ⅳa	(1.5)	(2.3)	0.6 ～1.6	2～3㎜の礫	良好	5YR6/6(橙)	-
	563	I-12/Ⅳa	(1.9)	(2.6)	1.5～1.8	2～3㎜の礫	不良	10YR6/6(明黄褐)	-
	564	J-6/Ⅳa	(5.0)	(3.8)	0.8～20.	2㎜の礫	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	565	I-6/Ⅳa	(1.8)	(1.8)	0.9～1.2	精緻	良好	5YR7/8(橙)	-
	566	I-11/Ⅲ	(3.6)	(1.7)	1.0～1.2	精緻	良好	5YR7/8(橙)	-
	567	F-12/Ⅲb	-	(1.2)	-	1～3㎜の礫	良好	2.5YR6/6(橙)	-
	568	注記なし	(2.4)	(2.4)	1.1～1.6	1～2㎜の礫	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	569	注記なし	(1.9)	(2.1)	1.1～1.3	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	-
	570	K-5/Ⅲ	(3.3)	(3.0)	1.0～1.5	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-
	571	H I-12/Ⅳa	(8.6)	(4.2)	1.0～1.5	1～2㎜の礫	良好	7.5YR6/6(橙)	-

赤彩土器(第85図)

赤彩土器は21点と少数で，底部は4点である。内外面に赤色11点，内面のみに赤色９点，外面のみに赤色の認められるもの１点である。底部は全て平底で，着色以外に形態，成形技法等に土師器坏との違いは認められない。

調整はミガキを認めるものと，認められないものがあるが，保存状態に起因するか，元々施されなかったのか，二次的作用で消滅したのかは判然としない。現状で両面にミガキを認めるもの4点，内面のみ６点，認められないもの12点を数える。

色調は，土器自体は浅黄橙色を呈するものが多い。また，黒色土器では黒色部分の断面は焼成不良の箇所が多いが，赤彩土器では認められず，断面まで浅黄橙色を呈する。

No572,573は口縁部である。No572は両面に顔料が塗布され，内面の赤色は外面に比べて濃く，両面はミガキを認める。No573は口縁部内外面にわずかに顔料を留め，内面は上端から１cmの幅に赤色を認め，ミガキは見られない。No574は底部で，両面に顔料を塗布し，底部外面にまで顔料を認める。底部と体部の境は丸みを持ち，調整は観察できない。

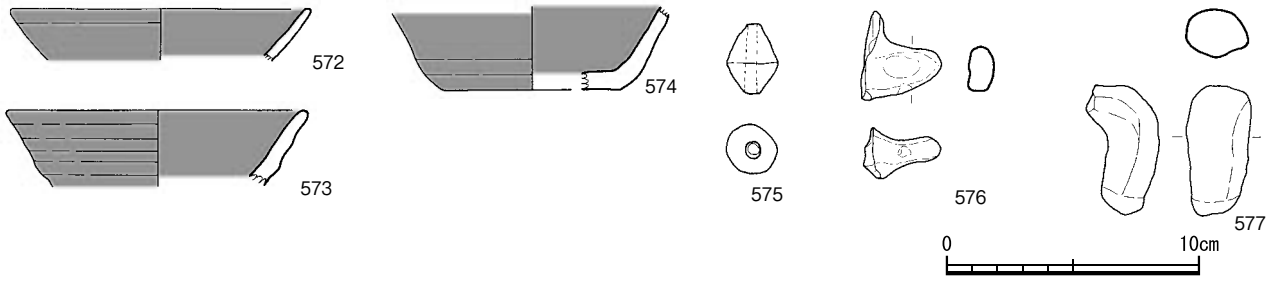
土錘(第85図)

１点で管状土錘である。鹿児島県内では紡錘形が一般的であるが，No575は，最大幅である中央部が稜線を持つ算盤形である。長さも2.7cmと小型で，色調は浅黄橙色を呈する。

把手(第85図)

把手の２点は，いずれも小型である。

No576は黒色土器把手付甕の把手で，正面三角形を呈し，上面は指押さえ，内面は黒色を呈している。No577は環状把手で，体部部分はなく器種は明らかでない。器面調整は粗く，色調は浅黄橙色を呈す。



第85図　赤彩土器及び土錘及び把手

第40表　赤彩土器観察表

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成	色調	備考
85	572	表採	11.8	(2.0)	-	0.3～0.4	精緻	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-
	573	L-5/Ⅳa	12.0	(3.0)	(8.4)	0.5～0.7	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	574	J-16/Ⅲ	(10.8)	(3.2)	7.0	0.5～0.8	粗粒を含む	良好	2.5YR6/6(橙)	-

第41表　土錘及び把手観察表

挿図番号	報告番号	出土区/層	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	胎土	焼成	色調	備考
85	575	I-14/Ⅳa	土錘	2.7	2	0.7	精緻	良好	10YR8/3(浅黄橙)	-
	576	H-13/Ⅲ	把手	3	2.2	1.6	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-
	577	J-12/Ⅲ下	把手	5.1	2.4	1.1～2.6	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-

紡錘車・円盤状土製品(第86図)

環状で，中心部分が穿孔される。穿孔されていない円盤状のものや針穴状の刺突で貫通していないもの，形態が不整形で穿孔の認められるもの等があり，全てが紡錘車と関わると断定できないが製作途上の可能性も考慮し取り扱う。

完成品も含めてすべてが土師器坏あるいは黒色土器からの転用で，元来，紡錘車製作したと断定できる資料はない。転用前の器種は土師器坏が圧倒的に多く，片面中央が窪み，片面は水平もしくはヘラ切り痕が観察される。以下では前者を表面，後者を裏面と呼称する。穿孔方向は表面からと裏面からの両者が認められ，規則性はない。周縁部は大方は平坦に調整するが，一部に転用前の土師器坏底部そのままのものもある(No584)。なお，器面には細線状の調整痕が確認できるものがある。

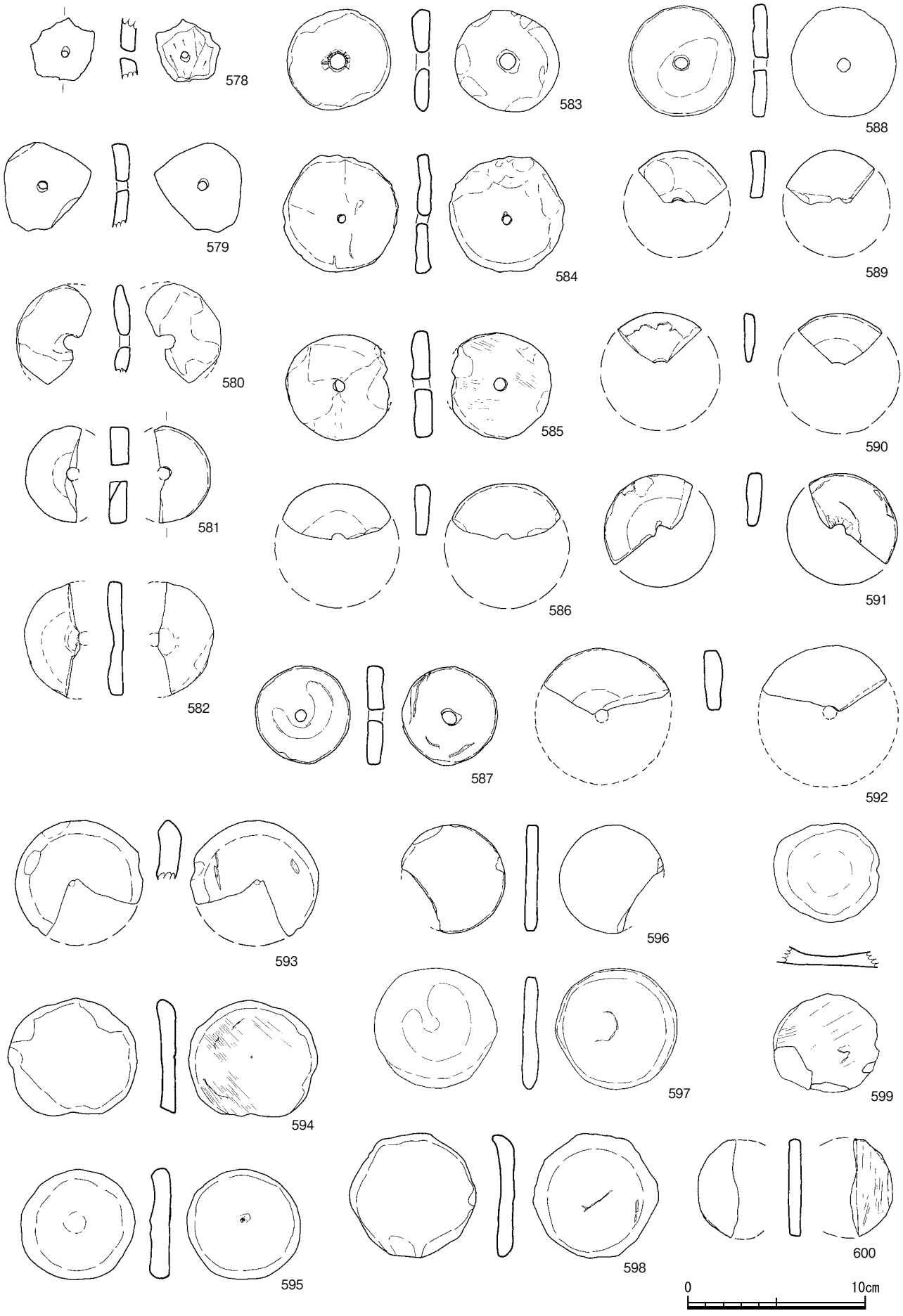
法量は径６cm前後が大多数である。一方，中心部分に穿孔しない円盤状のものでは径７cmが多く，完形品よりも若干大きい。よって，周縁部の整形で法量が小さくなる前の様子を示していると考えられる。なお，穿孔径はおおよそ0.6～0.8cmで，特に0.8cmが多い。

色調は橙色と浅黄橙色を認め，割合はほぼ同じで，この傾向も転用前の土師器坏に類似する。

No578,579は不定形な形態で中心部分に穿孔を認め，穿孔はやや狭く約0.6cmである。No578は土師器甕の転用で，裏面にケズリが認められる。幅は3.5cm程度で小さく，周縁部は全く整形しない。No579は色調がにぶい赤褐色を呈し，土師器の転用である。転用される前の器種は形態が不定形で，断定はできないが，一方向に器壁が段々と厚くなるため土師器坏あるいは椀の体部と考えられ，浅黄橙色を呈する。

No580～593は一般的な紡錘車である。

No580は内面に若干の窪みがあり，器面はあまり丁寧に調整されず，周縁部整形も粗雑である。No581は周縁部，器面ともに丁寧に整形され，表面は若干窪む。灰色に還元している箇所が認められる。No582は周縁部の整形は良好であるが，器面は整形が粗く，表面に深い窪み裏面にはヘラ切り痕を残し，穿孔はかろうじて残存する。No583も整形があまく，周縁部は平坦であるが整形されない部分も目立つ。表面は緩やかに窪み，裏面は若干ヘラ切り痕が残る。No584は全く整形が認められず，周縁部には転用前の坏の体部外面下端の立ち上がりが残存する。表面は若干窪み，部分的に剥離し，裏面は全体に剥離を認める。表面には，穿孔部に隣接



第86図　紡錘車及び円盤状土製品

して途中で止めた孔を認める。No585も整形が粗く，周縁部に整形が認められ，裏面は丁寧に整形，細線状の調整痕が残る。No586は周縁部の整形は認められるが、端面の幅が狭く，丸みをおびている。表面は凹む。No587は径5.6cmと小型である。表面には「U」字状の窪みが，裏面はヘラ切り痕が明瞭に残り，周縁部は丁寧に整形される。No588は完形で整形も丁寧で，器面に複数の窪みが認められる。No589は表面に窪み，裏面は器面が粗い。No590は表面に窪み，裏面にはヘラ切り痕が認められ，中心部分の穿孔はかろうじて残る。No591も表面が窪み，裏面にヘラ切り痕が認められる。No592は裏面が中央から端にかけ若干膨らみ，端部は丸みをなし，内面は若干窪む。No593は浅黄橙色を呈し，周縁部は土師器坏の体部外面下端の立ち上がりが残り，外見は全くの土師器坏片で，表面に回転ナデ，裏面にはヘラ切り痕が残る。穿孔は，中心部分から若干ずれた位置で認める。

No594と595は裏面の中心部分に針穴状の刺突を認める。

No594は周縁部の一部に整形が，整形されない部分は土師器坏の体部下端の傾斜が残存する。裏面は細線状の調整痕が確認でき，中心部に0.1cm未満の刺突がみられる。No595は浅黄橙色を呈し，表面は大きく窪む。裏面は幅0.5cm程の穿孔が約0.3cmの深さで認められ，そのさらに中心部に0.1cm程の刺突が施される。

No596～600は穿孔のない円盤状を呈する。

No596は径６cmで紡錘車の法量と類似し，周縁部等の整形も丁寧で，器面の一部分に灰色の還元色を認める。No597は周縁部の整形が一部に確認され，中断し傾斜面を残す箇所もある。表面には窪み，裏面にはヘラ切り痕を認め，法量は16.8cmと若干大きい。No598は整形を認めず，径7.4cmと大型で，表面はナデ，裏面はヘラ切り痕を認める。周縁部は体部外面下端を切り取るNo599も整形は認められない。径5.9cmで紡錘車の標準的な法量である。底部端部から内面の見込みにかけて斜めに切り取っている。No600は残存率が1/3程度で，穿孔がされていた可能性もある。器面は丁寧に整形されている。表面は黒色を呈し、黒色土器の転用が考えられる。表面には細線の調整痕が認められる。

第42表　紡錘車及び円盤状土製品観察表(１)

挿図番号	報告番号	出土区/層	径(cm)	器厚(cm)	穿孔径(cm)	胎土	色調	側面調整	備考
86	578	H-14/Ⅲ	(3.2)	0.8～0.9	0.6	砂粒，石	5YR4/3(にぶい赤褐)	-	-
	579	J-15/Ⅳa	(4.9)	0.6～0.9	0.6	精緻	7.5YR8/6(浅黄橙)	-	-
	580	J-15/Ⅳa	6.2	0.5～0.9	0.8	精緻	7.5YR7/6(橙)	○	-
	581	I-14/Ⅳa	5.4	0.9～1.1	0.7	精緻	2.5Y8/2(灰白)	○	-
	582	I-5/Ⅳa	6.6	0.5～0.9	-	精緻	7.5YR6/8(橙)	○	底部ヘラ切り痕あり
	583	J-15/Ⅳa	5.9	0.4～1.0	0.8	精緻	10YR8/3(浅黄橙)	○	-
	584	J-12/Ⅲ	6.8	0.6～0.9	0.6	精緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	-	-
	585	K-13/Ⅳa	5.8	0.6～1.0	0.7	精緻	10YR8/3(浅黄橙)	○	-
	586	G-7, 8/Ⅲ	(2.8)	0.6～0.9	(0.8)	精緻	10YR8/4(浅黄橙)	○	-
	587	J-12/Ⅳa	5.6	0.7～0.9	0.8	精緻	7.5YR8/4(浅黄橙)	○	-
	588	F-6/Ⅳa	6.2	0.7～0.8	0.9	砂礫の抜けた孔あり	7.5YR7/6(橙)	-	-
	589	F-7/Ⅲ	(2.7)	0.6～0.8	(0.8)	精緻	7.5YR8/6(浅黄橙)	-	-
	590	I-6/Ⅳa	6.8	0.2～0.6	1.2	精緻	7.5YR7/6(橙)	-	底部ヘラ切り痕あり
	591	I-14/Ⅳa	(6.2)	0.5～0.9	(0.8)	精緻	10YR8/4(浅黄橙)	-	-
	592	K-7/Ⅲ	7.5	0.6～1.0	-	精緻	5YR4/8(赤褐)	-	-
	593	H・I-14/Ⅲ	7.2	0.9～1.3	-	精緻	10YR8/4(浅黄橙)	-	-
	594	J-9/Ⅲ	7.2	0.7～1.0	-	精緻	7.5YR8/6(浅黄橙)	○	調整痕あり
	595	H-12/Ⅳa J-14/Ⅳa	6.3	0.9～1.2	-	精緻	10YR8/4(浅黄橙)	-	-
	596	J-6/Ⅳa	6.0	0.6～0.7	-	精緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	-
	597	J-13/Ⅳa	6.8	0.5～0.9	-	砂礫の抜けた孔あり	7.5YR7/6(橙)	-	底部ヘラ切り痕あり
	598	L-7/Ⅳa	7.4	0.7～1.0	-	砂礫の抜けた孔あり	7.5YR7/6(橙)	○	-
	599	J-14/Ⅲ	5.9	0.5～0.9	-	精緻	7.5YR7/6(橙)	-	底部ヘラ切り痕あり
	600	E-7/Ⅳa	5.4	0.6～0.7	-	精緻	7.5YR7/6(橙)	-	黒色土器の再利用

土師器甕(第87図)

本遺跡では多数の土師器甕が出土し，形態，調整技法，色調で数タイプに分類される。色調は橙色，浅黄橙色，褐色の大きく3種があり，橙色が胎土に砂粒を多く含み，浅黄橙色が脆弱で胎土は精緻，褐色は硬質で細かな砂粒・石英を含む。以下では形態，調整技法を組合せたそれぞれの分類基準を提示する。なお，大分類として口径20cm以上を大型，20cm未満を小型とした。底部から内弯しながら傾斜をもって立ち上がり，胴部の長さの短いものを鉢とした。甕７類～甕８類が大型，甕９類～甕10類が小型，鉢１を鉢とする。

甕１類(第88,89図，No601～623)

(形態)

胴部が若干張り気味で丸みをもつ。口縁部は他類に比べて長く，器壁も薄い。

(調整技法)

外面は縦方向のハケの後に横方向の回転ハケを施し，その上から幅のせまい縦ハケを施すものもある。胴部上位から口縁部はさらに横方向の回転ナデ，胴部下位は不整方向のハケが施される。

内面は胴部上位から口縁部に回転ナデ，或いは回転横ハケを施した後，左斜め上にケズリが施されている。ケズリの上端は水平にはそろえず，ハケやナデが残されている。口縁部外面は口縁部が長いためおおよそ２段にナデが認められる。

(色調)

色調は橙色を呈するものがほとんどで，若干浅黄色が認められる。

甕２類(第89,90図,No624～629)

調整技法，色調は甕１と同様である。甕1とは，胴部がまっすぐになる点で分類される。

甕３類(第90図,No630～632)

口縁部の形態，色調から他と分類される。調整技法は甕１・甕２と同様である。口縁部形態が若干須恵器にちかいことから，須恵器との関わりが想定される。

(形態)

口縁端部は斜め方向に面を持つ。胴部は張り気味の丸いものとまっすぐになるものが，数が少ないために細分は行わない。

(色調)

胎土に石英，角閃石をわずかに含み，灰黄褐色を呈する。

甕４類(第90図,No633～642)

甕２と同様に直線的胴部であるが，口縁部が短いことと器壁が厚い点が異なる。色調は橙色と浅黄橙色が見られる。内面のケズリは上端を揃えていない。

(形態)

口縁端部は丸くおさめるものが多いが，色調で浅黄橙色を呈するものは面をもつ(No641,642)。

(調整技法)

色調は橙色を呈する。No633,636の縦ハケ以外は認められない。大方は胴部上位のみに回転ナデが施されている。

内面は胴部上位から口縁部のナデの後にケズリを施し，ケズリの方向は左斜めで水平なものは認められない。

甕５類(第91,92図,No643～660)

まっすぐな胴部と短い口縁部を有し，色調は褐色に限定される。内面のケズリ上端は水平にそろえるものが多く，ケズリの方向も水平のものが認められる。若干，上端をそろえていないものも認められる。

(形態)

口縁端部付近が若干膨らみ端部は丸くおさめるものが多い。

甕６類(第92図,No661～667)

甕4とほぼ同様であるが，内外面に指押さえ痕を多く確認する点で分類される。色調は褐色に限定される。量的に多く，内面のケズリの上端は水平と水平でないものがある。

(形態)

口縁部は短く，指押さえ痕のためいびつになる。

(調整技法)

内面のケズリ上位の調整は，斜め方向と水平方向がある。

甕７類(第93図,No675～695)

内面のケズリ上端を水平にそろえ稜線を形成し，口縁部の長さにより甕６と甕７は分類される。色調は橙色，浅黄橙色，褐色を認める。

(調整技法)

橙色を呈する。No675は胴部上位に回転横ハケを認めるが，他は全てナデ調整である。内部は全て上端でケズリをそろえるが，ケズリの方向は斜めと水平に近いものがある。

甕８類(第94図,No696～710)

甕５と同様，内面のケズリ上端を水平にそろえ稜線を形成する。口縁部が甕６と比べて短く，色調が褐色に限定される点が甕６との相違点である。また，器壁の厚いものが多く認められる。

甕９類(第95図,No711～715)

口径20cm未満の小型である。形態は胴部が若干張り丸みを成し，調整技法は大型とほぼ同じである。色調は橙色が主体で，若干浅黄橙色を認めるが，褐色はみられない。

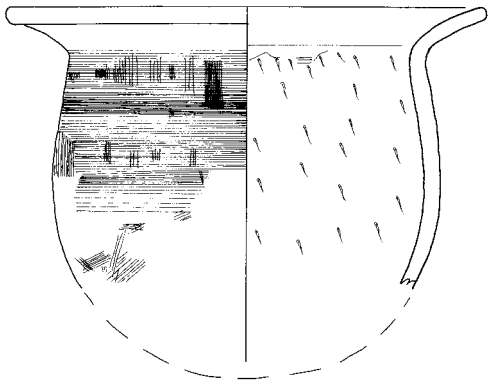
甕10類(第95図,No716～726)

口径20cm未満の小型で，胴部が直行するタイプである。橙色と浅黄橙色が主体である。

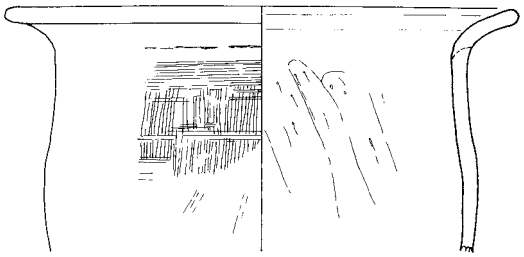
鉢１(第96図,No728～739)

底部から胴部にかけて内弯しながら傾斜し，そのまま口縁

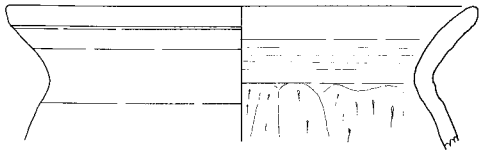
甕１類



甕２類



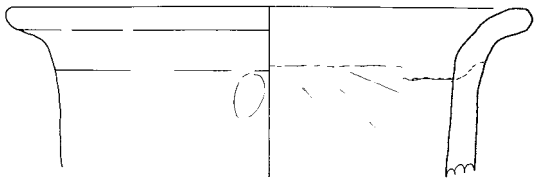
甕３類



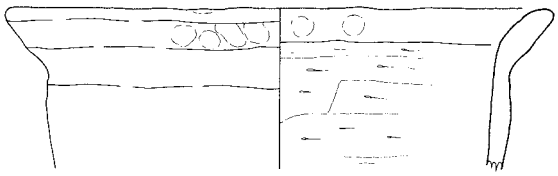
甕４類



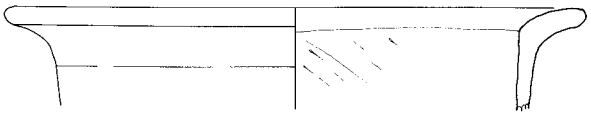
甕５類



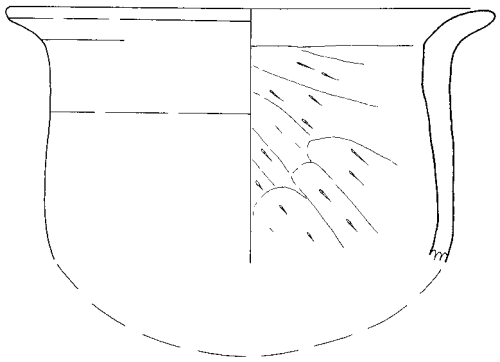
甕６類



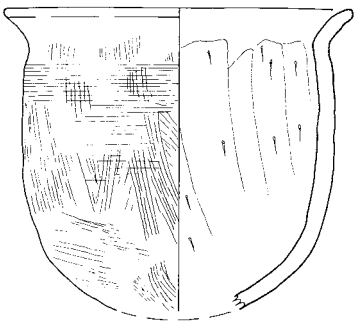
甕７類



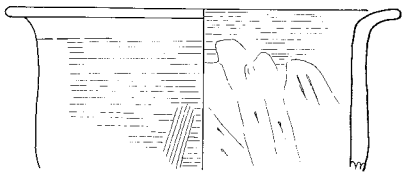
甕８類



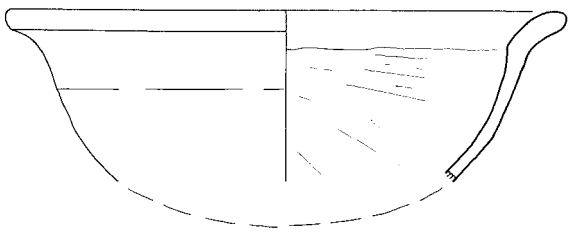
甕９類



甕10類



鉢１類



第87図　土師器甕分類表

部に至るものが多い。胴部が短く鉢として分類した。色調は橙色は認めず，浅黄橙色が多く褐色がそれに次ぐ。調整は外面にハケが残るものとナデのものがある。

(甕１類)

No601～604は口縁部が水平開き，端部が若干ふくらむ。外面に縦方向もしくは不整方向のハケ，口縁部内面には横方向のハケが認められる。

口縁部内面にNo605～611はハケ，No612～623はナデを施す。No605はやや脆弱な胎土で，赤色粒を多く含み，外面は縦ハケのみである。No607は硬質で砂粒を多く含み，その周囲に数mmのひびを無数認める。口縁端部は面を持ち，２条から３条の沈線を施す。外面の調整は縦ハケの後に横ハケを認めるが，不十分で下の縦ハケが目立つ。口縁部付近に灰色に変色する部分があるが，破損した断面部に灰色の付着物が認められことから二次的要因で付着，変色したと考える。No608は脆弱な胎土である。No610は外面の砂粒の周囲にひびを複数認める。No611は胴部下位が残存し，全体を復元した。胴部外面上位は縦ハケの後に横ハケを施し，各所に縦ハケが残る。口縁部は横ナデ，胴部外面下位は横ハケの後に不整方向のハケを施す。No612は胴部から口縁部にかけて同じ厚さで，外面には部分的に煤が付着する。No613は橙色のものに多い質感をもつが色調は浅黄橙色に近く，外面には煤が部分的に付着し，口縁部内面の横ナデは幅約１cmの単位が認められる。No614は器表が粗く，口縁部から胴部にかけて部分的に灰色に変色している。No615～618は硬質で光沢のある橙色を呈す。615は口縁部内面に横ナデの単位が認められ，No616は胴部外面に幅の広いハケを施した後，横ハケを施す。No617は口縁部内面から横ハケ⇒横ナデ⇒ケズリの調整工程が確認でき，外面にはハケ間隔の狭いものと広いもの，その中間の３種のハケが認められる。No618も口縁部内面にハケが若干残り，横ハケ⇒横ナデ⇒ケズリの調整工程がみえる。No617は胴部下位まで残存し，全体を復元した。外面は縦ハケの後に横ハケ，胴部下位には不整方向のハケ，口縁部には横ナデを認め，内面は下位から胴部上端にかけて一気にケズリを施す。No620は若干脆弱な胎土である。No621は口縁部外面に接合痕を残し，外面に若干横ハケを認めるが，他は縦ハケとなる。No622は甕１の中では口縁部が短く，口縁部付近が一部灰色を呈している。No623は若干器壁が厚い。色調も浅黄橙色を呈し，胴部外面は上位を横ナデで仕上げ他とは異なる。総体的には甕４に近い。

(甕２)

No624は直線的胴部をなすが，器面の窪み等で若干膨らみ，胴部下位に赤色状の付着を認める。No625は浅黄橙を呈し脆弱で，砂粒はほとんど含まず，胴部から口縁部にかけて若干器壁が薄くなる。胴部内面上位は，横ハケ⇒横ナデ⇒ケズリの工程が確認できる。No626は若干小型で，胎土に赤色粒を多く含む。No627は外面に細かな横ハケを認め，横ハケの下には縦ハケが施され，口縁部外面に横ナデで消し切れずに若干残る。外面には煤の付着を認める。No628は口縁部外面に強い横ナデ，内面の胴部上端はケズリで水平にそろえている。No629はにぶい橙色を呈し，他と若干色調が異なる。外面には幅２cm程度の縦ハケが不規則に認められ，口縁端部はナデで面を形成する。

(甕３)

No630は口縁部に若干丸みのある面を形成し，内面に横ハケを認める。No631は胴部が張り丸みを持ち，内面のケズリの上端はそろえ，外面の一部に煤が付着する。No632はまっすぐな胴部で，口縁部には傾斜変換点が１か所認められる。

(甕４)

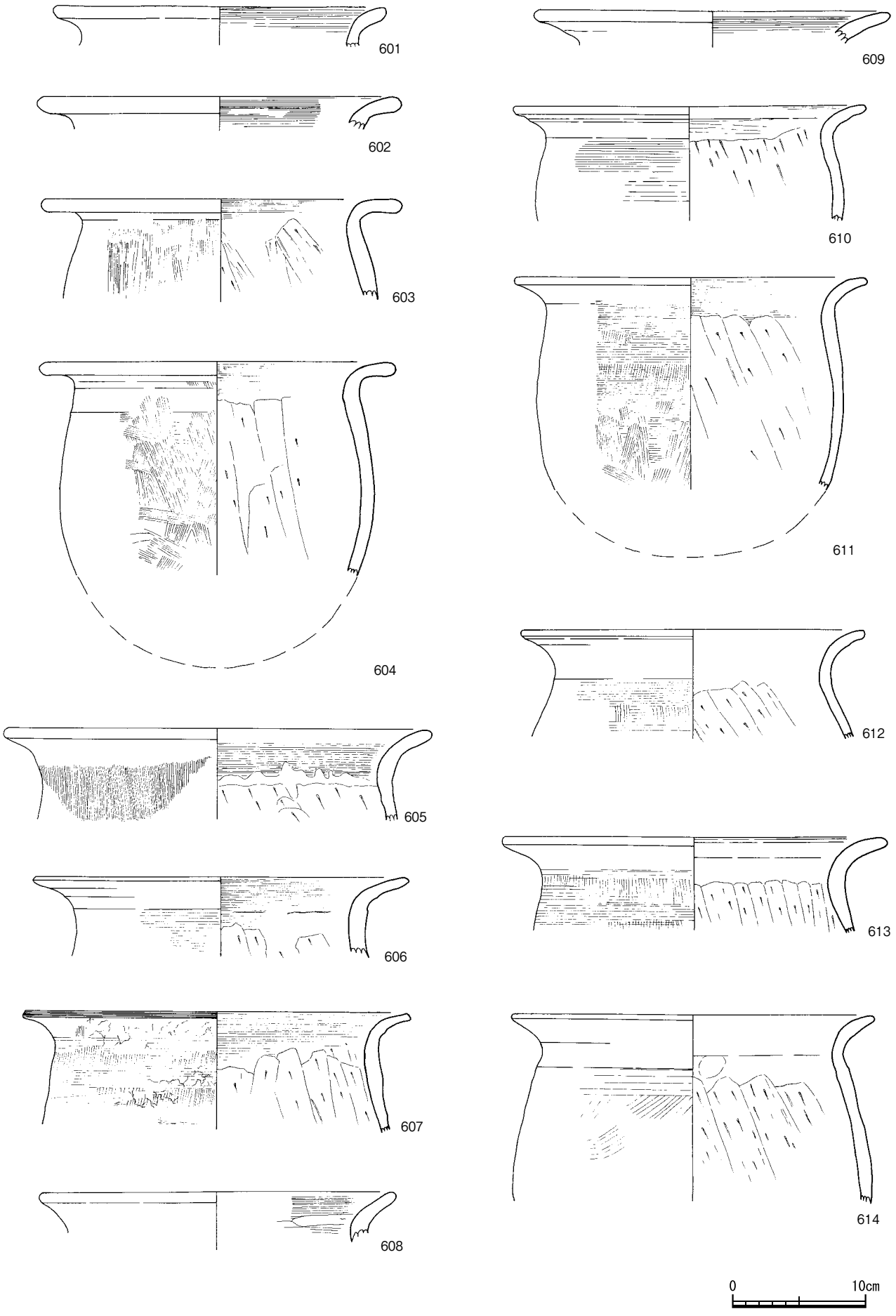
No633は胴部から口縁部で，１段の横ナデを認め，外面に方向をそろえた丁寧な縦ハケを施す。No634は短い口縁部で，内面のケズリ上端は水平にそろえる。No635は内面の胴部上端に斜め方向のハケ，その上の口縁部にかけては横にナデてハケを消している。No636は脆弱な胎土で，外面には間隔の広い縦ハケ，内面は口縁部から比較的低いところまで横ハケを認める。No637は胴部から口縁部に傾斜変換を認め，口縁端部は面を成す。No639は脆弱な胎土で１～２mm程度の石英を多く含む。No640はにぶい橙色を呈し，口縁部から胴部上位にかけて３段の横ナデを認める。No641と642は灰白色を呈し色調が特異で，胎土には赤色粒を多く含み口縁端部は面をもつ。

(甕５)

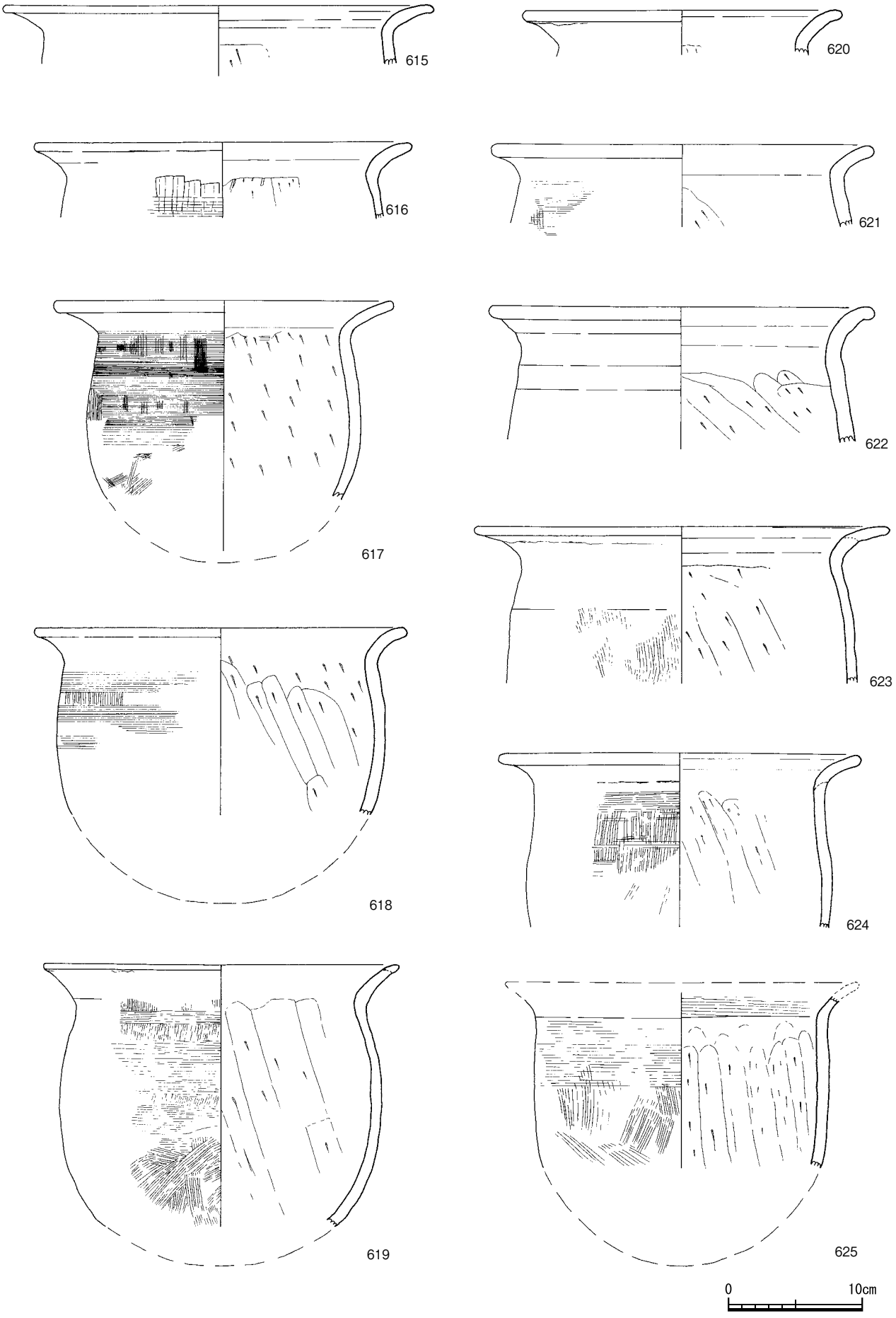
No643は胴部が口縁部に比較して器壁が薄い。No644は胴部から口縁部にかけてすぼまり端部は丸くおさめ，甕５の中では若干軟質である。No645は口縁端部から胴部外面に煤が付着し，内面のケズリは浅く器面の段差はない。No646は胎土が若干粗く，外面に爪痕を認める。No647は口縁部から胴部上端にかけて外面を丁寧に横にナデ，その下位は不整方向にナデによる凹凸を残す。No648は内面のケズリ上端を揃え若干稜線が残り，甕７とすることもできる。No649は外面に煤の付着を認め，No658と形態，煤の付着，出土地も重なり同一個体の可能性もある。No650は口縁部から胴部上位に横ナデ，その後に不整方向のナデを施し，内面も同じで，外面には若干煤の付着を認める。No651は器面が粗く，外面に若干指押さえを残し，器壁も甕５の中では厚い。No652も器面が粗く器壁が厚い。No653は内面のケズリ上端が若干稜を持ち，甕７とすることもできる。No654は胴部から口縁部にかけての屈曲がやや強く，胴部は口縁部に比べて厚い。No655は器壁が厚く内外面のナデも粗い。No656は内面上位のケズリを水平に施す。No657は胴部外面上端から口縁部に横ナデを認め，胎土に角閃石を多く含む。No658は口縁部にかけて緩やかに外反し，口縁端部付近で若干折れ曲がり，ナデはあまい。No659は器面が粗く胎土に細かな石英を多く含む。No660は胴部上端を若干外反し，口縁部先端を折り曲げて端部を丸く仕上げ，胎土に細かい角閃石を含む。

(甕６類)

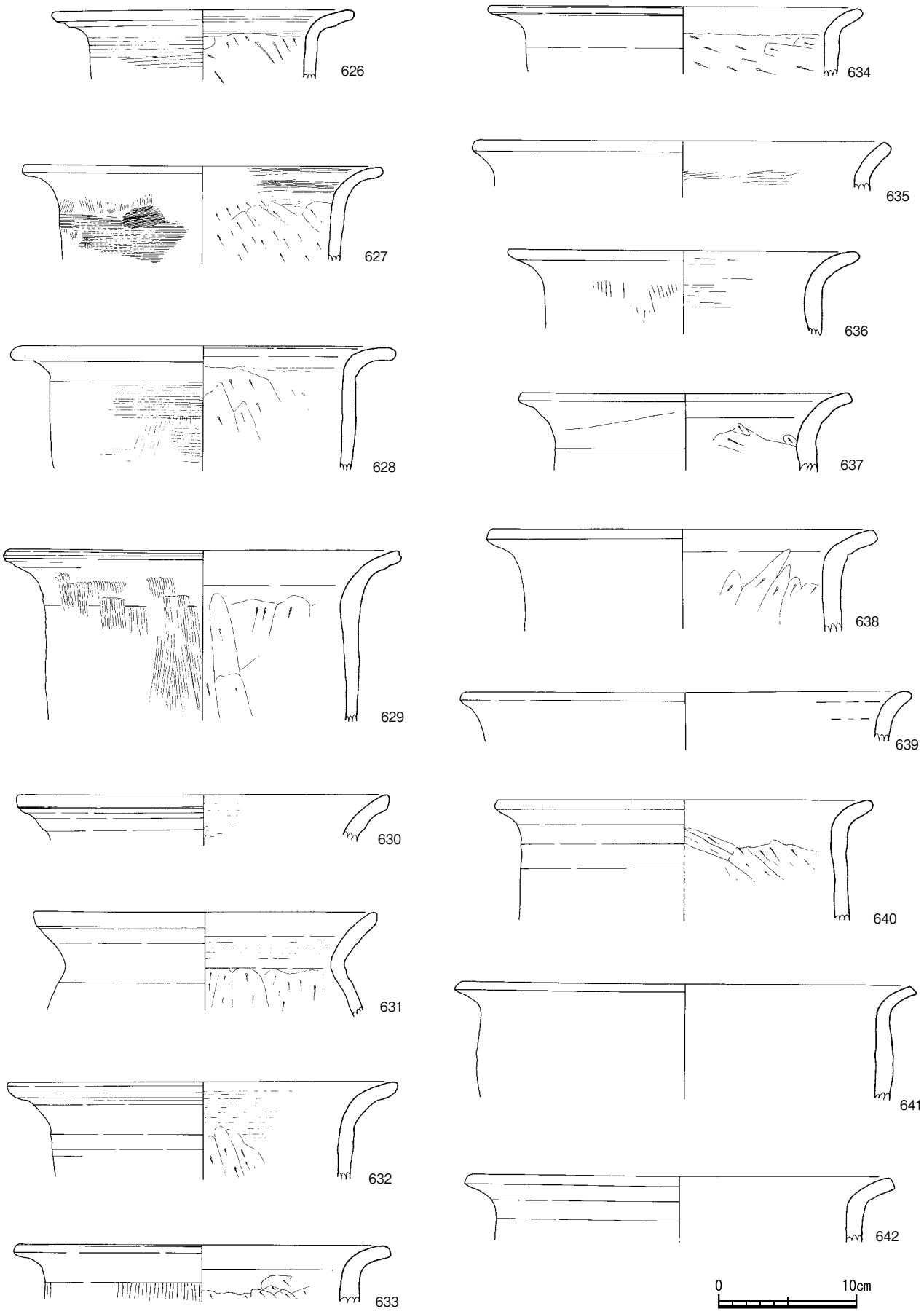
No663は内外面の粗いナデの後，複数の指押さえを施し，内面のケズリ上端はそろえていない。No664は外面の口縁部から胴部上位に横ナデ，その後指押さえを行い，胴部中位



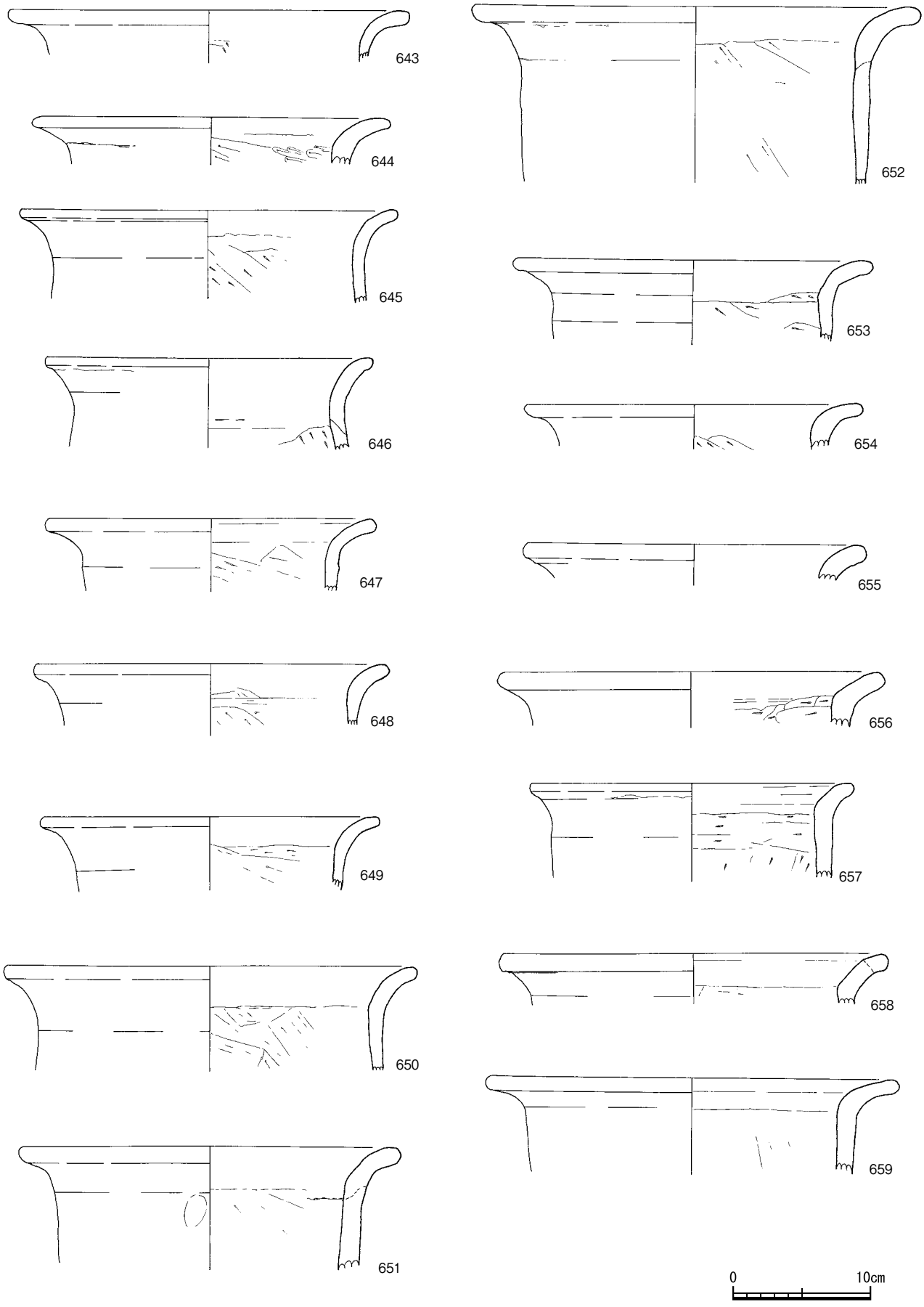
第88図　土師器甕（1）



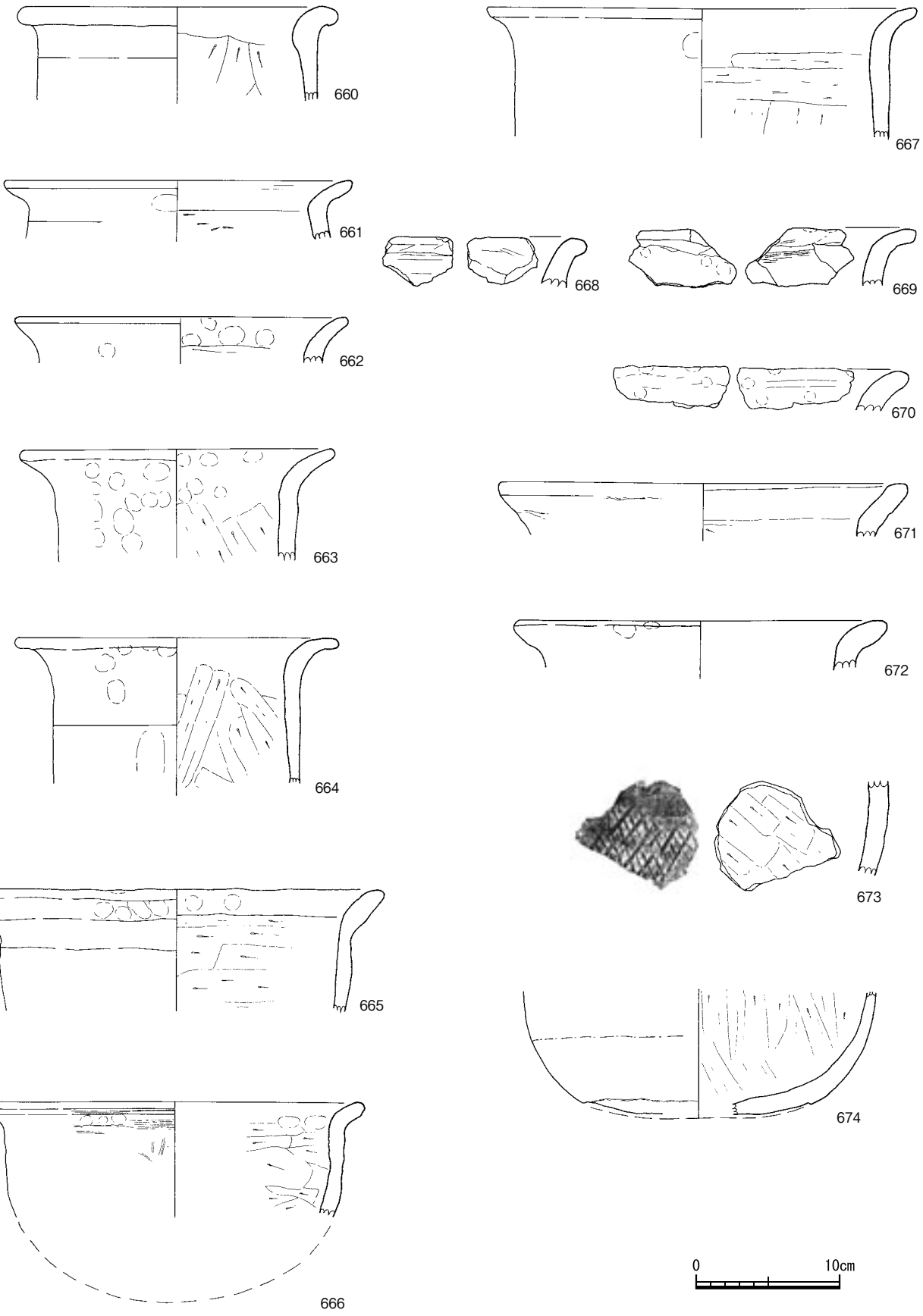
第89図　土師器甕（2）


626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
0
10cm

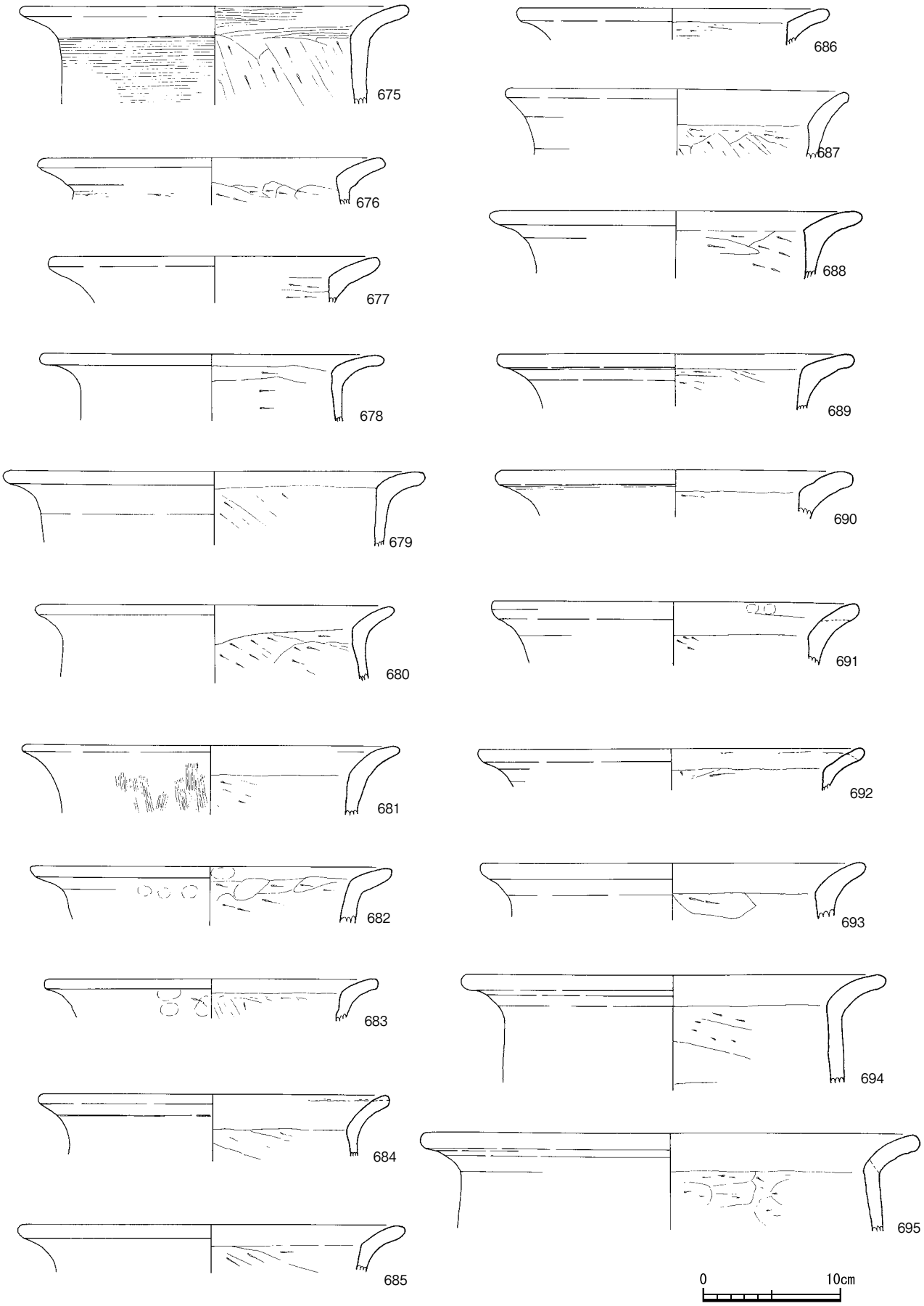
第90図　土師器甕（3）


643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
0
10cm

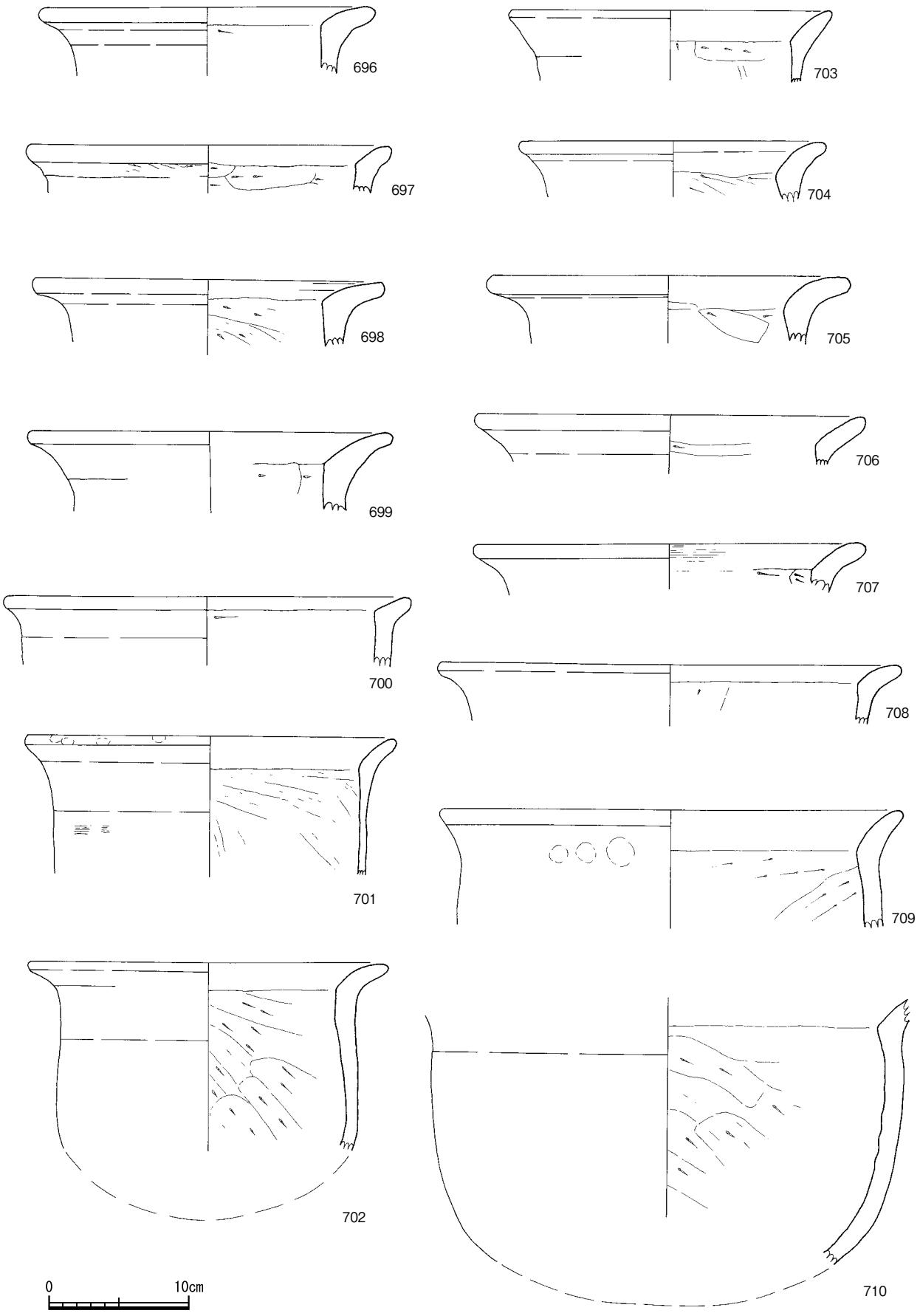
第91図　土師器甕（４）


660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
0
10cm

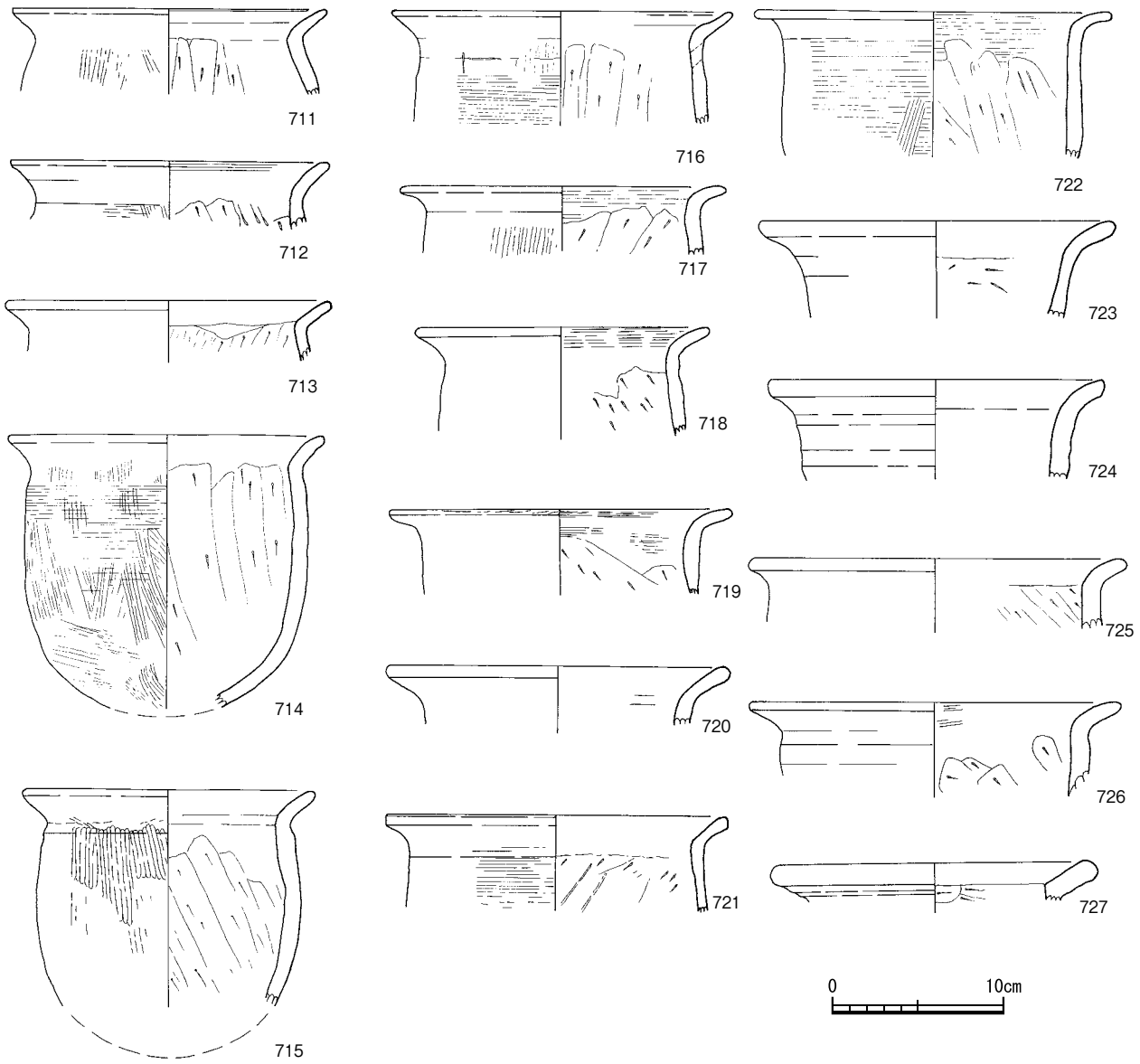
第92図　土師器甕（５）


675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
0
10cm

第93図　土師器甕（6）


696
703
697
704
698
705
699
706
707
700
708
701
709
702
710
0
10cm

第94図　土師器甕（7）



第95図　土師器甕（８）

には斜め方向にナデる。No665は胴部に比べて器壁の厚い口縁部を持ち，胴部と口縁部の境は強い横ナデで窪み，内面は水平方向の削りで上端をそろえ，外面全域に煤が付着する。No666は胴部から屈曲し短い口縁部を形成し，口縁部外面の上端をナデて面をつくる。残存部の下位は若干すぼまる傾向を示し，器高も低いことから鉢に分類できる可能性もある。

No668～672は口縁部である。No668は口縁部先端を折り曲げて玉縁状，No669は口縁部端部を押えていびつな面を形成し，No672は胴部から口縁部にかけてすぼまり，口縁部外面の上端に若干丸みのある面を形成している。

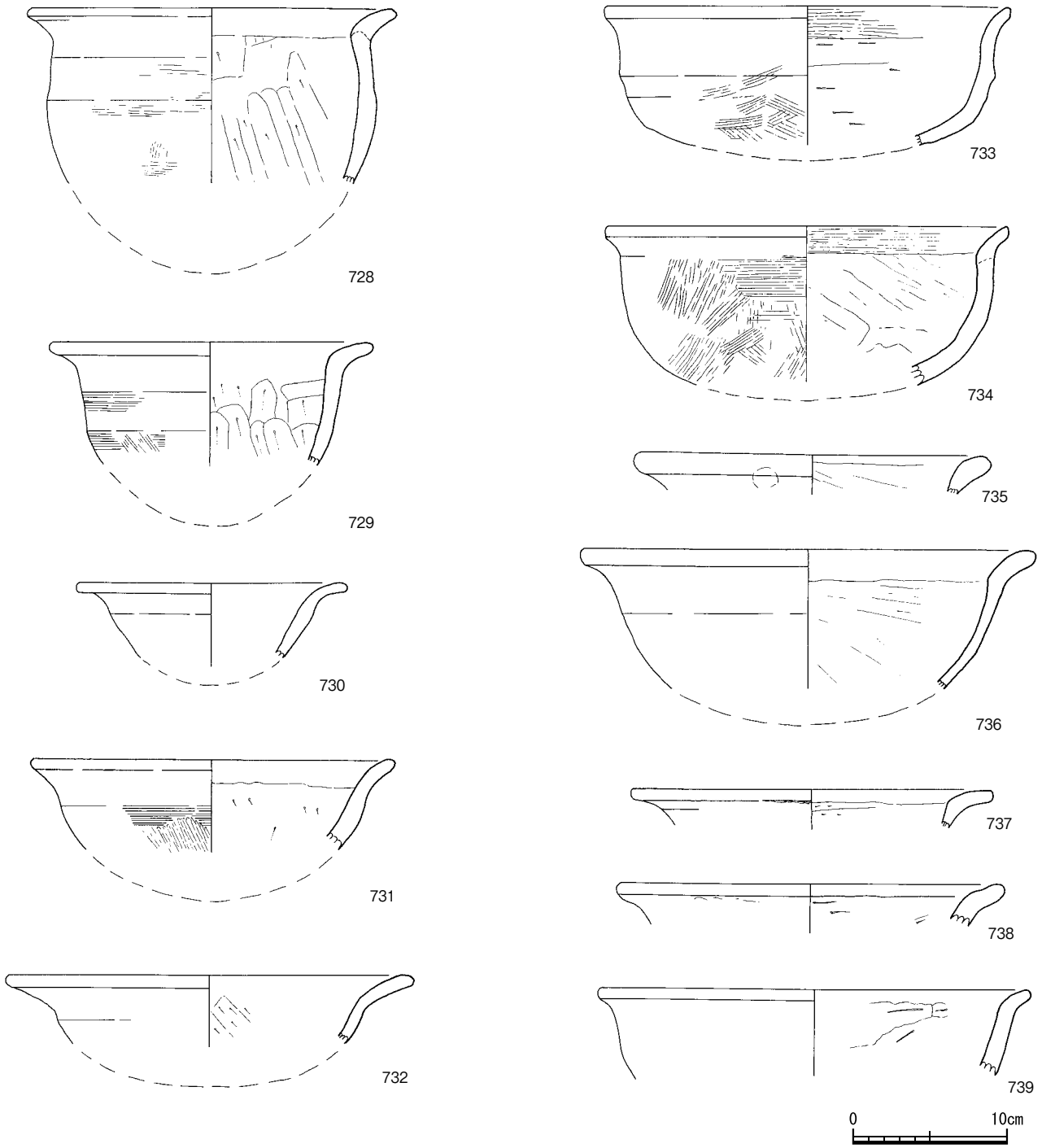
(胴部・底部)

No673は胴部片である。本遺跡で唯一外面に格子タタキが認められる。外面はタタキを施した後，回転のナデが認められる。色調は外面がにぶい橙色であるのに対し，内面は灰白色を呈す。No674は底部付近で，底部資料が少ないことからここで取上げる。資料は剥離しているため，詳細な情報はみえないが，その上位は斜め方向にナデられ，胴部外面下位の一定ラインから上位で煤が全体に広がっている。

(甕７類)

No675～683が浅黄橙色系，No684～695が褐色系である。

No675は甕７で唯一，横ハケを胴部上位と口縁部内面に施す。外面には黒斑も認められる。No676は口縁部が甕１や甕２に類似して長くナデも２段みられ，橙色に近い発色である。No677は口縁端部に一部黒斑を認める。No678～680は口縁部に比べ薄い胴部を持ち，口縁部の傾斜はゆるく水平に近くなる。No680は部分的に橙色に発色する。No681は外面に縦ハケ，胴部から口縁部では比較的緩やかに外反する。No682は口縁部と胴部の境に，口縁部の折り曲げ時の指押さ



第96図　土師器鉢

えを水平に残し，外面には黒斑も認める。No683は胴部外面に複数の指押さえ，口縁部内面には横ナデの後に斜め方向のナデがみられる。No684は胴部の器壁が薄く，口縁部の立ち上がりは傾斜をなし外反する。No687,688は口縁部外面の立ち上がりに傾斜変換がある。No689は胴部から口縁部にかけて丁寧な横ナデ，口縁端部は玉縁状で，外面に煤が付着する。No694は口縁部と胴部の境の器面が粗く，内面に黒斑が，断面は黒色を呈する。No693は器面が若干粗い。No694と695は硬質で赤褐色を呈し，口縁部外面には横ナデを認めるが胴部にはない。

(甕８類)

No696は口縁部外面に傾斜変換があり，内面のケズリは斜め方向に施す。No697は口縁部外面を若干膨らませ，膨らみの下位には爪痕を水平に残す。No698は胴部上位まで丁寧な横ナデ，胴部には煤が付着する。No699は口縁部にかけてすぼまる。No700は内面で，ケズリ上端の稜線から口縁端部までの長さが短く，外面には全面に煤が付着する。No701は器

壁の薄い胴部を持ち，外面の調整は胴部上位まで横ナデを施した後に不整方向のナデで仕上げ，部分的に横ハケの痕跡もある。No702は口縁部外面から胴部上位で横ナデ，胴部ではその上から縦ナデを施す。外面の胴部上位に層状に煤が付着し，内面の同じ位置にも煤が付着する。No703は口縁部の立ち上がりが直線的で，内面のケズリの上端は口縁部立ち上がりの屈曲点よりもやや上位にある。No704は口縁部内外面の横ナデは２段になる。No705は砂粒が多く器面が粗い。No706は硬質で口縁部内外面には丁寧な横ナデを認める。No707は口縁部内面に横ハケ，外面に丁寧なナデ，内面の横ハケの下位は横ナデで，その１cm程下位にケズリを認める。No708は外面胴部上端まで薄く煤が付着する。No709は外面の口縁部と胴部の境に横並びの指押さえ，内面は焼成が不十分で浅黄橙色を呈する。No710は外面胴部上位まで横ナデ，胴部下位は不整方向にナデを施し，部分的に横ハケが認められる。

(甕９類)

No711は胴部から「く」の字状に折れ曲がる口縁部で，外面には縦ハケ，内面には左，右両方向に傾斜するケズリがみられる。No712は硬質で橙色を呈し，外面の胴部に横ハケとその上に部分的な縦ハケ，内面は口縁部上端付近に横ハケを残し，下位は不整方向のナデで消される。No713は浅黄色を呈し，口縁部は胴部から「く」の字状に折れ，胎土は精緻である。No714,715は胴部下半から底部にかけての傾斜が残存し，復元した。No714は橙色を呈し硬質で，胴部上位は横ハケ，中位から下位は不整方向のハケを認める。内面は左斜め上に胴部下位から上位にかけ，一気にケズリを行う。No715は口縁部外面に横ナデした後，胴部下位から上位にヘラミガキを施し，このヘラミガキは一部口縁部外面まで行う。

(甕10類)

No716は胴部外面は，縦ハケ⇒横ハケ⇒横ナデの工程がみられる。胴部上端では横ハケは横ナデで消されるため，比較的低い位置にみられ，胴部上位には接合痕が横位に認められる。No717は胴部から口縁部の屈曲が強く，口縁端部では直線的に延び，口縁端部はすぼまる。外面には縦ハケ，内面は右斜め上の方向にケズリを施す。No718は胎土に砂粒を多く含み，器面が脆弱なため調整痕は判然としない。No719は口縁端部にハケを認め，No720は口縁端部が若干膨らむ。No721は硬質で，口縁端部は横ナデにより面を形成する。外面には一部煤が付着するが，接合した隣の破片では煤を認めないことから，土器が破片になった後に煤が付着したと考えられる。No722はまっすぐな胴部から外反し，口縁部が立ち上がる。外面の横ハケは下位まで認められることから，胴部下位まで施されていたと考えられる。No723は器面が粗く，胴部は若干外に開いている。No724は甕10の中では器壁が厚く，内面は下位まで横ナデが認められる。No725は浅黄橙色を呈する。No726は口縁部と胴部の境に強い横ナデ，胴部外面に煤が付着する。No727は唯一，褐色を呈し，口縁部内外面には丁寧なナデを認める。

(鉢１類)

No728～735が浅黄橙色系，No736～739が褐色系である。

No728と729は胴部が若干深く，甕の可能性もある。No728は胴部上位が強くナデで凹んでいる。胴部上位から下位に細い横ハケが一部消された状態で残り，内面は幅約１cmの狭いケズリを左斜め上方向に施す。No730は口縁部と胴部の境に強いナデ，内面にケズリは認めない。No731は橙色を呈し，胴部外面に横ハケ，胴部から口縁部は横ナデ，胴部下半は左斜め上の方向のヘラミガキで消える。内面のケズリは浅く，段差は認められない。No732は長い口縁部を持つ。No733とNo734は胴部が若干まっすぐに立ち上がり，口縁端部は丸みを持つ。内面はNo733が横方向のケズリ，No734が斜め方向のケズリとなる。No735は短い口縁部である。No736は胴部が薄く口縁部は外反し長く，胴部上端から口縁部は若干強いナデを認める。No738は口縁部内外面のナデが不十分で凹凸が目立つ。No739はまっすぐに開きながら立ち上がり，口縁部は短く直線的である。外面に煤が付着する。

第43表　土師器甕観察表(１)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成，保存状態	色調	調整
								外面	ハケ数(条/cm)
88	601	I-6/Ⅳa	25.0	(2.8)	1	礫多い	良好	10YR5/2(灰黄褐)	5
	602	K-15/Ⅲ	25.6	(2.0)	1.0～1.2	礫多い	良好	5YR7/6(橙)	9
	603	J-13/Ⅲ	26.6	(7.5)	1.0～1.3	礫多い	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	8
	604	H-12/Ⅳa，H-13/Ⅲ，I-13/Ⅲ J-13/Ⅲ，J-13/Ⅳa，K-14/Ⅳ上	26.0	(16.0)	0.9～1.3	礫多い	良好	2.5YR6/6(橙)	7
	605	T-1/Ⅲb	31.8	(9.8)	0.8～1.0	赤	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	9

第44表　土師器甕観察表(2)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成，保存状態	色調	調整
								外面	ハケ数(条/cm)
88	606	I-13/Ⅲ，I-13/Ⅳa，I-14/Ⅳa，K-15/Ⅳa	27.4	(6.0)	0.8～1.2	礫多い	良好	5YR7/6(橙)	6
	607	I-14/Ⅲ，I-14/Ⅳa	28.4	(8.5)	0.7～1.1	礫多い	良好	5YR6/8(橙)	6
	608	J-13/Ⅲ	26.6	(3.0)	1.0～1.2	礫多い	良好，脆弱	7.5YR7/6(橙)	6
	609	I-13/Ⅲ，I-13/Ⅳa，I-14/Ⅲ，I-15/Ⅲ，J-13/Ⅲ	26.0	(2.5)	0.9～1.0	礫多い	良好，堅緻	5YR6/6(橙)	5
	610	F-7/Ⅳa，F-8/Ⅳa	26.0	(8.0)	0.8～1.0	礫多い	良好	5YR6/6(橙)	5
	611	I-5/Ⅳa，I-6/Ⅲ，I-6/Ⅳa，I-7/Ⅲ I-7/Ⅳa，J-6/Ⅲ，J-6/Ⅳa，J-7/Ⅳa	26.0	(16.0)	0.7～1.0	礫多い	良好，堅緻	5YR6/6(橙)	8
	612	J-13/Ⅳa，J-14/Ⅳa	25.4	(8.0)	0.7～0.8	礫多い	良好，堅緻	7.5YR7/6(橙)	8
	613	I-11/Ⅳa，I-12/Ⅳa	28.0	(7.0)	0.7～1.1	礫多い	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	6
	614	I-6/Ⅳa，J-8/Ⅳa，K-8/Ⅳa	26.8	(13.0)	0.9～1.1	礫多い	良好，脆弱	5YR7/6(橙)	3
89	615	G-8/Ⅳa，J-13/Ⅲ	31.4	(4.3)	0.8～0.9	精緻	良好，堅緻	5YR6/6(橙)	-
	616	I-12/Ⅲ，I-12/Ⅳa，I-15/Ⅲ J-12/Ⅳa，K-12/表採，L-12/Ⅲ	27.0	(5.5)	0.6～0.9	礫多い	良好，堅緻	2.5YR6/8(橙)	4
	617	I-11/Ⅳa，I-12/Ⅳa，I-13/Ⅲ	25.0	(15.0)	0.8～0.9	礫多い	良好，堅緻	5YR5/6(明赤褐)	9
	618	F-8/Ⅲ，F-8/Ⅳa	27.0	(14.0)	0.9～1.1	礫多い	良好，脆弱	5YR6/6(橙)	6
	619	F-4/Ⅳa，I-6/Ⅳa，J-6/Ⅳa，K-8/Ⅲ，L-8/Ⅲ	26.0	(19.5)	0.6～1.0	礫多い	不良	5YR6/6(橙)	6
	620	F-8/Ⅳa	23.0	(3.0)	0.9	礫多い	良好，脆弱	5YR6/6(橙)	-
	621	I-13/Ⅲ，I-13/Ⅳa，I-15/Ⅲ，I-16/Ⅲ	34.0	(11.7)	0.7～1.0	礫多い	不良，堅緻	5YR7/6(橙)	5
	622	H-11/Ⅲ，J-13/Ⅲ	27.0	(6.0)	0.9～1.0	礫多い	良好，堅緻	10YR6/4(にぶい黄橙)	6
	623	J-6/Ⅳa	28.0	(10.0)	1.1～1.2	赤	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	-
	624	J-14/Ⅳa	27.0	(13.0)	0.8～0.9	礫多い	良好，堅緻	7.5YR7/6(橙)	7
	625	K-15/Ⅳa	(23.0)	(12.5)	0.7～1.0	砂粒	良好	10YR8/4(浅黄橙)	4
90	626	G-13/Ⅲ	21.6	(4.9)	0.9～1.0	礫多い	良好	10YR8/4(浅黄橙)	3
	627	G-14/Ⅳa	25.8	(6.8)	0.8～1.1	礫多い	良好	7.5YR7/6(橙)	8
	628	J-13/Ⅳa，J-14/Ⅳa	25.0	(8.7)	0.8～1.1	礫多い	良好，堅緻	5YR7/6(橙)	5
	629	G-7/Ⅲ，H-7/Ⅲ	28.0	(12.3)	0.8～1.4	砂粒，石	不良	7.5YR6/4(にぶい橙)	7
	630	I-11/Ⅲ	26.6	(3.2)	1.0～1.1	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	5
	631	I-5/Ⅳa，I-6/Ⅳa	24.6	(7.0)	0.85～1.1	精緻	良好	10YR6/2(灰黄褐)	4
	632	I-5/Ⅲ，I-6/Ⅳ	28.0	(7.0)	1.0～1.1	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	5
	633	I-13/Ⅲ	27.0	(8.0)	1.1～1.4	礫多い	良好，堅緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	5
	634	J-12/Ⅲ，J-12/Ⅳa上	25.4	(5.0)	0.9～1.0	礫多い	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	-
	635	J-13/Ⅳa	29.4	(3.3)	1	礫多い	不良	7.5YR7/4(にぶい橙)	5
	636	H-15/Ⅲ	24.4	(6.0)	1.1～1.2	精緻	良好，脆弱	7.5YR6/4(にぶい橙)	4
	637	I-13/Ⅳa	23.6	(5.5)	0.9～1.4	礫多い	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	-
	638	I-14/Ⅳa	27.4	(6.4)	1.0～1.3	礫多い	不良	7.5YR6/6(橙)	-
	639	J-2/Ⅲ	30.0	(3.5)	1.0～1.1	礫多い	良好	5YR7/6(橙)	-
	640	K-13/Ⅲ，K-14/Ⅲ，K-15/Ⅲ，K-15/Ⅳa	26.6	(6.0)	1.0～1.1	赤	不良	5YR6/6(橙)	-
	641	I-6/Ⅳa	32.6	(8.4)	0.8～1.1	礫多い	良好，軟質	10YR8/2(灰白)	-
	642	I-6/Ⅳa	30.4	(4.7)	1.0～1.2	礫多い	良好	10YR8/3(浅黄橙)	-

第45表　土師器甕観察表(3)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成，保存状態	色調	調整
								外面	ハケ数(条/cm)
91	643	G-12/Ⅲb，G-13/Ⅲ	28.6	(3.6)	0.6～0.8	砂粒，石	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-
	644	J-6/Ⅲ	26.0	(3.4)	0.9～1.6	精緻	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)	-
	645	K-14/Ⅲ下	27.0	(6.8)	0.8～0.9	砂粒，石	良好	2.5YR4/4(にぶい赤褐)	-
	646	I-12/Ⅳa，J-13/Ⅳa	23.4	(6.5)	0.9～1.3	砂粒	良好	7.5YR5/2(灰褐)	-
	647	T-2/Ⅲa，G-13/Ⅲ	23.2	(5.3)	0.9～1.0	砂粒，石	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-
	648	G-11/Ⅲb，H-13/Ⅲ，Ⅳ	25.0	(4.5)	0.7～1.1	砂粒，石	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-
	649	K-14/Ⅲ	24.0	(6.4)	0.7～1.0	砂粒，石	良好	2.5YR4/6(赤褐)	-
	650	B地点	30.0	(7.6)	0.8～1.2	石，角	良好	2.5YR4/6(赤褐)	-
	651	I-6/Ⅳa	27.0	(8.5)	1.4	砂粒，石，脆弱	不良	5YR6/6(橙)	-
	652	H-7/Ⅲ	32.6	(12.8)	0.8～1.6	砂粒，石	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-
	653	H-14/Ⅲ，H-15/Ⅲ	26.0	(5.8)	0.8～1.2	精緻	不良	5YR5/4(にぶい赤褐)	-
	654	F-9/Ⅲ	24.0	(3.0)	1.0～1.4	砂粒，石	良好	5YR5/6(明赤褐)	-
	655	J-14/Ⅲ，J-15/Ⅲ	24.0	(2.5)	1.2～1.3	砂粒，石	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-
	656	H-15/Ⅲ	28.0	(4.0)	1.4～1.7	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-
	657	L-15/Ⅲ	23.0	(6.8)	1.0～1.4	砂粒，石	不良	10YR5/3(にぶい黄褐)	-
	658	I-11/Ⅲ，H-13/Ⅲ，H-14/Ⅲ H-15/Ⅲ，K-12/表採	28.4	(3.6)	1.2	砂粒，石	良好	2.5YR5/8(明赤褐)	-
	659	F-7/Ⅲ	30.0	(7.0)	1.1～1.5	精緻	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)	-
92	660	I-6/Ⅳa上	22.2	(6.5)	0.9～1.8	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-
	661	K-15/Ⅲ	24.0	(4.1)	1.0～1.4	精緻	良好	5YR5/6(明赤褐)	-
	662	H-13/Ⅲ	23.0	(3.2)	0.9～1.2	精緻	不良	5YR5/4(にぶい赤褐)	-
	663	I-14/Ⅲ	21.4	(7.7)	0.9～1.3	砂粒，石	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)	-
	664	K-6/Ⅲ	22.0	(10.0)	0.8～1.2	砂粒	良好	10YR4/2(灰黄褐)	-
	665	1T/Ⅲa	28.2	(9.5)	0.8～1.4	砂粒，石	不良	5YR5/3(にぶい赤褐)	-
	666	H-15/Ⅳ	26.2	(8.1)	0.8～1.1	精緻	良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	-
	667	H-12/Ⅲ	29.6	(9.0)	0.9～1.3	砂粒	不良	7.5YR5/4(にぶい褐)	-
	668	K-16/Ⅲ	-	(3.4)	1.4～1.8	精緻	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-
	669	H-12/Ⅳa上，H-13/Ⅳa上	-	(3.9)	1.0～1.3	精緻	不良	7.5YR5/4(にぶい褐)	-
	670	T-2/Ⅲa	(26.6)	(2.8)	1.4～1.6	精緻	不良	7.5YR6/4(にぶい橙)	-
	671	T-2/Ⅲa。T-3/Ⅲa	28.0	(3.6)	1.4～1.5	砂粒	良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	-
	672	I-11/Ⅲ，J-11/表土	26.0	(3.5)	1.5～1.7	精緻	不良	7.5YR6/4(にぶい橙)	-
	673	J-8/Ⅳa	-	(6.7)	1.2～1.4	礫多い	不良	10YR6/4(にぶい黄橙)	-
	674	K-7/Ⅳb	(24.0)	(8.4)	0.6～1.6	砂粒	良好	5YR4/6(赤褐)	-
93	675	H-12/Ⅲ，I-12/Ⅲ	28.0	(7.0)	0.9～1.2	礫多い	良好	10YR8/3(浅黄橙)	5
	676	K-15/Ⅳa	24.6	(3.3)	0.5～1.2	赤	良好	7.5YR7/6(橙)	-
	677	K-14/Ⅲ	24.0	(3.4)	0.5～1.2	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-
	678	K-15/Ⅲ	24.0	(5.0)	0.5～1.2	精緻	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	-
	679	H-13/Ⅳa，H-14/Ⅳa	30.0	(5.2)	0.6～1.1	精緻	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	-
	680	K-15/Ⅲ	25.4	(5.2)	0.5+1.0	砂粒少し含む	良好	5YR7/6(橙)	-

第46表　土師器甕観察表(４)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成，保存状態	色調	調整
								外面	ハケ数(条/cm)
93	681	I-14/Ⅲ	26.0	(5.0)	0.7～1.2	精緻	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	6
	682	J-6/Ⅳa	26.0	(4.0)	0.9～1.2	精緻	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	-
	683	T-6/Ⅲb	23.8	(3.0)	0.8～1.0	精緻	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	-
	684	I-15/Ⅲ，I-16/Ⅲ	25.0	(4.4)	0.5～0.9	精緻	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)	-
	685	H-14/Ⅲ，I-15/Ⅲ	27.0	(3.3)	0.8～1.0	精緻	不良	5YR5/4(にぶい赤褐)	-
	686	I-13/Ⅲ，I-14/Ⅲ	22.0	(2.5)	0.8～1.3	精緻	良好	5YR5/6(明赤褐)	-
	687	I-15 /Ⅲ	25.0	(4.8)	0.9～1.3	砂粒	不良	2.5YR5/6(明赤褐)	-
	688	G-7/Ⅳa	26.0	(4.9)	0.8～1.7	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-
	689	H-14／Ⅲ・Ⅳa	25.0	(3.5)	0.9～1.2	砂粒，石	良好	5YR5/6(明赤褐)	-
	690	T-2/Ⅲb，I-14/Ⅲ	26.0	(3.4)	0.8～1.7	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	-
	691	H-14/Ⅲ，I-13/Ⅳa	26.2	(4.5)	0.9～1.3	石，角	不良	5YR5/4(にぶい赤褐)	-
	692	H-15/Ⅳa	27.6	(3.0)	0.6～0.9	砂粒，角	不良	5YR5/4(にぶい赤褐)	-
	693	K-6/Ⅳa	28.0	(4.0)	1.1～1.6	精緻	良好	5YR5/6(明赤褐)	-
	694	H-15/Ⅲ，H-15/Ⅳa，J-13/Ⅲ	30.0	(7.8)	0.9～1.2	精緻	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-
	695	H-15/Ⅲ	35.4	(7.0)	0.7～1.2	精緻，砂粒	良好	2.5YR5/8(明赤褐)	-
94	696	I-6/Ⅳa	24.0	(4.8)	1.2～2.0	精緻	良好	5YR6/6(橙)	-
	697	I-14/	26.0	(3.4)	1.2～1.6	精緻	不良	7.5YR5/4(にぶい褐)	-
	698	I-3/Ⅲ	24.6	(4.5)	1.2～2.0	砂粒，石	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)	-
	699	I-6/Ⅳa，J-7/Ⅳa	20.0	(5.6)	1.1～2.2	精緻	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	-
	700	J-5/Ⅳa	29.0	(4.9)	1.1～1.8	精緻	良好	7.5YR3/1(黒褐)	-
	701	M-4/表土，K-16/Ⅲ	26.0	(9.7)	0.5～1.0	砂粒，石	不良	7.5YR5/4(にぶい褐)	5
	702	I-13/不明	25.0	13.3	0.9～1.4	砂粒，石	良好	5YR5/6(明赤褐)	-
	703	H-14/Ⅲ	22.6	(5.1)	0.75～1.4	砂粒，石，精緻	不良	7.5YR5/4(にぶい褐)	-
	704	E-8/Ⅳa	21.8	(4.0)	1.3～1.9	精緻	不良	7.5YR6/4(にぶい橙)	-
	705	M-4/Ⅲ	26.0	(4.8)	1.3～2.0	砂粒が多い	良好	10YR5/4(にぶい黄褐)	-
	706	F-12/Ⅲb，G-12/Ⅳa	27.8	(3.4)	1.1～1.4	精緻	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-
	707	I-11/Ⅲ	27.4	(3.5)	1.2～1.7	石，角	良好	5YR4/3(にぶい赤褐)	-
	708	I-6/Ⅳa	32.2	(4.2)	0.9～1.4	砂粒，石	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	-
	709	K-14/Ⅳa	32.0	(8.0)	1.0～1.7	石，角	良好	5YR6/6(橙)	-
	710	I-6/Ⅳa	(34.0)	(19.0)	1.1～1.8	砂粒，石	良好	5YR5/6(明赤褐)	-
95	711	T-2/Ⅲ	18.0	(4.8)	0.6～1.0	精緻	良好	5YR7/6(橙)	5
	712	I-13/Ⅲ，I-14/Ⅲ	18.4	(3.3)	0.8	精緻	良好，堅緻	5YR6/8(橙)	3
	713	I-15/Ⅳa	18.5	(3.4)	0.6	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-
	714	G-12/Ⅲb，I-6/Ⅳa，I-12/Ⅳa，J-12/Ⅲ J-12/Ⅳa，J-13/Ⅲ，I-15/Ⅲ，K-15/Ⅲ	18.0	(11.0)	0.7～0.9	礫多い	良好	5YR7/6(橙)	6
	715	I-16/Ⅲ	16.4	(7.5)	0.8～1.1	礫多い	不良	7.5YR8/6(浅黄橙)	-
	716	J-13/Ⅲ	19.4	(6.5)	0.6～0.8	礫多い	良好	7.5YR6/6(橙)	5
	717	K-4/Ⅲ	18.2	(4.0)	0.6～0.8	礫多い	良好	5YR7/6(橙)	5
	718	F-9/Ⅳ	16.4	(6.0)	0.7～0.8	礫多い	良好	2.5YR7/8(橙)	6

第47表　土師器甕観察表(５)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	胎土	焼成，保存状態	色調	調整
								外面	ハケ数(条/cm)
95	719	I-12/Ⅳa，J-13/Ⅳa	19.8	(5.0)	0.5～1.0	礫多い	不良，脆弱	5YR7/6(橙)	7
	720	I-11/Ⅲ	19.0	(3.2)	0.8～0.9	精緻	良好	5YR7/6(橙)	-
	721	I-5/Ⅳa，I-6/Ⅳa，J-6/Ⅳa	19.6	(5.5)	0.5～0.8	礫多い	良好，堅緻	10YR6/2(灰黄褐)	6
	722	H-13/Ⅲ	20.2	(8.5)	0.9～1.0	礫多い	良好，堅緻	10YR7/4(にぶい黄橙)	4
	723	H-13/Ⅲ	20.3	(7.5)	0.7～1.0	精緻	不良，脆弱	10YR8/4(浅黄橙)	-
	724	I-15/Ⅳa	19.0	(5.7)	1.1～1.2	角	良好	10YR8/4(浅黄橙)	-
	725	L-4/Ⅲ	21.8	(4.0)	0.7～0.9	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	-
	726	L-12/Ⅲ下	21.5	(5.5)	0.9～1.0	精緻	良好，軟質	10YR8/4(浅黄橙)	6
	727	K-6/Ⅳa	19.0	(2.3)	1.0～1.3	精緻	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	-
96	728	J-7/Ⅳa	23.0	(6.5)	0.7～1.2	精緻	不良，脆弱	7.5YR8/4(浅黄橙)	8
	729	J-7/Ⅳa	20.6	(8.0)	0.8～1.2	精緻	良好，軟質	10YR8/4(浅黄橙)	9
	730	E-8/Ⅳa	17.0	(5.0)	0.6～1.0	精緻	良好	2.5YR7/3(淡赤橙)	-
	731	I-6/Ⅳa，I-14/Ⅳa	23.0	(6.0)	0.9～1.2	精緻	良好	5YR6/6(橙)	6
	732	I-13/Ⅲ，J-13/Ⅲ，J-13/Ⅳa K-13/Ⅳ，H-15/Ⅳ，I-15/Ⅲ	25.6	(4.5)	0.7～1.0	精緻	不良，脆弱	10YR8/4(浅黄橙)	-
	733	F-7/Ⅲ	25.4	(9.0)	0.7～1.1	精緻	良好，軟質	10YR8/3(浅黄橙)	4
	734	L-10/Ⅲ，M-11/表土	25.6	(10.2)	0.8～1.1	礫多い	良好，軟質	10YR8/3(浅黄橙)	6
	735	I-15/Ⅲ	22.0	(2.5)	0.6～1.1	精緻	良好，軟質	10YR7/4(にぶい黄橙)	-
	736	I-15/Ⅲ	29.0	(9.0)	0.6～1.3	砂粒，石	不良	5YR4/4(にぶい赤褐)	-
	737	H-13/Ⅳa	23.0	(2.4)	0.7～1.0	精緻	良好	7.5YR4/2(灰褐)	-
	738	T-1/Ⅲa，T-2/Ⅲa	25.0	(2.7)	1.2～1.4	精緻	不良	5YR5/4(にぶい赤褐)	-
	739	H-14/Ⅲ	28.0	(5.5)	0.9～1.2	精緻	やや不良	7.5YR5/3(にぶい褐)	-

須恵器壷(第97図)

底部が８点，口縁部が5点と少数である。復元できるものが少なく形態を知ることは難しいが，長胴の壷と思われる。

各部の特徴として，No751以外は全て平底である。胴部は南九州の多くの遺跡で認められるタタキ痕はなく，ケズリ，カキ目で調整される。胴部は肩が張り屈曲部の強いものと，なだらかに屈曲するものがある。口縁部は二重口縁を呈す。

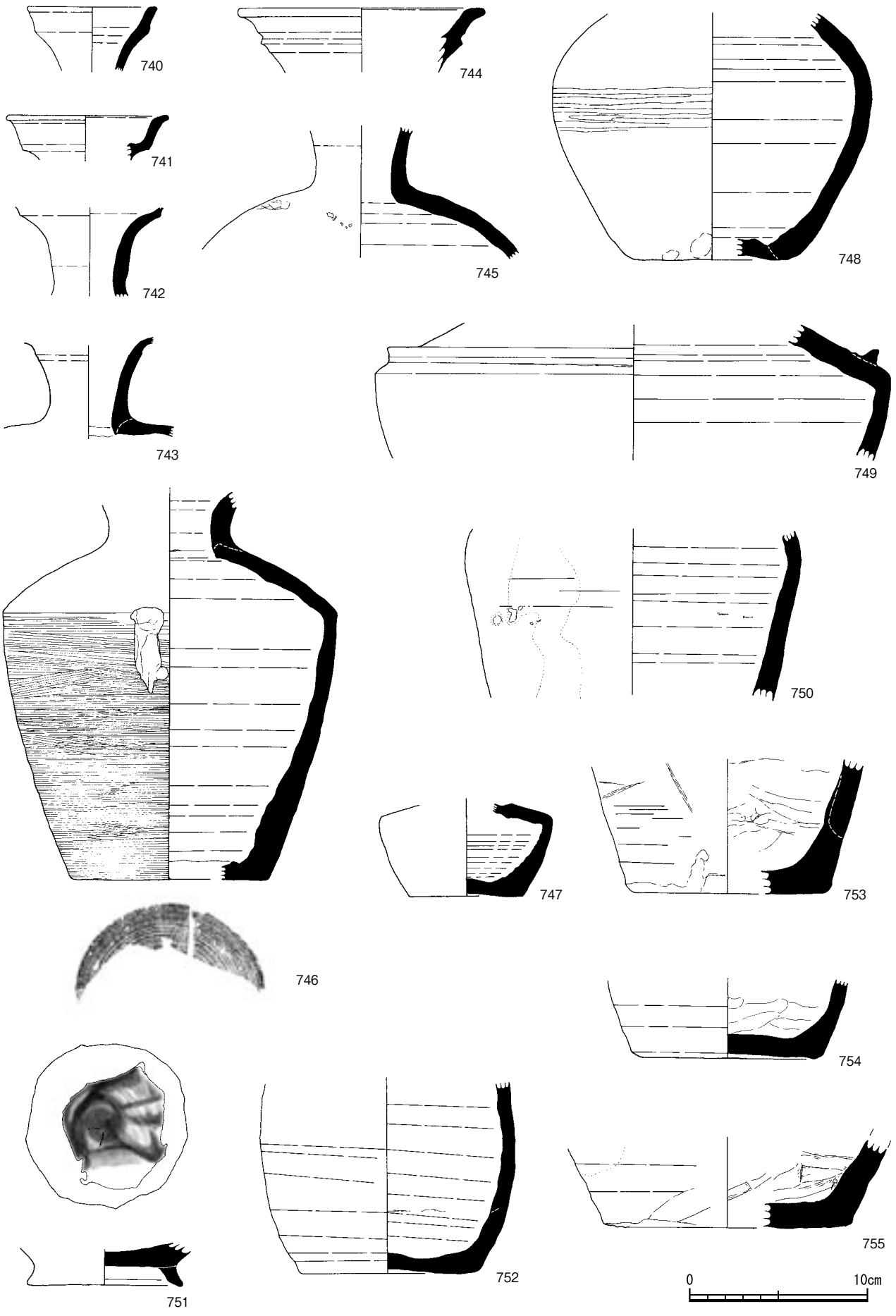
調整方法は胴部から口縁部の成形に際し，胴部閉塞の痕跡は認められず，口縁部まで全てロクロ成形である。

焼成は断面がセピア色に色調を呈するものが多く，燻べ焼きが想定される。

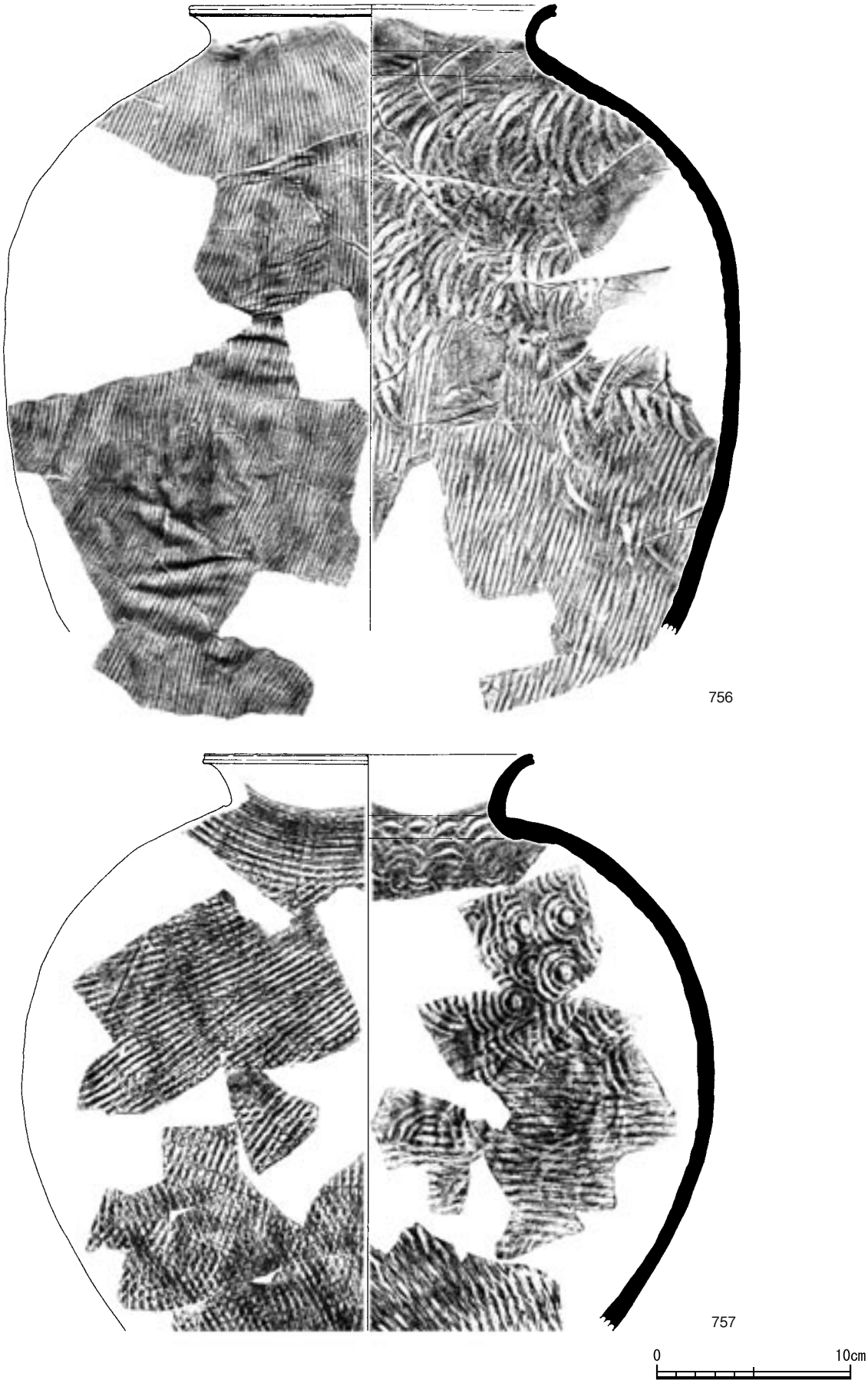
No740～744は口縁部である。

No740は屈曲部が曲線的になり，口縁部も丸くおさめ稜線は認めない。No741は屈曲部外面の稜線が鋭く，色調はにぶい黄褐色を呈し，口縁部外面に若干釉が付着する。口縁部内面の上端は横ナデで外反する。No743は外面から口縁部内面に淡緑色の釉が付着し，断面は淡赤橙色で，頸部内面は粘土が若干はみ出し，口縁部接合の痕跡と判断できる。No744は外面の色調がにぶい黄橙色を呈す。口縁部外面の屈曲部は突帯状につくり出し，稜線が鋭い。稜線の上位は幅0.5cm程の沈線で，口縁端部内面は強く屈曲し面をなす。

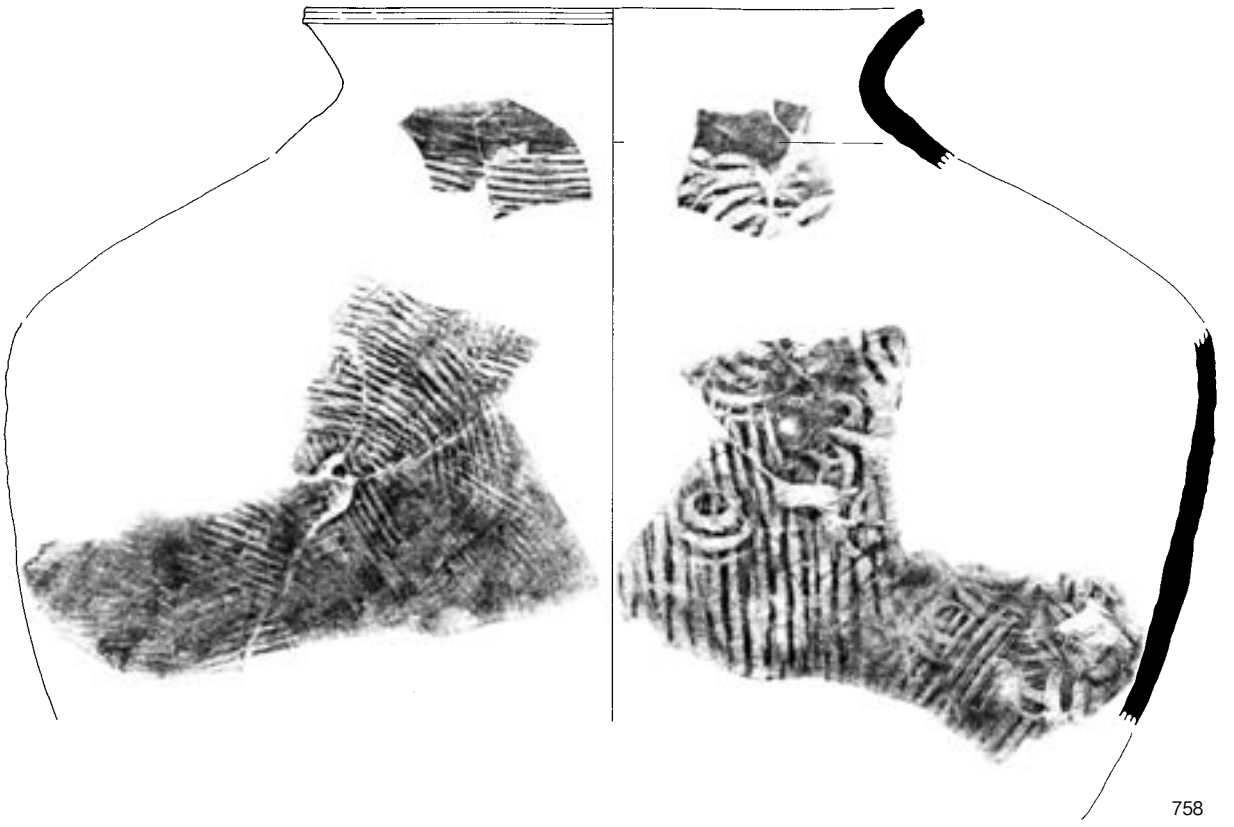
No745は曲線的に口縁部に達し，外面から口縁部内面にまで釉を認める。胴部と口縁部の接合は丁寧で，内外面に接合の痕跡は残さない，頸部外面に長さ1.5cm程度の付着物がある。No746は長胴壷の胴部から口縁部で，口縁端部は欠損する。肩の張った形態で，屈曲部の稜線が明瞭である。胴部屈曲から下位はカキ目，上位はナデ，下位のカキ目を施した後で上位のナデを施し，胴部のカキ目は底部外面まで見られる。また，胴部には粘土のはがれた後があり，耳状の把手があったと思われる。胎土も胴部と口縁部では土を違え，胴部は黒の異物を多く含み，口縁部は比較的精緻なものを用いている。No747は小型の長頸壷か。肩部が張り，屈曲部から口縁部にかけてはほぼ直線的に立ち上がる。内面には幅のせまい横ナデが密に認められ，内面上位は器面が剥離する。胴部下半や底部外面，底部内面に釉が付着する。No748は胴部上半で，中位の若干上に最大幅があり，最大幅部分は曲線的で，幅約2.5cmの範囲で横方向のヘラミガキを認め，胴部下端には指押さえを残す。No749は胴部に突帯を持ち，器面は内外面ともに光沢を持ち丁寧に整形さる。突帯の外側は丁寧にナデて接合痕を消すが，内側には接合痕を明瞭に残し，器

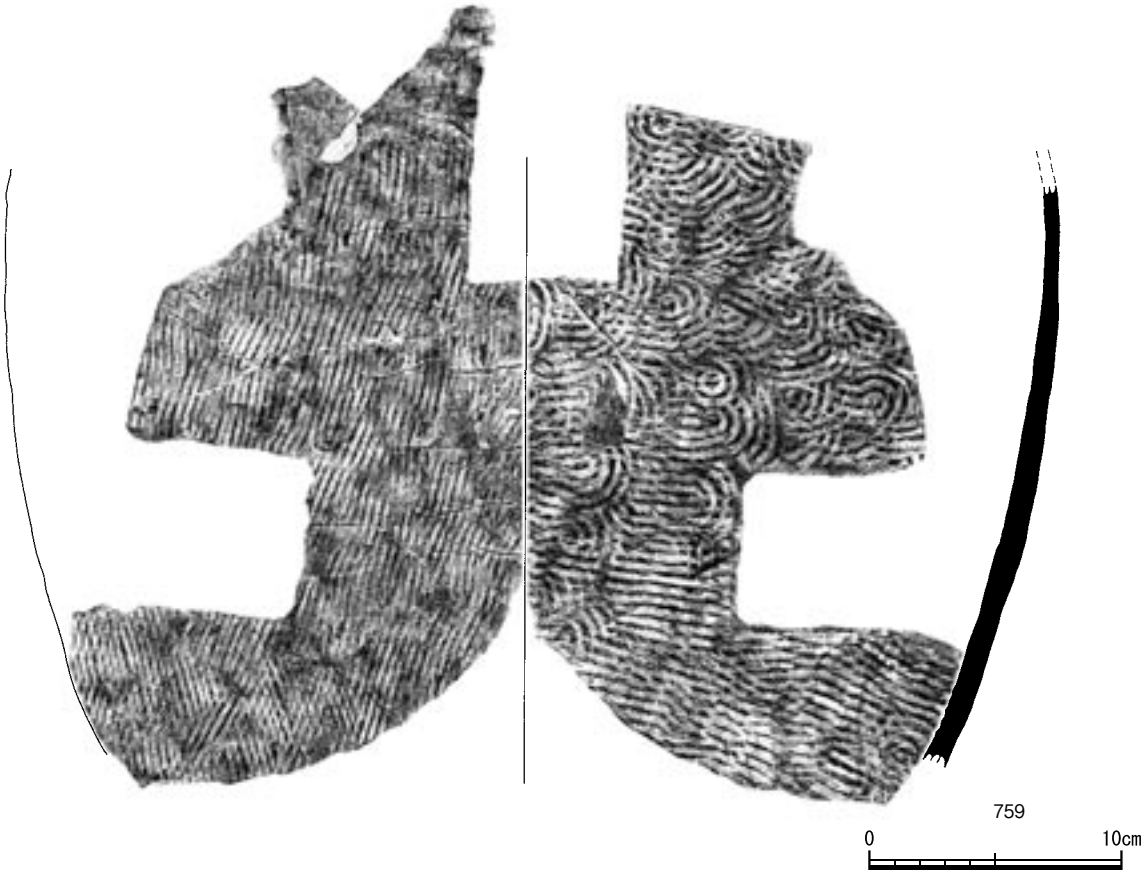

740
744
741
745
748
742
743
749
750
747
753
746
754
752
755
751
0
10cm

第97図　須恵器壷

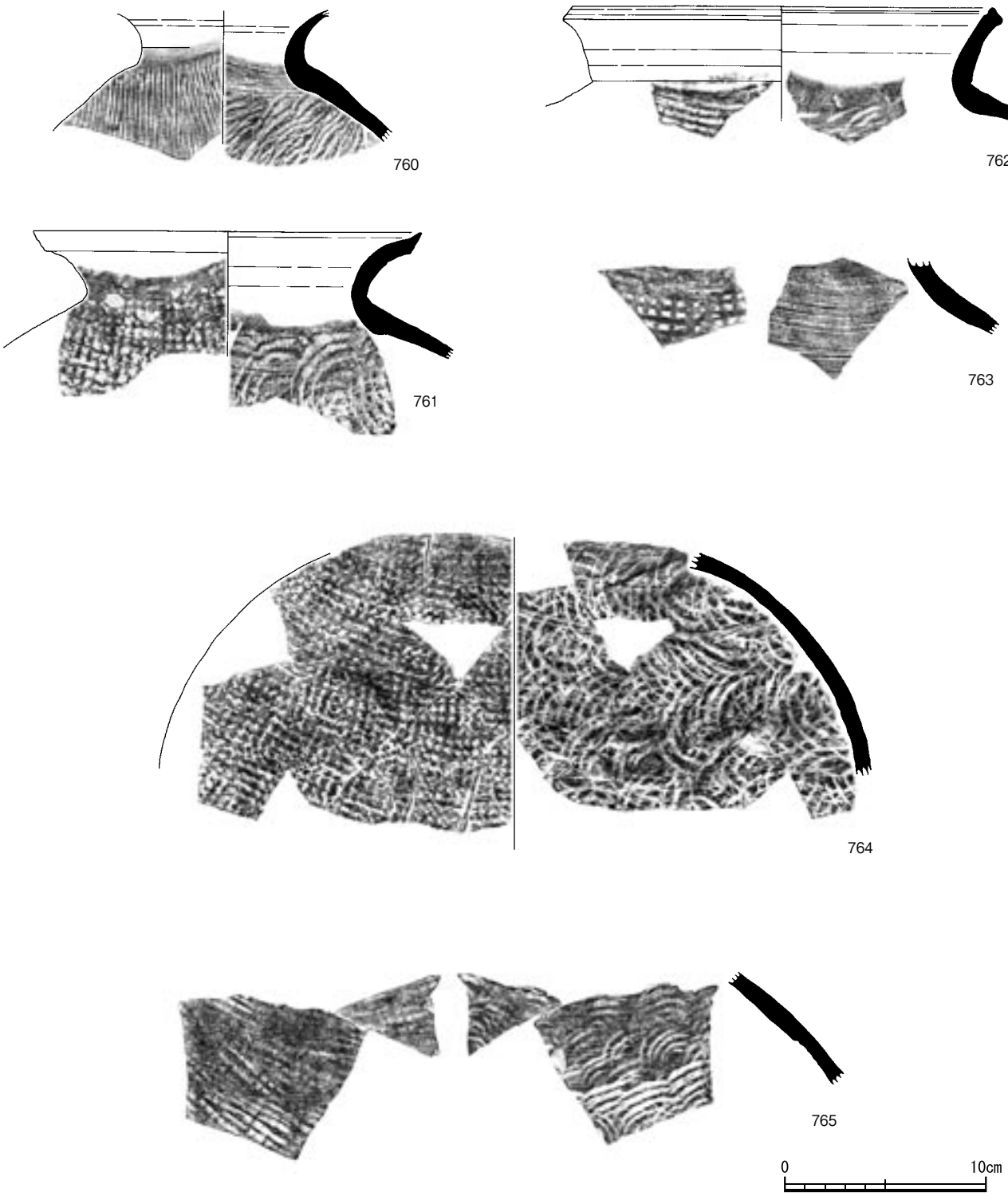


第98図　須恵器甕（１）





第99図　須恵器甕（2）

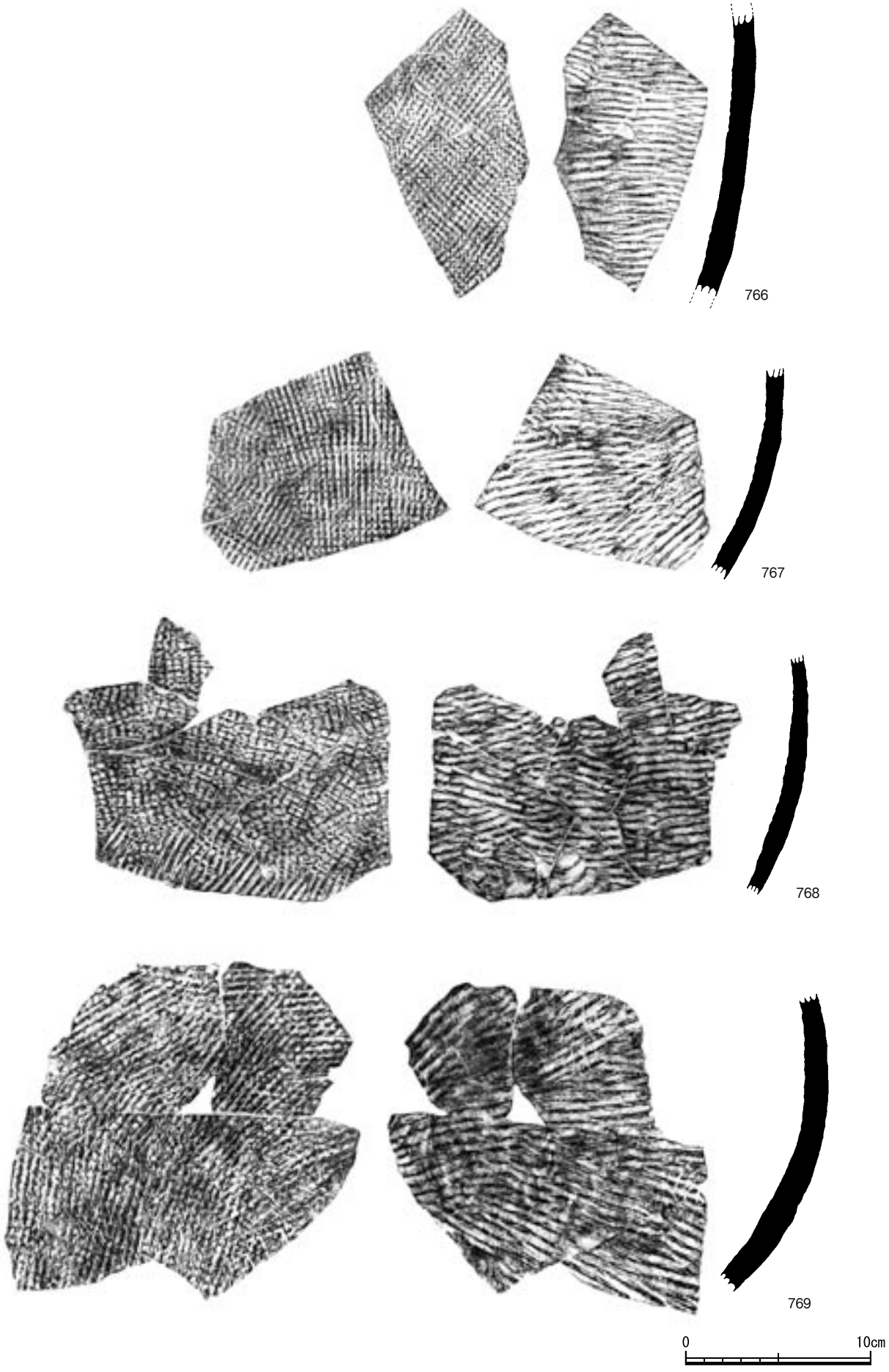


第100図　須恵器甕（３）

面の整形もあまい。断面はセピア色を呈する。No750は胴部器壁が底部から口縁部にかけて徐々に薄くなる。外面には釉が付着する。

No751～755は底部である。

No751は高台付で，底部径は小型である。須恵器壷類では唯一火襷状の痕跡が認められ，土師質を呈している。口縁端部は面を持ち，内側に傾斜する。底部内面には不整方向のナデを認める。No752～755は平底で，概して底部内面から胴部内面下端には不整方向のナデを認める。No752は胴部が内弯して立ち上り，胴部外面には複数のケズリが残る。底部外面には藁状の圧痕があり，下にスサを敷いていたものと思われる。また，底部には数か所に粘土と釉の付着が認めら



第101図　須恵器甕（４）

れる。No753は胴部下端の器壁は厚く，外面には藁状の圧痕が，胴部外面にはケズリが，胴部外面下端はヘラ切りで粘土が若干はみだしている。No754は見込みが若干盛り上がり，釉が付着し，底部外面も釉の付着，また，数mmの粘土塊も付着する。No755は胴部外面下端にケズリで砂粒が右側に動くことから，時計回りの回転台を使用したことが理解できる。

須恵器甕(第98～101図)

甕は14点掲載した。全体の個体数も20点を超えることはなく，土師器甕に比べてその数は著しく少ない。

底部まで残るものがないが，丸底と判断される。胴部は球状を呈し，口縁部の立ち上がりは比較的短い。

調整技法は，外面は平行タタキと格子タタキが，内面は胴部上半に同心円の当具痕，下半に平行タタキを認める。また，同心円の当具痕には，同心円の中心部分の痕跡を持つものと持たないものがある。内外面ともにタタキ調整の痕は回転のカキ目を施すものが多い。

No756は胴部下半まで残り，器壁は薄い。外面はタタキの溝幅0.2cm程度の細い平行タタキで，胴部上半は右斜め上に方向をそろえて丁寧に施している。下半は上半に比べて若干タタキの方向の規則性がくずれるが，方向は意識している。胴部上端はタタキの後に回転ナデを施し，タタキの後のカキ目調整は認められない。内面は胴部下半が縦方向の平行タタキ，上位に同心円の当具痕を認め，切り合い関係で下から上に整形の移動が見られる。なお，同心円の中心部分の痕跡は認められない。No757は球胴を呈し，外面は格子タタキの後にカキ目を施す。内面は下半に横方向の平行タタキ，上半に同心円の当具痕を認め，同心円の当具痕には中心部があり当具痕の後にカキ目を加える。No758は軟質で焼成は不十分で，外面がにぶい黄橙色，内面が浅黄橙色を呈し，土師質に近い。外面には平行タタキが不整方向に，内面は胴部下半に左斜め上方向の平行タタキ，胴部上半に同心円の当具を認める。平行タタキは溝幅0.4cmと広く，外面と異なる。平行タタキは一部同心円の当具痕を切ることから，当具を用いてから再度平行タタキを施したと考えられる。No759は胴部下半で，外面に釉が厚く付着し，光沢を持つ。外面は右斜め上方向に平行タタキ，下位はタタキの方向が不規則となる。内面は胴部下位に横方向の平行タタキ，上位に同心円の当具を認め，同心円の中心部分は若干痕跡も残る。

No760～762は口縁部である。

No760は口縁部で急激にすぼまり，断面はにぶい褐色，器面にも同じ色調が部分的にみられる。外面には縦方向の平行タタキ，内面には同心円の当具が，同心円の中心部分はない。No761は脆弱で器面もほとんどが剥離する。口縁部外面の上端に面を持ち，口縁端部は粘土を若干つまみ上げる。外面は格子タタキ，内面は同心円の当具が，同心円の中心部分は認めない。No762は口縁部が若干外反し，口縁端部を若干肥厚させ面を形成する。外面は格子タタキ，内面には同心円の当具を認める。

No763～765は胴部肩部から口縁部付近である。

No763は赤褐色を呈し堅緻で，外面には格子タタキ，内面にはカキ目がみえる。No764は軟質で，外面は格子タタキ，内面には同心円の当具，内外面ともにタタキ整形の後にカキ目を加える。なお，同心円の中心部分は認められる。No765は外面に格子タタキ，内面は同心円の当具痕を施した後，丁寧なカキ目を施す。

No766～769は胴部下半である。

No766は赤褐色を呈し堅緻で，外面には格子タタキ，内面には平行タタキが残る。No768は明黄褐色を呈し，外面は不

第48表　須恵器壷及び甕観察表(１)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	調整		備考
								外面	外面	内面	-
97	740	J-15/Ⅳa	7.3	(3.6)	-	精緻	良好	2.5Y6/1(黄灰)	ナデ	ナデ	-
	741	I-14/Ⅳa	9.1	(2.5)	-	礫含む	不良	10YR5/3(にぶい黄褐)	ナデ	ナデ	-
	742	H-13/Ⅲ G-13/Ⅲa	(8.0)	(5.0)	-	精緻	不良	2.5Y6/2(灰黄)	ナデ	ナデ	堅緻
	743	J-6/Ⅳa	(7.0)	(5.6)	-	精緻	不良	5Y5/1(灰)	ナデ	ナデ	-
	744	K-15/Ⅲ K-14/Ⅲ	13.9	(3.6)	-	精緻	不良	10YR6/4(にぶい黄橙)	ナデ	ナデ	堅緻
	745	K-5/Ⅲ	-	(7.4)	-	精緻	不良	5Y7/2(灰白)	ナデ	ナデ	-
	746	J-14/Ⅲ	(7.8)	(22.0)	11	精緻	良好	7.5YR7/1(明褐灰)	カキ目	ナデ	-
	747	K-15/Ⅲ	-	(5.2)	6.4	精緻	良好	5Y6/1(灰)	ナデ	ナデ	堅緻
	748	J-13/Ⅳa I-12/Ⅳa J-6/Ⅳa	-	(14.0)	9.6	精緻	不良	5Y5/1(灰)	ミガキ　,ナデ,指押さえ	ナデ	-
	749	H-11/Ⅳa上 I-15	-	(7.6)	-	精緻	不良	10YR4/1(褐灰)	ナデ	ナデ	堅緻
	750	K-5/Ⅳa上	-	(9.5)	-	精緻	不良	5Y6/2(灰オリーブ)	ナデ,ケズリ	ナデ	堅緻
	751	H-14/Ⅲ	(9.6)	(2.0)	8.6	精緻	良好	2.5Y7/6(明黄褐)	ナデ	ナデ	-

第49表　須恵器壷及び甕観察表(2)

挿図番号	報告番号	出土区/層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	調整		備考
								外面	外面	内面	-
97	752	2T/Ⅲb J-13/Ⅲ	-	(10.7)	10	精緻	良好	10BG6/1(青灰)	ナデ,ケズリ	ナデ	堅緻
	753	G-9/Ⅲb	-	(7.5)	10.5	精緻	不良	2.5Y5/2(暗灰黄)	ナデ,ケズリ	ナデ	堅緻
	754	注記なし	-	(4.5)	9.8	精緻	良好	5Y5/1(灰)	ナデ,ケズリ	ナデ	堅緻
	755	I-13/Ⅲ	-	(5.0)	13.8	精緻	不良	10YR3/1(黒褐)	ナデ,ケズリ	ナデ	堅緻
98	756	G-12/Ⅲ I-15/Ⅲ	19.0	(32.6)	-	精緻	良好	7.5Y5/2(灰オリーブ)	平行タタキ	平行タタキ,同心円	堅緻
	757	G-13/Ⅲ K-14/Ⅳa	17.0	(29.0)	-	精緻	不良	5YR5/1(褐灰)	格子タタキ→カキ目	平行タタキ,同心円→カキ目	堅緻
99	758	I-13/Ⅳa K-12/Ⅳa I-14/Ⅳa	24.5	(28.1)	-	精緻	不良	10YR7/2(にぶい黄橙)	平行タタキ	平行タタキ,同心円	軟質
	759	I-11/Ⅳa F-10/Ⅲ	-	(23.2)	-	精緻	不良	10Y3/2(オリーブ黒)	平行タタキ	同心円,平行タタキ	堅緻
100	760	K-5/Ⅳa上	(10.6)	(6.6)	-	精緻	不良	10YR7/1(灰白)	平行タタキ	同心円	堅緻
	761	J-7/Ⅳa J-5/Ⅳa	19.3	(6.2)	-	精緻	不良	2.5Y7/4(浅黄)	格子タタキ→ナデ	同心円→ナデ	脆弱
	762	I-10/Ⅲ J-7/Ⅳa上	21.0	(5.7)	-	精緻	不良	5Y5/1(灰)	格子タタキ	同心円	軟質
	763	J-12/Ⅲ	-	-	-	精緻	良好	10R4/4(赤褐)	格子タタキ	カキ目	堅緻
	764	I-6/Ⅳa I-5/Ⅳa	-	(11.0)	-	精緻	不良	5Y5/2(灰オリーブ)	格子タタキ→ナデ	同心円→ナデ	軟質
	765	I-5/Ⅳa	-	-	-	精緻	不良	5Y5/2(灰オリーブ)	格子タタキ	同心円	軟質
101	766	H-14/Ⅲ下 H-13/Ⅳa上	-	-	-	精緻	良好	10R4/4(赤褐)	格子タタキ	平行タタキ	堅緻
	767	注記なし	-	-	-	精緻	良好	5Y5/2(灰オリーブ)	格子タタキ	平行タタキ	-
	768	I-14/Ⅲ	-	-	-	精緻	不良	10YR7/6(明黄褐)	格子タタキ→ナデ	平行タタキ	軟質
	769	L-4/Ⅲ I-7/Ⅳa	-	-	-	精緻	良好	5Y6/2(灰オリーブ)	格子タタキ→ナデ	平行タタキ	軟質

整方向に格子タタキ，下位(上位の可能性もある)には平行タタキも一部認める。No769は器壁が厚い。

墨書・刻書土器

遺物出土状況(第102図)

墨書土器の遺物出土状況は，土師器杯をはじめ他の遺物と共通して，掘立柱建物周辺で多く確認できる。ただ，詳細にみるとI-14区やJ-14区で多く，焼塩壷で突出して多く確認されたK-14では少数である。文字内容の判明している土器の出土状況については個々の説明において指摘したい。

出土遺物（第103～106図)

101点の墨書土器と，３点の墨の付いた土器が出土した。墨書と墨付きの土器は土師器82点，黒色土器26点，土師器甕２点を数える。次に，土師器で底部の残存する11点の全てが平底である。一方，黒色土器で底部の残存しているものは２点で全て高台が付く。土師器甕は墨書ではなく，２点とも墨が付いただけである。このように本遺跡では食膳具に墨書され，器種を意識した選択はなかったと判断できる。

墨書の位置は体部外面が97点，底部外面が４点，内面が１点で圧倒的に体部外面が多い。一方，胴部に墨書した文字と土器の関係は，正位が36点，逆位が17点，横位が13点となる。

刻書は１点，土師器坏の見込みに認める。

出土状況は他の遺物と同様，建物の集中する箇所から多く出土した。

「牧」の文字をもつもの

No770の１点である。土師器坏の外面に横位に認め，上位は欠損することから文字が続く可能性はある。見込みには刻書を認めるが，判読できない。建物12の近くで出土している。

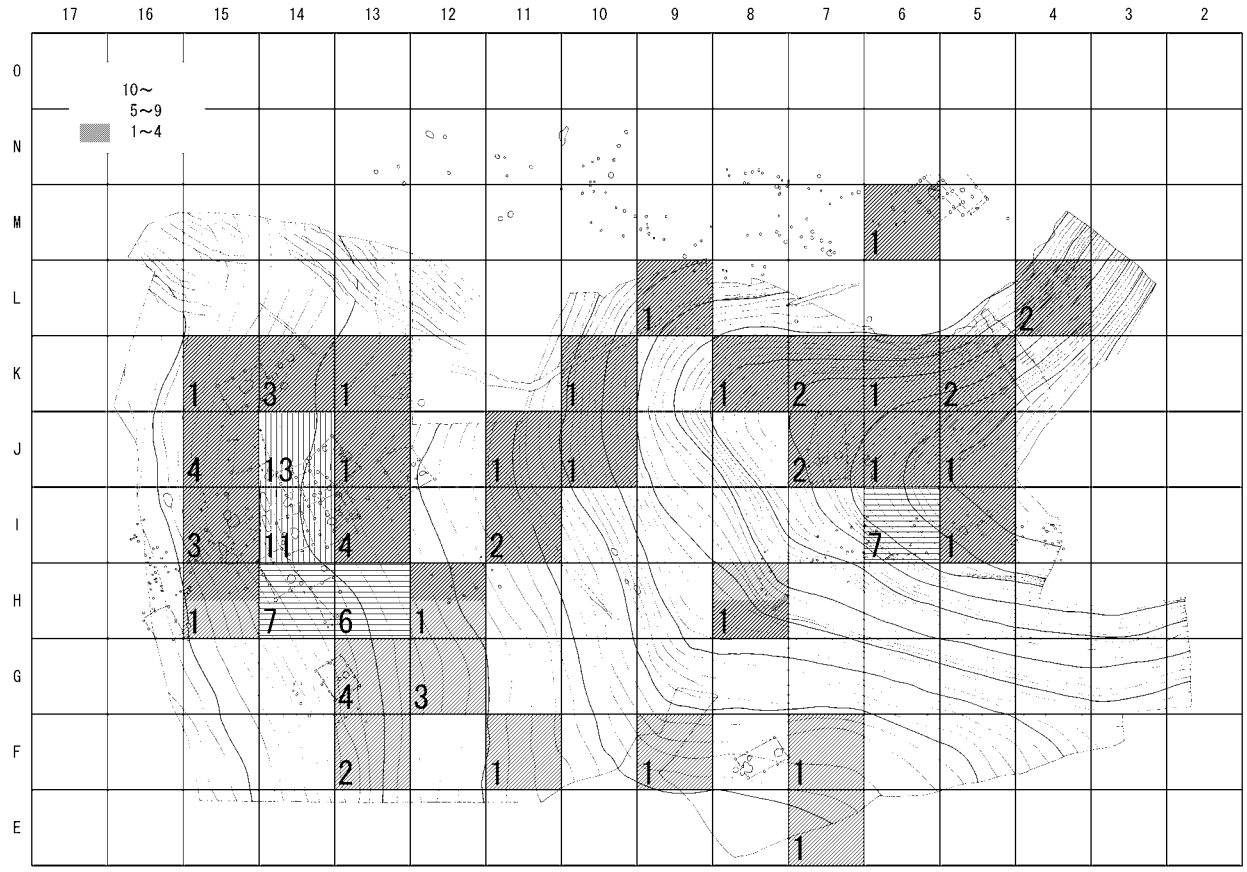
「舎」の文字をもつもの

２点出土し，ともに土師器坏である。No771は底部外面の中央に書かれることから，１文字である。体部にも墨書を確認するが判読はできない。No772は土師器坏の体部に正位で，上位が欠損することからもう１文字あった可能性がある。「舎」は鹿児島県溝辺町東免遺跡で「大舎」，川内市西ノ平遺跡で「太舎」，宮崎県宮崎市余り田遺跡で「隅舎」が知られる。

２点の出土は若干離れ，ともに周辺に柱穴が認められるが建物の復元はできていない。

「會」の文字をもつもの

No773の１点で，土師器坏の底部外面に書かれる。774の土師器坏は「會」の一部の可能性がある。



第102図　墨書土器出土状況

第50表　文字の判明している墨書土器の出土区

文字	出土区／層
牧	F-7/Ⅳa
舎	H-8/Ⅳa I-6Ⅳa
會	2T/Ⅲ J-7/Ⅳa

文字	出土区／層
大	I-6Ⅳa K-7/Ⅳa K-7/Ⅳa H-13/Ⅲ上 J-6/Ⅲa

文字	出土区／層
丈	J-7/Ⅳa
為	I-11/Ⅲ J-15/Ⅲ
男	I-14/Ⅳa，I-6Ⅳa

文字	出土区／層
安男	I-6Ⅳa
岑	I-11/Ⅲ I-11/Ⅲ J-14/Ⅲ
角	J-15/Ⅲ

「大」の文字をもつもの

本遺跡で最も多い文字である。正位で２点，逆位が３点の計５点で，土師器が４点，黒色土器が１点である。No776とNo779は３画目が大きく屈曲する点で類似している。No780は「大」の可能性は高いが，欠損のため断定はできない。黒色土器の外面に横位で書く。No781は２画目から３画目が続いており，「丈」の可能性もあるが，「大」に類似することで判断した。それぞれは比較的離れた場所から出土している。

「為」の文字をもつもの

No782とNo783の２点で，ともに土師器である。

「男□」「安男」の文字をもつもの

No784は黒色土器椀の底部外面に「男□」が書かれ，片方の文字は欠損のため，わずかに残存するが判読できない。No785は土師器坏の外面に正位に並列し，「安男」を確認できる。体部下半は欠損していることから，他にも文字の書かれていた可能性はある。「男」の墨書は始良町小倉畑遺跡で「田人」か「男」が出土し，また，「女」も同遺跡で認められる。

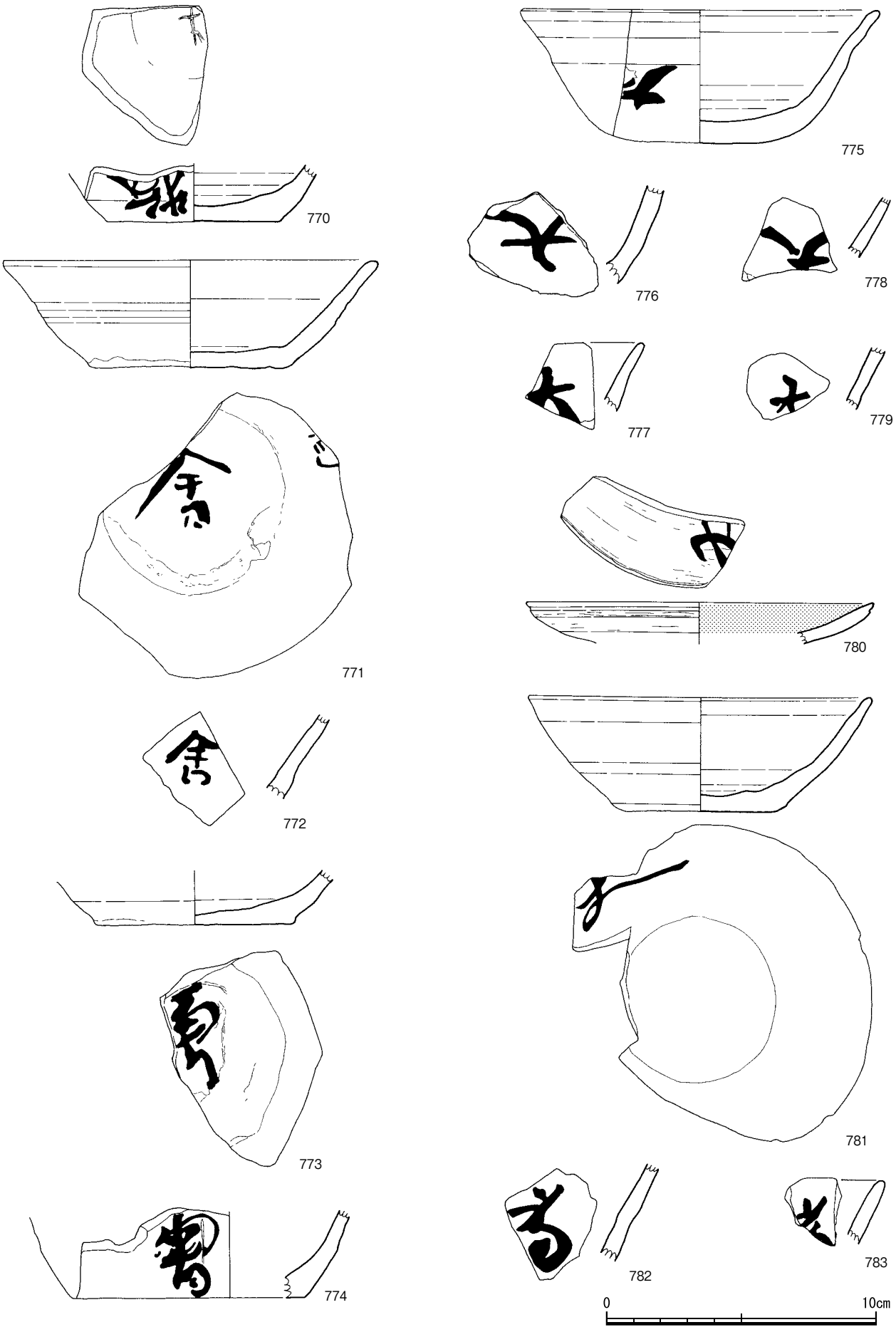
「安」の文字をもつもの

No786は土師器で外面に正位で書かれるが，保存状態が悪く文字の大部分は消滅している。「安」の両端は欠損しているために上記した「安男」のように，他の文字と並列していた可能性はある。「安」は金峰町小中原遺跡，市来町市ノ原遺跡に認められる。

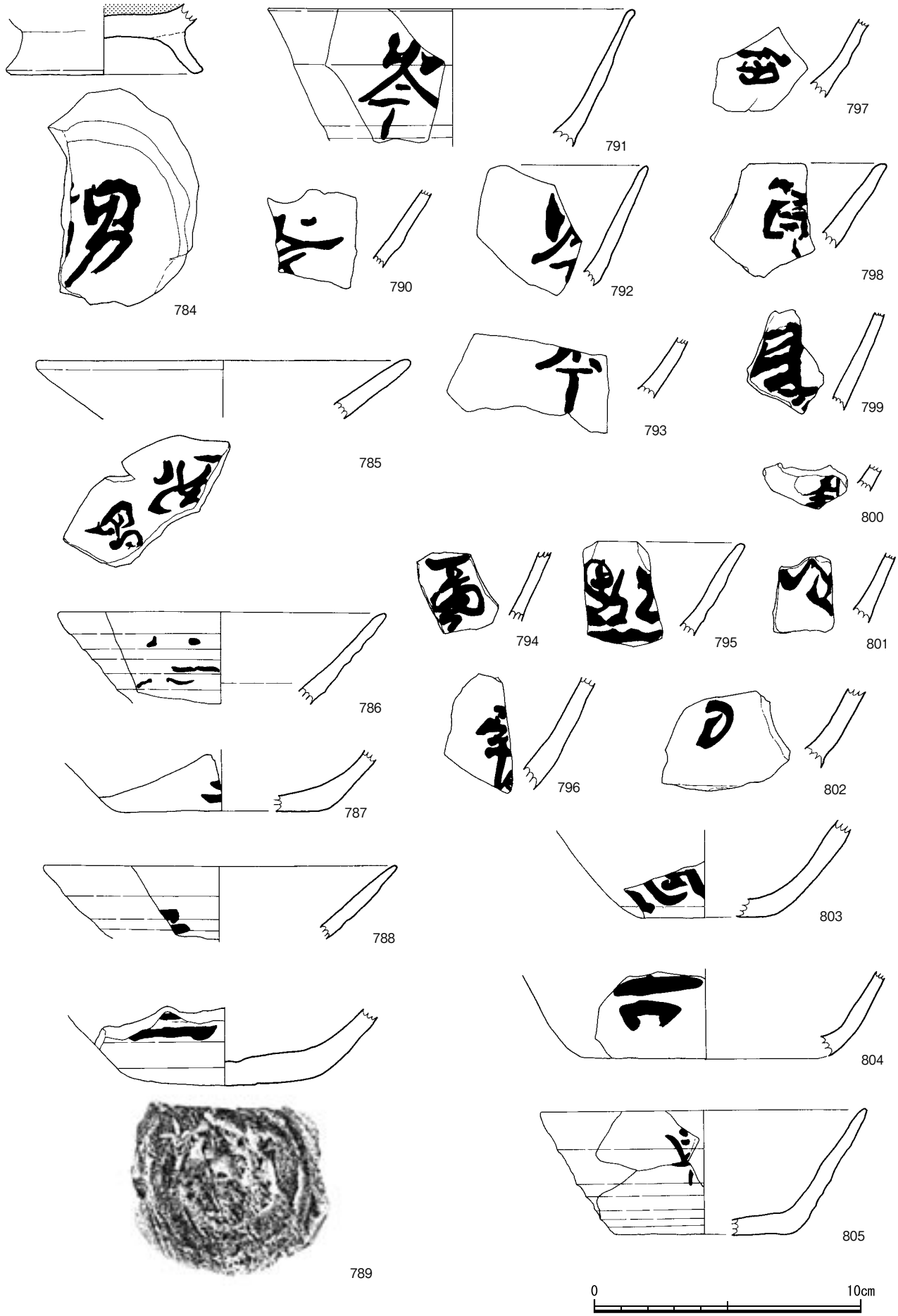
「岑」の文字をもつもの

３点で，ともに土師器である。No791と792は１画目の打ち込みが類似しており，同一人物によって墨書された可能性がある。

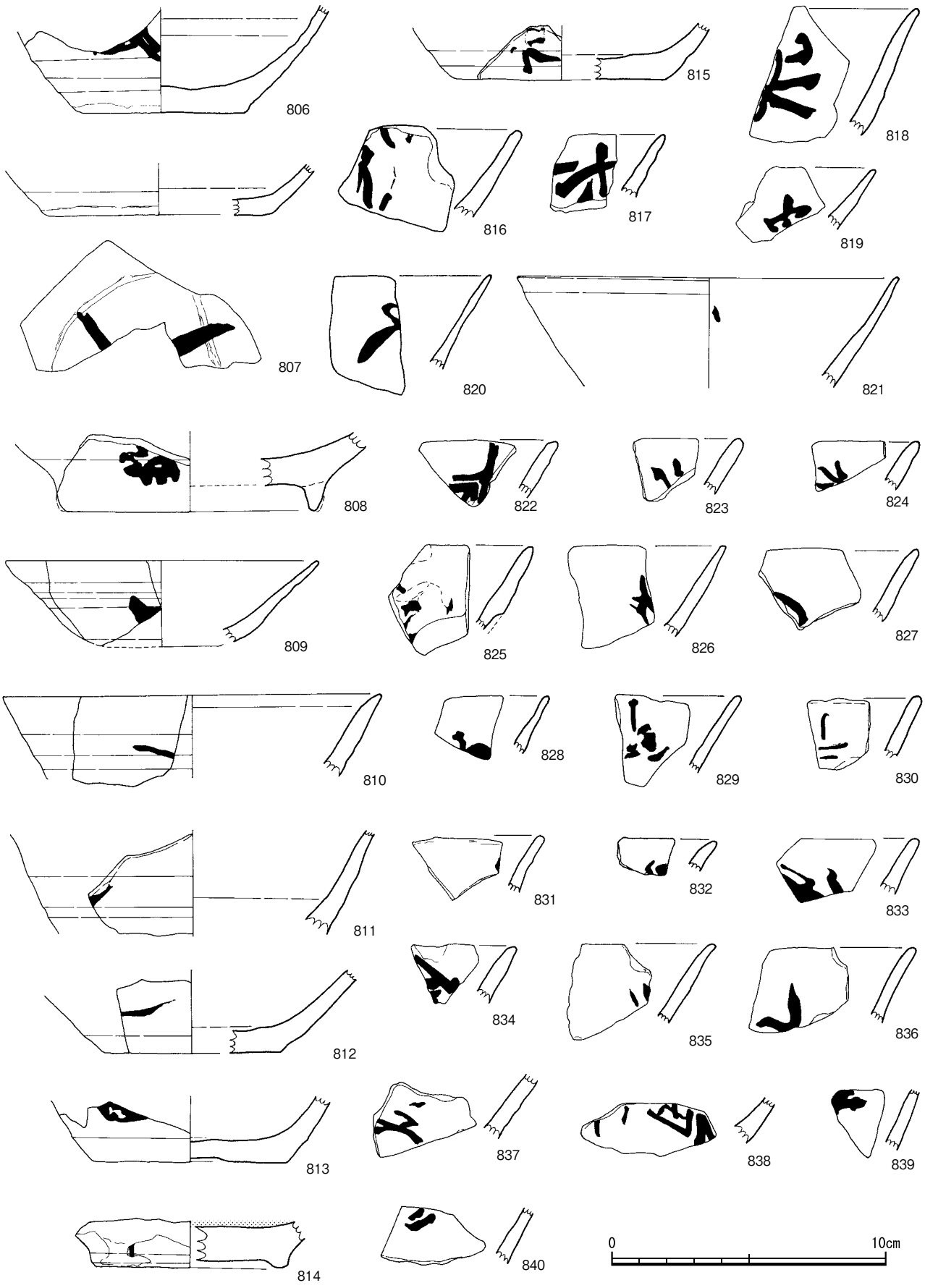
出土状況は３点のうち２点がI-11区からの出土で近接している。



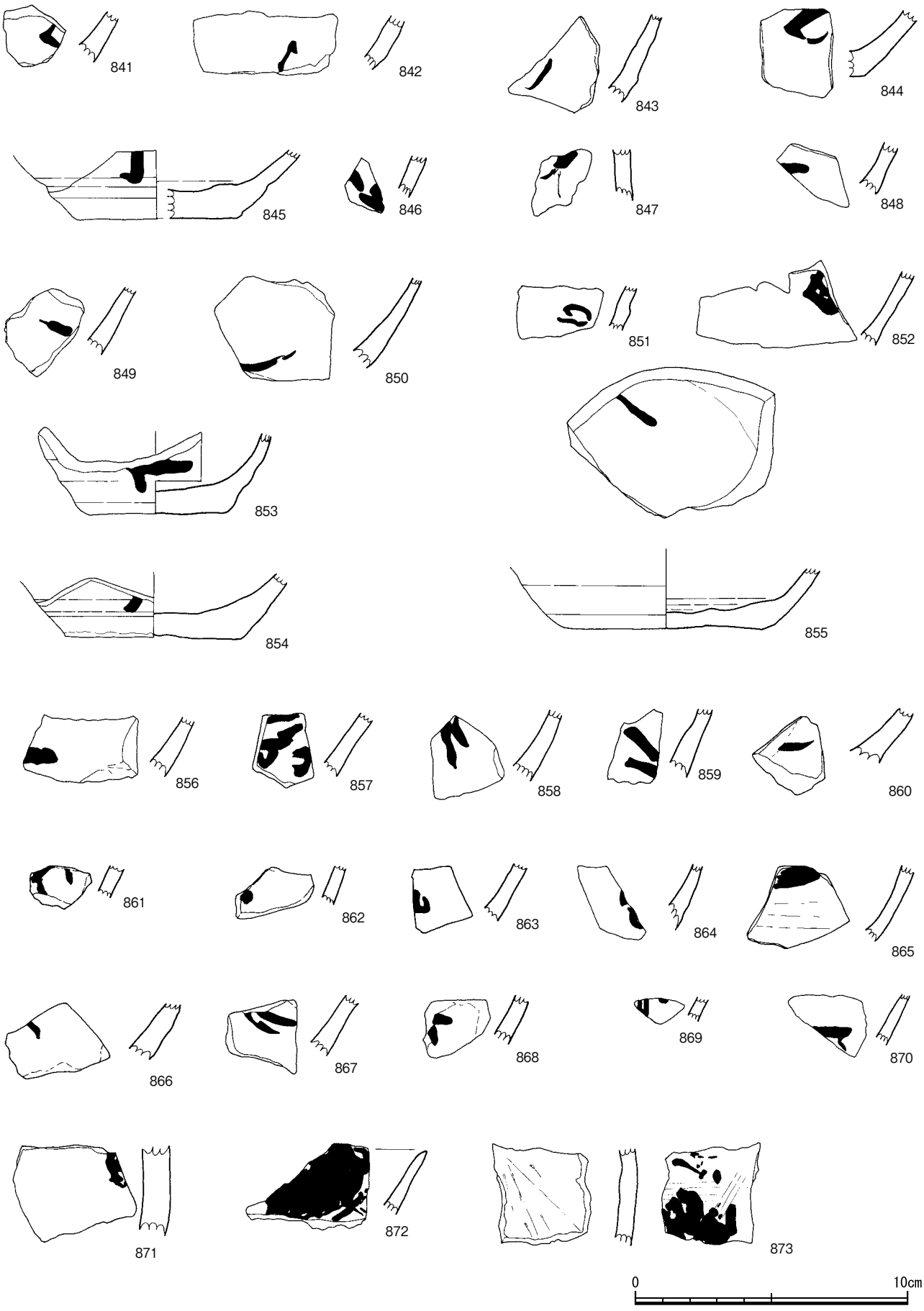
第103図　墨書土器（1）


784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
0
10cm

第104図　墨書土器（2）


806
815
818
816
817
819
807
820
821
808
822
823
824
809
825
826
827
810
828
829
830
811
831
832
833
812
834
835
836
813
837
838
839
814
840
0
10cm

第105図　墨書土器（３）


841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
860
861
862
863
864
865
866
867
868
869
870
871
872
873
0
10cm

第106図　墨書土器（4）

「角」の文字をもつもの

1点認められる。No797は土師器坏に横位に書く。

「奈」?の文字をもつもの

No805は横位で「奈」と判読できそうだが断定はできない。「奈」は宮崎県都城市本池遺跡で可能性が指摘され，姶良町平松原遺跡では刻書がある。

他の文字は判読できていない。その多くが「はらい」や「とめ」などの文字の一部で，判読できそうな文字もあり，今後の課題としたい。

墨の付着した土器は2点が土師器甕，1点が土師器坏である。偶然墨が付着したか，パレットとして使用した可能性も考えられる。

第51表　墨書土器観察表(1)

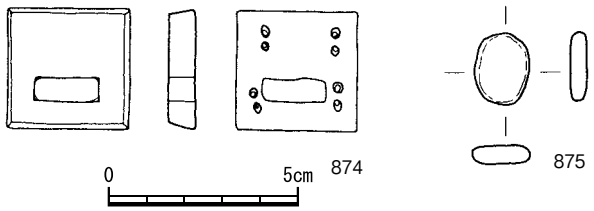
挿図番号	報告番号	出土区/層	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	方向	文字	備考
103	770	F-7/Ⅳa	土師器	(9.0)	(2.1)	6.4	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	逆	牧	-
	771	H-8/Ⅳa	土師器	13.8	4.0	6.6	精緻	良好	2.5Y8/4(淡黄)	正	舎・□	-
	772	I-6/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	2.5Y8/3(淡黄)	正	舎	-
	773	2T/Ⅲa	土師器	(10.2)	(2.0)	7.4	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	正	會	-
	774	J-7/Ⅳa	土師器	(11.8)	(3.2)	8.6	精緻	良好	5YR6/6(橙)	正	會？	-
	775	K-7/Ⅳa	土師器	13.2	4.9	5.0	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	逆	大	-
	776	I-6/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	5YR6/6(橙)	逆	大	-
	777	K-7/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	5YR7/8(橙)	正	大	-
	778	H-13/Ⅲ下	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR7/8(黄橙)	逆	大	-
	779	H-13/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	5YR7/6(橙)	正	大	-
	780	J-6/Ⅲa	黒色土器	12.8	(2.5)	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	横	大？	-
	781	J-7/Ⅳa	土師器	12.8	4.3	5.4	精緻	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	正	丈	-
	782	I-11/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	正	為	-
	783	J-15/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	正	為	-
104	784	I-14/Ⅳa	黒色土器	(6.0)	(2.6)	6.8	精緻	不良	7.5YR7/6(橙)	正	□男	高台高1.4
	785	I-6/Ⅳa	土師器	14.0	(2.2)	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	正	男・安	-
	786	I-6/Ⅳa	土師器	12.3	(3.4)	-	精緻	良好	10YR8/3(浅黄橙)	正	安	-
	787	I-14/Ⅳa	土師器	(11.5)	(2.3)	7.6	精緻	良好	7.5YR8/4(浅黄橙)	正	-	-
	788	F-9/Ⅲ	土師器	14.2	(2.8)	-	精緻	不良	7.5YR8/6(浅黄橙)	?	-	-
	789	H-13/Ⅳa	土師器	(11.4)	(2.7)	7.2	石,赤含む	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	正	-	堅緻
	790	I-11/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	正	峯	-
	791	J-11/Ⅲ	土師器	13.7	(5.2)	-	精緻	良好	5YR7/6(橙)	正	峯	-
	792	J-14/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	5YR7/8(橙)	正	峯	-
	793	J-14/Ⅲ K-15/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	5YR7/6(橙)	正	-	-
	794	I-14/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	正	-	-
	795	I-14/Ⅳ	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	逆	福？	-
	796	J-13/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	5YR6/6(橙)	正	-	-
	797	J-15/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	横	角	-
	798	G-12/Ⅲb	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	逆	-	-
	799	G-12/Ⅲb	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	正	-	-
	800	G-12/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	5YR6/6(橙)	逆	-	-
	801	F-13/Ⅳa	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	7.5YR7/6(橙)	横	-	-

第52表　墨書土器観察表(2)

挿図番号	報告番号	出土区/層	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	方向	文字	備考
104	802	J-14/Ⅳ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR8/4(浅黄橙)	正	-	-
	803	J-14/Ⅳa	土師器	(11.0)	(3.3)	5.0	精緻	良好	7.5YR8/4(浅黄橙)	逆	-	-
	804	K-8/Ⅳa	土師器	(13.6)	(3.4)	9.2	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	正	-	-
	805	I-5/Ⅳa	土師器	12.2	4.6	6.5	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	逆	奈？	-
105	806	I-6/Ⅳa	土師器	(12.0)	(3.8)	6.0	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	横	-	-
	807	I-14/Ⅳa	土師器	(11.2)	(1.8)	8.0	精緻	良好	7.5YR7/8(黄橙)	?	-	-
	808	K-6/	赤彩土器	(12.6)	(2.9)	9.2	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	正	-	-
	809	H-14/Ⅳa	土師器	11.4	(3.2)	(5.0)	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	?	-	-
	810	H-14/Ⅲ	土師器	13.2	(3.0)	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	?	-	-
	811	G-17/Ⅲb	土師器	(13.2)	(3.7)	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	?	-	-
	812	K-5/Ⅲ	土師器	(11.9)	(3.0)	6.4	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	?	-	-
	813	F-13/Ⅲb	土師器	(10.1)	(2.4)	7.0	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	正	-	-
	814	I-14/Ⅳa	黒色土器	-	(1.7)	7.0	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	?	-	-
	815	J-14/Ⅳa	土師器	(10.8)	(2.0)	7.6	精緻	良好	7.5YR8/4(浅黄橙)	逆	-	-
	816	J-15/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR8/8(黄橙)	正	-	-
	817	J-14/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	正	-	-
	818	H-14/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	5YR6/8(橙)	正	-	-
	819	I-15/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	正	-	-
	820	J-14/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	正	-	-
	821	I-13/Ⅲ	土師器	14.0	(4.0)	-	精緻	良好	5YR7/6(橙)	?	-	-
	822	J-14/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	正	-	-
	823	H-13/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR6/6(橙)	?	-	-
	824	H-14/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	横	-	-
	825	K-14/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	2.5Y8/2(灰白)	正	-	-
	826	I-14/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	横	-	-
	827	I-15/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR8/4(浅黄橙)	?	-	-
	828	F-11/Ⅲb	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR8/4(浅黄橙)	正	-	-
	829	G-13/Ⅲa	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	逆	-	-
	830	G-13/Ⅲa	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	逆	-	-
	831	G-13/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR7/8(黄橙)	?	-	-
	832	K-15/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR8/3(浅黄橙)	?	-	-
	833	H-14/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	7.5YR8/4(浅黄橙)	逆	-	-
	834	I-6/Ⅳa	黒色土器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR8/6(浅黄橙)	横	-	-
	835	J-15/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	7.5YR7/4(にぶい橙)	横	-	-
	836	I-6/Ⅳa	黒色土器	-	-	-	精緻	良好	10YR8/3(浅黄橙)	横	-	-
	837	H-15/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	正	-	-
	838	I-13/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	横	-	-
	839	M-6/	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	7.5YR7/6(橙)	?	-	-

第53表　墨書土器観察表(３)

挿図番号	報告番号	出土区/層	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	方向	文字	備考
105	840	I-13/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	不良	7.5YR7/6(橙)	?	-	-
106	841	I-14/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	横	-	-
	842	I-14/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	逆	-	-
	843	L-9/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	?	-	-
	844	J-14/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	逆	-	-
	845	H-14/Ⅳ	土師器	(10.4)	(2.3)	7.0	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	正	-	-
	846	L-4/Ⅳa	土師器	-	-	-	精緻	良好	5YR6/6(橙)	?	-	-
	847	H-13/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	?	-	-
	848	J-14/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	正	-	-
	849	H-13/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	2.5YR5/8(明赤褐)	?	-	-
	850	J-15/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	正	-	-
	851	K-5/Ⅲ	土師器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	横	-	-
	852	K-15/？	黒色土器	-	-	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	?	-	-
	853	H-14/Ⅲ	土師器	(8.6)	(2.9)	5.0	精緻	良好	10YR8/6(黄橙)	?	-	-
	854	I-15/Ⅳa	土師器	(9.7)	(2.4)	6.4	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	正	-	-
	855	I-14/Ⅳa	土師器	(11.3)	(2.2)	7.2	精緻	良好	7.5YR7/6(橙)	?	-	-
	856	L-4/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	7.5YR7/6(橙)	?	-	-
	857	H-14/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	7.5YR8/6(浅黄橙)	正	-	-
	858	K-13/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	10YR7/4(にぶい黄橙)	?	-	-
	859	H-14/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)	逆	-	-
	860	T-2/Ⅲb	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	7.5YR7/6(橙)	横	-	-
	861	H-12/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	10YR6/4(にぶい黄橙)	正	-	-
	862	K-14/	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	10YR7/4(にぶい黄橙)	?	-	-
	863	K-10/Ⅳa	黒色土器	-	-	-	精緻	良好	5YR6/6(橙)	?	-	-
	864	J-14/Ⅳa	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	7.5YR7/6(橙)	逆	-	-
	865	E-7/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	2.5Y6/2(灰黄)	正	-	-
	866	J-14/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	?	-	-
	867	I-13/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	10YR8/4(浅黄橙)	?	-	-
	868	J-14/Ⅲ	黒色土器	-	-	-	精緻	良好	10YR8/4(浅黄橙)	?	-	-
	869	?	土師器	-	-	-	精緻	良好	5YR7/6(橙)	?	-	-
	870	K-14/Ⅳ	黒色土器	-	-	-	精緻	不良	7.5YR7/4(にぶい橙)	-	-	-
	871	G-13/Ⅲ	甕	-	-	-	精緻	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	?	-	-
	872	J-10/Ⅳa	土師器	-	-	-	礫多い	良好	5YR6/6(橙)	?	-	-
	873	I-14/Ⅳa	甕	-	-	-	礫多い	良好	7.5YR7/6(橙)	?	-	-



第107図　石帯及び平玉石

石帯(巡方)(第107図)

3.2cm角の平面正方形を呈し，厚さ0.8cmの断面は裏面から表面に向かって傾斜し台形である。石材は蛇紋岩。垂孔は1.7×0.6cmで表面は四隅を直角に整形し，裏面は若干丸みをもつ。表面と側面は研磨剤によって光沢をもつほど丁寧に磨かれ，裏面の外枠付近まで認められる。裏面には２対に４ヶ所，径0.2cm程度の潜り穴が認められる。重量は13.5gである。なお，側面の一部分に黒色の汚れを認める。

平玉石(第107図)

G-7区Ⅳa層から出土した。蛇紋岩製で全面に磨かれ光沢がある。径1.4～1.9cmの楕円形を呈し，断面は0.5cmである。

第54表　石帯及び平玉石観察表

挿図番号	報告番号	出土区/層	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	備考
107	874	I-6/Ⅳa	石帯	3.2	3.2	0.7	蛇紋岩	-
	875	G-7/Ⅳa	平玉石	1.9	1.4	0.5	蛇紋岩	-

鉄製品(第108図)

総計25点の内，刀子片が12点と半数を占める。他に紡錘車，紡錘車の紡茎，釘，鍋の破片，鋏具が出土している。

No876～886は刀子で，全て破損する。

No876～880は先端部で，No876は幅約１cmの身をもち，先端部から約1.5cm手前で上端部に向かい直線的にすぼまる。No877は身の幅0.8cmと小型で，先端部が膨張している。No878と879は上下両端とも細くなり，刀子と判断した。No879は上端から見て軸が弯曲する。No880は先端にむかって曲線をもってすぼまる。No881は身から柄の部分で，両関と思われるが，下端の関は使用により緩やかで，柄部は上下端に面をもつ。No882は柄部で，先端に向かい幅が狭くなる。No883～886は身部で，No883と884は直線的な刃部である。No885は現存部が小さいが，刃部はわずかに内反りする。No886は刀子として分類したが，疑問も残す。

No887は紡錘車で，紡輪の中央に径0.6cmの紡茎が差し込まれている。紡輪は約3/5が残存し，断面は下面が紡茎にむかい若干傾斜する。No888と889は紡茎で，No888は断面が径0.5cmの円形を呈し，No889は上端から下端にかけて細くなる。断面は若干角をもつ円形である。

No890～894は釘で，全て破損した状態で出土した。

No890は中程で折り曲げられ，頭部は若干膨らみをもち，他の資料よりも太めである。No891と892は上下端が欠損し，断面の厚さは0.4～0.5cmである。No893は下端に向かって細くなり，先端部は若干曲がる。No894は先端部が錆のために膨らみ，身は若干曲がる。

No895とL20は鍋の破片と思われ，断面の厚さは0.2～0.3cmである。

No897は鋏具で，縁金の先端が欠損し，刺金が横棒の方に動いている状態である。X線写真では，軸金は縁金に施した小孔の中にはめ込み接合しているのに対し，横棒は縁金を貫通させた小孔の中にはめ込み，外側にはみ出た横棒を鍛打して接合している。軸金は先端につれて幅を減じている。

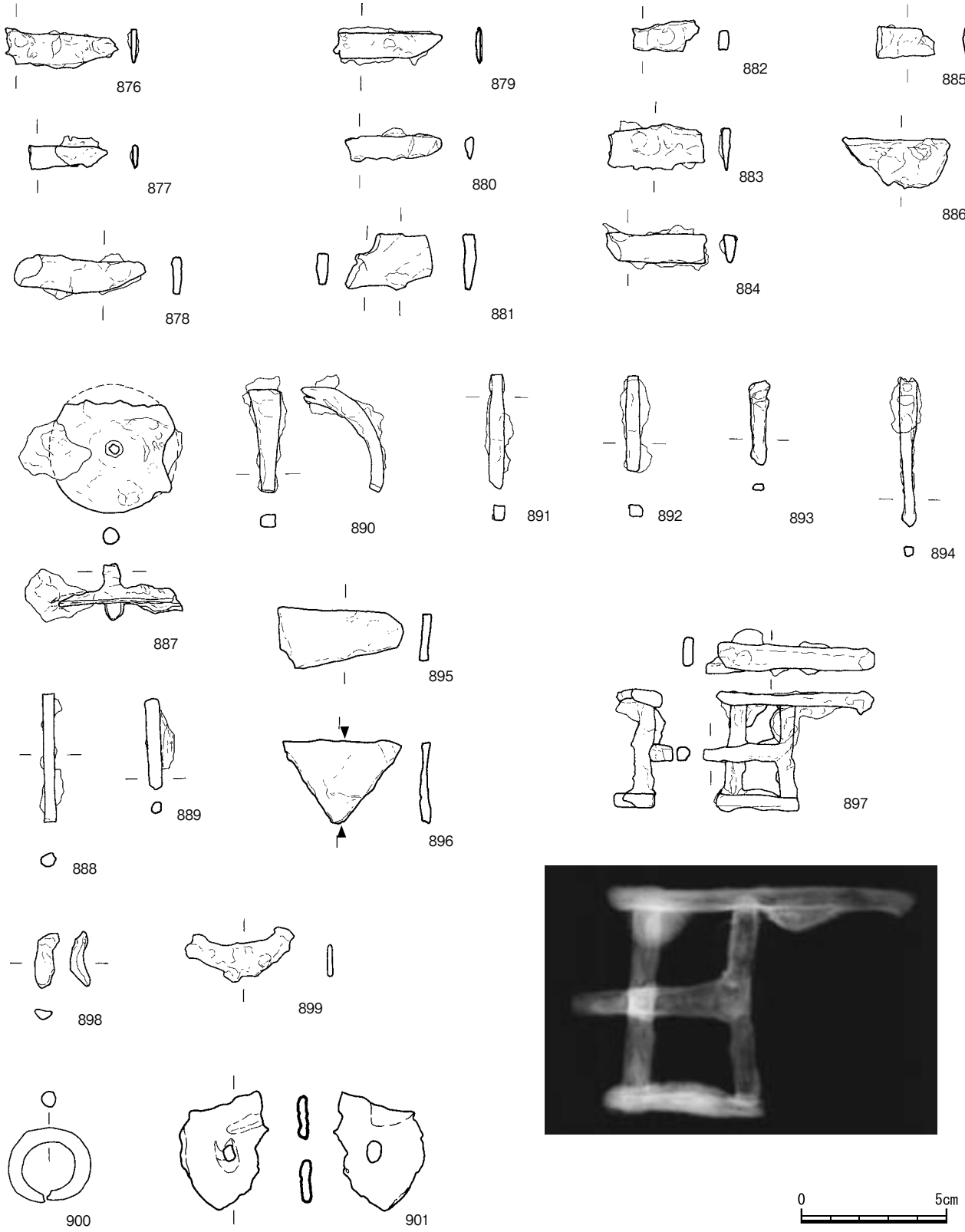
No898と899は不明鉄製品である。

第55表　鉄製品遺物観察表

挿図番号	報告番号	出土区/層	種類	計測値(cm)	重量(g)	磁石反応
108	876	2T/Ⅲ	刀子	(3.7)×1.1	2.67	○
	877	K-14/Ⅳa	刀子	(2.6)×0.8	1.29	○
	878	H-13/Ⅲ下	刀子	(4.4)×1.2	2.78	○
	879	K-15/Ⅳa	刀子	(3.5)×0.8	1.56	○
	880	J-14/Ⅳa	刀子	(3.3)×0.8	1.79	○
	881	K-14/Ⅲ	刀子	(2.8)×1.9	3.34	○
	882	J-15/Ⅳa	刀子	(2.2)×1.0	0.97	○
	883	I-6/Ⅲ	刀子	(3.2)×1.5	3.27	○
	884	K-14/Ⅲ	刀子	(3.4)×1.0	4.74	○
	885	J-15/Ⅳa	刀子	(2.0)×1.0	0.89	○
	886	K-15/Ⅳa	刀子	(3.6)×1.6	3.5	○
	887	H-13/Ⅲ	紡錘車	径4.4×(2.0)	17.94	○
	888	E-7/Ⅳa	紡錘車	4.4×0.4	2.81	○
	889	K-13/Ⅳa	紡錘車	3.1×0.5	2.46	○
	890	I-14/Ⅲ	鉄釘	4.0×1.2	8.24	○
	891	G-13/Ⅲ	鉄釘	(3.9)×0.5	1.93	○
	892	H-13/Ⅲ	鉄釘	3.3×0.5	2.68	○
	893	K-15/Ⅳa	鉄釘	2.8×0.6	3.64	○
	894	H-12/Ⅳa	鉄釘	5.1×1.0	3.42	○
	895	G-15	鋳造鉄片	3.9×2.7	9.37	○
	896	G-15	鋳造鉄片	3.9×2.7	9.37	○
	897	I-14/Ⅳa	鋏具	3.7×1.1	18.86	○
	898	G-14/Ⅳa	不明	1.8×0.7	0.73	○

第56表　銅製品遺物観察表

挿図番号	報告番号	出土区/層	縦×横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	種類	備考
108	900	I-14/Ⅳa	2.8×2.8	0.5	13	銅環	-
	901	-	4.2×2.8	0.35	12.9	不明	径0.5～0.3の穿孔



第108図　鉄製品及び銅製品

銅製品(第108図)

No900は銅環で，幅2.8cm，重さ13gで，金メッキは認められない。断面は径0.5cm程度の円形を呈し，部分的に緑青が残る。No901は不定形を呈し，径0.5～0.7cmの楕円形の穿孔を持つ。重量は12.9gで，片面は滑らか，片面は凹凸が目立つ。用途は不明である。

鍛冶関連遺物

椀形滓，ガラス質滓，鉄塊系遺物，鍛造剥片等がある。出土地点が記録されているのは185点中166点で，図110には39点を示した。

椀形滓(第110図)

椀形滓で，過半数を占める。多くは側面に数か所の破面が認められ，完形はNo909が唯一である。法量は長さ７cmと５cmが多く，比較的小型である。

断面の観察では，黄橙色を呈するものと光沢の強い黒灰色を呈するものが多い。

形状は円形や不整円・楕円形が多く，厚さは2cm前後のものと1cm前後の薄手のものがあり，特に薄手ではNo924のようにガラス質が付着し，重量の軽いものがある。

No902～911は厚さが2cm前後，断面色調が黄橙色を呈す。上面には幅1cm程の木炭痕による凸凹が見られる。No909は完形で長さ約6cmの円形で，No902～907も円形から楕円形の平面形が復元できる。

No904,903の上面はほぼ水平で，No907～909はやや窪む。No908,910,911は炉床の土が付着する。No911は破面が2面，残存率は1/4程度で，長さは最大９cmを測る。

No912～917は厚さが2cm断面色調は光沢のある黒灰色を呈する。どの個体も破面が複数認められ、本来の形態は伺いしれない。No912,914は炉床の土が付着する。No914は側面全てが破面で，上面は平坦で全体的に緻密である。No915も側面全てが破面で，上面は長さ1.0cm，幅0.5cm程度の木炭痕による凸凹が認められる。

No918～921は厚さが0.1cm前後の薄手である。No918は薄手の鉄滓が2段に付着している。No919は方形を呈し上面がわずかに窪む。No921も上面がわずかに窪み，断面は光沢の強い黒灰色を呈する。

No922～928は厚さが10cm前後の薄手で，上面にガラス質が付着し，重量は全体的に軽いものが多い。

No922は側面全てが破面で，長さは4cm程の小型で，炉床の土が下面に付着する。No923も3面が破面であるが，長さは6cmとやや大きい。No924はガラス質の付着は薄く，他に比べて若干重い。No925は断面の厚さが0.2cmで，ガラス質の付着も厚く1.5cmを測る。No926は上面に均一にガラス質が付着し、下部は海綿状を呈している。No928は上面に酸化土とガラス質が付着し，破面は1面で，形態は円形が復元される。

ガラス質滓(第110図)

羽口の先端部付近，高温で粘土質がガラス質となり，滴状に固まったものである。No929,930は表面に光沢をもつ黒灰色を呈し，長さは約４cmで軽い。No929はガラス質に１cm大の小礫が複数付着し，表面は凹凸がある。No930は数mm大の砂粒が付着する。No932～935は膨らみのある平面形で，長さは４cm以内で，光沢はないが，No933では気泡の中にガラス質の光沢が確認される。No931は約２cmの酸化土が付着する。No934は薄手の鉄滓に付着し，表面は気泡が多い。No935も表面の気泡が多く確認される。

鉄塊系遺物(第110図)

表面は酸化土で覆われるため凸凹が少なく，鉄分を多く含んでいる。鉄分の錆化により体積膨張を起し，外面には数か所に亀裂が認められる。また，磁石反応の強いものが多く，内部は暗赤褐色を呈する。No936は長さ2.5cmを測る。No937は長さ４cmで，方形状の鉄塊が付着する。No938は亀裂により数個体に分裂し，その一部を図化した。磁石の反応は強い。

鍛造剥片

10号掘立柱建物跡から２片出土している。長さ0.7cm程，幅0.6cm程を測り，厚さは0.1cmよりも薄い。表面は黒色を呈し光沢が認められる。

⑳その他の鉄滓(第110図)

No939は暗赤褐色を呈す細片で，表面には粉末状に酸化土が残る。No940は光沢のある黒灰色を呈す細片である。

研石(第111図)

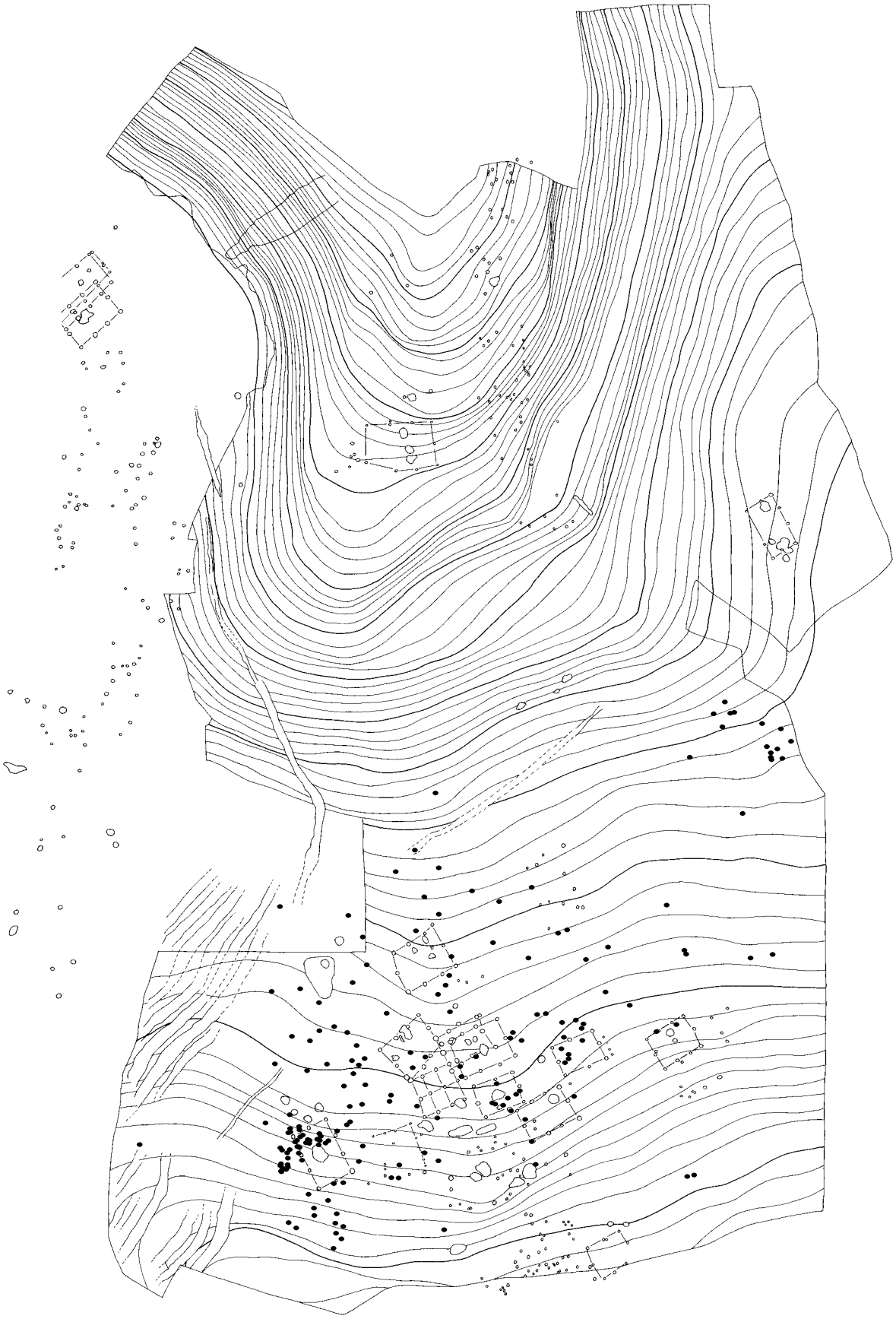
２点出土している。

No941は表裏面と側面に研面が認められる。研面には直線状の使用痕が認められる。No942は断面方形を呈し，表裏面に研面が認められる。

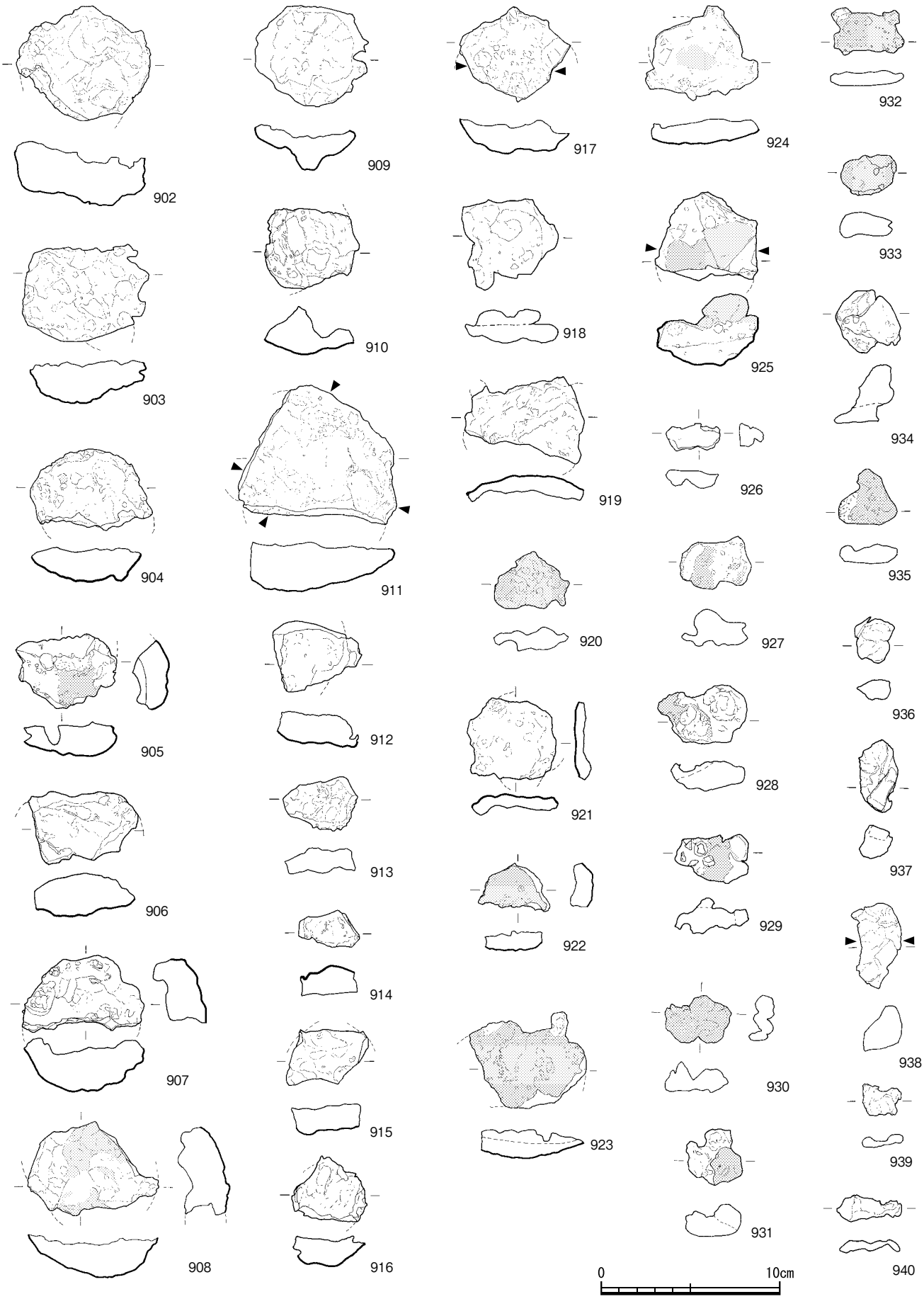
羽口(第112図)

破損し28点出土し，11点が先端部である。先端部分の径は２～３cmが多く，胴部は3～４cmである。概して胎土には砂粒が多く含まれる。

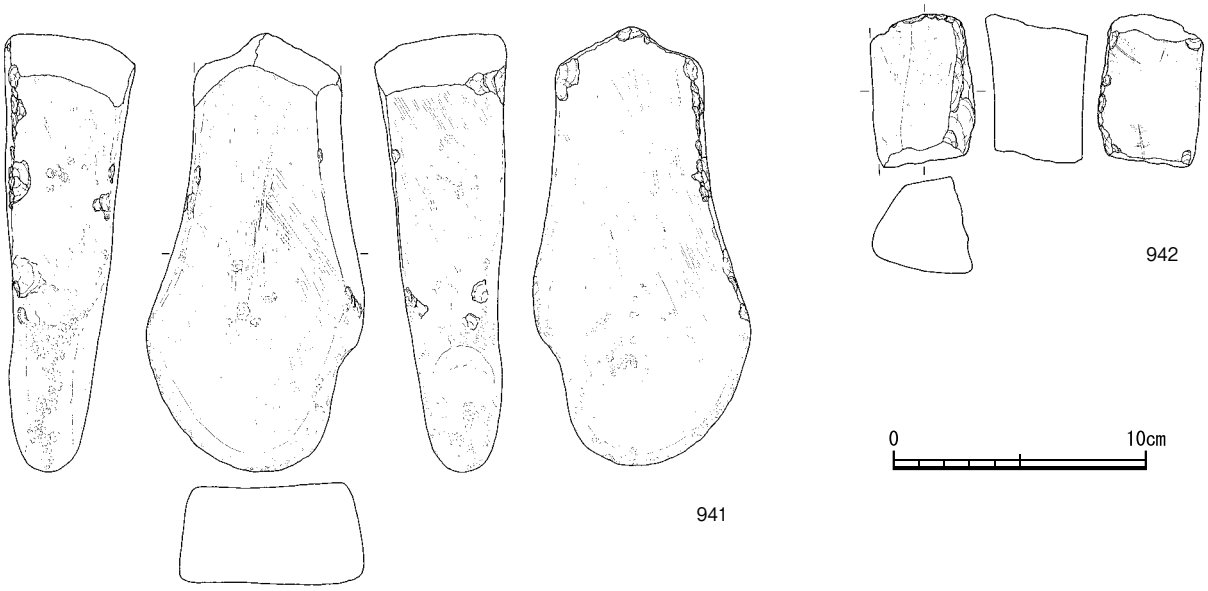
No943は最も残存率が良く，胴部から先端に向かい若干すぼまり，先端は灰色から黒色を呈し付着物がある。No944は先端部で，外面は先端に向かい曲線的にすぼまる。先端部は溶けてガラス質となるが特に，下位の部分は塊として付着している。No945は外面に指押さえが見られ，先端にかけて灰色を呈し，内部は橙色である。No946は外面に淡緑色の釉が付着し，断面は浅黄橙色を呈する。No947は先端付近がガラス質となり，内部は先端付近が黒色を呈する。No948～950の内部先端は赤褐色を呈する。No951は先端部分が平坦でガラス質となっている。



第109図　鍛冶関連遺物出土状況


902
903
904
905
906
907
908
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
0
10cm

第110図　鉄滓



第111図　研石

第57表　鉄滓観察表(１)

挿図番号	報告番号	取上番号 (出土区/層)	種　類	重　量 (g)	縦×横 (cm)	磁石反応
110	902	5167 (K-13/Ⅲ)	椀形滓	168.85	7.9×6.8	×
	903	5015 (K-14/Ⅲ)	椀形滓	141.72	7.6×5.9	○
	904	5418 (K-15/Ⅲ)	椀形滓	102.15	7.0×4.7	○
	905	7143 (J-13/Ⅲ)	椀形滓	42.72	5.3×3.8	×
	907	7012 (K-14/Ⅲ)	椀形滓	102.61	6.8×4.0	○
	908	8409 (K-14/Ⅳa)	椀形滓	100.31	7.3×5.1	○
	909	8825 (H-13/Ⅳa)	椀形滓	77.28	6.2×5.4	○
	910	9089 (H-13/Ⅲ)	椀形滓	71.96	5.4×5.4	○弱い
	911	9316 (J-15/Ⅳa)	椀形滓	328.1	9.2×8.1	×
	915	8719 (H-14/Ⅲ)	椀形滓	43.14	5.1×3.5	×
	-	1628 (F-10/Ⅲ)	椀形滓	27.72	4.2×3.0	○弱い
	-	1631 (F-10/Ⅲ)	椀形滓	34.29	4.2×3.1	○
	-	1782 (F-10/Ⅳa)	椀形滓	44.05	5.3×3.2	○
	-	1794 (F-10/Ⅳ)	椀形滓	16.17	3.6×2.2	○弱い
	-	5251 (K-15/Ⅲ)	椀形滓	63.37	5.4×5.4	○
	-	5347 (K-15/Ⅲ)	椀形滓	105	6.0×5.5	○
	-	5640 (K-15/Ⅲ)	椀形滓	28.12	4.5×3.3	○
	-	6050 (K-15/Ⅳa)	椀形滓	18.81	2.7×2.2	○
	-	6318 (K-14/Ⅳa)	椀形滓	115.67	7.3×5.1	○
	-	6666 (J-12/Ⅳa)	椀形滓	87.11	6.6×5.5	×
	-	7074 (J-14/Ⅲ)	椀形滓	21.21	3.1×2.4	○
	-	7680 (J-15/Ⅳa)	椀形滓	30.65	5.2×2.3	○

挿図番号	報告番号	取上番号 (出土区/層)	種　類	重　量 (g)	縦×横 (cm)	磁石反応
	-	7902 (J-13/Ⅳa)	椀形滓	32.69	5.1×2.7	○
	-	8865 (H-13/Ⅲ)	椀形滓	98.49	6.5×4.7	○弱い
	-	8946 (H-14/Ⅲ)	椀形滓	72.59	6.7×4.9	×
	-	9009 (H-12/Ⅳa)	椀形滓	89.58	7.2×4.7	○
	-	9363 (J-14/Ⅳa)	椀形滓	28.08	5.1×2.2	○
	-	9369 (J-14/Ⅳa)	椀形滓	30.49	3.9×3.7	○
	-	9370 (J-14/Ⅳa)	椀形滓	62.94	5.8×4.8	○
	-	9392 (I-14/Ⅳa)	椀形滓	23.02	5.2×3.5	×
	-	9400 (I-13/Ⅳa)	椀形滓	10.88	2.7×2.1	○
	-	9406 (H-14/Ⅳa)	椀形滓	57.87	6.4×5.4	○
	-	9470 (I-14/Ⅳa)	椀形滓	77.78	6.3×4.6	×
	-	9642 (J-12/Ⅲ)	椀形滓	24.55	3.5×2.5	○
	-	9777 (H-12/Ⅳa)	椀形滓	63.87	5.1×3.4	○
	-	9843 (J-6/Ⅳa)	椀形滓	66.59	5.8×4.3	○
110	922	8348 (K-14/Ⅳa)	椀形滓	4.47	3.8×2.2	○
	923	8604 (L-7/Ⅳa)	椀形滓	20.82	6.8×5.7	×
	924	9321 (I-15/Ⅳa)	椀形滓	38.99	6.4×5.1	○弱い
	925	9327 (I-14/Ⅳa)	椀形滓	57.83	6.1×5.6	×
	-	1726 (G-13/Ⅳa)	椀形滓	31.56	5.8×3.0	○弱い
	-	6141 (K-14/Ⅳa)	椀形滓	12.8	4.9×2.8	×
	-	8134 (K-14/Ⅳa)	椀形滓	8.32	4.4×3.0	×
	-	9303 (J-15/Ⅳa)	椀形滓	11.5	5.3×3.3	×
	-	9446 (I-14/Ⅳa)	椀形滓	21.92	5.5×3.3	×

第58表　鉄滓観察表(2)

挿図番号	報告番号	取上番号 (出土区/層)	種　類	重　量 (g)	縦×横 (cm)	磁石反応
	-	9467 (I-14/Ⅳa)	椀形滓	3.09	2.4×2.3	○
	-	895 (G-13/Ⅲ)	椀形滓	25.25	5.0×2.0	×
	-	1046 (F-11/Ⅲ)	椀形滓	72.57	6.5×4.0	○
110	918	5983 (K-15/Ⅳa)	椀形滓	46.19	5.8×5.6	○
	919	9132 (J-13)	椀形滓	48.58	6.6×4.5	×
	920	9463 (I-14/Ⅳa)	椀形滓	14.41	4.2×3.2	×
	-	1784 (F-10/Ⅳa)	椀形滓	28.95	3.4×3.0	○弱い
	-	5025 (K-14/Ⅲ)	椀形滓	11.42	2.9×2.8	○
	-	5080 (K-14/Ⅲ)	椀形滓	15.69	4.0×2.4	○
	-	5113 (K-13/Ⅲ)	椀形滓	70.15	6.7×5.7	○
	-	5259 (K-15/Ⅲ)	椀形滓	18.75	4.2×3.0	○弱い
	-	5344 (K-15/Ⅲ)	椀形滓	18.68	4.6×3.0	○
	-	5345 (K-15/Ⅲ)	椀形滓	26.82	6.3×3.4	○
	-	5949 (K-16/Ⅳa)	椀形滓	33.49	6.3×4.8	○
	-	5961 (K-15/Ⅳa)	椀形滓	33.5	5.5×4.6	○弱い
	-	9093 (I-16/Ⅳa)	椀形滓	28.11	5.7×3.6	○
	-	9105 (I-13/Ⅳa)	椀形滓	27.32	5.3×3.5	○
	-	9111 (I-13/Ⅳa)	椀形滓	26.14	4.3×4.1	○弱い
	-	9309 (J-14/Ⅳa)	椀形滓	13.19	2.9×2.8	○
	-	9639 (J-11/Ⅲ)	椀形滓	13.83	4.6×2.6	○
	-	9798 (I-13/Ⅳa)	椀形滓	16.93	4.1×3.2	○
110	906	9344 (J-14/Ⅲ)	椀形滓	79.2	5.9×4.0	○
	912	5386 (K-15/Ⅲ)	椀形滓	59.64	5.1×3.8	×
	913	7045 (J-14/Ⅲ)	椀形滓	20.99	4.0×2.8	×
	914	5378 (K-15/Ⅲ)	椀形滓	22.68	3.3×2.0	○
	916	9604 (I-12/Ⅲ)	椀形滓	30.16	4.0×3.3	×
	917	9671 (J-12/Ⅳa)	椀形滓	81.38	6.2×5.3	○
	921	9088 (H-13)	椀形滓	32.61	5.1×4.8	○弱い
	-	1450 (G-12/Ⅲ)	椀形滓	29.36	4.5×3.0	○
	-	1662 (F-10/Ⅲ)	椀形滓	17.7	3.9×2.9	○
	-	6412 (K-15/Ⅳa)	椀形滓	31.63	4.0×2.5	×
	-	7296 (J-14/Ⅲ)	椀形滓	12.91	4.6×1.4	○弱い
	-	7361 (K-14/Ⅲ)	椀形滓	16.71	3.5×2.4	×
	-	7459 (K-15/Ⅳa)	椀形滓	10.66	2.2×2.1	○
	-	9107 (J-13/Ⅳ)	椀形滓	61.94	6.2×4.4	×
	-	9275 (I-14/Ⅳa)	椀形滓	26.25	4.5×2.6	○
110	926	8508 (K-13/Ⅳa)	ガラス質滓	3.42	3.75×2.31	×
	927	156 (1T/Ⅲ)	ガラス質滓	23.42	3.9×2.6	×
	929	9591 (I-12/Ⅳa)	ガラス質滓	15.29	4.1×2.8	×
110	930	855 (K-14/Ⅳa)	ガラス質滓	7.84	3.6×2.7	×
	931	6405 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	10.65	3.5×3.3	○
	933	5225 (K-16/Ⅲ)	ガラス質滓	14.07	4.6×2.7	×
	934	9396 (I-14/Ⅲ)	ガラス質滓	20.12	4.3×3.6	×
	935	9647 (J-12/Ⅳa)	ガラス質滓	10.2	3.1×3.1	○弱い
	-	787 (2T/Ⅲ)	ガラス質滓	1.7	2.2×1.2	×
	-	1674 (F-10/Ⅲ)	ガラス質滓	8.07	3.3×2.6	×
	-	1783 (F-10/Ⅳa)	ガラス質滓	18.17	4.3×2.9	○弱い
	-	1922 (F-13/Ⅳa)	ガラス質滓	4.69	3.4×2.4	○
	-	5142 (K-13/Ⅲ)	ガラス質滓	5.31	3.7×2.5	○弱い
	-	5950 (K-16/Ⅳa)	ガラス質滓	5.65	3.5×3.0	○
	-	6406 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	7.51	4.4×2.2	○
	-	6407 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	4.43	2.4×1.8	○
	-	6422 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	0.77	2.3×2.0	×
	-	6431 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	7.67	2.5×2.1	×
	-	6436 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	1.22	1.7×0.8	×
	-	6439 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	1.99	2.2×1.3	○
	-	7850 (J-13/Ⅳa)	ガラス質滓	1.8	1.9×1.2	○
	-	7860 (K-13/Ⅳa)	ガラス質滓	2.05	2.6×1.9	○
	-	8056 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	0.48	1.5×1.1	×
	-	8070 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	13.22	3.1×2.5	○弱い
	-	8094 (K-14/Ⅳa)	ガラス質滓	2.24	2.4×1.4	×
	-	8095 (K-14/Ⅳa)	ガラス質滓	3.01	2.2×2.0	×
	-	8168 (K-14/Ⅳa)	ガラス質滓	3.05	1.9×1.1	○
	-	8243 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	0.89	2.1×1.1	×
	-	8244 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	1.58	2.2×1.5	×
	-	8245 (K-15/Ⅳa)	ガラス質滓	3.96	1.9×1.3	×
	-	8322 (J-14/Ⅳa)	ガラス質滓	2.55	2.8×1.7	○
	-	8353 (K-14/Ⅳa)	ガラス質滓	2.8	2.0×1.8	×
	-	8458 (K-14/Ⅳa)	ガラス質滓	4.19	3.1×2.1	○
	-	9085 (H-13/Ⅲ)	ガラス質滓	3.22	2.1×1.4	○弱い
	-	9524 (I-14/Ⅳa)	ガラス質滓	1.6	2.0×1.7	×
	-	9660 (J-12/Ⅳa)	ガラス質滓	19.79	4.8×3.5	×
110	936	581 (2T/Ⅲ)	鉄塊系	10.36	2.5×2.2	○
	937	9348 (J-14/Ⅳa)	鉄塊系	80.57	4.5×3.4	○強い
	938	9674 (J-12/Ⅳa)	鉄塊系	15.25	3.9×1.9	○
	-	1666 (F-10/Ⅲ)	鉄塊系	8.72	2.6×2.1	○
	-	1672 (F-10/Ⅲ)	鉄塊系	76.91	7.9×4.6	○
	-	5279 (K-15/Ⅲ)	鉄塊系	5.4	2.5×1.5	○
	-	5341 (K-15/Ⅲ)	鉄塊系	173.02	6.3×5.7	○

第59表　鉄滓観察表(3)

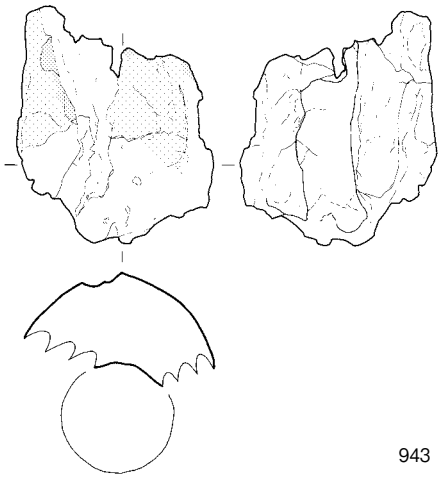
挿図番号	報告番号	取上番号 (出土区/層)	種　類	重　量 (g)	縦×横 (cm)	磁石反応
	-	5959 (K-15/Ⅳa)	鉄塊系	5.59	3.3×1.2	○
	-	6440 (K-15/Ⅳa)	鉄塊系	7.22	2.9×1.6	○
	-	6877 (K-15/Ⅲ)	鉄塊系	9.57	2.7×2.2	○
	-	7538 (K-14/Ⅳa)	鉄塊系	2.83	2.0×1.2	○
	-	8016 (J-15/Ⅳa)	鉄塊系	5.83	2.3×1.6	○
	-	8169 (K-14/Ⅳa)	鉄塊系	1.63	2.2×2.1	○
	-	8235 (K-15/Ⅳa)	鉄塊系	14.12	2.9×2.9	○
	-	8914 (H-14/Ⅲ)	鉄塊系	56.4	5.5×4.5	○
	-	9087 (H-13/Ⅲ)	鉄塊系	23.47	3.7×3.5	○
	-	9302 (J-15/Ⅳa)	鉄塊系	100.95	7.8×4.0	○
	-	9411 (H-14/Ⅳa)	鉄塊系	14.8	4.0×2.5	○
	-	9425 (I-14/Ⅳa)	鉄塊系	4.04	2.3×1.8	○
	-	9627 (I-12/Ⅳa)	鉄塊系	4.02	2.1×1.4	○
110	939	8605 (L-7/Ⅳa)	鉄滓(小片)	3.25	2.3×2.1	○
	940	9462 (I-14/Ⅳa)	鉄滓(小片)	4.08	3.5×1.2	×
	-	71 (2T/Ⅲ)	鉄滓(小片)	7.64	2.9×2.1	○
	-	210 (2T/Ⅲ)	鉄滓(小片)	3.37	1.8×1.5	×
	-	612 (2T/Ⅲ)	鉄滓(小片)	3.11	2.2×1.2	○
	-	1626 (F-10/Ⅲ)	鉄滓(小片)	12.06	3.2×3.0	○
	-	1664 (F-10/Ⅲ)	鉄滓(小片)	12.66	2.8×2.2	○弱い
	-	1670 (F-10/Ⅲ)	鉄滓(小片)	7.54	2.8×1.8	○
	-	5301 (K-15/Ⅲ)	鉄滓(小片)	4.71	2.6×2.1	○
	-	5343 (K-15/Ⅲ)	鉄滓(小片)	2.4	2.5×1.5	○
	-	6414 (K-15/Ⅳa)	鉄滓(小片)	2.38	1.4×1.2	○
	-	6421 (K-15/Ⅳa)	鉄滓(小片)	0.47	1.0×1.0	○
	-	6423 (K-15/Ⅳa)	鉄滓(小片)	1.65	1.6×1.0	×
	-	7837 (J-13/Ⅳa)	鉄滓(小片)	2.9	2.3×1.8	○
	-	9304 (J-15/Ⅳa)	鉄滓(小片)	99.99	1.6×1.0	○
	-	9464 (I-14/Ⅳa)	鉄滓(小片)	2.1	1.7×1.1	○
	-	9778 (H-13/Ⅲ)	鉄滓(小片)	5.17	2.6×1.6	○
110	928	6626 (K-12/Ⅳa)	鉄滓	36.05	5.0×3.3	○
	932	7342 (K-14/Ⅲ)	鉄滓	9.87	4.3×2.5	○
	-	8292 (J-14/Ⅳa)	鉄滓	49.68	6.4×5.3	○
	-	9350 (J-15/Ⅳa)	鉄滓	15.57	4.1×2.0	○弱い
	-	9615 (I-12/Ⅳa)	鉄滓	41.91	3.9×3.5	×
	-	5129 (K-13/Ⅲ)	鉄滓	21.23	3.6×2.7	○
	-	5282 (K-15/Ⅲ)	鉄滓	43.62	4.6×3.3	○
	-	9086 (H-13/Ⅲ)	鉄滓	14.56	3.5×2.6	○
	-	8047 (K-15/Ⅳa)	鉄滓	5.65	3.2×1.8	○
	-	7829 (J-14/Ⅳa)	鉄滓？	13.13	3.6×2.6	○
	-	7221 (J-15/Ⅲ)	鉄滓	14.98	3.2×2.6	○

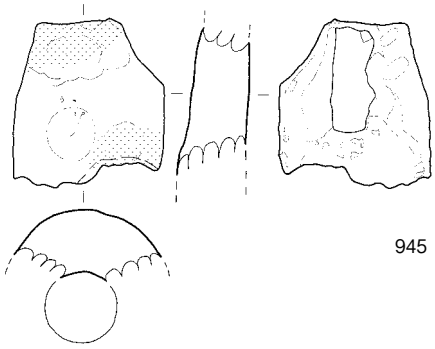
第60表　研石観察表

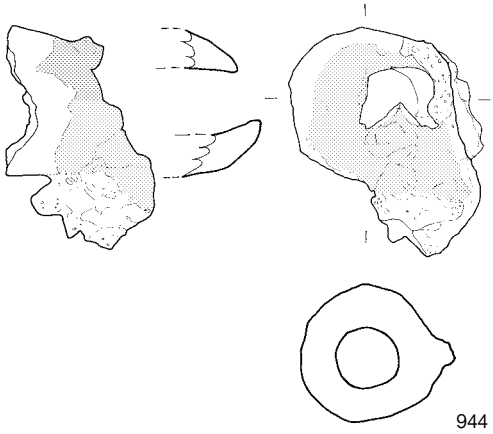
挿図番号	報告番号	出土区/層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
111	941	H-14/Ⅲ	(17)	8.6	5.2	900	砂岩	-
	942	H-14/Ⅳa	(6)	4	4	140	砂岩	-

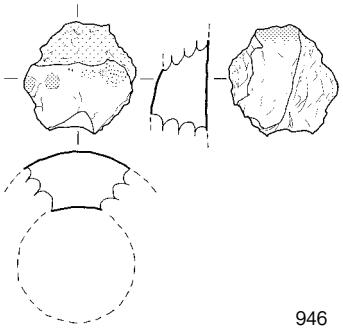
第61表　羽口観察表

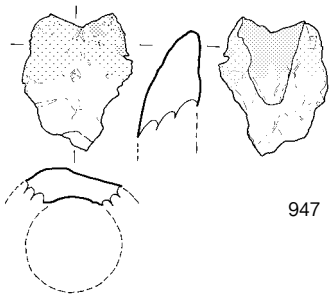
挿図番号	報告番号	出土区/層	外径×長さ (cm)	内径 (cm)	器厚 (cm)	重量 (g)	磁石反応	色調 (断面)	備考
112	943	G-15/Ⅳa	(9.1)×(7.6)	4.4	3.3	(196)	-	2.5YR7/6 (橙)	-
	944	H-12/Ⅳa	(10.0)×(6.9)	2.5	1.5	(150)	×	5YR4/1 (褐灰)	鉄滓付着
	945	K-14/Ⅲ	(6.5)×(6.1)	2.9	2.7	(83)	-	5YR7/8 (橙)	-
	946	J-15/Ⅳa	(4.5)×(4.2)	4.6	2.3	(32)	-	10YR8/2 (灰白)	-
	947	G-13/Ⅲ	(5.4)×(4.2)	3.7	1.3	(28)	-	10YR8/2 (灰白)	-
	948	J-14/Ⅳa	(5.7)×(3.4)	2.8	1.4	(25)	-	7.5YR7/6 (橙)	-
	949	H-11/Ⅲ	(5.4)×(4.9)	3.6	1.5	(43)	-	7.5YR8/6 (浅黄橙)	-
	950	H-12/Ⅳa	(5.3)×(3.5)	2.4	1.8	(30)	-	10YR8/3 (浅黄橙)	-
	951	H-15/Ⅲ	(4.7)×(4.3)	1.8	2	(45)	-	10YR8/2 (灰白)	-

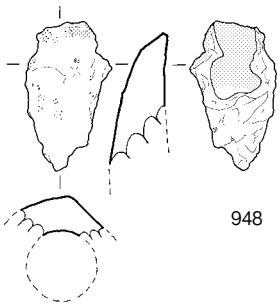


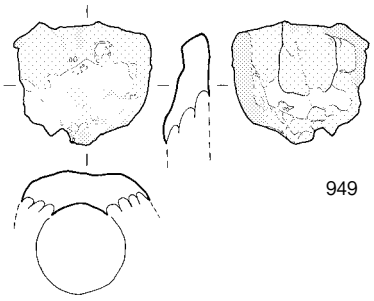


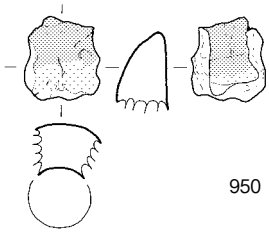


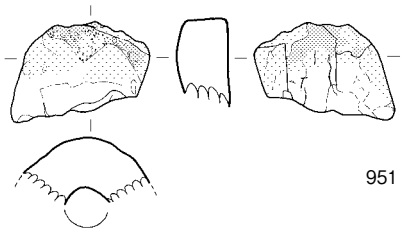


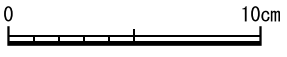












第112図　羽口

第Ⅲ章　まとめ

第１節　土器の製作技術と土器様相

１．土師器坏の製作技術と型式変遷

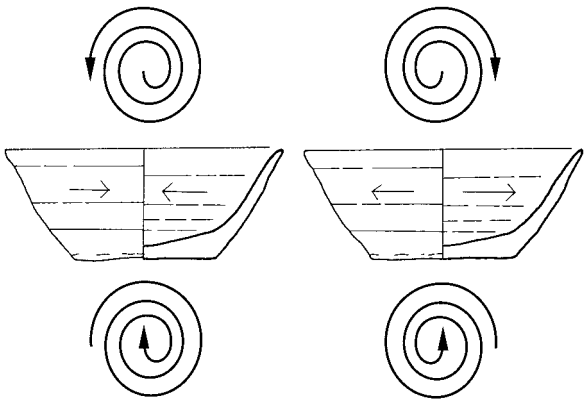
高篠遺跡では多くの土師器坏が出土したが，南九州の坏と対比すると，形態差の少ないことが指摘できる。つまり，限定された時期幅が想定され，時期的検討に有効な資料であるといえる。

また，坏の観察では製作方法に着目し検討した結果，特徴的な点を抽出できた。

そこで，まず第１に，坏の製作方法として，回転台の回転方向について検討する。第２に，坏の変遷を明らかにするため，形態と製作技法に着目する。土師器坏の変遷とその学史については，中村和美による詳細な検討がある(中村和美1994・1997)。今回の新たな視点は，中村の指摘した底部の切り離し技法や体部や底部の形態，法量，調整法の中で特に製作技法について追求を深めたことである。土師器坏のように比較的単純な形態は，わずかな差によって異なった類型に当てはめてしまう危険性がある。一方，製作技法は製作者の属する集団の規範，規制を強く反映することが予測される。そのため，形態分類よりも確実に地域差・時期差，製作者による違いを表出させる可能性が高いと思われる。よって，製作技法と形態分類をリンクさせながら型式組列を試みる。

(１)回転台の回転方向について

回転方向を明らかにするために，①底部ヘラ切り痕の回転



第113図　土師器坏の砂粒の動きと渦巻状痕

方向，②見込みのナデの回転方向，③体部内外面のナデによる砂粒の移動を観察した(第113図)。

①は回転台が時計回りに回転した場合，痕跡は渦巻きが外から内側に時計回りとして残り，反時計回りの場合は逆の痕跡が見られる。②も同様で回転台が時計回りに回転した場合，痕跡は渦巻きが外から内側に時計回りに，反時計回りの場合は逆の痕跡が見られる。一方，③ナデ或いはケズリによる砂粒の動きは，時計回りに回転台が回転した場合は正面からみて外面が右方向に，内面が左方向に移動する。半時計回りの場合は反対で外面が左方向，内面が右方向に移動する。

第62表は，本遺跡で観察された結果をまとめた。

観察した３か所の属性の様相は，ほぼ共通した結果を示し，８～９割が時計回りの回転である。おそらく，製作者は回転台を利き手で手前に引いて回転させ，時計回りと半時計回りの比率は即，右利きと左利きの差を示すと思われる。同様の傾向は，土師器甕の内面の削り調整でも認められる。内面のケズリは，体の正面に甕をおいて下から上に斜め方向に工具を掻き上げたと思われ，右利きの場合は左斜め上方向に，左利きの場合は右斜め上方向に削られる。また，水平方向のケズリの場合は右利きの場合が，右から左に向い，左利きの場合はその反対に砂粒が動く。本遺跡の土師器甕の傾向をみるとほぼ９割が右利き，１割が左利きで，土師器坏と同様の結果を得た。

以上から，本遺跡の土師器坏は，回転台を時計回りに回転させるという定式化した規範，規制を指摘できる。ただ，利き腕に関しては統一されないことから，その規範，規制は，回転台に対して利き腕の方を手前側に引く，もしくは利き腕の反対側の手を外にはらう(押出す)ことが指摘できる。

第62表　土師器坏の砂粒の動きと渦巻状痕の観察表

底部ヘラ切り		見込ナデ		砂粒の動き(外)		砂粒の動き(内)	
時計回り	反時計回り	時計回り	反時計回り	右方向	左方向	右方向	左方向
19	2	36	4	25	7	4	15

(２)土師器坏の型式組列

まず，高篠遺跡土師器坏で認められた形態・製作技法の特徴を以下に列挙する。

①底部は平底を呈し，充実高台，円盤状底部は少ない。

②底部外面の調整はほとんどにヘラ切り痕を残すが，底部調整としてのナデは必ず施されている。

③体部外面には回転ナデが認められるが，下端付近はナデきれず，工具痕を残す。

④回転ナデによる凹凸は浅く，ナデ幅は均等でない。また体部外面下位から上位にかけてナデ幅が広くなるような規則性は感じられない。

⑤体部は直線的に立ちあがるものと，若干曲線を持つものがある。

⑥口縁端部は細くすぼまり，全体的な器壁も薄い。

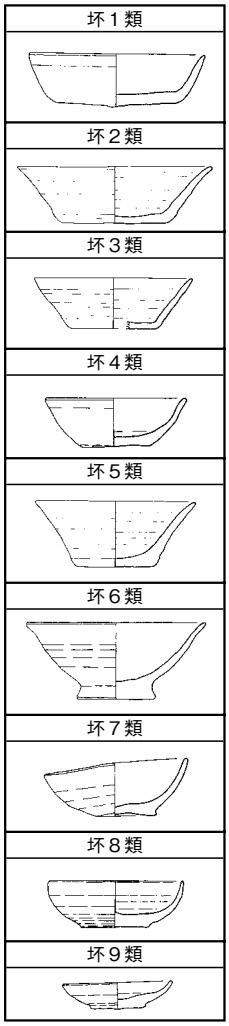
⑦大きく橙色系と浅黄橙色系の，２種の色調が認められる。

③については，工具痕の上位が回転ナデで消されることや，底部ヘラ切で，はみ出た粘土が工具痕の上に張り付いていることから，まず，工具で形を整え，回転ナデで調整した

と考えられる。体部外面下端の調整が充分でないことは，土器の立ち上がりの傾斜が緩いこと，回転台上と製作地点とに十分な間隔がなかったことに起因すると思われる。ただ，丁寧な調整を行う意識があれば，土器を回転台から切り離した後でも体部外面下端をナデることは可能である。しかし，本遺跡では未調整か，調整しても工具痕は完全に消されていない。したがって，切り離し時点で粘土の乾燥が進行していたこと，製作工程の簡略・省略化を指摘できる。

④については，回転ナデが水挽き成形ではなく，器面調整であったために必要以上に強くナデる必要がなかったと推測される。また，土器の乾燥が進行していたことから深いナデを施なかった可能性もある。さらに，ナデ幅が不規則なのは１回の回転で整形を完了しないで，数回に及んだ可能性が考えられ，粘土の乾燥進行状況や回転台の性能的な課題が想起される。

次に，土師器坏の形態分類を行い，型式を設定する。



第114図 土師器杯分類

坏１類から坏９類に分類し，取り扱う対象は，底部外面にヘラ切り痕の認められるものとし，糸切りは対象外とする。

坏１類

口径に対し，底径が大きく箱型を呈する。8世紀後半の須恵器坏の模倣形である。

坏２類

口径13～16cm，底径５～８cm，高さ４cm前後で，坏１類に比べて体部の傾斜が緩い。

坏３類

口径10～13cm，底径５～７cm，高さ４cm前後で，坏２類に比べて若干小型で，体部は直線的である。

坏４類

口径10～13cm，底径５～７cm，高さ４cm前後で，体部が曲線的に立ち上がる。

坏５類

口径10～13cm，底径５～７cm，高さ５cm前後の器高の深いもので，体部は直線的である。

坏６類

いわゆる充実高台である。大型で椀に分類することもできるが，円盤状底部との関わりのため取上げる。体部は直線的に立ち上がるものと曲線的なものの両者が認められる。

坏７類

円盤状の底部を持ち，口径10～13cm，底型５～７cm，高さ４～５cmで，体部は曲線的である。

坏８類

円盤状の底部を持ち，口径10～13cm，底径５～７cm，高さ３～４cmで体部は曲線的である。坏7類よりも器高が低い。

坏９類

円盤状の底部を呈し，口径10～13cm，底径５～７cm，高さ２cm以内で皿に分類される。口径10cm内のものも認められる。系譜的に，坏との関連が想定されたので取上げる。

以上の形態分類に対して，上記の高篠遺跡出土坏の特徴を参考にして以下の製作技法に注目する。

①底部ヘラ切り後の，ナデ等による調整の有無。
②体部外面下端における回転ナデで，ナデきれていない部分の有無。
③回転ナデによるナデの深さが，深いタイプと浅いタイプ。
④回転ナデのナデ幅が下から上にかけて，徐々に広くなるタイプとそうした規則性の認められないタイプ。
⑤器壁が厚いタイプと薄いタイプ。
⑥見込み部がナデによって凹むものと水平なもの，また，中心部が盛り上がるタイプ。

県内の状況から属性分析をしたのが第63表である。

まず，体部外面のナデの有無，ナデの浅いもの，器壁の薄手のものからは，坏1～６類と坏７～９類に大きく２分される。坏１～６類の中で，器壁の厚手のものや見込みの凹むものが坏４～６類に抽出できることから，さらに細分できる。

次に，坏１類～３類は，体部外面下端など製作技法の簡略化と法量の小型化を考慮すれば，坏１類⇒坏２類⇒坏３類への組列が考えられる。坏４～坏６類は，まず体部外面下端の未調整の有無で坏４・坏５類と坏６類に分けられ，この点では坏６類は坏７類以下と類似する。坏４類と坏５類は，組列が難しいが体部外面下端の未調整は坏４類が顕著である。

よって体部形態を考慮すれば坏５類⇒坏４類となり，調整技法を考慮すれば，坏４類⇒坏５類が推測される。

坏７類～坏９類は，製作技法上は違いが認められない。

以上の製作技法の変遷からは，坏１類⇒坏２類⇒坏３類⇒坏４類・５類⇒坏６類⇒坏７～９類が想定される。

一方，形態からは，坏１類は８世紀後半の須恵器高台付坏に類似し，組列として坏１類から坏２類への変遷が，一方，坏７～９類は，器高が徐々に低くなる変化を指摘でき，坏７類から坏９類への変遷が想定できる。

第63表　土師器坏属性分析表

型式	底部(外)	体部下端(外)			ナデ		ナデ幅		器壁		見込み	
	ナデ	ナデ	未調整		浅い	深い	a	b	薄手	厚手	水平	凹む
坏1類	○	○			○		○		○		○	
坏2類	○	○	○		○		○		○		○	
坏3類	○	○	○		○		○		○		○	
坏4類	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○
坏5類	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
坏6類	○	○			○	○	○	○	○	○		○
坏7類		○				○		○		○		○
坏8類		○				○		○		○		○
坏9類		○				○		○		○		○

以上，製作技法と形態から組立てられる土師器坏の型式組列は，坏１類⇒坏２類⇒坏３類⇒坏4類・坏5類⇒坏６類⇒坏７類⇒坏８類⇒坏９類が指摘できる。なお，坏６類は形態分類で指摘したように法量からは椀としても理解される。

よって，坏４・坏５類と坏７類との関わりの中で他形式として共伴が想定される。

次に，それぞれの型式の出土状況をみてみる。

坏１類単独で構成する遺跡に，指宿市宮ノ前遺跡と鹿屋市宮の脇遺跡がある。他の類型との共伴では，川内市計志加里遺跡，金峰町小中原遺跡，溝辺町石峰遺跡等多数である。

坏２類や坏３類を単独で構成する遺跡は存在しない。

坏２・坏３類が主体で，坏１類や坏４，坏５類と共伴する遺跡に高篠遺跡，蒲生町竹牟礼遺跡，福山町中尾立遺跡がある。

坏４・坏５類を主体とする遺跡が，末吉町井出ノ上遺跡，鹿屋市榎崎Ｂ遺跡で，これらの遺跡では，底部がわずかに突出したものが多くみられる。他に注目されるものとして，中尾立遺跡や末吉町土合原遺跡では，坏５類に低い高台を付けるものがあり，円盤状の底部と形態上見分けがつかない。これらは，充実高台の出現を知る上で重要である。

坏６類を主体とする遺跡は現状では認められず，多くは坏５類や坏７類に伴う。

坏７類を主体とする遺跡は，東市来町市ノ原遺跡第１地点で，若干坏８類を含む。

坏８類を主体とする遺跡は，川内市鍛冶屋馬場遺跡で，若干坏７類と坏９類を含む。

坏９類を主体とする遺跡に，東市来町犬ヶ原遺跡，鹿屋市榎崎Ａ遺跡がある。

このように坏２・３類や坏４・５類を細分するような良好な一括資料は認められないが，先に検討した型式組列はおおよそ検証した。

最後に，土師器坏の変遷から看取される製作技法上の画期とその背景にある変化の方向性について指摘したい。

まず，坏１類の段階は全体的に丁寧な調整が行われている。体部外面下端の工具痕も丁寧に消し，底部外面も丁寧なナデが施される。続く，坏２類は一部に工具痕を残すようになるが，比較的丁寧さは保っている。坏３類は徐々に工具痕が目立ちはじめる。このように，坏１類から坏３類にかけては調整技法の省略化が指摘できる。また，形態は13cm以上の大型のものから，13cm前後のものへの小型化が指摘できよう。

続く坏４類と坏５類は，坏３類までの属性を多くもつものと坏７類以降に類似するものがあり，過渡的な様相が伺える。

坏６類や坏７類以降では，器壁が厚く，ナデの深いものが確認され，体部外面下端の工具痕が認められなくなる。これらの属性は製作技法上お互いに関わりがあり，坏５類以前と，坏６・坏７類以降に画期が指摘できる。

坏５類までは体部外面に工具痕が認められるものがあり，上記したようにまず第１段階に工具を用いた成形が，第２段階に回転ナデによる器面の整形が考えられる。また，ナデが体部外面下端まで届いてないのは回転台と作業地点との幅が狭かったことを指摘できる。一方，坏７類以降は，回転ナデが確実に体部外面下端から認められ，体部の傾斜は坏５類までよりも緩く，曲線をもって立ち上がる。体部外面下端のナデの上には，部分的にヘラ切りによってはみ出た粘土が付着していることから，土器の切り離し後に施したナデ調整ではなく，体部成形時のナデが指摘される。体部成形時のナデが下端から丁寧に認められるということは，坏５類までとは異なり回転台と作業地点の幅が十分にあったことが指摘できる。また，これらの底部外面が円盤状を呈することからは，坏６類以降に粘土塊を円柱状にした上で水挽きによって一気に成形を行った可能性がある。一気に成形が行われた可能性を示すものとして，見込みの凹みが指摘でき，また，見込みの凹みによる貫通を防ぐために，ある程度の余裕をもってヘラ切りをした結果が円盤状底部の出現として考えることも可能であろう。また，水挽き成形への変化に際して回転台の改良が十分に伴わなかったことが，器壁の厚さやナデの深さの変化として想定することもできる。坏７類以降は体部外面の下から上にかけて，徐々にナデ幅が広くなるものが顕著となるが，これは，1回の回転で口縁端部まで水挽きした結果であろう。坏７類以降は，坏製作の簡略化が器種組成の変動と関わりながら坏９類へと変遷していく。

なお，底部外面の調整は，坏７類以降ほとんど認められなくなる。これも製作技法の省略・簡略化として指摘できる。

２．黒色土器坏・椀の製作技術と型式変遷

本遺跡の黒色土器は椀類が多く，坏類は少数であった。

製作技法上は，椀類が外面にまでヘラミガキの認められるものが多いのに対して，坏類は外面にケズリ痕を残す資料が多かった。この項では，第１に，体部外面に認められるケズリ痕について，ケズリによる砂粒の動きから製作技法を検討する。第２に，時期的変遷を土師器坏と同様，形態分類と製作技法との関わりから検討する。

(１)体部外面のケズリ調整について

土師器坏の検討では，回転台の回転方向が時計回りであることを指摘した。その場合，ケズリなどによって体部外面に認められる砂粒の動きは右方向であった。一方，黒色土器外面のケズリによる砂粒の動きの観察からは10点中10点に左方向への移動が認められ，土師器坏の場合とは逆である。このことから想定されるケズリ調整は，底部切り離し前に施されたものではなく，切り離した後に土器を反対にして器面を調整したためについた痕跡であることが指摘できる。そして，こうしたケズリは黒色土器の中でも特に体部が曲線的に立ち上がるタイプに多く，器形を整えることを目的としていた可能性が想定される。

(２)形態分類と調整技法の時期的変遷について

黒色土器の形態変遷には，森隆の論考がある(森隆1989)。

ここではまず，森氏の分類との関わりを明確にして形態分類を以下に示す。なお，分類は報告文と同様に高台付きを椀，高台なしの平底を坏とする。分析は椀を中心とするが，森氏の論考では坏も検討対象になっており，また本遺跡でも坏と椀の関係において，森氏の指摘に類似した傾向が伺えることから坏も分析の対象とした。本遺跡では皿も出土しているが，この項では取り扱わない。

坏１類

黒色土器坏は，森氏の分類の黒色土器Ⅰ類になる。森氏はⅠ類が「器形的には平底無高台の底部より体部が内弯しながら浅く開く」とし，調整技法として「器表面の内外に回転力を利用しない手もちの緻密なヘラ磨きを加える」としている。本遺跡では，森氏の指摘するように坏に外面のヘラミガキが認められ，椀にはないか，あっても外面のごく一部分である。よって，坏１類は森氏のⅠ類に相当するといえる。ただ本遺跡では，体部外面にヘラミガキの認められないものや直線的な体部で深手のものもあり，森氏のⅠ類よりも若干広い時間幅が想定される。

椀１類

体部は直線的に立ち上がり，高さの低い高台がつく。高台端部は，面をもつか若干丸みをもつ。森氏分類のⅡ類である。

椀２類

体部下位は丸みをもって立ち上がり，上位は直線的に外側に広がる。高台は椀１類と同様に高さが低く，端部に面を有するものが主体である。

椀２類は，高台の形状からみると森氏のⅡ類に類似するが，体部下位が丸みをもって立ち上がる点はⅢ類に近い。足高の高台は認められない。なお，体部上位が直線的に立ち上がるものと曲線的なものの2例に細分される。

椀３類

体部は直線的に立ち上がり，足高の高台がつく。高台は，先端に向かって細くすぼまる。このタイプが森氏の指摘した，南九州で10世紀代まで存続したⅡ類である。出土数は少ない。

椀４類

体部が曲線的に立ち上がり，口縁部付近で外反する。高台も外反気味に長くのび，端部は細くすぼまる。見込みは凹み深手である。

高台が足高である点では森氏のⅢ類と同じであるが，体部や高台の形態からはⅢ類と若干異なる。

椀５類

体部がゆるやかに丸みをもって立ち上がり，半球形を呈する。口縁部付近でわずかに外反するものも認められる。椀４類に比べて浅い。高台は足高で外方に開く。体部の形態は森氏のⅣ類に近いが，高台の形態や口縁部の外反が顕著でない点はⅣ類と相違する。

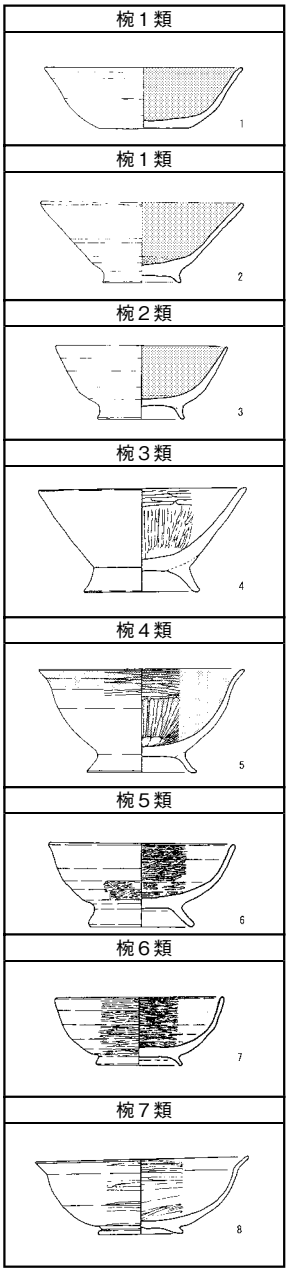
椀６類

体部がゆるやかに丸みをもって立ち上がり，半球形を呈する。椀５類とは高台が低くなる点で相違する。森氏の分類のⅣ類とほぼ共通するが，口縁部に外反が顕著でない点が相違する。

椀７類

体部がゆるやかに丸みをもって立ち上がり，口縁部付近で外反するものとそのまま丸くおさめるものがある。椀６類よりも体部は開き気味である。

森氏のⅣ類に相当する。



第115図 黒色土器坏・椀分類

以上の形態分類に対して，製作技法として以下の属性に注目する。

①外面の調整

a…横方向のヘラミガキ

b…放射状のヘラミガキ

c…回転ナデ(一部ヘラミガキあり)

d…ケズリ痕をのこす(一部ヘラミガキあり)

e…緻密なヘラミガキ，断続的なヘラミガキがある

②内面の調整

1…放射状の暗文

2…見込みの平行のヘラミガキ

③底部外面の器面調整

Ⅰ…高台との接合付近のみにナデ調整をする

Ⅱ…底部外面中央まで回転を用いた丁寧なナデを施す。

Ⅲ…底部外面中央にまでヘラミガキを施す。

分析結果は，第64表のとおりである。各型式と製作技術の変遷を確認すると，まず製作技法からは，体部外面に丁寧な

第64表　黒色土器坏・椀属性分析表

型式	外面					内面		底部外面		
	a	b	c	d	e	1	2	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
坏１類	○	○				○				○
椀１類			○	○		○		○		
椀２類			○	○		○		○		
椀３類			○			○		○		
椀４類			○			○			○	
椀５類			○				○	○		
椀６類			○				○	○		
椀７類					○		○			○

ヘラミガキが認められる坏１類が古く位置付けられる。８世紀後半代に遡るとする，森氏の指摘にほぼ附合するものと思われる。ただ，その時期の良好な一括遺物は，鹿児島では認められない。本遺跡の場合は，口縁部まで認められるものからは器高が高く，9世紀代まで下る可能性がある。

椀１類は，森氏の指摘によると坏１類におとらず古い段階から認められ，存続期間は坏１類よりも長い。鹿児島県内では，こうした傾向を検証するだけの明確な一括資料は現段階では認められないが，坏１類で若干新しい傾向をもつ本遺跡において，坏１類と比較して椀１類の出土数が多いことからは肯定し得る。福山町の中尾立遺跡が，坏１類と椀１類を主体的に出土している。

つづく椀２類は，体部が直線的から曲線的に立ち上がるようになる過渡的形態を呈し，椀１類に続く段階といえる。外面調整もヘラミガキの認められる事例がほとんどなくなり，ケズリが比較的顕著になることからも製作技法の変化が看取される。本遺跡では，坏１類と椀１類，椀２類を主体的にもつ。

椀３類は，栗野町猪ノ丸遺跡などで認められるがその数は少ない。一方，同形の土師器椀は比較的多く認められることから器種による違いが指摘できる。

椀４類は，体部外面の調整が回転ナデである。内面には放射状のヘラミガキが認められる。底部外面は，高台を張り付けた後に中央から高台端部にかけて回転台を用いた丁寧なナデが認められ，渦巻き状のナデ痕を残すものが多い。市来町市ノ原遺跡第１地点で，多量に確認できる。

椀５類は高台が椀３類，椀４類と類似するのに対し，体部の形態が半球形を呈する点や外面にヘラミガキの増える点は椀６類以降と類似する。以上からは，椀４類⇒椀５類⇒椀６類への型式組列が認められる。

続く椀６類は，高台が低脚化する。外面のヘラミガキは椀５類とほぼ同様に椀４類以前よりは顕著なものの，続く椀７類に比較して乏しく，器面に光沢をもつほどのヘラミガキは認められない。内面には放射状のヘラミガキがなくなり，側面に横方向，見込みに平行のヘラミガキが認められる。川内市鍛冶屋馬場遺跡に，椀６類の良好な資料が認められる。鍛冶屋馬場遺跡では，他に椀６類を主体としてわずかながら椀５類も認められる。一方，後出する椀７類は認められない。

椀７類は川内市上野城跡，東市来町犬ヶ原遺跡，上加世田遺跡土壙墓で認められる。上野城跡の様相からは11世紀～12世紀の中世にまで継続する。外面には丁寧なヘラミガキが施され，断続的なヘラミガキも認められる。光沢が認められるほどの丁寧なヘラミガキで底部外面にまで及んでいる。

以上から，黒色土器ではおおよそ体部が直線的に立ち上がり，高台の短いものから体部が曲線的に立ち上がり，高台の長いものに変遷し，続いて，深手から浅手への変遷の中で高台の低脚化，外面ヘラミガキによる器面調整へと変遷していくことが指摘できる。こうした中で，森氏が指摘した直線的な立ち上がりをもつタイプは，黒色土器においてはほとんどなく，鍛冶屋馬場遺跡など複数の遺跡では，土師器椀において認められる。

３．土師器甕の製作技術と形態変遷

(１)属性分析と類型の変遷

本遺跡の土器様相における特徴の1つとして，甕の多さが挙げられる。食膳具に比べて種類も豊富であることから分類が可能で，分類基準は報告文において提示した。この項では，これら諸類型において形態と製作技法，色調，胎土に注目し型式組列を試みる。なお，型式組列では小型例や鉢など形式差と考えられるものは取り扱わず，よって甕１類から甕８類までを対象とする。

注目する属性は，まず形態として胴部形態，口縁部の長さ，器壁の厚さを取上げる。製作技法は，外面調整と内面上位のケズリの方向，ケズリ上端の特徴を取上げる。色調は，橙色と浅黄橙色と褐色を基準とし，胎土は，砂粒を多く含むものと精緻なもので分類した。

第65表は，それぞれの属性を示した。これによると，各類型における各属性はまったく独自的な変遷を示すのではなく，お互いに関連しながら変化していることが指摘できる。また，こうした変化が段階的であることからは，分類が地域性ではなく時期差を示している可能性がある。

まず，想定される変遷としては組列の片方に甕1類が，もう片方には甕6類或いは甕８類が指摘できる。甕１類を基準に変化の方向性をみると，形態は胴部が張るタイプからまっすぐになるタイプ，口縁部は長いタイプから短いタイプ，器壁は薄いタイプから厚いタイプに変遷する。一方，調整技法は，外面において縦ハケの後に回転を用いた横ハケを施すタイプから，横ナデを胴部上位に施すタイプ，そして，外面に指押さえを多く残し，いびつな形態になるタイプへ

第65表　土師器甕属性分析表

類型	胴		口縁		器壁		外面		ケズリ上端			ケズリ方向		色調			胎土	
	張る	直線	長	短	薄	厚	ハケ	ナデ	不揃い	揃える	稜線	斜	水平	橙	浅黄橙	褐	礫多い	精緻
甕１類	○		○		○		○		○			○		○			○	
甕２類		○	○		○		○		○			○		○			○	
甕３類		○		○	○			○	○			○						○
甕４類		○		○	○		○	○	○			○		○			○	
甕５類		○		○		○		○	○	○		○			○	○		○
甕６類		○		○		○		○	○	○			○			○		○
甕７類		○		○		○		○			○		○		○	○		○
甕８類		○		○		○		○			○		○			○		○

の変遷が想定される。内面調整はケズリを斜め方向に施し，上端をそろえないタイプから，上端をそろえ，上位のケズリを水平に施すタイプ，そして，上位のケズリを水平に施し，胴部と口縁部の境に明瞭な稜を形成するタイプへの変遷が想定される。こうした内面調整の変遷は，胴部の形態と密接に関わっている。胴部の張るタイプでは斜めにケズリを施しているが，ケズリの上位は口縁部との境よりも若干低い場所である。上端を水平にそろえようとすれば，口縁部との境付近は土器が弯曲する部分であることから窮屈である。一方，胴部がまっすぐな場合はケズリを底部内面から手前に施した場合，自然と上端は水平に近くなる。また，視覚的にもケズリ調整が目立ち気味になり，上端を水平にそろえようとする意図がはたらいた可能性は十分にある。変遷では，ケズリ調整よりも若干形態の方が早く変化を遂げていることから，ケズリ調整は形態変化に伴って変化していったことが指摘できる。

色調は，おおむね橙色⇒浅黄橙色⇒褐色への変化が認められる。胎土は橙色に多く礫が含まれており，浅黄橙色は比較的精緻で，褐色も精緻で若干，砂粒，石英を含む。

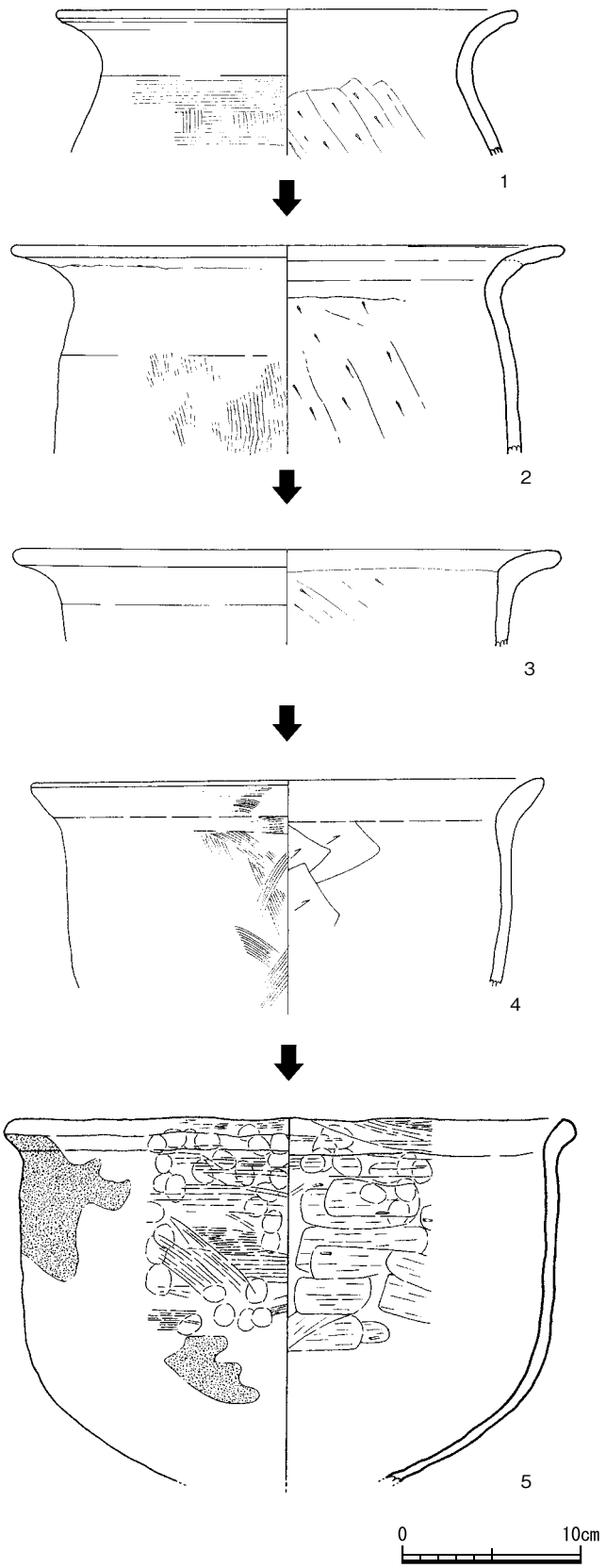
(2)各遺跡の様相

上記で指摘した型式組列に対し，出土状況からの検証を加える。取上げる遺跡は，土師器坏と黒色土器坏・椀の検討において指摘したものを中心に，時期の明らかな金峰町小中原遺跡，菱刈町山下遺跡，栗野町山崎Ｂ遺跡，福山町永磯遺跡，財部町踊場遺跡・九養岡遺跡，市来町市ノ原遺跡，川内市鍛冶屋馬場遺跡である。

まず，小中原遺跡では，甕５，甕７，甕８は本遺跡と共通するが，甕1，甕２は存在しない。代わりに外面調整に縦ハケを施し，橙色及び浅黄橙色を呈する軟質の甕が存在する。胎土に角閃石を含み，砂粒は小さく精緻で，甕５，甕７，甕８と比べて器壁が薄く，口縁部も長い。また，調整もハケを主体とするものが多く，内面のケズリ上端もそろえていない。これらの特徴からは，本遺跡の甕１，甕２に対比できると考えられる。褐色を呈するものは本遺跡ではハケが認められなかったが，若干ハケの施されるものも存在する。

山下遺跡と山崎Ｂ遺跡では，小中原遺跡同様に甕５～８が共通するが，甕１，甕２は存在しない。これに代わるものとして，黒色鉱物等の細かな挟雑物を多く含み器面がザラザラした甕や赤褐色の甕で，口縁部が長く，外面調整に横ハケを施し，内面のケズリはそろえず，器壁の薄い特徴をもつ。口縁端部に面を持つ相違点もあるが，本遺跡出土の甕1，甕２に相当すると思われる。

永磯遺跡，踊場遺跡，九養岡遺跡では，甕３を除いて全て認められる。甕１，甕２では，横ハケや内面調整とともに胎土や色調，土器質などで共通する。また，甕５や甕７などの褐色を呈するタイプも共通して認められる。これらの様相から，同じ土師器甕の分布地域として括ることが可能である。なお，若干，踊場遺跡では高篠遺跡にない口縁部形態をもつタイプが認められる。



第116図 土師器甕型式組列

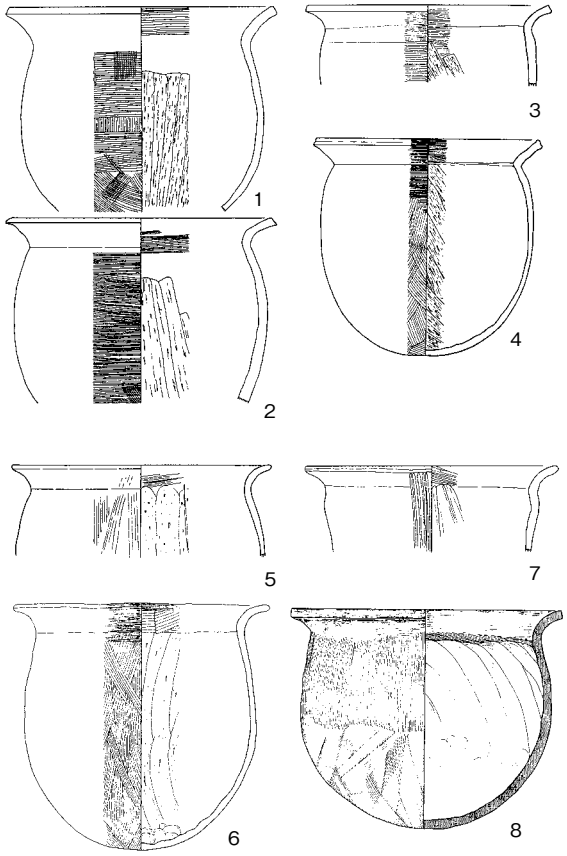
１．２．３＝高篠遺跡
４＝市ノ原遺跡第1地点
５＝鍛冶屋馬場遺跡

市ノ原遺跡第１地点からは，甕5，甕６，甕７，甕８が本遺跡と共通し，甕１，甕２類やそれに類似する事例は指摘できない。また，口縁部付近は若干凹凸があり，相対的に甕６類や甕８の割合が高い。

鍛冶屋馬場遺跡では，甕６，甕８が主体である。市ノ原遺跡第１地点同様に，口縁部付近は凹凸があり，指押さえが顕著である。また，口縁部の短いものが目立つ。

甕８を主体とする犬ヶ原遺跡も同様で，口縁部付近は凹凸が目立ち指押さえが顕著で，口縁部は短い。

以上の結果から，褐色を呈す甕５～８類で構成される遺跡は，県内に複数存在するのに対し，甕１～甕４類で構成する遺跡は皆無である。また，橙色を呈する甕１類，甕２類を持つ遺跡は，永磯遺跡や踊場遺跡，九養岡遺跡など本遺跡周辺に限られる。これに対し，甕５類～甕８類を持つ遺跡は，薩摩半島も含め鹿児島の全域で確認される。一方，甕５類～甕８類の単独の遺跡は，土師器坏や黒色土器坏・椀の検討から，市ノ原遺跡第1地点や鍛冶屋馬場遺跡等を抽出でき，これらは，本遺跡より時期的に新しい位置付けができる。



第117図 土師器甕の地域性

１・２=山崎B遺跡(栗野町)
３・４=山下遺跡　(菱刈町)
５　　=西ノ平遺跡(川内市)
６　　=薩摩国分寺(川内市)
７　　=小中原遺跡(金峰町)
８　　=屋形原　　(川内市)

(３)土師器甕の変遷と歴史的な評価

土師器甕の検討の最後に，変遷とその歴史的評価について言及したい。まず，本遺跡甕の古段階では胴部が張り，器壁が薄く，口縁部が長い特徴を持つ。また，胎土には砂粒が多く含まれ粗い。器面調整は外面に横ハケが，内面には上端をそろえない斜め方向のケズリが施される。色調は橙色を呈し，光沢をもち堅緻なものが多い。そして，こうした特質を全てもつ類例は本遺跡周辺に限られる。

外面に横ハケを施す土師甕は鹿児島県内では菱刈，栗野町周辺以外にはほとんど認められず，多くは縦ハケを施している。一方，県外では宮崎市やえびの市，都城市等で多く認められる。県内では菱刈町，栗野町，本遺跡周辺に限られる。本遺跡の所在する財部町や菱刈町，栗野町が日向に近いことを考慮すると，これらの地域と日向との関わりが想起される。ただし，上記の分析で指摘したように，菱刈･栗野町周辺と高篠遺跡周辺では土器の胎土，口縁部形態，色調で大きく異なることから，両地域は横ハケを施す点で共通するものの，小地域性として区分される。

本遺跡では，橙色を呈するものから浅黄橙色のものを経て褐色のものに推移する。褐色のタイプはまっすぐな胴部をもち，口縁部が太く，器壁が厚い。また，胎土は比較的精緻で器面調整は胴部外面上位に横ナデ，内面のケズリは上端をそろえ，上位は水平方向のケズリが看取される。こうした，褐色を主体とする遺跡は，市ノ原第１地点や鍛冶屋馬場遺跡で確認され，土師器坏や黒色土器坏・椀の検討では高篠遺跡よりも新しい時期の遺跡と認定できる。また，地域的にはそれ以前のタイプが各地域で地域性を有していたのに対して，褐色のタイプは鹿児島県全域で確認できる。このことから，褐色のタイプへの変遷は県内で土師器甕が斉一化する現象として評価される。その画期については，本遺跡で褐色のタイプが多く認められることから，土師器坏に製作技法の画期が認められる時期より若干さかのぼるものと考えられる。充実高台の時期を９世紀後半と想定すると，それ以前の９世紀中頃～後半に位置付けられる。鹿児島県内に班田制がしかれるのは９世紀初頭であるが，それから半世紀を経て土師器甕に斉一化が認められることは，当時の鹿児島県内の社会的状況を土師器甕が内包していると評価したい。

４．本遺跡出土須恵器の製作技術と菱刈町岡野窯跡との比較について

高篠遺跡における須恵器貯蔵具は，土師器甕と比べ極めて少量である。この項では，本遺跡須恵器の特に，壷・甕の製作技法及び形態の特徴を指摘する。そして，９世紀代に想定される菱刈町岡野窯の灰原，３号窯，５号窯出土例との比較を試み，共通点と相違点を指摘する。

(１)高篠遺跡出土須恵器壷・甕・坏の特質

①壷

壷で特筆すべきは，胴部の成形・調整技法である。

本遺跡の胴部は９点で，南九州で一般的なタタキが無く，外面にはケズリやナデ，カキ目，ヘラミガキが施される。こうした整形が，タタキを消して施された可能性も考えられるが，内面に凹凸が残されていない。本遺跡では，底部から胴部下端にかけて不整方向のナデ，上位には回転台を用いたナデが認められ，タタキは使用していないと判断できる。内面調整からは，回転台を用いた成形あるいは輪積みによる成形後の器面調整が想起される。また，報告文中で指摘した746は，胴部にカキ目が密で，底部外面にまで及んでいる。このようなカキ目を残す壷は県内では，わずかに菱刈町岡野窯やそこから比較的近い栗野町山崎Ｂ遺跡で知られている。岡野窯とは，食膳具に火襷状の椀が存在する点でも共通し，本遺跡の須恵器が岡野窯から搬入された可能性も高い。この点については，岡野窯との比較の項で触れたい。

その他の特徴も，いくつか指摘しておきたい。

まず，頸部から口縁部にかけては，胴部を成形した後に，時間をおき，口縁部以上を製作している。その成形方法は，次の２者が想定される。1つは，胴部上端まで一旦成形を行った後で，再び水挽きによって口縁部を作り出す方法で，この場合，内面は胴部から口縁部にかけて丁寧なナデが認められる。本遺跡で観察される３点中２点で認められる(745, 746)。２つ目は，頸部と口縁部を別々に成形し，最後に胴部と接合する(743)。この場合，胴部と頸部の境は調整が行き届かず，境に粘土が突出気味に下方にはみ出て残される。この，胴部と頸部の接合で興味深い資料が，746で，胴部と口縁部で胎土を変えている(写真図版67)。胴部は鉱物を含む粗い胎土を用い灰色を呈するのに対して，頸部から口縁部は精緻な胎土で明褐灰色を呈している。同一個体で胎土を違える手法は，黒色土器でも知られ，菱刈町周辺では高台が褐色，体部が浅黄橙色を呈する事例が多い。高台に硬質な褐色の胎土を使用した目的は，装飾より実用的な意図があったと思われる。本例で，胴部に粗い土を用いることはひび割れ防止上有効で，菱刈町周辺と本遺跡と共通する。なお，本遺跡でも，黒色土器に高台と体部で胎土が異なる資料が１点存在するが，高台の色調は菱刈町周辺のものとは異なる。

次に，形態について指摘したい。本遺跡では，胴部肩の張りが強く屈曲が稜線状になるタイプと，曲線になだらかに屈曲するタイプが存在する。先学の検討では，肩部の張るものから曲線的に屈曲するものへの変遷が，8世紀末から9世紀と指摘され(金田明大 2001)，本遺跡は変化期に相当すると言える。

最後に，突帯付壷について若干触れたい。本遺跡では，肩部に１条の突帯を巡らす壷を１点確認した。県内では，胴部屈曲部に断面三角形の突帯を持つものとして菱刈町山下遺跡，西ノ平遺跡がある。一方，胴部屈曲部から口縁部に傾斜する中途に突帯を持つものに西ノ平遺跡，成岡遺跡，栗野町山崎Ｂ遺跡がある。後者は前者に比べ突帯が小さく，断面も丸みを帯びる。本遺跡の場合，突帯の位置は後者に属するが貼り付ける位置は西ノ平遺跡や成岡遺跡に比べて下位にある。また，突帯の断面三角形は明快で前者に近い。前者から後者への変遷を想定すると，本遺跡はその中間に位置付けられる。

②甕

甕の器面調整は，タタキ板と調整方法にいくつかの種類が認められる。タタキ板に関しては，外面で平行タタキ痕と格子タタキ痕がある。調整方法は，内面上位の当具痕に同心円の中心部を持つものと持たないものがあり，当具の当て方や大きさが推測される。また，胴部下位には平行タタキが認められ，タタキ痕は縦位と横位がある。また，タタキ後に，回転のナデやカキ目を施す，丁寧な調整もある。さらに，色調や器壁にも特徴を見せ，焼成や成形段階の特異性も保持し，少ない資料にも関わらず豊富な形態差が指摘される。

③坏

坏は焼成に特徴があり，須恵質をした還元色のものから土師質の軟質なものまで，様々な焼成状態と色調が見られる(図版54)。酸化状態の坏は，土師器坏との判別が困難であるが，回転ナデ等で丁寧な調整が施される。坏で特筆されるのは，備前焼風の火襷が顕著に存在することである。火襷は，焼成時に釉着を防ぐために施された植物繊維痕跡と考えられ，同様の資料は，鹿児島県内に散見され，菱刈町岡野窯でも確認される。上述した須恵器壷の胴部カキ目の類似点も含め，岡野窯との比較が重要となる。そこで，次に，岡野窯出土須恵器の特徴を指摘し，本遺跡須恵器との比較を試みる。

(２)岡野窯須恵器の特徴と高篠遺跡須恵器の比較

岡野窯は４基の窯が発掘されたが，遺物を確認したのは３号窯と４号窯の２基と灰原である。以下では，岡野窯須恵器の特徴と高篠遺跡須恵器との比較を列挙する。

①食膳具は表採資料に高台付きがあるが，発掘資料は全て平底である。前項で指摘したように，岡野窯では火襷状の坏が確認できるが，口縁端部を平坦気味に仕上げるものが多く，細くすぼめる本遺跡の事例とは大きく異なる。

②須恵器甕は，外面の全てが格子タタキで，タタキの痕跡は２種類が想定できるが，その後のナデやカキ目調整は認められない。岡野窯からの供給を想定しても，タタキ後に回転ナデやカキ目調整を加える本遺跡とは直結せず，一元的な供給は考えにくく，岡野窯と同類と判断できない。

③須恵器甕の内面上位の当具痕は，大方同心円の中心部の痕跡が認められる。本遺跡では同心円の中心を認める資料は少数で，岡野窯例とは相違する。

④須恵器甕の内面下位の平行タタキが細線を呈しているが，本遺跡では認められない。

⑤須恵器壷の外面のカキ目は，本遺跡と共通する。しかし，岡野窯のカキ目は頸部まで認められ，肩部から上位にナデを施す本遺跡と相違する。

以上から，本遺跡例は岡野窯との相違点が目立ち，岡野窯からの供給は想定し難い。また，接近した時期とされる２者で，形態及び製作技法も大きく異なることから，本遺跡の須恵器の供給地は，他を想定すべきと判断する。

横市川に添う都城市の出土例も，壷の外面にタタキが認められ，甕の口縁部形態や調整も本遺跡とは異なっている。したがって，現状では本遺跡周辺に供給地を想定せざる得ない。

５．各期の土器様相と本遺跡の時期的な位置付け

(１)各期の設定と土器様相について

これまで，土師器坏，黒色土器坏・椀，土師器甕，須恵器壷・甕について型式組列と考察を試みた。ここでは，各時期の土器様相を明らかにし，本遺跡の時期的な位置付けを目指す。県内では最近，古代の一括遺物が増加傾向にあり，時期的な検討を行なえる状況にある。ただ，古代全体の変遷や様相を把握するには，未だ資料不足であることは否めない。こうした中，本遺跡資料は，時期を検討する上で良好であると判断された。そこで，現段階での編年を提示したい。

検討は，土師器・須恵器・黒色土器食膳具と土師器甕などの在地土器を対象として，各様相を“期”として把握した。ただ，一括遺物の少ない段階もあり，各期の時間枠は大まかに設定する。また，良好な遺構内遺物が少なく，遺跡単位の様相を主として検討し，Ⅰ期からⅥ期を設定した。

Ⅰ期

指宿市宮之前遺跡，鹿屋市宮の脇遺跡が単独Ⅰ期に該当する。また，小中原遺跡ではⅡ期以降も認められるが，比較的当期の事例が多い。Ⅰ期は，総じて他の時期に比べ良好な一括遺物が少ない。

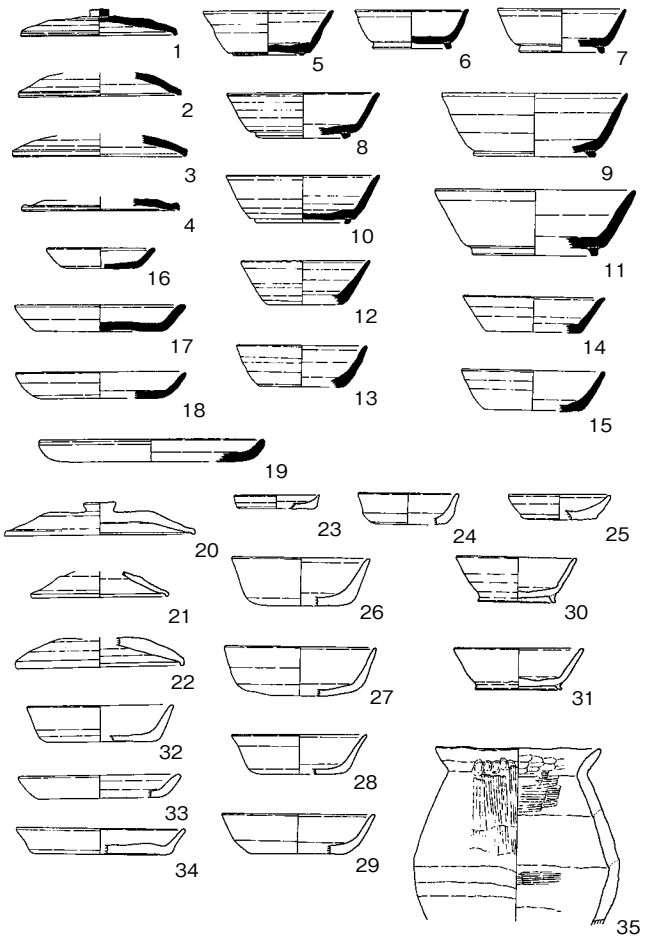
食膳具は須恵器が多く，器種として蓋と高台付の坏，平底の坏，皿がある。また，須恵器と同形の土師器も認められ器種は須恵器と同じである。土師器甕は良好な資料がなく，Ⅱ期以後に無い形態として，都城市の肱穴遺跡８号竪穴住居跡出土品を掲げた。また，中村和美氏は，Ⅰ期段階の甕として長胴のタイプを掲げ，9世紀以降器高が低くなると指摘する(中村和美1996)。

Ⅰ期は，本遺跡の成立前段階で，本遺跡の中には存在しない。一方，Ⅰ期と高篠遺跡段階の遺物の両者が認められる小中原遺跡からはⅠ期と高篠遺跡段階の遺物との間にヒヤタスはないと考えられる。

Ⅰ期以前の資料が国分市城山山頂遺跡に若干認められるが，数は少ない。

第118図にⅠ期の遺物を掲載した。１～４は須恵器蓋，20～22は土師器蓋である。基本的形態は類似するが，土師器が厚手である。高台付の坏は，須恵器で口径13cm程と20cm程の２種見られる。土師器の高台付の坏は，須恵器に比べて著しく少ない。平底の坏は数が多いことから，高台付と平底で時期差も想定される。例えば，宮之前遺跡では須恵器の高台付の坏が主体であるのに対して，成岡遺跡では平底の須恵器坏が多く認められる。須恵器と土師器の割合も，網田龍生氏が指摘するように８世紀後半から９世紀初頭にかけて土師器の比率が須恵器をしのぐようになると思われる(網田龍生1994)。

平底の坏は坏１類である。口径９cm程の小型と口径13～16cm程の２種がある。皿は，須恵器と土師器で形態差がない。体部外面は，ナデにより外反気味に立ち上がるものが多い。



第118図 Ⅰ期の土器様相(Ｓ＝1/8)

30・31・35=肘穴遺跡

その他　＝小中原遺跡

黒色土器は，一括資料の中では認められない。また，形態も当期の須恵器や土師器と類似するタイプは認められない。

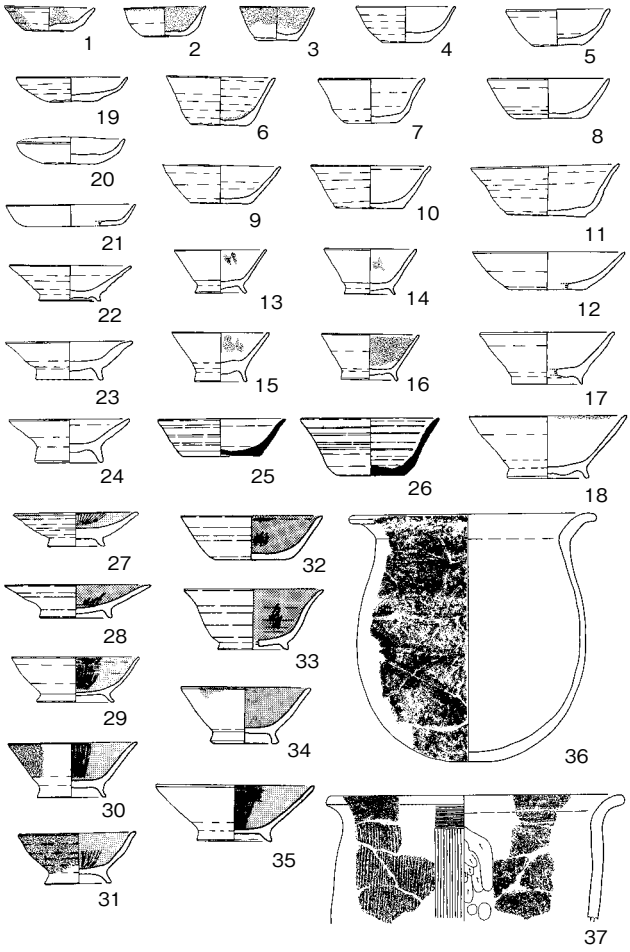
時期は８世紀後半から９世紀前半が想定される。

Ⅱ期

菱刈町山下遺跡，栗野町山崎Ｂ遺跡，金峰町山野原遺跡が単独Ⅱ期に該当する。姶良町小倉畑遺跡はⅡ期主体であるが，若干，Ⅲ期・Ⅳ期の遺物を含む。

土器様相は，須恵器・土師器に高台付の坏や蓋，坏１類が消滅し，土師器坏は坏２類・３類が主体となる。黒色土器も多く，須恵器は土師器坏２類・３類と同形が認められるがその数は大きく減少する。

平底の土師器坏はⅠ期に引き続き，口径９～10cm程度の小型(１～４)と10～13cmの中型(８～10)，13～16cmの大型(11～12)の３種が見られる。形態は体部が直線的に立ち上がる，坏２類・３類を主体であるが，曲線的に立ちあがる坏４類も含まれ，この両者の差異については現状では明らかにで



第119図 Ⅱ期の土器様相(S=1/8)

25・26=肘穴遺跡
その他=小倉畑遺跡

きない。また，器高５cm前後の深手の坏５類も，見られるが，量的には主体と成り得ない。

高台付土師器椀は，体部が直線的に立ちあがり，黒色土器椀１類と類似する。また，坏５類と同形態で，法量が若干小さく高台を持つものもある(13～16)。

土師器皿は外反するⅠ期から，Ⅱ期では底部から曲線的に立ちあがり，底部と体部の境が不明瞭なもの(19～22)，直線的な体部で，高台の短い高台付の皿が見られる(22～24)。

須恵器坏は坏２類・３類が認められ，一部坏４類，坏５類に類似するものもある。酸化焔焼成や火襷状のものが多い。

黒色土器は平底の坏，黒色土器椀１類，椀２類を認めるが，椀１類を主体とする。また，平底と高台坏の皿があり，土師器と共通する。

土師器甕は普遍的に見られ，同時に形態の変化期に相当する。変化前の様相は，土師器甕で指摘したように県内の各地域で地域性をもつ。形態的な特徴は口縁部が長く，胴部は張るものと直線的なものがあり，器壁は薄い。外面調整は外面にハケ，口縁部内面にもハケの認められるものが多い。胎土は砂粒を比較的多く含み，口径26cmと20cm以内の小型の２種が認められる。また，器高の浅い鉢も認められる。

一方，変化後の様相は，口縁部が短く，胴部は直線的で，器壁は厚い。外面調整はナデ，内面はケズリを施し，上端をそろえる。色は褐色を呈し，変化前に認められた地域性が終焉し，県内で斉一化する。

墨書土器は，当期からⅢ期にかけて多く認められる。

充実高台椀を伴わないことから，中島恒次郎氏と城戸康利氏が指摘(中島恒次郎・城戸康利　1994)した９世紀後半以前と指摘できる。Ⅰ期との関係から，９世紀前半から９世紀後半が想定される。

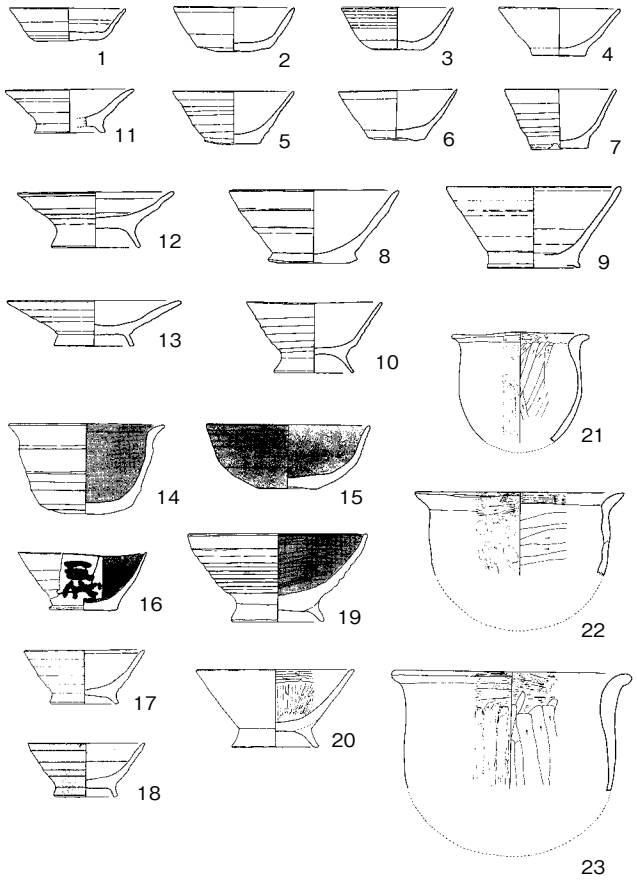
Ⅲ期

末吉町井手ノ上遺跡，鹿屋市榎崎Ｂ遺跡，輝北町鳥居ヶ段遺跡が，単独Ⅲ期に該当する。

須恵器の食膳具は当期で姿を消し，土師器甕において鉢が認められなくなる。

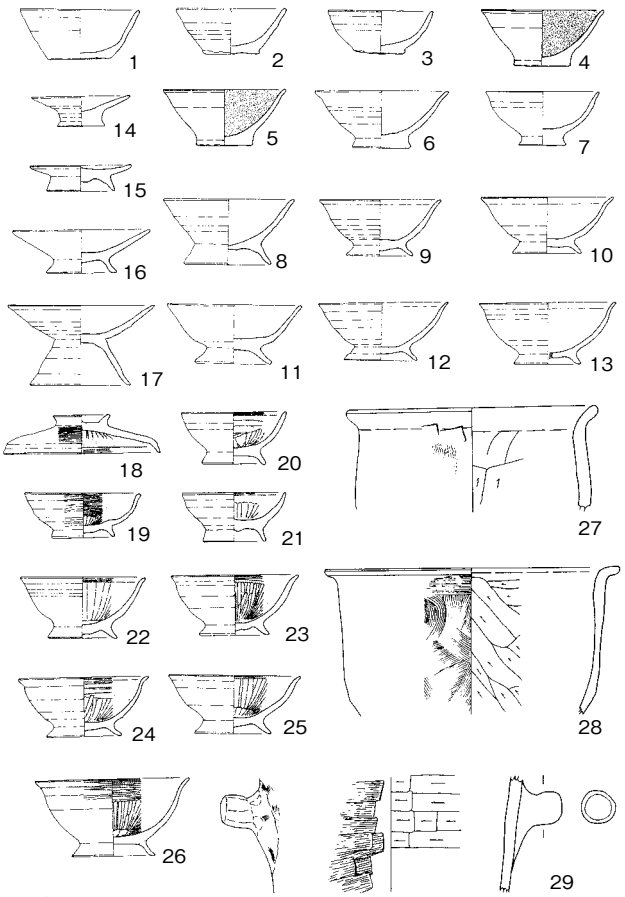
土師器坏はⅡ期までの小型のタイプがなく，口径10～13cmが主体となる。坏３類も若干残るが，深手の坏５類が中心となる。また，この時期，坏の製作技法に変化を指摘できる。底部は坏７類ほどは顕著ではないが，若干突出気味になり，坏７類への過渡的な様相を示す。

土師器皿は高台付のみとなり(12～13)，Ⅱ期の高台付の黒色土器皿は消滅する。10の土師器椀も含め，高台の足高化が認められる。



第120図 Ⅲ期の土器様相(S=1/8)

11・9・15=土合原遺跡
16　　=猪ノ丸遺跡
その他　=鳥居ヶ段遺跡



市ノ原遺跡

第121図 Ⅳ期の土器様相(S=1/8)

充実高台椀は，当期から認められる。９のように痕跡的な高台をもつものもあり，充実高台出現の背景を考える上で重要である。

黒色土器は，椀１類と椀２類が認められる。高台はⅡ期と同様に短いものが多いが，中に足高化したものもある。椀１類では，土師器坏と同様に深手のものが増加し，口径も若干小さくなっている。また，平底で底部の若干張り出した黒色土器の坏もあり，土師器坏と同じである。また，椀３類が認められ，体部が直線的な立ち上がりを示す。森隆氏は「８世紀以降11世紀に至るまで一貫して須恵器的な器形，手法を有する土師器の生産が継続」していることを指摘するが，生産が継続され続ける土師器に対し，黒色土器では当期をもって消滅するようである。

土師器甕は口縁部が短く，指押さえなどによる凸凹が目立つようになる。

充実高台が認められることから，９世紀後半から10世紀前半を想定する。

Ⅳ期

Ⅳ期の良好な遺跡は少ないが，市来町市ノ原遺跡が該当する。

坏７類が出現し，充実高台と共伴する。平底の坏５類も若干残るが，数は少ない。坏の製作技法は，Ⅱ期までとは様相を異にする。底部外面は，充実高台でナデが認められるが，ヘラ切りの状態を残すものが目立つ。

土師器椀は体部が曲線的に立ち上がり，高台が外反して端部をすぼませるものが多い。こうした形態は黒色土器の椀４類と類似している。

高台付の土師器皿は，足高や充実状のものが主体となる。一部長脚のタイプがあり，高杯の脚部のようである(17)が数は少ない。器高がなく，見込み部分とほとんど高さの変わらないものもある(15)。

黒色土器は，椀４類が主体で，若干椀５類も認められる。黒色土器では，平底の坏や大型の鉢も若干認められる。

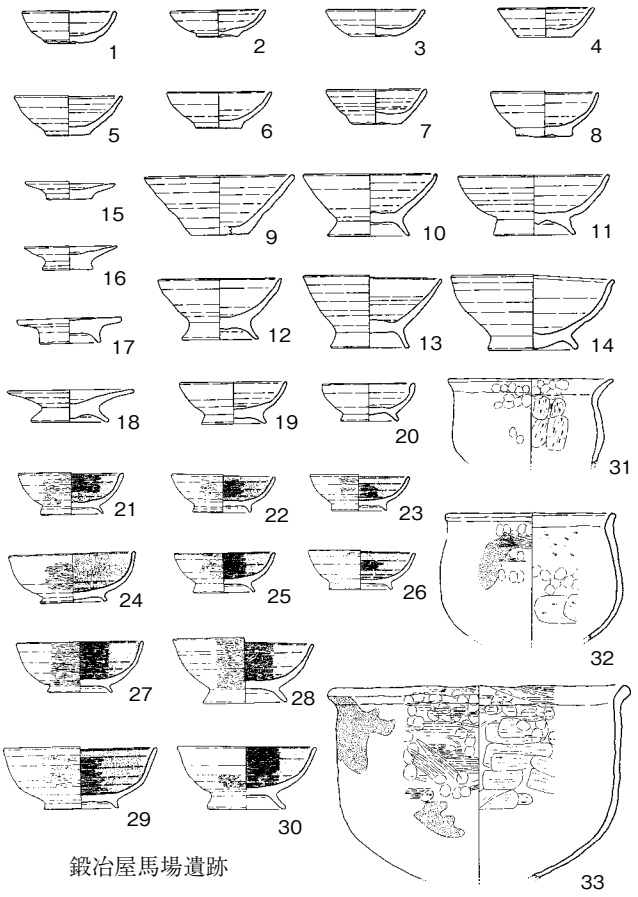
土師器甕は，Ⅲ期に引き続いて口縁部が短い。

10世紀前半から中頃を想定する。

Ⅴ期

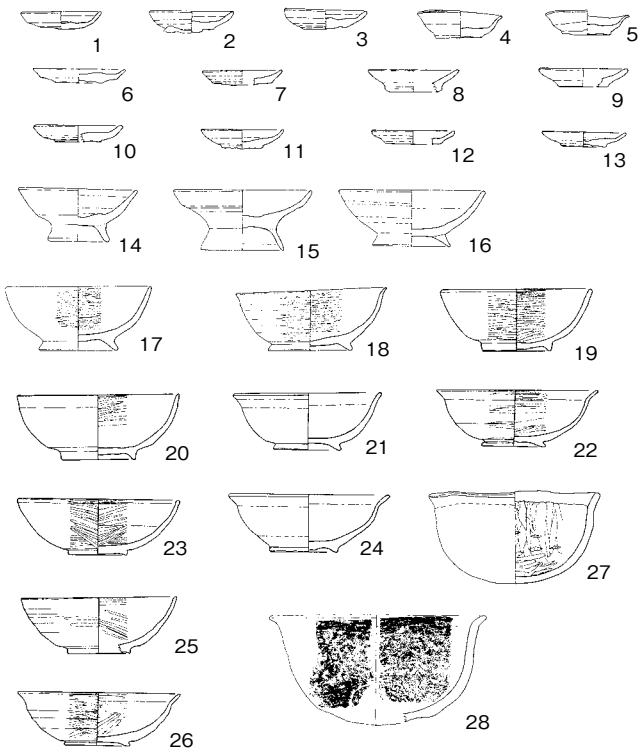
当期も一括遺物の認められる遺跡が少ないが，川内市鍛冶屋馬場遺跡が該当する。

土師器坏は坏８が主体で，若干，坏９類を含む。坏９類は皿としても分類可能で，次期以降に続く新しい形態が当期に認められる。全てで口径が10cmを越えている点は，次期以降の事例と異なる。



鍛冶屋馬場遺跡

第122図 Ⅴ期の土器様相(S=1/8)



第123図 Ⅵ期の土器様相(S=1/8)

1～5・14～16・27=榎崎A遺跡
6～13・28=犬ヶ原遺跡
17・18=保養院遺跡　21・24=上加世田遺跡
19・20・22・23・25・26=西ノ平遺跡

土師器椀は，曲線的に立ち上がる半球形を呈し，高台は短いものと足高で外反する２種が存在する。前者は黒色土器の椀６類に類似し，口径が約16cmと14cmと11cmの３種認められる。

高台付の土師器皿は，体部の短い立ち上がりのないものが主流となる。高台の高さは短く，円盤状の底部や，底部から高台端部が緩やかに傾斜するものが多く，見込みの器壁はⅣ期までと比べて厚い。

黒色土器は椀６類が主体で，一部椀５類も見られる。法量は，土師器椀と同様に口径が約16cmと14cmと11cmの３種認がある。なお，平底の坏は認められない。

土師器甕は口縁部が一段と短く，器面には指押さえが顕著である。また，口径20cm以内の小型のタイプが目立つ。

10世紀中頃から10世紀後半が想定される。土器様相からは，黒色土器の外面のヘラミガキが顕著でない点，Ⅱ期以降継続してきた土師器皿，直線的な体部の立ち上がりをもつ土師器椀が残存することから，古代の終末として捉えらる。一方，土師器坏が土師器皿として変化していること，黒色土器の高台部の形態からは，次期以降の中世的な様相も看取される。

Ⅵ期

姶良町保養院遺跡の円形周溝状遺構，姶良町森遺跡方形周溝，鹿屋市榎崎A遺跡周溝墓群等周溝遺構が該当する。他に，上加世田遺跡土壙墓，東市来町犬ヶ原遺跡がある。

土師器坏は，坏９類を主体とする。犬ヶ原遺跡や森遺跡の方形周溝，保養院遺跡の円形周溝状遺構，榎崎A遺跡の周溝墓１と周溝墓２では多くが口径10cm以上で，Ⅴ期の鍛冶屋馬場遺跡出土の坏９に類似する。一方，榎崎A遺跡包含層は口径10cm以内が比較的多く認められ，榎崎A遺跡の周溝墓３～５号では口径10cm以内を主体とする。これらの様相の違いは，中村和美氏が榎崎A遺跡周溝墓で指摘(中村和美1994)するように時期差を示すと思われる。従って，当期は今後細分が可能であるが，ここでは一括する。

高台付の土師器椀も器高が低くなり，皿型に近づく。土師器坏よりは大型で，高台は足高が多く，黒色土器の高台とは相違する。この傾向はⅤ期から認められ，土師器が黒色土器に比べて保守的といえる。

黒色土器には皿形態が認められない。椀は椀７類を主体とする。椀７類は口縁端部が外反するものとそのまま丸くおさめるものの２種がある。また，高台幅が狭く，高さのほとんどないものが存在する。

10世紀後半を上限し，下限は成岡遺跡の溝２等で貿易陶磁器と共伴することから現段階では11世紀以降と考えたい。

(２)高篠遺跡の時期的な位置付けと土器様相

本遺跡は土師器坏の坏２,３,４類，黒色土器椀の椀２,３類を主体とすることからⅡ期に位置付けられる。そこで，Ⅱ期の土器様相とその前後の状況からより具体的にみていく。

まず，食膳具でⅠ期は本遺跡では存在しない。須恵器壷の肩部に稜を残し８世紀後半前後の古相を示すが，須恵器高台付坏や蓋，土師器の坏１類は無く，口径９cm程の小型も認められない。

一方，Ⅲ期以降に主体となる坏５類は見られるがその数は少ない。充実高台の坏６類も認められるが平底に比べれば微々たるものである。また，坏７類は認められない。

土師期皿は底部から曲線的に短く立ち上がり，底部と体部の境は不明瞭である。

黒色土器は坏１類，椀１類，椀２類があり，数的には坏類が少なく，椀１類と椀２類は似通っている。高台は低く，端部に面を持ち，見込み部を押出す例も比較的多い。器種は他に高台付と平底の皿，鉢がある。

須恵器食膳具は全て平底で，焼成状況にバラエティーが見られ，火襷の痕跡の残るものが多い。また，酸化状態の土師質のものも多く，形態は浅手や深手があり，法量も数種類が認められる。

土師器甕は種類が多く，出土数も多い。本遺跡が機能していた段階で土師器甕に画期が想定される。

須恵器壷と甕は，土師器甕に比べて数が少ない。

以上のことから，本遺跡はⅡ期に展開したが，若干Ⅲ期も垣間見える。Ⅲ期からⅤ期に増加する土師器甕の外面の指押さえは，点数は多くないが本遺跡でも確認できる。したがって，年代的に９世紀前半から後半と想定する。

次に，本遺跡の土器様相の特質について指摘する。本遺跡の食膳具の割合を示したのが表(66)である。これによると，土器の種類ごとに主体となる器種の異なることが看取される。まず，土師器は圧倒的に平底が多く，体部は直線的に立ち上がる。一方，黒色土器は多くに高台を持ち，直線的な体部と曲線的な体部がある。須恵器は全て平底で，体部は直線的に立ち上がり土師器と共通する。

一方では，高台を持つ土師器や平底の黒色土器も存在する。高台を持つ土師器は，全て直線的に立ち上がり，曲線的な体部の黒色土器とは相違する。また，同じ土師器の中で高台坏は平底のものに比べて大きい傾向がある。黒色土器の平底タイプは，上述したように８世紀後半の古い段階から認められる。法量は比較的大きく，外面のヘラミガキ調整など土師器坏とは若干の形態差が看取される。

以上から，本遺跡ではそれぞれの用途により，土師器と黒色土器と須恵器を使い分けている可能性が高い。

第66表　高篠遺跡食膳具器種組成表(底部の破片をカウント)

土師器		黒色土器		須恵器
高台付	平底	高台付	平底	平底
72	1284	146	34	38

６　高篠遺跡出土墨書土器について

本遺跡出土の墨書土器に関しては，奈良大学文学部教授東野治之氏の指導を仰いだ。この項では東野氏の所見を紹介し，本遺跡の墨書土器のまとめとする。

〈指導内容・所見〉

高篠遺跡の墨書土器(105)点余りでは，「牧」「舎」「會」「為」「大」「岑」「丈」「角」「男」「安男」などが釈読された。いずれも１文字ないし２文字であり，「大」が同筆２点を含め数点ある以外は，字種にもまとまりがないため，明解は得にくいが，「牧」「舎」「會」は古代の官衙施設を指したり，官衙の用語として用いられた文字である。書体も日常的なもので，この遺跡の官衙的性格を裏付けるものといえる。

７　高篠遺跡出土石帯について

この項では高篠遺跡で出土した石帯の時期的な特徴についてまとめたい。石帯の編遷には田中広明氏による指摘がある(田中広明　2002)。田中氏は石帯の型式組列の着眼点として痕跡器官を注目し，垂孔とよばれる透かし孔を検討している。垂孔は本来垂飾りをつけるための孔であったものが必要性の欠如から小型化し，失われていったとし，垂孔を大孔・小孔・細長孔・無孔に分類した。従って型式組列は大孔から無孔への変遷が考えられているが，高篠遺跡の事例は氏の分類では小孔に相当する。時期的には小孔が9世紀前半にピークが認められることから，高篠遺跡の石帯も９世紀前半が想定される。なお，鹿児島県内では，現在９点が確認されている。

８　高篠遺跡出土銅環について

高篠遺跡では銅環が１点出土した。金属分析の結果，銅のみが確認され，錫或いは鉛は認められなかった。また，現状では金メッキは認められない。従って，古墳時代に多い青銅で金メッキをした金環とは異なる。時期的にも古墳時代，中世の遺物が皆無であることから古代が指摘できる。古墳時代とは異なった古代の耳環の様相を示している可能性と，そもそも耳環であるかどうかの用途の検討を今後の課題としたい。

(註)

１．中村氏は変遷として坏の器高が高くなり底径が小さくなること，椀の体部が直線的から曲線的になること，底部外面の調整が簡略化すること，底部切り離しがヘラ切りから糸切りになること等を指摘している。

２．粘土柱から一気に水挽きがされるが，榎崎A遺跡にみられる体部下端の接合痕からは，粘土柱の上端に輪状に粘土紐をまわしてから，それを成形したものと考えられる。

３．中村氏は土師器甕の変遷として８世紀末から９世紀にかけて器高の低高化を指摘し，９世紀にかけて胴部がはるものからまっすぐなものに変化することを指摘している(中村1996)。氏の指摘は今回の検討と附合する。

４．陶芸家四元誠氏からの教示による。

５．陶芸家四元誠氏からの教示による。

第２節　平安時代の遺構のまとめ

１　掘立柱建物跡から見た遺跡の性格

高篠遺跡では掘立柱建物跡が16棟検出され，今回採り上げた県内の同時代（平安時代）の遺跡では山野原遺跡と並び最も多い例となる。狭いエリアに11棟が集中しているため建物の間隔が狭く，４棟は切り合っている。主軸は14棟が北，２棟が東西となる。切り合いの状況から数時期に区別できると判断した。

共伴する遺構は焼土跡，軽石集積遺構がある。焼土は大型のものが建物の中心部に近く，小型のものは建物内に複数で検出した例が多い。また，軽石集積遺構と共伴する例もある。SB10の軽石集積５では鍛造剥片が出土し，建物内で小鍛冶が行われたことが想定される。建物の検出区では鉄滓，羽口等の関連遺物が出土していることから，遺跡全体で鍛冶工程を生業とする状況が見てとれる。

共伴遺物は墨書土器が多数あるものの，土師器甕・坏・黒色土器・須恵器甕・壺・坏等煮炊具が多く生活感がある。

建物の種別，規模と形態であるが，側柱建物15棟，総柱建物１棟で，梁行と桁行の構成は２間×３間が13棟で８割を占め，２間×４間が２棟，２間×２間が１棟となる。庇，溝等は付随しない。平面形態は長短の違いはあるが長方形である。間隔は等間隔にならないものもあり，柱筋が直線的に通らない建物が7割を占めている。検出状況からは平地式，高床式の判別はできない。

第67表　検出棟数

遺跡名	棟数
高篠	16
山野原	16
市ノ原	15
西ノ平	14
成岡	11
小中原	11
肱穴	9
山崎B	7
計志加里	7
踊場	6
鍛冶屋馬場	5
中尾立	5
小薗	4
一ツ木B	4
森	4
薩摩国分寺	3
榎崎B	2
藤坂・禁中	2
中園	2
小瀬戸	2
榎崎A	1
竹牟礼(県報)	1
竹牟礼(町報)	1
田平下	1
犬ヶ原	1
山神	1
赤井田	1
	152

柱穴掘り形の平面形態は円形，楕円形を基調とする。深さの平均が最深の棟で95cm（SB10），平均49.4cm，最も浅いもの30cm（SB15）である。径は最大49cm（SB14で最短径は41cm），平均38.6cm，最短は19cm（SB13で長径は22cm）である。梁行と桁行を１辺として計算した場合，床面積の平均が20.77㎡，最大31.44㎡（SB13），最小14.34㎡（SB１）となる。

本遺跡と県内及び近隣の都城市の肱穴遺跡の25遺跡の掘立柱建物跡152棟を実例として採り上げ，立地状況，規模（桁行×梁行），柱間平均値，共伴遺物を基準に比較検討を行った。数値データ等は68～70表に記載した。

まず，立地条件であるが方位，他の遺構との関係から別表に記載した基準をもとに大別した。Ⅰ類は方位に規制されている遺跡で，方位のみに規制される遺跡をⅠ－Ａ類，方位，溝（区画）,道等に規制される遺跡をⅠ－Ｂ類とした。次に溝（区画）,道，地形等に規制される遺跡をⅡ類とし，明確な規制が認められない遺跡をⅢ類とした。

これを基準に25遺跡を分類したところⅡ類が11遺跡で一番多く，Ⅰ－Ａ類が本遺跡を含め10遺跡になりこれで８割を占めている。Ⅲ類は４例，Ⅰ－Ｂ類は３例になる。ただし，２つの類型に重複する遺跡もあり，例えば肱穴遺跡は方位に規制される建物と規制要因がないものがあるため，Ⅰ－Ａ類とⅢ類の両方に含まれ，小中原遺跡は建物によって規制要因が異なるためⅠ－Ｂ類とⅡ類に渡ることになった。山野原遺跡は一部に方位と区画の両方に規制を受けない例があるがⅠ－Ｂ類とⅢ類に含めている。

さらに各類例の遺跡を遺物の年代等と関連させ分析を進めていくと，ある一定の傾向がみられた。Ⅰ類の遺跡では本章第１節の5で分類したⅠ期（８世紀後半～９世紀前半）に相当する遺物が含まれる遺跡が13遺跡のうち10遺跡になった。これに対してⅡ,Ⅲ類の14遺跡では３遺跡に過ぎない。

このことから，時期の古い遺跡で方位に規制を受ける確率が高く，時代が下ると方位の規制が緩み，他の遺構や地形に規制を受ける傾向が認められた。Ⅱ類では本報告のⅣ期（10世紀前半～半ば）が遺物の主流となる市ノ原遺跡，Ⅵ期（10世紀後半～11世紀以降）が主流となる犬ヶ原遺跡が方位に規制を受けているが，前者は墨書土器の出土数が県内最多で公的な性格が強く，後者は総柱建物の寺院的性格が想定されている。以上のことから律令制の浸透と衰退が建物の立地に影響を及ぼす傾向を読み取ることができた。

第68表　掘立柱建物跡の配置の分類表

分類1	比較基準1	分類2	比較基準2	遺跡数	遺跡名
Ⅰ類	方位に規制	Ⅰ－Ａ	方位のみ	10	高篠，竹牟礼(県報告)，成岡，肱穴，藤坂・禁中，一ツ木B，薩摩国分寺，赤井田，犬ヶ原，市ノ原
		Ⅰ－Ｂ	方位 溝(区画) 道等に規制	3	高井田，山野原 計志加里，小中原
Ⅱ類	方位の規制なし		溝(区画) 道 地形等に規制	11	山崎B,田平下,榎崎A,B 中尾立，小中原，小瀬戸 西ノ平，小薗 鍛冶屋馬場，踊場
Ⅲ類			規制なし	4	山神,中園，森，肱穴

第69表　規模

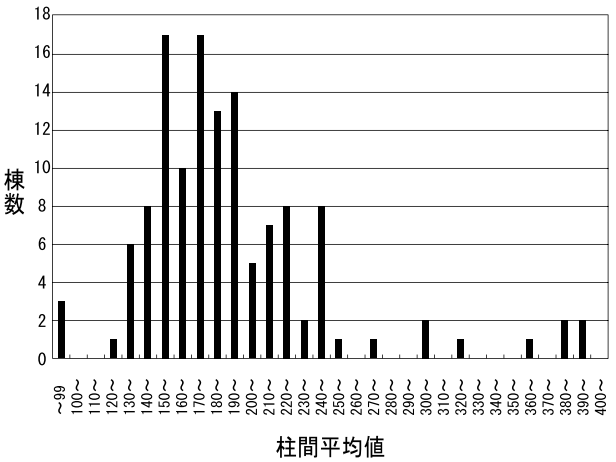
規模（桁×梁）	棟数
2×3	66
2×2	21
1×2	13
1×1	8
2×4	7
3×3	7
3×4	6
2×5	4
2×1	3
1×4	2
3×1	1
3×6	1
4×4	1
5×4	1
	141

次に規模であるが152棟中，２間×３間がほぼ半数の66棟，２間×２間が21棟，１間×２間が13棟でここまでで全体の７割近くを占めている。このうち市ノ原遺跡（５棟）と西ノ平遺跡，赤井田遺跡，山崎B遺跡（各１棟）では庇付の建物が検出されている。３間×１間,３間×６間,４間×４間,５間×４間の例もあるが１例ずつに過ぎず，県内では極めて稀な例と言えよう。本遺跡は８割が２間×３間を占めており規模としては一般的な部類になる。

最後に柱間平均値であるが，特に150～159cm，170～179cmでピークがありそれぞれ17例である。全体を俯瞰するとおおむね140～220cm，240～249cmに集約される傾向にある。なお，最長値が396cm，最短値が21cmとなっているが，この範囲の例は全体の５％程度に過ぎず極めて少ない例と言えよう。高篠遺跡の場合は190cm～がピークで180cm～，200cm～がこれに続く。

以上，掘立柱建物跡を通じて概観した高篠遺跡は，建物の桁行き，梁行きは一般的であるが立地条件では方位に規制を受け，軒数，柱間間隔共に平均値を上回り，墨書土器，石帯，銅環等の特殊遺物が出土しているため律令制の影響を受

第70表　鹿児島県における柱間値の状況



けた公的な性格の遺跡であると判断できる。

2　逆茂木痕を伴う土抗について

２基の土坑が検出された。遺跡範囲の最も安定した地区にあり，検出地点の20m四方には掘立柱建物跡が10棟検出されている。主軸はほぼ建物と等高線に平行し真北となり，２基が前後するような状態で隣接して検出されている。底部には逆茂木の痕跡が残されていた。

発掘調査の時点で年代は縄文時代後期と想定した。これは検出区を中心とする遺跡全体で同時期の土器片が数点と石鏃,敲石が20数点出土していたこと，２つの土坑が底部に逆茂木痕をもつことなどから狩猟場と認識していたことによる。しかし，1471年頃降灰した文明ボラが埋土の最上部に堆積しており，遺構がⅢ層から掘り込まれていることから古代以降の可能性を検討することにした。

そこで，県内外の事例を調査したところ縄文時代以外の時代と位置づけられている逆茂木痕を持つ土坑の類例が，鹿児島と宮崎の県境を中心に確認できた。上記の事例として県内は姶良郡福山町永磯遺跡，県外は宮崎県高原町椚粉山遺跡，荒迫遺跡，同えびの市小岡丸地区遺跡群のひとつ北田遺跡，西臼杵郡高千穂町中ノ原遺跡を採り上げ，本遺跡検出の土坑との類似点を考察し，時期判断の一助とした。別表に各遺跡の概要と土坑の計測値を記した。

中ノ原遺跡を除く４遺跡は霧島連山をはさみ40km圏内の比較的近距離にある。椚粉山遺跡では遺構の時代設定を中世としているが，これは埋土に高原スコリアが単独あるいは含まれること，検出区で共伴する遺構が無いことから調査担当者は中世の落し穴と判断している。時期判定の基準となっている高原スコリアの詳細な降下年代は不明な点が多いようだが，宮崎市の前田遺跡などで，文明３（1471）年降下と推定される桜島火山灰（文明ボラ）が高原スコリアの上層にあり，９～10世紀にかけての遺物が下層から出土することから各報告書では10～15世紀代と判断しているようだ。

永磯遺跡の場合，最下部に古代の包含層と文明ボラが混在した土が堆積していたため降灰前後と判断した。北田遺跡は縄文後期か弥生後期と推測される。中ノ原遺跡はアカホヤ降灰以降（縄文前期～）としているため，遺構の時期は古代から中世が指摘されよう。

検出状況は，台地の平坦面から縁辺部で検出されている。永磯遺跡の１基は，地形に直行し真北に軸を取っている。椚粉山遺跡は，等高線に対して直行が多く，平行は少ない傾向にある。報告書で指摘しているように２基が対になる場合とそれ以外の場合もあり，10m以内にほぼ平行していることが多いが必ずしもその限りではない。荒迫遺跡は２基が隣接するが，主軸，地形の意識はみられない。中ノ原遺跡は４基中２基が隣接し，位置は地形に平行になる。

形状は３遺跡で検出された22基が，平面が隅丸長方形，断面形は箱型で若干外開き気味になり，底部の逆木痕が共通する。その他22基の最大幅は160～204cm，最短幅は30～80cm，深さは36～131cmでほぼ同規格であるが，例外的に椚粉山遺跡の1基が最長幅が251.8cmで突出している。近年の耕作による削平等を考慮してもおおよそ類似した傾向が見られる。

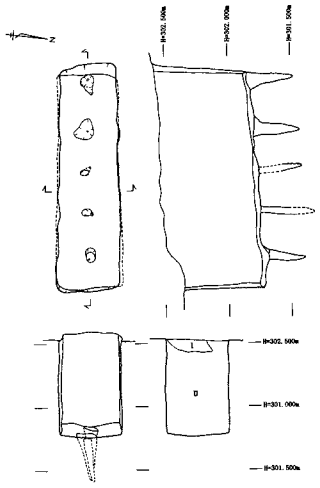
底部の逆茂木痕も22基全てで検出されている。逆茂木は並列しているが，荒迫遺跡の１基は並列部分がある。本数は４本が６基，５本が７基，北田遺跡７本及び永磯遺跡８本となっている。深さは中ノ原遺跡のみ50～70cmと深く，その他は20～40cm前後に収まる。

本遺跡では，土坑１が最大幅2.22m，最短幅0.71m，深さ1.39m，逆茂木の深さが15～48cmで平均が36.4cm，土坑２が最大幅2.62m，最短幅1.01m，深さ1.43m，逆茂木の深さが23～59cmで平均が40.7cmである。規格の比較では，本遺跡がやや大きいが形状は上記の遺構と同一である。

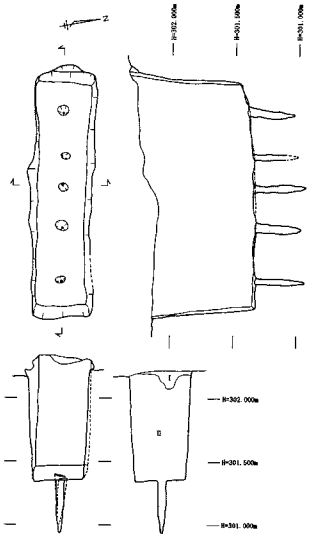
本遺跡ではこの土坑が掘立柱建物や軽石集積遺構，焼土等の古代の遺構の中に位置し，SB4,7と近接し主軸も一致している。また，遺物は古代のみで中世は認められない。これは他遺跡でも同様である。よって古代の遺構とも考えられるが，埋土の大半がⅢ層で最上部に1470年前後に降灰した文明ボラを含むことから他の遺構より新しく位置付けることもできる。他遺跡の類例は古代から中世と位置付けられており，本遺跡の土坑も同様（古代～文明ボラ降灰以前）と考えられる。

注）北田遺跡については掘立柱建物と検出面が同一で，古代の遺物を主体とすることから類例として採り上げた。

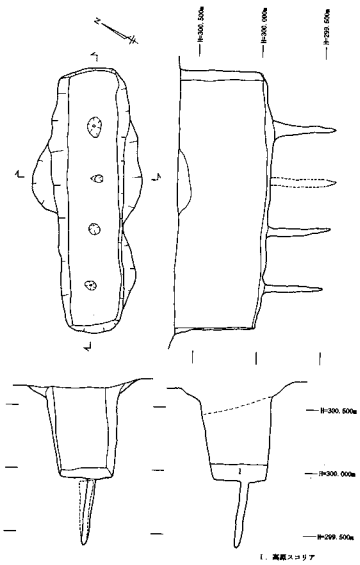
鹿児島県川内市霜月田遺跡からも同様の土抗が２基確認され，時期は中世が想定されている(平成15年現在)。



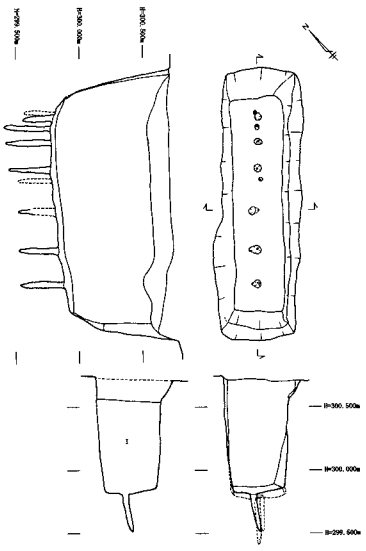
楢粉山遺跡１



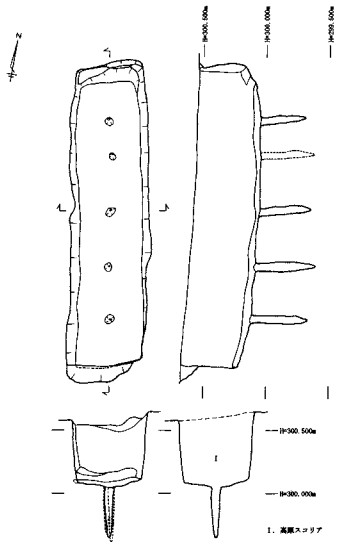
楢粉山遺跡２



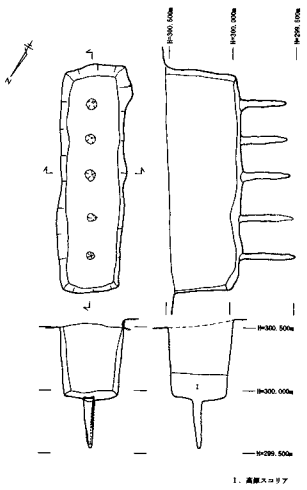
楢粉山遺跡３



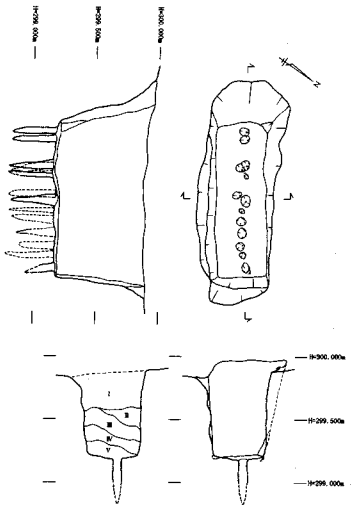
楢粉山遺跡４



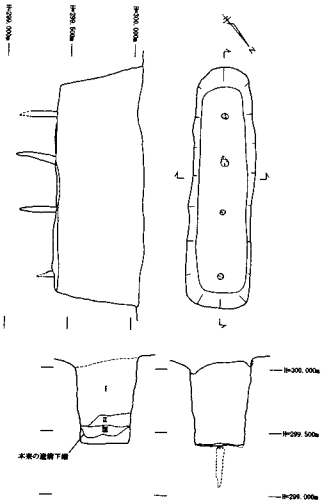
楢粉山遺跡５



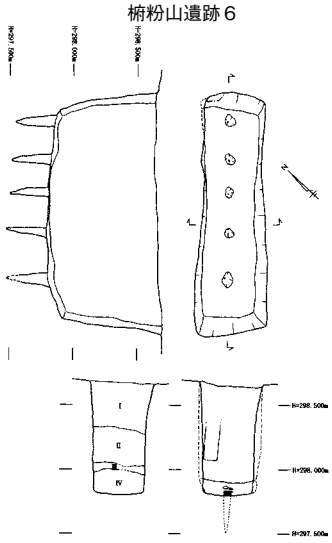
楢粉山遺跡６



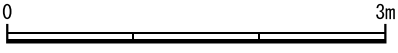
楢粉山遺跡７



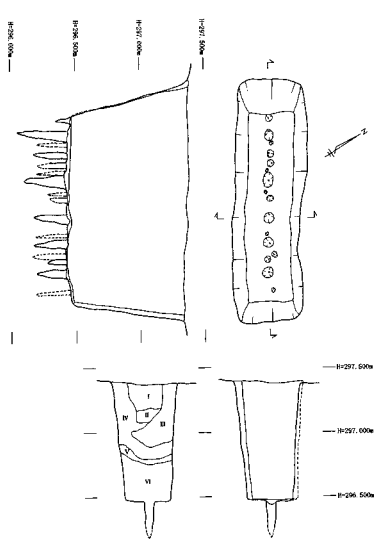
楢粉山遺跡８



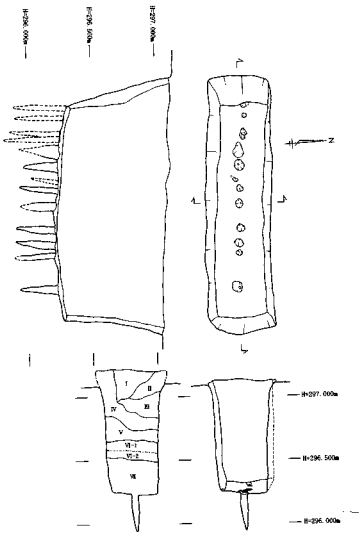
楢粉山遺跡９



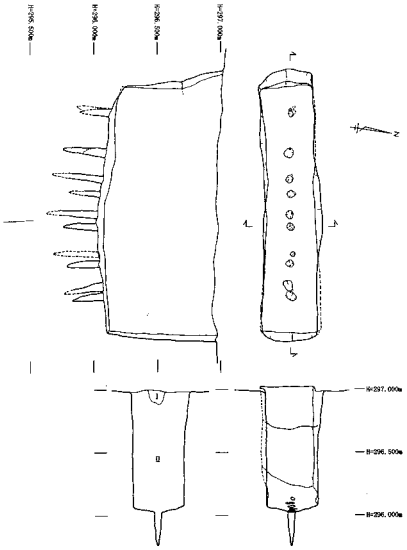
第124図　逆茂木痕を伴う土抗集成(１)



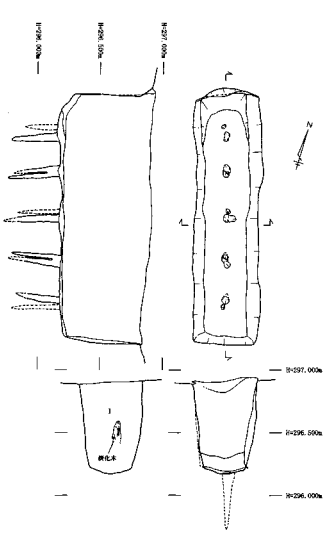
楢粉山遺跡10



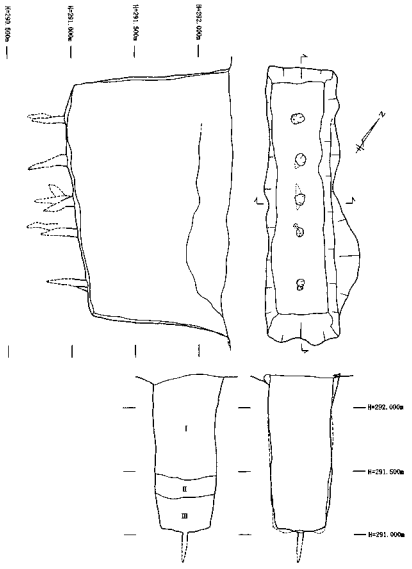
楢粉山遺跡11



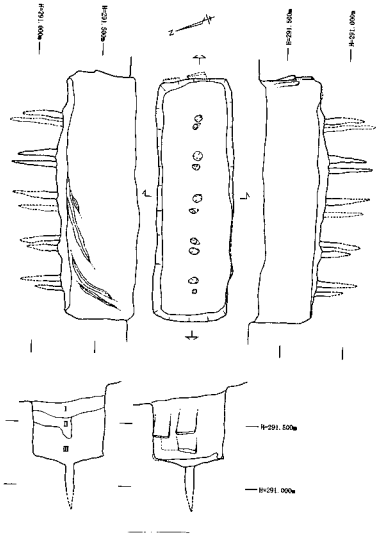
楢粉山遺跡12



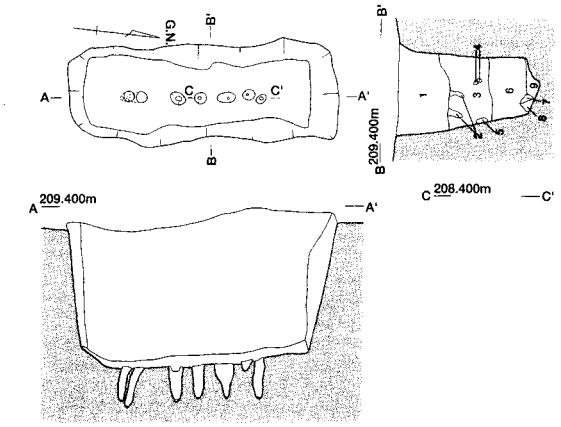
楢粉山遺跡13



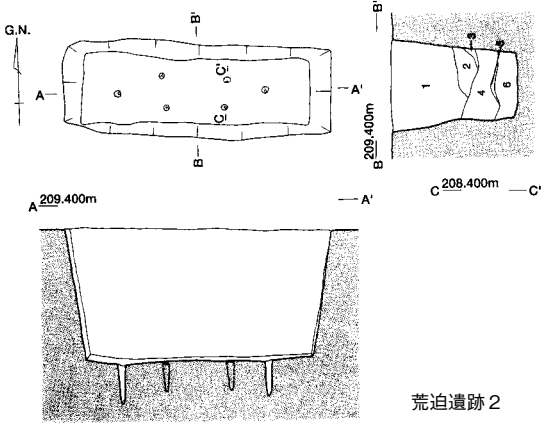
楢粉山遺跡14



楢粉山遺跡15



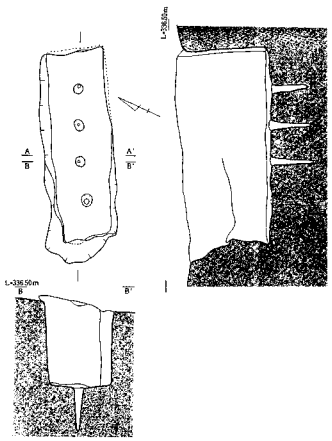
荒迫遺跡１



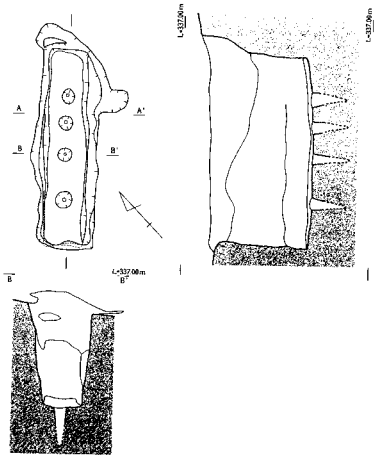
荒迫遺跡２

0　3m

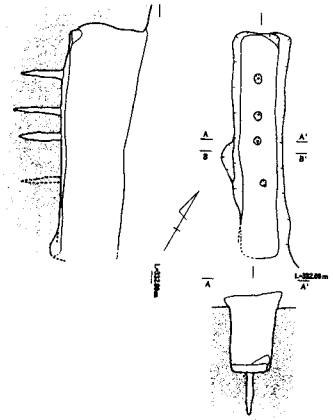
第125図　逆茂木痕を伴う土抗集成(２)



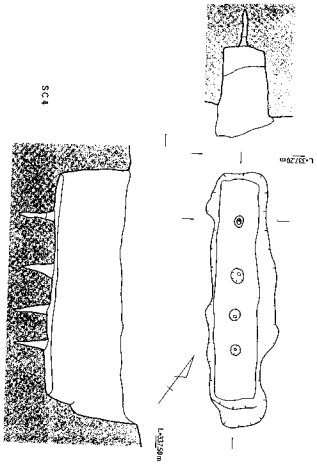
中ノ原遺跡１



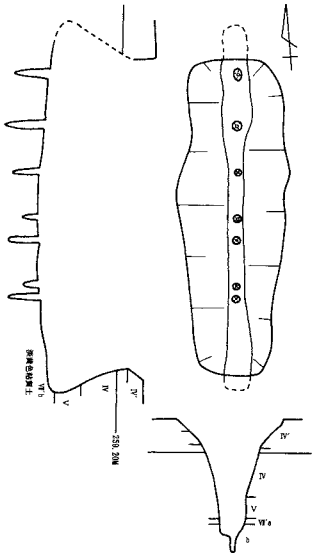
中ノ原遺跡２



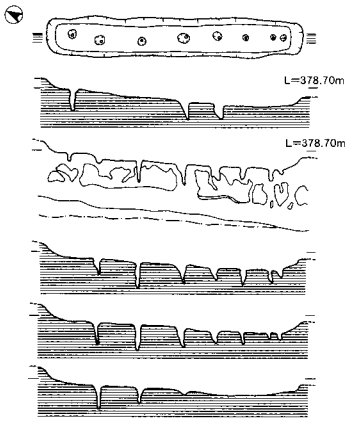
中ノ原遺跡３



中ノ原遺跡４



北田遺跡１



永磯遺跡１



第126図　逆茂木痕を伴う土抗集成(３)

第71表　榊粉山遺跡　逆茂木を伴う土坑観察表

遺構No	最長幅(cm)	最短幅(cm)	深さ(cm)	逆茂木痕深さ(cm)	軸方向
1	179.0	49.5	65～78	30～40	N83.3° E
2	198.0	53.0	80.0	34～42	N100.5° E
3	207.0	56.5	46～52	48～51	N63.5° E
4	221.4	65.0	87～95	24～37	N43.3° E
5	251.8	64.0	46～52	36～47	N10.5° W
6	178.2	51.2	36～37	56～59	N31° W
7	173.0	61.0	71～73	23～39	N56° E
8	189.0	49.0	65～70	14～31	N40.8° E
9	188.0	50.0	78～87	30～32	N47° E
10	186.6	52.0	87～95	11～39	N57.3W
11	201.5	51.0	77～86	28～44	N86° W
12	214.0	47.0	86～96	24～41	N80° E
13	203.5	51.0	60～73	34～42	N11.5° W
14	213.0	56.0	104～131	26～32	N34° W
15	191.8	60.5	45～55	23～42	N68.6° W

第72表　荒迫遺跡　逆茂木を伴う土坑観察表

遺構No	最長幅(cm)	最短幅(cm)	深さ(cm)	逆茂木痕深さ(cm)	軸方向
1	210.0	70.0	110.0	30.0	N8° E
2	210.0	70.0	106.0	24～30	N92° W

第73表　中ノ原遺跡　逆茂木を伴う土坑観察表

遺構No	最長幅(cm)	最短幅(cm)	深さ(cm)	逆茂木痕深さ(cm)	軸方向
1	170.0	55.0	71.0	55～64	N66° E
2	163.0	52.0	80.0	56～58	N44° E
3	175.0	46.0	66.0	66～74	N30° W
4	202.0	55.0	78.0	48～57	N39° W

第74表　北田遺跡　逆茂木を伴う土坑観察表

遺構No	最長幅(cm)	最短幅(cm)	深さ(cm)	逆茂木痕深さ(cm)	軸方向
1	234.0	56～80	70～80	13～30	N6° W

第75表　永磯遺跡　逆茂木を伴う土坑観察表

遺構No	最長幅(cm)	最短幅(cm)	深さ(cm)	逆茂木痕深さ(cm)	軸方向
1	204.0	30.0	13.0	8～10	N28° W

第３節　高篠遺跡の特質と歴史的な位置付け

本遺跡では石帯や鉸具等，一般的な遺跡で出土の少ない遺物がいくつか認められる。また，焼塩壷は県内では群を抜いて多く，総数は2000片を越す。さらに105点もの墨書土器には「牧」「舎」「會」の文字が認められ，官衙的な遺跡の可能性が想定された(東野治之氏による指導)。また，掘立柱建物跡の密集度や方位は鹿児島県内において古相或いは特殊性が推測された。

その一方，土師器甕が非常に多く，貿易陶磁器などの舶来品は認められない。また，掘立柱建物跡をはじめとする遺構は鹿児島県内でごく一般的な形態である。

このように本遺跡の評価は，官衙的な側面をもつ一方で一般的で素朴な遺跡の様相も見られ，整理作業はこの２面性を検討しながら行った。ここでは，整理期間中に検討してきた本遺跡の歴史的な評価を，遺物と遺跡を含む周辺の地形からまとめる。

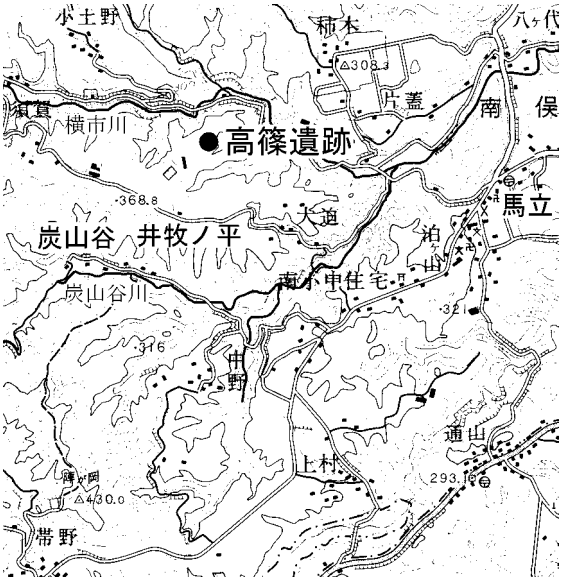
１　古代牧との関わりについて

問題提起として，多く出土した墨書土器の「牧」に注目したい。鹿児島の古代馬文化は，「日本書紀」に「日向の駒」とうたわれるほど知られ，近世も有名な馬の産地であった(鹿児島純心女子大学国際文化財研究センター編『新薩摩学Ⅰ』2002)。今回の「牧」字墨書土器は鹿児島で初出の文字で，古代の牧と馬生産が推測され興味深い。そこでまず，県外で出土している「牧」字墨書土器について見る。

山梨県武川村宮間田遺跡では，須恵器の体部外面に「牧□」の墨書が認められる。この宮間田遺跡は，勅旨牧の1つである真衣野牧との関わりが指摘されている(末木健2000)。一方，石川県金沢市金石本町遺跡では，底部外面に「牧大」の墨書のある須恵器坏が２点出土し，他に「麻呂」や「大」などの墨書を多く出土している。

本遺跡では，体部外面に逆位で「牧」字を墨書し，「牧」の下は土器が欠損することから，もう１文字書かれていた可能性もある。本遺跡に多い「大」と組み合わすと，金石本町遺跡と共通することとなるが現状では推測の域を出ない。いずれにせよ，宮間田遺跡の状況は高篠遺跡にも牧の存在した可能性を強く示している。

次に，遺跡周辺の地形と地名から，牧の可能性について検討を深めていきたい。まず，地形は調査地点から南に下ると，そこからはなだらかな台地が続く。注目すべきはこの台地の一部に小字「井牧ノ平」が，炭山谷川を挟んで南東の方角には「馬立」の地名が認められる。「井牧ノ平」は文字通り牧と関わる地名で，「馬立」は立の字を“館”に置き換えることも可能で，馬の施設に関わる中心場所が想定される。もちろ



第127図　高篠遺跡周辺図

ん，これらの地名がどの時代まで遡るのかは追求しなければならないが，地名からも遺跡周辺に牧の存在を伺わせることを指摘したい。

さらに，調査で検出した遺構，遺物の中から，「牧」字墨書土器以外で牧と関連する資料を検討する。

牧関連の遺構として群馬県安中市の中野谷遺跡では，南北410m，東西260～300mの溝で囲まれた台形状の区画が確認され，牧の水場の可能性が指摘されている(高島英之2000)。また，群馬県伊勢崎市三和工業団地遺跡では，馬房が指摘され，１房に５頭の馬が繋がれたとされる(高島英之2000)。一方，長野県福島町の望月牧は，勅旨牧の中では最大の牧で，文献からは室町時代(1466年)まで駒牽が行なわれていたことが知られる。望月牧推定地には，「野馬除跡」と呼ばれる堀と土塁が現存し，自然地形を無視して直線的に１周し，放牧場の範囲を示し，一部(野馬除跡大原地点)は発掘されている(福島2000)。

本遺跡では，調査区内の遺構中には上記したような施設は認められなかった。建物に復元できなかった柱穴はあるが，馬房を平面形に復元できない。一方，野馬除については，遺跡の周囲数kmの範囲で残存している可能性もあり，現地調査等を今後の課題としたい。

牧の可能性を示す遺物として，「牧」字墨書土器の他に“焼塩壷”と“鉄製の鉸具”を指摘したい。

遺跡からは大量の焼塩壷が出土した。遺跡は海からは遠く離れた内陸であり，塩生産が行なわれた可能性は少ない。可能性としては，塩の集積地・流通の拠点，或いは大量の塩を必要とした消費地が考えられる。本遺跡に，官衙的な機能を考慮すると前者の指摘は附合する。つまり，税として納める塩を集積した場所として評価できる。一方，後者の指摘は「牧」との関わりの中で評価が可能である。すなわち，厩牧令には馬に支給する食料として1日に粟１升，半糠米３升，大豆２升，塩２勺とあり，馬生産には塩が不可欠な要素と指摘できる。

牧との関連を示すもう1つの遺物に，鉄製鉸具がある。当初，ベルトの一部ないしは馬具とし検討した。縁金の基部には横棒が認められ，縁金は基部で扁平で，その基部にＴ形の刺金と別造りの横棒を取り付ける構造から，古墳時代後・終末期の鐙の鉸具(馬ノ口５号墳出土例など)から古代にかけて系譜が認められる(冨永里菜2002)。これらの事例から，鉄製鉸具は馬具と判断した。１点であるが，牧との関係が想定される。なお，本遺跡の鉄製鉸具は，都城市星原遺跡と同形態，同法量と判明し，同じ場所で製作されたと考えられる。両遺跡への搬入ルートとして，ともに横市川沿いに位置することから，横市川を媒介とした可能性も指摘できる。次の項では牧から一旦視点を移し，横市川を利用した交通路について検討したい。

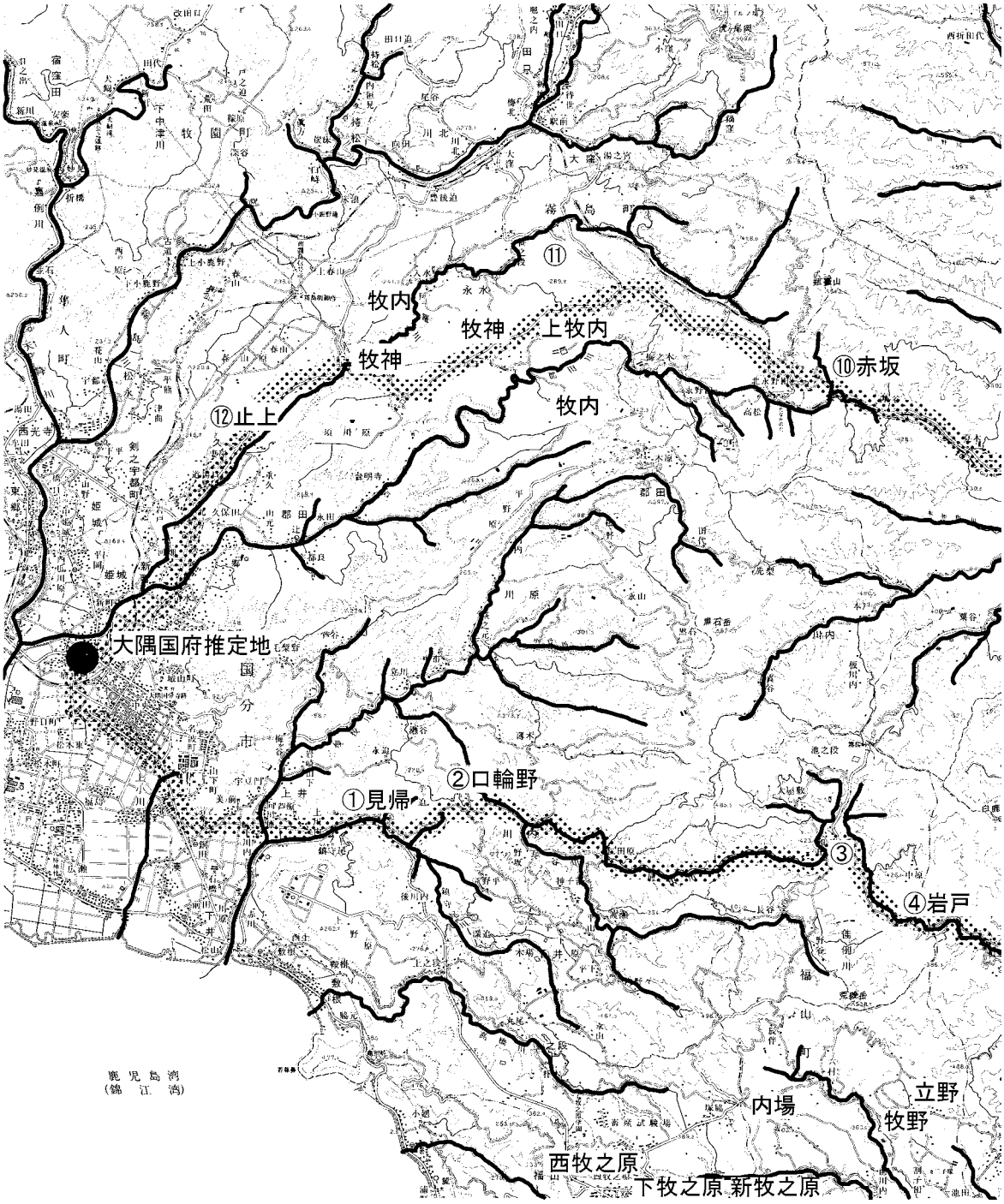
２　高篠遺跡と古代交通路

(１)はじめに

都城－国分間の古代交通路に関しては，延喜弐巻二十八の兵部省の中にある諸国駅馬伝馬によると「大水」の駅馬名がみられる。この「大水駅」は現在，大口付近と財部町付近の二説がある。前者の説は，和名抄の大水郷の地に当て大口付近とするのに対し，後者の説は，島津駅から大隅国府へのルート上に駅は存在するとの立場から財部町付近を指摘する。後者の立場の小園公雄氏は，大水駅の候補地として財部町大川原を充当し，都城から大川原を経由し県道２号線に添い，入戸に至り，国分に南下するルートを想定している。このルートは，都城側に関之尾，大隅国府側の重久に通称関の坂と呼ばれる場所があることから説得力がある。小園氏は，大川原に駅が存在した根拠として，(ア)大川原は河川の合流地点で，また，大淀川の上流にあたること。大水駅は大川駅の誤字か同意語の可能性が高い。(イ)駅馬，伝馬用の水・草が充分に自給可能である。(ウ)廐牧令によれば三十里（現在の五里）ごとに駅を置くとあるが，島津駅から大川原まで約24kmあり，大川原から夏木・赤坂を通り止上を抜けて大隅国府まで24km程であることから，島津駅から大隅国府の中間に大川原が位置すること。(エ)島津駅と大隅国の夏木・赤坂・止上は，ほぼ直線上にあり，また大川原は島津駅と夏木と同じ直線上に位置していることなどを指摘している。

小園氏の指摘したルートに対し，若干の問題点を指摘すれば，標準的な駅間の距離に比べて若干長いことである。ただ，御坂峠を挟んだ美濃国坂本駅と，信濃国阿知駅に距離が40kmもあった(中村太一2000)ことを考えると大きな問題ではないかもしれない。小園氏自身が指摘するように，厩牧令で「若地勢阻険及無水草處，随便安置，不限里数」とみられることからは，ある程度の距離は許容されよう。

次に，小園氏のルートに対し，古代官道と関わる新たな高篠遺跡経由のルートを指摘する。都城から横市川沿いに上流に向うと，遺跡の北側を通り福山町へと入る。比曽木野地区の痩せ尾根の分水嶺を超えると，前田川の上流に出，川沿いに下ると，鎮守尾川に乗り換え，国分市街地に通ずる道の存在を想定した。このコースでは遺跡付近が中間で，ちなみに都城(島津駅)と大隅国府からは20～22kmの距離となる。駅及び官営施設としての成立条件に，石帯，墨書土器，焼塩壷，鍛冶炉，硯，瓦等の存在が挙げられるが，本遺跡では硯・瓦以外は出土している。「牧」の墨書があること等を考慮すると，本遺跡が官営の牧とし，日向島津と大隅国分寺を結ぶ交通の要所とし機能していた可能性，遺跡周辺の横市川付近に駅的な施設の置かれた可能性も充分予想される。また，土器の検討から，９世紀前半から後半の短期間の遺跡であることが確認できた。したがって，本遺跡は短期間展開した，あるいは，期間の限られた施設として機能したとも捉えられる。しかも，律令社会との密接な関わりが想起される古代であることは，注目できる。



第128図　高篠ルートと大川原ルート(S=1/100000)

以上の仮説に基づき，新たに設定した高篠遺跡ルートと小園氏の大川原ルートを検証する目的で，フィールド調査を実施した。

(2)フィールド調査

Ａ高篠コース（９月２７日）

国分駅前からスタートし，鎮守尾川沿いに上る。

①見帰

国分平野と山間部との境で，国分を離る度名残を惜しみ振り返った場所か。加治木横川線の坂を登り切ると「見帰り」がある。（昔は見返りの松もあった）

②「口輪野」集落入り口

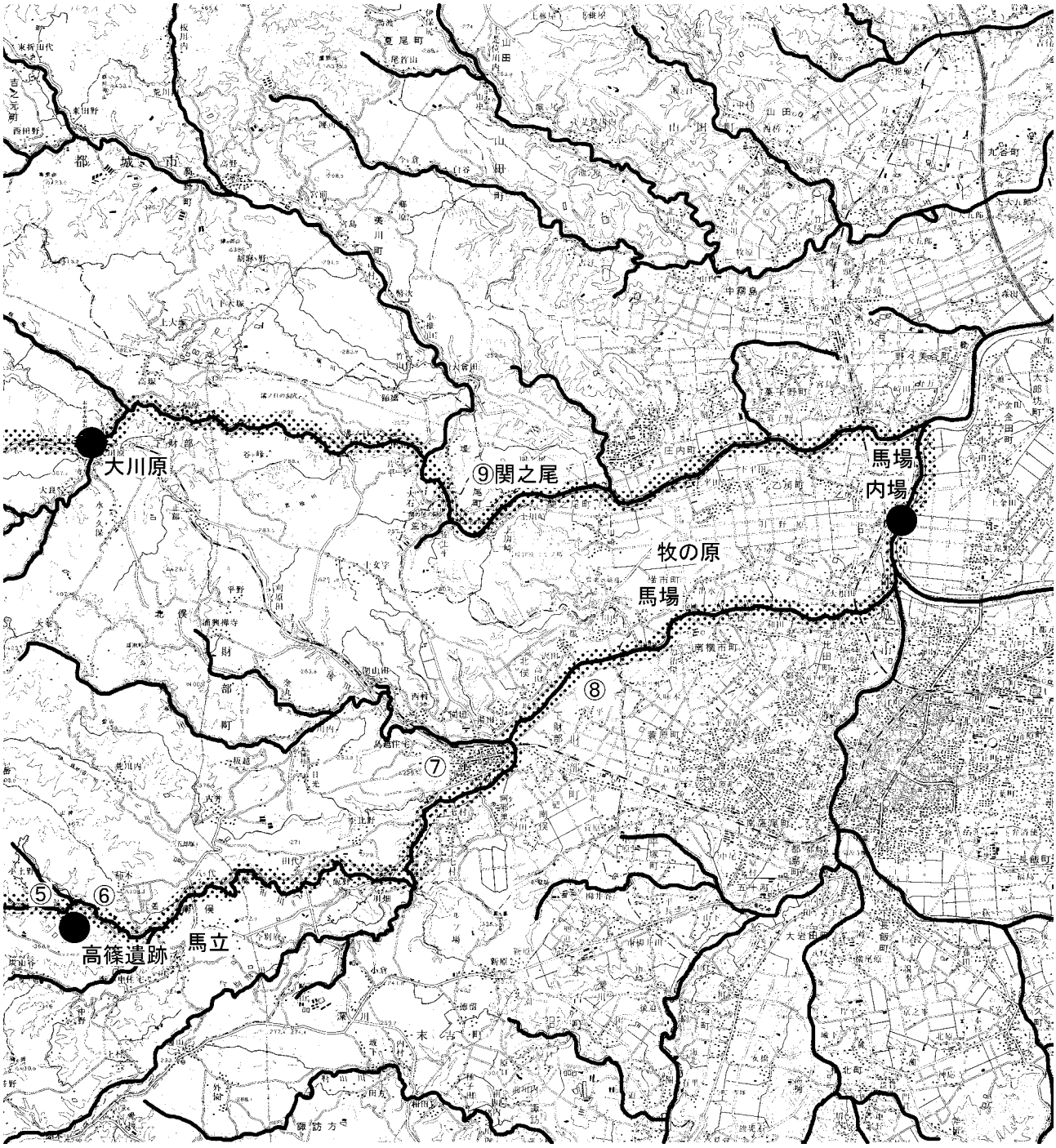
岩と岩の間を抜けて集落へ。細い山道を通り，大岩を乗り越えていたようである。

③比曽木野の分水嶺

和田から新村を通り，前田川から横市川に渡るが，そこには分水嶺としてやせ尾根が北に傾く。前原和田遺跡をまたぐ。

④「岩戸」集落

北に横市川が流れ，北側に水田が広がる。旧家が並ぶが大木が植えられ，旧家の所在を隠す。



註)　太線は河川を示す

⑤高篠北西部

高篠北西部は切り立つ急斜面，反対の山も切り立つため，Ｖ字谷で，逃げ場はない。

⑥高篠北部

渓谷から，平野が広がり一変する。「駅」があっても納得できる。横市川は東西に流れ，南東に700mで「馬立」に至る。

⑦龍虎城前

中世の山城。古くは城の前を流れる川を前川，城の後ろを流れる川を後川と呼んでいた。北側にＪＲ財部駅。

⑧横市川

財部を過ぎると都城盆地。川幅も広くなり，船も使える。

Ｂ大河原コース（９月２８日）

⑨関之尾の滝

滝を避けて横切ることができるので問題はない。

⑩赤坂

吉ヶ谷川沿いに上ってきたが，しばらくは急な坂が続く。

⑪牧

坂を登り少し下ると，安定した台地になる。標高は

300m。「上牧内」「牧内」「牧神」字が並ぶ。５キロ弱の間安定した地形である。「牧」姓があることも，表札から分かる。霧島町牧神であるが，入戸近くにも国分市牧神がある。

⑫止上神社付近

古代の豪族税所氏が居を構える。関も推測される。近くには，隼人塚，関の跡とも思われる用水路，墳丘が残されている。

(３)高篠遺跡経由ルートと大川原経由ルートの比較

以上のフィールド調査から検証すると，距離は高篠遺跡ルートが若干短く，山に挟まれた谷部を通り，川に沿っている。道中２か所尾根を跨ぐが，痩せ尾根であり障害には成り得ない。課題は，川沿いで部分的に渓谷状の場所があり，若干高低差がある。一方，大川原ルートは，都城から大川原までは高篠ルートと同様に川に沿って谷部を通る。大川原を通り，赤坂を登りきるとなだらかな台地に至る。あとは国分まで，ほとんど高低差のない台地を経由することになる。この台地が，古代に開発が進んでいたとすると通りやすいルートである。

次に，両ルートに対していくつかの視点から比較する。第１に，古代官道は直線的なルートが多いということである。直線的という視点からは，大川原ルートは赤坂から国分まで安定した台地が続くことから一歩リードする。一方，高篠ルートは地形の制約を受け，起伏や曲がりが大きく，自然地形により規制されたルートといえよう。第２は道幅である。当時の道幅を現状の地形から読み取ることは困難であるが，山間の谷部では十分な道幅は採れなかったであろう。特に渓谷状になった部分では山の傾斜面をテラス状にして道を設置していたと考えられ，最低限の道幅が設けられた可能性が推測される。こうした点からは，大川原ルートが安定している。なお，10世紀前後の上野国付近では，群盗が頻発し甚大な被害が記録される。坂東諸国の富豪層によって組織された群盗が，起動力に富んだ馬を駆使し，律令国家の物質輸送の幹線を襲撃，地方から中央への貢納物を略奪していたことが指摘されている(高島英之2000)。木下良氏は，古代官道が一般的に軍事的意味から挟撃される恐れのある狭隘部を避け，見通しの利く高所を選んだ可能性を指摘する(木下良1991)。この視点に立てば，大川原ルートの方が条件的によい。

従って，島津駅と大隅国府の主要道路としては大川原ルートの方が有力と思われるが，再度，高篠ルートも主要道路と関わる交通路として機能していた可能性を主張したい。

古代の官道には，駅路と伝路の存在が明らかにされている。駅路が，駅家の設置された大規模な計画的直線道路であるのに対し，伝路は地元に密着した交通路であると指摘される(中村太一2000)。また，東山道は律令時代以前において若干ルートが異なっていたようで「古東山道」と呼ばれている。この古東山道は近世の中山道と重なる所が多く，時代による道の変遷が看守される。それぞれの特質としては東山道が直線的であるのに対して，古東山道は直線的でかつ伊那と長倉間の最短距離を結ぶ。鹿児島の場合も幹線道の可能性のある大川原経由ルートに対し，高篠遺跡経由ではないが，付近には日向街道がある。この大川原経由ルートと日向街道の歴史的な変遷も検討する必要があろう。

一方，東山道で和銅６年に開かれた吉蘇路は，桜沢から坂本にぬけるが，鳥居峠を越える他は谷状の地形を川に沿っている。この吉蘇路は東山道の支道にあたるが，自然地形を最大限に生かしている点は，高篠ルートに類似する。

当時の官道には，幹線や支道などの道路網があったと思われるが，高篠ルートはこうした道路網の１つであったと思われる。こうした中で，高篠遺跡周辺は駅路の駅家のような役割を担っていたことを推測し，高篠遺跡もその中の1つの機関であった可能性を想定する。

では自然地形を最大限に生かした高篠ルートは，古代以前にどのような状況であったのであろうか。

高篠ルートの通る福山町，財部町は，多数の発掘調査が行われている。特に東九州自動車道の発掘調査では，前田川・横市川沿い，高篠ルートに関連して興味深い指摘がある。

前原・和田遺跡は，前田川と横市川の分水嶺付近にある。旧石器時代の礫群18基がⅩⅥ層で検出され，それらは東西に並ぶように配置されている。これらの礫群は計画的な設営に基づいているばかりでなく，「礫群の形成は東から西方向へ移行した可能性を強く感じることができる」と報告される。遺跡の南側は谷部，痩せ尾根の上部を東西に移動しているということは，行き着くところは両方とも川の上流になる。分水嶺のこの尾根をまたぐ手だて，川の有効活用を熟知していたとも考えられる。

また，福山城ヶ尾遺跡は，旧石器時代から古墳時代の長期にわたり，生活の拠点であったことが多くの遺構や遺物からわかる。遺跡は，前田川が浸食し形成した河岸段丘上に立地し，旧石器時代に多数の三稜尖頭器やナイフ形石器が，縄文時代には，埋設された４基の土器が出土したことがよく知られている。ここでは以下の点に注目したい。縄文早期に出土した大分県姫島産の黒曜石の10㎝を越す石核が２点出土している。このことから，大分と福山城ヶ尾遺跡を結ぶルートとして今回指摘したコースが有力視される。

さらに，養老４年に朝廷が隼人に軍を出した時，隼人が大隅・日向に７か所の城を構えるが，その１つに牛糞城がある。牛糞城の比定地は大口説と国分説の両者があるが，国分説では，国分市東部の大字川内小字牛の糞が有力場所である。この場所は前田川沿いにあり，今回設定した高篠ルートに乗る。国分郷土誌は，牛糞城の立地場所に対して「国分市川内の牛の糞は人里から遠く離れた山間部にあり，ほとんどが傾斜地で交通の要衝でもないこの地に築いても，戦略的な価値のあるところとは思えない」とするが，今回の高篠ルートで明らかにしたように，牛糞城の場所が交通の要衝として

重要な位置であったことは改めて理解されよう。７世紀初頭段階で高篠ルートは，軍事的にも既に重要なルートとなっていたのである。

高篠ルートは古代以前から交易，情報において重要なルートとしての役割を担っていたようであり，９世紀段階に，高篠ルートの中間地点である高篠周辺に，駅家に相当するような施設が設けられた背景が浮かび上がる。

３．古代官道と牧について

以上，高篠遺跡に対して牧と官道に関わる施設として指摘してきた。この一見異なるようにみえる両者には，深い関わりが認められる。例えば官道に設けられた駅家には駅馬が置かれ，その定数は大路が20匹，中路が10匹，小路が５匹と決まっていた。駅家に馬が必要であれば，近辺に馬の生産・飼育に関わる牧が存在しても良い。長野県御代田町では，古代長倉駅と長倉牧の両者が存在し，佐久市西屋敷南の御代田町と佐久市小諸市の鋳師屋遺跡群前田遺跡からは，「長倉寺」や「長倉□」の平安時代の墨書土器が出土している。また，東山道はこの長倉牧の推定範囲内を横断することから(御代田町誌1998)，牧の中に官道が通っているとする説がある。また，長野県で最大の御牧であった望月牧で，古東山道が南側に認められることも単なる偶然ではなく，牧と官道の有機的な関わりを示すものであろう。

高篠遺跡は北側に横市川が位置し，交通路的な性格が伺え，南側の台地には井牧ノ平や馬立など牧との関わりを示す地名もある。また，地形的にもなだらかであることから牧経営に適した場所であったことが推測される。一方，大川原ルートでは牧～国分間においてなだらかな台地が続く，この台地上には上牧内，牧内，牧神など牧のつく地名が多い。さらに都城において庄内川と横市川に挟まれた場所では「牧の原」「馬場」「内場」などの地名から，牧との関わりが推測される。庄内川が大川原ルート，横市川が高篠ルートであり，両川の接する微高地上に牧が想定されることは注目される。当然これらの地名が古代にまでさかのぼる証拠はないが，可能性として牧と官道が密接に関わることを想定したい。

古代において，牧の設置は土地開発に伴うことが指摘されている。高島英之氏は，牧の設置そのものが地域における巨大開発行為であり，牧がそれ以前には集落・耕地等がない場所に突如として造成されたことを指摘している。また，牧には製鉄・鍛冶工房，皮革製品工房等が付属し，最先端技術基地であると同時に基幹物資の生産流通・各種経済活動・労働力の拠点としての側面も備えていたとする(高島英之1996)。高篠遺跡では，小規模ながら鍛冶生産が行なわれていた。また，多量の焼塩壷は馬への食糧であると同時に塩の集積地の可能性もある。そして，古代の一時期突如として遺跡を形成し，その前後の時期にまったく生活の痕跡が認められないことからは，高篠遺跡が古代開発に伴って出現したことを推測したい。また，それは私的開発ではなく，公的なものであった。それは大隅・薩摩に班田制が導入され，隼人の朝貢停止が命じられてまもなくのことであった。

(註)

平田信芳氏から，薩摩国府から島津駅は地図上で一直線上であり，高篠遺跡もその直線状に想定されるのではないかとの助言を頂いた。

(参考・引用報告書一覧)

阿久根市教育委員会　1982『北山遺跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(１)
姶良町教育委員会　1978『萩原遺跡』姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書
姶良町教育委員会　1980『萩原遺跡Ⅱ』姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書
姶良町教育委員会　1993『萩原遺跡Ⅲ』姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書(５)
出水市教育委員会　1995『市来遺跡・老神遺跡』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書(４)
出水市教育委員会　1996『尾崎A・B遺跡』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書(６)
指宿市教育委員会　1980『橋牟礼川遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(３)
指宿市教育委員会　1981『宮之前遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(５)
指宿市教育委員会　1982『横瀬遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(６)
指宿市教育委員会　1990『中島ノ下遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(８)
頴娃町教育委員会　1990『城ヶ崎遺跡』頴娃町埋蔵文化財発掘調査報告書(１)
大口市教育委員会　1987『島巡遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(６)
大隅町教育委員会　1995『鳴神遺跡』大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書(３)
根占町教育委員会　1993『坂ノ上遺跡』大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(９)
大根占町教育委員会　1996『坂ノ上遺跡』大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
鹿児島県教育委員会　1975『薩摩国府・国分寺跡』
鹿児島県教育委員会　1976『放光寺遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(２)
鹿児島県教育委員会　1977『山神遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(７)
鹿児島県教育委員会　1977『新番所後遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(４)
鹿児島県教育委員会　1980『石峰遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

鹿児島県教育委員会　1982『山崎Ｂ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(18)
鹿児島県教育委員会　1982『小瀬戸遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(19)
鹿児島県教育委員会　1983『苦辛城跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(27)
鹿児島県教育委員会　1983『成岡・西ノ平遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
鹿児島県教育委員会　1985『成岡遺跡Ⅱ他』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(35)
鹿児島県教育委員会　1991『小中原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(57)
鹿児島県教育委員会　1991『平松原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(58)
鹿児島県教育委員会　1992『榎崎Ａ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(63)
鹿児島県埋蔵文化財センター　1992『榎崎Ｂ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(４)
鹿児島県埋蔵文化財センター　『竹牟礼遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(５)
鹿児島県埋蔵文化財センター　1994『保養院遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(11)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2002『小倉畑遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(34)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2002『高井田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(35)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2002『計志加里遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(38)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2002『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(39)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2003『市ノ原遺跡(第１地点)』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(49)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2003『犬ヶ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(50)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2003『森遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(55)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2003『石坂遺跡・西ノ原遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(58)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2003『武Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(59)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2003『永磯遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(61)
鹿児島県埋蔵文化財センター　2003『上ノ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(62)
鹿児島市教育委員会　1992『谷山弓馬場遺跡 上巻』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
鹿児島市教育委員会　1993『谷山菊池城跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(17)
鹿児島市教育委員会　2002『武E遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(37)
加世田市教育委員会　1985『上加世田遺跡１(第Ⅰ地点・第Ⅱ地点)』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(３)
鹿屋市教育委員会　『宮の脇遺跡』鹿屋市
蒲生町教育委員会　1994『藤坂・禁中遺跡』蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書(２)
蒲生町教育委員会　1995『竹牟礼遺跡』蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書(３)
輝北町教育委員会　1998『鳥居ヶ段遺跡他』輝北町埋蔵文化財発掘調査報告書(１)
金峰町教育委員会　1995『山野原遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(７)
金峰町教育委員会　2000『小薗遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
栗野町教育委員会　1995『猪ノ丸遺跡』栗野町文化財発掘調査報告書(３)
国分市教育委員会　1985　『城山山頂遺跡』国分市埋蔵文化財発掘調査報告書(２)
薩摩町教育委員会　『宮ノ前遺跡』薩摩町埋蔵文化財発掘調査報告書
末吉町教育委員会　1986『上中段遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(４)
末吉町教育委員会　1989『井出ノ上遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(８)
末吉町教育委員会　1990『土合原遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(９)
末吉町教育委員会　1991『井出ノ上遺跡Ⅱ』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
末吉町教育委員会　1997『上ノ原遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
末吉町教育委員会　2001『塚の段遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(22)

財部町教育委員会　1987『長十塚遺跡他』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(１)
財部町教育委員会　2002『田平下遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(６)
東郷町教育委員会　1986『五社遺跡』東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書
根占町教育委員会　1995『滝見遺跡』根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(８)
菱刈町教育委員会　1983『岡野古窯趾群』菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書(１)
菱刈町教育委員会　1985『山下遺跡』菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書(３)
日吉町教育委員会　2003『原口遺跡』日吉町埋蔵文化財発掘調査報告報告書(４)
吹上町教育委員会　1991『市坪・笑童子遺跡』吹上町埋蔵文化財発掘調査報告報告書(６)
吹上町教育委員会　1997『赤井田遺跡』吹上町埋蔵文化財発掘調査報告報告書(10)
福山町教育委員会　1994『中尾立遺跡』福山町埋蔵文化財発掘調査報告報告書(２)
牧園町教員委員会　1991『中園遺跡』牧園町埋蔵文化財発掘調査報告報告書(２)
都城市教育委員会　2000『肱穴遺跡(１), 馬渡遺跡(第１次)』都城市文化財調査報告書第50集
宮崎県埋蔵文化財センター　1997『余り田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書
宮之城町教育委員会　2001『一ツ木Ａ遺跡　Ｂ遺跡』宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告報告書(９)
吉松町教育委員会　1999『石打遺跡他』吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書(４)

第１節　土器の製作技術と土器様相

(論文)

網田龍生　1994「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』Ｘ
網田龍生　1999「９世紀の土師器坏」『池辺寺跡Ⅱ』
網田龍生　2001「九州における須恵器製作技法の転換とその背景」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東６　須恵器の製作技法とその転換』
網田龍生　2003「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『考古学研究室創設30周年記念論文集　先史学・考古学論究』Ⅳ
石川県埋蔵文化財保存協会　1997『石川県出土文字資料集成』
岩田明広　2001「須恵器のロクロ技術を考える」『研究紀要』第16号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
金田明大　2001「宮都出土須恵器の製作技法」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東６　須恵器の製作技法とその転換』
岡本武憲　1995「九州南部」『概説中世の土器・陶磁器』
岸本雅敏　1992「律令制下の塩生産」『考古学研究』第37巻第２号
柴田博子・中野和浩・東憲章　1998「日向国出土の墨書土器」『宮崎県史　通史編』古代２
田中広明　2002「腰帯具の変遷と諸問題」『帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
津田武徳　1994「ロクロの回転方向から見た近世陶磁」『大阪市文化財論集』
出合宏光　2000「九州南部における平安時代の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究,ＸＶ』
冨永里菜　2002「馬具の帯金具」『帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
中島恒次郎・城戸康利　1994「薩摩国から来た食器―大宰府条坊跡第89次調査出土資料―」『中近世土器の基礎研究』Ｘ
中村和美　1996「古代前期の煮炊具―肥後・日向・薩摩・大隅―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東４　煮炊具―』
中村和美　1994「鹿児島(薩摩・大隅国)における平安時代の土器―土師器の変遷を中心に―」『中近世土器の基礎研究』Ｘ
中村和美　1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号
森隆　1989「九州系黒色土器の器形的系譜に関する若干の覚書」『古文化探叢』第21集
八木澤一郎　2003「出土遺物～特に椀形土器～について」『石坂遺跡・西ノ原遺跡他』
山本信夫・山村信榮　1997 「中世食器の地域性―九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

第２節　平安時代の遺構について

えびの市教育委員会　2003「北田遺跡」『小岡丸地区遺跡群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第37集
鹿児島県埋蔵文化財センター　2003『永磯遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査
大學康宏　2003「陥し穴遺構について」『椙粉山遺跡―古代遺構・遺物編―』高原町文化財報告書第10集
宮崎県埋蔵文化財センター　1998『荒迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第11集

宮崎県埋蔵文化財センター　1998『中ノ原遺跡他』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集

第３節　高篠遺跡の特質と歴史的な位置付け

北御牧村教育委員会　2000『望月牧野馬除跡大原地点―緊急発掘調査報告書』
国分郷土誌編纂委員会　1997『国分郷土誌』
小島摩文　2002「薩摩の馬文化」『新薩摩学１』
末木健　2000「山梨の牧関連資料」『古代の牧と考古学』山梨県考古学協会
高島英之　1996「牧と古代の土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
高島英之　2000「古代上野国の牧」『古代の牧と考古学』山梨県考古学協会
田中網宏　1969『古代の交通』吉川弘文館
中村太一　2000『日本の古代道路を探す』平凡社新書
福島邦男　2000「信濃の御牧と望月牧」『古代の牧と考古学』山梨県考古学協会
御代田町誌編纂委員会　1998　『御代田町誌　歴史編上―原始・古代・中世―』
本木雅康　2000『古代の道路事情』吉川弘文館

付編　自然科学分析報告

踊場遺跡出土畠跡および７号建物に関わる自然化学分析

はじめに

鹿児島県曽於郡財部町南俣馬立に所在する踊場遺跡は，今別府川と横市川に挟まれた段丘上に位置する。鹿児島県北部から大隅半島北半部にかけての地域には，いわゆるシラス台地が広く分布し，本遺跡の位置する段丘もシラス台地に相当する(鹿児島県地質図編集委員会，1990)。シラス台地を構成しているのは，約２万５千年前に姶良カルデラより噴出した入戸火砕流堆積物であることはよく知られている。なお，斎藤ほか(1994)によると，隣接する末吉地域でシラス台地を開析する河川の河成段丘の地形面を構成する段丘堆積物を，入戸火砕流堆積物の再堆積物いわゆる二次シラスとして記載し，地質図上で本来の入戸火砕流堆積物と区別している。これまでの発掘調査によると，縄文時代早期・中期・晩期および奈良・平安時代～中世の遺構・遺物が検出されている。この内，中世に相当する層準では，桜島文明の降下軽石によって被覆された畠跡が検出されている。また，遺跡北側の丘陵斜面上で造成したとみられる平坦地(テラス状遺構＝７号建物)が認められている。この平坦地は，柱穴，炭化材，焼土跡などが検出されること，さらに遺物の出土状況から，祭祀に関連したと推定されている。

そこで，畑作植物の種類について検証するために植物珪酸体分析を，また中世の木材利用状況を検討するために樹種同定を，火葬墓とされる遺構の内容物について検証するために土壌理化学分析を，それぞれ実施する。

１．試料

植物珪酸体分析を実施する試料は，桜島文明の降下軽石によって被覆された畠跡の畝から採取された２点，畝間から採取された２点，畠境から採取された２点，合計６点である。なお，この畠跡の時代は，15世紀後半と考えられている。試料の詳細は結果とともに表１に示す。

炭化材同定は，掘立柱建物跡の柱穴と推定される土坑に残存する炭化物３点と転倒した炭化材１点，合計４点である。土壌理化学分析は，テラス状遺構で検出された３ヶ所の焼土跡から採取された土壌３点と対照試料として，Ⅲｂ層から採取された１点，合計４点である。炭化材の樹種同定試料と土壌理化学分析試料の詳細は，結果とともに表２に示す。なお，テラス状遺構は，出土遺物から９世紀末～10世紀初頭と推定されている。

２．分析方法

(１)植物珪酸体分析

試料を湿重約５ｇ秤量し，過酸化水素水・塩酸処理，超音波処理(70W，250KHz,１分間)，沈定法，重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5)の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈して，カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入し，プレパラートを作製する。これを400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下，短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ)を，近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

表１　踊場遺跡の植物珪酸体分析結果

種類 / 試料番号	畠１ D-5畝	畠２ D-5畝間	畠２ F-5畝	畠２ F-5畝間	畠境 E-5畝	畠境 E-5畝間
イネ科葉部短細胞珪酸体						
タケ亜科	146	190	185	187	181	202
ウシクサ族ススキ属	19	9	9	21	9	12
イチゴツナギ亜科	3	1	2	2	-	-
不明キビ型	10	12	10	13	7	12
不明ヒゲシバ型	24	13	6	11	14	9
不明ダンチク型	10	5	2	2	7	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
タケ亜科	49	76	61	46	107	82
ウシクサ族	29	15	24	30	35	40
不明	40	22	37	37	38	25
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	212	230	214	236	218	237
イネ科葉身機動細胞珪酸体	118	113	122	113	180	147
総計	330	343	336	349	398	384
組織片						
樹木起源Ⅲ	-	2	-	-	-	-
樹木起源Ⅳ	2	3	-	-	1	5

結果は，検出される種類とその個数の一覧表と植物珪酸体群集の変遷図で表示する。各種類の出現率は，短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも珪酸体毎に，それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(２)樹種同定

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の３断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し，種類を同定する。

(3)土壌理化学分析

土壌理化学分析では，特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸の含量測定を行う。リン酸は骨に多量に含まれ，土壌中に固定されやすく，遺体が埋葬されると土壌中にリンの富化が認められることから，遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。また，リン酸の供給源としては植物体も挙げられる。植物由来のリン酸成分が供給された場合，リン酸含量よりも腐植含量が高くなる。よって，植物体の影響を調べるために，腐植含量も測定した。

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法，腐植はチューリン法でそれぞれ行った(土壌養分測定法委員会，1981)。以下に各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後，軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃，５時間)により，測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し，0.5mmφのふるいを全通させる(微粉砕試料)。

リン分析は，風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し，はじめに硝酸約５mlを加えて加熱分解する。放冷後，過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後，水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し，リン酸発色液を加えて分光光度計でリン酸(P2O5)濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から，乾土あたりのリン酸含量(P2O5mg/g)を求める。

腐植含量の測定は，微粉砕試料0.100～0.500ｇを100ml三角フラスコに正確に秤りとり，0.4Ｎクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え，約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後，0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2Ｎ硫酸第１鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から，乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。この値に1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

３．結果

(1)植物珪酸体分析

結果を表１に示す。

各試料からは植物珪酸体が検出されるものの，保存状態が極めて悪く，表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。各試料からは，イネ属やムギ類などの栽培植物は全く認められない。各試料の産状はほぼ同様であり，タケ亜科の産出が目立ち，ウシクサ族(ススキ属)などが認められる。

なお，樹木起源珪酸体第Ⅲグループや第Ⅳグループ(近藤・ピアスン，1981)が検出される。第Ⅲグループは「Ｙ」あるいは「く」の字状の形態を呈し，大部分の樹木葉部に観察される。第Ⅳグループは網目模様の付いた紡錘形を呈し，第Ⅲグループと同様に大部分の樹木葉部で観察される。

(2)樹種同定

樹種同定結果を表２に示す。炭化材，針葉樹１種類(ヒノキ属)と広葉樹２種類(イスノキ・サクラ属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ヒノキ属(Chamaecyparis)　ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列，１～15細胞高。

・イスノキ(Distylium racemosum Sieb. et Zucc.)

マンサク科イスノキ属

散孔材で，道管はほとんど単独，横断面では多角形。階段穿孔を有し，段数は５前後。放射組織は異性Ⅱ型，１～３細胞幅，１～20細胞高。柔組織は独立帯状または短接線状でほぼ等間隔に配列する。年輪界は不明瞭。

・サクラ属(Prunus)　バラ科

散孔材で，管壁厚は中庸，横断面では角張った楕円形，単独または２～８個が複合，晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型，１～３細胞幅，１～30細胞高。

表２　踊場遺跡の樹種同定結果

遺構名	出土位置	樹種
テラス状遺構	ピット2　D-13区　Ⅲb層	イスノキ
	ピット4　D-13区　Ⅲb層	イスノキ
	ピット12　Ⅲb層	ヒノキ属
	転倒炭化物　Ⅲb層	サクラ属

(3)土壌理化学分析

結果を表３に示す。焼土灰試料３点では，腐植含量が1.66～2.90%，リン酸含量が0.89～1.62P_2O_5mg/gであった。これに対して，対照試料では，腐植含量が5.06%，リン酸含量が3.32P_2O_5mg/gで，両成分とも焼土灰試料より高い値を示す。

表３　踊場遺跡の土壌理化学分析結果

遺構名	調査区	層位	試料名	土性	土色	腐植含量(%)	P_2O_5(mg/g)	備考
テラス状遺構	C－13区	Ⅲｂ層	灰１	SL	2.5Y5/4　黄褐	1.66	0.89	
	D－13区	Ⅲｂ層	灰２	SCL	2.5Y5/4　黄褐	2.48	1.45	
	D－13区	Ⅲｂ層	灰４	SCL	2.5Y4/4　オリーブ褐	2.90	1.62	
	D－13区	Ⅲｂ層	比較３	SL	2.5Y3/3　暗オリーブ褐	5.06	3.32	対比試料

注．（１）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
（２）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
SL：砂壌土（粘土0～15%、シルト0～35%、砂65～85%）
SCL：砂質埴壌土（粘土15～25%、シルト0～20%、砂5～85%）

4．考察

(1)畑作の検証

畝，畝間および畝境ではタケ亜科珪酸体が多産し，次いでウシクサ族が検出された。また，僅かであるが，樹木起源の植物珪酸体も検出された。これまで，周辺で実施した植物珪酸体分析によると，台地の堆積物中では，これらの植物珪酸体が多産することが多い(パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表)。同様な傾向は，南九州の他地域でも認められている(例えば，杉山・早田，1997)。したがって，これらの珪酸体は，土壌に元々含まれていたものに由来すると考えられる。

堆積物中からは，栽培種，あるいは栽培種を含む分類群が検出されていない。このことから，本遺構では，陸稲，あるいは麦類以外の作物が栽培されていた可能性がある。台地上に位置する本遺跡では，花粉化石の産状から栽培について情報を得ることが難しいと想定される。しかし，住居跡などから炭化種子が出土した場合，その種類を明らかにすることで，当時の栽培植物に関する資料が得られる場合がある。今後，その方面からのアプローチを試みたい。

(2)木材利用状況

ピットから出土した炭化材は，イスノキとヒノキ属であった。このうち，ヒノキ属は，比較的大径木が得られ，耐水性・防虫性などにも優れていることから，柱材としては適材である。古代には，このような材質を利用して，宮殿や寺院等の特殊な建物の柱材・構築材としてよく利用されていたことが知られている(西岡・小原，1978；伊東・島地，1979；島地ほか，1980)。テラス状遺構は，祭祀遺構の可能性が指摘されている。ヒノキ属の利用は，寺院などにおけるヒノキ材の利用とも共通しており，興味深い。

一方，イスノキは，遺跡からの出土例では，その多くが櫛であるが，イスノキが自生する九州地方では柱材などにも出土例が知られている(島地・伊東，1988)。強度や耐朽性に優れた材質を有していることから，柱材としては適材であり，材質を考慮した用材が行われたことが推定される。

(3)火葬墓の検証

土壌中に普通に含まれるリン酸量，いわゆる天然賦存量の上限については，川崎ほか(1991)，天野ほか(1991)，Bowen(1983)，Bolt & Bruggenwert(1980)などの調査例を参考にすると，約3.0P_2O_5mg/g程度と考えられる。また，化学肥料の施肥など人為的な影響を受けた黒ボク土の既耕地では，5.5P_2O_5mg/g(川崎ほか，1991)という報告例もある。さらに当社がこれまでの分析調査事例で，骨片などの痕跡が認められる土壌では，6.0P_2O_5mg/gを越える場合が多い。なお，各調査例の記載単位が異なるため，ここではすべてP_2O_5mg/gで統一した。これらの値を著しく越える場合，外的要因(おそらく人為的影響によるもの)によるリン酸成分の富化が指摘できる。

今回，テラス状遺構で検出された焼土が火葬に伴うものか検証するために，腐植含量とリン酸含量を測定した。その結果，リン酸含量は，天然賦存量を上回ることがなく，極めて低い測定値であった。また，腐植含量・リン酸含量ともに対照試料より低い値である。したがって，これらの焼土では，リン酸成分の富化を指摘することができない。よって，土壌理化学分析結果からみる限り，これらの焼土が火葬に伴うものではないと言える。

(分析　パリノサーヴェイ株式会社)

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信(1991)中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.
農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.
Bowen,H.J.M.(1983)「環境無機化学　－元素の循環と生化学－」．浅見輝男・茅野充男訳，297p.,
博友社［Bowen,H.J.M.(1979)Environmental Cemistry of Elements］．Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.(1980)「土壌の化学」．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，309p.，学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976)SOIL CHEMISTRY］，p.235-236.
土壌養分測定法委員会編(1981)「土壌養分分析法」．440p.，養賢堂.
伊東隆夫・島地　謙(1979)古代における建造物柱材の使用樹種．木材研究・資料，14，p.49-76，京都大学木材研究所.
鹿児島県地質図編集委員会(1990)鹿児島県地質図　縮尺10万分の１．鹿児島県.
川崎　弘・吉田　澪・井上恒久(1991)九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23-27.
近藤錬三・佐瀬　隆(1986)植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.
西岡常一・小原二郎(1978)法隆寺を支えた木．NHKブックス318，226p.，日本放送出版協会.
農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖.
ペドロジスト懇談会編(1984)「土壌調査ハンドブック」．156p.，博友社.
斎藤　眞・佐藤喜男・横山勝三(1994)末吉地域の地質．地域地質研究報告(５万分の１図幅)，　111p.，地質調査所．島地　謙・伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧．296p.，雄山閣.
島地　謙・伊東隆夫・林　昭三(1980)古代における宮殿・官衙の使用樹種．古文化財編集委員会編「考古学・美術史の自然科学的研究」，p.249-260，日本学術振興会.
杉山真二・早田　勉(1997)南九州の植生と古環境　－植物珪酸体分析による検討－．月刊地球，19，p.252-257，海洋出版株式会社.

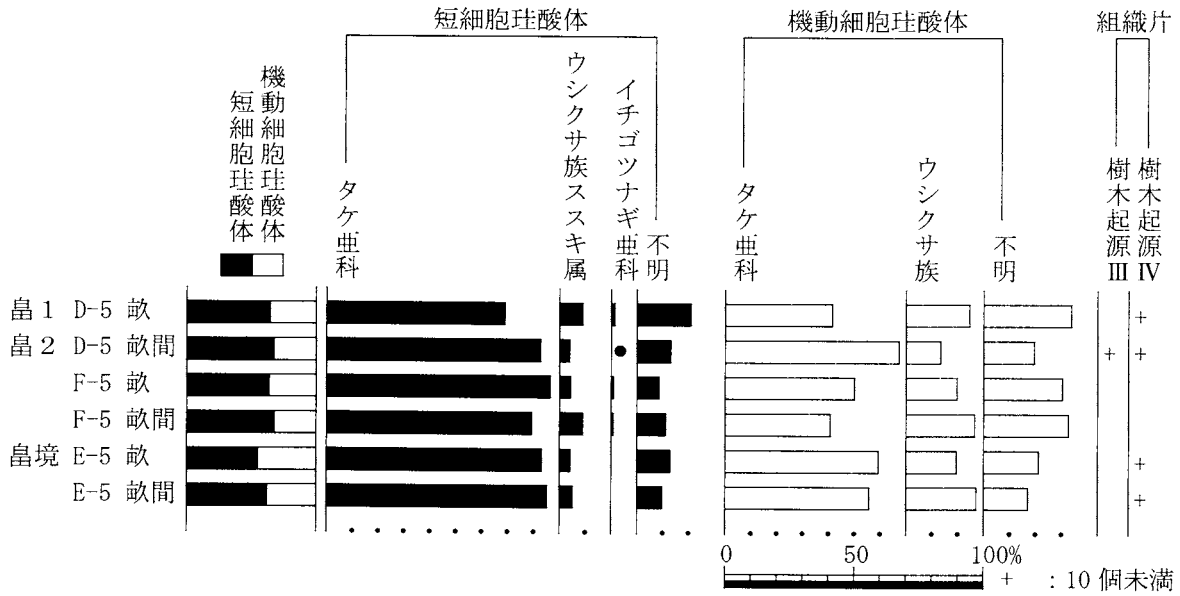
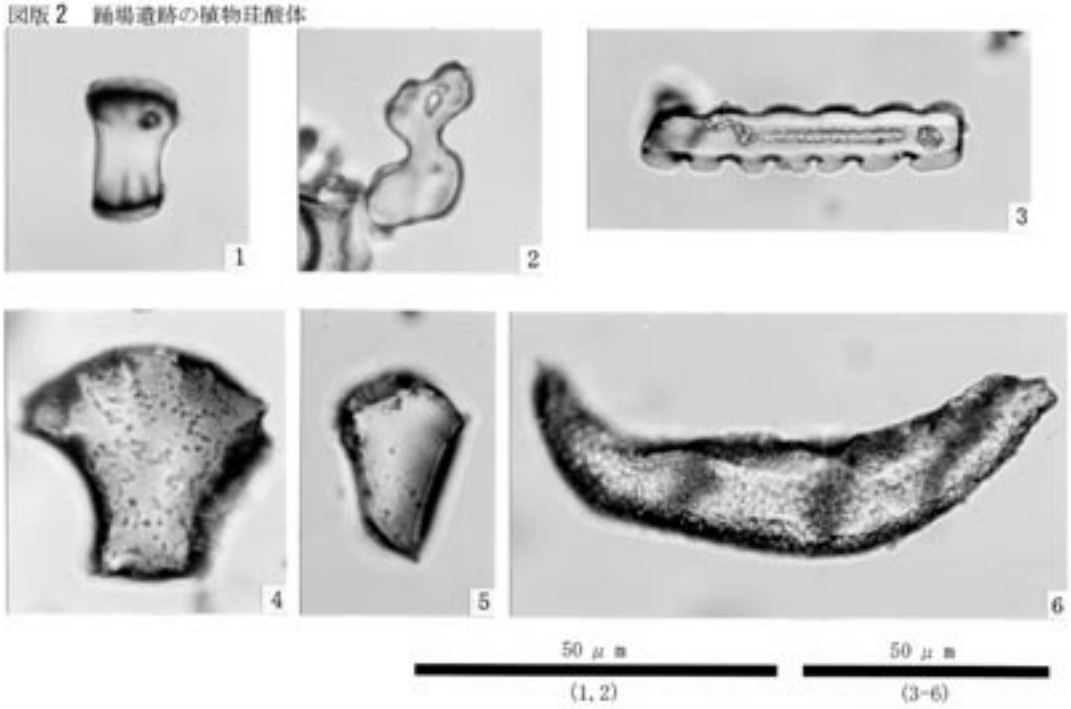


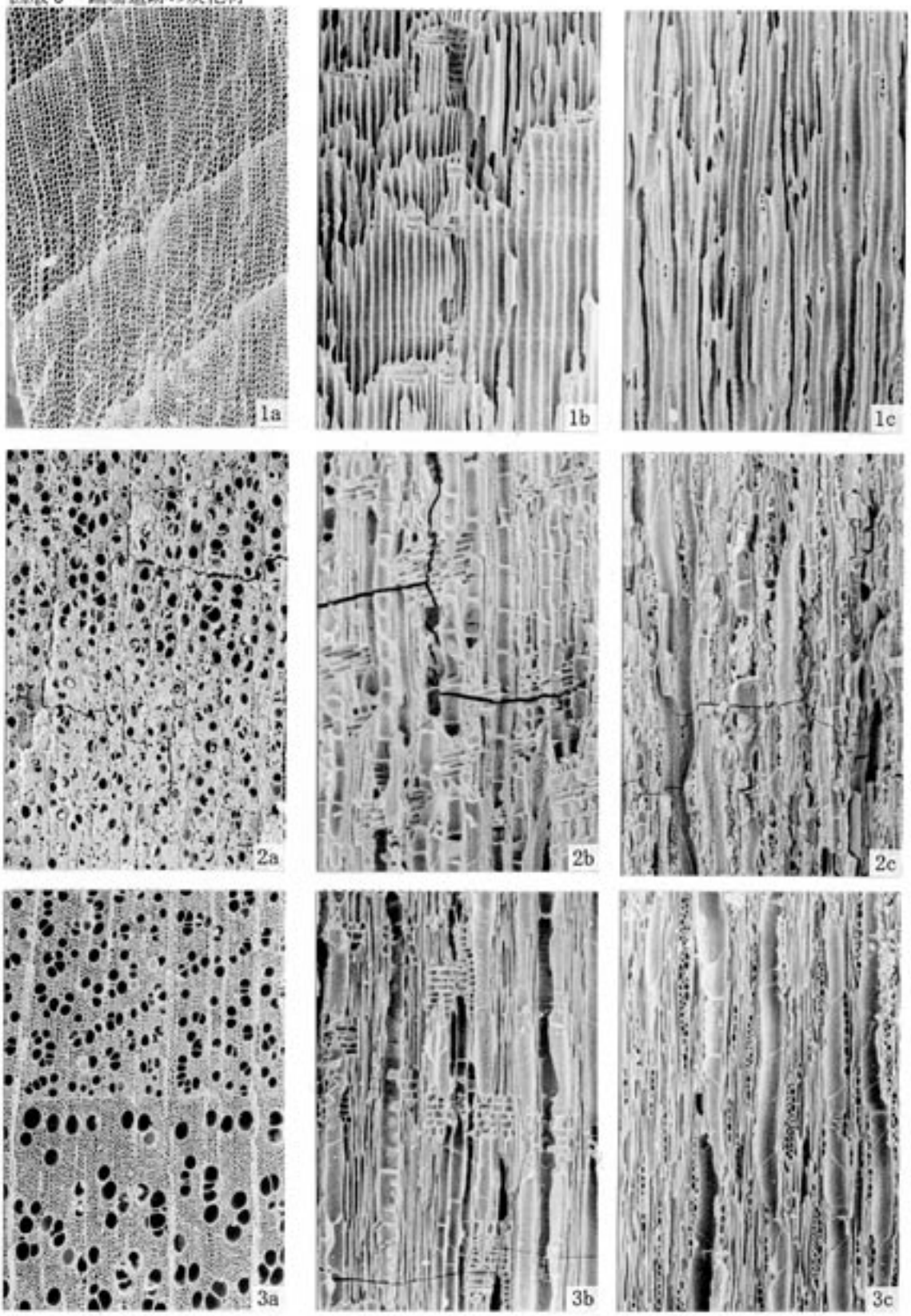
図１　踊場遺跡における植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は１％未満の種類を示す。また、組織片の産状を＋の記号で示す。

図版２　踊場遺跡の植物珪酸体



1．タケ亜科単細胞珪酸体（畠跡2 F-5 畝）
2．ススキ属単細胞珪酸体（畠跡2 F-5 畝）
3．イチゴツナギ亜科単細胞珪酸体（畠跡1 D-5 畝間）
4．タケ亜科機動細胞珪酸体（畠跡2 F-5 畝）
5．ウシクサ族機動細胞珪酸体（畠跡2 F-5 畝）
6．樹木（第Ⅳグループ）（畠跡1 D-5 畝間）

図版3　踊場遺跡の炭化材



1. ヒノキ属（ピット12）
2. イスノキ（ピット2）
3. サクラ属（転倒炭化木）
   a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

踊場遺跡出土土器に塗彩された赤色顔料分析

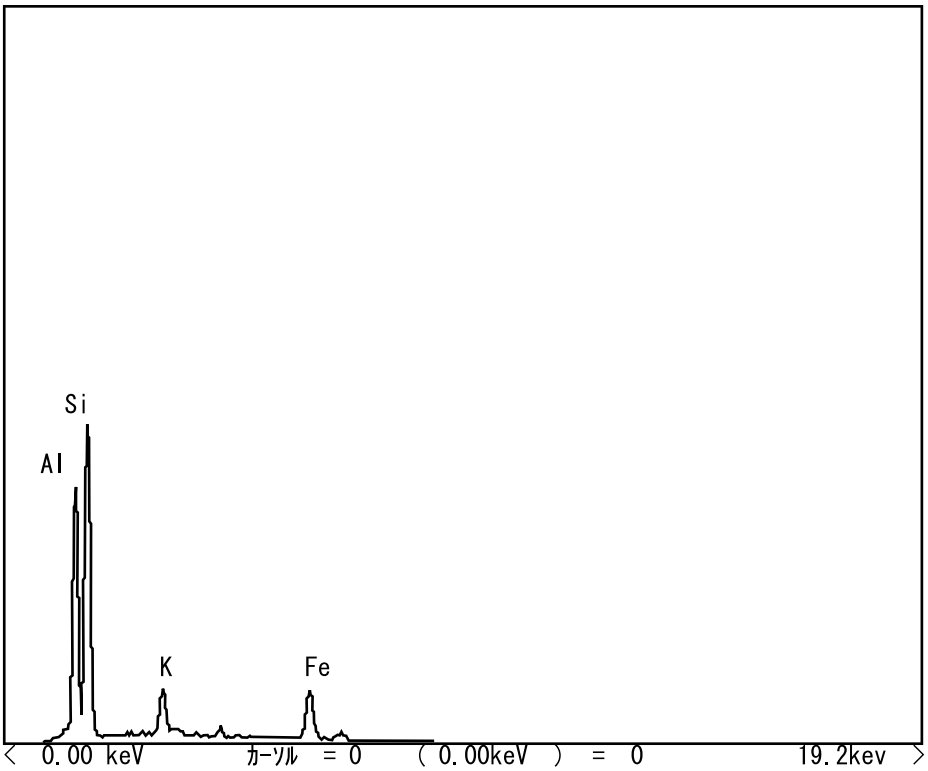
踊場遺跡出土の土器に付着した赤色顔料について実体顕微鏡，走査型電子顕微鏡による形状観察とエネルギー分散型X線分析装置(EDS)によるX線分析を行った。分析は鹿児島県立埋蔵文化財センター所有の機器を使用し，測定は永濵功治(鹿児島県立埋蔵文化財センター)が行った。

顔料とは着色剤の一種で，水には溶けない微粒子である。赤色顔料はその主成分から「ベンガラ」，「朱」，「鉛丹」の３種類に分けられ，ベンガラは酸化第二鉄(Fe_2O_3)，水銀朱は硫化水銀(HgS)，鉛丹は四酸化三鉛(Pb_3O_4)を主成分とする。ベンガラはさらに原料，製法に多様性が認められ，細分化される。赤色顔料の歴史は，古いもので1.5～2万年前に北海道，東北地方においてベンガラが付着した石器や顔料原石が出土した例があり，朱は縄文時代後期から，鉛丹は古墳時代から使われてきた。これまでに鹿児島県内で出土した縄文時代の赤色顔料は，ほとんどがベンガラであり，水銀朱の検出は数例しかない。

分析資料はⅢ層出土土器(平安時代)に付着した赤色顔料である。色の濃淡に違いはあるものの，口から胴部にかけて縦方向に７本，帯状の赤色模様を施しており，赤褐色～茶褐色を呈する。実体顕微鏡で赤色部分の表面を観察したところ，塗彩時に同じ部分を数回塗り重ねていることが分かる。

当センターの走査型電子顕微鏡(日本電子製低真空SEM・JSM-5300LV)で3000倍まで顔料の形状観察を行ったが特徴的な粒子形状は確認されなかった。さらにエネルギー分散型X線分析装置(日本電子製EDS・JED-2001)を用い，加速電圧20.00kV，取り出し角度26.57°，作動距離20.00mm，有効時間100秒の条件で分析したところ，Al，Si，Feの高いピークを得た。また，赤色が塗られていない土器表面を分析し，検出元素の強度比較を行ったところ，赤色部分の方が強いFeを検出した。Al，Siは土器の胎土や付着した土などのコンタミネーションと考えられるため，土器に塗彩された赤色顔料はベンガラなどの鉄を主成分とした顔料である可能性が高い。

(分析　鹿児島県立埋蔵文化財センター　永濵功治)



赤色顔料スペクトル図

高篠・踊場遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

概要

高篠遺跡(9世紀代)と踊場遺跡(9世紀末～10世紀初)出土の鍛冶関連遺物(椀形鍛冶滓，鉄片，鋳造鉄鍋破片)を調査して，次の点が明らかになった。

(1)高篠遺跡では砂鉄原料鉄を素材とした鍛器製作の鍛冶作業が想定される。作業内容は，鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温沸しから，低温成型の素延べ・火造りまでの連続工程である。これらの作業で排出された鉄滓は鍛錬鍛冶滓に分類される。共伴する鉄片の鉄中非金属介在物(鉄鋼中に介在する固形体の非金属性不純物，つまり鉄やマンガン，珪素および燐などの酸化物，硫化物，珪酸塩などの総称)は砂鉄原料に由来する「鉄-チタン化合物」のウルボスピネル(2FeOTiO2)を内蔵する。また，鋳造鉄鍋破片の存在は，鉄素材として「下げ」脱炭材とするか，軟鋼素材の「なめかけ浸炭材」の用途が指摘できよう。
(2)踊場遺跡からの出土滓は，砂鉄系荒鉄(製錬生成鉄で表皮スラグや巻込みスラグ，更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物)の不純物除去や成分調整で排出された精錬鍛冶滓であった。鉄滓の鉱物組成はウスタイトで，この粒内に微細な「鉄-チタン化合物」ウルボスピネルが析出する特徴を示す。

１．いきさつ

高篠遺跡と踊場遺跡は，鹿児島県曽於郡財部町南俣に所在する。東九州自動車道(国分IC～末吉財部IC)の建設に伴って検出された遺跡である。縄文時代から古代に属する複合遺跡に，後者より鍛冶関連遺物が出土した。これらの出土遺物を通して当時の鉄器生産の実態を把握する目的から金属学的調査の運びとなった。

２．調査方法

2－1．供試材

Table．1に示す。高篠遺跡出土品5点と踊場遺跡出土品1点の計6点の供試材である。

2－1．調査項目

(1)肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見を基に分析試料採取位置を決定する。

(2)マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが，本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を，投影機の10倍もしくは20倍のいずれかで撮影したものを指す。当調査は､顕微鏡検査よりも広い範囲にわたって，組織の分布状態，形状､大きさなどの観察ができる利点がある。

(3)顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み，エメリー研磨紙の＃150，＃240，＃320，＃600，＃1000と順を追って研磨し，最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3μと1μで仕上げて光学顕微鏡観察を行った。なお，金属鉄の炭化物は，ピクラル(ピクリン酸飽和アルコール液)で，フェライト結晶粒は5%ナイタル(硝酸アルコール液)で，腐食(Etching)している。

(4)ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と，金属鉄の組織同定を目的として､ビッカース断面硬(Vickeres　Hardness tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に１３６°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み，その時に生じた窪みの面積をもって，その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5)ＥＰＭＡ(Electron Propbe Micro Analyzer)調査

分析の原理は，真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し，発生する特性X線を分光後に画像化し､定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

(6)化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Totale Fe)，金属鉄(Metallic Fe)，酸化第一鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)，硫黄(S)，：燃焼容量法，燃焼赤外吸収法

二酸化珪素(SiO_2)，酸化アルミニウム(Al_2O_3)，酸化カルシウム(CaO)，酸化マグネシウム(MgO)，酸化カリウム(K_2O)，酸化ナトリウム(Na_2O)，酸化マンガン(MnO)，

二酸化チタン(TiO_2)，酸化クロム(Cr_2O_3)，五酸化燐(P_2O_5)，バナジウム(V)，銅(Cu)，：

ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

３．調査結果

3－1．高篠遺跡出土品

(1)TAK-1．椀形鍛冶滓　(高篠No911)

鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓である。平面は不整五角形を呈し，側面は1か所を残して他は破面となる欠損品。表面の色調は茶褐色で僅かに窪み，木炭痕と顆粒状肌をもつ。裏面は浅い皿状で弱く反応痕を残し，炉底粘土を一部に固着する。破面には2～5mm径の気孔を発生させるが緻密な滓である。

Photo.1の①～③に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は白色粒状のウスタイト(Wustite：FeO)と淡灰色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite：2FeO･SiO_2)が暗黒色ガラス質スラグに晶出する。高温沸し鍛接時の排出滓で鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

②③は鉄滓鉱物相の硬度測定の圧痕である。②は白色粒状

結晶の硬度測定で値は449Hvだった。ウスタイトの文献硬度値が450～500Hv(注1)であり，この範疇に収まる。③は淡灰色盤状結晶で値は502Hvを示す。ファイヤライトは通常600～700Hvの範囲に収まる鉱物である。今回の測定値は何らかの理由からか大きく外れた数値となった。この誤差は対象とした測定面積が狭いのと，亀裂の発生に起因するのであろう。

化学組成をTable．2に示す。鉄分が多くて脈石成分(Ti，V，Mn)の低い鍛冶滓成分が得られた。すなわち，全鉄分(Total Fe)は，52.47％に対して金属鉄(Metallic Fe)0.03％，酸化第1鉄(FeO)58.20％，酸化第2鉄(Fe_2O_3)10.30％の割合である。ガラス質成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$)は30.02％でこのうちに塩基性成分(CaO+MgO)を3.08％含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2) 0.30％，バナジウム(V)0.01％で，酸化マンガン(MnO)は0.07％だった。他の随伴微量元素も低めで，酸化クロム(Cr_2O_3)0.01％以下，銅(Cu)0.01％となる。また，鉄に有害な硫黄(S)0.02％，五酸化燐(P_2O_5)0.37％なども少ない数値である。化学組成からも繰り返し折り曲げ高温鍛接の鍛錬鍛冶滓に分類される。

(２)TAK-2．椀形鍛冶滓　(高篠No917)

平面が扇状を呈する偏平な椀形鍛冶滓の破片である。331gを測る。本来は円形に近い形状で大型品が想定される。表面は僅かに中窪みで黒褐色の流動状滑らか肌をもつが，表層剥離箇所は気孔を多発する。裏面側の自然面は，灰褐色で小凹凸の反応痕を刻む。しかし表層剥離箇所は海綿状の多孔質。側面破面は黒色地に2mm以下の気孔が散発するが緻密質だった。

Photo.1の④～⑧に顕微鏡組織を示す。鉱物組成の平均的組織は④～⑥にみられるウスタイトとファイヤライトで構成された沸し鍛接派生の晶癖である。ウスタイトの硬度圧痕は④にあるところの483Hvが測定された。⑦⑧は椀形鍛冶滓の底部で炉床粘土と接する箇所で，こちらは低温派生物で淡灰色盤状結晶のファイヤライトと，微小灰褐色多角形結晶のヘーシナイト(Hercynite：$FeO\cdot Al_2O_3$)を晶出する。⑧にファイヤライトの硬度測定の圧痕を示して695Hvの数値が得られた。ファイヤライトの文献硬度値の範囲内(600～700Hv)に収まっている。

Table.2に化学組成を示す。前述TAK‐1椀形鍛冶滓に近似した成分系である。全鉄分 (Total Fe)54.61％に対して，ガラス質成分27.46％，塩基性成分(CaO＋MgO)を4.0％含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2) は0.30％，バナジウム(V)0.01％であり，酸化マンガン(MnO)は0.07％が含有される。随伴微量元素は酸化クロム(Cr_2O_3)0.01％以下，硫黄(S)0.01％，五酸化燐(P_2O_5)0.27％，銅(Cu)0.01％で砂鉄系鉄素材の鉄器製作で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。

(３)TAK-3．ガラス質椀形鍛冶滓　(高篠No925)

平面が不整台形状のガラス質椀形鍛冶滓の破片。大きさや形状は前述したTAK-1椀形鍛冶滓に準ずるが，こちらの材質は軽質スラグである。該品は操業直後の赤熱状態のうちに，工具で捏ね上げられたのが折れ曲がる。表面は黒色半光沢の表皮を残し，裏面は灰褐色の砂粒肌を呈す。破面の上半分が3～5mm径の気孔を多発するが，下半分は小気孔の散在で一部に灰白色ガラス部分が観察される。

顕微鏡組織をPhoto.2の①～③に示す。鉱物組成の大部分が暗黒色ガラス質スラグで②にみられる組織で占められる。表層部の一部には①にある白色微小多角形状のマグネタイト(Magnetite：Fe_3O_4)の晶出があり，③に観察される淡灰色盤状結晶のファイヤライトが認められる。ファイヤライトは硬度測定を行って665Hvの数値が得られた。この椀形滓は赤熱鉄素材に粘土汁が酸化防止で塗布され，かつワラ灰まぶしで生成された滓である。低温成形の素延べや火造時の排出滓ともいえる。

化学組成をTable.2に示す。鉄分少なくガラス分で占められた滓となる。すなわち，全鉄分 (Total Fe)は16.92％に対して，金属鉄(Metallic Fe)0.05％，酸化第1鉄(FeO)14.02％，酸化第2鉄(Fe_2O_3)8.54％の割合であった。ガラス質成分($SiO2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$)は74.04％で，このうちに塩基性成分(CaO＋MgO)を6.82％と高めを含む。粘土中の混入砂鉄の影響を受けて二酸化チタン(TiO_2) 0.7％は前述TAK－1，2椀形鍛冶滓よりも高めで，バナジウム(V)0.01％，更には酸化マンガン(MnO)も多くて0.19％を含有する。また，五酸化燐(P_2O_5)が0.69％と高値を呈した。成分的にも鉄器製作に際しての素延べ・火造り時に排出されたガラス質の鍛錬鍛冶滓に分類される。

(４)TAK-４．鉄片　(高篠No938)

当初該品は茶褐色鉄錆と酸化土砂に覆われて、4.5×3.4×3.5cmの不定形塊で鉄塊系遺物と分類していた。しかし，試料採取に際して切断したところ，酸化土砂の一部が弾け，長方形断面が現われ，棒状破片が確認されたので名称を鉄片と改めた。

マクロ組織をPhoto.4に示す。上段が5倍の断面である。逆コ字状を呈して一部を欠損するが長方形断面(14×17mm)をもつ条材の可能性を呈する。錆化が激しく大部分はゲーサイト(Goethite：α－FeO･OH)化するが，金属鉄は底辺上部に僅少を残す。その拡大がPhoto.4下段の不定形白色部である。

顕微鏡組織をPhoto.2の④～⑧に示す。⑤～⑧は金属鉄部分を5％ナイタル腐食液(5％HNO_3アルコール液)で腐食した組織である。白色フェライト(Ferrite：α鉄もしくは純鉄)基地にパーライト(Pearlite：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織)が析出しており，このパーライトの面積比からみて炭素含有量は0.25％程度の軟鋼レベルが想定される。⑧はこの軟鋼レベルの硬度測定の圧痕を示す。値は167Hvで炭素含有量に対して若干高め傾向を呈した。時効硬化の影響が現われている。

次に顕微鏡組織のうち④に金属鉄に隣接して巻込みスラグが発見された。暗黒色ガラス質スラグ中に淡茶褐色から白色

の多角形結晶や片状結晶が晶出している。これらの結晶は砂鉄原料に由来した鉄(Fe)－チタン(Fe)系の鉱物相である。

それらの鉱物相のEPMA分析結果をPhoto.6の上段に示す。反射電子像(COMP)に1の番号をつけた淡茶褐色多角形結晶の定量分析値は86.0％TiO_2－2.0％V_2O_3組成でルチル(Rutile：TiO_2)が同定される。これには8.0％MgO，1.4％Al_2O_3，1.3％FeOなど微量元素が固溶する。更に反射電子像のL字状結晶の定量分析値は2の番号のついた箇所で69.1％TiO_2－7.6％MgO-17.1％FeO組成が得られた。こちらもルチル系である。

同じく暗黒色ガラス質基地の分析を行った。３の番号の個所の定量分析値は，44.2％SiO_2－16.2％Al_2O_3－14.8％CaO－5.7％MgO－4.8％K_2O組成の珪酸塩が同定された。これには少量ながら砂鉄特有成分10.7％TiO_2を固溶し，これに1.3％MnOなどの随伴微量元素も検出された。砂鉄原料鉄が巻込みスラグ(非金属介在物)から証明された。

(５)TAK-5.　鋳造鉄片　(高篠No896)

三角形に破損した鋳造鉄片である。鋳造鉄鍋破片の可能性が高い。厚みは最大で6ｍｍ，薄いところで5ｍｍを測る。表裏共に茶褐色酸化土砂と鉄錆に覆われるが内部に金属鉄を残存させる。

Photo.5にマクロ組織を示す。白鋳鉄のパーライトとセメンタイトの共晶であるレデブライト(Ledebulite)と球状セメンタイト内に小片状黒鉛を析出した組織で構成される。まだら(斑)鋳鉄と呼称される組織であり，ねずみ鋳鉄と白鋳鉄の混合している鋳鉄であった。断面の表層には灰黒色の酸化土砂と鉄錆を付着する。酸化土砂の厚みを外すと5ｍｍ厚前後の肉厚が想定される。気孔の発生はほとんど認められない。

Photo.3の①～④に顕微鏡組織を示す。10倍のマクロ組織に対して，②の100倍，③の400倍の拡大となる。両者はナイタル腐食組織である。マクロ組織の繰返しとなるが，レデブライト地の中に共晶状黒鉛が円形状に存在している。この円形部分の硬度測定の圧痕が③であって，値は黒鉛の析出で軟質となり169Hv，④は蜂の巣状レデブライト部分の硬度圧痕で，こちらは硬質の591Hvだった。両方共組織に対応した値を呈している。次に①は腐食(Etching)なしで研磨の組織を示す。写真中央の上部寄りに3μ前後の2点の異物が目に付く。これが鉄中非金属介在物である。介在物組成は硫化物系であり，この周辺には粒状析出物が分布する。燐化鉄共晶物であって，詳細はEPMA分析で述べる。なお，①の左側の不整楕円形状異物がパーライト基地に小片状黒鉛を存在させる。また右下側には小片状黒鉛のみの析出箇所も観察できた。

Photo.6の下段に鋳造鉄鍋破片中の非金属介在物のEPMA分析結果を示す。反射電子像(COMP)に4の番号が付いた箇所の定量分析値は，36.3％MnO－38.8％FeO－34.6％S組成が得られた。硫化マンガン(MnS)と硫化鉄(FeS)の混合組成である。これには砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2) が2.4％固溶されて砂鉄原料鉄を示唆する。更に反射電子像(COMP)に5の番号の付いた粒状異物が帯状に走る部分の定量分析値は124.9％FeO・21.5％P_2O_5組成であった。(124.9％FeOは100％Feと理解されたし)この部分はFe-Fe_3C-Fe_3Pの三元系共晶であるステダイト(Steadite)の存在を知らせる。鉄中に燐(P)が含有され，これが偏析していると理解できる。燐(P)は鉄の溶融点を低下させるため，鋳造時の溶湯の流動性をよくする。このために薄肉鋳物には添加する場合もありうるが，鹿児島県下の砂鉄は高燐傾向にあるので(注２)そのままの原料要因もありうる。むしろ後者の可能性が高く考えられて，在地鉄生産からの産物と見做すべきであろう。

３－２．踊場遺跡出土品

(１)TAK-6.　椀形鍛冶滓破片　(踊場No307)

自然面を殆んど残存しない緻密質な鉄滓の破片である。気孔も少なく僅かに1mm以下のものが目に付く程度であった。10ｇに満たない小破片となる。

Photo.3の⑤～⑦に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は白色粒状結晶のウスタイトとその粒内に淡茶褐色の微細な鉄(Fe)－チタン(Ti)化合物を析出する。ウルボスピネル系の組成であろう。こちらは荒鉄の不純物除去から成分調整の精錬鍛冶滓の晶癖をもつ。⑥は白色粒状結晶の硬度測定の圧痕である。硬度値は646Hvとウスタイトの文献硬度値(450～500Hv)の上限を超えて硬質である。マグネタイト化しているのか，ウルボスピネルの析出物の影響が現われたものと考えられる。⑦は椀形鍛冶滓の底部側に相当して，ファイヤライトと多角形小結晶のウルボスピネルが晶出した組織である。ファイヤライトは硬度測定を行っていて646Hvの値が得られた。組成に対して妥当な数値である。

Table.2に化学組成を示す。鉄分が多く，これに脈石成分(Ti，V，Mn)も高め成分系である。すなわち，全鉄分 (Total Fe)は57.68％に対して金属鉄(Metallic Fe)0.01％，酸化第1鉄(FeO)59.66％，酸化第2鉄(Fe_2O_3)16.15％の割合である。

ガラス質成分(SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O)は19.47％でこのうちに塩基性成分(CaO＋MgO)を3.18％を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2) 3.03％と前述したTAK-1，２の椀形鍛錬鍛冶滓の10倍以上となりバナジウム(V)も0.06％と増加する。更に酸化マンガン(MnO)も0.17％と多く，鍛錬鍛冶の前工程の精錬鍛冶滓に分類される。

踊場遺跡では砂鉄系荒鉄の不純物除去を行った鉄素材の準備が第一番目の工程として存在している。後続の鍛錬鍛冶作業の有無については，出土鉄滓の量が少なくて確認は出来なかった。

４．まとめ

高篠遺跡(9世紀代)と踊場遺跡(9世紀末～10世紀初)出土の鍛冶関連遺物の(椀形鍛冶滓，鉄片，鋳造鉄鍋破片)の調査結果のまとめをTable.3に示す。それらの結果を詳細に説明すると以下の如くなる。

(１)高篠遺跡

①椀形鍛冶滓

出土鉄滓は鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓である。2種類存在しその1つは緻密質滓で，鉱物組成にウスタイト(Wustite：FeO)を晶出し，鉄分を多く含有する。該品は鉄器製作に際して高温鍛接工程で排出された滓である。残るもう一つはガラス軽質滓である。鉱物相は非晶質ガラス質主体で，僅かにファイヤライト(Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)やマグネタイト(Magnetite：Fe_3O_4)で構成される。こちらは後工程の素延べ・火造りといった低温成型時の滓である。両方共に鍛錬鍛冶滓に分類できる。鍛冶に供された鉄素材は，二酸化チタン(TiO_2)を0.3%含有するので砂鉄系が想定される

②鉄片

断面が14×17mmの方形に近い条材の破片である。内部の局部に金属鉄を残存する。炭素含有量は0.2%前後の亜共析鋼クラスの軟鋼である。また，巻込みスラグを内蔵し，これには砂鉄原料由来のルチル(Rutile:TiO_2)を析出する。製鉄は在地浜砂鉄を高温操業で製錬された際に生成される鉱物相である。(注３)

③鋳造鉄片

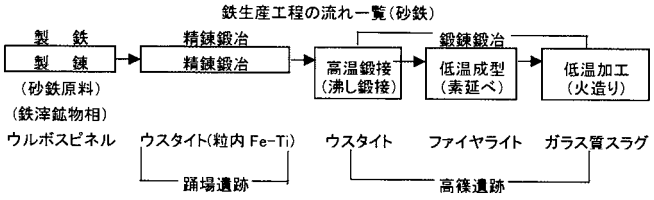
厚みが5mm前後で鉄鍋破片の可能性が高い。金属組織は白鋳鉄のセメンタイト(Cementite：Fe_3C)の一部が塊状黒鉛化したまだら鋳鉄(Mottled　Cast　iron)であった。鉄中の非金属介在物(鉄鋼中に介在する固形体の非金属性不純物，つまり鉄やマンガン，珪素および燐などの酸化物，硫化物，珪酸塩などの総称)は銑鉄特有の硫化物(36.3%MnO－34.6%S－38.8%FeO)で，これに砂鉄特有成分の2.4%TiO_2を含有し，砂鉄原料鉄が想定される。また，Fe－Fe_3C－Fe_3Pの三元系共晶のステライト(Steadite：124.9%FeO－21.5%P_2O_5，酸化物定量のため100%を越える数字となる)が内蔵されて，こちらには高燐系砂鉄の充当が推定できる。在地原料砂鉄の製錬鉄の裏付けとなろう。

鉄片や鋳造鉄片の存在は，廃鉄器リサイクル鍛冶も看過できない椀形鍛冶滓の成分のうち，低マンガン傾向(0.07%MnO)も注目すべき数値である。

(２)踊場遺跡

緻密質な椀形鍛冶滓の破片である。鉱物組成はウスタイトとその粒内に微小Fe－Ti化合物を析出し，化学組成は57.7%鉄分(Total Fe)と多く，二酸化チタン(TiO_2) も3.03%と高めの含有は，鉄塊の不純物除去で排出された精錬鍛冶滓に分類される。該品は前述した高篠遺跡出土の椀形鍛冶滓よりも前工程の排出滓に位置づけられる。

高篠遺跡と踊場遺跡出土の椀形鍛冶滓を鉄生産工程の中で模式図に表現すると下記の様になる。

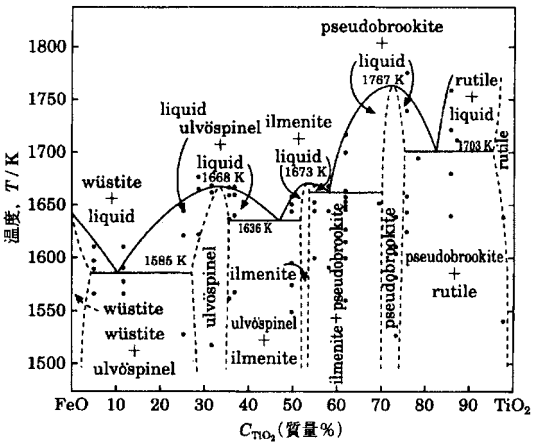


(１)日刊工業新聞『焼結鉱組織写真および識別法』1968．ウスタイトは450～500Hv，ファイヤライトは600～700Hv，マグネタイトは500～600Hv，の範囲が提示されている。また，ウルボスピネルは硬度値範囲の明記がないが，EPMAの組成調査と硬度値を対応させると600Hv以上はウルボスピネルと同定される。

(２)大澤正己・鈴木瑞穂「厚地松山遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『厚地松山製鉄遺跡』(鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第９集)知覧町教育委員会 2000.3.

(３)J,B,Mac chesney and A,Murau：American Mineralogist ,46(1961),572　イルミナイト(Ilmenite)，シュードブルーカイト(Pseudobrookite)，ルチル(Rutile)の晶出は$FeO-TiO_2$二元平衡状態図から高温化操業が推定される。

(分析　九州テクノリサーチ・TACセンター　大澤正己)



FeO-TiO_2 二元平衡状態図

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目								備考
					大きさ(cm)	重量(g)			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
TAK-1	高篠遺跡	J-12	椀形鍛冶滓	9c代	6.2×5.4	81.11				○	○			○			
TAK-2	高篠遺跡	J-15	椀形鍛冶滓	9c代	8.7×8.2	331.0				○	○			○			
TAK-3	高篠遺跡	I-14	椀形鍛冶滓(ガラス質)	9c代	6.0×5.4	57.61				○	—			○			
TAK-4	高篠遺跡	J-14	鉄片か	9c代	4.5×3.4	80.57		(L)		○	○		○	—			
TAK-5	高篠遺跡	G-15	鋳造鉄片	9c代	3.9×2.7	9.37				○	○		○	—			
TAK-6	踊場遺跡	D-9	椀形鍛冶滓破片	9c末～10c初	3.4×1.3	9.51				○	○			○			

Table. 2 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	* 二酸化珪素 (SiO_2)	* 酸化アルミニウム (Al_2O_3)	* 酸化カルシウム (CaO)	* 酸化マグネシウム (MgO)	* 酸化カリウム (K_2O)	* 酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度	Σ* 造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
TAK-1	高篠遺跡	J-12	椀形鍛冶滓	9c代	52.47	0.03	58.20	10.30	19.30	6.50	2.24	0.84	0.76	0.38	0.07	0.30	<0.01	0.02	0.37	0.15	0.01	0.01		30.02	0.572	0.006	
TAK-2	高篠遺跡	J-15	椀形鍛冶滓	9c代	54.61	0.01	59.29	12.17	16.22	5.99	2.12	1.88	0.85	0.40	0.07	0.30	<0.01	0.01	0.27	0.05	0.01	0.01		27.46	0.503	0.005	
TAK-3	高篠遺跡	I-14	椀形鍛冶滓(ガラス質)	9c代	16.92	0.05	14.02	8.54	46.36	17.36	5.52	1.30	2.02	1.48	0.19	0.70	<0.01	0.01	0.69	0.05	0.01	0.01		74.04	4.376	0.041	
TAK-6	踊場遺跡	D-9	椀形鍛冶滓破片	9c末～10c初	57.68	0.01	59.66	16.15	11.33	3.74	2.72	0.46	0.91	0.31	0.17	3.03	0.02	0.02	0.35	0.03	0.06	0.01		19.47	0.338	0.053	

Table. 3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目								所見
						Total	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
TAK-1	高篠遺跡	J-12	椀形鍛冶滓	9c代	W+F	52.47	10.30	3.08	0.30	0.01	0.07	30.02	0.01	高温沸し鍛接、鍛錬鍛冶滓、砂鉄系
TAK-2	高篠遺跡	J-15	椀形鍛冶滓	9c代	W+F	54.61	12.17	4.00	0.30	0.01	0.07	27.46	0.01	高温沸し鍛接、鍛錬鍛冶滓、砂鉄系
TAK-3	高篠遺跡	I-14	椀形鍛冶滓(ガラス質)	9c代	G+微量F+微量M	16.92	8.54	6.82	0.70	0.01	0.19	74.04	0.01	低温型素延べ・火造り鍛錬鍛冶滓、砂鉄系
TAK-4	高篠遺跡	J-14	鉄片か	9c代	Fe・P、巻込みスラグ・R	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄系軟鋼の条材、(Rは高温操業派生物)
TAK-5	高篠遺跡	G-15	鋳造鉄片	9c代	Ce基地に塊状黒鉛、介在物MnSとステダイト	-	-	-	-	-	-	-	-	まだら鋳鉄、MnSには2.4%TiO_2で砂鉄系
TAK-6	踊場遺跡	D-9	椀形鍛冶滓破片	9c末～10c初	W(粒内Fe-Ti化合物)+F	57.68	16.15	2.73	3.03	0.06	0.17	19.47	0.01	砂鉄系精錬鍛冶滓

W:Wüstite(FeO)、F:Fayalite($2FeO \cdot SiO_2$)、G:ガラス質珪酸塩、M:Magnetite(Fe_3O_4)、Fe:Ferrite(α鉄もしくは純鉄)

P:Pearlite(フェライトとセメンタイトの共析晶)、R:Rutile(TiO_2)、Ce:Cementite(Fe_3C)

TAK-1

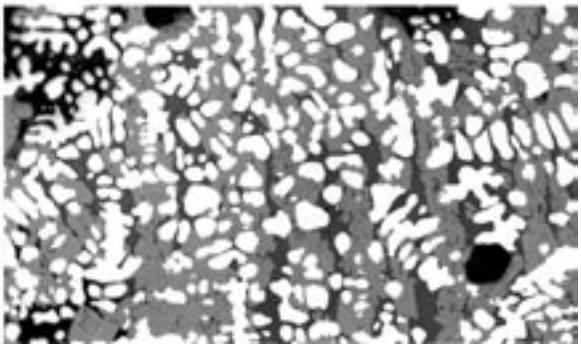
①×100 ウスタイト（粒内微小晶出物）-ファイヤライト

②③×200 硬度圧痕

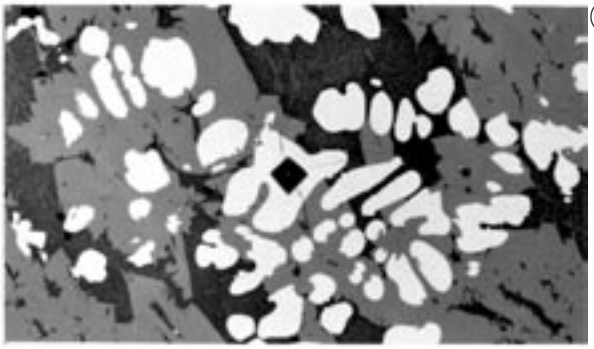
②:449Hv、ウスタイト

③:502Hv、ファイヤライト？+ヘーシナイト

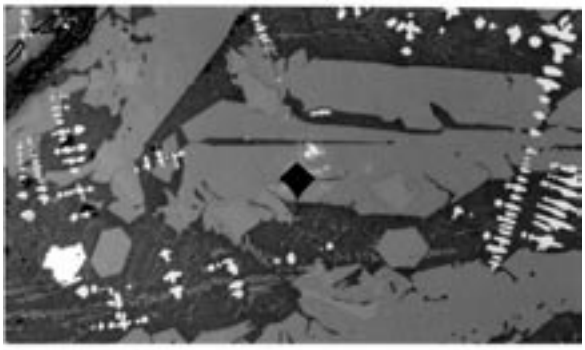
①



②



③



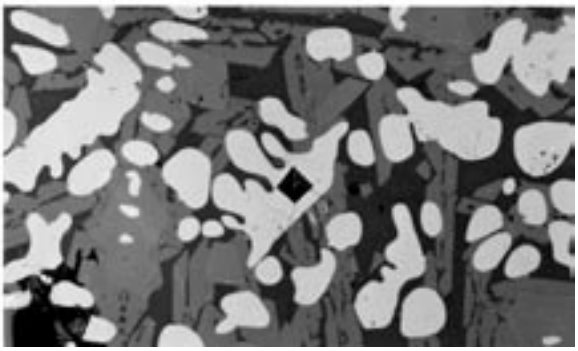
TAK-2

④×200 硬度圧痕:483Hv ウスタイト

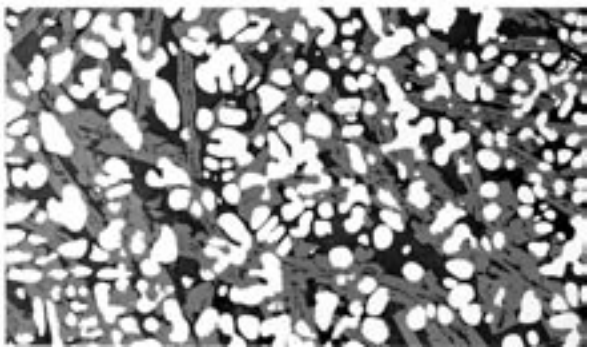
⑤×100⑥×700 ウスタイト（粒内微小晶出物）ファイヤライト ⑦×100 多角形結晶、外周:ウルボスピネル・ヘーシナイト、内側:ヘーシナイト・ファイヤライト

⑧×200 硬度:695Hv

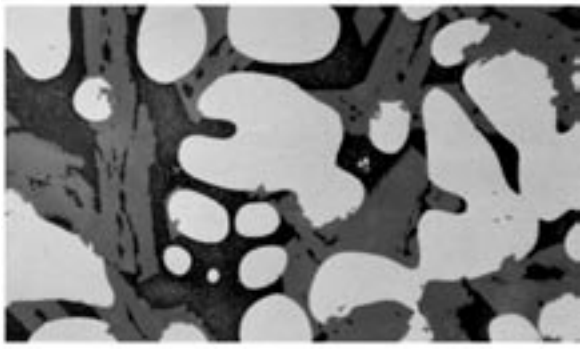
④



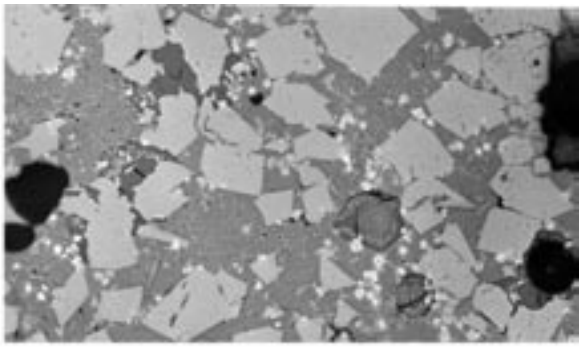
⑤



⑥



⑦



⑧

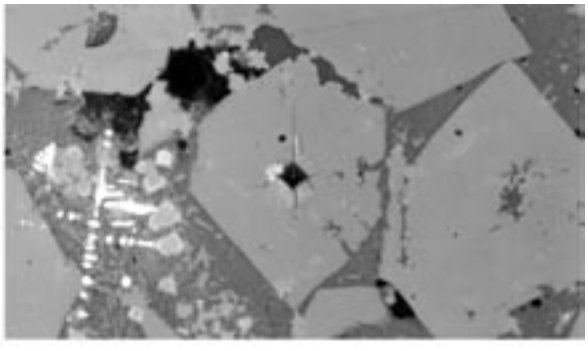
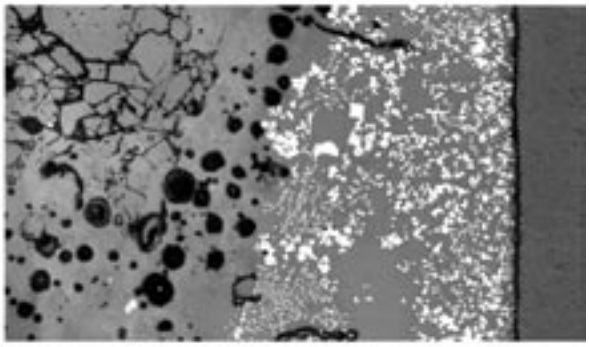
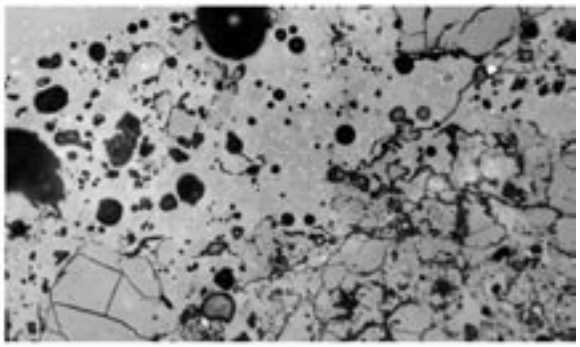


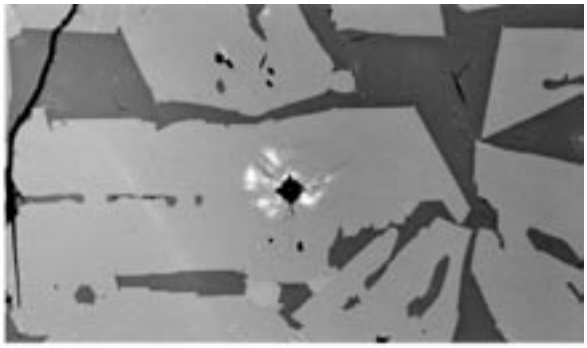
Photo.1 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

TAK-3

①×100 ガラス質滓
マグネタイト晶出
②×100 ガラス質溶融物
③×200 硬度圧痕:665Hv
ファイヤライト

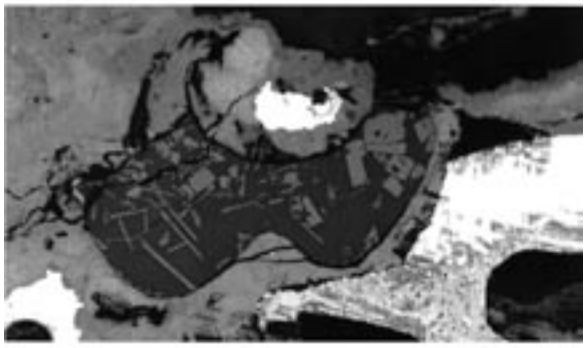


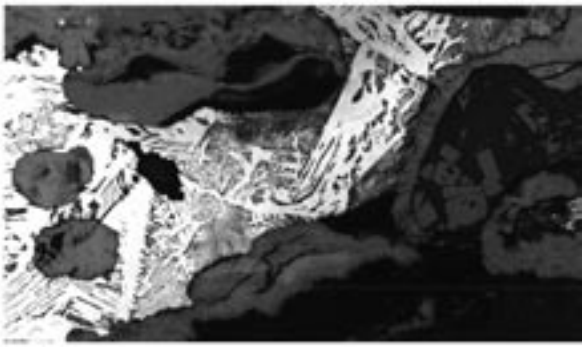




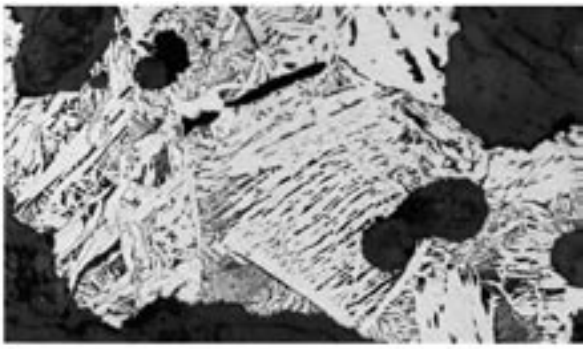
TAK-4

④×100 中央製錬滓片
シュードブルーカイトないし
ルチル。⑤~⑧残存金属鉄:ナ
イタル etch
⑤×100⑥×400 針状フェラ
イト・パーライト:亜共析組織
⑦×100⑧×200 同上
⑧硬度圧痕:167Hv









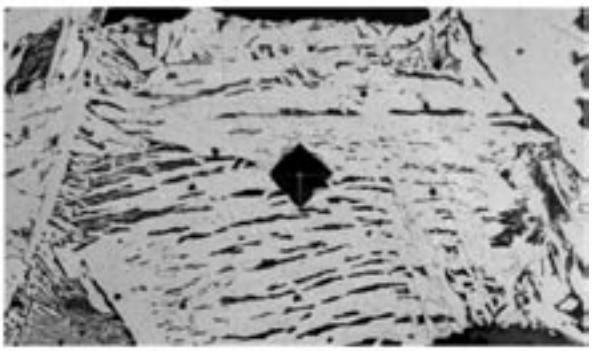
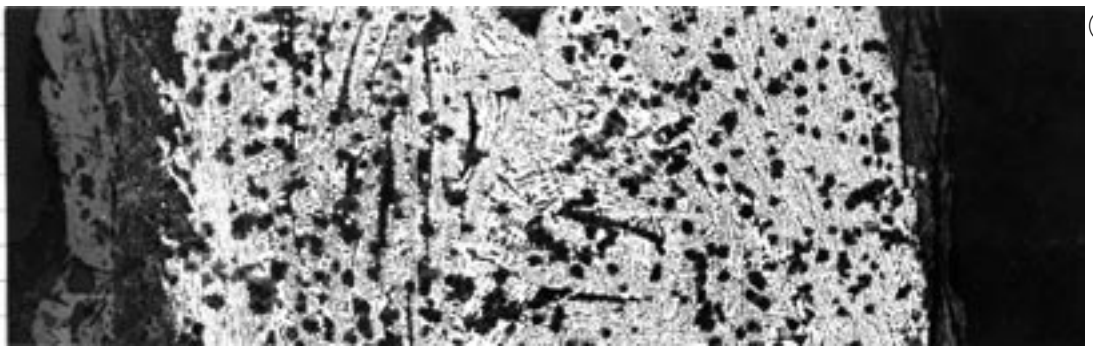


Photo.2 椀形鍛冶滓と鉄片の顕微鏡組織

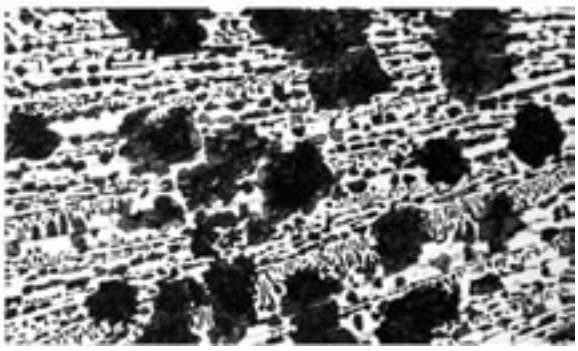
TAK-5

①×400 中央介在物:硫化物
右下:片状黒鉛
②-④ナイタル etch
②×50 斑鋳鉄
③④×200 硬度圧痕：
③169Hv、片状黒鉛・パーライト
④591Hv、レデブライト

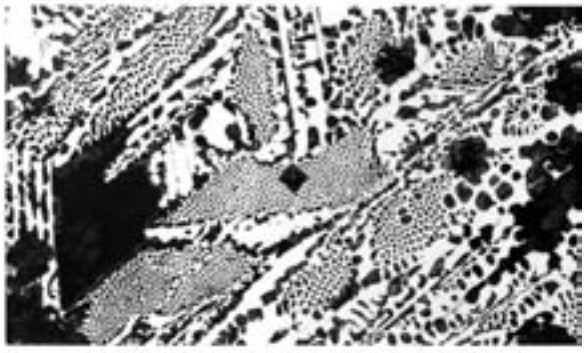
①



②



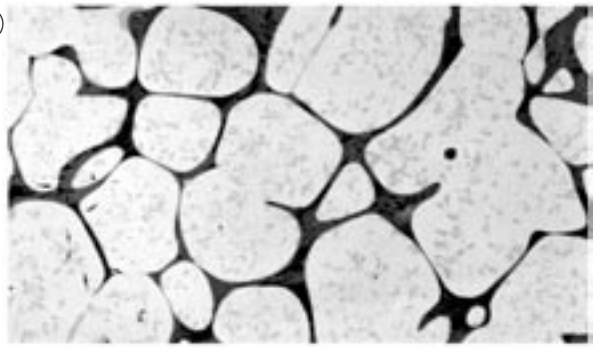
③



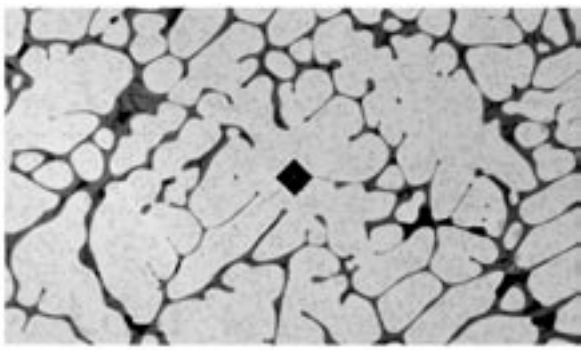
④

TAK-6

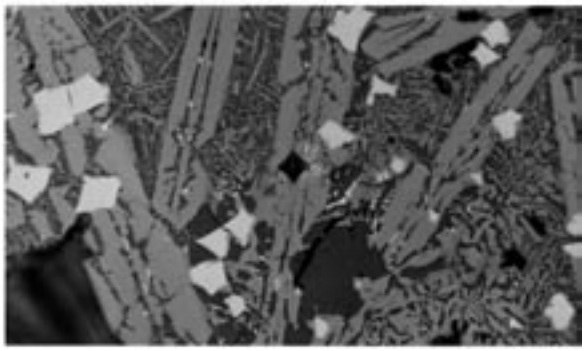
⑤×400 ウスタイト(粒内析出物)
⑥⑦×200 硬度圧痕
⑥:478Hv、ウスタイト(粒内微小晶出物)+ファイヤライト
⑦:646Hv、ファイヤライト
+ウルボスピネル



⑤

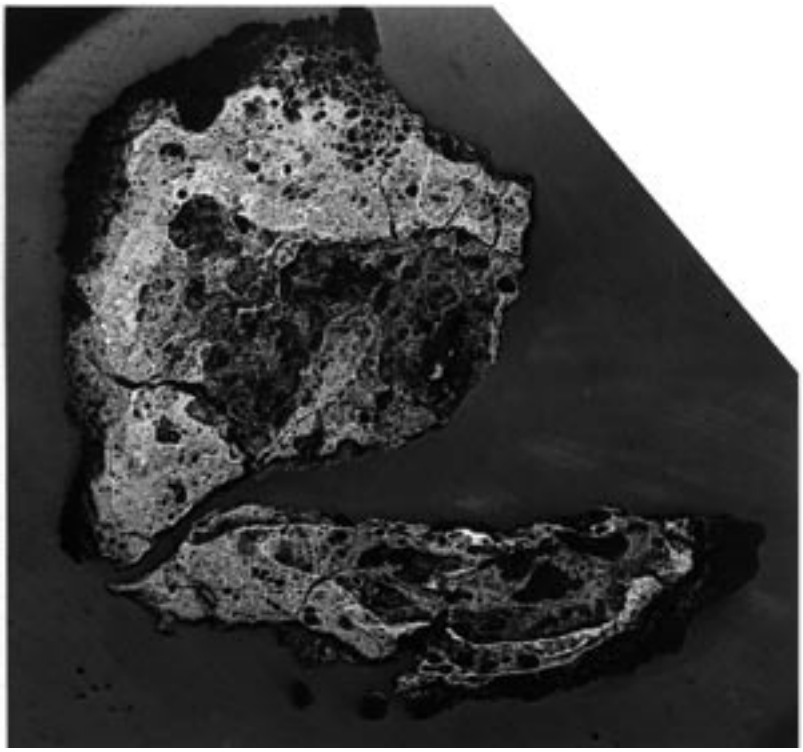


⑥



⑦

Photo.3 鋳造鉄片と椀形鍛冶滓破片の顕微鏡組織



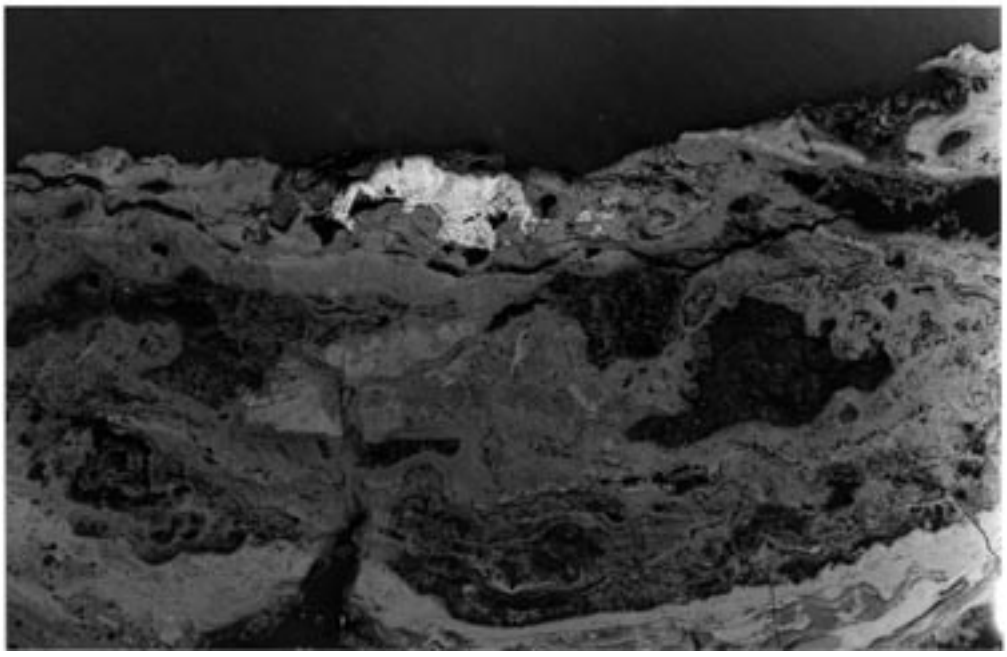


Photo.4 鉄片のマクロ組織(上段：5倍，下段20倍)



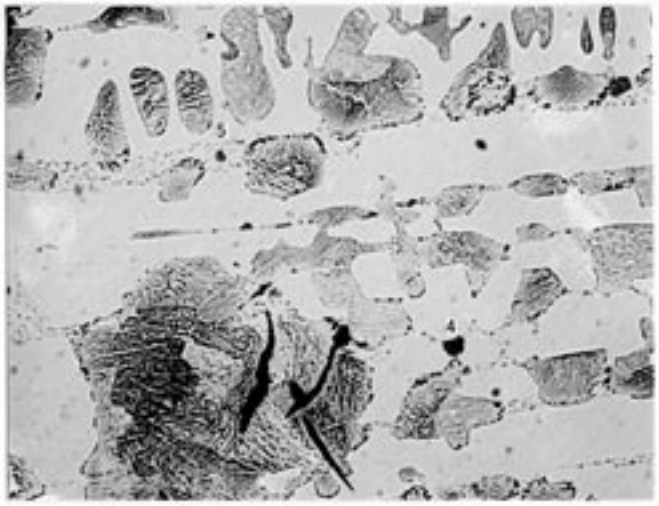
Photo.5 鋳造鉄片のマクロ組織(×10)

COMP
×600



Element	1	2	3
F	0.148	-	-
Na2O	-	-	0.811
MgO	8.041	7.585	5.692
Al2O3	1.436	0.961	16.234
SiO2	-	0.053	44.159
P2O5	0.029	0.031	0.023
S	-	0.015	0.117
K2O	0.023	0.082	4.748
CaO	0.081	0.455	14.815
TiO2	85.986	69.128	10.737
Cr2O3	0.050	-	-
MnO	0.773	0.405	1.288
FeO	1.302	17.099	1.981
ZrO2	0.151	0.195	0.145
SrO	-	0.023	0.303
V2O3	1.995	0.414	0.023
Total	99.953	96.442	101.047

COMP
×1000



Element	4	5
F	-	-
Na2O	-	-
MgO	0.031	-
Al2O3	0.034	0.006
SiO2	0.141	0.087
P2O5	0.033	21.498
S	34.604	0.220
K2O	-	-
CaO	0.006	-
TiO2	2.392	0.016
Cr2O3	0.068	-
MnO	36.296	-
FeO	38.745	124.892
ZrO2	-	0.038
SrO	-	-
V2O3	0.044	-
Total	103.759	146.702

Photo.6 鉄片鉄中非金属介在物のEPMA調査結果
(上段：TAK-4鉄片，下段：TAK-5鋳造鉄片)

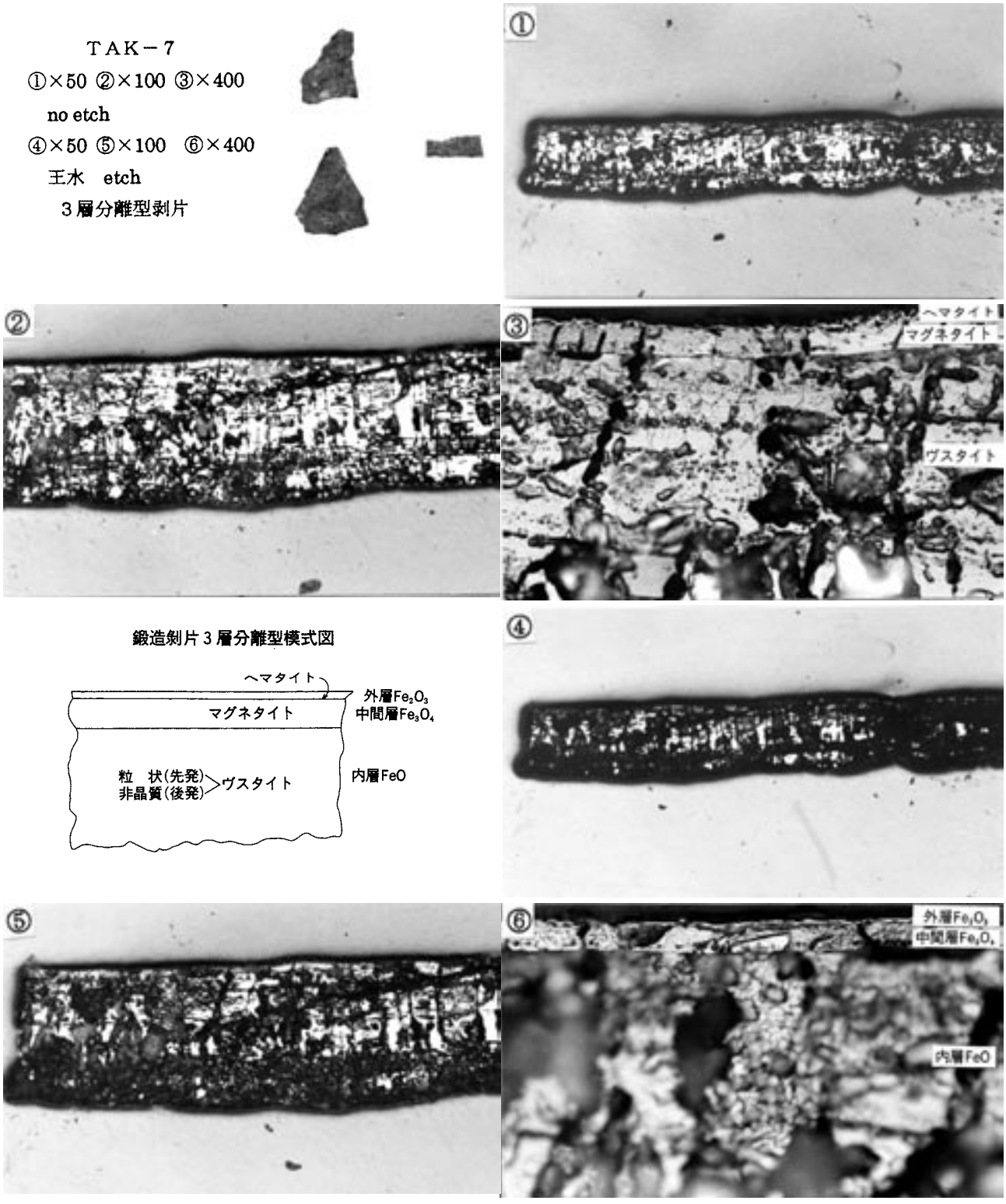


Photo.７酸化膜「剥片」の顕微鏡組織

高篠遺跡、掘立柱建物10の内側焼土面より2点の剥片（4×4×0.25mm）出土、鍛打作業で派生する鍛造剥片に準じた皮膜構造をもつ。該品を鍛造剥片と判定するにはあまりにも量が少ない。赤熱鉄材の表面酸化膜には間違いない。風化影響の大きい剥片である。

高篠遺跡出土金属器の組成について

高篠遺跡出土の金属製遺物についてエネルギー分散型X線分析装置(EDS)によるX線分析を行った。分析装置は鹿児島県立埋蔵文化財センター所有の機器(EDS：JED-2001　日本電子製)を使用し，測定は永濵功治(鹿児島県立埋蔵文化財センター)が行った。

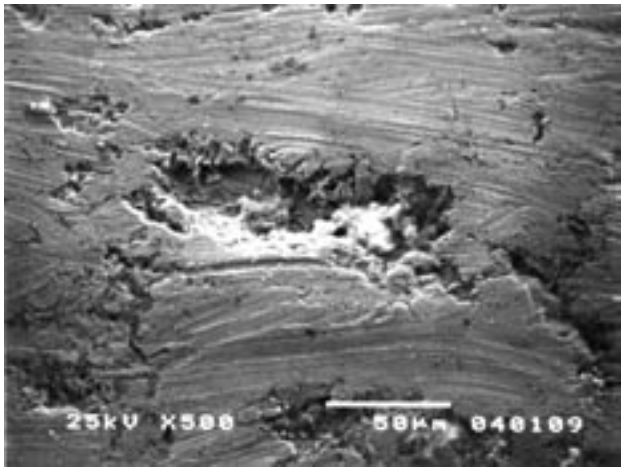
分析資料は第Ⅳa層出土平安時代該当の耳環１点と用途不明の金属板１点で，耳環は全体的に赤みの強い黄色を呈し，内側面の一部に緑色の錆が観察できる。金属板は全体的に緑色で，欠けた部分から内部が黒色を呈していることが分かる。資料は加速電圧25.00kV，取り出し角度29.05°，作動距離20.00mm，有効時間100秒の条件で表面をエタノール洗浄後，100倍に拡大し，面分析を行った。

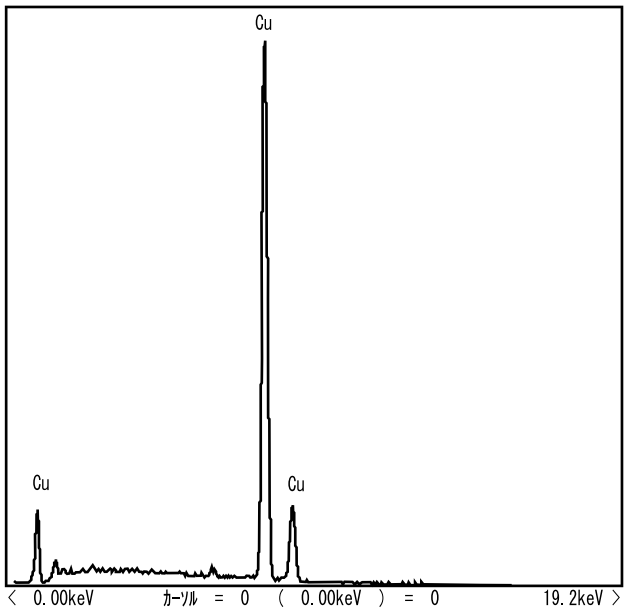
耳環は赤みの強い黄色を呈する部分でCuのピークを得ており(耳環スペクトル図１)，内側面の緑色を呈した部分でスズが検出された(耳環スペクトル図２)。銅は含まれるSn(スズ)の含有量が増えるにつれて，色が銅特有の赤みを帯びた色から黄金色，さらには白色となる。開口部端面の形状は丸みをおびており，電子顕微鏡で観察したところ，環の接線方向に表面を磨いた痕跡が観察された(顕微鏡写真)。表面を被膜した形跡は見あたらず，金などの鍍金に関する成分も検出されていない。

金属板からはCu，Fe等が検出された。板状を呈し，孔があるため製品の可能性も想定できるが組成や形状だけでは判断できない。

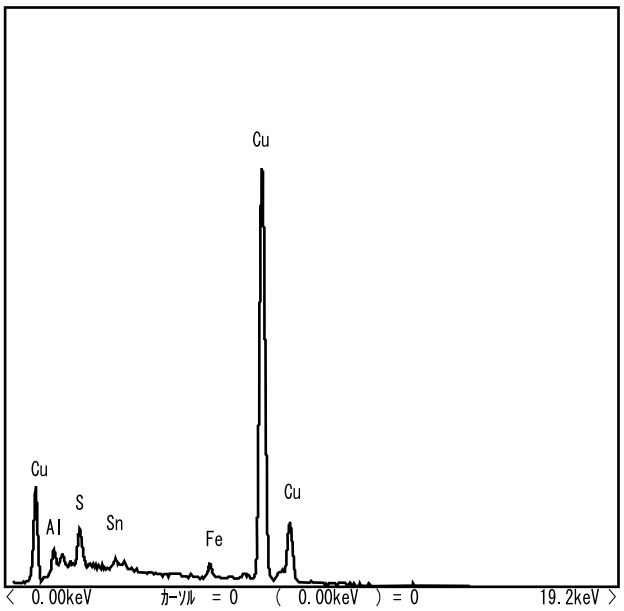
(分析　鹿児島県立埋蔵文化財センター　永濵功治)

参考文献：渡辺智恵美　「耳環小考」『創立三十周年記念誌　元興寺文化財研究所』　元興寺文化財研究所　1997
村上隆　「日本の美術９」No400　至文堂　1999
村上隆，内田俊秀他「文化財のための保存科学入門」角川書店　2002
村上隆　「古墳時代の金・銀製耳環の材質と製作技法をめぐる考察」　『奈良文化財研究所紀要』　奈良文化財研究所　2002





高篠遺跡耳環スペクトル図1



高篠遺跡耳環スペクトル図2

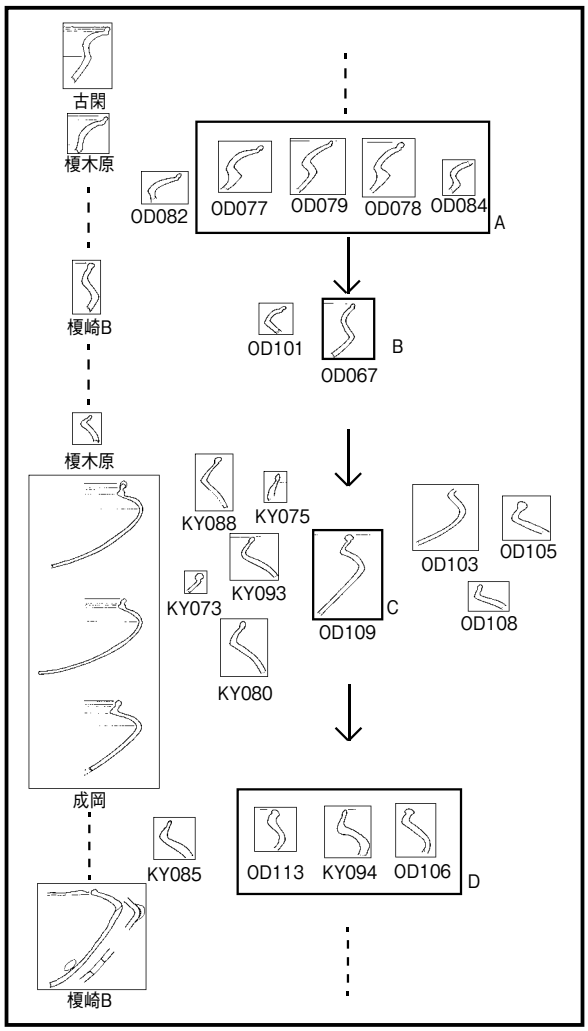
総　　括

３遺跡において，比較検討可能な良好な資料が得られたことは幸いであった。旧石器時代は九養岡遺跡のみの出土であり，比較検討はできないが，細密な石器接合資料の提供は，旧石器時代における石器製作の工程を研究する上で非常に重要な資料となった。今後，同様な接合資料の検討を深めていくことで，旧石器時代の石器製作の研究が深化していくことであろう。縄文時代については踊場，九養岡両遺跡において縄文時代晩期の土器がまとまって出土したため，器形の変遷について検討した。古代については高篠，踊場両遺跡でほぼ同時期で短期間の掘立柱建物跡，遺物の出土がみられたので，その相関関係，遺跡間の相違について検討した。

１　九養岡遺跡，踊場遺跡における縄文晩期土器編年試案

九養岡遺跡と踊場遺跡は，縄文時代晩期の土器が出土している。遺構は残されていないが，土器の残存状態は良好で，九養岡遺跡では黒川式土器，踊場遺跡では入佐式土器と黒川式土器を確認できた。

そこで，両遺跡の入佐式土器と黒川式土器の浅鉢に限定して検討し，遺跡の位置づけを行うこととした。なお，検討に用いる資料は，九養岡遺跡７点，踊場遺跡16点で，残存状態の良い資料とした。



第１図　晩期浅鉢器形の変遷試案

検討の方法として，古閑・榎木原・榎崎Ｂ・成岡遺跡の資料を基礎資料と認定し，九養岡遺跡と踊場遺跡の浅鉢形土器の器形の変遷について検討し，試案を示した。

浅鉢も器種が多岐にわたるため，入佐式土器から黒川式土器まで継続する器形に限定し，検討を加えることとした。そこで，両遺跡で口縁部から胴部最大径まで残る資料を抽出し，器形及び口縁部の形からＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄの４段階に分類した。そのほかの資料については類似資料として提示した。(第１図)

第１図のＡ→Ｂ→Ｃ→Ｄは，器形の変遷を示している。Ａ段階及びＢ段階を入佐式土器の終末段階，Ｃ段階からはいわゆる黒川式土器とした。

Ａ→Ｂ段階では，口唇部内外に明瞭な沈線を施す特徴が認められ，口縁端部に粘土紐を一条貼り足し，上位に引き上げることにより強調される。Ａ段階の頸部は，直線的に大きく外反し，口径が胴部最大径を大きく上回り，胴部外面にはシャープな稜を残している。これらの形状は，古閑１や榎木原１に遡り，古閑１及び榎木原１の顕著な口縁端部の立ち上がりを，踏襲した形状変化とみられる。したがって，古閑１・榎木原１→Ａ段階と推移する。

Ｂ段階は，口径と胴部最大径はほぼ等しく，榎崎Ｂ１とほぼ同様の器形をみせる。榎崎Ｂ１の口唇部の立ち上がりは形式化し，口縁端部は玉縁状断面を呈し，若干胴部が口縁部を上回る。Ｂ段階より少し新しいと判断した。OD101は，黒川式土器に近いと判断したが，Ａ段階・Ｂ段階土器に近似した口縁形状であることから時期差は少ないと判断できる。

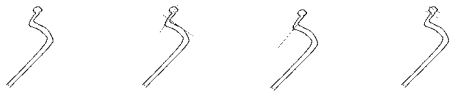
Ｃ類は，装飾的な玉縁状の口縁部をもち，内外面に沈線を巡らす。胴部は口縁部よりも大きく張り出し，頸部は短くなってくる。Ｃ段階のこれらの特徴は，成岡１，２，３とほぼ並行期と解釈できる。

Ｄ段階になると，頸部がさらに短く，口縁部外面の沈線が省略され，玉縁状口縁も形骸化し，消滅の傾向を示す。内面に残る沈線は，Ｃ段階の継承でありその痕跡として認識できる。榎崎Ｂ２では，頸部が形成されず，屈曲部から直接口縁部に移行する。以上のことから，成岡１，２，３と榎崎B2の中間にＤ段階を想定したい。

これまでは，頸部から口縁部，口縁部から口唇部，そして口唇部の形状を中心に浅鉢形土器の動向をみてきたが，胴部形状も，頸部上位の変化に呼応し屈曲胴部から弯曲胴部へと変化している。すなわち，Ａ段階からＤ段階へと胴部が変化する。

口縁部の沈線，頸部から口縁部の傾き，口径と胴部最大部の関係等を器形変遷の重要な要素と捉えた。そこで，これらの要素を８つの観点で検討を試み，表１に示す。

沈線をもつものを○，もたないものを×とした。頸部及び胴部の稜についても同様で，不明なものについては - で表記した。



第２図　遺物計測方法

口縁部の傾きは，図に示す方法で頸部屈曲部から口縁部が何度傾いているかを測定している。角度が小さいほど口縁部の立ち上がりが顕著である。玉縁状の断面の大きさも土器の変遷に影響を及ぼすものと考え，口縁端部の厚さを口縁端部直下，沈線がある場合はその直下の厚さで割ることで値を示した。また，断面が楕円状を呈する資料もあるため，計測する箇所は必ず平行になるよう設定した。ちなみに１というのは，口縁端部とその直下が同じ厚さであることを意味する。

胴からの口径は，胴部最大径になる部位から口縁端部はどの位置にあるかを示している。内側にあるとマイナスになり，胴部より外側にあるとプラスの数値で表される。口縁の長さについては，図に示す方法で行った。口縁部の短化を示す値である。

(岩澤和徳，真鍋雄一郎)

第１表　晩期浅鉢土器観察表

遺跡名	実測番号	口唇内外の沈線		頸部内外の稜		胴部内外の稜		口縁の傾き		玉の大きさ		胴部からの口径	口縁の長さ	分類
		内面	外面	内面	外面	内面	外面	傾き	口唇の立ち	比	有無			
踊場	077	稜	○	○	○	×	○	55	○	1.66	○	22.0	38	☆A
踊場	079	○	稜	○	○	○	○	61	○	0.75	○	17.0	31	☆A
踊場	078	稜	○	○	○	×	○	48	○	1.16	○	15.0	35	☆A
踊場	084	-	-	○	○	○	○	60	-	-	-	12.0	-	☆A
踊場	082	×	○	○	○	×	×	65	○	1.00	○	-	33	≒A
踊場	067	稜	○	○	○	○	○	31	○	1.00	○	0.0	19	☆B
踊場	101	○	○	○	○	-	-	46	○	1.00	○	-	22	≒B
踊場	109	稜	○	○	○	-	-	38	○	2.14	○	(12.0)	16	☆C
九養岡	080	○	○	○	○	-	-	30	○	1.50	○	-	22	≒C
九養岡	093	○	稜	○	○	-	-	39	×	1.66	○	-	20	≒C
九養岡	075	稜	稜	-	-	-	-	-	-	1.66	○	-	-	≒C
九養岡	073	稜	○	-	-	-	-	-	○	1.75	○	-	-	≒C
九養岡	088	稜	○	○	○	-	-	41	○	2.00	○	-	27	≒C
踊場	105	稜	稜	○	○	-	-	40	○	2.00	○	-	18	≒C
踊場	103	-	-	○	○	×	○	21	-	-	-	-	-	≒C
踊場	113	○	稜	○	○	×	○	28	×	1.12	×	(5.0)	9	☆D
踊場	106	○	×	○	○	○	○	22	△	1.50	○	(16.0)	11	☆D
九養岡	094	○	×	○	○	×	×	39	×	1.00	×	(24.0)	16	☆D
九養岡	085	○	×	○	○	-	-	24	×	0.80	○	-	17	≒D
踊場	108	○	○	○	○	-	-	55	×	1.00	○	-	10	≒D

２　古代土器における踊場遺跡と高篠遺跡の時期的位置付け

はじめに

古代の踊場遺跡と高篠遺跡は，時期幅の比較的短かい遺跡であることを提示してきた。また，今回設定した編年案(高篠遺跡報告のまとめに記載)からは，高篠遺跡がⅡ期，踊場遺跡がⅢ期に該当し，両遺跡には時期的なズレがあることを明らかにした。両遺跡は距離的に接近し，型式学的地域性を抽出する必要性は見出せず，土器様相の比較検証で時期判断が可能と思われる。そこで，両遺跡の土器様相の比較を試みたい。

分析の対象は，形態差の認められる土師器坏・椀，黒色土器坏・椀，須恵器坏，土師器甕とする。また，比較は踊場遺跡と高篠遺跡であるが，踊場遺跡では７号掘立柱建物跡とその他のエリアで土器様相が異なることから，二つに区分し，比較の対象を①高篠遺跡，②踊場遺跡，③踊場遺跡７号建物とし，表記もそれに準ずる。

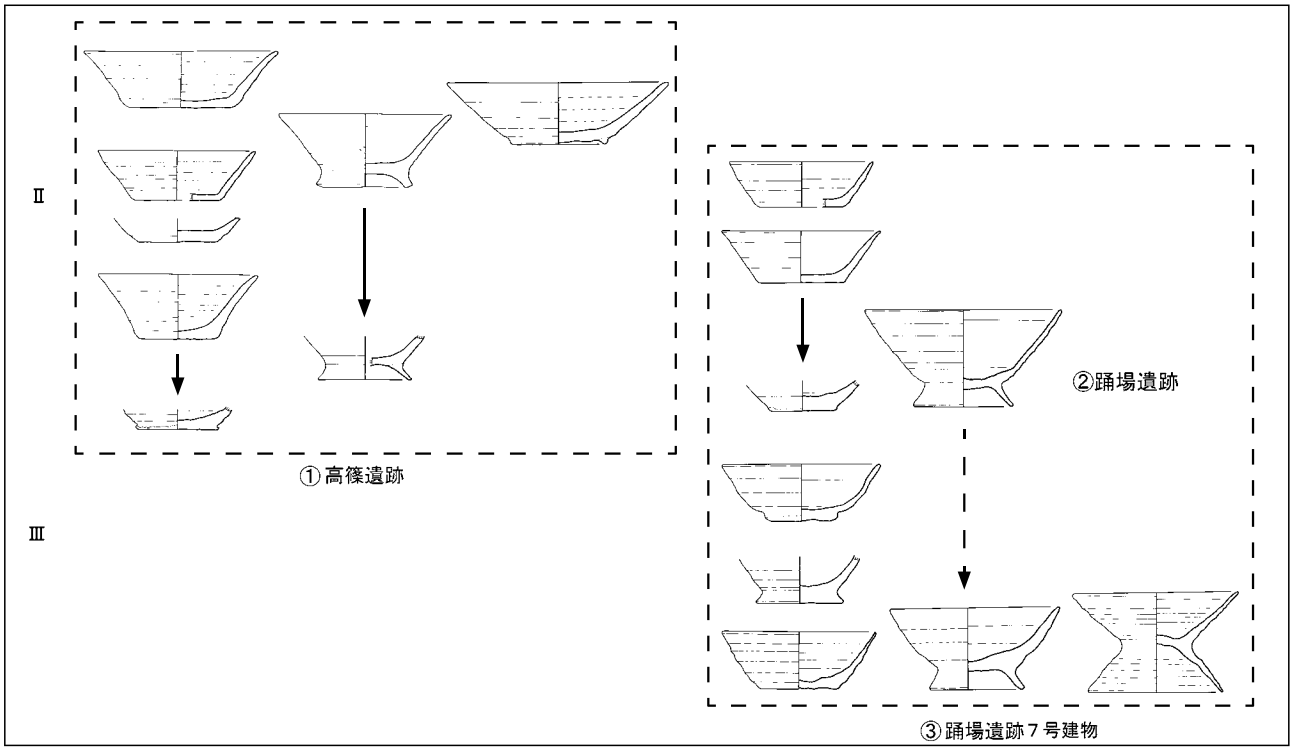
(１)　土師器(第３図)

高篠遺跡の土師器坏は平底が主体で，少数であるが突出の底部や充実高台が含まれる。踊場遺跡も平底が主体であるが，高篠遺跡に比べ突出の底部の割合が高い。踊場遺跡７号建物では突出底部が主体で，平底が従属傾向となる。提示した編年案では，Ⅱ期は平底主体，Ⅲ期は突出の底部が多くなることを指摘したが，①～③の様相からはⅡ期からⅢ期への変化が看過される。踊場遺跡７号建物では，底部外面に底部切り離し後のナデ調整がほとんど認められず器壁が厚いものがあるが，これはⅣ期以降の特徴であり，次期以降のより新期の様相もみられる。

次に，高篠遺跡の固有の口径13～16cm，器高４cm前後の大型で浅手の坏を注目する。高篠遺跡ではこの半数に砂粒を多く含むが，踊場遺跡では確認されない。一方，踊場遺跡７号建物は，長脚の高台付坏が特徴的にみられる。県内で同種の高台付坏は，市ノ原遺跡第１地点が知られるだけである。市ノ原遺跡第１地点がⅣ期に属すことから，この坏も同系統と評価できるが，出土量の充実からは踊場遺跡７号建物が起点と考えたい。なお，この坏に関しては，時期的な指標とともに用途としての特殊性も考慮すべき資料といえる。

製作技法に関しては，高篠遺跡で顕著であった体部外面下端の未調整と見込みの静止ナデが，踊場遺跡では少ない。前者はⅡ期からⅣ期への時期差を示す属性であり，後者も検証し得ていないが時期差を示す指標の可能性がある。

高台付椀は，高篠遺跡で高台高1.0cm以内と1.0～1.5cmがみられ，端部に面をもつものが多く，体部は直線的である。踊場遺跡でも，高台高や体部形態はほぼ類似するが，高台高1.5cmを越すものも散見できる。高台の端部は高篠遺跡に比べて面をもつものは少なく，丸く仕上げる。また，踊場遺跡では器壁の厚いタイプがあるが，高篠遺跡では確認されない。



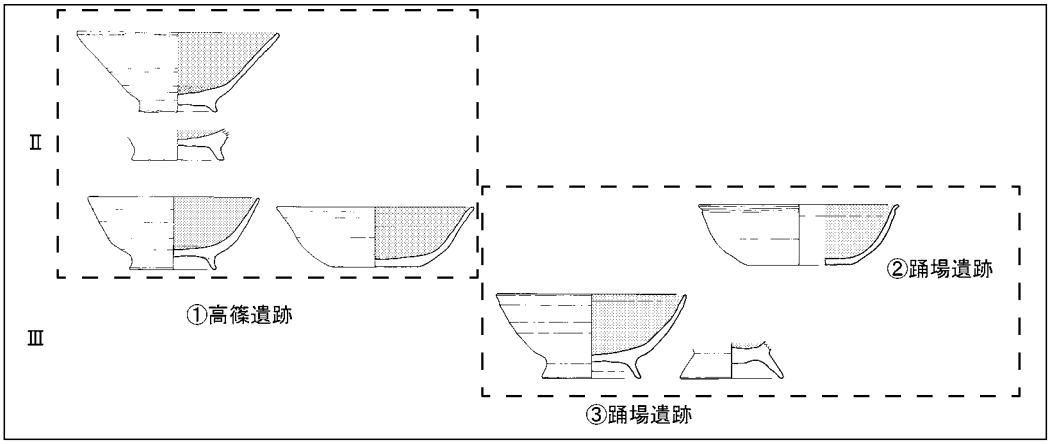
第３図　高篠，踊場遺跡土師器相関図

（2） 黒色土器(第４図)

黒色土器椀は土師器椀を踏襲し，高篠遺跡では高台高1.0cm以内と1.0～1.5cmで端部に面をもつが，踊場遺跡では高台高1.5cmを越す例もあり，端部は丸くなる。一方，体部は共に直線的なものと曲線的なものがあるが，曲線を呈すものでは，上端は直線的になる高篠遺跡に対し，踊場遺跡では全体が曲線的になるものが多い。この違いは，体部外面の調整と関係し，高篠遺跡では器形を整えるためにケズリが多用され，特に曲線的なものに顕著である。巻上げや回転ナデの成形を専らとした踊場遺跡との技術的違いに起因する可能性が大である。

中村和美は，このケズリ手法を９世紀前半の特徴として指摘している。両遺跡の資料からは，Ⅱ期とⅢ期の特徴として指摘できる可能性がある。即ち，ケズリ手法がⅡ期，巻き上げや回転ナデ手法がⅢ期となる。

踊場遺跡７号建物では，外面の体部と高台の接合部に強いナデ，底部外面の中心部まで丁寧に回転ナデが施され，中心部が膨らむものが存在する。これらは，Ⅳ期の新しい様相と指摘できる。なお，平底の黒色土器坏も数が少ないが，ほぼ共通した変遷が認められる。

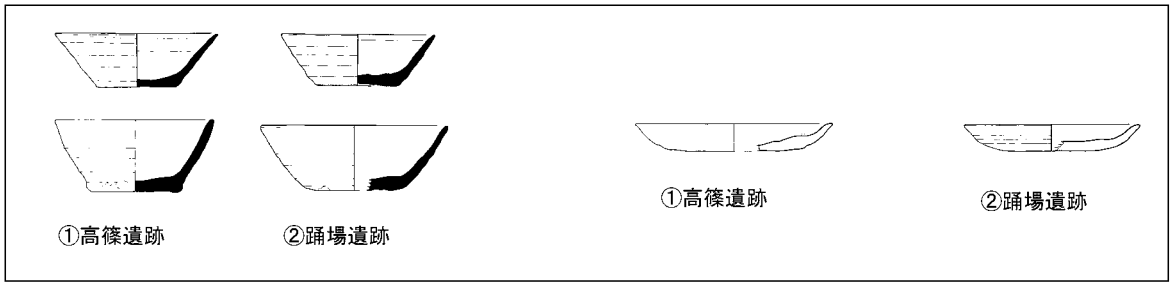


第４図　高篠，踊場遺跡黒色土器相関図

（3） 須恵器(第５図)

須恵器坏は，両遺跡に火襷が存在する。須恵器坏は両遺跡間で，差異は認められない。

高篠遺跡の須恵器坏の大多数は，体部外面下端からナデられ，底部は若干突出し，ナデも深い。こうした特徴は土師器坏とは異なり，須恵器が丁寧に造られたとみることもできるが，他方，この特徴がⅢ期以降の基本属性である点にも注目したい。つまり，土師器坏では認められた両遺跡の差異が，須恵器坏では認められない。加えて，Ⅲ期の属性を備えている点では，高篠遺跡の須恵器坏をⅢ期に組み込むか，あるい



第５図　高篠，踊場遺跡須恵器坏，土師器皿相関図

は坏の製作技法が，他の器種に先行したと解釈できる。なお，見込みの静止ナデの有無は，土師器坏と共通し，高篠遺跡と踊場遺跡で若干異なる。

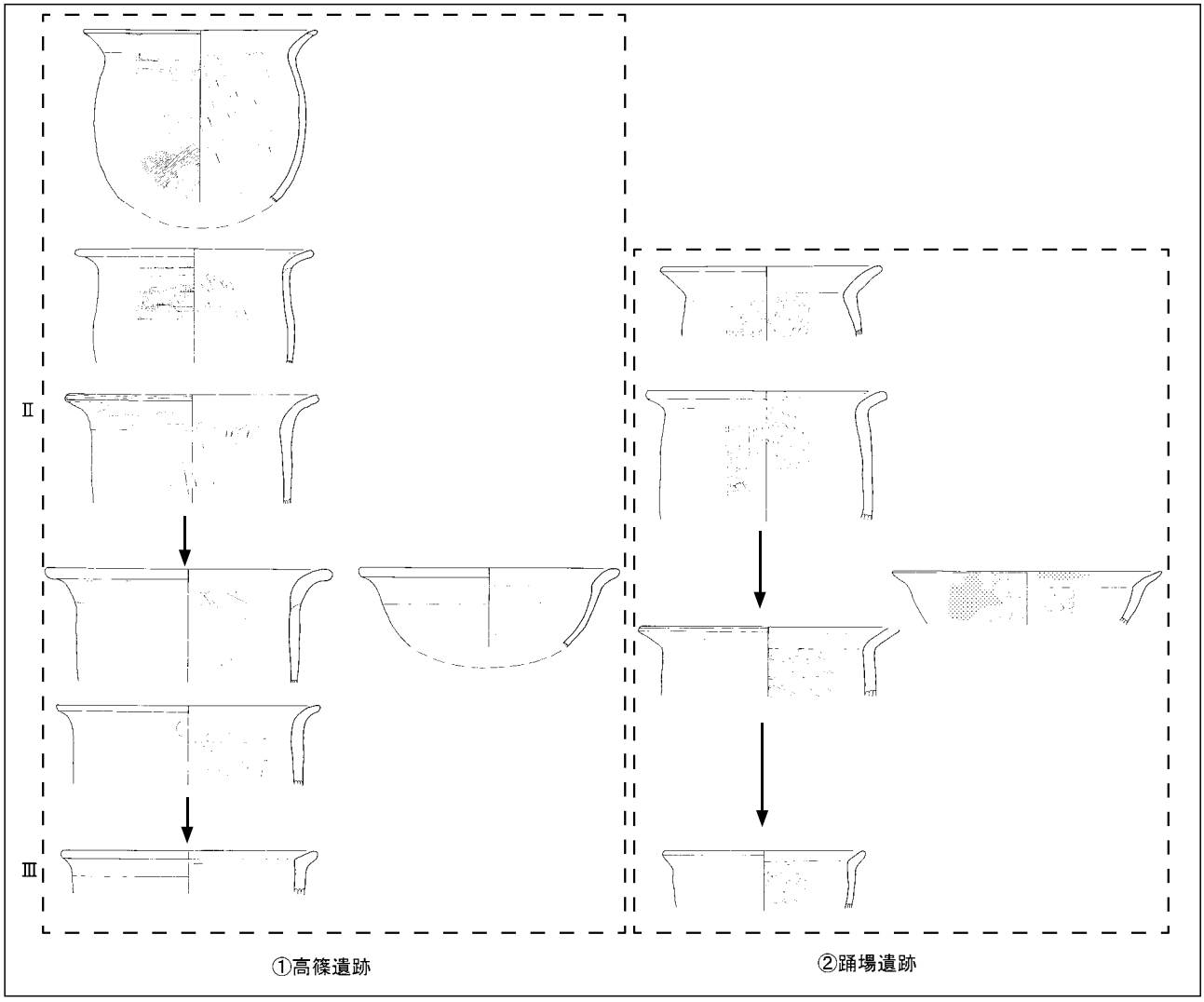
（4） 土師器甕(第６図)

高篠遺跡の土師器甕は，口縁部が長く胴部が膨らむ形状から，口縁部が短く胴部が直行する形状への変化が認められている。器壁は薄手から厚手になり，横ハケから縦ハケそしてナデへ，橙色の器面から褐色の器面色調に変遷する。踊場遺跡でも同様の変化が想定されるが，古相を呈すものが少数で，明確な変遷を遺跡内で把握できない。この傾向は，食膳具にみられた両遺跡のズレと合致し，甕の存在しない踊場遺跡７号建物は，検討から除外する。

３　高篠遺跡，踊場遺跡の時期的な位置付け

高篠遺跡がⅡ期を主体に若干Ⅲ期を含み，踊場遺跡がⅢ期を主体に若干Ⅱ期とⅣ期を含む。つまり，両遺跡はⅡ期後半からⅢ期前半において時期的な並行関係が存在する。さらに，踊場遺跡７号建物は踊場遺跡の中でも新しく位置付けられ，高篠遺跡との間に時期的な並行関係は無い。

以上から，①高篠遺跡⇒②踊場遺跡⇒③踊場遺跡７号建物への変遷が想定される。



第６図　高篠，踊場遺跡土師器甕相関図

4　古代の掘立柱建物跡について

高篠遺跡，踊場遺跡において，複数の掘立柱建物跡の資料が得られ，両遺跡で異なる傾向がみられた。そのうち建物配置，建物規模の観点からのまとめを行う。

建物配置については，高篠遺跡は建物主軸が南北をとるものが大半を占める。建物の密集度が高く，配置にも高い規格性が看取され，律令的影響を強くうかがわせる。踊場遺跡では建物主軸が北西-南東方向をとり，方位ではなく地形にその規定要因が認められる（７号建物においては何らかの方位を意識する可能性がある）。建物は分散しており，遺物等も含め宗教関連施設を伴う一般集落の可能性がうかがえる。

遺構規模については，高篠遺跡が柱間190cm前後の建物が主体で，当時の主流の遺構規模をもつのに対し，踊場遺跡は柱間250cm前後と通常より大型となる。これは先述の律令的影響を受けた高篠遺跡，宗教関連の踊場遺跡との差異を反映したものであろう。

高篠遺跡，踊場遺跡の掘立柱建物跡は，当時の財部郷への律令体制の浸透と弛緩，一般集落への影響力，当時の信仰を考える上で非常に興味深い資料である。

5　古代のまとめ

高篠遺跡は古代，９世紀前半から後半にかけての短期間に営まれた遺跡であるが，遺物量や掘立柱建物跡の密度からは，高篠遺跡の歴史的重要性がうかがい知れる。

石帯や墨書土器からは官衙的な位置づけが，「牧」の墨書土器や馬具，大量の焼塩壷からは牧経営が推測される。また，大隅国府と島津駅のほぼ中間に位置することから，交通の要所でもあった。

踊場遺跡は，高篠遺跡と若干の時間的並行関係を持つが，その主体は9世紀後半から10世紀初頭に位置づけられる。

特筆すべきは，宗教的色彩の濃い７号掘立柱建物跡の発見であり，さらに，それを頂点に配した６棟の掘立柱建物跡の存在も注目できる。墨書の「行司」は，宗教的行事を執行する役職の存在を想起させ，当時の地方信仰の実態に触れた感がある。

両遺跡は台地に立地し，眺望が利く。周辺には今回報告した遺跡の他，長十塚遺跡や永磯遺跡等が知られ，古代の生活拠点の様相を提示している。

出土遺物の検討では，９世紀から10世紀初頭の短期間であることを明らかにした。検討材料とした，土師器甕の胎土，調整技法に共通点が多いことも両遺跡の特徴であり，今後もこの地域を重視する必要がある。

(松田朝由，有馬孝一)

九 養 岡 遺 跡 図 版

Kuyouoka Site



旧石器時代第１エリア遺物出土状況(１)

図版2



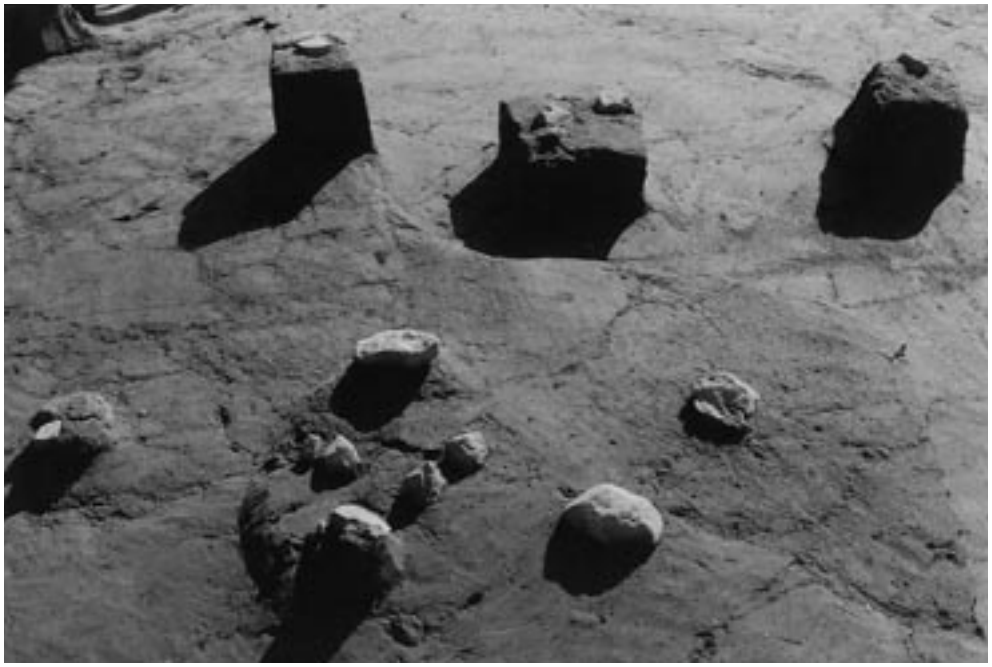




①旧石器時代第１エリア遺物出土状況(２)

②旧石器時代第２エリア遺物出土状況

③標準土層(Ⅰ～ⅩⅦ層)



1号礫群



2号礫群



3号礫群

図版4















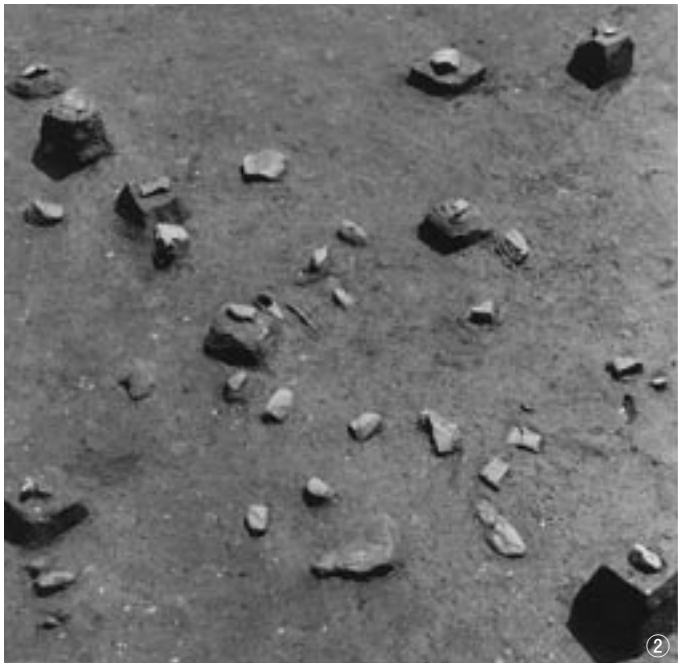


①２号礫群及び炭化物出土状況　②３号礫群及びNo.80出土状況

③～⑧旧石器時代遺物出土状況













①１号集石　②２号集石　③３号集石　④４号集石　⑤５号集石　⑥６号集石

図版6

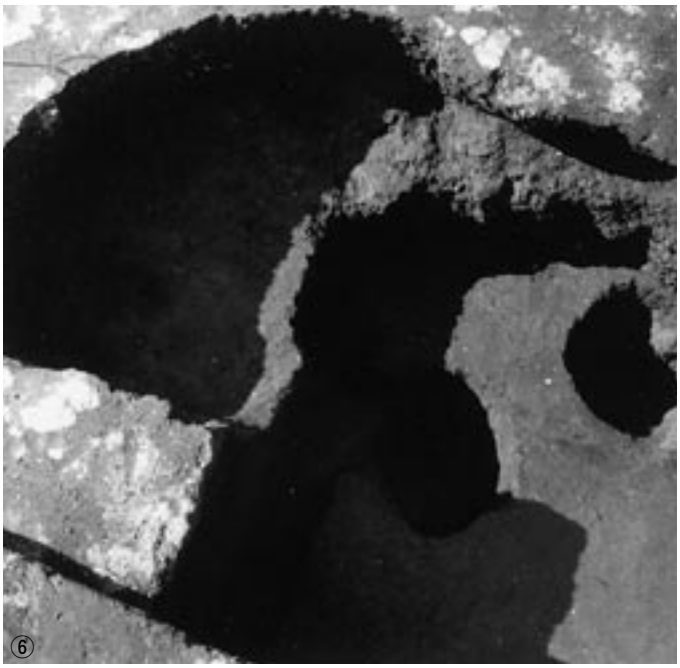












①７号集石　②10号集石　③12号集石　　Ⅸ層検出　④１号土坑　⑤２号土坑　⑥３号土坑



D～F-8,9区Ⅶ層遺物出土状況



Ⅶ層遺物出土状況(１)



Ⅶ層遺物出土状況(２)

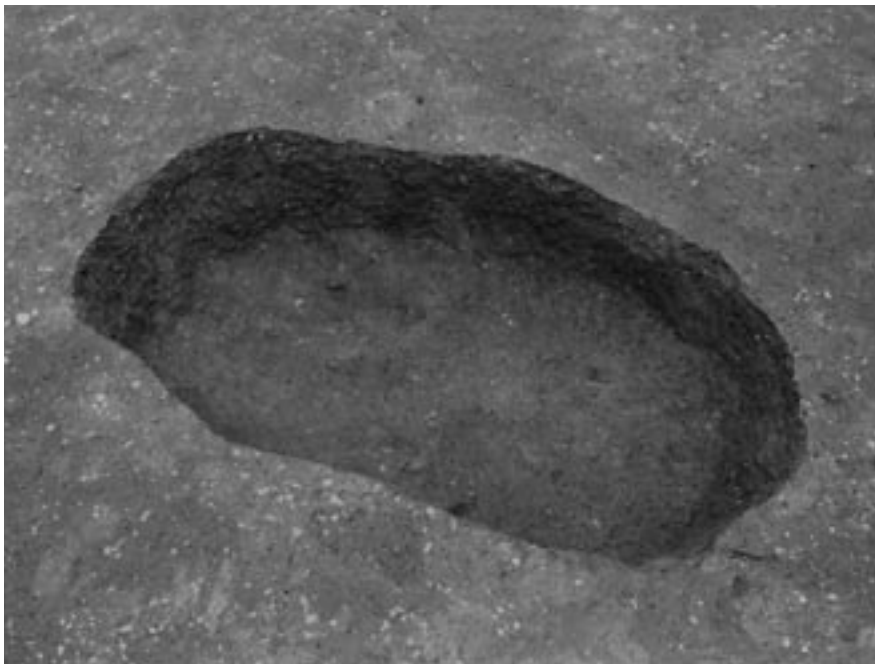
図版8



１号落し穴状遺構断面



１号落し穴状遺構完掘



２号落し穴状遺構完掘

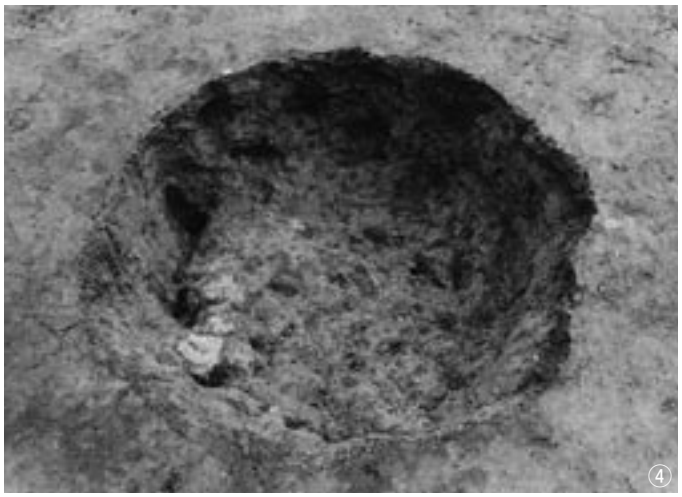


Va層石器出土状況





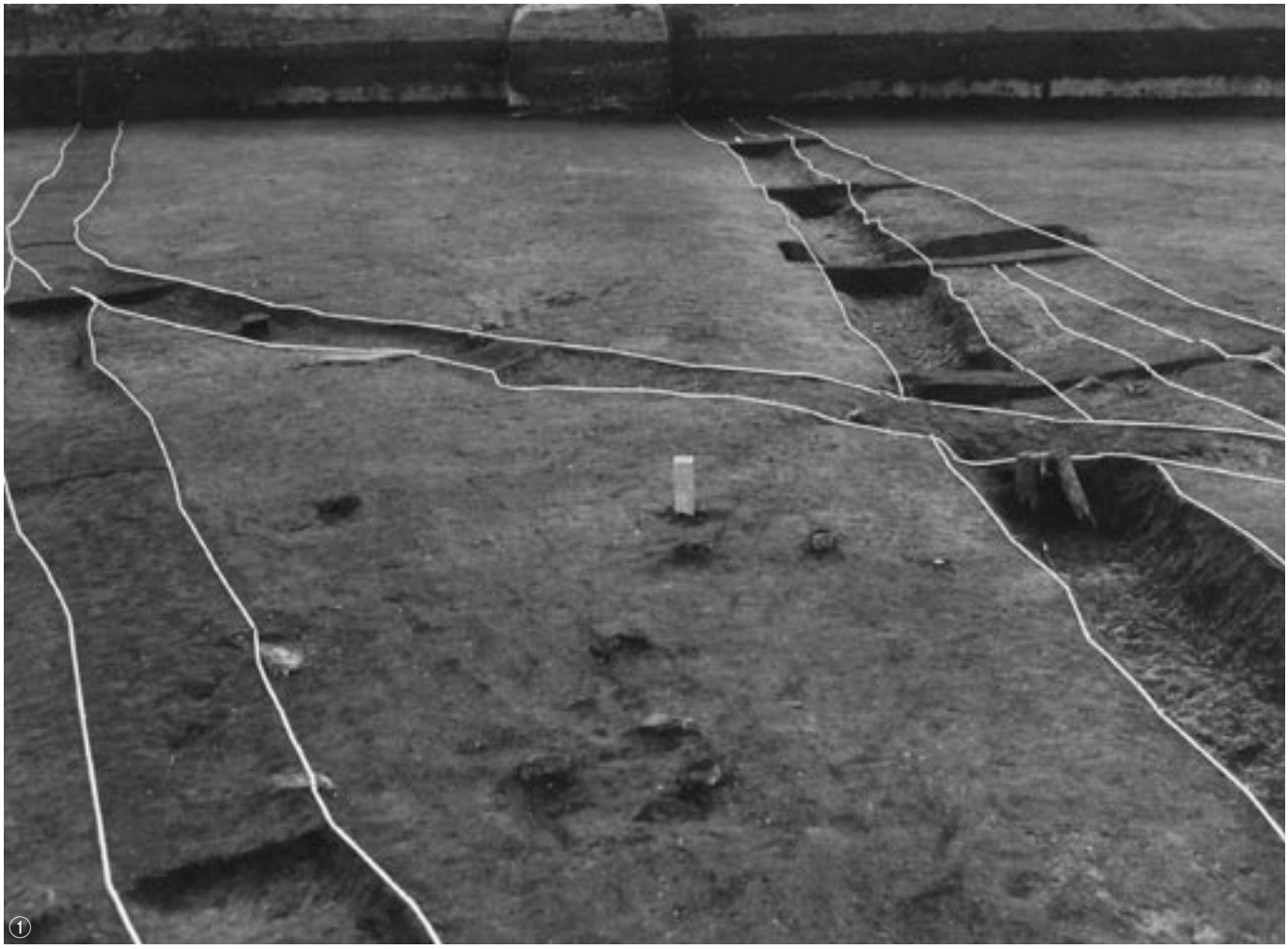


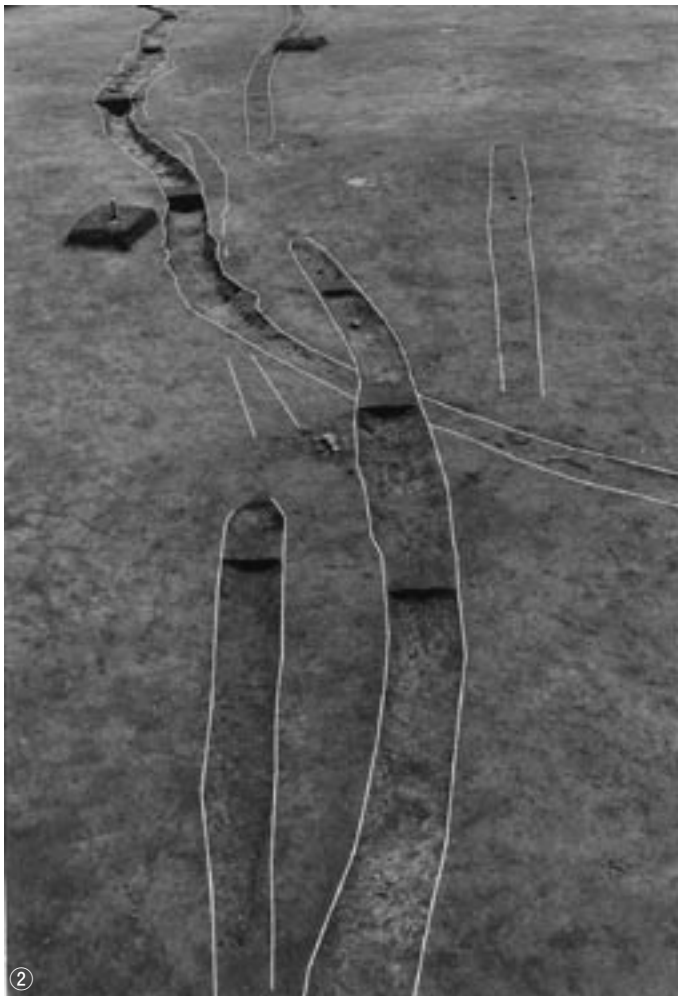


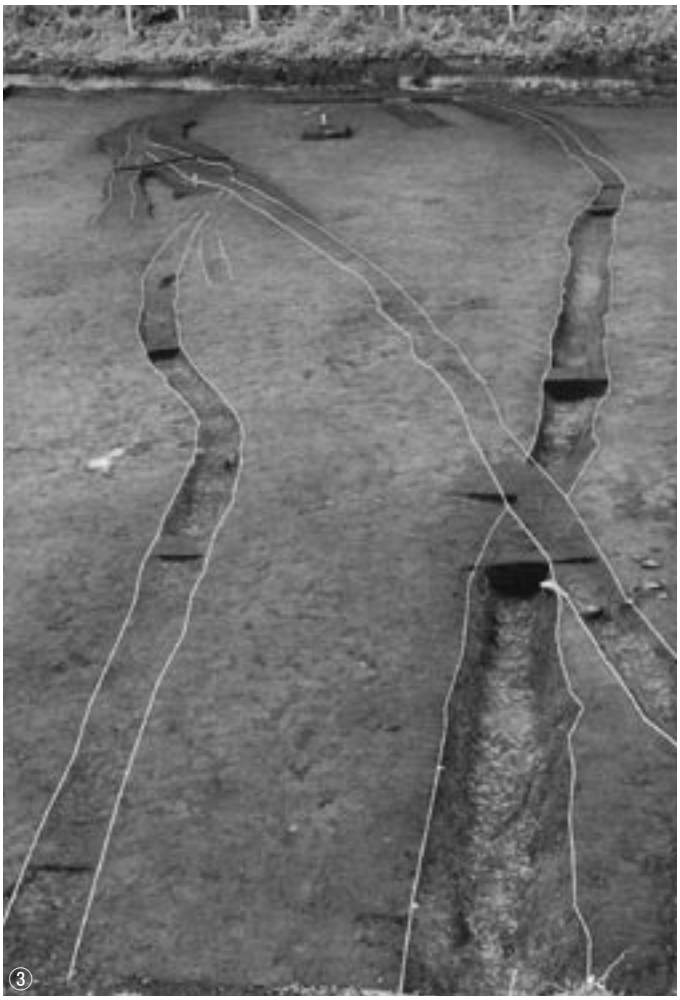


①F - 6,7区Ⅲ～Ⅳa層遺物出土状況　②D～F - 14,15区Ⅲ層遺物出土状況　③Ⅲ層遺物出土状況
④Ⅲ層検出１号土抗　⑤Ⅲ層検出4号土抗

図版10







①C～D - 11,12区古道跡　②D～F - 10,11区古道跡　③D～F - 12,13区古道跡







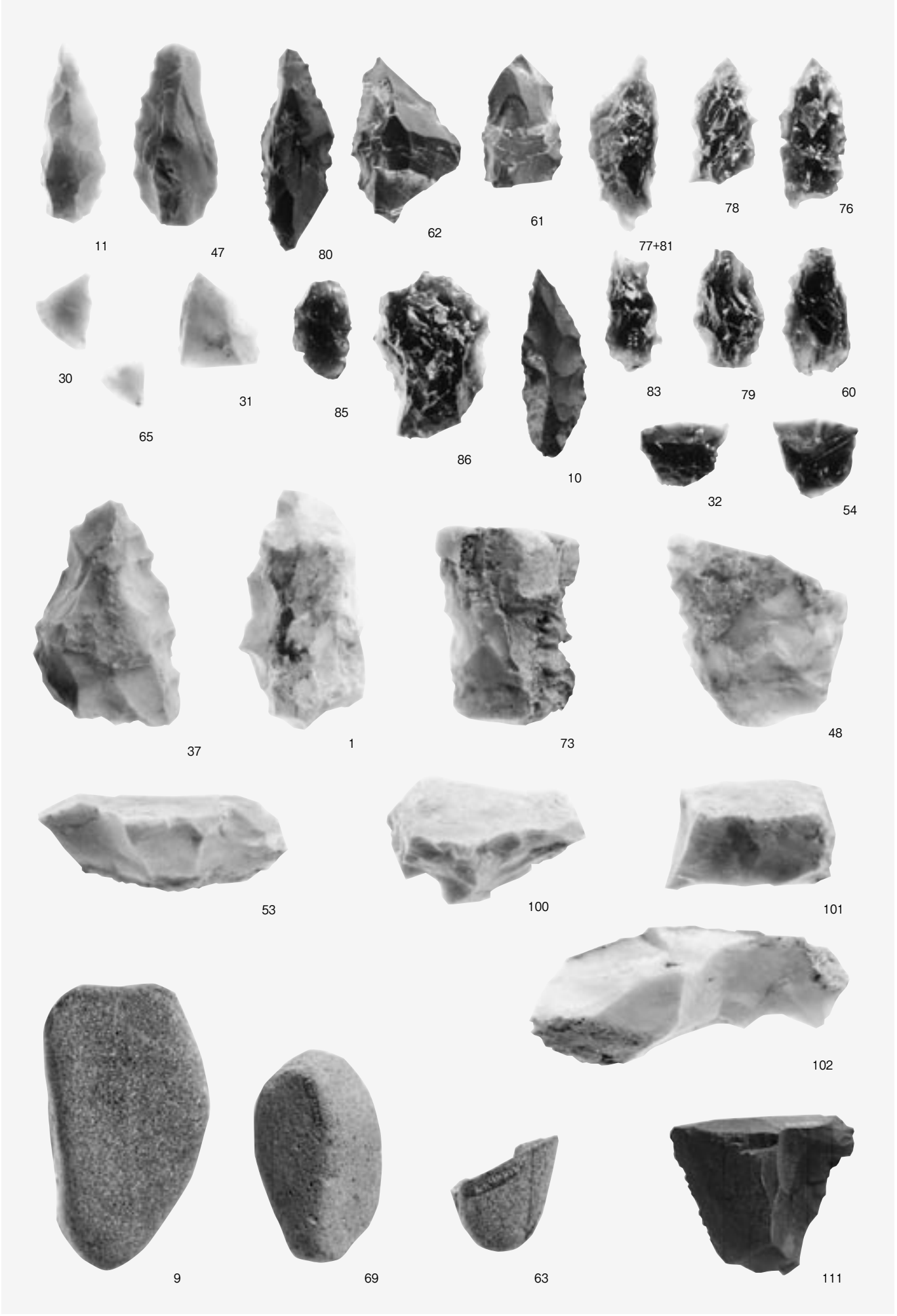


①E-12区古道跡断面　②C - 12区古道跡断面　③ＸⅤ層発掘調査風景
④九養岡遺跡近景

図版12



旧石器時代出土遺物（1）


11
47
80
62
61
77+81
78
76
30
65
31
85
86
10
83
79
60
32
54
37
1
73
48
53
100
101
102
9
69
63
111

旧石器時代出土遺物（2）

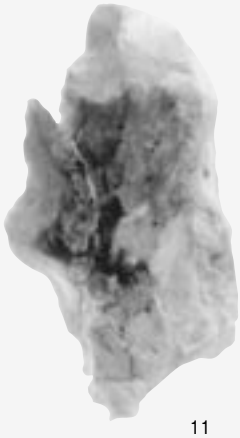
図版14



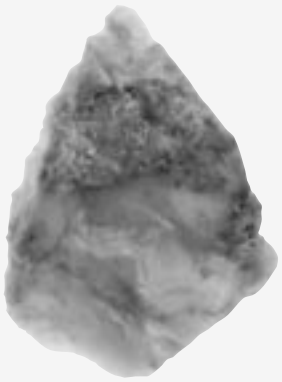
旧石器時代石器接合資料(１)



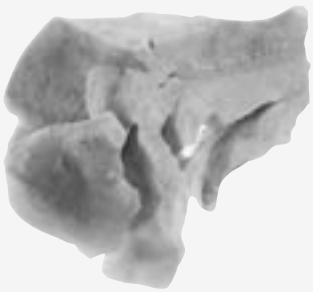
14



11



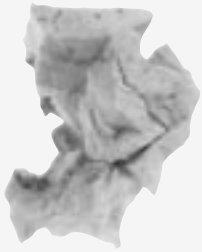
18



34



12



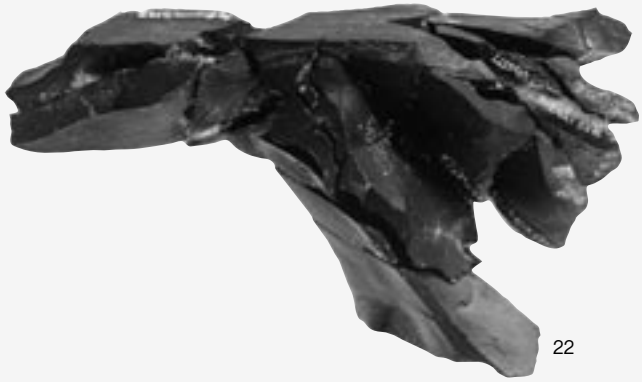
10



21



35



22



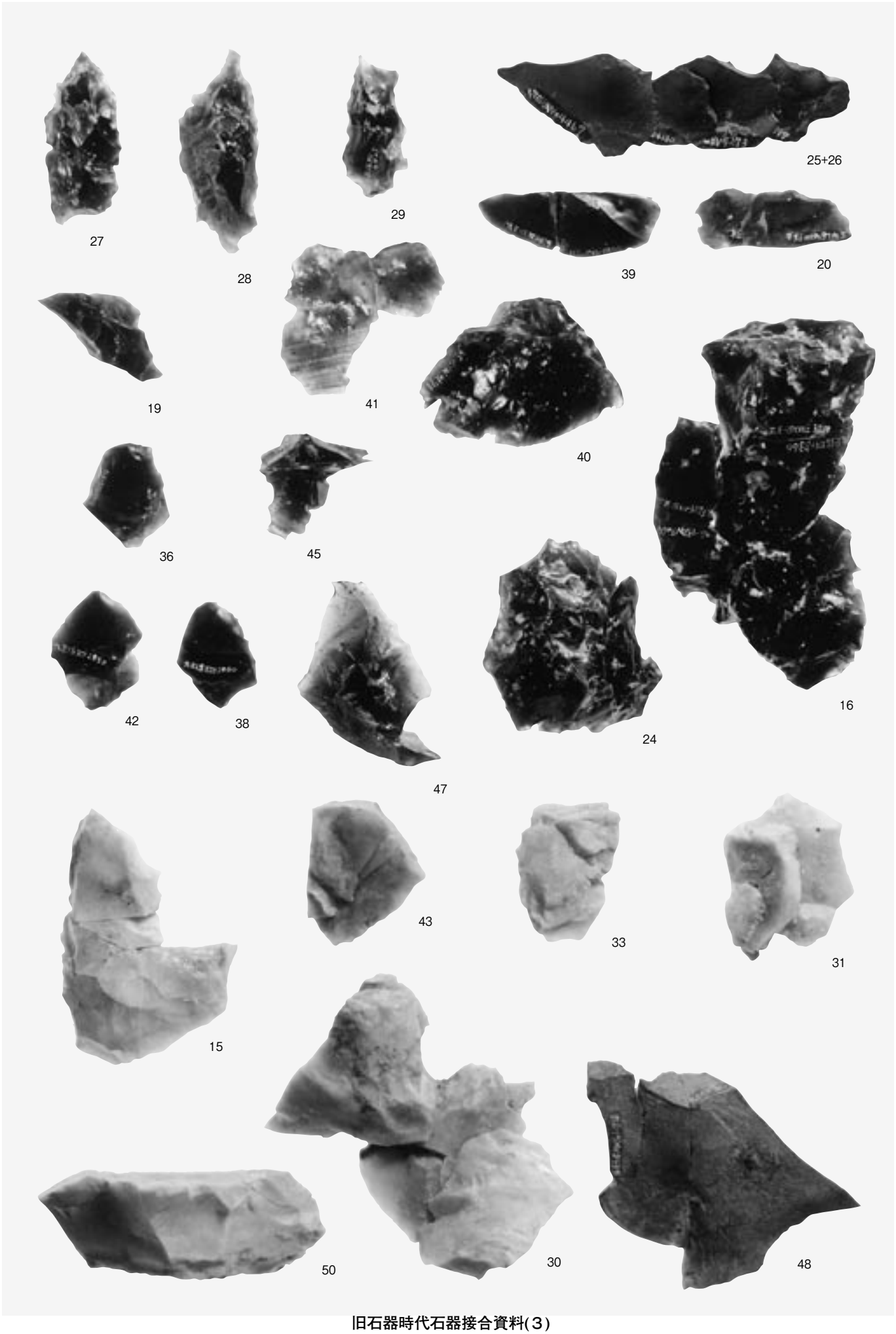
23



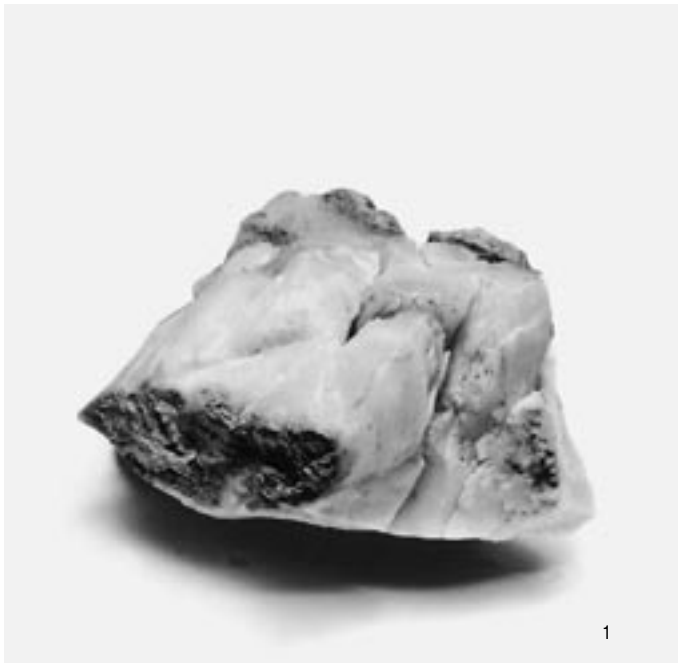
17

旧石器時代石器接合資料(２)

図版16



旧石器時代石器接合資料(3)


1


2


8

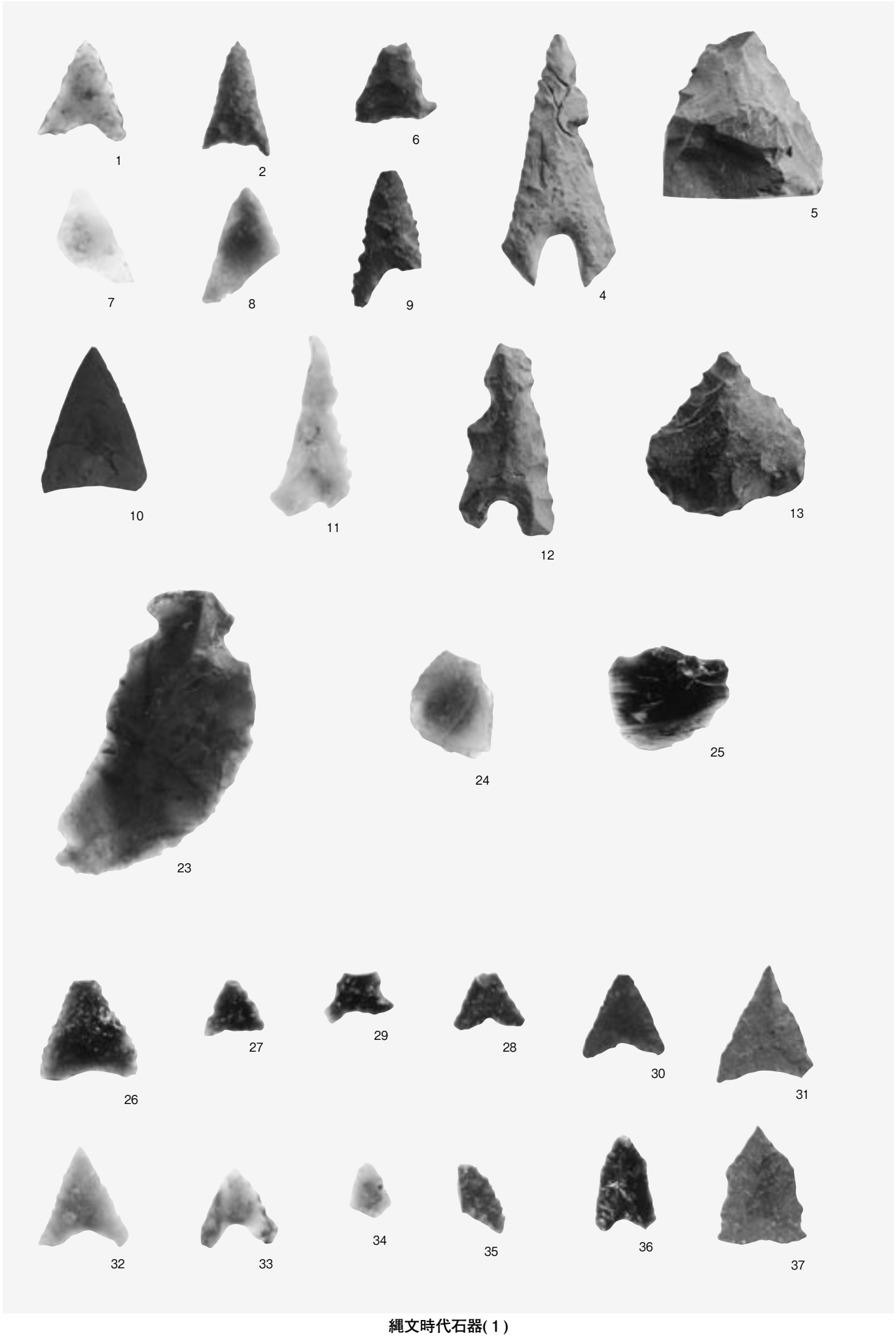

6


9


13

旧石器時代石器接合資料(４)

図版18



縄文時代石器(１)



縄文時代石器(2)

図版20



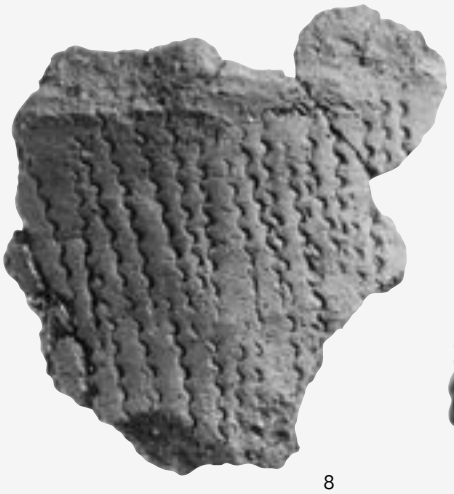
縄文時代石器(3)



1



16



8



11



30



15



13



39



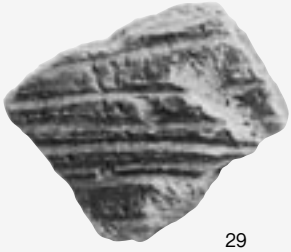
41



21



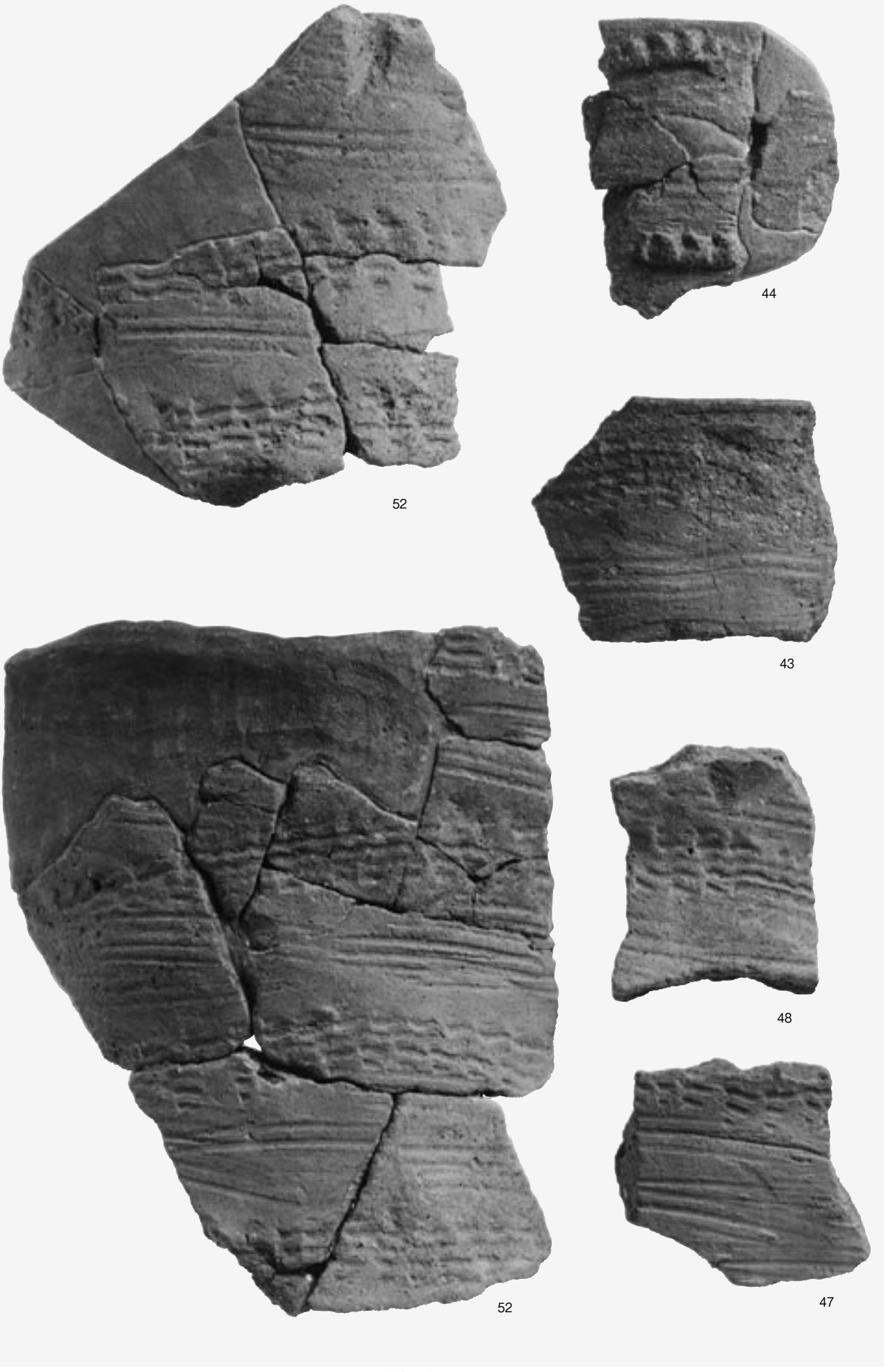
31



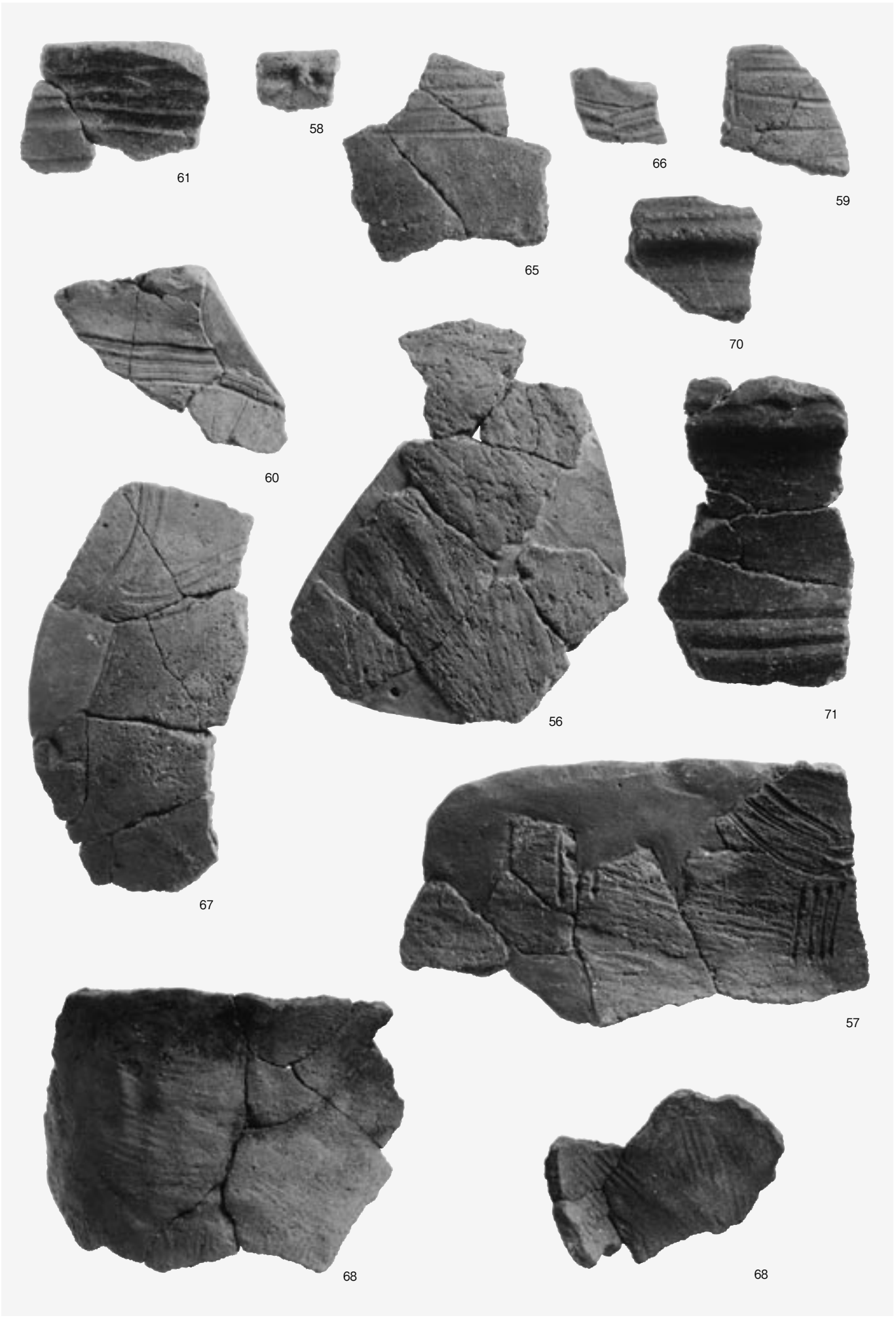
29

縄文時代Ⅰ～Ⅲ類土器

図版22

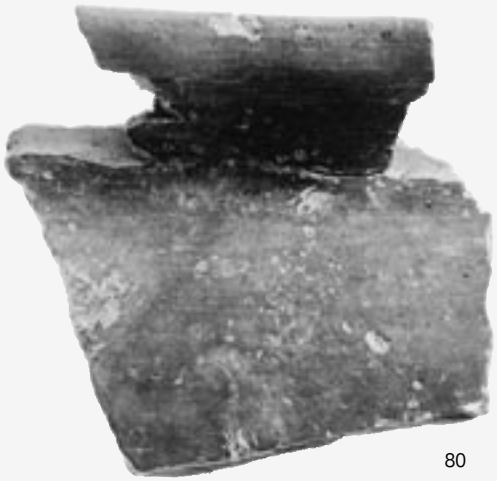


縄文時代Ⅳ類土器



縄文時代Ⅵ·Ⅶ類土器

図版24



80



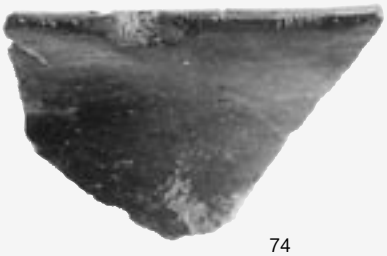
93



85



88



74



94



75

縄文時代Ⅷ類土器



109



157



113



131



111



158



146



128



148



147



150



152



151



167

縄文時代X類土器

図版26



古代土器(1)


28


30


32


34


36


38


39


10

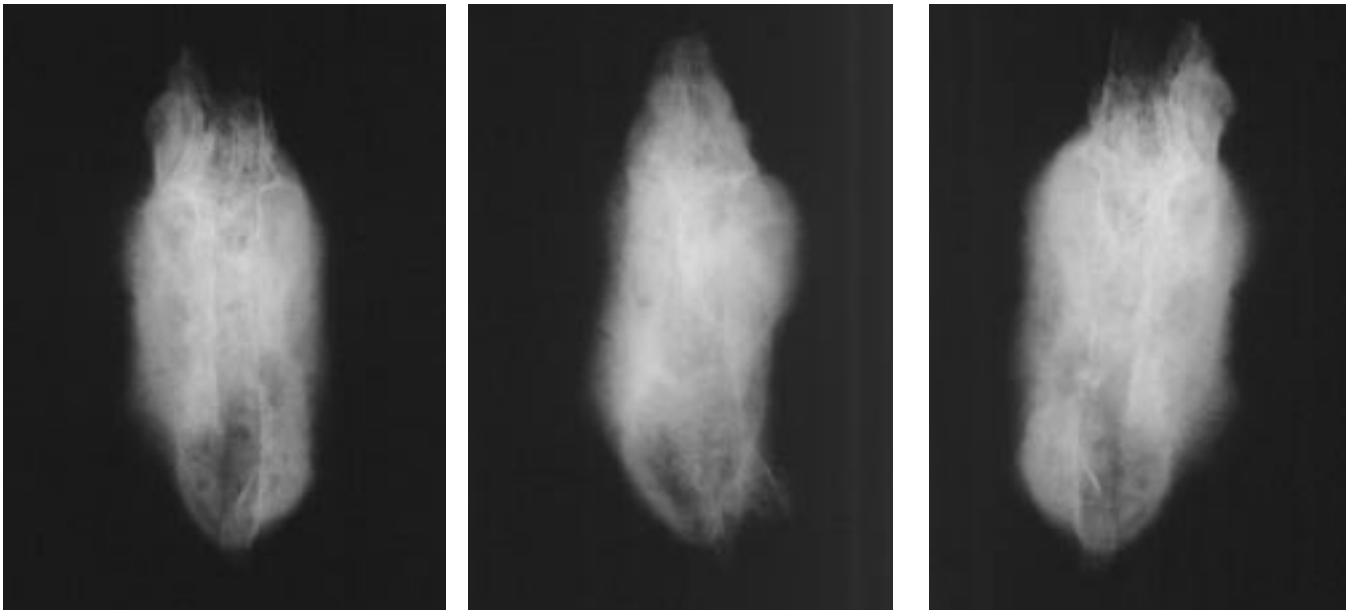

11

古代土器(2)

図版28



古代軽石製品



古代鉄器

踊 場 遺 跡 写 真 図 版



発掘調査風景



土層断面

図版30



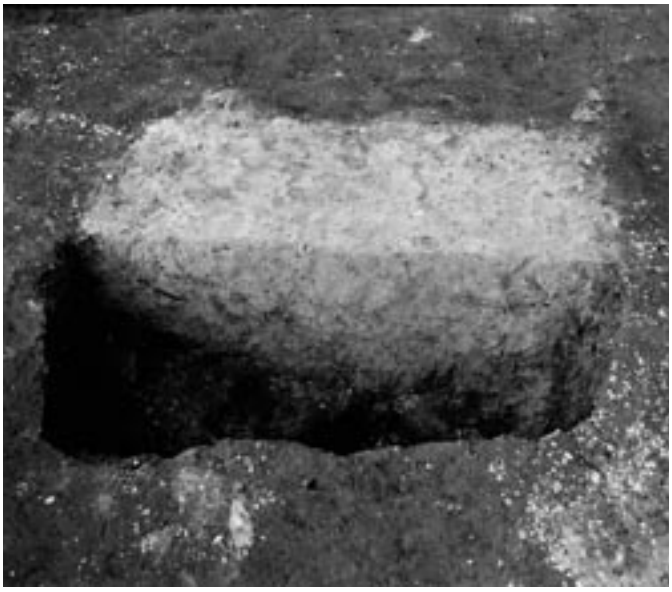
２号集石検出状況



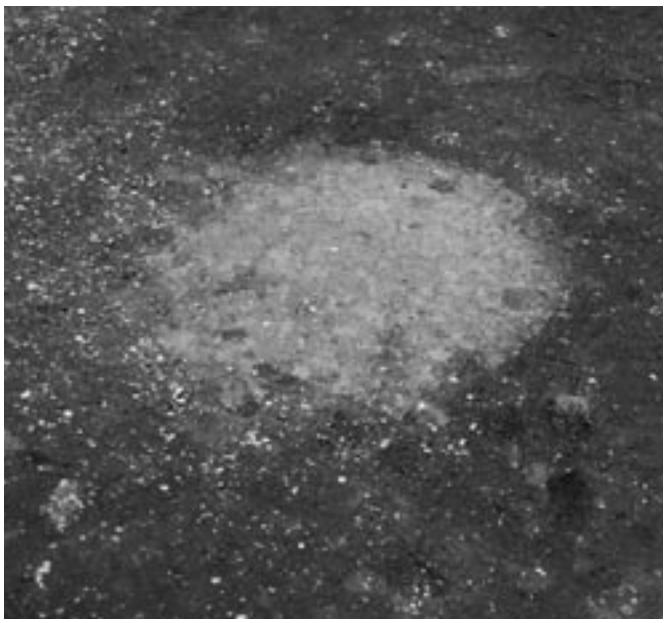
１号集石検出状況



２号土坑検出状況



２号土坑断面



１号土坑検出状況



１号土坑完掘状況



Ⅴ類土器出土状況(１)

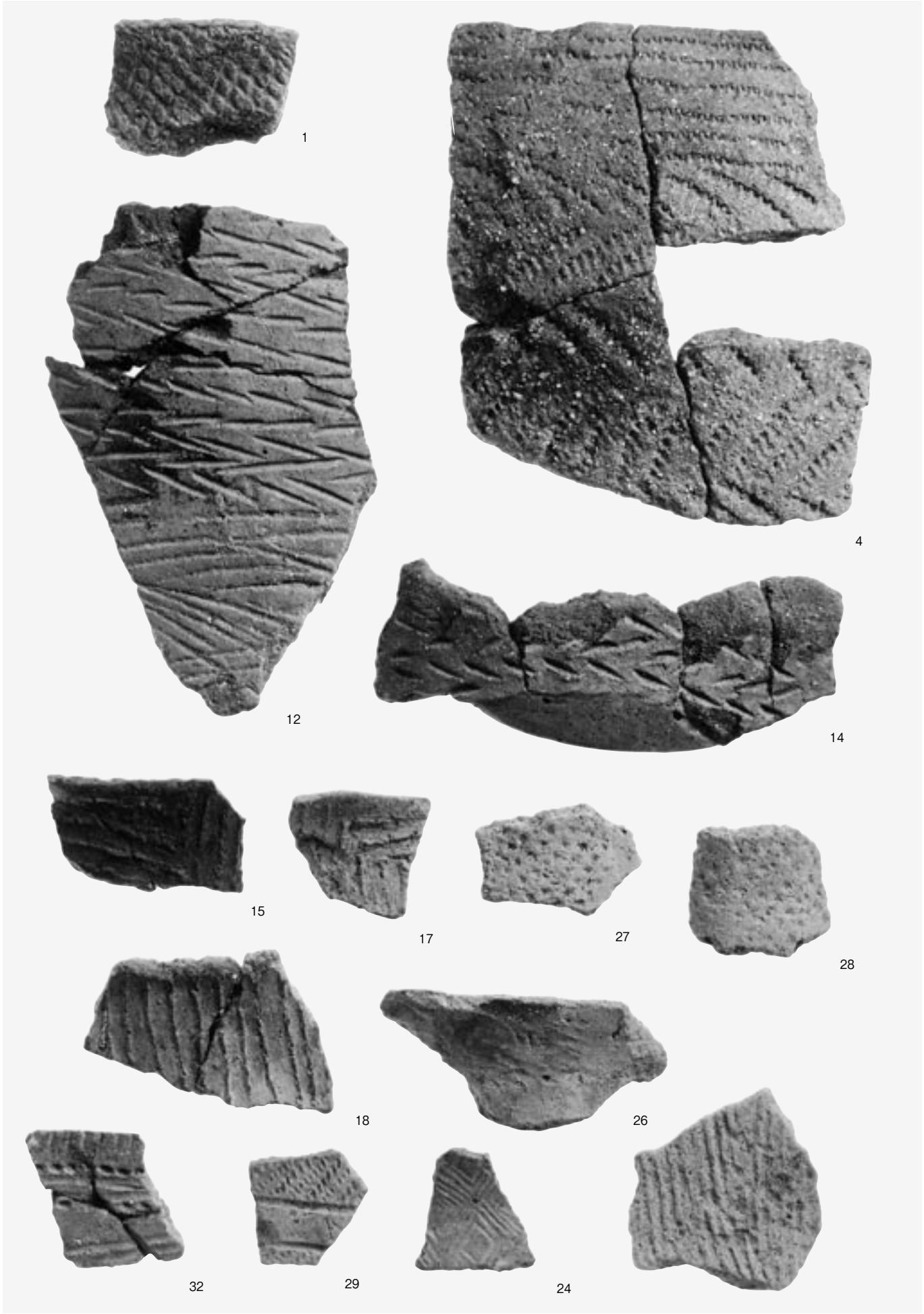


Ⅴ類土器出土状況(２)

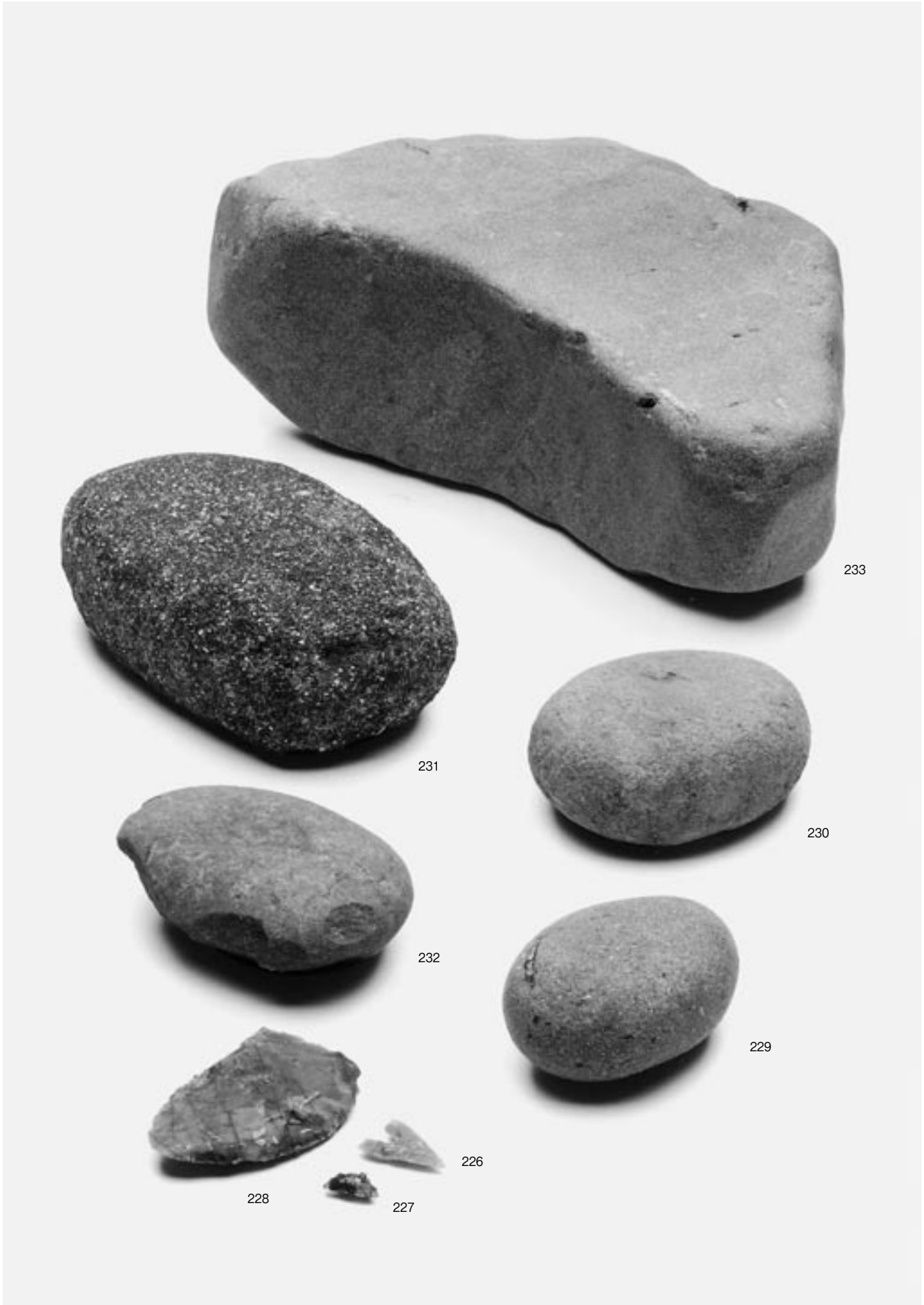


Ⅴ類土器

図版32

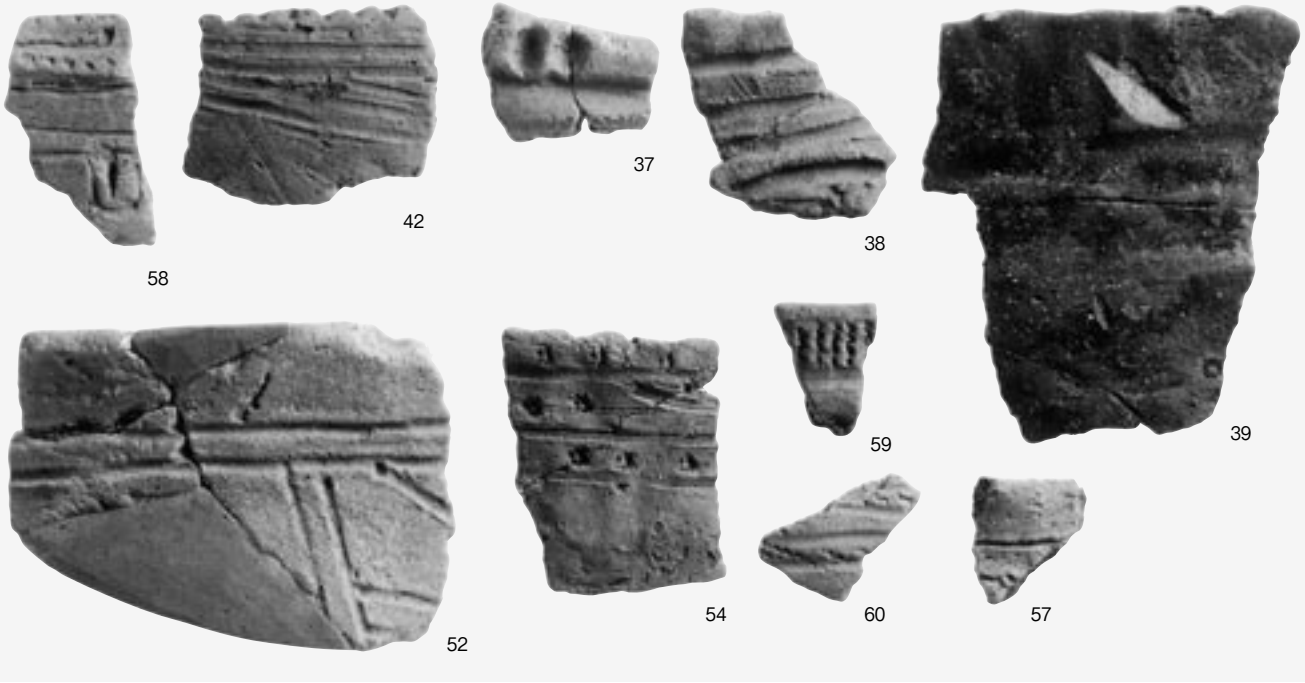


縄文時代早期出土土器



縄文時代早期出土石器

図版34

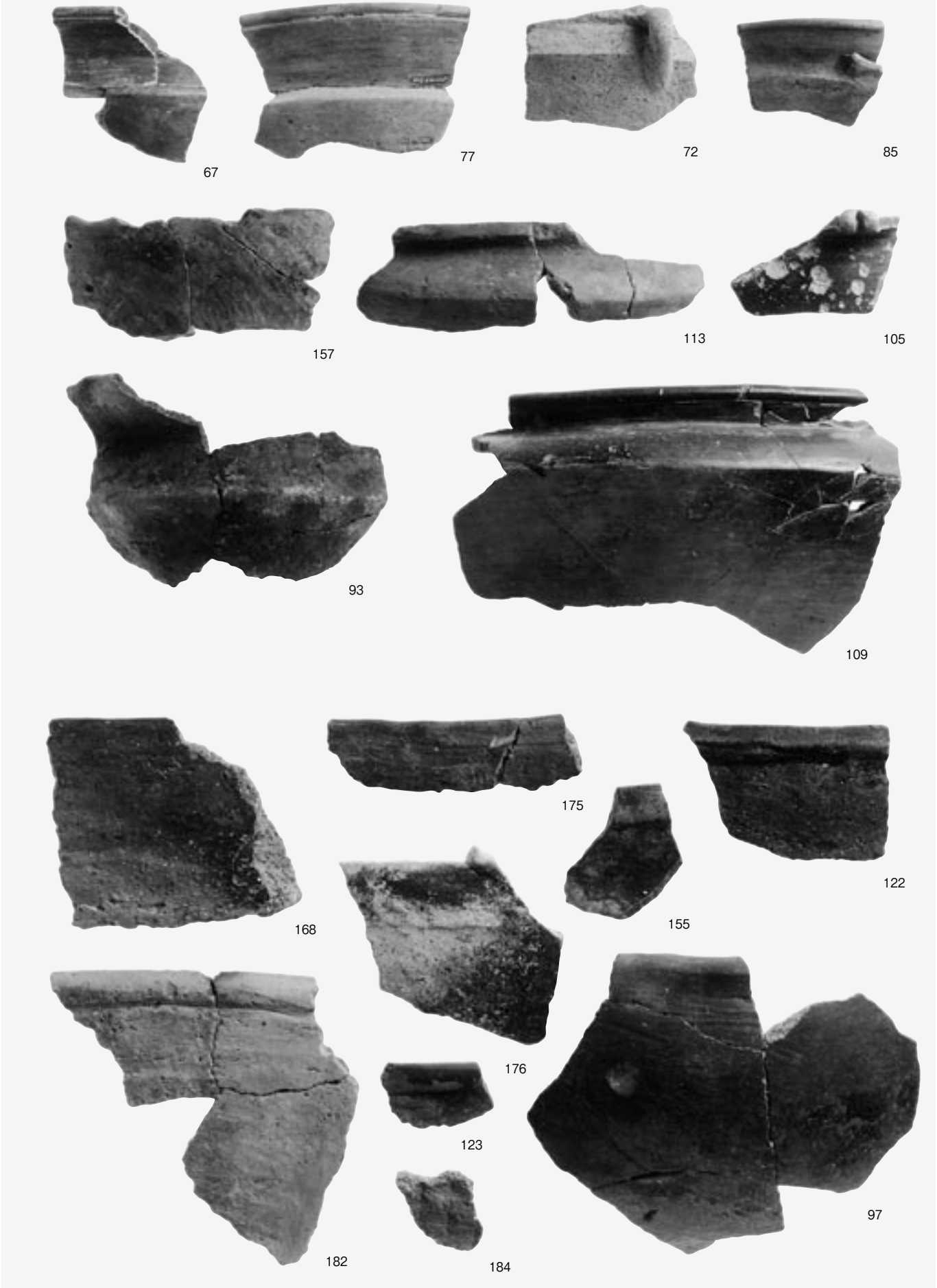






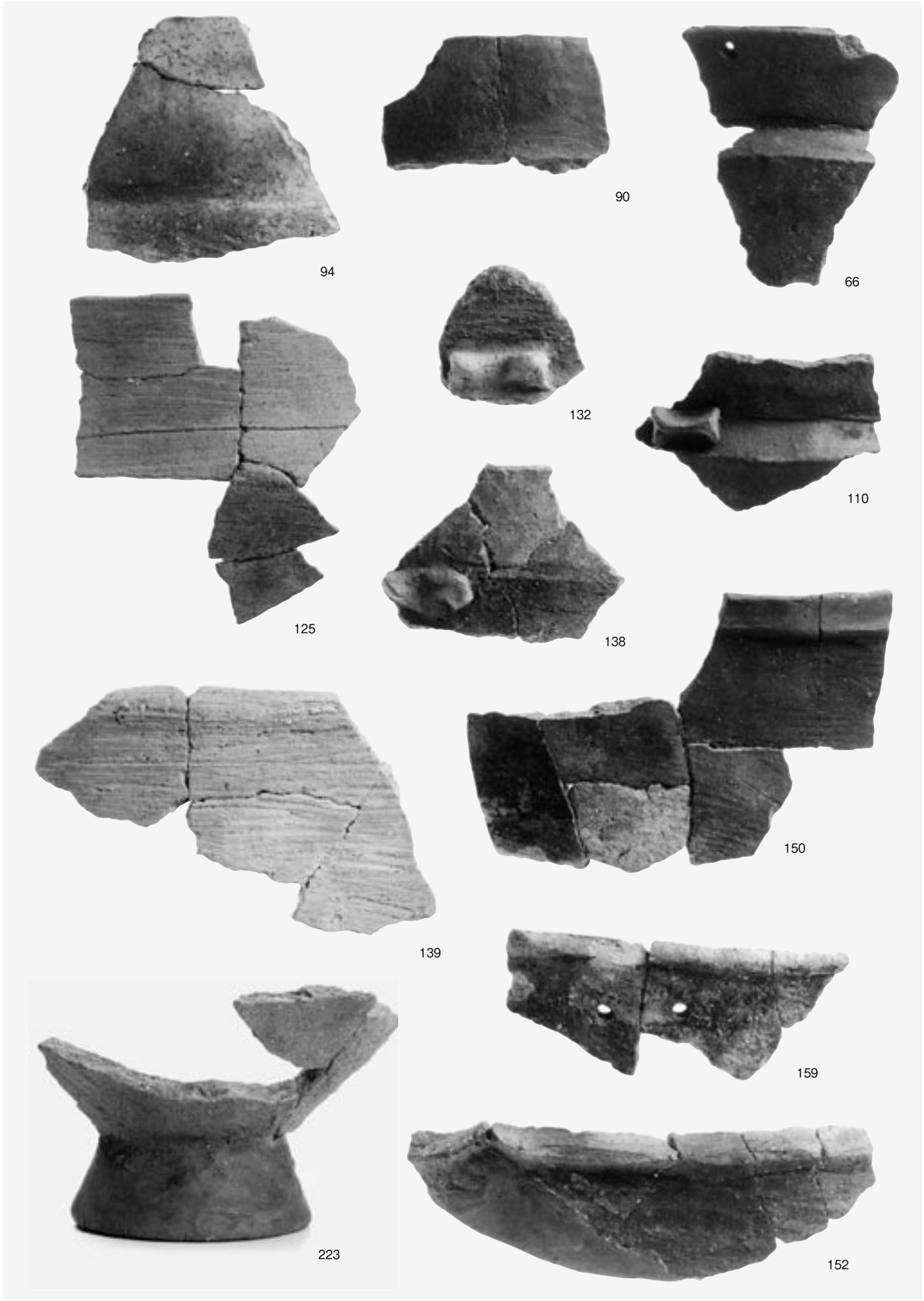


縄文時代後期出土土器



縄文時代晩期出土土器(１)

図版36

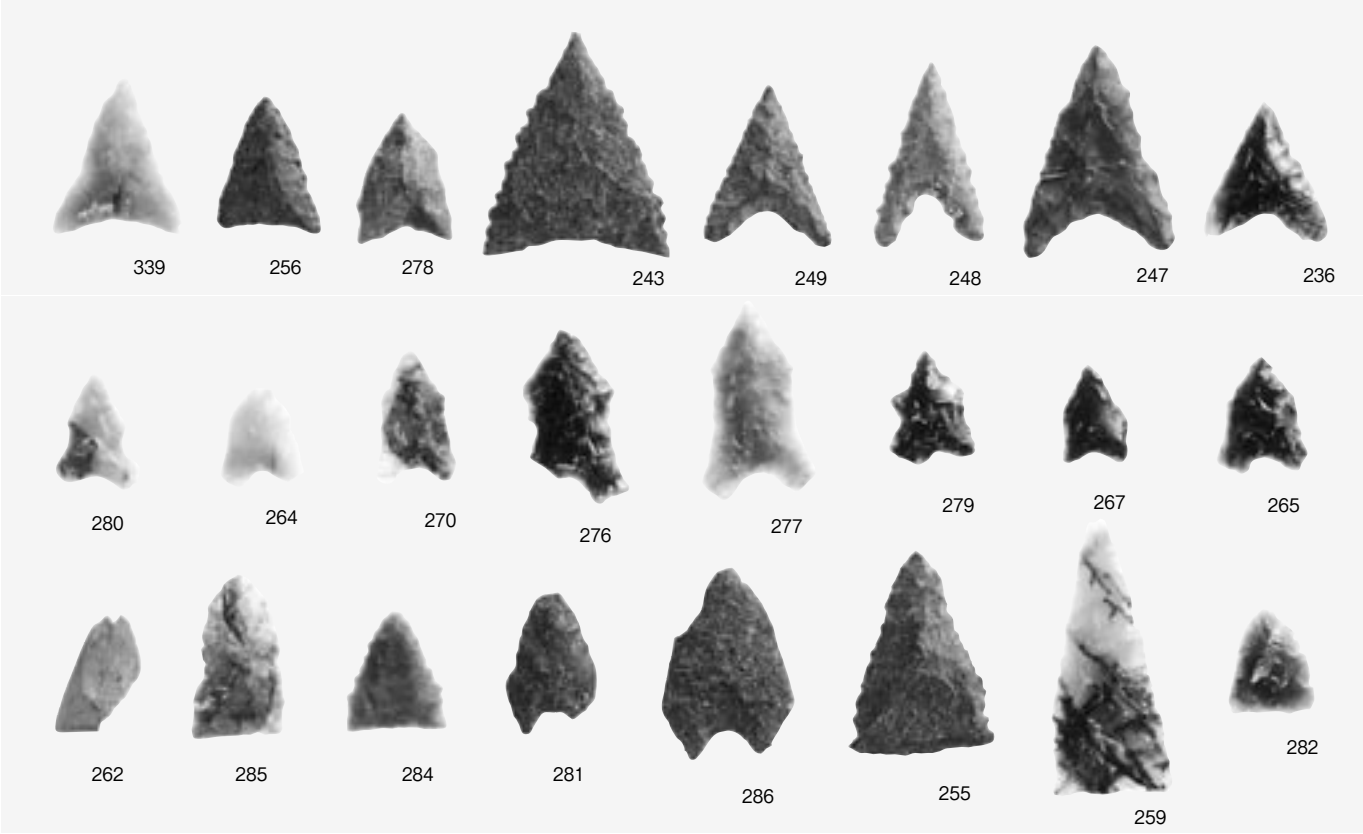


縄文時代晩期出土土器(2)

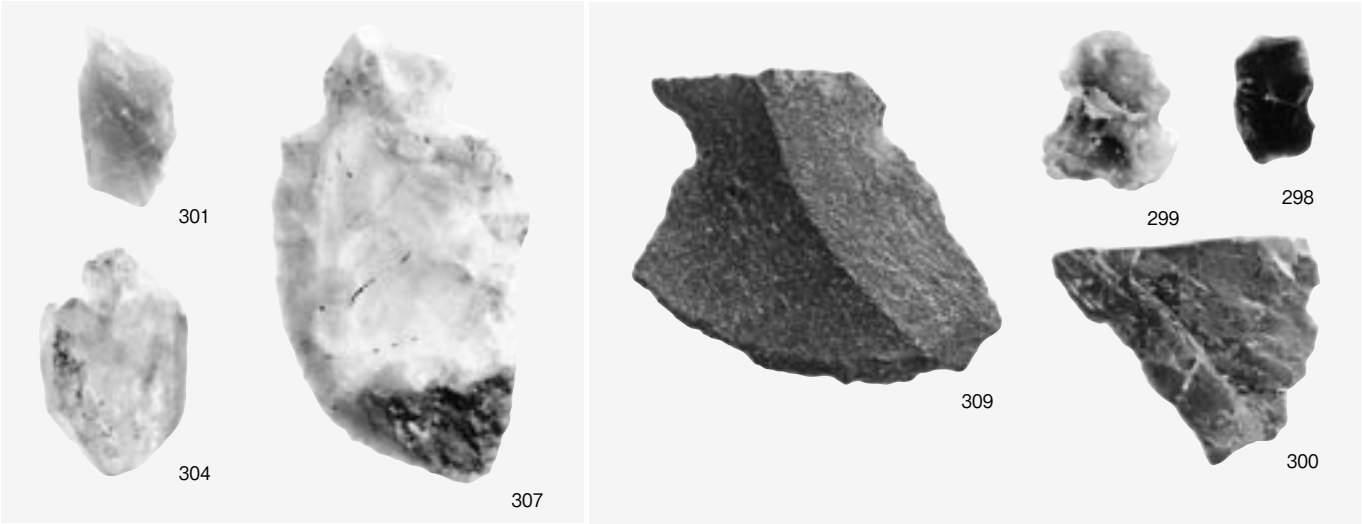




縄文時代晩期出土石器(石製錘飾品クローズアップ)

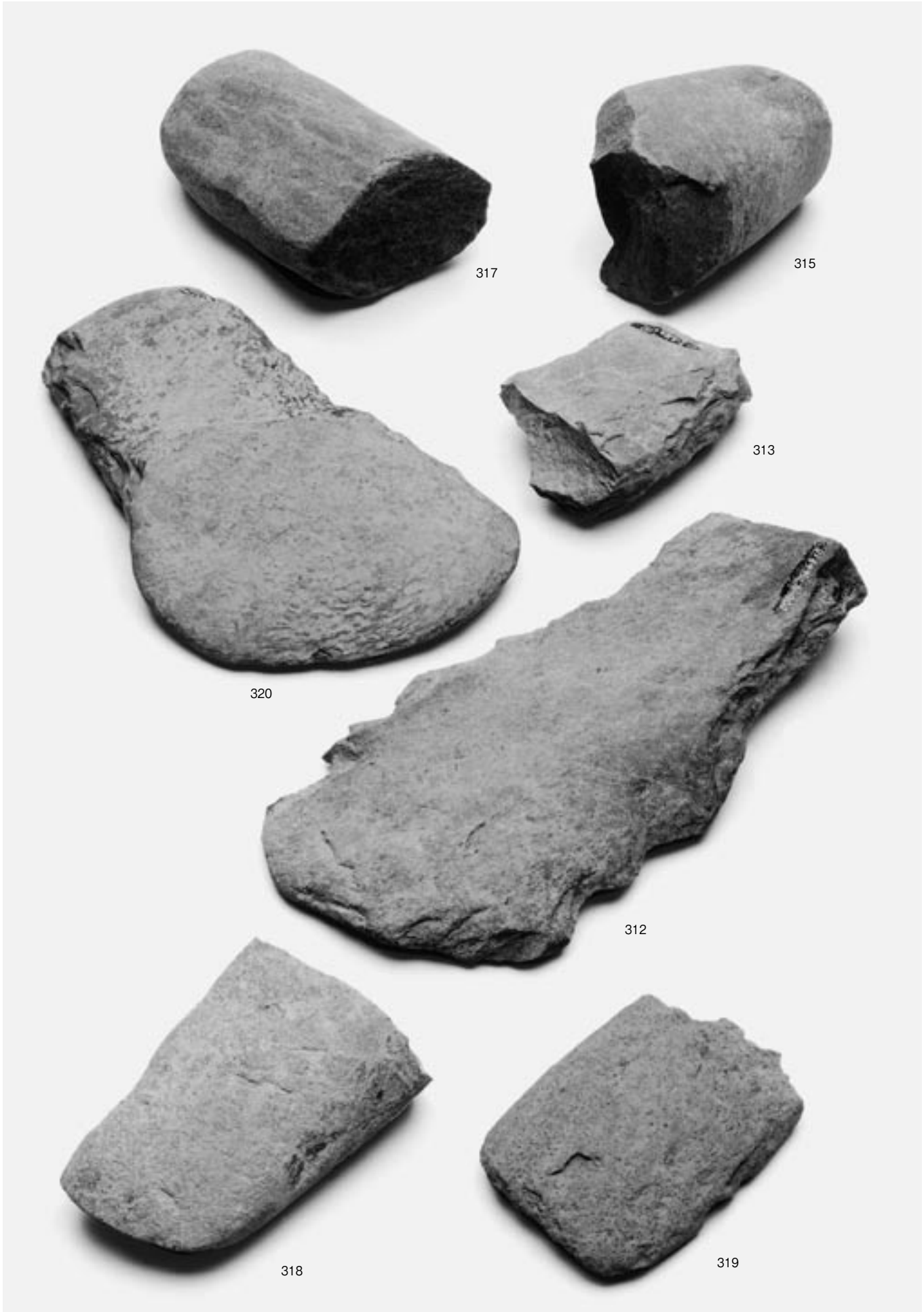


縄文時代晩期出土石器(石鏃)



縄文時代晩期出土石器(石匙・楔形石器・抉入石器)

図版38



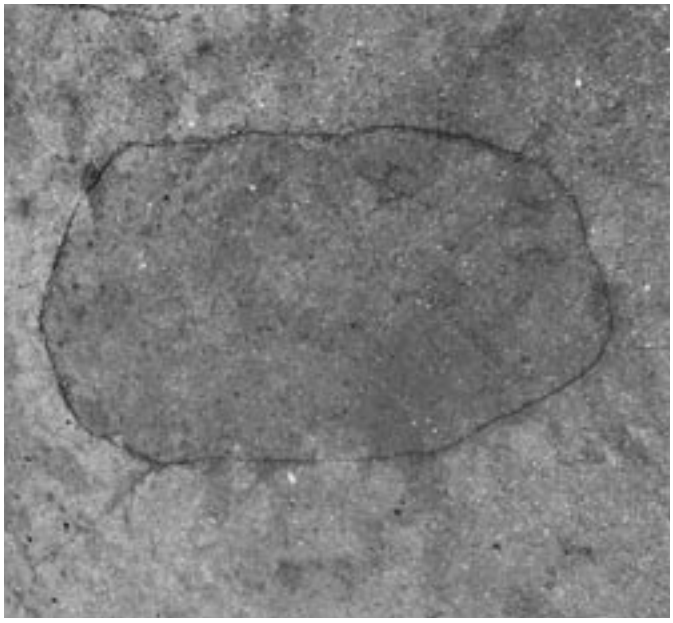
縄文時代晩期出土石器(石斧)



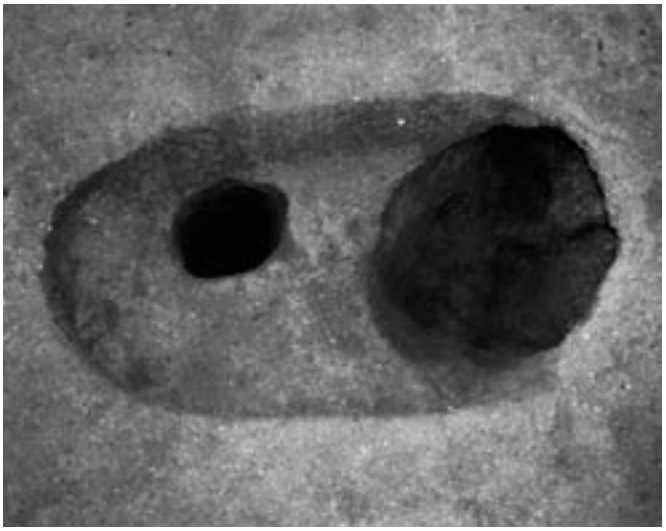
縄文時代晩期遺物出土状況(１)



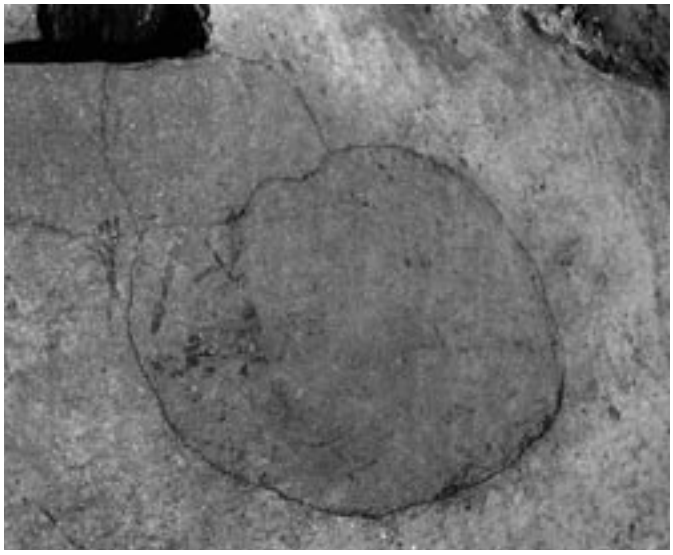
縄文時代晩期遺物出土状況(２)



３号土坑検出状況(古代)



３号土坑完掘状況(古代)



４号土坑検出状況(古代)



４号土坑完掘状況(古代)

図版40



７号掘立柱建物跡掘削面完掘状況



７号掘立柱建物跡ピット完掘状況



７号掘立柱建物跡ピット12断面



７号掘立柱建物跡５号焼土跡断面

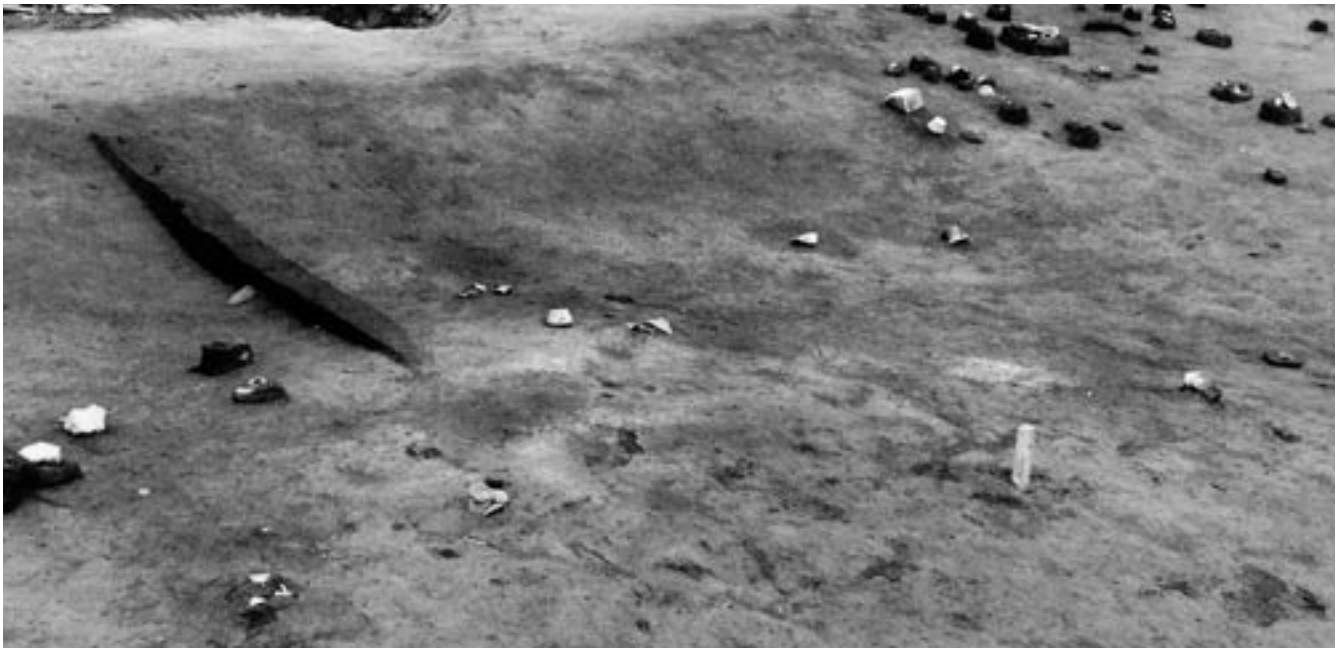


７号掘立柱建物跡炭化物検出状況



７号掘立柱建物跡白色土分布状況

図版42











７号掘立柱建物跡及び周辺遺物出土状況



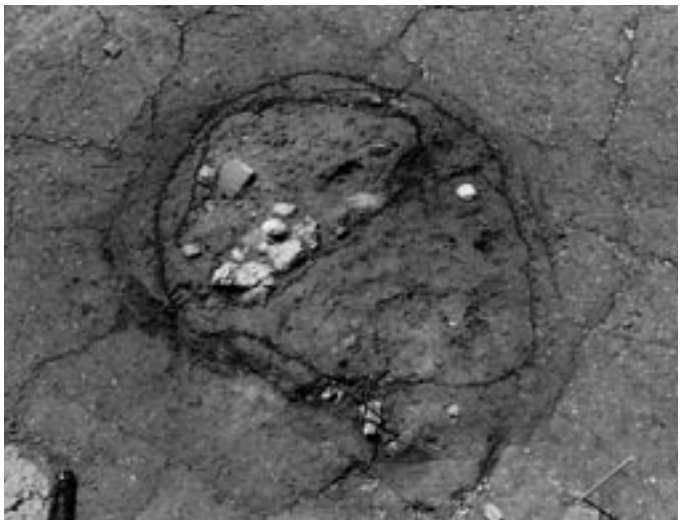
1号，２号掘立柱建物跡検出状況



古道硬化面検出状況



1号礫集積検出状況



２号焼土跡検出状況



古代遺物出土状況

図版44



７号掘立柱建物跡及び周辺出土土器



調査区内出土土器(古代)

図版46









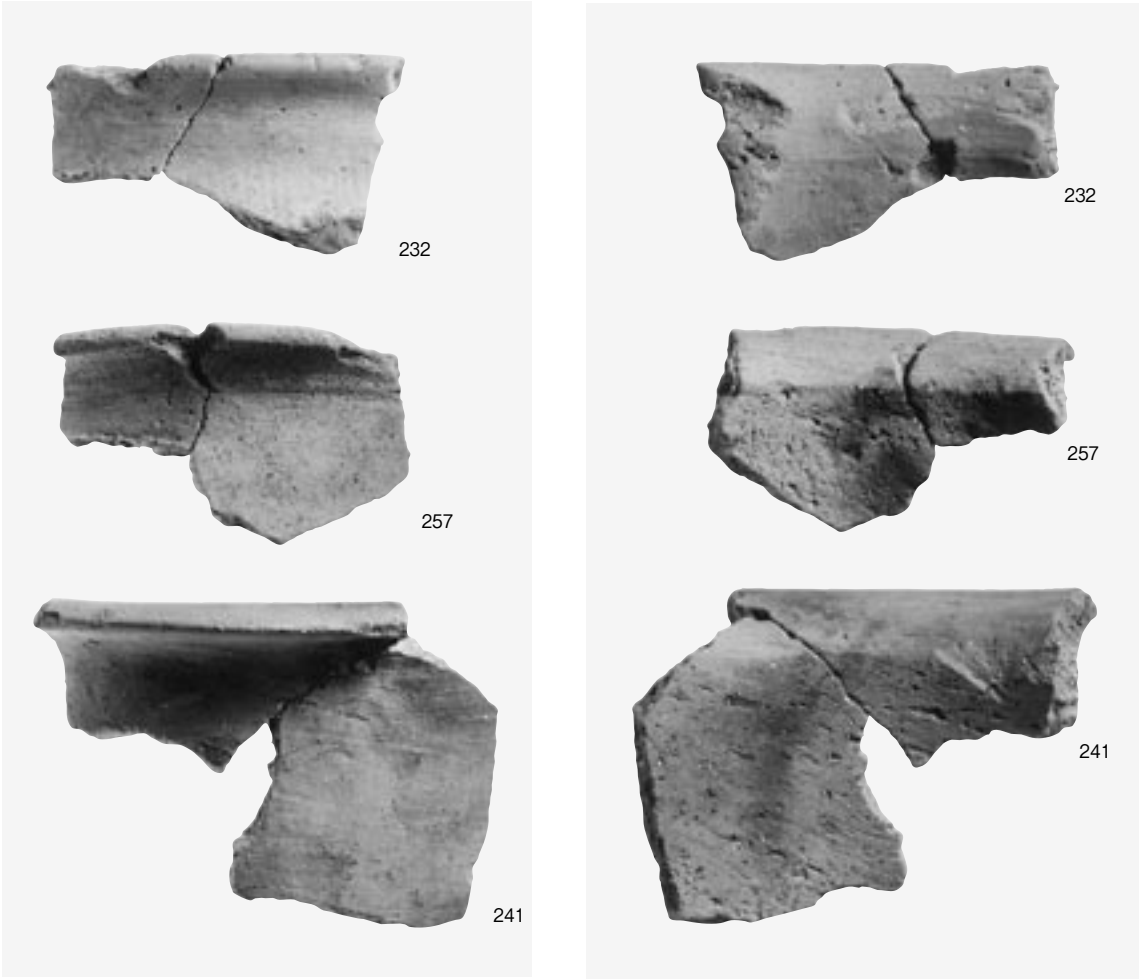




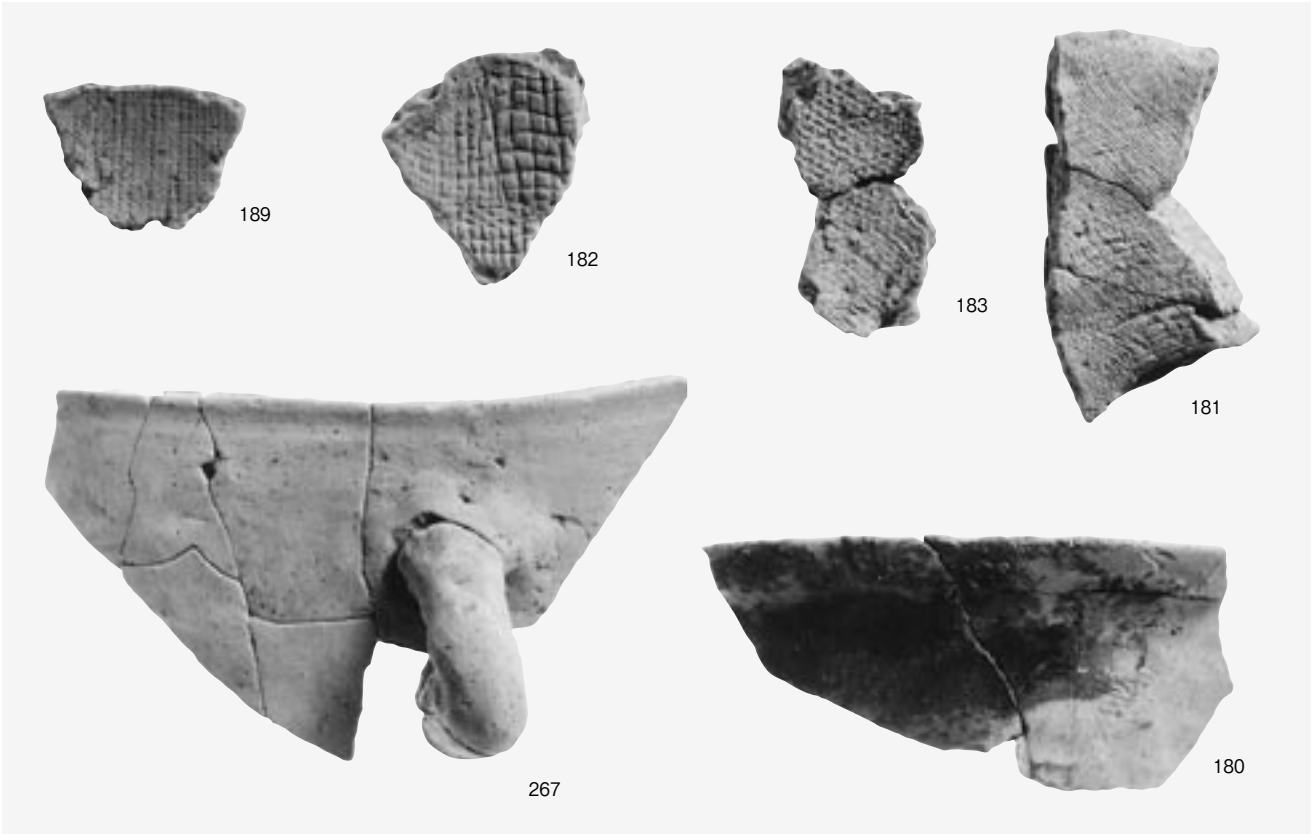




古代出土土器(土師器坏・高台付坏・小型壺・黒色土器)



土師甕器面調整(外面・内面)



古代出土土器(焼塩壺・甑・土師鉢)

図版48


90


293

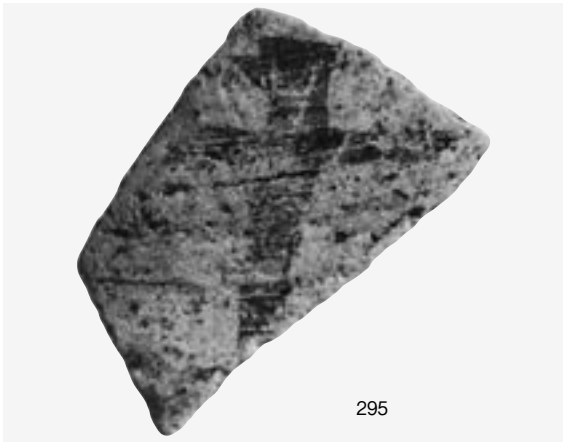

91

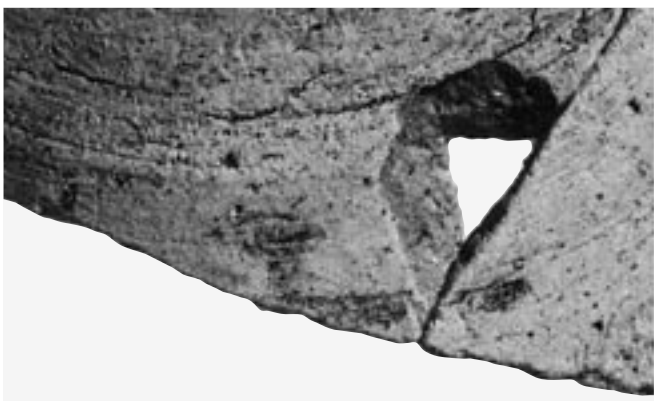

94


292

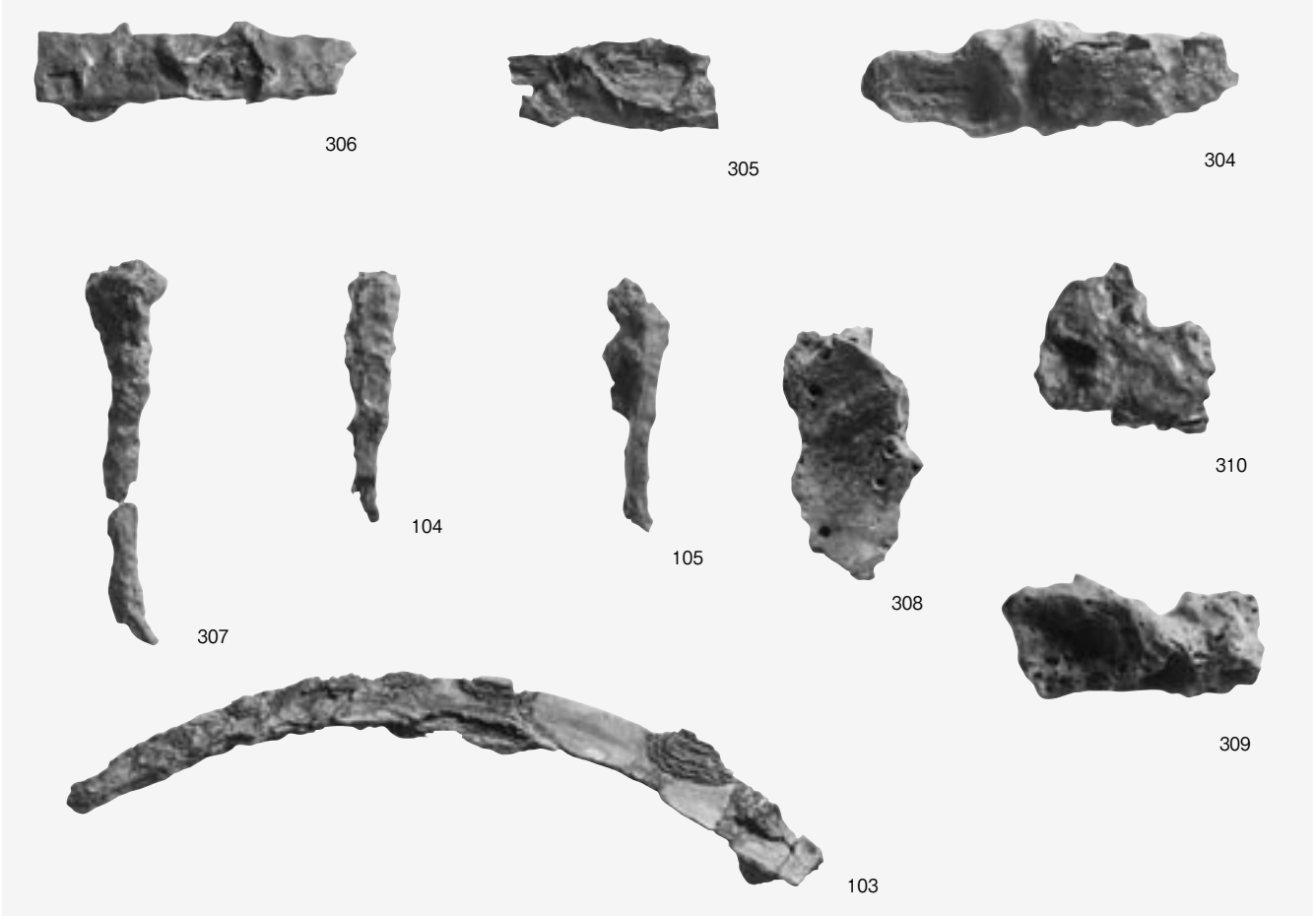
デジタルカメラ画像にレベル補正を行った
Photoshop7.0使用


291

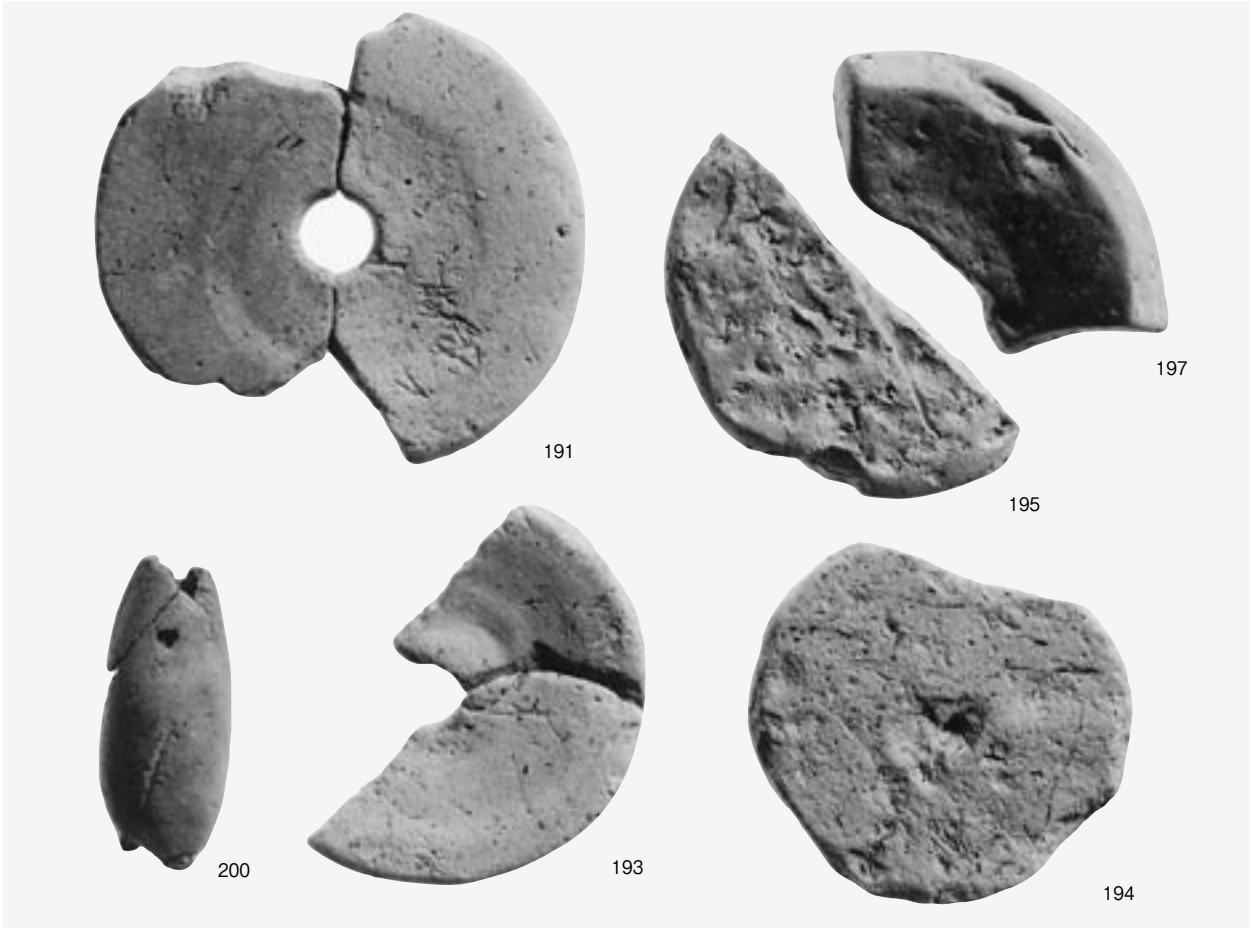

295


92

古代出土土器(墨書土器)



古代出土鉄製品(刀子・釘・鉄滓・銅製品)



古代出土土製品(紡錘車・紡錘車未製品・土錘)

図版50



中世畠跡検出状況(ボラ除去前)



中世畠跡完掘状況(ボラ除去後)

高 篠 遺 跡 写 真 図 版

Takashino Site



高篠遺跡遠景(東から)

図版52



焼土20



焼土18,19



焼土17



軽石集積３



軽石集積１
遺物集中地点１



遺物集中地点２

図版54



土師器甕　色調(左・浅黄橙色，中・橙色，右・褐色)



土師器坏　色調(左・橙色，右・浅黄橙色)





334



335



333



336

須恵器坏

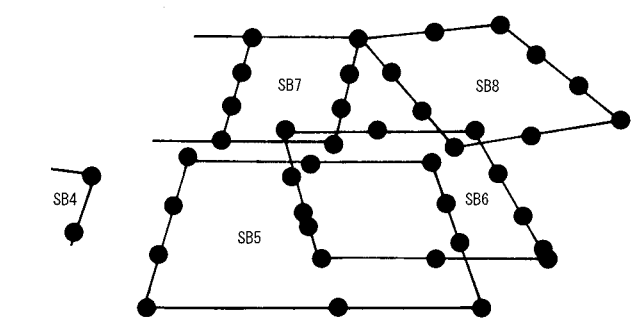
図版56



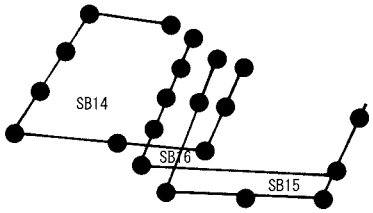
掘立柱建物検出状況







5～8号掘立柱建物

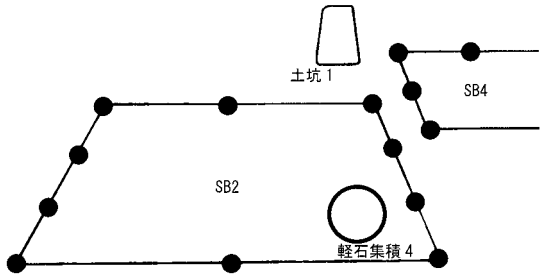


14～16号掘立柱建物





1号掘立柱建物



2号掘立柱建物，軽石集積４



10号掘立柱建物，軽石集積５



13号掘立柱建物



11号掘立柱建物



９号掘立柱建物

図版58



土坑１，２



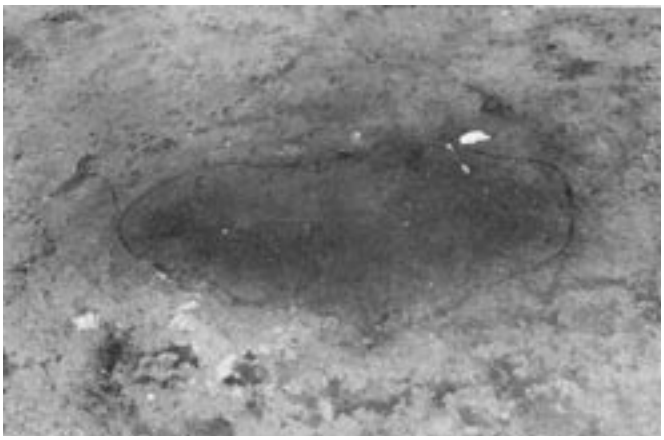
土坑１逆茂木痕



土坑２逆茂木痕



土坑５完掘，半截状況



土坑５検出状況



土坑５遺物出土状況



古道１



古道１断面



古道１断面



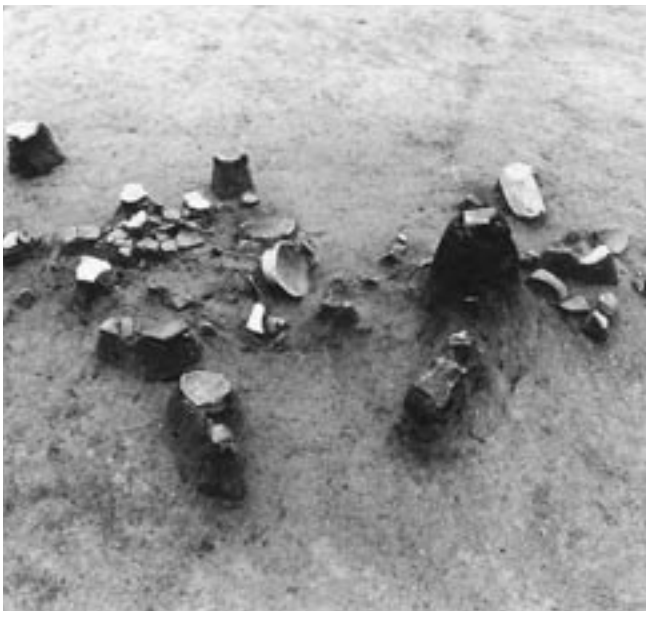
Ⅲ層遺物出土状況



Ⅲ層遺物出土状況

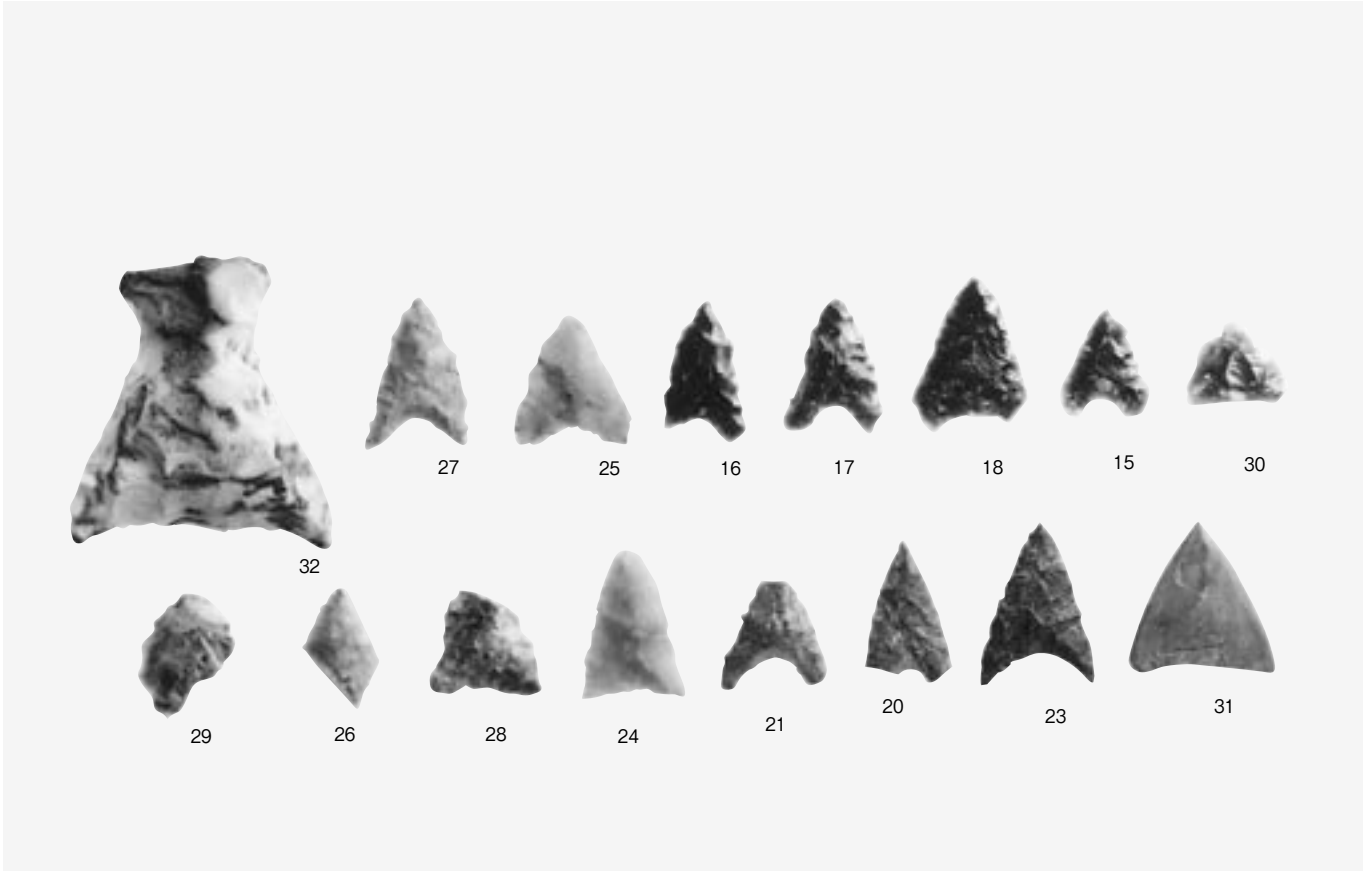


遺物集中地点１

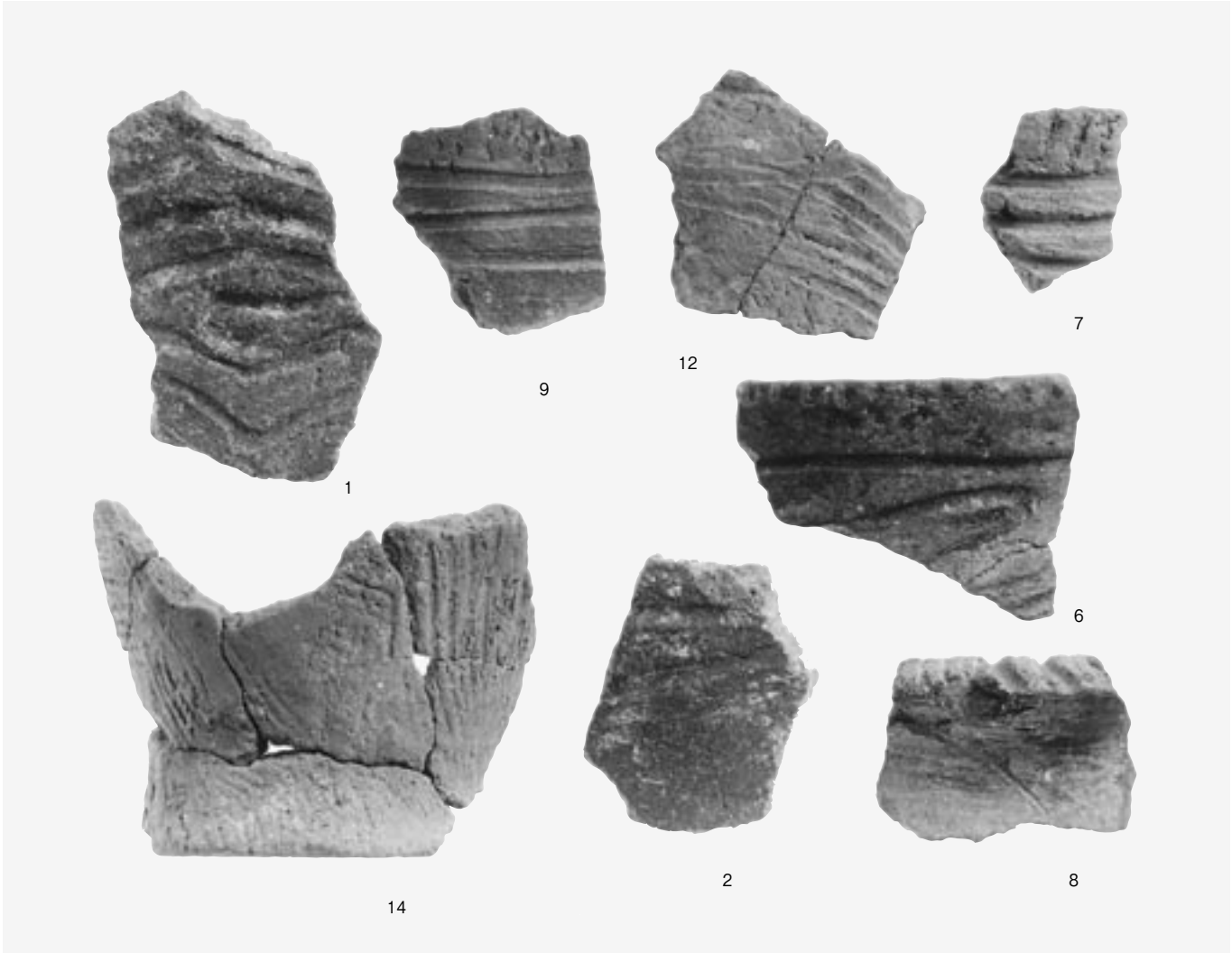


遺物集中地点２

図版60



縄文時代出土石器(石鏃，石匙)



縄文時代中，後期出土土器


121


185


129


140


141


128


141


124


131


127

土師器坏

図版62


205


214


209


213


211


178


134


323


300


301

土師器坏，椀


343


372


353


83


362


405


369

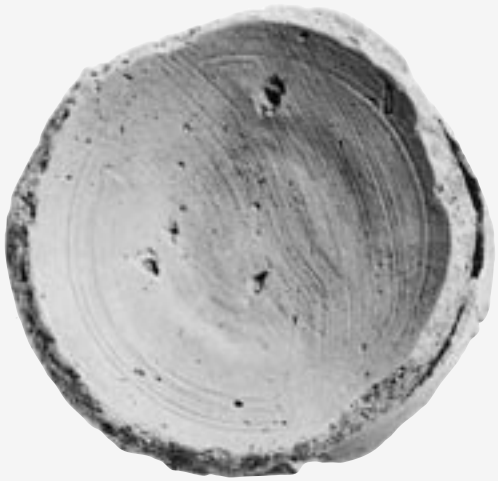

398


373


410

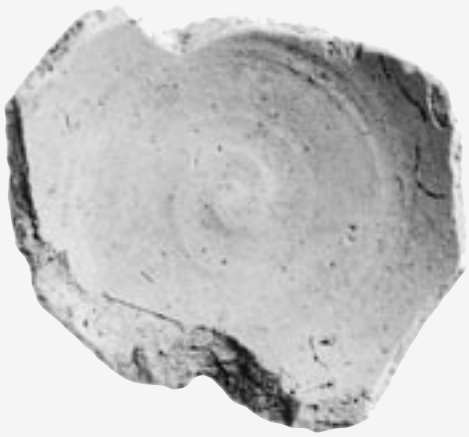
黒色土器坏，皿，椀

図版64



318

見込みの静止ナデ



231

見込みの回転ナデ



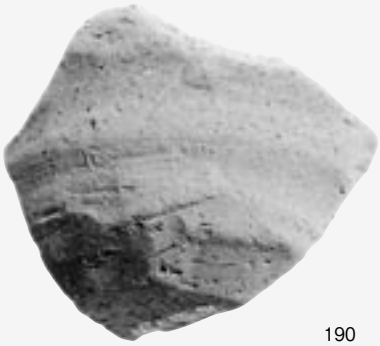
143

体部外面下端の未調整



108

底部外面のヘラ切り痕



190

体部外面下端のケズリ



402

体部外面のケズリ(黒色土器)



619



613



623



611



640



607



714

土師器甕

図版66


631


734


721


731


701


736

土師器甕，鉢


624

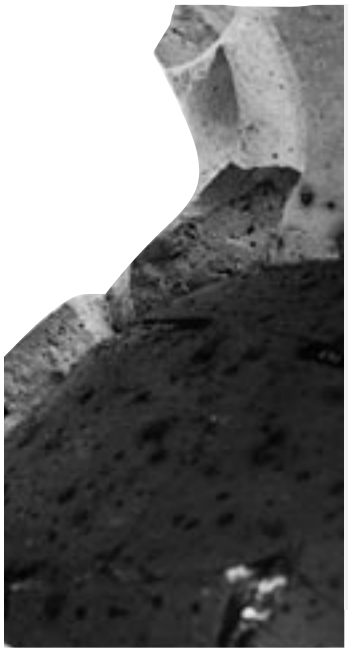

695


606


665

土師器甕内面のヘラケズリ

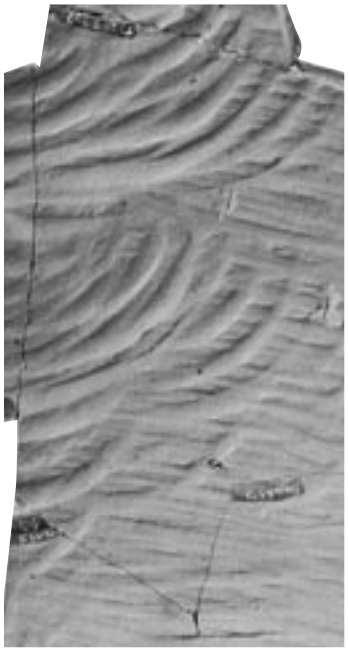






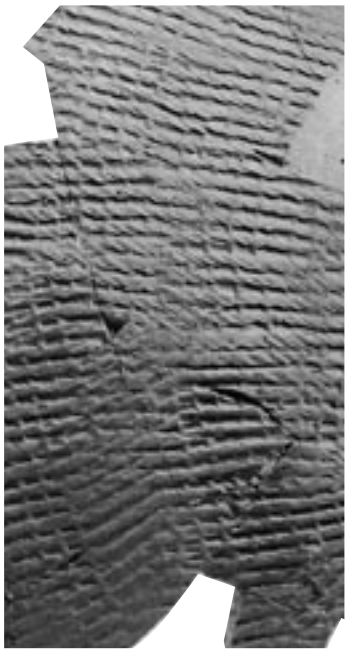
746

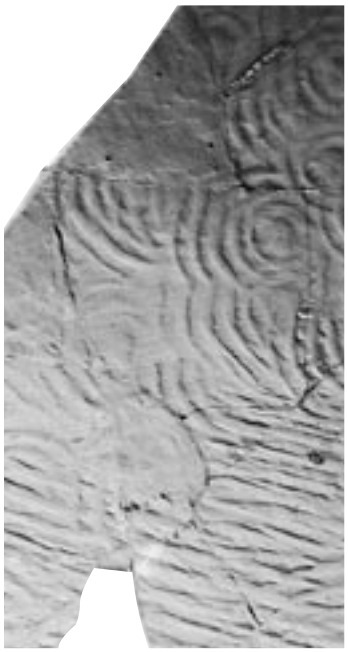






756







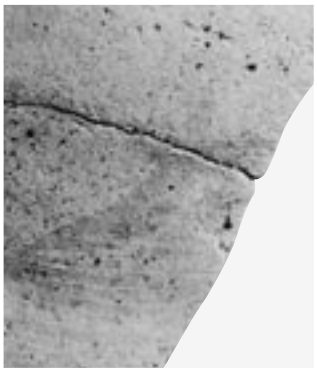
757

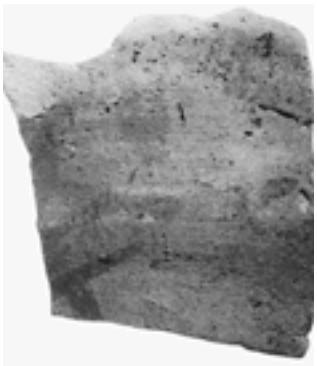
須恵器壺，甕(左・外面，中・内面)

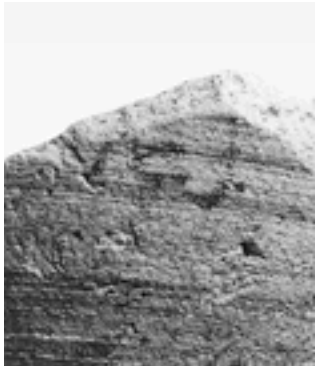
図版68


770


773

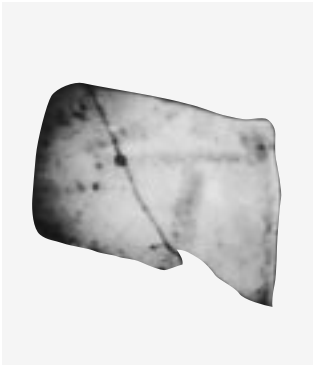

775


790

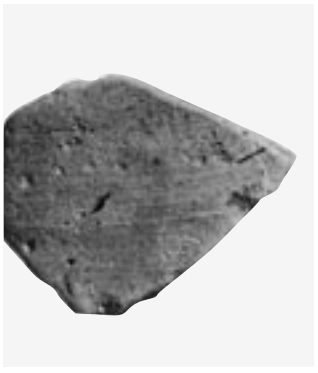

771


776


780


793

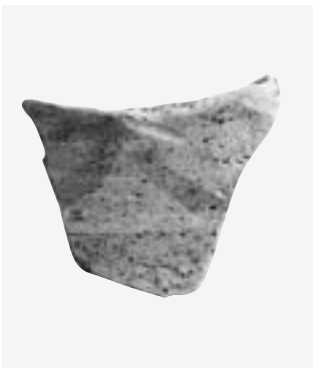

771


779


781


784

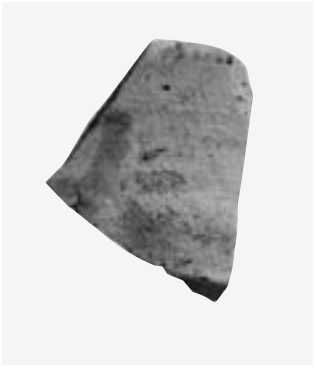

772

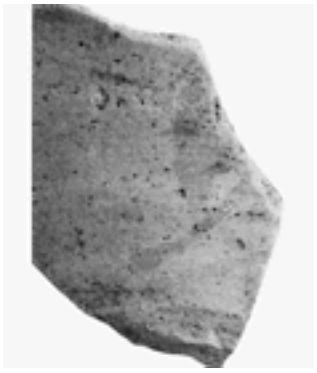

778


791


785

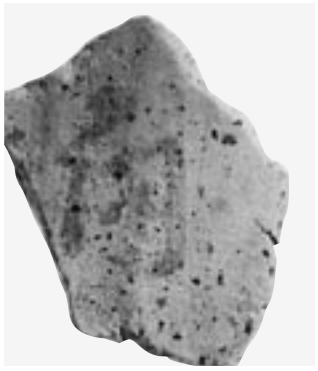

774

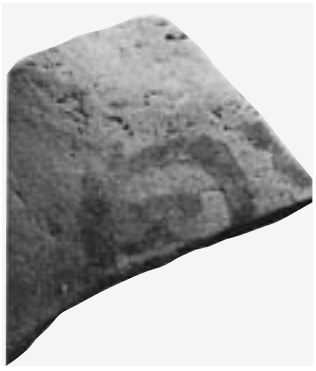

777


792

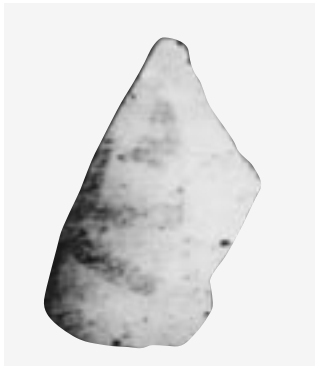

786

墨書土器(1)

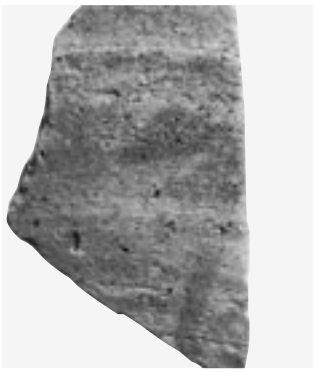

797


803


798


818


782


796

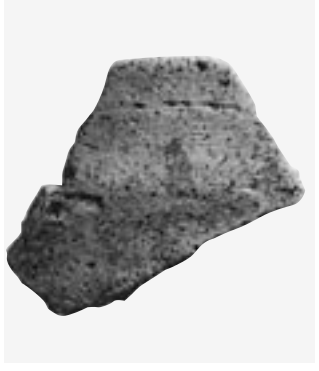

799


815


783

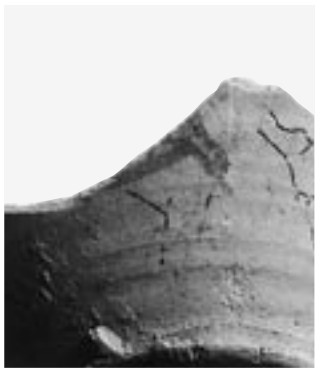

795

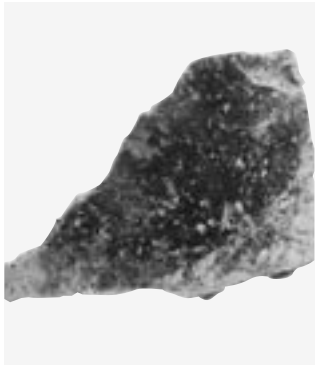

838

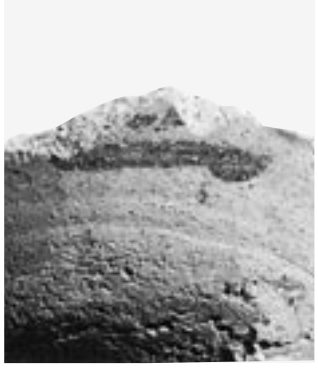

819


794


805

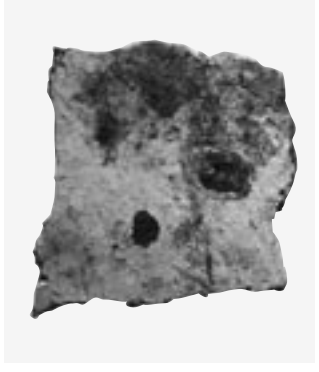

806


872


789

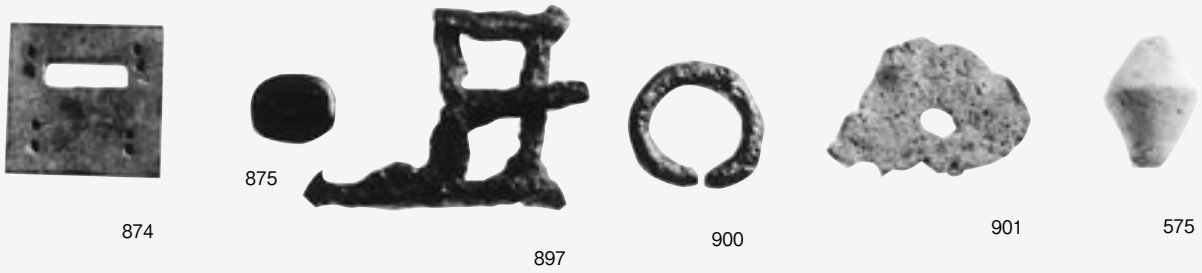

804


822

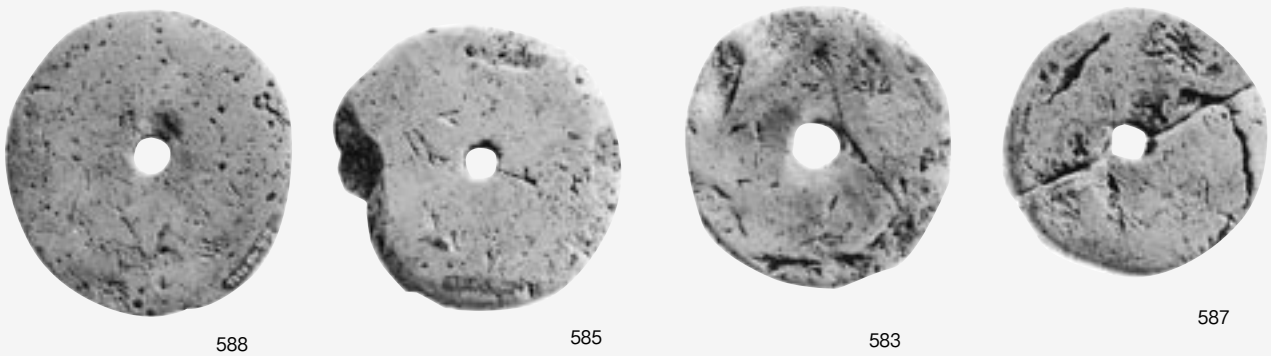

873

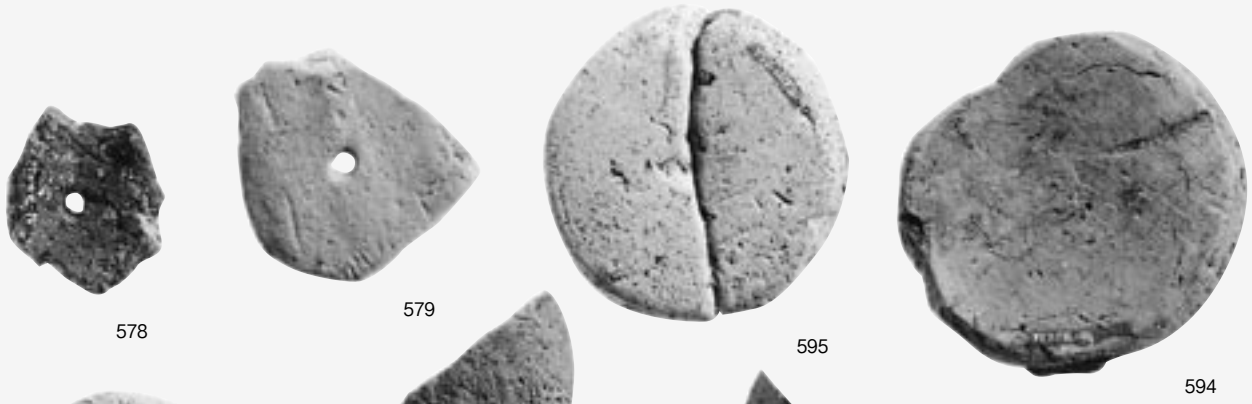
墨書土器(2)

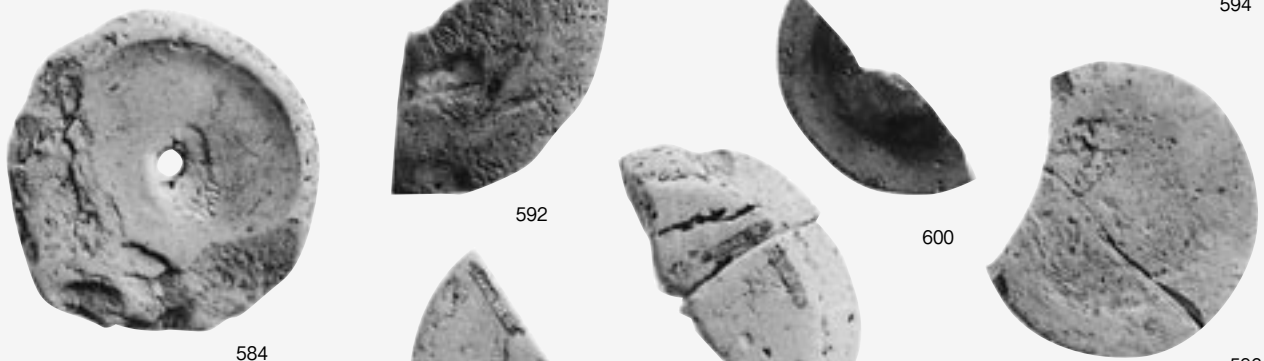
図版70

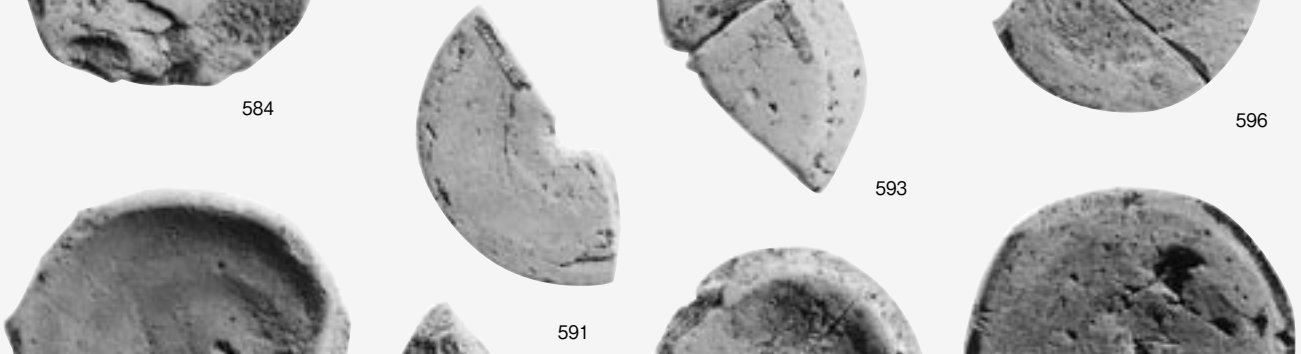


石帯(裏面)，平玉石，鉸具，銅環，不明銅製品，土錘





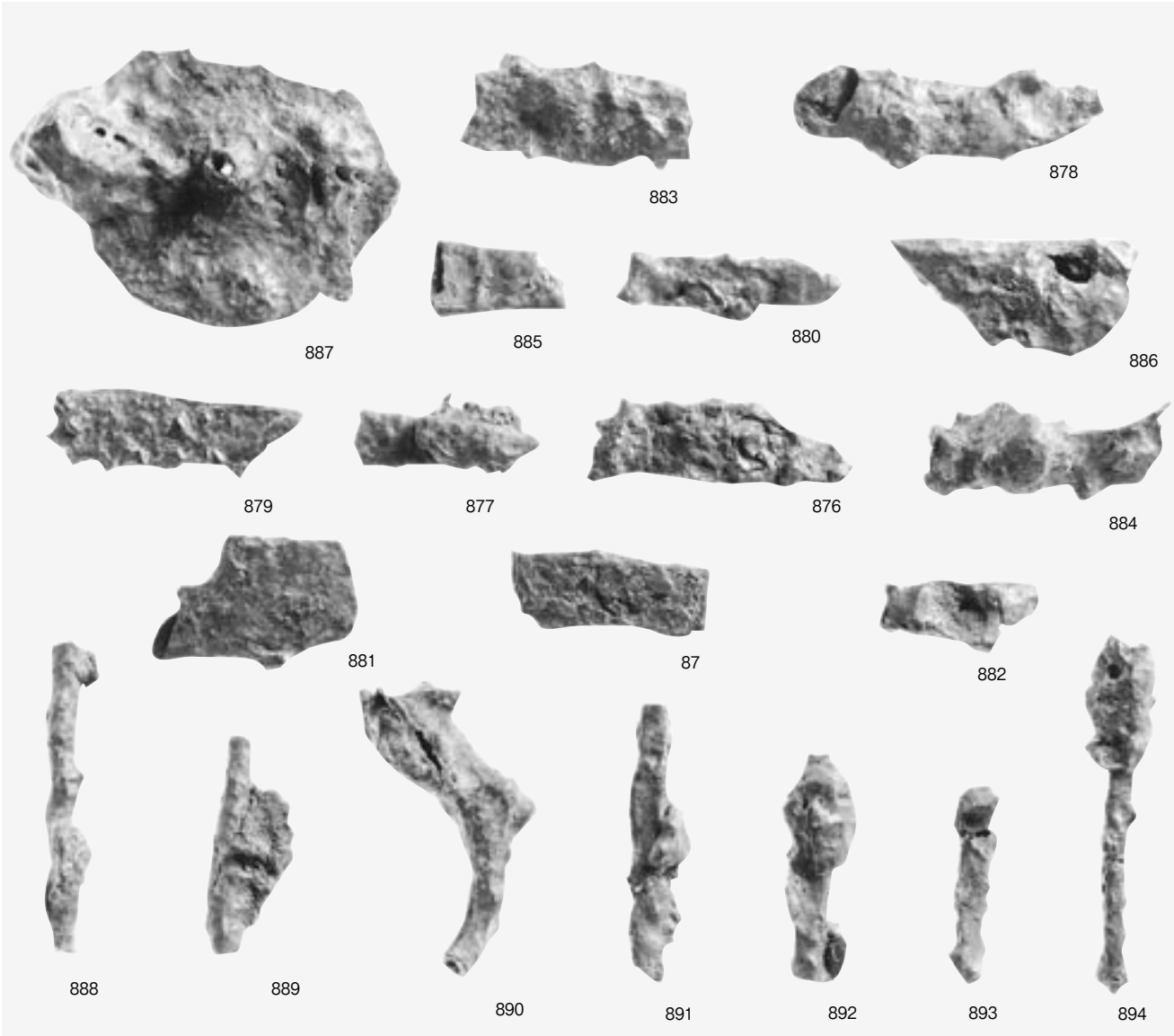




紡錘車



石帯(表)，鉸具，銅環



鉄製品(紡錘車，刀子，鉄釘)

図版72



鍛冶関連遺物



焼塩壺

あ と が き

本年度も，九養岡・踊場・高篠の３遺跡の報告書を何とか刊行にこぎ着けることができた。平成11年から12年度に調査した遺跡であり，失われつつある記憶を掘り起こしながらの作業が続いた。

九養岡遺跡では，夏以降見通しをたて始めた石器接合が見事に的中し，校了直前までその資料化に奔走した。接合の効果は絶大で，重複した文化層と判断していた５層にわたる石器がことごとく接合し，層位的編年研究の期待を見事に裏切ってしまった。その一方，基礎作業の重要性と，遺跡調査のもつ「怖さ」を再認識することとなった。

踊場遺跡の７号掘立柱建物跡の解明には，資料収集がいかに大切であるかを痛感した。

高篠遺跡は，担当者の情熱が結実した。大隅国府から島津駅の“道”を求めての１泊２日，往復50kmの踏破には，若さのエネルギーと行動力に驚き，感動さえ受けた。県内の土師器の比較検討は，今後率直な評価を期待したい。

報告書作成のたびに，力不足を露呈してきた。

「調査報告書はどうあるべきか」。“調査報告書＝記録保存”単純であるが，なかなか奥が深い。

「遺跡で得た情報を一つでも多く記録したい」を合い言葉に，昨年からデジタル方式を導入してきた。これも，命題である「調査報告書はどうあるべきか」への取り組みの一つであった。

２年目を迎え，パソコンを自在にこなす職員も増え，データ処理は作業員も行うようになった。

九養岡遺跡の石器接合関係の資料提示は，まさにその成果である。

限られた時間の中で調査報告書を作成し，失われた貴重な遺跡を正確に，素直に後世に伝えることが我々に与えられた使命。単純ではあるがやはり奥が深い。

巻頭グラビア
九養岡遺跡　旧石器ブロック検出状況
九養岡遺跡　旧石器接合資料
踊場遺跡　　７号建物跡ほか出土遺物
踊場遺跡　　畠跡検出状況

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 71
東九州自動車道建設 (末吉財部 IC ～国分 IC 間) に伴う発掘調査報告書

九養岡遺跡
踊 場 遺 跡
高 篠 遺 跡

発行日　平成 16 年 3 月 31 日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒 899-4461
鹿児島県国分市上之段 1175 番地 1
印　刷　日本高速印刷株式会社
〒 892-0834
鹿児島県鹿児島市南林寺町 25-10